

転生者は平穩を望む ～ルートPINK～

白山葵

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この作品は、本編でのifルート。

誰かしらが、誤った選択したりなんやらで18禁の展開に発展してしまつた場合のお話です。思いつきで書きますので、関連付けの話はバラバラになります。

★ルート分けしました★

- ① ◆ルート正史◆ 本編での裏側であつた、現行ルート
- ② ※ルート壊※ ある意味ハーレムルート（人妻編は、正史と時系列が同じで、家元ルート・あんこうルートとは別世界線）
- ③ ※ルートIF※ ルートではなく、完全に短編扱いです。
- ④ 宴編 単独IF。転生特典復活した場合のお話。短編扱いです。

※注意※

本編をご覧に頂いていない場合、人間関係等、全く訳が分かりません。

本編○○話の別ルート…完全に単発の短編集となります。

…のつもりでしたが…本編史の裏側、正史ルートもできてきました。

ifルートとなりますので、基本本編の延長線。

短編ですが、大幅な設定変更はありません。

話の都合上、たまに主人公がトチ狂うかもしれません

挿絵★付き

本編にて、関連ある話には、？マークをつけていくつもりです

## 目次

※ルート	IF※ 西住邸の夜 ★	1
◇ ルート	・人妻編① ◇	31
◆ ルート正史	◆ 西住 みほ	77
※ルート	IF※第23話	101
↳ 前編	アンツイオ潜入です！…潜入だよね？	
※ルート	IF※第23話	124
↳ 後編	アンツイオ潜入です！…潜入だよね？	
◆ ルート正史	◆ 真・男子会です！	163
※ルート壊	※第45話	200
↳ 前編	来客万来です！	
※ルート壊	※第45話	222
↳ 後編	来客万来です！	
◆ ルート正史	◆ 西住 まほ	250
※ルート壊	【みほ編】※続・来客万来です！	289
※ルート壊	【華さん編】※続・来客万来です！	309
【番外編】	↳ 転生特典の復活	332
※ルート壊	【宴編】※第45話	337
↳ 続・来客万来です！		
◆ ルート正史	◆ 西住 みほ	355
↳ 決戦前夜です！		
※ルート壊	※	388
↳ 平穩？（笑）		
※ルート壊	【宴編】※来客万来です！	427
↳ 修正 加筆版 ★		
◆ ルート正史	◆ 西住 みほ	457
↳ お泊りです！		
※ルート	壊※第14話	487
↳ 長い一日が明けました！		
↳ 前編		
※ルート	壊※第14話	535
↳ 長い一日が明けました！		
↳ 後編		

◇ ルート	・人妻編②	◇	く	大洗の夜く	595
※ルート壊	【宴編】※			ある日常の一コマ	621
◆ルート正史	◆			続・男子会です！PINK 前半	645
◆ルート正史	◆			続・男子会です！PINK 中編	690
◆ルート正史	◆			続・男子会です！PINK 後編	729
※ルート壊	【宴編】※			冷泉 麻子 ある日常の一コマ 修正・加筆	763
版					
◇ ルート	・人妻編③	◇	く	家元 く	820
※ルート壊	※			秋山 優花里 ある日常の一コマ	870
※ルート壊	※			く女子会です！く その いちい	906
※ルート壊	※			く女子会です！く その にい	935
※ルート壊	※			く女子会です！く その さあん	953
※ルート壊	※			く女子会です！く その しい	982
※ルート壊	※			く女子会です！く その ごお	1002
※ルート壊	【人妻・宴編】※			温泉宿での夜	1034
◇ ルート	・人妻編④	◇	く	マッサージく	1082
※ルート壊	※			く西住 まほく	1126
※ルート壊	※			く夜這いですく	1151
●ルート 願	【宴編】● スキル				1207
●ルート 願	● 戦車倉庫裏	★			1235
※ルート IF※	ルート・ノンナ				1284
◇ ルート	・人妻編⑤	◇	く	西住 しほく	1377
※ルート壊	【宴編】※			あんこう鍋 前編	1423
※ルート壊	【宴編】※			あんこう鍋 中編	1468

※ルート壊 【宴編】※ あんこう鍋 後編 ★ | 1523  
アンケート結果報告 + ※ルート IF※ Re:西住邸の夜

1571 ※ルート IF※ 続 ルート・ノンナ ★ | 1678  
アンケート結果と:スキル 「壊」 | 1625

1694 ※ルート壊 【宴編】※ 女子会ですっ!! そのいちい!★★★

※ルート壊 【宴編】※ #%||子会ですっ!! その%※★ (差分5  
枚) | 1739

※ルート壊 【宴編】※ もう女子会とは程遠いですっ! | 1801

※ルート壊 【正史・宴編】※ 女神会ですっ! | 1842

◆ルート正史 ◆…の、次回アンケート | 1894

※ルート壊 【人妻・宴編】※ 夢の後遺症 前編 | 1899

※ルート壊 【人妻・宴編】※ 夢の後遺症 中編 | 1945

※ルート IF※ 西住邸の夜 ★

「あっっついい!!」

夜の帳。

暗い部屋の中。起こした体の横で、熱風しか顔にかからない扇風機に視線を投げる。

「……」

西住流本家の客間で、夜中に目が覚めた。

空調：エアコンの代わりに置かれた、型が古い扇風機。

ガタガタと音を立てている。

この真夏の夜。

気休め程度にしかならないであろう扇風機が、熱風を撒き散らし、むしろ暑さによる苛立ちを増長させる。

普段、客なんぞ泊まることは無いのでであろう和室の客間。

掃除は行き届いてはいるが、エアコンが無い…。

というか、布団と扇風機しかない。

家主は、当然その事を知っているのだらう。

空調の効いた部屋での、宿泊を勧めてきた。

……んな事言っても、エアコンある部屋って、まほちゃん、みほ。しほさんと住み込み家政婦の菊代さんの各部屋にしか無いと言うじやないか…。

そんなの選択肢何て、無いじゃない!!

みほの部屋に泊まれと、遠回しに言ってきたようなものじゃないのか？

無理だろう。何のつもりだ…。

流石になあ…。エリリンも一緒にお泊りらしいが、まほちゃんの部屋で、寝るしかないだろうし…。

そんな訳で現在、真夏の夜のクソ暑い夜を満喫している。

…流石にきつい。

やつと襲ってきてくれた眠気を、暑さが撃退してくれた。

余計な事しやがって…。

ただ暑さのきつい夜を、何とか我慢していたが、汗も気持ち悪く、完全に目が覚めた。

ボケーと客間の出入り口に視線を移すと、出入り口に設置されていた支え棒が目に入る。

うん：一応保険で、襖の横に設置した。

外から開けようとすれば、棒が使えて開かない仕組み。

とても原始的な、とても頼りになる棒。

ありがとう…。

夜0時頃、ガタガタと音を起してコレの活躍を見ている。

外からまほちゃんであろう、舌打ちの音が聞こえてきたからまあ

……間違いないだろう。

こえーよ!!

なんで、夜中に来てんの!?

……しばらくガタガタと、開かない襖と格闘したのだけど、30分

ぐらいしたら帰っていった…と思われる。

「……」

怖い。

本当に、何しに来たのだろうか…。

……。

やめよう。深く考えるのは。

エリリンいるのに変な事は……しないよな？

よし、気持ちを切り替えよう。

流石に汗をかきすぎた。

水分が欲しい。というか、死ぬ。

喉が渴きすぎてというよりか、下手すると夜の熱中症か、もしくは

脱水症状にでもなりそうだ。

客間は2階。

水を求めて、1階の台所に向かおう。

支え棒に手を伸ばした所で、ふと思った。

…いないよな？ 廊下に…。

流石にホラーだよな？



携帯で時間を確認すると、そろそろ夜中の2時を回る……丑三つ時。

うん……。いないよな？ 流石にいないよな？

恐る恐る、襖を開けて、某姉様がいない事を確認して、安心した所で廊下にする。

……流石にこの時間なら寝てるよな！

はっはー。

……寝てるよね？

暗い廊下を歩き、階段へ差し掛かる。

音を意識し、ゆっくりと下りていく。

時間も時間。

更には人様のお宅だ。

昔はよくお泊りしたものだから、勝手知ったる他人の家。

間取りもだいたい把握している。

一番奥にある、台所目指して、暗い廊下をまたゆっくりと歩き出した。

うん。

電気の光が見える。

なんだ？ 消し忘れか？

あれはしほさんの、書斎……というか、仕事部屋……執務室という所か？

……小さい頃は、無断で入ると怒られたな。

というか、中学の時にみほが、間違えて酒を飲んじやった時を思い出した。

…やんちゃみぼりんがデイフォルトになるんだよなあ。

流石に仕事部屋の中を荒らし回った時は、青くなったもんだ。

いやあ…青くなって茫然自失で立ち竦む、しほさんを見たのは、あれが最初で最後だな。

ま、まあ…いいや。

電気の消し忘れくらいならいいや、消しておいてやろう。

…ん。

それでも他人の家だ。

念の為にノックを試してみたら、部屋の中より返事が返ってきた。

「はーっ。」

「あれ？…しほさ…ん!？」

「…隆史君?」

ここも出入り口は襖。

その襖をスライドし、開けた先にしほさんがいた。

それはまだ、昼間のまま。そのままの出で立ち。

ああ…エリリンに睨まれ続けた夕飯時に、まだ仕事が残っていると  
言っていたな。

今まで仕事を…。

あれ？ な…なんだ？

この部屋、なんか違和感がすごい。

この人クソ真面目だからだろうか。

普段無い物が余計に目立つ。

「どお…しました? 隆史君?」

…

「水飲み台所に向かっている最中に、部屋の光が見えまして！ 消し忘れかと思ひ、寄った次第です!!」

仕事机に立ち並ぶ…多種多様の…空になった酒瓶が目に入った。

よって！ 即逃げよう!!

あれ!? この人絶対、こんな事する人じゃ無かったよなあ!?

少なくとも、この部屋は仕事専用。酒なんて間違っても持ち込む人  
じゃなかったはず!!

返事というか、言動が若干おかしかった為、例の食事会の状態を思い出した。

この人酔うとやべえ…というのを主に!!

「…というか、なんとという格好をしているので…すか？」

…。

まあ…客服というか、旅館にある様な、ゆかたが用意された為に着ていた。

暑かった為だろうか、無意識に裸けていた様だ。

それを注意されたのだけど…呂律が少し回っていない…。

「いや…暑かったので自然と…」

言い訳をしながら、はだけた衣服を直す。

その衣服を直しつつ、改めて部屋を見てみる…。

……あの。

日本酒の空ビンが、4本程寝転んでるんですけど…。

あれ？ ウィスキーなんてこの人飲んだア…。

2本空になってますね。

……やっぱい。完全に出来上がってる。

「少し、みつともない所を見せてしまいましたね…」

そう言いつつ、悪びれる事もなく、手に持った琥珀色の液体が入った、ショットグラスを仰いでいる。

マジでどうしたんだろ…完全にヤケ酒って感じだけ…。

「…はっ。今日は良い事があったと思ったのですけどね…」

あ、やばっ。

これは愚痴が始まる。

話し始めた手前、逃げられない…。

「…まあ、撮影の件は置いて、隆史君が…みほと付き合いでした…とても喜ばしい事です」

「ありがとうございます…す？」

「貴方は、まほを選ぶとばかり思っていたのですが…」

流石に、ここまで話しかけられては突っ立てる訳にもいかず、中に入り襖を閉めた。

うん。逃げれねえと諦めた。無理無理。

「良い事があった…本当にそう思ったのです…けどね…本当に……」

うん。ダメだ。

完全に愚痴モード入った。

だって、机にショットグラス叩きつけて、前屈みになって震えてるし。

あくこりや下手すると朝までコースだあ。

しほさんが、場末の俺がバイトしていた店にいた、酔っ払いみたいになるなんてなあ…。

この酔い方は…長いぞ。絡み酒っぽいなあ…。

「まあ？一応、キャバクラ通いの夫にも？連絡してやろうと思っただんですよ？」

…黙ってハイハイ聞いていた。

とんでもねえ事言っていたけど、しほさんに言った時点で、常夫さんにも報告は行くだらうと覚悟していたから別にいいけど。

…いい加減、キャバ通いくらいは…許してあげれば？とは思っていた。

「でも、ですねえ!!」

「うわー!」

ダンダンと音を立てながら、小走りで接近され、片手で肩を掴まれた。

…そしてもう片方の手で、グラスを更に仰いだ。

うん。酒臭え。

「今日電話したらですね…」

「はいはい…なんですか？」

「うう…隆史君は、私の話もちゃんと聞いてくれるんですねえ…」

…あかん。だめだこりや。

多分、しほさん（泥酔）の話を真正面から聞いてやれるのって…千代さんと菊代さんくらいか…。

…話の途中でも、ちよこちよこ話が脱線する。

こりや今日は本当に寝れんなあ…。

「また、私の着信を中途半端に取った様でして……会話が聞こえてきたんですけど……」

「はあ……はい」

「多分……同僚の方でしょうか？ 変な音楽が聞こえてくるお店にいたようなんですけど……」

またキヤバか？

「風呂屋ってなんですか？」

「」

……。

……………。

常夫おおお!!!

何やってんだあの男!!!

「本番ってなんですかああ?!」

……。

いかん……これはまずい……。

「調べましたよ！ 調べましたとも!! 如何わしい所という事くらい、私でも察しがつきますよ!!」

ダメダ……。フォローできません……。

ほぼ単身赴任状態だし……まあ同じ男として……理解できない訳ではない……。

商売女を相手にするくらい……多めに見ろ……とは、この状態のしほさんになんて、とても言えない……最悪だ……。

なんで俺の胸ぐら両手で掴んだままで、いるんでしょうか？

ヤメテクダサイ、シンデシマイマス。

やあ……完全に人によつては浮気だね……フォローができませんね……。

しほさんは、俺の胸ぐら……というか、着物の首元を両手で掴み、額を俺の胸に当てていた……。

「……………」

これ、八つ当たりで、いきなり背負投げとかされないよな？

「……」

「……」

少し、無言の時間が続いた…。

泣くわけでもなく、小さく鼻で呼吸をする音が聞こえる。

顔を覗き込む訳にもいかないので、このままの体制で、文字通り胸を貸している。

しほさんの両肩に手を置き、軽くポンポンと先程から叩いてやってみる。

そのお陰だろうか…少し落ち着いてきたかな？

年上なのだが…年下の様な人。

不器用すぎて、心配になってしまおう人…。

「……」

「あの…何と言っているかわかりませんが…少しは落ち着きましたか？」

小さく声をかけてみる。

「……」

「……しほさん？」

あれ？ 頬を俺の胸になんでつけたんですか？

…ん？

なんで腰に手を回したんですか？

んん!?

「…男性の…汗もあるのでしょうか…？ 男の匂いと言うものを…少し振りに嗅いだ気がします」

「……」

なんかやばい事言い出した

「隆史君は、体付きも良いので…もう、普通に成人男性ですね…」

「  
まずい。

これはダメだ。

あれだ。あの食事会の時の、最終的にトチ狂った、しほさんと同じ感じがする。

スーナーなんか聞こえる!!

「ちよっ!? 何言っているんですか!? とうかが、何をしてるんですか!?!」

反射的に下を向き、しほさんの顔を確認してしまおうとした。

…それがまずかった。

いつのまにか、顔を上げ俺の顔を見上げる形になっていた。

目は…少し潤んでいた…が。ハイライトさんが蒸発でもしたのか、不在でした。

体重を急に預けられてしまい、部屋の中央に鎮座する模型…戦車道に関する物だろう。

その模型の台座それが、に太股裏、付け根あたりが当たる。

…要は、体重をかけられ、軽く追い詰められた。

いかん。

完全に自暴自棄になってる。

胸が当たる。うん、でつかい。

…:じやない!

はあはあと、荒い息遣い。

時折、唾を飲み込む様な音が聞こえる。

段々と正気を失った状態で、興奮してきたのが分かる。

しほさんの体温が、明らかに上がっている…。

洒落にならない。

肩を押そうと力を込めた瞬間、彼女の両腕が、俺の両腕の内側から外側に払い出された。

すっごい早技…。本当にもう技だった。

そのまま連携コンボと、いうのだろうか? 空いた両腕を俺の頭の後ろに回し、一気に引き寄せられた。

「ぬむい!?!」

引き寄せられた瞬間、唇に暖い感触…。

思いつき唇を合わせてええ1p!?

それだけでは無く。

口の中に異物が侵入してきた。

舌を絡める。

絡める。

完全に頭をホールドして固められているので、逃げれない。

「んぐー!」

驚く俺の声しか聞こえない。

しほさんの口からは、少し甘い吐息が聞こえるくらいで…:…なんとい

うか…。

俺の口の中を貪られた。

…貪る。

その表現が正しい。

動けないで硬直している、俺の口の中を、ヌルヌルと彼女の舌が這

いずり回る。

すでに聞こえるのは、彼女が俺の口と舌を啜る音だけ。

…正直気持ちいい。

いいのだけど…。

疲れたのか、満足したのか。

俺の口から離れた。

…離す時、俺の口から彼女の口まで繋がる唾液の糸。

正直官能的で、ちよつと色々と揺らいでしまったのだけど、理性を

持つて対応しよう。

顔が暑い。

…彼女は、常夫さんの行動で、今までの事も含め、完全に参ってし

まったのだろうか。

じゃなきや…:自分の娘と同一年の男…:更にはその彼氏…:男に、こん

な事はしないだろう。

普段真面目な人間が、あるきっかけで、どうにかなってしまうのは



…過去に…遙か過去に見た事はある。

その場合…真面目な分、反動がものすごい。

「…なぜでしょう?」

「……」

「……もうドウデモイイ」

いかん。

理性はある。理性は保っている。

保っているのだけど…。

あの胸を押し付けられ、口の中…舌を這われて…うん。

完全にアレが起き上がってしまっている。

ゆかたの下は下着だけ。

その下着のトランクスから、浮き上がってしまったっているモノを先程から、しほさんが摩っている。

首元に顔を入れ、鼻呼吸の音が耳に入る。

そのままゆっくりと舌を這わせ、ゆっくりとしゃがみ始める。

まずい。本当にこれはまずい。

たまに、こちらを見る、しほさんの顔が完全に女の顔になっている。

娘の彼氏、娘の幼馴染。

そんな言葉、関係性は完全に飛んでしまっている様で、ハツハツと息遣いは聞こえるものの、それが甘い。甘い音に聞こえる。

冷静を保っているつもりだろうが、俺も動けないで、次の行動に期待している自分がいた事に気が付く。

気がついた頃にはもう遅く、しほさんが完全に下着に手を掛け、下ろしてしまった。

夫が浮気をした。だから私もする。

そんな単純な思考回路だろうか?

何とかしなければ。

突き放す?

考える。

どうすれば良いか、考えようとする。

…だがもう遅い。

息子。

冗談でいう事はあるが、俺の陰茎がすでに顔を出し、聳え立っている。

一瞬、息を飲む音が聞こえたが、躊躇せずそれをまた彼女は、口を入れ貪り始める。

瞬間。

生暖かく、柔らかい感触が。身体を駆け巡る。

ジュルツと音を立て彼女の頭が前後にゆっくりと動き始める。

「っー」

声が出てしまう。

味わう。

直に感じた。

舌を筋から筋。隙間まで、先でなぞる様に小刻みに、たまに大きく舌を動かしていた。

…彼女もそんなに経験は無いのだろう。

俺もそんなに…というか、前世でもそんなに経験は無い。

が。現状の背徳感と、この状況に酔っていた。そう酔ってしまった。

…動けない。

快楽というモノが、ここまで自制を殺すとは。

ジュルジュルと嚼る音から、ジュポジュポとリズムミカルに頭の前後運動が激しくなってきた。

舌と一緒に絡めながら動かされるものだから、快楽の為に腰が砕けそうになる。

止めない。止められない。

この感触を味わっていたいという感情が支配する。

「…ンッ！…ンンッッ!!」

亀頭が少し膨らんだのか、感覚的に分かったのか。

自分でも分かる。意識が亀頭に集中した。

執務室中央の模型に中腰で寄りかかっている。

その俺の股の下。

この世で、生まれて初めて意識した女性。

その女性が一心不乱に俺を…俺自身を貪っている。

…下品にな音まで立てて貪っている。

意識した瞬間。

そう、意識してしまった瞬間。

背徳感も相まり、…何かが壊れた。

彼女の頭を掴み、少し強引に離す。

片手で額に手をやると少し前髪がめくれる。

ジュルつと音を立て、彼女と自身のモノに唾液の糸が繋がっている。

そのまま親指を、その口に入れ強引に開く。残った指で顔を少し上に上げさせた。

もう片方の手で陰茎を擦り、…自身の欲望を彼女の口から顔にぶちまけた。

「ふっ……んんー!」

しばらく何もしていなかった為か、すさまじい量が、しほさんの顔を白く汚す。

ボトボトと質量がある音も聞こえる。

「は……は……」

息が荒れる。

興奮と色々な気持ちが入り混じった、特殊な感情。

ジュルつと口から、少しこぼれたモノを啜る音がした。

前髪から鼻に掛けて、口元まで飛び散った白く、テラテラした大量の液体が彼女の顔。

口にも大分入ってしまい、口内を見ると真っ白な液体が満たされていた。

「……」

無言。

俺もしほさんも、一言も喋らない。

言葉にできない。

足元から心臓を駆け抜け、脳まで熱くなっている。

口の中のモノを飲み込むか、吐き捨てるか…迷っている様だったの  
で、半開きになった口に…収まらない俺をねじ込む。

「ふグウ!？」

無理やりねじ込んだもんだから、口から溢れたものが、首筋をつた  
い胸の谷間に落ちていく。

更には、太ももにも落ちて、結果。全身を汚した。

「……」

余った口の中のモノは、強引にだけ飲ませた形になった。

しほさんは、汚れた顔のまま、スーツのパンツを脱ぎ始めた。

上はワイシャツ一枚だが、エアコンも無いこの部屋。

汗で完全に透けてしまっている。

ワイシャツ一枚になると、上ボタンから外し始めた。

ハアハアと、息を切らしながら。

お腹のあたりまで外した辺りで、仕事をする為であろう、机に腰を  
駆けた。

「…」

小さく呼吸が聞こえる。

汗だろがなんだろうが分からない。

ただ彼女の秘部の上の布。

それはもう、透けている程水分を含んでいた。

「……」

「……んっ」

触ると粘着質の液体が、指に付く。

前戯はいらぬ。早くしろと、段々と激しい息使いが俺に催促をするようだった。

秘部の前の布をずらす為に、少し引つ張ると、ヌチャツとした音と共に、液体がヌラヌラと室内灯の光を反射した。

一度出ただけじゃ、全然収まらない陰茎を、そのまま秘部の入口に当てる。

自分の口から、熱い息が出ているのも気がつかない。

目線がもう、そこにしか行かない。

自身のモノと、彼女の入口。少し当たるだけで、おかしくなりそうになっていた。

しかし、その先…ソレを超えてしまったら…崩れる。

イロイロな関係が崩れてしまう。

…。

………。

ダメだ。

これ以上は。

その場と快楽に流されてしまったが、これはいけない。

目線をしほさんの顔に戻し、口を開こうとしたが、

自分の白液で汚れた、彼女の顔を見て。

「……」

最後の砦。……意識の奥の何かが、完全に瓦解した。

勢いよく。

ツラヌク。

「ふっ…うううん ああ!」

いきなり奥まで突っ込んだせいでだろうか？

しばらく夜の生活が、無かったせいでだろうか？

奥の壁に当たった感じがした瞬間、彼女が痙攣を起こした。  
……。

彼女は、俺のモノを入れただけでイッた。

勢いよく、不意打ち気味だったが、あの「西住 しほ」が、俺のモノを入れただけ……で、果てた。

背筋を伸ばし、豊かな胸がワイシャツから溢れだしている。

「ヒュッ……フツ……」

小さな甘い声が聞こえる。

「……」

多分俺は、今悪い顔にでも、なっているのだろうか。

そんな彼女を見た瞬間。

背筋に、ゾクゾクとした感覚が走り抜ける。

「……」

ヌルツつと少し抜くと、白く粘ついた液体が、根元に少しついてた。

確認した瞬間。また思いつきり、奥に突き刺す。

「んあ!!」

もうダメだった。

ただもう、一心不乱に腰を動かす。

ただ快楽を貪るといふ、行動に殉じていた。

突き刺す事に、甘く熱い吐息をだす彼女を見ては、また動かす。

彼女はこういう時には、あまり声は出さないのだろうか？

吐息、息遣いのみ聞こえてくる。

意地でも出させたくなってきた。

ピストンする音は、もうすでに水分を含んだ音。

多分、彼女はもう何度か、果ててしまっているのだろうか。

だが足りない。まだ足りない。

彼女はまだ身体を鍛えていたのもあるのか……正直締りがすごい。持って行かれそうに感じる。

机から下ろし、今度はその机に手を付いてもらう。

その指示に素直に従う彼女の目は、もう正気では無かった。完全に

快樂を俺と同じく貪っている。

手を付き、尻をこちらに向けた彼女をまた貪る。

腰骨を手で掴み、遠慮なくただ突き動かす。

こちらの方が都合が良い。

彼女から、待て、待つてと声がするが、無視をする。

というか、聞こえなかった。

「た…隆　ンッ！　ハッ！　君…ちよつと待つアツ！　てえ！」

なんだろうか。

会話をしながらの艶っぽい声は、…正直興奮する。

「い…イツ…たああ。ばかりでっええ!!?」

パンパンと、肉体を叩き合う音が早くなる。

そろそろ俺が果てそうだった。

ただ一心不乱に、腰を彼女に打ち付ける。

中からゾリゾリと削り取るように、カリが引つかかっているのを連続す

るので、彼女の艶っぽい息遣いが大きくなる。

熱くなるのが分かる。

込上がってくるのが分かる。

彼女から引き抜き、今度の欲望の行き先は、その目の前。

「!!」

音が出ながら、出しているんじゃないかと思うくらいの量が、また  
出た。

それがまた、更に白く彼女を汚す。

絞り取るように一滴残らず、彼女にかける。

…。

…。

…。

液体は、尻の谷間滑り、菊門から秘部へと流れ出す。

ヌルヌルと。ゆっくり。

中に出してしまったのでは、無いかと勘違いするくらいに量が、ボ  
タボタと肌を滑り落ちてゆく。

……。

だが収まらない。

一線を超えてしまった感が、更に俺を突き動かす。

熱い息を吐きながら、こちらを向く彼女。

その場に座り込んでしまった。

目に光はないが、少し：いや、非常に満足をした顔をしていたが。

「……た……隆史君？」

見上げた彼女の目は、次第に怯えた表情になり、俺の一部を凝視している。

今の行為の時、彼女は正気では無かった。

共に、俺もどこか壊れたようで、正気では無かった。

まだ俺は満足していなかった。まだまだイケル。

大丈夫。

ただ会話は、したくない。

会話をしてしまったら、正気を取り戻してしまいそうだったから。

まだ狂っていたかった。

「……あ……」

だから無言で、彼女の手を掴み、また起き上がらせる。

まだ足腰は立つ様だ。

なら大丈夫だ。

大丈夫。

仕事机の上に背中を預けさせ、両足を開きまた彼女に入る。

「ツー」

やはり声を殺していたのだろう。

ならば出せなくなる。

声を我慢すれば、その分意識が下部に集中するのだろう。

敢えてゆつくりと一突きする。



何度か繰り返せば、秘部からまた白い液体が陰茎に絡みつきながら出てくる。

ゆっくりと。

「ツ……………ハアアああ…」

大きく息を吐いた。

また果てたのか、少し脚から震えを感じた。

肺の中の空気を、熱っぽい吐息と共に吐き出した瞬間。

今度は思いつきり早く突き立て始める。

ガタガタと机が音を立てるくらいに。

「んあ!? ハッ! あッ!! アッ!!」

大きな声がでる。

甘い声がでる。

胸が大きく揺れ、顔を見れば目は虚ろ。

完全に快楽に身を任せてしまった彼女が、目の前にいた。

床が畳の為、俺が寝れば彼女が跨る。

少し催促をされた様になった。どうやら主導権を握りたいようだった

うだった

…この人は……………なんか知らんが、騎乗位が凄く似合う…。

俺の上、腰を振る。

が。

ダメだ。

両手で彼女の尻を鷲掴みにし、それでは遅いとばかりに下から上

に、腰を叩きつける。

俺が、快楽で「西住 しほ」を屈服させている。

その事実を実感する度に、また興奮した。

収まらない。

収まらない。

まだだ。

胸を揺らし、彼女は俺の上で甘い声で喘いでいる。

腰が抜けようが、容赦なく責め立てた結果がコレだ。  
我ながら何だったんだ、あの性欲は。

「……………」  
執務室。

その部屋は、行為をした男女特有の匂いで充満していた。

朝の5時

……………」

はい、賢者タイムです。

やっちゃまった……。

文字どうりヤツチマツタ……。

しかも生で……、避妊具をつけていなかった……。

またしほさんも拒否をしないものだから、頭から完全に飛んで、しほさんを貪ってしまった。

しかも何回やったか、全く覚えていねえ……。

約3時間程やりっぱなしだった。

若い身体パネエ……。

性欲に動かされ、我を忘れ、酔っ払って自暴自棄になっていた女性に手を出しちまった。

「しかも……彼女の母親……………」

走馬灯……死ぬ前に見るといふ走馬灯が、見えた……。

言葉も出ない。

ただ獣の様に最終的には、求め合っていた。

「……………」

しかもこの後……下手すつと菊代さんが起こしに来ないだろうか？  
肝心のしほさんは、もう気絶をしているかの様に動かない。

意識はあるのか、呻き声に似た声を上げて呼吸を繰り返している。  
…まずい。

「し、しほさん。動けますか?」

この状態を何とかしないと。

ぐったりとしているしほさんに、声をかける。

まだ所々、白い肌の上に、更に白いモノがついているが一部乾いてしまっている。

…我ながら…。

「…:はっ…:ははは。…:してしまいましたね…」

自暴自棄になっていた人特有の、乾いた笑いで返される。

「…」

してしまった。やってしまったとでも言えるのだが、正直考えるのは後だ。

これは責任を取るとかどうなの、話ではない。

一線を超えてしまった以上、その反動は大きく襲ってくる。

「…:まずは、風呂にでも入ってきてください…。この部屋は何かしますので」

変に冷静な自分が嫌だ。

でもなあ…。

「部屋?」

…。

……………。

「!!」

寝ぼけているかのような、それでいてまだ熱っぽい目で、部屋を見渡した直後…:飛び起きた。

「いつ、今何時ですか!?!」

「5時10分程ですけど…」

「…:いけない。菊代さんは、5時半に起床します…:か…:片付けないと…:」

「いいから! 取り敢えず風呂行ってください!! …:俺がしでかしてしまった事ですけど、しほさんすごい格好ですよ」

「!?」

自身の格好を改めて見直し、年甲斐もなく……と言つては失礼かも知れないけど、真っ赤になるしほさん。

酒瓶の処理は台所に！ と言仰りまして、慌てながら部屋を飛び出して……行けなかった。

立ち上がろうと、手を仕事机にかけてところで動きが止まった。

足が腰からプルプルと震え、片膝を付く。

裸になってしまつてゐる為に、それはそれで官能的だったが、そんな事悠長に思つてる時間は無い。

「……腰が抜けてる……」

「……」

そのまま急いで、しほさんを抱き上げ、襖を足で開けた。

廊下に出て、脇目も降らず一直線に浴室へ向かった。

執務室の酒瓶を片付け、窓……外気に触れるであろう場所を全開に空ける。

この匂いは特有すぎて、ある程度経験のある人にはすぐにバレる。簡単に取りれるモノでは無いのだろうけど、しほさんが風呂……もしくはシャワーでも浴びている最中に出来うる事を急いで行った。

客室から扇風機を持ってきて、外に向かつて最大にする。

ガチャガチャと多少、音はするが、大量の酒瓶を台所へ運ぶ。

量が量だけど、これはまだ誤魔化しが効くので、指定場所らしき場所に捨てておく。

……何やっつてんだらうか俺は。

証拠隠滅に躍起になつている自分自身を、ぶん殴りたいと思うのは

普通だと思う。

5時40分

菊代さんの起床時間が、過ぎていた。

台所より戻ってきた、執務室の時計で確認した。

鼻が慣れてしまっている為に、俺には分からないが、この部屋の匂いは多少なりとも取れただろうか？

浴室から持ってきた、雑巾なりで急いで床畳を水拭きして一息ついた。

5時50分

今度は、俺自身の番だ。

足早に部屋を後にして、客室に戻る。

壁に掛けてあった昨日も着ていた、学校の制服に袖を通す。

今更寝れるはずも無い。ならばと、急いで普段の格好に着替えようと思ったからだ。

しほさんが浴室から出てきたら、俺も入らせてもらおう。

着替えおて、取り敢えず汗だくだった、顔くらいは洗っておこうと、部屋の襖を開けた。

開けた。

開けたんだよ？

「隆史君？」

「!!」

声にならない声を出したは、生まれて初めてかも知れない。

目の前に菊代さんが、立っていた。

∴。

バクバクと心音が聞こえる∴。

いつもの様にしっかりと、着物を着て∴普段通りの笑顔を浮かべている。

が、目が怖い…。

スツつとその笑顔が消え、無表情になった。

「若気の至。そういった言葉もあるくらいです」

「!？」

わか…

「……」

「……」

朝の挨拶も無しに、一言言われ黙ってしまった。

指先が震え、足も震えだした。

バ レ テ ル

「…正直、言いたい事も有りますが…今回の件は、私の胸にしまっておきます」

「」

「……………これが知れてしまったら、みほお嬢様は勿論、まほお嬢様も酷く傷つきますよね？ それは隆史君なら、嫌という程お分かりになると思いますが？」

「…はい」

「行き届いていない後処理は、こちらでしておきます…と、申しませうか、あんな処理で、まほお嬢様と後輩の方はともかく、私を誤魔化せると思ったのですか？」

「」

「…では私は、奥様にお話がありますので、これで失礼しますね。ああ…さっさと風呂に入ってきて下さいね」

…

淡々と無表情に喋った後、無言でその場を離れていってしまった。

…思いつきりバレていた。

カタカタ震える足を叩きながら、浴室に向かう。

今は、朝の6時半。

まほちゃん達も起きる時間。

どこからか、菊代さんの怒号が聞こえてきた…。

朝食の時の事を思い出す。

俺とエリリンがいた為だろう。

普段なら、一緒に朝食をとる事をあまりしないしほさんもいた。

旅館の朝食：その様な感じしかしなかったけども、正直。味なんて分からなかった。

無言。

黙って黙々と食べるしか無かった。

妙にツヤツヤした肌のしほさんだったけど、表情はいつもの様に厳しい顔をしていた。

が、顔は蒼白になっていた。

何を菊代さんに言われたか分からないが、後ろめたい事がある為にあんな表情をしているのだろう。

昨日、俺に何かお使いを頼むと言っていたが、もはやそれ所では無いのであろう。

一人素早く朝食を済ませると、一言仕事に出ると言い、部屋を出て行ってしまった。

俺と話がしたいのだろう：俺の目をずっと見ていた。

ので、冷や汗が止まらなかった。

菊代さんに酷く怒られたであろう：が、しほさんの俺を見る目が、もう完全に昨日と変わっていた。

後悔はしたのだろうか：何を考えているのかも、分からない。

完全に、男を見る目で見られている…。

思い出したら、身震いが何故か止まらなかった。

それに、いつもより様子がおかしい人物がいた。

…：エリリンですら、感じ取ったのか困惑した表情で、朝食を食べ

ている。

チラチラ横目で見るのだけど、すぐに目の前にある朝食に目を落とす。

まほちゃん。

無表情。

人からすれば、感情が顔に出辛くて、分かりにくいと言われていた彼女だけど、とても小さいが、変化は勿論ある。

俺には今までその変化は、すぐに分かっていただけでも、今回は全く分らない。

無言の重圧とでもいうのだろうか。

ずっとこの調子だった。

しほさんとも一言二言、朝の挨拶をするだけで、何も喋らない。

「エリカ」

「は、はい!!」

「先に学校へ行ってくれ。私は少し野暮用で寄って行く所がある」

「は…はい」

無言を貫いていたまほちゃんが、やっと口を開いた。

それでも見えないプレッシャーなのか、有無を言わさない雰囲気  
で、エリリンに指示を出す。

そして、また無言の時間。

朝食を全員済ませた所で、今度は俺に声をかけてきた。

ただその目が、酷く冷たく。なんだろうか…他人を見る目…とも  
違う。

敵を見る目…?」

「隆史。エリカを見送ったら、話がある。後で客間に行くから待つて  
いろ」

「わ…わかったけど…」

俺にここまで、命令口調な言い方をするまほちゃんが珍しい…。

そのまま言い捨て、立ち上がりエリリンと部屋を出て行ってしまっ  
た。

普段なら、ここで突っかかて来そうな彼女も、異様なまほちゃんの



雰囲気にも言えないでいる。

そのまま後をついて行き、早々に登校していった…。

そして命令口調の約束を受け、その通りに客間で彼女を待っていた。

しほさんの事もあり、イロイロと考えなければいけないのだけでも、正直菊代さんにバレていた時点で、うまく考えがまとまらない。

正直、まほちゃんの初めて見せる雰囲気、戸惑ってしまっているものもある。

後ろめたさが強い為だろうな。

窓からボケーと外を眺めついても不安感が拭えない。

昨日の夜の事が、どうしても引つかかる。…当たり前だけど。

「隆史」

「フブツ!?!」

突然真後ろから、声がして腰を抜かしかけた。

久しぶりのステルス発動まほちゃんだった。

…ただ、それだけでは無い。

彼女を見て驚いてしまった。

声が出ない。

いつもの制服。

…前がはだけて、スカートを履いていなかった。

この部屋に入ってすぐに脱いだのか、床畳に赤いスカートが、無造作に頼り出してあった。

制服の黒いワイシャツのボタンを更に外し、母親に負けない胸の谷間を見せつけるよに…前に出してきた。

…なに? …なんなの!?

俺が疑問を口に出す前に、一言。

「昨晚のアレは、なんだ」

最悪な一言だった。

「…夜中、何度かこの客室を訪ねてみたのだが、開かなかつた襖が開いていてな。好機だと思い、中を覗けば……お前がいなかった」

「えー……」

「トイレだろうと思い、客間でしばらく隠れて待つてみたのだが……一向にお前は帰つて来なかつた」

「……何してんの、まほちゃん。」

「はっ。それで何かあつたのかと、少し探してみた結果」

「……」

「……」

「お前は、お母様の執務室で、そのお母様と何をしていた」

「……」

「思いっきりバレていた。」

「あれを……見られていたのか？」

「よりよって……」

「俺を睨む訳でも無く、悲しそうに見てくる、まほちゃんの間を真っ直ぐ見れなかつた。」

「……」

「……みほを最悪の形で裏切つたお前を見た時……」

「やはり見ていたの……ん？」

「おかし。」

「責められるなり、ぶん殴られるなりするのは分かるが、この格好のまほちゃんはおかしい。」

「……なぜだろな。お母様が、隆史に逃げた気持ちだ。すぐに理解できなかつた」

「な……何を？」

「段々と近づいてくる。」

「私もある意味でお母様と同じなのだろう。抑圧された物に負けてしまったというのだろうか？」

「近づかれて分かつただけだ、まほちゃんは……しほさんと同じ顔をしていた。」

熱っぽい目と、呼吸。

酒は入っていないのであろうが……あれ!? 入ってる!? え!?  
ちよっと酒臭い!!

「あの襖の外で、行為を覗く真似までして……怒りを通り過ぎ……気が付けばその場で、無意識に自分を慰めていた」

「

これ……本格的にまずい!

この後、学校に行くつもりなんて、もはや無いのだろう。

「……そんな自分が、心底嫌になった」

自暴自棄。

完全にヤケになっている。

「もう気を使わない。……みほも知らない。私は私の思うままにする……感情にただ従う……」

多分、この客室に来る前に飲んで来ているのか、完全に飲酒をしたと確信した。

匂いが……

気が付けば壁際に追い詰められていた。

「卑怯かも知れない……いや、卑怯だな……。まあいい……もうどうでもいい……何でもいい」

声が出ない。気が付けば、まほちゃんは下着姿になっていた。

脱ぎ捨てられた制服。

そのまま胸を押し付け、俺の身体に手を回した。

「大丈夫だ……黙っていれば……みほにはバレ無い。私も何も言わない」

彼女も恥ずかしいのだろう。当たり前だ。

勢いを付ける為に、飲酒をまでしたのであろう。

「私を抱け」

完結に一言、言い捨てられた……。

「よりにもよって、……お母様とお前は関係を持ったんだ」

「そんな私の気持ち分かるか? 分かってくれないのか? お前はワカラナイダロウ」

すでに泣きながら…懇願するように…強く抱きしめながら求めてくる。

「ごっごで、お前に拒否されると……」

「ま…ほ…ちち」

抱きしめられていた手。

爪を立てたのだろう、背中に複数の痛みが走る。

顔を上げて俺の目を見た彼女は、笑っていた。

泣きながら笑っていた。

目は俺を見ているのかどうか分からない。

ただ黒く濁っている。

「私の中の全てが、壊れてしまう」

◇ ルート ・ 人妻編① ◇ 〳 過ちの始まり 〵

「正直にいますすとね、出会った頃…隆史君が非常に苦手でした」  
ホテルの最上階のラウンジ。

カウンターにしほさんと並び愚痴を言い合っている。

グラスの中の丸く白い塊を見つめ、今回の騒動がやっと一区切りついたと、実感した。

何故でしょうか？

バーテンダーの方が、私達を見ながら顔を引き吊らせていますね。まだ、2時間程しか飲んでいないと言うのに。

私達の左右に、見知らぬ男性が酔いつぶれていた。

勝手に声をかけてきて、勝手に酒を仰いで、勝手に潰れてしまった。

まあ…私達は、目立ちますからね。

こんなのを相手にするのもバカバカしいですし、私の話を聞けど、しほさんに絡んでみました。

話半分に、私の愚痴を聞いていたしほさんも、隆史君の話になつたら食いついてきましたね。

話の流れ的に、今日の話になつただけなのですけど。

「苦手…ですか？」

「初めて会ったのが中学生の頃…だったかしら…。尾形さんが連れてきて紹介されましたね」

「…先輩ですか」

隆史君の母親。

私としほさんの共通の知人。

…随分と破天荒な…親戚の方。

「まあ、随分と可愛げが無かったですよ…子供と話している気がしませんでした。…正直、薄気味悪さまで感じました」

「……」

どこか納得がいくのか、黙って聞いていますね。

「…喋る言葉が全て社交辞令。…営業マンと話をしている気分でした…」

「……」

「しほりん、聞いている!？」

「はいはい、聞いていますよ。まあなんとなく分かりますから……」  
遠い目をしながら、グラスを仰いだ。

彼女は、小学生の頃も見ているのですね。

中学生であの態度でしたから……小学生の時ってどの様な感じだったのでしょうか？

「……認識が変わったのは……愛里寿との事ですね……。隆史君、初めて会った小学生の愛里寿に、土下座したんですよ!？」

「……はいはい。その話はもう、3度目ですから知ってますよ……。馴れ初め聞かされて、正直いい気分はしませんが」

……まあ、あの愛里寿が……私以外に心を開いた。

それだけで、興味が湧きましたね。

「だって……たった一回あっただけで、愛里寿が別人の様に変わっていった。……あの泣いてばかりいた娘が……」

お礼を言ったほうがいいのか？

何をしたら、聞いたほうが良かったのか……

愛里寿に何を聞いても、頑なに教えてくれませんでしたからね……

……フツツ。

少し……いえ、かなり嫉妬したものでしたね。

高校生になって、久し振りに見た彼は、体格も良くなり、すでに成人男性にしか見えなかった。

なんというか……とてもからかいがい……いえ、話していて面白い子でしたね。

あの下衆蛙と、話している時もそうでしたね。

大の大人でも、立場もありますし、あの下衆とやり合える人間は限られるのですけどね。

しかも17、8の子供。

普通物怖じしてしまいそうなものなのですけど……

立場なんて無いのが強みかもしれませんですけどね。

「……」

「……」

本日の食事会で、主役みたいな彼の話は、花が咲いた。  
でもね。なんでしょうか？

「隆史君の話で、しほさんが得意気になっているのが、少々気に入りませんが……」

「まあ……娘との事もありますし……。付き合いが長いですからね」

あまり表情には出しませんが、少し嬉しそうに微笑んでいますねえ……。

……。

「……娘の為に、高校生が県まで跨いで、私に意見しに来た時は……。流石に驚きました」

「それも、もう何度も聞きました」

「ちなみに……後で聞いたら、娘だけじゃなく私の為でもあった……と言っていました」

「………しほさん。何か張り合ってますか？」

「そんな事無いですよ？ 張り合う理由がありません」

イラッ

「……」

「……」

何故でしょうか？

目の前のバーテンダーの方が、怯えていますね。

「………しほりん」

「なんですか、急に」

「高校生に手を出してはいけませんよ？」

「……あ？」

あら？ グラスを口に運んでいた手が、止まりましたね。

「いくら旦那様が、単身赴任でいない日々が続いているからといって………高校生はダメですよお？」

「……おい、ちよきち」

「欲求不満でしたら、その酔い潰れている男で我慢して下さいねえ

「？」

「……よし。売ってるな。それは私に、喧嘩を売ってるな!？」

「いえいえ、ご忠告申し上げているだけですよお?」

二人同時にグラスを仰ぎ、一気に飲み干す。

また、同時にカウンターに叩きつけられる二つのグラスの音。

「……どちらかといえば、欲求不満は千代さんでは? お一人、お部屋に連れて帰ったらどうですか?」

「……趣味じゃありませんねえ……この様な方々」

「遠慮しなくとも良いのですよ? 黙っていてあげますから!」

「あらあら。その言葉、そっくりそのまま、熨しつけてお返ししますよ!？」

「あ、あの!!」

なんですか……バーテンダーさん。

……あら? 何故、小刻みに震えているのでしょうか?

「お……お連れの男性は、逃……いえ、お帰りになりましたし……」

「「連れではアリマセン」」

「ヒイ!!」 失礼しました!!」

全く。何をどう見たらそうなるのですか?

先程から目の前で、様子を見ていたでしょう?

……まあ。

確かに、いつの間にか、潰れていたどこかの男性達はいなくなっていますけど。

「で……ですね」

「「……なんですか?」」

酔ってしまったしほさんの……ええ、しほさんでしょう。

ダメですよ? しほさん。

そんなお仕事の方を睨みつけるなんて。

そのしほさんのせいで、青くなったバーテンダーの方が、店の時計を掌で指し一言。



「あの…。申し訳ありませんが…。まもなく閉店になります」

ホテルのラウンジは、どうしてこう閉店が早いのでしょうか？  
まだ24時だと言うのに…。

「ちよつと足りませんね」

誰に言う訳でもなく、自然と口から出てしまいました。

エレベーター前で、いつまでも迷っている訳にはいきませんし  
ねえ。

…あの子達3人共、もう寝てしまったのかしら？

一応携帯で、愛里寿の様子と確認してみたら、まだ起きてますね。  
しほさんは、もう部屋に戻ってしまいましたし：ソウデスネエ。

愛里寿もお世話になっていきますし…。

「……」

あの子達も：たまには労ってアゲマシヨウカ。

はい、そんな訳で目的の階が決まりましたね。

降るエレベーター。

目的の階の一つ上。誰か乗り込む方がいるのでしよう。

ゆっくりとエレベーターが止まり、機械音と共に扉が開きました。

「あれ？」

「あら、隆史君？ どうしたのこんな時間に」

先ほどの話の主演が乗り込んできました。

明らかにホテルにある、宿泊客用の衣類を着ていますね。

…ああ…先程お酒で汚れてしまいましたからね。他に着るものが  
無いのでしよう。

観光ホテルでもありますし、浴衣があってもおかしくは無いのです

けどね。

……。

胸板がすごいわね。

この子、鍛えているだけあって…なるほど。

「…千代さん、今まで飲んでいたんですか？」

「え…ええ！」

エレベーターへ入るなり、少し責める目で見られちゃいましたね…。

…。

まだ飲みに行くって言ったなら怒られちゃうかしら？

「…千代さんの部屋、確か上の階でしたよね？ …下の階に何か用ですか？」

「え!? ええちよつと…」

ジロリと、エレベーターの各階のボタンへ視線を移した。

…先程私が押した階のボタンが、煌々と光っている。

「…大学生の人達の所ですか？」

またジロリとこちらを向き、半開きにした目で睨んできましたね。

…ちよつと、怒ってますよねえ？

「ち、違うわよ？ 飲み足りないから、連れ出そうとか…そんな事思っていないわよ？」

「……」

「」

「た…隆史君は!?!」

この子、こんな責めるような目が出る子だったかしら…。

ちよつと怖かったわ…。

無言で、ジロつと責められるのが案外きつかった為に、話題を隆史君に逸らしてみた。

「はあ…近くのコンビニですよ。例の大学生は兎も角、愛里寿…下手すると朝、二日酔いになってそうですから…モロモロ買っておこうかと」

「こんな時間に？」

「大学生達に、先程の食事会でですね?」「千代さん」が「散々」飲ませた為にですねえ……潰れた彼女達を、さつきまで俺が介抱していたから、こんな時間になりました」

「……ゴメンナサイ」

少し今日は、言い方に刺が……あ、また私が飲んでいた為かしら……。言いながら、1階のボタンを人差し指で押していた。

「やっと介抱し終わったんですから、千代さんも流石に今日はもう諦めて下さい。……余計な事しないでくださいネ?♪」

「……ハイ」

確かにホテル近くにコンビニはあったけど、愛里寿の為に……とはいえ、随分とマメな子ね。

……ふむ。

返事をしてしまった以上、あの3人の事は諦めましょうか。

多分、この後あの3人を連れ出したら、隆史君すごい怒りそうだし……。

……今も笑顔で青筋立ててますしね……。

……あ。

「では、私もコンビニに行きましょう」

「は?」

「正直に言うと、確かにあの子達ともう一度飲みなおそうかなあ……って思っ……やめる! やめますから、睨まないで!!」

すごい顔で、近づかれちゃったわあ……。

やめて正解だったわね。

「だからですね? 部屋で一人で……少しよ! 後少しだけ飲みた……いか……なあって……思いました……」

「……」

「」

「……だ、ダメ?」

「はあ……、分かりました。んじやいっしょに行きましょうか?」

「ほ……本当!? 怒らない?」

「……黙っても一人で行っちゃいそうですし。夜道一人で歩かせるよ

りましたですから」



はい。そんな訳で、コンビニでお買い物。

酔った千代さん、ほっぽり出しておく訳にもいかないしね…。  
全く。

「……」

コンビニ自体そんなに入らないのか、物珍しそうに店内を物色している。

アルコールが入っている関係もあるのか、彼女は随分と子供っぽい印象を受けた。

…はしやぐタイプの酔い方するのか。

しかし、恐ろしくコンビニが似合わないなあ…千代さん。

やはり普段、コンビニなんて利用しないのだろうなあ。

俺が買うものはもう決まっていたので、店内に入り次第売り場に直行。

スポーツドリンクとキャ○ツ○をカゴに入れる。

……大学生の分も買っておいてやるか。

……。

キラキラした目で、酒売り場の冷蔵庫で物色している千代さん。

…うん。

多分俺は、すっごいレアな光景をみているのだろうか。アンバランス感がすっごいねえ。

俺の買い物カゴに、缶チューハイを何本か入れると、まだ何か足りないのか売り場を物色している。

缶チューハイねえ…これまたイメージに合わないねえ。

今まで飲んだことがないのか、飲んでみたいとの事。

千代さん、高級酒しか飲まないイメージあるからなあ…。

お代は千代さんが、持つてくると言ってくれているので、文句は無いのだけど…。

高校生に酒入った買い物カゴ、長時間持たせないでください…。年齢確認とか、色々と初めてが多かったのか、物珍しそうにキヨロキヨロしながら、やっとこさ千代さんの買い物が終わった。

コンビニ店員独特の挨拶とともに、店内を出てホテルへ並んで歩く。

…：…こんな状況もレアっちゃレアだ。

少し先行して歩く千代さんは、肩の荷が少しは下りたといつもより上機嫌そうだった。

徒歩5分程の帰り道では、特に話す事も時間も無い。

…：…。

何でもない。

何も無い、ただ買い物をして帰る。

ただの日常。

こういつた時間が、とても好きだ。

…：まあ状況が、今回ちよつと特殊だけどね。

二人分に分けたコンビニ袋の片方を渡し、エレベーターで千代さんと別れた。

そのまま赤い絨毯の廊下を進み、自室に帰る。

…：そして寝るだけ。

うん。

後、寝るだけだったよな。

ここで一つ忘れていた。

戦車道している人達の特異能力。

はい、ステルスですね。ステルス能力。

ええ…。

「…なんで、俺の部屋にいるんですか千代さん」

「？」

「何言ってるんだ？ って顔やめてください。さつき挨拶して別れまし

たよね？ 何故、さも当然の様にソファ―に座って、飲む準備してるんですか!？」

「だってほらあ、少しだけ飲んでもいいって言いましたよね？」

「自室で飲んでください…。というか、どうやって入ったんですか…」

「島田流は忍者戦法と言われているましてね…こう…隆史君の真後ろで…」

「……」

さて。寝るか。

「やめて！ 流石に猫を持つみたいには持ち上げないで！ そのまま摘み出そうとしないでえ!!」

「……」

多分千代さんを襟首もって持ち上げようとしたのは、史上俺が初だろう。だが後悔はしていない。

モラルつてもんがあるでしょうが！

「ほら！ しほさん寝ちやったし!! あの3人誘えないし!! 流石に一人で飲むのは寂しいのよ!!」

「子供ですか!! いい大人が、甘えないで下さい!!」

「隆史君、甘えていいって言いましたよね!？」

「……ぬっ！ 場所と状況を考えて下さい」

確かに食事会での席で、勢いといえ口走ってしまった。

が。甘え方がダメです。アウトです。

「そもそも高校生とはいえ、男の部屋に…しかも夜中に来るなんて…何考えてるんですか？」

「あら？ 隆史君、こんなオバさんをご様な目で見れるのですか？」

♪

「……この酔っぱらいは…。当たり前でしょう？ だから早く帰ってください……」

その言葉を言った途端、千代さんの顔が満面の…とても嬉しそうに…そしてすっげえ悪そうに笑った…。

「…な、なんですか？」

「いえ…隆史君、随分とはつきり言ってくれたなあって思っています。ちよつと嬉しく…」

「……」

さてと。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！！ ですから、猫を持つ様に追い出すのはやめてください!!」

……うん。

千代さん、酔うとめんどくせえ。

どうすつかなあ…。

◇

ふっ！ 甘いですねえ…ええ、甘いです。

懇願して懇願して…。

そして懇願して、やっと了解が取れました！

「少しだけですよっ！」

ここまでムキになる私も、ああ酔ってるなあ…つて、自覚が有りますから多分大丈夫でしょう。

ええ！ 酔っていません。

…あの、隆史君。

その目は、その…やめてください。

さて…正直、年頃の男の子と話す話題がありません。

お酒が乗った机に、向かい合わせで座ってくれていました。

「話し相手になってくれる姿勢を見せてくれてる辺り、隆史君優しいですねえ…」

「…酒を出す店でバイトしてましたから…。ええ「酔っ払い」の相手は慣れています」

「あら、手厳しい」

不機嫌そうですけど、それでも相手をしてくれる辺り…この子やっぱり面白いわ。

バリバリと頭をかいていますが、もう普通に話すようになってくれますしね。

この場では、愛里寿の件に関して話す事はもうやめましょう。

またお礼を言ってしまうえば、気を使ってこんな素の状態を解いてしまいかもしれませんしね。

それはちよつと勿体無いです。

…ふむ。チューハイと言うのはまあ…なんというか…アルコールは入っているのでしょうか…。

甘いですし…ジュースみたいですわね。

先程まで強いお酒を飲んでいたので、余計にそう感じてしまうのでしょうか？

小さい瓶ですが、強いお酒を買っておいて良かったですね。

……。

この子。食事会の時は、ちよつと小細工してみましたけど結局飲みませんでしたね。

このくらしいの年の男の子は、大人の許可があれば、喜んで飲んでしまいそうなものなのに。

……。

蝶野一尉が言ってましたね。

隆史君は酔うとすごいと…。

……。

食事会の時を思い起こしてみると、この子随分と、びしょ濡れになったしほさんにドギマギしていましたね。

まあ…透けた下着姿とかになってましたし…年頃の男の子って感じはしますけど。

…ふむ。ちよつと面白くありませんね。

私に対しては、どうなるのでしょうか？

……。



……………。

「……フフツ」

「千代さん？」

「え!? あ、すみませんね…少しブーツとしてしまいましたね」

「…ソウデスカ」

やっと回ってきましたかね? ちよつと声が変わってきました。

私一人飲んでは…と、隆史君には普通の飲み物を出していました。

ええ…すでに中身はすり替えてあります。

入室してすぐに、お手洗いくるりに行くふりをして…ペットボトルの中身をすり替えました。

ペットボトルから、コップに中身を移す為に私が最初に開けたので

…はい。バレませんでした。

…普通に飲んでますね。…正直すぐにもバレると思ったのですけど…。

この子はお酒に強いのか、弱いのか…。

しかしコンビニには、結構強いお酒も置いてあるのですね。

隆史君にバレない様に、購入するのは骨が折れました。

…ウイスキーの水割り…iリットルは飲んでますよね?

目の光が、段々と濁っていつてますねえ。

そろそろですかねえ・

さて、どうなるか。

「……」

……私は高校生にお酒を飲ませて、何をしているのでしょうか。

普通にコレ犯罪ですよねえ…。

少し冷静になると結構とんでも無い事をしているのだろうと、思いましたけど…もう後には引けませんしね。

では…。

ソファアに並んで座っていましたが、ちよつとからかう意味でも、少し寄って密着してみました。

ワイシャツ一枚の薄着になって、一つだけボタンを外して見まし

た。

「……………」

…むっ。

照れるわけでもなく、動じないですね…。

完全にお酒が回ってきたのか、目線が壁に向かっていますね。

私を見ようともしません。

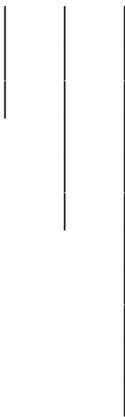
これはちよつと…残念ですね…。

というか、悔しいですね。

ワイシャツ一枚のになった時のしほさんとの反応の違いが、若干苛立たせますね。

「……………」

確か、酔っ払った隆史君は…。



怖いくらいに、バカ正直に答える様になりましたね…。

何を聞いても、即答でした。

ロボットか何かでしょうか？

……しほさんが、初恋って本当だったんですね…。

あ。私のお酒まで飲み出しましたね。

最近お酒を飲んだ事が有るか、聞いてみたら面白い答えが返ってきました。

大洗学園の生徒会歓迎会で、知らぬ間に飲まされていたと…。

悪い事考える子もいるんですね…。

『貞操奪うつもりで口説いてみ？』

まったく…凄い事を言う生徒会長もいるものですね…。

…。

一度会ってみたいですね！ すごく！

でも、この朴念仁・隆史君が、女性を口説く…ですか。  
ふむ。

「隆史君」

「はい？」

「…私も、その様に口説けますか？」

「…は？」

見てみたい。

正直すごく見てみたいですね！

…あ。

でも考えて見れば、口説けと言われて口説かれてもねえ…。

対処に困りますよね？

「…ええ、すいません変な事言いましたね？ 忘れて…「ワカリマシ  
タ」

…え。

そういつた直後、肩を抱かれて引き寄せられました。

え？

「えっと…確か、年上の女性の場合…：貞操を奪う…：だったか？」

ボソツツと呟いた直後、耳を軽く舐める感触があ!?

ただ無言で、耳たぶを舌で弄ぶんでいますね…。

今更…生娘では無いのですが…これはちよつと…。

そのまま、舌を這わせて耳から首筋へ。

なに…この子…。

食事会の時とは違い、一切の躊躇が無い…。

体重をかけられて、軽く押し倒される形に流れるようにもって行  
く。

しほさんの透けた下着姿を見て、ドギマギしていたとは到底思えな  
い。

「!？」

すつごい自然にボタンを外されました。

え…。

気がついたら胸の中央くらいまで、気がついたら開いています。

「えつと…あの？ 隆史君？」

流石に躊躇してしまいますね。

今度は、少し倒れた私の足の間に太ももを入れてきました…。

本当に…何この子…。

高校生が取る行動じゃない…。大胆にも程がある…。

ここまで、一切無言。

「んっ」

ただ必要に舌で何かを探すように、首元を這わせている。

思わず声が出てしまった。

自身の吐息が暑いと認識するくらいに。

しかし、一切の躊躇が無い行動に若干の恐怖を覚える。

確かに酔った勢いで、からかい半分に口説いてみてほしいと頼んだ

のですけど…これはその先ですよ？

口説かれる…のでは無く、押し倒されているという認識ですけど？

「流石にこれは…オバさん相手に無理をしなくても…。」

躊躇してしまっただのもあるが、好き勝手やられている気がします。

それに、数時間前まで偽装とはいえ、娘の婚約者が…。

「あの…。」

「ここまで初めて口を開きました…。」

「千代さんをオバさんだと思ったことなんて、一度も無いですよ？」

「」

耳元で囁かないでください！

隆史君の手が、腰を持ち上げ身体を密着させる。

…でしたので、触れたので分かりました…。

硬い。

さすがにいけない。少々これは度を過ぎている。

冗談が冗談では、無くなってきている。

「んんん？」

いつの間にか、指で太ももをなぞりながら、ロングスカートの中に  
まで手を入れている。

そのまま腰骨から、ふとももの関節部分をなぞる。

擦りたい感触と、ゾクゾクとした背を這うような感覚が駆け抜ける。

「ん…はあっ」

軽く仰け反ってしまい、顔を上げたら、伸びた首の筋を舌を這わせしてきた。

身体に熱が帯びていくのがわかる。

この子、直接胸や秘部を触ってこようとはしないで、周りの神経や関節部分。

それこそ焦らすように攻めて来ている…。

止めなくては。

先程のラウンジでの、しほさんとの会話。

欲求不満…。

自分自身に言えることで…まあ…正直に言えば、ありますね。

夫と夜の営み自体、しばらくしていない。

…それどころか、顔すら見ていない…。

「…」

あら？

いつの間にか、隆史君の攻めが終わっていた。

ソファーから立ち上がっていた。

「…」

ああ…そうか。

口説いて見てく欲しいと言ったので、口説き終わったと思ったのか、隆史君の行動は終了していたのですね。

私は無意識に、胸で呼吸をする程、息を荒くしていたようでした。

ソファーに完全に押し倒されていましたね…。

…。

少し勿体無い気もしますが、こちらも冗談で言ってしまった手前、やりすぎた彼を責められませんね。

危なかつた…。

お酒と欲求不満が重なったせいだとは思いますが、…：…籠絡しかけ

てしまった気がしますね。

「……隆史くん!?」

固まってしまった。

立ち上がった隆史君は、私の胸辺りに立っていた。

視線を下に向けてみたら……その。

浴衣を着て、薄着になっていたので彼の前がはだけていた。

その……先程感触で分かりましたけど……

目の前に下着の下からでも分かるくらい、大きくなっていた。

「……」

近い。顔にすごく近い。

……というか……なんででしょうか……。サイズが違う……。

「!?!」

彼は、下着をずらして股間を露出した。

混乱した。思考が追いつかない……。

え? 本当に? え?

隆史君が、隆史君に思えない……。

彼も飲酒して、理性がどうにかなくなってしまったのでしょうか?

「……」

すごい男の匂いがする。

久しぶりの匂い。

ただ大きさが……コレ……多分、規格外だと思っただけです……。

彼の体格に比例しているのでしょうか?……その……すごく立派なモ

ノが、鼻先にまで伸びてきていました。

段々と、口元に近づいて来た。

目が離せず凝視してしまいましたが、一瞬目を上に向けると……すこ

く無表情な彼の顔が見えました。

興奮しているとか……恥ずかしがるわけでもなく……。

ただ一点。

私の目を見ていた。

「……どうしたのですか?」

彼の声で気がついた。

無機質な声に。

私だ。

私だった。

下着を脱いだのでは無く、脱がせた。

近づいてきた…のでは無く、近づいた…。

無意識に私がしていた。

思考が言い訳がましく、後からついてくる。

彼の攻めと、お酒。

…現場の雰囲気。

欲求不満。

しほさんに張り合う。

…言い訳の理由は多々あります。

私は気が付いたらすでに、彼のモノを味わってしまっていた。



肌を舐める時の特有の味。

久しぶりの匂い。

舌先で味わう。

亀頭の周りを舌全体を使い、その味をヌルヌルと絡め取る。

顔を前後に動かすとか、そういった性的行為をする訳でもなく、ただ味わう。

「…あの」

頭の上から声が出たけど、夢中になってしまって気がつかない。

そのうちに頭を抑えられ、強引に口から離れさせられてしまった。

「…千代さん。それは、少しまずいのでは？」

隆史君。

隆史君の事務的な口調が、少し腹立たしかった。

口説けと言ってしまったが、少なくとも私のスイッチを入れてしまったのは彼だ。

「……あら、隆史君。あそこまでして置いて……今更……」

この言い方は少し卑怯だ。

人のせいにはしている。

「……これ以上は、俺も収まりがつかなくなりますよ？」

すでに関係がおかしくなっている。

歳は離れているけど、ここまでしてしまったら、ただの男と女の話になっていく。

……だからか。

収まりがつかなくなると……彼は忠告してきたのだろうか？

今更過ぎる。

独特な卑猥な匂い。

もう香りと、言ってもいいかしら？

口にしてしまったので、私の方が収まりがつかない。

考えたくない……。

久々の感覚と、溜まっていた鬱憤。

私の中の性欲が、それは、ダムが決壊する様に……溢れ出した。

無言のまま、彼の先にキスをする様に口先をつける。

今度は完全に彼をイカせる為に……そう。

性行為として、動き出す。

ちゅ……じゅる……。

小さく啜る音が、自分でも聞こえた。

……。

……。

しかし。

舐めていた。

収まりがつかなくなると言った彼を、十代の経験の無い……もしくは経験の薄い男の子だと……舐めていた。

「……もう知りませんよっ。」



腹が決まった。

行為を続けると、決心したのか、私の頭を片手で持ち、乱暴に前後に動かし始めた。

初めは、せっかちな子。

がつつき始めたと思っただけけれど……違った。

何か足りなかったのか、少し前後をする位置を変え、私の頬の口内を文字通り「使い」始めた。

「んっ!? んん!?!」

そのまま、口内全体を犯す様に暴れ回し、最後には喉の奥まで犯し始めた。

ジュツ、ジュバツ! ジュポ!

「ンッ! ンッ! ンンッ!?!」

意識をして、敢えて音を出させるように腰を動かす。

強引に喉の奥まで、長いのと太いのが侵入してくる。

咽るのも許してくれそうに無く、自然と涙まで出てきた。

「…千代さんは…少し強引なのが好きそうですね?」

見下す様な目で見下ろしている。

涙目になりながら、目だけで見上げた。

「……ある程度、地位の有る人や、おエライさんは…そういうのが好きな人が多いと聞きましたか? そうですか。合わせますね?」

私を見て、冷静分析していたのか、何か納得したようで、「仕方が無い」そんな一言呟いていた。

呟いた直後、私の頭を両手で掴み、強引に前後しながら腰まで使い、奥まで犯す。

ジュボジュボジュボジュボ…と、音を立てさせられる。

頭が段々と真っ白になっていく。

…この状況にどこか、興奮しだした自分があるのが怖い。  
喉奥まで犯す、犯されている。

「…いきますね? 飲んでくださいいね?」

感情の高ぶりも無く、淡々と喋る隆史君が別人に見えた。

…酔うとここまで、人は変わるものだろうか？

「！」

「んん!!?? んんん!!」

喉奥まで突き刺され、手で強引に抑えら得た時、喉の奥で熱いものを感じた。

「ほら。逃げないで下さい」

「んぶっ!!? ン!!」

体から汗が噴き出す。

窒息しそうになり、鼻から息を吸うが異物が入っていて、上手く酸素を取り込めない。

いっしょに特有の…精子の匂いが鼻の奥に、広がる。  
…。

「えはっ!! ゲホッ!! ウ…ンン!!」

唾液と精液が混じりあったものが一緒に、ダランと糸を引きながら彼が引き抜かれた。

が。

すぐに彼の手で、私の口を強制的に閉ざされた。

喉の奥で咳をする。

「ダメですよね? 飲んでと言いましたよね?」

力尽くで、顔を上に向かせ飲み干すまで離さない。

そんな感じだ。

グ…ゴクツと喉が鳴る…。

喉を鳴らして、唾液ごと強引に飲み干す。

少し時間が掛かってしまったが、証拠に彼に口内を見せるように指でこじ開けられた…。

「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…」

平らげた。

全て飲み干してしまった。

指を入れ、舌を弄る様に確認してきた。

ハアハア…。

激しく息をしている私が、ちゃんと彼のモノを飲み干したのを確認

したら、即私を両腕で抱き上げた。  
…休憩すらさせてくれなかった。

「……んっ！」

ベットに連れて行かれ、その上に放り投げられるように寝かされました。

ちよつと私の扱いが乱暴…。

先程の、口説く…モトイ…押し倒された時…前戯というものが済んでしまっているかのよう…。

…ちよつと…いえ、かなり…私は彼にヤラレテイタ。  
何時脱がしたのか…。

すでに私はスカートを履いていなかった。

今更、下着姿を見られて、恥ずかしいとかそういう感情は沸かなかつたけど…。

？

下着の秘部の部分を、遊んでいるかの様に下に引かれた。  
自分でも分かるぐらい、濡れていた。

「んっ！ はあ…。はあ…。ああああ!？」

乱暴に扱う訳でも無く、膣口を指でスライドして触りだした。  
濡れているのを確認するかの様に。

親指で軽く抑えたり、広げたり…。

ジユクジユクと音を敢えて立てるかの様に、私に確認させる。  
仰向けになっている私の膝の上に両手を乗せ、強引に開く。

そのまま躊躇なく、膣口入口を舌で弄ぶ。

「んっ…んっ…はあっ！」

声を殺したいのだけれど、この子は焦らすのが上手いのか…、不意打ちで刺激を与えてくるので、殺しきれない。

…この子…先程から、舌も指も私の中には入れようとしなない…。  
入ってこない。

ただ優しく撫でたり、焦らしたり…。

……。

「た…った…んっ！ たか…あッ!!」

喋らせようとさせないかの様に、時に激しく攻めてくる。  
ジユクジユクトと音をさせて。

「……」

「はぁー……ハァー……」

「……さて。もういいですかね？ まあ今更……トメラレマセンケ  
ド」

来る。

身体を起こし、開かせた両膝に手を置いてる。  
やっと来る。

……生殺しの状態だった。

イキそうになると、指…舌を離された…。

私の恥丘の上に見える彼のモノ。

……期待と恐怖の両方が、入り混じっている。

あのエグい大きさと形。

「た…隆史君……。こ…こんな……女性経験あつ……たのね。驚いた  
……わ」

ハアハアと息も絶え絶えに、先程何とか言いたかった事が言えた。  
ちよつとシヨックだったから…

「無いですよ？」

「……え？」

「俺、現時点で童貞です」

……うそ。

嘘よね!?! 扱いが……。

女に熟れている感じしかなかったのよ？

「……冗談よね？ え？ 初めてで……コレ？」

そんな彼の顔は至った真面目…というか、無機質。  
両足にグツつと体重が掛かった。

「………コツチノ、セカイデハ」

ふっ！ ううううう!!??

「……カッ…はッ!?! フッ！」

一瞬息ができなかった。

ボソッと何か呟いた瞬間、彼が入ってきた。

意識が少し飛んだ…。

太い…。

散々焦らされた為、快楽が津波の様に押し寄せてきた…。

まだ入れただけなのに…。

ニチャツつと、音がした。

私の中の愛液が、強引に押し出された音…。

先程から、隆史君はどうにも声や音を出す、出させる事が好きなよ

うだ…。

「んんあああああつ!!」

ズルツつと引き抜かれた。

亀頭の力りの部分だろうか？ 私の中を根こそぎ掻き出す様に…。

…これは…まずい。

素直になりましょう。

気持ちがいい。

今までの何より。

身体の相性がいいとか…そういう次元では、無いのでしょうか。

多分…これは天性のモノでしょうね…。

ジュツ！

パチュ！

パツつ！

動かす度に、恥ずかしい音がする。

正常位で、ただ無言で腰を振る彼。

一突きされる度に、頭が白くなり。

引き抜かれると、現実に戻される。

そんな快楽…。

「ハッンっ、はっ、あっあつ!!」

小刻みに動かす時、何かを探る様に動く。

「んっあ!! あっ、あんん!!」

まだ、挿入してから数分しか経っていないのでしょうか。

でも…波が…いく…こんな年下の男の子にいい様に  
……。  
……。  
……あつ。

◇

…そうだな。俺は多分、酒でも飲まされたのだろう。  
少し抜けたのか…多少冷静になる。  
が。もう遅い。  
やめる気はもう無い。

「……どうしました？」

彼女…千代さんが、汗だくになりながら乱れている。  
ワイシャツを脱がせ、下着を脱がれ…。  
すでに全裸になっている。

しほさん…と比べてしまつては失礼だが、匹敵するほどの大きさ。  
そして綺麗さ。

…全裸になつてしまつたのは、少々残念だ。

はい、俺は半裸派。

自身でも自覚する程、暴走しているので…開き直っている。

その彼女…千代さんは、まだ数分程しか動いていないが、そろそろ  
限界そうだった。

果てそうなのだろう…。

焦らし焦らしして…今やつとつて所だろうから…すでに千代さん  
は、快楽に飲まれている。

— 咎だった。

声をかけた時、行為の羞恥とは、また別の類の羞恥を感じた。

目が泳いでいる。

何かを考えている様だ。

「……なるほど」

彼女目は、酒の空き缶へ向いた。  
しこたま飲んだからね。

…。

彼女の…困った顔が目に入った。

「…千代さん。俺の首に腕回してください」

言われた通り、彼女は俺の首に両腕を回してきた。

そのまま両太股に腕を入れ、一気に持ち上げる。

「んっ、はあ…」

持ち上げた時に、彼女は驚いたのか、腕を引き…：要は完全に俺に抱きついた。

俗に言う「駅弁スタイル」。

入れたままだったので、それなりに刺激があつたよう、耳元に甘い吐息がかかる。

「た…隆史君？ どうしました？」

なぜか、少し恐怖が入り混じった声がした。

…。

そのまま何度か、少し早く腰を動かす。

身体がまだ熱く、密着した胸の柔らかい感覚を味わっていたかつたが…時間をかけるとダメだろう。

この人は…：ベットでは…：トテモ…：いぢめたくなる。

はつきり言おう。

この「島田 千代」さんは、ドMだと思う。

Sの皮を被った、超マゾ。

…：華さんと一緒かなあ…。

だからだろうか？

とても、相性がいいのだろう。

…。

そのまま、浴室に向かう。

はい。そのスタイルのまま。

「え…えっ!?! 隆史君!?! どこに行くんですか! え!?!」

大の大人が慌てない。  
片手で、ドアを開き浴室に到着。  
少し暴れたが、その場で何回か打ち込むと、軽く痙攣して動かなくなる。

はい。我慢してますね。

…だから、浴室で聞いてみる。

「…千代さん」

名前を呼ばれて、少し身体を離し怯えた目で見てきた。  
ゾクゾクと背中になんかが走る。

浴室にこの格好で連れて来られ、感づいたのか…。

「我慢…してますよね？」

「!？」

笑顔で聞いてみた。

…悪い顔をしていたのだろう。

顔が、赤から青に変わっていった。

いい大人ですからね…貴女。

「ちよっ!?! 待って!! たか…んあああ!!」

ピストンを始める。

先程とは違い、それなりのスピードで。

彼女の性感帯は、なんとなく分かった。

俺の首を掴む腕の力が強まる。

「あっ！ あっ!! やめっ!?! イクッ！ ハアあああ！」

パンパンと腰を打ち付ける音。

パチュパチュと愛液が絡む音。

「あ…あな…貴方っ！ 分かって…んっ!! 分かって!？」

スパートに近づける。

ゴリゴリと削る様に性感帯を直に攻撃する。

「…もういいですよ？ 俺もそろそろですから」

「ハッハッ！ んあ!?!」

女性が果てる瞬間。

本気で果てると、体の力が全体的に抜ける。



我慢していたモノが、出てしまう。

潮？

否。

バチユンと、腰を一番奥に打ち付けた時。

水音と、温かいものが身体にかかる。

「……」

「…んっ！ …ハッ！ ハ…ハア…」

身体を震わせ、ビクビクと痙攣しながら、羞恥と快楽で顔を伏せている。

突き抜いた奥。まだ軽くゴリゴリと刺激をする。

快楽から逃がさない。

「ハアハア…た…たあ…たあ…」

「なんですか？ 聞こえませんか」

果てたばかりで、上手く声が出ないのであろう。が。

知らない。容赦しない。

俺の体をつたい、浴室に広がる体液。

「わ…っ…わかっていて……」

「はい。ワザトデス」

「なっ!」

怒気を含んだ声を、笑顔で軽く受け流す。

「俺は受け止めましたので、今度は…おもらししてしまった千代さんが、受け止めて…くださいね」

「え…」

バツバツつと、タダでさえ浴室で音が響くのに、更に音がする様…強めに打ち付ける。

失禁して…いや…させた千代さんの顔は、もうすごかった。

「こっ！ これっも!! …んああ!! まって!! いった…ばあかあ!!」

言わせない。

込み上がるモノが有る。

にちやにちやと音。

大きく響く声。

「あああああ!! あっああ!!」

女性がイキ続けるのつてのは、拷問だと聞いた事がある。

敏感になった所、更に神経を刺激されるわけだしね。

まあ：知ったことじゃない。

更にもう一度、失禁。

水音ともに、浴室に座り込んでしまった。

違う。

抜いて、ゆっくりと座らせた。

俺の番だったからだ。

「千代さん」

「ハアハア……ハア……」

顔を片手で上げて、もう片手で陰茎をしごく。

意味はわかったのだろう…。

顔に：顔に出すつもりだったのだけど：何故か、自発的に千代さん

は口を開けた…。

まるで強請る様に。

御所望でしたら…。

ついでにかけるつもりで、前にだしたら：千代さんが食いついてきた…。

後はドクドクと波打つ感触と共に：彼女の口の中にぶちまけた。

：直にそのまま：彼女が飲み込んだ…。

ゴクツつと一定の感覚で、喉が鳴る音がする…。

そのまま、何度か突き引き抜くと、千代さんの顔が：完全に女になっっていた。

だが、まだだ。

少し落ち着いてきたのだろうか？

千代さんは、その場でシャワーを使い簡単に体を流す。  
俺の体も一緒に。

「……」

「隆史君……まあ言いたい事もあるだろうけど……」  
冷静になったと、普通に話し始めた千代さん。

シャワーの音が邪魔だった。

「お……落ち着きました?」

若干恐怖の色がまた見え始めた……が。

正直に答える。

「いえ、全然?」

「……え?」

終わらせない。

終わらせるか。

だから聞いたじゃないか。

確認取ったじゃないか。

収まらなくなると……。

強引にシャワーを持った腕を掴み、唇を奪い……ふと思った……。

まだ。

まだだ。

まだちゃんとヤツテイナイ。

そして言う。

ちゃんと予告しておく。

まほちゃんや、みほ達と恋愛関係になるのを躊躇していた理由の一つ。

そういった関係になったのなら、俺の場合プラトニックな関係は多分無理だろう。

まあ……昔と違い、今の体のアレは、自身がドン引きするくらいに成

長した。

何年も立って膨れ上がった性欲は、異常だった。

千代さんなら大丈夫だろう。

だから言っておく。

宣言しておく。

「……壊れないで下さいね？」

彼女の顔が、本気の恐怖に染まった。



嫌な予感がしました。

何故でしょうか？

夜中に目が覚めた。

時計で確認する：夜中の3時。

酔った状態での、売り言葉に買い言葉。

ラウンジで別れてから、まだまだ飲むと：大学生達を誘うつもりのようにしたし。

私が心配するのもおかしいが：念の為と携帯に確認を取る。

時間も時間ですし：迷惑ですが、千代さんは就寝の時には携帯の電源を切るので、すぐに分かるでしょう。

電話口から呼び出し音が鳴る。

いつまで経っても出ないのですが、これは：まだ飲み歩いているのでしょうか…。

いくら欲求不満とはいえ、娘が同じホテルで宿泊していますし、本当に男漁りなどする訳ないでしょうし。

男…。

「……」

なぜ？

…なぜ隆史君の部屋の前に、私はいるのでしょうか？

……その部屋の前で、電話を無意識にかけていました。

こんな時間に…非常識にも程がありますね…。

しかし、直感にも似た何かを感じていた。

非常に隆史君を気にしていた千代さん。

蝶野一尉から、酔った隆史君の話を、目を輝かせて聞いていた千代さん。

『……しほさん？』

出た？

電話口から、隆史君の声が聞こえた。

「隆史君。今貴方の部屋の前にいます。すぐに開けてくれませんか？」

『え？』

前置きを飛ばし、直に本題に入る。

面食らった…そんな感じの返事が返ってきました…が。

隆史君の声がおかしい。

夜中に電話をかけたのに…特に寝ていたとか、そんな声ではない。

はつきりとした返答をしていた。

直感。

「今…そこに千代さんが…いるんですか？」

…どうにも意識が追いついて来ていないのでしよう…。

ただ、一瞬電話口で、隆史君以外の声が…聞こえた…。

ハッハと…艶っぽい声が…聞こえた…。

マサカ。

「あー…ちよつと服着るんで、待ってください」

「……服？」

待っているという割には、すぐに扉が開いた。

ガチャっという音と共に、部屋主がドアを開けてくれ…た…。

開かれた瞬間分かった。

隆史君の格好、

いくら浴衣とはいえ…その格好。

私も着ている、ホテルの浴衣。

羽織っただけの様に、胸元が開いている。

隆史君の顔もオカシイ。

虚ろな…。

そして何より…匂い。

独特なすえた匂い。

隆史君の言葉も待たないで、部屋に入る。

入口付近の短い廊下を抜けると、机の上には酒類が散乱していた。

「千代…」

湧き上がる怒り。

色々と思うところはあがるが、ダメでしょう…。

これはダメでしょう？

怒りと共に、入口前にいるであろう隆史君に振り向…く。

「!？」

息を飲んでしまった。

振り向く途中、視界に入ったベットに千代さんがうつ伏せに横た

わっていた。

「ち…千代……さん？」

異常だった。

流石に私にもわかる。

この女は隆史君と肉体関係をもってしまった。

体は体液で汚れ、ヌラヌラと光っている。

体は熱っぽく赤くなって…小刻みに震え、痙攣している。

ハッハッと、小さく呼吸は聞こえるが…目の焦点が合っていないよ

うだ。

入ってきた私にも気が付いていない。

千代さんの秘部が、ポツカリと丸く空いている。

特にその部分が、異常性を強調していた。

人体って…あなるのだろうか？  
何をしたら…。

何時間程続けたのだろう…。

身震いする程の彼女の惨状…。

虚ろな目をした、隆史君を思い出した。

「しほさん」

「!？」

いつの間にか、背後を取られていた。

両肩に手を置かれている。

…こんな子供に恐怖を感じた。

「…千代さん、動かなくなってしまうまで…」

振り向くのが怖い。

後ろにいるのは、私の知っている隆史君では無い。

両肩に置かれた手が、私の胸に降りてくる。

耳元に顔があるのも分かった…。

息が耳に入ってくる。

一言呟いた。

「収まりがつきません」



いつの間にか、しほさんが来たみたいですね。

ベット。

ツインの部屋でしたので、もう一つの空いたベットで、隆史君に迫られてました。

ぼやけた視界で、私の自我も少し戻ってきました。

…私はもう限界…。

「まつ待って、待ちなさい！ 隆史君!!」

私が果てようが何だろうが…、激しく攻められた。

果てたばかりで、敏感になった身体は、隆史君に何をされようが、感じてしまう。

ただもう…途中から、快楽に思考を支配されてしまい、よく覚えていない。

私のせいなのでしょうが、隆史君が酔った状態を舐めていた。

普段なら効く自制、それが完全に外れ、私が我慢しきれなかった為に持ってしまった関係で、完全に倫理観まで崩壊したのでしょね。

でなければ…娘さんの件もありますし…、しほさんに対して、あそこまで求めないでしょう。

「く…口！ お口でならっ…うぶっ!」

口と妥協案を出した時点で、終わりですね。

強引に口に入れられて、仕方が無いと奉仕していますが…。

彼の趣は何となく理解しましたが…結構、隆史君鬼畜ですよねえ…。

ぬぶぬぶっと少し音は聞こえてきますが、渋々やっているのが分かりますし…抵抗もあるのでしょね。

「……………千代さんの方が、上手いですね」

あつ。

カチンツときたのでしょうか。

一瞬しほさんが、こちらを目だけで見ましたね。

ああ…あれは絶対ワザとですねえ…。

ワザと私と比べましたね…。

ズゾゾと、舐める音から吸う音に変わりました。

ジュパジュパと、本気でイカせる気で、唇を使い彼のモノをしごいています。

はっ…しほさんも、所詮女ですね…。



目が段々と、艶っぽく潤み出し、怪しい光を帯びてきました。

…意識がまた朦朧としてきました。

眠い…というのか、意識がハッキリとする度に少し時間が経過して  
いるみたいでした。

「…ハア…ハア…ハア…あ…熱い…」

口で済んだのでしょうか。

隆史君は、しほさんの顔を汚していました。

…彼は、基本マーケティングが好きですねえ…。

第三者目線ですと…かなり冷静に見れますね。

…ああ、やつぱり。

まだ収まらないのか…また口に入れてますね。

…。

パンパンと体を鳴らす音で、目が覚めました。

はっ。

結局、しほさんも体を許した様ですね。

まあ…旦那様が浮気をしたと嘆いていましたから…今の隆史君  
なら、簡単にしほさんを籠絡できるでしょうね。

…よし。これで言い訳が立ちました。

「んっ！ はっ！ はっ！ なっああ！ 何っ!? こ…これええ!!」

ああ。完全に隆史君を味わっていますね。

…後ろから突かれて、女の叫び声を上げている。

「んあ?」

腰を骨付近を持たれ、強引に奥に当てられた瞬間…彼女の声が高  
まった。

ビクンと震え、背筋を伸ばした。

「はあ…はあ…ハア…ハア…」

彼女も久しぶりらしく、満足気な顔に変わっている。

まあ…自覚は無いでしょうが…。

果てた様で、胸が揺れる程大きく息を繰り返していますね。

でも。

隆史君の鬼畜性は、ここからですねえ…。

「え…え!? んっ!! たかつ!」

周期的に、襲ってくる眠気。

「待って!! たかつ!? イったばかああああああ!!」

よほど参ってしまったのか…横でしほさんが、文字通りいぢめられているのですけど、意識が飛んでしまう。

まあ…次に意識が戻った時…、しほさんがどうなっているのか…ちよつと楽しみになつてきました。

「つああ…はあ…はあ…いい…隆史君…もう…限かああ!」

「はい。13回目」

「も…もう…流石に…いきた…くな…んいい!」

グチャグチャとした、粘ついた水をかき混ぜる様な音で、目が覚めました。

体を腰で上から押さえつけ、バチユバチユとした水音が混ざった様な、体を打ち付ける音で目が覚めた。

「んちゅ…じゅる」

嫌がつている割に…隆史君の唇を貪ってますね…。

そろそろ私も回復してきました…。

だからでしょうか? ちよつと…イラツつとしましたねえ…。

「しほさん…すごいですね」

「んっ…はあ…。な…なにがですか?」

「千代さんは、8回目くらいで動かなくなりましたのに」  
「……」

喜んでいいのか分からない…そんな顔をしています…満更でもない感じもしますね。

体力馬鹿のしほさんと比べられましてもねえ…。

……それらの合計をこなす、隆史君は…。

休憩のつもりなのか、している最中ほとんど喋らない彼が会話を続けていますね…。

「しほさんは、見られるのが好きな人ですか？」

「……え!？」

あまりに意外な言葉に、目を丸くしていた……。

「…その千代さんが、横にいるのに…見られているのに、ここまで乱れるなんて…ナルホド。努力します」

「たかつ!?! 努力!?!」

しほさんは、私が気絶もしくは、寝ていると思っていたのでしょうけど…。

……気づかれていた。

その隆史君と目があった。

ゾクツ!

……笑っている。

少し背筋に走るモノを感じた…。

そのまま、しほさんを私の様に抱き抱え……窓に近づいた。カーテンは開いている為、外が見える。

……。

その窓の袂のテーブル…。

あれ？

机の上の……お酒のビンの中身が……空になって…。

「ん?! たかああんああ!!」

窓にしほさんの胸を押し付ける様に、後ろから突き上げ始めた。高層にある部屋ですし…外から見られるはずも無いのですが…。

「やつ! やめ! んあ! あつ!!」

「……ふむ。ナルホド。やつぱり」

「なあつ!?! なにつ!?! があ!!」

喋らせ無い。

そんな感じで、突き動いていますね。

「濡れ方と感じ方が、桁外れになりましたね。ハイ」

「……ハアハア……な……なに……を」

ズルっと、引き抜き…今度は……私を浴室に連れて行った体位に変

えて、また突き入れた。

甘い吐息が聞こえたけど…あれは多分…移動する為…。

努力つて…。

まさか…。

「…はい、しほさん。声出すとバレますよ?」

「!! っ!! んっ!!」

入口付近にまで、彼女を連れて行き、部屋のドアを開けた。それでも激しく動いているのか…肌を打ち付ける音が聞こえてくる。

…隆史君…すごいわねえ。

リスク等…完全に忘れている。

止めたくとも、私は動けないし…。

「…あつ」

「ん!!」

何かを見つけた。

そんな声が聞こえた。

しほさんは、多分落ちない様に隆史君に抱きついていたのでしよう。

顔は部屋の方を向いているので、ドアの外。廊下側は見えないのでしようね。

あの格好だと後ろは、見れない。

焦ったような…くぐもった声が聞こえる。

「おじさん? 凝視しすぎですよ?」

「え!? んっ!? あ…ん!! ん!」

え…。

「ああ…正確には、おじさん達ですね」

「んはあ!! んああああ!!」

本当に? え?

「あ。締りが良くなったと思ったら、盛大にイってしまいましたね。…

「どっただけ変態ですか」

「はあ……はあ……」

「ああ……しようがないですね。このまま見てもらいますか？ それとも参加してもらいますか？」

「……」

「参加の方ですね」

「……恐ろしいげな声が聞こえ……即座にパタンと、ドアがしまった音がした……」

「出て行った……」

「しほさんを連れ行った。」

「……」

「まさかっ!？」

「これはいけないと、体を強引に起こした。」

「隆史君が、完全に暴走してしまっている。」

「客観視できないほど……」

「体を起こした瞬間。」

「視界にぐったりとしたしほさんが、ベットに横たわっているのが見えた……」

「はあはあと大きく息を吸い、顔がもう……私ですら見た事がないほど……蕩けたような顔をしている。」

「え？」

「あれ？ 出て行っていない？」

「はい。無駄に知識はありましたから」

「!!」

「横に隆史君がいた……」

「心臓が止まるかと思いました。」

「リップサービスという奴でしようか？」

「すごい普通に言ってますけど……横でしほさん、腰がガクガク痙攣していますよ？」

「しほさんから、見えない位置でしたしね。フェイクで軽く演出してみました……効果は絶大でしたね」

……この子…。

「しほさんも、千代さんも…こんな姿誰にも見せませんし、触らせませんよ?」

「た…たか…?」

当然でしょ? という顔。

サラリと嘘を付き、しほさんをここまで籠絡した…。

…もうダメでしょうね…。

「では、千代さん」

何故でしょうか…これ…もう、戻れない気がします…。

「……回復しましたね?」



はい。

目が覚めました。

朝ですね、朝。

…最中に頭のブレーカーが落ちるように意識が飛び、寝てしまった様だった。

……。

はい。

ベットの上。

……裸の家元に挟まれていますね。

左右から、思いつき見られています。

脂汗が止まりません。

……。

ゆっくり起き上がるのと一緒にシーツがめくられる。

俺も全裸だった。

これは都合がいい。

そのまま流れる様に、全裸土下座をベッドの上で披露できる。

「では、隆史君も起きたことですよし…私達は一度、部屋に戻りますね」  
「まったく…千代さんのお陰でひどい目に会いました……」  
「」

普通にしゃべりだす二人。

土下座をする隙すら与えないように、ベッドから下りた。

二人の間ですでに話がついている…その様な感じだった。

シャワー自体もすでに浴びていた様で、二人共綺麗な体をして  
いた。

こ…声がでねえ…。

とんでもない事をしてしまった…。

エロい趣向は、飽きがくる。

見れば見るほど、飽きがくる。

次へ…次へと、段々と趣が偏って曲がってくる。

よって…無駄な知識を総動員して…特にしほさんをいぢめ抜いて  
しまった。

……いやまあ…それ以前に、よりもよってこの二人と関係を  
持った事が……。

「あ、隆史君。分かっているとは思いますが、他言無用ですよ？」

ブンブンと首を縦に振る。

「このお酒のゴミは…千代さん、しっかり処分してくださいよ？」  
「はいはい」

何も無かったかのように服を着て、さっさと退室準備をしている。

なに…え？ え？

時計を見たら、朝の8時頃。

携帯に着信も無かったので、愛里寿達もまだ寝ているのだろうか？  
ぶっちゃけ、それどころでは無いけど…。

「では、隆史君」

「ハイ!!」

「正直私達は今、立って歩くのがやっとです」  
「」

「……無茶してくれましたからね」

「今回の事を忘れろと言っても、無理だと思えますので……一つだけお願いがあります」

「なんででしょうか!?!」

やはり話がついていたのだろう。

千代さんの言葉を、しほさんは黙って聞いている。

お願い。

なんででしょうか!!

死にますか!?

喜んで死にますよ!?

「飲ませた私が言うのも何ですが……今後……」

「……ハイ」

「私達の許可が無い限り、飲酒は禁止です」

「…………了解デス」

やっぱり酒か……。

……。

ん? 私達? 許可?

「……まあ。もしかしたら……」

「……しほさん?」

「すぐ許可するかも……しれませんが……」

……

……

え?

結局この日。

大学生含め、愛里寿まで二日酔いで、グロッキー状態だった。

特に大学生は、朝方まで飲んでいた様で、ヘリが運転できない状態だったのもある。

よって。

もう一泊する羽目になりそうだ。



だって…。

脅迫じみた目で家元二人に宿泊を勧められたから…。

俺に昨夜の事があるので、拒否権は無い。

二人共仕事があるので、早々に出て行ってしまったのだけど…しほさんもまた、このホテルにもう一泊するという。

…。

何故だろう。

…悪寒がすごい。

無茶をしすぎたのは分かるが…それこそ殺される勢いで怒られると思っただのに…。

いや実際殺されると思った…。

目には殺気は帯びていなかった…逆に…：なんだろう…：妖艶な…。

『隆史君、聞いている?』

「お…おお!! ぐめん。なんだって?」

みほからの着信…正直、辛い。

まあ…自業自得だけど…。

ああ…どんな顔して会えばいいのやら…。

『…お母さんからね、久しぶりに電話が来たの…』

「…」

『一応、共学だから…その…心配してくれたみたい。私驚いちゃって…お母さんが、はつきり私を心配して電話くれたのが…』

「…」

『だから言ったの。隆史君いるから大丈夫だよって』

「…そっか」

心臓が鳴る。

バクバクと鳴る。

『そしたらね、隆史君も男です例外では有りません…だって。即答されちゃった』

「」

しほさん…。

タイミングが最悪だ…。

今までほとんど連絡していなかったのに…、いきなりそれは…。

俺としほさんがいるのが、わかっているみほに対して…このタイミング。  
グ。

『……………隆史君』

「なんででしょう？」

『何かあったの？』

◆ルート正史 ◆ 西住 みほ く夜這いです！く

目が覚めて、ベッドの下を見ると、隆史君はようやく寝入った様だった。

携帯で時間を確認すると、ベッドに入ってから、時間がかなり経っていた。

…寝るふりと言うのも結構大変で、変な寝言で誤魔化すとか…うん、大変だった。

たまに意識が飛んでしまったりしたんだけど…そのまま寝入ってしまったえば楽だったのに。

中途半端に目が覚めると、余計に寝れないよ。

咄嗟に出た、寝言。少し、本音が出てしまった。

あ、隆史君が変態さんってのは、ちよっと思ってる…。

戦車道チョコのカードを事で、言っていたことは…うん、えっち。

隆史君の部屋に、その…お泊り。

昼間の出来事がまだ怖いとか、一人で部屋にいるのが怖いって言うのも本当。

実際…お風呂に入る時に、羞恥心より恐怖心が優ってしまった。でも…。

隆史君が思いの外、真面目でびっくりした…。

まさかいきなり、玄関を閉められるとは思わなかったなあ…。

「……」

目覚まし時計の、秒針が動く音だけが聞こえる。

少し体を起こし、その彼を見下ろして、寝る前に言ってくれた事を

思い出した。

私を意識してくれていると言ってくれた。

なんだかんだで、泊めてくれたり、手を貸してくれたり…。

私の事を本当にどう思っているのだろう。

ただの幼馴染というだけなのかな？

私じゃなくて、他の…それこそ、会長とかも私と同じ様に押しか

けたら、この人は泊めてしまうのかな…。

…まあ、お姉ちゃんなら絶対泊めるだろうな。

……。

外を見ると、雨はもう止んだ様だった。

月明かり…じゃない。夏場だし、日が出るのが早い。

少し紫がかった空が視界に入った。

まったく寝れなかったよ…。

時計で時間を確認すると、4時30分頃だった。

「……ん」

隆史君の声があった。

それと同時に、腕が引つ張られる。

あ…手を握ったままだった。

流星に上げっぱなしでは無かったけど、私も半身になりベットの隅っこで握っていたから、腕を私の手で、吊るような状態で握っている。

ちよとちよこ夜中、手を持ち替えて遊んでいたりした。

彼の左手を、右手で持っていた為に、私がうつむせに寝てる。

お陰で、ちよつと私がベット半身が出てしまい、落ちそうになっていた。

「よこよこ」

上半身を横にずらして、少し上半身をベットから出すように動いてみた。

見下ろすと、彼の寝顔。

うん、ちよつとマジマジと見てみたくなったの。

「あはは、ちよつと可愛くないかも」

何故か、しかめっ面で寝ている。

悪い夢でも見ているのだろうか？ 眉間にシワが寄っている。

そして少し、困ったような顔。

嫌いじゃない。

その彼の寝巻きは、いたってシンプル。

Tシャツとハーフパンツだった。

夏場だし、薄着なのは分かる…分かるのだけど…。

初めは、顔だけ眺めていた。

しばらく見ていたと思うけど、その…無意識だった。

無意識だよ？

特に気にしていた訳では無いのだけど、目線が流れて…下を見ていた。

うん、下半身。

だから気がついちゃった…。

「ふぶっ!？」

夏用の寝巻き。

うん…。

薄着と言えば薄着だよね。

もうそろそろ朝だし、基本的に隆史君は早起きだ。

だからかなあ…。

私だって高校生だし…その…まったく知識が無い訳じゃない。

だから、うん。

不可抗力なものも分かるし、意識していないのも分かる。

何言ってるんだろ、私…。

…。

うん。なんか…オツキイノガ。

「」

びつくりして、危うく大きな声が出ちやうところだった。

無理に声を飲み込んだ為に、ズルつと中途半端に出していた身体が滑った。

「!？」

あ…危なかった…。

なんとか余った片手で地面を支え、完全に落ちてしまうのを阻止できたあ。

特に彼を起こしてしまいう事は、なかった。

なにをやっているんだろ…私。

「…はあ…おトイレ行こ…。」

あつ。

無意識に出てしまった独り言。

変な格好で、そんな独り言を言ってしまったので、慌てて彼を見る。

……良かった。起きてない。

こんな姿を見られて、あんな独り言を聞かれたら、恥ずかしくて死んじやう。

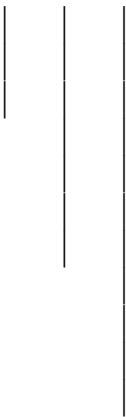
「……何やってるのかなあ、私」

モソモソと起き上がり、ベットから降りる。

私の部屋と、隆史君の部屋は間取りは一緒だし、何回も来ていたからトイレの場所も分かる。

暗い部屋を進み、トイレに向かおう……。あ、隆史君、踏まない様にならないと……。

……これが間違いだった……。



立ちすくむ私。

……ベットの横で。

「……」

トイレから戻った時、隆史君は……ベットの上で寝ていた……。

……そんなに長時間離れていた訳でも無いのに……。

真っ暗だったけど、流星にベットに人が寝ていれば分かるよ……。

いけない……私どうしよう。

寝ぼけていたんだろうな、

私の事を忘れて、自分がベットから落ちたとでも思ったのだろう。

普通に、仰向けになってベットの上で片足を曲げて……寝ていた。

本当にどうしよう。

起こすのも…ちよつと可愛そうだし…。

「……」

しようがないから、見下ろすしか無い。

ま…まあいいや。

腰を下ろして、さっきまで隆史君が寝ていた所に座る。

ちよつと、いたずら心に火が着いた。

寝返りをうって、こちら側に体を向けてきたので、お腹が目の前に来た為かな？

服もズレて、お腹が露出した為に、指先でツンツンつついてみた。

むつと小さな声と共に体をモゾモゾさせているのが…うん、ちよつと面白かった。

普段ならこんな事もしないし、できないから…普通に嬉しい…。

モゾモゾ

しばらく遊び、これで本当に起こしてしまったら、やっぱりちよつと可哀想。

どうせもう、私は寝れそうに無いし、後はこのまま寝顔を見ていようかな。

「…あつ」

寝顔。

忘れていた。

寝顔というフレーズで、先程の事を思い出しちゃった。

うん、お腹が目の前にあるという事は、それに近いモノも近くにあるという事で…。

ゆっくりと…視線を横に……。

「!!」

危なかった…。両手で口を押さえ込んで、なんとか声を出すのを我慢できたけど……。

先程の存在感があるもの…が、その……頬っぺたの横に…。

顔が熱い。耳が熱い。

目頭が熱いし、頭も熱い。

横を向いてしまった為に、目の前突き出された様な…そんな格好に…。

「ど…どどど、どうしよう。動けない…。」

思いつきり目の前にあるのから、目が離せない…。

ひう。

変な声が出ちゃった。

なんで？

なんで今気がついたの？

隆史君は、ズボンを履いていなかった…。

暑いとばかりに、正座した私の足元の横に落ちていた。

暗いのもあったのだけど…なぜ気がつかなかったのだろう…。

アレが目の前に、あるのでそこで気がついた。

「ふうういう!?」

変な声が出るう。

慌てて、隆史君の顔を見ると…普通に寝ている。

え?! なんで? あの…下着サイズ合っていないんじゃないので

でしょうか!?

その…社会の窓的なモノが少しずつ動いているのだけど!?

「……」

私達も、年頃だし…その。

そういった話に興味がない訳では無い。

特に、隆史君という異性が、身近にいる為だろうか…沙織さん達との会話でも、そういった事の話題が出ないわけじゃない。

というか…今日のご飯会の後も…その、話の流れ的に少し出たばかりだったし。

みんな顔真っ赤になるけど…。

「……」

自分の心臓の鼓動が聞こえる。

目が離せなくなっている。

あれ? 私、普段だったら、絶対逃げちゃう…。



変な意味で、大胆になってる…のかな？

…私しかないからかな…。隆史君寝てるし…起きそうも無いのも分かるし…。

「……………」

ゆっくり動く社会の窓が、近づいてくる…。

違う…動くわけないし、無意識に私が動いているのだろうけど…。

正座になって、前屈みになって…私何やってんだろ…。理性では分かっているのだけど…その…。

「んんっ！」

「あたっ！」

隆史君が、咳払いの様な声をだした。

多分、体の位置を少し変えたのだろう。

ビクツつと体動いたと思ったら、おでこを小突かれた。

「な…何？　なんか、当た…た…た…た…」

うん…その…飛び出してきたモノに。

「」

えつと…。

思考が止まる。

さつきまで、変な期待感で見入っていたというのに。

体中のあらゆる部分が、熱を帯びていくのが分かられうあう。

まべ？

違う!!

昔見た、隆史君じゃない!!

小さい頃、一緒にお風呂入った時には、こんな…え？　えつと…。

え？

え…えいりあん？

「」

頭が真っ白になった。

暗いとはいえ、はっきりと分かる存在感…。

…なんか、怖くて泣きそう…。

スースーと、すぐ横で寝息が聞こえてくるが、それとのギャップが

また…異常に感じた。

自分が、フーフーと軽く呼吸音が漏れているのにも気がつかない。  
えっと…これ、どうしよう。

え？ これ今、隆史君が起きたらどうなるんだろう!?  
ソレが、ビクンツツと脈打った。

「  
落ち着いて!!

これば、なんとかせんば!!

でもお!こぎやんもんつ、どうすりやよかかああ!!??

…。

しん…呼吸うう…。

取り乱しても仕方が無い…。

ううう…なんだろう、ある意味自業自得だと思うのは…。

さつさと、寝ていれば良かった…のかなあ…?

…。

それとしばらく睨めっこする事になったけど…目なんて無いし…。

先程から、長時間…その、隆史君こんな状態だけ…その。

なんだろう…痛くないのな?

逆に別の意味で、心配になってくる。

たまに聞こえてくる、隆史君の咳払いにも似た声って、痛いとか苦

しいとかじゃ…ないよね?

…

…。

ど…どうにかしないと!!

「…」

「…みほ?」

「!?!?」

心臓が飛び出るかと思った。

ちつ違うの!つとよく分からない言い訳と共に、声がした方向を振

り向くと、隆史君が……あれ？

目を閉じてる……？

少し手で、顔をモソモソと触っているけど……寝ぼけてる？

黙って固まっていると、段々とまた、静かに寝息が聞こえてきた……

「……」

び…。

びつくしりた！ びつくしりた!! びつくしりたあ!!!

あー本当に……死んじゃうかと思ったよ……

……。

はあ…。

「……これ、どうしたらいいんだろ」

確か……誰からとは言わないけど……、見せてもらった雑誌に書いてあつたな。

うん、誰からとは言わない。

「男の人って確か……その……えっと……だだ出して、スッキリすれば収まるって……」

思い出しながら、口にしてしまった。

言葉にしてしまったので、余計に自分が恥ずかしくなった。

だって、顔が熱いのが分かるもの!!

「……そういうものなのかな？」

◇

……。

え？

どういう状況？

みほさん？ え？

反射的に名前を呼んでしまったので、驚かせてしまったようだ。

寝ぼけて呼んで、また寝てしまった…というフリをした…。  
まあ…うん。寝ぼけていたんだけどね。

一発で目が覚めましたよ。ええ、覚めました。

なして、幼馴染が俺の御子息を凝視しておるのでしょうか？

…おお、錯乱しとる、錯乱しとる…。

キョロキョロと周りを見渡しても、俺しかいねえよ。

というか、聞きたい。

貴女どこから、そういつた情報を仕入れたの？ 雑誌か何かで読ん

だのでしたら、それを提示しなされ。

内容によつて、褒めるか怒るかするから!!

「た…たしか…上下運動…」

」

何する気だよ！ そりゃ俺が寝返りをうつなりすれば事が、すむの  
だろうけど…。

…すむか？

すまんだろうなあ…。

だつて。

「に…握ればいいのかな？」

あら、みほりん大胆！

…ふざけてる場合じゃねえな、こりや。

なにを思ったのか、本気で何かをしそうだ。

「え、えいっ！」

「っ!？」

片手で握つてきた。

少し汗ばんだ手の感触がする。

えいっ!つて…。

……………。

え？ マジでどうしたらええの？

「…えつと」

ゆつくりと表面をさすりだした。

軽く握っているって感触だけ伝わってくるけど…。

「……ふっ。お姉ちゃんはこのままではしたこと無いだろうなあ……」  
何故か若干勝ち誇った様な、セリフが聞こえた。

「貴女、少し現実逃避してませんか？」

「……」

無言で、お腹をさする様に手を動かしている。

「……なにがそこまでさせるのか。」

「いやまあ……気持ちがいいと言えば、気持ちがいい。」

正直、なんだ……その。

性的興奮というか、刺激はほぼ皆無だ。

ただ、みほがなにをトチ狂ったのか、こんな事をしている状況が変に興奮した。

「……刺激が足りないのかな？」

少し力を込めて、扱くという行為と呼べるくらいにはなった。

あ。やば。普通に気持ち良い。

「……なにか熱いし……脈打ってるし……」

感想を一々、口に出さないでください。

夢中になってきたのか、スライドが早くなっていく。

軽く腰を曲げているので、みほの正面にあるのは俺の腹。

右手で、アレを左右にスライドしている。

だから、みほの顔は横顔しか見れない。なにか……その、少し目を見開いて、アレを凝視している。

あ……たまに、俺の反応を伺うように、横目でチラチラ顔を見ている。

爛々と輝く目と言うのは、こういう目の事を言うのだろうか……。

わあ……つか、ちよと声聞こえるし……少し、やんちゃみぼりん降臨してませんか？

「隆史君の顔、なんか苦しそうだし……やっぱり何とかしないとイケないのかな？」

色々と我慢してんの!!

なんだよその使命感は!!

貴女もう、最初にさする様な感じではなくて、もう普通につ……!

「……」

……。

はつきり言おう。

……なぜ俺は幼馴染が、手コキしてるのを黙って見ているんだろう。  
う。

…だめだな。動こう。

中途半端に火がつくと、今度は俺が止まらなくなりそうだな。  
上手く寝返りでもうって、なんとか誤魔化すか…。

「……」

あ。手が止まった。

ゴソゴソと体を動かし、今俺は、みほの後頭部しか見えない。

……おい、嘘だろ？

「ぎっ！ 雑誌には…たしか…手で収まらない場合…」

みほの行動が読めない。

耳まで真っ赤になって、なにをやってるの!?

少し期待してしまっている俺をぶん殴りたい。

…寝ていて無理だけど…。

「……真正面から見ると…やっぱりちよつと怖いなあ…。えっちつて  
これが……」

なにを思ったのか、またゆつくりと扱きだした。

「………た…隆史君なら……うん。 ……だいじょう……ぶ」

自身に先程から言い訳するように、普段なら言わない、しかもこんな事しない。

みほの心臓の音が、こちらにまで聴こえてくるくらい、目に見えて緊張していた。

「っ!？」

思わず声が出そうになってしまった。

一瞬、下から上に亀頭先をくすぐった感触がした。チロツて。

身体が一瞬、震えてしまったので、振り返り俺の顔を見てきた。

薄目で見ているから、完全に表情は分からないが、起きていない事を確認すると、また俺の顔から後ろに向いてしまった。

……さっきのアレ……舐めた？

そのまま、亀頭に生暖かな、温度を感じた。  
みほが口を開けた…。

……。

しかし、それだけ。

やはり、いきなりそれは躊躇したのだろう。  
完全にそこで止まってしまった。

「う…うんっ！ 勢いでやっちゃたけど…そこまでは、流石に……」  
顔を離し、パタパタと空いていたもう片方の手で、顔を仰いでいる。  
…ちよつと期待した自分が情けない…。

「……」

それでも、何度かチャレンジしようと、生暖かい息が亀頭に絡みつ  
くように感じる…。

試して躊躇しては、離れる。

かれこれ…五回目だ。

なにこの生殺し。

「も…もう一度……」

そう言つてまた、近づいてくる生暖かい息。

「……」

はい、無理です。

ここまでされて、俺の頭の中がかなりヒートアップしていた。  
顔が熱いのではなくて、頭の中があっつい。

「んんっ！」

また咳払いするかのような声と共に、腰を前にだしてしまった。

……みほが口を開けていたタイミングを見計らつて。

先程までのなんとかしなくては…とか、やめさせないと…という感  
情は、負けてしまった。

「ふっ!？」

入った。

口内に入った。

違う。入れてしまった。

一瞬ビクリと身体が震えたが、入ってしまったものは仕方が無い…と、ばかりに動かない。

生暖かい感触がする。

なにか喋るつもりだったのか、ヌラツツと舌が動いた。

今度は、俺の身体が反応してしまった。

ビクツツと腰が反応する。

……。

動かない。

どうしたらいいか、まったく分からない様だった。

頭の中が真っ白で、完全に固まった…様な感じ。

「……」

少し、更に腰を前に動かしてみた。

ヌルツツと舌の感触。

やば…。

それを2回ほど繰り返したら、みほの頭が前後に動き出した…。

ただ本当に動くだけ…。

良く分からないのだろう。

まあ…仕方が無い…。

少し冷静になった。また色々な罪悪感と共に、どうしたら良いかと考える余裕がでてきた。

今更すぎるけどね…。

「ぢゅ…ちゅ…ちゆる」

……みほさん？

え？

「れらあ…ぢゅ」

あれ？

「んっ」

何かを思い出したかのように、動きが早くなり、その動きに躊躇が消えてきた。



奥まで入らないのか、亀頭とカリの部分の間を往復する。  
唇を使い、本格的に…。

「じゅぽっ！… じゅぽっ！」  
空気と唾液の混ざる音。

舌も使い、亀頭の部分だけ舐めまわす。

「はぁ…はぁ…んっ！」  
たまに口を離し、息つきをする。

これは…なんだろうか…むしやぶりついている。

「んっ！… ふっ!!… んはぁ……」  
…艶かしい声が聞こえた。

正直、テクニックと呼ばれる様なものは無い。

ただ、夢中になっているようだ。

背徳感が凄まじい。

唾液が伝う。

しごいていた手のローション替わりになるかの様に、刺激も増す。

あ…本格的に、気持ちいい。

動かす手からも、卑猥な擬音が聞こえるかのように、音がする。

「じゅ…はぁっ！… はぁ…んっ!!」  
…。

みほが、モゾモゾと動き出した。

動き出しながらも、顔を動かすのもやめないで、前後に動かしている。  
はぁはぁと、息遣いも荒くなっている。

自身の事だけで、気がつかなかった。

よく見ると、みほの空いた左腕が、自身のふとももの間を弄っていた。  
…え、それって。

「んっ！… んっんっ…カポツカポツ」  
…。

「ジュ…パツ！ んふう……ふうー……じゅっ！」  
ダメだ、これはもう。

「ふっ!! んぁ…ちゅ…」

左腕の動きも速くなっている…。

完全にあれだ…。

俺のを啜えながら、自身も貪っている…。

わぁ…生で、初めて見たよ…女性のそういうの…。

しかも…みほが。

とてもそういつた事に、縁遠いと思っていたみほが…。

「ジュ…パ。ふうーふうー…んぁ」

動きながら、休みながら…。

啜えながら、艶っぽい声を出すものだから、それがまた…。

「んっふぁ…、あれ?…なんか…苦いのが、出てきた…」

もはや、俺自身の声を殺すので精一杯。

息切れもできやしない。

そう言いながらも、みほは手を休めない。

流石にそろそろ限界だった。

「…あっ、そっか…」

みほが、周りを見渡していた。

流石に気がついたのだろう…。

みほも知識はある様で、ティツシュ箱を探していた。

…暗くて分からないのかな？

探し回っている中、それでもアレから手を離さないのが、すごい…。

いや…動かし続けている。

フウ…フウ…と息遣いも聞こえる。

見つからないのか、まだキョロキョロと周りを見渡している。

が、無い。

「っ!」

危ない…。不意打ちでまた、口つけてきた…いや、啜えて来たので、声が出そうになった。

ティツシュを諦めたのか、また音を立てながら、顔を前後に動かし

始めてた。

手の動きも速くなる。

みほ……お前が読んだ雑誌とやらを今度見せてもらおう。  
流石にクレーム入れてやる…。

……ちよつと待て。

ティッシュ箱が無いのが分かって、なぜまた口をつけた？

「んちゅ…ぱっ！ ジュ…ぱッ！ んちゅ…ぱっ！ ジュ…ぱッ！」  
絞るように、唇でカリ部分から先端にまで、口で扱く。

たまに、舌を這わせながら。

…まずい。

出る。

根元から込み上げるモノを感じる。

しかし、今は頭も混乱している。

みほは、絶対分かっていてやっているだろう。

マジかよ。普通、経験がある人でも躊躇する事じゃ無いのか？

「つつ!!」

止めとばかりに…カリ部分を舌尖でなぞられた…。

「んん!? んんっ!!」

ドクドクと波打つ。

ずっと我慢していた訳だから…その反動がすごかった。

信じられないくらい量の量がでたと思う。

出している時……なんとなく自分でも分かった。

…みほの口の中で、果ててしまった。

「んふうー…ふうー…」

出し終わったとしても、余韻がすごい…。

まだこの状態でいたい。

みほも、中に出されたモノをどうしたらいいか…困っているよう  
で、まだ唾えた状態から、口を離さない。

「んっ…んぐっ!!」

は!?

「んぐっ！ つっん!! ん…ふうー……」

嘘…だろ？

え!?

みほの喉が動いたような…喉を鳴らす音がした。

飲んだの!?

ええ!?

「…に…苦…んっ」

そう言いながら、俺のアレからヌラツつと口を離した。

「はぁ…はぁ…」

みほの息切れと、眩きが聞こえる。

「男の人って…なんでこれ飲むと喜ぶって言われるのか…何となく分かつちやった。…にがい」

……。

混乱する。

え…、みほの眩きから、性行為自体をした経験が無い事が伺えるので、安心する反面…。

みほ。なんでいきなり、そこまでできるんだと…、思う訳で…。

「はぁ…はぁ…、えっと…後は…」

「っ!?!」

声を殺す。

流石に起きてるとか、起こしてしまうとか、思わないのだろうか？

完全に行為に集中してしまった為なのか、分からないが…。

また、みほが陰茎を口に入れた。

「ジュル…ジュル…パッ! ……これでいいのかな?」

……簡単だけど…掃除までした。

「も…もう…大丈夫…だよね？…まだおつきいけど…」

「ごめん、正直収まりがつきそうに無い…が。」

みほの行動が、あまりに大胆…というか、逸脱しているというか…。混乱の方が大きかった。

…メチャクチャ気持ちよかったけど。

「…ん、隆史君…起きてないよね？…流石に恥ずかしいし」

「いやいやいや！…もうガッツリ起きてるよ!!」

「むしろなんで起きないって思うのさ!!」

…しかし、もう寝たフリを解除できない…。

今更だけど…。

「…うう…口の中が、苦い…でも、き…嫌いじゃないかも…」

「嘆きながら、もう事は済んだと、あつさりと立ち上がった。」

「そのまま、洗面台にでも口を濯ぎに行くのかと思ったら…。」

「……………うあああ…私、寝ているとはいえ、隆史君の前で何やってるんだろ…」

「寝巻きのズボンの部分を前に引っ張り、自身の先程までまさぐっていた部分に目を落としている。」

…。

「…………」

「…………」

「薄目を開けてはいるのだけど、正直に言うとは暴走手前デス。」

「流石にみほを襲う訳にもいかないので、…理性と戦っています。」

「…うわあ…ぐっちよりしてる…」

「つつっ!!!」

「我慢!!! がまああん!!!」

「普段のみほと、ギャップが凄すぎる!!」

「…………」

「はあー！…はあー!!!」

「我慢!!…今更感が半端ないけど、付き合ってもいないのに欲望のま

ま暴走はまずい!! 今更だけど!!

目を離せないのが、辛い! 辛いけど!!

「……………んっ」

また、触ったのだろうか…甘い声が聞こえた。

ジユクジユクと何かを混ぜるような…水の音。

「…んっ…んっ…はぁ…っつぁ!!」

……………ブチッ

っ危ねえ!!

切れた!! 今一瞬切れちゃった!!

切れた理性を、また理性で縛り直す! 駒結びだ!!

「…」ビクッ!

いつの間にか、みほが俺を見下ろしていた。

一瞬ビクついてしまったけど、寝たフリはバレてはいない様だ…。なぜバレないのだろうか…逆に不安になるヨ。

そんなみほは、少し見つめていたが、…俺から離れていった。

歩く音が聞こえる…。絨毯を踏む音。足を滑らす音…。

洗面台にでも行ったのだろうか…。

あぶねえ……思い止まった自分を褒めてやりたい!!

息がそろそろ限界……。

カチャ……パタ

「……!？」

なんで？ ドアの音がしたの？

反射的に体を起こした。

軽く部屋を見渡すと、誰もいない…。

「……」

トイレのドアの隙間から、光が漏れていた…。

うん、ドアの横の部分から…。

ゆっくりと、立ち上がり近づいて見る。

足音を立てない様に…ゆっくりと…。

やはりトイレに入った様だった…中からゴソゴソと音がする。

急いで入ったのだろうか…その…。

施錠を示す部分が、赤くなっていない…。

…鍵が、かけられていない。

それどころか、ドアがしっかりと閉められていないのだろうか…少し中が見える。

「……」

理性が限界だった…。

普段なら、絶対にしないのだが、少し開けてみる…。

見えた、トイレの中が凄い事になっていた。

「んっはぁ！ と…止まらない！ 止まらないよおお…」

みほが便座手をかけ、お尻をこちらに向けて、前かがみになっている。

足の下に下ろされている、寝巻きのズボン。

完全に下半身が裸だった。

股の間から、秘部を乱暴にかき混ぜる右手。

グチャグチャとすごい音がシタ。

「に…苦い…匂いもお…んん!!」

こちらに背を向ける形になっているので、俺には一切気がつかない

様だ。

「はあ！ はあ！ はあ！」

「……」

えっと。

うん。

俺、頑張った。

「んっ！ あっ！ あっ!!」

今ここで、思いっきりドアを開けたらどうなるだろう？

「はあ…はあ！ はあっ！」

グチャグチャと音が聞こえる。

「な…なんで!? なんでこんなつに…いつもと違っ!!」

頭が真っ白になった。

もう…なんか…。

ドアノブに手が伸びる。

そして掴んだ。

ピリリリリ!! ピリリリリリ!!!

「!!!???

」

…目覚まし音が鳴った。

反射的に、ドアの影に隠れてしまった。

電子音で我に帰れました…。いや、帰られました。

…これは、お礼を言っておいた方が、いいのだろうか？

それとも、目覚ましを粉砕した方が、いいのだろうか？

「ひゃあ!!」

トイレの中から、すごい声が聞こえた。

ゴツンとか、色々鈍い音も聞こえた…。



「んああな?!?!」

後ろを振り向いたのだろう。

すごい勢いで、ボタンとドアが完全に閉まった。

…はい、みほ共に正常に戻りました。

「……」

中から、地の底から唸るような声が聞こえてきたし…。

あ。

俺の状況…。

そこで、躊躇なくドアをノック。

「わひゃあああ!?!」

なんちゅー声を出す…。

「みほ?」

「にやつ! にやに?!?!」

「…いや、まあ、ひよつとしてみほ。トイレに避難したのか?」

「Ifじゃ@いうj!?!」

日本語でヨロシク。

「いや、「今」起きたら…その、俺すごい格好で寝てたからさ」

冷静に…冷静に……

「避難!?! えっ!?! あ!! あああうん!! そうじゃよ!!」

……まあうん、気持ち分かる。

焦るよね?

だから言っておく。

「まあ…なんだ」

終わらせておこう…冷静な判断がつくうちに…これ以上…共に暴走しないように…。

「…気にするな。なっ？」

※ルート IF※第23話くアンツイオ潜入です！  
…潜入だよね？く 前編

今更ながらに思う。

何俺、普通に女性宅に来てんの？

普通有り得ないよなあ…。

アンツイオの独特のノリに、流されていると言わべきかね。

2DKのお家。

ダイニングキッチンの部屋は、8畳くらいあるのか、それなりに広い。

…学生の一人暮らしで、2DKって…。

仕送りをもらっているとはいえねえ…うん。親が結構な親バカなのかな？

夕飯の片付けはこちらでやると、家主に進められてテーブルに座り、お茶を飲んでいるんだけどね？

そのお茶を飲んで、気持ちが悪く着いた、うん…落ち着いたんだ。

千代美で遊ん…もとい、戯れていた為、変なテンションで色々いたけど…急に冷静になった。

そして思う。

飯作ってやる為だとはいえ、なに俺一人暮らしの女の子の部屋に来てんの？

しかも夜に！

なに俺、お茶飲んでゆつくりしてんさ。

「ああ？ タカシ。なに急にソワソワし始めてんだ？」

洗い物が完全に終了したのだろう。

手をタオルで拭きながら、怪訝な顔で家主様から声をかけられた。「いやな…お茶飲んで冷静になったら、色々俺って非常識な事してんじゃないのかなあって思ってたね」

「は？ 非常識な事？ タカシが？」

言い方はちよつとキツイが、笑いながら肩をバンバン叩いてくる。

「別に 今に始まった事じゃねえーだろ!? 何言ってるんだ!？」  
「……」

そうそうと頷く、その家主の同級生と隊長さんがいる。  
「……」

「……常識的に生きてきたつもりなんですけど……ペパロニに言われたので、俺って大概なのだろうか……」

改めないよ……生活を改めないよ!!

……時計を見るとすでに、22時を過ぎていた。

うん、流石にこの時間まで、お邪魔しているのは失礼すぎる。

「遅くまで悪かったな、そろそろお暇するわ」

「んあ? なに言ってるんだ?」

いつまでも話していると、ダラダラと時間だけが過ぎていくだけだ。

さっさと切り上げよう。

うん、さっそく常識的な行動にませう。

……あれ?」

なに寝ぼけた事言っているんだ? って顔で、不思議そうにしている家主様。

あ、そういえば。

千代美とカルパッチョさんって寮住いだったよな?

門限とか大丈夫なのだろうか?

「泊まっていくんじゃねえの?」

「」

はい。約1名様が、絶句していますねえ。

はい。カルパッチョさんは、いつもの通りにニコニコしていますね。

はい。俺も何となく、そう事言ってきたそうだとは思っていました。

はい。カルパッチョさんが、普段通りなのが若干気味が悪いです。

「皆さん達も泊まってくつもりだぞ? というか、いつもそうだしな!」

「ペ……ペパロニ!!」

「なんすか? 皆さん!」

はい。言いたい事は分かります。分かりますけどね？

「お前え!! なモガツ!」

千代美が顔を真っ赤にして、両手を振り上げたので、即座に誘拐犯の様に後ろから口を押さえた。

「千代美。言いた事は分かるが、もう夜遅い。叫ぶな」

「モガア!!」

噛むなよ？

赤くなつてパタパタ暴れたので、苦しいと思い、多少手の力を緩めた。

そのまま、人の事を非常識だと仰っしやいました、非常識な家主様に一言言っておく。

「あのな？ ペパロニ」

「あんだよ?」

だから怪訝そうな顔をするな。

「夜遅くまで居てしまった俺が言うのもなんだがな？ 女の子が男に泊まつていけなんて、軽々しく言うな」

比較的、真顔で真面目に言っておく。

モガモガと言いながら、千代美が大きく頷いている。

…ただ、その横で無言を貫いている、カルパッチョさんがちよつと気になるけど…。

「男たつて、タカシだろ？ それに、どうせ明日も学校に来るんだろ？

んじや丁度いいじゃねえか!」

…俺だからなんだと言うんだよ…。

僕だつて男の子ですよ？

少し会話がズレている気がするんですが？

「はあ…あのな？ ペパロニ。お前に他の男友達がいたとしてだな…」

「アホだなタカシ! アンツイオは女子高だぞ? いるわけねえじゃん!」

話の腰を折るなよ。

女子高って言っても、俺って言う友達がいるだろう？

学校外にも友達って、できるだろうが。

…できるよな？

…俺、友達だよな？

違うとか言われたら、正直傷つくから、聞かないで話を継続しよう…。

彼女はこういう性格だし、他に男友達とかいたら普通に泊めてしま  
いそうだなあ…正直心配になる。

「いたとして！…軽々しく部屋に男友達とか…泊めるなよ？」

自称…では無い事を祈って、友達として忠告しておこうかね。

本当に、ノリと勢いだけで泊めそうだ。

「はあ？ 泊めるわけねえーだろう？ お前だから泊まってけって言っ  
てんだろ？ 何言ってるんだ？ あほか？」

「… ……」

えっと…。

「千代美さんや」

手元のドゥーチェさんに声をかける。

「モガ!？」

「…どうしよう。ちよっと、ときめいちゃた……っ痛え!!」

…噛まれた。

元々いつもの流れだったようだ。

千代美とカルパッチョさんが、ペパロニ宅に夜まで遊びに来る時  
は、大体お泊まりコース。

よって、お泊まりセットが一式置いてあるそうだ。

で…だ。

「大体よお、おめえ今から帰るってたって、一体どこに行くつもりなんだ  
よ」

はい、そうですね。ホテル等は大体が満室でした。

ネットで調べたらオールレッド。

ドコモ二モネエ。

高級ホテルのスイートくらいだった。

無理!!

アンツイオは、観光名所が多々有る学園鑑の為、大体いつも満室らしい。

何ヶ月も前から予約していないと、飛び込み客なんて、当日キャンセル室ができたとか、余程運が良くないと止まれない。

「ネットカフェとか何かで…」

「無えよ、そんな店」

「……」

無かった。

本当に無かった…。

外観を損ねるとかの理由だろうか…。

「野宿とか言うなよ？ 自分の客放り出して、野宿させるとか無えかならな」

「……」

ペパロニの仰つしやるのも最もだし…自分の立場でもそうする。

もし、それが異性ならば…まあ俺が部屋から出て行って、軽トラにでも寝るっただけだし…。

どうしよう…。

逃げ道が塞がれていく…。

あっ！ 服!! 服とか無いし!!

どうとでもなりそうな、苦し紛れの言い訳が頭に過ぎっ「ありますよ?」

「」

カルパッチョさんが、部屋の隅に置いてあつた買い物袋を持ってきた。ガサガサと開封をして、中身から一式を取り出す。

……。

男物のTシャツとハーフパンツ。

「どうせこうなると思って、ここに来る前に購入しておきました♪」

「スーパーって、今では衣類も結構な数が、置いてある所もあるんですよねえ♪」

「」

飯の買い出しで寄ったスーパーで、購入していたらしい…。  
というか、なんで俺の考えている事に返事ができるんでしょうか!?  
そもそも、計算ずくかよ!!

用意周到なカルパッチョさんが、俺を泊まらせたいと思えない  
!!

「…いくらでしたか、お金払います」

「あら、いいですよ？ 安物ですし、プレゼントしますよお？」  
なんかもう無理な気がしてきた。

お誂え向きに、外から雨音まで聞こえてきたし…。

「待て！ 待て待て待て待て!!」

「なんすか姐さん」

「流石にそれは無いぞ!! た…隆史と、おなツ！ 同じい!!」

真っ赤になって結局叫びだした千代美さん。

はい、頑張れ！ 俺の味方はお前だけだ！

「いやあ、でもですね姐さん」

「なっなんだ!」

「外、雨すつごいつすけど?」

「…え?」

聞こえてきていた雨音は、すでに豪雨となりつつあった。

部屋の窓ガラスを、雨水が叩きつける音がした。

「この状況で追い出すってのはちよつと…姐さん、ひどいつすよ?」  
「」

色々と問題があったのだけどなあ…。

俺に気を使ってくれたという思う時点で、俺の性格上…逃げ道が  
段々と無くなっていた。

拳句にこの雨だ。

「ドゥーチエ、大丈夫ですよ？ 部屋は分ければいいんですから」

「…グッ」



あら…千代美さんも気を使い出してくれた。  
まいったなあ…。

「タカシもいいよなー!」

「……ハイ」

ノリと勢い。

アンツイオの性分なのだろうけど…もはや勢いだけだなと感じた。  
もはや言い争いをする気も起きない…。

好意を無碍にするもなあ。

ただ…。

了承の返事をした時、カルパッチョさんがニタアと笑ったのを俺は  
……見逃した。

◇

…はい。

結局お泊まりデス。

一人暮らしの女の子のお家にお泊りです。

人生初…。

流石に、同じ部屋で寝るって訳にもいかないの、俺はリビングの  
ソファアで就寝する運びとなりました、はい。

寝室の部屋では、3人仲良く川の字になって寝るんだってさあ…。  
もう千代美とカルパッチョさんが泊まるのが、前提の寝室になって  
いるらしく、ベットでは無くて布団を敷いて寝るらしい。

んで、俺はというと。

夏場というのもあるので、タオルみたいな薄い掛け布団を腹の上に  
掛けている。

ソファアの上に寝転がり、天井をできる限り眺めるように努めま  
す。

流石になあ…あまり内装をジロジロと見るわけにもいかないし

ねえ。

風呂…というか、シャワーだけ借りたけど……まあ千代美が騒ぐ騒ぐ。

普通にカルパッチョさんと、ペパロニは寝巻きを見られても大丈夫だったようですけどね。

千代美は恥ずかしがってしまい、まあ…大変だった。

まあ…うん、それが普通の反応ですから大丈夫だよ？

しっかしまあ…腹の部分が透けている様なパジャマ…あれ何て言うんだらう。ネグリジエとも違うよなあ？

フリッフリのもいっぱいについていたし…すげえなドゥーチェ。

まあ、ありや異性に見られたら恥ずかしいわな。

カワイイを連呼してやったら、さつさと寝ろ！ つと、赤くりながら仰って、寝室に閉じこもってしまいましたね。

いやあ…こりや今日の事は、みほ達には言えないなあ…。

大洗に帰る前に女性宅に泊まったなんぞ…何を言われるか分かったものじゃない。

「……」

段々と眠気が襲ってきた。

初めは緊張してしまっただけど、天井だけを見ていたら気持ちが悪…落ち着いてきた。

カルパッチョさんや、ペパロニの寝巻きも色々と思う所があるが…寝れなくなり…そうだったので…考えるのをやめた…。

思考も…だん…だ…だ…。

なんだろう。

下半身が寒い。

いや、夏場だから寒いって事は無いのだけど……なんかスースース  
る。

なにも履いていないような……。

まあ、寝ぼけているだけだろうな。

薄目を開けて、感覚的にまだ寝ている途中だと感じる。

ああ……ソファで寝ていたから、ズボンがずり落ちたか？

……女性宅で、朝そんな姿を見られてはたまらん。

……あれ？

まず手で、本当にズリ落ちたか確認しようと、腰の部分を触ろうと  
する……が、手が動かない。

……あれ？

気がついた。

俺、横になって寝ていない。

ソファに座って寝ていたようだ。

……あれ？ ちゃんと横になっていたよな？ 天井見ていたもの  
な？

なんでだろうか？ スースーする下半身なのに、一部生暖かい。  
というか……。

暗い部屋の中。

俺の下半身の前に、人の頭があった。

雨は止んでいた為に、カーテンの隙間から月明かりが入る。

その光に反射するかの様に、キラキラと金髪が反射していた。

「……」

俺の下半身の前で、大きく前後往復していた。

「……チュ……ジュプ……」

小さく音を立っていた。

はい。

目が覚めました。

この状況で、また寝れるほど凶太く無いです。

「はあ……はあ……」

大きく音を立てはしないが、夢中になっているって感じがする。こうすればいい。そんな知識程度だろう。

口に入れて動かす。

そんな程度。

でも意識してしまつたら、なんかすつごい気持ちがいい。

じゃない!!

「…なにやってんすか、カルパッチョさん」

極めて冷静に切り出したつもりだった。

でも少し声が上がってしまった。

アレを口から出して、俺の目を真っ直ぐに見てきた。

「っん…プハツ、あら、起こしてしまいましたね」

いつもの様に、少し笑いながら答えてくれた……。

ですけどね？ 起こした？

「人の腕、後ろ手に縛っておいて…何を言っているんですか？」

「いえいえ、念の為ですよお？」

……。

腕は縛られていた。

タオルか何かだろう、そんなに痛くはない。

腕が動かないはずだ…。

しかし、やめない。

それを指摘しても悪びれる訳でもなく、無邪気に笑っている。

俺と話す為なのか、陰茎を口に入れないで舌を上から下へ、舐め動か

かし始めた。

…違う、先程とは動きが違う…。

いきなり上手くなった…。

「ひい…もちいいですか？ 色々と試してみましたけど…これは、反

応がありますねえ」

試した!?

「もう…人肌を舐めるような…そんな塩っ辛い味も無くなってしま

ましたねえ」

…。

そう言いながらも、今度は唇で噛むように亀頭を挟み、小刻みに動きながら舌を動かし始めた。

これは刺激が強く、顔を上に向けてすこし声が出てしまった…。

「チュッパッ！ はあ…これも中々…。」

なにが!?

色んな反応を見たいのか、ずっとやり方を変えてしゃぶっていたらしい…。

「一体…いつから…いやいや！ んな事より、ペパロニの家ですよ!?! 本当に何やってんですか!」

「いえ…ペパロニなら…隆史さんを泊めるだろうなあって」

何を言っているのだろう…。

会話が噛み合わない。

「ですから…」

体を起こし、俺の顔をまっすぐに見てくる。

「こんなチャンス、二度と無い…そう思いました」

一言言うと、また俺の下半身に頭を潜り込ませて、陰茎をしゃぶり始めた。

「あまり大きな声だと、ドゥーチエ達起きちゃいますよ?」

「……」

なんか、いつものカルパッチョさんじゃない。

怖い。なんかすっげえ怖い。

エロいんですけど…はい!

それはもう、普通のギャップもありまして、すごいエロいのですけどね!

「チュ、ジュル…はあ…何をやっているか…そうですねえ」

話しながら…口に入れて味わうように舌を這わせてくる。

「チュッ…隆史さん。私の気持ち…。少なくとも私が、貴方の事を好きなのは、気がついてくれていましたよね?」

え?!

間拔けな顔をしてしまったのだろう。

呆けた顔で、カルパッチョさんと目があつた。

いや！ 知らないよ!! 知らなかったよ!! 衝撃的な一言だよ!?

「……」

ああ！ すつごいジト目で見られてる！

」

痛あ!!

「…まったく！ ほんつつつとに、もう!!」

息子を噛まれた…。

「まあ…いいです。ですから！ そういう事です!!」

少し怒った顔で、立ち上がったカルパッチョさん。

初めてここで、彼女の全体が見えた。

黄色のパジャマ。

ボタンをすでに外していた為に、前が全開になっている。

彼女らしい、かわいいタイプのデザインのだが…もうただ、エロ

いの一言に尽きる出で立ち。

簡単に言えば…、全裸にパジャマの上だけを羽織っているだけだ。

はい。下は下着すら穿いていなかった…。

そのまま彼女は、俺の肩を両手で押して体を後ろに倒した。

「…では、失礼しますねえ?」

「むぐっ!」

そのまま、胸を俺の顔に押し付けてくる。

それは体が密着したという事で…まさか…。

「ぶはっ！ まずいですっつてそれは!」

胸から少し顔を背け、カルパッチョさんに叫びかける。

初めから、このつもりだったのだろう。

すでにパジャマの上着すら、羽織っていただけなので、肩から落ち

てしまっていた。

つまり、完全な裸。

すこし片足を上げて、俺の上に乗つかろうとしていた。

…マジかよ。

「ダメなんですよ……もう」

手を縛ったのは、今この時に手で制止させない為。

体を無理に動かせばとは思いますが、カルパッチョさんを体で突き飛ばしてしまいう形になる。

彼女の後ろにはテーブルがある為に、下手をすると、どこかぶつけて怪我をさせてしまいそうできない。

「貴女、初めてですよね!? こんな形でいいんですか!？」

なんとかやめさせようと、普段なら女性に言っちゃダメな事も言うてしまった。

天井を指す陰茎に、自信を入れようと、彼女は秘部を指で広げた。マヌケでだけど、しっかりと目がいつてしまった。

ヌラヌラと愛液が、月明かりで照らされている…のが、分かるくらい思いつき見ちやった…。

「あ、そこは気にしなくていいですよ？ 私、処女じゃないですから」

「……」

え。

……。

え？

「あらあ…隆史さん……急に真顔に……」

うわあ…別に俺、処女厨って訳じゃあない。なかつただけれど…でも、なんだ…。

なんか知らないけど……すごいシヨックだ。

あの普段から、アンツイオの連中の中で、異彩を放って…。

例えば、聖グロリアーナにいても違和感がなさそうなカルパッチョさんが…。

別に俺、彼女の彼氏とかじゃないけど……その……すごい複雑……。

「ああ…でも、男の人は隆史さんが、初めてですよ？」

「……………は？」

オトコノヒトハ？

エ？

ドウイウコト？

「あ…考えてみれば、初めてが、同じタカちゃんですね…」

ナニイツテンスカ？

何か嬉しそうに…おかしそうに…クスクスと笑いでした。

えつと…え？

「……………んっ！」

「はっ！… だからって、ダメですって!!」

意識が一瞬飛んでしまった為に、止めるのが遅れてしまった。

彼女はそのまま秘部を指で開いたまま、亀頭先に合わせゆつくりと下に腰を下ろす。

生暖かい感触と、ヌルツとした感触が交じり出し、その感触が陰茎全体に広がっていく。

「んっ!! はあ…んっ!!」

肉壁をこじ開けていく感触。

ただ俺の…が、サイズのきついのか、たまに苦しそうな声が出ている。

また…それが、色っぽく…艶っぽく……高校生の出す声じゃない…。

全神経が、一部に集中していく。

先から、ゆつくりと伝達していく熱。

「…あ……………はあ……………」

ため息にも似た、熱い吐息と共に…全部…入った。

そのまま俺の胸に、倒れる様に体を預けてきた。

ハアハアと少し荒い呼吸が聞こえる。

「……………玩具と違って……………熱い……………これが隆史さん……………  
やってしまった。



違う…やられてしまった…。

カルパッチョさんが、全て入ってしまった。  
もう、どうしようもできない。

「んん…はあ…」

1回だけ、少し腰を上げて落とす。

ニチャツとした音が聞こえた。

「ぐっ」

背筋にまで走る、快感に少し声が漏れてしまった。

それを聴き、もう一度腰を上げて、落とす。

またニチャツとした、音がした。

「…ちよつと…きつ……んっ」

まだ慣れていないのか、時折苦しそうな声が聞こえる。

本格的に動き出した。

「はっ…んっ……はっ」

ソファアの上。

ゆっくりと体を使い、上下運動を繰り返す。

「あはっ！ んっ!! んっ!!」

…。

腕の拘束がすでに取れていた。

彼女が俺にもたれ掛かった時に、外したのだろう。

後ろから、少し布が擦れた音がしたの同時に、手首の圧迫感が消えた。

…だからと言って、今更動けない。

俺も男だ。

今更…。

「はああ…ふふっ…、流石にひどい……んっ！ と、思いまして……手の拘束はあ…あっ…解きましたけど…」

「…」

「突き飛ばさない…つてえ！ ……こと…おわあ…」

「色々と卑怯な気もしますけど…」

「い…いいんですよお…私は、2番目でっ！ でも…。体だけの関係

でも…」

「…流石に……そんな関係は……ぐっ」

「ドゥーチェ……ペパロニ……」

「……」

眩く。

二人の名前を。

「だから……気にしないでください……ふふっ」

……。

いかん。

なんか色々切れそうだ。

喘ぎ声と共に喋る彼女が、とても淫靡に見える。

荒い息使いと共に、ゆつくりと動く彼女。

理性が……。

「ふ……ふふ……、逃げない隆史さん……」

「え？」

俺の着ていた服を下から捲くりあげる。

胸の辺りまで捲くりあげ……そのまま、顔を近づける。

古傷にキスをしだした。

「チュ……。はあ……」

何度も繰り返す様に、口づけをして……嬉しそうにな声で……。

何度も。

何度も。

そのうち……今度は舐め始めた……。

傷の後をなぞる様に。

奉仕をするように。

……味わうように。

「もう……っん、これはあ……完全にSEXですよねえ？」

「カ……カルパッチョさん？」

はつきりと言葉にした。

抱くとか……比喻でも何でもなく。

はつきりと行為を口にする。

これももう、今更感がすごいけど……まあ……はい。

そうですね…。

あまりにいつもの雰囲気……というか、数時間前と違う為は無意識に彼女の名前を呼んだ。

いつもの通りに。

カルパッチョと。

「…もう…んっ。いいでしょう?」「ひな」って呼んで………くだ…んん!!」

ゆっくりと動いていた体が、一瞬硬直した。

頭を俺の首の下に預けて、今度は少し、早めに…小刻みに動き出した。

彼女は、本名を俺に呼ばせたがる。

あの海で、俺が彼女を庇って怪我をしてしまった時からだ。

本人曰く、千代美…アンチヨビが羨ましくて仕方が無い…そんな風に笑顔で言っていたのだけど…。

「はあはあ…はあ……んあっ」

バチュバチュと、少し水が混ざり合う音が大きくなった。

彼女の息遣いが、段々と荒くなっていく。

これは…。

「ひ…ひな…さん?」

「っ! …ああああっ!!!」

耳近くで、名前を読んだ瞬間に少し、大きな声と共に……体が痙攣した。

ビクビクと。

「あ…は……ああ……」

「……………」

小刻みに震えている。

「ハアハア……ハア……ハア……」

「……あの……大丈夫ですか？」

熱い吐息が、首元にかかる。

「い……イキました……」

「……」

あの……はつきりと言葉にしないでください……。

「……こんなに早く……初めて……」

こ……答えようがありません。

「ハア……ハア……な……なんかすいません……私だけ……」

「い、いえ……」

謝られてしまった。

……いや、我慢もしたんですよ。

思いつきり生での行為でしたし……その……正直めちやくちや我慢

しましたよ！

これでも全然安全じゃないんですけどね。

「ハア……ハア……ハア……」

「……」

快樂の……その絶頂を味わうかの様に……動かない。

肩が大きく動いている。

「ハア……ハア……。ハ……フ」

「……」

「フ……フフ……ッ」

「……」

「……」

「フ……フフ……ッ」

ん？

「フフフ……フツ……フフ……フフフ……」

彼女は体を起こさない。

そのまま俺に体を預けている。

そこから聞こえてきたのは…腹の底から…。

「ウフフフフフフ フ…フ フ ハ ハ ハ ハ ハ  
ハ…」

搾り出すよな…嗚咽の様な…笑い声。

「ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ！ アハハハハハハハハツ  
!!」

背筋に、快樂とは別の感覚が走り抜けた。

「だ……」

体を起こし、顔を真上に向けた。

その為、表情が分からない。

ただ、声だけが聞こえてくる。

「出し抜けたあ…」

「出し抜きましたあ……」

「出し抜きました。 出し抜きました出し抜きました出し抜きました  
出し抜きました」

「残念でしたねえ…ノンナさあん……ダージンさああん……」

…。

『西住 みほ』さあん…」

……。

「ウフツ…ウフフフフ…」

頭を下に向かせ、俺の目を見てくる。

両手の指で、頬を包み込む様に…支える様に…触れているその顔は…。

恍惚の表情。

ヌラツつと目は怪しく月明かりを反射させ、怪しい笑みを浮かべている。

「フフフ…」

小さい笑い声が響く。

…。

………。

えいつ！

「フフ…んああ!？」

まだ差し込まれていた状態のアレを、奥にグリッとねじ込むように突き上げた。

「た…っ!? んああ!？ たかっっ!？」

自由になった両腕を、跨っていた彼女の太ももの下に滑り込ませ、一気に持ち上げる。

持ち上げた衝撃の為か、更に口から甘い声が聞こえた。

「……」

立ち上がった瞬間、思いっきり腰を打ち付けた。

バツンと音共に、悲鳴にも似た、彼女の喘ぎ声が耳元で聞こえる。

「ちよっ!? ええ!? んああ!？ はっ!! あっ!!」

バツンバツンと、肌がぶつかる音がする。

「はっ！ はっ！ んああ!!」

肌がぶつかる衝撃で、愛液が飛び散る。

一心不乱に腰を打ち付ける。

…ごめんペパロニ。

後で掃除しとく…。

「ああ!! んああ!!! ああ！ すっ！ すごい！ これん、わああ!!」

気が付けば、彼女も腰を動く反動で、打ち付けてくるようになっていた。

……。

潮まで嘔きながら。

バチュバチュと音が変わっていく。

…再度、ごめんペパロニ。

掃除させていただきます。

……。

「あん！ ああ！ たったかっ…しき!! イクっ！ またっ!!」  
はい。

怖かった。

すっごい怖かったんです！

あの状態じゃ、どうしようも無かったし。

俺自体、生殺し状態だったし…。

うん。

「やつ!! またっ!! いっん!! ああああ!!」

怖かったので、快楽でやつつけてしまおうと思った次第です。

否、空気を無理やり変えてやろうと思った次第であります。

怖いんだもの！

「はあはあ…」

とは言っても、一心不乱に腰を打ち付けて、本当に中に出してしまつたらと思ひ、一度腰を止めた。

…うん、今更ですけど。

「す…す…い…こんなああ…腰が…」

耳元から聞こえてくる甘い声が、何度も理性の紐を切りそうにかか

る。

「何度もいいですけど、今更ですけどね！

「…隆史さん…」

「…なんでしよう」

「…もう分かっているかと思いますが…」

彼女の髪の毛が、俺の頬の上をなぞる。

顔を動かしたのだろう。

…。

ん？

動かした瞬間、その先にあるのであろう…場所から、ガタンと音がした。

…。

…うん。

ヤリスギタ。



耳が麻痺したのであろうか、ひなさんの声の大きさ…忘れていた。

「……次は…彼女達の番ですねえ」

ひなさんが声を出した瞬間。  
更に大きな物音が聞こえた。

※ルート IF※第23話〜アンツイオ潜入です！  
…潜入だよね？〜 後編

「はい、大丈夫です」

隆史が寝ているソファアをどこぞのガイドの様に手で指し、嬉しそうに報告をしてくるカルパッチョ。

部屋の暗さにも目が慣れてくる頃、雨も上がり、カーテンの隙間から月の光が入ってくる。

「流星になあ…寝込みを襲うつてのは、ちよつと卑怯じゃないだろうか？」

確かに、あの男には散々…赤面させられる程からかわれて来たけど…。

夜の1時頃、カルパッチョに私とペパロニは、起こされた。

隆史とお…同じ屋根の下だ。何かあったのかと思ったら…ひどく悪い顔で、寝ている隆史さんに悪戯しましよ？♪と、悪い顔で提案された。

ペパロニは寝ぼけていたのだけど、その提案の為か、即目が覚めたようで、更には即答で食いついた。

…多分反対した所で、この二人は強行しそうだったし、無茶しそうだったから監視の意味を込めて同行した。

あまり大きくない、黒いソファア。

隆史の足が、はみ出しているのが分かる。

その足の先。

キツチンの前で、作戦会議。

「んでよお？ 具体的にはなにすんだ？」

「…油性はやめてやれよ」

カルパッチョを二人して見つめている。

どうにも先程から、嫌な予感しかしない。

…まあ、カルパッチョの事だ。

顔に落書き。

そんな所だろう。先に妥協案を出しておいてやる。まあ油性は流石に可愛そうだ。

「ドゥーチェったらっ♪」

なんだ？ 当たったか？

いつもの様に、ほんわかとした雰囲気で、面白そうに微笑んでいる。この子のこういった、彼女特有の空気は、変に血の気の多いとかかなんというか…そんなアンツイオの中で良い清涼剤となつて…正直助かっている。

「そんな可哀想な事しませんよ？」

ん？ 違うのか？

「んなら、なにすんだよ」

提案主といえ、カルパッチョの微笑みで、少し空気が柔んだ。

顔に落書き…じゃないにせよ、何にせよ。

まあ、大丈夫だろう。さっさと終わらせて寝てしまおう。流石にまだ眠い。

「隆史さんの陰莖をしゃぶります」

……。

「いん…ああ？ なんだそれ？」

「」

ああ！ 聞き間違えだ！ うん！

そうだそうだ！

流石にカルパッチョが、そんなとんでも無い事を口走るはずがないよなあああ!!

「ペパロニ…では、簡単に言うわね？」

「お…おお」

よし！いつもの優しい雰囲気のカルパッチョだ！  
やはり、私の聞き間違いだなあ！ …欲求不満なのだろうか……私  
は。

「隆史さんのオチ○チンを、私が口で舐め回します」

「」

……………あ。

そうだ。夢だ。うん……えらくリアルな夢だこれ。

「後は、流れに身を任せて……そのまま、文字どうり身を任せてもいい  
んですけどお……」

「」

「もう！ 二人して何をボーつとしてるの!?!」

「……いや、絶句してんだよ。何トチ狂った事、言ってるんだよ……カル  
パッチョ」

「」

ほら！ ペパロニがカルパッチョにツツコミをしてるじゃないか  
！

うん！ やっぱり夢だ夢!!

ペパロニもこう見えて、結構な乙女だ。

顔が真っ赤になっているじゃないかあああははは！

「えっと、ドゥーチエ、ペパロニ」

「な……なんだよ」

「」

「純情可憐も結構ですけど……ここで既成事実でもつくっておかないと  
……………」

いつもの笑顔だ。

いつもの笑顔だ。

いつもの笑顔だああ!!

普通にとんでもない事、サラツ……………つと、言ったあ!!

「隆史さん、本当に取られますよ?」

「…え」

「隆史さんが、大洗学園に転校した時点で、もう遅いというのに…それがもう数ヶ月前…」

あ、ペパロニの肩が一瞬動いた。

「西住 みほ」の事を言っているのだろうか?

次の対戦相手…。

「…ドゥーチエ。こんなに近くで、隆史さんを独占できるチャンスなんて…多分、いえ、絶対にもうありませんよ?」

…か……かるぱっちよさん?

「私は…ドゥーチエかペパロニ…それ以外の2号さんは嫌ですからね?」

なにを仰っているのでしょうか?

え? え?

本当に? いや私でも分かるけど!! 本気ですか!?

色々と正直、心がついて行けない!

驚きすぎて…。

声が…でない。

「時間が惜しい…というか、待ちきれないので、私は行きますけど…」  
喋りながら…なんでパジャマを脱ぐんだ?  
なんで下着まで脱ぐの!?

「……………さてと、フフツ!」

最後に嬉しそうに出した笑い声が…とても怖く感じた。

というか…目が…捕食者の目になってるうう。

あれ? これ最初から結果が決まっていた作戦会議?

ただ、カルパッチョの宣言みたいなものじゃないのか?

え?

ペパロニは、何故か真っ赤になって固まっているし!

…ゆらりとした足取りで、彼女は行ってしまった。

どこかで、やはり疑っていたのだろう。

そんな事をするはずが無いと。

だから私も、全力で止めなかった。

カルパツチヨは、そういった悪ふざけや冗談を言う子じゃないの  
分かっていたのに…。

「ハアアアア………チュブツ」

ここまで、音が聞こえてくる…。

すつごい普通に、隆史の体を起こし。

すつごい普通に、用意していたタオルで、腕を縛り。

すつごい普通に、隆史のズボンを下ろして…。

すつごい普通に、頭を……その中に…。

足が震える。

頭の中が熱い。

目頭も熱くなってきた。

何が起こっているか…現実離れしすぎていて分からない。

気が付けば、その場に座り込んでしまっていた。

それはペパロニも同じなのだろう…先程からたまに、喉を鳴らす音  
が聞こえてくるだけだった。

判断ができない。

ここからでは、何をしているか良く分からないけど…その、前後し  
ているカルパツチヨの頭の後ろ側しか見えない。

『…なにやってんすか、カルパッチョさん』

呆然と眺めている中。

どのくらい時間が過ぎたのだろうか…。

…起きた。

隆史が目を覚ました。

単純な思考しか働かない。

会話が小さくて上手く聞こえないが、隆史は彼女を止めている。やめろと。

しかし、カルパッチョはやめない。

楽しそうに声をかけて、またいやらしい音をわざと立てている。

そんな隆史は、時に苦しそうに…時に何かを我慢しているような…そんな顔をしている。

あれは気持ちがいいのだろうか？

『あまり大きな声だと、ドゥーチエ達起きちゃいますよ？』

…白々しい。

なんのつもりだろうか？

分かっているの発言。

「!!」

目があった。

その為、意識が戻ってきた。

今動くと、隆史にバレてしまう。

傍から見れば、完全にのぞき見をしている私達。

…横を見れば、ペパロニと目が合う。

……バカ騒ぎしそうなペパロニすら空気を読んで黙っている。

その目は…赤く充血している。

耳まで赤くなっている。

…どうしよう。

逃げられない。

『チュツ…隆史さん。私の気持ち…。少なくとも私が、貴方の事を好きな事は、気がついてくれていましたよね?』

……。

………ちよと今。

カルパッチヨがすごい事を言った。

はつきりと言った。

好きだと。

……隆史が、鈍感すぎるのは分かってはいた。

全力で、そういった周りの気持ちに対して、気がつかない様にして  
いる…。

『…まったく! ほんつつつとに、もう!!』

怒ってる…。

まあ…うん。分かっていたとは思うけど…うん。

一瞬、隆史が悲鳴を上げた気がしたけど…何やった、カルパッチヨ。

そんな彼は、無理に鈍感なっている。

そんな気がする。

そんな感じがする。

だからだろう。

プラウダと聖グロの連中も、敢えて控えていたのだと、私は思う。

気持ちを伝える。

告白しない。

同性から見れば…いや、誰が見ても分かりそうなものなのに。

牽制しあい、身動きが取れない。

告白できない。

でもそれでも良いと判断していたのだろう。

妙な締結が出来ていた。

「……」

自分の喉元から、変な呼吸音がする。

カルパッチヨは、あっさりとそれを崩した。



今、好きだとはつきりと言った。  
あつさりと壊した。

……まずい。彼女は本気だ。

ペパロニと再度目が合う。

小刻みに震えている。

目が見開かれて、声が出せない。

アイコンタクト…。

何となく気持ちちが分かる。

どうしよう。

今飛び出ていけば、なんとかなりそうな気もする。

だけど足が動かない。

ふたり揃って、よく分からない焦りと共に慌てふためいてしまっているこの状況…。

『んっ!! はあ…んっ!?!』

大きな…艶のある声が響いた。

…。

カルパッチョが、隆史の上に跨っている。

……。

『んん…はあ…』

……。

何故だろう。

目の周りが。

熱い。

ペパロ…

(どうしよう!! 姐さん!!)

(どうしようって…今更、出ても行けないだろうし!)

(…姐さん。あれって逆レイ…)

(……うん、皆まで言うな)

そんなジエスチャーとアイコンタクトで、何となくの意思疎通をするも……。

(…カルパッチョ。あんな…エロい声だせるんすねえ…)

(やめろ！ 変な現実逃避をするな！ 色々悲しくなるだろうが!!)

もう甘い声…とでもいうのだろうか？

それが、断続的に響き渡る。

ただ、あまり長くは続かなかつた。

何往復か…隆史の上で彼女が動いた時、彼女の体が大きく痙攣した。

そのまま隆史にもたれ掛かっている。

行為というのが済んだのだろうか。

経験が無い私には分からないが、これで終わったのだろうか。

我慢の限界か…ペパロニの腰が少し上がった。

飛び出る気だろうか？

が。

『フフフ……フツ……フフ……フフフ……』

笑い声。

『ウフフフフフ フ フ…フ フ ハ ハ ハ ハ ハ…』

聞いたことが無い。

こんな笑い声。

『ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ！ アハハハハハハハッ!!』

あんな笑い方をするカルパッチョ。見たことが無い。

ペパロニも同じなのだろう。

先程の表情では無く、どこか怯えたような顔になっている。

『出し抜けたあ…』

『出し抜けました。 出し抜けました出し抜けました出し抜けました  
出し抜けました』

『残念でしたねえ…ノンナさあん……ダージリンさああん……』

『西住 みほ』さあん…』

背筋に何か走った。

知らない。

あんなカルパッチョは知らない。

人間、二面性を誰しも持っているって聞いたことはあったのだけど…。

今までの行為は、正直変に興奮する部分もあった。

気が付けば、目から何かボロボロと流れているモノもあったし、無理にいつものノリっぽく、ペパロニと話そうとしていた部分もある。

いつも一緒にいた知人の痴態。

乱れる姿。

そう…性的な興奮も…その……無かった訳じゃあない。  
が。

全て吹き飛んだ。

暗い、とても暗い。

狂気地味た……そんな空気。

『た…っ?!? んあ?!? たかつつ?!?』  
あれ!?

隆史が立ち上がった……んだけど……えー。

『ああ!! んああ!!! ああ! すっ! すごい! これん、わあ!!』  
なんか…すごい勢いで、隆史が動き出した。

先程までの、なにもしない……ただ座っていただけでは無く……  
その…。

(……)

(……)

『やつ!! またっ?! いっん!! ああああ!!』

バツンバツンと何度も体がぶつかる度に、カルパッチョがまたすごい声をだす。

ニチャニチャとした音も一緒に、無言で動く隆史が……別の意味で怖かった。

色々とカルパッチョの黒い部分が全開になった雰囲気。

そんな雰囲気を見無視して、ぶち破った…。

…相変わらず空気読まないなあ……隆史。

ただ先程までの、怖いカルパッチョはいなくなり、逆に完全に蕩けたような顔のカルパッチョがいた。

ああ…なんだったんだ、今のは。

荒い呼吸が聞こえる。

(姐さん)

(…なんだ)

(…初めは正直、カルパッチョの奴、ずるいなあとか思ってたんですけど…)

(……まあ)

もはや普通に、アイコンタクトとジェスチャーで会話しちやってるな。

すごいな私達。

(ずっと見てたら…その……)

(だから、なんだ?)

(………多分、今あたしの下着…すごい事になってます)  
(ブツ!?)

しまった…思わず立ち上がってしまった。

その時に、どこかにぶつけたのだろう…。

ちよっと大きな、音を立ててしまった。

『……次は…彼女達の番ですねえ』



「ウフフフ……」

「」

テーブルの下に、見慣れた顔が二ついた。  
……えつと。

「隆史さん」

「」

ひなさんが、声をかけてきた…のだけど、なんでそんなに普通なん  
でしょうか!?

すつごい所見られていたんすけど!?

「ドゥーチエ達、最初からいましたよ?」

「…え」

すつごい嬉しそうな声で、とんでもない事を言ってきた。  
最初から。

えつと…どの最初?

「隆史さんが寝ている時からですよ?」

「」

はい。

全貌を聞かせて頂きました。

ひなさんが、千代美達を起こしてしまうとか言うのも、分かっ  
ての発言らしいです。

…フェイクですか。

「ンッ!」

無言で…その…アレをひなさんから引き抜くと、ちよつと色っぽい声が出た。

ゆつくりと彼女をソファアに下ろして…えつと。

「ギャー!! 下半身裸で近づいて来るなあ!!!」

「……」

あ。忘れてた。

もはや桃色空間みたいなモノだったからなあ…うん。

ごめん…千代美。顔がオーバーヒートしてますね。

…なんで、ペパロニは凝視してるんだろう。

あの…口半開きですよ？

「隆史さん」

「な…なんすか、ひなさん」

あいかわず、名前で呼ぶとゾクゾクとしたような…一瞬、呆けた顔になる。

「んんっ！ ごめんなさい…えつと……」

「……」

何を言う気だろう…ちよつと怖い。

「まだ、隆史さんイッてませんよね？」

「ブツ!!」

「どうしますか？ まだ私は全然大丈夫ですよ？ とうか…ちよつと悔しいのでっ♪」

何が!?

え!?! 千代美達居る前で、続けるかどうかの話?!

「……カルパッチョ。流石にその発言は…私達の前で…その」

千代美が、チラチラこちら…とうか、下半身見えますよね？

ごめん。隠すわ…。

ズボンどこいった…。

「タカシ」

「…なんですか。家子様…」

「そこに座れ」

黙っていたペパロニが、ソファアに向かって指を指した。

「ソファア？ 正座しなくても、よろしいのでしょうか？」

「…しなくていい。そのままでもいいから、普通に座れ」

すごい真顔で。

射抜くような視線で俺を見ている。

顔は真っ赤ですけどね…。

そのやり取りをし始めた時から、ひなさんが満面の笑みで黙って見守りだした。

なんなのだろうか…。

土下座なら喜んでやらせて頂きますのに…。

……………。

はい。座ります。

だから、睨まないで下さい。

「……………」

ソファアが冷たい。

合皮製のソファアの為、ある程度の水分は大丈夫。

…その、つまり…ひなさんの愛液というか…潮というか…それが冷たい…。

「よし、座ったなー！」

はい。座りました。

「じゃあ、次は私の番だな!!」

……………。

え？

一言宣言して、おもむろに衣服…寝巻きを乱暴に脱ぎだした。

「ペパロニィ!？」

千代美が騒ぎ出した。

普通の反応に何故か安堵する…。

ありがとうございます！

「よしっー！」

全裸になったペパロニさん…。

…で……でかい!？」

着痩せするタイプだとは思っていたけど…その…健康的な体も相まり。

一瞬、息を飲んでガン見してしまった。

だってね…服脱ぐ時に胸が引つかかって…胸がずり落ちた瞬間に…その…。

重力って素晴らしいよね！

……………何言ってるんだ俺。

「…タ…タカシ。その…あたしも…恥ずかしいから余り…凝視するんな」

「……」

顔に手をやり、ちよつとよく考えてみよう…。

なにこの状況……。

恥じらうペパロニさんが、ひどく可愛く見える…。

いや、実際に可愛いんだけどさ…。

「よしー！」

「…え」

座りながら俺の両足の膝を掴み、強引にこじ開けた。

躊躇せずに…その…俺のまだ収まらないアレに口を入れた。

「ふあふいふあ、ふおうたつたひよなー！」

「ペパロニ!？」

そのまま大きく前後運動。

…口内の生暖かさが広がる…。

「ふっ！ フツ!? チャツ」

やはりよくわかっていないのだろう。

ひなさんの行為を、見たままで再現しているっぽい。

「……ちゅっぱっ！」

数回動いて、すぐに口を離してしまった。

ちよつともつたいない…。

違う!!

「……タカシの反応あんまだし…なんか違うのか？」

「いや…なにしてんすか、ペパロニさん…びっくりしたよ……」



「見てわかんねえのか？」

「……いや。そういう問題でもなくて……」

「まあいいや！ 次！」

「は!？」

おもむろに立ち上がり、今度は俺の肩を押してソファアの背もたれに押し付けてきた。

……正直、状況に流されている。

もたれ掛かるように、大きな胸を俺の顔に押し付けてきた。

ソファアに、もう一人分の体重が掛かったのが分かった。

俺の腰骨付近、その左右にペパロニの足の体温が伝わる。

「……さてと」

「ちよつと待て！ いや、ほんとに待てって！ 何やってんのかわかってるのか!？」

「当たり前だろう？ 何言ってるんだ？」

暗い部屋の中。

それでも赤くなっていると分かる、ペパロニの顔が見えた。

口調はいつも通りなのだけど、少し手から伝わる震えが分かった。

「……張り合ってるんだよ」

「……」

張り合う？ 誰と？

……ひなさんとか？

行為の一部始終を見ていたのであろう事から……か？

なんで？ なんで張り合うの!？」

…先程から妙に大人しい、横にいらであらう千代美とひなさんに視線を投げてみた。

無論助け…というか、ペパロニを止めてもらう為だ。

このノリと勢いはまずい。

いくら何でも…。

「ま…まって！ 待て！ カルパ…んあつ!!」

「……ジュルルル」

「ま…どこ…んんっ！ どこを舐めっ……」

……。

ひなさんが、ドゥーチエを押し倒していた。  
何してんすか。

下半身を下着一枚にして、その股間に頭を潜り込ませていた。  
啜る音が先程から聞こえる……。

「……」

どうしよう。

初めて見たよ……百合展開……。

うっわ！ エロツ!!!

……。

ごめん……これは見入っちゃうわ……。

「やだっ！ ちよっ!! んあっ！ 舌を……いれええ……」

「ハアハア……次は多分、ドゥーチエですからねえ……」

痛っ！

「……流石に今は、他所見すんなよ」

両手で顔を挟まれ、強引に顔を正面に向かされた。

そのペパロニと目が合う……。

赤く充血し……涙目だ。

「……」

片手を離し、俺のアレの手を添えて、動かぬ様に位置を固定した。

……マジかよ。

「……ひな……カルパッチョさんにも言ったけどさ、まあ……今更俺が言う  
のもなんだけど……」

「んだよ」

「……ペパロニ。流石に初めてだろ。……手の震えで分かる。こんな事  
で……俺なんかで……」

「タカシ。お前やつぱりアホだなっ！」

俺の言葉を遮って、笑顔で罵倒された。

「おめえを泊める云々の話でも言ったけどさあ。……タカシだからだ

よ」

「……」

「っ！」

そのままゆっくりと腰を落としていった。

先が壁に当たる感触がする。

「……まあ……あたしも……こんなタイミングでつてのは、気になるけどよ……カルパッチョ見てたらさ」

体重が掛かる。

「負けたくねえなつてよ……おも……痛っう」

「……」

ペパロニの腰に手を置き、ゆっくりと下に押し込む。

よく女に恥をかかせるなど言うが……まあ今がその時だろう。実感した。

「っっあっ!!」

何かを貫いた。

生暖かい物が、ツタウ感触。

「はあ……はあ……」

俺に寄りかかり、首に回る腕。

肉壁をこじ開けて進む感触。

暖かい……いや、熱い感覚。

「っは！……ひゅッ」

一気に奥まで押し入れた。

それと同時に、快感と共に複雑な思いが、体全体に広がった。

「っ……息が……上手く……できない……」

「大丈夫か？」

「……思ったより……痛……い、なあ……」

「……」

「……ハア……ハア……んだよ」

「……」

「あ……たし……のお……ハア……初めて……くれてやったんだ。な……んか、言えよ……」

「……えつと」

「謝った…ら、ぶん殴る…からあつ…なつ」

「……正直に言おうと」

「……」

「ペパロニが…なんか、ものつつすごく可愛く見える」

「カツ！ ハハ…なんか…初めて言われた…いつもドウーチエに…しか言わない癖にな…」

「そしてすっごいエロいデス。…あと気持ちが良い。色々和我慢で  
きなくなりそう…」

「…それは、喜んでいいのか？」

いきなり素にならないで下さい。

「まあいいや…う…動いていいぞ？ とうか、どうしたらいいか  
…分かんし」

…泣きながら我慢して…

流石にペパロニの気持ちも察しがついた。

でも俺にそんな価値があるのだろうか？

…二人に好意を寄せられた。

いや…余り自分を卑下にするのも…もはや、二人に悪い。

ならせめて、気持ちに応えよう。

「分かった。我慢できなくなったら言ってくれ。…俺が我慢できな  
くなる前に」

「…待て。流石に少しは優しくっううう!!」

ゆっくりと動き始めた。

「っ！ っ!!」

そのまま抱きしめる形で小刻みに動く。

ペパロニはその度に…苦痛だろう。

顔を歪ませていた。

時に大きく動いて見て反応を伺うも、やはりまだ性行為の快樂より、痛みが勝るのだろう。

段々と俺自身も遠慮が無くなっていく…。

こういう時は男は楽だな…痛みを伴わない。

狭いと感じるペパロニの体内は、確実に俺の理性を削っていく。

座位ということもあり、抱きついているペパロニの体とすり合う。

それもまた気持ちが良い。

胸が押しつぶされて、あたっている感触と肌の感触。

…いや、本当にでつかいな…。

双方が又、俺の理性を…というか、まずい…。

ひなさんとの情事もあり、すでに限界も近い。

「はっ！ はっ！ っ！ んっ！」

しかもおもいつきり生だ。

避妊具をしていない。

今更ながらにそんな事を思い出した。

ペパロニが、大きく動き出した。

痛いだろうに、強引に腰を上げ何度も、打ち付け始めた。

「っ！！ んっ！」

「ペパロニっ!？」

「ほらっ！ っ！ タカシも好きにっ！ 動けよ!!」

「ばっ!! ちよっ！ やめっ！ ぐっ！」

「…！ んっ!! やつと慣れてきたしい！」

ただでさえ、締めりが強くて危ないと、我慢していた中。急に全力で動き始めた。

「んっはあ…」

耳元から甘い吐息…。

……。

こんな風になるのか、ペパロニは。

普段とは随分とかけ離れているな。

「いつ！ な…なんだ？ ちよつと…：…気持ちよくなつ!? にいつ！  
んあ!!」

頭が熱い。

友達。友人。

そんな風に思っていた。

そんな娘が、前の前で…裸で…。

「まだッ！ ちよつと痛いけど…お。んあッ！」

彼女の尻を鷲掴みにし、彼女の動く体に合わせて、上下に動かす。  
血なのか、愛液なのか分からないが、水音が激しく繰り返している。

「はっ！ んっあ!! あっ！ あっ！」

痛みには完全に慣れたのだろうか？

甘い声がしばらく耳元から聞こえる。

脳髓が刺激される様だった。

しばらく続けていた。

続けていたい。

そんな中、ペパロニとは違う、甘い声が横から聞こえていた。

…あ。

カルパッチョさんに、完全に押し倒されて…執拗に攻められていた  
千代美が見えた…。

………。

すごい状況だった。

流されているだけだったけど…これは…。

ぐっ。

まずい。

……本気でまずい…。

「ど…：…んっ！ どう…：…したっ！ タカシっ!？」

「…：…出そう。…：…一度…：…抜く」

「…：…はあ…：…ハア…：…」

イキそうになっていた。

避妊具もしていないのに、ただ快楽に流されていた。

腕と腰の動きを止め、一度中断するとペパロニへ：  
ペパロニ!?

ギョツと少し強い力で、抱きしめられていた腕の力が強まった。

「……別にいい」

「は!？」

完全に虚をつかれ油断していたのもアリ……違う。

イイワケだ。

ただの言い訳。

……ただ俺が我慢できなかっただけだ。

言い訳はやめよう。

この快楽に流されていただけだ。

だからコレは俺のせい。

俺の責任。

別にいい。

ペパロニが呟いたと同時に、更に激しく腰を動かし始めた。

「はっ！ んっ！」

限界が来ていたのもあり。

……。

脈と共に、吐き出されている。

射精と同時に膨らんでいたであろう亀頭が、膣内で押さえつけられている。

……おもいつきり中で、果ててしまった。

「はあはあ……タカシ……」

血と同じくして、体温と同温度。

ペパロニには分からないだろう。

……分かっていた。

ガキじゃないんだ。

その危険性は。

生で…避妊具を着けていないだけでも、無責任だというのに…危険性は高いというのに。

「はあー……はあー……はあー……」

耳元から、熱い息と共に彼女の少し甘い呼吸が聴こえる。  
しばらくこうしていたいとばかりに、腕の力を抜いてくれない。  
……。

ダメだ。

俺って…こういう事にも流されやすいのかよ…。

…どのくらいだったのだろうか。

ただ、彼女の体温を感じていた。

やってしまった事は、もう仕方が無い。

責任とらんと…とは思っていた。

「もういいか…んっ！」

彼女が少し動き腰を上げた……抜き出す。

「……」

ボタボタと、血液と混じった白い液体が、ペパロニの中から溢れ落ちてくる…。

「うっわ！ なんだこりや。すげえ量だな……まだ出てくる……これは……終わったのか？」

まあ…うん、責任…とらんとなあ…。

「…さてとー！」

事が終わったと見て、ピロートークや余韻に浸るって事もなく、あっさりとした態度で、俺の上から降りた。

「ガキが出来ちまったら、そんなときやそんな時だな！」

「…ペパロニ」

あまりの軽さに、別の意味で心配になる。

「大丈夫ですよ？」

「うわあ!!!」

「んだよ、カルパッチョ。邪魔すんなよ」

「はいはい。次はドゥーチエですからねえ……準備は終わりましたし」

……え？

「ああ後、先程も言いましたけど、大丈夫ですよ？ 隆史さん」

「……」



何が？ 色んな意味で混乱している。

次？ ドウーチエ？ 大丈夫？ 何があ!?

「ペパロニ？ テーブルの上に置いてある、私のポーチにお薬入ってるから、後で飲んで頂戴」

「んあ？ 薬？」

まさか…

「避妊薬よ」

」

アフターピル…準備してたの？ え？

「…ちよつと私も興奮しすぎて…迂闊でしたね」

いつの間にか…というか、ペパロニとしている時に準備していたそうだ。

……。

え？

「はい、ではちゃんとしたのも用意しておきました！」

はい。

そのポーチから取り出したるは、ゴムですね。

コンドーム。

黒々とした箱に虹色に光る文字のパッケージ。

え？ これ買ったの？ カルパッチョさんが!?

どこで？ え？

……ちよつとその絵を想像したら、少し背徳感を感じちゃった。

「はい、次はドウーチエです。あれをご覧下さい」

あの…俺の混乱を無視しないでください。

計画性がありすぎでしょう？

……コワイ…。

「なあ、カルパッチョ」

「なに？」

「薬って、今飲まなくていいのか？」

「ええ。飲んだ後は、性行為しちやダメだから」

「…んあ？ どういう事だ？」

「まあ色々あるけど……今日はもう、隆史さんとしなくていいのね？」

私はドゥーチェの後もう一度お願いしたいけど……」

「……なるほど。んじゃ後でいいな！」

「……………エ？」

まって！ 待ってくださいよ!? どういう事!?

「では、隆史さん」

「

「何度も言わせないでくださいね? 『ドゥーチェの番です』よ?」

「

—————

—————

前戯。

ひなさん曰く、それを済ませてみると、形のいい胸を張られた。

仰向けになりながら、大きく胸を上下に動かしている千代美さんは

…すでに半裸に剥かれていた…。

……。

「ドゥーチェ、反応が可愛くて…ちょーっと…やりすぎちゃいましたえ…」

バツが悪そうな顔をしているひなさん。

目の前の千代美から、ヒューヒューと喉から音がする。

……。

時折、上げた片足の根元が、ビクンビクンと痙攣をしている。

…。

下半身はショーツのみ。

随分と攻めたのだろう。

ひなさんの唾液と、愛液の為に薄暗い室内でも分かった。

水でもかぶった方のようにグチャグチャに濡れていた。  
カーテンの隙間から入る光がソレをヌラヌラと照らしている。  
シヨーツの秘部分が、その為にピッタリと張り付き、秘唇の形が  
ハッキリと分かるくらいだった。

……まずい。

色んな疑問や何もかもぶっ飛んで、ついでに理性までぶっ飛びそう  
だ。

「……」

痴態を晒している千代美には悪いが、賢者タイム中の俺は何とか理  
性を保ち、彼女に近づく。

……何言ってるんだ俺。

「…おい、千代美！ 千代美さん！ 大丈夫か!?」

顔をペチペチと軽く叩きながら、意識を確認。

あかん。目が虚ろだ…。

「だかしいい！ やあ！ もうやだあ!! カルパッチョが怖い  
!!」

…うん。それは賛成する。

「あら、ドゥーチェは隆史さんとしなくていいんですか?」

「…やだ。初体験は、もっとロマンチックの方がいい…。ノリと勢い  
は嫌だ」

「ああ…ドゥーチェの愛読されてる恋愛小説みたいなの…。えっと、  
なんでしたっけ? 夕日の浜辺とかホテルとかでしたっけ?」

「んなああつ?!?!」

…えっと。

目は虚ろだけど、愛読書を暴露されて慌ててますね。

というか…何読んでんだよ。

「あの…ひなさん。俺も流されてしまった分、何も言えないですけど  
…流石にこんな…」

すでに二人としてしまった…なので、今更感が半端ありませんが。

説得力皆無ですけどね!

「……隆史さんは黙っていてくださいいね?」

……ハイ。

「さてと……いいんですか？ ドウーチエ？」

「……」

「……本当に取られますよ？」

「…グ…」

「それにドウーチエも…ほら！」

「んあ!？」

…ひなさんが、千代美のショーツの秘部の周り部分を掴み上に引つ張り上げる。

「…ドウーチエも収まりつかないでしょう？」

「あん！ んっ!! ひっ！ ひっばるなあ!!」

ひなさん。目が怖いですよ？

そのまま、顔を千代美の耳元に近づけ、何かを囁いている。

時に耳たぶ噛みながら…。

慣れてるなあ……怖いなあ……。

「でもお！ んっ！」

……。

「ほら…隆史さんもあんなになってますし……」

「ふっ!？」

真っ赤になった千代美に凝視された…。

はい。

この映像ぶっちゃけエロすぎて、復活しました我が息子。

「はいっ！ 後は隆史さんお願いしますね？ 女に恥を搔欠かせないでくださいね！」

「」

また、ヒューヒューとした呼吸になった千代美さん。

交代とばかりに、ひなさんに場所を譲られた。

強引に…。

「うくん…流石になあ…」

ぐったりとした、千代美。

流石に本人の意思が無いのに…なあ…。

「……」

「……千代美？」

何かを訴える様な目をして見つめてきた。

「……いい」

「ん？」

「……もういい」

あの…。

「やっぱり、隆史は鈍感すぎるし…取られたくないし……」

「……」

「嫌だと言ったが…ノリと勢いは……やっぱり私達らしいし……」

「……」

「わ…私も……たか……隆史が……その………好きだ………シイ」

「……」

「だから……もういい。……好きにしてくれ」

「……」

いかん!!

これは本気でいかん!!!

千代美が、涙目で真っ赤になりながら、こんなエロい状態でもモジモジとしながらあ!!

告白なんていきなりされるものだから!!

……最低な事だとは思うけど!!

ひなさん、ペパロニを抱いた後にこんな状況でえ!!

理性が…死ぬ……切れる。

「その……隆史」

「!？」

潤んだ瞳で更に見つめられながら、名を呼ばれた。

「…だ…抱いてくれ」

ブツツ

っ危ねえ!!

だから、切れやすいよ俺の理性!!

自身の理性の紐を掴み、また縛り直す…。

マジで女性の好意に甘えて、これ以上はっ!!

本当にただのクズに…。

……。

精神世界。

俺の理性の紐が…張りが無い。

あれ？

手元からダラ〜ンとしてる。

アレ？

何となく横を見たら。

…ハサミを持って、嬉しそうにしている…笑顔のひなさんがいた。

……。

千代美のショーツをずらした。

秘部が目の前にある。

ヌラヌラと光り、息をするように少し…動いている。

亀頭を入口に押し当てて。

ヌチャつとした感触と、生暖かい温度。

そのままゆつくりと押し付けている。

「んっ！」

侵入を拒むかのような壁にぶつかる。

そのまま、突き進む。

…もう理性なんて無い。

「っ!!」

何かを破る感覚と、快感が先から感じる。

ヌルつとした感覚。

「ぐっううー！」

肉壁をこじ開け、一気に一番奥にまで千代美の中に入った。

押し上げる感覚と、包まれる感覚が…。

「はあっ！ はあッ！ …ちよつと……苦しい」

「…すまん」

「だ…大丈夫だ。ただ、やさしくしてくれ」

「ど…努力します」

「……思っていた程……痛くないな……」

少し痛みは有る。

そう言っているが…こういう事にも個人差があるのだろう。

痛みが少ないのならよかった…。

「ただ…た、隆史のが…キツくて……ちよつと……圧迫感が…」

生々しく言わないでくれ…。

「動いていいか？」

「や…ちよつと……まっつて」

一言言って、俺の首に手を回す。  
そのまま唇を合わせてきた。

「……ん」

「……」

「私の全部の初めてだ」

ああもう無理だった。

無言で、ゆつくりと動き出す。

今度はこちらから唇を合わせに行き、舌を入れる。  
ズルズルと引き抜くと……。

……。

……なんだ？

またゆつくりと動き、遅めのピストンを繰り返す。

「……んっ……あ」

目の前から甘い声が聴こえる。

「……本当に痛くないな……変な気持ち……んあ!？」

千代美は、すでに快楽を感じているのだろう。

「あ！ あっ！ んっ!？」

それに戸惑うような声。

……それ以前に……。

ズルツと抜き。

また突き進む。

な……なに？ めちゃくちゃ気持ちがいい。

下衆な言い方をしてしまうとアレだけど……初めてだから絞まり  
いいとか……そういう問題じゃない。

入れて抜く。

脳が熱い。

「はあ……はあ……ど……ど……どうした？ その……」



まだ数回しか動いていないが、一度動きを止めてしまった。それを疑問に思ったのか、不安げな顔で聞いてくる。

「す…すまん、初めてだし…あまり…その…気持ちよく無いか？」

「…逆」

「え？」

「ごめんな？ 千代美」

「な…何？」

「…ちよつとこれは、抑えきれぬ自身が無い」  
「？」

一言言つて、また動き出す。

やつぱりだ。

これは千代美もだろう。

個人差があるが、初めての女性が、こんな短時間で快楽を感じてしまふものだろうか？

感覚が鋭くなつていた。

「なっ!? 何!? くあ! ああ!」

いきなりだけど、激しく動き出してしまった。

腰骨に親指をかけて腰を持つ。

少し体を浮かせて、後は腰を打ち付ける。

「やつ!? んあ!! はっ! はあっ!!」

腕で目を隠すようにしていた。

甘い声が恥ずかしいのか、たまに我慢をしようとするが。

すぐにそれが崩れる。

バツンバツンと何度か腰を打ち付ける。

ゴツンと何度か、奥にも当たる。

「んあやあ!! なんっ!! なんか!!」

腰の手を動かし、足首を持つ。

何かそのまま、正常位の格好に持つていく。

覆いかぶさる様になると、自然と千代美が腕を首に回してきた。

それに…。

もう…イキそうだった。

さつきイツタばかりだというのに…あまりに限界が早い。

「あらあ…隆史さん凄いわねえ…」

「…あれドゥーチエ大丈夫か？ 凄い声出してるけど…」

後ろから声が聞こえた。

が、止まらない。

バチユンと水音と肌がぶつかる混ざり合った音が、何度も繰り返している。

こみ上げてきたモノを感じながら、それでも激しく打ち付ける。

「んあ!!? んはあ! なんか! なんかくるう!!」

顔を少し振り乱し、真っ赤になりながら叫んでいる。

…千代美もイキそうなのか。

「っはああ!」

これは…あ。

「っ!」

すぐに引き抜き、そのまま千代美の体を汚す。

白い液体が飛び、腹から顔まで一直線に液体の線を引いていた。

千代美の体が、痙攣を起こしている様にビクンと何度も小刻みに跳ね上がっている。

…また避妊してなかった。

また中に出してしまっ所だった…。

千代美の秘部からは、赤いものが少し見えた。

…なのに…これか。

千代美も果てた様で、痙攣が収まっていないようだった。

「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…」

…今…我慢できなかった…。

イキそうだとは思ったけど…、完全に不意打ちだった…。

これは…。

「ハア…た…隆史…」

「…はい」

「……………優しくつてしてくれつて言つたのにい…」

別の意味で泣かれた。

…

……………

千代美を抱いた後、もう一度と言つて、ひなさんがまた襲つてきた。段々と慣れてきたのか、ペパロニも参加してきて…。

それに、復活した千代美も恥ずかしながらも、更に参加…。

なんだろう…最終的には、3人共、気絶させてしまふ程、激しく攻め立てしまつた。

はい、完全に欲望のままに行動してしまいました…。

何回やつたのだろうか？

まあ結果。思つた。

千代美と体の相性が、抜群に良いみたいだつた。

意識ごと持つていかれそうな快感。

…でもまあそれを持つて思う。

はい。完全にハーレムでした。

はい。俺、今日にでも死ぬんじゃないだろうか？

…モラルでなんだっけ？

そして朝。

ソファアール目を覚ますと、また下半身が寒かつた。

あれだけやつてしまつたというのに、まだ男の生理現象は正確に起こつてくれた。

その生理現象を…3人で舐め合つてました…。

「ドゥーチェ。ちよつとずるいです」

「チュツパツ！ さつきまでカルパッチョの番だつたら？ 次は私の

番だ！」

「姐さん…変われば、変わるもんつすね」

まあ…3人にそのまま、まとめてかけてしまった。  
なにを？ ナイシヨ。

そんな、色々と死にたくなる様な、賢者タイム中の思考でした。はい。

…やっぱり俺、今日死ぬと思うの。  
そしてその予想は的中する。



『なんだよおー！ アンツイオにそんな奴いたんだったら、昨日呼んでやりやよかったのに！』

優花里さんの潜入動画。

それを今、生徒会長室で皆と見ている。

初めは皆、それなりに喋りながら…談笑でもしながら見ていた。

…けど。

『昨日？ 呼ぶ？』

『おお！ こいつ昨日の放課後に学園艦にいたらしくてな、色々あったんだけど…まあいいや。簡単に言うたら私ん家で、飯作ってくれたんだよ』

『……』

『……あの、つかぬ事をお聞きしますが、えっと…ご自宅では、ご家族の方も一緒に居ました？』

『いねえよ？ 私、一人暮らしだし』

『……』

「」 …… 「」

『つまり、隆史殿は一人暮らしの女性宅へ、しかも放課後って事は夜で  
しょうか？ …そこにお邪魔したと？』

『そーだな』

カメラが、グルンと勢いよく回転し書記を捉える。

『……』

隆史君の顔色が悪い。

滝のような汗はなんだろう。

……。

『どうしました？』

優花里さんが、目の前の…コック帽を被った女性に声をかけてい  
る。

なにか具合が悪そう…というか、何かに困った表情をして呟いた。

『…ん、いや……まだ、なんか入ってるみたいで、変な感じがする』

『なにがです？』

『んんっ!? あっはっは！ 気にすんな！ こっちの事だから！』

『』

「」 …… 「」

笑ってごまかす表情が、若干の赤みをさしていた。

隆史君の顔の色が、七色に変化している。

さつきから一切無言だなあ…。

『タカシの形になっちまってるから、しばらく続くって……カルパッ  
チヨ言ってたなあ……ちよつと動き辛え』

「」 …… 「」

『…まあなんだ、アンチヨビ姐さん！ さつき言ってたウチの隊長な  
！ もう一人、カルパッチョって副隊長を飯食ってた！』

『…食事……ですか？』

『おお！ パスタ料理の新作作って食わせてもらったんだよ！ ……  
まあ、あたしらは、食われちまったけど…』

『ガタガタガタ』

『なんの事ですか?』

『いやいや! まあ気にすんなっ! こっちの事だから!』  
『はあ』

「」…「」

はい。

一旦ここで、画面が暗転、小休止となりました。

「…優花里さん」

「はい、なんですか?」

「隆史君は?」

「私と一緒に帰って来ましたら…大洗にいますか…西住殿  
!?!」

「…次見せてください」

「え…あ、はい。怖いです…今の映像で、どこか怒る所ありましたっけ  
?」

改めて再生された動画は、コロッセオの中でした。

本来の目的である、P40を撮した映像。

…もう、どうでもいいけどね。

『ドゥーチエ! ドゥーチエ! ドゥーチエ!』

『以上! 秋山 優花里がお送りしま…あれ?』

『おーい、千代美。楽しそうな所悪いけど、ちよつといいか?』

『ドゥーチエ! ドゥー…あっ!』

『隆史!?! ど…どうした!?!』

『いや、もう帰るから一応一言、声を掛けとこうと思ってな…声裏返っ  
てるぞ?』

画面からは、相変わらずザワめきが起きている。

そのギャラリーがとんでもない事を言った。

『ドゥーチエの男だ…』

『姐さんの男だ…』

『……』

無言。

ひたすらの無言。

優花里さんと華さん…それと河嶋先輩は、何が起こっているか分かっていないみたいだけど…。

それでも沙織さんと麻子さんは、気がついていている様だった。

だって、二人共顔が真っ赤になってるし。

会長と小山先輩は…真顔。

目に光が無い。

『……どちらかといえば、私が隆史の女という事なんだが……』

『千代美…凄い事眩くな…』

『……まあ、事実もう私…女だし…ってなにを言ってるんだ私は!!』

『……』

聞こえるように言うのは、眩きって言わない。

…ピシツつと、部屋の何処かで音がした。

「チョビィィ…」

「……西住殿」

「え!? あ、はい」

「続き、ご覧になりますか? かなり強烈ですけど…」

「はい見ます」

「…即答ですか…」

「見せてください」

問答の必要はありません。

次を再生してください。

映し出された映像…噴水の前。

金髪の女生徒と…隆史君。

……。

『あの……カルパッチョさん!』

『あまり、同じ事を言わせないでください。昨晚と同じく、ちやんと

「ひ・な」って呼んでくださいい』

』

「……」

『フフツ』

「」「!？」

彼女の目が、カメラをとらえていた。

…誰に言ったのだろう。

こちらを向いて一言…。

『…ザアンネン…デシタネエ?』

言った直後、テレビ画面が真っ黒になった。



◆ ルート正史 ◆ 真・男子会です！

「他の方とか…もう…どうでもいいですから!! そういうのは良いですから!! 母はああ!!」

「分かる!! 分かるよ!! 痛いほど分かる!! 優花里さん!!」

聞こえてくる、垂れ流しの無線が優花里さんを攻撃している。

…隆史君の好みが、これじゃ全然分らないよお…。

『さすがつすわ先輩。憧れないけど…』

『流石、光源氏の再来…』

『お前ら…人に聞いといて…』

そういえば、この「林田」君って呼ばれている人、ちよつと前に隆史君から聞いた事ある。

大洗学園が順調に勝ち進んでいく中、珍しくできた戦車道の男の子のファンだって。

…動機は不純だとも言ってたなあ…。

もう何となく分かっちゃったけど…うん。

オ ボ エ テ オ コ ウ

『しっかし…まあなんだ。見た事無いけど…なんでまた…』

『基本、綺麗な人だし……なんだろう…ちよつと疲れた感じが、非常にエロい』

『お前…同級生の母親に向かって…すげえな』

く

「もうタラシ殿は、家の敷地に入れません！ 永久出禁です!!」

「……優花里さん」

「西住殿の悲しみが、こんな事で分かりましたああ！」

「優花里さん!! 今度、お姉ちゃんに優花里さん紹介するよ！ 絶対仲良くなれるよ!!」

「…みぽりん。車内狭いんだから、二人して抱きしめ合わないでよ…」

「……」

「華？」

「…隆史さん。私の母親（元）には、そんな劣情を抱かないでもらいたいものです…」

「劣情って…」

∨

『んでだ。話変えて悪いが…、一番気になる事だけどさ』

『んあ？ 何よ』

『尾形、ぶっちゃけ西住さんとは、どこまでいったの？』

『……』

∨

「ふえ!？」

とんでもない事を、また話の議題に出された。

無線の先では、隆史君が絶句しているのか唸っているのか…しばらく無言が続いていた。

「……」

「なんで皆、すっごい真剣な目で無線機を睨みつけてるの!？」

「気になります!」「気になるな」「気になるよね!」「気にならない方が、無理ですよ?」

酷い…。

……

…まあ、あの夜の事はバレていないだろうし…特に…悲しいけど進展は無い…。

それにしても…皆、帰らないのかなあ…。

『何もないな』

『……』

『……なんで?』

『なんで…って…何言ってるの?』

『ぺっ! このへタレが』

『……』

『いや…普通に…忙しいし…二人きりでどっか行ったりとかも、まだしていないなあ…そういや…』

『…それは、西住さんが可哀想だろ…』

▽

「先輩ひどい」

「…隆史ちゃん」

気がついたら、IV号の周りに皆が集まっていた。

「どうしたんですか? 皆さん!？」

「西住ちゃん…もういいから、みんなで聞こうよ…というか…」

「皆さんとじゃないと…：胃と心臓が、持ちそうにないですねえ」

「罪悪感も酷いし…まあ、ほとんど盗聴みたいなモノだしな!」

…生徒会役員が揃って…。

赤信号、みんなで渡れば怖くないっ! みたいな心理だっって言ってるけど…。

「まあ、デート云々の話は、私達も悪いから、一概には言えないよね…

ゴメンネ?」

「あ、いえ…」

…まあそこは仕方がないよね。

試合が終わったら、ゆっくりね…。

『でもさ、それは理由にならんだろ。ぶっちゃけた話、お前が迫ったら一発だろ。なんだかんだ了承してくれそうだろ?』

『何がだよ…』

『あく…それは俺も思うわ。先にしちやっても、おかしくないな』

『なんの話だよ…まさかっ』

『ぶっちゃけ、もうヤっちゃった?』

『……お前ら』

〈

《 …… 》

「男子って、エッチな話とかするのは知ってるけど…」

「ここまで露骨に言うかね…」

「最低…」

……。

何も言えないよ!!

『…まだそういう関係じゃないな』

『やっぱ、ヘタレか』

『嬉しそうに言うな』

『でもさ、西住さんって結構エロいよな？ 尾形、よく耐えてるな…って思う。んな事だからEDに疑われるんだぞ？』

〈

「!？」

「…凄い事、言い出したけど…」

「みほさん、可愛らしいとは思いますが…エロいって…せくしーって事でしょう？…ちよつとイメージとは違いますよねえ？」

「五十鈴さん…結構、辛辣な事を言ってる気がするぞ…」

「西住殿は、エロくありません！」

エロいエロい、言わないでえ!!

『…お前ら…人の彼女に……』

『そうか？ アワアワして…まあ可愛いとは思うけど…そう言ったのは感じないなあ…』

『はっ。所詮は林田。素人がっ』

『…そうだな、まだ林田には早いか……』

『なんだよ！』

『いいか！ みほはな！』

『あ、また尾形に変なスイッチが入った』

『…あんな潜在能力を秘めたエロさ…。他校の生徒でも見たことが無い…』

『……』

『みほは、何にでもなれるし、どこにでも行ける!!』

『…具体的に』

∨

「隆史君！ 何言い出すの!?!」

「西住殿…これもう、聞こえてるの言ったほうが、いいんじゃない…」

「そうだねっ！ 止め…」

∨

『隙が非常に多い事も起因している…たまに誘ってるのか？ と思うくらいだ!』

『……』

『現在、中間だがな…あれはSにでもMにでも、どっちもいけそうだな!』

『…それは何となく分かる』

『…後、…ぶっちゃけた話、結構な無茶も聞いてくれそうだろう!』

『分かる！ それは、すっごい良く分かる!!』

『…具体的に』

『そうだなあ!!』

∨

はい、無線を切ろう。

「よし！ 一年帰れ!!」

《えー!!》

「これは聞いちゃいけない会話だ!! 踏み入ってはダメだ!!」  
流石に河嶋先輩にも分かったのだろう…。

えっちな話だ…18禁だ…しかも私の話!?

「先輩ずるーい!!」

「気にならない方が無理だよ!!」

「というか、河嶋先輩、顔真っ赤あ!」

「うるさい!!」

完全に隆史君も悪ノリし始めているし!

…あれ?

あれえ!!?!

「…無線が切れない……」

どこか…壊れちゃった!?

『正直、野外でもさせてくれそう!』

『…分かるっ!!』

『すっげえ、分かる!!』

《…………》  
えっと…意味がちよつと…

『少なくともフェラくらいなら、困りながらもしてくれそうだよな!』

『うんっ! 露骨に言うな! お前、後で殴る!』

『今更だろ…』

『学校でも、その気になったらしてくれそうだよな!?!』

『…そうだな! 男子学生の憧れ、学校のトイレとかか?』

『まあ…。エロ漫画とかによくあるけど…。まあ憧れるわな…』

『あ、壊れた尾形が帰ってきた。わーい』

『あく…。でもあれ、結構バレると面倒だから、やめとけよ?』

『『中村!』』

『…後、戦車の中とかも…。まあ、やめとけよ? 匂い籠って、すぐバレるから』

『『先輩!!』』

『やめろ! その目はやめろ!!』

◇

「……」

「あの…沙織さん」

「なななあに!? 華!」

「あの…みほさん、完全に固まっちゃってますけど…」

「…露骨すぎるしね」

「あと…」

「なに?」

「ふえらってなんですか?」

「!?!?」

「皆さん…理解しているみたいですが…」

「あ、私も分かりません! 武部殿、ご存知ですか?」

「…み…みぽりーん!! 助けてえ!!」

「」

◇

『フェラねえ…。西住さん、嫌がりそうな気もするけど』

『出した後の処理とかもなあ…。そこら辺はトイレとかだと楽だけだな』

『でも、西住さんなら飲んでくれそう』

『…あれって、嫌がる人は本当に嫌がるからなあ…』

『ああ、嫌がりそうだなよな!』

『…』

『尾形?』

『いや…』

『あ、すまん。流石に露骨すぎたな』

『…:…:…:ミホハ、アノヨウスジヤア…:タブン…:アレ、スキダナ…:…:』

◇

!!!???

「生々しいよ…」

「…なんででしょう? 最後、小さくて聞き取り辛かったですね」

「何だかんだ、皆さんもこういうったお話、好きなんでしょうか?」

「…誰も帰らないな。というか…全員、顔が赤い」

「もう変に慣れちゃいました…母に比べれば…何でも…:…ん?」

「ん? みぼりん?」

…:…:…:。

キコエタ。

…:血の気が引いた。

え…:…:うそ…:…:え!?! ええ!?!

◇

『…:尾形。お前、流石に童貞じゃねえだろ?』

『』

『…:林田…:…:お前…:…:露骨すぎるぞ』

『転校前とかからして、あんだだけ他校の生徒に迫らてるんだろ?』



『まあそうだな、その質問の意図は理解すが…ぶっちゃけすぎだろ』  
『…流石に、西住さんの話に罪悪感が芽生えた…話題変えよう…』  
『まあな。で？ どうだ？ 尾形』  
』』

∨

ガタンツと戦車が揺れた…。  
皆、前のめりになりすぎ…。  
私も気になるけど、さっきの言葉あ！

『ねえな、はい、チエリーデス』  
『…嘘だろ？ おっぱい星人のお前が!?!』  
『なんでだよ!!』  
『ノンナ選手』  
『ぐっ!!』  
『ダーズリン選手』  
『…ぐぐっ!』  
『あ…でも、オレンジペコ選手とか…』  
『…』  
『カチューシャ選手もか』  
『なに？ 尾形お前、ロリペド野郎?』  
『ブツ殺すぞ?』  
『ああでも、あれか。西住まほ選手…あの人すごいよな』  
『…』  
『お前、よく我慢できるな』  
『やっぱホモなんじゃね?』  
『よし、ちよつと待ってる。今、ベコの着ぐるみ着てくるから』  
『変身して来るみたいになうなよ』

∨

「……」

「改めて聞くと……隆史ちゃんって……すごいよね……」

「安心する反面、非常に不安になりますね」

「たまに、柚子ちゃんの胸を凝視するしな」

「水着の時とかね!!」

「そうなの!? ……そっか」

「柚子ちゃん!」

◇

『ノンナ選手とか…普通にすごいよな。素直にすごいよ…って思える』

『すごいよなあ…冗談抜きで、一度驚掴みしてみたい。はい、中村』

『騎乗位とかで、下から眺めてたい。はい、尾形』

『……』

『ああ…少なくとも、隆史にとつてはあれか…露骨すぎるな』

『いや…まあ思う所が無い訳じゃないが…まあしょうがないだろ。男

の会話じゃ…まあ無粋だよな…』

『おお！ 話がわかるな！ …でも本人に知られたら…』

『死ぬな』

『間違いなくな』

『……』

『……』

◇

「……騎乗位ってなんですか？」

「ゆかりん！ 知らなくていい!!」

「私も知りません」

「あーっ！ もう！ 後で!! 後でまとめて教えてあげるから!! 今

言わないでええ!!」

「沙織さん、顔真っ赤ですねえ…」

「西住殿は先程から、遠くを見つめていますねえ…」  
バレた？ え？ バレた？

∨

『で？…尾形は？』

『……』

『…でかい図体で、モジモジするな気持ち悪い』

『……引かない？』

『男同士でそりや無いだろ。…余程の事じゃない限り』

『……』

『で？』

『……力』

『力？』

『カチューシャに電話してる時とか、攻めながら邪魔したい』

『……』

『引くなよ!!』

『いやあ…さすがつす、先輩』

『んじや、ダーズリン選手は？』

『…あの人、高貴な感じがすごすぎて…何もできなさそう…というか、

攻められたい。はい、中村』

『うむ。気持ちは分かる。…あの人は、攻めるより攻められたいな！

そのくらい？ はい、尾形』

『お茶飲んでる時、バックから無理やり攻めて邪魔したい』

『アンチヨビ選手』

『…正直、童貞の俺にはきつくなってきた…パス。はい、中村』

『……あの子、普通に初心っぽいからなあ…普通？ はい、尾形』

『よくあいつ演説とかするから、隠れながら攻めて邪魔したい』

『西住まほ選手は？』

『…あの胸は、魅力だけど…無理。怖くて何も想像できない…。はい、

中村』

『……俺も無理。想像すら無理。つか怖い。はい、尾形』

『無線飛ばしてる時とか、声出せない状況で、おもいつきり攻めたい』

『……』

『……』

『…ごめん、自分でもどうかしてるとしか思えない…』

『しつかし…随分とまあ…リズムカルに言ったな…。お前って基本、

ドSだよな…』

『自覚はしてる…』

『尾形の変なスイッチ壊れたか?』

『……』

『あ、ケイ選手は?』

『……』

『……』

『どうした? 二人共』

『『ノーコメント』』

『は? なんだ? 二人して。あの人ってすごいフランクだろ? 想像難しいか?』

『…これだから、童貞は』

『中村!?!』

『…あの人って、いい意味でも悪い意味でも、結構な常識人だから…調子乗って迫って、最終的にマジギレされそうで怖い』

『怖い』

『…なぜ中村まで』

◇

「よし! 一年! 本当に帰れっ!!」

「河嶋先輩!」

「なんだ!?!」

「嫌です!!」

「決意したような目で言うな!!」

「でもお…ここまで、露骨に性的な話するタラシ先輩って、初めてですよねえ？」

「……」

「…書記も所詮、男だという事だな…」

「……」

ダメだ…なんか段々とマヒして来ちゃった…。

正直、ここまで本音の隆史君はこの先…見れないだろうなあ…。

今更、引けないと河嶋先輩に皆揃って抗議している…。

それはそれとして…。

…起きてたのかな？

………起きていたのかなあ!?

∨

『尾形の性癖がおかしいのはわかったけど、…逆にもつと聴きたくなかった』

『なんだよ、林田』

『大洗の選手達だと、どうなの?』

『……』

∨

《!!!??》

「ちよ…ちよつと待って、これって本当に聞いちゃ、まずいやつじやないのお!?!」

「…でもさ」

「なんですか、会長!?!」

「私達って…隆史ちゃんに「女」として見られてるのかな…」

《……》

「露骨に恥ずかしがるってのは、何度か見たけどさあ…性的に見られ

る対象なのかなあ…」

《…》

「西住ちゃんは、さつきからフリーズしちゃってるけど…まあ他の子ってどうなんだろう？」

「か…会長…」

いつ!? いつから!?

…あ…でも、目覚まし時計が鳴った時…とか…隆史君、どこにいた!?

「…みほさんが、本格的にオロオロし始めましたけど…」

「…これ多分、無線聞いてないね? どうしたんだろ…まあ、理由は隆史君だけ…」

◇

『…正直、みんなの事は、性的に意識しないようにしてる』

『まあ…距離も近いしな』

『だけど、たまに無理』

『『だよな!!』』

『というか、結構赤裸々に語るな、尾形』

『…男と話すのが、こんなに心休まるとは思わなかったんだ…ホモじゃなくて』

『…まあ女の子と話す時って、結構気を使うからな……話題の内容然り』

『だからまあ…久しぶり過ぎて、結構暴走し始めていた自分がいた…ホモじゃないよ?』

『ああ! そうだな! そのまま突き進め!』

『林田…』

『で!』

『そうだなあ…』

『結局話すのかよ…』

『じゃあ、生徒会…かめさんチームだっけ？ あの先輩達から』

◇

「!?!」

はっ！ 意識が飛んでた…。

あの夜の事は、後で聞いてみ…聞けないよお!!

あ…あれ？

どうしたんだろ…みんな無線機を睨んでる…。

「結局、喋るのか…」

「……」

なんで、会長達3人、正座して無線機の前に座ってるんだろ…。

「…みぽりん。これ以上…聞かないほうがいいんじや…」

「え!! え!!」

◇

『まず会長』

『いきなりかよ…なんかSっぽいよな。んじや林田』

『無理デス。パスです。はい、中村』

『…お前…自分から振っておいて』

『…だって、犯罪臭がするんだ。オレンジペコさんとか、カチュー

シャさんとかと一緒にで』

『…気持ちは分かる。が、あの人ある意味、そろそろ合法ロリになるぞ

?』

『言い方…』

『まあ。俺もちよつと想像つかないなあ…普通かなあ…。はい、尾形』

『泣いて、許しを請うまで攻めたい』

『…即答したな』

『基本的に飄々として、何気に感情的にならない人だからかな…』

『そうなのか?』

『そこも結構、可愛い人だとは思うけど、だからだろうか？……………トコトン攻めてみたい』

『攻めるのが、お前のデエフォルトだな…』

『河嶋先輩は？ 尾形』

『…………あの人はなあ…………なんか…………攻めるのが可哀想になりそうだからなあ…』

『え〜尾形のSっ気を刺激しそうな性格じゃね？ 胸も』

『…あの人結構…というか、普段強がってるからな。逆に人に甘えるくらいの方が、丁度いいのに…とは思う』

『…………でも結局？』

『甘えて来た所を泣かせるまで攻めたい』

『……なんか分かる』』

『だろ!？』

『んじゃ、尾形的ランキングの1位！ 小山先輩は？』

『…』

『どうした？』

『なんだろうか？ 逆にあの人には、なんかトコトン…甘えてみたい。

あの人の包容力は異常だ』

『なっ!？』

『…お前なら、壊れるまで攻めてみたいとか言いそうなのに…』

『その気持ちは無い事は無い!!…だけどな』

『なんだよ』

『あの人は…本気で怒らせちゃダメな人だ』

『優しそうな人しか見えないけど…』

『…………調子乗っていると、いつのまにか真顔で追い詰められそうな気がする』

『…………』

『というか、いつの間にか、なんで俺だけ言ってんだよ。』

『お前の話、聞いてるだけの方が面白い』

『そうだな』

『…………』



∨

「……」

「会長」

「何…小山」

「おもいつきり、意識してもらってましたね…」

「……」

「桃ちゃん、完全に意識停止しちゃってますけど…」

「…可愛い人って言われちゃった」

「そこですか!？」

な…何が起こっているんだろ…。

攻めるって…え？

∨

『かばさんチームは?』

『無理』

『は?』

『正直接点が、あまりないからな』

『期待を裏切りやがって…』

『同じ理由で、レオポンさんとアライクイさんチームも。　　ぴよたんさ

んは、見た目がモロ好みだけどな!』

『あれは?　うさぎさんチーム』

『ああ…一年チームも無理だなあ』

『なんで?』

『…どうにも、父親目線…というか、保護者感覚で見ってしまう…。失礼な話だけどなあ』

『ああ…』

『丸山さんとか、休憩中とか気が付くと俺の横に座っていたりしてな…一緒にお茶飲んだりしてるんだけど…無理だろ?　娘にしか見えねえよ』

『…お前…その年で…』

『でもお前、眼鏡っ娘好きだろ?』

『好きだな!!』

『そこは元気いいな…』

『ああいたな、そういえば。かばさんチームにも、うさぎさんチームにも。後は、アクリイさんチームにもいたな。あれはいいの?』

『……』

『……』

『…どうした?』

『…難しい……』

『マジで悩みだすな…』

◇

「紗希っ!」

「いない!?!」

「逃げたあああ!」

「……複雑ぜよ」

「そういえば、尾形書記とあまり長時間話した事ないな」

「一度家には来たが、結局…ホラーな展開になってしまったしな…」

…話の流れが分からなくなってる。

「………」

アクリイさんチームが無言で固まっているし…どうしたんだろ…。

◇

『…アヒルさんチーム』

『……』

『……』

『正直に言っていいか?』

『おうっ! 言え言え!』

『わからん』

『』……『』

『……』

『…唯一まともに話せるの、近藤さんだけだし……』

『…キャプテンの子って2年だろ?』

『んく正直、熱血しすぎていて…応援したくなるから、異性として見れない』

『あの…ハチマキしてる一年の…近藤さんだっけ?』

『…結局、あの子も一年だし…保護者目線で見ちやうしなあ…』

『でも立派だよな?』

『立派だな!!』

『そこは即答か…』

『河西さんには、相変わらずナンパ野郎って蔑まされるし…』

『……』

『…あの金髪の…胸エグイ子は?』

『…保護者目線だなあ』

◇

『……』

『異性として見られてない…』

『キャプテンって、あんまり尾形先輩とお話とかしませんよね? それでなんじゃあ……妙子ちゃん!』

『妙子!』

『』

『…目が死んでる……』

◇

『でもさあ…近藤さんは嘘だろ』

『っ!?!』

『だってお前、初めて大洗に来た時、罰ゲームとはいえ近藤さんナンパしたんだろ?』

『……あ。くそ……お前には、言っただけであつたな』

『…なにしてんだ、尾形』

『……』

『……』

◇

『……』

「あ……妙子ちゃんが復活した」

「なんで正座して、無線の前にいるの? この子」

◇

『…ちよつと前に、変な男連中にあの子ナンパされててな』

『ふむ?』

『まあそんな時に、助けてやれたんだけどさあ……なんかそれが気になつちやつて』

『ああ……なるほど。それは気を使うな』

『まあなんだ。ワンボックスで拉致ろうとしていた奴らだったからさ、ナンパというより明らかにアレ目的だから余計にな』

『…そんなのいたのか?』

『そいつらどうなったの? 捕まった?』

『……』

『…空のお星様になつてると思います』

『なぜ敬語……』

『つてことはさ。結局、近藤さんに気をつかうって事はよ、おもいつきり保護者目線じゃ、ねえじゃなねえか』

『……』

∨

「…妙子の目が…キラキラしてる…」

「……」

「キャプテン？」

「…え？ なに？ この子、茨の道を進んでるの？」

「…今更ですか？」

「キャプテン以外気がついてましたよ？」

「ええ!？」

なんの事だろ…。

∨

『まあいいや！ 最後に輝くのが、あんこうチーム!』

『……』

『……』

『…どうしたよ』

『話の流れ、ある意味ガン無視だな』

『本来の流れじゃないの!?!』

『…』

『なんかなあ…改めて意識すると…これからやり』はい！ まずは武器部さんー!』

『聞けよ！ 事情を察しろよ!!』

『2位に選んでいる時点で、逃げ場は無いだろ』

『……』

『…ポテンシャルかなり高いのになあ…なんであそこまでガッツいて  
いるんだろ』

『黙っていれば可愛いのに…っていうのとは、ちよつと違うなあ』

『…ん、悪いが沙織さんの事で、そういう話題は、ちよつとノーコメントで』

『……あつ！ あー…そうだな。悪い』

『ん？ 中村？ またちよつとシリアス？ んじゃパスでもいいけど…』

『でも武部さんって、女子力とか、よく言ってるんだろ？ でもあの子、女子力、嫁力とか郡を抜いているよな？』

『そうだな、ありや結婚とかしたら、いい嫁さんになると思うな。それにあの子、最近モテたいモテたい言わなくなったしな』

『あく…そういえば』

『好きな男でもできたんじゃない？』

『そうなのか!?!』

『…』

『なんだよ、中村。真顔で見るな』

『…尾形』

『だからなんだよ』

『死ね』

『!?!』

∨

『…』

『…沙織が……他界した……』

『生きてるよ!!』

『えく…だって目が発光してたぞ』

『…』

『沙織?』

『いいお嫁さんいいお嫁さんいいお嫁さんいいお嫁さん…』 キャー!

『…』

『気を使ったのは分かるんですけど…タラシ殿、一々言ってはダメな一言を言いますね』

『…書記イイ』

『これはしばらく、続きそうですね』

『…』

「西住殿？」

「あの：優花里さん。ひよつとしてまだ、えつちな会話続いてるの？」

「やはり聞いていませんでしたかあ…」

「今、あんこうチームの話ですよ？」

「ええ!？」

◇

『んじや次、秋山さん』

『：俺らにとつてもクラスメートだからなあ』

『優花里？』

『……』

『……』

『：なんか』

『なんだよ』

『：正直、何も思いつかない…女性としては見れるんだけど…』

『：お前…そのお母さんは、エロいって言うていたのに…』

『なんか、一生懸命してくれそうで…なんか悪いかなあって…。良い子だし、ちゃんとしてやりたくなるな』

『すげえな、秋山さん。尾形の良心を損なわせない。…してくれそうって言うてる時点でどうかとは思うが』

『：でも結局、行為に慣れてきた辺りで、俺が暴走しそうな気もするが………外……か?』

『』

◇

「：ゆかりん？」

「ひゃい!?!?」

「：一々、隆史さんは、タラシさんになりますね」

「最後は、どうかと思うが」

「…」

「そもそも、彼女いる男の会話じゃないよな」

「ま…麻子？」

「まあまあ…結局、皆さんお年頃ですし。興味が無い方がおかしい…という話でしょうか？ 他のチームの皆さんも…結局、聞き入ってま  
すしね」

「私はドン引きしてるけどな」

「男の子同士の遠慮の無い話って…貴重っていえば、貴重だよな？」

「麻子も結局、聞いているじゃない」

「西住さんが可哀想だろ」

「…わ、私は別に…（途中聞いてなかったから何とも言えないなあ）」

「そもそも…『次は冷泉さんだな』」

「」

「…なに意外な顔してるのよ。あんこうチームって言ったんだから、  
麻子だつて入ってるでしょ」

「わ…私は」

◇

『次は冷泉さんだな』

『…麻子かあ』

『……』

『中村？』

『いやお前、冷泉さんの事、結構な呼び方してなかったっけ？』

『ああ、マコニヤンか？』

『そうそう！ それ!!』

『あれ、基本的に本人にしか言わない様にしてるんだよ』

『やめた場合は、名前呼び捨てか？』

『ん？ 本人から許可はもらってるよ？』

『……』

『んだよ』



『…お前が、タラシ殿やらタラシ先輩やら言われているのが段々分かってきた…』

『……』

∨

「やめろよ！ 普段からやめろよ!!」

「もおー、本当は興味あるんでしょ？ なんで強がるの!?!」

「強がってない!!」

「…んじゃあ麻子。隆史君が麻子の事、そういった対象で見れるって言われたらどうするの?」

「んなあ!?!」

「今、それを皆が、興味持って聴いてるんじゃない。…具体的にえっち過ぎて引いてるけど!!」

「」

「…沙織さん、しっかり把握していたんですねえ…」

「私、もう引くに引けなくなつて聞いてましてあ…」

私はあの夜の事が気になって、ほとんど聞いてなかった…。

∨

『冷泉さんってあの、基本寝てる子だろ?』

『そうだな。尾形のお気に入り』

『そうだな!!』

『……付き合ってる女がいる男の返事じゃねえ』

『でも、あの子胸無いだろ』

『無いな！ 絶壁だな！ 72だな!!』

『…でもお気に入りなんだろ?』

『そうだな!!』

『お前が胸張つて言うなよ…』

『あの性格じゃあ、めんどくさがつて何もしてくれそうにないよな』

『麻子の場合、「眠いから嫌だ」とか、淡々とこちらを見もしないで言いそうだよなあ』

『あの子も保護者目線か？ 尾形にとって、マスコットみたいな感じの子かねえ』

∨

「はっ。それみろ…何がマスコットだ…」

「ま…麻子？」

「……」

∨

『違うなあ。マスコットって、そりゃ酷いだろ』

『…んじや、なんかあんのかよ』

『寝てる最中。いいか？ 普段じゃない。寝ている最中に、起きるまでガンガン攻めて睡眠の邪魔したい』

『……』

『んで、起きたら起きたで、気絶するまで攻めて、また寝かしたい』

『……お前、すげえわ』

『わーい、壊れた尾形が帰ってきたあ！』

∨

「……」

「麻子…すんごく異性として見られてる…ね」

「んにゃ!？」

「顔真っ赤だけど…」

「……」

「…結局、最後まで聞いているじゃない」

「ね…」

「ね？」

「寝ない!! 書記の前じゃ、絶対に起きてる!!」

「…」

「…最後…私ですか」

「西住殿、最初に終わりましたしね」

「隆史さんの意見、ちよつと楽しみにしてました!」

…なんか、怒る気力が無くなっちゃったよ。

まあ浮気している訳じゃ無い…けど。

これしてないだけって話な様な…。

〈

『はい!! 最後、尾形的ランキング3位の五十鈴さん!』

『……』

『……』

『…正直に言っつていい?』

『どうぞ!!』

『華さんと、そういう関係になつたとしたら…』

『なつたとしたら?』

『枯れるまで搾り取られそう…』

『『分かる!! すっげえ分かる!!』』

〈

「……………」

「は…華さんが、見たことない顔色してる…」

「五十鈴殿!」

「華、今の意味は、分かつたんだ…」

〈

『彼女、食欲すつごいな』  
『食堂で見かけた時、すげえ量の学食食ってたな』  
『食欲は性欲に比例するか…』  
『でも、彼女凄いな！ あんだけ食って、あの細さ!!』  
『栄養が全部、胸に行ってんじやね?』  
『ありがたいな!!』  
『ありがたいな!!』

◇

「……………」  
「あの…華さ…「みぽりん!」」  
「は、はい!」  
「その事には、触れないで上げて！ そっとして置いて上げて!」  
「…はい」  
「五十鈴殿が…オーラを纏っているかの様であります…」

◇

『でもよ、あの人すつげえSっぽいよな?』  
『んあ? 違うよ?』  
『…素で、否定しやがった』  
『華さんは、Sの皮を被ったDMだろ。あんなに縄が似合いそうな人…見た事がないっ!!』  
『…………』  
『…俺が、みほに怒られている時とか…すつごい黒い笑顔で見つめてくるけど…アレ絶対、立場を自分と入れ替えて見てる…って思う』

◇

「!?」

「…華の肩が一瞬跳ね上がった…」

「……」

∨

『なにをしても喜んで、最終的には全てを持っていく…そんな感じが華さんからする…』

『……』

『一言で言うと、エロイヨナ』

『身も蓋も無いが、そうだな!!』

∨

「エロく無いです!! 私エロく無いです!!」

「……」

「みほさんの先程の気持ち、分かりました!!」

「華さん!!」

「…書記のせいで、あんこうチームの結束が強まっていく……」  
「……こんな強まり方、嫌だなあ…」

∨

『では尾形。最後にいいか?』

『なんだ中村! 変なテンションで何でも答えられそうだ!!』

『…お前のランキングの人だけどき』

『ん? 誰だ?』

『西住流家元…えっと「西住しほ」さんだっけ?』

『おお!』

『お前あの人の事、好きだよな?』

『好きだな!!』

∨

「西住殿!! 戦車、蹴っちゃダメですって!! 気持ちには分かりますけど!!」

「またお母さんまたお母さんまたお母さんまたお母さんまたお母さんまたお母さん」

「つま先で先程から、ガンガン蹴ってますね…痛く無いのでしょうか？」

「もはや、何も語るまい」

「沙織、何を言っているんだ？」

∨

『…今回の話の流れ的に…想像できるか?』

『……』

『……』

『流石に、それは色々とまずいと思う…』

『そうだよなあ…いくら何でも、彼女の母親だもんなあ』

『で、だ』

『おお?』

『色々話してきたけどさ。お前、すっげえ浮気しそうなんだけど…』

『しねえよ!』

『説得力が無い』

『』

∨

「無いね」

「皆無です」

「書記、死ね」

「…私は、多分大丈夫だと思っただけ…」

「私も多分、大丈夫だと思いますが…」

「西住さんと秋山さんは甘い」

「男が狼なのが、例外無く証明されたようなモノ…でしようか？」

「……………マア…ソノバアイ、ワタシモ…ウゴキマスガ」

「まるで、タラシ殿が浮気したかの様におっしやいますね…」

◇

『泥酔状態の時のお前が、ケイさんと浮気一歩手前までいったのは知っている、というか見てた』

『……………プラウダの時のか…』

『まさか、女をシャワールームへ連れ込むとは思わなかったな』

『連れ込んでねえよ!!』

『…そうだったな。西住さんの名前で、踏みとどまっていたな』

『……………実際にしたら、浮気みたいなものだしな。いや、浮気だな』

『泥酔状態のお前を踏み止ませたと、西住まほ選手が驚愕していたのを覚えている』

『……………』

◇

「え!? それ、私知らない!! お姉ちゃん、何も言っただけだ!!」

「…あの状態のタラシ殿を…」

「隆史君!!」

「…随分と、キラキラした笑顔ですが…その状態になるのが、すでに異常なんですけど…」

「まあ、酔った隆史君…酷かったからなあ……………マタ、アレヤツテクレナイカナア」

「…沙織」

∨

『で…その前フリで、一体何が言いたい…』

『なあ尾形。正直俺は、お前が童貞だというのを信じていない』

『嘘つく意味ねえだろ…普通、逆じゃ無いのか？』

『…ここで、西住流家元だ』

『は？』

『普通、彼女のお母さんを名前で呼んだりしない』

『いや、それは…』

『いい大人が…あのお前に対しての入れ込み具合…』

『な…何が言いたい…まさか!？』

『お前、人妻と不倫とかしてないよな？』

』

∨

「あ、みほさんのキラキラが止まりました」

「…しかし、凄い事言う友達だよね…」

「高校生の会話じゃなくなってるな…」

「今迄のも疑わしいですが…」

「あ、西住さんが真顔になった」

∨

『する訳、無いだろうが!!』

『…』

『諭す様な顔をするな!!』

『尾形…』

『…なんだよ』

『百歩譲って、していないと仮定しよう』

『してねえって言ってるだろうが。本気で怒るぞ』



『…で?』

『んだよ?』

『もし、その「西住 しば」さんから迫られたら…お前、我慢できる自信あるか?』

『』

『…デキマスヨ?』

『本当に?』

『あのな…いくら何でも…みほの母親だぞ? 流石に…』

『まあ…そうだよな。聞いていた途中で馬鹿らしくなった』

『どうした、中村。いきなりなんなんだ。聞いてきた割に随分とあっさり…』

『……準決勝のテント前で……西住……まほ選手に頼まれた…』

『なにしてんの、まほちゃん!!』

『違うな……ハハ……あれは脅迫だ……』

『……』

『いやあ……流石に聴取とつてくれつて言われた時は、啞然としたけどさあ……』

『……』

『……少し、西住さん達の事考えて、家元さんとの距離を考えてやってくれ……俺に火の粉が飛んでくる……』

『ハイ』

∨

『……』

『みほさん!?!』

『西住殿!?!』

……。

お姉ちゃんの気持ちも分かる。  
分かる。



『…もういいか？ そろそろ帰りたいたいんだけど』

『なんか尾形。今回の話って、バレたら死ぬよな』

『何言ってるんだお前。死ぬだけで済むか…済むわけがねえ…』

『まあ女子つてのも、エロい話好きだから良くするらしんだけどさ』

『……』

『…もつとエグいんだってよ』

『……』

『それはそれで、興味あるな！』

『…林田。幻滅するだけだから、やめておけ』

『お前この後、どうすんの？ 戦車倉庫行くのか？』

『いや…ちよつと、母さんに拉致されてくる』

『は？』

『…家庭の事情』

『ふくん。また他県いくのか？』

『明日の朝になりそうだけどな。まあ行くなあ…そのまま決勝戦会場』

へ直行』

『…林田は決勝見に来るのか？』

『いかないなあ…ちよつと用事あるし』

『…まっ、いいけど』

…。

そこまで言っつて、無線が切れた。

多分、無線の電源を落としたのだろう。

「…沙織さん。ちよつと…」

「な、なに!？」

返答の時。

一瞬、間があつた。

その後の敬語の返事。

「はい、では皆さん、今回の件は…隆史君には黙っていきましょう」

あれ？ 何故だろう。

皆の顔が少し青いなあ。

先程の無線会話暴露会…の。ちよつと緩んだ雰囲気もうない。

みんなが私を注目している。

「華さん」

「はい!？」

「ごめんなさい、ちよつと…今日は、沙織さんの家に泊まってくれます？ 話は通してありますから」

「え…あ、はい。ご迷惑おかけしてます…」

なんだろう。

ちよつと空気が変。

「あの…西住ちゃん」

「なんです？ 会長」

「お…怒ってる？」

「え？ 私がですか？」

怒ってる？ そう見えるのかな？

それでかな？ みんなの心配そうに見てくれるの。

ん。皆には申し訳ない。だからちゃんと言っておこう。

「はい、怒ってますよ。」

「」

うん！ ちよつと怒りで、思考がおかしい。

ひつさしぶりだなあ…このカンカク。

皆がザワザワしている中、携帯を取り出した。  
誰にかけるのか皆が分かったのだろうか？  
まあ分かるよね！

「……チツ」

電話に出ない。

メールにしとこう！

帰りたいつて言っていたから、すぐにアパートに帰ってくるだろうしネー！

「…西住ちゃんが舌打ち…」

「では、皆さん。今日の事は忘れて……もうカエリマシヨウ？」

《 《 はい!! 》 》

なんだろう……急いで、走るように皆が一斉に帰宅準備が始まった。

「あの……みぼりん」

「なんですか？ 沙織さん」

「……本当に怒ってる？ 隆史君に」

「男の子同士のお話だもん！ 盗み聞きしちやった私達も悪し……怒ってないよっ」

「そ……そうだよねっ」

「うん！ その事に関しては！」

「……え」

「久しぶりなんだア……中学生の時以来かなあ……ここまで本気で怒ったの♪」

「」

「返事にね？ 間があつたの♪」

「……え」

「優花里さんなら、分かってくれると思うのっ♪」

「……間って……あっ!!」

「やっぱり分かってくれたね！ うんっ……ちよつと今晚、聞きたい

事できちやった……だから今日はゴメンネ？ 華さん

「いえっ！ 大丈夫です!!」

……うん。メールに返事がない。

うんっ……早く帰ろう。

「西住さんの…マジギレ……」

「…これが西住流……」

※ルート壊※第45話く来客万来です！く 前編

「…んっ」

カーテンの隙間から見える外見て、結構な時間が経っていたと実感した。

外はもう暗い。真っ暗になってる。

「ふぁ…。寝ちやつてたんだ」

朝、隆史君と華さんを送り出した後、決勝戦に向けての作戦を考えていた。

昨夜…全裸の隆史君に抱きつかれ、そのまま一夜を明かしてしまった。

…寝れるわけがないよ。

変な時間に寝てしまうとダメだと思い、無理して起きていたのがまじかった。

気がついたら、こんな時間。

…お腹すいた。

時間を確認しようと、目覚まし時計を見ようとテーブルの上に視線を移す。

同じくそのテーブルの上に置かれた、携帯電話のランプが光っている。

なんだろう。

隆史君かな？

ついでにと折りたたみの携帯を開くと…やっぱり隆史君だった。  
―が。

着信数が尋常じゃない。

未着信…38件

なにかあったのだろうか？

こんなに連続してかけてくる様な事、一度も無かった。

少し悪い予感がして、急いで折り返し電話をする為に携帯を操作する。

携帯から、電子音が繰り返し聴こえてきた。

…でないなあ。

……。

……………。

『みほか!?』

あ。やつとでた。

その電話を通して聞こえてきた、彼の声。

……なんか、すっごく焦って聞こえた。

「ごめんね? 寝ちやっけたみたい…」

まだ少し、寝ぼけているような声が出る。

『悪いが今すぐ、俺の部屋に来てくれ!』

確信した。

焦っている。

ここまで取り乱しているなんて…本当になにかあったのかな?

華さんの事だろうか?

「隆史君? ちよつと落ち着いて…何かあったの?」

『何かあったっていう……か……』

どうしたんだろ。

今度は絶句した様な声。

『つて!! 華さん!?! 何やってるんですか!?!』

あれ? 華さんがいるの?

電話口の私ではなく、おそらく同室にいる華さんに向かって叫んでいた。

「隆史君? 華さんがいるの?」

『…戻っ! いや、取り敢えず!!』

私の声が聞こえていないみたい。

顔から携帯を離れたのだろう。

雑音が聞ここ…

『バスタオル一枚で、出てこないでください!!』

「……」

ガサガサ…

『いいから!! 着替え!? 俺のTシャツかYシャツでも、後で持つて行きますから!!』

「……」ガチャツ!

『やめっ!! 近寄らないで下さい!! …あ、違っ、そういった意味では無くですネっ!? 嫌いじゃないですから!!』

「……」パタン…カチャ

『ほらっ!! そんな格好で歩き回らないで!! 落ちる!! タオル落ちちやいますからっ!!』

「……」トントントントン

『ああもう!! その格好で、しやがまないで下さいよ!!!』

「……」トントントントン

『…ウア……でか……じゃない!! 今、みほに……』

「……」

『たっ! 谷間っ!! だから、ダメですって!!!』

「……」

ピンツツツ……ポーン

『ほらっ!! みほ来ましたからっ!! 来てくれましたからっ!! 取り敢えず脱衣所戻って下さい!!!』

「……」

コンツ…ガチャ!

ガチャガチャガチャガチャガチャ!!

『あっ!! 通話…待て!! 待つてくれ!! 今開けるから!!』

ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ!

ピンポーン

ピンポーン

ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ!

ピンポーン

ピンポーン



ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガ  
チャ!

「怖いよ!!!」

「……」

……やつと開けた。



「……と、いう訳で……華さんの家出が、本日確定しました」

「……」

はい。

僕の彼女様に、一連の流れを説明しておきます。

華さんの実家での出来事。

まあ……大分大まかに説明したのだけど……言えねえよ……妊娠させ  
たって勘違いされたなんて!!

はい、睨まないで下さい。

はい、帰ってきてハイライトさん。

「……で? ……なんで華さんが、隆史君の家のお風呂に入ろうとしてるの  
?」

「……」

はい。

説明を追加させてもらいます。

散々みほに電話をして、事情を説明。

みほの部屋に今夜だけでも、泊めてもらおう! ……と、画策したので  
すが……家主様が電話に出て頂けないので……ですね?

他のあんこうチームの面々にも電話をしたのですが、出ていただけ  
ないので……仕方が無いので、家に泊めるしか無くなったと……。

ええ? ……俺? ……俺ですか? ……勿論、外の車で寝ようかと……あ、はい。

浮気じゃないです。浮気では無いですよ!?

「そんな訳で、後は風呂入って寝かしつけるだけ……だったんですけど……ちよつと問題ができません……」

その問題を言っているのだろうか……というか、言わないと……。

「……」

「……」

「……ふくん」

足が痺れてきた……。

玄関入つてすぐの、脱衣所の扉の前で正座をさせられています。

はい。彼女様は、立って俺を見下ろしています。

目だけ。

……む……無言が痛い……。

「ちよつといいですかあ?」

「うわあ!!」

「ひゃあ!!」

スパーンと、スライド式のドアを勢い良く開け、華さんが脱衣所から声をかけてきた。

びっくりした!! びっくりしたあ!! 無言が続いていただけあつて……つて。

「なんでまだ、バスタオルだけなんですか!!」

「え? いえ、流石に裸はあ……」

「じゃなくて!!」

「あら、みほさんこんばんわあ………ツク!」

「で、隆史さあん。この服……ちよつと大きくてえ……」

「……寝巻きの代わりになりますから!! バスタオルから手を離さないで!!」

急いで渡した、俺の制服用のYシャツ。

俺の体のサイズからして、完全に体は隠れるだろうと、渡しておいた。

最近、新品購入しておいて良かった!!

「そうですかあ…ご迷惑をおかけしてますう…」  
顔が赤く、頭を小さく揺らしている。

「いえ！ いいですから!! 早く戻って!!」

「でえ…みほさんも、お風呂ですかあ?」

「会話してください!!」

「隆史君!!」

「はい!」

今度はみぼりん!

掴みかかる勢いで、顔を突き出し俺を睨んでいる。

なにこの板挟み!!

「これ!! 華さんお酒臭い! 酔ってるよね?! お酒飲ませたの!?

どういうつもりなの!!」

「……」

帰宅後。

即、これから…というか、今夜をどう乗り切るかを相談した。

頑なに自室に戻る気は無いようで、俺に迷惑をかけるくらいなら…  
…ってマジで野宿でもするような気迫だった。

こんな夜に、女の子を外にほっぽり出すわけにもいかず…取り敢えず  
部屋に泊めさせる事にした。

散々渋ったが、俺が車の中で寝る事が条件とした。

家主を追い出して、自分だけ…と。

いや…もう、そんな事を言ってる場合じゃないんですけどね?

みほに連絡をしようかと携帯に電話をかけたまま続いていた。

連絡さえ取れば、みほの家に移動してもらおうつもりだった。

―が。結局、連絡がまったく取れないでいた為に…あきらめた。

…んで。まあ…こんな長い一日だったし…女の子だし…風呂く  
らい入りたいと思いましてね?

取り敢えず、風呂場の掃除をしようとしたんですよ。

「……その。」

「華さん、適当に冷蔵庫から飲み物でも出して下さい」

「え……あの……流石に人様の家の、冷蔵庫を開けるなんて……」

「あー大丈夫です。セルフサービスみたいで申し訳ないですが」

「といった感じで、完全に中村達が来た時の様にしてしまっていますね……」

「そこで、手前に入れてあった……その。」

「赤ワインを、ジュースか何かと勘違いして……飲んでしまわれまして……」

「そもそも、なんで赤ワインなんて買ってあるの!!」

「……その……まあ」

「何!？」

「……飯って、みほにいつつもピーマンばかり出してたし……」

「そうだねっ! 悪意しか感じないよ!!」

「和食ばっかり作ってたし……たまにはって思い、その……肉を購入してありまして……」

「お肉?」

「ほぼ焼くだけだし……ステーキ肉ね。その為……焼く時用に赤ワインを購入してありました」

「……」

「今も一応、下拵えで、ヨーグルトに漬けてあります」

「……ヨーグルト?」

「赤身肉は、それでかなり柔らかく仕上がります……」

「……」

「みほに気を使っただけだから、微妙な顔をしていた。」

「たまには肉の塊を食わせてやろうと思っていた。」

「まあその気使いが、今回裏目に出てしまったのだけど……」

「風呂の掃除から戻ってから気がついたんだけど……。華さん……一瓶を丸々開けてまして……」

「」

「瓶に入ったブドウジュースって勘違いしていたみたいでしたが……ど」

うにも大変気に入って頂けたようでしてね…」

そんなに時間をかけて掃除した訳じゃないのに…出てきた瞬間、かなり出来上がっていた。

顔真っ赤になってたし…。

一度飲んだら、止まらなくなったそうで…。

理由を説明すると、顛かみを指で押さえて何か呆れている、みぼりん。

うん。ここまでにしよう。

言えないけどね。

酔った状態の華さんの凄まじさを。

彼女はどうにも酔うと、大胆な性格が更に大胆になるようで…。

後、俺に…ここ、告白した後、更にこの状況だ。

かなりハイテンションになっていたようで…。

「なんかあ！　こう、夜の部屋で、隆史さんと二人きりって状況が凄いですねえ」

「確認事項の様に言わないでくださいよ!!」

「これ、みほさんから見ましたら、完全に浮気ですよねえ」

「怖い事、嬉しそうに言わないで下さい!!」

「……」

「急に黙って…な…なんですか」

「します?　浮気」

「しませんよ!!」

「ウフフフ…冗談ですよお?　みほさんを裏切る様な真似…したくありませんからあ」

「……」メガワラツテネエ

などなど…大変嬉しそうに…おっしやいまして…その…更にかなり甘える性格といえますか…。

初めての酒という事で、体の自由が思うようにきかないらしく…俺にしなだれ掛かるみたいなのが、多々起こった。

勘弁してください…。

…よし！ 今のは意識したので、声に出してない！！  
柔らかいし、いい匂いするしで、大変でした!!!

「…何が柔らかいの？」

」

油断したあ!!!

ジト目でしばらく睨まれながら…それでも一応と、先程から大人しい華さんに視線を移すと…。

ニコニコして、フラフラして…なんかもう…。

「あの…華さん。大丈夫ですか？ 隆史君に変な事されませんでした？」

」

「はいいい。大丈夫ですよおお？」

信用が…無い!!

まあ本気では無いのだろうが…軽い俺へのあてつけだろう…。

みぽりん、前はそんな子じゃなかったのに！

「では、みほさん」

「はい？」

「一緒に入りましょうか？」

「え…えっ!？」

「え？ って…入りに来たのでしよう？」

家は銭湯じゃないっすけど…。

はじめのセリフの続きなのか、ほらほらと笑顔でみほの制服のスカートを引つ張りだす華さん。

…ていうか、まだ制服着てるな。

朝からそのままかよ…。

「ちよつと待って下さい、華さん!! 隆史君も止めて!!」  
「無理です!!」

バスタオル一枚で、みほの制服を脱がし出す華さん。  
すげえ…。

いやあ…すっごい揺れるなあ…。

俺、正座してるし…みほの服を脱がしにかかるしで、まあなんだ。チラツチラみほの下着が見える。

顔を背けるも、見えてしまっていた事の記憶は消せず、なんというか…立てない！ エロくて立てない!!

「あつ」

「え？」

……。

軽い声を上げた華さんに釣られ、そちらの方向を向いてしまった。

…重力つて偉大だ。

「……」

「……」

正座して、三人で向かい合っています。はい。

だから言ったじゃないですか。

だから言ったじゃないですか!!

おもいつきり見ちやったよ!!

一糸纏わぬ姿つて奴をよおお!!

そのまま、あらあゝ…とか言いながらも、全裸でみほを脱衣所に引きずり込んでいった華さん。

…強え。

脱衣所から、黄色い声がやたらと（たまにエロい声も含む）聞こえて来て、結局みほも諦めたのか…そのまま入って行きました。

狭いだろうに…。

そして今、俺のYシャツを着た二人が目の前にいる！

まあ2着とも新品といえば新品だし…大丈夫だろう。

「…見たよね。隆史君」

「……」

「華さんの裸、見たよね？」

どうしろと!? 不可効力だと思いの!!

「私は気にしませんよ？」

「……」

「隆史君、華さん止めてくれなかったし……」

「……だって」

「……だって、何？」

「……」

「……何？」

「……華さんもそうだけど、制服引っ張られて服装乱したみほの姿が、余りにもエロくて見ちゃダメかと……」

「!?」

必死だったのだろう。

改めて、先程の自身の状態を思い出したのか、正座をしたまま赤くなつて小さくなつてしまった。

まあ……うん。唸ってるね。

なんで言葉にするのと、呪詛を呟きながら唸ってる。

……でも、ね？

今の状態の方が、何倍もヤバイの気がついてますか!?

俺が用意したとはいえ、現状がヤツバイの!!

ノーブラの風呂上りの女子高生二人が、目の前にいる現実!

ノーブラつてのが、こんなに分かりやすいモノなのか……。

重力のありがたみを感じながら、そんな事を思った。だからね？

……まずい。

これ早く、部屋でない……。

「……そもそも、みほは何で着て来た制服着なかったの？」

そうだよ……みほが来たなら、華さんも着ていた私服を来て、みほの部屋に行けばよかったじゃないか……。

「……お風呂から出る時に……ビツシヨリに濡れちゃった」

あ……そういえば、俺が入る時……脱衣所の床がお湯で濡れていたな。



何かしたのかと思ったけど…。

みほの制服と華さんの私服。ともにダメなつたと。

「…華さん、酔うと怖いよおお。突然何するか分からないいい。着るものなくなっちゃったあ…」

「…」

何をした華さん。

いや…あの、目があつたくらいで、照れないでください…。  
対処に困ります…。

「私も帰れなくなっちゃった…」

「…」

「隆史君」

「…俺が、みほの服を持ってくるってのは…」

「良いと思う?」

「思わない…」

俺の服じゃでかすぎて、動きも取れないらしいし…あ。  
学校のジャージだったら、ある程度のサイズ…あ。  
学校に置きっぱなしだ…。

……。

はい。

みほりんのお泊りも確定しました。

「よし、分かった! みほも泊まってけ」

「う…うん」

微妙な気持ちの表情で返された。

まあ…しようがないだろう。

「んじゃ、二人共。もう寝なさい。俺は車に行くから」

「あ…うん」

さっさと寝てしまえ。

そうすればいい。一日を終わらせよう。うん!

考えるのをやめた…早く明日になってください。

…みほを前回、泊めた時もそうだった。

……。

……………素直に寝てなかったけど。

「ダメですよお?」

「え……」

腰を上げ、車の鍵を取ろうと立ち上がった。

その俺の服の裾を引つ張ってきた華さん。

…なに?

「家主さんは、ちゃんとベットで寝て頂かないとお」

「

あれ?

その話はもう終わりましたよね?

え?」

「あ、みほさんも同じベットですか?」

「ふえ!? ねっ! 寝ませんよ!! 床でいいです!!」

……。

酔った華さん…怖い。

先程から、ポンポンきわどい発言が飛び出す…。

「…華さん。その話はもうついたでしょう? 俺が車に…」

「でなければ…私、この格好で出ていかなければならなりません」

…」

「!?」

じ…自分を人質に取ってきた!?

俺の性格を分かったの発言か!?

顔がすごい笑ってる!!!

「あ…隆史さんがそういった…その…趣味であれば…私、かまいませんが」

「……」

酒と風呂で、赤くなった顔を更に赤らめて、とんでもない事言ってきた。

酔ってますよね? 貴女、酔ってますよね?

計算ずくとかじゃないですよね!?

「…みほ」

「……………なに？」

「…どうしたらいいでしょう？」

「私に聞かないでよ！」

「…俺にはもう、回避ができないと思うんだ」

「……………」

「浮気に当たるかって問題も…まあなんだ」

「なに？」

「俺の彼女の、貴女が決めて下さい」

「ずっ！ ずるい!! それは、ずるいよお!!」

青森から俺はそう呼ばれていたから、今更なに言われても何とも思わないや。

「隆史君！ それは卑怯だよ!!」

はい、俺は卑怯者デス。

◇

「……………」

結局、俺は床の下。

寝ている状態で、彼女達が視界に入らない場所を選んだ。

浴室で寝ようか？

「出てきます」

トイレで…

「それは困りますね…あっ！ そういったご趣味も？」

だ…台所に…………

「ウフフフフ…」

ガタガタガタツ

流石に、女子二人を床で寝かせる訳にもいかず…シングルベットに無理してでも二人で寝てもらった。

そして俺は、その下の床。

……みほを泊めた時と同じ構図となった。

みほは何か思う所があるのか：結局、俺を終始ジト目で睨んでいた。

ふっ。泊めていいと最終判断をしたのは、貴女でしてよ？

ベツトの上からは：華さんだろうか：寝息が聴こえる。

みほは：あ。

よく聞くと、スースーと、寝息らしき呼吸が聞こえてきた。

二人共何だかんだで：寝てしまった様だった。

「……」

そして俺は。

(寝れるか！ 眠れる訳ねえだろ!!)

前世で無かったよこんな経験!!

そうそうあつてもたまらないけど!!

はつきりと言おう。

今までは彼女達は子供。そう見ていた。

―が。

みほと付き合うとなったら、そういう訳にはいかない。

一度、みほを女性と認識してしまったら、周りの他の娘達も連鎖的に認識し始めてしまった。

無理だよ!! 無理無理!!

男の夢（一部の人間）の裸にYシャツだよ!?

それが二人、目の前で寝てるんだよ!?

…。

部屋が女の子の匂いで充満しているのが：また…。

「……」

みほは：胸が小さいわけじゃない。

だからと言って大きいわけじゃない。が、標準以上だろう。だから：まあ：揺れる。

華さんは：揺れる!! ものすごい揺れる!!

谷間もすごいし、あれはズル!!

みほのあの格好は、可愛らしい。

華さんのあの格好は、エロい。まさに卑猥。  
…あ。

今重大な事に気がついた…。

話している最中…どうにもモジモジとしていた二人…。

着てきた衣類が全滅したと言っていた…。

まさか…下も履いて無かった!!??

…。

いかん。

息子がウィーンと駆動音がする様に、起動した。

まずい。

思考が泥沼化してきた。

取り敢えず、朝はコーヒーを入れて、あの格好で飲んでもらわない  
と!!

ゴソツ

ベットの上で音がした。

寝返りでもうったのだろうか。

寝返り打てる程…大きいベットじゃないんだけど…。

薄目を開けて、少しベット側を見てみる。

黒い影が、立っていた。

いや…体だけを起こしてのだろう。

頭の部分が、こちらを見ているみたいだった。

「…あら」

声がした。

この声は…華さんだろう。

何かを見つけてた。そんな眩きにも似た声を発した。

「…んっ…華さん?」

「あ、すみません…起こしてしまいましたか?」

「…いえ、大丈夫です。寝付けなかったから…」

「…ふふっ……私もです…」

結局全員起きてたよ!!

「あの…みほさん」

「はい?」

「すみませんでした…流石に非常識でしたよね?」

「え…」

「隆史さんの所にお泊りなんて…」

「あ…いえ。大丈夫です…最終的に決めたのは私ですし…」

「…そうですか」

「……」

「……」

暗い部屋で、無言の時間が進む。

…これは、俺も起きていると声を発した方がいいのだろうか?

「…ところで」

「はい」

「暗くて良く分からないのですが…あれはなんでしょう?」

「え?」

「隆史さんの…その、股間の部分が…腫れている様になってるんですが…」

「ヒウ!!?」

……。

戦車道乙女と言うのは、どうしてこう…人の股間事情に敏感なんだろう…。

仰向けに寝てしまっているから、目立ったのだろうか…。

…どうしよう。

片膝でも上げて誤魔化すか。

「…痛く無いのでしょうか?」

「」

みほも同じ感想を持ったみたいだし、なにも言えないのだろうか…。

「つと…」

「華さん!?!」

ベットから降りる為だろう。  
布が擦れる音がした。

「……」

気配で分かる…。  
いる…。

足元…というか、俺の右側に回り込み、一部を凝視している…。  
ここまで近づけば流石に分かった。

んっ！

一瞬、電気がつきました消えた。

完全消灯していた状態から、豆電球のオレンジがかつた色に、部屋が染まった。

「あらあ…ちよと尋常じゃない腫れ方…では無いでしょうか？」

う…動けねえ…。

なんでまた寝たふりをしないといけないのだろうか？ 自分の部

屋で!!

「華さん!？」

みほの声が聞こえた。

完全に焦っている…。

バタバタとベットから降りる音…俺の左側。

華さんと反対側に降りてきたのか…。

ごめん。

あんたら、人が寝てる時に何してんの!？」

「…これ、隆史さん起こしましうか？」

「ダメですって華さん!! 今、起こすのはまずいです!」

そりやそうだ。言い訳できんだろ。

「でも…ちよつとこれは…、何か病気とかだといけませんし…」

「ち…ちがっ!! そういった意味ではないんです!!」

声が真剣な分タチが悪いネ。

「では……」応確認しときませんと……」

「華さん酔ってます!? まだ酔ってますか!？」

「…」(ドウシヨウ)

みほが必死になって止めている。

あくまで医療行為…怪我の患部確認…その様な真剣な声が、華さんから聞こえる。

「あつ、救急車…」

凄い事、ツブヤイテマスクド…。

そんな事で救急車呼ばれたら…。

部屋に女の子を二人も泊めて、こんな洒落にもならないくだらない事情で救急車呼ばれ…。

それが明るみになると…俺の学園生活は終わるな。うん。間違いない!!

……。

俺がここで起きると、説明やら何やらで余計におかしいことになりそうだからなあ…。

よし！ みほ!! がんばれ!!

「みほさん」

「な…なんですか!」

「私も場所が場所ですから、恥ずかしいんです」

「ならやめましょう!!」

「ですが、隆史さんに異常がみられますから…手遅れになっては大変です」

「声が真面目な分、やり辛いよお!!」

だらうな…。

「スズメ蜂とかに刺されていたとか…蛇…とか? でもこんな所を

…隆史さん…」

「…華さん。流石にそれは無いよ…」

「…いけない…。いつまでも躊躇していられませんね」

「…華さんの中の隆史君って、どんなのなんだろ…」

「……。」



「華さん？」

「…」

「……ハナサン？」

普通に脱がされた。

ずるつと一気に…。

寝ている人間のズボンってそんな簡単に脱がせれないんだけど…。

まあアレだ。

勃起してただけあつて、勢いよく飛び出して来ました我が息子。

元気いいねえ…。

……。

最早、慌てる元気は無い。

「……みほさん」

「」

「…病気ではありませんでしたね。流石に私でもコレは分かります

…」

「だから言つたじゃないですか!!」

「……でもこれはこれで…痛く無いのでしょうか？」

「なんで、そんなに冷静なんですか!？」

声が若干上ずっていた…。

みほには分からなかったのか…これ華さん大分焦ってるな…。

「……ちよつと辛そうですね？」

「…そこは私も、そう思いますけど」

同意すんなよ!!

戦車道乙女って、こんな人ばかりなのだろうか!?

「……あの、みほさん。今元に戻そうと思つたんですけど…」

「そうですね! 戻しましょう! すぐに戻しましょう!!」

「重大な事に気がつきました…」

「な…なんですか?」

「これ…ズボンを、はかせれないです…」

「」

「…私の早とちりとはいえ…こんな状態で、隆史さん起きてしまったら…」

「痴女…以外の何者でも無いのでは？」

薄目を開けて、現状を確認。

俺！

起きる！

ダメ!!

どうしたらいいんだろう…。

「あっ…」

「こ…今度はなんですか!?!」

「あの…これって一度出すと収まるって、沙織さんの家にあつた雑誌に書いてありましたよね？」

「……」

沙織さん…。

「……」

はい。前回のみほの思考回路と一緒にすねえ…。

「……あの」

「…ハイ」

「お願いします、みほさん」

「なふ!?!」

「!!?!」

「いえ…みほさん…隆史さんの恋人さんですし…」

「」

あ。

みほの目が、死んでる…。

「私の責任を押し付けるみたいで、申し訳ありませんが」

「……真面目な事言ってるけど…まだお酒残ってるのかなあ…」

華さんって、性的な知識が偏りすぎているなあ。

「では、私がしてもよろしいですか？ やり方は雑誌に書いてありま

したから、何となく分かりますし」

「……………ダメ」

「でしよう?」

「……………」

「私は見守りますから!」

「」

あ。みほが追い詰められていく…がんばれ華さん!  
じゃない!!

「ですから! お願いします! みほさん!!」

「」

…起きよう。

また無言の時間が流れ始めたので、ここらで諦める。  
理由は知っているから、まあ大丈夫だろう。

…まったく今何時だ?

こりや今日は…徹夜かね…。

…………。

生暖かい。

…………。

みほさん、マジですか!?

…みほが俺の先を、少し舌で弄っていた。

※ルート壊※第45話く来客万来です！く 後編

「うう…私、友達の前で何やってるんだろ…」

みほの嘆きが聞こえる。

華さんの無駄に真剣な眼差しに押されたのか、俺のアレを舌先で弄り始めた。

くすぐる様に、亀頭を弄るものだから声がたまに出そうになる。

前回より控えめ。

華さんが気になるのだろうか…というか、気にしない方が無理だね。

羞恥も有り、思い切った行動にも出れないのであろう。

…あの。

舌先ですつとチロチロされると…その。

完全に蛇の生殺し状態なんですけど…。

小さな快感が連続して感じる。

「レラ…ア…はあ…」

又。

みほも少しずつ興奮してきたのか、熱い吐息らしきを出し始めた。

…いや…俺、冷静に何言ってるんだろ。

でもなあ…この特殊すぎる状況…どうしようも無いよなあ…。

起きれないし…。

「……………チュ」

あ。

キスをするかのように、亀頭の頭を唇で噛んだ。

「チュ…チュ……ヂュユユブ」

…。

先。

尿道入口…というのだろうか？

中の物を吸い出すかのように、ストローを吸うかのように…啜りだした。

「…………あれ…ちよつと、アレの味がする…」

「アレ？ アレとはなんですか？」

「えっ!? いや、何でも無いですよ!?!」

…それは、カウパーという奴ですよ。みぼりん。

「…もう、出そうなのかな？」

「……」

「もう」とかいう時点で、完全に行為に集中したと見て…間違いなのだろうかね。

マダデスヨ。

というか、ちよつと傷ついた…。

「…うう…やっぱり恥ずかしいし…一気に……」

「……」

うう!?

一気に陰莖を口に含み、一番奥と思われる所まで、みほに飲み込まれた。

後は、ゆつくりと引き出される。

カリの部分で、唇が引つかかり…非常に…その、気持ちいい。

「プツ…ヂュ……ヂュ…」

オレンジ色の部屋の中。

薄目を開けて、結局は二人を眺めている俺。

…。

しかし…ちよつと心配になるな…。

みほは、空気に流されやすい。

普段なら絶対にしないだろうし…でも、この友達の前での行為とか

…変な背徳感だろう。

みほのスイツチが入った様だった。

だって…。

俺のアレをしゃぶる中。目を閉じていなかった。

その目から怪しい光が見える。

「みほさん」

「ほはっ!?!」

完全に集中していたのだろう。

陰莖を口に含んだ状態で、驚いたような声を上げた。

ちよつと歯が当たって痛かった…。

「まだ少し、遠慮していますか？」

「…あ…当たり前です！ 恥ずかしいし…こんな事…は…初めてですし…。」

やーい。みぽりんの嘘つきー。

「あ…本気のみほさんを見てみたいのですが…」

「ふえ!？」

「…雑誌だと…その、音を出すと男性は喜ぶとか…気持ちがいいとか…。」

「……。」

凄いき言い出すなあ…。

華さん…まだ酒残ってるんだろうな…。

そうだ、前回に比べると、みほのやり方が結構控えめだった。

本人に言うとは多分怒られるんだろうけど…その…途中からもう…貪る様だったしね。

「チュプ……。」

みほがまた、一気にアレを一番奥まで、飲み込んだ…。

え？ やるの!？」

「チュ…ヂュユユウウウ…：ジユプ」

…一度、ゆつくりと音を出しながら引き出した。

一度引き出した後、あの時の様に…貪り始めた。

「ジユポ、ヂユポ！ チュポ…んっ…：カポッ！ チュボ！」

「……。」

「ヂュルツ…ヂュユユ…」

「……。」

あかん。

完全に飲まれた。

空気に飲まれて、みほの…多分、女の部分のスイッチが入ったと確信した。

「……ハウ…：レラア…：ちよと…苦いのが…：出てきた」

「フウー…フウー…」

黙って見ていた、華さんから小さな呼吸音が聞こえてきた。  
少し、もぞもぞし始めた…。

「んぷっ。ヂュツッ！ ジュツッ！ ジュツッ！」

「ハア…ハア…ハア…ハア…」

なにこの絵。

彼女が一心不乱に、俺の陰茎を貪り…その友達が横から見ている…。

清楚を絵に書いた様な友達。

その女性が、行為を見て…興奮し…無意識だろうか？

自身の秘部をまさぐっていた。

…理性ってどういう漢字で書いたっけ…。

無理だよ!! 保つので精一杯だよ!

「…チュパッ。…あれ…前は…そろそろだったのに」

すげえ事、言わないで下さい。

「ハア…あ…あの。みほさん」

「…ハイ…。完全に集中しちゃってた…ウウ…恥ずかしい…」

今更だよねえ…というか、2回目だからだろうか…スイッチが入ったらまったたく躊躇しなかったよね…。

テクニクが上がってるって、こういうことだろう…。

動く際、舌を動かし刺激してくるとか…。

「……」

「な…なんですか？」

「失礼かと思いますが…」

「…な…なんでしょう？」

「私も挑戦してみてもよろしいですか!?!」

「!?!」

すっごい事…言い出した…。

「……」

そしてすっごい真剣な眼差し…。

「…華さん…」

「はい」

「…あの…分かっていて言ってますよ…ね？」

「はい、破廉恥なのは重々承知ですが…その…」

「……」

潤んだ目で真剣な眼差し…そしてこの空気。

彼女もまた流されていた。

俺とみほの関係を知っているの、この発言…。

……。

「ちよ……」

「はい？」

「ちよつと……だけ……な……らっ？」

「ありがとうございますー！」

…おい、みぽりん。

おい、彼女!!

—————  
—————  
—————

何する気だろう…。

「華さん…何するんですか？ 隆史君、起きちやいますよ？」

本当に何するんだろう!?

彼女様のお許しを頂いて、嬉しそうに俺の下に回り込んだ。

そのまま両足を上げて…そのまま俺のケツの下に、正座で滑り込んだ形。

…しかし俺。すっげえ間抜けな格好。

「では…」

ポチポチと、着ていたワイシャツのボタンを外していく。



ワイシャツが前開きになった、その華さんの姿は、すごい、ものすごいエロかった！

…ってまさか。

」

その圧倒的な戦力差を目の前に、みぼりんのハイライトさんが敵前逃亡…。

「確か、雑誌では…」

俺のアレ様が、暖かい人肌に包まれた…。

すげえ…。息子様でも柔らかいと分かるものなんだな…。

華さんの豊かすぎる胸に挟まれた。

「……クッ！」

みぼりん！

「……で、これでどうするのでしょうか？ 動かせばいいのでしょうか？」

「…雑誌だとそう書いてあったね…」

「んしょ」

そのまま両手で、自分の胸を押し込み、小刻みに上下させ始めた。

みほの唾液にまみれていた為か…滑りもよく…。

「チュッ」

躊躇なく、そのまま口に亀頭を含んだ!?

「プ…チュプ…チュプ…」

ぐっ…

動かしながら…龟头とカリ部分を口で往復…。

まずい…これ…本気でまずい！

やわらかいのと、あつたかいのと…先っぽ!!

「チュプッ…チュプッ…チュプッ！ チュプッ！」

「……フウ…ハア…」

異様な光景…。

これ…完全に浮気ですよね？

彼女が公認したんですよ!?

慣れてきたのか、胸を押さえている手と、啜えている口が段々とり

ズミカルに動き出した。

その動きを呆然と見守る、みほ。

口を半開きにし、華さんの顔と、胸の谷間で好き勝手されている状態の陰茎を見つめている。

陰茎を通して、みほの唾液と華さんの唾液が混ざり合い、それを挟んでいる胸が段々と湿っていく。

動くたびに、水音が段々と含まれた音が聞こえる。

オレンジ色の室内灯の光が、華さんの胸をテラテラと反射し始めた。

「ヂュプツ…ヂュプツ！ チュプツ！」

その光景を見て、興奮し始めているのか、黙って見ているみほの体がゆっくりと動き出した。

「…なるほど。確かに少し…苦いのが出てきてますね…んっ」

「ハア…ハア…」

足の付け根から、柔らかい感触と暖かい感触…。

段々と早く動き出した両方の胸の肌の感触…。

ダメだ…イキそう…。

「あ…みほさん」

「んっ…ハア…」

みほもまた、股間を少し摩っていた。

華さんの呼びかけに答えられない。

「…みほさん？」

「えっ!? あう…な…なんでしようっ？」

苦笑して見ている華さん…。

気持ち分かるのだろうか？ 敢えて、その事には触れなかった。

「…一緒にしてみますか？」

「えっ!?」

「えっと…こうやって…」

挟んでいた陰茎を外に出し、完全に頭になっていた胸を谷間を強調するかの様に押さえ込む。

できた谷間の先に、陰茎をセットした。

セットしたって…。

「…」

「…：ほらっ！ みほさん！」

「うん…」

チラツつと俺の顔を見たみほ。

完全に顔がオーバーヒートしている。

「前に回り込んで下さい。私動けませんから」

「…：雑誌記事。まさか自分が、再現するとは思わなかったよ…」

「まあまあ…」

「隆史君…起きてないよね…」

そう言いながら、もう一度俺が寝ているのかを確認したみほ。

「…：どうか…前回はそうだけど…」

「…：なんで起きないって思うのさ！」

「…：またガッツリ起きてるよ!!!」

「んしょ…」

俺を跨ぐみほ…。

華さんと向かい合わせになって、みほもまた…ワイシャツのボタン

を外していく。

みほの尻が、俺の目の前…。

「…：あ、ちゃんと下着はいてた。」

「…：チツ」

「…：ああ…違う、違う…」

「…：でもすっごい光景だ…」

「…：うん…」

みほの頭になった胸。

位置からして下乳が見える…：やっぱり結構大きいと思うんだけど。

「…：うん…」

その胸を華さんの胸と押し付け合う…。

俺の息子に柔らかい圧力が…：…。

「…：いやあ…：…。みほさん。」

「…：ナガサレスギデス。」

そして。  
少しは躊躇して下さい。

「では」

「…うん」

ゆっくりと二人の女の子が、動き出す…。

擦れる肌。

なに…え？

なにこの状態!?

「次は…」

「レラア…」

「…みほさん…では、私も…」

腰が少し高い位置に上げられているのも有り…踏ん張りがきかない…。

一々…声が出そうになる…。

みほが、右側を…華さんが、左側を…舌先で何かを舐めとるかの様に動かしました…。

というか、その記事書いた雑誌!! 今度沙織さんに借りよう!!

「ハァー…ハァ…」

「チュプ…チュツ…はあ…」

目の前で、みほの尻がクネクネと動いている。

一々、会話で躊躇しているが。

ダメだ…みほも華さんも…どこか壊れた。

…理性ってなんだろ…。

二人が挟んでくれている所が見れないのが非常に惜しい。

目の前には、大股開いて俺を跨いでいる、みほしか見えない。

…下着の恥丘部分が完全に濡れている。

「……」

もう…目なんて普通に開いている。

ガン見してます…はい。

ピチャピチャと、わざとだろう…音を出し合いながら…二人揃って貪り合っている…。

「はぁ…はぁ…」

「フウ…んっ…はぁ…」

荒い息遣い。

……。

うん。

がんばった。

オレ、ガンバツタヨ？

「ひゃあ!？」

「んっ…どうしました？ みほさん？」

力なく投げ出していた脚を踏ん張る。

みほの尻を鷲掴みにし、左右外側に引っ張った。

「たっ!?! たかっ…んあ!?!」

下着の端を片手でまとめる様に掴み、Tバックにする様にまとめ、上に引っ張る。

秘唇の形がくつきりと浮かんだ。

「ちよっ!?! えっ!?! 起き……んんん!?!」

秘唇を甘噛みする。

下着をずらし、そのままみほの秘部を乱暴に舌ベロでかき回す。愛液が口に入る。

唾液と混ざり合って、ピチャピチャと音が響いた。

「あはあっ!?! んあ!! あっ!?! んあ!?!」

甘い声が下半身側から聞こえる。

……というか…前戯が必要ないくらい…大洪水になつとるな。  
するつと華さんの上から滑り落ち、普通に仰向けになる。

ちよつと残念そうな声が聞こえたけど…うん。

みほは、俺が完全に掴んでいる為に逃げられない。

まだ秘部を攻めよう。

「んっ！ んっ!!? んはあ……」

「……みほ」

「ずるっ！ いつ……んっ！ から……おきいいん」

「…みほ」

避難の声を無視。

いきり立っている状態の陰茎が、みほの顔付近にまで来ていた。

身長差もあるけど…問題ない。

腰を上げ、片手でみほの頭を押し、催促を試みた。

「はあ…はあ……んっあ!! はあ……チュツ……プ」

何をして欲しいか分かったのか、素直に口に含んだ。

それは素直に…。

俺には見えないが、みほの目の前には華さんがいるだろうに…。

俺の舐める音と、みほの貪る音。

しばらく無言で、それだけが部屋に響く。

「ぢゅ…んっあはあっ！ んっ！ チュツ!!」

こちらはこちらで、みほの秘部を…取り敢えず、クリトリスあたりを必要に攻めてみた。

「ん!!? ほあ！ あっ!!」

というか、啞えながら上げる喘ぎ声って…すっごい興奮する。

…行為の催促しておいて、邪魔をする。

でもあまり続かなかった。

んにや、続けなかった。

止めを刺そう。

クリトリスを剥いた。

舌を少し這わせると、体の痙攣が大きくなった。

歯先で…軽く噛んだ。

「んっ！ ああんっ！ あああ!!!」

噛んだ瞬間、体が大きく跳ねた。

「ん…はあ…はあ…はあ…はあ…」

俺の体に突っ伏して、大きく息をしている。  
その体から、熱い体温を感じる。

「……」

うん、無理。

無理です。

理性なんてもう無い。

ゆっくりと体を退かせて、仰向けにさせる。

体を起こし、改めて見る。

目線の下には、ハアハアと呼吸を繰り返している、みほの胸が大きく動いている。

「はあ…はあ…ううう……」

今更になって恥ずかしがっている様だった。

手で顔を覆っているみほ。

華さんは、特に衣服を戻す訳でもなく、熱っぽい視線で俺を見つめている。

あ…でかいなあ…。

「はあ…い…いつから…起きてた…の？」

まあ当然の疑問が、みほから出る。

うん。即答しよう。

「最初から」

「」

はい、絶句してますね。

でももう、遅いです。

「ちなみに…2回戦の前日夜も、ガッツリ起きてました」

「!?」

ガバツつと上半身を起こし、胸がはだけて見えているのも気にしないで、見開いた目でこちらを見てきた。

まあ…うん。

「だからもう…我慢の限界です」

「な…っ!?!」

みほの膝を掴み、左右に開ける。

そのまま、秘部分の下着をずらし場所に、陰茎の先を当てる。流れるように、言葉を挟ませない様に行動した。

「…みほ」

「えっ!?! えっ!?!」

この行動で、察しがつくだろうが、混乱している。

俺だって男だ。

何度も言うけど…。

「もう無理だ」

「ちよっ！ ちよつと待って、たかっ!?!」

最早、躊躇は無い。

脚を上げさせ、ゆっくりと中に入れる。

当たった。

壁に当たった。

「ほ…本気!?! 隆史君!?!」

そのまま進む。



プツツと音がしたような気がした。

先に当たる壁を破っていく。

ヌルつとした感触が伝わってきた。

「っ!!」

できるだけ、ゆっくり。

それでも、ズルズルと奥に入り込んでいく。

「っはー!」

少し苦しいのだろう。

肺から息が漏れる。

「……はあ……んっ……」

「……」

奥に当たる感触を感じ、ゆっくりと今度は、ソレを引き抜く。

「んっんんん!」

声を殺すような……顔。

痛いのだろう。

引き抜いた陰茎に血が付いていた。

……

「……………っ」

体全体で、みほに差し込む様に動く。

「んんっっ。っあ!」

……

少し、動いて見ると……みほの顔が、苦痛に歪む。

……

あれ? 違うのか?

え?

「……………」

少し、引き……今度は……

「ひゃあ!?!」

おもいつきり、突き上げるように……入れてみた。

ズルズルと快感が走り、みほの奥……違う壁に先が当たったのが分かる。

「んああ!? ああああああつああ!?」

当たった瞬間…みほが、再度痙攣した。

「ああ…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…」

みほの足が、プルプルと小刻みに震えている…。

嘘…イツた? イツつたの?

え?

「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…」

「」

「……グスツ」

泣き出した!?

泣かせちゃった!?

「ウウウウ…やだ…」

「!？」

「こんな初体験は、やだああ…」

「」

「キスもまだなのがいい…隆史君…ひどいいい…」

「……」

「華さんの前なのにい…初めてで…なんで…気持ちいいのお!?

痛く無いし…一回で…ううう!! 私…へん…た…」

「……」

「やだあ…こんなのは…やだああ…」

「……」

入れたままの状態、天を仰いで嘆いている。

あらあ…顔が……。

……これ、下手に謝らない方がいいよな…。

まあ…うん。

「だがじぐんの、ばがああああ…ああつ!？」

そのままの状態、みほの腰に手を回し、一気に起こし上げる。  
俺自身も胡座をかき、そのままみほと向かい合わせになる。

対面座位…だっけか？

まあいいや。

「…んっ…：…うう…：…」

「…：…」

めつちや、泣きながら睨んでくる。

うくん。

確かに場に流されて…：…ああ俺も思いつきり流されたな…。

まあ…うん。では順番？

そのまま軽く、みほに唇を合わせてみた。

「!？」

一度離し、もう一度。

「…：…」

2 回目に合わせると、今度は下唇を唇で噛むようにする。

喋らないようにしよう。

下手に喋ると…：…なんか…：…傷つけそうだし…。

3 回目に合わせると…：…今度はみほが、唇を舐めるように合わせてきた。

あ。

顔が惚けている…。

泣かせるよりは…：…いいけど…。

それでも涙目になって、俺を非難してきた…。

「ずるいー」

「…：…」

「隆史君、ずるいい!!」

ハイ。卑怯者ですから。

4 回目はもう、口の中を舌で愛撫する。

みほから…：…もう、同じように絡めてくるようになった。

…適応早すぎないか？

「…痛くないのか？」

「う…うん。痛くない…」

「まあ…盛大にイッたしな…痛ッあ!!」

…首を噛まれた。



あらあ……完全に二人の世界に入ってしまったか……ね？

私お邪魔ですよねえ……。

でも……、敢えて見ましようか。

ええ……見ます。

隆史さんは、たまあぁに私の顔を、なんとも言えない顔で見てきますが……まあ……はい。

結局続けるんですね。

その……何か、みほさんと会話をしているのですが……まあ……えつと。

みほさん……凄い……顔ですね……。

もう吹っ切れたのでしょうか？

また先程と同じ体勢になり、初めはゆっくりと動いていた隆史さん。

みほさん……初めは恥ずかしいのか声を我慢していたのでしょうか……もう普通に喘ぎ声を上げています。

隆史さんも最早、遠慮せず、腰でみほさんを殴るように動いていますね。

……。

みほさんの初体験……でしょうし……お邪魔はダメだと思い、我慢しますが……。

自身の理性が切れそうなのって……自覚できるモノなんですわね……。

「……」

みほさんは腰を上げられ、それを隆史さんが上から覆いかぶさる。肉が当たる音と……みほさんの声。

それしか聞こえないですね。

隆史さんの名前を連呼してます…何度かみほさんは、果てているのでしょうか。

初めてで…そういうモノなのでしょうか？

……。

あ。

隆史さんと目が合いました。

……あ。

一瞬、またバツが悪そうな顔をした…と、思ったら……なんでしよう…。

見たことが無い……悪い顔しましたねえ…。

私自身、もう我慢ができず自身を慰めていましたが、それを見ての顔じゃありませんでしょうし……なんでしよう？

羞恥心は…今更すぎるので、もう遠慮してませんから感じませんよ？

……誰に言い訳してるのですよか……私は。

あ。

隆史さんが、みほさんを四つん這いにさ……せ……。

「た…隆史君!? ちよっ!? たつかあ!? んっ!? はあっ！」

うわあ…わざとでしょうねえ…。

また肩を両手で掴み、顔を伏せさせない体勢で激しく動き出しました。

うわあ……。

みほさんの顔と目が…完全に蕩けてますし…。

私の指も段々と早くなっていきますね。

もう一度思いますけど……すっごい顔してますよ？ みほさん。

隆史さんは先程から、一切言葉を発していません。

みほさんの喘ぎ声と…私の声…。

その二つしか聞こえませんか。

「っ！」

隆史さんが、苦しそうな顔を始めました。

どうしたのでしょうか？

バツバツと、肌がぶつかる音が早くなりました。

「……」

ああ…、なるほど。

その前に、みほさんがまた大きく痙攣…。最後に出した、大きな声が私と合いました…。

そのままぐったりと、前のめりに倒れ込みました。

私の体も脱力感が襲います……。

……。

ハアハアと大きい息遣い。

ズルツつと隆史さんが、陰茎を引き抜き、うつぶせ気味になっている、みほさんを仰向けにしました。

仰向けになった、みほさんの顔に、陰茎を近づけると、それをまたみほさんが啜えました。

何度か、隆史さんが自身を擦ると、今度は隆史さんが震え…。

「んぐっ!! んっ!!」

隆史さんの息遣い。

独特の匂い…。

「……んはあ！ ん…」

みほさんが、なにかぐったりとして、口を動かしていますね。

なんというか…。

隆史さんもみほさんの隣で、仰向けになり、大きく息を繰り返して

います。

「はあ……はあ……隆史君……。ひどい」

「いや……まあ……みほ……なんか……それ好きそうだったし……」

あ。

みほさんが固まってしまいました。

……。

「痛ああ!？」

隆史さんの手を噛みましたね。はい。

……。  
さして。  
私ですが。

…先程、みほさんは、挑戦をしても良いと、仰ってくれました。  
一応…事が事ですので…もう一度確認を取りましようか？

「みほさん…」

「ハア……ハア……は……はい……」

「あの…大丈夫ですか？」

「ハア…ハア…は……い……」

「では、次は私も…挑戦してみても…よろしいですか？」

「ハア…ハア…ハア……ハア……は……い……」

「ありがとうございます♪」

はい。無理です。  
私も我慢の限界です。

…。

あら、立派。

隆史さん…まだ元気そうですね…。

……ええ、無理です。

「ハア…ハア…ハア……ハア……んんっ!? 私、今なんて!？」

隆史さんも気がついていませんね。

…では。

◇

いやあ…。

初めてだというのに…ちよつとSっ気が出てしまった…。

まだ空気に流されているのだろうか。

…あれは、俺の真性だろうけど…。

みほ…なんかすっごいエロかった。

初めてだとは思えない程、乱れていた。

だからだろうか？　こちらもちよつと暴走してしまった。

…。

ん。

なんか先が暖かい感触。

それと掴まれる感覚。

まだ…みほ？

「…では」

目を開けた先。

すごい光景が広がっていた。

華さん。

俺を跨ぎ、自身の秘部を指で開け…うあああ!!　エツロツ!!

でつか!!!

じゃない!

「華さん！　なにやってっ!!!」

「っ!!」

…遅かった。

違うなあ…。

これ…止めさせない為なんだろうなあ…。

一気に腰を下ろし…躊躇なく…俺を飲み込んだ。

また壁を破る感覚…。

熱い…体温…。

「お…思ったより…痛…痛いです」

「」

「でも……なんででしょう？　それが…心地いい…」

「…」



」

横で、みほが目を見開いてる…。

ハツとした瞬間…手で、目を覆った。

「……あれか……私……許可……」

なんか嘆いている…え？

「…大丈夫ですよ？ 隆史さん」

「……何がですか？」

「…みほさんから、お許しは得てますから」

「なっ!？」

そういえば、さつき華さんとみほがなんか喋ってたな…。

でも……え？ 嘘だろ？

「んっ!」

考える暇は与えない。

華さんが動き出した…。

俺の胸に手をつき、腰だけを上下させて。

「はっ…はっ…はっ!」

もう一心不乱…どうのだろうか？

笑顔が少し…怖い。

「みほ…どういう……」

「…む…無意識に返事しちゃった…」

「はあ!？」

取り敢えず、華さんの太股の付け根を押さえ…それを止めさせる。

「……っ! ん……やはりちよつと、痛いです…」

「……」

そのまま、華さんがみほの顔を見る。

俺も同じくみほを見る…。

何してんの…みほ。

しばらく時間が流れる…。

「あの…みほ」

「…はい」

「これ……完全に浮気になるんですけど…」

「……」

「それを許可って…あの？」

「……」

「みほさん…」

「……」

「少し…：卑怯ですね…」

「……っ」

睨むわけでもなく、ただ寂しそうに華さんを見つめるみほ。

それを泣きそうな顔で、見つめ返す華さん。

普通…逆だろうに…。

「……い」

「い？」

「一回…：だけ……」

—  
—  
—

元々、根が優しいというか…：なんというか。

華さんも初めて…：というのも後押ししたのか…：本気で許可をしてしまった、みほ。

その問答が、丁度いい休憩になったのか、華さんも回復し、段々と慣れていった。

許可を得たから…：と言って、素直に従うってのもなんだけど…：この特殊な状況。

やっぱりどこか、みんな壊れていた。

華さんは、やはり凄かった。

いやあ…：でかい。

騎乗位で動けばそれに合わせて、下乳が揺れる揺れる…。  
初めは苦しそうな息遣いだったのだけど…痛みに慣れた辺りで、甘い声に変わっていった。

やはり…睨んだ通り…華さんはM気質が強い。

騎乗位から、正常位。

試してみようと片手…人差し指と中指。

薬指と小指で、左右の乳首を掴み引つ張り上げて攻めてみた。

もう…なんか。痛いのだろうけど……すっごい乱れていた。

「ずっ!! ずるいです隆史さんっ! んぁ!! それはぁ!! 動く度におぁぁ!!」

ゾクゾクと背筋に走る。

「……」

みほりん…やめて…睨まないで…。

……。

みほを片手で抱き寄せ、唇を奪い、舌で口内を犯す。

はい。誤魔化してみました。

ニチャニチャと、音を立てて…それにまた応える、みほ。

「じゅ…じゅるい…たか…んっ!」

はい。エロイです。

もう……本格的に狂い始めていた。

結局、華さんとも一回で済む訳が無かった。

何度もイカせ、何度も汚した。

いやぁ…華さんは胸に出したくなるよね。

みほと並ばせて、同時に攻める。

…華さんも、みほと同じく精液に興味が出たらしく…吸い出すように龟头を吸る。

最初の様に二人揃って、胸で改めてもらったり…。

……。

冷静になって考えて見る。

何してんの俺。

死ぬよね？

多分、近いうちに死ぬよ。うん。

…ただ。一瞬最中にも「死」を一回感じた。

華さんに唇を合わせよ様とした時、両手でみほに顔を掴まれ、強引に正面を向かされ…。

凄い笑顔で。

「キスハダメ♪」

と、一字一句…はつきりと言われた。

怖いよ…なんで？

全てが終わり…皆冷静になった時も…：まあなんだ。  
酷かった…恥ずかしいやら、罪悪感やら…。

…：はい。

りぴーとあふたーみー。

死ぬよね？

多分、近いうちに死ぬよ。

それが…分かったのが…その日の朝。

朝の5時。

結局、疲れきって二人は寝てしまっている。

俺はもう色々と諦め…部屋の前に出て、手作りの筋トレ用ベンチに座っていた。

脱欲感やら罪悪感やら…色々と感じていた。

まあ……うん。

オレ、メツチャクス野郎。

はあ……。

そして、俺は重大な事を忘れていた。

…。

来ると言っていた。

また来ると。

これがいつもの関係と……習慣は変えられないと…。

忘れてた…。

本気で忘れてた!!

「来たわ!」

「い……いらつしやい」

「……」

カチューシャ達の事、すっかり忘れてた!!!

「……」

「……ん? どうしたの? ノンナ」

入口付近をゆっくりと……ウロウロと無言で歩きだす……ノンナさん。

一瞬目を細め、扉……玄関扉を……ものすごい殺気を込めて睨みだした

…。

「ノ……ノンナ?」

カチューシャが本格的に怯えだした…。

ツカツカと俺の前に立つと、俺の首元に顔を近づけた…。

スーッと鼻で息を吸う音…。

……。

え?

「……カチューシャ」

「な……何?」

「今日は、帰りましょう」

「え……なんでよ」

「今。私は隆史さんの部屋には、死んでも入りたくありません」

「えー…有無を言わせない様な黒いオーラ。

カチューシャも無言で首を縦に振っている…。

「…二人」

「

ひっさしぶり!! ひっさしぶりに見た!! この目のノンナさん!!!

ゴミを見る目をされたあ!!

「……」

「

「まっ……隆史さんの事です…、どうせ流されて関係を持ったのでしょう」

「

「…そっちがその気なら……考えがあります」

「!？」

耳元で、なんか怖い事言ってる!？」

痛!？」

パンツ! と、音が出る程強く、両の頬を両手で挟まれた。

……。

そのまま…2回目ですね。

冷たい唇の感触…じゃない!？」

そのまま、口の中に舌が入ってきた。

え!？」 何してんの!？」

目を見開くと…ノンナの目が上を向いていた。

見えるはずが無いだろうに…どこか別を見ていた…。

チュパツつとわざとだろう…音を立てて唇を離すと、扉の横。

出窓部分を睨んでいた。

真っ赤になって固まっているカチューシャが見える…。

!？」

後ろ!？」

背後からもすっごい、殺気というか気配を感じる!!  
ふ…二つ!!!

「では隆史さん」

」

「今日はこれで失礼します」

」

「…隆史さん」

「……はい」

「Я не буду давать от」

……諦めませんって。

後ろの殺気がまた濃くなった

◆ ルート正史 ◆ 西住 まほ く夏祭りく

お囃子が聞こえる。

少し離れた、少し大きな神社。

家にも微かに聞こえてくる。

服を脱ぎ：そろそろ迎えに来る、隆史に見せる為に着替えている。

そう：見せる為。

それは、みほも同じのようで、昔から着ていた物では無く、新たに新調した。

白地に水色の花柄。

紫陽花。

：浴衣。

どうにも隆史は、昔から私に白色の衣類を着せたがる…。

まあ制服もそうだが、普段：黒色が強いものを好んで着ていたからだろうか？

ならば、期待に答えよう。

…。

私は焦っていた。

夏場に入り、もう何ヶ月かすれば、私は今の中学を卒業。

一人高校に入学：学園鑑へ…。

そうすれば、みほと隆史が二人きりの状態になってしまう。

：焦るだろう。

妹を敵視：などしたくはないが、この事に関しては別だ。

圧倒的に、二人の時間が増える。

私は…。

積もる思いもあるが、顔には出さない。

態度にも出さなかった。

戦車道があるから。



私は、西住流を継ぐのだから。

まあ：みほには、明らかにバレているだろう。

……多分、お母様にも。

しかし、相変わらさずお母様は、隆史にだけは甘い。

たまに嫉妬をする程に。

普段を律し、自分に厳しくして来たつもりだ。

西住流らしく。

西住流として。

：ただ、隆史に関する事になるとどうにも態度がおかしくなる様だった。

それは、みほにも指摘された。

私自身は気がつかない…。

帯を締める。

襟首を但し、着方を確認。

シユツつと布が擦れる音がする。

その時、偶々机の上の雑誌が目に入った。

クラスメイトより、借りた雑誌。

私はどうにも、世間に疎い。

こういった、年頃の娘が読む様な雑誌は全くと言っていいほど縁がなかった。

ピンクやら金やら、やたらとキラキラとした、装飾の雑誌。

：今からの事を、クラスメイトに話した時。

一度読んでおくと、無理矢理に渡された雑誌。

『一夏の体験 特集！』

：何やら如何わしい内容だったが：何故だろう、全て読んでしまった。

学校でも、隆史は酷く疎かった。浮いた話の一つも出てこなかった。

：あいつは、戦車道を履修していた者に、妙に人気があったのを目覚めすらしていなかった。

みほから、隆史が一度、告白らしきものをされたと報告があった。

本人は、告白と認識もしていなかったようだが…。  
雑誌の内容の様に、隆史は軽薄な男では無いと思う。  
思うのだが、所詮隆史も男だ。

『西住さんが、強く迫れば一発だよ!!』

そう…強く、クラスメイトに言われたのを思い出した。

…

……………ん？

これ、バレてないか？

「…ん」

部屋の扉がノックされた。

菊代さんだろう。

…来たか。

『まほお嬢様。隆史君が、いらっしやいましたよ?』

「わかりました」

待ち人が来た。

しかしよくお母様が、今回この様な時期に遊びに行くのを許してく  
れたものだ。

しかも夜に…。

地元の夏祭り。

去年まで夜に出かけるは、禁止されていた。

なぜだ？

いくら隆史が頼んだとしても…浴衣まで新調してくれて…。

先週から、隆史の様子がおかしくなった事と何か関係があるのだろ

うか？

…。

まあいい。

玄関で待たせたままの彼の元に行こう。

もう一度、自身の格好を但し、鏡を確認。

映る自分の顔を見て…覚悟しよう。

みほには、悪いが…今日、計画を実行しよう。  
あの絶望的に鈍い男に。

—  
—  
—

「……」

「……」

「こんばんは！」

玄関へ出向いた先…その絶望的に鈍い男は……。

「…いい加減、この子…俺に懐いてくれないかなあ…」

飼い犬に手を噛まれていた。

…あの、私達と一緒に助けられた子犬。

育ちに育ち…すでに成犬となっているのだが…。

「ウウウウウウ!!」

隆史の手を噛みながら、唸っている…。

この子は、来客にも懐く、人懐っこい犬。

番犬にもならない…と、お母様が珍しく笑いながら嘆いていたのを  
思い出す。

なのに…。

「…隆史君、痛くないの?」

「痛いな!!」

何を嬉しそうに…。

噛まれながらも頭を撫でている…。

何故か昔から、隆史にだけは懐かない。

しかし、隆史自身はこの子が好きなようで、毎回こうして噛まれな  
がらも頭を撫でる。

「いやいや、二人共。随分と可愛い格好だね」

「…え…エへへ」

みほは、玄関に先に到着していた。

いつもとは違う、少し濃い色模様の浴衣。

向日葵の浴衣。

白地なのだろうが、向日葵の柄大きく、少し派手…。

しかしみほには良く似合った。

というか…。

「隆史は、臆面もなく…良くそういった事を言えるな…」

「そうか？」

「あまり度が過ぎると、軽薄な男に感じるぞ？」

「…気をつけます」

「そうだな。注意しろ」

…。

「お姉ちゃん」

「なんだ？」

「…顔赤い」

「……」

「お姉ちゃん、可愛いって言われる事、少ないしね」

「……」

「中学生なのに、綺麗とか凛々しいとか…そういった事ばかりだしね…その所、どうなの？ 隆史君からすると」

みほ!?

「んあ？ まほちゃんは、可愛いだろ」

「」

……。

な…なにを…。

「隆史君…早々に家の娘を、口説かないで下さい」

「お母さん」

奥からお母様が顔を出した。

何故か、目が少し優しかった。

「く…口説く事になるのか…これ」

「自覚無しですか…」

「…隆史君、なんですか？ ジツと見て」

「いや…しほさんは、浴衣じゃ無いんだなあって…」

「そうですね…ってどういう…」

「いえ…普通に見たかったとおおいったあ!!!?」

すでに下駄を履き、出かける準備が終わったみほに、横から抓られていた。

…私？ 私は掴んでいるだけだから、痛くは無いだろう。うむ。

「…隆史君」

「……隆史、早々にお母様を口説きにかかるな」

「ちっ！ 違っ！」

なにをお母様も年甲斐もなく、満更でも無い顔をしてるのですか。

…そのお母様は、仕事で出かけると、私達に言いに来た様だ。

あと、あまり遅くならない様にと注意を。

普段なら、菊代さんを通して言ってくるのだが…何故か今日は直接。

「…隆史君」

「はい…」

「……来年…」

「……」

「ま…まあいいです。…隆史君もあまり遅くならない様に」

珍しく、言い渋ったお母様…。

やはり何か有るのだろうか？

「あと、ちゃんと虫避けになって下さいね？」

「…ああ。はい」

虫？

「貴方が、その虫にならない様に」

「……信用が……無い……」

なんの話だろうか？

夜道。

夏祭りの会場近く。

あの日もその準備が行われた日。

：私達が襲われた場所：その近くを通りかかる。  
色々と感慨深い。

暗い夜道を歩いて来たが、そこに近づくと段々と明かりが見えてきた。

：考えてみれば、みほと一緒にこう出かけるのも久しぶりだった。  
戦車道で忙しく、中々自由な時間が取れなかったのもある。

…。

感慨深いが：もう大丈夫。

その場所の前を通っても、なにも思わない。

ある意味：隆史と出会った場所だ。

違う意味で：感慨深さを感じた。

それはみほも同じだろう。

そこはもう大丈夫なのだろう。

：みほは、別の意味での傷を負っているから。

もう別の話なのだ。

あの事件以降、私達は腫れものに触れる：様な扱いだった。

なまじ有名な家柄の為、それはしばらく続いた。

それは大人達しか知らない話。

同世代の人達からは、西住流としての扱いは感じたが、それはそれ。

ある意味で普通だったから良かった。

「おっ！ 隆ちゃん！ 両手に花だね!!」

「…おばちゃん…やめて…ここ同級生達も多分いるから…大きな声で言わないで…胃が！ 死ぬ…」

通りがかかる地元人。

出店や何やらで、やたらと声をかけられる。

…隆史は、有名人だった。

普段から、同級生達より大人の人達と接する事が多かったらしく、顔見知りが多かった。

本人曰く、大人の人達と話す方が楽との事。

そんな事だから、同級生の友人が少ないのでは無いのか？

隆史も珍しく浴衣を着ていた。

紺一色の浴衣。

普段ならこういったイベントもあまり参加しないのに…珍しく、そんな格好までして。

というか…隆史は、ガタイが良いから、そういった服装は…ガラが悪いな。うん。

…虫除け…ね。

「隆史君！」

みほもみほで、珍しく燥いでいる。

出店の間を、隆史の浴衣の裾を引き急かしている。

…こここの所、みほの性格も落ち着いたと思っただけにな。  
根本的なモノは変えられないのだろう。

隆史は、みほの性格が、中学生位から落ち着いてきて良かったと言っていたが…まだまだだな。

実際は、小学生高学年位から。

段々と内気な性格に変わっていった。

昔の様な…無茶はもうすまい。

…多分、その原因は隆史にあるのだが…言っただけやらない。

「……」

「ん？ どうした隆史」

「隆史君？」

「い…いや…何でもない」  
「？」

少し表情が曇った隆史。

みほと一緒になって、久しぶりに3人でいるというのに…。

「…こりゃ…学校で何か言われるなあ…」

小さく呟いていた。

ああ…なる程。

同級生でも見かけたか。

……。

ふむ。なる程。

見られているのか。

…ふむ。

雑誌では…確か。

隆史の腕を取る。

「…何してんの、まほちゃん」

いや、違う。

これでは関節を決めにいく時だ。

こうだったか？

腕を絡め、肘を曲げる。

「お姉ちゃん!？」

「腕を組んでみたのだが？」

注目が一気に集まる。

それはそうだろう。

私達、姉妹は有名人だ。

…特に私は。

地元では知らぬ者は、少ない程だろう。

少し赤くなっている隆史が…何故だろう。

…そんな彼を見て、嬉しく感じる自分がいた。

年下の…背の高い彼の顔を見上げ…聞いてみる。



「…どうだ？ 隆史？」

そろそろ、21時。

久しぶりに燥いだと、みほに少し疲れが見える。

まあ…少しの休憩。

出店を周り：行く先々、囃し立てられる隆史。

みほもいるので、早々に二人になど慣れないと思っていたのだが：流石に地元の祭り。

隆史とみほ。そして私の同級生。

合計してしまえば結構な人数。

思いの他多くの人と遭遇してしまい：何もできなかった…。

夏祭りも終わり間近の最後の活気で、盛り上がっている。

少し離れた境内。

「コワイコワイコワイ…ファンクラブ…コワイ」

たまに隆史が何かを呟いているな。なんだ？

腕を組んだ辺りからか？ たまに呟いている。

「さ…さて、そろそろ帰るか？」

最後までいると、帰りの帰宅ラッシュに捕まると…風情も何もあつたものじゃない事を隆史が言い出した。

こういった時は、最後までいるものだと思うのだが…。

と…どうか。

…計画…まったく何もできなかった。

私達が一緒にいられるのは、これが最後かも知れないというのに。

「う…うん」

みほは、もう少し愚図ると思ったのだが…隆史の提案に素直に…

ん？

「…みほ。大丈夫か？」

「お姉ちゃん…だ…大丈夫」

普段、履き慣れない物を履いた為だろうか。

下駄の鼻緒の根元に少し、血がついていた。

親指の関節部分が、少し擦れて充血している。

「…歩けるか？」

「大丈夫…」

そう言つて立ち上がり…ゆつくりと歩き出した。

……。

ダメだろう。

帰り道。

暗い為シルエツトが浮き彫りになり、余計に目立つ。

歩き方が、少しおかしい。

歩行を隆史と二人、一緒にみほに合わせて歩いていたが、やはり少

し心配になる。

「ふむ…まあ…いいかなあ…」

「…隆史？」

「みほ」

「な…なに？」

先程から何か少し考えていた隆史が、やっと答えを出したとばかりに声を掛けていた。

なんだ？

「……怒るなよ？」

「え？」

…抱き上げた。

両腕を使い、足の関節部分を刈り取り…というか…。

「ひゃあ!？」

なんだ、その慣れた動きは。

「に…睨まないで…」

「随分と、慣れていたな」

「…こんな事するの初めて…ですけど?」

「アワワワ…」

あれだ…俗に言う、お姫様抱っこ…というやつだろう。

雑誌に載ってた。

載ってた!

「いや…おんぶしても良かったんだけど…そっちの方が恥ずかしく思ってた…」

「…その格好の方が恥ずかしいと思うが?」

「いや…だって…浴衣だから…足とか結構出るぞ?」

「……」

「シワにもなるし…」

「……」

「…何故、まほちゃんが怒ってるんだろう…」

…なんだみほ。

その顔は。

何故、勝ち誇っている。

幼少の頃の表情と一緒だな。

しかし顔が赤い分、変に強がっているな。

暗いが、しっかりと分かるぞ?

「あー…みほ」

「なっ! なに!?!」

「…できれば首辺りに、腕を回してくれるか?」

「…なっ!?!」

「その方が持ち運びに、ら…く…な…まほちゃん!! なんで更に睨むの!?!」

「原理は分かる。分かるが…なんだ? みほは、重いか?」  
「!?!」

「…いや、重くは無いけど…目が怖いんですけど…」

「ならば頑張れ。男だろう」

「……」

まったく。

結局何もできなかつた。

これを思うのは何回目だ？

無言で、みほを抱き抱え、歩く隆史。

結局、最後には赤くなり、無言で縮こまっているみほ。

無言で、その横を歩く私。

…まあいい。

今のこの時が、心地いい。

態々、壊すこともあるまい。

あまり時間は無いが…まだ卒業までにはある。

そのうちに……。

…離れる前に。

思いを伝える事も…できるだろう。

自然に笑う。

今は、この時間を楽しもう。

「…なあ、まほちゃん。みほ」

無言に耐えかねたのか、隆史が口を開いた。

なんだ？

少し声が真剣だった。

無言で歩く、この時が少し名残惜しい。

「…母さんのさ。契約が今年いっぱい、切れるんだってさ」

「おばさんの？」

足が止まった。

「お姉ちゃん？」

…分かった。

私には、すぐに分かった。

契約。

隆史のお母様は、西住流師範代。

全国規模で飛び回る、ある意味珍しい師範だと聞いていた。

もう、何年も熊本にいたので、ここに腰を落ち着けたと…そう思っていた…。

呆然と下を向く私を見て…苦笑しているかの様な…そんな声で話し出す。

「まだ、正確にいつになるか、わっかんないけどさ…」

その…契約が切れた？

「間違いなく、まほちゃんの卒業前には…」

なんだ…。

何故、今言う。

何故この帰り道。

今この時に言うのだ。

「俺は転校する」

随分と甘い待遇だったそうだ。

隆史が小学生の為、教育の為にある程度成長するまでは…と、随分と契約期間を伸ばしてもらっていたそうだ。

そこには、お母様も絡んでいた。

…まあ当然だろう。

あの破天荒な、隆史のお母様。

戦車道の講師…護身術の講師としての二足の草鞋。

昔から引く手数多だったようだ。

もう限界だった。

最長期間が過ぎ……これ以上の引き伸ばしはできない。

これは決定事項なのだ……淡々と語る隆史。

みほは、動かない。

隆史の腕の中で硬直している。

目を見開き、少し……震えている。

なる程。

それで、今日の事をお母様はお許しになったのか……

3人での……最後の……

そのまま無言で、暗い夜道を歩く。

無言。

先程までの雰囲気では無い。

とても憂鬱な……

とても……

みほは何も言わない。

たまに様子を見ると……隆史の浴衣を握り締めている。

表情が……わからない。

我が家の光が見える。

玄関先、菊代さんが出迎えてくれた。

私達の表情を見て……何も言わないで、隆史の顔を見ていた。

ああ……菊代さんも知っていたのか。

「ま……まあ、まだしばらくはいれるからさ……」

そんな隆史の言葉を見無視し、みほは無言で、自室に早足で消えていった。

足もまだ痛いだろうに。

……

……

全身の毛が逆立つ…鳥肌が立つ…。

そんな感覚が先程から、体を駆け巡る。

…焦った。

ここまでの感覚は…人生初だ。

なかった。

全然、時間が無い。

いつだ？ いつ隆史は…いなくなる？

「ああ…大丈夫ですよ、菊代さん。明日にでもみほと、ちゃんと話してみますから」

「…そうですか？」

「ええ」

菊代さんと話している。

そろそろ帰ってしまう様な雰囲気だった。

相変わらず年上には、気持ち悪い位の丁寧な喋り方…。

…ダメだ。

今日ここで帰しては。

「では…俺はこれで…」

「ダメだ」

「まほちゃん？」

「…もう夜も遅い。未成年が夜道を一人で歩くな」

「…！ あ、それもそうですね!!」

菊代さんが何かを察してくれた。

明るい口調で、私に合わせてくれる。

「菊代さん!？」

「…連絡はしておく。だから隆史…」

「…待て、待て待て！ それは小学生の時だったからであって!! 今は、まずいだ…」

「泊まっていけ」

有無を言わさず押し切った。

—  
—  
—

取り敢えず、話があるからと自室に招いた。

…そういえば、隆史を自室に入れるのは…小学生の時から…無かつたな。

それは、みほも同じだろう。

……ふっ。

違う。

そうじゃない。

勝ち誇ってどうする。

「……」

居心地が悪いのだろうか？

部屋の中で正座している。

なんだ？

頭を抱えている。

「…年頃の娘が…夜に男を自室に招くなよ……」

相変わらず、お父様みたいな事を言っているな。

「…素直に流されて入る、俺も俺だけ…」

…嘆きが長いな。

「私は…そうだな。飲み物を用意するから少し待っている…？」

「…何故疑問形…」



「少し退室するが…あまり物が無い部屋だがな、あまりジロジロ見ないでくれ」

「…見ないよ」

「…衣類箆筒とか漁るなよ？」

「漁らないよ!!」

「ちなみに…下の段から2つ目が、下着…」

「どうしろと!?! その情報を俺に教えて、何かメリットあるの!?! まほちゃんに!!」

「……」

「…なぜ黙る」

「…本当に漁らないのか?」

「なんで、残念そうなんだよ…」

ぬ…私に興味が無いのだろうか…?

隆史も年頃の男だというのに。

それは、私の焦りを加速させた。

……。

何故だろう…何か間違っている気がするのだが…。

ま…まあいい。

さて。

自室を退室し、菊代さんが空けていた台所まで一直線に来た。

飲み物を用意する。

何の飲み物かとは言っていない。

あの雑誌に書いてあったな。

男の本音を聞きだすには…。

一夏のアバンチュールの初期動作…とか、なんとか、かんとか…。

蝶野さんの話によると…随分な事になるそうだしな…隆史の場合  
は特に。

まあ…蝶野さんは、蝶野さんで何故その事を知っていると、随分とお母様に追求されていたが…。

探せばあるだろう。

お母様の物が。

私達の前では飲まないから、バレていないつもりなのだろうか？

…あの酒好きが。

コップにつき、氷を入れる。

…くさい。

あまり好きな匂いではない。

バレないだろうか？

まあ：大丈夫だろう。

なんせ隆史だ。

聞きたい。

本音が聞きたい。

今日の計画とは大分違ってしまっただが、あまり躊躇している時間が無いのが分かった。

特に私は…。

隆史と会ったり、話したりする機会がみほと比べると極端に少ない。

もう一度言う。

私は焦っていた…。

思いを告げる…その前に…：隆史の気持ちを知って起きたかった。普段ならこんな卑怯な事はしない。

でもなぜだろう…。

お母様の一升瓶の中身をコップに移す時、私は…無意識に笑っていた。

「隆史？」

「…はい」

「一心不乱に、何を数えているんだ…」

「…素数」

「はっ？」

お盆に載せた「飲み物」を持って、部屋に戻ると、必死になって素数を数えていた隆史がいた。

素数？

「まあいい」

正面に同じように正座で座り、お盆のまま差し出す。

お盆の上にはコップが二つ…。

当然、私の方を向いているコップの中身は…隆史とは違う。

少し琥珀がかった「飲み物」

「…あ…ありがとう」

「―で？」

「…で？ つて？」

「漁ったか？」

「漁らねえよ!!」

―チッ

「なぜ舌打ち…」

「…」

「な…なに？」

「飲まないのか？」

「…の、飲むけど…」

「…」

「…」

「なに!？」

「いいから、早く飲むんだ」

「…」

「…」

「まほちゃん」

「なんだ？」

「なにか、企んでる？」

「……」

「……」

なぜ、こういう時だけ鋭いのだ、こいつは。

では、まず誤魔化すか。

「…隆史、お前は本当に転校してしまうの…か？」

「……」

私はその話題に言い淀んでいると思ったのか、少し真面目な顔になった。

まあ…それもあるのだがな。

「んー…しほさんが、何とか俺だけは残れる様にできないかって、考えてくれているみたいだけども」

「お母様が？」

意外だ…それは意外。

隆史に甘いのは昔からだ…そこまで。

「そ、まあ教育上やら何やらで、無理だったみたいだけどもね」

「……」

ここで「飲み物」に、口をつけてくれた隆史。

良し！

「まあ…正直…」

「なんだ？」

「俺が転校するのは…みほの為に、良い機会かなって思ってたな」

「…みほの？」

隆史も少しは、緊張してくれているのだろう。

「飲み物」を一気に飲み干した。

一瞬、眉を潜めたが、話の腰を折りたくないのか、そのまま続ける。

「まほちゃん。ハッキリ言う」

「…なんだ？」

「みほは、俺に依存してる」

「……」

「コレは、みほの為にならない」

「……」

「ガキの俺が言うのもなんだが…ね」

「……」

「……」

隆史の言いたい事も分かる。

昔からみほは、隆史と一緒にいる。

小学生から、中学生にかけて。

特に異性と共にいるみほの評判は、正直あまり宜しくなかった。

まあ中学に入り、私と同じく戦車道を履修してからは、時間があまり

取れなくなり、その時間は減っていったが…。

「あの事件の事もあるけど…どうにも俺をヒーロー像として見ている

のかねえ…。まあ俺自身の事もあるし…だから」

「…だから？」

「…転校する事を素直に受け入れた？」

「……」

「だから…まほちゃんも…『待て』」

ダメだ、それは言うな。

私も…みほと一緒だ。

お前に異存しているつもりは無いが…無いのだけど…。

みほの気持ちは理解できる…できてしまう。

何か言おうとしたが、視線を落とした先、先程隆史が飲み干した、空

になったコップが目に入る。

また、話の腰を折ってしまう事になるが…。

「…空になったな…もう一度入れてくる」

誤魔化した。

言わせない為に。

言い返してしまいそうだった。

ヒーロー像？

なにを言っているのだろうか？

少なくとも…。  
私達、姉妹にすれば…お前はソレ、そのモノだ。  
助けてくれた。  
それどころが、何年も一緒にいてくれた。  
支えてくれた。  
私だって女だ。  
心が折れそうになる事もあった。  
だけど、隆史。  
お前は、あの病室でした約束の通り。  
ずっと…私達を見てくれてたじゃないか。

「……」

逃げるように出てしまった自室。  
少し早足で、台所に向かう。  
台所にて…また「飲み物」をコップに移す。  
今度は、笑いなどしなかった。  
……ただ、少し…視界が揺らいだ。

「飲み物」を入れ直し、もど…いや、もうこのビンさら持っていこう。  
部屋の外にでも出して、視界に入れなければいい。  
自室の扉の前、逃げ出すように出てしまった為に、入るのに躊躇し  
てしまう。

だが、こうしている訳にもいかない。  
…。

「…何してる隆史」  
ドアノブを捻り、ドアを開けた先…隆史が私の机の前に立っ  
てた。

な…なんだ。

様子が少しおかしい。

「あ…ゴメン。まほちゃんも…こういつた雑誌を読むのかと」

「!!」

「こ…これは！ クラスメイトに借り…もとい！ 押し付けられたのだ」

「そう…なの？」

「そうだ」

急いで近づき、机にお盆を置き、ひったくる様に隆史の手から、雑誌を奪う。

ぬ…。

「見たのか？」

「中身？」

「他になにがある」

「ザツと…全部見た」

「…」

少し耳が熱い。

少々内容が如何わしい為、後ろめたい…。

「ま…いいんじゃないか？ まほちゃんも…年頃だし…まあ…程々にね」

「」

くそ！ 下手に言い訳をすると墓穴を掘りそうだ。

「の…飲め」

ん？

コップを出すと、何も言わないで素直に飲み始めた…。

そうだ、やはり隆史の様子がおかしい。

口調も…少しゆっくりになり、所々…言葉が飛んでいた。

……これは。

2杯目をすぐに飲み終わらせた…。

なんだ？ …目が少し座っている。

これは!!

◇

フ…

フフ…

フフフフ…

なる程。

こうなるか。

酔った隆史はこうなるのか。

色々と試してみたが、なる程なる程。

蝶野さんの言っていた通りだな。

非常に…怖いくらいにバカ正直に言うことを聞いてくれる。

普段なら教えてくれない事も、今ならなんでも聞けば答えるてくれる。

照れているのか何なのか分からないが、普段なら絶対にしてくれない事も今では思いのままだ。

フフ…これは…いい。

「…まほちゃん」

「なんだ？」

「…何かこの行為に意味は…あるのか？」

「…無いな！」

「そうか…」

ふっ。

これはいい！

隆史の頭は今、私の膝の上だ。

…一度やってみたかった。

膝枕というものを。

たまに見せる疑問は口にするが、答えれば特に何もしない。試しに言ってみるものだな。

素直に従った…横になった隆史の頭を…軽く撫でている…。

いいな！ これはいい!!

「隆史」



「なに？」

「みほに、この…膝枕とか…して貰った事はあるか？」

「無いね」

よし!!

…。

「…なあ、隆史」

「はい」

……。

呼びかけながら、頭を撫でる。

手で硬い髪感触を楽しむ…。

何故だろう…。

こんな…酒まで飲ませて…卑怯な真似までして、聞き出そうとした隆史の気持ち。

少し、みほの事を口にしてしまったら、凄まじい罪悪感が襲ってきた。

それに…こんな事で…。

この膝枕で、私の心が満足してしまった。

…。

もういい…。

転校の事は…明日また、ちゃんと話そう。

みほも交えて。

正直言ってしまうば、隆史の本気の本音を聞くのも…少し怖かった。

…だから、もういい。

もう少し、あと少しこうしていさせてくれれば…今日の所はこれで満足だ。

「…そういえば」

「なんだ、隆史」

「さっきの雑誌にも…似たような……事が書いてあったような…」

「……」

「…彼氏を膝枕に誘導……痛いんだけど…まほちゃん」

「忘れろ」

少し頭に爪を立てた。

どの記事の事は、すぐに思い出したが、あんなモノと一緒にされるのは心外だ。

あれはもう、如何わしい類の事だ。

それに…だ。

「…隆史。少なくともお前は、あんな事出来ないだろう？」

「…あんな事？」

私をちゃんと、異性として見てくれているかも心配する程の朴念仁だというのに…。

「雑誌の内容？ なに？ ヤレバイイノ？」

「……はっ。できるものならな」

軽く笑い流し、いつもの様に軽口で、軽くからか…。「分かった」

……。

ん？  
今、何といった？

「!?」

撫でる事に一生懸命だった、自身の手と腕を、両手のまま宙に浮かべた。

……。

隆史の手が、太股を触ってゆつくりと撫でていた。

その…浴衣の裾の間から滑り込ませて…。

太ももの内側に指が入って来る…。

「なっ!? 隆史!？」

いつの間にか、体を起こしていた隆史。

そのまま私の前に、真正面から向かってきた。

座っていた私の肩を、顎で軽く押しながら…覆い被さろうと…。

両手を後ろでに支え、なんとか倒されないように体を支える。

違う、いつもの隆史じゃない。

最近では、私の体…というか、手にすら触れるのを躊躇していた隆史なのに…。

「まっ…待てたっ…んん!!」

抱きしめられる様に、背中に手を回され、首元に…隆史の唇の感触…。

押されてしまっていた為に、脚を崩した所を、更に隆史の足が、私の足の間に入ってきた、

後ろに逃げようとしたのだけど、こちらは浴衣。

裾を膝で踏まれてしまっていた為に、動きが取れない。

…背中から、布が擦れた音がした。

少し、乱暴にだけど、帯が緩められたのか？

簡単に解ける訳も無いのだけど…。

…待て。

…帯に触れた？ 緩めた？

帯の根元付近の着物の襟を指で掴み、引き抜く様に、上にずらした。シユツと音を立てて、少し動いた。

菊代さんが着付けを手伝ってくれたのだから、ほぼ完璧な着こなし。

…帯は簡単には解けない。

要は…それを知っていて…尚且つ…。

上半身の浴衣が、大分気崩れていると分かる。

…これを…隆史が随分と…慣れた手つきで…行った？

驚き、固まってしまった私の首元に隆史の顔がある。

…気が付けば、完全に押し倒されてしまっていた。

足もとの裾は完全にめくれ、その…下着の部分まで手と足で開かれてしまっていた。

上半身は、帯で腹周りは締められていた為、首元から肩にかけて…胸元を露出しながらはだけさせられた。

……。

一瞬。

放ってしまった間に…一気にここまでされた。

「んっ!？」

後頭部に、隆史は左腕を入れてきた。

半身になって、私の横に並ぶように寝そべる。

「んんっ!」

空いた右腕で、太股の付け根部分、関節を筋をなぞる様に指を這わせた。

そのまま親指を下着の間に入れたのだろう。異物感を感じた。

…隆史だよな？

あの、隆史だよな!?

親指を曲げ、下着の端を掴まれた。

そのまま下に…。

「まつ!!… まっつ!!… んん!!」

唇に熱い体温。

「待て」の一言を言わせて貰えない。

……唇を奪われた。

「んう…チュ……うん」

下唇を舌と唇で弄ばれている。

下着はすでに、太股まで脱がされていた。

無意識に腰を浮かせ、自分からそれを受け入れていた。

口の中に、舌が入ってきた。

ニチャニチャと音が、頭に響く。

すでに私自身、もう身動きを取る気なんて無く、素直にそれを受け入れた。

「は……ハッ……んっ……チュ……」

隆史の顔に手を添え、口内から出た舌を絡ませる。

たまに私の舌を吸われ、なんとも言えない感覚が、脳髓を走る。

隆史が女として私を見てくれていた。

こんな状態だけど……その事実が……思考を支配した。

嬉しかった。

口から離れた隆史の唇が、時に首へ……胸元へ……私を味わうかの様に……動き回る。

「んっ……はあー!」

遊んでいた、隆史の右手が、私の恥丘へと届く。

ニチャっとした感覚がする……とか。

指先が熱い……とか。

囁くように、私の耳元で隆史が呟く。

太股を撫で回す指と手。

それが毛を逆立てるかの様に、ゾクゾクとした感覚を誘導する。

「あ……あ……んっ!」

声を出すのが恥ずかしい。

必死で我慢するが、どうにももうまくいかない。

指が秘部を刺激する。

ニチャニチャと……クチュクチュと……隆史は、音をワザと出すように。

……ただ……快樂とは別に……恐怖感も生まれてきた。

隆史が、隆史では無いみたいだった。

怖かった。

流されだした自分も怖かったのだけど…隆史が別の誰かに思えて怖かった。

「はあ……はあ……んん！ あっ!! ああ!!」

秘部の表面を撫でながら…時に…良くわからないが…一部を摩擦れると、脳が痺れる感覚に襲われる部分を…必要に弄ばれた。

「はっ！ はっ！ はっ！ んあ!?!」

入口部分…というのだろうか？

散々に焦らされていると感じたら、不意打ちで快樂の一撃が襲ってくる。

その繰り返し…。

何度も。

何度も。

他人に触れられる…予想外の感触。

隆史…。

「んっ!! はっ!! はっ!! んんっ!? んんああ!?!」

来る…。

なにか…大きな…。

グチュ

指が入った。

「つつつつ!!! んつつんんん!!!」

視界が…頭が…真っ白になった。

「はあ……はあ……」

「……」

「ハア……ハア……ハア……」

「……………」

隆史は何も喋らない……………。

「んん!？」

ボーっとしてしまっている…思考がまだハッキリとしない目線で、隆史を見る。

いない…。

隆史が横にいない。

いや…真上にいた。

これは…。

荒い息遣い。

明らかに目がおかしい。

充血して…光が無く。

そして…。

ある意味で、私を見ていない。

両手で腰を持たれ、浮かされた。

うまく…考える事ができない。

…

……………

秘部に熱い。

本当に、何か熱いモノが当たった。

「あ……………」

奪われるか…。

…それもいい。

むしろ…隆史意外とは…考えられなかったしな…。

……。

……………。

ズツ…と、押される感覚が……。

「待て！ やはりまだダメだ!!」

押し返すより、横に受け流す。

その方がいいと瞬時に判断、体を動かしてしまった。  
手を隆史の顔を殴るように、当ててしまった。

嫌だ。

嫌だった。

こんな隆史は嫌だ。

普通の…いつもの隆史では無くては嫌だ。

……。



反射的にとは言え……。  
殴る様に拒絶した手は、思いの他、本気の花だったように……。  
横から凄い音がした……。

ゴツンとか……ガツンとか……そんな音では無くて……。  
ゴツ

つと……鈍い……音。

勢い余って、机に隆史の頭を打ち付けてしまった。

本気の花カラで。

「……」

「……」

た……隆史が動かない……。  
完全に脱力した体は重く……私の上に覆い被さっている……。

……。

「た……隆史!？」

体を起こし、肩に手を添える。

……。

血の花が引く……。

「オネエちゃん？」

「!?」

ノックもなく…扉が開いていた…。

「私達の部屋には鍵が無い…だから…いや……。  
みほが…開かれたドアの外に立っていた。  
すでに着替えたのか、部屋着のまま……。  
浴衣が乱れ…ほぼ半裸の私に覆い被さっている隆史…。」

……。

みほがない。

私が知っている…みほが…いない。

無言で、眼球が動き回らせている、みほ…。

目だよな…。

あれは、目と判断していいのだろうか!?

「ま……待て!! みほ!! ご……誤解……だ!!」

「 広辞苑 」

「…え?」

「 オネエちゃん 抜けがけて意味…引いてきて  
……。」

「」

命乞いに似た、言い訳とやらを…私は人生で…初めてした…。

酷かった。

廊下に置きっぱなしにした酒瓶で、みほには言い訳がたった。

酒。

全ての現況。

雑誌の記事を鵜呑みにするものでは無いな……。  
改めてそう思う。

気絶した隆史は、結局朝まで目を覚ます事は無く、私はお母様に幼少の時以来、久しぶりに本気で怒られた。

まあ……。大半は、あの酒だろうなあ……。

どうにも、秘蔵の酒だったらしい……。

正直、お母様より……菊代さんの方が怖かったが……。

ただ……。

何より最悪なのは……。

隆史の記憶が飛んでいた。

どうにも、酒を飲ませた後の事……膝枕くらいまでは覚えていた様なのだけど……その後の……。

それが良かったのか……残念なのか……。

あそこまで……シタノニ……。

翌日、正常に戻った隆史に土下座されたが……本当の事を言っていない物なのだろうか？

すつごい、大まかに、みほに説明した内容を復唱させられ……土下座されたからなあ……。

まあ、私をちゃんと、女性として見てくれていたと分かっただけでもよしとしよう……。

今回、記憶が飛んだのが、酒のせいだと思い込んでしまったので、後日またひどい目に遭うのだな……。

アレの第二段階があるとは思わなんだな……。

教訓。

人間は、失敗を糧とする生き物……。

一つ……隆史に酒を飲ますべからず

二つ……あの状態の隆史に、面白半分に口を開くべからず

三つ……みほを……怒らさずべからず……



「何されましたの!?!? というか、貴女本当に何してるんですか!!」  
やかましいな、ダーズリン。

そんな事、事細かに詳細に…言う訳が無いだろう。  
これは私と隆史の…まあ記憶は飛んでしまったが…。  
私達の秘め事という奴だ。  
これは隆史以外には、言わない。  
ある意味…切り札だ。  
それはみほに対しても一緒…。

「エリカ…お前は、どうする?」

さて…アレの暴走を止めなくてはな。

「…黒森峰…西住…まほさん」

「…なんだ?」

聖グロリアーナ…オレンジペコと言ったか。

ふむ…この娘が隆史のお気に入り。  
なるほど。

「…何か…ありましたよね?」

「…何か…とは?」

勘がいいな。

「オレンジペコ…と言ったな?」

「…はい」

「君は、何もかも他人に…大事な思い出…と言う奴を話すのか?」

「え…」

唇の前に人差し指を立てる。

シー…と口から音を出す。

「…内緒だ」

※ルート壊 【みほ編】 ※続・来客万来です！く

ノンナさんの諦めません、宣告をされたその日。

一日中…その…、約2名様の殺気に怯え続けた…。

なんだろう…すこぶる機嫌が悪い…。

他には、みほと華さん。

俺と目が合うと、即座にオーバーヒート気味の真っ赤な顔になるので、逆にこちらが恥ずかしくなるという状態でもあり…。

落差が激しく、少々戸惑う事が多い日でした。

心臓も色々と持ちません。

止めに放課後、うん…オカン来襲するし…。

案の定、昔からの暴力という名の愛を感じるさせられた。

明後日…また千代さんの所へと出かけるのか…。

その日の夜……。

何とも言えない空気でしたね。

なんだろうか…特に態度に変化は、見られない。

コワイ…それが余計に…。

夕飯も終わり、洗い物も片付た。

特に何か、変化があったわけでも無いのだけど…直感だ。

みほと華さんは、これからの事を話している。

華さんの所在。

取り敢えず、決勝戦が終わるまでは、みほの所で寝泊りすると決まったようだけど…。

空気が変。

あ…そうだ。

夕飯を済ませて後、ある程度落ち着いたら部屋に帰って行くみほが…帰らない。

もう21時を超えるんですけど…。

あの…華さんも、なんにも言わないし…。

……。

き…切り出して見るか…。

「あの…みほさん」

「なに？」

「そろそろ、21時回るけど…」

「う…うん」

チラツつと時計を確認し、視線膝下に落とした。

若干、耳が赤み掛かっている。

「…」

黙っちゃった…。

「帰らなくていいのか？ 明日、朝練有るから早いだろ」

「……」

あ…あれ？

「か…帰っていい…の？…」

「…え」

「……」

「いいんですか？ 隆史さん」

「華さん!？」

な…え？

あ…泊まっついていく気か。

また泊まっついていく気ですか!?

正座をして、正面に向かい合わせで座ってるみほりん。

特段、お泊りセットらしきは持っていないのだけど…え？

「そ…その」

顔を真っ赤にして、上目遣いで見てくる。

「し…しなくて…いいの？」

きよ…強烈な一言を頂きました…。

変われば…変わるもの…たった一日で…。



思いつきり額をテーブル机に打ち付けた。

はい、土下座の要領ですね、はい。

いきなり理性を砕きに来ました。

なに…？ どうしたの？ どうしちやっただの!?

「男の方って…その、特に思春期の男性は…そういったのは我慢出来ないとお聞きしたんですけど？」

華さんも横から、妙に熱っぽい声で…なんだろう。

誘う感じで確認をしてくる。

聞いたって…例の雑誌でしように！

やば…。

コレはやばい……。

机に突っ伏したまま、本当に葛藤する。

この子ら、たった一日でこうまで変わるか…。

ちよつと…いや、かなり特殊な初体験後だから、多少…どこか壊れ

ちやっただ？

……。

どうしよう…正直、したいと言えば、めっちゃくちやしたい。

が…。

「き…」

「き…？」

「今日は…大丈夫…。帰りなさい」

ピシッ

「……」

あ…、なんだ!?

一気に部屋の熱っぽい空気が、一気に氷点下になった気がする!!

恐る恐る突っ伏した顔を、みほに向けると…。

表情が無かった…。

「…ノンナさん？」

「あ、そっか。また明日朝来るものね」

「ふーん。そっ」

立ち上がるみほさん。

それに釣られてか、同じく立ち上がる華さん。

こ…コワイ…動けない！

動いたら殺られる!?

「…じゃあ華さん。八方美人の隆史君は頼っておいて、帰りましょう」  
「そうですねえ」

「まあ、いろいろと取り決めもしたいし…今日の所はって事で」  
「はい」

動けないまま…部屋の玄関で音をしたのを確認…。

二人は帰っていった…。

…金縛りって…本当にあるんですね…。

次の日の朝、ノンナさん達は来なかった。

来なかったのだけど…朝食の時の雰囲気もまた…ひどかった。

昼休み。

屋上入口の踊り場で、生徒会の仕事をしていた。

戦車道だけでは無くて、生徒会役員としての仕事も、俺にはある。屋上は基本閉鎖されている。

しかし無題に広い踊り場は、物置に近い空間になっていた。

手すりは、俺の腹くらいまで、コンクリ壁の様になっている為、しゃがめば隠れられる。

よって…まあ。他の生徒達の隠れ場や、たむろするには適した空間になっている。

…。

ま、よからぬ事をするのを防止する為、更にこの場所に物置として言わしめる様に、更なる物資搬入をしている最中。

まあ…ダンボールに入ったどうでもいい書類一式だけど…。

空間が潰れれば、階段に座ってたむろするだけだと思いますけどね。

下見がてら、昼休みにここに来てみた。

…つか。結構広いから…これ大変な作業になるよね？

どの位のダンボール箱運べばいいんだろ…。

力仕事は嫌いじゃないが…ちよつと会長を恨む。

「…これでまあいいか」

バリケードの様に設置させられていた、古い机と椅子。

まとめて組み、隅に追いやる。

更に広くなったスペースを…これから埋めないといけないのかよ…。

ふう…。

一息ついて、放置されていた椅子に座った。

まだ少し時間あるし…どうすつかなあ…。

ダンボール運ぶのは、放課後でもいいか。

「……」

「……」

…だからさ。

なんで態々、気配を殺すのさ。

「なにしてんの、みほ」

「…いや。なんか、隆史君真面目に仕事してるなあって…」

邪魔するのにも悪いと、膝を折りつま先立ちする様に座っていた、みほりん。

俺が気がついたと同時に、手すり壁に背を預けそのまま座り込む。

…なんだろう。

久しぶりに二人きりになった気がする。

「…なんか用？」

「……ん、特に無いけど」

俺だけ椅子に座ってるってのも悪いので、同じように向かいに地べたに座る。

改めて思う。

なんかみほが、違う。

…うまく言えないけど。

「隆史君。明日またどこか行っちゃうんだよね…」

「ん？ ああ、多分決勝には間に合うと思うけどね」

「…うん」

……。

ああ……そうか。

…ノンナさん来襲、昨日のみほ。

そしてどっか行く俺。

「なに？ みほ。いちやつきたいの？」

「ッ!？」

真っ赤になった。

「…で…デリカシーが無いよお」

あ…当たった見たい。

「華さん…の事もあるし…うまく言えないけど…」

「……」

露骨に言ってみたものの…まあなんだ。

寂しいのか。それとも不安なのか。

その両方か…。

この分だと…華さん…言ったのか。

みほにも。

ここまで露骨に態度が変わるとなあ…。

……。

まあ、でもなあ…昨日みたいに誘うのは、どうかと思うけど。

『し……しなくて……いいの?』

みほの口から、露骨に言われた言葉。

正直、理性を保つのがやっとなお言葉でした。

……。

そういえば、生徒会業務中の置き看板を、下の階の踊り場。

ここに繋がる階段前に置いておいたつけ。

だから、みほもここにいた俺に気がついたのかな?

…なるほど。人來ないか。

……ふむ。

みほの強烈なセリフを思い出して…ちよつと息子が元気になりました。

「…みほ」

「なっ! なに!?!」

「…下着見えてる」

「!?!」

慌てた時、体制を崩したのか、白い肌の間からパステルピンクのモノが見えていました。

はい、ガン見です。

「もう! 隆史君は!! もうっ!!」

立ち上がって、制服のスカートをパンパン叩き直している。

……。

「みほ」

「…うう。なに? もう…」

顔を真っ赤にして、唸っていますみほりに…S気が出てきた。やっぱりなんだ。

みほりんのこういった顔は好きですヨ?

「見せて」

「…え!？」

あ。固まった。

まあ…普段、冗談でもこういった事は俺言わないからな。

…言わないよな?

…言っていないよね?

「な…何言ってるの?」

「下の看板で、人來ないしね。例え來たとしても、みほの位置なら手すりの壁で俺にしか見えないから」

「…(…(…(…学校…外……あ!」

何かに気がついたみほりん。

「た…隆史君の悪い顔……嫌い」

はっはー。

ちよつと暴走し始めたヨ?

「はい。捲って見せて♪」

「うう〜…」

一度でも肉体関係を持つてしまったので、羞恥心というか、どこか遠慮が無くなった。

それはみほも一緒の様で、前なら怒ってきたところ、今は非常に恥ずかしそうに照れている。

い…いかん、ゾクゾクしてきた。

仕事サボって何してんだろ…。

ナニか。

「んううう…」

ゆつくりと、両裾を持ち上に上げていく。

白い肌の付け根が見えると、そのままピンクの布地に少し白いフリルが着いた、神依が見えます。

スカートを捲くり上げ、顔を少し背けながら…目を閉じているみほりん。

…。

そしてここは学校。

「こ…これで…いいの?」

「いやあく…随分あっさり、お願い聞いてくれたなあ…びっくりした」  
「やっ… やらせておいて!」

取り敢えず、拍手を送ろう。

…怒られた。

「たっ!? 隆史君!」

近づいて見ました。

はい。

そして躊躇なく、太股を摩る。

スベスベとした肌。

上下に動かし、足の付け根部分をなぞる。

…はい。完全に俺のスイッチが入った。

脚を摩るとか…自身で、オヤジ臭いなあ…と思ったのは内緒だ!

「やっ… ちよ!? たかつんっ!!」

「おつきい声は、流石にバレるぞお」

人差し指で、下着の上から秘部の部分をカリカリと優しく動かす。

…あの…なんで最初から、すっごい濡れてるんでしょ。

「っ! ん!!」

クリトリスの前で、少し爪がかかる。

布越しでも、突起部分は分かるものなのね。

「はあ…ん!」

下着をずらし、本格的に指を這わす。

撫でる様に往復し、出てきた愛液を表面上でかき回す。

…ああ。

これ…最終的に下着が学校で、すごい汚れちゃうよね?

んじや、仕方がない。

仕方がないよね?

「んっ! んん! な…ハア…何言っ…ハアハア…」

あ、声に出ってたか。まあいいや。

そのまま下着を下に下ろした。

スルツつと一気に。

「!?」

有無を言わせないで、そのまま秘部に口をつける。  
舌で指と同じように、這わせ、引つ搔き、かき混ぜる。

みほが、俺の頭に手を置いて、体重をかけてきた。

押しつける…のでは無く、声を殺すために我慢している為だろう。

「んっ！ あん！ つ！！ んんん！！」

軽くイツたのか。頭に強い指で押される感覚。

そのまま、尻に手を回し、揉みしだきながらトドメ。

できるだけ音をたてないで、舌でみほの中をかき混ぜた。

「ああ!! ふ!! んんん!!」

抜き出す時にクリトリスを舌で刺激した。

後は、痙攣するみほを体で感じた。

……。

その場に、力なく座り込む。

下を向き、小さく呼吸を繰り返している。

……。

隠れて見えないからね。

うん…、

今度は俺が立ち上がる。

「ハア…ハア…：うう…なんて事するのぉ？ 隆史く!!」

余韻がまだ残る中、甘い呼吸を繰り返すみほ。

場所が場所だけに、恥ずかしいのか少し睨む様に、こちらを見上げてきた。

その顔に、準備していました！ と、ばかりに…露出した陰茎を突き出した。

「……」

無言で見つめるみほ…。

「ハア……」

あ…目に光が無くなってきた…。

代わりに目の奥から…別の光が見える…。



「はあ……あ……ん……ちゅぷ」

俺は、なにも言っていない。

まあ察しがつくだろうが、みほは無言でそれを口に含んだ。舌で、周りを舐めとる様に、亀頭周りを這い回っていた。

「ちゅ……んっ！ ジュプツ！ ……んっ」

大きく顔を動かし、一気に奥に入れた。

暖かい体温と感触。

背座をする様に、顔のみを前後に動かす。

「ジュブ！ ジュブ！ ジュブ！ ジュブ！ ジュブ！」

慣れてきたのだろうか。

リズムカルに動かすと、口内での舌の動きと合わせて、快感と快楽のみが、段々と思いを支配して……

「ジュブ！ チュツツッパ！」

みほ自身、すぐ夢中になり始めた。

口でもらっている顔を、上から見下ろすと……うん。

みほって……口でするのが好きなのかなあ……

あ。

「あっ！ 隆史殿!!」

「!？」

屋上入口広場の下、階段途中の踊り場から急に声をかけられた。手すり壁の上部分から、俺の上半身が見えたのだろう。

「優花里？」

平静を保ち、声を返す。

みほは、声で気がついて驚いたのか、動きを止めた。

……。

「どうした？ なんかあったの？」

「いえ！ 西住殿を探しているんですけど……こちらにはいませんね」  
みほの頭に手を添える。

少し下を向くと、少し涙目でこちらを見上げてくるみほ。

前髪を少し、かき上げ顔を見ると……

……ゾクツつとした。

「みほに？ 会ったらなんか言っとく？」

普通に会話を続ける。

と、同時に、押し込むように力を加え、続ける様に促す。

やはり、みほにも何かスイッチが入っていたのか、渋々だけど…  
ゆつくりと前後運動を再開し始めた。

チュブ…チュブ…チュブ…

「いえー！ お昼休みに見かけなかったものですから」

チュブ…チュブ…チュブ…

「ああ…」

音を殺す様に…それでも小さく、ここにいれば音が聞こえる。

チュブ…チュブ…チュブ…

少し目線を落としてみると…目が爛々と鈍く光っている。

「隆史殿は、なにやってるんですか？」

カツンツと。

音がした。

階段を上がる音。

ツ！！

流石に分かったのか、動きを止めた。

―が。強引に動かす。

頭を動かし、少し腰を動かす。

「ん!？」

みほは驚きはしたが…すぐに抵抗を諦めた。

「隆史殿？」

階段を上がる音がするに連れて、みほの頭の動きが早くなる。

ジュパジュパと、音が漏れ出す。

ジュパツ！ ジュパツ！

「ん、生徒会の仕事」

「そうなんですか？」

ジュパツ！ ジュパツ！

優花里の顔が、はつきりと見える位置：後3段程上がれば、みほに気がつく…。

グツと手で頭を押さえ込み、頭の動きを止めた。

下から、フーフーと息が漏れる音。

「あゝ…優花里」

「はい？ なんですか？」

「ちよつと埃で汚れちゃてさ。今着替えてる最中…」

「……」

「下半身…脱いでるから」

優花里の足が止まった。

若干、顔に赤みが刺す…。

あら、かわいい。

「…こんな所で、着替えないで下さい」

「…立ち入り禁止の立て看板あったろ」

「ありましたけどお!!」

「…まあ、もう少し俺は、ここで作業するから。みほ見かけたら言つとくよっ。」

「わ…わかりました。まあ急ぐ用事でもありませんし、見かけたらでいいので教えてください」

そう言つて、急ぎ足で階段を下りていく優花里。

…。

さて。

怒られますか!!

「……」

「ハァー…ハァー…はあ……」

大きく上を向き、呼吸を繰り返している。

特に怒る事もなく、ボーと俺を見つめている。

あ…あれ？

着替えてるつて言えば、優花里ならすぐにどこか行くと思つていたから…大丈夫だろうと踏んだのだけど…。

我ながら無茶したなあ…って思いまして…すっごい怒られるかなあ？　って思ったんですけど…。

…。

「みほ…？」

「な…なあに？」

…あかん。

完全に呆けてる。

羞恥心やら、興奮やらにやられ。

…完全に発情…してるんだろうなあ…。

うん、怒られるのは多分、冷静になった後だな！

なら…。

ブーツとれている、みほの手を取る。

ゆつくりと立ち上がると、手すり壁に手をつかせた。

俺がこの位置にいれば、また急な来客にもすぐに気が付けると思っただから。

みほの腰を持ち、上げさせ…スカートを捲る。

すぐに分かったのだろう…素直に受け入れているみほ。

秘部を軽くいぢると、その口から…太股に伝い落ちる愛液が…。

すげえな、みほ。

まあ…もう今更、俺も無理ですけど。

そのまま後ろから、みほの中に入った。

「んんあ!!!」

と、同時にみほの口を抑えた…。

完全に場所を忘れている。

いや…場所が余計に、みほを興奮させるのだろうか？

取り敢えず…。

「みほ…声！」

「え…あ…」

注意が分かったのか分からないのか…。

覗き込んだ顔が、惚けている。

一応、注意深くゆっくり動かすと、小さく声を殺していた。

「ん…んっ…ふっ！」

動かす度に、ニチャッと音がする。

「んっ！ んっ！ んぁー！」

腰骨を持つて、ゆっくりと大きく動かす。

ニチャニチャと音が繰り返し聞こえてくる。

ここであまり激しく動くのは、流石にまずい…。

「はぁ…はぁ…んっ!!」

…。

「た…んっ。 隆史…く…んっ!! な…なんか…私…」

眩くように…我慢したような声が、余計に俺を興奮させる。

ゆっくりと大きく、それをまた繰り返す。

ズリズリと奥に侵入し、奥の壁にぶつかる度にみほの体が跳ね上がる。

みほのお尻を鷲掴みにし、左右に広げた。

少し早く動く…。

…。

まずい…ちよつとイキそう。

あ…避妊もしてないけど…処理。

変に制服汚しちやってもな…後で大変だし…。

「だ…大丈夫…」

「みほ？」

「で…出そうになった…んっ！ た…ら言っ…」

あ…また声に出たか…。

惚けていても…どこかは冷静なのね…。

気を使って声を掛けてきた。

「お…」

？

「お口…なら…その…」

まさか…

「の…飲める…から…汚れッ！ なぁんん!？」

ガツンと、腰を打ち付けた。

みほが：「昨日まで処女だったのに：ここまで変わるか。グチャグチャと音を出しながら、腰を打ち付ける。」

「んあ!? んっ!! まっ! 声っ!! でちゃ!!」  
すっごいエロかった。

みほは、言葉の返しが、エロい。ずるい!!  
理性を根元から切り崩しにくる!!  
そして。

カツンと。

また：誰か来た：。

立て看板見れないのかよ：。

正直、今回は邪魔されたと思い、少しイラッと怒りが芽生える。

まあ：俺に言う権利は無いけど：。

踊り場に人が来た。

そして俺と目が合う。

……。

……………。

「ハア：ハア：……」

来客は、みほも気がついたのだろう。

少し残念そうに、体から力が抜けた。

先程は優花里だったし、みほもある程度俺が追い返すのが、分かっ  
ていて激しくしたのだろう：が。

まあ：もう無理だろう。

そう：思ってた：……のでしょうけどね、みほは。

「んあ!? たかつ!!」

グチュツつともう一度奥まで、突き入れた。

熱い体温をまた感じる。

「もう正直、イキそうだったし：今更止めるの無理」

「えっ!? ほんん!! んっ!!」

グリユつと押し込む。  
グチユツと引き抜く。

「はっ!! んん!! ああ!!!」

パンパンと少し、小さめだけど音が出る。

「あッ!! んあ!! ああ!!!」

カツン、カツン、と来客が階段を上がってくる。

それは、みほにも聞こえているはずだ。

だから更に腰を打ち付ける。

「あと、3段」

「んあー、んっ!! んう!!」

「あと、2段」

「んあ!! ああ!! あっ!!」

眩く様に、来客の位置を教える。

段々とみほの声が、大きくなっていく。

「あと…あ…」

「あああああっつ!!!」

大きく体が跳ねた。

吊り橋効果…と似たようなモノだろう。

それが変な相乗効果を加えて、興奮値を跳ね上げる…と、どこか本

で読んだな。

怖いくらいに…まあ…いったな。

はい、じゃあ仕上げ。

大きく肩を動かしながら、涙目で大きく呼吸を繰り返している、み

ほの肩を持つ。

その場に座らせ、陰茎を顔に近づける…。

「ごめん。口開けて」

もう、完全に惚けているみほの顔が、更に興奮させる。

みほは、来客の方向を見れないのだろう…が、素直に行為には従っ

た。

「はい、舌突き出して」

「…」

手を口の下に添えて、受ける準備をさせた。

そのまま口に再度入れ…一気にその中に解き放つ。

陰茎が脈打ち…ドクドクとみほの中に…。

そしてそれを見守る…来客。

「ジュル…ジュ…」

みほは、そのまま吸い出すように…啜る。

……。

「フウ…フウ……んん!!」

そのまま飲み干す…。

ゴクツつと音が聞こえた。

「はあ……はあ…やっぱ…嫌いじゃないかも……」

……。

え？ 2回戦？ いったほうがいいの？

息子まだまだ元気ですよ？

「趣味が悪いですねえ…隆史さん」

「…黙っているように、指示をしたのはそっちでしょうに…」

来客。

そう嬉しそうに、華さんがしやがみこんで、それを見学していた。

踊り場に来た時点で、勘付いたのか…口元を人差し指を添えて、

黙っているのジエスチャー。

まあ。華さんなら今更見られても大丈夫かなあ…て思い、みほをい

ぢめてみた。

…なんだ？ デジャヴを感じたぞ？

「…はあ……はあ……」

涙目でこちらを見る、みほ。

多分…コレは勘付いていたのか？



「…やっぱり華さん」

「あら、気づいてました?」

「…隆史君の事だから…ね…:…うう…:…でもすつごい恥ずかしかったあ」

「…:…」

「学校で…しちやった…:…うううう」

今更、なんか嘆いている。

いやあ…なんだろう。

やっぱり俺も、少しタガが外れてますね。

「…なんか赤面してるみほが、無駄にエロいやら可愛いやらで…」

「ふう!」

これで誤魔化そう…:。

「…ごまかす?」

—  
—  
—

「さて、みほさん」

いやあ…:…すつごい怒られたなあ…:。

あ…:…もう、昼休み終わってる…:。

「授業始まってますよ?」

「…」

行為の余韻も無く、華さんがいた為に基本怒られていた。そそくさと衣類を正、トントンと階段を下りていくみほ。と、いうか。

まさに逃げるように…:。

「…俺も教室…戻らないとな」

「……」

……。

「…あれ？ 華さん？」

「はい？」

「みほと教室戻ったんじゃない？」

普通に俺の横にいた…。

「あら、私。さぼりました♪」

…生徒会員に堂々というセリフじゃねえ。

「何言って…ん!？」

視界の端、手すり壁の下方付近…。

半身のみほがいた…。

あれ？ 授業は!？」

「隆史君」

「はい!!」

「…キスはダメだからね」

「……」

そう一言、呟くとスツ…とその姿を隠した。

そのまま、階段を下りていく音が再度響き…今度こそ本当に自分のクラスに戻っていった…。

な…なんで、あの時と同じセリフを今。

ハッ!

「では、隆史さん」

熱っぽい視線が俺を捉えていた。

華さんの目は早速、限界突破した…正気の日をしていなかった。

「お願いしますね?」

※ルート壊 【華さん編】 ※続・来客万来です！く

屋上入口にの踊り場…。

なんで、学校の真昼間から何してんだろ…。  
華さんの症状が、明らかに発情状態だった。  
真正面から密着してくる。

みほどの情事を、見ていたからってのもあるんだろかなあ。  
んあー…。

正直、露骨に来られると対応に困る…。  
みほも、なんで容認してんだろうか…。

「…隆史さん」

「近い！ 近いです!!」

当たる！ 胸！ 柔らかい!!

「沙織さんの雑誌に書いてあったんですけど…」

…おいおい。

普通に暴露してきたけど…。

「いくつか、お聞きしたい言葉がございました」

「…な、なんですか」

流石に露骨に迫るつても、場所も時間も色々有り、少し会話で  
間を取りたいのかな。

「あの…正直に申しまして…明らからに…その、えっちな事とは思  
うのですが…」

「…まあ、流れからしてそうでしょうね」

沙織さんの雑誌…如何わし過ぎるだろ…。

「上級者がどうの書いてあったのですが、沙織さんとみほさんも、知  
らない様子でしたので…」

「…ロクでもなさそうですね…」

踊り場、手すり壁に追い込まれながら、嘆願する様な顔で見上げて  
くる。

はい、胸は当たっています。

「あの…」

「はい？」

「ランコーって…なんででしょう？」

「…」

ランボーみたいなイントネーションで聞かないで…。

その場につまみついてしまった…。

華さんの口から、そんな言葉聞きたく無かった…。

「文章の途中に書いてあったのですが…意味がちよっと…」

乱交って…。

素直に教えていいものか…。

流石にクラスメイトに聞きまくる訳は無いと思うのだけど…。

ググレ！　とも思うのだけど…そこから下手なアダルトサイトに

飛ばされて、右往左往している華さんがリアルに目に浮かぶし…。

「ふ…」

「ふ？」

仕方がない…、分かる範囲で教えておこう…。

変なのに聞いて、変なのに捕まっても困るし。

「複数で、性交渉する事です…」

…なに俺真面目に教えてんの。

「まあ…昨夜の私達みたいな事ですか？」

「ブツ!!」

露骨に…言わないで…。

誰かに聞かれたら…俺が死ぬ!!

「概ね…」

「難易度が高いと記載されてましたし…なるほど」

納得しとる…。

「男女の数が、違ってもいいのですか？」

「突っ込みすぎ!!　華さん！」

「いえ…雑誌には、男性が3人…女性が1人でしたので…」

「…あ…はい…ソウデス、ありえますから…もういいですか？　…貴

女の口から聞くと…色々不安になる…」

「…はあ」

真剣な眼差しで聞く事じゃないよ!?

「後……」

「まだあるんですか……」

「何故か、金融経済用語が記載されてまして」

「……」

「すわっぷ……? でしたか。どういった……」

胃が……死ぬ……。

学校で、何て事聞いてくるんだ、この人は……。

「男女カップルが……その、パートナーを交換して性交渉を行う……夫婦交換とも言われる……」

「……」

もう……ウイキ先生の文章を読んただけだよ!

意味は知ってるけど! 淡々と答えられないよ!!

意味を教えたら、華さん黙っちゃったよ!!

「それは……」

何か考え込むようにしているけど……目が鋭い……。

「……虫唾が走りますね」

「」

怖! 目がこっわ!!

「私、隆史さん以外には……」

嬉しいよ!?! そう言ってもらえるのは!! 嬉しいけど、コワイ!!

でも嫌悪感を持つって事は、まあそっちの心配は無いわけで……。

今、華さんとどうこうする気なんて起きない!

賢者タイムってのもあったけど、一時の暴走で、すごい場所で見ほ

としちやったし……。

冷静に考えると……馬鹿だろ俺。

う……うん。逃げよう。

ゆっくりと立ち上がると、不思議そうな顔で聞いてきた。

「あら? 場所、移すんですか?」

……。

笑顔…笑顔で…。

逃げられないなあ…。

「…流石に授業中に…ここは、まずいですので…」

「昼休みだろうと関係が無いと思うのですが…正直、先程のみほさんを見て、少し羨ましいと感じました」

「え…」

「本当に…とても「すりりんぐ」そうだと思います…」

「」

「私も密会での逢瀬というものを、体験してみたいです」

「…」

なるほど…これが華さんの性癖か…。

露出とか、そういった性癖じゃなく…ただ単純に刺激を求める。

M気質つてのも、それを助長してんだろうなあ…。

めちゃくちや危うい。

どうしたもんか…。

「あ、隆史さん」

「…はい？」

「ニゲルキジヤ、ナイデスヨネ？」

「」

「隆史さんは、女に恥をかかせる様な方では無いですよネエ？」

…逃げられない。



踊り場の階段を降り、学校の最上階…3年の教室並びの廊下を歩

く。

教室の中では、当然授業をしており、教師に見つかったらまずいと思うのだけどね…。

少し早足でそこを通り抜ける。

無言で後ろをパタパタとついてくる華さん。

一番奥。

一番奥にある、生徒数減少の為に、空き部屋になっている教室が二部屋。

…の更に奥。

ほぼ使われていない…孤立した男子トイレ。

普通なら、女子トイレと隣り合わせか何かになっているんだけど、新設な為に孤立している。

3年生の男子生徒は、ほぼいない。

平均的に割り振られてはいるが、一つのクラスに大体2名程。

…地獄だろうな…先輩方。

男女比率の暴力だろう。

ま…まあ今はいい…。

それでも大体の男子生徒は、このトイレは使わない。

トイレ数的にも、取り合いにもならない人数なのに、こんな一番奥のトイレは使わない。

だから…ここに来た。

はつきり言おう。

無理！ 華さん怖い！！

だから女性からして、近寄り難い所に場所を移して、諦めてもらおう。

と、いう作戦。

…作戦。

作戦だったんだけど…。

彼女は躊躇なく…入っていった。

中に人が居ないのは、すぐに分かったと思う。

…なんで。躊躇なく扉を開けたの？

真新しい、男子トイレ。

小便器2つ。個室トイレ2つ。

そんな狭い空間。

教師もまったく使わない。

なんで：そこまで知っているか。

少々、悪い噂：その報告が、一般の生徒会員から聞かされていたからだった。

場所が場所って事と、噂の内容もあつて、生徒会でたった一人の男である俺が対応する様に言われていた案件。

まあ：、戦車道で負けたら廃校：つてな事も有り、大会が終わったら対応するつもりだった。

男女共学になつた為に、作られた新設の男子トイレ。

人気の無い：男子ト『これってどう使うんですかあ!?!』

「…」

華さん：キラキラした目で聞かないでください…。

死にたくなるから…。

シリアス脳が死んだ。

どうしようか：完全に押し切られてる感じがするよ…。

一応、この場所の説明はしておいた。

：だからって：なんでそんなに生き生きとしてるんすか？

取り敢えず、個室のトイレ：出口から手前側に二人で入った。

もう完全に。それ目的つてのが：ちよつと…。

変なスイッチ入つてないと、俺って基本的にヘタレなのな…。

実感しました。

便座に座り、向かい合になる…。

：めっちゃ狭い。

一畳半程しか、スペースが無い個室。

ちよこんと便座にスカートのまま座る華さん。

顔を少し赤くして：俺を見上げている。

…。

現状確認！



華さんを、男子トイレに連れ込んだ。  
華さんを、男子トイレに連れ込んだ！  
華さんを、男子トイレに連れ込んだ！！  
死ね！ 俺！！

字面と絵面が凄まじい…。

「こちら辺は、女子トイレとあまり変わりませんね」

「知りませんよー！」

同意を求めないで…知ってるように言わないで…。

内開きのトイレのドアに寄りかかり、頭を抑える。

個室の中での、華さんとの距離は膝が触れてしまう様な距離。

狭い…。

手を伸ばせば直ぐに届く距離。

だからってね？

ジ…。

「…躊躇なく、ジッパ―下ろさないで下さい」

「あら…あまり元気ありませんね…」

「聞いてください！ おもむろに取り出さないで！！」

明白すぎて、動けなかった。

ジッパ―下ろす、開ける、取り出す。

作業手順の様にしないで…。

「んあっ…」

すでに元気の無い息子様を、口を大きく開け、舌を出して…下から絡め取るかの様に口に含んだ。

「っー」

そのまま、一気に舌で舐め回してきた。

いきなりの刺激で…声が出そうになった。

「…少し、元気になりましたね」

若い身体ってすごいな…。

躊躇していた割には、身体は正直で、すぐに勃ち始めた。

「ジユプ…ジユプ……ジユプ……」

小さく音を立てて、前後に頭を動かし始めた。

背の差が有る為に、体を前に倒し、少し前かがみで。

…はい、普通に大きくなってますね。

その状態が嬉しいのか、一瞬上目使いで俺の目を見てきた。

啞えたままで上目使いの顔が、エロすぎて…はい。

すぐに、MAX状態になりました。

そのまま、小さく音をたてて…チュプチュプと舐めましている。

「チュプ。……ぷあ…独占できるのって…なにか感慨深いです♪」

…どう答えると？

何をどう答えると!?

一言言つて、またすぐに啞え舐め始める。

「チュプ、チュプ、チュプ」

亀頭前だけを前後して、舐めながら動かしている。

指で耳元の長い髪をかき揚げて、薄目を開けながら…。

鼻息が掛かる。

たまに口から出し、横から舌だけで裏スジ付近まで舐め始めた。

「ここが…レラッ。男性は喜ぶと書いてありましたが…チュプ…どうでしょう?」

「…」

夢中になって、むしゃぶりついている華さん。

その顔は、恍惚としており…そんな表情を見ると…段々と理性も切れ始めた。

華さんとこんな関係になるとは、夢にも思わなかった…。

何だろうか…。

みほには、変な公認を受けているみたいだけど。

セフレとも違うし…なんて関係なんだろう。

その関係を拒否しない、俺が一番悪いのは明白だけどな。

「ジュポッ！ ジュポッ！ ジュポッ！ ジュポッ！」

動きが大きく、音が激しくなってきた。

目の光はとつくにいなくなり…ただ、ただその行為に夢中になっている。

「……」

華さんの頭に手を置く。  
柔らかい肌触り。髪の毛の感触…。

この人…本当に、髪が綺麗だな。  
無意識に撫でてしていると…なにか嬉しそうにしていた。

「ジュチュツッ！ ジュチュウウウ…」

先を…ストローで吸うように吸い出した。  
カウパーを吸ってるのだろうか…。

みほといい…華さんといい…。

ガチャ

「んう!？」

夢中になっていた華さんが、一瞬体が強ばった。  
ドアの開く音。

誰かが入室してきた？

別段おかしくは無いのだけど、まだ授業が始まったばかり。

…男子トイレなのだから、男だろうな。

さすがの華さんも、動きを止めていた。

入ってきたと思われる人の足音が聞こえる。

…二人？

『ありや、先客』

声が聞こえた。

先客？

まあいいや。

流石に、隣の個室に入ったら急いで出よう。

そんな事を考えていると…そいつは、こちらのドアをノックしてきた。  
た。

コンコンと、軽めのノックで。

隣に入ればいいのに…なんで態々？

『えつと…本来？ 別件？』

ドアの外から声が聞こえた。

二人いたであろうに、もう一人の声は聞こえない。

…別件？

コンコンと、再度ノックされる。

…あー…。

マジだったか。

悪い噂。

「別件」

一言、端的に答える。

直感だけど、何となく分かった。

一言返答すると、扉の開閉の音。

…無言で横の個室に入った。

…マジかよ…出てかないのか？

『――』

『――』

小声で誰かと話している様だ。

華さんも、様子が変だと息を殺している。

横からは、布が擦れる音がする。

ゴソゴソとした音もあり…やっぱりアレか。

噂通りだったか…？

…さて。

(華さん、今の内に出しましょう。隣の個室に入っているうちに)

(そ…そうですね…。名残惜しいですけど…)

名残惜しいって…。

こちらでも小声で話す。

薄い壁…仕切り板の様な物だから、普通に声を出すと聞こえてしま  
う。

ジュツツパツ!!

音が聞こえた。

ジュプ！ ジュプ！ と…アレの音…。

チュプ！ チュプ！

…。

…。

華さんも目を見開き、すぐ横の仕切り板を見ている。

聴こえてくるのは、ワザと聴かせるように音をす隣人。

…。

(たっ！ 隆史さん！ これ！ これって!?)

(…)

隣室の音に戸惑っている華さん。

(噂…本当だったかあ…)

(噂ですか?)

少ししやがみ、彼女の耳元で簡単に説明する。

…ここがカップルの、そういった事目的で使われている…って事。

主に放課後が多いらしいのだけど、男が少ない学校。

すぐに男同士のネットワークで流れてくる。

ま…ついには正式な書面で、通報してきた人間がいたって訳ですけ

どね。

金が無い学生には…まあ、ある意味ありがたい場所なのかね。

カラオケボックスとか…公園とかの障害者用のトイレとか…まあ

…。

…。

(ああ…なるほど。納得しました)

(…また雑誌に書いてあったんですか?)

(ええ…俄かには信じられませんが…私達もそうですしねえ

…)

(まあ…)

(…)

華さんは、そのまま仕切りの壁をまた見つめ始めた。

ジュルルル…

音でさえな。

挑発…にも近い感じがする。

…。

出るか。

変な事になる前に、華さんを連れ出そうとすると…彼女の口から、フーフーと小さな息を切らすような呼吸音。

……。

興奮してる。

他人の行為の音を聞いて…。

「…フー…フー…ハア…。」

「……。」

放置してあった…というか、出しつ放しだった俺の物を、試しに彼女の口元に軽く当ててみた。

ゆっくりと目をソレに移すと、また口を開けた。

はあはあとした、熱い呼吸。その息が掛かる。

…暖かい体温を感じた。

「チュ…プ…。」

目を閉じながら、ゆっくりとまた舐め始める。

彼女は…感化しやすい。

みほどの情事を見ていた時もそうだけど、やはりどこかで刺激を求めている。

……。

黒い感情が芽生える。

「チュ…チュ…んっ…ヂュ…。」

名前を出すのは…まずいだろう。

さて…。

コンコンと横から、仕切り壁がノックがされた。

「……。」

横からまた、派手な音が聞こえた来た。

音を出してとか…横に聴かせて…とか、聞こえる様に男の声も聞こえた。

挑発だなあ…。

「チュツ…：ジュチュユユ…：ジュツパ！」

今度は、華さんが音を出した。

…華さんが、その挑発に乗った。

華さんの頬張っている、頬に手を当てる。

親指で、閉じている目を軽く撫でると、目を開けた。

数分の間だろうと思うが…その部屋の中が凄かった。

横の個室の女の子と、華さん。

もう、一心不乱に音を出し合う。

「ぢゅぷ！ ぢゅぷ!! ぢゅぷ!!」

動きまで合わせているのか、同じような音で張り合う。

「じゅぱー… じゅぱー… ジュパー！ ジュパー!!」

…華さん、結構負けず嫌いだけど…こんな事で張り合わくとも

…。

「…まっ、しょうがないか」

激しく動く、彼女の顔を手で止めた。

口から、陰茎を引き抜くと、顔を少し上げて口で息をしている。

ハアハアと、激しく。

その息の出処の口元は、唾液でベチャベチャになり、唇が怪しく光を反射していた。

こちらの音が止んだので、壁の向こう側からの音も止んだ。

「ハァー…ハァー…んっ」

彼女の手を取る。

少し引っ張り、体を浮かせた。

そんな俺の顔を見て、彼女がどこか嬉しそうに呟いた。

「…また…悪い顔…ですなぁ」

そのまま少し、引つ張り上げ体を後ろに回させる。  
便座に手をつかせ、こちらに腰骨を取り、お尻を上げさせた。  
お尻を撫でるように、スカートをゆつくりと上げ…肌を露出。  
下着をそのまま下に下ろした。

彼女の秘部が顕になる。

すでに…その、肌が光る位にドロドロになっており、内股に粘ついた水滴がつたっている。

口でして上げようかとも、思ったのだけど…狭すぎて俺がしゃがめなかった。

指で少しいじる。

クチュクチュと少し、音をたてながら秘部を撫でると、体がビクビクと動く。

…。

前置きも何もなく、いきなり彼女の中に入った。

グチャツと音と一緒に、彼女の壁に一撃を叩き込む。

「っんあああ!？」

少し驚いたのもあったのだろうが、声を完全に出してしまった。

というか、出させた。

トイレの外に、誰かいれば気が付く様な声。

まだ授業中だし、2つの空き教室に阻まれ、人がいる教室まで結構な距離。

まあ聞こえないだろう。

「ず…ずる…い…」

非難にも悲鳴にも似た様な声。

そのままゆつくりと亀頭部分まで、彼女の声と共に引き抜く。

お尻を少し押し、体を少し引き…。

「ん…ああッ!!!」

そしてまた一気に奥まで突き入れる。

愛液がグチャツと音を立てる。

2回目は、予想していたのか声を殺したようだ。



必死になって声を殺している。

「……」

後は、意地でも声を出させてやろうと腰を動かす。グチャグチャと、ニチャニチャと音を出しながら。

「ふっ！ はう!! んあ！ あ！ あ！」

リズムカルに小さな喘ぎ声。

「んっ！ んっ！」

くそおう。

狭くて思いつきり動かせない。

…。

『はっ！ んあ!! あっ！ あうう!! んあ！』

横からの声が、聞こえてきた。

さすがに隣人も、控えてか大声では無く、部屋に聞こえる位の声で。

…。

また、華さんが横の壁に顔を向けている。

ふむ。

小刻みに動き出し、子宮の奥を探る様な感じでグリグリとしてみる。

ビクビクとたまに痙攣をする華さん。

顔が見れないのが…ちよつと残念。

ハアハアと息遣いは聞こえるが…。

こちらもしっかり動けないので、それでも浅く深く…できうる限りで、彼女を攻める。

「あっ！ んあ!! あっ！」

ぬう。

名前を言えないのも…会話ができないのもちよつと辛い。

何より胸を触れない！ 揉めない!!

…。

ああ…完全にスイッチ入ってるな。俺。

…。

黒い感情が、段々と侵食をしていた。

というか、すでに真っ黒だったと思う。

「はっ！ はっ！ はっ！ んちゅ」

大きな声を出しそうになると、口を押さえてみると、華さんは俺の指を舐めてくる。

「……」

『ん！ んっ!!』

横からも同じように声が聞こえる。

ガタガタと音を立てて。

「……よし」

シュツと首元から音を立てる。

制服のネクタイを外した。

：首太いから、ちゃんとネクタイ締めると苦しかった為に、元々緩く締めてあったので、簡単に解けた。

そしてそのネクタイを首から外して…。

「えっ!? たっ!?!」

少しびっくりしたのか、俺の名前を言いそうになっていた。

ちよつと危なかったね…。

驚く彼女を無視し、そのままネクタイで彼女の視界を奪った。

後頭部で、軽く縛ると簡易的な目隠しの完成。

「んんっ!!」

ごまかす様に、一度強く押し込むと、顔を上げ少し海老反り…腕を便座から伸ばした。

少し立ちバツクのような体位にすると、後ろに少しスペースが開く。

カチャ…

ので、内開きの扉を開いた。

「!？」

おおー…彼女から体を通して、驚きが伝わってくる。  
だけど、そのまま体をまた倒させ、便座に手をつかせる。

「あっ… あの… どういう…っんん!!」

ドアを開けて、腰を動かすスペースの確保。

彼女に、手つかせた瞬間、反動をつけて思いっきり突き入れた。

腰骨を持ち、腰を大きく動かし叩きつける。

「え!!? んあ!!? あッ!!」

パンパンと、肌をぶつける音を出す。

「あう!!? あ!!? なっ! んん!!」

隣人達が唾然にとたれていているのだろうか?

目隠しまでは知らないとは思うが、扉を開けた事を。

誰か入ってこれば、すぐにまた中に入り扉を閉めればいい事だし

…、何より…。

華さんを…とことんイヂメたくなつた。

言葉で攻めてみるか?

…後で怒られるだろうなあ。

扉を開けた事で、声が漏れ出す。

この部屋だけで、聞こえるであろう声。

……。

ガチャ

よし、乗ってきた。

挑発をり返してみた。

案の定、同じように扉を開け、同じように誰であろうか分からない

女の子を攻め始めていた。

甘い声が聞こえる。

同じような大きさの声で、艶っぽい声で喘いでいる。

目の前の華さんは、目隠しを取ろうともしないで、肩で息をしてい

た。

グチュツつともう一度ねじ込む。

「んあ!!」

こちらからも、甘い声が聞こえた。

後は無言で、腰を動かす。

隣人も同じようで、こちらを見ようとしもない。

まあ、体事覗き込もうとしなければ見えない位置だしね…。

…あ。

横に軽くノックをする。

それに気がついたのか、隣の男は動きを止めた。  
隣の女性の息遣いだけ聴こえてくる。

「やつ!! んっ!! あああ!!」

華さんの声だけ響く。

…体を少し倒し、耳元まで顔を近づける。

前かがみのまま腰を打ち付ける。

「…声、聞かれますよ?」

「んふあ!? んっ!!」

パツパツと、少し控えめな肌が合う音も響く。

「目隠し…視界が塞がれると、他が敏感になりますからね」

「ああっ!! あ!! あ!!」

それでも声を抑えきれないのか、小さく甘い声を出す。

「後、隠れて見えないでしょうから、教えときますね?」

「んっ! あ!! な…なに…んん! を!」

「先程から、横の人達。貴女のこの…淫らな姿を見えますよ?」

「ふっ!」

そう言ってまた腰を動かす。

グチャグチャとした音が更に大きくなった。

「やつ!! んあ!?! ほっ!! んっ!」

後は無言。

なにも喋らない。

…AVはともかく、エロ本って結構勉強になるんだなあ…昔は良く見たなあ…漫画のだけど。

特殊なシチュエーションが、満載だからなあ…実際にする事になるとは思わなかったけど。

さて。

ずるツつと彼女の中から、それを引き抜く。

フェイクで言ってみただけど…それを聞いた隣人も変に乗ってくれて、一切動かないし、喋らない。

こちらに来ようともしない。

プレイだと判断している…。

すげえなこいつ。

「ハアー…ハアー…」

それがまた、俺の悪乗りを加速させる。

クチュツつと陰茎を引き抜き、お尻に添えていた手を離す。

「…」

「…ええ？」

しばらく放置すると、不安になってきたのか、顔だけこちらを向けてくる。

見えもしないだろうに。

壁に手を合わせ、今まで上がった手の体温を冷やす。

熱く熱を帯びた手が、冷たくなってきた。

その…冷たくなった手を、彼女のお尻に添える。

「ひゃう!!」

亀頭先を、ワザと秘部の周り…入れる場所を探る様に擦りつける。

ニチャニチャと音がする…。

「え…えっ……う？　だ…誰…ですか!？」

怯えた声が聞こえた瞬間。

思いつきり中に突き入れた…。

「ひぁ!？」

彼女自身…そろそろ限界だったのだろう。

「やつ!？　ふっ!!!　んぁ!？」

驚きとかイレギュラーな事などを含め…。

「あぁ!!　あっ!!　あっ!!　いつ!!」

たった数回、ねじ込んだだけで…。

「あぁぁあぁぁ!!」

すぐに果てた。

内股だった足は震え、今にも崩れ落ちそうになっている。

ガクガクと痙攣している。

「たっあ！・隆史さん!!」

完全に腰が砕けてしまった華さん。

流石にあの場所で、続ける事も出来なかった為、彼女を抱き上げ、別の場所に移動した。

個室の隣人。

気味の悪いくらいに合わせてくれた隣人は、すぐに個室に戻り、顔を見ないように気を使ってくれた。

そして今…。

宿直室にいる。

収まりつかなくなったら、ここに連れてくるつもりでは合っただけど…。

四畳一間の部屋。

畳と押入れ。そして机とテレビ。

もう典型的な部屋。

基本鍵は掛かっていない為、出入りは自由になっている。

中からは鍵が掛かる仕様になっている為に、誰かしら屯するかもしれない場所。

…が、不思議と誰もいない。

場所が非常に分かり辛いってのもあるし、何より…。

まあ…普通鍵がかかっていると思っただけ近寄らないよね…こんな学校の敷地の外れ。

俺も不完全燃焼だったし…正直もう、火が完全についていた為に、躊躇なくここへ連れ込んだ。

はい！ 連れ込みました！ もういいや！

そして俺に連れ込まれた華さんは…怒ることもなく…俺の下で惚けていた。

胸を揺らし、背を仰け反らせ…顔もなにもかもグチャグチャ。乱れ方が…すごい…。

「はっ！ はっ！ たっ…隆史さん!!」

「…なんですか？ 華さん」

「っ…強い…んあ!! もう少し…強いっ!! 言葉で!! あああ！」

「…強い言葉？」

「呼び捨ててくだっ！ んあ!!」

畳の上…トイレではそれなりに色々和我慢していたのだろう。

一気にここに来て弾けた。

もう…何回イったのだろう。

トイレでのフェイクは…種明かしをしたら…正直、泣かれそうになっただけ…。

半信半疑だったらしいが、俺だとすぐに分かったそうさ。

匂いで…。

……。

………怖。

匂いで、人物特定できるのかよ…。

情事が終わり、裸の…妙に肌がテカテカした華さん。

余韻もあるのだけど、戦車道は流石にサボれないとの事で、今服を着ている最中。

…脱ぐ時よりも、着ている時の方にエロスを感じますね。

とか言ったら睨まれた…。なにこの差。

怒る境界線が分からない…。

着替えている最中の会話が酷かった…。

「隆史さん？」

「なんですか…」

「隆史さんって…みほさんとしている時もそうですけど…」

「ぶっちゃけすぎです…」

「まあまあ。…で、ですね？ どうして…こう…精液を体なり顔に出したがったのか、わかりました」

「

とんでもない事、言いだした。

「あれは、マーキングの一種なんですねえ」

「

とんでもない事、言い出した!!!

「ふふっ。納得しました。もうみほさんも、私も…隆史さんのモノみたいですね」

「

とんでもない事、言い出した  
!!!!!!!

「…あの、華さん」

「…」

「…華さん？」

「……は？」

「

「は…華」

「なんででしょう？♪」

……もはや語る事は、無い…。

「…その…みほは…なんで容認してるのか…わかりますか？」

「私との事ですか？」

「結局、甘んじてしまってる俺が言うのも何ですけど…」

「教えません！」

「…え？」

「教えませんよ？ それは乙女の秘密ですっ♪」

「…」



えーと……

ダメだ!! このニツコニコした笑顔の華さんに何言っても無駄だ!!



「あっ!! 麻子!!」

「……」

「やっぱり、ここにいた!!」

「……」

「ああ…もう! 押入れ開けっ放しで…。何!? 押し入れの中で寝てたの!」

「……」

「…麻子?」

「……」

違う…人が来たと思ったから…

「ああ…もう、布団がずり落ちちゃってるじゃない!」

沙織か、そど子かと思って、押入れに隠れただけ…

「……」

「麻子…? どうしたの? ボーっとして…」

どうしようか…。

どうしようか…。

西住さんは容認してる…って言ってた…。

「どうしたの!?! 顔、真っ青…? あれ? 赤い?」

どうした?

分からない…。

どうしたらいいんだろう…。

【番外編】 転生特典の復活

夢の中だろうか。

景色が無い暗い空間。

座り心地の悪い、丸い椅子に座っている。

なんだろう？ 俺は、何かを待っているのだろうか？

ただ、暗闇の先を見つめていた。

どのくらいたつただろうか。

……

……………

「つてー… なんでまたこの空間にいんだよ!!」

暗闇の先に向かって叫んだ。

なんだよ!! もう現れないとか言っただけか!?

ポーン

《》

「…」

《》

「…おい」

《あ、ごめんねえ。また呼んじやったわ!》

「……………」

《ちょっと色々、不具合起こっちゃってね、やっぱり何かしら、貴方に特典与えないとまずいみたいなの》

さて…。

いきなりフランクすぎる声に、若干の苛立ちを覚える。

というか…こんな喋り方していたっけか…。

《でね、早速で悪いんだけど…》

「待て。勝手に話を進めるな。あんたキャラ変わりすぎだろ…」

《え？ ああ！ そうそう。あの時、貴方を担当したのは、そうね

…。貴方の世界で言えば、自動機械音声なのよ》

「…はっ。」

《本来、命を司る水の女神たる私!! この私が!! 担当するはず

…だったんだけどお…ちよーと、色々あって…

…なんだろう。

この適当感。

《パッド入りの後輩に頼むのも癪だし…じゃあいつそ、ある程度の返答できれば、それでいいかなあーって！》

「……」

《あ、貴方！ 異世界に興味ない!?》

「無い。特典もいらぬ。だから早く元の世界に帰せ」

《まあーまあ。最近じゃあ、異世界の需要も無くなって、行きたがる死者もいなくてね、少し困ってるのよ》

「……」

《今なら好きナだけ、チート機能つけたげるわよ!?》

「…顔も見せない、自称女神なんぞの話を鵜呑みにするか。詐欺師とどう違うんだ？ さっさと元の場所に戻せ」

《なんかつけてよ!! …今回の事が上にバレて…せつかくこの領域に戻ってこれたのに、また飛ばされるかもしれないのよお!!》

「…」

本来、転生特典とやらを、課題をクリアした転生者に贈るのは、ほぼ強制だったらしい。

それをこの自称女神様が、サボって自動機械とやらに任せてしまった為に、特典拒否した「俺」という魂が通ってしまった。

よって後からそれがバレて、この自称女神様が、上司っぽいことから怒られたと。

んでもって、今更俺にその特典とやらを押し付けたい…と。

「そういうことか?」

《……》

「黙るって事は、凶星か」

《……》

暗い空間なのだが、多分あたふたしているのが、雰囲気で何となく分かった。

無言の中、目の前に数枚の紙が現れた。

転生特典一覧表とか書かれてる…。

「…この中から選べど?」

《 そうそう! あ、私は無理よ!? 私が欲しいとか言われても無効だか『いらね』》

《 ……》

「なんだよ」

《 な…なんか釈然としない…》

なにか絶句しとるな。

神様だか女神様だか知らんが、最低限の礼儀を弁えないような、物言いの奴には適当に相手してりやいいや。

…無言で紙を破り捨てる。

《 ちよ!? なんて事するのよ!!》

「だから…いらねえって言っただろうが…」

《 この際、貴方の意見はどうでもいいの!! なんか特典もらつてよ!! 私がひどい目に遭うじゃない!》

「…保身の為かよ…。んじゃ余計にいらん。なんか知らんが、あんたは痛い目にあつたほうがいいと思う」

《 ひどい!!》

…うぜえ…。

心のそこからそう思う…。

「だから、今更チートもらつて、本物の化物なんかになりたくないんだよ」

《 ぷー! くすくすつ! 何? 貴方。自分は化物じゃないと思ってるの!?!》

なんだ? いきなり煽られた。

《 過去の記憶持つて、子供からやり直した貴方が、化物とどう違うのかしら?》

「……」

この女…。

「分かった。特典をもらう」

《 ホント!? い…いえ、最初からそういえば良いのよお! そう

すれば、すぐに済んだんだから!!」

「……」

《で? なに!? 何が欲しいの!?》

破られた紙に書かれていた、一文を指差す。

「ゴツドキラー…要は、神殺し」

《…》

「ほら、早くよこせ。このファンタジー要素満載の厨二病全開のこのスキル」

《…》

「そんでもって、姿を見せろ」

《…》

「……」

《そうね!! これがいいわ!! 『性技特典』!!》

「は!? おいコラ、無視すんな!!!」

《あんたみたいなのにピッタリね!! あらゆるプレイが可能よ!!》

《

「少なくとも女神だろアンタ!! プレイとか言うな!!」

《複数の異能が使えるわよ!!》

「ふざけんな!! そんな如何わしいのを無理やりよこすな!!」

「……」

おい。

体が発光したぞ…。

《はい、受諾かんりよ》

「えっ!? マジで!? こんな寄越しやがったのか!?!」

《1つ、精子の操作。意識一つで、避妊、懐妊が選択可能ね! 出し放題ね!》

「……露骨に言うな」

《2つ、意思を持った受肉した分身の作成。…複数プレイが可能よ!》

「…なんちゅー事を」

《 3つ、催淫。他人を強制的に発情状態にできるわ！ 》

「してどうすんだよ!!」

《 4つ…なんかもうめんどくさい…そのうちに分かるわ!! 》

「ふざけんな!!」

《 あ、説明書一応、脳内に送っとくわねえ。お疲れ様でした!!

》

突如、黒の空間より、白い空間へ切り替わる。

キイイイイイイイイイイイイイイイイイ

機械の回転音のような、高い音が鳴り響く。

…記憶にある…まじで適当に擦りつけたよ…こいつ。

ただ…薄れゆく意識の中…あのクソ女神の断末魔が聞こえた気がした…。

《 え!? ちっ! 違います!! ちゃんと同意して…見てた? え

!? 見てたんですか!?! 》

その声は…子守唄の様に…俺には柔く感じた…

《 こ…降格… 》

※ルート壊 【宴編】※第45話〜続・来客万来です！

現状確認！

華さんを、男子トイレに連れ込んだ

華さんを、男子トイレに連れ込んだ！

華さんを、男子トイレに連れ込んだ！！

死ね！ 俺！！

字面と絵面が凄まじい…。

「こちら辺は、女子トイレとあまり変わりませんね」

「知りませんよ！」

同意を求めないで…知ってるように言わないで…。

内開きのトイレのドアに寄りかかり、頭を抑える。

「……」

ヤル為だけって理由で、こんな所に連れ込んでしまった…。

例の噂…。

授業中とはいえ、本当にしている最中に、他人でも来てしまったら

困るなあ…。

変な関係とは言えなあ…。

結構、俺って独占欲強いからなあ。

……みほ以外に関係を持ってしまった、俺が言うなって話だけど。

……。

横には空いた個室が一つ。

「……」

あ。

…うん。

使ってみるか？

ジー…。

「…躊躇なく、ジッパ―下ろさないで下さい」

「あら…あまり元氣ありませんね…」

「聞いてください！ おもむろに取り出さないで！！」

明白すぎて、動けなかった。  
ジツパー下ろす、開ける、取り出す。  
作業手順の様にしないで…。

「んあっ…」

すでに元気の無い息子様を、口を大きく開け、舌を出して…下から絡め取るかの様に口に含んだ。

「っー」

そのまま、一気に舌で舐め回してきた。

いきなりの刺激で…声が出そうになった。

「…少し、元気になりましたね」

若い身体ってすごいな…。

躊躇していた割には、身体は正直で、すぐに勃ち始めた。

「ジュプ…ジュプ……ジュプ……」

小さく音を立てて、前後に頭を動かし始めた。

背の差が有る為に、体を前に倒し、少し前かがみで。

目を閉じてるな。

…。

今の内に…。

体が少し、ぼんやりと光った。

すぐにそれは収まったけど…さ。

特に何か、唱えたりする訳もなく、念じるだけでそれはできた。

意識が二つあるってのは…なんだ？

…気持ちわるいな。



「あれ？ 隆史君？」

「ん。みほ、ちよつといいか？」



2年生の教室の、並びが有る階に降りる階段。

その踊り場に間に合った。

というか…ちょっと時間が経っていたってのもあったが…なんで、まだ教室戻ってないんだろう…みほは。

ああ…あの後処理か。

聞かないでやっておこう。

「いいけど…華さんは、どうしたの?」

ジト目で見てくる。

いいのか? と。

「なんか…その…アレが、きたそうで…」

「アレって? …ああ」

我ながら、結構最低な言い訳だなあ。

みほも察したようで、何とも言えない顔をしている。

「で、だ」

「うん?」

手を引いて、また階段を上り始める。

登り始めた時点で、みほも気がついたのか、何も言わない。

俺の収まりがつかないと、変に察してくれた様だった。

期待しているのか何なのか。

握った手が、熱を帯び始めた。

「え…あれ? …どこ行くの?」

また先ほどの踊り場に行くと思ったのか、廊下を歩き始めた時点で、疑問を口にする。

授業中の教室並び。

声を出すと、教室の中の人達が気がついてしまいそうで…すぐに口を閉じた。

……はい。

戻って来ました。

もう一人の俺がいる場所。

みほは、目を見開き、声も出さないで真っ赤になってる。

…華さんは、躊躇なく入ったけどな…。

ゆつくりとドアを開けると、大人しく一緒に入ってきた。  
俺が先行した事で、人がいないと判断したのだろう。  
が。

(たっ！・隆史君!!)

閉まっている個室の扉を見て、焦り始めた。

口到人差し指を当て、静かにする様に促す。

そのまま奥の個室に、みほを押し込めた。

特にノックをする訳でもない。

全部、分かっているからな。

ここで、記憶に有るもう一つのスキルを使っておく。

意識変換。

これは別に、みほに使った訳ではなく、こここのトイレに誰も来ない。

誰も意識すら向けない様に、結界の様なモノ…を、張っておいた。

…というか…、こういったスキルが…何故か、行為をする時以外に

は使えない見たいだな。

それが複数のスキルを所持、使用できる条件…らしいが…。

馬鹿だろ、あの女神。

(すぐに分かる)

(え?)

『ジュポツ！ ジュポツ！ ジュポツ！ ジュポツ！』

(…え…なんの音?)

(……)

『ンチュツ…あ…あの…人が……』

『大丈夫です。さっき言った噂…それが本当だって事ですよ』

(…あれ。どつかで聞いた声…というか！ 女の子!? え!?)

『チュプ…、チュプ…チュプツ』

『あれ…控え目になりましたね…』

『ンプツ…で…ですが…んっ!?!』

『激しくしてみても下さい。…それこそ聴かせるみたいに』

『……え』

(…なっ!? え!? ええっ!?)

(はい、みほ。そちらにお座りください)

便座に促してみた。

壁越しつてのものもあるし、俺(分身)が、目の前にいる為に、華さんだとは気がついていないのだろう。

さつき…最低な言い訳もしちゃったしね……。

「……」

…随分と…まあ素直に座ったな。

真っ赤になって、横の壁を見ている。

『ジュポッ！ ジュポッ！ ジュポッ！ ジュポッ！』

聴こえてくる、華さんのフェラ音。

『はあ…はあ…んん…チュツツバツ!!』

『ジュポ、ヂュポ！ ジュポ！ ジュポ！』

(……)

手を握り締め…あらま。下向いちやった。

耳まで赤くしてるな。

……。

………。

少し座り、脚を触ってみる。

膝付近から…摩る様に。

「んっ…」

少し、ビクツつとした振動を感じた。

…い…いかん。

これはいいな!! こっちはこっちで、暴走しそうだ!!

そのまま、スカートをゆつくりと上にずらす様に捲る。

腰を少し前にずらせ…というか…みぽりん…もう火が入ったのか、素直すぎて逆に不安になる…。

先程も見た下着。

新たな水分で湿っていた。

「…凄い事になってるな」

「!?」

ワザと普通の声を出した。

これは横の個室の俺にも聞こえている。

…。

「…たっ!!」

俺の名前を呼びそうになった為に、口を手で押さえた。

そのまま、耳元で試しに言ってみた。

「ちよつと自分でしてみてください?」

「!?」

赤い顔が、また赤くなった。

涙目になって何か言いたそうデスネ!!

『ジュツツ…ブブブブ…』

おいおい…バキュームまでできるの? 華さん。

あ、違う…教えてんのか、俺。

「…んっ…」

「……」

横目で、壁を見ている。

まだ顔は、はずかしそうに下を向いてるな。

みほが、躊躇しながら…自身の秘部をゆっくり指で、撫で始めた。

うん! エロイ!!

暫く黙って見てよう!!!

「んっ…ん………」

『ジュルルル…はあはあ……んっ!!』

「はあ…んっ…んっ!」

段々と指が早くなる。

「はあ…あ……んっ! はあ…はあ……」

『ジュパツ! ジュパツ! ジュパツ! ジュパツ!』

「んあ…はあ……あっ…あっ……!!」

少しすると…。

すでに脚を広げ、顔を上げた。

その顔は、完全に壁に向いている。

「あっ！ はっ！！ んあ！！」

熱が入った。

夢中になり始めた。

下着はずれ、完全に秘部をまさぐり始めた。

もういいかなあ？

「あっ！ あっ！ んあっ！！ んっあっ！！」

『すごいなあ…どうします？』

『ブツブツ…、な…何がでしよう？』

『隣、貴女のを聞いて…こりや。自慰行為してますよ？』

『……』

「あっ！！ あっ！！ んあ！！」

ダメだな。完全に夢中になってるなあ…隣の会話…聞こえてるはずなのなあ…んじや。

「はあ…ん…ちゅぶ…んんっ…ちゅぷ……」

顔に、陰茎を差し出して見た。

躊躇せずに…口に入れた。

催淫…発情スキルってのは、使っていないんだけどなあ…。

「ちゅぱ…んっ…ちゅ…ちゅ……」

『ジユプ…ちゅぱ…ちゅ……』

この後、暫く…二人の音が、室内に響いた。

◇

「ハァー…ハァー…んっ」

彼女の手を取る。

少し引つ張り、体を浮かせた。  
そんな俺の顔を見て、彼女がどこか嬉しそうに呟いた。

「…また…悪い顔…ですわねえ」

他人を興奮させた。

自身の出してた、音で。

それがまた彼女を興奮させたのか…目が…怪しい色を放っていた。  
ゾクゾクと…変な悪寒。

もういいか。

横の俺も、俺自身も、もう限界に近かった。

そのまま少し、引つ張り上げ体を後ろに回させる。

便座に手をつかせ、こちらに腰骨を取り、お尻を上げさせた。

お尻を撫でるように、スカートをゆっくりと上げ…肌を露出。

下着をそのまま下に下ろした。

彼女の秘部が、顕になる。

すでに…その、肌が光る位にドロドロになっており…それを亀頭で

上下に擦り付けて見る。

「んっ…」

入れらるのを待っているかの様に、少し…こちらを見ていた。

では、ご期待に添いましょう？

グチュツと音をたて、狭い彼女の中に…ゆっくりと入る。

口での音を、故意に聞かせていたつてのもあり…声を殺す事もなく

…。

「っあああ…入ってきましたア…」

嬉しそうに…鳴く。

少し動かすだけで、グチュツとクチャツツと音が出る。

そのままゆっくりと亀頭部分まで、彼女の声と共に引き抜く。

お尻を少し押し、体を少し引き…。

「んんっ…ああああッ!!!」

そしてまた一気に奥まで突き入れる。  
愛液が、またグチャツと音を立てる。

『…み…んん!! 腰上げて』

『う…うん』

隣のみほも、本格的に始めた声を聞いて…その気になったのだから。

みほオナを…もう少し続けて欲しかった…うん。

我ながら、なんちゅーネーミング…。

しっかし…狭くて、思いつきり動かせないなあ。

一回一回、ケツが後ろの扉に当たる。

なんか…嫌だなあ…。

…。

『はっ！ あっ!! チュブツ…あはあ…れあ…』

横からの声が、聞こえてきた。

まだ、控えめな声。

…なんだろうか。

分身との意識を切り離して、みほの声を第三者から聞いてみると…

エロいな！

NTR感もやっぱり、少しはあるのだけど、すぐに分身と意識を共有できるから、あまりそこは問題にはならなかった。

『ちゅ…んん!? ふ…深い…』

正常位…駅弁スタイルでやっている為に、顔も近い。

なるほど…やたらとみほは、キスを求めてくる。

華さんとキスの禁止って…その為？

…。

前を向きなおすと、華さんが横の壁に、また顔を向けている。

ふむ。

小刻みに動き出し、子宮の奥を探る様な感じでグリグリとしてみ

る。

ビクビクと、痙攣をする華さん。

上手く、顔が見れない。

感じている華さんの顔が見れない!!

すっごい残念だ…。

思いつきり動けないので、それでも浅く深く…できうる限りで、彼女を攻めてみた

「あっ！…んあ!! あっ！」

ぬう。

名前を言えないのも…会話ができないのもちよつと辛い。

言葉攻めつてのも、やってみたいしなあ…。

……。

黒い感情が、段々と侵食をしていた。

というか、すでに真っ黒だったと思う。

はっはー…分身スキル使った時点で、今更だよね!!

「はっ！…はっ！…はっ！…んちゅ」

口に出してみると…華さんは俺の指を舐めてくる。

舌を絡ませ…愛撫するように…。

「……」

いいや!!

もうトコトンやってみよう!!

理性？ 知らん!!

シユツと、首元から音を立てる。

制服のネクタイを外した。

…首太いから、ちゃんとネクタイ締めると苦しかった為に、元々緩く締めてあったので、簡単に解けた。

そして、その外したネクタイを…

「えっ!? たっ!?」

驚く彼女を無視し、そのままネクタイで彼女の視界を奪った。

後頭部で、軽く縛ると簡易的な目隠しの完成。

「んんっ!!…んはあ!!」



ごまかす様に、一度強く押し込む。

彼女は顔を上げ、少し海老反りする様に背中を伸ばし：腕を便座から伸ばした。

少し立ちバツクのような体位にすると、後ろに少しスペースが開く。

カチャ：

内開きの扉を開いた。

「!?」

彼女から体を通して、驚きが伝わってくる。

そのまま体を、また前に倒させて、便座に手をつかせる。

「あつ！ あーの！ どういう…：っんん!!」

ドアを開けて、腰を動かすスペースの確保。

彼女に、手つかせた瞬間、反動をつけて思いつき突き入れた。

腰骨を持ち、腰を大きく動かし叩きつける。

「え!? んあ!? あツ!!」

バツツン！ バツツン！ …と、肌をぶつける音を出す。

「あう!! あ!! なつ！ んん!!」

扉を開けた事で、声が漏れ出す。

この部屋だけで、聞こえるであろう声。

まあ、防音も感覚スキルは兼ねているから、外までは聞こえない。

……。

ガチャ

『えっ!? なつ…：なんっんんあ!!』

みほの声が、聞こえた。

みほも、華さんと同じように、目隠しをする為に、バツクの姿勢に変更。

こちらまで聞こえる音で、腰を打ち付けて誤魔化す。

文句はいせない。

『はっ!! んん!! んあ!?』

『散々壁越しに、声を聞かせ合っていたんだ。何を今更恥ずかしが  
るの?』

『んん!! じよっ…状況がああ!!!』

『違うないね? 何が違う? まあいいか』

『なっ、何!? なんで目隠し何てっ……んあ!!!』

みほって…えろいよね!!

隣り合って、お互いの正体も分からないのに…トイレで二人が、俺  
に攻められて喘いでいる。

並んでるつてのが、またすごい状況…。

場の空気で、俺も酔いだした。

「あっ!! はん!! んっ! んっっ!!!」

こっちはこっちで、華さんを攻める。

すごいな。

言葉責め…どう言ったらいいんだろ…。

エロ漫画くらいしか参考が無い。

…でもなあ。あれ実際言ったら馬鹿みたいだし…まあいいか。

後で黒歴史にでも閉まっておこう。

「すごいですねえ」

「なあ!? んあ!!」

「扉を開けたら、感じ方が…濡れ方が…変わりましたけど…?」

「ふっ!」

まあ実際に、ぐっちゃぐちゃになってる。

さて。

更に後ろに、体を引っ張る。

個室から出て、個室の入口部分。

その開けた入口横に手をつかせた。

「な!? ええ!! 見えます!! んあう!!! 見えちゃってますお!!」

「見えますね。隣の人」

「あああっ!!」

『たっ!! んあ!? なんで!? 見えちゃう!! 見られちゃうよお  
!?!』

『見てるな。思いつきり』

『やだっ!!! んあ!!!』

俺二人揃って、思いつきり腰を振る。

グツチャグツチャと音が被る。

バツンッ! バツン!

パン! パン! と…音も響く。

なんだこの興奮。

一瞬、本当に分身ではなくて、他人に見られたらっ…て思ったら、萎えそうだったからヤメタ。

それは流石に無いな。

多分、殺意しか沸かない。

「やつ!! んあ!! あっあああつ!!」

『ンっ!! ンああああ!!!』

…締まる。

完全に二人共…感じていた。

「…っ!!」

そのまま、二人の中に同時に果てた。

脈を打つのが分かるくらい…大量に出たんだろう。

避妊スキルを初めから機能させておいて良かった…。

「ああ…ああ…」

『ん…あ…あ…はあ…』

ずるつと抜き出すと、秘部からボタバタと音をたてて、白いモノが落ちてくる。

…二人揃って、手を個室の入口壁につけて…肩で息をしている。が。

まだ終わらない。

すぐにもう一度、彼女達の中に入る。

またすぐに、甘い声が聞こえた。

分身スキル、応用。

どうにも、分身は過去の自分だったら…要は体の記憶にある体型に

だったら、その姿で分身が作れる。

それを、いくつか一気に作ってみた。

中学位の時でも…下手な大人より、大きかったからなあ…。  
…アレも。

まあそれを、部屋の外に出現させておく。  
外で待機していた分身達を入室させた。

ガチャツ!!

ゾロゾロと、ワザと足音を立てる。

「えっ!? えっ!? 誰!? 誰ですか!?!」

『はあ…はあ…あ…ああ!?! 誰!? 何!?!』

また腰を突き上げてた。

手加減無しの本気で。

…また一心不乱に腰を動かす。

今度は無言で。

「やっ!! んっ! んあっ!! やめっ! ああ!!!」

『はっ!! んあ!! っあくう!!!』

何も言わず、暫くピストンを続けた。

俺を押しのけない。

されるがまま…俺を受け入れている。

ささと。

「すごいですね。見られて派手にイキましたよね?」

『すごいな? 見られている方が、興奮するの?』

「ちっ!! んあ!! 違い!!」

『やあ…んっ!!! ンン!! 違うよおお!!』

見られている。

目隠しされている状態で、人の気配が多数ある中…彼女達の体は、快楽を受け入れている。

それがまた、自身でも分かるのか…、甘い声を殺す事をしなくなっ  
ていった。

何人か、近づく。

ワザと音を立てさせる。

まあ綺麗だしいいか。

下に寝そべり、騎乗に体位を変更。

みほも同じように、体位を変更。

二人並んで…淫らに乱れている。

「なんだ、自分から腰…動かしてるじゃないですか」

「はっ!! はっ!! んっ!」

もう聞いていない。

変な高揚感が有るのだろう。

…うん。催淫スキル使ったからってもあるんだろうな。

発情状態をMAXの手前にしたみた。

正気じゃなくなる手前。ギリギリのライン。

ほかの分身が、成長過程のアレを取り出す。

華さんの前に突き出すと、一瞬躊躇した。

匂いで分かるのだろう。

それはみほも、同じようで、激しく腰を振りながら…何か迷っている。

『どっ!… んんああ!!… しまったああ』

みほが、喘ぐ。

俺に説いたのだろうか?

どうしたらいいのか?

だから答えてやる。

「ダメ」

拒否。

ダメです。

それでも、他の分身は位置を動かないで、その位置に立たせている。

匂いだけは、充滿していく。  
みほと華さんの頬つぺたに、それを擦りつけてみる。  
ヌルツとカウパーで滑る。

匂いに刺激されたのか：口を開けた。  
ついに開けた。

それを無意識だろう。

完全に握り締めている。

舌が伸びる。

腰を動かし、更に刺激する。

それが助長し……捕まるようように、両手に握っていた。  
握り締めてしまった。

両の頬：そのまま口元に擦りつける。

「んっ…はっ!! ン…チュプ…レラ…」

あ、舐めちゃった。

二人揃って、我慢がもうできなかった。

一度、舌の上を滑らすと、もう止まらないのだろう。

舌で二つ亀頭を舐めまわし始めた。

「ちゅぷっ!! はあ…んああ…んああ… つっ…!!」

騎乗位の為、両手が空く為、二本の陰茎を交互に貪り始めた。

舐める音が響く。

泣きそうな顔で貪る。

「んっつふうん!! じゅぷっ! ああああ!!」

『やつ!? んあ!? ああああ!』

止めかなあ…。

すぐに…その二つ…違うな、4本を射精させた。

『「んぷっ!」』

口に掛かる、顔に掛かる、髪に掛かる…。

その匂いが、みほと華さんを包む。

…この二人…どこか似てるから…。

ベタベタになった二人。

何回だろうか？

体まで精液の匂いをさせて、順番待ちの様に…並んだ全員を受け入れてた二人。

休み時間も終わり、次の授業の時間になっても続いていた。

…うくん。

催淫スキルは…頻繁に使うのやめておこう。

なんか…下手すると壊れてしまいそうだ。

個室の便座に座り…二人共すでに気絶してしまっている。

…うわ…自身のは言え…ドロツドロになってるなあ…。

…。

指を出すと…無意識にしゃぶりついて来た。

……………。

うん！ 催淫スキル！ 封印!!

んじや最後ね。

性行為の後片付け…。

《リフレッシュ》

性行為の汚れを、全て無くすスキル。

シュツツと二人の体が光ったら…このトイレに入室した時と同じ姿になった。

便利だ…普通の掃除に使えないかな…無理か…。

…さすがにまずいよな…記憶操作とかのスキル無いかな？

…あ。

あつた…。

「……………」

よし！ 華さんには好きだけど、なんか食わせてやろう！！  
よし！ みほには、ボコのなんか買ってやろう！！

後日：

下手な誤魔化しは逆効果で：

なにかしたの？ と、怪しまれただけの結果になった…。



◆ ルート正史 ◆ 西住 みほ ㄱ 決戦前夜です！

部屋の中。

一人になつて考えてみる。

頭に登った血も、時間と共に下がり、少しずつ冷静になってきた。つまらないヤキモチは妬かないと、決めていたのだけど…。

日が段々と傾き、外は少しずつ暗くなってきた。

：彼の部屋でただ待つ。

怒る為だけに…。

なんか嫌だな…こういうのは。

メールの返事はあつただけけど、遅くなりそうだと、たった一言。相変わらず、短文のメール。

その、携帯に表示されるメールを、ただ、ただ眺める。

…

やめよう。

ただ、怒りに任せて、ただ怒っちゃうのは。

その結論に至つた時、すでに暗くなつた室内に気がついた。

：特にする事も無い。

待っている間、決勝戦での作戦を考えたつていいのに…余計な思考が邪魔をする為すぐに諦めた。

集中できない。

…

待つ。

ただ待つ。

でも待つた所で…今日彼が帰つて来た所で、明日の朝には、またどこかへ出かけてしまう。

おばさんと一緒に出て行ってしまう。

島田さんの所だろうか…。

…またお母さんの所だろうか？

…

お母さんの事は、多分まあ…大丈夫だと思うのだけど、あのいつもの隆史君のお母さんに対しての反応。

不安になるに決まっている。

決勝直前で、そちらの不安感も合わさり…ちよつと、感情が安定しない。

…頭によぎる事が多い。

次々と思い出してしまう。

もうすぐ決勝戦。

正直に言ってしまうえば…怖い。

その決勝戦が…怖い。

怖い…怖い…。

怖いよ…。

試合の勝敗で決まる、学校の命運。

お姉ちゃん…お母さん。

…あの犯人。

一度意識してしまうと、次々と連鎖して、嫌な事ばかり思い出す。いろんな感情が混じり合い、体が震える。

…怖い。

…

隆史君が、よく言っていた。

思考でも、会話でも…袋小路に入ってしまったら無理やりにも、流れを変えてみるって。

だから初心に戻ろう！

うん！

帰ってきたら、やっぱり怒ろう。

激怒してあげよう！

こんな気持ちにさせられたんだし、八つ当たりしてあげよう！  
思いつきり八つ当たりして…。

それで…。  
…それで、少し甘えてみよう。  
…少しだけ。  
うん、少しだけ!!



夜の通学路。

母さんを宿泊予定のホテルまで送った帰り道。

ようやく見慣れた道にまで、戻ってこれた。

学園艦の外かよ…。

もう日なんて完全に落ちてしまっていた。

まったく!

遠いんだよ! 大洗のホテルでいいじゃねえか!

わざわざ、ヘリ使って移動してまで、あんな高そうなホテルに宿泊

しやがって!

はあ…。

手には紙袋が一つ。

これって冷やさなくても大丈夫なんだな…。

あまり菓子というものは、買ってまで食べるということをしな

よって、あまり詳しくもない。

よくある王道の菓子しか、作らないからなあ…。

今度、和菓子も作ってみるか。

マコニヤンの婆さんなら、色々知ってそうだし。

…。

マカロン。

ホテルに売ってるものなのか…。

母さんを送って行ったホテルに売られていた。

高級ホテルつてのは、こんな菓子も売られているんだな…。  
というか、この菓子…驚く程高かった…。

ま。最近じゃ、ようやくピーマンを食べれる様になってきたからな。

たまには、ムチだけで無く、アメを与えてあげようじゃあないか。  
自信の彼女とやらに！

12個入りで、5千円もしたけど…。

こんなカルメ焼きの親戚みたいな…なんでこんなにするんだよ。

「……」

…彼女…ね。

みほと付き合い出して、まだ日が浅い。

ただ、幼馴染という事で、友人関係の期間が長かったから、新鮮味  
というものは、正直あまりない。

ま、それはそれで、心地の良い関係だと思う。

放課後の中村達との下賤な会話を思い出す。

…みほとの関係を、多少は踏み出してみた方が、いいのだろうか？

「……………」

はい、変な思考はやめとこう。

やっとこさ、自分の家についた。

うん、ちよつと集中しようか。

あつるえー？

これ、自分の家だよね？

うん、見慣れたベンチもあるしね!!

でも…なんだ…この禍々しい気配は…。

いや…しかし…。

いつもの玄関ドアを開けることすら躊躇してしまう…。

この気配は…中から…。

自分の鳴らす喉の音が聞こえた…。

呆然と立っただけでも仕方がない。

躊躇すると、いつまでたっても、動けない状態が続く…。  
覚悟を決めるか…。

鍵を開ける手が震えている。

音をたて…ゆっくりと玄関が開いていく…。

はっ！ 自分の行動が、第三者目線で見れてしまうほど…動揺していた…。

「お帰りなさい♪」

みほがいた。

また部屋を真っ暗くしたまま。

だから！ 電気つけようよ!!

部屋に入った瞬間、あの禍々しい気配が無くなった。

…普通。

至極普通のみほさん。

むしろ、機嫌が良さそうな雰囲気…。

はっ…素人ならそう判断するだろう…。

だが、俺は見た事がある…この懐かしい雰囲気。

「遅かったね?」

「あ…ああ、ちよっと母さん送ってっ…」はい、そこ座って?」

「

みぼりんが、マジギレなされてる…。

震える足で、靴を脱ぎ…取り敢えずと電気を点る。

そのまま、俺の動きを目だけで追う、超怖いみほさんと、正座して向かい合う為に座った。

有無言わせない様な迫力…の、笑顔。

さて…。

腰を落ち着けた所で、改めて考えよう…。

俺なんかしたっけ!?

「あの…みほ…さん」

「なんでしよう?」

「…なんで、まだ制服なのでしようか?」

「ずっと待っていたからダヨ」

「…そ…そうですか…:…すみませんでした…」

…分らん。

分からない!!

みほからのメールで、何かしら用があるのは知ってはいたけど!!

え…:マジで今回、俺特に怒られる事してない…。

ましてや、この状態になる程の事をした、覚えは…ないよ…:…?

言い切る自信が無くなって来た…。

「では、隆史君」

「…はい」

見た目はいつもの様に普通なんですけど、雰囲気は…戦車乗ってる時に似てるな!

いつもの口調に、雰囲気は戦車搭乗時。

アンバランス感が半端じゃない…。

「単刀直入に聞きます」

「…はあ」

「お母さんと変な関係じゃないよね?」

「ぶふっつ!!」

な…:な? な!?

「今日の放課後…:…その…:隆史君の教室前を通った時、聞こえたの。隆史君達の会話…」

「!?!?」

「もう、最後の方だったけど…お母さんに迫られてらどうのって…」  
あの時か!!!

何!?

あの会話聞いてたの!? 聞かれたの!!??

「最後、間があった」

「…え」

最後…? 最後!?

「あの、しほさんに迫られたらって話か!」

「間があった!」

「いや…それは、中村の質問に…絶句しただけですよ?」

「……」

「特に…深い意味…は……」

「……」

「な……」

「……」

「」

みぼりんが…動かない…。

とういうか、そこ!?

そこに、怒ってんの!?

「毎回毎回、試合前にどこか行っちゃって…大体、お母さんと一緒に行動してるみたいだし…」

「…ぐ」

「お姉ちゃんから来る報告メールも、段々おかしくなってくし…」

「マホチャン!!」

「か…彼氏の浮気するかも知れない相手が、お姉ちゃんならまだしも…自分のお母さんとか…泣きたくなるよ…」

「!?!」

「……」

ああ…。

徐々に、目線が下に行き、上目づかいで睨んでくる。

本当に、この部屋で長時間、待っていたのだろう…。

今までの事も相まり、溜まりに溜まって爆発した…といった感じでしょうか？

「…浮気してません。というか、しませんよ!? しかも、しほさん相手とか…普通に考えて、ありえません」

「だって、隆史君…」

「なんででしょうか」

「…結構な変態さんだし」

「……」

変態って…。

えー…。

俺は変態じゃないよ？

仮に変態だとしても、変態 という名の紳士だよ！

「ナニソレ」

口に出てたあ!!

どうする!?

どうしようもない!!

…いつもの様に、流れを変えてみよう。

そう！ 俺の手元には、これがある!! 武器がある!!

「…取り敢えず、先にこれをお受け取り下さい」

「なに？」

「お土産」

ふっ。

こんなものが、ここで役に立つとは…。

「マカロン」

「……」

紙袋を凝視してるな…。

あ、顔さら逸らした。

「いない」

「…いない？」

「こんなもので、誤魔化そうとするとか…」



「…これ、5千円もしたんだけど…」

「ぐっ!？」

「いやな、みほもピーマン食べれる様になってきたからさ、たまにはつて買ってみただけけど…」

「……」

「そうか…いらないか……」

ちよつと、悲しそうな顔を試みる。

「ず…ずるい!!」

ふっ…。

甘いなあ、みぼりん。

その言葉が出た時点で、俺の勝ちだ。

ほらほらあ…そうやって、渋々でも、受け取ってしまえば…こつちのペースだ。

正直、浮気なんぞしてないから、そんな仮定の話で怒られるのも心外だ。

こつちからも何か言つてやろうか…。

時間が経つて、弱体化したマジギレみぼりんなら、何とかかなりそうだ!

肘を前に伸ばし、体を少し前かがみ正座をした状態から動かなくなつた。

何か考えているのだろう。よしよし。怒り状態が解除されていくのが…あれ？

「……」

「み…みほさん?」

その場でいきなり立ち上がった。

その顔は、先程とは違い…真顔になった。

何かを考えている様だつた。暫くそのまま動かない。

目が少し泳ぎだした。

…なんだ？

おもむろに、ベットを指さした。

な…なんだろ…

「座って」

「す…座ってますよ？」

「…何時もみたいに、ベットに腰掛けて！」

「ハイ？」

な…なんなんだ？ 唐突に…。

下手に逆らって、また怒らせるのもなんだし…素直に従おう。

のそのそと立ち上がり、指を指された場所へ腰を落とす。

「……」

な…なんなのだろうか？

いつもの様に、少し深く座り、少し股を開いて…っ!?

……。

みほさんが、俺の膝を持ち、強引にこじ開けた。

何してんすか？

「……」

そのまま、後ろを向き、俺の股の間にストンと…座った。

「……」

いや、本当に何してんすか、みほさん。

なんか、いや…。みほから、ここまで近くに来るのって初めてじゃ

ないだろうか？

あれ？ なんで？ 怒ってるんじゃないの!?

みほの後頭部と…肩が見える。

「だって…隆史君。大きな胸の人好きだし…」

「……」

なんか、言い出した…。

いや、大好きですけどね？

大きさが全てじゃないですよ？ とか言ったら、また怒られる

であろうから黙ってしよう…。

「初恋がお母さんとか言われても、まったく否定しないし…」

「……」

否定できないセリフだけ!!

手を膝の上に乗せて、ブツブツと呟きだした…。

…表情が見えない為に、ちよつと感情が読めない。

ただ、ブツブツとした呟きが聞こえる…。

「全力全開になるとか言ってたくせに…」

ん？

「抱きしめてくれたのだって一回だけなのに…お母さんの胸、鷲掴みにするし…」

んん!?

「…隆史君。何にもしてこないし…」

「みほ…お前、何言ってるんだ…?」

「!？」

あ。自身でも気がついて無かったのか。

とんでもない事言ってしまった思ったのか、横髪の端から除く耳が少し赤い。

「うう…」

「えーと…」

どうしようか…これは、俺でもどうしようも無いなあ…。

なんだ？ 手を出して欲しかったのか？

そ…そういうモノなのだろうか…?

女って分かんないなあ…。

うーん…だからだろうか？

この状態は。

手を出して欲しいとかではなくて、ただ…もうちよつとそれらしい事をしてみたいのだろうか？

すきんしつぷ？

…ふむ。

取り敢えず、両肩に手を置いてみる。

「…!」

…今、一瞬…肩が跳ね上がったぞ…。

「…というか、震えてるな…。」

「…みほさんや」

「な…なに」

「…あの、恥ずかしいの?」

「当たり前だよ! デリカシーが無いよ!!」

女の子が甘えて来るって事…だろうか?

経験が無いから分らん!!

まいったな…完全に固まってしまった…。

ふむ。まあ、みほがここまでするくらいだしなあ…

あ。

決勝戦。

ああ…そうか…あれか。不安なのか。

この状態は、そういう事か…。

それでか…ああ。まあ今更気が付く辺り…俺は散々言われた通り、

唐変木なのだろう…。

…え。どうしよう。

そう気づくと、逆に何していいか分からん!! え? 何? もう一

回抱きしめるとかした方がいいの!?

「はあ…」

あ…目の前から…大きな溜息が聞こえた…。

「…やっぱり、ダメかあ」

え!?! なにが!?

「隆史君、私のお尻触りたいとかいきなり言うし…」

!?

あれか! 初めて抱きしめてみた時か!!

「…ス…スコシクライナラツテ、オモツタノニ…」

小声で聞こえない!!

あ…動きが止まった! またため息と共に何か考えてる!

「…変態さんなのに。お母さんの胸は驚掴みにしたくせに」

「

「…えっち」

うむ！ かなり破壊力がある一言!!

「……」

でもなあ…。

えっちつて…。

「…え。何？」

夜中寝てる俺に、あんな事したみほに、エッチとか言われたくないなあ…。

「!？」

あまつさえ、人様の家のトイレで…あんな事まで、してた人にとかなあ…。

「!!??」

いやあ、あん時のみほは、エロかった。うん。

「」

……。

ん？

こちらを振り向いてる。

あれ？

「どうしたみほ、顔がすごい色してるぞ？」

「……おおお」

「おっ」

「おきて…」

「掟？」

「お……おおきて…たの……お!？」  
……。

おきてた？

あ。

「…また声に出してたか」

「」

…ふむ。

ま、いいか!!

「…はい、始めっから、しっかり、ガッツリ起きてました!!」

「!!!!」

はい、声にならない悲鳴というものですね?

両手を前に出して、完全に固まってしまったね。

目を見開き、完全に涙目に…というか、泣いちゃってますね。

あ。立ち上がった。

オロオロしてるなあ…。

ロボットダンスしてるみたいに、左右に体を回している。

「ひうー」

変な声を上げて、玄関に体を向けたな。

まさか…。

「さて。逃げるな」

「うふうううあ!!」

腕を掴んで、逃亡を阻止する。

うわあ…めっちゃ涙目になってる。

…いかん。ちよつと可愛いとか思っちゃった。

……。

「ああああ!! あう!？」

「日本語でお願いします」

「なフツ！」

うん。…いい機会だから、言っておくか。

なんか、手を出すとかなにもしてこないとか気にしていたしな。

まずは…。

「俺はな、取り敢えず大会が終わるまではな。みほと、どうにかなるつ

もりはなかつたんだ」

「おおお母さんの胸は、掴んだのにい!？」

マタ、イワレタ

「……スイマセン」

「酔っていたとしてもお！ 他の学校の人とかあ！ 不安になる要素しかないよお!？」

「…あーうん、それも申し訳ないのですけどね？ 一応、最後まで聞いてください」

「うううう!!」

「…付き合う前にも言ったけどな、俺にはプラトニックな関係は無理だと思うんだ」

「……」

「それでも、一応我慢してまして…。落ち着いた後に、徐々にという事で…」

最後まで聞いてくれと言われた手前、ちゃんと最後まで聞いてくれた。

聞いた上で一言。

「…いくじなし」

「……」

いや…それを漫画とか以外で、聞くとは思わなんだなあ。

そうか、俺が躊躇しているだけだと思っていたのか…。

うーん。

ま。いいか。

言っておくか。

「あのな、みほ」

「……」

「一回、そういった関係になるとな」

「……」

「確実に俺が暴走しそうでな…正直、自分自身でもな……」

「…なに？」

「ナニスルカ、ワカラン」

「」

性欲というものに、長年栓をしている様なものだった。

一度開放すると間違いなく、溢れ出す。  
みほの顔色が、また変わった。  
今度はちよつと青くなつたねえ。

「…大会中にそんな事になれば、絶対に戦車道を疎かにさせてしまう  
だろうし…」

まあ…あれだ。

俺が何が言いたか、なんとなく理解してくれたのか、また赤くなり  
ながら、目を逸らした。

「…でも…そうか」

「え…つと？」

掴んだ腕を引っ張り、抱きしめてみた。

多分、先ほどの足の間に座ってきたみほは、最後まで気はなかつ  
たのだろう。

ま。無理だろ。無理無理。

だけでもまあ、このみほが、あそこまでしたんだし…。

「たつ!? 隆史君!」

話しているうちに、色々と感情が高ぶってきた。

俺に抱きしめられた、みほの体はそのまま硬直している。

つい先程まで、俺もその気はなかった。

いつもの様に、怒られて…それで言い訳して…。

「いくじなし、か…」

そのままの関係で…。

「えっ!? えっ!」

「では、その意気地を見せようと思うのだけど…どうだろうか?」





少しかがみ、みほと頬を合わせる。

少し、変な声がまた聞こえたが、まあ…無視してやろう。

ここまで顔が接近したのは、多分…今まで無かっただろうな。

合わさる頬から、熱い体温を感じる。

少しずつ頬をずらしながら、真正面まで来ると目があった。

そのまま、みほの唇と自分の唇が、少し触れた。

一瞬、彼女の体が、ビクついたが、この機会を逃すと…また俺がそ

の気になるのが、いつになるか分からない。

俺の行動で不安にさせてしまっていたのなら…。

多少強引でも…彼女が拒否しないのなら…。

…そのまま唇を合わせた。

暫くして、少し顔を離れた。

みほの目が…泳ぎだした。

左右を行ったり来たりで…疲れないのか？

「あ…あの！ えつと、はう…」

唇を合せている間は、大人しかったのに…離れた瞬間…いつもに

戻ったな。

だから、もう一度。

「んん!？」

今度は、舌を入れてみた。

入れた瞬間、体がまた硬直した。

こちらから、みほの口内をまさぐる。

「…ん」

顔を離すと、今度は目の焦点が定まっていな…。

今度はまた、抱きしめる。

首元に頭をいれ、鎖骨から首筋まで…そちらに今度は唇を這わせ

る。

「んっ…」

「みほ。嫌なら今、言ってくれ」

「えっ!? あのとっ!？」

「…これ以上続けると…抑えが、効かなくなる」

「ひう!？」

おー動揺しとる、動揺しとる。

何が言いたいか流石に、分かるだろう。

「うう…あの…本当に？」

「こんな流れじゃ、ロマンチックとやらとは…随分とかけ離れて、申し訳ないんだけどな」

「…そうだね」

苦笑する。

ふたり揃って…苦笑する。

…少しの間、笑い合う。

顔を首元から離すと、今度はみほから、唇を合わせてきた。

当てるようなものではなく、ちゃんと…唇を合わせてきた。

あのみほが…。

「嫌じゃないよ…。多分…ここでやめちゃうと…次は無い気がする」

「……」

「だから…うん、いい…」

みほから感じていた、動揺感がもう無い。

…。

みほの決断が、早かった…考える素振りすら見せなかった…。

……

……

息遣いしか、聞こえなくなった。

取り敢えず、全開未遂に終わったので、そちらを優先した。

うん。

みほの体を両腕で抱き締めるように、後ろに回し、スカートの下から手をいれる。

一瞬、体が硬直した様だったけど、構わず手を差し入れた。

特に抵抗もなかったので…構わず撫でる様に、下着の上からマツ

サージをする様に揉む…というよりか、こねくり回す。

「んう!？」

はい、こねくり回します。

下着の感触が、指から伝わる。

それと同時に、尻の柔らかい感触も、手全体で楽しむ。

…うん。これだ!

念願のみほの尻…臀部を手に入れた! 文字通り!!

「やつ!? 隆史君、何言ってるの!？」

「何、言ってるんだろうな…」

また、声に出ててた…。

雰囲気ぶち壊しですね!

でもまあ…。

左右の尻の間…臀裂とか言ったか?

手を回すように、左右の人差し指で、下着の下部から、まくるりな

がら指を這わせる。

「ンッ…」

目の前から、少し甘い声が聞こえてきた。

そろそろ、スカートを本格的に捲りたかった…が。

いやね…下着とか見たかったんですけど…。

みほがの両手が、俺の頭を左右の手でホールド。

もう一度、唇を合わせてきた。…そのまま俺の口を貪る様に…吸っている。

荒い息遣いと共に。

…アレ?

みほさん、もっと恥ずかしがるとか、思ってたんですけど…。

…あの夜。

真つ暗な中ではいいえ、直前までしてしまっただからだろうか?

初々しさとか、すげえ見たかったんですけど?

…みほも色々、溜まっていたのだろうか?

「んあ…あっ!!」

何かを思い出したかの様に…突然声を上げた。

なんだ？

「た…隆史君」

「ん？」

「お…お風呂先に入っている？ シャワーだけでも…」

「……」

「その…汗とか…かいちゃって…」

「……」

「…隆史君？」

「ヤダ」

「えっ!？」

「なんか勿体無い!」

「……」モツタイナイツテ…

あ、ちよつと引いてる。

じゃあこっちは、押そう。

軽く肩を押さえ、ベットに座ってくれと、指示をする様に押ししてみた。

特に抵抗なく、そのままチョココンと座った。

何か、上目使いでこちらを見上げてくる。

……。

…。

あの時。

あの夜のみぼりんを、もう一度見たくなった。

さてと。

もう、中途半端に恥ずかしがると、先に進まない。

おもむろに…ズボンのチャックでは無く、ベルトを外し、ズボンをそのままズリ下げた。

「!？」

はい。

正直、体は健康体です。

そして若い。

先程、みほの推進力部分を堪能していた時、見事に元気になりました

た。

我が息子。

それを表しに、特になにも言わずに、みほの眼前に突き出した。  
5センチほどの距離…。

一瞬息を飲む声が聞こえたが、すでに目線がソレに集中している。

…目を見開き、夢中になる様に…ソコしか見ていない。

小さな鼻息が聞こえる。

少しずつ近づいて来ている為、その鼻息が少し亀頭へ掛かる。

あの夜と違い、現在電気が絶賛活躍中。

はつきりと見える陰茎に、夢中になってますね。はい。

…いや、逆に俺が恥ずかしくなってきた。

人差し指をみほの顎の下に入れ、親指で軽く唇を下に下ろし口を開かせる。

特にそれ以外の事はしていないが、段々とみほの口が接近してきた

…。

口から舌が少し顔を覗かせた。

…。

「はあ…え…あ」

舌が、亀頭の下に触れた。

「つぷ、あ…んむ…」

ズリユツつと、そのまま一気に飲み込む様に、口に入れた。

頭を、押し込むように前に出す。

そのまま、少し舌を動かしているのが分かる。

ニユルつと…。

一往復がすみ、亀頭の部分に口が戻ってくると、今度はそれを舐め回すように舌を這わせ始めた。

そして、ゆっくりと小刻みに前後に動き始めた。

プツ…ジュプツ…音が聞こえる…。

段々と鼻息も荒くなって…。

「チュプツ、チュプツ！ チュプツ！」

舌の全体を使い、舐めまわす。

夢中になって…舐めます。

一度口を離し、こちらを見上げてきた。

俺の陰茎の横に、見上げるて来るみほの顔がある。  
すげえエロい絵面になってるなあ…。

「あの…隆史君」

「なに？」

「その、…見られてると恥ずかしい…」

「……」

「で…電気…を。その…消してほし…『断る！』」  
「!?」

拒否します。

はい、力強く拒否します。

です、そのままもう一度、亀頭の先をみほの口につける。  
明るい状態で、みほのフェラ顔を見たいのですよ。うん！

「……」

あ、みほが動かない…。

ちよつと非難する様な目で、見上げてきた。

はい、ジト目というやつですね。

「…やっぱり、変態さん」

一言、ポツリと呟いた。

うん、ちよつと逆にもつと言わせたくなってくるな！

「…んっ」

動かないで待っていると、観念したのか…もう一度口に入れた。  
手で前髪をあげる。そのまま、手はみほの頭の上に置いておく。

この方が、よく見えるしな…。

またゆつくりと動き出す。

口から唾液の音が聞こえる。

啜る音が聞こえる。

休憩の為か、たまに開ける口からは、ハアハアと熱い吐息を感じる。  
また動き出す。

……

あの夜のみほと、今みほが重なって見えた。  
2度目だからだろうか。

少し、躊躇が無くなっていた。  
とうか…上手くなってる…。

目を閉じずに、半目のまま動かすみほ。  
その目が、とても熱っぽいのが分かる。

…

口端を唾液が伝う。

ポタポタと、座っているみほの太股の上に落ちる。

唾液が混ざる音が、大きくなってくる。

ジュプジュプと…。

ジヨパジヨパと…。

「ッ…」

両手でみほの頭を掴み、動きを止めた。

そのまま、口から引き抜くと、大きな呼吸を繰り返し始めた。

…夢中になりすぎです。

ギシツと、ベットが軋む。

もう一度、みほの肩を押す。

「はあ…はあ…」

呼吸が荒い。

みほの、上気した顔。

潤んだ…熱っぽい瞳。

体に触れれば、小さな声を上げる。

押し倒した体は、もはや硬直する事もなく…くたつと、力が抜けて  
いる。

太股を今度は横から摩り上げ、スカートを託し上げる。

白いレースが着いた、パステルイエローの下着が目に入った。

体を倒し、彼女の体に覆いかぶさり、再度まだ唇を合わせる。

舌を入れれば、それに呼応する様に、また絡み合わせてくる。

ニチャニチャと目の前から音がする。

たまに薄目を開けてみれば、またみほも開ける。  
膝に腕を入れ、片足を上げさせる。

下着の端を、滑らすようにを下げ様とすると、一瞬躊躇した気がするが、みほが腰を上げた。

するつと下着を脚を通し、彼女から完全に取り払う。

…取り払いながら、自信の服を脱ぐ。

そのままスカートを脱がし、制服を脱がす。

下とセットの、またレース付きのパステルイエローのブラを取り  
払つらおうした所で…みほの体が硬直した。

ブラ紐が肩から外れ、両手で胸元を抑えて、少し抵抗している。

そして…。

「…た…隆史君」

「…なに？」

「……」

「……？」

無言で、少し不安そうに…そして少し疑う目で…。

「…なんか…慣れてる」

硬直した。

…俺の体が。

「…動きが……すごい手馴れてて…なんか…ヤダ…」

い…いかん。

普通にしすぎた。

ぐっ…横を向いてしまった。

「……」

前世でそれなりに経験をしたからなあ。

…まあ素人童貞みたいなモノだけ…。

そこから考えれば、久しぶりとはいえ…普通にしすぎたか？

ど…どうしよう。

…ひどく不満顔。

いや…ちよつと悲しそうな…。

ぐっ…。



仕方ない…。

「いいか、みほ」

「…なに？」

「男ってのはな。普段からイメージトレーニングを欠かさないモノなんだよ」

「……」

「……」

「ね…ねえ、隆史君」

「…はい」

「それって…普段から、えっちな事考えてるって事だよね？」

「」

「すげえジト目で、見られた…。」

「よって自然と目線から逃げてしまった。」

「えっち」

「…スイマセン」

「……」

「……」

「多分…俺の顔も赤くなっているのだろう。」

「少し、みほが笑ってくれた。」

「……もう…隆史君は……」

「仕方がない。」

「そう言って、胸の前で重ねていた腕を解いた。」

「自分から、最後の衣服を取り払ってくれた。」

—————

—————

—————

「一糸まとわぬ姿という体の感想でも、言おうと思ったのだけど…。」

恥ずかしかつたのか、即座に俺の首に手を回し、抱きついてきた。裸同士で抱き合うと、：触れ合う肌が心地いい。

「んっ！ ふうっ！」

見えないので、手探りでみほの秘部を愛撫する。

口でしてやろうと思っただけど、みほが離してくれないので、これしか方法が無かった。

「んんっ!!」

声を殺しているのは分かるのだけど：正直…。

「みほ…」

「…」

「なんか、すっごい事になってるんですけど…」

「んんっ!!」

なんかもう：大洪水…というか何というか…。

触れるだけで、ぐちゃつと音がした…。

音が恥ずかしいのか、俺に抱きついて腕の力が強くなる。

…

「んんっ!! はあっ!! んあ!!」

だから、敢えて大きく音を出し見る。

擦るだけで水音がする。

ニチャニチャと…。

少し浅めに指を入れ、上下に動かせば、グチャグチャと粘り気がある音が響く。

…

秘部をまさぐり、クリトリスの場所を手探りで見つける。

…

「ああああっ!! んあ!!」

擦る。

皮を剥き：ひたすら優しく、擦る。

愛液で滑り気も、申し分無いため、ひたすら剥いたばかりのその場所を攻める。

「やっ！ んん!! あっ!! あっ!! はっ!!」

すでに腕を解き、ベッドのシーツを握り締め、刺激を与えれば腰を跳ねさせ、その快楽に酔っている。

何度か繰り返すと、答える様に何度か、大きく痙攣を繰り返す。

「や……はっ……はあ……はあ……」

そろそろやめておこう…。

あまりやりすぎると…またなんか言われそうだし…。

なにより、俺がそろそろ我慢できない。

さて…。

というか…みほさん。

貴女、エロスギデス。

「あ……あ……はあ……は……」

あく…こりや、2, 3回はイッタのか…目が少し焦点が合っていない。

これなら、幾分は大丈夫だろうか？

みほの上に覆いかぶさる様に、位置につく。

膝に腕を入れ、脚を上げさせる。

残った手で、彼女の入口に…俺を当てる。

熱い体温を先から感じながら、ニチャツと音を出しながら、ぐぐつ

と押し入れる。

その少し奥。

壁に先が触れた辺りで、一度止めた。

「…みほ？」

「う…うん。でも…やっぱり…ちょっと怖いかも…」

できるだけ、痛みの無いようにしてやりたい…が。

こればかりはどうしようもない。

ゆっくりより…ま、一気にした方が、一瞬で済むだろうか？

……

ま、それ以前に。

やっと…と言うべきか…何と言うべきか…。

「…」

みほが少し、不安げにこちらを見てくる。

なにも言わない方がいいだろう。

「……うん」

みほの声がした。

それをきっかけに……

グチツと一気に……押し上げるように……

「っ……あ……」

……何か音がした。

「あ!! ……はっ……はあー……はあ……」

一番奥まで、一気に押し入れた。

小さな声を上げて、ゆっくりと息を吐いた。

一瞬、苦痛に歪んだ眉。

目に力が入り、体が痙攣した。

「あ……あ……は……」

流石に心配になる……

「だ……大丈夫……だから……」

ただ慣れるまでと、動かずにいる。

「ただ……その……恥ずかしいから……あんまり……見ないで……」

「思ったより……痛くない……から、その……」

露骨に言いたくないのか、そこで黙ってしまった。

……なんとなく言いたい事は分かった。

「……痛みとか……より……本当に、私を選んでくれたのが……今になって実感したの……」

「……」

ゆっくりと動き出す。

「……それが、うれしい」

感情が高ぶる。

「っ!!」

血か愛液か。

ヌルツとした感触が…気持ちがいい。  
いや…みほとこうしているのが…心地がいい。  
今になって…何か安らいだ気がする。

「ふっ…い…んん…」

クチュツとした音がする。

もう一度押し入れると、グチュツと音がする。

「……」

少しは気の利いた事を言ったほうが良いのだろうけど、下手な事を言うくらいなら黙っていた方がいいだろう。

だからそのまま、ゆっくりと動き続ける。

「んあ!？」

奥に当たった感触がした。

コツンと。

その当たった時、みほの声が明らかに違った。

甘い声。

もう一度。

ニチャツ…ズチュツ。

「はあ!!」

……。

「んっ！ はっ!! あっ!! あん!!」

一回だけでなく、何度か繰り返す。

痛みとは違う、本当に甘い声に変わっている。

快感…を、もう感じている。

「……」

少し上を向き、目に涙を溜めながら…こちらを向いている。

また、みほの方から、首に腕を回してきた。

…口を吸われた。

「ふっはっ！ んっ!! んんっ!! ちゅはあっ!!!」

舌を絡めながら、そのまま押しつぶすように腰を動かす。

ただ…動かす。

みほ自信、良くわかっていないのだろう。

ただ、目の前。顔の前で、口と口の間から熱い息と共に、吐き出す声。

グチュ、グチュと音がする。

肌を肌に叩きつける音もする。

そこから、また水が叩きつけられる様な音…。

「はっ!! あっ!! …き…もち…い…んああ!!」

動く。

ただ、みほに繰り返し、何度も入る。

ジュチュ、ジュチュと、何度も繰り返し音を響かせながら。

何度も。

みほの中は狭く、脳髓から快感を感じる。

ただ気持ちよく、夢中になってしまいたいそうになる。

―が、なんとか意識を保とうと我慢する。

今は、出来るだけ快楽に流されないように…。

「あっ!! あっ!!」

抱きしめながら。

抱きしめ合いながら。

「た…隆史…く…」

耳元から、リズムカルに聞こえてくる声。

「隆史君っ!! ああ!! たかつ!! んん!!」

連呼して名前を呼ばれる。

呼ばれる…。

正直、本当に始め、みほが官能的に見えていた。

普段のギャップもあり、この乱れ方。

…。

でも何故だろう。

今はそんな気持ちだが、もう無い。

動く度に俺の名前が、彼女の口から発せられる。

何度も呼ばれた。

何度も叫ばれた。

呼ばれる度に、気持ちが高ぶる。

呼ばれる度に、みほが愛おしく感じる。  
今はただ…。

何度目だろうか…。  
何回目だろうか…。  
こみ上げるモノを感じ…。

俺の全てを みほの中に吐き出した。

◇

裸のまま、目が覚めた。

時計を確認する…前に、俺の寝ていた横を確認する。

…。

疲れ果て…そのまま眠り込んでしまった みほがいる。

同じく、なにも着ていない。

一回だけですまなかつたな…。

何度、肌を重ねたか。

何度、みほを抱いたか。

覚えていない。

気がついた時には…というか、気がついたのは今だな。

いつ寝たかも覚えていない。

適当に頭を撫でてみると…寝息と共に変な声を出している。

「…」

ベッドから脚を出し、立ち上がる。

今度こそ時計を確認すると、早朝の5時ちよつと前だった。

もう一度みほを見る。

決勝会場へ移動する為に、起床する時間とやらには、まだもう少しあるな。

まだ、寝かしといてやろうか。

目覚まし時計を、みほの起床時間に再度セットする。  
さして。

俺自身が、家をでないといけない時間には、もうあまり時間が無かった。

本当は、4時に起床しないといけないのに、もう5時だ…。

急いで、みほを起こさないように支度をする。

書置き位はしておこう。

殴り書きだけど、なにも無いよりいいだろう。

5時半には、母さんが迎えに来る。

あの性格だ。

時間になつても出てこなかったら、ドアを蹴り破つてでも入ってくるだろう。

…この状態のみほを見られたら…それは流石にきつつい。

いろんな意味で…。

…

…

…

彼女達は、決勝戦へ。

俺は、過去への決戦地へ。

向こうで会えないかも知れない。

俺だけ決勝戦へ、参加できないかもしれない。

みほの側に、いてやれないかもしれない。

…

彼女は抱かれながらも、少しずつ話した。

…不安。

…恐怖。

…だけど…もう大丈夫だろう。

…なんとかできるだろう。

…学校の皆がいる。

…友達だっている。



だから、大丈夫だ。  
なんとかなる。

…はっ。

死亡フラグみたいだな…決戦前にこんな事。  
ま、そんなフラグはへし折ればいいな。

……。

最後にみほを見下ろす。

相変わらず、変にニヤケて寝るな…

……。

はっはー。今度は逆に、どんどんエロい事をしていこう！  
感傷的にならないで、エロ特化で！

……。

………。

んじゃ、頑張れよ。

…頑張るから。

「行ってきます」

※ルート壊※　　く平穩？（笑）　　く

全校集会。

体育館で行われた…全校生徒に向けて…戦車道全国大会　優勝の報告。

暗い体育館の中。

壇上の上で、私達は並び…全校生徒の注目を浴びる。

一部は、熱狂したかの様に歓声を上げ…。

一部は、ただ退屈な日常の一部として、時間が過ぎるの待っている。まあ廃校が、かかっていたなんて…一般の生徒は知るよしもない。後日、それも知れ渡ってしまうのだけど…それはまた別の話だな。ある程度の発表が終わり、スクリーンに映し出された、各試合のダイジェストが流れ始めた。

壇上から下りた後、また私達は元いた場所に戻り…他の生徒とその映像を眺める。

…という予定だったが。

ま。私はいつもの様にサボル。

ボイコットだ。

騒がしいのは嫌だし…河嶋先輩がうるさい。

暗い体育館の中、抜け出すのは簡単で、堂々と体育館を後にした。校内をブラブラと彷徨く。

今日は、どこで寝ようか？

校舎を何気なく見上げると、朝の事を少し思い出した。

…決勝戦。

私達の試合の裏での事。

書記が小山先輩にした、その報告…。

そうだ。

途中、抜け出して…日本戦車道連盟の理事長とやらと、面会していると思われる書記を思い出した。

体育館にはいなかったから、まだその理事長とやらと話でもしているのか？

結局書記は、全校集會に現れなかった。

…。

…：あいつが、よく分からない。

なんだろう…：少し、モヤモヤする。

書記：尾形 隆史。

ほぼ初対面の私に、喧嘩を売ってきた奴。

私に変なアダ名をつけてきた奴。

…。

おばあ…。

…：私を助けてくれた奴。

そして…：西住さんの彼氏。

西住さんと、付き合いだしたのでは無かったのか？

フラフラと彷徨ってはいるが、変な所が生真面目で、不貞をする様

な奴では、無いと思っていたのに。

…。

五十鈴さんと関係を持っていた。

しかもあれは、どう見ても五十鈴さんから誘っていた様に見える。

でも、西住さんとの会話も、何時もと同じようにしていた。

ごく自然に…。

会話の中で、西住さんが五十鈴さんとの事を容認していると、二人は言っていた。

…。

「うう…」

…：気持ち悪い。

痴情事など、今までに考えた事もなかった。

縁なんて全くないと思っていた。

変に考えすぎて…：気持ちが悪くなってきた…。

…。

気がついた時、例の宿直室の前に立っていた。

フラフラと歩いて…：体育場を抜けて…：無意識にここへ来ていた。

小さな小屋。

本当に小さい：4畳の部屋。

校内の雑記林の中に設置され、小汚い風貌からも、ここが宿直室だと誰も認識はできまい。

見た目が、ただの倉庫か何かだ。

だからここで寝ていたのに：。

まあいい。

書記もない。西住さん：五十鈴さんも全校集会に出ている。

携帯を確認すると昼の1時か：。

1時間か2時間くらいは寝れそうだな。

窓のカーテンの隙間から室内を覗くと、誰もいない事が分かった。

誰かがいた。もしくは、いる様な痕跡もない。

もう今日は、誰も来ないだろう。

ここでサボるか。

いつもの様に、鍵の掛かっていないドアを開け、室内に入る。

：小さな部屋。

中途半端な生活感。

：。

押し入れが少し、開いている。

襖を開くと、沙織に畳まれた布団。

やはり前回の日から、誰もここに来たような痕跡が無いな。

もう、布団を出すのも面倒だ。

また、この中がいい。

丁度暗くなるし：布団の上だし：。

押し入れの中。

畳まれた布団の上：頭を下げれば、私が座れる位のスペースに流れ込む。

そのまま布団の上に寝転び、襖を閉める。

襖を締切り、真つ暗くしてしまうと、本当に夜まで寝てしまいそう

だから、少し開けておこう。

狭まっていく、室内を何気なく見つめる。

「……」

…そう。面倒くさいだけ。

一瞬感じた、嫌悪感も気のせいだ。

別に、書記と五十鈴さんがいた、あの畳の上にいたくないとかでは無い。

違う…。

◇

…ッ。

スカートのポケットの中で、携帯電話が振動している。全校集会の時から、マナーモードにしていた為だろう。元気よく、携帯が振動している。

…おかげで目が覚めた。

暗い中、ポケットを弄り携帯を探す。

取り出して、画面を確認する前に着信が切れた…。

どうせ沙織だろう。

携帯の画面に映し出された、デジタル時計。

…なんだ。

寝に入って30分程しか経っていない。

すぐにまた、携帯が振動した。

メールか何か…やはり沙織だった。

休憩時間に、私が見当たらなかった為、私がどこにいるか？ その様なメール。

…休憩時間って…どんだけ試合映像を上映するのだろうか？

無視だな、無視…。

ん？

…あれ？

襖が、締め切つてある…。

室内が真つ暗だった。

無意識に閉めてしまったのか？

まあいい…さつさと出よう。

襖の端を、手探りで探る。

ああ…あつた、あつた。

ん…なんか、音が聞こえる。

何か…移動する様な音とか…そんな感じでは無い。

何かを叩きつける様な音と、人の声。

まずい…誰か、この部屋に入ってきたのか？

出れないじゃないか…。

…。

!?

一気に寝ぼけていた脳が、目を覚ました。

声の正体に気がついた。

というか、声質で分かった。

…あの時と同じだ。

甘つたるく、甲高い…。

そして、変にリズムカルな…。

…この場所を知っている人間は限られるし、ましてや…この全校集会をしている最中…休憩時間…。

何となく正体が分かった…。

もう来ないと思つていたのに、また来たのか？

書記と…五十鈴さん…。

恐る恐る…ゆっくりと少しだけ、襖を開けてみる…。

確認するだけしたら…布団の中にも潜つて、やり過ぎそう。

「!!」

襖がしまっていた為に、外の音も遮断されていたのだろう。

声が出てしまいそうなのを、なんとかこらえた…。

『はっ!! んっ!! んっ!!』

…五十鈴さんじゃ、なかった。  
二人いた。

一人、あれは書記…だろう。

その書記の下半身の上に、制服姿のまま、股がついている…。

…西住さんがいた。

こちらに背を向けて、体全体で上下に動いている。

顔は見えないが、あれは間違いなく西住さんだろう。

腰部分は、スカートに隠れて見えないが、私でも分かる。

情事という奴だろう…。

こんな狭い小屋だ。

ヘタをすれば、外にも聞こえるだろう。

それが分かっているのか…声を出さない様に、片手で口を押さええているのが、体を傾けた時に少し見えた。

…やはり、西住さんだった。

呆然としていると、書記は突然、動きを止めた。

『…あのさ、本当にいいのか？ みほは今回、ある意味で主役だろ？』

抜けていていいのか？』

『あ…んっ。だ…大丈夫』

『…変に勘ぐられそうだけど…特に華さんに…』

『はあ…はあ…。だ、だって隆史君、今日また…』

『あく…うん、引越し完了もしてないけど…この後、陸に上がる予定だな』

『…だから…いいの。華さんも、一緒に住む事になりそうだし…今ぐらいしか…』

『……………』

『……………』

『あの…これ以上は正直、俺も止められなくなりそうだけど…』

『……』

書記の手が、西住さんのお尻を鷲掴みした。

『んっ!?!』

掴んだ直後、西住さんの体が傾き、前に倒れ込んだ。

そのまま、肌同士がぶつかり合う音が、大きく響きだした。

下から書記が、突然激しく動きだした。

足を踏ん張り、大きく…。

『やつ!?! んあ!! たっ! たかっ!! こっえ…でちゃんア! はっ

! あっ!』

…。

……。

聞いた事のない、西住さんの声が響く。

西住さんが、書記の上に倒れこむ様になっている為…見えてしまっ  
た。

西住さんの秘部分。

……。

え……。

ナンダ、アレ。

「……あ」

なんか物凄いモノが、西住さんの体内に入り込んで…出し入れを繰  
り返している。

無意識に声のでてしまった。

書記のモノが、テカテカと光ながら…西住さんの体ごと押し上げて  
いる。

グチグチと、変な音が聞こえる…。

い…痛くないのか…あんなに…。

……。

……何を言っている。私は。

書記の手が、西住さんお尻の握り締める様に力をいれ、左右に開い  
た。

おかげで秘部分が、丸見えになり…なんだろう…肌がぶつかる度に、



水滴が飛び散っていた。

……。

……………。

突然、書記の動きが止まった。

そのまま、西住さんをお腰上げ…西住さんから…アレを抜い

…いい!?

な…なんだあれ?

何なんだアレは!?

あんなモノが、体内に入っていたのか!?

は…初めてまともに見た。

男の……。

……。

『……』

そのまま、西住さんを四つん這いにし、後ろに回った。

というか、西住さん正面の方向が、こちらを向いている…。

少し離れた為に、気づきはしなと思うが……。

『なあ…みほ』

『んひゃあ!?! なに!?! どこ触ってるのお!?!』

西住さんの悲鳴と共に、書記の動きが止まった。

なんだ?

書記が、西住さんのお尻を撫で回してる。

『…そのうち、ここでしてみたいか?』

『ふえ!?!』

なんの事だろう…。

『まあ…段々と慣らして行って…まあ。うん、多分大丈夫』

『こ…怖いよ…それ…普通じゃないよ……』

『我々の業界では至ってノーマルです』

『はえ!?!』

『…今の時代、ネットになんでも載ってるしな…道具揃えて…』

『…………』

……………。

私は何をしている。

何を凝視しているのだろうか…。

やめよう…。

さっさと、布団に…

『んああ…はあ…ああ!!』

…書記の顔が完全に見えた。

こちらを見ている訳ではないが…西住さんの腰を後ろから腰で押していた。

「!!?」

西住さんの体が一度、大きく前に押された直後…また…溶けるような声と一緒に、体を震わせた。

目を見開き、泣きそうな顔と共に…首を上げ、大きく背中を伸ばした。

泣きそうな顔…といっても、目だけで…口元は笑っていた…。

見た事が無い…顔をしていた…。

『あ…んっ! …はっ! あ……』

『みほさん…入れだけで…一人でイカないで下さい…』

『…ふっ!? そっ…いう事、言わ…っないで!』

『呂律が回っていないけど…というか、みほさん。何回いったのでしょうか?』

『……………内緒』

あ…書記が悪い顔した。

体を倒し、西住さんの顔の横に頭を落とした。

何か、耳元で囁いてるな…。

『う…ううううう』

西住さんが、唸りだしたな。

『……………3回…いいいい!』

何か回数を言った瞬間…書記の体が少し震えた。

直後に、また激しく動き出した。  
…バツツン、バツツン聞こえる…。

西住さんは、両手両足を使い踏ん張っているが…顔がすごいなあ…。

段々と、嗚咽にも似たような声が、西住さんから聞こえてきた。

西住さんの下半身が、少し宙に浮いてしまうように、書記は下半身を叩きつけている。

…

『アッ!! アッ!! ンッアッ!!』

「……」

書記に腰を叩きつけられる度に、大きな声を上げている。

…呆けた様な顔…。

気が付けば私は、押し入れの壁に背をつけ…て、顔を外に向け…ただひたすらにまさぐっていた。

何故だろう。

五十鈴さんの時には、こんな事にはならなかった。

決勝前だという事で、無意識に気が張っていた為だろうか。

…：まあ、家帰ってからはすごかったが…。

自分の秘部を指でなぞる。

声が出てしまつては、まずいので…軽めに。

…一瞬、書記の顔が見えた。

そこから連想してしまう。

無線で聞いた、男同士の会話。

書記が私へ抱いている希望を、少し思い出していました。

私も…あんな顔をしてしまうのだろうか？

…!!

結局…見入ってしまったているな…私は。

…というか、なにをやっている…。

…外からの光で、自分の指が凄い事になっているのに気がついた。

また視線を外へ…。

やめなければと思うが、なぜか動けない。  
目を逸らせない。

呆然と見つめる中、……響く。

ただ響く。

ひたすら、西住さんの…声が。

……ンツ。

『みほ…そろそろイキそう』

西住さんの顔が…どこか笑っている様に見えた。

書記が少し、苦しそうな顔をしている。

西住さんの腰を持ち、今まで一番激しく動いている様に見えた。

叩きつける音も、今迄で一番大きい…。

《 やってやる やってやる やつあああて、やるぜ イ〜ヤなあ

いつをボコボコに ♪》

『……』

『た……はあ…隆史君？ ど…どうしたの？』

『……』

何度か聞いたことがある、西住さんの携帯電話の着信音が響いた。  
相変わらず、なんとも言えない歌だ。

『……いや…何でもない』

なんだろう。

着信音が響いたら、書記が動きを止めた…。

なんかしかめっ面になったな…そんな表情をした。

《 ケンカは売るもの！ 堂々と〜♪ 》

『…いいや、みほさん。出てください』

『え……』

『…ボコの歌が、バックミュージックつてのは、ちよつと……』  
『……』

書記が、すぐ横のちやぶ台の上に置いてあつた携帯電話を、西住さんに渡す為に手に取つた。

その手の携帯から、まだよく分からない歌が鳴り響いているな…。

『う…うん』

まだ、ガラケーの西住さん。

折りたたみを開き、耳に当てる前に画面を見ている。

…。

なんだろう…今、一瞬。

また書記が、非常に悪い顔をしたように見えるけど…。

『あ、会長だ』

『!!』

—  
—  
—

『な…なんか、ごめんね?』

『いや…大丈夫。まあ…早く行ってやって…』

『う…うん』

着信相手は、会長だつたようだ。

私と違い、西住さんは真面目だからな。

抜け出した彼女を、携帯で呼び出したようだった。

書記が許可…というのも変だが、その許可を出すと、西住さんは乱れた制服をなおしていた。

『…でも、隆史君。私が電話にでようとした瞬間…何かしようとした?』

『……イエ』

『そう？』

あ…。

書記が視線を、顔ごと逸らした時点で思い出した。  
無線垂れ流しの時に、言っていたな。

声が出せない状況で、どうこう…そんな希望ばかりだったな。

ああ、それで通話中に、何かしようと画策したんだろう。

…変態が。

大方、相手が会長だったからやめたのだろうか。

なんだかんだ、あの人は勘が鋭いからな。

じゃあ行くね？ と、西住さんは言い、慌てる様に部屋を出て行った。

ボタンとドアが締まると、書記はその場に大の字になって仰向けにひっくり返った。

…その前にまず、下半身をしまえ。

『いかん…非常に…中途半端だ…』

「……」

…うん。

意味が分かる自分が嫌だ。

『自分で処理すんのも嫌だし…まあ…我慢する…か？』

ブツブツと独り言が大きいな。

あ…こちらに顔を向けて止まった。

最後なにかに気がついた様に、体が固まった。

…。

寝転がったまま、完全に顔をこちらに向けている…。

…オイ、マサカ。

『あれ？…襖、しっかり閉めたはず』

閉めたのはお前か！

まずい!!

非常にまずい!!

少し開いた襖に、書記が気がついた!!!

今閉めるのも、バレそうだし……いいああ!?  
下半身丸出しでこちらに近づいてくる!!  
しまえ!! まず、下を履け!!!  
いつまでもマゴマゴしている訳にもいかないし!

どうする?  
どうする?  
!!??!?

『……』

スー……

襖が静かに開く音がする。

取り敢えず、逃げ場が無いので、無理やり下の布団に潜り込んだ。  
中も暗いし……これでやり過ごせるだろう。

幸い、体が小さい私だ。

そんなに目立たない……。

でも……これ、私が見つかったらどうなるのだろうか?

ドウニカ サレテ シマウノダロウカ?

『……』

書記が、無言なのが怖い……。

おそらく、押入れ内を凝視してるのだろう。

……チラッと、五十鈴さんの顔が浮かんだ。

「……」

!?

なんだ!?

なにか、足に……あつ!!

書記が、布団に手を突っ込んできたのか!?

いきなり足首に、暖かい温度が……掴まれた!?

『……誰だ? 華さん……じゃないな』

後は無理やり……力任せに、引きずり出された……。



なんか……大物が釣れた……。

初め、華さんかと思った。

この宿直室……というか、この小屋の存在を知っている者は少ない。前回、普通に使用してしまった、華さんくらいしか思いつかなかった。しかし、これで隠れているつもりだったのか……。

布団が思いつきり人、一人分浮いていたので、すぐに誰かが隠れているのはわかった。

流石にさっきの、情事とやらを見られていたか不安だったので、引きずり出してみたものの……。

……どうしよう。

布団とセットで、猫みたいな人物が出てきた……。

というか……。

挟まっていた布団に、色々と引っかかったのだろう。

スカートはめくれ、上の制服も腹部までめくれ……その。

……乱れた布団の上に、横たわるようになってる姿が、非常にエロ



い事になつていた。

『…マコニヤン。なにしてんねん』

「……うむう」

おそらく、ここでサボっていたのだろう。

押し入れの中で寝ていた…そんな所だろ。

俺も似たようなモノで、していた事がアレですから何も言えませんがね！

うん。

腕で目元の顔を隠している。

俺の呼びかけに、少し腕を上げて、目だけ覗かせた。

「書記………下履け」

……。

片足を上げているマコニヤン。

思いつきり下着がはだけているのに、気がつかないのか…隠そうともしない。

白の下地に、青の水玉が……ん？

んんん!!?!

「きつ…聞いているのか。下をは………下?」

目を下に移しましたね。

「!?」

なにか言ったと思ったら、勢いよくスカートの前を下に降ろして、前を隠す。

…が、お尻の下に、畳まれてスカートが挟まっているので、うまく隠れない。

いや…まあ。

股間部分に目が行ってしまったのは、仕方がないにしても…。

……仕方ないよね？

普通、目に焼き付けるよね!?

まあ…その股間部分。

下着の下地が白だったので、気がついてしまった。

なんか…一部部が、少し色が変わっていた。

女性でも露骨な、ああいったのを見ると…まあ、そうなのだろうな。  
ふむ。非常に気まずい。

「はあ…覗いてたのか……」

「ふう!？」

「…襖が開いていたから…まあ……」

「こ…こんな所で、サボっているお前が悪い」

ありや否定しない。

まあ、言い訳できないからな。

「そりゃあ…そうなんだけどなあ……」

「取り敢えず、下を隠せ!」

…あ、忘れてた。

ああ…：しかもMAX状態でしたね…。

寸前にやめてしまったから、中々収まらない。

「…それともなんだ? このまま……」

このまま?

…そうか。

この状態だと、第三者が見れば、即座に通報されても仕方がないよ  
な…。

「?」

一瞬なにか、期待した様な目をしたマコニヤン。

顔を赤くして、人様の息子様を凝視してますね。

…何考えてんだ。

先に、マコニヤンの横腹を両手で掴んだ。

体が強ばったが、気にしない。

目を強くつぶって、口を真一文字に結んでいる。

「…よっ」

そのまま体を持ち上げ、ストンと立たせる。

なにか呆けた様な顔をしているなあ…。

「……あ」

変な声を出したが、まあいいや。

捲れ上がり、乱れた制服を直してやってみた。

「……」

これで、よし。

…流石に俺も、ズボンを履こう。  
後ろに頼り出してあった、制服を探す…。

「いや…ちよつと待て！」

ん？

背中から、マコニヤンが叫んだ。

なんだ？

「いや…確かに、履けとは言ったが…流石に、あの姿の私をスルーする  
とは思わなかったぞ」

「え…う？」

何を言っているのだろうか…？

あんな状態の姿、はよ何とかしてやろうと思ったのに…。

「いや…知らないよ。なに？ 感想でも言えればいいのか？」

「……」

横を向いて、顔を赤くしているな。

なにをモジモジしているのだろう…。

え…なに？ マジで感想ほしいの!?

「マコニヤン、マジ。エロス」

「……」

あ…あれ!?

殺すとか、死ね！ とか言われると思ったのに!?

すげえ真顔になった!?

それに、待てと言ったから待つてるけど…流石にそろそろズボンを履かせてほしい…。

まあ、さつさと履けばいいんだけどね。

同級生というか、見知った女の子との、この場の特殊な状況に、ちよつと興奮してるのは内緒だ！

まあ…寸止めつてのも、含んでるんだろうなあ…。

「……」

「…え、なに？ どうしたの？」

「いや…書記なら、躊躇しないで襲って来ると思ったのだけだな」  
「…俺を一体、何だと思ってるんだ」

はっ！ つと一瞬、あざけ笑う様な顔をして、一言。

「決勝前にお前。五十鈴さんと、ここで何してた」

」

「…その時も、私はそこにいた」

え…

えあ!?

いたの!?

その時もいたの!?! 押し入れに!?

何してんの!! マコニヤン!

「…それに…まあ、覗いていた私が言うのも何だが…お前。その…中途半端なんだろう?」

」

「…よりによつて、西住さんの友達に手を出しているお前。しかも…そんな状態だ?」

どこ指さしてんの!?

「むしろ、襲われない理由を探す方が難しいな」

傍目から見れば、ごもつとも!!

あ…いや!!

腕組んで、睨まないでください!

「ああ…華さんの件は…ちよつと特殊でして…」

「はっ」

まあ何となく…掻い摘んで、説明しました。

はい。

なんで俺、マコニヤンに下半身丸出しで、特殊な初体験での事を説

明してんだろ…。

納得しろとは言わないが…黙っていて下さると助かりますと。

終始！ 真顔！！

普段からあまり、表情を表に出さないから、余計に怖い！！

でも…まあ。

ある程度の事情が分かれば、黙っていてくれるくらい…。

「はっ！ 許可？ 浮気を西住さんのせいにするのか？ 許可あれば、浮気は許されるのか？」

「…ごもつともです。」

「…いや、まあ…結局流されて、関係を続けた俺が悪…」

「じゃあ、なにか!? 私が頼んで、西住さんの許可が下りれば、私との浮気も許されるのか!？」

「は!?! なんでそうなんだよ!！」

え…何言ってるの？

なんか問題が、変わってない!?

キョロキョロと部屋を見渡している。

「ちよっ!… …ちよっと待ってる」

結局何がしたいか分からない。

なにをムキになっているのだろうか？

マコニヤンの顔が止まった。

布団が崩れて、入口を少し塞いだ押入れを見ている。

布団を引っ張りだし、空になった黒い空間。

襖を掴み、元いた押し入れに、また入ってしまった。

「…いいか？ 覗くなよ。そして聞き耳たてるなよ…」

スパン。

そのまま音を立てて、襖を閉めて引きこもってしまった。

え…なに!?

なんなの!?

……。

……。

小さく襖の奥から、ボソボソと会話をしていると思われる、声が聞こえる…。

やべえ…あれ絶対、みほに電話してる…。

すっ飛んで、この部屋に帰ってきそうだなあ…。

うん…ズボン履いところ…。

スー…と。

襖が開き…マコニヤンが出てきた…。

少し顔が赤い…とうか、少し青くもある。

何言ってるんだ俺は。

這いつくばる様にして、近づいて来て…ゆつくりと、自分の携帯を俺に渡してきた…。

「…西住さん。変われって」

「……」

お…怒られる。

マコニヤンの携帯を耳に当て、通話相手であろう、みほに返事をする。

「は…はい。もしもし」

『……』

「……」

『……』

「も…もしも…し？」

無言が続く携帯の奥から、息を呑む声と風の雑音が聞こえてくる。

あ…溜め込んでるう。

帰ってきて早々に、バレたワケですし…。

『…キスはダメだからね』

……。

その一言で、通話が切れた。  
……。

無言で携帯電話を、麻子に返す。

「許可がでたな。これで……書記？」

麻子が、無意識に目を見開いていた俺を、下から覗き込むように見上げている。

「……」

みほの一言に怖気が走った。

血の気が下がる。

どこか浮ついて、舞い上がった感情が、一気に氷点下になる。

余りに予想外の返事だった。

……いくらなんでも……それは無いだろう？

華さんの件は、なし崩し的になってしまっているから理解出来る。

麻子がみほに、何を言ったかは分からない。

だからって……自分の友人との浮気をまた……容認した……許可を出しやがった。

……

狂い始めている……。

特殊過ぎた初体験だったからだろうか？

……壊れた貞操観念。

それでも必用に、キスをする事に対してだけは、許可を出さないのは、最後の理性というやつなのだろうか？

でもさ……だからって……。

俺をシェアし始めやがった。

「……麻子」

「!？」

久しぶりに、普通に名前を呼んだ。

本当に久しぶりな為、驚いたような顔をしている。

「みほに対して、何を言ったか知らないが…お前。意味を理解して言ったんだよな？」

「……」

「今の行動…。お前、俺に自分を襲えと言っている様なモノだぞ？」

「……」

変な会話の流れだったが、麻子自身で、みほに対して浮気の許可を取った様なモノだ。

あの流れじゃ、抱いてくれと言っているようなモノだ。

「…お前、処女だろ？ 勝手に勢いや、空気に流されて捨てるモノじゃないぞ…」

静かに…恥ずかしげもなく言った。

華さん…の気持ちは、はつきりと聞いていたから…その…何となく分かる。

が、麻子は違う。

はつきり言おうか。

麻子は、どこかで発情でもしてるのだろう。

俺とみほの行為を、全部見ているこの状態。

下着の染みからも…多分それを見て、自身を慰めてでもいたのだろうよ。

だから…

「…別に私は…その…。処女じゃないぞ？」

「……」

は？

いや…もう……。

高校生だし…ありえない事も無いけど…。

なんだろう…。

もう一つの予想外な発言に…俺は。

「書記…。お前なんか、すごい顔色悪いが…大丈夫か？」

「……」



なんか…もう、どうでもいい。

◇

わかった。

分かりました。

無言で麻子に近づく。

襲えと言うのなら、襲ってやる。

：処女じゃないなら良いとか、そういった事ではない。

少し…あの経験で、俺もどこか壊れたのだろうか？

「!!」

麻子の小さい体…その肩を抱き寄せる。

突然、引き寄せた為に驚いたのか…体が強ばった。

「ちよ…書記!」

そのまま、尻に手をいれる。

下着を下から指だけ入れるようにした状態で、顔を首元に入れ、舌

先で首筋を舐め上げる。

耳たぶに近づいたら、そのまま耳へ舌をいれる。

「ふっ!? んっ!!」

大人しく、されるがままの麻子に、若干の苛立ちを感じる。

本当にいいのかよ。

そのまま、尻にある手と指を、秘部に持つていくと…少し小さな音がした。

クチュツと…。

濡れてる。

分かっではいたが…予想外に凄い事になっていた。

指先でかき混ぜると、クチャクチャと音が聞こえる位だった。

「くっ！ んっ!!」

麻子が首に抱きついてきた。

少し前かがみになって、小刻みに震えている。

……。

なんで抵抗しなんだ？

少し乱暴にかき回す。

わざと音を出すように、膣内を前後に…少し早めに指を動かす。

「ふっ！ んっ！ んっ！ つっ！」

声を殺していた。

少し乱暴にしてみましたからか、少し痛がる声でした。

抱きつかれているので、顔は分からないが…。

「……」

「……なあ、やっぱりさ。やめよう」

「…は？ 怖じけずいたか？」

…最後の理性ですよ。

その目はやめて…。

「麻子がどういうつもりで、こんな事をしたのか俺にはわからんし…」

「馬鹿かお前は」

「…」

はあ…とため息をつき、腰に手を当てた。

「初めは、そんな気無かったんだがな…。私も確かに流されている…」

「……」

「…お前が今日、生徒会室から出て行った後な」

「午前中の話か…」

なんだ？ 急に…。

「五十鈴さんが、皆に…あの場で、宣戦布告をした」

「……は？」

宣戦布告?!

え!?

少し自暴自棄になりそうな、落ち込んだ気持ちだが、一気に焦りに変わった!

華さん!

何を言ったんだ!?!?

「…お前の事が、好きなんだと」

」

相変わらず、ド直球だった…。

それ言っちゃったんだ…。

「…でだ。加えて、先ほどの初体験とやらの話を聞いて…西住さんには悪いが…こう思ってしまった」

呆然とする俺を置いて、淡々と続ける麻子。

バツが悪そうに…それでいて、何か恥ずかしそうに…。

「五十鈴さんがいいなら、私もいいんじゃないか? と…」

「……」

「……」

「……」

「…おい、書記。なんか言え。…恥ずかしいだけだろうが」

「……」

分かり辛い。

分かり辛いが…わかった。

理解した。

いやあ…マジかよ…。

華さんと同じ…同じ気持ちだと、言っている様なものか…。

呆然としていると、完全に顔を逸らしてしまった麻子。

「そもそも…気持ちが無いのなら…この私が、こんなに大人しくしている訳がないだろうが…」

「……」

えっと…。

「まあ…私も今回は、デリカシーが無かったな。多分…西住さんは、私達だから許しているんだと思うぞ?」

……。

俺のさっきの状態を汲み取って、変にフォローを入れてくる。

…そうか。

やっと思えた友達だ。

だがこれで、みほの貞操観念が、狂ってしまったのを確信した。多分…この色恋沙汰で、みんなとの友人関係が壊れるのを、恐れているんだ。

一度許してしまった…後に引けなくなっている…。

華さんも…。

だから、キスだけはダメだと言っているのか…。

多分、それが最後の砦。

で、今は麻子が、何となく理解した上で、その気になっているって事か。

頭良いもんな…。

いやあ…完全に、みほの気持ちを利用しているな。

麻子も。

華さんも。

…俺も。

それで、この関係か。

色々と狂ってきた…。

変に遠回しな告白を受けて、本当は拒否しなくてはいけないのだろうが…。

やはり俺もどこか、おかしくなっていると自覚した。

このまま、続けると…決めてしまったから。

今度は腰を掴み…引き寄せる。

「…それにな?」 書記

「……」

「私は、処女では無いと言ったが…その」

「…なんだ?」

「なんとというか…男性経験は無い」

「……は？」

「だからもう少し、優しくしてくれると…その…助かる……」  
えっと…どういう事だ？

首から彼女を引き剥がし、顔を見る。

目があった瞬間、顔が上気して目を逸らした。

チラチラとこちらの様子を伺うように、たまに目線を合わせる。

「どういう事？」

「…私が処女では無いと言った瞬間、お前の顔が凄かったからな…。  
何か、勘違いさせてしまったのでは無いかと思った」

あ…まあ、色々と打ちのめされたけど…。

だから言っておく…と、上気した顔が更に上気し始めた。

「その…お前と五十鈴さんが…ここで…していた日」

「……」

まあ、うん。

「私も女だ。その…夜、思い出したら…その…自分でもわかるくらい…  
激しくしてしまつて…だな」

ん？ 何が？

「その…血が出てきたから…あの…」

……。

………。

あ、はい。

察しました。

「なっ！ なんだ！ せつかく気を使って、こんな事まで言ったのに…  
…なにもなしか！」

…えっと。

うん、少し冷静になつてきた…。

…今回も感想でしょうか？

んじゃ…

「あれか…意外にも、マコニヤンは、おなにいが激しい…つてぶっ!？」

「近くに転がっていた枕で、殴られた…。」

まあよく処女って、膜を破るとか例えられるが、あれは実際は膜じゃない。

膣内のヒダだ。

それが押し上げられたり、拵げられたりで、出血するのであって…。こちら破る…とか、感触が実際あったのは実体験したけどね。

それに、本当に男性と性行為をしていないのなら、それは処女と言える…。

「

「どうした？　なんだその目…」

「…いや…それ聞いて、ちよつと安心したが…書記。博識だな。…キモいぞ」

「……」

はい。声に出てました。

恥ずかしかつたのと、なんとも言えない空気を、どうにかしたいのもアリ…。

不意打ちで、一気に麻子の下着を下にずり下ろした。

「!?!」

早業で一気にやりましたので、呆然としてますね、マコニヤン。が…。

俺も呆然としました、はい。

「なっ!?!」

「おっ！　おま!!　書記!!　いきなりナンテ…。」

「コトヲ…って、どうした。なぜ固まっている。そして下着をズリ下ろされた私に、なにを気を使わせている」

…正直に言おう。  
グチャグチャな気持ちになり、闇落ちみたいな状態になりそうな俺。

そんな俺を一発で吹き飛ばした…。  
今まで、ある意味一番シヨッキングだったから…。

「は…生えて…無…無…だ…と…?…」

「!?」

はい。

白い、牌でした。

「わー…これだと、濡れ具合とかすげえ良く分かるうう」

「はっ！ 恥ずかしいことを言うな！ 私だって気にしてるんだぞ！

屈むな!! 凝視するなあ！」

「わー…エツロ〜い…」

指で秘部から出る水滴を、掬い取る様に指で触れてみる。

ニユルツとした感触…。

「んうう!?! いきなり触るな！」

「……」

「んっ！ はあっ!! あ…遊ぶな!! ちよお!?!」

いつもと違う麻子の反応が、段々と楽しくなってきた。

秘部を親指と人差し指でつまんだり…愛撫をする様に弄る。

…さつき首元をまさぐった時も思ったが…。

麻子は、感度が高いのか…。

動かす事に、反応をしてくれるのが楽しい。

これだけ…濡れていればいいか。

しゃがむ様に、腕を引き座らせる。

そのまま肩を押し…畳の上。

仰向けに寝かせた。

その時点で気がついたのか、麻子自身も…いつもの様に無言となつた。

やはり不安感が有るのか、少し力が入っているように感じる。  
…手を握り締めているからな。

「その…雑誌にもあったが…口とかで、しなくていいのか？」

「…ん。変に気を使うなあ、麻子は」

特に必要無いと…彼女の足を持つ事で、返事をする。

というか、沙織さんの雑誌が、そろそろ本気で読みたくなってきた。  
さてと…。

「…麻子」

亀頭を麻子の秘部に当てる。

ニユルつとした感触。

「……」

「最後だ。本当にいいのか？」

「……」

「麻子？」

「おばあの時が、そうだ」

「婆さん？」

「…私にやたらと、絡んで来た時も、そうだ」

「……」

「…恋とやらは、惚れたら負けだ…そうだ…」

「……」

「…好きに……しろ」

「……」

なぜ俺なのだろうか？ とか言ったり、謝ったりしたら…本気で怒るだろうな。

だから黙ってしよう。



ぐつと力をいれる。

入口が狭い…。

強引にこじ開ける様に、入っていく。

「いっぐう!!」

ゆっくりと入っていく。

自慰行為で慣れているのか、あまり痛がら…。

……。

な…!?

「い…痛みより…も…苦し…っ」

……

奥に当たる感触がした。

ゆっくり慣らしていこうと思っていたのだが…。

ズリユツと少し、動かしてみた。

「ふっあ!？」

肺から息が押し出された様な声。

…な。

なんだこれ。

陰茎全体が、細かいヒダに…包まれているのが何となく分かる。

亀頭から、ゾリゾリと削られるような…そんな感覚…。

「ふっ…ふっ…はっ!」

ゆっくりと引き抜くと…水分を得て、ヌラヌラと光った陰茎。

ミチュツと音をたて…もう一度、彼女の中に入っていく。

まただ…。

「ど…どうした…?」

「…ごめん、麻子」

グチュツとまた…一番奥まで押し入れる。

「んはあ!!」

喘ぎ声ではなく、また肺から押し出されるように…息を吐き出した。

「お…おまつ! 謝ると…」違う「

「はあ…はあ…なにが…」

「出来るだけ…優しくとか…麻子の気持ちも考えようとか、思っていたんだが…」

「だから、なにがっああ!?!」

話している途中。

もう一度押し上げる。

「んああ!!」

奥に当たると、ザラザラとした感触…。

やばい…もうイキそう…。

「麻子の中がスゴい…というか。異常に…気持ちいい…」

「か…はあ…そ…そりや良かったな…」

「だから…」

「…はあ…はあ…ああああ!!」

初めてだというのに、無茶をしまいそうだった。

打てば響く…。

ゴチュツとした、水音が弾け飛ぶような音がした。

上を向き、お腹を突き出し…海老反りをするかの様に体を曲げていた。

パタンと背中をつき…熱のこもった目で、俺をまっすぐ見てくる。

「す…好きにしろ…と言った…気にするな…」

「…でもな…。このままだと、正直…抱くというよりか…」

「ああ、なるほど」

何かを察したのか、こちらを一瞥し、目線を逸らした。

…最後の一言。

「別に恋人同士でもない…。私がしたい様になっているだけだ…だから

…好きに使え…」

麻子に言わせたというのものもある。

普段の彼女からは、想像できないほどの声を聞いたこともある。

後…彼女の中。

多分、体の相性がいいのだろう。

それもある。

が…それ以上に…彼女は、名器という奴なんだろう。  
使え…意味…：わかって…  
もう一度動かしたら、理性が飛んだ。

「んっ！ ふっ！ ふっ！ ふっ！」

最初は、少し苦しそうな声だった。  
正常位から、まだ少し意識がある様で、気を使いながら動いていた。  
ただやはり、動かせば動かすほど、快楽が脳から理性を奪っていく。  
一度、果てた。

彼女から抜き出し、腹を精液で汚す…。

全て脱がせておいて正解だった…。

初め、やはり彼女は裸になる事には躊躇していた。  
胸を気にしていたな。

大きさは気にしないのに…。

避妊具は、今回は何とか用意しておいた…というか、前回の華さん  
の事もあり。

一箱程、この部屋に隠しておいた。

用意周到だと引かれたが、万が一の事もあるので、察してください  
…。

「あぐっ！ あっ！ はっ！ あっ！ あっん！」

暫くすると、大分慣れてきたのか、苦しそうな声から、甘い声に変  
わった。

秘部から、相変わらず漏らしたかの様な量の愛液の音がする。

やはり、体の相性がいいみたいだった。

夢中になって腰を振る。

それに答えるかのように、麻子もまた甘い声で答える。  
いかん：避妊具が切れそう…。  
乱れた布団と枕を抱いている麻子。  
それを後ろから、攻めまくっていた。  
お尻に使用済のコンドームが、少し乗っけて続けたら…。  
ちよつと官能的すぎて、また硬くなる。

「あゝ！ あゝっ!! あゝ あゝ！ あゝ!!」

もう暫くすると、完全に麻子も快樂に堕ちた。  
普段の眠そうな顔や、冷たい表情から想像できないような：蕩けた  
ような顔と目。

痛みや苦しみなんで、もう感じていない。  
ただひたすらに：俺の上で腰を降っている…。  
なんだろうか：ちよつとみほに対抗でもしているのか…。  
同じような格好になっていた。

「ハッ ……ハッ ……アウ…ア……」

更に暫くすると、動かなくなった。  
ただ、突けば反応する。  
突く度に、か細い声で嬉しそうに声を発する。  
俺の性欲が暴走し、文字通り麻子を使った結末が：コレだった。  
意識が朦朧としているのか、俯せに腰を上げ：ビクビクと痙攣を繰  
り返している。

すでに避妊具が無くなってしまった。  
体にまだ縛らなかつたコンドームが、幾つかへばりついている。  
おかげで部屋中が、すごい匂いだろう。  
一応、この小屋には簡易的なシャワーだけは有る。  
後で使わせてあげよう。  
俺はまだ、使わせてもらおう。

「ア……ア……」

グプ、グプと。

バツツ、バツツ！ つと。

まだ彼女の中に入る音が響く。

……

……………。



「おまつ！ …おまえええ……」

「すいませんでしたあ!!」

はい。

土下座である。

もうそろそろ5時を回る。

完全に腰が砕けてしまった彼女をシャワーに連れて行き、しようがないから一緒に洗った。

うん、俺の体と。

無茶をしてみましたってのもあるし、完全に暴走していた事を、土下座で詫びます。

マジ土下座です。

「……好きにしろと、確かに言ったが……この……変態があ……」

「ありがとうございます！」

「褒めてない！」

ちゃんと制服を着て、崩れ落ちるように座っているマコニヤン。

意識を取り戻して、はい！ まず怒られた！

…もう大丈夫だと思ったのになあ…溜まったのか…。

窓を全開にして、部屋の空気を逃す。

色々とスツキリとして、今は完全に落ち着いている。

でだ。

「なんで、俺の膝の中にいるのだろう…」

崩れ落ちた様に座っている彼女は、現在あぐらをかいた俺の足の中だ。

カチューシャみたいだなああいったあー!!??

手を噛まれた。

「…他の女を考えてたな」

「」

だからなんで分かるの!?

「…西住さんから許可を得てる以上。こういう事で、あんこうチーム以外の女の事を考えるな」

「……あんこうチームって…」

「多分、西住さんの許容範囲はそこまでだ。それ以外はアウトだな」

「…それだと、沙織さんと優花里も入ってるけど…」

「…やはりお前は、一度死んだほうがいいな」

「なんで!?!」

擦り寄ってくるマコニヤンは、初めてだ…。

「ここまで露骨に甘えてくる子だっけ？」

「…やっぱネコみてえ。」

「…私は精神学は、本で読んだ程度だが…その…西住さんの件だ…」

「……」

「甘えてしまっている手前、私からは何とも言えないが…かなり異常だな」

「……そうだな」

「はっ。私もすでに共犯だな…」

「……」

「…五十鈴さんにも、後で話を聞いておくか…。なあ書記」

「へい」

「西住さんは、キスだけは絶対に許さないな」

「…まあそうだな」

「だから、私もそれは一切しようとしなかった。それが約束だったから…」

「約束…ね…」

「ある意味で、一番危険なのはお前だ。…私の考えだがな、書記…お前…」

「なに?」

「彼女の、許容の範囲が異常すぎる。だからその反動もまた異常になるぞ」

「…異常?」

麻子曰く。

積もりに積もった恋心を成就したみほ。

改めて言われるとアレだけど…。

まあ、後は交友関係もあり、一度華さんとの事を許してしまった事もある。

俺も友人関係も、手放す気は一切無いのだろうと。

拳句、大会優勝で張り詰めていたモノが、一気に解き放たれた状態。

だから麻子の事も許した。

だから許可したのだろうと、彼女は言っている。

しかし。

もしくは。

と、彼女は続ける。

「例えば他校の連中…。もしくはキス。要は、西住さんの中での「浮気」を…しようもなら…」

「……」

「お前。…本当に西住さんに、刺されるかもしれんぞ」

「これは、冗談でもなんでもなく…な。それは、その浮気相手にも言えるがな…」

「……」

「だから、はつきりと言ってやる」

「……」

「今の西住さんは…壊れている」



※ルート壊 【宴編】 ※来客万来です！く修正 加筆  
版 ★

現状確認！

華さんを、男子トイレに連れ込んだ

華さんを、男子トイレに連れ込んだ！

華さんを、男子トイレに連れ込んだ!!

死ね！ 俺!!

字面と絵面が凄まじい…。

「ここら辺は、女子トイレとあまり変わりませんね」

「知りませんよー」

同意を求めないで…知ってるように言わないで…。

内開きのトイレのドアに寄りかかり、頭を抑える。

「……」

ヤル為だけって理由で、こんな所に連れ込んでしまった…。

例の噂…。

授業中とはいえ、本当にしている最中に、他人でも来てしまったら

困るなあ…。

変な関係とは言えなあ…。

結構、俺って独占欲強いからなあ。

…みほ以外に関係を持ってしまった、俺が言うなって話だけど。

……。

横には空いた個室が一つ。

「……」

あ。

…うん。

使ってみるか？

ジー…。

変に考え拱いていると、さっさと始めようと華さんが普通に…。

「…躊躇なく、ジッパ―下ろさないで下さい」

「あら…あまり元気ありませんね…」

「聞いてください！ おもむろに取り出さないで!!」

明白すぎて、動けなかった。

① ジッパ―下ろす ② 開ける ③ 取り出す  
作業手順の様にしないで…。

「んあっ…」

すでに元気の無い息子様を、口を大きく開け、舌を出して…下から絡め取るかの様に口に含んだ。

下先の感触と熱が、その息子様を通して伝わってくる…。

「っー」

ヌルツとした感覚に、無意識に声が出てしまう。

そのまま、一気に舌で舐め回してきた。

いきなりの刺激で…さらに声が出そうになったのを嘔み潰す。

「…少し、元気になりましたね」

若い身体ってすごいな…。

躊躇していた割には、身体は正直で、すぐに勃起始めた。

「ジュプ…ジュプ……ジュプ……」

小さく音を立てて、前後に頭を動かし始めた。

背の差が有る為に、体を前に倒し、少し前かがみで。

目を閉じてるな。

「ふっ…んっ…」

段々と…というか、すぐに大きく勃起を始めたそれを嬉しそうに舐め続けている。

リズムミカルな音と共に。

「……」

今の内に…。

体が少し、ぼんやりと光った。

すぐにそれは収まったけど…さ。

特に何か、唱えたりする訳もなく、念じるだけでそれはできた。  
意識が二つあるってのは…なんだ？

…気持ち悪いな。  
それもすぐに慣れたけど…。

◇

「あれ？ 隆史君？」

「ん。みほ、ちよつといいか？」

2年生の教室の、並びが有る階に降りる階段。

その踊り場に間に合った。

というか…ちよつと時間が経っていたってのもあったが…なんで、  
まだ教室戻ってないんだろう…みほは。

ああ…あの後処理か。

聞かないでやっておこう。

「いいけど…華さんは、どうしたの？」

ジト目で見てくる。

いいのか？ と。

「なんか…その…アレが、きたそうで…」

「アレって？ …ああ」

我ながら、結構最低な言い訳だなあ。

みほも察したようで、何とも言えない顔をしている。

「で、だ」

「うん？」

手を引いて、また階段を上り始める。

登り始めた時点で、みほも気がついたのか、何も言わない。

俺の収まりがつかないと、変に察してくれた様だった。

黙って階段と一緒に登ってくれている。

…期待しているのか、何なのか。

握った手が、熱を帯び始めた。

「え…あれ？ どこ行くの？」

また先ほどの踊り場に行くと思ったのか、廊下を歩き始めた時点で疑問を口にする。

授業中の教室並び。

声を出すと、教室の中の人達が気がついてしまいそうで…すぐに口を閉じた。

…はい。

戻って来ました。

もう一人の俺がいる場所。

みほは、目を見開き、声も出さないと真っ赤になってる。

…華さんは、躊躇なく入ったけどな…。

ドアの前で、少し留まっていると、キョロキョロと後ろを何度か振り向いていた。

もう、察しはついているのだろう。

その為か、ゆつくりとドアを開けると、大人しく一緒に入ってきた。俺が先行した事で、人がいないと判断したのだろう。

それとも少し強めに腕を引いている為だろうか？

―が。

(たっ！ 隆史君!!)

閉まっている個室の扉を見て、焦り始めた。

口に人差し指を当て、静かにする様に促す。

そのまま奥の個室に、みほを押し込めた。

特にノックをする訳でもない。

全部、分かっているからな。

ここで、記憶に有るもう一つのスキルとやらを使っておこう。

【意識変換】

これは別に、みほに使った訳ではなく、こここのトイレに誰も来ない。誰も意識すら向けられない様に、結界の様なモノ…を、張っておいた。

…というか。

こういったスキルが…何故か、行為をする時以外には、使えないよ  
うだな。

それが複数のスキルを所持、使用できる条件…らしいが…。  
馬鹿だろ、あの女神。

(すぐに分かる)

(え?)

『ジュポツ！ ジュポツ！ ジュポツ！ ジュポツ！』

(…え…なんの音?)

(…)

『ンチュツ…あ…あの…人が…』

『大丈夫です。さつき言った噂…それが本当だって事ですよ』

(…あれ。どつかで聞いた声…というか！ 女の子!? え!?)

『チュプ…、チュプ…チュプツ』

『あれ…控え目になりましたね…』

『ンプツ…ですが…んっ!?!』

『激しくしてみして下さい。…それこそ聴かせるみたいに』

『……え』

(…なっ!?! え!?! ええっ!?! ここ男子トイレ…え!?!)

(はい、みほ。そちらにお座りください)

便座に促してみた。

壁越しつてのも有るし、俺(分身)が、目の前にいる為に、華さん  
だとは気がついていないのだろう。

さつき…最低な言い訳もしちゃったしね…。

「…」

…随分と…まあ、素直に座ったな。

真っ赤になって、横の壁を見ている。

足を閉じて、手を握り締め、膝の上に乗せていますね、はい。

『ジュポツ！ ジュポツ！ ジュポツ！ ジュポツ！』

聴こえてくる、華さんのフェラ音。

壁越しだけど、第三者の感覚で聞くと…余計にエロい。

『はあ…はあ…んん…チュツツバツ!!』

『ジュポ、ヂュポ! チュポ! チュポ!』

(……)

…あらま。下向いちやった。

耳まで赤くしてるな。

……。

少しかがみ、みほの脚を触ってみる。

膝付近から…摩る様に。

「んっ…」

スーと肌同士を擦り合わせる音がすると、少しビクツツとした振動を感じた。

…い…いかん。

これはいかん!! こっちはこっちで、暴走しそうだ!!

そのまま、スカートをゆっくりと上にずらす様に捲る。

腰を少し前にずらさせ…というか、みほりん。

もう火が入ったのか、素直すぎて逆に不安になる…。

先程も見た下着。

新たな水分で湿っていた。

「…凄い事になってるな」

「!？」

ワザと普通の声を出した。

これは横の個室の俺にも聞こえている。

…。

「…たっ!!」

俺の名前を呼びそうになった為に、口を手で押さえた。

そのまま、耳元で試しに言ってみてみた。

「ちよつと自分でしてみて?」

「!？」

赤い顔が、また赤くなった。

涙目になって何か言いたそうデスネ!!

『ジュツツ…ブブブブ…』

おいおい…バキュームまでできるの？ 華さん。

あ、違う…教えてんのか、俺。

「…んっ…」

「……」

横目で、壁を見ている。

まだ顔は、恥ずかしそうに下を向いてるな。

みほが、躊躇しながら…自身の秘部をゆっくり指で、撫で始めた。

うん！ エロイ！！

暫く黙って見てよう！！

「んっ…ん………」

『ジュルルル…はあはあ……んっ！！』

「はあ…んっ…んっ！」

段々と指が早くなる。

秘部の部分にある、下着の染みが、段々と大きくなっていった。

「はあ…あ……んっ！ はあ…はあ……」

『ジユパツ！ ジユパツ！ ジユパツ！ ジユパツ！』

「んあ…はあ……あっ…あっ……！」

少しすると…。

すでに脚を広げ、顔を上げていた。

その顔は、完全に壁に向いている。

「あっ！ はっ！！ んあ！！」

熱が入った。

夢中になり始めた。

下着の布部分から、指がはずれ、完全に秘部をまさぐり始めた。

指先がグチグチと、秘部の唇を撫で回している。

目の前の俺すら忘れているかのように、夢中になって…。

…もういいかなあ？

「あっ！ あっ！ んあっ！！ んっあっ！！」

『すごいなあ…どうします？』

『ブツブツ…、な…何がでしよう？』

『お隣さん。貴女のを聞いて…多分、自慰行為してますよ?』  
『……』

「あつ!! あつ!! んあ!!」

ダメだな。完全に夢中になってるなあ…隣の会話…聞こえてるはずなのなあ…んじや。

「はあ…ん…ちゅぷ…んんっ…ちゅぷ…」

顔に、陰茎を差し出して見た。

躊躇せずに…口に入れた。

催淫…発情スキルつてのは、使っていないんだけどなあ…。

「ちゅぱ…んっ…ちゅ…ちゅ…」

『ジゅぷ…ちゅぱ…ちゅ…』

顔だけ動かすというのも、この体制では難しいのか、下で亀頭を舐め回している。

カリの部分を必用に…。

たまに尿道先…何かを探る様に動いてくる。

正直舌先だけでまさぐられるだけでも、気持ちがいい。

「んん…ん…んっ! んっぷ! ふあつ!」

小刻みに顔も動かし始めた。

それと同時に、指先の動きも少しずつ早くなり、声もまた大きくなる。

すごいな、みほは…。

この後、暫く…二人の音が、室内に響いた。



「ハァー…ハァー…んっ」

彼女の手を取る。

少し引っぱり、体を浮かせた。



そんな俺の顔を見て、彼女がどこか嬉しそうに呟いた。

「…また…悪い顔…ですっねえ」

他人を興奮させた。

自身の出してた、音で。

それがまた彼女を興奮させたのか…目が…怪しい色を放っていた。  
ゾクゾクと…変な悪寒。

もういいか。

横の俺も、俺自身も、もう限界に近かった。

そのまま少し、引つ張り上げ体を後ろに回させる。

便座に手をつかせ、こちらに腰骨を取り、お尻を上げさせた。

お尻を撫でるように、スカートをゆつくりと上げ…肌を露出。

下着をそのまま、膝くらいまで下に下ろした。

彼女の秘部が、顕になる。

すでに…その、肌が光る位にドロドロになっており…それを亀頭で  
上下に擦り付けて見る。

「んっ…」

入れらるのを待っているかの様に、少し…こちらを見ていた。

では、ご期待に添いまししょう？

グチュツと音をたて、狭い彼女の中に…ゆつくりと入る。

口での音を、故意に聞かせていたつてもあり…声を殺す事もなく  
…。

「っあああ…入ってきましたア…」

嬉しそうに…鳴く。

少し動かすだけで、グチュツとクチャツつと音が出る。

そのままゆつくりと亀頭部分まで、彼女の声と共に引き抜く。

お尻を少し押し、体を少し引き…。

「んんっ…ああああッ!!!」

そしてまた一気に奥まで突き入れる。

愛液が、またグチャツと音を立てる。

『…み…腰上げて』

『う…うん』

隣のみほも、本格的に始めた声を聞いて…その気になったのだろう。

みほオナを…もう少し続けて欲しかった…うん。

我ながら、なんちゅーネーミング…。

しっかし…狭くて、思いつきり動かせないなあ。

一回一回、ケツが後ろの扉に当たる。

なんか…嫌だなあ…。

…。

『はっ！ あっ!! チュブツ…あはあ…れあ…』

横からの声が、聞こえてきた。

まだ、控えめな声。

…なんだろうか。

分身との意識を切り離して、みほの声を第三者から聞いてみると…

華さんと同じく、エロいな！

NTR感もやつぱり、少しはあるのだけど、すぐに分身と意識を共有できるから、あまりそこは問題にはならなかった。

『ちゅ…んん!? ふ…深い…』

正常位…駅弁スタイルでやっている為に、顔も近い。

なるほど…やたらとみほは、キスを求めてくる。

華さんとキスの禁止って…その為？

…。

前を向きなおすと、華さんが横の壁に、また顔を向けている。

ふむ。

小刻みに動き出し、子宮の奥を探る様な感じでグリグリとしてみる。

ビクビクと、痙攣をする華さん。

上手く、顔が見れない。

感じている華さんの顔が見れない!!  
すっごい残念だ…。

思いつきり動けないので、それでも浅く深く…できうる限りで、彼女を攻めてみた

「あっ！…んあ!! あっ！」  
ぬう。

名前を言えないのも…会話ができないのも、ちよつと辛い。  
言葉攻めつてのも、やってみたいしなあ…。

……。

黒い感情が、段々と侵食をしていた。  
というか、すでに真っ黒だったと思う。

はっはー…分身スキル使った時点で、今更だよね!!

「はっ！…はっ！…はっ！…んちゅ」

口に手を出してみると…華さんは俺の指を舐めてくる。

舌を絡ませ…愛撫するように…。

「……」

よし！ いいや!!

もうトコトンやってみよう!!

理性？ 知らん!!

シユツと、首元から音を立てる。

制服のネクタイを外した。

…首太いから、ちゃんとネクタイ締めると苦しかった為に、元々緩く締めてあったので、簡単に解けた。

そして、その外したネクタイを…

「えっ!? たっ!?!」

驚く彼女を無視し、そのままネクタイで彼女の視界を奪った。

後頭部で、軽く縛ると簡易的な目隠しの完成。

「んんっ!!…んはあ!!」

ごまかす様に、一度強く押し込む。

彼女は顔を上げ、少し海老反りする様に背中を伸ばし…腕を便座から伸ばした。

少し立ちバックの様な体位にすると、後ろに少しスペースが開く。

カチャ…

内開きの扉を開いた。

「!？」

彼女から体を通して、驚きが伝わってくる。

そのまま体を、また前に倒させて、便座に手をつかせる。

「あっ！ あの！ どういう…っんん!!」

ドアを開けて、腰を動かすスペースの確保。

彼女に、手つかせた瞬間、反動をつけて思いっきり突き入れた。

腰骨を持ち、腰を大きく動かし叩きつける。

「え!?! んあ!?! あッ!!」

バツツン！ バツツン！ …と、肌をぶつける音を出す。

「あう!! あ!! なっ！ んん!!」

扉を開けた事で、声が漏れ出す。

この部屋だけで、聞こえるであろう声。

まあ、防音も感覚スキルは兼ねているから、外までは聞こえない。  
が、本人はそんな事は知らないだろう。

「いやね、腰を動かし辛いんですよ…狭いから」

「ひう!?! でっ！ んあ!! あっ！」

何か言おうとするのを、腰を打ち付ける事によって邪魔をする。

……。

ガチャ

『えっ!?! なっ…なんっんんあ!!』

みほの声が、聞こえた。

みほも、華さんと同じように、目隠しをする為に、バックの姿勢に変更。

こちらまで聞こえる音で、腰を打ち付けて誤魔化す。

文句は、言わせない。

『はっ!! んん!! んあ!?!』

『散々壁越しに、声を聞かせ合っていたんだ。何を今更恥ずかしが  
るのや?』

『んん!! じよっ…状況がああ!!!』

『違うないよ? 何が違う? まあいいか』

『なっ、何!? なんで目隠し何てっ……んあ!!!』

みほって…えろいよね!!

隣り合って、お互いの正体も分からないのに…トイレで二人が、俺  
に攻められて喘いでいる。

並んでるつてのが、またすごい状況…。

場の空気で、俺も酔いだした。

「あっ!! はん!! んっ! んっっ!!!」

こっちはこっちで、華さんを攻める。

すごいな。

言葉責め…どう言ったらいいんだろ…。

エロ漫画くらいしか、参考が無い。

…でもなあ。あれ実際言ったら馬鹿みたいだし…まあいいか。

後で黒歴史にでも閉まっておこう。

「すごいですねえ」

「なあ!? んあ!!」

「扉を開けたら、感じ方が…濡れ方が…変わりましたけど…?」

「ふっ!？」

まあ実際に、ぐっちやぐちやになってる。

さて。

更に後ろに、体を引つ張る。

ここで同時に使っておく。

【催淫】

使われた本人達からすれば、興奮状態の今じゃ余計に気がつかない  
だろうしね。

そのまま個室から体をだし、その個室の入口部分。

その開けた入口の両横に手をつかせた。

「な!?! ええ!! 見えています!! んあう!! 見えちゃってますお!!」

「見えますね。隣の人」

「あああつ!!」

『たっ!! んあ!? なんで!? 見えちゃう!! 見られちゃうよお!!』

『見てるな。思いつきり』

『やだっ!!! んあ!!!』

俺二人揃って、思いつきり腰を振る。

グツチャグツチャと音が被る。

バツンッ! バツン!

パン! パン! と…音も響く。

なんだこの興奮。

一瞬、本当に分身ではなくて、他人に見られたら…て思ったら、萎えそうだったからヤメタ。

それは流石に無いな。

多分、殺意しか沸かない。

「やつ!! んあ!! あっあああつ!!」

『んっ!! ンあああ!!!』

…締まる。

完全に二人共…感じていた。

「締りがすごいですけど…、なに? 見られて感じてるんですか?」

「はっ! はっ! んっあつ!! ちっ、ちがあ」

「その割には、声もすごい大きいんですけど…外に聞こえますよ?」

「ひっうっ!! んっ! んっ!!」

すぐに声を殺した。

だけどなあ…。

『み…ああ名前を呼んじやまずいか…』

『やめっ!! んああ!!』

ゴリツと奥に押し込んでみた。

ギユツとまた締まる。

『はっ!! あん! あっ!! ああああ!!』

みほも、スキルの為かなんなのか。

理性が瓦解しかかっている。

大きな声をまた上げるのと同時に、華さんも声を殺せなくなっていた。

バツン、バツンとまた肌を叩きつける音が二つ。

個室トイレの前で、二人並んで後ろから攻められている二人を再度確認すると…。

「……………!!」

背徳感が凄まじく…すぐに込み上げるモノを感じた。

腰を打ち付ける音が早まると、また声もまた甘く大きく響く。

そのまま、二人の中に同時に果てた。

脈を打つのが分かるくらい…大量に出たんだろう。

避妊スキルを初めから機能させておいて良かった…。

「ああ……………あ……………」

『ん……………あ……………はあ……………』

腰を押し込め、一番奥で果てる。

子宮に入りきらなかったのか、すでに秘部から少し溢れているのだろう。

そのままずるつと抜き出すと、更に秘部からボタボタと音をたてて、白いモノが落ちてくる。

…二人揃って、手を個室の入口壁につけて…肩で息をしている。

足を広げ、震わせ…。

充血したかの様に真っ赤になっている秘部をこちらに向けて。

…が。

まだ終わらない。

終われない。

すぐにもう一度、彼女達の中に入る。

ぐちつとした音と甘い声が聞こえた。

分身スキル、応用。

分身は過去の自分だったら…要は体の記憶にある体型にだったら、その姿で分身が作れる。

それを、いくつか一気に作ってみた。

中学位の時でも：下手な大人より、大きかったからなあ…。  
…アレも。

まあそれを何体か、部屋の外に出現させておいた。

その出現させ、外で待機していた分身達をすぐに入室させた。

ガチャツ!!

ワザと大きく音を立ててドアノブを回し。

ゾロゾロと、ワザと足音を立てる。

「えっ!? えっ!? 誰!? 誰ですか!?!」

『はあ…はあ…あ…あ…ああ!! 誰!? 何!?!』

驚きの声を上げた瞬間。

即座にまた、腰を突き上げた。

手加減無しの本気で。

「ふああ!」

『ああっ!?!』

…そしてまた、一心不乱に腰を動かす。

今度は無言で。

ぐつちやぐつちやと、中に出されていた白いものが、泡立ちながら音を出す。

「やっ!! んっ! んあっ!! やめっ! ああ!!!」

『はっ!! ンあ!! っあくう!!!』

何も言わず、暫くピストンを続けた。

俺を押しのけない。

されるがまま…俺を受け入れている。

さてと。

「すごいですね。見られて派手にイキましたよね?」

『すごいな? 見られている方が、興奮するの?』



「ちっ!! んあ!! 違い!!」

『やあ…んっ!! シン!! 違うよおお!!』

見られている。

目隠しされている状態で、人の気配が多数ある中…彼女達の体は、快楽を受け入れている。

それがまた、自身でも分かるのか…、甘い声を殺す事を、しなくなっ  
ていった。

何人か、近づく。

ワザと音を立てさせる。

まあ綺麗だし、いいか。

下に寝そべり、騎乗に体位を変更。

みほも同じように、体位を変更。

二人並んで…淫らに乱れている。

騎乗位になり、二人並んで腰を振っている。

「なんだ、自分から腰…動かしてるじゃないですか」

「はっ!! はっ!! んっ!」

もう聞いていない。

変な高揚感が有るのだろう。

…うん。催淫スキル使ったからってのも、あるんだろうな。

発情状態をMAXの手前にしてみた。

正気じゃなくなる手前。ギリギリのライン。

二人揃って、制服をまくり、胸を露出させる。

ダイナミックな胸部が下着と一緒に顔になった。

「えっ!? えっ!」

分身達に、後ろに回らせ、そのままホックを外させた。

ゆるくなつたブラをまたまくり、本格的に胸部をはだけさせた…。

更にそこから下から一気に突き上げる。

体全体の振動と一緒に、胸も大きく揺れさせる。

そこまで。

それ以外は、分身にはなにもさせていない。

が。

二人共逃げようとも、拒否しようとしなかった。今はもう、ただ一心不乱に身を任せている。

両腕は俺らの腹の上に置き、腰を上下させている。見えないのが幸いしているのか、なにもしない。さて。

分身達に、成長過程のアレを取り出させた。華さんの前に、一本突き出せてみた。

匂いで分かるのだろう。

それはみほも、同じようで、激しく腰を振りながら…何か迷っている。

全体で動いていた体は、上半だけは支えている腕で、固定して動きを止めた。

何かを躊躇している。

よし。

もう一人の分身を近づけた。

左右から、彼女達の頬に亀頭を当てた。

すでに大きくなっている為…後は熱だろうか。

一瞬体が硬直したな。

これで意図はすぐにわかるだろう。

「…どうします？ 貴女達見て、彼ら凄い事になっていきますけど…」

「はっ！ あっ！ あっ！ あん！」

顔を左右に動かし…何かを確認している様になっている。

すでに見られている事に、疑問はないのだろうか？

段々と口が空き…舌を覗かせていた。

口を開けば唾液が糸を引き…口からは熱い息を吐いている。

『どっ！ んんああ!!…しったああ!!』

それはみほも同じだった。

みほが、喋りながら喘ぐ。

俺に説いたのだろうか？

どうしたらいいのか？

なるほど。

俺に判断を仰いできているくらいだ。

完全に…快樂に墮ちてる。

…経験も無いのだろうに。

「はあー…はあー……」

『ふうー……ふゆ……』

腰を止めた…。

喋らせる為…だね。

「二人共、今周りに何人いると思う?」

目隠し状態で分からないから、予測を聞いてみたかった。

少なくとも二人以上だとは、先程で分かっただろうし。

「はあー…はあー……ふ…ふた…いえ、三名程…でしょうか?」

『よ…四人…』

同時に応えた。

体を前に倒し、肩で息をしている。

胸も隠そうともししていない。

スキルとはいえ、理性を飛ばした状態の二人は…普段とのギャップ

がすごい。

「ふっ! ……あの…これ…」

『ん…』

もう一度、頬に左右から亀頭を当てさせる。

「正解は四名。どうしたい? 二人共」

「え…」

「二人の痴態を見て、彼らこんな事になっちゃってるけど…」

「……」

『……うう』

分身はそのまま、ぬらぬらと頬に擦りつけている。

それを素直に受け入れて、口が半開きになっている。

ハアハアと軽い呼吸音すら聞こえてきた。

『…なんだ? 舐めたいのか?』

『ええ!?!』

みほが、驚きの声を上げた。

そんな事を言ったのが驚きなのか。

それとも当てられたのが驚きなのか…。

『それは、浮気になるよな？』

『…うん…うん…』

『いくら、口でするの好きでもねえ…そればかりはねえ…』

『…うん』

あ。否定しなかった。

よし。

ちやんと、答えてあげましょうか。

「 だからダメです」

拒否。

ダメです。

それでも、他の分身は位置を動かないで、その位置に立たせている。

匂いだけは、充滿していく。

みほと華さんの頬つぺたに、それを擦りつけてみる。

ヌルツとカウパーで滑る。

段々と、二人の呼吸が荒くなっていく。

口元にゆっくり…半円を描きながら近づけさせていく。

その間、俺らは動かない。

そのまま眺めている。

『や……んっ……』

匂いに刺激されたのか…無意識なのか…。

みほが、半開きの口を更に開けた。

中から伸びる舌先…。

華さんも同じく、下先だけ…伸びていく。

俺らは何も喋らない。

それに無意識だろうか。

彼女達の片手が、左右の陰茎を恐る恐る掴んだ。

その掴んだ事に対しても、俺達は何も言わない。

すでに完全に握り締めている。

何も言わないのが、どう思ったのか：親指で少しさすっている。口から息使いが益々、荒くなっていく。

手に掴んでいる為、場所を把握しているのだろう…。

その方向に顔を向かせた。

そしてその方向に舌が、更に伸びる。

すこし腰を動かし、刺激してみた。

両の頬…そのまま口元に擦りつける。

「んっ…はっ!! ン…チュプ…レラ…」

あ、舐めちゃった。

二人揃って、我慢がもうできなかつたようだ。

一度、舌の上を滑らすと、もう止まらないのだろう。

舌で二つ亀頭を舐めまわし始めた。

「ちゅぷっ!! はあー…んああ! つっ…!!」

騎乗位の為、両手が空く為、二本の陰茎を交互に貪り始めた。

舐める音が響く。

泣きそうな顔…まあ、眉間のシワで判断するしかないが…そんな顔をしている。

「すいません…もう…無理でした…んちゅっ!」

『ごめっ…ごめんさっんぷっ! がまんチュツ! でき…』

俺に謝っているのか。

そんな事を言いながらも、手を口を動かしていた。

両手に持ち、舌を突き出しなぞる様に舐めている。

違うな。

下全体をで味わう様に、陰茎の表面を舐め取っている。

「ちゅぷっ! ぶぶっ!!」

華さんは、華さんで口全体を使って、絞る取る様に音を出しながら、左右交互に頭を動かしている。

視界が遮られているというのも、あるのだろう。

少しも羞恥心を感じられなくなってきた。

「左右のそれ頬張りながら言われましても…」

『ふーん。じゃあ、俺も好きにしているよね?』  
そこまで言って、勢いよく腰を動かし始めた。  
再動ですね。

入っていた陰茎をつたつて、愛液が床を濡らしていた。  
グツチャグツチャと音をたて、糸を引きながらも体を揺らし始めた。

その両手には別の陰茎を握り締め、口を動かしながらも喘いでいる。

「やつ!! なんてしよう!! すっ! すごい! んちゅばっ!!」  
『んっ! んっ!! んっ!!!』

全力で彼女達は、快楽を貪っている。

スキルを使つたとはいえ、完全に正気じゃなくならせてしまった。  
今、目隠しを取つたらどうなるのだろうか?

そんな事を思いながらも、こちらも腰を振る。

締めり方が尋常じゃない。

腰骨に手を置き、もう一度ラストスパートを掛ける。

はっはつと、動物の様な息遣いが更に聞こえてきた。

激しく動く為、流石に彼女達ももう、口には唾えていない。

尻を掴み、腰を浮かせ…水音が混じった、バチユツバツチュと肌をぶつける音。

「んっっふううん!! じゅぷっ! あああああ!!」

『やつ!? んあ!? ああああ!』

彼女達もイキそうなのだろう。

んじゃ

止めかなあ…。

まず最初…。

彼女達左右の、分身の四本を射精準備させた。  
体を起こさせ、顔を上げさせた。

小刻みに動かしながら、顔を上げさせる。

「んっんっ! えっ! はっ!! かつあ! 掛けるう…:…:気ですかああ!」

「嫌ですか？」

「んああ！ か…かまいま…んああ!!」

『…どうしたい？』

『の…く…口に…いいいい!!』

『はい、じゃあ舌だして、口開けて…』

ゾクゾクと、二人の回答に背筋に走るモノを感じた。

と…同時に分身同士…リンクした。

『「んぷっ!?!」』

口に掛かる、顔に掛かる、髪に掛かる…。

一斉にその匂いが、みほと華さんを包む。

驚く程真っ白に。汚く。

…この二人…どこか似てるからな…。

ベタベタになった二人。

みほは、口にご所望でしたのでね。

一気にいったら、口から溢れ…胸にかかり…そのまま腹につたう。

『んっ…ふぁ…んん…』

『飲みたからったらドウゾ』

『うえあ…あ…』

あ。吐き出した。

また大量のモノだったので、それがまた胸を汚す…。

『…他の人の…やだ…』

『…』

ここまでやっておいて…このセリフはずるい…。

ただ、味わってみたいって願望はあったみたいだけど…。

「はあ…はあ…なんですか？ ……ここ…今度は？」

『ハア…ハア…ハア…』

下になっていた、俺達はそのまま抜け出し、他の分身と位置を変わった。

腕を掴んでの移動だったから、すぐにわかったのだろう。

「はあああ…ああ…あ…」

『んんああ…』

今度は、分身達に彼女達の秘部に挿入させた。

すんなりと…スムーズに。

余計な事を挟ませないで、即挿入。

そのまま、小刻みに動き始めさせた。

小刻みだというのに、先程からの事もあり…秘部からする音が…卑猥すぎる…。

「あ…あ…あ…あ…」

『んっ！ んっ！ んっ！』

そして、俺達はそのまま後部に周り、彼女達のお尻を掴む。

そのまま左右に開くと…結合部分が、ビツチャビツチャと…水しぶきを上げていくくらいの状態を見て楽しむ。

いや…素直にすげえと思いますよ。

はい。次の目的。

そのまま動かされるお尻。

それと連動して、ヒクヒクとしている菊門。

はい。これです。

ここで、もう一度スキル

「リフレッシュ」

菊門に親指を当て、このスキル。

本来は、性行為の汚れを、全て無くすスキル。

これをここに使ってみます。

そうすると…腸内とこの汚れが一切無くなります…だって。

これで避妊具使わなくても良いよね…。



生でできる。

トイレだからって…逆流はこまるよ…彼女達もねえ。

さして。

後は…

【EXP】

経験値。

これで多少、慣らしてなくてもいけるだろ。

そう、経験値を与えるスキル。

前かがみに倒れてるように突かれている二人の、菊門に亀頭の先をつける。

愛液と精子で、ローション替わりにもなっている。

「んん!?!」

『んああ!?!』

ゆっくりと…。

ギチギチとした感触…。

キツイ…特にみほ…。

「か…あ…ア、…」

『ぐう…うう…』

ヌルツとした感触もあり、ゆっくりとそこに侵入していく。

中はリフレッシュで清潔になっているのもあり、特に挿入する時に異物感はない。

が、彼女達は別だろう。

「あ…あつ…い…息があはっ!」

『は…はっ…はっ』

特にこの行為を、非難するわけでもなく…素直に受け入れている。

息が苦しいのか、何かに耐えている。

痛みは…無いのだろうか？

最後。

無理やり、力任せに一気に押し込んだ。

「んあっ!!」

『はう!!』

全て飲み込んだ。

菊門が大きく円を描いて、根元まで飲み込んだ。  
陰茎全体を熱い熱で覆っている。

「ふうー…ふうー…」

『あ…はあ…はあ…』

そのままゆつくりと、動き出す。

ローション替わりになっている物があるので、比較的スムーズに動き出した。

「あ…ああ…あああ」

『んあ…ん…』

秘部の陰茎も、それと連携をとり、同時に動き出す。

二つの穴と愛液。

もう…すごい音がする。

グチャグチャと。

グプグプと。

初めは苦しそうな声を発していた二人だが、段々とそれも変わっていった。

「す…すごい…すごい…おお…んああ！ アッ！ アッ！」

『きもち…んっ！ ウア…これ…すごい…』

同時挿入。

あまり激しく動けないが、二つの異物が交互に出し入れを繰り返す。

その内…。

「ジュルッ！ ブッ！ ブッ！ ジュッ！」

残った分身達が、残った彼女達の口を使い始めた。

お尻も大分慣れてきたのか、スムーズに出しりれを繰り返す。

途中何度も、彼女達の体が震え、脱力感が襲うのか、ぐったりとしそうになるのを、また強引に快樂に引き戻す。

アナルを攻める勢いも激しくなり、尻の肉が波伝うように、パンパンと音を出すほど、激しく攻め立てる。

「はっ！ はっ！ なかつ！ 中でっ!! ぶつかって!!」

『おかしくなる！ おかしくなっちゃう!!』

たまに陰茎から口を離すと、溶けたような様な声で、叫びを上げる。水音を響かせながら、まだ突く。

突く。

そして…。

『んんん!!!』

同時に果てた。

口内、膣内、腸内に同時に注ぎ込まれた。

頭を抑えられて口内に出された為、喉を鳴らす音まで聞こえる。

それでもなお、まだ熱い鼻息を出している。

…。

ぐぷつと音を出しながら、同時に全て引き抜く。

菊門が丸く閉じなく開かれたまま…大量の白い液体が、膣内から流れ出す白い液体と混ざって…すごい量を床に落としていた。

その場に倒れる事も無く、そのまま四つん這いになっている二人。

…。

…。

何回だろうか？

体まで精液の匂いをさせて、順番待ちの様に…並んだ全員を受け入れてた二人。

休み時間も終わり、次の授業の時間になっても続いていた。

その後、分身を4人程追加してみた。

そのまま彼女達をまた個室トイレに入らせた。

便座に手をつかせ、こちらに尻を向けさせておいた。

後はもう…彼女達が求める限り、何度も分身達を並ばせ、抱かせてみた。

求める。

無言で始終求めていた。

響くのは甘い声だけ。

何度かりフレッツシユをかけるが、あまり意味が無かった。  
さすが俺の分身、すぐ汚す…。

ああ…そうだ。

一度、綺麗にしてまた汚すを繰り返したいだけかもしれない。

一人終われば、後ろを振り向き。

もう一人終われば、また振り向く。

…またそれに、俺も引つ張られる。

最後には、体は白く汚れ、目隠しも取れてしまっていた。

目は虚ろになり、どこを見ているかも分からない。

理性って大切だなあ…って思い知らされた。

普段の彼女らを見ていと余計に。

壊れた人間は何度か見たことあるけど…まさか自分でここまでするとは思わなかった。

…うくん。

よく見ると、個室の便座に座った二人は、すでに気絶してしまっている。

…うわ…自身とはいえ…ドロドロになってるなあ…。

目の奥に、濁ったハートマークが見える気がする。

口が半開きになっている為、試しに指を出す…。

「んっ…はっ…ちゅ…」

指を出すと…無意識にしゃぶりついて来た。

…。

…。

…。

うん！ 催淫スキル！ 封印！！

怖い！ これ、本気でヤバイやつだよ！

性欲をほぼ無限に引き出す様に感じがする…。

…。

これ、みほと華さんの素じゃないよな…？

と…取り敢えず、この惨状をなんとかしないと…。

あ。さっきのだ。

性行為の後片付け。

《リフレッシュ》

性行為の汚れを、全て無くすスキル。

シユツと二人の体が光ったら…このトイレに入室した時と同じ姿になった。

衣服は戻り、髪や顔。体中に掛かった白い体液が消え、汚れすら無くなった。

便利だ…普通の掃除に使えないかな…無理か…。

…さすがにまずいよな…。

完全に俺、クズ野郎だよな…。

二人からすれば、他の男に抱かせた様なものだしなあ…。

記憶操作とかのスキル無いかな？

…あ。

あつた…。

本当に…怖いな…。

ちなみに応用効くかな。

…応用スキルあつた…催眠か。

これはこれで、次回使ってみよう。うん。

「…」

よし！ なんかお詫びだ！

よし！ 華さんには好きだけ、なんか食わせてやろう！！

よし！ みほには、ボコのなんか買つてやろう！！

よし！ 何かしたのかと、逆に疑われたあ！！

追伸。

後日、すこぶる体調が良さそうな二人だった。  
その原因が二人の便秘が治ったらしいと：俺は知る由もなかった。

◆ ルート正史 ◆ 西住 みほ くお泊りです！く

頭から薄い掛け布団を被り、暗い布団の中。  
光る携帯電話の画面を見ていた。

：目が完全に覚めちゃった。

『寝ろ』

受信したメール文。

相変わらず、たった一言。

少し寝ぼけていたのもあったんだろうな…。

何となく思った事を、そのまま隆史君にメール送信してしまった。  
結局、どこの部屋に泊まっているかとか、聞けなかったなあ…とか、  
思いながら寝てしまったのが原因なのかな？

ボケーっと、メールを送信した後に現在の時間に気が付いた。

夜の1時過ぎ…。

迷惑この上ないね…。

時間も時間だし、返信が来るとは思っていなかった。

起こしちゃったかな？

というか…ちよつと怒ってないかなあ…。

返信メールの内容が、冷たいよお。

上半身を起こし、周りを見渡してみた。

暗い部屋の中。

畳の上に並べられた、布団の中から微かに皆の寝息が聞こえてくる。

「…」

さて、どうしよう…。

まあ…もう一度、寝るくらいしかないけどね。

ん？

手元の携帯電話が振動した。

なんだろ、こんな時間に…迷惑メールかなあ…。

あ、隆史君だ。

携帯画面には、隆史君のフルネームが表示されていた。  
もう一通、メールが届いた。

・・・。

ごめんなさい。

ちよつとメールを開くのが怖いです。

怒ってないかなあ…。

ただ躊躇していたも仕方がない。

開いたメール…。

またそれも一言だけの文。

『5階 502号室』

……。

お…教えてくれたよ…。

てつきりさっきのメールで、終わりだと思っていたから、びっくり

だよ…。

…。

なんで教えてくれたんだろ…。

こんな時間なのに…。

……。

い…。

行っても…いいのかな？

時間が時間だというのものもあるけど、私は目が完全に覚めてしまい、  
しばらく眠れそうにないし…。

この様子だと、隆史君も眠れないのかな？

……。

………つまり。

「……」

今度は、こちらからメールを返信。

こつちも、たった一言だけ。

変に心音が高鳴る…。

「いっ！」

思わず出そうになった声を抑える。



突然携帯電話が連続して振動した。

…電話だ。

隆史君から電話だ…。

ああそうだ。

基本的に隆史君、メールって2回くらいしかリレーをしてくれない。

それ以上の場合、電話をしてくるんだった…。

周りのみんなを起こしちゃいそうだし…携帯電話と同じく、枕元にあった部屋のカードキーを手にとって、急いで部屋をでた。

ゆっくり…静かに…。

「うう…」

手元の携帯電話の振動音が、私を焦らせる…。

できるだけ音を立てないように、部屋のドアを開け…その入口前の廊下に出て、人がいない廊下に立った。

そこまで来て、漸く彼からの電話に出ることができた。

…夜のホテルの廊下って…なんか、静か過ぎてちよつと怖いなあ…。

「はっ…はい」

『……みほ』

少し重たい声が、携帯から響いた…。

お…怒ってる…。

『…行つていいか？ っ、メールが届いたんだけど…』

「う…うう」

『…今、何時だと思ってるんだ？』

「よ…夜中の1時過ぎ…だね」

『……』

む…無言が…。

少しその、無言の時間が続き、最終的に聞こえてきたのが…ため息だった。

携帯の向こうで彼は、短いため息を吐いていた。

『…はあ…分かった。寝ないで待ってる…』

「え？ いいの？」

『いいよ…なんかもう…考えるのもキツくなってきた…。部屋の前に来たたら、ノックしてくれ。すぐに開ける』

「う…うん！」

そこまで言って、すぐに電話が切れた。

ちよつとぶつきらぼうだったけど…特に怒っている感じじゃなかったかな!!

あ、でもどうしよう…何か持っていた方がいいかな？

荷物、部屋に置きっぱなしだけど!?

「……」

う…うん！ いや！ このまま行っちゃえ！

し…下着もお風呂で変えたばかりだし、大丈夫！

……。

………ううう

我ながら…何考えているんだろ…。

変な思考が頭を過ぎったけど、気にしない！

そのまますぐに、その場からエレベーターに向かって歩き出した。

変にドキドキする。

—————

はい、到着しました隆史君の宿泊部屋。

こ…ここまでの道のり…あんまり覚えていない…。

変に緊張してたし…仕方がないと思うの。

……。

し…深呼吸…。

すー…はあー…。

「……」

も…もう一度…。

すー…

ガチャ。

「ーふっ!?!」

息を吸い込んだ所で、目の前のドアが引かれて開いた。

吸った空気が行き場をなくした為に、少し噎せそうになっっちゃった

!

「…なにやってんの」

中から隆史君が、出てきた。

なんだろう…怒ってる？ 怒ってるよね!?

目が少し座ってるよ!?

「い…今、ノックしようと…お!?!」

ぬつと、彼は手を伸ばし、私の肩を抱き寄せた…。

その彼の部屋に…なんというのか…。

引きずり込まれた…。

と、言っても…そのまま手は背中へ…。

少し押すように部屋の中へ促された。

入室した室内は…広い!

全体的に和室テイストだけど、なにこの部屋!!

ツインのベットが二つもある!!

隆史君が、先程まで寝ていたであろう、少し乱れたベットが目に入る。

ベット……ト

「っ!!」

部屋の内装に、驚いていたら、いつの間にか両肩に、隆史君の手が乗っていた…。

グツと、下に抑えられる様に力を入れられた…。

「みほ…」

「はっー…はい!!」

いきなり!?

いきなりなの!?

いや…私も別に嫌じゃないけど!

入ってすぐになっていうの…は…。

ここに来て…数分も経ってな…:…:…い…。

体を回されて、真正面に向けさせられた。

ググツと体重を、かけられる。

部屋の奥へ押される様に…ベットへ誘導される…。

え…つと…本当に?

もう!?

ストーンと、いつの間にかベットに座らせられていた。

部屋のライトが逆光になり、彼の顔が少し暗く…よく表情が分から

ない…。

隆史君の手は、まだそのまま肩の上…。

少し腰を落として、顔を私の前に出してきた。

「みほ」

「は…:…:はい…:…」

顔が熱い。

胸が鳴る。

無意識に握っていた手に汗が滲む…。

「こんな時間にどうのとか…:…:言いたい事は色々あるけどな…:…」

「うん…:…」

その…:…:二回目だけ…:…:。

まだ慣れてないから…:…:まだちよつと怖い…:…:。

「実はな。俺は昨日徹夜で、まったく寝ていない」

……。

……え？

逆光にも慣れて、目に入った隆史君の顔が…死んでた…。

「さつき、優花里を運んだ時も言ったが、そんな中…いつの間にか、酒も飲まされていた。それでいてもう、頭ん中がぐっちやぐちやでしてね!!」

「う…うん」

「つまりな？ みほちゃん」

「…はい？」

真剣な顔で、昔の呼ばれ方をされてしまった。

ただただ、真剣な声で…。

「俺は、もう 駄目 デス」

あ。

隆史君の目に、光が無い…。

「ひゃあ!？」

隆史君の体が、覆いかぶさってきた。

ベットの上に仰向けに倒され…腕を惹かれ…。

枕の下まで引きずられた…。

バンツと彼は、そのまま部屋の電気のスイッチに手を伸ばし…叩くように部屋の灯りを消した。

その腕で、抱きしめられ…。

「……スー……」

そのまますぐに、寝息を漏らし始めた…。

「……スー」

え…。

えー！？

寝ちゃった…。

本当に寝ちゃった。

「……」

呆然としてしまう。

な…何しに来たんだろ…私…。

いやいや！ それなり夜中に来ていいって言われたから、そういう事かなあとは思っていたんだけど！！

この部屋に来て、即座に問答無用で、抱き枕にされちゃった…。

う…うう…。

隆史君の匂いがする…。

胸元が目の前にあるから、彼の顔が見えない。

ただそれだけが、ちよつと残念。

……。

こ…ここまで、がつちりと抱きしめられた事なんて、今までないよ

！！

「…ん」

気がついたら、腕枕…。

……。

なんか…いい…。

腕枕……。

◇

ん…。

あ…。

ああ…私も寝ちゃってたんだ…。

頭の下から…体温をまだ感じる。

薄目を開けると、彼の胸…じゃない。

横顔が見える？

あれ？

そうか。寝返りでも打とうとしんだろうな。

仰向けになり、大の字で寝ている様だった。

でも腕は私の頭の下あ…。

…。

私の体が、今度は逆に隆史君に抱きついていた。

私が彼を抱き枕にしていたよ…。

手は、彼のお腹へ…足は…。

「…」

うう…恥ずかしい…浴衣からはだけて…隆史君の片脚に脚を絡ませた…。

すぐに脚を戻し、衣服を正す。

上半身を起こして、胸元も少しはだけていたので、こちらも…。

あ。

携帯って、どうしたっけ？

ああ…袖にしまったままで、寝ちゃったのか。

左腕が少し重かったなので、左の袖に手をいれてみたらありました。

そのまま確認の為に、携帯を取り出した。

…壊れてないよね？

動作を確認しようと、携帯を開くと現在の時刻を教えてくれた。

…5時…。

朝食って…7時半からだっけ…。

まだ少し寝れそう…。

みんなと、何時に起きるって約束していたっ…け……起きて!?

そうだ！ みんなが起きる前に戻らないと！

：みんなが起きた時、私がいなかったら心配する：より！  
絶対に何か勘ぐる！！

うう：追求されたら、絶対に顔に出ちやいそうだし：。  
：う？

「」

うん：。

大丈夫。

2回目だから。

うん：すごく、自然な事だと知っているから：。  
：。

浴衣が乱れて、変にはだけているから：余計にだらうけどね：。

め：目立つよね：。

「ううううう！！」

夏場だから日が昇るが早い。

前回と違い、今回はそれなりに周りの様子が分かる位に明るい：。  
だからだらうけど：目端に映ったソレに、視線が誘導されちゃった  
：。

開かれた浴衣の間から：その：。

オツキク、ナツテルウウ！！

男の人の生理現象だったのは、理解してるの！

でも、いきなりそんな状態が、目に入れば普通！ 動揺すると思う

の！！

：。

：。

隆史君：起きてないよね？

わざとじゃないよね？



赤くなつて、慌てる私を見たいからとか、その為にとか…。  
いやいや!

いくら隆史君が変態さんでも、そんなマネする訳…。

「……」

……しそうだなあ。

アハハ…乾いた笑いが出てくるよ…。

前日も寝てるフリしてたし…。

しつかり起きていたらしいし…。

……。

ちよつとインターネットで調べてみよ…。

前回は勢いで、色々…：その…：しちやつたけど…：こういった場合、  
本来ならどうするべきなのだろうか？

携帯を操作して、そのインターネットの検索画面を開く。

な…何を検索すればいいんだろ…。

えつと…。

取り敢えず…

「朝…あと…」

こういつた検索じゃ、抽象的な表現じゃ出てこないよね。  
露骨に文字として入力するの…：すつごい、恥ずかしい…。

でも…。

ぼ…

「……」

あ…後…。

か…彼女として…

「!!??」

もっ!?

…モーニン…：ぐう…

彼の股の前に、正座してます。

下を見下ろすと、思いつきり内側から押し上げられるように…その、下着が浮いている…。

じ…時間もあまりないから、躊躇もできないよ…。  
うう…。

男性の下着…トランクスって、ズボンみたいに…その…。  
窓があるというか、なんというか…。

こんなにマジマジと見たことなんてなかったから、ちよつと…ね。  
指先で、なんとなくつまんでみる。

スツと、ずらしてみると、ゆつくりと小さく開いた…。

も…もじやもじやが見えた…。

あ、ボタンって付いてるんだ…こういうの。

「……」  
うん！

彼を起こさないように、静かにそのボタンを外す。

余計な事を考えると、いつまで経ってもこの状態から動きそうにな  
いから、思い切って一気に!!

「……」

社会の窓というのを、全開にしてみたけど…その…出てこない…。

どうしよう…。

ぐ…。

考えるのは後。

下着を上方へ少し引つ張り、スペースを確保。

手をその窓にいれて、手前にレバーを引くように、一気に引つ張り

出す！

「れ…」

レバーって！！

レバーってえ!!!

自分で言っておきながら、なにその表現!!

うう…バカみたい…。

顔を逸らしながら、やってみただけど…結局の所…見ないとできないし…。

触っちゃったし…。

逸らしていた目線をゆっくりと…戻すと…。

ズルツとそれは、現れていた…。

え…えいりあーん。

「…」

まっすぐ上を向く様に…少し手前に倒すと…その…全貌がはつきりと分かった。

ううう…。

できるだけ、余計な事を考えないようにとしたのだけど…。

考えてみれば、いくらインターネットに書いてあったって、こんな事毎回する訳じゃないだろうし…。

でもなあ…。

昨日、まさか私に来てから、即寝ちやうなんて思わなかったし…。

これからの事を考えると…二人きりになるって時が、減っちゃうと思うし…。

しばらく隆史君の顔も見てなかったのに…久しぶりに会ったのに寝ちやうし…。

まあ…二日だけだけど…。

「…うう…」

それにしても…前に比べると余り躊躇しなくなった自分自身が…ちよつと嫌だ…。

顔が熱い…心臓が激しく音を鳴らしているのが分かる…。

おつきい…。

…改めて見ると…顔の…顎からおでこ位の…その…。  
そのソレを見てみると、改めて思い出す…。  
前日の…。

「……………」

これが、私の中に入ったのかあ…。  
ん…。

なんだろう…頭の奥に、何か一瞬…ツーンとした感覚が走った…。

「……………」

み…脈打ってる…。  
それに、熱い。

真上を向かせる為に握っている手が、すごく熱い体温を感じている。  
る。

「…………チュ」

キスをする様に、先に口をつけてみた。  
唇からも、その熱い体温をすぐに感じる事ができた。

なんだろう…余計な事は、考えないよに思って思ったんだけど…。  
むしろ、考えがまとまらないっていうか…頭の中が、段々と真っ白  
になってきた…。

その割に、先程インターネットで見た情報は、鮮明に思い出すこと  
ができるのが、不思議。

少しずつ口が強制的に開かされる。  
ゆっくりと頭を沈めて行くと、口の中いっぱい、塩辛い…そんな  
味が広がった。

前に感じた…その…。  
ちよつと苦い味はまだしない。  
…何、言っているんだろ…私…。

「ちゅっ…………ぶ……………」

彼の先っぽが、口の中に収まった。

えつと…。

唇で囙むように…。

先を…だっけ？

前に隆史君に言われた事を思い出した。

彼は口でもしてもらうのが、好きなのか…前回の最中でも、よく頼まれた。

うう…顔が熱い…。

舌を少し動かしながら、そのまま彼の先から、離さない程度に顔を引く。

そのまま、また先が収まるくらいまで、顔を沈めた。

入れる時に、舌で周りを舐めとるみたいに、舌全体を使いながら動かす。

「んっ…」

くぼっ、くぼっ、くぼっ。

連続で…少し早めに動かすと、口から漏れる音がする。

えつと…彼の先っぽの段差…つていうのか、そこに唇が引っかかる。

だから余計に音が漏れる…。

「じゅっ…ぶ…ぶっ…じゅぶ…」

唾液が出てきた。

唾液を絡ませる様に、ワザと飲まずにそのまま動く。

それでも、啜るように…音を出すのが良いらしいけど…。

早く動くと、更に音が大きくなる。

ブチュブチュと、口先から音が響く…。

彼は寝ているのだから、特に音を出す必要はないのだけど…それも…。

「はあ…はあ…んっ」

今度は、先を往復するだけでなく、もっと深く頭を落としてみる。

舌で押さえつける様にしながら、大きく動くと…隆史君の体が良くビクンと反応したのを思い出した。

だからまた、それをやってみる。

喉元まで入れると、口全体が熱い。  
頭を引く時、もう一度すする様に…。

「ちゅうう……ぶぶっ！　じゅ……ぶっ……」  
それを何度か繰り返す。

頭を落とす時も、音が大きく鳴る様になっていたのだけど……それに気がつかなかった。

そんなに速く動かしているつもりは、まったく無かったんだけど……響く音から、結構な速さで動かしていたみたい。

ぐぷっ！　じゅぽっ！　ズロロロ……。

じゅぷっ！　じゅぷっ！　じゅぷっ！　じゅぷっ！

ズゾゾ……。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

う……うん。

ちよつと、顎が疲れてきたよ……。

一度、隆史君から口を離すと……自分でも信じられない位の唾液が、口元から垂れてきた。

窓から差し込む朝日の光で……隆史君が……その……私の唾液に塗れて、すごい……テカテカとしてる……。

「……」

すでに口の中に、苦い味は感じていた。

苦いのに……そんなに嫌じゃない……。

その出先……自身の唾液に塗れていたモノを見下ろすと……またすぐに……無意識にだろうけど……口をつけていた。

ちゅぷつと、口元から軽い音が聞こえた。

また口の中に熱い体温を感じる。

もう少しかな？

またゆつくりと動き出すと、頭に……手かな？

撫でられる様な感覚がする……。

それもまたゆつくりと髪を撫でるように、動いている。

それがまた、心地いい……これ好き……。

それに答える様に、また一気に頭を落とす。  
また口元から音が響く…。

「チュプ……レロ……」

入れた先、舌をかき混ぜる様に動かすと、彼の体が少し跳ねた様な気がした。

気持ちいいのかな？

だから、もう一度…。

ん？

「んん!？」

頭!? 手!?

口に入れたまま…手が頭の上にある為に、離せられない!

だから目だけで、上を確認すると…あ。

隆史君と目があつた…。

「ふぷっ!？」

顔に別の熱が籠ってきた!

目の周りが熱い!

そうだよ! 起きるに決まってるよ!!

ただ、自分でも気づかない程に、夢中になりすぎたの!

それを…思いつき見られてたあ…。

あー…あー………。

◇

「…みほ」

「……」

まただ。

また寝込みを襲われた…。

総じて色々と、思う所はありますけどね?

一言で言うと…。

貴女、何してん。

まさかのモーニングフェラ。

みほさん貴女、そんな事する人でしたか？

いや：気持ちいいけど…。

しかし、この状態で終わらせるのは惜しい。

だから敢えて何も言わないで、続けてもらいましょうか。

俺のモノを加えながら、涙目で上目使いでこちらを見ている。

…：ちゅぷ。

軽く頭を押さえるようにすると、俺の意思が伝わったのか。

目を閉じて、ゆっくりとまた、動き出した。

ダメだ！

それはダメだ！

「みほ…。そのままこっち見ながらして」

「!？」

一瞬目を見開いて、こちらをまた見てきた。

そうそう、そのまま。そのまま。

ぢゅ…ぷ。

ぶっ！ ぶっ！ ぢゆる…。

涙目だけど、その目でこちらを見上げながら動き始めた。

動く度に出る音と、みほの髪の毛の先が当たる感覚。

朝っぱらからスゲエ事になってるなあ…。

随分と熱心にしてくれていたみたいで、みほは自分の浴衣がはだけ

ているのも気がついていない。

胸元が見える…。

脇の線と胸…。

うん！ エロい！

「ぶっあ…はあ…はあ…」

顎が疲れたのか、陰茎から口を離してしまった。

こちらを恨みがましそうに見ている。



「ううう…これすごい恥ずかしい…」

目が合いながらの奉仕だ。

その事を言っているのだろう。

「はい、結構前から起きてました。股から暖かい感覚とかしてね。ああ、ちなみに上目使いのソレは、大変エロくて素晴らしいかったです」

「ひいう!？」

はい、聞かれる前に全て答えておきます。

寝起きだけど、頭がフル回転してます。

はい、一気に目が覚めました。

あー…いいなあ…。

みほの真っ赤になって固まってる表情…。

「た…隆史君の変態…」

絞り出すような声で、俺を攻撃する言葉を吐くが…。

「みほの口から、そのセリフが聞きたかった!」

「!?!？」

もはや、ご褒美です。

さてと…。

すでにエンジンが掛かっている。

今更止められないし…。

携帯電話で時間を確認すると、まだ6時前だな。

…よし。

「みほ、俺をまたいで後ろ向いて」

「え…」

「はよ」

うう…と、唸りながらも素直に指示に従ってくれた。

背中へ枕をいれて…少し体を起こした。

みほの脚を持ち、移動を少し手伝う。

脚を上げ、俺の体をまたぎ…四つん這いになった彼女のお尻が…目の前に来た。

「そのまま、もう一度やって下さい」

「……うん」

みほにもスイッチが入っている…というか、エンジンが掛かっているというか…。

またそれに素直に従った。

四つん這いの為、体が多少自由になったからだろう。

さつきよりも、深く口の中へ、陰茎を沈めていった。

「ちゅ…ぷ…ちゅ…ちゅ…ちゅ…ちゅ…ちゅ…ちゅ…ちゅ…ちゅ…」

そのまま目の間の尻へ、手を伸ばす。

少し撫で回すようにすると、下着の端のラインの感触。

お尻に手で触れると、一瞬体が跳ねたが、すぐにまた夢中になって

頭を動かし始めた。

…うん、夢中になってね。

みほはどうにも、口でするのが好きみたいだ。

本人は絶対に否定するだろうがね。

俺自身は、口でもらうのが好きだから、丁度良いというか何と  
いうか…。

ま、今は目の前の桃だ。桃。

「ちゅっ!?!」

躊躇せず、その桃を躪にした。

浴衣をあつさりと捲ったのですね、はい。

ゆっくりとかではなく、一気に下半身が、下着姿になりました。

「んっ!」

両手の人差し指と、親指の間。

それと手の全体を使い、脚の付け根から秘部周りと、大きくマツ  
サージする様に手を動かす。

親指の付け根で、秘部周りを揉みしだくと、陰茎を啜え込んでいる  
みほの口から、少し甘い声が漏れる。

というか…。

下着に大きな染みができていた。

正直、前戯なんて必要ないくらいに。

…その染みの部分を、指先でカリカリと撫でる。

「ふっ!? …んっ! …んっ!」

動かす度に声が聞こえる。

秘部前の下着部分を少し引っ張ると…ニチャとした音が少し聞こえた。

秘部から離れた布に、糸が少し引いていた…。

そのまま横に、下着を少しずらし…その糸と大量にテラテラと光っている水分を舐めとる様に、舌を這わせた。

なぞる様に舌先を這わせると、それと連動して、みほの体がビクツ!  
! ビクツ! と反応する。

舌をそのまま、膣内へ入れる。

入れた瞬間にまた体が反応…って。

「ふっ…はふっ…ふっ! …ふっ! …ふっ…」

イツたのか…。

コレだけで…。

なんとか動かしていた頭も止まり、体全体が少し痙攣しているかの様だった。

そう。

みほは、感度が素晴らしく良い。

打てば響く…。

そのまま、舌で中を掻き回す。

イツたばかりだろうが、お構いなしに。

グチュグチュとした音が、目の前から響く。

「はっ!? …んっ!! …ああっ!! …あっ!! …あっ!!」

小気味良くリズムカルに、甘い声が響く。

目の前からは、俺の唾液なのか、それとも愛液が溢れてくるか…。  
もうすごい事になっていた。

ぐっちやぐちやだ。

下着は、ずらしてあるだけな為、その水分を吸ってまた染みが大きくなっていく。

みほは、感じながらも顔を動かそうと…俺の陰茎を吸っている。

吸っている音と混じり、喘ぎ声が非常に淫靡に聞こえる…。

「ぢゅあ！ はあ!! ぶっああ!!」

さて…と。

「みほ…もういい」

「か…はあ…はあ…ぢゅぶ…」

「…もういいですよぉ〜?」

「ぢゅぶっ！ ぢゅぶっ！ ぢゅゅゅぶっ!!」

あ…聞いてねえ…。

夢中になっている…。

うくん

本当は一度、みほの口の中にも出したかったが、いかんせん時間が余り無い。

うん…みほに入れたかった。

腰を上げて、すぐに降ろす。

ちよつと強引に、みほの口の中より、アレを抜き出した。

そのままスルツと体全体を引き、体を起こした。

みほの体を少し押し、前に行かせた。

このまま、更に体を引き出して、そのままバックで…ってのも良かったが。

ここは敢えて…。

みほの体を起こし、俺はみほの背中に密着する様に、座った体勢になる。

「え…つと…あれ?」

全て素早く行動した為、いきなりの体勢変化にみほは、膝立ちの状態で固まっている。

「みほ」

「え…あ、はい」

「自分で入れてみて」

「ふえ!?!」

俺の陰茎は、みほの下にある。  
だから、する事は簡単ですよ？

「……うう……」

後ろを振り向き……というか、俺を見ながら、赤い顔を更に赤くさせていた。

彼女自身も、余り時間がないのは分かっているのだろう。  
こういう時の切り替えは、早いなあ……みぼりん。

「……なんで……こう……えっちなんだろ……」

なんか、怨嗟の声を呟いているけど、聞こえませーん。  
躊躇はしているのだけど、俺が言った事をこの状態に変える事はないのを知っているしね。

彼女の手が、陰茎に添えられた。

もう片方の手が、前に出したのか、見えなくなった。  
ん。

しまった!!

バックじゃなくて、真正面からの方が色々良かったんじゃないか  
!?

入れる瞬間のみほとか、すげえ見たい!!

と……今回は、意識して口から出ないように、心の中で叫ぶ。

「ううー……恥かしい……」

先から熱い体温を感じた。

みほが腰を落とし始めたので、狙いが定まったのだろう。

……本当に今回、あんまり躊躇しないなあ……みほ。

段々と、陰茎が熱い熱に包まれていく。

ゆつくりと、みほの中に入っていった。

「ん……はあ……んんっ……」

全体が完全に包まれた時、みほの体がまた少し跳ねた。

「んっっはあ!!……はあ……はあ……まだ……キツイ……」

体を前に少し倒し……両手は俺の脚の上にある。

浴衣の下から覗く、尻が妙に白く見えるねえ。

「はい、では動いてください」

「えっ!？」

「どうぞく…」

「……」

またこちらを振り向き、涙目で睨んできた。

俺とまた、目が合いましたね？

「うう…悪い顔してる…」

「はっはー」

まあ、どう動いていいか。

よく分からないと仰っていますので…腰骨を持ち、少し体を動かして上げた。

体全体で、上下…少し四つん這い気味だから、前後に動かしてやると…小さな声を上げていた。

「んっ…んっ…」

初めはぎこちなかったが、段々と慣れてきたのか…。

動かす速度が速くなってきた。

「はっ…はっ…あ…あ…あっ…」

声も段々と甘くなっていく。

起こした体を少し倒し、手をみほのお尻に添えた。

そうだな。

「みほ。慣れた？ んじゃ、今度は腰だけで上下させてみて」

「あっ… あっ!! んっっはっ!!」

いや…マジで、すごいエロい…。

返事をする事もなく、そのまま俺の要望に応えた。

腰を使い、お尻だけで上下に動き始めた。

こちらの方が、小刻みに速く動けるのか…動く速さに応じて…みほの声も大きくなっていく。

体を倒したお陰で、丸見えですね。

みほは、お尻を下に叩きつけるように動いていた。

バツンッ! バツン! と衝撃が走る。

俺の陰茎が、ビチャビチャに濡れながら…みほの秘部から出し入れされている。

動く度に、グチャグチャと音がなっている。  
それが目の前で、繰り返されている…。

「はっ!! はっ!! はっ!!」

うん…少し、込み上げるモノを感じてしまった。  
んじゃ…。

手でお尻を掴み、動きを止めた。

そのまま一気に、奥まで腰を突き上げる。

「はうっ!」

突き上げて奥に当たった瞬間、みほから変な声が聞こえたけど、そのまますぐに行動をする。

ニユルツとみほの中から、陰茎を取り出し、抜いてしまう。

「…んっ!」

また体を滑り起こし、四つん這いになったみほの体を、そのまま回転させ、仰向けに倒した。

さして。

ちよつと俺も夢中になりすぎた…。

いぢめるのにじゃないけどね!

携帯で時間を確認すると…まず…7時前だった。

下手するともう、起きてる人もいる時間。

だからといって、今更やめるのも無理。

「みほ」

「…あ…あ…はあ…はあ…な…にい…う…」

完全に顔が…というか、目の焦点が合っていない。

うああ…エロおお…。

みほの顔が、すごいな…。

まだ数回は、頑張れそうな程の蕩けた顔になっている。

「もう、余り時間がない。だから…」

「う…う…ん…ん…?」

「…本気でいく」

「…ほ…え？」

仰向けになつたみほの体。

乱れた浴衣を更に開く。

胸を露出させ…それに、むしやぶりつく様に、顔を落とす。

胸に挟まれていると、自然にだろうか？ みほの手が、俺の後頭部に添えられた。

…なんかいいな。コレ。

手探りで、みほの入口に亀頭を当てる。

体を起こすように…腰を前に…。

「あ…あああつ!? んあー!」

グチュつと、一気に奥まで。

奥に当たる感触を感じ、一度そこで止まった。

俺自身、イク事の為だけに、本気で動こうと思う。

その様な旨をお伝えしておきました。

「ど…どうい…?」

つまり。

少しだけ、みほの体の気遣いができないけど…まあ、悪いが我慢して下さい。

「アッ!! アー!! アー!!!」

陰茎が抜けるギリギリまで引き…。

「アッ!!! アッ!!! アッ!!!」

叩きつける様に、一気に奥を殴る様に打ち付ける。

両腕で、みほの両脚を捲り上げ…逃げられない様に…。

「ぎもちいい!! すごっ!! ヤァ!!!! ヤァ!!!!」



これを何度も繰り返す。

陰茎全体を、みほ中で絞る様に…力任せに思いつきり。

みほの声がすごい…。

完全に叫び声に変わっている。

まあアレです。

俗に言う、杭打ちというモノだ。

男側からのモノだけだな。

陰茎の全体を使い、大きく動くので、亀頭の根元。

カリを使つて、みほの中身を書き出す様に…。

打ち付ける度に、グツポツ！ グツポツ！という音がする。

グチャツグツチャツ!! と言った音にも変わる。

みほが、果てた時に出した愛液が混じった音だろう。

だから、すぐに分かった。

さて。

みほの両手を掴み、今度は小刻みに打ち付ける。

そろそろ、イキそう。

引つ張る力と、腰を振る押す力がぶつかり、バチユバチユと音がす

る。

「みほ！ そろそろイキそう!!」

「アッ!! アッ!! アッ!!」

「あく因みに、みほ。何回くらい…っ！ イった!？」

赤面させる為だけの、質問。

ただそれももう、意味をなさなかった。

「わかっんない!! わっかんっ!! ないよお!? んぁアッ!!!」

またイッたのか…少しまた体が痙攣した。

ゾクゾクとした感覚、体の内側よりする。

あ…。

今更だけど…避妊してなかった…。

やば…どうしよう。

ティッシュにでも出すか…。

ラストスパートと腰を打ち付ける。

こちらにも込み上げるモノを我慢しながら…何も考えられないで…。  
もう、肌を打ち付ける音と、みほの声しか聞こえない。

「っっ!!!」

陰茎を引き抜く…。

その陰茎を掴みながら、テッシュの箱を…。

…。

ラブホではないので、こぼしてシートなどに飛んでしまっただけです。

そう、まずい。

だから、みほの顔に近づける。

亀頭が仰向けになっていて、みほの口に触れさせると、みほが口を大きく開けた。

舌を少し出すように指示をする…。

そのまま亀頭をみほの口内に差し入れると、手で軽く陰茎をしゃべった。

みほが、舌を動かしてきた…その刺激で…

「んんんっ!!!」

みほの口の中に、思いつき全てを吐き出した。

脈を打つのも感じる。

ドクドクと…脈なのか、出しているのか分からないくらい…。

「んぐっ!! んっ!!」

飲み込んでいるのが分かる。

射精している最中、舌が動いている刺激が、妙に気持ちがいい…。

しごくのではなく、そのままみほの口内を使い…完全に全て吐き出し終えた。

「ふぁ………にがい…」

「朝っぱらから、すごい事をしましたね？ みほさんや」

「はあー……ここまでになるとは、思わなかったよ……」

乱れた浴衣を正し、今はもう落ちつたのか……ベットに腰掛けている。

座った脚の膝が……少し痙攣してますね……。

多分、同じ事をもう一度やったら、腰抜けそうだね。

さて。モーニングフェラの部分には、触れないで置いてあげよう……。

また、何かに感化されたのだろうか……。

「い……色々と、今度は私から言いたい事はあるんだけど……」

「はい」

部屋に戻るのだろう。

すぐに腰掛けていたベットから立ち上がった。

そうだな……もう、7時を回っている。

さて。どう言い訳するのかなあ……。

絶対に勘繰られる時間ですけど……。

「……部屋に早く帰らないと、本当にまずいから……もう行く……。どうやって説明しよう……誰か絶対に起きてるよお……」

「そうだなあ……風呂にでも行っていたって事にすれば？ 大浴場とか朝早くからやってなかったっけ？」

「お風呂って……そんな嘘、すぐバレちゃうよ……」

「いや、そこにあるし……」  
指を指す。

部屋の備え付けのお風呂。

「え……」

「昨日から沸かしておいたから、すぐに入れるぞ？」

「……」

何をマゴマゴしているのだろう。

浸かるだけなら、すぐに上がれるだろう？

「…じゃ…じゃあ、そうする…」

「分かった。んじゃ、俺も一緒に入るわ」

「えっ!?!」

はい、そうと決まったらさっさと行動!

即座に抱き上げ、風呂場へ連行しましょう。

「ちよっ!?! ちよっと待って!! 隆史君!?!」

「あく…そうそう。一度聞きたかったんだけどな?」

「え? 何? じゃない! おろしてえ!!」

バタバタと暴れだした。

今更、裸になっても同じだろうに…。

散々さつき、それ以上の事したんだからさあ。

「同じじゃない!! 同じじゃないよ!!」

あ。はい。また声に出たか。

まあいいや。

「なあ、みほさん」

「なに!?!」

「風呂に入りながらでいいや…ちよっとエロい質問を色々としたいの  
で…」

「もう入るの決定事項になってる!?!」

バタバタと脚を振るみほを、そのまま運搬します。

はい、でももう少し、赤面してもらいましょう。

まあ何よりも…。

風呂場でそのまま、もう一回戦いかないように我慢しないとな…。

「おろして〜!!」

※ルート 壊※第14 話く長い一日が明けました  
！く 前編

「…スー…スー…」

ムニムニと顔を動かしながら…はい。

寝てしまわれました。

静かな寝息と共に、胸が上下している。

しかし…寝辛くないのかね…。

ソファアの背にもたれながら…顔を真上に上げて…まあ…。

「はあ…」

ため息しかでないな。

酔ってしまっていた為…とはいえ、告白をまた受けてしまった。

なんだろうか。

素直に喜べなかった。

みほと付き合っていて…その本人の許しを得ているとはいえ…昨日、麻子とも関係を持ってしまった。

華さんとも…。

そんないい加減な奴のどこがいいのか。

ただのクズだぞ、俺は…。

こんな関係、長く続く訳もない。

…

ま、もうここまで来てしまつて…。

最悪みほに刺されてたしても…まあ、仕方がないだろうな。

明らかに自業自得だ。

寝息を立てている優花里を見て思う。

もし彼女の好意に甘え、俺また関係を持ってしまったら。

またみほは、容認するのだろうか？

思えばここまでの好意なんて、前世じゃ受けた事なんてなかった。

経験が…無い。

だからだろうか？

無意識に甘えてしまっていたのだろうか？

漬け込んでしまっていたのだろうか？

「キスさえ、しなれば…何してもいいって事か？」

あんこうチーム限定で…。

いつそ、開き直ってしまおうか？

そうすれば楽だろうか？

欲望に、ただ忠実に…。

「…ハッ」

変な笑いが出た。

中身は17、8のガキじゃないんだ。

そうしてしまえば、どうなるかなんて…簡単に想像できる。

どんどんと泥沼にはまっていく…。

みほは、俺が他の女性を抱く事に抵抗は無いのだろうか？

「…」

何言ってるんだ俺は。

あるに決まっているだろ…。

彼女は、友人関係と俺を天秤にかけている。

だからこそ思う。

今度は俺が、彼女を追い詰めているのだろうか？

…。

「…そえにでしゅね!!」  
「!!??」

うわあ…びつくりしたあ…。

突然目を覚まして、会話の続き…だろう。

その続きを叫んだ。

行動が完全にアレだ。

うん…酔ってんなあ…。

「しゅきでもなかったら、あんな！ …はじゆかしい水着にやんて、着  
ませんよお!!」

あゝ…はい。

すいません…。

躊躇半端に酔っていたせいもあって、欲望がダダ漏れでしたね…。

今は少し落ち着いてるし…多分もう大丈夫だろうけど。

対照的に、優花里はグテングテンになってるけど…。

「うう…そえにしても…」

「…?」

「にゃんか、チクチクしましゅ…」

「は?」

「ちやかし殿が、あんな水着にやんて着せるからでしゅよ!」

何が?

…少し考えがまとまらない。

優花里の声が半分程しか入ってこない…。

「…すちやつふの方に……」

…。

ん?

ああ…スタッフね…。

「下の毛…じえんぶ剃られましたゆた…」

「」

…。

はい、きわどい水着でしたからね…。

一気に現実を引き戻されました…。

「責任とつてくださしいよ!!」

酔ってるなあ…。

絶対、普段ならんな事言わないだろうし…優花里さん…。

…。

視線が無意識に、その場所に行ってしまう。  
もじもじとしている、優花里の太股が目に入る…。

「…んにゃ?…そういえば、今にゃんか、隆史殿…キスがどうの言つてましゆたね?」

無意識に口から出た言葉を拾ったのだろう。

聞かれてたのか。

まったく…。

「あえですか? にしゆいじゆみ殿が言つてましゆた…」

「みほが?」

いつ? なにを?

ああ…そういえば、昨日は新宅にあんこうチームで、お泊りしたとかなんとか…。

その時か…?

「キスしゃえ、しなければ…大目に見ゆとかにゃんとか…」

「……」

「わしゃし、意味がちよつと分かりましえんでしたが…ちやけべ殿は、顔真つ赤にゆい、してましゆたね…」

なんでしよう? って顔で、体をぐるんぐるん回している優花里。

心配になるくらい、酔っているのだけど…それ所じゃない…。

マジかよ…。

血の気が引いた…。

みほは…あらかじめ宣言していた…。

麻子は、「みほは、壊れている」と、はっきりと言っていたが…。

そこまで…。

辿たどしい口調で、優花里は説明してくれる。

華さんは、いつも通り…。

麻子は、目を伏せ…沙織さんは、顔を赤くして…少し引いていたそうだ。

優花里自身は、その意味が良く分からなかったのか、キスという部分にだけが、少し恥ずかしかつたそうだ。

その後、少しみほと沙織さんが…別室に消えていったそうだが…。



暫くすると、呆然とした顔で沙織さんは戻ってきた。

その後…華さんが、沙織さんを連れ出していったようだ…。

完全華さんが、沙織さんを説得している様に感じた。

何が起きているんだ…？

それ以前に…。

…。

みほ。

…。

なんか…頭がグチャグチャになって来た…。

もう、飲む事は無いであろうとしたポットの中身を、丸い湯呑に注ぐ。

注いだ湯呑を、一気に喉に流し込むと…生ぬるい液体が胃に入っていく。

大分薄めていたのであろうが…胃が少し熱くなった。

薄い…。

そして軽い…。

おもむろに立ち上がり、部屋備え付けの冷蔵庫へ向かう。

あのハゲの事だ…多分…。

トラップというか、なんというか…。

やっぱり。

この部屋に来て、一度も開かなかった冷蔵庫。

その冷蔵庫の中に1本。

200mlサイズのウイスキーが、入っていた。

…。

酒癖の俺の悪さは知っていたのだろう。

だからだろうか？ ワザとこんな風に…。

絶対に置いてあると思っていた。

だから敢えて、冷蔵庫は開かなかったのに。  
俺が飲まなかったら…俺が見つめて追求したら…。

どうせ部屋を変えた為とか何とか…これは、自分の物だった…とでも言い訳でもするつもりだったんだろう。

だから知らない振りをしようと思っていたのに…。

……。

「ちゃ…ちゃかし殿？」

揺れる頭で、俺を視線で追っていたのだろう。

その酒瓶を取り出した俺に対して、不安気に声を掛けてきた。  
酔っていても、この瓶が何か分かったのだろう。

ビンの蓋を開け、一気に仰いだ。

「!？」

栄養ドリンクじゃないんだ…こんな風に飲む物じゃない。

一気に流し込んだ為、喉が焼ける様に熱い。

だけど…飲まなければやってられない。

空になった瓶を持ち、そのまま元の席に戻る。

正面に座った優花里の顔が、とても不安気だった。

「あ…あの…隆史殿？ それ…お酒ですよね？」

瓶を指差し、確認をしてくる。

呂律が元に戻っているな。

そこまで、驚く事ですかね…。

……。

胃が熱い。

「あ…あのお……」

なんか…もう…。

…考えるのをやめた。



「優花里」

「な…なんですか?」

すごい警戒色を出していますね。

だから、そんなにかよ…。

まあいい。

「責任を取ろうと思う」

「え…えう!?!」

変な声を上げたな…。

…少し頭の中が…熱い。

「まず、立ってください」

「…」

なんかすごいジト目で、睨まれてる…。

あれ? 一気に白面になってない?

「なんか、変な事考えてませんか?」

「…考えてるな」

「!?!」

驚きの表情になったね。

ただ、正直にお答えしただけですけどね。

「立って。ほら、早く」

俺が真顔で急かすと、渋々だけど立ち上がった。

少し体揺れているのを見ると、まだ酔っているのが分かった。

「では、責任を取るために…確認させてください」

「か?!?!」

「はい、見せて」

「」

固まった。

赤い顔をさらに蒸気させて、固まった。

「たっ!? 隆史殿!」

そのまま、中腰で近寄る。

ソファアールの間のテーブルを避けて、優花里の正面に腰を落とした。普段ならセクハラだなんだと、何かあるとすぐ動揺する俺。

その俺が、積極的に行動しているに驚いているのか、体を硬直させて動かない。

よって、俺の目の前には、優花里の太股。

さて…。

浴衣の間に手をいれて、そのままさする様に太股を踵にしていく。

一瞬、優花里の体が跳ね上がったが、特に逃げる事もしないで、その行動を受け入れている。

浴衣の帯したの付け根を、左右に少し引つ張り、浴衣が開いたままになる様に固定。

下着まで、迷彩柄とか…まあ優花里らしいけど…。

そのまま、その下着の端を持って、一気にずり下ろす。

「…あう?」

素早く行動した為、ついて行けないのか…完全に固まっている優花里さん。

動かない。

ただただ、硬直。

思いつきり、下半身が丸出しになっているというのに…。

「…ふむ。確かに」

「なっ!? なにが、確かにですかあ!!」

綺麗に剃られてましたね。

はい。

毛一本無い、不毛地帯です。

マコニヤンとお揃いだね!

…酒が回ってきた…。

ここに来て、ようやく腰を引き、逃げようとするゆかりん。だが逃がさん。

「腰に手を回し…逃げ場を奪おうとする。  
ただ密着している為、よく見えない…。  
チツ。  
だが…。」

ソファアの前に立っていた為というのと、バランスが悪かった為に  
大勢を崩して…。

そのままソファアにまた座るように倒れてしまった。  
俺の後ろで、テーブルが引きずられるような音がした。  
はい、正面にテーブルを押しつけて滑り込みました。

「!? !?!」

寝るように座ってしまった…違うな。

座る部分へ背中をつけて、俺に下半身を突き出すような格好の優花  
里。

目の前には、優花里のお花畑が、広がっています。

「わーい」

「わーい…じゃ、ありませんよお!!」

頭の上から、涙声が聞こえてくる。

太股を閉めるが、ただ俺の頭を挟むだけで、ただのご褒美になっ  
ていた。

そのまま目の前の秘部に、舌を伸ばす。

少し塩辛い味を舌尖から感じた。

「チヨツ!? えっ!? 隆史殿!」

秘部の入口を…下から上に舐め上げる。

ジュルツとした音と…また塩辛い味が、今度は舌全体に広がった。

「んっ!! どこっ! そんな所、汚いですよ!!」

ソコカヨ。

まあいい。

舌尖で、秘部の頭。

クリトリスを丹念に舐め回す。

優花里の手が、俺の頭にある。

ただ押しつけ様としているのだけど、太股で挟んでいる為に動かな

い。

「んっっ!!」

チロチロと、舌先で丸い物を舐る。

舐る。

舐る。

「んっ！ んっ！ んっ！」

声を殺しているのだろう。

喉元から声が聞こえる。

優花里の聞いた事のない声だった。

段々と、頭を押しつけ様としていた力が弱まってきた。

よし。

不意打ちで、花卉の真ん中に舌を突き入れる。

グチュツとした音が、目の前から聞こえた。

「んあっ!?!」

そのまま中から舐め取る様に舌を引く。

…それを何回か。

いや、何回も繰り返す。

口元から音が何度響く。

「ふっ！ ふっ！ んあっ!!」

段々とリズムカルになっていく声。

暫くすると、俺の頭にあった手は、もうなくなった…。

腰を浮かせて、足で地面を踏ん張った。

ブルブルと腰を具連させて。

だが。

またそこで、ズズツと溢れ出した愛液を啜ったりすると、体を反応

させてくれた。

…。

指でクリトリスを撫で回しながら、舌で膣口を舐め回す。

腰が震えた。

頭を急に、強く抱きしめられた。

……………。

どのくらいだろうか。

何度も繰り返した。

……………。

長時間、丹念に愛撫した結果。

優花里の両足は、ソファアの肘掛に。

体は完全に開き…ぐったりと力が抜けていた。

座り直させた為に、背もたれの上に頭を置き…顔は天井を向いていた。

何度か、体を痙攣させ…水でも掛けた方の様に股周りが、ビチャビチャになっていた。

立ち上がり、優花里を見下ろすと、浴衣は開け…とろつとろに惚けている。

「かつ…あつ…はう…うう…」

「…さて、優花里」

「はっ…はっ…」

俺を見ているのだろうか…目の焦点がズレているようだった。

返事もままならない。

……………。

なんだろうか？

いつもと感覚が少し違う。

自覚して酒を飲んだからだろうか？

長時間ほろ酔い状態でいて…一気に強い酒を飲んだ為だろうか…。

まあ…どうでもいいか。

「これから、優花里を襲おうと思うのだけど…」

「い…今…さ…つ！ 今更…」

あ…はい。

そうっすね…。

「みほ曰く、キスをしなければ浮気じゃないらしい…」

「…はあ…はあ…あ…あ…」

先程と昨日の事を思い出したのだろう。

そして意味を理解した。

そんな顔。

「だけどな、俺はどうにもそれ抵抗がある。ある…が…」

結局それに流されて…華さんと麻子とも関係を持ってしまった。

そんな俺に非難する権利は無い。

だから。

「…た…隆史殿…」

俺はどんな顔をしているのだろう。

考えがまとまらず、今は感情で動いている。

呼吸が整ったのか…優花里は何故か、心配する様な目で俺を見上げ

ている。

「優花里の気持ちは、素直に嬉しい…だから…」

「…」

確認。

最後の確認。

…一方的な、他人へ許可を求める卑怯な…良心への最後の…

「…最後だ。優花里…いいか？」

「……………」

…本当に嫌ならばやめる。

そんな言い方。

それに、優花里は…ゆつくりと返事を返してくれた。

「私なんかで、よろしかったら…私は…隆史殿を受け入れたいと思

います」

「……………」



「…隆史殿は…どうしたのですか？」

「俺？」

どうしたいか。

襲いたい。

したい。

やりたい。

抱きたい。

違うな…そういった事を聞いているのではないな。

だけど…。

「そうだな…今は…。」

「今…は？」

みほを何とかしたい。

狂った関係をどうにかしたい。

…そんな事で悩んでいたはずなのに。

口から出た答えは、まったく逆方向のモノだった。

「優花里を、俺のモノにしたい」

酒を入れてしまった為だろうか？

ただ…欲望のままに答えてしまった。

本当は違う事だろうに…。

本当は…。

「な…なら、それでいいですよ？」

モラルも何もない…ただの欲望を受け入れた。

この答えも多分…おかしい。

…狂っている。

優花里も酔っていた為か。

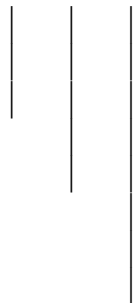
今の行為による事か…。

なんにせよ…狂っている。

お互い、ただ欲望に従った。

それでも恥ずかしそうに答える、優花里を見て。

―俺の中で、何かが壊れた。



優花里抱き上げ、ベットに移動した。

すでに愛撫をやりすぎた後だった為に、もう大丈夫だろうと…即座に抱きにかかった。

優花里からの、口での愛撫もいらぬ。

ただ早く、優花里の中へ入りたかった。

仰向けに寝た彼女の脚を上げて…彼女の入口の前へと、陰茎を当てる。

当てるだけで、ニチツとした音がした。

無言。

ただ無言で、そのまま中に…ゆっくりと入っていく。

ヌルツとした感触が、亀頭にまとわりついた。

「…んっ」

そのまま、ゆっくりと静かに前進する…。

腰を押し上げると、壁に突き当たる感触。

「ふっ!! んんっ!!」

…ここで一気に…。

「んんああ!!」

全てを飲み込ませた。

「く…あ…」

破瓜の痛みに顔を歪ませている。

できるだけ、ゆつくりと。  
せめて慣れるまでと動き出す。

体の力を抜く様に言っては見るが…痛みが勝るのか、聞いていいない。  
い。

ズルツとした感触がする。

血が出ていなかった。

ただ陰茎は、愛液で濡れていた。

それでも痛みが強いのか…

一度、動きを止めて…縛らく優花里の体に覆いかぶさってみる。

自然と彼女の腕が首に周り、お互いの体を密着させていた。

……。

「ふっ…ふう…ふ…ふ…も…もういいですよ…落ち着きました」

そんな言葉と受け、またゆつくりと動き出す。

今度ではできるだけ浅く…痛みがないように…

「ふっ…ううう…あ…あれ？」

「どうした？」

「あんまり痛く…なくなりました…」

「…え？」

…優花里が酔っていたのもあり、暫く休憩した為に痛みが安定したのか？

まあ…痛みが少ないなら良かったけど…。

少し早めに動き出す。

グチユグチユとした音が響く。

やはり血は出ていない。

浴衣につくことも無く…むしろ愛液で湿っていた。

感触もあり、処女だというのは分かったが…血が全く出ない人もいるんだな…。

さして。

「ふっ…ふっ…」

できるだけ同じ動きを繰り返す。

慣れているなら、できるだけ痛みが発生しない様に、同じ所を重点

的に。

「はっ！ はっ！ はっ！」

暫く繰り返すと、ただ肺から空気を漏らす声が、少しずつ変わってきた。

まだ、同じく両足を持ち…正常位でそのまま突く。

「あっ！ はあ!! あ！ あ！」

さらに縛らく繰り返すと、甘い声が混じってきた。

たまに挿入部分を見ると、やはり血は出てきかない。

愛液で濡れている股が、室内灯に照らされて光っているだけだ。

ん…。

胸が見たい。

ただ単純にそう思った。

両肩に手を置き、またさする様に浴衣の上半身を脱が…。

「だっ！ ダメですう!!」

え…。

ここで抵抗された。

両手を内側から払われた。

「は…恥ずかしい…ですよ…」

「…今更ですか…」

もつと凄い事、現在進行形で行っているんですけど…。

ま。

「やっ!? ちよっ!!」

剥くけどね。

「隆史殿お!!」

ふむ。

みほど同じくらいの大きさ…。

浴衣だった為か、初め風呂へ行く前だったからか…。

ノーブラでした。

浴衣を開かせ、今はお腹の部分の帯で、辛うじて着ているだけの状態に脱がせた。

うあ。顔がすげえ赤くなった。

両手で胸を撫で回す様に…そのまま腰をまた動かす。胸を愛撫させながら、また必用に…。

「んっ…い…んっ…い…」

今度は声を殺し始めた。

愛撫していた時の様な声が聞こえる。

…。

上半身裸といのちも恥ずかしいのか…腕で目元を隠している。

……………。

いかん…。

ゾクゾクしてきた。

腰骨を持ち…腰を上げさせる。

ゆっくりと奥まで突き上げた。

奥に当たると今度は…ゆっくりと引き抜く。

「…あ…ああ……」

引き抜く時に…うっとりとした声を上げた。

もう完全に慣れていた。

処女って…初めそんなに快楽を感じないって聞いていたのに…。

戦車道履修者は、痛みにも強いのか？

みほも、華さんも…麻子も…初っ端からイキまくってたな…。

比べる時点で失礼な話だけどね…。

これなら…少し強く動いても大丈夫かな？

ぐぐつと今度は早く動かし始める。

グチャグチャと腰を打ち付ける度に、愛液が俺の股にもまわりつ

く。

「あっ… あっ… んん!! はっ!!」

締まる。

すごい締まる。

優花里の日課も、俺と同じく筋トレだと言っていたのを思い出した。

それでだろうか。

無意識にだろうか…締め上げる…。

筋肉を使つて、膣内で陰茎を搾り取る様に…。

普通…初めてじゃできないだろうに…。

だから…。

限界が早かった。

「……………」

「んっ…はあ…はあ…ど…ど…どうしました？ 隆史殿？」

「…すまん、優花里」

「……………え？」

「イキそうだ…ちよつと早く動いていいか？」

「え…ええ……かはっ?!?!」

グチツと。

思いつきり中に突き入れた。

正常位。

そのままの体制でピストンのスピードを早くした。

入れて引き抜く度…彼女に絞られる。

同じく卑猥な音が響き始める。

肌同士が、激しくぶつかる音。

ベツトが軋む音…。

愛液が混ざり合う様な音…。

「あっ！ あっ!! あっ!!!」

押し込む度に答える優花里。

腰骨を持ち、自身の腰に引き当てる。

同時に腰を打ち当てる。

体全体を揺らし…打ち込む度に込み上げてくるのを感じる。

手を優花里の頭を両端に置き…腰だけを動かす。

突く度に、胸が揺れ。

突く度に、甘い声を上げる。

「ぐっ…」

先にイカされた。

処女だったので、イカさせる事ができるかとか思っていたけど…それ以前に先にやられてしまった。

急いで陰茎を彼女の中から取り出し…不毛地帯の恥丘に添える。軽く陰茎をこすると、先から音が出るように精子が飛び出た…。

昨日散々、麻子を抱いたばかりだというのに…ゼリー上の白いものが、優花里のお腹を汚す。

いや…勢いが良すぎて…そのまま顔にまで飛んでいった…。

「はぁー…はー…」

彼女は彼女で、体全体で呼吸をしている見たいだった。

ヌルつとしたものが、ゆっくりと彼女の肢体を流れだした。

……。

「す…すごい…ですね…」

なにを見て凄いと思ったのか…まあナニか。

俺の方向を下目に見て…そんな感想を言っている。

「ハア…ハア…」

息を切らしているのは、俺も一緒だった。

ただ…それは動きから発生するモノとは違った。

…沸き起こる衝動。

「な…なんか…まだ何か入ってる気がします…」

汚れたお腹を摩りながら…。

「ど…どうでしたか？ 私…隆史殿のモノになれましたか？」

「っ!!」

「ちよ…ちよつと、痛かったですけど…」

……。

変に嬉しそうに…そんな事を言ってくれた。

それが…また…。

「ハア…ハア……優花里…」

「は…はいい」

「まだ…できそうか？」

「…え」

なんだろうか。

「ええ…はい。隆史殿が満足するまで…頑張ります」  
体が精液で汚れた優花里。

仰向けになりながら…また健気な事も言ってくれた。

愛おしくも感じ…妖艶にも感じ…性欲がまた湧き上がる。

できるだけ、優しくしたつもりだった。

愛情もあった。

彼女を気使う余裕もあった。

…ただ性欲に流されていなかった。

それを優花里も、感じ取っていてくれた。

そこまでは。

そんな俺を見て、忘れていた。

そう、彼女は忘れていた。

アルコールが俺に入ってた事を。

暴走しやすくなっている俺を。

そんな健気な彼女見て、俺の奥の最深部…とでも、言うのだろうか？

俺の中の…黒いスイッチが入った。

そのスイッチはもう、戻らないだろう。





「優花里さん、帰ってこないですねえ」

私達の宿泊部屋。

先にお風呂から上がり、隆史君に連れられていった優花里さんの帰りを皆で待っていた。

そろそろ23時を回りそう…。

いくらなんでも…遅すぎるよね…。

並んだ布団の上、流石に就寝する様な時間帯にも帰って来ないのは心配する…。

…。

まさか。

昨日の今日で。

…。

昨日のお泊りで、みんなには一応説明をしておいた。

今の状況、これからの事。

ミンナノ、キモチモ、ソンチョウシタイ

そんな事。

だけど…まさか。

いくらなんでも…。

イチオウ、ユカリサンニモ、チュウイヲシテオイタカラ、ダイジヨ  
ブダトオモウケド。

「…うん、みほさん」

「え？」

「隆史さんのお部屋って、ご存知ですか？」

「…うん。知らない」

沙織さんもまだ戻ってきていない。

結局部屋には、私と華さんと麻子さんの三人。

不在が二人。

沙織さんは、妹さんの所へ行っているみたいだから良いのだけど…。

「…西住さん、書記に電話でもしてみたらどうだ？」

「ええ。でも、お仕事だと悪いから…メールにしてみるね」

「…」

送ったメール。

仕事終わった？ 優花里さん知らない？ よかったらお部屋の番号を教えて？

その様な内容。

思いの外…すぐに返事が来た。

いつもの様に簡潔に。

『 仕事終わった。 5階 502号室 』

「5階 502号室…」

そのメールを見て、思わず口に出てしまった。

「この上の階ですね」

「仕事とやらも終わったのに…なにをしてるんだ書記は…」

あれ…優花里さんの事は、返事に無い…。

どうしたんだろ…。

多分、入れ忘れたんだろうな。

「…うん。ちよつと隆史君の所行ってくるね？」

「え？ 何かあったんですか？ …私達も行きましょうか？」

「大丈夫…うん。すぐに帰ってくるから」

急ぐ。

部屋の二人を置いて、隆史君の部屋に向かう。

エレベーターを上り…5階。

宿泊客も少ないのか、人の気配がなかった。

降りたエレベーターから、すぐ近く…502号室。

ほぼ横。

見つかった。

「……」

あまり躊躇しているのも意味がないだろうと、思い切って一度ノックを試してみた。

…。

もう一度。

……。

ダメか。

寝ちゃった…訳ではないだろうし…。

電話をかけてみよう。

携帯を取り出そうとした時、部屋のドアノブから音がした。

ドアノブが、回りだした。

「みほか…」

「隆史…君？」

隆史君がドアの隙間から見えた。

私だと気が付くと、半開きのドアを全部開けて、招き入れてくれようとしてくれた。

部屋は明るい。

まだ普通に起きていた様だった。

普通の格好。

ホテルの浴衣を来て…少しはだけているけど…。  
でもなんだろうか。

目の焦点が合っていないというか…。

…ああ、そういえば。

お酒がまだ残っているのかな。

「あの…優花里さん知らない？ まだ、部屋に帰ってっええ!!」  
腕を掴まれた。

そのまま強く引かれ、隆史君の腕の中へ、引きずり込まれる様に抱かれる。

「?!?!」  
パタンと後ろから、ドアが閉まる音。

私を引きずり込んだ後、片方の腕ですぐにドアを閉めたのだろう。

「ふう!!」

なに!! なに?!?!

呆然としている中、いきなり口を塞がれた。

隆史君の唇の温度が伝わってくる。

うん…口で塞がれた。

隆史君の腕が腰に回る。

そのまま引き寄せられる様に、抱きしめられ…舌が入ってくる。

口の中がまさぐられている…。

「はっ…んっ…」

声が出てしまった。

口の中に暖かいモノが、ヌルヌルと動き回り…舌を吸われる。

強制的に…飲み込まれる様に、私の舌が彼の口に吸われて…彼の中で動き回っている。

それがもう自分の意志か分からないほど…。

頭がボーっとしてきた…。

「っふぁ…え…」

どれくらいしていたか分からないけど、急に口を離された。

また変な声が出てしまった。

…どうしたんだろ、本当に。

彼が求めれば、応えるつもりではあるけど…前回と違って…ちよつと強引。

…き…嫌いじゃないけど…。

すぐに彼の頭が、私の首元に入ってきた。

首に口をつけている。

んっ…。

んん!?

彼の手が、私の浴衣…太股付近を撫で回す様に…いきなり捲り始めた。

本当にどうしたの!?

「えっ!?! ちよっ! たかつんん!!」

声を上げようとする、また口を口で塞がれる。

彼の手が、私のお尻を掴んだ。

マッサージするかの様に、揉みしだきながら…また舌が私の中で…。

「ちゅあ…はっ…ん…」

指を動かしながら、何かを探る様に…そのまま股間へ入ってきた。

恥ずかしい所を摩っている…。

「ふっ…んっ! っんっ!」

何かを掘る様に…指が動き出した。

動く度に、快感が脳に走る…。

壁に背中を預けているとはいえ…足が震えて…立っていられなくなる。

そのまま、口を合わせながら…指が私の秘部を小刻みに…。

「ふっ!?! っんっ!!」

声が漏れてしまう。

指…だらうな…。

彼の太い指が、入ってきた…。

そのまま、上をこすっんっ!?

擦りつける…みたいにい…。

クチュクチュと、音をワザと立てて…動かし…。

段々と、その音も変わって…。  
グチユグチユと…音を…

「んっ！…んっ！…ちゅぷ…ぷあー！」  
んん！

し…下着を下ろされた…。

残った片方の手を、お尻の上から下げ…一気に…  
太股の下付近で止まってしまったけど…。

「少し早いけど…こんだけ、濡れればいいか」

確認する様に…また、恥ずかしい事を言ってきた…。  
うう…絶対ワザと言ってるよ…。

「ほら。ちよと後ろ向いて…」

両方を掴んで、そのまま後ろを向かされる…。  
壁に手を置き、腰を引かされる…。

「あ…はあ…はあ…はあ…」

刺激がまだ強くて…うまく考えがまとまらない…。

強引…どうしたんだろ…。

それと…。

何か忘れていている気がする…。

あ。

「ちよっ…ちよと待って隆史君！ 優花里さんが…ああああっ!!!」

そのまま立ったまま…隆史君が入ってきた。

上に押される様に…一気に奥ま…でっ！

「あ…はっ…はっ…!!」

中が満たされる…。

ゆっくりとではなく…強引に全部…。

刺激が…んっ…。

呼吸が…一瞬止まっちゃった…。

「この部屋…一応防音とかもしっかりされてる見ただけけど…」

「んあっ！ はっ!! あんっ!!」

こ…腰動かしながら…言わないでっ…!

声が…。

「入口付近じゃ、流石に声が外に漏れる…ぞっ！」

「ひゃっ!? はっ!! んっ!! んっ!! うんんんっ!!!」

そう言いながら…いきなり激しく…なったあ…。

彼が、私の中に出し入れを小刻みに繰り返して…んっ!

手で私の口を塞ぐ…。

指が口の中に…。

舌でそれを舐める…舐めまわす…。

こうすると…彼はあ!? よ…喜んで…んんっ!!

「……」

あ…あれ…動きが…止まった…。

「ひゃっ!?」

彼の腕が、私の両脚の下に入ってきた。

そのまま一気に…体ごと持ち上げられた。

壁に足がちよつと当たった…。

って!!

「やっ!! やだっ!! 恥ずかしい!! この格好は恥ずかしいよ!!」

彼からは見えないだろうけど…。

腕で、開脚される様に持ち上げられていた。

その…入ったまま。

「…優花里…だったな」

「えっ!?」

そのまま…辿たどしく、隆史君は歩き出した。

部屋の中へ…。

初めに目に飛び込んできたのは…テーブル。

その上に置かれた…お酒のビン!?

え!?! え!?!?

方向をクルツと変えられ…ベットが目に入る。

ツインのベットが並んでいる…。

そのベットへ…ゆっくりとそのまま移動されると…。

その上…。

「優花里さん!?!」

仰向けで：天井を眺めている、優花里さんだった。  
全裸で：所々、体が濡れている…。

独特の匂いもする…。

胸で大きく息を繰り返し：私に気がついたのか、いないのか…。

「すまん。みほ」

「なっ!?! えっ!?!」

「大丈夫だ」

「なにが!?! え!?!」

思考が追いつかない…。

「…キスは、してない」

キ…。

……。

頭に冷たい感覚が、走った。

いや…言った…確かに言ったけど…。

華さんの時も…麻子さんの時も…。

彼女達のキモチを考え…テ…。

キ  
モ  
チ

あ…そうか。

私…。

隆史君のキモチを…。

「それにな、みほ」

「えっ!?!」

「収まりがつかん」



「え…えっ!? んぁ!!」

動き出した…。

こんな恥ずかしい格好で…。

少し体を倒し…小刻みに…私の中に出し入れを繰り返しっ!!

「んっ! んっ!! んっ!!」

もう大丈夫だと。

ここまで部屋に入れば、声は出しても問題無いと…。

そんな事を耳元でえ…。

「やつ! はずかあっ!! 優花里さっんがあ!!」

見ている。

見られている。

この格好を。

それをまた分かって…いて、隆史君はっあ!!

「…そうだな。動きづらい。この体位」

「へっ!?!」

ドサツと。

そのまま…私をベットに下ろした。

前に落とす様に…四つん這いにする様に…前から降ろした。

優花里さんの上に。

「ゆっ…優花里さん!?!」

近くに来て分かった。

顔が蕩けている…。

初めての時の…華さんと同じような顔…。

虚ろな目が、こちらを向いていた。

はっはっ…と小さく呼吸を繰り返している、その顔は…笑っている。

ギシツと、ベットにもう一人分の体重が掛かった音がした。

それと同時に…。

「ふいー…んぁあー!」

四つん這いの私に、大きい衝撃が…。  
グチュツとした…音。

「…優花里にあまり無茶をさせたくなかったんだけどなあ…」

「はっ…ふぁ…ああ…！！」

グリツと奥で、擦られる。

全身に何か…凄い…かんかあ…く…。

「3回目で動かなくなった…」

何を言っているのか…よくわからなくなっていた。

言った瞬間…ズルツと抜かれる…。

抜かれたと感じた瞬間、また…。

何度も…なんども…押し寄せて…く…。

「あっ!! はっ!! はっ!! あんっ!! あっ!!」

やつ…も…う…。

きも……ち……い…。

なに…も……か……考え……ら…



優花里のに覆い被さる様に、四つん這いになっている、みほ。

ただそれを、後ろから何度も犯した。

ゾリゾリとみほの体内の感触を感じていると、みほの性感帯…というのか。

弱い所が分かってきた。

まだこれで3回目だ。

行為に慣れていないのだろうか。

弱点…刺激が強い所を、カリで引っ掛ける様に動かす度に、体が少し跳ね上がる。

「…」

上…の奥。

「ひう!？」

頭を下げ…優花里の上に体を預けていた。

顔は優花里の首元に埋めて…。

声を出さない様にと、我慢しているのは分かるが、正直意味を成さない。

さて。

「優花里」

「…ひ…:…やい…:」

優花里の弱点も同じくして分かった。

重点的にしつこく攻めたら…:初めてだというのに、最終的には狂った様に喘ぎ声を上げていた。

2度目だろうか。

俺の…:こんな状態でも、できるだけ無茶をしない様にした。

極力優しく…:。

それが分かったのか、段々と素直になり…:。

最終的には、完全に堕ちた。

言えば素直に脚を広げ、俺を受け入れた。

結構恥ずかしいと思われる、体位にも素直に従う。

だから。

言えば聞いてくれるだろう。

今の彼女なら何を言っても。

目の前には、憧れだと言っていた、みほがいる。

その彼女が目の前で、甘い声で喘いでいる

「みほの口が、寂しそうだ」

「…ふむう」

言った直後。

すぐになにが言いたいか理解したのか…:。

目の前のみほの唇に、自身の唇を合わせた。

「んむっっ!？」

みほの驚きの声が聞こえた。

何度か口から離し、何度も重ねる。

俺も動きをゆつくりとした動きに変えた。

ゆつくりと…引き…ゆつくりと奥まで入れる。

「んちゅっ…ふぁ…れちゅ…」

すでに舌を絡ませているのか、思いの外、大きなキス音が聞こえてくる。

ふむ。もう少しゆつくりと動こう…。

歯に当たったら危ないし…何より…。

見たいし。

優花里さん!? と、叫んだのが数分前。

すでに体を優花里の横に倒し…横になりながら口を吸われている。

たまに西住殿と、優花里が呟く。

また…それが…。

優花里はソツチの気も、あったのではないかと疑ってしまう程…夢中になってみほの口を吸っていた。

……。

グチツと。

高ぶるモノを感じて…一度また、弱点を思いつきり攻めた。

「ふむうっ?! うっ…うううう…」

ビクビクツと波を打つ体。

小刻みに揺れる体を無視し、それでも動かすと横にしていた体を仰向けにし…腹を突き出した。

海老反りをしている様な格好だな。

「あ…あっ…」

はい。一回目。

「優花里…もういい」

一言、声をかけると…素直に顔を離し、また仰向けになって荒い呼吸を繰り返し始めた。

さて…と。

絶頂に達した余韻に浸っているのか…みほが動かない。

よって、そのまま脚を上げ、腰まで上げさせる。

「ふあっっ!? えっっっ!? アッッ??」  
みほの本丸。

感じやすく感度が、非常に高いみほ。  
俗に言う、Gスポット。

カ리를意識的に使い…小刻みに…。

「えっ!? なに!? なあっ??」

ゴリゴリと…

「っ!! あっ!!」

直接的に神経を直に撫でるように…。

知らない刺激を感じているの、混乱している顔をしている。  
泣きながら…口を開けて。

そして。

グチュツ…と。

杭を打ち込む様に、一気に一番最深部まで押し込む。

子宮のさらに奥。

Aスポットと呼ばれる場所。

この体の陰茎なら余裕で届く。

「カッ…ハッ…あ…」

呻くような声が聞こえた。

またその奥をゴリゴリと撫でる様に、陰茎の先を擦り付ける。

「アッ アッ…」

目を見開き、何がなんだか分からないといった顔。

はい。では…ここからだ。

一気に引き抜きく。

…膣内の上部を削り取る様に。

そしてまた一気に最深部まで打ち込む。

繰り返す。

これを何度も。

何度も何度も。

何度も何度も何度も。

さて。

みほは、何回まで持つだろうか？



「……」

「…帰ってきませんねえ。みほさん」

「……」

「もう一時間になりますね」

五十鈴さんが、ぼやく。

眩くのではなくて、ぼやく。

もうすでに大体の予想…どうか、想像はついているのだろう。

秋山さんもどうにかなって、西住さんは、ミイラ取りがミイラ…状態になっているのか…。

もしくは、書記の部屋には、秋山さんはいなく…結局、西住さんは書記と…。

……

……

「ちよつと私も、様子を見に行つてきます！」

「えっ!？」

か…輝く笑顔で、私に報告する様に発言した…。

「五十鈴さん、ちよ…ちよつと、待ってくれ」

「はい？ なんですか？」

「…私が行く」

…自然と口から出た言葉。

「麻子さんが、ですか？」

特に気にした様子もなく、素直に疑問を口にしたようだ。

「情けない話なんだが…その…こういったホテルでな…」

「？」

「…一人で部屋にいるのは…ちよつと怖い」

「ああく…」

嘘だった。

流石に部屋に、御札が貼つてあるとか…。

そういったのがあれば、絶対一人でいるのは嫌だけど…ここは違う。

私が、そういったオカルトが嫌いなのを知っている為、妙に納得した顔をした、五十鈴さん。

すまん…。

「それに、五十鈴さんの場合…その…」

「あらあら、ウフフ…ちよつと否定できないのが、お恥ずかしいですね」

テンプレの笑い方で、素直に肯定したよ…。

五十鈴さんも、どこかおかしくなっている…。

…人の事は言えないが。

沙織がいつ帰ってくるかもしれない為、どちらかが残らないといけないからな。

だから、私が行く。

「その…私は大丈夫だ。昨日の…ううう…その…アレで、まだ少し痛いくて…そういった気分じゃない」

「そうなんですか？ まあ…はい。お気持ちは分かりますね。私の時は、寧ろ捗りましたけどねえ」

…ろ…露骨…。

いつの事だろうか？

まあいい。

五十鈴さんの了解も取った事だしな…。

布団から立ち上がり、部屋を出よう。

…。

そもそも、私はなぜ行くなんて言ったのだろうか。

……

また…その…。

して欲しいとかでは、無いだろうに…。

どこかでまだ、変に妬いているのだろうか？

…西住さんに…。

邪魔…。

私は邪魔をしようとしているのだろうか？

それでも腕は動く。

私の考えとは別に。

気がついたら、部屋の前。

書記の宿泊部屋の前にまで来て、ノックを繰り返しながら、そんな事を思っていた。

……。

開かれるドア…。

そこからの記憶は…あまり無い。





「ただいまあ〜…」

麻子さんが、部屋をでてから…30分ほどして、沙織さんが帰ってきました。

「あれ？ 華だけ？ 他の皆は？」

「隆史さんの部屋です」

「……………」

「ここまで来ては…沙織さんを仲間はずれなんて…………」。

カワイソウダトオモイマス

同じ気持ちを共有する者としてはね…。

まあ、露骨に言うつもりはありませんし…後は、沙織さん次第ですね。

私は助け舟を出しただけです！

「正確には…優花里さんが、帰ってこないの、みほさんが様子を見に行つて帰つて来なくなり…」

「……………」

「さらにその様子を見に行つた、次の搜索者の麻子さんも、帰らぬ人となりました」

「言い方…………いや…………なんか普通にホラーだよ…」

「だから、次は私の番です!!」

「なんでまた嬉しそうに言つてるの!?!」

嬉しいからに決まってますね!

一応、隆史さんの部屋号を、ホテルのメモ用紙に記入して置きましたので、沙織さんも後で気が付くはずですよ。

その後、どうするかは彼女次第…。

「では、私も行つてきますね!!」

「なんで敬礼!?!」

正直、すでに行きたくて仕方ありません!

…そういつた行為をされているとも、予想できますけど…。

何より、私も仲間はずれにされている感がありまして、寂しいです。呆然としている沙織さんを、部屋に放置して…部屋を飛び出しました。

あら…少し、はしたないですね。

……。

……………。

「…」

エレベーターを上がり…隆史さんのお部屋に到着しました。

し…静かですねえ。

少し気味が悪いくらいです。

結構お高い部屋ですし…防音とかしつかりされていると思いますけど…。

何か…嫌な予感がしますね。

……。

叩く。

ノックを何度か繰り返しました。

すぐに出て来て頂ける…とは、思いませんでしたけど…。

少々時間がかかっています。

……。

さ…寂しくなってきました…。

あ。

部屋のノブが回りました。

内側から回したのでしよう。

それから直ぐに…ゆっくりとドアが…。

◇

麻子が呆然としている。

部屋のドアを開いた時、俺の姿を見て何かを察したのだろう。入室した途端に、部屋の奥にまで早足で入っていった。

「さ…酒…」

一度、テーブルの上に転がっている酒瓶を見て固まったが…顔をベットの方向に向けた瞬間。

…腰が抜けたのか…その場に尻餅をついた。

「…なっ…え…っ？」

呆然とベットを眺めている。そう。

ベットの上には、甘いうめき声を上げている、二人が横たわっていた。

秘部は開きっぱなしで…体液に汚れ。

…同じく汚れた体を、時たま痙攣させている体。

ビクンと…。

「に…西住さ…秋山…さ…ん？」

「麻子」

後ろから名前を呼んだ。

肩に手を添えながら。

添えた瞬間、体から怯えを感じた。

…怯え？ ナンデ？

まあいい。

ちやんと説明しておこうか。

「まだ慣れていないんだろうな。優花里は3回…みほは、4回目で動かなくなった」

「!?」

俺の言葉に驚いたのか…怯えた目でこちらを見上げた。

…だからナンデダロウ？

そのまま、座り込んだ麻子の脚に腕を入れて、抱き上げる。

お姫様抱っこという奴だな。

大人しく抱き上げられた麻子。

だから言っておく。

……。

「…麻子」

「……な……なんだ？」

「収まりがつかん」

「え…」

—

—

—

そうだな。

麻子の弱点は、結構直ぐに分かった。

「あっ!! あっ!!」

小ぶりの尻を掴み、強引に外に引つ張るように開かせている。

そのお陰で、顕になってよく見える秘部に突き刺している。

ヌラヌラと光りながら、そこへ出し入れを繰り返している陰茎。

「ぐっ!! あっ!!」

狭い。

そして、異常に気持ちのいいソコへ。  
そうそう。

この奥、タコ壺ともいうのだな。  
そんな名器。

しかも麻子の体付きからして…狭い。

その小さい体全体を使う様に締め付けてくる。

サイズの、俺の陰茎は大きすぎるのか…彼女の腹を圧迫し、声を  
殺せないのだろう。

口から卑猥な声を、強制的に漏らさせている様な感じだった。  
…。

「えっ…えぐられ…んっ!!」

奥だ。

Aスポットより、その手前。

子宮を圧迫される事に、麻子は快楽を強く感じる様だった。

さて…そろそろ2回目だな。

「カ…あっ…ん…あ…ああああ?!」

絶頂に達し、ベットに手を置き腰を突き出していた、彼女がその場  
に崩れ落ちた。

使って良いと言っていたいな。

お言葉に甘え、悪いが使わせてもらおう…と。

だけど、ただそれでは申し訳ないので…。

みほと同じく…満足するまで、快楽に酔って…モラオウカ？

昨日の今日だし…流石に少し手加減をしようかな。

初め、彼女は何かを言っていた気がしたが、体をまさぐり…。  
脚を開かせ…彼女の中に入って暫くしたらそれも消えた。

「しゅっ…と」

彼女の体を回転させて…真正面に向けた。

繋がったまま、みほ達の横にある、もう一つのベットへ彼女を誘導

した。

まだ少し震えているな。

絶頂からの…もう一度…。

「やあつ!? ちよっ…待て! 待ってくれ! まだ敏感んんっ!!」

無視して、そのまま中へ。

その刺激で体が強張る。

「んあー…怖い!! なにか、知らなつい!! これ! こわい!!」

新たな刺激に、新たな快樂。

経験がほぼない彼女だ。

その不明な感覚が怖いのだろう。

ナレテオコウナ

一度突き入れると、そこから逃げようと体をよじる。

…。

ふむ。

彼女の脚をもう一度抱える。

そのまま抱きしめる様に体を密着させると…一気に起き上がらせた。

彼女の細い腕が、無意識に俺の首へと回る…。

まあ…体の小さい麻子だ。

首に手を回してくれなくても、抱き抱えた腕をそのまま背中に回して固定。

はい、立ちながらもできますね。

コレデ、ニゲラレナイ

「あ…あ…あ…」

駅弁スタイルになり…さらに奥に入る。

麻子自身の体重を振り子にして、さらに奥に叩きつける。

何度か、体の痙攣を感じた。

5回目くらいだろうか…。

すでに体からは力を感じない。

…ん。

そこで、ドアがノックされている音に気がついた。

…。

面倒だな。

…また浴衣を羽織るのは。

「あ…あ…ま…待て…書記…どお…こ…へ…」

「ん？ ドアがノックされていた見たい。…来客だな」

「!？」

そのままの格好で、ドアへ向かう。

そうすると、麻子の体に力が戻った。

そうか。

そろそろ、潮時かと思ったけど…。

まだデキソウダナ。

「待って！ 待ってくれ!! 何…をおんあ!!」

一度強く押し入れた。

グチャツと音が響くと、体をまた痙攣させていた。

はい、6回目。

…。

ドアスコープを覗くと…華さんだった。

…また来た。

…。

麻子をおろして、壁に手をつけさせた。

身長差もあり、かなりキツイ。  
立ちバツクの様になれば…腰を落とせば…。  
何も言わせない様に、もう一度突く。

「はっあああ…あ」

ゾリツとまた陰茎全体を擦りつける様に。

目の前から、小さな甘い声が響く…。  
ささて。

「え!?! 書記?!? ちよっ!」

腕を伸ばし、ドアのノブを下に下げて、回した。  
音を立てて、ドアが開く音。

ドアを手前に引いた…。

「!?!」

「こんばんは、華さん」

驚きと…何故か少し期待の混じった…そんな目をして、立っていた  
華さんと目があった。

一瞬、キョロキョロと顔を動かしたくらいだから…大丈夫だろう。

「ちよっと待ってて」

そろそろ俺もイキそうだった。

それはまた、締め付け具合から、麻子もだろう。

素早くまた、麻子を抱き上げ…駆弁スタイルへ。

驚きもあるが、ドアが開かれている状態での事で、声が出せないの  
だろう。

麻子の背をドア側にして、外が見えない様に体をまわす…。

目で華さんに、入室する様に促した。

一歩下がり、華さんを入室させると…ゆつくりと重みで自動的にド  
アが閉まった。

ホテルのドアは、このタイプが多い。

音も無く閉まった瞬間…激しく腰を動かし始めた。

体がぶつかる音…。

「はっ!! あっっ!!! まっ!! んあ!!」

「廊下に響くね…麻子の声」



声を殺す事ができないのは、わかっていた。だから、チョットしたフェイクだったけど…。耳元で言った一言が、最後だろう。

恥辱が入り混じった顔が…もう…快樂に堕ちた。直ぐに…ビクンツビクンツと体を痙攣させた。

抱きしめていた体を…ゆっくりと降ろした。

さて…今度は俺の番だ。

ほぼ、イク直前だった為…後は軽く扱くだけで…。

…。

華さんの目が…それに釘付けになっていた。

さてと…どうしようか…。

考える様に目を逸らすと…というか、逸らした瞬間。

…それをすでに華さんが、啜っていた。

…どっただけですか。

後は…彼女の口内へ…吐き出すだけだった…。

見ている…。

すげえ…見ている。

そのまま自分の秘部を、恥も何もなく…乱暴にまさぐっていた。

「いけずです！ 隆史さんは、ひどい人です!!」

華さんに、んな事を言われてながら…。

今度は、また優花里を貪っていた。

…もはや、体に力は無く。

俺に突かれる度に、体を反応させていた。

はい。

華さんは、オアズケです。

「…華さん、勝手な事をしたので、今回はそこで見てるだけです」  
「うううう!!」

パンパンと肌の叩き合う音。

優花里は、そろそろ5回目の絶頂を迎えていた。

それを見て、恨みがましそうに睨んでくる華さん。

…さて…んじゃ。

「華」

ビクッ!

呼び捨てで、呼んだ所…体がなんか反応していた。

だから…。

「そこで見てる」

言い捨てる様に言ってやる。

普段ならこんな風には、絶対に言わない。

それを分かっているのもあるのか…なにか、特別扱いされている感もあるのか…。

はい。と一言…。

何故か嬉しそうに…。

その後何も言わなくなった。

ただ、俺がイク時…中には出さない様にしていたので…外に出そうとすると、必ず食いついてきた。

それぐらいはと思ったので…その体液の処理は華さんへと、一任した…。

そんなか…。

最終的に、俺の体液で一番汚れていたのは…華さんだった。

はい。

合計。

みほ…8回

優花里…5回

麻子……………7回

華さん……………0回

……………。

夜中の1時頃まで、それは続いた。

はつきり言う……………まだ。

タリナイ

……………。

風呂入ろ……………。

みほ達は、そのまま寝てしまい……………どうしようも無かった。

部屋備え付けの風呂へは、何故か華さんも一緒に入ると聞かなかった。

まあ匂いすごいしね……………一緒に入る意味はあるのかどうか知らないけど……………。

他の3人は、気絶してしまっている為にどうしようもなかった。

浴槽の端に、座っていると、華さんはその前に寄りかかってきた。

うん……………。

デカイ

その時は、たわいの無い話をしたが、なに気に女性と風呂へ入る事自体が、華さんが始めてだと言う……………彼女は非常に喜んだ。

なんで？

あ。でもアツサムさんと……………温泉で出くわしたし……………。

じゃあ二回目か。

まあうん……………喜んでるっぽいし黙っていよう……………。

「……………」

まだ頭がボーッとする。

全てが終わり……………結局華さんも、この部屋で寝ていくそうだ。

ひどく欲求不満で寝れそうにないと言っていたのに……………結構すぐに

寝たな…。

一度、酔っ払いの襲来を受けた。

みほ達がいる為に、バレない様に…廊下で話をしたが…何とかごまかせた。

俺が飲んでるのが、分かったのか…一瞬…凄まじい……なんとも言えない目で見られた…。

捕食者の眼だ…アレは…。

さて……参った。

その時に、カードキーを持たないで部屋を出てしまった。  
オートロックの為に締め出されてしまった…。

……。

いかん…人の事が言えなくなった…。

面倒くさいが、一度フロントへ行くしか…あ…。

エレベーター前で気がついた…。

部屋の中は、女の子が4人寝ている。

そんな…中……。

いらぬ誤解を生みそうだ。

下手したら事案発生になる…。

……。

すで押していたボタン。

その為に呼び出されたであろう、エレベーター…。  
開いた扉の中。

「隆史君!？」

沙織さんが…立っていた。

※ルート 壊※第14 話く長い一日が明けました  
！く 中編

「……」  
「……」

エレベーターの中で、無言が続く…。

沙織さんは、どうにも一人で部屋で、他のあんこうチームを待って  
いたようだった。

俺の部屋に行くと言って、優花里の様子を見に行く為と、部屋を出  
て行った…というか、俺の部屋に来たみほ。

そのみほも、帰らないと麻子が出て行き…続いて華さんも。

気が付けば、こんな時間まで一人きりで部屋にいた沙織さん。

まあ俺のせいだけでも、一人残して行ってやるなよ…。

5階の宿泊部屋…。

最後の一人になった沙織さんも、部屋のメモ用紙に書いてあった部  
屋番号を見て、様子を見に来た様だった。

俺はというと、カードキーを部屋に置き忘れて、自分の宿泊部屋か  
ら締め出されるといいう間抜けな状況。

取り敢えず、エレベーターに乗り込み…1階のフロントを目指す…  
はずだが…。

『 隆史君。 お話があります 』

沙織さんから、その様な事を言われてしまい…現在、誰もいないあ  
んこうチームの宿泊部屋へと向かっていた。

3階へと動くエレベーター…。

それこそ5分も掛からない移動時間が、ひどく長く感じた…。

電子音が鳴り、こんな時間だ…誰もいない廊下を、沙織さんが先行  
しながら歩いている。

特に手を引っ張られているとか…服を掴まれているという訳でも  
ないのだけど…なんだろう…この強制力は。

「ん…ん…ん…」

その宿泊部屋へ到着。  
オズオズと入室を勧められた。

…。

和室…。

布団が並ぶ室内…。

状況を確認しよう。

夜中、1時過ぎ。

布団が並んだ…誰もいない部屋に二人きり。

そして、その部屋へ女の子に招き入れられた。

お邪魔します…と、他にでるセリフもないので…その言葉で入室した。

「ど…どこか、適当に座ってください…」

「…はい」

何故か敬語ですね…。

適当にというが、ほぼ部屋は布団で敷き詰められている。

開いているスペースが、殆ど無い。

「ふむ…」

布団の上にも座るくらいしかな…。

しかし…主が現れなくとも、女の子が寝る布団だ。

はい、そうですかと座り込む訳にもいかなしいな。

少し布団を折り曲げて、強引に畳のスペースを作り、そこへ座る。

はい、正座で。

沙織さんは、その様子を面白そうなモノを見る様な目で、眺めていた。

な…なんででしょうか？

何か不自然でした？

「いや…なんとなく気持ちは分かるんだけど…隆史君。変な所、律儀だよねえ」

こんな時間なのに、特に眠そうにしている訳でも無く、ただ楽しそうにそんな事を言っていた。

「さて…と」

沙織さんも座った。

俺と同じく、正座で…畳の上に真正面で…。

「では、隆史君」

「はい、なんででしょうか？」

アルコール…しかも結構、強い物を飲んだというのに…特に呂律が回らなくなっている訳でも無し…。

変に頭がスツキリとしていた。

…エレベーター前で彼女に会った時に、驚いたからだろうか？

程よいシヨックが、良い方向へと…。

…

本当に良い方向だろうか？

まあいい…今は彼女の話だ。

なにを聞かれるかは、分かりきっているけど…な。

「……」

「……」

あ…あれ？

言い出せないのか、暫く無言が続いた…。

向かい合っているの、見つめ合っているみたいだけど…。

「あの…沙織さん？」

「はっ!!」

なんだろう…急に後ろを向いて、ブツブツと言っている…。

あ、こつちを向いた。

……。

あ、また後ろ向いちゃった…。

「ぐ…そうだよね…いくらなんでも…ね……」

顔を赤くして、何かを確認する様にしている眩きが聞こえる。

まあ、いいや。気長に待とう。

「かるく…そう、かるく…」

「……」

そろそろ、2時頃かなあ…。

んでもって、そろそろ何か言ってくれないかなあ…。

「…よしー」

あ、何か覚悟を決めたようだった。

「隆史君ー」

「はい？」

「そのお…みぽりん達、知らない!？」

やはりな。

当然と言えば当然か…まあうん。

「…俺の宿泊部屋で寝てます」

当然の疑問に、隠し立ても不可能なので、簡潔に正直にお答えした。

その俺からの答えに、顔を真っ赤にして固まった…。

「」

「さ…沙織さん？」

「」

「…あの……」

「はっ!! い…意識が……」

あーうん。飛んでいたね…数秒程。

「あーくくでも…でも…まあ、うん。寝てるだけだしね…うん」

「……」

「いや…華もそうだけど…みんな出て行ったきり、帰って来なかった

からね…」

「あー…ごめん」

「なんで、隆史君が謝るの？」

手をパタパタ振って、笑いながら…狼狽してる。

「ひどいなあ…私だけ置いて、みんなで遊んでったの？ それでその

まま……」

ああ…普通だ。

そうそう…これが普通。



普通の考えだ。

遊んでいた。

男の部屋…しかし、俺一人だから…とか、周りに数人いるから…。そんな状況で、変な事をしている訳がないと思っっているのか。

優花里の話だと…みほの、俺との関係の…ぶっ飛んだ結論を沙織さんも知っているはずだ。

だからの確認…。

そうだという、返事が欲しいのだろうな。

普通なら信じられる筈がない…が、多分華さんも沙織さんへ、何かを話しているニュアンスだったな…。

……。

「……はっ」

諦めにも似た…変な笑いがでる…。

まあ…バレているのに決まっているな。

「隆史君？」

「……沙織さん」

「な…なに？」

正座をしていた脚を崩し…胡座をかく。

「ごめんな、気を使わせて…」

「…大丈夫」

「多分、沙織さんが心配…いや、想像している事そのものだ」

「……え？」

ぶっちやける。

先行して白状する…。

察したのか何なのか…顔が赤くなり…青くなった。

まあ…うん。そうだよな。

「はっ…今回は、華さん意外…全員だ」

「……」

「みほの許しが、なんだってんだらうな…？ 結局…最終的には全員とだ」

「……え」

「ヤケになって酒まで飲んで…結局、収まりがつかない、抑えが効かない…で、そのまま…」

話した…。

それこそ淡々と…感情が湧き出なかった為に…ひどく棒読みな言葉が口からでる。

なにか頭が麻痺している感じがする。

酒のせいだとは思うが、何故か普通に今は喋れる。

そして喋っている内に…。

沙織さんの顔を見れなくなっていた。

なにか、懺悔でもしている気分だった。

畳を眺めていても仕方がないのにな…。

「今は全員、疲れきって寝ちゃってるってな、感じですね」

ふざける訳でもなく…素直に白状。

彼女の顔をもう一度見て、はつきりと言う…。

優花里からの告白から、華さん来襲まで。

流石に行為の内容までは、言わなかったけど…まあ…分かるだろ。

それを呆然と聞いていた。

初めは、驚いた顔。

次に、泣きそうな顔。

最後には、俯き…その顔すら見せなくなっていた。

「な？」

「な？…って…」

「…みほの気持ちは、何となく分かる。みんなの好意は嬉しい。ただそれを…結果的に利用している俺が最低だって事…」

まあ…みほの気持ちは分かっても…理解は結局できなかつたけどな。

ある意味で、俺の腹はもう決まっていた。

今更逃げられない…。

「……」

「……」

再度の静寂。

ただ俯く、沙織さん。

……。

携帯を取り出すと：そろそろ2時だ。

丑三つ時つてやつになるな

こうしていても仕方がないな……。

さて：本来の目的に戻るか。

無言で立ち上がる。

このままでは、ただの迷惑だ。

ここに長居もできない：ま、さっさと出て行くか。

「んじゃ、そういう事だから。もう、行くわ：だから沙織さん」

「……あ」

力がない目がこちらを見上げた。

心中がグツチャグチャになっているのだろう。

「：俺を嫌ってもらっても、構わない」

「!!」

最後に目が合つて：何かに気がついた様な顔をしていた……。

俺はどんな顔をしているのだろうか？

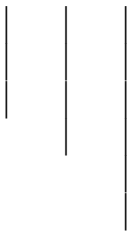
どちらにしろ：もう行こう。

……

最後：何か呼び止められた気がしたが：まあ気のせいだろう。

……。

そんな筈がないだろうから……。



1階フロントロビー。

暗いな…。

フロントにだけ明かりがついている。

売店も電気が消され、人氣が全くない。

昼間賑やかロビーも、真夜中はこんなもんか。

……。

当たり前だな…。

ここへ来て思い出したが、あんな状況の部屋へ、戻るわけにもいかない。

本人確認の為に、一度スタッフと一緒に室内へ入るかもしれない。

……。

備え付けのベンチへ座る。

もういい…ここにいますか。

その内…後、4、5時間もすれば、部屋の中の誰かが、起床して気づくかもしれないしな。

「……」

なんか…疲れた…。

決勝戦の時は、必死だったから…ある意味で余計な考えが、どこかへ飛んでいた。

それが終わり…日常へ戻ったらコレか…。

……。

痛い。

胃が痛い…。

比喩でもなんでもなく…。

「……」

やめだ。別の事を考えよう。

そう。

分かりやすく、これからの事を。

あの七三メガネの件は、多分まだ終わっちゃいない。

廃校の危険がまだ残っている事を、杏会長へ言った方が良いだろうか…。

でもそれは、肩の荷が漸く降りた…そんな安心した顔を、潰す事にならないか？

「……………」

そんな事をするくらいなら…俺一人でも…。

考えだしてどのくらい経っただろう。

別の事を考えようとしても、先程までの行為が邪魔をする。

多分…これから、彼女達に対しては、もう俺は躊躇しないだろう。

どこか、諦めにでも思える感情がある。

求められれば、応えるだろう…。

それこそ…。

「……………」

「……………」

「……………」

「…隆史君」

「……………何？」

項垂れて前屈みになっていた、俺の浴衣裾を沙織さんが引つ張っていた。

なんでいるんだろう…なんで来たんだろう…。

いつの間にか隣に座っていた沙織さんを…見もしないで…俺の視界は、地面を見ていた。

「…まだ、お話終わってない…」

「……………」

「…まだ……………」

「…分かった。」

「……………」

なんでもいい…。

夜の海…。

はっ…夜中とはいえ、ロビー…。  
いつ人が来てもおかしくない。

だからだろうか？、ホテルの裏手の海岸へと連れてこられた。

こんな夜更けに…女子高生引つ張り出して、何やってんだらうな？

いや…引つ張り出されたか。

もはや真つ暗だった。

ホテルの建物を見上げれば、いくつかまだ部屋の光が見える。

それくらい。

あとは、地平線の彼方…船だらうな。

いくつかの丸い光が見える程度。

ホテル備え付けのプール…。

鉄格子と呼ばれそうな柵に腰をつけて、体重を任せる。

今更だけど、素直に部屋へ行つていれば良かったか？

女の子の就寝部屋だけ…：人気がないとはいえ、多分こんな所で話  
す事…ではないだらうし…。

まあいいや。

みほの事だらうし、危うい話だと思つたら戻ろう。

「あ…あのね、隆史君」

寄りかかっている俺の向かいで、体を縮こまらせて小さくなつてい  
る。

胸の前で手を組み合わせて…：なにか喋るのを躊躇している…：みた  
いに感じる。

「……」

「……なに？」

中々喋り出さない。

やはり、躊躇をしている様だった。

ただ無言を貫いている。

時たま声には出すが、すぐにやめてしまう。

……。

気長に待とう…。

どうせやる事もない。

この話とやらが終わったら、ロビーに戻って朝を待つだけだ。

……。

彼女自身も、この状況を良しとしないと思っているのだろう。

なにか言わないといけなそう思っているのか…：気を使われているだけなのか…。

踏ん切りがつかない。

？

勢いよく顔を彼女は上げた。

俺と目が会った瞬間、なにか…：酷く悲しそうな顔をした。

「……」

「わ…：私はっ！」

それを切っ掛けにしたのか…：漸く声を上げた。

「私は！ 嫌わないよ!?!」

「……」

…：は？

「い…：今はどこか、皆おかしくなってるだけ…：うんっ！ そう！」

…：なにを言っているのだろうか？

部屋を出る時に言ったことの返答か？

嫌わない？ なんで？

おかしくなってる？ 当たり前だろ…。

「み…みぽりんだって…男性とお付き合いするのは、初めてだろうし…よく分かってないだけだと思うの！」

その付き合っている男が、ただのクズ野郎なんですけど？

「分かる、分からないの問題じゃないだろ？ ガキでも分かるモラルの問題だ。自分で何言ってるのか、分かっているのか？」

少し強めの言い方になってしまった。

変に苛立ちを感じる…。

「そ…そうだけど！ でも！ みぽりんも話せば分かるはずだよ！」

「分からねえはず、ないだろ。分かっているの…コレだろうが」

「…そ…そうかもしれないけど」

「かもじゃない。そうなんだよ。それしか考えられないだろうが」

感情的になり始めている。

完全に苛立ってるな…。

沙織さんにこんな言い方…今までした事はなかった。

それに驚いたのか…なんなのか。

すぐに意気消沈してしまった。

「みほは、肉体関係はよし。キスだけは浮気だと言っているんだぞ？

沙織さんも、直接みほの口から、聞いたんだろ？」

「…うん」

「華さん始め、その流れに乗っかって複数と肉体関係持ちまったんだぞ？ 俺は」

「…でも」

「でも？ でも、なんだよ」

「ちや…ちやんとすれば…意識して直そうとすれば…また…」

「……」

「前みたいな…関係に戻れるよ…」

「……」

…はっ……。



その関係を壊した本人へ、それを言うか？

戻れる？ 戻れると思っっているのか？

本気で思ってるのか？

そもそも、同じくして壊れた…俺にそれを言うか？

……。

「…沙織さん」

「う…うん」

突き放す様に、言い放つ。

「無理だ」

戻る訳がない。

やらなくなったとしても、やってしまったという過去は残る。

結果…どこかで絶対に無理がくる。

「修復なんてできやしない。そんな風にしたのが俺だ」

「…」

状況が状況…。

本来なら、俺がさっさとどこかへ消えれば良いだけの話だけど…。

大洗学園の廃校が、完全に消えた訳ではないと確信している以上、

俺だけどこかへ転校なんてできやしない。

何より…今、そんな事をすれば…みほが、更におかしくなりそうだ。

逃げられない。

自分で自分の首を絞めている状況。

「…そんな男に…そんな俺のどこに、好感が持てる？」

「…！」

だから嫌ってくれ。

軽蔑してくれ。

—それで構わない。

…？

なんだ？

一瞬目を見開いたかと思っただけ…睨みつけるような目になった。  
睨んだ…。

ああ…うん。それでいい。

「も…持てるよ!!」

「……」

手を拳に変えて、今度は何かを訴える様な顔をした。

「…はっ。優しいな、沙織さんは。でもな…それは……」

「だ…だって、私!!」

「私、隆史君の事が好きだったもん!!」

「……」

は？

今までの流れをぶった切で、真反対の事を言ってきた。

一瞬、言ってしまった…といった焦った顔をしたが、勢いがついたので…。

それはもう、マシンガンの様に喋りだした。

本日2回目の告白…。

呆然とした俺に向かい…ただ、一方的に。

生徒会室から始まって…納涼祭…。

まああの事件の事だろう。

それが切っ掛けだったと…。

ただ、覚えているのはソコまでだった。

違う…理解できたのが、そこまで…。

否定してくれた。

気遣ってくれた。

嫌いになればいいと言った俺を、またそこが俺の優しい所だと…そんな事を言っていた。

…申し訳がない。

本当に何も理解ができなかった。

みほに気を使い、俺に何も言えなかった事。

昨日、華さんが皆の前で宣言した事…。

記憶としては、断片的にしか覚えていない。

そんな俺の、好きな所を言ってくれる。

俺が自分に否定的な所を、否定してくれる。

―が。

何を言われても、それを否定をし、遠ざける。

彼女は想いの丈をぶつけてきてくれた。

普通ならば、焦っていたかもしれない。

年甲斐もなく、照れて硬直していたかもしれない。

―が。

分からない。

痛い。

初めてだ。

痛い痛い。

本当に分からない。

痛い痛い痛い。

なぜ人の好意を…こんなに痛く感じるのだろう。

痛みしか感じなかった。

「…だ…だから！ 隆史君！」

「……」

「た…隆史君？」

「…分かった」

「……え？」

考えてみれば、今のこの状況。

…俺を好きだと言ってくれた彼女を…完全に孤立させてしまうの

ではないか？

あんこうチームで、残ったのは彼女だけ…。

上手く思考が纏まらなくなってきた。

先程までの感情とは、別の感情が湧いたのが分かる。

その場に勢いに流され、後に後悔する。

みんな壊れていく…。

「え…あの？」

「華さんも…麻子も……優花里も……」

「…隆史…君？」

鉄格子から体を離し…一歩彼女に近づく。

もう一歩近づくと、彼女が一歩離れた。

少し怯えている。

「彼女達も、俺を好きだと言ってくれた…」

「…あ」

「だけど…俺には、それが理解できない」

「そっ！ それは!!」

何かを言いかけていた。

また…俺を庇ってくれるつもりだったのか…。

「それは！ 華達もっお!!」

一歩でた彼女の腕を掴み…。

力任せに抱き寄せた。

「たっ!? 隆史君!?!」

こんな状況だというのに、赤面でもしているのだろうか。

抱きしめた彼女が、普段よりも体が小さく感じる。

「みほの許しがあったから」

今度は俺が喋る番だった。

たくさん言ってくれた、彼女の言葉は理解ができなかったが…。

俺の事を思ってた言ってくれた事は、単純に嬉しかった…と、思う。

「あったからこそ、せめて…そんな彼女達に伝えようとして…この状  
況……」

抱きしめられて、小さくなっている沙織さん。

変な呻き声が、腕の中から聞こえてきた。

そのまま彼女を抱き上げ…ホテルの建物の間…。

空調が置かれたスペースへと、連れて行く。

「え!?! え!?!」

建物同士の狭いスペース。

そこへ彼女を連れ込んだらすぐ抱き上げていた彼女を下ろす。

ただでさえ、夜で暗いというのに、こんな建物の隅…更に暗い。

「沙織さん」

「…:…:っ!?! え!?! 何!?! なに!?!」

男慣れしていないのが、丸分かりになるほどの狼狽ぶり。

直接のふれあい。

抱き上げるとかは、一度していたが…今回は意味が違う。

それに会話の流れからしての、俺が取る行動に混乱している。

そんな彼女を見て…別の笑みが溢れた。

「…:俺は君の想いには、みほがいるから…:応えられない。」

「…:…:」

はつきりと言った。

頭の中がグツチャグチャで上手く考えられないのもあるが、これだけは初めに言っておこうと思った。

俺自身、驚く程はつきりと言葉にした答えに、驚いたのか顔を上げた。

その顔は「分かっている」…そんな諦めた笑顔をしていた。

「今のこの状況…:全部分かかっていて…:それでも好きだと言ってくれた

…:…:」

独り言の様に呟く。

ブツブツと…:言い訳がましく。

自分に言い聞かせる様に…:

「隆史君?」

「そんな君だから、本気で応えようと思う…:」

「え?」

変に間の抜けた声で返事を返された。  
応えられないから、応えようと思う…。

よく分からない言葉。

告白された時に、少し思った。

思ってしまった。

なぜだろうか、それに素直に従う気になったのは…。

ブレーキが効かない。

先程までは、グジグジと後悔しかしていなかったのに。

不思議とスツキリとした…。

開き直ったのか、なんなのか分からないが。

なんで思ったんだろうか。

彼女の告白を受けて、頭の片隅に…浮かんだ事に気がついたから。

彼女も抱けるだろう…と。

ソウダナ。

みんな一緒にしてしまえば、元の関係に戻るだろう。

あの5人で一緒にいれるだろう。

大分歪んだ形で、戻ってしまうが…。

ソレハ ソレ ダ

沙織さんも、俺を好きだと言ってくれたのなら…

オナジヨウニ コワシテ シテシマオウ

「……」

見つめる。

俺の腕の中で、混乱している彼女の顔に顔を向けた。

見つめ合う…暗い建物の中で。

「みほからすれば…キスは浮気らしい」

「え……むぐっ!？」

体を落とし…そのまま唇を重ねた。

ただ…。

彼女に対しては、流されるのではなく、俺から…。

納涼祭の事もある…。

乱暴はしない。

だから…誠意を持って…。

コ  
ワ  
ソ  
ウ

◇

震えている。

肩に力が入っているのが分かる。

薄目を開けて見て見ると…。

目を見開いていた。

「……」

すぐに顔を離した。

「っ!?!」

暗くても分かるくらいに、顔が上気していた。

触れば多分、とてつもなく熱くなっているだろうな。

「え!?! な…なっ!?!」

彼女の両手が、俺の体に触れていないので、多分…あ。

やはり指がつるんじゃないかと、思うくらいに思いつき開いてい

る。

もう一度…。

ただ、唇を重ねるだけ…。

近づく俺の顔に、沙織さんは…逃げない。

ただ…そのまま受け入れた。

…痛い。

何かが痛い。

唇で、唇を挟むように…少し動かす。

下唇を噛むように挟み…そのまままた離す…。

それを至近距離で、何度か繰り返した。

性行為とは、また違う…ちやんとした…。

「ん…」

何度か繰り返す内に、沙織さんは目を閉じていた。

…完全に俺を、受け入れていた…。

小休止とばかりに、少し体を離すと、そこで我に返ったのか…急に慌てた。

「たっ！ たか!？」

「…嫌だったでしようか？」

いつもの様に、少しふざけた言い方。

「いつ！ …いや…じゃ……ないけど……私……その……初めて…」

横を向いて、消えそうな声で答えましたね。

「けっ…けど！ …これ完全に浮気!!」

「そうだな。…みほにとっても浮気だな」

「う…」

みほにとっても、浮気ね……そうだな。

他の女性と関係を持っていて、今更何が…。

「後……なんで急に、いつもみたいに戻ったの？」

「いつも？」

「…その…隆史君の雰囲気……さつきまでは、ちよつと……怖かったのに…」



「ああ…なるほど。ある意味で、吹っ切れたからかな？」

「吹っ切れた…？」

ある意味で、迷いがなくなったから。

「俺はね、沙織さん」

「え？」

「…沙織さんが、欲しくなった」

「!?」

おー…驚く程、赤くなつたな。

沙織さんの行動原理というか、性格からして、人間関係とやりに刺激を求める。

事、恋愛に置いては特に。

この所、みほに対して負い目を感じるのか何なのか…。

自分が当事者になって、大分大人しくなっていたからなあ。

前は、兎に角恋愛関係に結びつけてたし。

もう一度、強めで抱きしめると、硬直する体を無視して、もう一度唇を重ねた。

今度は…。

「うん!？」

舌を入れた。

ただ入れただけではなく、彼女の舌を弄る。

根元から全体的に絡ませ、刺激する。

「あ…はっ……」

ヌルツとした感触を感じる…いや、感じさせる。

段々と水っぽい音も混じり出してきた。

「…は……あ……」

舌を抜き出すと…彼女の顔が変わっていた。

女の顔。

子供…いや、高校生なら中間か。

ならこんなキスの意味はわかるだろう。

性的なキス。

抱きしめていた腕を離し、腰に手を回す。

逃げる気なら逃げれる体勢。

腰を抱き寄せ、今度は彼女の舌を吸う。

自身の口へ招き入れると、伸ばされた彼女の舌を、全体的に絡み舐める。

ニチャニチャとした音を、わざと出しながら…。

もう一度抱きしめると、彼女の首元に頭をいれ、首元へ口を這わせる。

手は彼女の脚の付け根へ…お尻との中間を掴む。

ここへ来て、初めて抵抗の意思を見せた。

俺の手を押しやる様に、腕の付け根を押さえた。

「だ…だめ……」

力がない声と、押さえる手。

ソウダナ。

「み…みぽりん…悪いし…裏切り……」

「…もう浮気、しちやっただんですけど？」

「!!」

キスだけはダメだと、彼女も知っていただろうに。

これは、沙織さんの好意に漬け込んだような、卑怯な手。

ま…もう、今更だけどな。

順序が逆。

すでにタブーを侵している。

ま、普通の人ならキスの時点で浮気確定なんだけどな。

やはりどこか、沙織さんも麻痺していた。

…今の取り巻く関係が、常軌を逸しているからな。

「沙織さん…キスした時点で、逃げなかつたんだから、もう遅い」  
流された自覚があるのか、少し体が硬直した。

罪悪感からなのか、目を見開いた。

「それに、ここまで…浮気までしたいと思ったのは…」

「!？」

そう、なんだかんだ…キスまでしたのは、沙織さんだけ。

その事実を、首元から耳元に顔を移動させ…囁く。

そのまま後ろに周り、後ろから抱きしめる。  
さて。

彼女の顎を、指で添えて引き上げる。

意味が分かったのか、目が俺の顔を見上げた。

そのまま…もう一度唇を奪うと…逃げない…。

すぐに顔を離すと…目がまたあつた。

「しよ…正直に言っただいいい？」

「なに？」

目を逸らして…なにか懺悔するかのように…呟きだした。

先程の俺の様に…自分に言い訳をする様に…。

「私…みぼりんが、羨ましかつた…」

「…うん？」

羨ましい…？

「わかってるの…私の方が全部、後からだし…」

「後？」

「隆史君と付き合いだして…応援していたから、私も嬉しかった…け

ど、やっぱり複雑で…」

…ああ…ああ…俺の事か…。

「……」

あ、はい。

すいません。鈍感でしたね。

現実に戻されるような、ジト目はやめて下さい。

「…はあ…ま。隆史君そんなだし…気付いたら、周り凄い事に

なってるし…」

「……」

「今日、部屋でみぼりんと華から…話聞いて…」

ああ…なんか個別で、二人に呼ばれたって言っていたな。

「みぼりんには、バレてた…それでも良いって言われた…。正直、関係

を持つ事に…その…言い切る、みぼりんが…怖かった」

「……」

「華には…すっごく直球で、誘われた…」

「さ……そ……」

「何かの冗談かと思った……。絶句しちゃったよ……」

そうだ……。華さんもおかしい。

完全にノンブレーキだ。

……壊れ方が尋常じゃない。

さつきもそうだ。

抱かなかつたら、ズルいとか言われたし……。

「でもどこかで、その……考えちゃった私もいたの……」

「……」

「みぼりんと華……二人の話を聞いてるうちに……その……」

……。

……伝染していた。

みほ本人の話だけじゃない。

華さんもいたという事で、沙織さんも毒されていた。

ただ……思うだけで留まるのが普通だ。

良心で留めていたのだろう。

ある意味で、唯一の常識人だしな……沙織さん。

が、今ここで、俺がその最後の良心を壊している。

その告白を遮り、また唇を塞ぐ。

舌を少し入れると、今度は彼女自身から舌を出してきた。

先程まで、今の関係をどうにかしようとして、俺を……みほ達を説得しよ

うとしていた手前、何も言えないのか……。

ただ無言で、舌を合わせている。

空気に流されているな。

まあ……流させたのは俺だけだな……。

さて。

浴衣の隙間に手を添える。

指を入れ、前に押し出すとシュツとした音と共に、少し浴衣の前が

緩んだ。

「ふむっ!？」

焦ったような声が、目の前からした。

ま…そうだね。

外だしね、ここ。

「ちよつ!? たかつ!! んんう!!」

余計な事を言わせまいと、片方の手で顎を軽く掴み、また口を口塞ぐ。

少し緩んだ浴衣。

そこの手を入れると…うん…なんだ…。

デカイ。

ああ、もう谷間なんだと気づかされる様な感触。

「んん!？」

そのまま、躊躇なく手を差し入れ…弄る様に下へ…。

連動して開かれていく浴衣…。

グツと、腕を下に引くと…完全に片方だけ開かれ、片方の胸が飛び出した。

手の感触でわかったのだけど…ノーブラでしたね。

寝る前だったからかね。

華さん達も、そうだったなあ…。

……うん。

ここまですると…もう変な痛みは感じなくなっていた。

「ちよつ! ちよつと待つて!! 隆史君! 流石にツ!!!」

小声で叫ぶ…器用な真似するなあ…。

前屈みになり、腕を胸を隠すようにクロスさせて、しやがんでしまった。

顔だけ上げて、こちらを向いた。

「大丈夫。ここ、暗いし…こんな時間だし…。」

「で…でも…外っ! それに…私、初めて…。」

……。

もうすでに、承諾した様な事を言っている。

まあ、胸を軽くだけど、弄る時も抵抗はなかった。

…やはり毒されてたな。

彼女もまた、ある意味でおかしくなっていたのか？

ま…これで分かるかな。

「今すぐ、沙織さんが欲しくて、仕方ないんだけど…」

「ふっ!？」

散々、自分を責めて…後悔を吐露して俺が。

今は、それを進んでしている。

この変わり様に、疑問も持たなくなっているな。

俺も…沙織さんも…。

「流石に…初めてを…外って…」

しゃがんでいる彼女の目の前に…自分の浴衣を左右に開く。

言葉を遮って…すでに大きくなっていたアレを取り出した。

ポロンツて!!

「うふ!？」

変な声を上げて、少し上…それこそ目の前に出てきたそれを…。

凝視してますね…。

あ、そうか。

彼女の所持されている雑誌で、皆さん変な知識を中途半端にお持ちでしたね。

こんな外…先行してソレを取り出したのだ。

なら…まあ分かるだろ。

「…お願いします」

根元を持って、彼女の口先まで陰茎を誘導する。

また変な声を彼女が上げたけど…目は完全にソレに釘付けになっ

ていた。

どうするか分かるだろうけど…踏ん切りがつかないのか…口を開けたり、閉じたり…。

鯉みたいに、顔を赤くしてパクパクし始めた。

まあ、始めてしまえば…後の流れは想像が付くだろうな。

コの字になっている、今のこの建物同士の間…。

その一番奥にいるし、この暗さだ。

本当に通りからは見えない。

それは、彼女も分かっているだろうし…ソロソロかな？

ここで、陰茎の先を彼女につければ、多分舐め始めてくれるだろうが…それじゃダメだ。

彼女からさせないと…この後の事ができない。  
さて…後どのくらい……。

「…っ」

舌先が当たった。

まだ躊躇をしているみたいだけど…。

次にキスをする様に、唇を合わせてきた…。

唇で噛むように…先を愛撫し始めてくれた。

…不意の感覚に声が出そうになる…。

暫く眺めていると…ゆっくりと龟头が、彼女の体温に包まれた。

…舌の上を移動しているという、感覚が分かる。

ヌルツと…。

ここまで来れば、後はいいだろう。

彼女の頭に手を置き、軽く前後させる。

またヌルツとした感覚が走る。

ま、始めてだろうし…まだ躊躇が見られるからか…ぎこちない。

「っ…っ…っ…っ…っ…っ…っ…っ」

舐める音が聞こえる。

段々と集中し始めたのか、前後する速さが上がってきた。

「ちゅっ…っ…っ…ちゅっ…っ…っ…ちゅっ…っ…っ…」

何ていうのだろうか…。

性技としての気持ちよさは、正直あまりない。

…が。

この状況が、俺の興奮を加速させていった。

まあ…いい。

多分…彼女は、知識はあるのだろう。

経験はこれから、積んでもらえばいい。

……。

はっ…経験ね…。

簡単にその言葉が出たってことは…。

「つつ?」

あ…危ない…本気で声を出してしまいそうだった…。  
すごい感覚が…。

彼女は尿道口に舌先を入れていた。

そこまたグリグリと、ほじる様に…。

つつ!!

「さ…沙織さん?」

「…れア?」

上目でこちらを見てくれ…た…。

すごい絵になっている…。

すごい絵になっている!!

舌を伸ばして、亀頭の先を突き…上目遣い…。

エツツツロ!!

おかげで、こちらも本気でエンジンが掛かってきた!!

「んっ!! んっ! んっ!!」

音をたてる…事はしないが、唇でしごく様に…強く動き始めた。  
動く際に、彼女の口から声が漏れる…。

「んっんっんっ!!」

亀頭からカカリに掛けて…その区間を今度は素早く動き始めた。

いれる度に、舌を突き出し…全体を使って亀頭を包み込むように…  
亀頭に小気味良く舌の感触と…つつ!!

「ちよっ!! ちよつと待って!」

腰を引き…少し離れた…。

なんだ…急に…。

「…その…あんまり気持ちよくなかった?」

不安気な顔…いや、そうじゃなくて…。



吹っ切れるの早くない!?

「いや…気持ちよかったですけど…なんでしょうか？ 今の技は…」

そう、技だ。

最後の絶対に、テクニックと言われる様なものだ！

「あ……」

目を逸らして真っ赤になった。

取り敢えず、中腰じゃ辛かろうと…手を引いて立ち上がらせました…。

「そ…その…雑誌に書いてあって……」

だからその雑誌なんなの!?

女性誌って、怖いよ!?

そしてその雑誌を、結局あんこうチーム全員が読んでるって!!

「み…未来の旦那様について……その……」

まさか…

「お…おもちやで、何度か練習した事……が……」

沙織さん!!

多分!! いきなりあのテクニックは、未来の旦那様が引く!!

というか、おもちや持つてるの告白してる!!

「…その雑誌を、みほ達も読んでいたのか…」

「え…みほりん達？ 読んでないよ？」

……

え？

「みほりん達には…その……刺激が強すぎだと思って…」

「……」

え……？

そういえば、外でするのも、恥ずかしがってただけで……

流石に初めては…って……

その行為自体には否定的ではなくって…

「え？ ああ…うん。世の中にはそういう男の人も、沢山いるって書いてあったから大丈夫」

声に出てたああ!! って!? 大丈夫!?

え!?

……。

待て。

みほ達には?

って事は、他の更に刺激が強いと言われる、雑誌を読んでいるって事?

……。

か…考えるのは後にしよう…。

「……………」

※ルート 壊※第14 話く長い一日が明けました  
！く 後編

月明かりというものは、結構明るく感じるものだな…と実感する。  
建物の間：それこそ、室外機が置かれて影になり、更に暗いと感じ  
る中でも、沙織さんの顔がハッキリと分かった。

俺の陰茎とセツトなっているその顔を見下ろす…というか、なんて  
言った!?

いや：野外とか：露出とか：そういった性癖の持ち主かと思われ  
たのか…。

その、みほ達にも見せていない過激な本を朗読した彼女は、そんな  
俺でも大丈夫だと言った。

：言い切った。

そんな性癖はないですよ？

ええ、少ししかありませんよ？

：うん。ナイナイ。

「つ…続けるね？」

黙って見下ろす俺が、続きを待っているのかと思ったのか…もう一  
度、口を開けた。

……。

「いや…もういい」

彼女の手を取り、立ってくれと、その手を軽く引っ張りあげた。

うん…。

その行動に少し、不安な表情を彼女は浮かべた。

「あ…あの、隆史くっ!」

あまりに自然にアレを、口でしてくれたので、疑問に思わなかった  
が…彼女は初めてだと言っていた。

彼女なりにスイッチは入ったのだろうが、恐怖感はあるのだろう。  
軽く肩が震えていたのが、分かった。

「つむ…!」

だから抱きしめた…そして、そのまま口を塞ぐ。  
余計な事は、言わない。

余計な事も、言わせない。

俺自身、彼女も抱くと決めた以上、全力で…。

「うん…：チュ…：…」

舌を入れれば、それに応えてくれる。

舌を動かせば、それに合わせてくれる。

「……」

今はただ、抱き合ったまま…夢中になって口を貪り合う。

波の音しか聞こえない…そんな中で、ただ舌を絡ませ合う、唾液の音が響く。

「あ…：はあ…：んっ…：」

どのくらいだっただろう。

気が付けば、彼女は俺の首に腕を回し、自分から舌を貪っていた。

舌の疲れ始めたと感じるまで、気が付かない程…長い間…。

うん…。

口を離すと、彼女の顔が見える。

「あ…：…：はっ…：…：はっ…：…：」

唾液にまみれ、濡れた口を開け…小さく興奮したと思える、呼吸を繰り返している。

…目が…完全に惚けている。

その目は俺しか見ていない…。

もう一度。

口をもう一度重ねる…。

が、今度はそれだけではなく、彼女の体を弄る。

手で摩るように、全身を。

肩から腕へ、胸へ…腰へ…脚へと…。

掌が移動する度に彼女の口から、暑い息が出る。

摩る手で、次に尻を掴む。

そのまま、マッサージをするかの様に、その柔らかい感触を楽しむ。  
口は、首に移動し、首筋に舌を這わせる…。

「んっ…あ…はっ…」

舌先が移動する度に…彼女から甘い声が聞こえてきた。さして。

浴衣の下半身を左右に開くと…少し体が強ばったが、気にせず浴衣を捲るように手を差し込んだ。

そのまま、摩るように後ろへと回していくと…布の感触…。

親指を上部に差し込むと…そのままゆっくりと下げて行く。

…抵抗する意思は感じられない。

…。

うん。

「…沙織さん」

「っ…はっ…はあ…はあ…」

「沙織さん？」

「あ…なあ…にいつ？」

…完全に惚けている。

その声を聞いているだけで、興奮するな。

こりゃ、何言ってもダメそうだ…。

即座にしゃがみこむと、中途半端に下げられた下着が見える。

もう一度、邪魔だと言わんばかりに、浴衣の左右を開くと…そのまま

ま両手で、下着を下ろす作業を再開します。

うん…ゆっくりと…。

それに対して、沙織さんは一切の抵抗を見せない。

彼女の手は、今なぜか俺の頭の上に添えている。

…ぬたあ…と、糸を引きながら…愛液が、下げられて行く布の後

を着いてきた。

少しだけ差し込んだ月明かりが、その糸をテラテラと照らしている。

「…」

腕がされてた下着は、太ももで付近で止まった。

…というか止めた。

…なんだろう…すげえ…エロい事になってますね…。

見上げてみると、すごい期待された目をして、俺を見下ろしている。  
恥辱…とも違うのだけど、この特殊な状況にも興奮しているのか…。

「……」  
舌で舐めてやろうとしても、身長差があつて難しい…というか、これ愛撫必要なくね？  
さて…。

その閉じられた秘部を…指で少し触れる。  
グチュツと音がすると思える程、すぐに分かった。  
濡れ方がすげえ。

初めてだし…その、痛いと思うので、少しずつ指を侵入させて見た。  
浅い所を少し前後に動かすと…。

「っん!!…んっ!!…あっ!!」

…その…押し込められていたと思われる愛液が、甘い声と共に一気に垂れ出てくる…。

そのまま、太ももの内側を伝って…。

「……」

…俺の行為を完全に受け入れている。

…あまりの抵抗の無さ…そして、順応速度…そして…このエロさに…。

はい、冷静になりました。

ちよつと、おかしくなりそうな頭を、正気に戻す程の妖艶さを放っていますよ。

あの…3、4回かき混ぜただけなんですけど…手が…ビツチャリに…。

うん…やっぱ、愛撫必要ねえわコレ…。

いやね…。

好きだと言った相手に…こういう行為をされて、興奮する…てのは分かるんです。

ですけどね…部屋で話したり…みほの行為に対しての話もそうだけど…え？

なにこれ。

「……」

「沙織さん……そろそろ……」

「……」

あ…壁に手をつけた…。

腰をこちらに向け…後ろを向いた…。

いや、やって欲しい事だったけどさ…えっと、

本当はもつと、彼女の胸を眺めたり…弄んだりしたいのだけど…先にちよつと確認しておこう。

腰を手で軽く掴み…引かせる。お尻をこつちに突き出す格好に…。

それにまた、あつさりと素直に従ってくれる。

浴衣を捲くり…下半身を顕にする。

内股になって、こちらにお尻を突き出した姿。

一瞬、エロいなあ…と全身を見ると…その視界に、少しこちらを振り向いている、彼女の顔が見えた。

……。

目の奥に怪しい光を感じる…。

月明かりが、その目を怪しく反射している…。

「…」

脚を開いて…というと、素直にまた開く…。

……。

確信した…。

彼女は、華さんに誘われて考えたと言っていた…。

本当に考えたのだろうか…。

考えた末…彼女は多分。

…それに乗った…。

今の、期待と興奮が入り混じった様な目を見て…本気でそう思った…。

乗ってしまったのだろうか、本当に良いのかと良心が邪魔をする。

俺と同じ、後は良心との戦い。

その戦いは：俺が誘った事で、良心が木っ端微塵に吹き飛んだのだらう…。

……。

亀頭を秘部の入口に添えると、先からヌルつとした感触。

彼女の背筋がゾクゾクツツと、震えた。

……。

今までの会話は、一体なんだっただらう…。

俺の葛藤は…。

グチツと、少し押し入れる。

「んっ…はっ…」

…。

麻子の時もそうだが、もう最後の確認はしない。

もう…どうでもいい。

「んっっ!!」

ゆっくりとソレを押し…押し入れ…。

「……」

押し返される感触を無視し、強引に彼女をこじ開ける。

あ…あれ？

擦れる気持ちのいい感触とか…ま、それは置いておいて…。

いや…それなりに締め付けられるし、慣れていないなあ…つてのは分かるんですけど…。

「沙織さん…初めてじゃない？」

多分、聞いちゃいけない事だと思うけど…聞かずにはいられなかった。

この感触は…多分…。

「は…初めてだよ!! その…んっ！ その…前に…自分の指で、して…」

ああ…麻子と一緒に…。



「…その後も何度かしてたし…。ただ、おもちゃが初めてじゃ嫌だったから…流石に最後までは…。」

あの…そこまで聞いてませんけど…。

……。

うん…。

なら、遠慮はいらないな。

多分…。

――  
――  
――

夜、夜中…。

波の音とは別に。

「あつー… あつー！ んうう!!」

声を殺しているのだろう。

小さな喘ぎ声が響く…。

素直に俺を受け入れた沙織さんが、目の前でヨガツテイル。

すでに浴衣は、乱れ…腕にかかっているだけ。

正面から見れば、彼女の豊かな胸が露出されているだろう。

が！ 見れない!!

「んっ…た…隆史君」

「…なんでしよう？」

「こつ…こつこ、本当に見えない？」

見えない？ ああ…。

「一番、奥ですし…室外機の影になって見えませんよ。真っ暗ですしね」

というか…ここつてひよつとして、カップルとか良く来るんじゃないのだろうか？

目が慣れてきたら分かった。

開封されたゴムの袋とか…その、いくつか捨てられている。

「じゃ…じゃあ…うん。隆史君の好きに…その…していいよ？」  
「…え…」

「痛く無くなったし…その…遠慮してるよ…ね？」  
…。

やっぱり痛かったのだろう。

声を殺していたので、良く分からなかったけど…ま、一応ゆっくりと動いていた。

血も特に出ていないみたいだし…そうですか。

「…分かりました」

「う…うん、遠慮…しなっつ?!」

一気に奥に押し入れた。

「かつ…はっ…」

うん、最初だけで、全部入れていなかったからね…流石に。

浅い所を前後していただけ。

だから…。

「ああああ!!」

「…声は聞こえますよ？」

奥をゴリゴリと、亀頭で擦りつける。

秘部から溢れる愛液で、プチュプチュと…下から聞こえてきた。

…うくん。

「んっ!…はあ…はあ…」

「…」

「やっぱり…ちよつとまだ…苦う…しい…かな…」

普段なら、ここで少しいぢめたくなるのが、俺の性分…なのだけど…。

流石に…初めてでじゃあ…なあ…。

「もう少し、ゆっくり動きましようか？」

「いい…このままで…だって隆史君…」

…?

「納涼祭での事…まだ気にしてるでしょ？」

「……………」

「そういう事されそうにいい…あ…なって…私に…遠慮して…変に話題まで…」

「そ…そりゃ、気にしない訳が無いでしょう?」

「…うん。でも…それが嫌…」

嫌って…。

「腫れ物に…触れるみたいな扱いは…嫌…」

「……」

暗い…月明かりしか無いようなこの場所。

大きく息を繰り返している彼女の背中が、上下している。

少し頭を起こし、こちらを振り組む彼女と目があった…。

「……っ!」

まだ気を使われてた。

「ここまでして…こんな事までしているのに…。

「だから…あああっ!?!」

勢いよく腰を打ち付けた。

彼女との肉のぶつかる音が響く…。

「はっ!…はっ!…はう!!」

もういい…分かった。

遠慮しない…。

もう会話はしなかった。

行動で察してくれたのか…沙織さん自身も行為に集中し始めた。

響く…押し殺した、甘い声が。

「んっ!…んっ!…んっ!」

…暫く…ただそれに集中した。

グチャグチャした粘液をかき回す音が聞こえてきた。

…。

ん…。

壁に手をつき、足がガクガクと震えている始めた彼女を見て…そろそろ限界かと思える。

…この場所での行為が。

そう、ここは集中しきれない。

夜中だが、人が100%来ないとは言いつれない場所だ。それに慣れていない所か、初めての彼女には…流石にな…。段々と、声も漏れ出している様な状況だし…。

「あつ！ あん!! あつ!!」

…ま。

機会があれば、次回にしよう…。さて。

何回か動かした所で、イチモツを引き抜く。

ニチャツとした音…。

「あ…ん…ん…は…あ…あ…」

彼女の愛液にまみれた陰莖が、ドロドロになっているのが分かる。血はやはりついていない。

…。

改めて見ると…やはりすごいな…。

お尻をこちらに向け、恥部を顕にしている。

ただ…。

「…ど…どうしたの？」

突然の行為の中止。

不安がっている彼女の声が出た。

だから。

「…沙織さん」

「ん？」

「部屋に戻ろう」

「……」

壁に手をつけていた彼女が、体を起こした。

そのまま衣服を直しもせず、無言で立ちすくむ。

こちらを振り向きもしないで、顔をただ…項垂れている。

…ああ…

何か勘違いをしたな…これは。

ただ、無言で軽く肩を震わせ始めた…やばい…。

「もう…いいの…?」

いかん…これはいかん!

やはり何か、誤解してるな…。

変に誤魔化しや、言い訳をするよりもストレートに言ったほうが良さそうだな。

「え? よかないよ?」

「…え?」

ここで、漸く振り向いた…。

あくやっぱり涙目になつとる…。

また気を使った…行為自体…:沙織さんの体…。

突然の行為の中止を、マイナス面で、色々と考えてしまったのだから。

うくん…動きながら言ったほうが良かったのだろうか?

その涙目に気づかないように、普通に言うか。

「ここだと集中しきれないから、部屋に戻ろうか?」

「…あ」

「暗すぎるし、沙織さんのエロい声聞けないし…」

「んあ!」

「裸見たいし、裸見たいし、裸見たいし、裸見たいし、うまく胸触れないし…で」

「んんんっ!」

はい、もういいや。

欲望全開でいきましよう。

いやあ…赤い顔が、更に真っ赤になったな。

先程までの涙目が、更に涙目になりましたね。

「…他のあんこうチームは、今俺の宿泊部屋で完全に寝ちゃってるから…大丈夫だろ」

「…うう…」

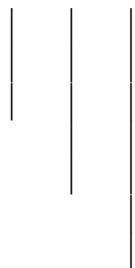
「何より沙織さんに…初めくらいは、ちゃんとしてやりたい」

「それは、今更だよな!」

まあ…うん、外でヤっちゃってるしね…。

何よりもまあ…はつきりと言えば…。

「ただ、何も考えないで…君を貪りたい」



衣服を直し…誰もいないホテルロビーを通過する。

そのままエレベーターへ。

うん…沙織さんは兎も角…MAX状態になっていた息子様。

浴衣じゃモロバレで、人に出くわしてしまつたら、ワシヤただの変態じゃ。

つて事で…中途半端に収まるのを待つよりも、さっさと移動してしまえという事で…もはや全力疾走。

考えて見れば、結構間抜けだな。

そして今は、その箱。

エレベーターの中…。

「んっ!! はっ!! あっ!」

で、沙織さんの秘部を弄っています。

うん、心に余裕が出てきた証拠だね。

…開き直つたら、なんでも出来そうだな。

「ちよっ…:…んっ! たかっああっ!!」

喋らせない様に、秘部をクリトリスと一緒に撫で回す。

そう、すでにエレベーターは、目的の階には到着していますが…はい。

開ボタンを片手で押しっぱなしにして、もう片方の手で壁に寄りかからせた沙織さんをいじめ…:…もとい、いぢめております。

…うん。俺の位置からだ、廊下の様子が分かるから、人がこれば、すぐにやめればいいだけだしね!

指を引き抜くと、また愛液でグチャグチャになっておりました。マジマジとそれを見つめていると…あ。

パタパタと、俺の腕を掻い潜り…廊下に出て…少し距離を取る為か、小走りで逃げられた…。

チツ…。

仕方がないと、俺もエレベーターを出る。

そのまま彼女に、同じく小走りで近づき、部屋までの短い距離を並んで歩く…。

すげえ恨みがましい目で見てきますけどね！

「…忘れてた。隆史君が変態なの…」

「それこそ、今更だよな？ …さっきまでの事考えると」

「わっ！ 私だって恥ずかしいんだからね!？」

知識はあるけどって、事でしょうか？

一言二言、小声で会話をしていると…はい、到着しましたあんこう宿泊部屋。

扉の前…カードキーをスライドし、無言で扉を開ける沙織さん。

開いた部屋は、真っ暗だった。

人の気配は無い…。

その部屋には、敷かれた布団が陳列している。

誰かが帰ってきた様子も無い。

「……」

「……」

後はもう…無言だった。

終始無言。

彼女も我慢していたのだろうか？

ドアが閉まり、オートロックの音がすると彼女から抱きついてきた。

無言で抱き合い、無言で口を吸う。

ただ聞こえるのは、激しい呼吸の音のみ…。

口を合わせながら、手探りで帯を解く。

肩に手を置き、摩るように浴衣を脱がせる。

：  
彼女から腰を下ろし、俺の首に手を回していた為、ほぼ強引に俺ごと横たわった。

薄い掛け布団を捲る事もなく、その上で行為に及んだ。

待望の胸を持ち上げるように、揉みしだく…っっていうか、重!!  
でっか!

片足を上げ…前戯もせず、すぐに彼女の中に入れる。

甘い声と共に、どこかで我慢していた様々なモノが溢れ出してきた。

：陰茎から彼女の熱い体温を感じる。

すでに部屋の中は、その行為の匂いと音…そして声が充満していた。

何回しただろう…。

すでに知識だけはあった沙織さんは、俺の要望に素直に答えてくれた。

やはり彼女も騎乗位が異常に似合う。

下から眺めているだけでも素晴らしい…うん。

わざと胸が揺れる様に動かしたりもする。

自信から動くように指示を出しても、素直に従ってくれた。

：あと、彼女の性感帯も分かった。

あまり攻め続けると、また動けなくなってしましそうですので、今回は出来るだけ攻めない方向で…。

あ。

メガネは、外させませんでした。

はい、当たり前です。

はい、当然です。

神に対する冒瀆ですからね。

異論は認めません。

はい、そんな彼女は、大きな胸を上下させ、大きく呼吸を繰り返している。



彼女もそろそろ限界なのだろう。  
さて…。

「…沙織さん」

「んあ……はっ……あ……ちゅぶ……」

今度は、掃除……とも違うけど、もう一度口でもらっていた。  
先程は驚いてしまったのあり、途中でやめてしまったから、最後までして欲しいと言ったところ……普通に舐め始めてくれた。  
頭に手を置き、彼女の上下運動を眺める。

「ぶっ！…ぶっ！…ぶっ！…」

う……うまい……と、素直に感心する程、俺の弱い箇所にも舌先を入れてきた。

今はもう、夢中になっている。

俺の呼びかけにも答えない。

「沙織さん」

「ぶっ……あっ……。あ、ごめん……なに？ どうしたの？」

「……」

4度目くらいで漸く気がついてくれた。

それでも視線をこちらに向けて、またすぐにしゃぶりだした……。

慣れたね……行為自体に……。

そんな彼女に確認を取る。

一度浴衣にしまつてあつた物を取り出しておいた。

そしてそれを、指差す……。

携帯電話。

「撮っていい？」

うん、このエロいの撮っておきたいと……素直に聞いてみた。

さて……どうだろう……。

「嫌だよ!!」

即答でしたね……。

「ま、撮りますけどね？」

はい、即答でカエシマス。

携帯を操作して、動画撮影の操作をすると……携帯から電子音が鳴つ

た。

はい、撮影開始の合図ですね。

「チョッ!? 隆史君!? んんっ!?」

今度はこちらから彼女の口に、亀頭を当てる。

唇の感触…。

さて…どうするか…?

ここでやめるなら、素直に諦めよう…。

「むう……」

あ…睨んでいる…その亀頭を睨んでいる…。

んじやと、頭に手を添えて…押さえ込み催促をすると。

「…う…ぶっ…じゅ…ぶ…」

ゆっくりとまた、しゃぶり始めてくれた。

…よし。

「ちゅ…ぶ…。だ…誰にも見せないでね?」

「…見せるわけが、ないでしょうが」

うん…ネットを繋いでいないPCにでも、保存しておこう!

見せる訳がない。見せてたまるか。

「はっ…んっ…ちゅぽっ…ちゅぽ…」

そのまま、胸まで使い…口との両方で、最後までしてもらった。

彼女は一度許してしまえば、大体最後までさせてくれる…。

そんなイメージがついた。

…俺も完全に開き直ったな…。

ここまで欲望に素直になるなんて、思いもしなかった…。

「ズツチュ! ズツチュ!!」

さて、何日目だろう…。

絶倫といわれも仕方がない程…今日はしてしまった。

そしてこれが、最後になるだろう…。

…流石に…無理…

彼女に口を開けさせる…

舌先のみで、尿道口をチロチロと舐めさせる…。

メガネを掛けているんだ…。

汚したくなるというものだろうか？  
彼女の顔を埋める様に：最後に大量のモノで、彼女を汚した。

—  
—  
—

はい。

結局動画は消されました。

全て事が終わり、冷静になった沙織さんに携帯を取り上げられ…。

「もうっ！ もうっ!!」

って、言いながら、真っ赤になって操作していましたね!!

はっはー。あれはあれで良かった!!

「……」

……くそう…。

彼女は…洗面所で顔を洗い、体を綺麗にし…夜の5時頃でしょうか？

うん、夜ですよ？ 夜。

流石に限界でした。

布団は余りまくっていたのだが、流石に行為の後は残る…。

畳んで誤魔化し、そのまま寝る為だけの布団を用意し…匂いを出す為窓を全開にして…。

ほぼ裸…沙織さんは、どうにも足がガクガクと震えが止まらなかつたらしく、仕方がないから！ と、俺に抱きつく形で…爆睡。

ほぼ気絶する様に二人共寝てしまった。

…何故か俺の腕を枕にして…寝てます。

誰も来ない部屋。

……

と、というのが昨日…というか、今日寝る時の状況だったと思います。そう記憶しております…。

はい。

確認すると、やはり右腕を枕にして、俺の体に抱きつく様に寝ておいでですわね沙織さん。

人肌…というのは、心地がいい。

簡単に着た浴衣は開け、非常にまた記録媒体へと残したくなるような絵面。

…スースーと寝息が聞こえてくる。

はい、もう気がついていません。

携帯で時間を確認しようとする…うん…左腕が動かねえ…。

はい、人肌はもう一つ感じておりました。

ただ…振り向くのが、凄まじく怖い…。

「イケズデス、タカシサンハ、イケズデス」

「……」

はい、誰かはすぐに分かりましたけどね…。

「イケズデス、タカシサンハ、イケズデス、イケズデス、イケズデスイケズデス、イケズデス」

んんっー!!!

「ワタクシダケ、オアズケ…ワタクシダケ、オアズケ…ワタクシダケ、オアズケ…ワタクシダケ、オアズケ…ワタクシダケ、オアズケ…」

「……」

部屋に気配は、他にない。

多分、彼女だけだろう…。

いつまでもこうしている訳にもいかないし、他にも戻ってくるかもしれない…。

……。

「」

意を決して、ゆっくりと首を左へ回すと…。

「……」

目をガン開きにした…とても無表情な…。

「オハヨウゴザイマス、タカシサン」

「お…おはよう…ご…ご…ぎ…ぎ…」

華さんが、残った左腕を枕に寝ていた…。

すつげえこつちを向いて…。

「ワタクシダケ、ノケモノデスカ？」

「」

すでにこの状況…察しは着いたのだろうか…が。

この…華さんは、彼女の実家の時を越えていらつしやる…。

両手に華。もとい、両腕に華。

いやいや、片腕に華…。

この状況…どうしよう…。

「…ま、誘った私は、何も言う権利はございませんが…」

あ、良かった…。

普通に喋りだしてくれた…。

「コンカイ、ワタクシダケ、ノケモノ…」

だめだ！

「……」

「……」

汗が…止まらない!!

瞬きもしないで、ただジーーーーーと、俺の顔を見つ

めている、華さんの顔が直視できない…。

が、逸らそうモノなら…どうなるか…。

ぐ…。

「あの…」

「朝起きたら隆史さんは、部屋にいらつしやいませんでした。テーブルにカードキーが置きっぱなしでしたし、ああこれは締め出されたかな? と思いましたが」

「……」

「まさかと思い、こちらに来てみれば…まあ、随分と沙織さんがお幸せそうに寝ている…と、いう状況に出くわしたという訳ですね」

「カタカタ

「昨晚は随分とお楽しみのようでしたし？　いつぞやの朝とはと違い……元気がありませんでしたので……ええ何も出来ませんでした」

「カタカタカタカタ

「文字通り、する事もやる事も有りませんでしたから？　随分と羨ましい状況の沙織さんの真似をしようと思った次第です」

「ガタガタガタ

「ああ、みほさん達はまだ、隆史さんのお部屋でご就寝ですね。……タイヘン、ハゲシカッタヨウデ……ネタマシイ……」

「」

「こんな所でしようか？♪」

き……聞きたい事を、一気に教えて頂きました……。

無表情が……段々と笑顔になっていく様は……恐怖以外のなにモノでもない……ね……。

「……いけず」

……。

……。

う……動けない……。

「……」

暫く見つめ合ったあと、おもむろに華さんが立ち上がった……。

「ん……」

声が聞こえた。

反対側の沙織さんが、目を覚ましたからだろうか？

つか……なんで分かったんだろう……。

「……あえ？　ん……んっ!!」

焦った様な声。

「た……たかつ!!　んうあ!!　華あ!!?」

あ……はい、すでに立ち上がった華さんを見上げ……上半身を起こし、乱れた浴衣を即座に直していた……。

ちっ……勿体無い……。

「……隆史さん？」

「あ、はい！ ぐめんなさい!!」

こ…怖い…。

目つきが鋭い…。

「…あれ？ あれ!? あれえ!?」

はい、状況に混乱していますね…。

俺と目が合うと、真っ赤になってしまわれますが…。

「…隆史さん」

「え…あ、はい!!」

呼ばれた方向へ視線を向けると…華さんが、浴衣の帯を解いていた。

なに？ え!?

開かれた浴衣から…下の下着一枚の姿にな…うつつわ!! エツロ!!!

「…私は着替えます。そろそろ7時過ぎますし…みほさん達も目を覚まされると思いますよ?」

そのまま恥ずかしがる事もしないで、淡々と着替えを始める…。

いやあ…ブラ付ける姿って…すげえいい!!

「隆史君…」

「あ、はい！ ぐめんなさい!!」

赤くなつて今度は、沙織さんが睨んできた。

こ…怖い…。

が、目つきが可愛い。

「ウフフ…今度は、ワタクシ…沙織さんとお話がございませうので…」

「えっ!? 華!？」

カードキーを持って出てきてくれたのだろう。

その下着姿のまま、そのカードキーを渡してくれた…。

白かあ…。

…あ、はい。ごめんなさい。

「寝起きの「ぴろーとーく」何て許しません。さっさと行ってください?」

ピロツ!?

どこで覚えたの、そんな言葉!!

華さんの口からんな言葉が出るなんて!!

「……はは……私の持つてる雑誌だ……」

はい……まあ、察しは付きますけどね……。

俺も浴衣を直し……カードキーを手に取る。

そこから、さっさと行けと言わんばかりに、こちらに笑顔を向ける

華さん……。

「た……隆史君、私は大丈夫だから……その……行つて？」

ぬ……。

また気を使われた……。

赤くなりながらも、苦笑して……そんな顔の沙織さんとまた、見つめ

合う形に……

「ズイブント……ナカノ……ヨロシイコト……デス……ネ」

「分かった！ 分かりました！ すぐに行きます!!」

華さんが、限界だと感じ沙織さんとの、モロモロの事をすっ飛ばし

て……

俺は自室へ戻る為に、その部屋を後にした。

—————  
—————  
—————

「……」

「……」

帰る途中……部屋から帰る……みほ達と鉢合わせた。

廊下で向かい合う4人……。

「う……う……う……う……う……う……」

優花里は、完全に麻子の後ろへ隠れてしまい……俺の顔を見てくれ  
ねえ。



慎重さをカバーすべく、麻子の肩に手を添えて、完全に顔だけ隠す  
感じで…。

あく…耳が真っ赤だねえ…ウフフ。

……。

「…書記」

「あ、はい」

「…………この…変態がつ」

「…………」

話す事は無い。

そんな感じで、すれ違って行った…。

うん…マコニヤンも顔真っ赤だったけどね!!

下手に会話をしない方が良いと、彼女は判断したみたいだね!

それに、涙目だったけどね!!

……。

……………。

さて、みほだ。

何か複雑そうな…そんな顔すらしていなかった。

普通の顔…。

それが異常だと感じる…。

普段なら、それでスルーしてしまっていたかもしれない。

だが、今回は話がある。

「みほ、ちよつといいか?」

「え?」

俺の宿泊部屋…。

みほは、一度着替えをしてから来ると、先に戻っていた。  
ノックが聞こえ、みほを招き入れると、即本題に入る。

「まずな?」 みほ

「なに？」

普段と変わらない彼女。

それが少し、苛立たしい。

だからここからだ。

彼女がどういう反応を見せるか…。

昨晚の経緯を、淡々と話始めた。

みほ達との後の事…。

要は…沙織さんとも関係を持った事を。

それを黙って聞いていた…。

彼女は普通の顔で、聞いていた…。

結局朝まで、あんこうチームの宿泊部屋にいた事も…。

それを最後まで。

「うん…そっか…。やっぱり沙織さんも…」

何か納得した顔をした。

「……」

違うだろ…。

そうじゃないだろ…。

また仲間ができたみたいな顔…。

「そうか…みほは、やっぱりそうなんだな…」

「…え？」

「みほは、俺が浮気をしたらどうするんだ？」

「……」

みほにとつての浮気…。

「…どうするって…なんで？」

ハッキリ言おうか。

「沙織さんと浮気した…ま、俺からだっただけど」  
「……」

ここで初めて、顔が硬直した。

…意味は分かったのだろう。

みほにとつてのタブー…。

怒ると思った…泣くかな？　とも思った。  
だがその答えが…。

「…こ…今回…だけ」  
「…」

ほぼ…考えることなく、そんな返答があつた…。  
嘘だろ…。

その顔は、また普通…。  
笑うほどでは無いが、特に変わらない…。  
はっ…。

ある意味完成した。  
完全にぶつ壊れた関係になつたな。  
なんだ、この気持ちの悪い関係は。

「私…今回の事で、気づいたんだ…」  
「…なにが？」

「私、隆史君の気持ちを、完全に考えてなかった…」  
「…」

「…昨日の夜…隆史君の顔辛そうだった…」  
「…」

「まあ…途中で、か…考えごとなんて…できなくされちゃったけど」  
その言葉は対処に困ります…。

「だ…だから…その…今回だけ…」  
肩が震えてでした。

「こんか…い…だ…」  
…。

「なあ、みほ」  
「…なに…？」

声に震えが出てきた…。  
ああそうか、我慢してただけか。

「本当に今回だけだ。もうしない…」  
「う…ん…」

「沙織さんの好意に甘え、八つ当たりみたいに彼女に逃げてしまった

…だけ…かもしれない」

「…何となくわかる。だから、今回だけは…本当に…今回だけ…」  
こんな事、沙織さんには言えないけどな…。

実際に、情事の最中…そんな事考えている様な余裕なんてなかった。

ただ…なんだ…夢中になっていた。

「…だから、みほ」

「な…に？」

「ボダーラインを教えてください」

「…え？」

実際問題…どこまでのキスとやらが、浮気に当たるのだろうか？

こんな関係になって以上…特に華さん…。

みほには悪いが、肉体関係は継続してしまいそうだ。

だから…。

「…えつと…キス…？」

よく分からない。

そんな顔で、俺を見上げた。

ああ…やつぱり涙目…。

…。

じゃ…ない…。

目がドス黒く…ボールペンでグリグリと書き潰した様な、そんな色をしている目を向けてきた。

泣いていたんじゃない…本気で今回だけだと、我慢している目だ。  
…。

これ…本気で、ヤバイのでは無いだろうか？

俺の気持ちを蔑ろにしまった。

みほ自身にも、落ち度があるからと…渋々納得…というか、許してくれた。

そんな感じだ…。

今回だけ…ギリツギリで、秤が現在の状況側が、傾いただけだ…これほ。

次回…みほの言う、浮気をしたとしたら…。

友人関係ぶつ壊してでも…何するか分からんぞ。

俺…刺されるだけで済むのか？ と言った、狂気的な目をしたみほが、そこにいた。

いかん…これ…。

眼力の威圧が…しほさん超えてるぞ…。

「…どういう…事？」

…。

よし！ 力技だ！ ここは！！

「えつとだな…口と口でキスだよな？」

「…そうだね」

何言ってるの？ って感じで小首を傾げるみほ…。

いや…普通の顔が、すっげえ怖いんですけど。

「舌と舌だけだったら？」

「…え？」

「口と舌は？」

「…え？」

あ、意味が良く分からない…そんな顔だ。

まあ…完全にそこまで行くと、性技の部類に入るからなあ…。

「ではな、みほ」

「はい」

両肩に手を置く…。

ぶっっちゃけ、直視するのが怖いけど…。

うん…力技だ！

「順番に試していくので、判断してください」

「…………へ？」

「はあ…あ…：…んう…」

「みぽりん…廊下で、エロい声はやめてください…」

「だあ…：…れのせいで……」

はい、一通り試しました。

すでに狂気じみた眼は解除され、逆に今は…：…なんかすっげえピンク色だなあ…。

うん…：…なんとかなった…。

今は、ぐったりと…：…そしてフラフラと歩いている みぽりんですね

！

「いやあ…：…そうかあ…：…みほは口内が弱いのか…」

「!？」

「キスだけで、あんだけイクとは思わなああ!!!」

…：…抓られた。

もう一度。

一通り試しました。

…：…  
試しました所、みぽりんのスイッチが完全に入ってしまいました…

でも、また致してしまいましたら、絶対に時間が掛かる。

はい、華さんがまたブチ切れそうですね。

…：…。

でもまあ…：…なんだ…。

こんな事で誤魔化す辺り、完全に俺…クズになってるね…。

「…うう…すぐに答えでないい…」

はい、思考すら邪魔する位に何度かイカせて見ました。

「ちよつと、皆の相談するね…」

「……」

え…。

選択の余地あんの？

普通に全部、キスの部類ですけど…。

そのままエレベーターに乗り、ロビーへ向かう最中…なんか…みほがやたらと寄り添う様になっている…。

いや…まだ発情中です…かあああ!!??

…腕を噛まれた…。

うん…。時間がそれなりに掛かってしまい…結局、皆とはロビーでの待ち合わせとなった。

その行動最中が怖い…。

……うん。

華さん怖い…。

うん、だつてほら…。

なんの用だか知らないが、到着したロビーに見知った顔が一人いた。

俺達は、丁度その場面に、出くわしたようで、何か向かい合っている。

まあなんだ、色々と溜まっているのだろう…完全に八つ当たりだろうなあ…。

「元お父様…邪魔です」

青くなつた華パパさんがいた。

追伸

朝食前、華さんに散々睨まれた挙句…ホテルのバイキング料理で、俺の朝食は華さんが選んだ。

携帯と睨めっこし…すげえ量の飯を朝っぱらから食わされた。

生徒会席とも言えるような、そんな俺の座った席に並べられた料理…食材は、俗に言う…。

精のつく食べもの…だった。



◇ ルート ・ 人妻編② ◇ 大洗の夜

「それが嫌なら、スタッフが来るまで…大人しく自室前で待っていてクダサイネ？」

はい、笑顔で言いました。

絶句していた酔っ払い達を散らせ、フロントへ電話する為に自室に戻る。

さっさと寝てしまおう。

……。

はあ…なんか、こうして思い返してみると、濃い一日だったなあ。

優花里、沙織さんの件が、メインイベントでしたね！

ある意味、今の酔っ払い来襲で、頭が冷えた…。

…あ。

そうだ。フロントへの直通電話の受話器を持ち上げた所で、気がついた。

しほさん、千代さん、どちらの部屋の鍵を無くしたか聞いていない。

兩人って事は無いだろ。

……。

いやあ…あの酔っ払い達だしなあ。

もし無くしたのが二人なら、こんな時間に全く関係のないホテルマンさんに御足労をかけた挙句、2往復させてしまうかもしれない。

自身達で連絡…まあフロントへ行きや良いのだろうけど…。

まあ…あの様子じゃな。

…また絡まれそうだけどなあ。

持った受話器を下ろし、もう一度部屋の外へ向かおうかね。

はあ…足が重いなあ…。

自室の扉を開け、恐る恐る廊下を見渡す。

やだなあ…廊下で暴れてたり、してないよなあ？

ふむ。

さすがに夜中。

人の気配が無い。

誰もいない、廊下が奥まで伸びている。

さて：どつちだ？

俺のプレミアムルームとやらは、東の端側にあつたので、その反対方向に進む。

壁で隠れて見えなかつた廊下を、曲がりながら進むと…。

あれ？

誰もいない。

絨毯廊下の先は、突き当たりの壁しか見えない。

壁のこの階の平面図を見ると、スイートつて、隣り合わせになつているようだ。

なる程、見当たらないつて事は、どちらかの部屋に泊めてやるか、鍵が見つかつたのだな？

念の為と、廊下の一番西側にまでやってきて、そういつた落ちかよ。

…はあ…それなら、それで一言言つておいて欲しい。

スタッフ呼ぶ所だつたじゃないか。

もういいや。寝よう。寝てしまおう。

考えたくは…。

ブラブラと自室に戻ろうと歩き出した。

「……」

さつきは、ただ廊下を直進し…人影のみ探した為に、気がつかなくなつた。

ああここが、スイートか…くらいの感覚で何となく視線を投げた所…。

いた。

はい、おりました家元様。

スイートつて、廊下に面しての入口では無く、少し豪華に…この字で、入口に隠れてるのね…。

その入口…ドアの寄りかかっていた家元。

先ほどの俺の部屋に来た時のように、だらくんとした…普段なら想像もつかない、非常にだらし無い格好。

念の為と、逆コの時になつている隣のスイートの入口を見てみる

と…。

うん、誰もいねえ。

って事は、残されている家元様。

「……しほさんの方が」

まあいいや、さつさとスタッフ呼んでやろう。

というか…。

「しほさんっ。立ったまま寝ないで下さいよ」

ペチペチと軽く、頬を叩く。

「んう〜…」

顔を逃がすように動かすと、薄目を開けてこちらを見た。

なんだろうか…ここまで酔ってるって…。

浴衣姿という事もあり…非常にまずい。

少し乱れた浴衣から、白い首を上げて…。

酷く乱れていないにしても、浴衣越しからも分かる、そのおつきい

の。

足を、軽く組んでるのか少し、間から出ている…。

真っ先に目が行く辺り、非常にそれが強調されているのが分かる…

のが、非常に危険。

んで、この泥酔。

「…ほら！ スタッフ呼びますから！」

まだペチペチと頬を叩く。

一度、意識をしっかり持ってもらおう。

…この格好。

時間も時間でって事で、変な奴が通り掛かったりしたら、普通に部

屋に持ち帰りされそうだぞ？

まあ…こういった普通のホテル内だから、大丈夫だとは思うけど

…。

貴女みみたいな、酔っぱらいもいるんですよ!?

「やめ…。。やあっ!!」

やあっ!! って…おいおい…。

大きく手を払われて、そのままその床絨毯に座り込んでしまった。

ズリッ！ と、落ちる様に……。  
うわあああ……めんどくせえええ。

しほさんに対しただけではなく、こういった……特に女性の酔っ払いは、とてつもなく面倒臭い。

年上の……女性の……しかも、しほさんのここまで酔った姿……見たくなかったなあ……。

座り込んだのと、少し壁で浴衣が引っ張られたのか……。

帯が綻び……浴衣が乱れていた。

足を崩し、落ちる様に、座り込んだ為に……その足がまあ大きく……露出……。

……。

……ふむ、やはり黒か。

はあ……軽く、浴衣の裾を戻したり……胸元隠したり……。

こんな状況で、スタッフ呼び出す訳にも行かないしなあ。

はいはい、アンヨ隠しましょうねえ……。

はあ……。

疲れた……ため息、何回目だ？

ここまだ、部屋の中じやないんですよお？

帯取らないで下さいねえ……。

ノーブラだなあ……。

……。

……。

あの……。

ドアの下。

丁度壁に隠れて見つけ辛いかもしれないがね？

……下に落ちてたよ……カード。

絨毯の色と似ているから、酔っ払いには特に見つけられないかもね

！

見つけたよ！ カード!!

急いで、それを拾い上げると…ああ、やっぱり。

この部屋のカードキー…。

なんでここに…。

ああ…バックか何か、しまう時にでも落としたのか？

結構あるらしいんだよなあ…。

ひよつとして、その時から酔っていたのかな？

はあ…。

もう…いいや。

部屋に放り込んで、さつさと寝てしまおう。

いくらエツロイとはいえ、こんなしほさん…何時までも見たくない

や…。

「つむ!!」

あ、変な声出した。

「うう…うう…」

少し、意識を取り戻したのか…ちゃんと起きてくれたのか。

目がこちらを向いた。

少しは酔が。冷めていてくれると…いいなあ。

ヨロヨロと、ドアと壁に手をついて、立ち上がるしほさん。

ああほら…帯、解けちゃってますよ？

元々緩んでもいたのであろうかね？ すっごい簡単に下に落ちま

したよ？

前開きになって…すっごい事になってますよ？

もう、慌てるの疲れた…。

「ふう——…ふう？」

ボーとした目で、現状を確認している。

少し顔を振り、自室の前だと分かってくれたのだろう。

うん…ああ、こりや寝ぼけてんなあ。

今気がついたって感じた。その寝ぼけ眼と、酔も手伝ってか…すっ

ごい熱っぽい顔してますね。

「ほら…しほさん、カードキー見つ「これは、隆史君がしたのですか

?」

…おい。とんでもない事、言い出したぞ。

そのまま…ボーつした目を、顔ごと自分の体に下方向へ向け…。

「……」

そのままスツと、前を隠した。

はい、浴衣をクロスさせ…まあ、帯は落ちてますけど。

なんか、すげえ誤解をされてる気がする。

「違います。それはしほさん自身が、勝手にやりました」

慌てるソレっぽいので、極めて冷静に返しましょう。

というか、もう俺も疲労と眠気が溜まっているのか、淡々としか返せないよ。

「…ホテルのスタッフの方が、来るのが分かかっていて…どうして、私自身がこの様な格好するのですか？」

「泥酔していたからでしょうよ」

頭を手で押さえ…なんか一気に酔が冷めました。

何手いう事をしでかしたのでしょうか？ どういったつもりでしょう？ とか言い出した。

「隆史君」

はあ…なんか、もう…考えるのが、本当に面倒臭い。

怒る気力すら無い。

「はい？ なんすか？」

「その…」

なんだ？ 何を言い含めているんだ？

しほさんの顔に、酔とは違う、赤い色が混じり始めた。

「…一度、関係をもってしまったとは言え…」

「」

おーいっ!!

言っちゃったよ!!

これは流石に焦るよ!!

アレから、何度か顔を合わせたけど…それだけは意識しない様にしてたのに…。

みほと付き合いだしてからは、特に!!

もうあんな事は無いだろう。アレはまあ…ノリと勢いが突出してしまっただけだと、自分を納得させていたのに。

いやでもな…正直…少しでも意識してしまうと…理性が瓦解してしまうのが、何となく分かっていた。

だからなのに…。

「時と場所を…その、考えるべきだと…私は思いますが？」

「いやあ…まだ酔ってるよね。」

その言葉つてのは…その。

「あの、しほさん」

「はい、なんでしよう？」

帯を探し始めたのか、体をくねらせては、絨毯廊下を見渡している。すぐ足元に落ちているのですけどね？

「…俺とみほが、付き合ってるは知っていますよね？」

「当然です！」

むふっーつて…なんっー顔…。

やっぱりまだ酔ってるな。一体どんだけ飲んだのだろう…へべレケ共は…。

「その上でしほさんは、時と場所を選べば…良いと仰ってるんですね？」

「そう言ったでしょう？」

「……意味分かって言ってるんですか？」

「意味つて…」

酔ってるなあ…。

「……」

改めて言ってみると、非常に死ね俺！ なのだけど…正直に言おうか。

どこかで、やはりカチンと来ていたのだろう。

先程と酔っ払い介護の関係で、その張本人へと、今は仕返しがない仕方がない。

彼女自身は、酔っているからこそか？

一度関係を持つと、情が移りやすい…というのも関係してるのだろう。

本能的に女の部分が、勝ってしまった…とかかな？

はい。

正直、あの発言の後、段々とおつきよくなって行く息子様を感じます。だつてなあ…。

あの言い方だと、またあの様な関係になる事自体は、構わないみたいじゃないか。

…。

いや…本当に構わないのか？

……。

………。

試しに…いや、試そうって気がすでにオカシイ。

おかしいが…なんだろう…。

特に不自然ではなかった。

不自然に感じなかった…いや、感じられなかったか？

彼女は、自分の体を抱きしめる様に、腕をクロスさせている。

その為、浴衣からはみ出そうな様に、胸の谷間が強調…。

隠すなら、しっかり隠してくださいよ…。

見えるんですよ…その胸のふくらみが。

その…うなじが…。

試…す…

◇

気がついたら肩に手を置いていた。

それを特に気にする様子では、なかったしほさん。



そのまま、さする様に下に手を移動させて行くと…彼女の体が少し驚くような反応した。

「っ…」

吐息が…。

そのまま体を後へ倒し…気が付くと抱きしめる様に腕を後ろに回していた。

しほさんの組んでいた腕も解かれ、俺の首の後ろへと回っていた。彼女の後頭部は、壁に当たっている。

「はっ…ん…あ」

「っ!？」

そのまま顔を押し付け…いや、口を押し付けて来た。

口を半開きにし…軽く舌が当たる。

生暖かい、体温が伝わって来る。

そのまま止まっていると、すぐに顔を離れた。

「あの…隆史君、流星にこんな所では…」

いや、貴女がされたんですよ？

こんな所では、って!？」

「ふっ…あ…仕方…ないで…すね」

また塞がれた。

何も俺は言っていない。

ただ、自主的にしほさんが、動いているだけ。

「…あん…ちゅ」

今度は、舌が入ってきた。

ぬるっと、一気に。

遠慮もなく、俺の口内を弄る様に動き回る。

動き回りながら、舌を吸い取る様に愛撫されている。

あ…完全にスイッチ入ってる。

…仕方ないって…俺のせいにされている気がするんですけど…。

「……」

そのまま、こちらも顔を押し込み、空いた両手で尻肉を鷲掴みにし

た。

何も拒絶の意思すら見せないで、ただ夢中になって俺の口を吸っている…。

というか、尋常じゃないくらいに積極的になってる。

なにが…え？ 躊躇が一切感じられないのだけれど…。

そのまま、手を動かし、浴衣を少しづつ掴みながら上げていく。

お尻の肉の…スベスベとした生の触感を感じると、その尻の間に指を這わせ…下着をその筋に収めていく。

ぬ…いかん。

流された。

と、思ったけど…もう…いいか。

考えるのやめようか…。

ただ、現状がとても気持ちがいい。

また、快楽に流されていく。

「ちゅあ…んっ！」

まだ、彼女の攻撃が激しくなった。

今度は舌を、強引に奥にまで押し入れてきた。

こちらも舌を動かすと、その反応に嬉しそうにまた、対応してきた。

舌だけが絡み合う。

静かな廊下に、唾液が混じる音がする。

…。

腕を移動させ…浴衣の前から両腕を侵入させ、素肌を触感のみで楽しむ。

体を全体的に弄り、さするだけでも、しほさんの口から熱い吐息が吐かれる。

片手で胸を少し乱暴に掴む。そのままもう片方の手を秘部に持つていくと…。

…顔を急に離された。

「っ…あ…そういえば、ホテルの方が…」

…。

急に冷静になりやがっ…いやいや、少し正気を取り戻されまし

た。

ああ…まだ呼んでないの言っていないかったか？

でも、カード見つかったの言ったよな…ああ、遮られたな。

変な誤解をされて…。

……。

……………。

ふむ。

「…そうですね…冷静になってきました。これまでですね…私も少し酔っ…っ!？」

一瞬、名残惜しそうな顔をした時点で、正気になり始めているのに気がついた。

が、すでにこっちのスイッチが完全にONだ。

しほさんが入れたんですよ？ 真っ黒い俺のスイッチ。

肩に手を置き、座れとばかりに、下へ力を込める。

「え…あ…あの？」

アルコールがまだ当然入っている為か、困惑しながらも素直にその誘導に従ってくれた。

ストーンと、膝立ちの格好になると…真正面のソレに気がついたのか…。

息を呑む声が出た。

はい、俺も当然、浴衣姿。

男の場合、酷くわかりやすい。

特に浴衣は乱れている訳でもないのだけど、突出した物は非常にわかりやすい。

まあ…ここ廊下だけ…。

小部屋の様になっているスイートルームの小さな玄関ホール。

俺の背中は廊下に向けている為…例え後ろで人が通っても、軽い露出狂みたいな事になっているのは気づかないだろう。

俺の体格もあって、パット見て、同じ柄の浴衣も有り、しゃがんだ、しほさんには気付きにくいだろう。

片手…親指だけで下着の間から、それを彼女の前に露出させた。

「っ!？」

驚いた声は聞こえなかったが、更に強く息を飲んだ。

上から見下ろしているが…しほさんの目が、それしか見なくなっていた。

大きく鼻で、呼吸をする音。

…前日もそうだけど、匂いを良く嗅ぐなあ…この人。

口が半開きになってるけど…我慢しているのだろうか？

俺はまだ何も言っていないけどね。

「ここ、すぐ横がエレベーターですから…ベルの音がしたら、やめればいいだけですよ?」

「…え?」

ここで、始めて俺の顔を見上げた。

その一言だけ。

後は何も言わない…。

さあ…どうでる…か……つて…。

「っは…」

まさか…また躊躇無く、舌を這わせて来るとは思わなんだ…。

…熱いネットリとした感触が、陰茎を包んだ。

まじかあ…。

ちよつと、意外すぎて冷静になったよ…。

なんだろうか…今回のしほさん…すつごい、がつついて来るな…。

自然に彼女の頭に、手を添えるとそのまま口の中へと、陰茎を飲み込んだ。

ニユルツとした感触やら、舌が動き回る感触…それと熱い体温。

…。

「…つぷつ…ちゅぷ…」

ゆつくりと前後を繰り返している。

動かす度に、舌で全体を舐め回そうとする。

無理矢理にでもって感じで、亀頭から奥…根元までゆつくりと全体的に。

「ちゅぷあつ……つ…はあ……はあ……つ…」

一度離れた…と思ったら、息継ぎの様に一度大きく呼吸し…また飲み込んだ。

……。

しほさん…スタッフが来るかもしれないって事を心配してましたけど…ここ…往來の廊下なんすよ？

まあ。そこでこんな事させてる俺も大概ですけどね？

ただ、どこかで気にもしているのだろう。

極力音を出さない様になっている。

…フエラ音好きなんだけどなあ…流石に無理かな。

目立ちすぎる音はまずい。

その反動か、顔を動かし頬の裏を使い…口内全体で陰茎を舐り始めた。

舌と頬を使って…グチュグチュと、口内でなにか混ぜる様な…小さな音…というか、振動は伝わってくる。

片手で前髪をどけて見ると…目があった。

もう、何も気にしていないという目…。

ただ、夢中になっている目…。

完全に女の顔してる…。

「くぷっ…くぷっ…ぐぷっ…」

ぬ…ちよつとこみ上げるモノが有る。

流石にここで…ああ…でも、口内なら…。

そこでちよつと、中腰になってしまった。

「あの、大丈夫ですか？」

「!？」

後ろから、声を掛けられた!

床絨毯だから、足音がしなかったのもあるし、俺も俺で集中してしまっていた。

顔だけ振り向くと…若い夫婦…だろうか？。

しほさんと同じく、少し酔ってる感じだった。

…極めて冷静に対処する。

「ええ、大丈夫ですよ？ 彼女が酷く酔ってしまつて…」

俺が影になつてゐる為、やはり良くは見えないのだろう。それでも、完全に隠しきれていないのだろう。

膝立ちをしている、しほさんにも気がついた様子だった。

「ああ…」

声をかけてきた女性は、それに納得をしたのか、苦笑をしていた。…その女性も大分酔っているのか、多少…目の焦点が合っていない。

その声に驚いたしほさんは、体が硬直していた。

「っ!!」

はい、ではそのまま、動かしてくださいねえ…。

少し頭に添えていた手を動かすと…それにゆつくりと従つた。

また、熱い舌が動き始めた。

「…気をつけましょうね…お互い」

はい、完全に世間話モードになりましたね。

「そうですねえ…」

中腰をやめ、背筋を伸ばす。

後ろから…その若い夫婦から見れば、寄つたしほさんが、俺にしがみついている様に見えるだろう。

顔だけ動かしている動きは、分からないだろうし。

…が。

夫…男性の方は、なぜか少し笑つた。

そして聞こえた…。

「…ああ。なる程…」

はい、野郎同士は分かり会えますよね。

女性は見えていないみたいだけど、しほさん…浴衣の前、ガン開き。そこで、気がついたのだらうなあ。

「大丈夫…ですかあ？ その女性…」

男性だけ、こちらに寄つてきたな。

…さて…どうするか…。

前回は、リップサービスだったけど…まあ参加させる訳でも無し

…。

女性の方は、足取りが怪しく、奥の廊下の壁に寄りかかっている。それも男性は、気が付いているのか、俺と一定の距離を取って、止まっている。

…許可を求めている。

いやあ…この人もいい趣味してるわ。

「…大丈夫だと、思いますよお？ ほうら」

軽く手招きすると、嬉しそうに寄ってくる。

俺の横に立つと、そのまま、しほさんを見下ろしている。

あ…影が増えたので、気がついたのか…目を見開いた。

さてと…。

少し陰茎を抜き…舌先のみでしてくれと指示を出してみた。

怒ればそこで終了…。

…が、その特異な状況に興奮したのか…その男性に見せつけるように、舌先で亀頭を愛撫し始めた。

脳内が麻痺しているのだろうか。

すんなり従った。

「あつ…じゅぷっじゅぷっ！」

…しほさん。

少しの間、その男性は腕を組んでその光景を見ていた。

時たま、しほさんの目が、俺の目を見てきた…が、その目が怪しく光っている。

なにか背筋に走るモノを感じた…。

その男性…。

突然、ポンツと俺の肩を叩いた。

どんな意図があるか分からないが、その方向を見ると…。

グツジョツ！ って親指立ててた…。

いやあ…何、その笑顔。

そのまま何も言わないで、元の女性への元へと帰っていった。

弁えた男性だった…。

まあ、その女性の前で参加させろとは、言ってこないとは思っただけ

どね。

「ほらっ…色々迷惑だから、行くぞ」

「ええ？ ああ…うん…」

壁に寄りかかった女性の肩を抱いて、片手を挙げて、足早に去っていった。

……。

……………。

びつくりしたあ…。

男性が去ったのも気がついていないのか…まだ夢中になっているしほさん。

…しほさん、本当にどうしたんだろうな。

「つああ…はあ…はあ…はあ…」

陰茎を引き抜くと…口から大きく呼吸を繰り返し始めた…。

片腕に腕を入れ、立ち上がらせた。

すでに興奮が、許容値をオーバーしているのか…起こした瞬間、壁に背を預け…完全に胸を露出させた状態で、大きく呼吸を繰り返している。

「た…あ…隆史君…何を…」

そのまま、カードキーを使用。

部屋のロックを解除する。

「!？」

ピツと、電子音が響く。

「さっき言ったでしょ…ありましたよって…」

少し、言い訳がましく言ったのだけど…すでにどうでも良いのだろう。

目が虚ろになっている。

彼女に取っては、この歳…と言っては失礼だけど…生まれて始めての露出行為だったからだろうね。

完全におかしくなってる。

先程の事にも何も言われない。

部屋のロックが外れても、彼女はそのまま部屋に入ろうとしない。



まだ大きく呼吸を繰り返している。

……。

ん？

何か…声が聞こえる。

甘い…声？

少し、玄関ホールから顔を出し廊下を見渡してみる。

特に…あ。

先ほどの若い夫婦がいた。

5〜6部屋程先の部屋だったのだろう。

その部屋先…うん…。

先ほどの男性が、女性を壁に手をつかせ、後ろからツイテイタ。

やあ…感化させちやったか…。

確かに人通りが無いけど…そこまでの勇氣は俺には無いなあ…。

少しの間だけだろうけど…まあいいや。

「しほさん」

「はあーはあー…な…ん…」

俺の位置と入れ替わり、しほさんに頭だけ出すように指示をする。

そのまま顔をその方向へと向けると…体が硬直した。

「さ…先ほどの…」

驚きの声が、心地いい…なあ…。

壁に持たれる様に、半身を出してその光景を見ていた。

体を少し密着させ…あ、部屋のドアは開けておこ…最悪すぐに室

内へ逃げれる様に。

はい、では。

「しほさんに、感化されたんでしょうね」

「!?」

「しほさん、エロかったですから」

「エロっ!?!」

前かがみに体を倒し…顔を出していた為に、お尻がこっちに向いている。

さて：こつちの番かな？

即座に浴衣を捲くりあげ：お尻を露出。

驚くように体を起こそうとしたけど、それを軽く背中を押して押さえつける。

「えっ!?.. 隆史君っ!?」

小声で悲鳴の様なモノを上げたが、無視です。

下着を横にずらすと、すでに前戯など必要ないくらいに熟れている。

玄関ライトのオレンジの光が、それをまた際立たせる…。

そのまま一気に、しほさんへ陰茎を押し入れる。

手加減なし。一気に奥まで。

グチュツとした音が響く。

「んんふう!?!」

そのまま、今度は焦らすかの様に、浅くゆつくりと出し入れを繰り返す。

ぐちつぐちつと、水が混ざる音。

片手で壁で体を支え、もう片方で口を押さえている。

「ふっ！.. ふっうう…んっ！」

なんだろ：しほさん、なんかもう…なすがままだな…。

：何も抵抗をしない。

こんな事：されてるのに。

その現状が、普段とのギャップでさらに興奮させる。

この人は：なんだろうか：とことん苛めたい。

動かす度に顔を左右に動かし：人が来ないか確認している。

俺からはもう見えないが、まだあの夫婦はいるのだろうか？

まあもうどうでもいいけど…。

さて：とっ！

不意打ちで、もう一度一気に奥を、殴る様に突き入れた。

ゴツツと亀頭で何か当たった感触。

「んっんんんっ!!! あはっ!!!」

内股になっていた、しほさんの足が震えている。

ビクビクと痙攣を繰り返し…そのまま力なく動かなくなった。  
……イツたなあ。

前かがみになった、しほさんを見下ろす。

「あ…はっ…あっ…あっ…」

まだ小刻みに、痙攣を繰り返している…。

なら敏感になつて今のうち…もう一度…。

「た…隆史君…」

「？」

熱っぽい目で、こちらを振り返るしほさん。

やめてくれと言うのだろうか？

…やめないけど。

「あの…流石に…その…あ…はっ…」

うん、ゆっくり動かして、発言の邪魔をします。

こういった声つてのも好き。

「もう…細かい…とおお…は、言いませんので…その…」

「なんでしよう？」

今度はもう一度一気に…

「ひ…避妊を…」

……。

……。

……あ、はい。

ソウデスネ。

すげえ現実的な単語に、ドS気が冷めました。

しかし、持っていない。

ここはラブホでは無いのだから、ゴムなんて常備されてないだろう

し…しかもスウィート…。

「あの…私の…バッグに…その…幾つかありますので…」

……。

………は？

「せめて…それ…」

………なんで？ なんで持ってたの？ え？ ゴム？ ピル？

「隆史…君…?」

一気に陰茎を引き抜き。

しほさんを、抱き抱え…そのまま部屋へと直行した。

幾つかあるって言ってたな。

って事は、ゴムだろうか？ え？

室内に入ると、しほさんは、おぼつかない足取りで、その避妊具が入っているであろうバッグへと近づいた。

そのままゴソゴソと漁っている。

…。

……………。

両方…もってました…。

後はもう…なんか…色々興奮やら何やらで…。

—————  
—————

ゴムは…その、サイズが違いましたので、使用致しませんでした。  
アフターピルをお持ちでしたので、そのまま生で続行。  
ベツトの上では、しほさんはもう…なすがままだった

「しほさん?」

「はっん!! なっ! なんでしょう?!?!」

正常位で突かれながらも、俺の声に反応する。

完全に裸にした彼女は、写真撮影の為にジムへ通っていただけあり

…20代の引き締まった体に見えた。

揺れる胸を掴み止め、感触を楽しみながら、口撃。

「なんで、避妊具なんて持ってたんですか？」

「んっ…んっ…!! んっ…」

口を紡いだ…。

ので、動きを止める。

はあはあと、体で呼吸をするかの様に、大きく揺らしている。

何も言わないでおくと…腰を少しくねらせて来た…。

「そ…その……」

「……」

「ぜ…前回の事もあって…隆史君が…また……」

「俺が？ また？」

「も…求めて来ても…大丈夫な様に…と…」

……。

あの…俺のせいにしてますけど…それって…。

「…みほも宿泊してるのに…そうそう暴走するはずないでしょ？」

…まあ現在進行形で、おかしくなってるけどね。

説得力が無い。

「本当は？」

「っはああ!!!」

グリッと押し込める。

「…その…また…機会が…あればと……」

弱!! あっさり吐いた。

「つまり、また俺と肉体関係を持つのに期待したと…」

「…」

「…俺、貴女の娘の、彼氏なんですけど？」

「!!」

顔が別の意味で、赤くなった。

色々と葛藤し始めたのだろう。

…今更だなあ。

体を動かし、えっと…松葉崩しって言ったっけ？

その体位に変える。

そのまま、ご要望通りに腰を動かし始めた。  
グチャツとした音。

「んっあー！ こっ……これっ!! 奥に!!」

「…さつき、見られてどうでした?」

「あっ！ はっ!! はっ!!」

横で、ダイナミックに揺れる胸がすごい…。

グツとまた押し入れると、海老反りする様に体を反らせる。

「興奮しましたよね?」

「っ!!」

「…どうでした?」

「んっ！ なッ!!」

「その娘の彼氏に、好き勝手されるのは？ あんな事までさせられて…」

「くあっ!! あっあああ!!」

あ、またイった。

「あ…はあ…はあ…んっ…んっ!! ああ!!」

でも動きを止めない。

腰を動かし続ける。

「やっ!! やめっ!! 今アア!!」

「どうでしたでしょうか?」

乱暴な言葉は使わない。

ギリツギリの所で、いつもの様に接して、背徳感を押し付ける。  
言わせる。

完全に丸裸にして、快楽で屈服させる。

肉のぶつかる音だけが響く。

違う、段々と獣じみた喘ぎ声に変わっていく、しほさんの声も響く。

正常位に戻し…今度は体を抱き起こす。

そのまま騎乗位に。

ここで少し、しほさんへと主導権を渡してみる。

俺の上で、真上を向き…大きな胸を肺ごと揺らしている。

「…あ…」

「あ？」

「新しい…感覚でした……」

「……」

「頭中が…その…熱い感覚と…言うのでしょうか？」

「……」

「何も考えられなくなって…夢中に……」

「あそこで、あの男性にも奉仕しろって言ったらしました？」

「…わ…から……ない……」

背筋にゾクゾクとしたモノが走った。

この人…やっぱりドMだ。

普段、抑圧されているモノがすごいのだろう。

開放感を…非日常を酷く…強く求めている。

前回はまだ違ったが…それが娘の彼氏…俺なんだろう。

「そ…それが…とても怖い…」

年上の女性と思えない…まあ実際は、年下に当たるのか？

その女性が、狼狽した子供の様な表情をしていた。

まあ、他の男充てがうなんて真似はしないがな。

そのまま騎乗位になっているしほさんの尻を掴み、動いてとばかりに体を上下させた。

2、3回、動かしたただけで後は、もう…。

胸を揺らし、その胸を自身で愛撫し激しく俺の上で乱れ始めた。

体を倒し、口を吸い上げ…。

下から腰を突き上げれば、淫らな声を出し俺に応える。

何度か彼女の中に、吐き出した。

それでも萎えない。

顔に陰茎を近づければ、しほさんはもう、何も言わなくても奉仕をする。

「…後」

「ちゅぶ…なんですか？」

掃除中…というか、掃除まで教えたらしめてくれる様になった。

ただ、絶対に強い言葉は使わない。

「母娘ですよね…みほそつくりです」

「!?」

「精子…なんでそんなに好きなんですか?」

「…っ…ふ…あ!?!」

そう、飲む。

途中から出す時は、やたらと口にと求め始めた。

それが…みほを思い出させた。

後、しほさんは、みほと比べられるのを、非常に嫌がった。

…フリをしている。

何をする時も、時に名前を出す度に…ほぼ強制的にイカせられる。

…みほの名前を出す時、罪悪感を毎回覚えるが…これはもう、仕方ない。

甘んじて受け入れる。

そして今も、喉を鳴らして俺の吐き出したモノを飲み干している。



朝、8時頃。

「隆史君」

「…はい」

ホテルエントランス。

「随分と…まあ、しほさんの、肌のツヤがよろしいようですけど?」

「そ…そっすね…」

「……」

千代さんに、めっちゃ絡まれています。



完全に気がついてます。

…目が笑っていません…。

いやあ…結局…やりっぱなしで、朝を迎えました。

流石に不味いという事で、6時頃静かに自室に戻りました。

しほさんも勿論起きていたのですが…完全に俺を見る目が変わってしまいました…。

いやあ…やりすぎた…ストレス発散っぽくなってしまったのもアリ…うん、全開になってしまった。

ぶつちやけ、みほに対してあれを…欲望の限りを尽くすと…壊れそうで…。

遠慮して出来ない事も、本気でしほさんに吐き出した。

「はあ…見苦しいですよ？ 千代さん？」

「……」

ガタガタガタ…。

はい、すつごいなんか、テツカテカしてるしほさん。

「モラル…なんて言葉、もう私の口からは言えませんで自重します  
が…」

「」

「…はあ、私も少々期待していたというのに…今回は、先を越されま  
したね」

ん…？

「……ま…この後もありますから…期待しましょうか…ねえ？ 隆

史君？」

んん!?

「隆史君…」

「はい!？」

しほさんが、少し顔を近づけてきた！

「……私もまだイケマスヨ？」

「」

張り合ってる!! なんか張り合ってる!!

「さて、撮影会ですねえ…個室ですねえ…」

……。  
……。

なんだろう…え？ 千代さんも？ え!?

「しぼりんは、少し遠慮してくださいねえ？」  
「さあ？ どうでしょうか？」

調子に乗った、自業自得とはいえ…なぜだろう。  
なぜか本気になってる家元達を見て…。  
枯れていく自分が、ハッキリ見えた気がした。

※ルート壊 【宴編】※ ある日常の一コマ

放課後。

今日は、戦車道の放課後の練習も無く、生徒会実務に動んでいた。といつても、珍しく時間がかかる様な仕事もなく、荷物運びだけで終わる。

書類の山…。

ダンボールに入れられたソレらを、保管倉庫へと運んで終わり。

そう。本当に珍しく、定時…じゃない。

普段、帰宅部の一般学生達が帰れる様な、そんな時間に帰宅ができる。

ただ何もしないで帰るのは気が引けるので、せめてと思い、力仕事。そのまま直帰しても良いとの事。

そんな訳だから、さっさと終わらせて、とっと帰ろう。

杏会長達は、後日行われるエキシビジョンマッチの件で、もう暫くは学校に残るそうさ。

……違う。

いや…正確には、今日この日の定時帰宅は、桃先輩の気使いでもあった。

休め。

その一言…。

一応、俺も生徒会役員だし、手伝いの申し出を試みたが、その一言であっさり拒否された。

いつもなら馬車馬の如く、生徒会長に尽くせとばかりに言っていた桃先輩が、こんな珍しい…。

そんな訳で、即終了。

保管倉庫へ、ダンボールを入れ、鍵を閉めて…返して…。

10分もかからないで終わってしまった…。  
……。

時間は、まだ2時過ぎ。

2度目の登校日の為、午後の授業は一つしかなかった。といつても、ホームルームだけって感じ出しね。

すっごい、時間が余ってしまった。

うーん。

どうしよう…。

みほ達は、帰りに食材の買い物をして帰ると言っていたし…本当に特にやる事がないな…。

手伝いを申し入れたら、即答で断られたし…。

下駄箱で、靴に履き替え…このまま帰るのも…と、少し途方に暮れる。

「あっ…」

無理矢理何か、する事がないかと思いを巡らせてみると、一つ思い当たった。

例の宿直室。

いい加減に、鍵を直さないとまずいな…。

何時までも、鍵を掛けられないと問題があるな。

一般生徒は近づかないけど、下手に誰かがアソコに気が付くと、入り浸る輩がでそうだ。

良い、サボリ場所になるからね…飲食できるし…水道、トイレ…テレビまであるしな。

約一名は、速攻で気がついて、即さぼり場所に確定させたからな。

マコニャンには恨まれるかもしれないが、ダメだよなあ…壊れた鍵を放置するのは。

鍵自体に、形式番号か何か記載されているはずだし、携帯で写真を撮っておくか。

…後日、修理を頼もう。

思い立ったら…って事で、さっそくグラウンドを横切り、学校玄関口  
ビーから、結構な距離を歩いた。

例の宿直室へ到着し、さぼり防止の為にやって来たというのに…。  
これもちやっちゃと、済まそうと思ったというのに…いやあ…なん  
というか。

もういたよ、サボリ魔。

コンクリの玄関に脱ぎ捨てられた、学校指定のローファー。

ちゃんと並べましょうね…と、無意識にその靴を外向きに並べる。

小さい靴…ああ…もう。

部屋内を見なくとも、犯人が分かる。

四畳間の畳の部屋。

その中心に、押入れから出されただろう枕を、抱き抱える様にうつ  
伏せになって、小さな寝息を立てていた。

「はあ…まったたく…。いつからだ？」

独り言を呟きながら、そのまま彼女へと近づく。

上から見下ろした彼女は、口を半開きにして…まあ…気持ちよさそ  
うに寝ていた。

枕の上には、開かれた本…小説だろうか？ 完全に、読んでいる時  
に、寝落ちしましたって感じだ。

「…なにしてん、マコニヤン」

スーナー寝息が聞こえる。

ああ…制服が、シワになるぞ？

本当に何時からここにいるんだろ…？

昼休み、あんこうチームで飯食ってたから…ん？ ちゃんと教室  
戻ったんだよな？

ここ、比較的戦車倉庫から近いし…まさか…。

携帯を取り出し、即保護者様へ連絡を入れる…。

3コール程したら、明るい声が電話口から聞こえてきた。

『もしもし？ 隆史君？ どうしたの？』

「…あ、沙織さん？ ちょっと聞きたいんだけどさ…」  
『聞きたい事って…なに？』

「麻子…午後の授業出たよな？」  
『……………』

「…爆睡してる所を発見いたしました」  
『…まあこおお……………』

あ、この声の様子じゃ…。

『昼休み終わって…ちゃんと教室まで、送ったのに…』  
「うわ…やっぱりサボったか…」

『半日、丸々寝てたね…それは…』  
「やっぱり…。」

『どうしよ…今、みほりん達とスーパーにいるんだけど…戻ろうか？』  
「いや…いいよ。起こして連れて帰るよ」

『あ、うん。お願……………い…』

「こんな寝方していりや、そりゃー夜、寝れなくなるわな…」  
『……………』

「ん？ 沙織さん？」

『隆史君』

「ん？ なんですか？」

『…寝てる麻子に、いたずらしちゃダメだからね？』  
『……………』

い……………言うようになったねえ…沙織さん。

「しませんよ…」  
「まったく…。」

会話もソコソコに、通話を切った。

携帯を制服のポケットにしまうと、改めてマコニヤンを見下ろす。  
……………。

はあ…。

「麻子。ほら！ 起きろっ！」

軽く頬つぺたを叩くが、にゅあ？ にゅ？ んな、よく分らない声

を発するだけ。

あつ。

手を振り叩かれた…。

無意識にでも、睡眠を邪魔する俺を攻撃してきた。

沙織さんが、起こす時なんて、絶対にしないのに…。

…。

というか学校で、熟睡すんなよ…。

寝たふりとかでもなく、本気寝だな…こりや。

「……」

いたずら…。

そういや…マコニヤンが家に引っ越してからというもの…何もしてないな。

忙しさや何やら色々あつて、結局…大洗ホテルでしたのが最後か

…。

…。

スカートから白く細い足が伸びている…。

「……」

沙織さん。

モウシワケアリマセン。

ワタクシ、嘘ヲツキマシタ。

「起きないと…イタズラスルゾオ？」

◇

徐に、スカートを捲ってみる。

多分、大雑把に捲ったとしても、このマコニヤンなら気がつかないだろう。

中途半端にゆっくりと捲るより、こちらの方が気がつかれないと踏んだ。

シユツと少し、布が擦れる音…。

ふむ…。

青天の霹靂。

…。

意味は全く違うが、ただ青天と言いたかっただけです！

…。

今日は青ですね。

ぶりゅー…。

お尻の間に少し挟まり…できた下着のシワが、めちやくちやエロい。

こうやってマジマジと見ると…。

…マコニャンも結構な推進力をお持ちな様で…。

「…」

ここ数日、アレをしていない。

まあ。少し溜まっておりまして…少々、視覚的刺激が強い。

ムニツと、尻肉を手で揉んでみる。

「うむ…」

我。躊躇セツ。

やわらかい尻肉が、軽く形を変えた。

…。

…。

ぐにぐにと、揉んでいるとふと、思った。

そういや…最近、スキルつての使っていないなあ。

…たまには試してみるか？

しかし、それは完全に寝込みを襲う訳で…。

完全に最後までって事で…。

そんな卑怯な事出来るはずも…。

あ。俺、卑怯者だった。



ならいつつか!!

「……」

結構、なにも考えないと本当に躊躇なく、できるものだな……。前なら葛藤やら何やら：グジグジ考えてしまつて、思い切つた事なんてできなかったのに。

何度か肉体関係を継続している状態だと：罪悪感が和らいでいる。だから：うん。ちよつと欲望のまま動いてみようか？

：マコニヤンだし：前からやりたかつた事できそうだし：やつてみるか！

でも、いきなりは痛いだろうし：何か…。

あ。

アレ、使えるかな？

下手に愛撫して気がつかれたら、終わつちやうしな。

そのまま、パンツの両端に親指を掛ける。

残つた指で、腰骨を持ち：ゆつくりとお尻を上げる…。

更に、そのまま：ゆつくり：ゆつくり…。

「んん…っ」

!?

「…んん…スー…スー…」

つつぶねえ!!

気づかれ：いや、起こしてしまつたかと思つた…。

催眠とかあるし、強制的に眠らせるとかもありそうだけど…：それ

じゃ意味ないしな。

そのまま：作業を継続…。

ゆつくり…ゆつくり…。

段々と：更に白い桃が頭になつていく。

いや：しかし、マコニヤン：本当にエロい尻してるなあ…。

小ぶりなのだけど、なんというか：肉が…。

ゆつくり…ゆつくり…。

そして…

「っ!!」

成功…。

声に出さない雄叫びを上げる…。

戦利品を天へと掲げ…。

その青く薄い布を…。

…。

うん…途中で起きて、奪われたら台無しだしな…隠しておこう。

どこにとは言わないが…。

…次だ。

足を曲げさせ、お尻を更に手前に引く。

正座したまま、体を倒したかの様な姿勢にさせる為だった。

「……」

失敗した…。

膝立ちしながら、上半身を地面につけたような格好にしてみました。

これは…余計にエロくなった…。

秘部部分をお尻ごと突き出して、俺に見せつける様な姿勢…。

「……」

…我慢。

下手に手を出したら、水泡に帰す…。

…。

しかし、ここまでやっても、まだ起きないか。

まあ都合がいいけど…。

さて！ ここからが本番だ。

では、前回使用した…この…。

『リフレッシュ』&『EXP』

その、小さな菊門へとスキルを使用…やはり使えるな。

腸内浄化と経験値付与。

使用後、お尻の穴が…心なしか、いやらしくなって気がする。

…：性器としての機能を、兼ね備えたのだろう。  
…：うん。

我ながら鬼畜だよなあ…。

でも、起きないマコニヤンも悪いよね？

…。

悪いよな？

両手の親指を、唾液で湿らせる。

お尻を両手で鷲掴みにすると、軽く親指で菊門をいじってみる。

…：やわらかい。

「んっ…あ…。」

快楽を感じているかは、分からないが、親指を尻穴に少し沈める。

すると、少し甘い声が聞こえた。

そのまま、清潔になったソコに舌を入れる。

唾液を流し込む様に…。

さて…：本番だ。

あまりいぢくり回すと、気がついてしまう可能性がある。

ここは一気に行こうか。

ズボンを脱ぎ…：息子を露出させる。

うん…：すでにマックス状態にまでなっている、我が愚息。

少し、手で口の唾液を取り…：龟头を濡らす。

…：無理だな。

これじゃ多分、ダメだ。

何か…：他に…。

脳内を検索。

即、答えを見つけてた

あ…：あった。

スキルつてのは、便利だね…：というか、ずるいな。

まあ…：いいや。こういった事にしか使えないし、使わない。

『ローション』

手内に、粘着液のドロドロしたモノが出現した。

スキル名まんまだね…。このスキルも多様性がありそうだし…。

成分は唾液と一緒に  
無味無臭。

特段、害は無いが…ちよつと粘膜につけると、少々、媚薬効果もある…そうだ。

それを、自身の陰茎に塗りたいくる。

温度は体温と同じに設定した為、冷たくはない。…ちよつとキモチ悪いくらいかな。

さて…。

…先程、少しマコニヤンの菊門を愛撫してみたが…。  
スキルの効果もあるのだろう。

唾液で少し湿り、小さくパクパクと出口…いや、今からは入口だな。その入口が、誘うように開閉を繰り返している。

そのローションを流すこむ様に、塗りたいくる様に人差し指を入れた。

第二関節くらいで、周りを締められて、止まってしまふ。

そのまま少し…出し入れを試みる。

「…んっ…んっ…んっ…」

動かす度に、少し甘い声が出た。

感じているかは、やはり分からないが…枕を強く抱きしめていた…。

菊門から、余った粘着液が垂れている。

糸を引き…ぬらあ…つと。

……。

さて。

変に高鳴る心臓の鼓動を感じながら、その入口に早く入れたくなくなった。

…あ、俺も亀頭に塗ってしまったので…粘膜を通して媚薬効果もあり…興奮が倍増していく。

それはマコニヤンも、同じなのだろうか？

…無意識に荒い呼吸を、自分自身で繰り返していた。

陰茎を手で添えて…亀頭をその入口へ…。

又チツとした音がした。

そのまま、ゆつくりとマコニヤ：麻子へ入っていく。  
亀頭を全て飲み込んだ辺りで、止まった。  
き…きつつい…。

周りの肉壁が、異物を押し出そうと圧迫を始める。  
ので。

入る所までと…強引に…が、ゆつくりと一気に入れる。

「!? つ!? しょ つあ!!」

流石に目が覚めたのだろう。

どこで覚めたか分からないが、苦しいのか、声が出ない様だ。  
見開いた目が合った。

「つ…か…はっ…あ…あ…あ…」

ゆつくり…しかし、止まらず…。

「つ…はっ…はっ…」

クチツ…と、粘液同士が、合わさる音を立てた。

俺の体と、麻子の体が当たった為に。

要は…

「いやあ…全部、入ったな…」

声にならない悲鳴が、下から聞こえてくる。

麻子の腰に添えた手を引き…逃がさない。

ヒューヒューと、喉から息が漏れているな。

「な…っ…しよ…!」

涙目で、体をくねらせ、半身でこちらを睨んでくる。

でもなあ…逆に、変な感情が沸き上がってくるんだよ…その目は。

「マコニヤン、おはよう。というか、もう放課後だぞ?」

つつても、まだ、3時頃だけど。

「おっ…おまつ!!」

「んじや、動かすなああ」

「っ!!」

今度は、ゆつくりと少し引く…。

俺と麻子の体に着いた、粘液が糸を引く…。

「あ……はっ……あ……」

麻子から、声が漏れる。

半分程陰茎を引き、動きを止めると、少し楽になったのだろう。呪詛を吐きましたね。

「なっ……はっ……息が……うまく……できない……」

「大丈夫か？」

「ど……どの口が……というか……何を……」

「いや、マコニヤンを起こそうかと思いましたが」

「は!?! 何をっつ……あ……」

何か思い出したかの様な声をあげた。

顔が少し青いよ？

……。

というか……すごい。

肉壁が陰茎の細かい隙間を埋める様に、圧迫……絡み付いてくる……。

麻子は、こちらも名器なのだろうか？

だからだろう。

気持ちよさが半端じゃない。

少し動かすだけで、一気に持って行かれそうに……というか、もうイキそう。

すごいな……。

「んはっ!!」

半分まで引いていた陰茎を、今度は一気に奥までねじ込む。

そしてまたすぐに、半分ほどまで引き……一気にまたねじ込む。

「はっ!! はっ!!」

ニチツ……ニチツ……と音が繰り返し聞こえる。

起こしていると言う、過程の話はしたので、もういいか。

「っ……っま……どこに……いれ……んっ!!」

さてもういいや。

今度は、会話は不要。

そのまま出し入れを繰り返そう。

「はっ……はっ……ふっ……」

動かす度に、麻子の口から息と声が漏れる…。

いや…本当に気持ち良いな…。

すでに、こみ上げる物を感じる。

「んっ!! んっ!! んっ!!」

麻子の声にも変化出てきた。

今は口元を、枕で隠すように、力いっぱい枕を抱きしめている。

「んっ! あっ!! んっ!!」

…陰茎が熱い。

少しずつ、腰が早くなっていく…。

パツツパツツと、腰が当たる音…。

龟头が…膨らんだ気がした。

「っ!」

「んんっ!!」

…あっさり…と…果ててしまった…。

前置きも何もなしに…あっさり。

「あ……はっ……あっ……い……」

麻子の腰を引き…その中に全てを吐き出した。

ドクドクと、脈を打っているの感じる。

「はあ…はあ…」

息を切らして…っ…て…こんなに早く…いや…ちよつと情けない。

「……は……あ……う……」

だけど、まだ息子は元気でやっています。

硬くなっている陰茎を、抜かずにそのまま動かさない。

…というか、なんだろうか。

抜き出したくない。

「寝て…る私に…よりによって…どこに…」

ふーふーと、息を切らしながら、何か眩いている。

「あ……か…この…変態が…終わったなら…早く抜け…苦しい

んだ……」

「…」

苦しいか…それだけなら、俺も流石に遠慮するけど…。

「なあ…マコニヤン」

「こ…ここにきて…その呼び…か…」

「少し…感じ始めただろ？」

「っっ!!」

一瞬、体が硬直した。

「く…苦しいだけ…だあ…。早く…ぬ…んんっっ!!」

そのまま継続する事にした。

また一気に押し入れる。

中に増えた、体液という粘着液が、グチつと大きな音を立てた。

「…これで、更に滑りが良くなったし…大丈夫だろ？」

◇

な…なに!? なんなんだ!!

熱い…お尻がすぐく熱くなっている。

目を覚ました瞬間は、気がつかなかった。

書記が何度か動き…そして気がついた。

熱い中にも…動く感覚…。

「っ…っま…どこに…いれ…んっ!!」

ふっ!!

息がうまくできない…。

ニチニチと、下半身から音が聞こえてくる…。

…書記が動いてる。

私のお尻…に入れてる…。

本気か? そんな所に入るのか!?

「はっ…はっ…ふっ…」

なぜ…? え?

うまく思考が働かない。

圧迫感がすごいのもあるが…ヌルヌルと…それでもスムーズに…

書記のアレが、私の中で出し入れを繰り返している…。

熱い…熱い…あつ…。



「んっ!! んっ!! んっ!!」

自分でも気がつかなかった…。

声の質が変わっている…。

先程までは、ただ苦しいだけだったのだが、暫く…ゆつくりと出し入れされていると…なにか…湧き上がる感覚がある。

まずい…これは、まずい!!

起き上がろうと、両腕に力を込める…が、起き上がれない…。

突かれる度に、力が抜ける…。

まずい…本気でまずい。

書記に気づかれない様にしないと!

枕を抱きしめて、口元を隠す。

声が…できるだけ漏れない様に…。

「んっ! あっ!! んっ!!」

なんでだ? おかしいだろ?

こんな…お尻…初めてなのに…。

書記の動きが、少しずつ早くなっている。

なにか液体が押し出される音がする…。

グチュグチュと…。

その内、逃げれない様に腰を掴まれる…。

逃げれない様にというか…先程から腰にも足にも力が入らない…。

おかしい…おかしい……おかしい…。

圧迫感の中に、少しずつ…その…。

快楽が生まれてきた…。

おかしくなる……おかしくなる…。

こんなの普通じゃない…そこは、Hする所じゃない…。

なのに…。

「あっ! アっ! アッ!」

声が…出てしまう…。

書記の腰の動きが、更になが早くなっている…。

「っ!」

「んんっ!!」

書記が、一番奥にまで突き入れてきた…。  
中をこじ開けられる様に…大きいのが…。

「あ……はっ……あっ……い……」

なにか…流し込まれてる…。

お尻が熱くて、よく分からないが…自然に声が出てしまった。

ビクンツと書記の体が、何度か痙攣を繰り返していた…終わった…  
か？

「寝て…る私に……よりによつて…どこに…」

息を切らしながらも、恨み言を吐く…。

何と言う事をしてるんだ、こいつは!

「あ……か……この……変態が……終わったなら……早く抜け…苦しい  
んだ……」

「…」

書記が黙っている…。

半身をひねり…なんとか書記の顔を確認すると…。

「なあ…マコニヤン」

悪い顔をしてる…。

いかん…この書記はマズイ。

何をしてくるか、予想がつかない!

「こ……ここにきて…その呼び……か……」

そ…それでも、負けじと睨みながら言つてやると…。

「少し…感じ始めただろ?」

「っっ!!」

一瞬、体が硬直した。

バレていた。

バラされた。

はつきりとした快樂は感じなかったが…感じ始めていたのは事実。

おかしい。本当におかしい…こういつた事は、何度か回数や時間を  
かけないと快樂は感じ辛いものでは、ないのか?

それなのに、うっすらだけど、自覚できる程なんて…なにが…?

「く…苦しいだけ…だあ…。早く…ぬ…んんっ!!」

正直、認めてしまうと何をされるか分からない…その為否定するが…。

グチツと、音を立てる様に、書記がまた…私の中に…一番奥に入ってきた…。

「…これで、更に滑りが良くなったし…大丈夫だろ?」

なにか、恐ろしい事を言われた気がした。

部屋の中には、卑猥な音が響く…。

書記のアレが、私の中を何度も行き来を繰り返す。

再度動き出した時には、まだ熱さが酷く、うまく感覚がマヒをしていた。

だが…ゆつくりとまた動き出した書記は、私の手を取り…何かへ誘導するかの様な…そんな感じの動きをくり返していた。

私のお尻を何度か往復を繰り返す度に、音が…卑猥な音が変わっていく。

空気が漏れる音…なにか、水を混ぜる様な音…。

最初から数えて、すでに2回果てた書記の精液が…混ざり…空気を更に含んだ音…。

グチツグチツとした、音から…グポツグポツと空気が混ざった音…。

バチユツバチユツと、粘液が書記と私の体を粘つきながら、叩きつける音…。

…そう、最初から思った…。

なんで…痛みは感じなかったのだろう。

そして、なんで快楽を快楽と、認識できたんだろう…。

最後に…私の思考は…ここら辺でおかしくなっていた。

「すごいな、麻子。こんな短時間で、尻穴を使われるのが…もうそんなに気持ち良いのか？」

こいつのこういういった喋り方は、五十鈴さんと行為を行っている時に良くする…。

普段…こういういった喋り方は…しないのに。

「すごいな…声」

思考がおかしくなった。

要は…至極単純…。

そして至極簡単に…。

「アッ!! アッ!! アッ!!」

快楽に吞まれた。

すでに恥ずかしげもなく、獣地味た声を発していた。

気持ちよかった。

思考が飛ぶ程。

「えっと…こうか？」

グリツと、奥に突き入れ…

「ンッッ!! アア!!」

中からえぐり取るように…引かれる…。

少し、圧迫感から開放されたと思っただら…。

また隙間なく奥まで…。

…。

…もう…むり。

この腸内を抉られる感覚…。

…目の前が真っ白に…。

「んっんんんああっつ!!」



…スキルとは関係がないのか？

麻子は、尻穴で快楽を感じやすい身体なのだろうか？

俺が3回目を終える時には、すでに数回イっていた。

お尻周りが凄い事になっている。

抜かずに3回だった為、精液が麻子の中でシェイクされたのだから。  
う。

泡を立て…グツチャグチャになっている。

一度抜いてみると…ポツカリと丸く空いたままになった、麻子の尻穴から…グチュグチュの精液が垂れ流れている。

膝を立て…秘部の周りを流れ…落ちていく。

腰がビクンツビクンツと脈を打つように、痙攣を繰り返しているな…。

膝を立て…両腕は力無く投げ出されている…。

「…」

小さく呼吸を繰り返している麻子。

今回は速攻勝負という事で、雰囲気もなにも無く…完全に性処理みたいにしてしまった…。

秘部に人差し指を、ゆつくりと差し入れてみる。

クチュツとした音がした。

垂れ流れた精液と愛液が混ざり…ヌタァーとした液体が、指を覆う。  
う。

「んっ!! はっ!!」

あ…反応した…。

そのままかき混ぜると、逃げる事もなく、おとなしくされるがままだった。

前後にグチユグチユと、音を聴かせる様に激しくかき混ぜてみた。  
…すぐに目の前のお尻が、跳ね上がった…。  
またイツたのか。  
…。

「しよ…きい…」

「……」

もう一度、黒く空いたその穴に…一気に差し込む。

「んっあああ!!」

歓喜にも似た声が響く。

グリツと一番奥まで入れた状態で…両足に腕を差込み、スライドし…。

逆駅弁の体位へと体を移動させる。

そのまま立ち上がると…。

「…やっ…これは…やめ…恥ず…か」

いや…その表情が見たかったあ。

両足をバツクリと開かれ、御開帳のポーズ…だからね。

半分まだ意識を持っているのか、後ろから更に赤くなつた耳が見えた。  
さて、分身のスキル。

「っえ!」

目の前…対面に突如現れた、もう一人の俺に驚きの声を上げていた。

「書記!? えっ!? 後ろ…だ…書記!?」

おお…混乱してる、混乱してる。

下手に思考を巡らせる前に…。

グチユツと。

もう一人の俺に、前穴を塞がれた。

「んっんん!!」

ゆっくりと…俺に、前後の穴の奥まで犯される。

その体は力無く…前の俺に体事、寄りかかっている。

「ゆ…ゆめ…か? これは…は…は…」

はい。

では…もう一度…寝てもらいましょうかね？

ドロドロになっていた下半身を、更にドロドロになるまで前後から搔き回される。

声はもう発していない。

熱い吐息と、呼吸を繰り返している。

目が虚ろになり、その奥は怪しい光しか発していない。

「……あ……は……ん……あ……」

俺同士、コンビネーションは取るのは容易い。

同時に攻めたり…交互に攻めたり…。

そのまま、抜かずに何度も麻子の中の中、その奥まで俺で満たしてみた。

「……はう……あ……」

一度止め…油断した所で、また攻め入る。

攻める…。

攻める…。

攻める…。



「……………おい変態」

「…なんでしよう？」

「鬼畜」

「……………な……ん……」

「外道、女の敵、人攫い」  
「……………」

はい、そういった訳で、お姫様だつこで帰宅しております。

通学路…人目があまりなかった為に…おんぶも出来なかったの、  
こうして運こばせて頂いている訳ですね。

うん…。

目的は達成。

寝ているマコニヤンを…起こして…寝かしつける…。  
帰りの事まで、考えてなかった…。

流石に分身は夢だと思っていたらしく、俺が寝込みを襲って、マコニヤンの後ろの初めても頂きました！

って…事で、本人は納得しているようだ。

…が。

お姫様抱っこで運んでる最中、目を起こされたようで…。

「クズ、レイプ魔、カス、ゴミ、死ね」

「……」

はい、延々と怨嗟の声を聞いております…。

こんな状態ですから、人に見られ、聞かれ…勘違いされても困りませんから…今は普段通らない公園を突っ切っています。

「…いい加減、下ろせ」

はい、ご希望でしたので、下ろしました。

公園の中央…そろそろ5時ですねえ…人…いない…。

「…良くも寝ている私に…あんな事…」

はい、手首を掴んでいますね…。

…ん？ あれ？

「…どうした？ 足、震えてるけど…」

「誰かさんのせいで、腰が抜けて上手く立てないんだ!!」

「…スイマセン」

「まったく!! 死ね! このへんた…い…い…?」

「あれ? どうした?」

バツと、スカートを両手で押さえた。

そのまま、顔が段々とまた、赤くなっていく…。

「つつ!! つつ!!」

……?

本当にどうしたんだろ…。

「ぱっ!!?? パンツ!!??」



あ…抜き取って、そのままポケットに入れっぱなしだ…。  
うん、パンチユ。

「おまつ!! えっ!! つっ!!!」

今度は、なんだ? 別の事に驚いているようだ…。

あ…。

内ももに…液体が上から誰落ちてきている…。

ああ…リフレツシユは…表面上しかかけてなかったなあ…。

「垂れッ!! 溢れてっ!!」

「……」

「だ…出しすぎだ…この変態が…出てきちやっただじゃ…」

片手をマコニヤンの肩に置くと…そのまま素早く。もう片方の手を動かす。

そしてそのまますくい上げ、またお姫様抱っこをする。

立ったままだと、出てちやうからね。

うん。

でも、その姿がすつごくエロくて…ですね?

一生懸命、股を押さえて…。

……。

「っ!? 何を?!?!」

「マコニヤン」

「…なっ!? 下ろせ!! おかしいぞ!? 目がおかしいぞ変態!!」

「…金のない、高校生らしく…ですね?」

「はっ!? 金!?!」

「そこに公衆トイレが…ございますね」

「…お…書記…まさか…」

「今日は俺、欲望のままにマコニヤンを抱こうと、初めに思いまして…初志貫徹を貫きたく…」

「……え……」

「マコニヤンは、どうやら…尻穴が気に入った…ようだしな…」

「書記…やめろ…その、意地の悪い喋り方は…やめろ…」

スイッチを切り替える。

もう一度、ドSモードへ。

正直、最中にしかこういった喋り方は、しないのだけど…。

「まだ…一回くらいはできる時間あるしね…んじや、麻子」

「やめろ！ マコニヤンで良い!! 今のお前に、普通に名前を呼ばれると、恐怖しかわかない!!」

「…行こうか?」

はい。

そうして、一回で済む訳が無く…。

ドS気全開になってしまった為に…多少無茶をしてしまい…。

一時間後。

腰が完全に抜けた麻子を、抱き抱えたまま…日が落ちて暗くなた夜道を帰っていった。

家に帰ったら…みほど、華さんに怒られて…今日という日が中々終わりませんでした…。

◆ ルート正史 ◆ 続・男子会です！ P I N K 前半

『ま…まあ、そうだろうけど…』

『はっはー。大丈夫、大丈夫』

『お前…その信頼はどこからくるんだろ…』

∨

アイツが寄せる、変な信頼感に会場中の全員が、が押し黙ってしまっただ。

…。

わ…私は別に気にはしないのだけど、なぜだろうか？

隊長とみほの、墓まで持っていこうって言葉に、心のどこかで同意してしまっただ…。

∨

『よし、後は報告して終わりだ！ 俺は…少し寝る…』

『お…おお！ 寝ろ！ マジで寝ろ!!』

『お前らどうするの?』

『流石に帰るわ…俺らも流石に疲れた…』

『だな…』

∨

ああ…漸く終わる…。

特に私は気にしないけど！

「カチューシャ、起きてください。帰りますよ?」

「ん…?」

お子様隊長…寝てんじゃないわよ。

他の連中は…尾形とロビーとかで、鉢合わせなんかにはならない様

にだろう。

各学校の連中が、急いで帰り支度を始めた。

眺めていると隊長が、どこか暗い顔で声を掛けてくる。

「……帰るぞ、エリカ」

「…はい」

そうね。

私は、気にしないけど！ ……終わったのならば、さっさと帰ろう…。

はあ…。

黒いけどウエディングドレス…。

変な物を着させられる羽目になってしまった…。

ウエディングドレス…。

…黒いけど。

ウエディングドレス…。

「エリカ、…何をニヤケている？」

「いっ！ いえっ！ その…漸く帰れると…」

「……」

「……」

すごい目で見られてる…。

顔さらその視線から逃れると、その先には、あの泡を吹いたハゲが

…家元に引きずられて、会場から退場していった。

まあ、あの家元二人から、おもいつきり最後、睨まれていたからね。

気絶してしまったのだろう。

…いい気味ね。

各高校が会場から、各々退場していこうとした時…。

テレビ画面から、新たな声が聞こえてきた。

▽

『んあ？ お前ら何してんの？ 帰るんじゃないのか？』

▽

おに…尾形？

テレビ画面から聞こえてきた声に再度目をやると、机の上に他の男共が、ファイルの様な物を取り出していた。

なに…？

∨

『いやさ？ ちよつと実家に戻る用があるもんでさあ。今日、この打ち合わせの後、中村とトレードの約束してたんだ』

『林田は、学園艦に戻らねえからか？』

『そうそう、そういう事。ちよつと机かりるわ。流石にホテルのロビーじゃ、こんなの広げられねえよ』

『尾形は、寝に行つていいぞ？ この部屋の鍵は返しておくから』

『いや…一応責任者だし、いいよ。そのくらいは待つてやる』

『サンキュー』

『それにしてもトレード？ なんの？』

『前段の、乙女の戦車道チョコカード』

『俺、ダーズリン選手持つてなくてなあ…』

『ああ中村、ダーズリン選手のファンだったな』

『そーそ』

∨

……。

何故だろうか。

退場しようとしていた、各高校の生徒達が、結局足を止めて、立つたままテレビ画面を見ている。

また何か始まろうとしてるの？

∨

『…出ないんだよなあ。ダージリン選手の水着のカード…』  
『カードの売買が、完全に規制されてっから、知り合い同士でのトレードか、自力で出すしかないんだよ』

『あー…そうだったな。変な所でマメだよな、連盟』

『一応、ダブったの持ってきたからさ…その交換って訳だ』

『ふくん』

『ちなみに、尾形は持ってるか？ ダージリン選手の水着カード』

『流石に無いだろ？ ダージリンさんの水着カードの方も、確率低いし…』

『 あるよ？ 』

『 …… 』

『ん？ なんだよ』

『…西住姉妹も持ってて…ダージリン選手のもか……？』

『ダー様の水着カードだろ？ SRの』

『 そうだな 』

『 5枚程持つてる 』

『 『 っっ?!!? 』 』

✓

『ダージリン様？』

『何かしら？ ペコ？♪』

『…何をそんなに、嬉しそうなんですか』

『いえ…少々、運命論というモノを、信じたくなりましたわ』

『 …… 』

『…私は、まだこの時はカードになっっていなかったし…だからでは？』

『あら、アツサム？ 遠吠え？』

『 …… 』

『何の…とは、申しませんが…少々その…ねえ？』

『 …… 』 コノ…

聖グロリアーナが、ギスギスしてる…。

◇

『ゴールデンボックスって言ったか？ あれ引き当てた時とか、すげえ高確率で入ってたな』

『』

『スーパ〜とかで、入荷される度に、店側に用入荷されるみたいだったんで、それ含めてまとめ買いした。結果的にそっちの方が、安く済むからな』

『な…そ…そんな裏技が…』

『結果、ダージリンが、5回ダブった』

◇

『…』

『だ…だーじりん様』

会場内が、押し殺したかのような声の笑いで包まれた…。

◇

『…尾形。言い方…』

『ちなみに、制服SRも3枚ある。プリズム仕様が違うのも1枚あるな』

『』

『尾形…』

『なんだよ、中村』

『…交換してください』

『…』

『…』

『…はあ、土下座すんな…』

『もう！ 本当に出ないんだよ!! 林田、1枚しか持ってないからトレードしてくれねえし!! 頼むから!!』

『まあ、俺持つてるのって、制服のカードだけだな』

『……』

『売ってくれても構わないから!!』

『友人同士での、金のやり取りはする気はないぞ?』

『あつ!! あれとトレードならどうだ!?!』

『…なに?』

『家元のLR!!』

『なつ!! お前、持つてるのか!?!』

『決勝戦会場でも売っててな! そんな時何となく買ったら出たんだ!!』

◇

『………』

『…エリカ? どうした? 顔色が悪いぞ?』

『…いえ』

……。

………。

◇

『どうだ!?! お前、家元好きだろ!?! 若い頃のだぞ!?!?』

『…く…口惜しいが、いらん』

『なあ!?!?』

『先着がある…そちらの約束を、反故にする訳にはいかん』

『…そ…そうか』

『お? 中村、あつさりと、引き下がったな』

『いいか…林田。こいつが家元関係を諦めるって事は、何言っても無駄だ。硬い決意があるのだろうか…』



『……決意って』

『まあ、中村。トレードじゃなくて、一枚ならやるから』  
『!?!?』

『…お前、本気でダージリンのファンだしな…まあいいだろ…。試合  
会場での礼を兼ねて、やるよ』

『!!』

『…泣くほどか……すげえ、ガッツポーズとってるな…』

『ありがとう!! ありがとうございます!! 尾形あ!!』

『…あ…ああ、うん。それにお前、またロクに飯食ってないだろ? 今  
度家に来い。そんな時に、ついでに食わせてやるから』

『わかった!!!』

∨

「ダージリン様?」

「い…いえ、正直に言ってしまうと…隆史さんが、私のカードをご友人  
に差し上げるといふのは、少し寂しく感じたのですけど…」

「…まあ、何枚も持つてるらしいですし…」

「ええ。それにあのご友人の方…アソコまで喜んで頂いて…まあ?

それはそれで、悪い気はしませんわね」

聖グロの隊長が、少しはしゃいでいるのが、聞こえてくる。

…まつ! どうでもいいけどね!!

「エリカ?」

「なんですか!?! 隊長!!」

「い…いや、今度はえらく顔色が良いな…」

「気のせいです!! さあ! 学園艦へ帰りましょう!!」

「そ…そうだな」

安心…いえ、なんかもう、どうでもいいわ!

テレビ画面でも、後は野郎同士が、カードの話しかしなくなったし

!

他の連中も、腰を上げて本当に帰りそう!!

∨

『しかし、家元カードを諦めるとは…』

『なんだよ』

『トレード相手って、女か？』

『なんで、そうなるんだよ！』

『いや…お前、俺達以外に、男友達いねえだろ』

『……………』

『林田…お前…尾形が、固まったぞ？』

『…って事は、その女の方が、家元以上に大事だと…』

『飛躍しすぎだろ…って、そうとも言えないか？ まあ、いくら約束と

はいえ、西住流家元より、そちらの女をとった…と…』

『……………』

『…浮気相手かな？』

『……西住さんに言っておいた方が、いいかな？』

『やめろ!! 深い意味なんてないわ!!』

『…まあ、そういう事にしておいてやろう』

∨

「…今度は顔が赤いぞ？エリカ」

「にゃ!! にやんでもありません!!!」

「……………本当にどうした？」

深い意味はありませんから!!

林田とか言う男の、最後の眩きとか関係ありませんから!!

「…に…西住？」

「……………」

あら？ みほが、押し黙ったわね!!

別に深い意味は無いけど、いい気味ね!!!

『しっかし、中村が、ダーズリンさんのファンだったなんて、知らなんだなあ』

『そうか?』

『そーいや、他県まで試合見に行ってたな』

『まあな』

『…まあいいや。尾形。取り敢えず突っ立ってないで、座ってお茶でも飲め』

『お? おお』

『林田!!??』

∨

……。

……………。

あの男…何かするつもりだろうか?

お茶…酒を追加で勧めたわよ?

あ…出口付近にまで行った、他校の連中が、席に戻ってきた…。

∨

『ダーズリンさんって、この人だろ?』

『…えっと…そうそう、このカードの人』

『……』

『…どうした?』

『…すげえな尾形』

『なにがよ?』

『お前この美人…振ったんだろ?』

『』

∨

「お…面白いことを仰る、殿方ね…」カチャカチャカチャツ！  
「…ダージン様」

聖グロ…うるさいわね。

ティーカップを鳴らさないでよ。

∨

『おおすげえ。尾形の顔が、真っ青になった』

『まあ言ってやるな、林田。多分、まだその段階にいつてねえなコリヤ』

『中村は良いのか？』

『何が？』

『この人のファンだったんだろ？』

『ああ…なるほど。俺はあくまでファンだよ。…それに』

『それに？』

『…戦車道してる人達って…変わり者多いから…。恋愛対象に見ない様にしてんだよ…』

∨

「」

「ア…アリサ…」

サンダースの一人が突っ伏したわね…なに？

それになに？ あの優男。

変わり者？ 失礼ね…って、そうね…みほとか変な熊のぬいぐるみ  
集めたりとか…。

一部変わり者がいるのは、間違いないわね！

∨

『尾形』

『な…なんだよ』

『お前がこの美人と、そういった関係になるのって…想像つかねえ…』  
『俺、本人もそう思うよ…』

『そつかく…これが、尾形がお茶飲んでる時にバツクで攻めて、邪魔したい人かあ…』

『改めて、言葉にして言うな』

『…林田…お前…』

∨

「?????」

「どういう事でしょうか？」

「さあ？」

「隆史さん、お茶会の時とか…私に、いたずらしたかったんでしょうか？」

「まあ、少し子供っぽい所もありますし…まあそれもギャップですね」

……。

……え？

ちよつと…え？

いやいや…まさかね…。

「西住い!!」

「と…止めましょう!!」

何?!? すぐ横に座っていた、大洗の副隊長が、勢い良く立ち上がったわね…。

いきなり大きな声出さないでよ。

「どうした、みほ。何を慌てる」

「お…お姉ちゃん!!」

顔が真っ赤…。

あれ…？

じゃあ…さっきの意味って…そのまんま!?

みほの代わりに、大洗の副隊長が話し始めた!!

「前回、無線垂れ流し事件と言う物が、大洗学園であつてな…」

「なんだ？ それは…」

「男の子同士…あの三人の会話が聞こえて来たのだが…」

大洗の副隊長の説明に、なぜだろう…。

この場にいる全員が清聴している…。

顔を真っ赤にし…そのまま手を机に叩きつけて…………。

「あの三馬鹿共が集まると…卑猥な話しかせん!!!」

なんか、とんでもない事を言い放った。

「しかも!! 今の尾形は、酒が入ってる状態だ!!!」

《!!??》

「素面でアレだったんだ……………本当に今回、何をのたまうか…わからんぞ……………」

…………あ。

その説明に、聖グロのアッサムって人だけが、顔を真っ赤に染め上げた。

あの人は、あの意味分かったんだ…。

あ…うん…会場で、顔を赤くしている人だけは、理解できたって事は…分かりやすい。

隊長は、涼しい顔をしているので…なんだろうか？

この人、結構ソツチ方面は鈍いからなあ…。

あれ!?! 座るんですか!?! 帰るんじゃないんですか!?!

「ふむ…それは、興味が沸くな」

「お姉ちゃん!?!」

「まあ、朴念仁の隆史だ。私に腕を組まれて、赤面するくらいだぞ? そんな隆史のそういつた話しには、多少興味がある」

「ダメだよ、お姉ちゃん!! 隆史君、想像以上にアレだよ!? 前回もみんなそう言って、それで大洗の皆が、撃沈していったんだよ!」

「ふっ…大丈夫だ」

「フリじゃないよ!! 本気で言ってるんだよ!!」

…わ…私には分かった。

あの一言で、尾形の…その…。

「いえ…あの…隊長」

「なんだ?」

「先程の聖グロリアーナの隊長へ…その、あいつの…その…えっと…意味お分かりになりました?」

言葉にして言えるかあ!!

「ん? ダージリンが、お茶飲んでる所を、後ろから邪魔したいってだけだろう?」

「……」

「ただのイタズラだろう?」

「……」

この人…思いの他…純……

「まあ…よろしいのではないですか?」

「島田さん!」

「…毒を食らわば皿まで…ここまで聞いていたのですから、もう一緒にでは…」

「毒って…」

その一言が、皆を納得させたのか…。

あ…全員が席に座っている。

隊長もだし…。

「…丁度、堅物のしほさんは、いませんしね」

「島田さん!! わ…私は、帰ります!!」

「私もだ!! もしくは…強制的にでも終わらせ…」

「はいはい、情報が漏れるとダメですからねえ…おとなしく拝聴しましょうねえ」

「ピッ!」

逃げようとしたのか…それとも強引にテレビ画面を破壊でもしようとしたのか…。

大洗学園の二人は、島田流家元に腕を捕まれ…強引に座らされたわね。

あゝあ…大洗の副隊長…完全に島田流家元のおてられたわね…。

白目むいちゃってまあ…。

「貴女達もお…彼に異性として見られているかって…気にならないのかしらあ？」

島田流家元が、会場中に流し目で意味深に言い放った。

ぬ…。

全員が動かない…。

▽

『…またその話かあ？』

『いやな？ 今日、ロビーで色々な学校の選手見てさあ…』

『まあ、各学校の隊長、副隊長が揃ってるな』

『尾形の場合、他の選手相手だと、どんな面白いこと言ってくれるかなあ…って思ってる』

『……………』

『林田…。まあ…それは、正直俺も興味あるが…尾形、そろそろ休ませてやれよ…』

『…衣装決めた順番で良いと思うんだ』

『……………』

『無視すんな、話を進めるな！』

『中村、俺さ……………』

『なんだよ』

『最近な…？ 広告とかで、優しそうな父親と母親。それと子供って組み合わせのイラストとか、よくあるだろ？』

『は？ …分かるけど…それが？』

『…いや…そんな純そうな夫婦も、ガッツン、ガッツンやって子供作っ



たんかあ…とか、思っちゃって…」

『…』

『…現実…戻りたい…』

『お前…』

『童貞こじらせてるなあ…』

『ほらっ!! 尾形、西住さんと付き合う前になんか、色々あったんだろ!?!』

『…まあうん。そうだけど…』

『もし! そんな時の別の人達と付き合ったら、どうすんの!? あの怖い人達相手に!!』

『怖い人って…』

『想像が! できない!!』

『…お前、ただエロい話したいだけだろ…』

『いや…尾形な? そういった目線で彼女達見れるか? さつきも言ったけど俺。無理!』

『実際問題、どうなんだ? 想像つくか?』

『いや…まあ…みほ以外と付き合ってたら…ねえ…?』

「さあ? どうかしら? いいわよお? 今なら出て行っても…」

島田流家元が、畳んだ扇子で口元を隠し…すごく嬉しそうに会場の全員を挑発する。

「私は娘の今後の対策の為に、見てくわあ?」

そのまま、席に座ってテレビ画面に、顔を向けた。

…会場の誰もが動かない…。

「まっ…いいですわ。私は興味がありますもの…」

ダージリンの周りに聴かせる様な呟き。

興味があるとはつきりと言った、その言葉に、もはや誰も帰る気をなくしたようだった…。

サンダースの一部を除いて。

…私は帰りたい…わよ?

へ 聖グロリアーナの場合 へ

『このダーズリンさんなんて、俺には想像もつかねえ…』

『まあ…そうだな』

『…しかしこの人…肌キレイだし…すげえ美人だよな』

『林田、どうした？ やけにダー様、押すな』

『…』

『…林田？』

『でも、性癖ひん曲がってそう…』

『あ、それは俺もそう思う。上流階級に人っぽいな。…多いんだよな…そっち系の人』

『…林田…中村…』

『すげえ、顔面騎乗位とか強制してきそう』

『Sつ気がすごそうだもんな。でもな？ 言葉にすんな林田』

『…そこで、紅茶良く飲んでるみたいだし……なんか、飲まされそう…』

『OK、林田。ブレーキ』

『それでもこの人…ダーズリンさんのダーズリンなら、俺はイケソウ…』

『ブレーキだって、言ってるんだろ!? 見ろ、林田！ あの尾形が引いてるぞ?!』

へ

へ

『…ダーズリン様？』

完全に青くなって、微動だにしなくなったわ…。

それでも、微笑を崩さないのは、流石というか…ただ、壊れたというか…。

「あの…アッサム様？　なぜ…あのダージリ…「オレンジペコには…まだ早いわ…」」

「??」

この場合…早いも遅いもない…。

あ…半数は意味が分かったのか…島田流家元まで笑顔のまま固まった…。

男つてのは…。

きもっ！

◇

『いや…あのな？　ダージリン…ああ見えて、そっち方面は結構奥手だぞ？』

『そうなのか？　結構、グイグイお前に迫っていた気がするけど…？』  
『ありや、ある意味強がつてるようなもんだろ？　男なれしてないから、どうすれば良いか分からないんだろ』

『…いや、分からないから、迫るって…』

『…カチューシャに現地妻やら、変な言葉教えたり…どうせそれと一緒に、変な所での情報を鵜呑みにしたんだろ…』

『現地妻って…』

『まあ…後、青森で色々…初対面の時とかもそうだし…。変な男に騙されないか、たまに心配になる…』

『すでにお前に、騙されてるしな』

『……』

◇

「……」

全員が、腕を組んで頷いてるわね…。

∨

『じゃあ、何か？ お前がダージリン選手と付き合っていたら…えっらいプラトニックな関係にでもなるんか？』

『無理だろ』

『聞いておいてなんだが…そうだな、どう考えても無理だな』  
『……』

『どうした変態。なんか言い訳でもあるのか？』

『いや…ないな』

『お…。自覚はあんのか』

『いや…まあ、男同士だから言うのだけどな？』

『『言え言え!!』』

『…ダージリン相手だと、暴走しそう…無茶しちやいそう…』

『まあ…ダージリン選手…エロいな。気持ちは分かる』

『あそこまでくると…権化だよな…何しても、どんな格好してもエロい…』

『そうそう！ ダージリンって、基本的に淑女たるもの、常に優雅に美しく…って、言っていてな？ それを自身で体现してるんだよ。…エロいけど』

『そうだな。ノーブルシスターズ…だっけか？ 他の生徒の模範になってるみたいだな？ …エロいけど』

『そこを崩したくなる…』

『『分かる!!』』

『めっちゃくちや、乱れさせたくない!!』

『『すっげえ分かる!!』』

『…そこで、前回のだ…』

『バツクか!!』

『なるほど!!』

『なんだかんだで、ダー様何しても、許してくれそうだし!! 取り敢えず、あの黒いストッキングやぶきたい!!』

『尾形の……エンジン温まってきましたね!!』

『…林田、なんで秋山さんの真似したんだ…すげえ似てるけど』

『夕方の教室とかで、すげえ襲いたくなる!!』

『あ…本格的に、尾形のスイツチ入ったな』

『ダージリンは、立ちバックが異様に似合うと思うんだ!!』

『お帰り！ 尾形（壊）!!』

◇

「みほさん!!」

「…なんですか？」

「あっ！ あっ…あれ!!」

「だから言ったじゃないですか!! あの三人が集まると、おかしな事になるんです!!」

「ダージリン…」

「アツサム!」

「良かったわね…女性として見られていて…」

「慰めにもなっています！ エロいって、言われました…私、淑女です。 淑女ですのにい…」

「世の男性は、そこにエロスを感じるそうよ？ …データによると…清楚な女性を辱める事に興奮をする男性は、多数いらつしやいます」  
「捨てておしまいなさい！ そんなデータ!!」

◇

『ただな…』

『うお!? テンションが一気に下がったな…』

『……ダージリンが、行為自体に慣れてくるとな…?』

『…くると?』

『逆に、枯れるまで搾り取られそうでな…』

『……』

『どうにも…華さんと、同じ雰囲気を感じるんだ…すつごい迫られそ

うでな…』

『 …… 』

『そんな訳で、ダージリンだと、そっち方面は乱れた生活になりそう…』

『 …… 』

◇

「 …… 」カチャカチャカチャッ!

「ダージリン：顔、すごい色してるわよ？」

「こ…こんな言葉を知ってる？」

「…はい、たまにはちやんと聞いてあげます」

「オレンジペコ…」

「愛せなければ、通過せよ」

「ドイツの哲学者、ニーチエですね？」

「 …… 」

「 …… 」

「ダージリン様？」

「…ま…まあ、隆史さんも男性ですし…あ…ある意味仕方がない…と…」

「 …… 」チョット、オモイデス…

◇

『はい、んじゃ次ね。オレンジペコさん』

『ロリ粹だな。どうなんだ？ そっち方面は』

『…さりげなく限定したな』

『ただイチャつけるって話を聞いてもつまらん。俺らは、お前の変態性に娯楽を感じるんだ』

『…林田。お前も結構、口で破滅するタイプだな…』

『で!? どうだ?』

『：オペ子かぁ：普通だな。多分、暴走しないと思うな』

『えっ!? お前が!? 嘘だろ!?!』

『なんでだよ…。オペ子だろ? 普通が一番だぞ? 普通に：イチヤつけそうだよ』

『あの子、お前に対してなら、なんでもしてくれそうな気がするけど…』

『は? あぁ：まぁ：そうだなぁ。無茶言っても戸惑いながらも、してくれそうだけど…』

『毎回思うが、お前のオレンジペコ選手に対しては、なんか：変に優しいよな…』

『そうか?』

『：西住さんが、また勘違いするぞ?』

『むう…』

『……』

あの子が、真つ赤になって俯いてるわね…。

…。つきりそちらの隊長さんに、勝ち誇る顔でもするかと思ったけど…。

あの子も結構、黒いのよね…。

『ただなあ…』

『なんだよ』

『もしオペ子と付き合っていたら：多分、手は暫く出さなないだろうな…』

『結構、露骨に言ったな：なんでまた?』

『いや：なんか、壊しちゃいそうで怖い…。関係性も：その体自体も…：…：…：…：…：…：…：…：…：…：…：…：…：…：…：…』

『……』

『すまん、尾形』

『なんだよ』

『…普通に恋愛相談みたいになりそうなんで、オレンジペコ選手の話は危険だ。やめておこう』

『……』

『へたをすると、余計な事を吹き込んだと、俺が西住さんに刺されそう  
だ』

『…わ、分かった』

〈

「だっ…大丈夫です！ 隆史様なら優しくリードしてくれます!!」

「オレンジペコ…。真っ赤になって、何を口走ってるの…」

「だから、手を出して頂いて結構です!!」

「赤面して涙目になるくらい恥ずかしいなら、言わなくてよろ…みほ  
さん？」

みほが、なんか赤くなって顔を左右に振っている…。

なんなの？

まあ…彼女の立場なら…この場にいたくないでしょうけど…。

「…あの時の隆史君は…野獣さんだよ…」

眩きが、小声で聞こえない。

言いたい事があるなら、大きな声で言いなさいよ。

〈

『そういや、林田。今回は静かだな？』

『ん？ オレンジペコさん？』

『そうそう。元気がないな』

『いや…ちよつと圏外で…』

『圏外って…』

『なんだ？ 俺のオペ子に不満か？』



『俺のつて…』

〈

「そうです！ 貴方のオペ子です!!」

「…ペコ。貴女…。隆史さんも…サラッと、そういった事を言うから…」

「…西住姉妹が、アップを始めたわね」

〈

『いや…だつてさ……』

『だつて?』

『あの子、胸ないだろ? 俺はおっきのが好きだ』

〈

「……」

「ペ…ペコ?」

〈

『可愛い子だとは思うけど…尾形は巨乳派頭目だから、正直あの娘が、お前の守備圏内にいるのが不思議で仕方がない』

『なんだよ、その派閥は…』

『どいつもこいつも、大きさは関係ないとか!? それ自体が尊いだあ!!? 綺麗事並べやがって!!』

『お前なあ…』

『大きい方がいいだろ!? いいに決まってるだろ!!??』

『……』

∨

「あ、ローズヒップさん？ ちょっと、チャールル持ってきて貰えますか？ 今。 すぐ。 急いで」

「…ペコ」

「砲弾は結構ですよ？ 引くだけですから。 あ、チャールル・クロコダイルでも結構です」

「……」

「あ、ダーズリン様？ ちょっと私、あの方ぶつ殺してきますね？」

「お…おやめなさい…はしたない…」

「なんでこの子、笑顔なのかしら…」

∨

「…!?!」

『どうした、林田』

『…な…なんか、すつごい悪寒が走った…』

『お前が変な事、言うからだろうが…』

『…お前、直接本人にそんな事言うなよ？』

『言わねえよ！ っていうか、会う事もないだろうしな』

『それにな？ オペ子って、装填手だから…多分、お前より腕力あるぞ？』

『……』

『もし出会えたとして…下手な事言うと、握り潰されるかもな』

『…だ…だから、会う事なんてない…別の学校だろ…』

『その内、大洗とまた対戦するかもしれないから、一概に会わないとは言えないだろ』

『……』

『……』

『…つ…次行ってくれ』

「あの男のせいで…私の事を隆史様が、あまり言ってくれませんでした…」

「…言われたかったのかしら？」

「…隆史様の趣向を、知っておきたかったのにい」

〈

『さて…アツサム選手…だな』

『尾形の混浴相手だな』

『…』

『で？ どうだ？ 尾形』

『うん…アツサムさんかあ…なんか、想像つかないなあ…。付き合ったとしてもどうしたらいいか、まったく分からないな』

『まあ、あの人もガチのお嬢様って感じだもんな。気持ち分かる』

『それ言ったら、みほも良いトコのお嬢様なだけだな』

〈

『…』

「…アツサム」

「…なに？」

「どんまいっ！」

「だあじりいん…くっ！」

グロリアーナの隊長が…親指立て、また…すっごい笑顔ね…。

〈

『あくでも』

『でも?』

『アツサムさんって…すげえむっつり…いや、Mぽいんだよなあ』

『あのお嬢様が?』

『あっち系は…あ。なんか…想像ついてきた…』

『壊れた尾形のエンジンが、掛かり始めましたね』

『漸くだな…こうなると面白いよな』

『ダージリン選手の時も大概だったけど…あれは前の事、聞いたただけだしなあ』

『さて…』

『…アツサムさんって、データ主義なんだよ』

『データ主義?』

『おお。んで、ちよこちよこノーパソいじってんだけどさ…』

『…』

『…すげえ…後ろから邪魔したい…』

『ま…まあ、想像付いたけど…尾形だし…』

『んで』

『…』

『…自分自身のデータを集計させて…エロくなつてく状態をデータとして本人に出させたい。そして自覚させたい』

『…』

『…数値にさせたら…多分、凄い事になりそうなほど…アツサムさんも、ダージリンに匹敵する程、エロいと思うんだ』

『お帰り!! ドS尾形(壊)!!』

『そう!! 俺達の想像の斜め上に行くのが、お前だ!!』

『付き合っていたら、結構長い時間一緒にいる事になりそうだし! 相当いいデータが取れると思うんだ!』

◇

」

「…よ…よかったですわね? 想像がついたみたいですよわ」

」

もはや…言葉もない…。

「アツサム様…」

「ちっ！ ちがっ!!! 隆史さん!! 何故…あ…ああ!! もしかして…記憶…戻った…? 思い出した!?!」

「…ちよつと、こちらに來なさい、アツサム」

「お話を少々お伺いしたいのですけど? アツサム様?」

く

『あとアレだ! アツサムさんって、リボンがうさ耳…みた…い…』

『あ? どうした?』

『しまった…』

『いや…本当にどうした、尾形』

『カードの衣装…今更もう一つ浮かんだ…というか、何故これが浮かばなかった…』

『…ちなみになんだよ』

『バニーガール』

『…』

『RPGだろ!? あるだろ!! カジノ!!』

『!!』

『…変更は…』

『無理だ…確定のハンコ押しちまった』

『…そうか』

『まあ、クツ殺と二択にするとまた時間かかりそうだしな…ある意味良かったか…』

『…惜しいな』

『…まったく』

『ちなみに…色は?』

『聖グロなら青バニー、一択だろ』

『網タイツか？ ストッキングか？』

『網だな』

『そこらは、即答だな…』

『…俺、あの三人にその衣装で、接待とかしてくれたら、死んでも良いと思う』

『漢の夢だな！ 文字通り!!』

『頼んでみれば？ 尾形ならしてくれそうだろう？』

『はっはー…。絶対引かれるか、軽蔑されるかの二択だろう』

『そうだな！ もはや、ただの欲望の話だしな!』

『…男なんてみんな、こんなもんなのに…何故こうも…何故俺だけ…』

『林田…』

∨

「二 …… 二」

あの…男…。

「…いえ、あの…アツサム？」

「……なに？」

「バニーガールとか言う物は兎も角…あの格好で、何を接待…」

「…」

「……」

「…隆史さんに聞いてください」

「ふむ…それとなし、今度聞いてみましょう」

はい、まずひとつ。

あの男に死亡宣告。

∨

『さて、聖グロはこれで終わりだな』

『そうだな。強制的にでもやめないと…話が終わらん…』

『えつと次は、何処だったけ?』

『ちよつと待て。また俺の話だけか?』

『そうだ。今回のお前の話は、露骨で非常に楽しい』

『……』

『さて…次は…あ…サンダース』

『…』

∨

「OK!! 私達ね!!」

「…隊長!? なんてそんなに楽しそうなんですか!」

あ…いたんだ。

「……」

「た…隊長?」

「…タカシの気持ちだが、本気で気になる…。なんか…もう…女としての意識すらされていないような…」

「あからさまに、18禁の話なんですけど…それに先程、隊長の事ベタ褒めだったじゃないですか…」

「ん? そういえば、そうね!!!」

「……」クツチャクツチャ

へ サンダースの場合 ∨

『はい、んじやまず、お케이さん』

『『怖い』』

『……お前ら……』

『中村は兎も角なあ。尾形はさつき、何かしら再確認してただろ!』  
『んく……』

『さあ、お前の欲望を見せてみろ!』

『なんつー言い方……』

『そもそも尾形。そういや前に本人が言っていたけど……』

『なんよ?』

『ケイさんを振ったんだって?』

『……ハ?』

『よし林田。気持ちは理解するが、ぶれーき』

『……』

『なんでまた…あんな美人…んで、あのアメリカンスタイルを地で行くような、エロい体を…』

『いや…良くまだ知らない人だったし…』

『モゲロ! オガタ!!』

『林田…。あのな? 昨日今日、ほぼ初対面の人に、んな事を言われても、はいそうですかって、なるはずないだろ!』

『いや? 俺なら飛びつく。何も考える事なんてない!』

『…お前、美人局の良いカモだよ…』

『でもよお尾形。今なら違うだろ?』

『ぬ…まあ、そうだな。みほどの事がなければ、正直わからん』

∨

…サンダースの隊長を振った理由を口にしてている。

その一挙一動を、画面を食い入る様に見る、その当人と…隊長。

「隊長」

「なんだ、エリカ」

「取り敢えず、アイツ等…スタイルを良い女性、全てをエロい体の、一言で片付けてませんか?」

「……」

「まったく…あんな男の何が…その、良いのですか? はっきりとあの馬鹿に、言ってましたけど…」

好きだと。

素朴な疑問。



どこにでもいる、普通に馬鹿でいやらしい…そんな男だろう。  
…うん。

昔の事は聞いたが、それはもう過去の事。

感謝をしているのは分かるが、今に至るまで…そこまで…ここまで…。

「わからない」

「は？」

一言…。

その言葉に、画面では無く隊長に、会場中の人間が注目している。

一番長く時間を共有し…。

一番長く時間を共有した、もう一人の女に、その男を持って行かれた。

そんな女性の一言。

「そんなものは、時間の積み重ねだ。小さな頃からアイツといて…昔、私…私達に言った、あいつの言葉は…嘘じゃなかった。まずそれが始め」

「…言った言葉？ 始め？」

「たかだか、小学生の時の言葉だぞ？ それを愚直にずっと…。それこそ転校してしまった先でも、実行してくれていた…」

「……」

「たった一言の…普段なら絶対に言わない、私の弱音を…あいつは拾ってくれた。だからといって…普通、来るか？ 青森から熊本までなんて」

隊長は、笑いながら、楽しいそうに…あの時の事を言っている。

内容は飛ばし飛ばし…多分これは…もう一人の女に言っている。

「あの時の事で、本格的に参ってしまったな…私も女だと強引に納得させられてしまったな」

久しぶりに会った時。

私が気付かなかった時の事を。

「理由か…改めて考えだしたら、やはり分からないな」

…。

みほは、その姉の発言を黙って聞いている妹。  
静かな会場内。

その妹に、楽しそうに視線を投げる姉。

「多すぎて…な？」

∨

『それに…』

『それに…なんだよ…』

『付き合ったら、付き合ったで、結局エロい事はするだろ？』

『するな！』

∨

「…隊長？」

「……」

あ、コメカミを押さえた。

∨

『俺も男だ。誰とそうなってもそうだけどな！ その内にどうなるかわからん！ タガが外れたら、もうダメだろうな！』

『…まあ、普通そうだよな』

『良く逆は言われるが、実際はその反対だよな。女も男の事を良くわかってないよな』

『まあそうだな！』

『……それで、ついに西住さんに対してもタガが、外れてしまったと…』

『外れてねえよ！ それ言わせたいだけだったろ！ 今の流れ！』

『…いや、本当にタガ外れただろ…。今日のお前の発言聞いてると、本当にそう思うぞ?』

『外れてません!』

『嘘つき!!』

『外れてねえって言ってるだろ!』

∨

「隊長?」

「た…隆史も、男だ…思春期の男の子だし、ある程度はしかたががが」  
「目を見て話しましょう?」

∨

『…はあ。ある意味でな? 俺は自分が変だと自覚している』

『変じゃなく、変態だ』

『…まあ、ある意味で男は皆、変態だしな…言ってやるな』

『…そ、その俺が、本気でタガが、ぶっ壊れたとしたら…』

『したら…?』

『俺自身、みほに何するか、想像もつかん』

『……』

『…まだ理性で、かなり押さえ込んでる…頑張ってます…察してください  
さい…本当に我慢してんっすよ…』

『……』

『……』

『さ…さあ、ケイさんだったな! 脱線したなあ! 悪かった尾形』

『次だな! 次!』

∨

「カタカタカタ

「…みほ？」

「なっ!? なに!? お姉ちゃん!」

「顔が青いぞ?」

「な…なんでもないよ!」

「今の発言か? どうした? 隆史と別れる気になったか? 私は大丈夫だぞ?」

「どうしてそうなるの!! 大丈夫って、何が!」

…まあ、ある意味で今の発言はギリツギリだったわね…。

色々もうアウトを重ねているとは思うけど…。

「隊長」

「なんだ?」

「…本当に、アレで良いんですか?」

「…無論だ」

あ、ちよつと揺らいだかな?

……。

何故、少しスカツとしたのだろう。

「…え…あれで? まだ…あれで…?」

みほが、また眩きだしたわね。

◇

『さあ、お케이姐さんだ!!』

『ケイさんかあ…なんか、付き合ったらそれは、それで楽しそうだ』

『まあ、基本明るい人だしな。光属性だよな』

『…はしやく所は、はしやいで…締める所は締める…そんな感じだよな』

『大雑把に見られそうだけど、実際的にはあの規模の部隊を率いてる隊長だしな。その片鱗は見えるよな。…愛里寿の件は本当に助かつ

た…』

『でもな、あの人が結構尽くすタイプと、俺は見てる』

『お、中村が乗ってきた』

『…俺には睨んでくるけど…』

『…』

『ま…まあ、いろんな発端が、お前だしな…』

『俺…そんなに悪い事したかなあ…』

『今度会ったら、言っておいてやるよ…』

『頼む…多くは望まないから…普通にして頂けると助かりますと  
言っておいて…』

『わ…分かった』

『…』

『正直！ ケイさん、頼んだら結構、ノリッノリで色んな事してくれそ  
う!!』

『よし！ 空気を読んだな、尾形！ 例えば？』

『コスプレ!』

『…』

『プレイか?』

『プレイだ』

『してくれそう…か?』

『してくれっだろ。あの人が、そういつたの好きそうだし!』

『ま…まあ、あつちの人、仮装とか好きだしな』

『日本人だけだな』

『で? 尾形。貴様は、何を望む』

『鉄板だな』

『は?』

『カウガール』

『ああ…そつちの意味か…まあそうだな』

『中は水着か』

『他になにかあるか?』

『『 ないな!! 』』

『ビキニだな!!』

『『 そうだな!! 』』

∨

「元気ねえ…男の子」

「…隊長、結構その格好しますよね」

「そうね! コスプレ自体は嫌いじゃないわ!!」

「それよりも、孝が…ノリノリなのが、辛い…」

「アリサ…。ならアリサも送れば?」

「送る?」

「前に私、チアの格好の写真、タカシに送った事あったけど、なんか敬語でお礼言われたしっ! 喜ぶんじゃない!」

「なっ!? 何やってんですか隊長!! ヒツ!」

…。

「一度、隆史君の携帯中身…特に写真を全部見せてもらおうかな…」

「…手伝おう、みほ」

「ふらいべーとな事だから、無理強いはしないよ? お姉ちゃん」

「無理強い? するはずが無いだろう。…やましい事がなければ、見せられるはずだ。その確認だろ?」

「……」

「……」

「水着姿も送った事、あるわよ!」

「隊長つ!! 睨んでる!! 西住姉妹が睨んでます!!」

「だからなに? あの子達も、タカシに送ればいいじゃない」

「…タノシミダネ、オネエチャン」

「…タノシミダナ、ミホ」

はい、ふたっつ。

あの男に死亡宣告。

◇

『そのまま、着たまま…胸だな』

『…テンプレだな、尾形』

『嫌か?』

『はっ、まさか。愚問だな』

『憧れだな』

『漢の子の憧れだ』

◇

「……?」

サンダース…。

よくわからないって顔してるしてるけど…

間違いなくロクな事、言ってるない!!

◇

『…でも、ケイさん相手だと』

『相手だと?』

『俺が、完全に後手に回りそうで…』

『ああ、お前基本、攻めの姿勢のド鬼畜S野郎だしな』

『………なんだろう。否定できないのが悔しい…』

『ああもう! で? 回りそうであってなんだ?』

『…俺さあ、まほちゃんもそうだけど…積極的に迫ってくる女性って、基本苦手』

◇

「」

……。

「…た…隊長？」

あ、サンダースの副隊長と声が被った。

「」

ああ…二人の隊長が固まっている。

まあ、この二人…アレに対してだけは、すごいからなあ…。

まず腕を取りに行く姿勢とか…。

…フツ

∨

『そうなのか？ 俺としては羨ましい限りなのだけど？』

『まほちゃんは、どうにかできそうだけど、ケイさんは攻めに移れる自身がない…』

『…なんて言っつていいのかわからん。西住選手は大丈夫なのか…』

『まほちゃんは、なんか無理して迫って来てる感じがするから、正直、それだけなら、どうとでも…』

『冷静に分析してるお前がちよつと怖いぞ…』

∨

「…なによ…マホ。その勝ち誇った顔は…」

「いや？ なんでもないが？」

「…くっ!!」

…なぜだろう。

色んな意味で、ダメです隊長。

∨

『贅沢言うなよ尾形！ 要はアレだろ!?!』

『なんだよ、林田』



『お姉ちゃんプレイだろ!? ウラヤマ!!』

『……………』

『小山先輩よろしく、ケイさんだろ!? 西住さんのお姉さんだつて可能だろうが!! なんだよお前!! 各種取り揃えてんじゃねえよ!! 終いだ、終い!!! 俺の心臓が死ぬ!!』

『…言い方……………』

『…ま…まあいいけど、お前から振った話だろうが』

∨

「…お…おね?」

「…確かに私は、姉になるが…プレイ? 別に隆史の……………ん?」

「……………」

多分、サンダースの副隊長は理解してるのだろう。

凄まじい顔をして黙っている。

「エリカ…分か「わかりません!!」」

…分かる自分が嫌だ…。

∨

『はい! 次はナオミさん!!』

『マジで接点がないから無理』

『…無理』

『えく…結構なイケメン美人だと思うけど…』

『その意見には賛同するけど、本当に…ロクに話した事ないからなあ…』

『プラウダ戦の時も、なんかケイ選手応援してる感じだったし…完全に茅野外って感じだったな』

『…チツ。まあいいや。んじゃ…次行くか?』

『あっ』

『なんだ尾形!! なんかあんのか!?!』

『食い付きがすげえな…林田』

『あの人ってベリーショートだったよな?』

『そうだな。結構女性としては勇気がいる髪型だな』

『あの人がロングヘアーになったの想像したら…』

『したら?』

『すげえ好み』

『……』

『……』

『つまり。次行こう』

『だな。ただの好みだ』

『なんだよ!!』

∨

「ナオミ!♪」

「…はい、ママ」

「貴女は、その髪型が一番ね!♪」

「……」

…ついにあの女も、牽制かけてきた…。

∨

『んじや、次はアリサさん!!』

『『むり』』

『…おい、タカシ・コンビ』

『いや…俺は普通に無理。中村との関係性考えると、更に倍率ドン』

『倍率ド…なんだそりや?』

『……』

『いやな…むしろその質問は、中村の為にあって、過言ではないと思うのだけど?』

『まあ…そりやそうか』

『……』

『で？ どうなん、中村？ 女性として見れるの？』  
『……』

〈

「尾形ああああ!! よくぞ!! よくぞ聞いてくれたあ!!」  
「うっさいわね、アリサ。…下手すると立ち直れないわよ？」  
「男同士の会話ですからね。アリサにとっては、キツイ返事かもしれないですからね」

〈

『会ってやれ…と言った手前もあるけど…実際どうなの？』  
『……』  
『まさか…お前、散々俺の事で根掘り葉掘り聞いてきて…自分の事は答えないとか…』  
『……』  
『…そんなふざけた事…シナイヨナア?』

〈

「いけ!! もっと押せ!! 尾形ああ!!」  
「……アリサ」  
不憫な子を見る目で見ているなあ…。

〈

『…じ…』  
『…じ…』  
『…じ?…』  
『実際、正直…本当に分からん…』  
『……尾形』

『なんだ？』

『ベコの着ぐるみ持ってくるか？』

『おお、頼む』

『待て!! ちよつと聞け!!』

『……』

『……』

『さつきも言ったけど……戦車道履修者に、そういった目線で見ない様にしてんだよ……』

『ああ、言つてたな』

『……その原因が、アリサ』

『』

∨

「」

「……」

言葉もない……つて感じね。

∨

『確かに俺は、戦車道が好きだ！ だからと言つてな!! それ履修して！……なんだかんだ……今は、サンダーズの副隊長だぞ!!』

『いや……そりゃ、お前に……』

『わかっちゃういるわ……流石になあ……でもなあ……だからつてなあ……一言で言うつと……』

『なんだよ』

『重い』

『』

∨

「……………」  
「……………」  
いや…本当になんて言っていないか…。

「気持ちは分かるが…。いやあ…なんていうのかなあ？ 重いとは違  
うだろう？」

「なにがよ…」

「ただ、お前と共通の話題が欲しかった…って、だけじゃねえの？」  
「…は？」

「直接本人と何度か話した事あったけどさ…そんな感じだったぞ？」  
「……………」

「不器用なんだよ。盗聴やらそっこら辺は器用だけ…」

「フォローしてんのか？ それは…」

「お前に注目して欲しくて…頑張つて…副隊長まで上りつめちやつて  
…」

「……………」

「気が付いたら、他に何もなくなつてた…そんな感じだろ。だから  
言つたんだ。一度、会つてやれつて」

「…尾形」

「お前…なんで、そこまで他人の色恋分かつて、自分の事分かんねえん  
だよ」

〈 本 当 に 〉

今…感じた…。

会場中が…今…一つとなつた…。

『……………』

『そうだな…お前に言われたくねえ感がすげえ…けど、まあ分かった』

『…中村?』

『一度、本気でちゃんと話してみるわ…』

『…なんだろう…釈然としねえ…』

∨

「…………お…おおがあ…………たあ」

「あらら…泣き始めちゃった…」

「…………」

…………。

あの馬鹿。

∨

『はい、じゃあ次行つていいか?』

『…………』

『エロい話!! しようぜっ!!』

『また、いい笑顔で言ったな…』

『お前のそういつた素直な所は、嫌いじゃないが…空気を読め』

『他人の色恋なんて、聞いていてつまんねえんだよおお! 初心な乙

女じゃねえんだぞ!!』

∨

《コイツ》

あ…なんか、一瞬そこから殺気を感じた…。

∨

『林田：ま：まあいい。この話題は俺も辛い…』

『次は、面白そうだな！』

『まあ概ね認める：少し楽しみだ』

『：なんだよ、二人共』

『尾形のお気に入りだな！』

『そうだな!!』

『……』

『次はアンツイオだ!!』

◆ ルート正史 ◆ 続・男子会です！ P I N K 中編

『アンツイオねえ…チヨミン達か…』

『そうそう、まとめてお前に全裸姿を見られた、被害者達だ』

『覗いてねえ!! 被害者とか言うな!!』

『まあ、いいや。取り敢えずお茶でもドウゾ』

『…あ…ああ。なんなんだよ…まったく…』

『……林田』

へ アンツイオ高校の場合 へ

「いやあ…あん時は、参ったつすね！」

「お前のせいだろうが！」

「今となっては、良い思い出ですねえ」

「そんな事言ってるのはお前だけだ、カルパッチョ…」

アンツイオ。

順番的に来るのは分かっていただろうし…仕方がないが…。

どうなの？　なんで、そこはかたなく嬉しそうなのよ…アイツラ。

「ううう…あいつら、何言うつもりだろう…」

隊長さんだけが、唯一真っ赤になって怯えてるわね。

…違うわ。

満更でもない顔してる…。

イラッ

というか、アレをまた飲んでるわね…

へ

『まずは、カルパッチョさん!』

『清楚を地で行く人…っばいよな!』



『入る学校間違えてる感じが、すごいよな!』

『あの人、絶対に聖グロリアーナの生徒にしか見えないよな…』

『……』

『大人しいな…尾形。で? どうなん?』

『いや…うん。ちよつと考えてみたんだけど…』

『ふむ?』

∨

「ウフフ…私今、隆史さんの頭の中で、何されてるのでしょうかねえ?」

「…カルパッチョ、言い方…」

「嬉しそうにまた…」

∨

『普通』

『は?』

『なんだろうか…付き合うとかの過程で、色々狼狽してしまうであろう俺を、なんだかんだで、微笑みながらリードしてくれそう…』

『……』

『女性にリードされるとか…それはそれで、どうかと思うけど、なんだろう…それもまた楽しそうだと…』

∨

「…ま…まあ、隆史って、その辺はダメそうだしな…」

「女性を引っ張るって、タイプじゃありませんよねえ?♪」

「…姐さん。カルパッチョが今年一番の笑顔を…」

「……」

イライライラ

∨

『違うわ!!』

『なんだよ、林田』

『いちやつける過程の仮定の話なんて、どうでもいいんだ!』

『…お前、聞いておいて』

『だってお前、あの人の顔がエロくなるとか言っただけか!? あ  
の清楚な人がどんな風に、乱れるか聞きたいんだ俺は!!』

『待てっ!! すでに関係を持っているかの様にいうな!!』

『実際、どうなんだ? 俺達は、接点が無いから分からんぞ? あの手  
のタイプは、正直予想も想像もつかん』

『だから…ああ…もういい…』

『で!? お前が予想しないはずも有るまい!!』

『元氣だなあ…林田』

『普通』

『……』

『特段無いな。普通…多少、俺が無茶しそうだけど…まあ? カル  
パッチョさんだし…』

『……』

『…サキユバスなんて、とんでも衣装を選んでおいて…』

『そこは、何となく分かるな』

『ま…まあ、あの人の場合、酷い事すると、罪悪感がすごそうだしな…』

『つまらん!!』

『林田…』

『まあ…うん。次行こう…』

『次は、ペパロニ選手だな』

『……』

『尾形?』

『あ、いや。なんでもない、ペパロニね』

『…意識が飛び始めたな…』  
『で?…どうだ?』

◇

「…あら、少し残念ですね。大体の要求は、受け入れる覚悟はあったのですけどお…」

「カルパッチョ…お前…そんな話聞いてどうすんだ…。あの程度で、むしろ良かっただろうに」

なんて事口走つてのよ…あの人。

というか、なんで若干、みほが震えてるのかしら?

すつごい見てるけど…。

「ここで、ある程度の趣向を聞いておきましたら…あの人には、無理でも私は大丈夫ですと…武器にもなり得たんですよ? ドウーチエ?」

「か…かるぱちよ…さん?」

「それは、ドウーチエにも言える事ですよ? ある意味で、この場はとてもとても…良い機会になりますよお? ですから…頑張りましょう…ねえ?」

…な…なにあの子。

顔はアンツイオの隊長向けてるけど…目だけみほを見ている…気がする。

その視線に、みほは…気づいてないのか、変に涼しい顔しているわね…アレ?

あ…目が合ってる…気がする。…両者、にらみ合ってる…気がする!?

アレ?

顔は、二人共、別方向を見ているんだけど…な…なんでそんな事思ったのだろう…?

あ…またあの男…、尾形にアレ飲ませてるわ…。

〈

『ペパロニさんって、あの暴走族みたいなノリの娘だろ?』

『尾形のお気に入りだな。本人曰く、着やせするタイプのおつきい人らしいな』

『そうそう。おつきい(確信)』

『…でもなんか、恋愛とかには無頓着な気がするけど…』

『見た目はな。でもなあ…ペパロニって、結構どストレートな乙女だぞ…』

『ごめん、尾形。意味がよくわからん』

『……』

『尾形?』

『…冗談だとは、思うけど…』

『……』

『みほには、言うなよ?』

『マカセロ、オガタ!!! クチハ、カタイホウダヨ!!!』ヨテイデハ!

『マカセロ、オガタ!!! クチハ、カタイホウダゼ!!!』キガムイタラ!

『…コンビニ行こうぜ! ……の、感覚でプロポーズされた』

『……』

『高校卒業までは、子供できたらまずいからって、エロい事はしないゾと、釘までさして…』

『』

〈

「あはは! 言ったなあ! んな事!」

「言ってみましたね、ドウーチエ」

「言ってたな、カルパッチョ」

会場中が、静寂に包まれた…。

所々、一部…物凄い気配を感じるけど…特に隣から…左右から!!

「いやあ…タカシの奴…そんな時は誤魔化しやがったけどな…」

「ペ…ペパロニ？」

「…結構、マジだったんだけどなあ…。ま、いつか…まだ時間はあるし…」

……。

……………。

あ…また飲ませてる…。

◇

『…まあ、なんだろう…だからだろうか？ 付き合ったら付き合ったで、楽しそうではあると、結構簡単に想像できた。というか…』

『あ？』

『林田…ブレーキ』

『改めて…真剣に考えたらさ…普通に…そのまま結婚まで付き合っ  
ていくビジョンが、簡単に想像できた…』

『』

『特段、疑問も何もなく…すげえ自然に…。初めてだ…この感覚は  
……』

『…ま…まあ、料理とか趣味も合うしな…』

『みほに対しての罪悪感で、押しつぶされそうだ…』

『…なあ中村』

『……なんだよ、林田』

『尾形…なんか嘆いているのはわかるんだけど…目が座ってきてねえ  
か？』

『決勝戦の後で、貫徹で作業後に、てめえが散々飲ませたからだろう  
が』

『……』

『責任……とれよ』

◇

「……………」

「ペパロニ!？」

「あらあ…」

「やがpgじやlk sdじやがごい」

「…何言ってるか、わからないぞ? じやがごいって…」

「顔、真っ赤ね…」

……。

「なあ…みほ?」

「なに? お姉ちゃん」

「…ひよつとしてなんだが…」

「……」

「一番危険なのは、彼女じゃないのか?」

「……………」

「改めて考えたと言っていたな? …不味くないか? これは……」

「……………」

チツ

…しかたないわね。

「隊長」

「なんだ、エリカ」

「罪悪感って言ってましたけど…そんな大層なモノを、あの男が、持ち合わせていたのに私は驚きですけどね」

「……………」

「そんなモノが、まだ有るだけマシでは?」

「そ…そうだな、まだ今のうちに…」

「えつと…エリカさん」

「……昔みたいに呼ぶな」

「……………」

えつとえつと言わない。

何をまぐ(まぐ)してるのよ。

なによ…そんなに変わってないじゃないの。

『でもよ、尾形。実際に付き合ったら、エロい事するだろ?』  
『するな!!』

『そこは、元気いな』

『林田：ある意味、空気の流れ変えるの上手くなってきたな…』  
『……』

『林田?』

『…尾形の顔色が、ちよつと変わってきたな』

『疲労がピークの時に、飲ませすぎだ…』

『だから言ってるじゃないか。…意識がちよこちよこ飛んでるのが分かるぞ』

『……』  
『……』  
『あの…クソ変態共……』

『エロい事するなと言う方が、無理があるな!』  
「迫って来るなよ!?」  
断りきる自信ねえからな!!』  
『とも言われたし!!』

『なんだろう!!』  
散々飲ませた工程をすつとばして、今、お前をぶん殴りてえ!!』

『あんなエロいの、二つもぶら下げられてたら、理性なんぞいつ飛ぶか分からん!!』

『そーいや、彼女を着痩せするタイプって言っていたけど…一度見ただけで分かるのか?』

『一度や二度じゃねえ!』  
あいつ、俺の前で普通に着替え開始するからな!!』  
嫌でも目に入る!!』

『……』

『流石に水着とかじゃないけどな！ 制服から調理服とかに着替える時とか…』

『…しっかり見てるんだな』』

『いやだって…目の前だぞ？ 急いで顔ごと逸らすけど、間に合わない時の方が多いんだよ！』

『下着姿見ておいて…何言ってるんだ？』

『違うわ！ 中はTシャツとか着てたし…だからじゃないか？ いきなり服捲った時とか、流石にびっくりしたけど…』

『…』

『…ペパロニって、体育会系のノリも強いしな…結構心臓に悪い…』

『揺れたか？』

『…すげえ揺れた。胸って弾むんだな…』

『…』

『なあ、尾形。…今、俺は確信した』

『なんだよ』

『彼女が目の前で着替えるってのはな？』

『おお？』

『ワザトダ』』

『…』

『下着付けていたら、弾むほど揺れるはずねえだろ？ ブラって、胸を固定する器具だぞ？』

『…まさか』

『ノーブラだろ、それ』

『…』

◇

「ペパロニ。お前…何してんの？ え？ なに？」

「…姐さん、顔近いっす」

「女の子が、なにやってんだあー！！ 恥じらいを持って！！」

「いやいやいや、だって！！」



「だって、なんだ!? 私も怒る所は、怒るぞ!!?」

「カルパッチョが…そうすりゃ…悩殺だの…なんだの…できるって…」

「……」

「あ、ドゥーチエ? 次、始まりますよ?」

「カルパッチョー!!」

……何やってのかしら…本当。

次…アンツイオと対戦したら…本気で潰そう…。

∨

『尾形』

『…んあ?』

『…顔が青くなってきたけど…大丈夫か?』

『…あ……ん……まあ、ちよつと気持ち悪くなってきた。寝てねえからかなあ…』

『そ……そうだな』

『どうしよう…中村』

『尾形で遊びすぎだ、お前』

『…勢いで乗り切るか』

『……』

『…でもさ、実際どうなん?』

『なにがだよ…』

『ペパロニさん。純情だか大胆だか、よくわからない人だけど…エロい事できるのか? また悪い気がするとかどうのって…』

『できるな! 全力で!!』

『キコウジヤナイカ!!』

『いや…林田、尾形の扱い上手くなったなあ…。変な空気は読めるのな…』

『ペパロニって、「まっ!」いっか!!』の、一言で何でもしてくれそう

なんだよな!!」

『本当にノリと勢いで生きてるなあ…アンツイオ』

『真っ先に浮かんだのが…』

『……』

『……』

『いいよもう！ お前の発言で、引かない方が少ねえから!! モジモジすんなー!』

『……』

『…いや、違うな…フラフラしてんのか…』

『…本格的に、まぶくなってるかい?』

『勢いの良い時と、悪い時の落差が大きく出てきたな…』

∨

『……』

『みほ…』

「なに？ お姉ちゃん」

「隆史…あれは大丈夫なのか…?」

「あんなに分かりやすく、酔ってるの初めてだね…」

『……』

∨

『尾形…お前、本当にだいじょ…:子供できらたまずいって、言ってたし』

『……コード』

『尻だ』

『……』

『お…尾形?』

『…段々と、開発して行きたくなるな…特にペパロニの場合』  
『……』

『ペパロニの場合、奉仕とかはぶつちやけ苦手に思えるんだ!』

『…段々露骨になってきたな、尾形』

『流石に包丁とか扱ってる時は、危ないからしないけど…』

『しないって言っている時点で、どうなんだ?』

『たまに一日中、間接的に攻め続けたい…』

『……』

『あそこの開発って、結構時間かかるからなあ…拡張とか?』

『ら…らしいな』

『同時進行で良いと思うんだ!!』

『同時進行って…』

『後ろやってる最中、前…とか? 後ろだけとは誰も言っていない!!』

『っ!!』

『ペパロニって、結構体も鍛えて、頑丈だし……段々と…』

『……』

『…自発的に飲み始めた…』

∨

《??????》

『…データジリン様。隆史様、なんの話をしてるのでしよう?』

『……卑猥な話だとは推測できますけど…お尻って…?』

『男性は主に、女性の胸、お尻、脚と趣向が別れると、データを取った

事がありますけど…主に年を重ねるとその趣向もずれて…』

『…アッサム。貴女、普段から取ってるデータを、一度全部見せて頂

戴』

…お。

………?』

これは、私も分からない…けど…ま、あの男の事だし…。

絶対に卑猥な妄想だろう。

はっ! どうせ、撫で回したいとかそんな所かしらね?

まったく…死ねばいいのに。

……。

そ…そこまで言う事じゃないか。多分。

「…：意味わかるか？ ペパロニ」

「いえ…まったく」

「ペパロニ？」

「んだ？ カルパツ…：チョ!!？」

「ウラヤマシデスネエ？」

「何!? 近い！ 近い!!」

く

『で…でもさあ…アレの開発って、童貞の俺は、よく知らないけど…どうするの?』

『林田!』』

『主に器具を使う』

『淡々と答えるな。尾形…』

『器具って…そんなの、大洗に…っていうか、一般的に売ってるものか？ 学生が購入出来る物でもないだろ？ アツチの部類だろ?』

『そうだな、あつちの玩具だ』

『…どうしよう…面白がっていたけど、尾形のスイッチが本格的に壊れた気がする…。というか、よくそんな知識あるな、尾形』

『ん？ 一般教養だろ?』

『…』

『…なあ、中村』

『…』

『今のを一般教養と言い切った尾形に、若干の恐怖を覚えたんだけど…』

『なんか…尾形のスイッチというか…目覚めさせてはダメなモノを、起こし始めてしまった感が強いな』

『……………漫画やらエロゲーやらでは、多々あるけどな…実際は…そんななに…簡単じゃないんだ…』

『尾形?』

『簡単に、言いやがってなあ…徹夜続きの後だし…給料未払の癖に、女充てがえばいいとか…』

『給料? え?』

『…なんで、顔も知らないお偉方とやらの…を…俺が…何がオコボレだ…』

『ブツブツ言ってるな…何言ってるか良く聞こえないけど…』

『目が遠くを見てる…』

『しよ…う売女じゃ…じゃねえか…騙して…くそ…胸糞悪い……………』

∨

尾形が俯いてしまった。

何か、ブツブツと呟いているけど、断片的にしか聞こえなくなっている。

なに?

体を揺らして始めたわね…。

∨

『お…尾形? …おい』

『…』

『お前、本当に大丈夫か? 顔色…なんか、すげえぞ? …って、半分寝落ち状態だな…ブツブツとなんか呟いてるし…』

『そりゃ…寝ずに働かせられて…夜は夜で…くそみてえな仕事……………』

『いや…尾形、何言ってるんだ？』

『……は？』

『いや、は？　って…』

『尾形？　誰だそれ』

『……』

『俺の事か？　何ってるんだ。俺は…角谷…えい…い…』

『角谷？　生徒会長の事か？　なんで今？』

『…せいと…』

『なんか…本格的にまずいな…やめておくか？　この後もあるって  
言ってたし…こりや、西住さんに悪い事したかなあ…』

◇

「…本格的に酔っているな」

「初めてのパターンだよね、お姉ちゃん」

「そうだな。しかし、みほ」

「う…うん。ちよつと怖いかも。あの酔い方って、隆史君…別人に見える…」

◇

『ごそごそと…何言ってるんだ？　西住って…みほの事か？　なんで  
今…』

『西住さんの事で、ちよつと正気に戻ったのか？　…すげえな、西住さ  
ん』

『疲労困憊の時に、薄めているといっても、アホみたいに飲ませるから

…林田』

『…いや…つ…』

∨

「なんだその顔は…何を勝ち誇っている、みほ」  
「べ…別に？」

「……」

「……」

みほ…なにそのドヤ顔。

……その頬を力いっぱい引つ張りたい。

ま。様子のおかしい尾形も、少し持ち直したみたいだし…もう、大丈夫だろう。

なんか釈然としないけど…。

∨

『あっ』

『『!!』ビクッ！』

『ペパロ……シリ……みほ』

『お…尾形？』

『何を考え込んでんだ？』

『……』

『『……』』

『 ……ニ タ ア ……』

『『っっっっ?』』

《 《ザワツ！

え…えっ!?

何?! なんなの!? 今の顔!!??

「え…な…えっ!？」

「み…みほ。なんだ、今の隆史の顔は」

「…悪い顔…どころじゃない…なに？ 今のすっごい邪悪な顔…つて  
いうのかな…」

「言いえて妙だが、他に例えが思い浮かばんな…。あんな隆史の顔…  
見たことないな」

「ど…どうしよう!! 最後、私の名前言った!! どうしよう!!」

「…みほ」

「なに!? お姉ちゃん!!」

「何があつたか、後で教えてくれ」

「何かあるみたいにな、確定事項の様に言わないで!!」

……。

……………。

∨

『そ…そうだ!! 尾形!!』

『……』

『お、おい! 尾形!!』

『ん? ああ、俺か。なんだ?』

『…ペ…ペパロニさんと、バニーは何色だと思っ!?!』

『んあ? ああ…ペパロニだと…』

『林田! よし!! お前、本当に成長したよ!! 尾形! 帰ってこい

! 今、お前は行っちゃダメな所にいる!!』



『何言ってるか、分からねえけど…ペパロニだと、バニーじゃないな。いや、バニーなら黒だけだ』

『しっかり答えてる時点で、戻ってきたと思えるけど…、バニーじゃないならなんだ？』

『裸えぷろん』

『お帰り！ 尾形!!』

『ちやんと属性考えて言ってるな!! よし!! この際ファンタジー関係ねえけど、よし!!』

『…何言ってるの？ お前ら…』

∨

会場中が、安堵に包まれた…。

何故かホツとした様な、声がそこら辺から聞こえてきた…。

「よ…よかった…のか？ えっ？」

「は…裸エプロンって…なんすか？」

「し…知らん！」

「…私の時は、何も聞いてくれなかったのに…あの男共…」

「カルパツチョ!! 今は、抑えてくれ！」

よし。ただの変態に戻ったな。

…。

なんだったのだろうか…あの、顔は…。

∨

『次は、アンチョビ選手だな!!』

『あれ？ ペパロニ終わり？』

『終わりだ!!』

『いいけど…ふむ。チヨミンか』

『…あの状態に戻らないように、アンチョビ選手に託そう…』

『…本当に西住さんに、悪い事をしてしまったと、確信できるほどの

面だったな』

『だから、何をボソボソと…』

『気にするな!! でっ!』

◇

「……」

「ね…姐さん?」

「…すつごい恐怖しか沸かないんだけど」

◇

『千代美さんねえ…彼女、すつごいメルヘン乙女だしな』

『すげえ頭悪い女に聞こえるぞ…』

『後、千代美つて…ああ、アンチヨビ選手の本名か…』

『いやいや。彼女、趣味が恋愛小説を読む事だからね? それが基準だと、ちよつと…俺じゃ、その理想には近づけないかなあ? ってな』

『ああ、なるほどな…理想が高そうだと』

『そうだな、シユチュエーションに拘るタイプだと、俺は思う』

『あ…ちよつとまともな意見…』

「……」

『尾形…もう、それ飲むな』

『…』ゴツゴツ!

『尾形!』

◇

「はえ!! え!! なっ!」

「ドゥーチエ。バレてないと思ってたんですか? 隆史さん、知って

ますよ?」

「なふっ!」

「恋愛小説を読み終わった後に、思いを馳せて、ボーっとしているドウーチエ。…の横に、よく隆史さんいましたし」

◇

「ち…ちなみに、アツチだと？」

『林田!?!』

『あ? ……ああ…そうだなあ』

『……』

『……』

『な…なんか、すげえ考えてる…』

◇

「あらあら…ドウーチエ？」

「にや! にやに!?!」

「カルパツチヨ…すげえ楽しそうな…」

「ひう!?! 耳!! 息が!!」

「ドウーチエ？」

「だからなんだ!?!」

「多分…今、隆史さんの頭の中で、ドウーチエ、凄いことされてますねえ…」

「ひっ!?!」

な……なんで、あそこ…女同士でいちやついているんだろう…。

カルパツチヨと呼ばれる女性が、アンチヨビ……っていったわね。

耳に口を近づけながら、囁いてるけど…。

「いや…それは…男だし……ある程度は……」

「そうですねえ? ドウーチエ、どんな事されてるんでしょうねえ?」

「なっ!?! なあっ!?!」

「……カルパツチヨが怖い」

∨

『……千代美って、髪型ドリルだろ?』

『お? おお:見事な螺旋力だな』

『:それが?』

『真ん中に突っ込んでみたい』

『』……『』

『髪コキってどうだろう:』

『』……『』

『千代美の髪の毛って、やわらかくて好きだ:』

∨

《  
??????  
》

また:意味が分からない単語が出てきた:。

『:あれ:調べない方が良さそうだよね:』

『絶対にとんでもない事を口走っているのが分かるな:』

『お姉ちゃん:あの隆史君:。ちよつと本気で怖いよ:』

『』……『』

会場中の連中も知らない様子だけど、みほの一言で、皆:取り出した携帯を仕舞った:。

『』……『』

『ドゥーチェ:顔真つ赤つすけど?』

『まあ、隆史さん。ドゥーチェの髪の毛で、良く遊んでいますからね?』

『……好きって言われた:』

『』……『』

『』……『』

『カルパッチョ。姐さんって、結構ポジティブだよな?』

「良い事よね」

◇

『後、バレてないつもり例の服装で…』

『は？ なんだそりゃ』

『普段、でっかい一本の三つ編みで、メガネかけてんだよ、千代美って。地味変装っていうのか…』

『そうなのか？ …想像つかん…』

『まあそれで、趣味が読書みたいなモノだしな…だから…』

『だ…だから？』

『図書館とか図書室とかで、声出せない状況で、泣くまで攻めてみた  
い』

『…』

『…後』

『な…なんだ!?!』

『…そんな中、官能小説読ませながら、攻めたい』

『』

『ま…まずいぞ、林田。ちよつと尾形が本格的におかしくなってるぞ』

『…ちよつと楽しくなってきた』

『…今回の流れ、原因がお前だつてバレたら…確実に殺されるぞ?』

『はっ…バレなきやいいんだよ…』

『…お前もちよつとやけになってるな』

『んで、絶対あいつ拗ねると思うから、それはそれで、可愛いからいいかなっ!! っと思う!!』

『お…尾形?』

『後、普段の制服の時、あの白タイツだけ、目の前で脱いで欲しいとか  
!!』

『お…おーい』

『なんか千代美だと、いくらでも想像が沸くな!!』

『…帰ってこーい』

◇

「」

「姐さん、変装ってなんの話つすか？」

「今はんな事より、洒落にならん事、いっぱい言われたらろ!!」

「ムチを振り回さないでください」

「かるぱっ!」

「…なんでしょう…とても羨ましく…私…普通の一言でしたのに…」

「お前も一体、何処へ行くんだ!!??」

……。

……………。

変態が…。

「……みほ」

「…なに？」

「別れる気になったか？」

「ならないよ!!」

アンタの顔色…赤なのか青なのかはつきりなさいよ。

まあ…あの男が正常じゃないの分かってるから、色々と許容できてるのでしょうけど…。

アレ…浮気してないってだけじゃないの？

言ってる事、結構最低だと思うけど…。

「…別れりやいいのに…」

「…エリカ？」

「えっ!? あ、はい!!」

「男というものは、大概があんなモノなのだろうか…?」

「…違うと思います」

◇

『後な!!』

『はい!』

『…一つ俺は嘘をついた』

『一つ所の騒ぎじゃないだろうが…』

『んで? 何?』

『カルパッチョさん』

『お! 振り出しに戻るか!』

∨

ガタツ!

「カルパッチョ!」

あ…例の金髪が、前のめりになった…。

何を…期待した目をしてんのよ。

∨

『…怖いんだ』

『怖い?』

『みほに悪いと思っちゃいるが、なんか歯止めがきかなくてな…なんか色々と暴走していると自覚もある』

『…は? 何が言いたいんだ?』

『他の女性に対して、ちよつと行き過ぎた想像だとも思う…』

『いや、気持ちは分かるが…それがカルパッチョさんとなんの関係が…』

『出てくるんだ…』

『…は?』

『ペパロニに続いて…千代美へと想像したが…必ず彼女が出てくる…』

『…』

『行為に必ず参戦してくるのが、何故か強制的にビジョンに浮かぶ…』

『……………』

『俺…正直、乱交趣味ないのに…』

『はつきり言ったな…』

『この尾形…怖いけど、すげえ楽しいな!』

『お前は、順応力が変な所、高いな』

『…絶対どこかしら、どちらでも…:彼女が気づいたらそこにいる…』

『ま…まあ? いいんじゃないか? 男だろ? ハーレム展開は、夢

だろ?』

『俺はどちらかと言うと、一人を相手に集中して、トコトン…ドロツド

ロにまで快樂に酔わせたい派だ。墮とさせたい派なんだ!』

『…ま…まあ、お前、女性を肉体的じゃなくて、精神的に追い詰めたい

タイプのドSだしな…』

『そうなんだよ!! でもな!!』

『…あ、はい』

『ひな…すげえ無駄に、エロいんだ…:…』

『あ…呼び方変わった』

◇

「……………う…嬉しそうだ…。カルパッチョが、すつごい恍惚の笑みを浮かべている…」

「今の喜ぶ所あったか!？」

「ウフフフ…:…」

いや…なんか、凄つい事言つてなかった?

どうしてこう…ハーレム?

はあ!!??

「…トコトン…:…集中…:…そうなのか? みほ」

「知らないよ! なんでさつきからお姉ちゃん、私に何でも聞くの!？」

「…いや、その内にボロを出すかと思ってな」

「……………」

顔色…赤以外から変わってないしね。



…。

別に聞き耳を立てている訳じゃないわよ!?

〈

『ひな：サキュバスの衣装、真っ先に浮かんだって言ったろ?』  
『言ったな』

『ああ言うのって、変装というか…人間に化けてる姿って絶対あるだろ? それも一緒に真っ先に浮かんだんだ…』

『…なんよ?』

『シスター』

『シスター?』

『そう。呼び方がプリーストじゃなくてシスター…』

『変なこだわりだな…』

『ガーター。えっろいガーター着用のシスター。搾り取ってくるタイプの…』

『…』

『はい、嘘つきましたア…。ひなの場合、アッチ方面は、ぶっちゃけ乱れまくりそうで、すっごい怖い。エロいシスターしか浮かびませんでしたア』

『…』

『なんか…いつでも、どこでも、どんな事でも受け入れて、更には求められそうで…』

『…あの…尾形くん? そろそろ休みませんか?』

『ひなの場合、肉欲に溺れそうで…すっごい怖い』

『聞いてください』

〈

「…おい、ペパロニ」

「なんすか、姐さん」

「すつごい卑猥な事を言ってる隆史が、なんかすつごい辛そうなんだけど…」

「そつすね…反面、カルパッチョがすつごい笑顔で、画面見つめてるっすけど…」

「そうね！ 求められるっていい事よね!!」

「いや、なにも聞いてない」

「何か、すつごい満足感です!」

「……」

相変わらず、漫才ね…アンツイオ。

「…結局…恥ずかしいだけだったな…隆史」

∨

「……」

『あ…尾形の電池が切れた』

『…動かなくなつたな』

『……』

『……』

『お…尾形?』

『ああ、悪い。ちよつと、トイレ行ってくる』

『おお! 少し休め!!』

『……吐いてくる…なんか…すつげえ気持ち悪い…』

『行け! 早く行け!! スッキリして、そして戻ってこい!! 本当の意味で! 頼むから!!』

『勿体無い気もするが、ぶつちやけドン引きだ! 胃の中のモン、出して!!』

『ああ…悪い……』

ガチャ

『……行つたな』

『ああ。なんだつたんだ…さつきの尾形』

『カード衣装決める時と、流れがまったく一緒だし…』

『また、家元に絡まれて帰ってくんのかな?』

『…トイレすぐ横だし、大丈夫だろ』

『どんな風にも度は変わるんだろうな…吐くとまた変わるんだろ?』

『…怖い事を言うなよ』

◇

「ミカ?」

「ナンダイ?」

「アタシ、タカシが何言っつつか、まったく分からねえけど、ミカは分かるか?」

「……」

「エロい事、言っつてんのは分かるんだけどよお…なんでミカ、顔が青くなっつてんだ?」

「……」

「あれ? いつものもそれらしい事、言わねえの?」

「……………」カタカタ…

はっ。珍しいわね。

あの風来坊があんな顔するの。

というか…尾形、どこであんなのと出会ったのよ…。

戦車道の試合にすら、滅多に顔出さないのに。

「…あ、ミツコ。隆史さん、帰つて来た」

「結構、早かったな」

へ 継続高校の場合 ◇

『ただいまあ!!』

『うあ!?! ビビった…』

『どうしてお前は、勢いよく…つて…すげえ早いな』

『いやあ…すつきりした…』

『……』

『……』

『ん？ どした？』

『お帰り尾形！』

『顔色いいなあ！ おい！』

『…何言つての？ お前ら』

『いいよいい！ 顔見りや、元に戻ったのわかるから!!』

『ああ…鏡で見ただけど…、すげえ顔色してたな、俺』

『なんか、変な事言っていたしな』

『変な事…ん？ なんだ？ 覚えがない…』

『泥酔完全記憶能力のお前がか？』

『なんだその、能力…』

『…：…やっぱり、本格的におかしかったんだな…』

『まつ！ いいや!! このまま継続して継続だ!!』

『林田…』

『まあ聞け、中村。このまま続けてみたらハッキリするだろ？ 尾形

の状態』

『は…？』

『ぶつ壊れたままか、戻ったか…。正直、あの状態の尾形を野に放つの

は、怖いだろう？』

『…まあ…そうだけど…』

『はい、決まりい。…尾形！』

『ん？ どうした』

『……』

『……』

『何かね？』

『…：…なんだ、今度のあの爽やかさは…：きめえ』

『ああキメエな』

『はっはー。…：怒るぞ』

『あ、所でよ尾形』

『だから、なんだよ』

『前から気になってただけだし、お前…ミカ選手とどうやって知り合っただけ？』

『んあ？ ミカと？』

『そうそう。あの人、戦車道会のはぐれメタルって、一部で呼ばれていてな？ 滅多に会えない、会っても即逃げるって有名なんだ』

『…ああ。すげえ分かる』

『だろ？ どうやって…しかも何？ あの好感度。死ねよ』

『サラっと、言いやがって…』

『で？ 西住さんにも言えない事か？』

『いや…そんな事は………ないよ？』

『…なんだ、今の間は』』

『…ぐ』

『ほら？ いいじゃん、言ってみな？ またイケメン君が、判断してくれっよ？』

『…あっさり元に戻った尾形も尾形だが、それに対しての態度も戻ったな、林田』

『いや…いいけど』

『ドウゾ!!』』

『一応、みほにも軽く言ったんだけどなあ…高一の夏の時だな。出会ったのは』

『ほう…？』

『車の免許を取得したばかりで…練習がてら、車で北海道横断しようと思っただけ。』

『…その発想が、すげえな』

『まあ…女満別って空港まで飛行機。そこからレンタカー借りて、函館まで行って…青森に戻ろうと思っただけよ。んで、その空港の先で出会った』

『…端折りすぎじゃね？』

『いや…そこからだよ。なんか、戦車で空港の端をウロウロしてたからさ…なんかあったのかって思っただけ。声かけたのがきっかけだ』

『ナンパか』

『ナンパだな』

『違うわ!!』

『…じゃあなんだよ』

『いや…あいつらの戦車って珍しい形してるだろ?』

『BT-42だな。確かに…んなモンウロウロしてたら、俺も見に行くな…』

『まあ戦車にやそんなに詳しくもないからな。変わったのだからいい。声かけたらなんかさ…腹減って動けないみたいだな言ってるんだ』

『らしいな。本当に継続らしいな』

『んで、バグをパクられた』

『…』

『食料入ってたから、分けてやろうか?って言ったら、バグ事持って行きやがった…』

『』

『まあ、本当に大したもん入ってなかったらさ。買えば代わりが効くものばかりだったし…ただな。携帯電話が入っててな…』

『携帯?』

『おお。みほとまほちゃんと、まだ交流あったし…しほさんの写真も入ってたしで、代わりがないモノだから、それは取り戻そうかと思ってるな…』

『待て。さらつと言ったが、後半は西住さんからすればアウトだろ』

『んで、あいつら逃げるもんだから、戦車のスピード上げる前に飛び乗ってさ…んで、まあ色々合って…』

『聞け。…まあ、彼女達からすれば…今更か…』

『んで、遭難した』

『』

『まあ正確には、携帯のバッテリー切れて、方角すら分からないし…森人中入っちゃってよ。強引に進んで、漸く舗装道路に出てさあ…そのまま、ちよこちよこ集落経由しながら…結局、ミカ達とBT-42で、函館目指し始めたって所ですわ』

『いやいやいや！ 端折るな!!』

『結局…2週間掛かったなあ…まあ色々勉強になったけど』

『……』

『集落集落で、野生動物とかの捌き方とか教えて貰ったり…食料も  
らったり…で、なんとか生き延びたよ？ 一応、鹿と兎は、それなり  
にうまく捌けるぞ?』

『…待て』

『なんだよ』

『2週間、あの戦闘力高い人と、ロリ粹二人でサバイバルしたってこと  
か?』

『まあ、舗装道路出たら、道教えてもらいながら進んだから、まったく  
サバイバルだけって訳じゃ…』

『そこじゃねえ!!』

◇

「…懐かしいね」

「あはは…隆史さんには、悪い事したね…」

「ありや、ミカが悪いだろ」

「くれると言った物を頂いたんだ…何か問題があるかな?」

「…まとめて持っていくのは、流石に問題あると思うけど…」

「んな事、言ってるとまたタカシに怒られっぞ?」

「大丈夫だよ。結局は最後には許してくれる…それが彼の良いところ  
…「んっじや報告すつかアキ」

「そうだね。後で言っておこうか」

「いいかい? 何事も…「ああ!!!」

…なによ。

いきなり大きな声出さないでよ。

「どうした、みほ」

「……戦車道チヨコ……カード……」

「ん？」

「知らない人のカードを聞いた時……隆史君……ミカさんのカードをその中に入れてた……」

「……」

「……………」

「何を誤魔化したんだろう……」

「みほ。それは……しつかり……ハッキリ……と、させないとな？」

「……そうだね、そうだねえ？ お姉ちゃん」

は……はい。みいっつ。

あの馬鹿に死亡宣告。

∨

『いやあ……後な？ 森の中だと本当にでるんだなあ……熊』

『だから、聞きたいのはそんな……くまあ!？』

『いたいた。ヒグマ』

『……軽く言うな』

『キャンプ設置していた所でさ、少し目を話した際に、手荷物漁ってたんだよ』

『…………』

『ただ遊んでいただけかもしれないけど……それ見て、ミッコが切れちゃってさあ……ミカも取り戻そうとするし……ま。止めたけど』

『な……なんか、お前……帰ってきたら、喋り方すげえ軽いな……』

『そっか？』

『で？ なんか、そっちが気になる』

『ん？ ああ、熊って獲物に対する執着心が強くてさ。追い払ったりすると粘着されるんだ。唾液とかで匂いも強いし……特に食料なんて荷物に入ってたなかったしで、そのまま丸々くれてやって、その場に荷物捨てて逃げたわ』

『…………』

『すげえ、しつこいからなあ……熊。山の天気も変わりやすくてさあ……』



雨降って一張羅も濡れるしで最悪だったな！ はっはー!!』

『夏の熊って怖いからなあ…。あの時、逆に食料切らしていて正解だったかもな。下手に奪われていたり、食われていたら、学習して他の人間襲いかねないしな。人間の近くに飯が有りつてね』

『…尾形、変に詳しいな…』

『散々…中学ん時から、熊だ熊だと言われ続けていたからな…調べた……調べ尽くした…』

『……』

『あ、後な？さつき言ってたミカのカンテレが壊れたのって、この時な』

『え…あ、うん。熊講座受けてた気分だったから、どうでもいいや…』  
『…着替えないし…北海道…夏場で夜中とか寒いしで…素っ裸に毛布だけじゃ辛かったなあ…。戦車の中に俺の私物の1枚しか、無かったしな』

『……ん？』

『どういう事だ？』

『何が？ ああ、北海道って場所によって夏場でも、気温が一桁代に…違う!!』

『毛布…？ 一枚…!』

『それ…ミカ選手も素っ裸って事か？』

『そうだな。着替えあいつら持ってなかったし』

『あのロリっ子二人もか!』

『だな』

『夜か!? 一枚の毛布か!? 4人か!』

『そうだな』

『死ね!!!』

『なんだよ、いきなり。仕方ないだろ。風邪引くし。まあ流石に初めは俺も遠慮したけどさあ』

『軽いんだよ!! なんだ、この落差!!』

『いやあ…人肌って結構暖まるんだよな』

『知らねえよ!!』

『いやいや。大丈夫。延々とお経唱えて、煩惱消してたから』

『…あつさり言うなあ、というかお経?』

『えつと…宇宙天地 與我力量 降伏群魔 迎來曙光 吾人左手 所封百鬼 尊我号令 只在く』

『怖ええよ!!』

『あく…言われたなあ…夜中だったし…。なんか黄色の雨合羽着た子供とかいたしな…流石に黙ってたけど…』

『はっ!?』

『山中の夜中だしな。うん、アキの怯え方が可愛…可哀想だったから、黙ってた』

『…お前』

『まあそんな時は、ミツコが何時までも熊の事を気にしてたから、別の話で誤魔化したけど…』

『別の話って…』

『いや…丁度、北海道だったし…熊に対する知識をと思ってたな?』

『まさか…お前…』

『三毛別熊事件の話…』

『お前は鬼か!!!』

『すげえな…林田の突っ込みがキレッキレだな…』

『お前…いろんな意味でひでえわ…』

『いやあ…なんか、一晩中抱きつかれてたわ。頑張れば理性って持つんだな…』

『…』

『なあ、林田』

『…なんだよ』

『三毛別熊事件ってなに? お前知ってるんだろ?』

『…ググレ』

∨

「二」 …… 「三」 カタカタカタ…

あ…なんか、皆一斉に継続高校の連中を見るのと同時に、携帯を取り出したわね。

三毛別巖事件って…なんな…

「…お姉ちゃん」

「……なんだ」

「もつと警戒しておくべきだったね」

「……」

…尾形…あんだ…。

∨

『もう…いい…お前が、ド鬼畜だと分かった…で?』

『で? 何が?』

『尾形、お前、そこまでの事しておいて、ミカさんの事、想像つかないとか言わないよな?』

『ミカ? つくけど』

『……』

『……軽い…軽すぎる……』

『そうだな。ミカの場合…』

『場合?』

『…変わらんなあ』

『変わらんって…』

『…そうだなあ。みほの次かな?』

『…はっ!』

『自然体に入れる女性って、意味でな。結構、ミカといるとそんな感じがするな』

『…お前が、西住さんを選んだ理由って奴だよな…?』

『そうそう。昔からの事もあるけどな？ うん、主にはそんな感じだな！ 特段そういつた関係になっても変わらないと思う。続く説教の日々だな！』

『言い方、軽いんだよ!!!』

『ちなみに、あの二人は?』

『アキとミツコか?』

『そうそう』

『んあゝ…妹みたいに感じるからなあ…保護者目線だ』

『一年と同じか』

『そうだな』

∨

「いつでも自然体というのはね？ 一番簡単で、一番難しいものなんだよ?」

「…ミカ。顔真つ赤だぞ?」

「…ホ…ゴ…」

「アキ? アキ!? どうした!?!」

……。

……………。

あれ。 あいつ、結構、私にも…アレ?

「……」

「…み…みほ?」

「実感した…お姉ちゃん。それで、決めた…」

「何が…だ?」

「私…ちよつと…もうちよつと、隆史君に積極的になろうと思うの…」

「……」

「…もう少し…頑張る…うん」

今更、危機感?

決意した顔してるけど…ま…まあ? 関係ないけどね。

∨

『あっちは?!?!?』

『ミカとか?』

『他に何があんだよ!!』

『落ち着け、林田…』

『あるよ?』

『だから、軽いんだよ!!』

『…おや、林田が劣勢になってきたな…』

『でっ?!?!?』

『…ミカとの場合…』

『場合!?!』

『…トコトン、心が折れるまで、攻めそう』

『』

『ミカってほら、飄々と何事も躲すみたいに…結構余裕をもってお姉さん風だし…』

『…あ、はい』

『…その余裕が瓦解するくらい…嫌と言う程、女だと自覚させたい…』

『』

『それにミカは…そうだな…ワイシャツとか似合いそうだな!』

『お…俺、まだなにも聞いてないけど!?!』

『男物のワイシャツとか…ブカブカとか最高だと思う!!』

『あの…ふあんたじ…』

『あ、基本はカンテレの妨害かな。後背座位だな。うん。対面でも良いな!!』

『』

『基本流浪人だしね…外が増えそうだし…』

『』

『…あ、みほに』

『!?!?』

『………よし』

∨

『

…みほ』

『

…積極的に…頑張れ』

『他人事!?!?』

『正直、今の隆史は私も…その…少々恐怖を感じる…』

『

∨

『…笑わなかったけど…雰囲気変わったけど!!』

『責任取れよ…林田』

『!?!?』

『…どうすんだよ…この尾形(邪)』

◆ ルート正史 ◆ 続・男子会です！ P I N K 後編

「やっぱりタカシの奴、ちよつとおかしくなってるんなく」

「そうだね」

「……」カタカタ

継続高校のチビツ子二人が、お気楽にそんな話を話している。

ちよつと？

どこが!?

アイツ、情緒不安定なんじゃないの!?

いくらアルコールが入っているといえ、あからさまにおかしいじゃない!!

「嫌と言う程、女だと自覚させたい…つて、ミカ別に男に見えねえけどな?」

「内面的な事じゃないの?」

「ちよつと変な事、たまに言うけどさあ…別に内面だつて男っぽくないよな?」

「…うくん。ちよつと分からないよね?」

「んじや、タカシに直接聞いてみつか」

「そうだね。その内にまた会うだろうしね」

「や…やめておいた方がいい。隆史が困るだけだよ?」

「……」

「ん? 何かな?」

「ミカ、意味分かったの? 哲学みたいな事?」

「女なのに、女だ…つて、自覚させるなんてな。いつもミカが言っている事と一緒に?」

「い…いや。哲学とは…違うね」

「じゃあ、なんなのさあ」

「う…」

あ…純粹な眼差しに、あの風来坊がたじろいでる…。

あの女、意味分かってるわよね…絶対。

それにしても哲学って…。

く

『まああのミカさんって人、見る限りじゃ…乱れた姿なんて、想像できねえけど…体はエロいけどな』

『うむ。ミカ選手って、結局の所、場の主導権を握るのすげえうまいからな。想像できないな…エロいけど』

『ま、継続は、ここで終わりだなあ…』

『……』

『…尾形（邪）？』

『ミカに…』

『ん？ まだなんかあんのか？』

『ガッツリ快楽に酔わせた後に…』

『…いや酔わせたって…だから想像できない…』

『快楽主義には賛同できない…とかなんとか、それらしい事言わせながら、腰振らせたい』

『……』

『上からで!!』

『……』

『説教ついでに、お仕置きとか定番の事言って、自分から求めてくるまで、ギリツギリの寸止めを繰り返すとか…』

『……』

『後、アキとミツコと会話させながら…『OK!! ブレーキ!! 尾形!!』』

『なんだよ、聞いてきたのお前らだろ?』

『…いや、止めないと、止まらないだろお前…。今のお前は、どこまでも行きそうで怖いんだよ』

『また一々言い方軽いしな…。いつものお前なら楽しそうなんだけど…今のお前からは、聞きちゃダメな事まで言いそうだな』

『そうか?』

『…そうだよ。今更止められないから、全員分は聞くけど…やばく



なったら止めてやるから、まあ言ってみろ  
『ふむ。ま、いいけど』

〈

「ミカく…って、顔色が、すごい事になってるけど…」

「なんで小刻みに震えてるの?」

「…いや…隆史の欲望が、思いの他強くてびっくりしたんだよ」

「欲望って? お説教されるのいつもの事だよね?」

「いや…」

「ミカく。快樂主義ってなんだ?」

「それは…」

「それに腰振るって…なんで? 振ってどうするの?」

「

「「ねえく?」

「

尾形：間接的にあの女を追い詰めてない?

掴まれてるみたいだから、逃げる事もできない様ね。

助けを求めて周りを見渡すも…皆目を逸らすわね。

ま、どうでもいいけど。

…こっち見ないでよ。

へ プラウダ高校の場合 〈

『んじゃ次は、プラウダ高校か。尾形の古巣だな』

『そうだな!』

『んじゃ、早速…歩く核弾頭…ノンナさん』

『ノンナさん？ あれ？ まあ…いいけど』

『実は俺、未だに信じられない…あの鉄仮面を瓦解させたお前が…』

『鉄仮面？ ノンナさんか？』

『…カチューシャ選手の前しか、微笑みすら浮かべない程の無表情だったのに…』

『いや、そりや試合中ならそんなモンだろ？ 結構笑うぞ？ あの人』

『そりや、お前の前だからだ！ 言わせんなよ!! くっそ!!』

『林田？ どうした？』

『俺、ノンナさんのファンだったのにい!!』

『そうなのか？ 初耳だな…』

『そうだよ!! あのおっぱいの大ファンなんだ!!』

『……』

『大きいのが好きなんだよ!! ただ、ただ純粹に!! 小さいのよりっ!!』

『大きいのがっっ!!』

『……』

◇

「あ、ローズヒップさん？ まだですか？ さつさとチャーチル・クロ

コダイル持ってきて下さい」

「ペコ!?!」

チャーチル・クロコダイルって…たしか、火炎放射器が装備された、ゲテモノ戦車だったわよね…。

何する気かしら…あの子…。

「汚物は消毒です」

「……」

すごい事を笑顔で言い放った…。

「……」

「やあーね、男って。ね？ ノン…ナア!? なんて目してんのよ!」

「いえ…隆史さんは、少し交友関係を改めた方が、宜しいかと思いで…」  
「…ま…まあ、ノンナのファンって…ああいうの多いしね…」  
「ええ…虫唾が走ります。ですからファンクラブとやらも嫌だったのですけど…」  
「…まあ、なんか代表が、タカーシヤだしね…」  
「隆史さんだけで良いのですが…」  
「……」

く

『準決勝の時も！ 俺、見てたぞあの映像!! 裏山死ね!!』  
『ああ…あの時のか…』  
『押し付けられて、押し付けられたって!! 何と何とは言わないけど!!!』  
『……』

『カタ…』  
『中村?』  
『カタカタ…』  
『ど…どうした!? 顔真っ青だぞ!』  
『カタカタカタカタ!』  
『あ…そうか。今更だけど、悪かったな中村…』  
『は? え?』  
『あの時、俺は…各強豪校達の殺気の爆心地にいたんだ…』  
『……』  
『尾形のせいで…西住流家元もいて……生きた心地がしなかった…』  
『……』  
『お前はただの自業自得だろうが、俺は完全に被害者だ』  
『いや、だから悪かったと思って、ダー様のカードやるって言ってるだろ?』

『ぐっ!! そうだった…』

『もういいか?』

『…林田』

『ノンナさんの番だ!!』

『…』

◇

「 なんの話ですか? 同士ノンナ 」

「 私がタカシさんの唇を奪った話です 」

「 そうで…:は? はっ! 」

「 正確には、奪われたので、奪い返しただけです 」

「 そ…え? は! 」

「 あ、そろそろ…それも返却しないといけませんね 」

「 …同士ノンナ。後日、詳しく聞かせて頂きます 」

「 お断りします 」

「 …アンタ達、私にも分かるように言い争いしなさいよ! 」

「 ちゃんと日本語も交えましたよ? 」

「 そうね…:ピンポイントでね…。ミホーシヤがすごい顔してるわ  
よ 」

…:そうね。なんのつもりかしらね。

みほだけじゃなく、会場全体を見渡したわね…:。

◇

『ノンナ選手か…:尾形が青森で、彼女とどういいう付き合いをしてたか  
知らないけどさあ』

『普通だけど…:なんだよ中村』

『…正直、オレンジペコさんと同じ香りがする…西住さんに怒られそう…俺が!! お前の事で!!』

『んあ? んじゃ中止か?』

『いや…うくん…』

『んじゃ、エロい話だけならいいんじゃないやね? カモン、オツパイ』

『林田…』

『…そっち方面なら…いやでも…』

『中村! お前だけ保身に走るな! 既に俺も尾形も捨て身だ!』

『いや、巻き込むなよ…』

∨

「チツ…余計な事を…」

「の…のんな?」

「ナンデシヨウ? カチューシャ」

「い…いえ、なんでもないわ…」

「オレンジペコサン」

「えッ!? あ、はい!」

「あの林田と言う男…」

「あ、はい。汚物ですね?」

「…私も何車輛かは、回しますよ?」

「ありがとうございます!」

「ノンナ…」

二人して、向かい合って笑い合っているわ…。

∨

『林田。ノンナさんと付き合ったとして、そっち方面なら、胸の話はな  
いぞっ?』

『なっ!?!』

『あの人、コンプレックスに感じてるみたいでな、露骨に言うて怒るし』

『な…え？ 生乳見たことあるの、お前だけなんだぞ?!』

『ねえよ!!』

『…え？ は？ マジで？ なんにもないの?』

『いや…一度だけでも、一日中揉みしだいてみたいとか…』

『…』

『上下じゃなくて、真正面からでも胸で、できそうだとか…してみたいとか…』

『…』

『制服のシャツのボタンを2、3つ開けて、その隙間からして欲しいとか…』

『…』

『その状態で、無表情な顔で、上目使いでして欲しいとか…』

『…』

『そんならいしかない』

『十分だとか突っ込まないぞ?』

『あ、うん。それがお前だ』

『取り敢えず、青師団高校の制服を着て見せて欲しい』

『…分かる!!』

『というか、皆に着て見せて欲しい』

『大洗だと、小山先輩筆頭に似合う人多そうだしな…というか』

『もはやそういうった問題ではなくて、普通に見たい』

『そうそう、制服だしね。問題ないよね?』

『そうそう、公式だしな。学校指定だしね!!』

『卑猥じゃないよな? エロくもないな。指定だしな!!』

∨

《……………》

全員が頭を抱えてるわね…。

尾形の変態的発言…らしき物より、しっかりと意味がわかる方ね、これは。

青師団高校の制服…? …ブツブツ嘆きが聞こえて来るし。

一部黒い殺気撒き散らしてるけど…え? チビツ子ばかりね…。

どんな制服だったっけ?

他校の制服なんて、そんなにしつかり覚えて…。

「隊長? どうしました?」

「…青師団高校の制服というのは…圧倒的に男性に人気でな。私が一年の時に、試合を行った事があるのだが…」

「はあ…」

「普段女性しかいないギャラリーが、この時ばかりは…男しかいなかった」

「……」

後で調べよう…。

∨

『で? …頻りお前の欲望は聞いた。で? …本題だとなんだ?』

『ノンナさんだろ?』

『おお。まああの人、胸が突出してるから、そこばかりに目が行くが…匠の方はどうしますか?』

『正直、昔のノンナさんだったら…色々と思いつくんだけど…』

『昔?』

『最初の頃は、結構キツイ態度だったんだ。初対面なんて、いきなりドロップキックもらったし』

『……』

『何時頃…ああ、あの時か…、まあいいや。途中からなんか…穏やかになってきたな』

『……』

『今じゃ…まあ…うん』

『…ちよつと…イラツときますね、中村さん』

『そうですね、林田さん。西住さんに気を使わない方が、尾形の為に、なるのではないかと思ひ始めました』

『ですから正直、エロい事も普通になりそうで…』

『ああ〜はいはい。なんかもう…ノロケ聞いている感じになってきた…』

『彼女いるくせにな。本来の意味のツンデレ…そのデレ模様を聞かされてみるみた……』

『ちよつと寂しい…』

『……』

『無表情ノンナさんだったら、そこから段々と…嫌でも…とか、真つ白い肌、真つ赤に染め上げたいとか……その経緯も想像できるんだけど…』

『…忘れてた。こいつ今、尾形（邪）だった…』

『言い方が軽いから、流されてたな…』

『今だと、あのエロツツいおでこに……』

『……』

『ケファイアです!!』

『ケファイアなら仕方ないな!』

『ああ! ケファイアならな!!』

『……』

『いや…もう、いや…』

『なんか…尾形が、ノンナ選手とそういった関係になっていたとしても、疑問も沸かねえ…』

『絶対に尾形が、暴走して良しって感じだし…合宿とかの時も…なんだろ…』

『何があっても、尾形（邪）ならやりかねん』

『辛いから、次行こうぜ…つか、こいつ二重人格か何かじゃねえのか?』

∨



「ノンナ……なんで、きつきからチョコチョコ、私の耳を塞ぐのよ……」  
「……」

「最後聞こえたけど……ケファイアってなに？」

「……カフカース地方を起源とする、発酵した乳飲料と……ありますね」

「ふくん、これがなんなのかしらね」

「……」

「……」

あ……頭痛くなってきた……。

結局全員、最後までいるし……ああ……ついに我々だ……。

なにを言う気かしら、あの男……。

∨

『んじゃ……次は、黒森峰か……』

『ある意味でラスボスだな……』

『あれ？ カチューシャは？』

『……え？』

『いや……お前……ロリコンだっけ？』

『お前……』

『尾形の事だから、カチューシャ選手も保護者視点かと思っていたけど……』

『まあ……その視点は確かに無い訳じゃないけど……』

∨

「……」

「カ……カチューシャ……あの……」

「……なによ」

「……いえ」

チビツ子隊長が唇を噛んで……震えてるわね……。

〈

『ああ…そういう事か…あのな？　俺は普通にカチューシヤを女性として見れるぞ？』

『!?!?』

『確かに言動やら何やらで、子供っぽく見える所も多いけど…お前ら、彼女をマスコットの見てるだろ？』

『お……お……』

『カチューシヤ、見てくれは幼いけど…お前らより年上だぞ？　考え方も結構しっかりしてるしな』マア…オレハ、チョットチガウケド…

『まあ、18歳だしな…』

『何だかんだ、彼女はちゃんと周りも見れる。人に対しても気を使える…じゃなきやノンナさんが、ついて来ないだろ？』

『尾形…』

『ただ可愛いだけのマスコットが、プラウダ高校なんて強豪校で、隊長なんて張れる訳ねえだろ』

『そうだけど…』

『小さな暴君…なんてのも言われてるけどな？　ありや性格上の問題だ』

『……』

『それも個性だ。高校生なんてまだガキだけだな？　それでも成長しようとしてる…普通の18歳の女の子だよ…』

〈

「……………」

「カチューシヤ…」

「カチューシヤ様」

「なっ…何よ！　何、見てんのよ!!」

…今度はなんか涙目になってるけど…。

「と…当然の事をタカーシヤは言ってるだけよ！ うん！ 当然ね！！」

「私は何もまだ、言ってますんよ？」

「……っ」

なんで副隊長の方が嬉しそうなのよ…。

▽

『わかった…悪かった…』

『…尾形…ちよつと怒ってたな』

『ん？ ああ悪い。少し昔の事思い出した』

『昔？』

『いやな…一度、青森で…カチューシヤの事で、本気でブチ切れた事あつてなあ…』

『……』

『俺の学校の奴らだったんだけどさあ…俺、ちよつと特殊な関係だろ？ プラウダ宜しく、聖グロと』

『ああ、羨ましいかぎりだ』

『ま…まあ、それでか。珍しがって、からかいに来た馬鹿共がいてなあ…そいつらに対してな』

『……』

『いやあ…思い出したくないから言わないけど、カチューシヤの前で本気になつちやつたから…ちよつと怯えさせてしまった…悪かったなあ…』

『……』

『ま、そいつら、カチューシヤの事だったから…その場の漁師連中まで敵に回したからなあ。魚の餌になつてりやいいの……なつてなきやいいけど！』

『い…いや。本当に悪かったな。そこまで深い意味はなかったんだけど…』

『ああ、分かってくれりやいいよ』

『…尾形の逆鱗って、分かりやすいな…』  
『こいつ、人脈って力だつて言ってたからな。なんか余計に怖かった…周り巻き込んで、総動員して攻撃してきそう…』  
『まあ…ある意味で、こいつの良い所ではあるんだけど…』  
『尾形（邪）の状態だと…どうなるんだろうな？』  
『なに、ボソボソ言ってるんだ？』

◇  
『…決勝戦会場で、カチューシャさんが言っていた事ですわね？』  
『隆史さんは、私達の事でも怒って下さるのかしらね…』  
『…ダーズリン様』  
『怒るでしょうね。間違いなく。断言できるわ』  
『カチューシャ？』  
『…正直、あのタカーシャ…別人みたいで見たくないけど…』  
『サンダースの時に言っていましたわね…恐ろしく丁寧な口調になるとか…』  
『んな訳ないでしょ。人間、本気で感情的になったら、んな余裕ある訳ないわよ』  
『…ふむ。私はその時いませんでしたが…どうなったんですか？ カチューシャ』  
『……』  
『カチューシャ？』  
『……一言も喋らなかった……淡々と作業…処理するかの様だったわ』

◇  
『んで!!??』  
『林田？』  
『問題は、エロい事できるかどうかじゃねえの!? 違うか!?』

『……………』

『あのロリツ子相手に、どんな鬼畜模様を見せてくれるんだ!? 尾形ア!!』

『…すげえわ、お前』

『そこまでブレないのは、素直に感心するわ』

∨

《……………》

「ノンナ。許可する」

「はい」

「あの男……肅清してやる…。空気読みなさいよ!!!」

∨

『では、そんな林田にっえ、正直に言おう!!』

『よし、バツチこーい!!』

『…林田』

『無理!! できない!!』

『……………』

『いや…お前…あそこまで、言っておいて…。女性として見れるんだろ?』

『もちろんだ!!』

『でも…お前、無理の一声って…』

『だってな!!』

『おお…』

『カチューシャ…殺しちゃいそうで…』

『…』

『…』

『…ど…どういう事?』

『いやな…もう…サイズ的にどうなの? 物理的に無理だろ? つて、話…』

『は?』

『カチューシャの腕…さつき見ただろ? ここに来た時、実際に。間近で』

『ああ。見たけど…それが?』

『俺のアレ、MAX状態だとあの位』

『…』

『な? 物理的に…』

『…』

『…』

『あの…なんで、お前ら土下座してんの?』

『散々生、言いました…スイマセンデシタ、尾形サン』

『いるよな…あそこのサイズで、変に卑屈になる奴…』

◇

『何をタカカーシャは言つて…なに!? えっ!? なんで全員、近づいてくるの!!?!』

『カチューシャ? ちょっと腕まくってクダサイ』

『ノンナ!?』

『そうですね。特段、普通の事ですよ? 別に減るモノでもありま

せんし…」

「ダーズリン!?」

「そうだ。早くしろ」

「黒森み…なに!? なんなの!?!」

「そうですよお? …皆さんご希望なんですから…その可愛いお手手  
見せてください」

「ちよっ!? カルパッチョって、言ったわよね!? 貴女、目が怖いのよ  
!! なんて必死に…い!?!」

「さあ…さあ…さあ…さあ! さあ…! ほら!! 早く!!!」

「近い!! 近い近い!!! か…勝手に捲らないでよ!! ノンナあ!!」

「…姐さん。アンチヨビ姐さん」

「……」

「カルパッチョ…生き生きしてますね……」

「……」

「なんか、カルパッチョが…黒髪の賭け事ばかりやってる女に見え  
ます」

「……………」

「姐さん?」

「わ…私も…行って…止めてくる!!」

「…姐さん」

…。

なんかチビツ子隊長…もみくちやにされてるわね。

早くなさいよ

「タカーシャ!!! 助けてえー!!! えっ!?!」

し…島田流家元…。

チビツ子隊長の腕を掴んだわね…いつの間近づいたのかしら…。

「…ナルホド」

《……………》

そして掲げられる腕を、全員がまじまじと…

「……………あ…う……………」

一斉に視線が、チビツ子隊長から、みほに移ったわね。

ええ…全員の視線が。

どこ見てんのよ。

「……………あ……………あわ……………」

こつち見なさい。

「みほさん…ちよつと此方にいらして？」

「嫌です!!」

「……………」

「みほ…」

「……………」

「ミホ…お前は…すごいな……………」

「何が!？」

……………。

……………手を……………。

《……………》

え？…これ？…この……………え？

◇

『つ…次行こう…ショックが強する…』

『…いたいた…中学の時とか、修学旅行とかで風呂入ったあと…急に  
よそよそしくなる奴』

『お前…外人だっけ？』

『純日本人ですけど…』

『…膨張率は』

『日本人ダヨ？』

『お前もう、AV男優にでもなれよ』



『いたわ…中学でも、んな事言ってくるやつ…』

『次だ！ 次!!』

『あつ!! そういや、河嶋先輩ってどうなの!?!』

『は?』

『大洗勢か…ああそうだな。カードと違うからな…そつちはOKだろ』

『まあそうだけど…桃先輩は前に言っただろ』

『そうだったな』

〈 大洗学園の場合 〉

『桃先輩かあ…』

『見た目はできる女っ! って感じなのにな…』

『ポンコツ可愛いってのもあるし…比較的、何言っても、何にでも、強引に迫ればOKしてくれそう』

『…』

『結構、あの人も甘いからな…露出の気もあると見た…』

『そうなのか!?!』

『じゃなきや、あんなキワどい水着なんて着ない!!』

『…』

『何言っても強がるから、とても良い! ああすつごく良い!!』

〈

「

「…河嶋先輩」

『…そういえば大人しいと思ったけど…ずっと気絶してるのね…あつちの副隊長。』

『ある意味では、運がいいわよね…。』

〈

『んじゃ、本命！ 西住さん!!』

『実際の彼女に対して、何をどう言えればいいんだよ、俺は』  
『素直に希望でも言えればいいんじゃない？』

『希望ねえ…』

『だって、西住さんってエロいだろう？』

『エロいな。その質問は疑問すらないな』

『…俺にはわからない…』

『ま…いいけど。ま、みほの場合…』

『場合?』

『最後だ』

『『は?』』

『まあーま。いいから次だ、次。最後に言っでやる』

『大洗の話は、恐ろしく短いな…』

『つまんねえー!!』

『オマエラ』

∨

「…恐怖しかないよ」

みほの眩きが聞こえた…。

∨

『はい、次は黒森峰だねえ』

『そうだな、西住さんの…お姉さんだな』

『……』

『……』

『姉妹丼か…』

『姉妹丼だな……』

『如何わしい言い方するな!!』

『でもよお…体はお姉さんの方がエロいだろう？ 色々と想像が捗らな  
いか？』

『…お前…人の幼馴染に…』

『違うのか？』

『間違っではない』

『ハッキリ言ったな…』

『姉妹揃って、エロいって…』

『んで、お母さんもすごいだろう？』

『…』

『西住流って、エロいんだな』

∨

「」

「隊長…。やっぱりあの馬鹿共、殺してきていいですか？」

∨

『…あ。ちよつと休憩していいか？』

『どうした？』

『…気持ち悪くなってきた…もう一回、吐いてくる』

『おー…行ってこい。顔色は悪くないから、大丈夫だとは思うけどな。  
無理すんな』

『あいよ。ちよつと行ってくる…』

ガチャ…

『…行ったな』

『…ああ』

『尾形…やっぱり様子が変だよな…』

『急に露骨に言い始めたかと思ったら、変に濁す所とかあるしな…ケ  
ファイアとか』

『…最後の理性ってやつか…』

『…戻ってきた時に、こういう風になっているか…もはや興味しかないな』

『今の内にカード、片付けとこうぜ』  
『だな』

◇

「…」

「隊長？」

他の学校連中に、もみくちやにされているチビツ子隊長とみほ。

隊長は特に気にもしないで、立ち上がった。

「どうしました？」

「いや…ちよつと私も休憩だ」

…ああ。

「で…では、私も」

「そうか」

後ろの断末魔にも似た、チビツ子隊長の声を無視し…私達はロビーへ。

まあ…暫く部屋から出なかったしね…。

特に誰も気にしている感じではなかったし、何より尾形が退室した為に、誰も画面を見ていなかった。

というか、チビツ子隊長とみほにご執心の様ね。

…ま、どうでもいいけど。

ロビーを抜け…そのままお手洗いへ向かう。

—

—

「はあ……」

自然とため息がでた。

会場へと帰る途中、ロビー前から外の景色が目に入った為だろう。先程までとは違い、変にのどかな感じを受け、思わず出てしまった。

「どうしたエリカ？」

「いえ…」

いや……まあ、ある程度は大洗の準決勝の時に感じていたけど…。

お兄ち…あのクソ変態が、想像を遥かに超えた成長をしていたからだ。

「いくら酔っているとはいえ、あそこまで…正直、引きました」

「ふむ…」

「いくら男同士での会話だと言っても…普通に気持ち悪いと感じませんか？ ただの変態ですよ！」

「エリカの気持ちは分からなくもないが…男だしな…多少の…」

「多少!? どこがですか!!」

「エリカ、大きな声を出すな。一般の方に迷惑だ」

「ぐ…」

「あと…往來で酔っているとか…言ってやるな。アレは事故の様なものだろう？ 故意ではない」

「…隊長は甘すぎます」

「そうか？ まあ…隆史が、あそこまで言うなんて、多分この先ないだろうから…聞いている分には少し楽しいんだ」

「……絶対に、またあると思いますけど」

「私も異性のああいった考えに、興味が無い訳ではないしな…後学の為にな…」

「………」

隊長は結局…何か理由をつけて、あのバカを許してしまう…。

自身の妹の恋人…もしくは、自身の思い人…が、他の女との…その…。

…そんな想像を聞いて、本当に楽しいのだろうか？

「まあ…正直………」

「隊長？」

「隆史の矯正箇所を探すのが、楽しくて仕方がない……」

「……」

あ……そっちなか。

「いかん、長居をしてしまった。早く会場へ戻ろう」

「……はい」

ロビーで立ち話……目立って仕方ないしね……。

あれ……尾形からメールだ……なに？

◇

『ただいま』

『お、今度は普通に戻ってきたな』

『(邪)は、取れたか？』

『なんの話だよ』

『今度は……本当に戻ったか？ 雰囲気……』

『何が？ さつきからお前ら変だぞ？』

『……』

『尾形……もう一度、トイレに行つてこい。そこに鏡あるから。そこで、同じセリフ……言つてこい』

『……』

『んじや、早速……西住 まほさん！』

『まほうちゃんか』

『魔王な』

『まほちゃんは……正直、考えないようにしてたなあ……』

『まあ、西住さんの実姉だしな……』

『みほへの罪悪感が半端ない……特にエロい方面より、付き合つたとしたら……』

『……まあ……そうだな、気持ちは何となくわかるわ……』

『あっち方面は、ぶつちやけ背徳感が凄まじくて、逆に撈りました』  
『詳しく!!』

『大体…なんでもしてくれそう…』

『…なんで急にオブラートに言ってたんだ』

『……』

『尾形?』

『……いや…言葉にしようとする、胃が一気に痛み出す…』

『ダメじゃねえか……。アレ? お前、尾形(邪)だよな?』

『何言ってたんだ、中村』

『いや…でもなんだろうな? あの人って無表情がデイフオルトだよな? ちょっと厳しい顔の』

『そうか? まほちゃん、結構笑うぞ?』

『…でもよ。なんか、アレの時も声とか出してくれなさそう…』

『なんで、急に言葉を濁した、林田』

『怖いんだよ! いなくてもなんか…:こう…:背筋に…:』

『そうだな! 気持ちは分かるぞ、林田! 尾形だけがおかしいんだ!』

『アレの声って…:いや…でも…:声は…:』

『?!』

◇

ザワツ!

『……』

『…ん? なんだ?』

会場に戻ってきた途端、一気に注目を浴びたわね…隊長が。

周りの視線を気にしながら…:それでも一応、元の席に戻った。

「ふむ。隆史は戻ってきたのだな」

『……』

なに？

なんなの？

なんか、すっごくいい目を見開いて見られてるけど…？

∨

『え…おが…え？ は？』

『ま…マジデ？ エ？ 姉妹丼？ はあ!？』

『……』

『今の言い方…ニユアンス!? えっ!？』

『邪推って言葉を知っているかね？ 君達』

『……』

『夏祭りって言ってたな…』

『…中村の推測は、西住 まほさんだったよな？』

『……』

∨

「オネエチャン♪ チョット、コツチキテ」

「!？」

∨

『…尾形。お前、童貞だったよな？』

『YES。ワイ、チエリーボーイ』

『もういいわ！ ぶっちゃけた話…さっきの夏祭りの相手って…』

『ノーコメント』

『西住 まほ選手だろ』

『ノーコメント』

『答え、言ってる様なもんだろ!!』



『…違うって言っても、お前ら信じねえだろうが』

『当たり前だ!!』

『まじか…:…こいつ…:…姉妹に手を出してやがった…』

『出してねえ!!!』

『なあ、尾形』

『なんだよ』

『お前のせいで、すごい噂が広がってるのって知ってるか?』

『は? 何言ってる…』

『そりゃ…:…そんな噂も広がるわ…:…お前、西住キラーじゃなくて、その内、戦車道乙女キラーとか言われるぞ…』

『なんでお前、その呼び名知ってんだよ!!』

『…お前、血筋は島田家だろ? こんな噂があるんだ』

『なんだよ』

『島田の男は、女癖が悪い』

『…:…』

◇

《…:…》

あ、島田流家元が、頭を抱えてた…。

なに? そんな噂あるの?

…:…。

みほは執拗に、隊長に対して手招きしてるわね…:…。

◇

『これ以上、聞いても西住選手の事は言うつもりないだろ、尾形』

『のーこめんと』

『…:…』

『では、次だ』

『中村!?』

『逸見選手』

『……』

『どうだ?』

『はあ…いいか? 中村』

『なんだ?』

『本人達がいらないとはいえ、そういった話で盛り上がるのは良くない  
と思うんだ!』

『どの口が言ってるんだ!!』

『何、ヘラヘラ笑ってるんだ!!』

『カード衣装の時もそうだけどよ! お前、逸見選手の時だけ、特別扱  
いしてねえか!』

『……』

『…まあ、確かに決勝戦での事考えると、アレかもしれんが…』

『……』

『あ…ひよつとして、逸見選手も保護者目線で見てるのか?』

『……』

◇

『……』

『エリカ!』

…。

……。

◇

『……まっ。もういいか』

『尾形?』

◇

う……?

な……なに? 尾形の雰囲気が変わった……。

浮ついた感じではなく、先程一瞬見せた……とてつもなく不穏な感じ……。

◇

『さて……いいか?』

『なに? ……え?』

『俺だって男だ。変な理想を押し付けられてもたまらん』

『は?』

『みほには言ってるんだ。付き合う前にな? 付き合う条件……とは違うけど、結構、俺ってそっち系統ひどいからさ』

『な……え? どうした急に……』

『結局、俺はこういう男だ。……なんか、変に気持ちが高ぶっていてさ……今までも結構すんなり言えたなあ』

『……』

『いいか? 今回、俺のした事は、ただのセクハラだ。だけどな? 男なんて皆こんなモンだと、中村達との会話で分かったと……分かってく

れたと思う』

『……………あ』

『まほとみほの事は、基本的にはいつでも真面目に考えている。だからこそ、ここに言う事では無いと思う』

『お…尾形？ どうした!?!』

『エリ…ちゃんの事もそうだ。だから言わないし、本人達にも聞かせられない』

『……………お前』

『…さて、林田』

『どうした中村？ 荷物まとめ始めて…』

『お前は逃げる。急いで逃げる。超逃げる』

『は?..』

∨

尾形の雰囲気が変わった…。

目の前の男共に話している様には感じなかった。

自分に言い聞かせる？ それとも違うわね…。

会場中が、黙ってそれを見ている…。

どうしたの？ 帰って来たばかりで…私の事もロクに話してもいいない。

∨

『…尾形、いつからだ?』

『初めから』

『はっ!?!』

『俺って…:まあ、色々あってさ。こういう事に敏感なんだ』

『……………』

『今さっき、吐いてくるって言ったろ?..』

『お……………おお…』

『ありや、嘘だ』

『……』

『確認しに行っていた』

『…それで時間が掛かったのか』

『そーそ。衣装は仕方ない。自分達が着るモンだし…って思ってたんだけどな』

『……』

『…ダーズリンへ電話した時に、後ろから聞こえてきた声で、それで、大体いた高校は把握した。誰かしらの声がすれば、その高校は全員いるはずだろうしな』

『…あの時』

『まあ？ 場所は何となく……だったけどな？ カチューシヤがここに来て、目線で判明……確信したわ。ありがとな？』

『結構今回は、本音で話したなあ…俺も浮ついているのか…結構楽しかった…』

『 だがな 』

『もう一度言うが、ある意味で許せるのは、衣装合わせの時までだ。その後の事は、完全にプライベート。お誂え向きに、中村達と会話が続けられたから楽だったなあ。きっかけを作らなくて済んだ』

『カードの事がなけりや、お前から何かしらしてきたってことか？』

『そうだな。でも…だからこそ言っただ…いいか？』

『最後通達はした』

『…アレか…どうりで……』

『そう…「そんな映像が流れてたとしても、彼女達なら素直に見るような…そんな卑怯な真似はしないだろうよ」ってな』

『…あの不自然な信頼感発言だな…』

『結局、本当に退場していたのは、黒森峰だけだったな…エリ…リンに、メールで聞いてみたら、本当にロビーにいたしな。だから、黒森峰勢には、俺はなんにも言わない』

『……』

『いやあ…それに1回目の退室は、本当にトイレで吐いてきたんだ…それでか…妙に頭がスッキリしてな…』

『躊躇と容赦が消えた』

『……』

『…これが、尾形（邪）』

▽

見てる……すつごいカメラ目線で、見てる!!

だから!?! だから、あそこまであからさまに如何わしい発言したの

!?

あ…会場中が、押し黙っちゃった…。

要は……

▽

『不自然な置物……盗撮と盗聴…バレバレだ』

『……』

『下手に動くと、分かっちゃうしな。もう一度言おうかね? ありが

とよ、カチ ユーシヤ』

『…な…中村』

『なんだよ……』

『尾形…口は笑ってるけど……目が座ってるな』

『……』

地震…でも起こってるのかしら？  
全員で、小刻みに震えてる…。

∨

『さて…最後だ。みほ…の事だったなあ？』

『いや…なんかもう…遠慮しときます…』

『黙ってる、林田！ アレ尾形、結構マジで怒ってるから！』

『えつと…あっち方面だったな？ ハヤシダ』

『えっ!? そ…そうだな』

『ほら…ふられた…』

『全部だ』

『は?』

『オールスター、今までの全部』

『』

『今、そこに誰がいるかは、分からない。…まほとエリカは、いないだろうからいいけど…他の連中、今回の事は、知らない振りをしてくれ。俺もそうする』

『』

『あ、千代さん…? 後でお話があります』

『家元もいたのかよ…』

『さて、俺はな？ お仕置きという名目で、いぢめるのが、非常に好きでな…だからだかなあ…本気を出そうと思う…。ナア？ ミホ？』

∨

手の上だった…。

尾形の全て手の上…。

一喜一憂していた全員が、青い顔をしていた。

知らない振りをしろ…そうすれば、対象が分からないから…そう言っているのだろうか？

私達…黒森峰は、たまたまロビーにいた所でも見たのだろうか。

その時に来た尾形からのメールは、何処に今いるかのメールだった。

素直に答えたわよ。

嘘つく意味ないし…。

だからだろう…私達は、抜けていた。

テレビの画面には…奥から近づいてくる尾形が映っている…。

小刻みに真っ青になって、振動を繰り返しているみほ…。

そして尾形の声が、そのカメラを通して聞こえてきた。

発言の後…尾形の手がアップになった直後…画面が真っ暗く  
なった…。

最後に聞こえた、ひどく重い声は…

『タノシミダナア』



※ルート壊 【宴編】※ 冷泉 麻子 ある日常の  
コマ 修正・加筆版

放課後。

今日は、戦車道の放課後の練習も無く、生徒会実務に勤しんでいた。といつても、珍しく時間がかかる様な仕事もなく、荷物運びだけで終わる。

書類の山…。

ダンボールに入れられたソレらを、保管倉庫へと運んで終わり。

そう。本当に珍しく、定時…じゃない。

普段、帰宅部の一般学生達が帰れる様な、そんな時間に帰宅ができる。

ただ何もしないで帰るのは気が引けるので、せめてと思い、力仕事。そのまま直帰しても良いとの事。

そんな訳だから、さっさと終わらせて、とっと帰ろう。

杏会長達は、後日行われるエキシビジョンマッチの件で、もう暫くは学校に残るそうだ。

……違う。

いや…正確には、今日この日の定時帰宅は、桃先輩の気使いでもあった。

休め。

その一言…。

一応、俺も生徒会役員だし、手伝いの申し出を試みたが、その一言であっさり拒否された。

いつもなら馬車馬の如く、生徒会長に尽くせとばかりに言っていた桃先輩が、こんな珍しい…。

そんな訳で、即終了。

保管倉庫へ、ダンボールを入れ、鍵を閉めて…返して…。

10分もかからないで終わってしまった…。

……。

時間は、まだ2時過ぎ。

2度目の登校日の為、午後の授業は一つしかなかった。といつても、ホームルームだけって感じ出しね。

すっごい、時間が余ってしまった。

うくん。

どうしよう…。

みほ達は、帰りに食材の買い物をして帰ると言っていたし…本当に特にやる事がないな…。

手伝いを申し入れたら、即答で断られたし…。

下駄箱で、靴に履き替え…このまま帰るのも…と、少し途方に暮れる。

「あつ…」

無理矢理何か、する事がないかと思いを巡らせてみると、一つ思い当たった。

例の宿直室。

いい加減に、鍵を直さないとまずいな…。

何時までも、鍵を掛けられないと問題があるな。

一般生徒は近づかないけど、下手に誰かがアソコに気が付くと、入り浸る輩がでそうだ。

良い、サボリ場所になるからね…飲食できるし…水道、トイレ…テレビまであるしな。

約一名は、速攻で気がついて、即さぼり場所に確定させたからな。

マコニャンには恨まれるかもしれないが、ダメだよなあ…壊れた鍵を放置するのは。

鍵自体に、形式番号か何か記載されているはずだし、携帯で写真を撮っておくか。

…後日、修理を頼もう。

思い立ったら…って事で、さっそくグラウンドを横切り、学校玄関口  
ビーから、結構な距離を歩いた。

例の宿直室へ到着し、さぼり防止の為にやって来たというのに…。  
これもちやっちやと、済まそうと思つたというのに…いやあ…なん  
というか。

もういたよ、サボリ魔。

コンクリの玄関に脱ぎ捨てられた、学校指定のローファー。

ちゃんと並べましようね…と、無意識にその靴を外向きに並べる。

小さい靴…ああ…もう。

部屋内を見なくとも、犯人が分かる。

四畳間の畳の部屋。

その中心に、押入れから出されただろう枕を、抱き抱える様にうつ  
伏せになって、小さな寝息を立てていた。

「はあ…まつたく…。いつからだ？」

独り言を呟きながら、そのまま彼女へと近づく。

上から見下ろした彼女は、口を半開きにして…まあ…気持ちよさそ  
うに寝ていた。

枕の上には、開かれた本…小説だろうか？ 完全に、読んでいる時  
に、寝落ちしましたって感じた。

「…なにしてん、マコニヤン」

スースー寝息が聞こえる。

ああ…制服が、シワになるぞ？

本当に何時からここにいるんだろ…？

昼休み、あんこうチームで飯食ってたから…ん？ ちゃんと教室  
戻ったんだよな？

ここ、比較的戦車倉庫から近いし…まさか…。

携帯を取り出し、即保護者様へ連絡を入れる…。

3コール程したら、明るい声が電話口から聞こえてきた。

『もしもし？ 隆史君？ どうしたの？』

「…あ、沙織さん？ ちょっと聞きたいんだけどさ…」

『聞きたい事って…なに？』

「麻子…午後の授業出たよな？」

『……………』

「…爆睡してる所を発見いたしました」

『…まあこおお……………』

あ、この声の様子じゃ…。

『昼休み終わって…ちゃんと教室まで、送ったのに…』

「うわ…やっぱりサボったか…」

『半日、丸々寝てたね…それは…』

やっぱり…。

『どうしよ…今、みぼりん達とスーパ―にいるんだけど…戻ろうか？』

「いや…いいよ。起こして連れて帰るよ」

『あ、うん。お願……………い…』

「こんな寝方していりや、そりゃー夜、寝れなくなるわな…」

『……………』

「ん？ 沙織さん？」

『隆史君』

「ん？ なんですか？」

『…寝てる麻子に、いたずらしちゃダメだからね？』

『……………』

い…言うようになったねえ…沙織さん。

「しませんよ…」

まったく…。

会話もソコソコに、通話を切った。

携帯を制服のポケットにしまうと、改めてマコニヤンを見下ろす。

……………。

はあ…。

「麻子。ほら！ 起きろっ！」

軽く頬つぺたを叩くが、にゅあ？ にゅ？ んな、よく分らない声を発するだけ。

あつ。

手を振り叩かれた…。

無意識にでも、睡眠を邪魔する俺を攻撃してきた。

沙織さんが、起こす時なんて、絶対にしないのに…。

……。

というか学校で、熟睡すんなよ…。

寝たふりとかでもなく、本気寝だな…こりや。

「……」

いたずら…。

そーいや…マコニヤンが家に引越してからというもの…何もしてないな。

忙しさを何やら色々あつて、結局…大洗ホテルでしたのが最後か

…。

……。

スカートから白く細い足が伸びている…。

「……」

沙織さん。

モウシワケアリマセン。

ワタクシ、嘘ヲツキマシタ。

「起きないと…イタズラスルゾオ？」

◇

「徐に、スカートを捲ってみる。

多分、大雑把に捲ったとしても、このマコニャンなら気がつかないだろう。

中途半端にゆっくりと捲るより、こちらの方が気がつかれないと踏んだ。

シユツと少し、布が擦れる音…。

ふむ…。

青天の霹靂。

…。

意味は全く違うが、ただ青天と言いたかっただけです！

……。

今日は青ですね。

ぶりゅー…。

お尻の間に少し挟まり…できた下着のシワが、めちやくちやエロい。

こうやってマジマジと見ると…。

…マコニャンも結構な推進力をお持ちな様で…。

「……」

ここ数日、アレをしていない。

まあ、少し溜まっておりまして…少々、視覚的刺激が強い。

ムニツと、尻肉を手で揉んでみる。

「うむ…」

我。躊躇セツ。

やわらかい尻肉が、軽く形を変えた。

……。

……。

ぐにぐにと、揉んでいるとふと、思った。

そーいや…最近、スキルつての使っていないなあ。

…たまには試してみるか？

しかし、それは完全に寝込みを襲う訳で…。

完全に最後までつて事で…。

そんな卑怯な事出来るはずも…。

あ。俺、卑怯者だった。

ならいつつか!!

「……」

結構、なにも考えないと本当に躊躇なく、できるものだな…。

前なら葛藤やら何やら…グジグジ考えてしまって、思い切った事なんてできなかつたのに。

何度か肉体関係を継続している状態だと…罪悪感が和らいでいる。

だから…うん。ちよつと欲望のまま動いてみようか？

…マコニヤンだし…前からやりたかつた事できそうだし…やってみるか!

でも、いきなりは痛いだろうし…何か…。

あ。

アレ、使えるかな？

下手に愛撫して気がつかれたら、終わつちやうしな。

そのまま、パンツの両端に親指を掛ける。

残った指で、腰骨を持ち…ゆっくりとお尻を上げる…。

更に、そのまま…ゆっくり…ゆっくり…。

「んん…っ」

!?

「…んん…スー…スー…」

つつぶねえ!!

気づかれ…いや、起こしてしまったかと思った…。

催眠とかあるし、矯正的に眠らせるとかもありそうだけど…それじゃ意味ないしな。

そのまま…作業を継続…。

ゆっくり…ゆっくり…。

段々と…更に白い桃が頭になっていく。

いや…しかし、マコニヤン…本当にエロい尻してるなあ…。

小ぶりなのだけど、なんと…肉が…。

ゆっくりり……ゆっくりり……。

そして…

「っ!!」

成功…。

声に出さない雄叫びを上げる…。

戦利品を天へと掲げ…。

その青く薄い布を…。

……。

うん…途中で起きて、奪われたら台無しだしな…隠しておこう。  
どこにとは言わないが…。

…次だ。

足を曲げさせ、お尻を更に手前に引く。

正座したまま、体を倒したかのような姿勢にさせる為だった。

「……」

失敗した…。

膝立ちしながら、上半身を地面につけたような格好にしてしまっ  
た。

これは…余計にエロくなった…。

秘部部分をお尻ごと突き出して、俺に見せつける様な姿勢…。

「……」

…我慢。

下手に手を出したら、水泡に帰す…。

…。

しかし、ここまでやっても、まだ起きないか。

まあ都合がいいけど…。

さて！ ここからが本番だ。

では、前回使用した…この…。

『リフレッシュ』&『EXP』



その、小さな菊門へとスキルを使用…やはり使えるな。  
腸内浄化と経験値付与。

使用後、お尻の穴が…心なしか、いやらしくなって気がする。

…性器としての機能を、兼ね備えたのだろう。

…うん。

我ながら鬼畜だよなあ…。

でも、起きないマコニャンも悪いよね？

…。

悪いよな？

両手の親指を、唾液で湿らせる。

お尻を両手で鷲掴みにすると、軽く親指で菊門をいじってみる。

…やわらかい。

「んっ…あ…。」

快楽を感じているかは、分からないが、親指を尻穴に少し沈める。  
すると、少し甘い声が聞こえた。

そのまま、清潔になったソコに舌を入れる。

唾液を流し込む様に…。

さて…本番だ。

あまりいちくり回すと、気がついてしまう可能性がある。

ここは一気に行こうか。

ズボンを脱ぎ…息子を露出させる。

うん…すでにマックス状態にまでなっている、我が愚息。

少し、手で口の唾液を取り…龟头を濡らす。

…無理だな。

これじゃ多分、ダメだ。

何か…他に…。

脳内を検索。

即、答えを見つけてた

あ…あった。

スキルつてのは、便利だね…というか、ずるいな。

まあ…いいや。こういった事にしか使えないし、使わない。

『ローション』

手内に、粘着液のドロドロしたモノが出現した。

スキル名まんまだね…。このスキルも多様性がありそうだ…。

成分は唾液と一緒に。

無味無臭。

特段、害は無いが…ちよつと粘膜につけると、少々、媚薬効果もある…そうだ。

それを、自身の陰茎に塗りたくる。

温度は体温と同じに設定した為、冷たくはない。…ちよつとキモチ悪いくらいかな。

さて…。

…先程、少しマコニヤンの菊門を愛撫してみたが…。スキルの効果もあるのだろう。

唾液で少し湿り、小さくパクパクと出口…いや、今からは入口だな。

その入口が、誘うように開閉を繰り返している。

そのローションを流すこむ様に、塗りたくる様に人差し指を入れた。

第二関節くらいで、周りを締められて、止まってしまう。

そのまま少し…出し入れを試みる。

「…んっ…んっ…んっ…」

動かす度に、少し甘い声が出た。

感じているかは、やはり分からないが…枕を強く抱きしめていた…。

菊門から、余った粘着液が垂れている。

糸を引き…ぬらあ…つと。

…。

さて。

変に高鳴る心臓の鼓動を感じながら、その入口に早く入れたくなつた。

…あ、俺も亀頭に塗ってしまったので…粘膜を通して媚薬効果もあり…興奮が倍増していく。

それはマコニヤンも、同じなのだろうか？

：無意識に荒い呼吸を、自分自身で繰り返していた。  
陰茎を手で添えて：亀頭をその入口へ…。

又チツとした音がした。

そのまま、ゆつくりとマコニヤ：麻子へ入っていく。

き：きつつい…。

周りの肉壁が、異物を押し出そうと圧迫を始める。

ので。

入る所までと：強引に：が、ゆつくりと入れて行く。

ニチツと、粘液質の漏れる音がした。

亀頭の半分程入った時…。

「…：うあ…：う？」

マコニヤンが目を覚ましたかのような、声が出た。

ダメですな。ここで躊躇すると、多分失敗する。

だから…。

「!? つ!? !!」

グリツと、亀頭部分を全て挿入。

先部分のみ、燃える様な熱い体温という名の熱を感じた。

「っ!??!」

おお：寝起きで混乱してるな…。

腕を地面：畳につき、体を起こそうとしている。

流石に目が覚めたのだろう。

異常事態を察知して、どうにか行動を起こそうとしているの  
だろうね。

はい、遅い。

「ぐうう!??!」

ズルツ…と、一気に…。

「あっ…：あう…：ふぐうっ!!」

力任せに…：一気に根元まで、陰茎を肛門奥までねじ込んだ。

苦しいのか、声が出ない様だ。

何かを探すように、パタパタと手で畳を叩いている。

ゆっくりとこちらを向く顔……見開いた目と俺の目が合った。

「っ……か……はっ……あ……あ……あ……」

ゆっくり……しかし、止まらず……。

「っ……はっ……はっ……」

クチツ……と、粘液同士が、合わさる音を立てた。

俺の体と、麻子の体が当たった為に。

「いやあ……全部、入ったな……。うん、人体ってすごいな」

声にならない悲鳴が、下から聞こえてくる。

麻子の腰に添えた手を引き……逃がさない。

ヒューヒューと、喉から息が漏れているな。

「カ……う……な……っ……しょ……」

涙目で、体をくねらせ、半身でこちらを睨んでくる。

でもなあ……逆に、変な感情が沸き上がってくるんだよ……その目は。

白白お尻を丸出しにし……あ、もう一度EXPかけとこう……苦しそう

だし。

うん、ではもう一度。

白白お尻を丸出しにし……肉棒によって限界まで広げられた穴が視

界に入る。

こちらを真つ赤な顔で、睨んで見てくる麻子の顔とセットで。

「マコニヤン、おはよう。というか、もう放課後だぞ?」

つつても、まだ、3時頃だけど。

「おっ……! おまつ!!」

「んじゃ、動かすなああ」

「っ!!」

今度は、ゆっくりと少し引く……。

俺と麻子の体に着いた粘液が、ニチツと体から離れる音と一緒に……

俺の体と糸を引く……。

「あ……はっ……あ……」

麻子から、声が漏れる。

陰茎をゆっくりと引き続けると、力が抜ける……様な声が聞こえてきた。

陰茎の半分程、引き抜いた所で、動きを止めると、少し楽になったのだろう。

会話が少しできた。

「なっ……はっ……息が……うまく……できない……」

「大丈夫か？」

「ど…どの口が…というか…何を…」

「いや、マコニヤンを起こそうかと思ひまして」

「は!? 何をっっ……あっ……!」

何か思い出したかの様な声をあげた。

顔が少し青いよ? どしたの?

……。

というか…すごい。

肉壁が陰茎の細かい隙間を埋める様に、圧迫…絡み付いてくる…。

麻子は、こちらも名器なのだろうか?

だからだろう。

気持ちよさが半端じゃない。

少し動かすだけで、一気に持つて行かれそうに…というか、もうイ

キそうな感覚。

すごいな…。

「んはっ!!」

半分まで引いていた陰茎を、今度は一気に奥までねじ込む。

隙間なく強引にこじ開けている為に、粘液質のローションが、低い

音を出しながら、彼女の尻穴から強引にあふれた。

グジュツ…つと。

「あ……はっ……」

背筋を伸ばし…四つん這いになった。

奥まで全て入れると、麻子の心音が陰茎から伝わってきた。

もしくは脈か…。ドクンツドクンツと。

そしてまたすぐに、半分ほどまで引き…一気にまたねじ込む。

「はっ!! はっ!!」

ニチツ…ニチツ…と音が繰り返し聞こえる。

起こしていると言う、過程の話はしたので、もういいか。  
入れれば入れる程：肺の空気も一緒に押し出されるかのように、苦し  
そうな息を吐く。

「か…はっ…ふっ…」

陰茎全体を包み、飲み込む様に全体をシゴく。

細かい所まで、小さな隙間まで：全てを包んでいる。

「っ…っま…どこに…いれ…んっ!!」

今度は、会話は不要。

そのまま出し入れを繰り返す。

動かす度に、ローションが菊門から溢れ出す。

ブチュツとか：ズチュツとかの音を繰り返し繰り返す。

「はっ…はっ…ふっ…」

動かす度に、麻子の口から息と声が漏れる…。

いや…本当に気持ちいいな…。

すでに、何度もこみ上げる物を感じる。

「んっ!!…んっ!!…んっ!!」

麻子の声にも変化出てきた。

今は口元を、枕で隠すように、力いっぱい枕を抱きしめている。

「んっ！…あっ!!…んっ!!」

…陰茎が熱い。

少しずつ、腰が早くなっていく…。

パツッパツツと、腰が当たる音…。

何か…いや、何も考えられなくなってきた。

ただ夢中にソコを貪る。

グチュグチュグチュグチュ…と、掻き混ぜる。

突き混ぜる…。

「っ！」

「んんっ!!」

油断した…。

あっさり…簡単に。

前置きも何もなしに…あっさりと…。

「あ……はっ……あっ……い……」

麻子の腰を引き……一番奥まで突き入れて……その中に全てを吐き出した。

肉壁で押しえ込まれているのもあるだろう。

ドクドクと、欲望を吐き出す脈を感じる。

「はあ……はあ……」

息を切らして……って……こんなに早く……いや……ちよつと情けない。

「……は……あ……う……」

だけど、まだ息子は元気でやっています。

硬くなっている陰茎を、抜かずにそのまま動かさない。

……というか、なんだろうか？

抜き出したくない。

「寝て……る私に……よりによって……どこに……」

ふーふーと、息を切らしながら、何か呟いている。

が……何を言っているか、良くわからない。

「あ……か……この……変態が……終わつたなら……早く抜け……苦しいんだ……」

「……」

苦しいか……それだけなら、俺も流石に遠慮するけど……

「なあ……マコニヤン」

「こ……ここにきて……その呼び……か……」

「少し……感じ始めただろ？」

「っっ!!」

一瞬、体が硬直した。

「く……苦しいだけ……だあ……。早く……ぬ……んんっっ!!」

そのまま継続する事にした。

スキルの為だろうが、開発済の尻穴。

強制的に与えた経験値なので、結局今回が初めてのお尻での行為なのに……と、ちよつと困惑しているのだろうか？

まあ……いいや。中に増えた、体液という粘着液が、グチつと大きな音を立てた。

「ふうっ!?」

グリツ…と、もう一度押し入れた為だった。

「…これで、更に滑りが良くなったし…大丈夫だろ？」

◇

な…なに!? なんなんだ!!

熱い…お尻がすごく熱くなっている。

目を覚ました瞬間は、気がつかなかったが、何か…下半身がスー  
スーして…燃える様に一部が熱かったのに、すぐに気づいた。

「っ…っま…どこに…いれ…んっ!!」

ふっ!!

息がうまくできない…。

ニチニチと、下半身から音が聞こえてくる…。

物凄い異物感…。

何かが私の中に入ってくる…。

書記!?

何を…はっ!?

後ろに顔を向けると…書記がいた…。

ひどく…悪い顔して…。

…ちよつと待て。

何してるっ!? 何してるんだ!!??

書記が…え? なんで?

書記が、私のお尻…に入れてる…。

本気か? そんな所に入るものなのか!?

知識としては知っていたが、フィクションだと思っていたのに!!

「はっ…はっ…ふっ…」

なぜ…? え?

うまく思考が働かない。

書記の太い…大きなモノが熱を帯び…私の中で蠢いている。



圧迫感がすごいのもあるが…ヌルヌルと…それでもスムーズに…。  
書記のアレが、私の中で出し入れを繰り返し始めた…。

熱い…熱い……あつ…。

「んっ!! んっ!! んっ!!」

思考が飛んでしまったので、うまく…いつかはわからない。

…自分でも気がつかなかった。

声の質が変わっている…。

先程までは、ただ苦しいだけだったのだが、暫く…ゆっくりと出し入れされていると…なにか…湧き上がる感覚がある。

まずい…これは、まずいぞ!!

起き上がろうと、両腕に力を込める…が、起き上がれない…。

突かれる度に、力が抜ける…。

まずい…本気でまずい。

書記に気づかれない様にしないと!

枕を抱きしめて、口元に押し当てる。

声が…できるだけ漏れない様に…。

「んっ! あつ!! んっ!!」

なんでだ? おかしいだろ?

こんな…お尻…初めてなのに…。

書記の動きが、少しずつ早くなっている。

なにか液体が押し出される音がする…。

グチュグチュと…。

その内、逃げれない様に腰を掴まれる…。

逃げれない様というか…先程から腰にも足にも力が入らない…。

おかしい…おかしい……おかしい…。

圧迫感の中に、少しずつ…その…。

快楽が生まれてきた…。

おかしくなる……おかしくなる…。

こんなの普通じゃない…そこは、Hする所じゃない…。

なのに…。

「あつ! アつ! アツ!」

声が…出てしまう…。

書記の腰の動きが、更になが早くなっている…。

快感を感じているなんて、この変態にバレたら…。

「っ！」

「んんっ!!」

書記が、一番奥にまで突き入れてきた…。

中をこじ開けられる様に…大きいのが…。

強引に力を剥奪される気分だ…思考すら奪ってゆく…。

「あ……はっ……あっ……い……」

中に…流し込まれてる…。

お尻が熱くて、よく分からないが…自然に声が出てしまった。

ビクンツと書記の体が、何度か痙攣を繰り返していた…終わった…

のか？

動きを止めてくれたおかげで、漸く声がだせた。

できるだけ、恨みを込めて……気づかれないように…思いつきり

…。

「寝て…る私に……よりによって…どこに…」

息を切らしながらも、恨み言を吐く…。

思考も回ってきた…。

こいつは……なんて事を、どこでしてくれているんだ!!

「あ……か…この……変態が……終わったなら……早く抜け……苦しい

んだ……」

「…」

本当に苦しかった。

肺が下から圧迫される感じ…内蔵を押し上げられる…。

ぐ……書記が黙っている…。

半身をひねり…なんとか書記の顔を確認しなければ…。それで大

体わか…

「なあ…マコニヤン」

まずい。

すごく悪い顔をしてる…。

いかん…この書記はマズイ。  
何をしてくるか、予想がつかない！

「…ここにきて…その呼び…か…」

そ…それでも、負けじと睨みながら言ってる…。  
ここで引くと本当に、何されるかわからない。  
…その思いも虚しく…。

「少し…感じ始めただろ？」

「っっ!!」

一瞬、体が硬直した。

バレていた。

バラされた。

はつきりとした快楽は感じなかったが…感じ始めていたのは事実。  
あっさりと言破されていた…。

おかしい。本当におかしい…。

沙織の所の本で見た…。上級者向けだと…。

こういった事は、何度か回数や時間をかけないと快楽は感じ辛いものではないのか？

信じられない行為だし…簡単に…。

「く…苦しいだけ…だあ…。早く…ぬ…んんっっ!!」

正直、認めてしまうと何をされるかわからない…その為、即答で否定する…。

―が。

グチツと、音を立てる様に、書記がまた…私の中に…一番奥に入ってきた…。

確認作業の様に…淡々と…

「…これで、更に滑りが良くなったし…大丈夫だろ？」

なにか、恐ろしい事を言われた気がした。

部屋の中には、卑猥な音が響く…。

書記のアレが、私の中を何度も行き来を繰り返す。

再度動き出した時には、まだ熱さが酷く、うまく感覚がマヒをして  
いた。

だが…ゆつくりとまた動き出した書記は、私の手を取り…何かへ誘  
導するかの様な…そんな感じの動きをくり返していた。

私のお尻を何度か往復を繰り返す度に、音が…卑猥な音が変わって  
いく。

空気が漏れる音…なにか、水を混ぜる様な音…。

最初から数えて、すでに2回果てた書記の精液が…混ざり…空気を  
更に含んだ音…。

グチツグチツつとした、音から…グポツグポツと空気が混ざった音  
…。

バチユツバチユツと、粘液が書記と私の体を粘つきながら、叩きつ  
ける音…。

…そう、最初から思った…。

なんで…痛みは感じなかったのだろう。

そして、なんで快樂を快樂と、認識できたんだろう…。

最後に…私の思考は…こちら辺でおかしくなっていた。

「すごいな、麻子。こんな短時間で、尻穴を使われるのが…もうそんな  
に気持ち良いのか？」

こいつのこういうった喋り方は、五十鈴さんと行為を行っている時に  
良くする…。

普段…こういうった喋り方は…しないのに。

特に私には…。

「すごいな…声」

思考がおかしくなってきた。  
何故か？

…至極単純…。  
そして至極簡単に…。

「アッ!! アッ!! アッ!!」

快樂に呑まれた。

すでに恥ずかしげもなく、獣地味た声を発していた。  
気持ちが悪かった。

思考が飛ぶ程。

「えつと…こうか？」

グリツと、奥に突き入れ…

「ンンンッ!! アア!!」

中からえぐり取るように…引かれる…。  
少し、圧迫感から開放されたと思ったら…。

また隙間なく奥まで…。

内側から探られるように…。

私の知らない私を、書記が連れてくる。

強引に…強制的に…。

…。

無理。

…もう…むり。

この腸内を抉られる感覚…。

知らない感覚…脳が痺れる…。

体中の力が抜け…。

…目の前が真っ白に…。

「んっんんんああっ!!!」

◇

…スキルとは関係がないのか？

麻子は、尻穴で快楽を感じやすい身体なのだろうか？

俺が3回目を終える時には、すでに数回イっていた。

お尻周りが凄い事になっている。

抜かずに3回だった為、精液が麻子の中でシェイクされたのだから。

泡を立て…グツチャグチャになっている。

一度抜いてみた。

俺の形に固定されてしまったかの様に…真っ黒な穴が出来上がってしまった。

…ポツカリと丸く空いたままになった、麻子の尻穴。

そこからグチュグチュの精液が、音を立てて垂れ流れている。

いや、飛び出してくる。

余ったソレが…秘部の周りを流れ…落ちていく。

腰がビクンツビクンツと脈を打つように、痙攣を繰り返しているな…。

膝を立て…両腕は力無く投げ出されている…。

「……」

小さく呼吸を繰り返している麻子。

今回は速攻勝負という事で、雰囲気もなにも無く…完全に性処理みたいにしてしまった…。

秘部に人差し指を、ゆつくりと差し入れてみる。

クチュツとした音がした。

垂れ流れた精液と愛液が混ざり…ヌタァーとした液体が、指を覆

う。

「んっ!! はっ!!」

あ…反応した…。

そのままかき混ぜると、逃げる事もなく、おとなしくされるがままだった。

前後にグチグチと、音を聴かせる様に激しくかき混ぜてみた。

…すぐに目の前のお尻が、跳ね上がった…。

またイツたのか。

…。

「しよ…きい…。」

「……」

もう一度、黒く空いたその穴に…一気に差し込む。

「んっあああ!!」

歓喜にも似た声が響く。

グリツと一番奥まで入れた状態で…両足に腕を差込み、スライドし

…。

逆駅弁の体位へと、体を移動させる。

そのまま立ち上がると…。

「…やっ…これは…やめ…恥ず…か」

いや…その表情が見たかったのに。

うまく見れないのが、ものすごく残念。

両足をバツクリと開かれ、御開帳のポーズ…だからね。

半分まだ意識を持っているのか、後ろから更に赤くなった耳が見えた。

さて、分身のスキル。

「っえ!？」

目の前…対面に突如現れた、もう一人の俺に驚きの声を上げていた。

「書記!? えっ!? 後ろ…だれ…書記!?!」

おお…混乱してる、混乱してる。

下手に思考を巡らせる前に…。

グチュツと。

もう一人の俺に、前穴を塞がれた。

「んっんん!!」

ゆっくりと…俺に、前後の穴の奥まで犯される。

その体は力無く…前の俺に体事、寄りかかっている。

「ゆ…ゆめ…か？　これは…は…は…は…は…」

はい。

では…もう一度…寝てもらいましょうかね？

ドロドロになつていた下半身を、更にドロドロになるまで前後から

掻き回される。

声はもう発していない。

熱い吐息と、呼吸を繰り返している。

目が虚ろになり、その奥は怪しい光しか発していない。

「……あ……は……ん……あ……」

俺同士、コンビネーションは取るのは容易い。

同時に攻めたり…交互に攻めたり…。

そのまま、抜かずに何度も麻子の中の中、その奥まで俺で満たして

みた。

「……はう……あ……」

一度止め…油断した所で、また攻め入る。

攻める…。

攻める……。

攻める………。

麻子の中でゴリゴリと当たるモノを感じる。

「うっ……うっ……」

あ、ダメだ。

いきなりの二穴は、刺激が強すぎたのか…簡単に意識を飛ばしてし

まった。

パツツンパツツンになった、両穴。

ゴリゴリと攻め続けるのは良いのだけど…反応が無いのは、非常に

寂しい。



夢と判断するだろうけど…後で念の為に記憶もいじらないとダメ  
そうだな、こりや。

…あ、そうだ。

しかも記憶を消してしまうと…それはそれで…。

前回のみほと華さんの時も感じたが、性技みたいな事を教えたとし  
ても、覚えちゃいけないだろうし…。

次回にこれだと生かせない。

分身スキルで、乱交…の様な事は、もう少し後で…もう少し…も  
う少し…。

「…あ…っ！」

この状態でも体は反応するな。

今、軽く痙攣したしな…さて…どうするか。

ま…取り敢えず…帰りにでもするか。

一度…出してしまおう。

はい、こうなったらダメでした。

結局このまま、3回ほど好き勝手して、しまいましたとさ…。

動かす度に微動だにだが、反応する彼女…。

目が完全にうつろになつて虚空を見つめている。

ダメだ…これじゃダメだ。



「……………おい変態」

「…なんででしょう?」

「鬼畜」

「……………な…ん……………」

「外道、女の敵、人攫い」

「……………」

はい、そういった訳で、お姫様だつこで帰宅しております。  
通学路…人目があまりなかった為に…おんぶも出来なかったので、  
こうして運こばせて頂いている訳ですね。

うん…。

目的は達成。

寝ているマコニヤンを…起こして…寝かしつける…。

目的は達成したが、ちよつと思つていたのと違った。

いきなり尻はマニアック…というか、難易度が高かったか。

記憶操作。

分身は夢だと思わせたておこう。

俺が寝込みを襲つて、マコニヤンの後ろの初めても頂きました！

つて…事で、本人は納得させよう。

…が。

中途半端な二穴攻めのセイで、完全に意識をシャットダウンされた  
マコニヤン。

どうせなら次回、自分から求めさせられる様にさせたいものだな。

「……」

現在は、仕方が無いので、帰宅する為に…彼女をお姫様抱つこで運  
んでる。

いや、運んでいた…。

…はい、目を起こされたようで…。

「クズ、レイプ魔、カス、ゴミ、死ね」

「……」

はい、延々と怨嗟の声を聞いております…。

こんな状態ですから、人に見られ、聞かれ…勘違いされても困りま  
すから…今は普段、まったく通らない公園を突っ切っています。

人も余りいないしね…こんな姿は、あまり見られたくないだろうし  
ね…マコニヤン。

「…いい加減、下ろせ」

はい、ご希望でしたので、下ろしました。

公園の中央…そろそろ5時ですねえ…人…少ないなあ…。

子供が、まばらに2、3人が見えるくらい。

「…よくも寝ている私に…あんな事…」

はい、手首を掴んでいますね…。

ワナワナと震えていますねえ…。

あんな事。

記憶操作は成功。

…分身したもう一人の俺の存在は記憶にもうないのだろう。

二穴攻めしてみた事も、覚えていない。

ただ、交互に俺が、マコニヤンの大事な所二選を弄んだと思っっているのか、すっごい恨みがましい目で見えますねえ。

ごめんなさい…精子操作スキルですごい量出してしまいました。

…あれ、射精時間も設定できる様で…ドロドロになるまで…。

だから…ん？ あれ？

「…どうした？ 足、震えてるけど…」

「誰かさんのせいで、腰が抜けて上手く立てないんだ!!」

「…スイマセン」

「まったく!! 死ぬ! このへんた…い…い…?」

「あれ? どうした?」

バツと、スカートを両手で押さえた。

そのまま、顔が段々とまた、赤くなっていく…。

「つつ!! つつ!!」

……?

本当にどうしたんだろ…。

「ぱっ!!?? パンツ!!??」

あ…抜き取って、そのままポケットに入れっぱなしだ…。

うん、パンチユ。

「おまつ!! えっ!! つつ!!!」

今度は、なんだ? 別の事に驚いているようだ…。

あ…。

内ももに…液体が上から誰落ちてきている…。

ああ…アレか…。

リフレツシユは…表面上にしか、掛けてなかったからなあ…。

「垂れツ!! 溢れてっ!!」

「……」

「だ…出しすぎだ…この変態が…出てきちやっただじゃ…」

片手をマコニヤンの肩に置くと…そのまま素早く。もう片方の手を動かす。

手首を掴み、スカートを押さえていた手を離させる。

「なっ!!」

そのまましゃがみこみ、足をじつ…と見ていると…。

ツ…つと、液体が太ももの内側を垂れ落ちて来た…。

ま…まあすげえ量出しちゃったしね…。

「何をマジマジと見てるんだ!!」

ふむ。エロイ。

「ばっ!!? 離せっ!!」

顔を真っ赤にさせながら、辺りをキョロキョロと見回していますね。

まあ…公園のど真ん中だしね。

「ひう!?!」

前置きも何も無く、麻子のスカートの中へ手を入れた。

秘部に当たる感触がしたら、指をそのまま這わせ…溢れ出してくる物を確認…。

おう…すげえ…見てもいないのに分かる…。

大量の粘液が、中指へと移ってきた…。

「お…い…っー!」

そのまま中へ…。

グチュツとした音が、指先が伝わる。

中の液体を掻き出す…いや、掻き混ぜる。

「んふっ!!」

声が出そうだったのだろう。

片手で口を押さえ、しゃがみこんだ俺の肩に、少し体重を預けて来た。

そのまま力の弱い腕で、軽く肩を押して来た。

「お…お前…書記…何してるう…んっ！」

「ん？ ああ…確認」

「確に…んっ!!」

グチュグチュと、掻き混ぜる指を早める。

「こ…こんな所…でえ…あんっ!! ひ…人が…」

「ああ、遠くに子供しかいないから大丈夫」

…これもスキル…と、言う奴なのだろう。

感知スキル。

人の気配を確認、把握する。

羞恥プレイ用って…説明にあるのを確認。

バカじゃないのだろうか？ 本当にこういった行為にのみ使用可能。

それが、複数のスキルを使える条件だつてさ…。

「んっ!!」

先程自分が出した粘液が、グツチュグツチュと音を立てている。

更に聴かせる様に、ワザと大きな音を立てる。

比例して、麻子の中を掻き混ぜている中指が、激しく動く訳で…。

…膝がガクガクと震えだしたな。

「んっ…はっ…はっ…」

俺の肩を掴んでいる麻子の手に力が入り始めた。

イク寸前だなあ…。

「だいたいしようぶ？」

「っっ??」

あ。中が引き締まった…。

突然声を掛けられ、驚いた為だろうけど、キュッと分かるくらいに。

…エロいマコニヤンに、集中して気がつかなかった…。

ああスキルはちゃんと反応してくれている…。

麻子の真後ろで、心配そうに立っている6歳くらいの男の子。

麻子の背中姿しか見えていない様で、麻子のスカートの中に手を

突っ込んでいるという、行為自体は見えていない様だ。

うん…俺には当然気づいているよ？

だって一瞬、俺の顔見て、怯えた子供の顔が見えたから…。

「…子供？」

麻子は、その子供に顔を半分向けた。

まあ…体は向けられないだろうな…。

「ああ、このお姉ちゃん、気分が良くなってな？」

「そうなの？」

「ふっ!?!」

麻子が俺の体にしがみついてきた。

思いつきり口を引き締めて…震えている。

「だから、おじちゃんが見てあげてるの?」

「そうだよ? おじちゃん、このお姉ちゃんの友達だからね」

いや…うん。おじちゃん呼ばわりには、慣れてますよ…はい。

「ふくん、そうなの?」

子供が、心配そうに…更には俺の顔を疑いの眼差しで見てる…。

そっちの方が、おじちゃん呼ばわりより慣れてるから大丈夫だよ!!

シヨックじゃないよ!?

「そ…そう…だ。だから…だい…じよっ!?!」

はい。

指の動き、継続中。

バレてしまったり、何か合っても、行為の延長線上だから記憶操作

は使えるだろうしね。

だから、先程から指を書き混ざる動きから、ピストン運動に変えて

いる。

クリトリスを撫でる様に出し入れを繰り返している。

「っ!!」

今度は肩に頭をつけて…本気で声を殺しだした。

音を立てない様に、今度は指先で、中を掻き混ぜる。

指を3本程入れ、一気に動かすと…。

「な? 体調…悪そうだろう?」

「あ、ホントだ。足がすごい震えてる」

「っ!! っっ!!」

ビクン、ビクンと、体全体も震えた。

―が、動きを止めない。

俯いていた体を今度は海老反りにし、唇を噛み締めている。

小刻みに振動している体を、子供が不思議そうに眺めている。

「心配してくれてありがとな？　もうこのお姉ちゃん駄目そうだし：

抱っこして帰るから：坊主も、もう帰りな」

「分かった!!」

あら素直。

本当に心配してくれただけ、みたいだね。

踵を返し、そのまま、こちらを振り向きもしないで、反対方向へ走っていった。

麻子の体は、まだ震えている。

「つつ……つつ」

「いやあ……子供の前で、盛大にイっちゃったねえ……マコニヤン」

「つつ……つ!!」

まだ声が出ないのか……体を少し離し、すっごい睨んできてますねえ。

いやあ……もつといぢめたくなるなあ……。

「つ?!」

なんだ？　俺の顔見て、青くなったな。

「……すっごい事になってる」

「ふっー」

又ルツと抜き出した指。

というか、手全体が、愛液だベツトベトになっていた。

指同士をこすり合わせると、ぬるぬるとした感触。

すっご……。

「あ……はっ……しよ……き……おま……」

漸く声が聞けました。

少し落ち着いてきたのだろう。

―が。

素早く腕で、麻子の震えた脚を掬い上げる。

相変わらず体が軽いので、いとも簡単に完成。

お姫様抱っこ。

「っ!? 何を!!?」

「マコニヤン」

「…なっ!? 下ろせ!! おかしいぞ!? 目がおかしいぞ変態!!」

腕の中のマコニヤンが、俺の顔を見てそんな事を言っていますね。

いやあ…声が完全に復活したな。

先程の行為自体を非難する前に、身の危険でも感じたのか…また変態呼ばわりしてきた。

やあ、遠くで麻子を抱き上げた姿を見たのだろう。

さつきの子供が、手を振って…そのまま公園を出ていたのが見えた。

取り敢えず、これで公園内は誰もいなくなったな。

「…金のない、高校生らしく…ですね?」

「はっ!? 金!?!」

まあ、ぶつちやけ金は、そこそこ持っている。

バイト三昧で稼いだ金が、貯金として結構な額がね。

別にラブホに連れ込んでも良いのだけど、流石にみほ達待ってるから、んな事できないし…。

そもそも学園艦になんて、無いだろ…ラブホなんて。

「そこに公衆トイレが…ございますね」

「トイレ…お…書記…まさか…」

まあ、テンプレですよね。

これが、障害者用の公衆トイレとかなら、個室になっていて良かったんだけどね。

「今日は俺、欲望のままにマコニヤンを抱こうと、初めに思いまして…」

「…え…」

その一言で、少し暴れていた体が大人しくなった。

「…初志貫徹を貫きたく思う所存です」

「なっ…」



「マコニヤンは、どうやらお尻が、どうも気に入ったみたいだしな…」  
「書記…やめろ…その、意地の悪い喋り方は…やめろ…」

スイッチを切り替える。  
もう一度、DSモードへ。

最中にしかこういった喋り方は、しないのだけど…。

それが分かっているのか、お尻が気に入った発言にもツツコミがない。

「まだ…一回くらいは、できる時間あるしな…んじや、麻子」

「やめろ！ マコニヤンで良い!! 今のお前に、普通の名前で呼ばれると、恐怖しかわかない!!」

「さあ?…行こうか」

「えっ!? 本当にか!? あそこか!? やめつつ…」

そこからは、一言も言葉を発しないで、一直線で公衆トイレへと足を運んだ。

手の中では、バタバタと再度暴れだしたマコニヤン。

いやあ…うん。

その暴れ方で何となく分かった。

そのトイレ。

男子トイレへと入った瞬間、麻子の動きが止まった。

借りてきた猫状態。

体が硬直し、目だけで周りを見渡している。

「お…お前…躊躇無く入ったが…人がいたらどうするつもりだったんだ」

「え? 見てもらう?」

「死ね!!」

顔を真っ赤にして悪態をついてくるが、こんな所だ。

声は控えめですね。

「…生涯で、男性用トイレに入るなぞ…夢にも思わなかった…」

ま、そうだね。

普通はね…。

比較的にな新しく、綺麗なトイレ。

公園自体新しいのか、どこも真新しかったしな。  
そのまま一気に奥の個室へ入る。  
すでに暴れる気はしないのか、麻子は完全に大人しい。  
トイレの中、二室しかない比較的に大きな個室。  
個室の地面へ麻子を下ろし、俺も入ってすぐにドアを閉める。  
俺と麻子が立っていても、十分なスペースがある。  
さて…。

「はっ…この変態。は…早く済ませろ」

赤い顔は継続中。

いじけた様に顔さら俺から視線を逸らしている。

視線を落とすと、手はスカートの端を握り締めていた。

うくん…。どうしよう。

本気でいぢめるかどうか…迷ってしまう。

麻子の場合、結構…こう…なんというか…。

「私の場合なんだっ!? 早くしろ…あまりこんな所に居たくないんだ、変態」

「……」

思った事…まあ、もういいや。

「さて…変態ねえ?」

「なんだ? 不満か変態。何か違うか? こんな所に私を連れ込ん  
……」

「うん、それで行こう」

「………は?」

変態か。うん。希望に添いましょ。

意味が良く分かっていないのか…硬直してますね。

「麻子さ。スカートをえらい強く握り締めてるけどさあ…」

「はっ。最後の私の防衛ラインだ」

防衛ラインねえ…。

「じゃあ、自分から捲って?」

「………は?」

「捲って?」

「…お前…すごい笑顔で何言ってるんだ」

「麻子さ…」

「なんだ、変態！」

「ここ連れてこられた時…期待したろ？」

「なっ!?!」

「子供の前で、イカされて…挙句、行為する為だけって露骨な意味で、ここへ連れ込まれて…最後、大人しかったよな？」

「な…はっ!?! それは!!」

顔を近づけ、耳元で囁く…。

「本気で嫌がれば、俺はすぐにでもやめる…くらいの事は、分かっているだろ？」

「……」

そう、流石に泣かせるまでの事をするつもりは無い。

行為自体に入ってしまったえば、ある程度は強引に行くかもしれないが、本当に…本気で嫌がればすぐにでもやめる。

…嫌われたくないからな。

「つつの、へん…「そうだな。だからこそだ」」

言葉を遮り肯定する。

だからこそ…それに殉じようかね。

「はい。時間が無いから、早く捲ってくれ」

「ぐ…」

時間…ある程度は頭の隅にでもあったのだろう。

家に帰る途中だったしね。

さつさと済ませると、言った手前もあるのだろう。

手が更に強く握られ、震えだした。

そのまま、ゆっくり…腕が上がっていく…。

—ので。

「…やっぱり期待してたか」

「ちがっ「違わない」」

否定の言葉を、また遮る。

「……ぐ」

捲るといふ行為自体、先ほどの言葉を肯定すると言う意味を、言葉で植え付ける。

多少強引だけど、この方が後々楽になる…。

「…くっ…この…」

悪態をつきながら…それでもゆっくり腕を上げ、手を上げ…。

悪態に力が無くなってきましたね。

スカートの両端を掴み、恥部を自分からさらけ出させた。

下着を着けていない…まっさらなそれを俺に見せてくれた。

先ほどの手でした跡…まだ太ももと恥部付近に、粘り気のある液体が付着していた。

盛大にイッたしね。

「ふっ…んっ！」

また確認するかの様に、入口から中へ…少しまた弄ぶ。

グチュツとした音と共に、少し甘い声が出た。

「…どうだ？ 満足か？ …この…変態が…」

「子供とはいえ、人に見られているのに感じまくって、絶頂に達してしまった人に言われたくないなあ」

「おまつ！」

懇切丁寧に説明…黙っちゃったね！

…しかし、こりやまた前戯は必要ないな。

麻子に口でもして欲しいけど…時間ないしね…。

では…。

立ち上がると、即…自分のズボンのチャックを下ろす。

今度は俺の番だとソレを取り出した。

「…」

すでにMAX状態のソレが、社会の窓からそり立たせると…その状態に麻子が目を逸らした。

さて…華さんの時とは違って、身長差がありすぎる。

立ちバツクはキツかもな。

んじゃ…。

便座を開けて、そこに座る。

そそり立ってるなあ…これ。目立つ目立つ。

「んじや、麻子…」

「……」

呼んだ意味は理解したのだろう。

ゆっくりと近づいてくる。

俺も少し、便座の上に寝るように体をずらすと…倒れこむ様に、俺に体を預けながら…足を広げた。

「…改めて見ると…これが私の中に入っていたと思うと…怖気がするな…」

眩きながら、俺の陰茎を掴む。

「躊躇がないなあ…」

「は…早く終わらせたいだけだ!」

掴んだソレを秘部へと合わせる…。

クチツと少し、水っぽい音…。

麻子の腰へと手を添えて…そのまま下へと力を入れる。

「んっ…」

対面座位って奴だね。

ニチツ…ニチツと、少し音を立てながら、ゆっくりと麻子へと入っていく。

暖かい体温と、快感が陰茎を通して伝わってくる。

「ふっ…んっ…あ…」

そして……入った。

全部は入り切らないが、それでも大部分…。

散々先程まで彼女を抱いていたのに、また抑えが効かなくなりそうだ。

パンパンにまで膨らんだ彼女の秘部を感じる。

小さい入口から、中まで…ギユ…と全体を締め上げてくる。

「はっ…はっ…はっ…」

無言でゆっくりと動き出す。

ギチギチと締め上げるそれは、俺自身を絞り取るみたいに扱いてくる。

プチップチユツとまた、収まりきららない水分が、音立てて、そこから溢れている。

「はっ……あ……ああ……んっ」

声を途中から殺し始めた。

今更思い出しのだろうか？

ここ…トイレ。人、来るかもしれない。…と。

んじゃ…。

「ふっ!？」

腰に添えた手に力を込めた。

グリツと押し入れると、ビクツと体が反応した。

「しよ…書記。やめろ…あまり激しくするな…声が……」

もはや、こんな所でする事自体に抵抗は見せないで、更には声すら気にしている事を俺に言ってきた。

たった数回だが、ある程度は慣れてしまったのだろうか。

「ヒッうっ!？」

更に押し入れる。

素早く抜き、また押し入れる。

俺の方が、先に果ててしまいそうな気もするが、素早くピストンを繰り返す。

「さっさと済ませろと言ったのは、麻子だろ？ んじゃ、本気で動くな？」

「待てっ！ だからっつっ、んあ!!」

バチユバチユと淫音が繰り返えされる。

腰から尻にかけ、激しく動かす。

俺はあまり動けないから、麻子の体も使って、大きく…素早く。

「んっ！ んっ！ んっ!! んんっ!! っはっああ!!」

すぐに麻子はイってしまった。

この外で…って、特殊な状態も相まり、多少興奮もしているのだろうか？

「待てッ！ イったばかりっつい!!」

が、まだ容赦なく、そのまま動かすのを止めない。

イツてしまったを言うという、普段なら恥ずかしくて言えない事も、余裕がないのかすんなり白状した。

ま、止めないけど。

「やつ!! あつ!! んあ!! 声……こええ!!」

麻子のこういった声は、絶対に誰も聞いた事がないだろうな。

むしろ、こんな淫靡な声を彼女が出すなんて、想像すらしないだろうな。

「人っ！ 来たたら……聞かれる!! やっんっ!! んっあ!!」

探知スキルに、反応は無い。

誰もいない。

だから遠慮もしない。

「そーいや、麻子。お尻でしなくて良かったのか？ 普通にしてるけど」

「はっ!! はっ!! あう!!」

「おーい」

「うっ……んっ!! 動かしながらあ……言うなあ……あああ!!!」

いや……楽しい……。

ゾクゾクしてくる……。

ま……いいや。

喋りやすい様にと、ちよつと動きを止めよう。

さあ、白状してもらいませよ。

「つつあは……あ……。アレは……。始めは苦しいだけ……。だあ……。今は……普通がいい……」

「始めてる事は……最終的には、気持ちよかつたって事だよな?」

「ちがっ!? んあッ!!」

本当の事を言え……とばかりに、もう一度突き上げた。

激しく動いていた為か……目の奥がすでに……ハートマークにでもなってるのか?

……そう、真っ黒いハート。

「麻子……ちゃんと……言え」

「ぬ……あ……あ……っ!!」

もう一度、強く突き上げる。  
そして、強く聞いてみる。

「き……気持ちよかった……。中が……圧迫されて……押し上げられて……」

観念したのか、俺の目を見ながら……ゆっくりと白状し始めた。

「はっ！ 初めてののお!! 感覚でっ!! おっっああ！ おかつしく!!」

ぐっちやぐっちやと、わかりやすい音を立てながら……更に動かす。

白状させて、邪魔をする。

ゾリゾリと中を削る……。

「はっ!! あっ!! あっ!! あっ!!!」

「声……いいのか？」

「あっ!! あんっ!!! あッ!!! ひう!!!」

既に聞こえていないのか、夢中になっていた。

白状した事で、羞恥心が少し……マヒしたか？

もう自分から少し、腰を動かしている。

……何度も卑猥な声を上げさせる。

快楽に集中させる為に……そして。

ゴトツ

突然……個室のドアが開き俺の膝に当たった……音がした。

先程、実は鍵をしっかりと、締めなかつたお陰ですね。

少し引つかかる様にしていただけ。

頃合を見て……伸ばした足で、軽く小突くと、それは簡単に開かられた。  
た。

「つつ!？」

あ、正気に戻った。

すごい勢いで後ろを振り返った麻子。

その先は、足を扉を開く様に入れ替え……完全に開いたドアが見えるだろう。



ま、外だよな。

「なっ……えっ?」

「はあはあと、息を繰り返しているが、動きが完全に止まった。

「ん? 鍵…壊れたか? あ、違うな。緩かったか…外れただけみたいな」

シレッと、すつとぼけた事を言う。

「はあ……はあ……お…驚いたぞ…」

「夢中になってましたからね? マコニヤン」

「…くっ。いや…もういい。ここで否定しても…お前は喜ぶだけだしな…」

「あら、素直」

「いや…感心してないで、閉めろ…人が来たら、色々終わるだろうが」

「……」

「…おい、書記?」

熱っぽい目で、俺を見下ろしている。

だから、なんだろう…こう別の意味で白状させなくなった。

「早く、続きしたいのか?」

「なっ!?!」

おー…目と口がすっごい開いたな。

「……ぐっ……」

目を伏せ、ちよつと歯を食いしぼり…何かを考えている。

ウフフ…。

真つ赤になつたその表情は、すごいソル。

「そ…そうだ…早く、お…終わらせたいんだ。だから閉めろ」

そうそう。

麻子は頭が良い…だから、ここで下手に意地を張ると、白状するまで俺が、ドアを閉める気がないのを察したのだろう。

―が。早く終わらせたいってのは、余計だなあ…そうだの一言で良かったのに。

「もういいだろ? 白状した…早く……」

「いや……麻子。さつきまで、声をすっごい出してたよな？」

「はっ…ハッキリと言うなああ」

押し殺した声で真っ赤になってますね。

「だからじゃない？」

「…は？」

「トイレの外で…足音するけど…」

「…なっ!？」

うん。出していた。

うん、分身を少し前から。

ちよつと今回は趣向を変えようかね。

態とらしく、大きな砂をこすり合わせる様な音を出させている。

「なっ…なら、早く閉めろ!! 閉めてくれ!!!」

小声で強く言われましたね、はい。

一瞬押し黙って、耳をすませたのだろう。

俺が言ったとおり、まだ砂を擦り合わせている音が聞こえた…つて、顔をしている。

要は、青くなった。

「……」

「…お…おい、書記…」

表情を意識して消している俺の顔を見て、変な焦りを感じている。何も言っていないけどな。

「……」

「…あ…足音がしなくなった…」

ここら辺で、一度分身を消した為だろうな。

麻子は見られて興奮するタイプでは無いだろうが、強引にそちら方面へ持つていこうと思う。

だから…今回は記憶は消さない為に、分身と交わりは持たせない。

「い…今の内に…書記…」

「…っしょ」

「んっ!…んあ!？」

対面座位の体位から、麻子の両足を持ち…そのまま立ち上がった。



比較的に新しい公衆トイレだからだろうか？

結構、金掛かっているなあ…とか、ちよつと思っていたいな。

その鏡の向かいに立つと…俺にしがみついている、お尻を丸出しの麻子が映っている。

「あ…つ…く…つ…な…なんのつもりだ！ 書記！」

「あまり大きな声出すと、人来るぞ？」

「っ!!」

ギョツと抱きしめられた…ぐ…ちよつと罪悪感が目覚める…。

…のと同時に、加虐心がゾクゾクとした背筋を走る感覚と共に、沸き上がってくる。

「あそこだと思いつきり動けないし…後…」

「な…なに？ 今、なんて言った!？」

「ここなら壁になって外から見えないだろ？ っと」

「ふっ!!? あっ!!」

体を持ち上げ…陰茎を抜く。

抜く瞬間も、麻子の声は甘いままだった。

焦ってはいるのだろうが、やはり女としてのスイッチが入りっぱなしだ。

さあ、スピード勝負だ。

そのまま、ストンとその場に下ろす。

反射的に、足で支えて、普通に地面にたった…が、足の力が入らないのか、少しよろけてしまう。

その瞬間、グルツと体を回転させ…背中を正面に向け…軽く前を押す。

そのまま目の前の、洗面台へ両手をつかせた。

後は何も喋らせないように、素早く腰を引き…お尻をこちらに突き出させた。

「っ!!? ちよっ!!? 待て、しよ…んんっっ!!」

身長差が凄い為に、俺が膝を折り、下から上へと突き上げるように、一気に麻子の中へと再度侵入させる。

「ふうふうああ!!」

有無を言わせない。

ただ素早く。強引に。押し入れるのと同時に、麻子の肺から声と共に息が放たれた。

中腰のままでは、俺が動けないから仕方がない。

両足を腕で、またすくい上げ…体をそのまま一気に持ち上げる。すると…。

「つつ!! ま…やつ…!!」

完全な逆駅弁の体位の完成…。

そして目の前は、鏡…要は…。

「いや…こうして見ると…すごいな麻子」

「ふっ!! んつつ!! あ…かつ…」

その鏡には、愛液で濡らした陰茎を、丸々くわえ込んだ秘部。

それを見せつけるかのように、強引に開かされた足。

体重の重みで、陰部に突き刺さるモノが少しづつだが、押し下がっていく。

そんな麻子の姿が映っている。

「ん…あ…あっ?!」

その自分の姿に気がついた。

顔を上げ、羞恥に染まった顔が、どんどんと顔色を変えていく。

「や…やだ…これは…恥ずか…んああっ?!」

言わせない。

体事、腕で押し上げて…即座に、腕の力を抜き体を下げると同時に腰を上突き上げる。

「はあっん!!」

声が出てしまうのだろうか、またその声を即座に咬み殺す。

それが逆に、ソソルという事は分からないだろう。

「んっ! んっ! んっ! ふっ! ふっ…! はっ! はっ!」

その動きを繰り返す。

目を伏せ、顔を伏せ…何かを言いたいのだろうが、俺が動いて邪魔をする。

言葉を発しようモノなら、その言葉以外に甘い声を出してしまうの

が分かっているのだろう。

しかし、殺している声が段々と、変わっていく。

息遣いの様な声に…。

「はっ…い… はっ…!! はあっ!! あっ!!」

動かす度に、グチユグチユとした音が段々と大きくなつてく。

動きはゆつくりと…しかし、大きく。

竿で中を掻き出す様に…抜ける限界まで上げ……入る限界まで押し込める。

繰り返す。

何度も繰り返す…。

その内に麻子の秘部の入口。

繰り返す出し入れされている陰茎の根元…白い粘液の様な液体が、段々と溢れ出してくる。

出し入れをやめない為、段々と掻き混ぜられた様に泡までたてて。

「本気汁…って奴だな」

一度動きを止めて口に出した。

「ふうー…ふうー…ふうー…ふうー…」

俺の言葉に反応を見せない。

ただ、普段見せる無表情に近い顔ではなく…目が虚ろ…口は半開き…。

完全に惚けだしている。

モウ、スコシダナ。

「分かるか？ 麻子」

「…あ……はあ……う……」

誰かしら来るかもしれないという、不安感。

この見せつけられている自分の痴態…という、羞恥心。

声を上げられない為に、力を込めて我慢しているという、状態。いろんな感情がミックスされ…もう、あまり正常な思考ができなくなっている。

「この状況で、ここまで興奮できるモノなんだなあ…」

「う…うう……あ……」

ぐったりとしている麻子に本気汁って奴の説明を、耳元で囁く様に教える。

「女性が極度に性的興奮をした時、白く濁った愛液が分泌される…分かるか？」

「あ……はっ……ああ……」

「今、麻子はそれを、この状況。こんな姿を晒して…俺のをドロツドロにさせているのを」

「う……ううっ!!」

そこまで言うと、惚けていた顔に変化が見えた。

改めて、別の羞恥心が芽生えたのだろう。

この状況。

こんな姿。

俺が言ったその言葉の意味を理解したのだろう。

……。

もういいか。最後の仕上げかな。

…持ち上げていた彼女を、洗面台の上に片膝をつけさせる様に乗せた。

力なく上半身は、正面に設置されている、鏡に持たれかけた。

直後、ブチユツと音が響いた。

「つつっあっ!!」

一度腰を引き…思いつき入り突き入れた為に発した音。

洗面台の上に乗せた麻子は、丁度いい高さでお尻をコチラに向けている為だ。

…これなら本気で動ける。

ニチャ、ニチャと音を立てながら、そのまま腰を何度も振る。

それと合わせる様に…麻子の口から息が漏れる。

「うっ！ うっ！ んっ!! ふっ！ つ!!」

まだ我慢している。

先程から、ずっと声をなんとか殺しているのは変わらない。

だからコレを壊しましょう。

「麻子、…鏡に映った自分を見てみる」

「……？」

思考回路がやはりマヒしているのか、俺の言葉に素直に従った。少し体を離し……自分の顔を確認した。

「……っつあ!!」

そのまま、また突き上げる。

奥に当たるのを確認すると……グリツと更にえぐる。

「な？　それが今のお前だ」

「あ……う……」

奥をえぐられた時に思わず出した声……と、快楽に完全酔っている顔。

惚けた……女の顔を自分自身で確認させた。

彼女は頭がいい。

1を言えば、10を理解する。

だから俺が言いたい事も、分かってくれたと思う。

——これで終わり。

その証拠に……すました顔のどこか眠そうな……そんな麻子は、もういなかった。

ここからはもう、本気で動いた。

小さな彼女の中を、猛スピードで蹂躪……犯す。

「アッ!!　アッ!!　アッ!!」

ブチュブチュとした音も繰り返し響いている。

公衆トイレ内に響く声。

肉と肉をぶつける音すら大きく響く。

そしてもう、声を殺していない。

「イ……イクツ!!　またイクツウウウアア!!」

ビクツビクツと痙攣を繰り返す。

繰り返すが、その最中も動きを止めない。

「……言ってみてくれ。何がそんな気持ちいいのか」

「お……っ!!　お前のがっ!!」



もう、躊躇しなくなつた。  
聞いた事に素直に答える。

「私のっ!! 中をつ…隙間なく…掻き出す!!」  
小さな体の、彼女の中は俺のでパンパンになっている。

「きつ!! 気持ち良い所おお!! まとめて!! しげっ…きいいされつて!!」

亀頭のカリが、彼女の性感帯の何箇所をまとめて刺激するのだから。

隙間が無いので、引くたびに連動して快樂を与える。

同じく俺も全体的にしごかれていたようなもので、かれこれ3回ほど彼女の中で射精を繰り返した。

というか、4回目…。

「あ…あ…また…なあか…で…」

出すたびに、脈を打つ陰茎。

ビクンツビクンツと、同時に彼女の体も跳ね上がる。

ついでに、学校で使ったもう一つの穴。

3本ほど指を入れて拡張、刺激している。

前と後ろ。

両方で繰り返し繰り返し…白い体液と混ざる愛液で…秘部と後穴がベトベト…。

精子操作で、避妊…量増加…毎回、一ヶ月程貯めた状態の量で設定。  
大量に麻子を汚す白い液体。

それがまたローシヨの様に、糸を引く。

「…あっ…はっ…」

普段…こんな大きな声は出さないだろうな…。

今は小休止とばかりに、小さな呼吸を繰り返している。

麻子は尻が好き…新たな発見…。

というか、癖にしてしまったか。

後ろに入れた指を動かす度に、前の彼女の穴が締まる。

…流石に人避けのスキルだけだと不安だったから…防音スキルも発動しておいた。

声…すっごいでかい…。

我慢していた反動もあつたのだろうか。

「声はいいのか？ 人来るぞ？ というか、麻子の声大きくて、もういるけど…すっごい見られてるけど…」

「いいっ!! もう、なんでもいい!! あっ!! あっ!!」

まあ、いないんだけどね。

鏡見りや、すぐにわかる嘘だけど、試しに言ってみたら…予想外の反応。

ああ…完全に堕ちた。

さて…また動き出して、どのくらいが経つただろう。

夏といえ、外はもう暗い。

体位を変え、洗面台に仰向け…というか、向かい合わせになる様に座らせた。

正常位に近い形で、バツバツとそのまま攻める。

公衆トイレ内の蛍光灯の明かりのみ。

その明かり照らされた、グツチユグチユに下半身を体液まみれにした麻子。

そろそろまたイキそう…。

思考とは別に、体は正直で…最後か近いと腰の動きが無意識に早まる。

バツツ! バツツ! と、体のぶつかる音がドンドンと早まる。

「麻子」

「アッ!! アッ!! エグッ!! えぐられっつ!!」

聞いてない…。

「麻子…そろそろ、俺またもイキそう…」

「イクツ!! またっ!! またあ!!! 私もっ!! アッ!!」

…うん、やっぱり聞いていねえ。

ビクンツとまた、体が痙攣した…。

先に麻子の方が果てた。

んじや、これで最後だな。

「んんっ!! …ふっ…はっ…はっ…」

膣内から何度も掻き回された体液と共に…ヌタア…と糸を引き伝う陰茎を引き抜いた。

引き抜いた瞬間、栓を外された…ゴプツと真つ白い体液が溢れ出した。

ボタボタと、それがまた別の音を立ててこぼれ落ちる。

力なくうな垂れ、激しく呼吸を繰り返す麻子。

ズリ落とす様に、洗面台から下ろし、地面に片膝をつけさせる。

ゆっくり…痛くないように。

さて、最後だ。

俺と麻子の体液がドロドロにまとわり付く陰茎を、彼女の小さな唇に当てる。

そのまま、押し込まず、彼女が飲み込むかどうかを試す…つて。

「んっ…ふぁ…ヂュ…ブツ…」

…躊躇なく飲み込んだ。

舌の動きが気持ちがいい…。

全体的に、俺のモノで強引に口を限界まで広げる。

頬の裏と、愛撫する舌がまたゾクゾクと快感を俺に与える。

「ぢゅっ…ぷっ」

麻子の体力が限界なのか…動きがゆっくりだ。

んじゃ、これで終わり。

亀頭だけ口内に残るように引き抜き、その亀頭を舐めわさせる。

特に指示をしていないが、何となく理解、分かったのだろう。

露出した根元をシゴク。

俺の息遣いも荒くなつていく。

既に限界に近かった為に、あっさりとお出せそうだった。

「…麻子。飲め」

一言つぶやき…陰茎を麻子の喉奥まで突き刺す。

ツリユと、押し込む刺激で…喉奥をこじ開けたと感覚的に察した瞬間、物凄い量を射精した。

「ぐっ!!…おぼっ!…おあ…ヴツ…ぐっ!!」

頭を押さえつけ…直接胃に流し込む。

「ぐっ……う……」

ドクドクと波打つ脈。

涙目になりながら、目を見開く…麻子。

止まらない…量がすごいな…。

射精中…ズルツと引き抜き…。

「えはっ!! げほっ!! づっ…う!？」

残った精液を搾り出すように…。

「口あけて…顔上げろ」

麻子の顔に全て吐き出した。

「げほっ! げほっ!!」

えずき続ける彼女は、それでも従い…それをすべて受け止めた…。

「がはっ!! …えっ…はっ」

◇

「だ…出しすぎだ…この…ド変態が…んっ!」

「……」

「まだ…んっ! 入ってる…出てくる…んっ!!」

「麻子…ごめん、ちよつとエロい声、やめて…またやりたくつつ痛アア!!」

耳を…引っ張られた…。

情事が終わり…一度…まあ男子トイレの個室にもう一度彼女を入れた。

まあ…その…彼女の中の体液を掻き出す為…なんですけどね？

それも、俺がヤリマシタ。

彼女の前にしやがみこんで、丁寧の後処理をさせていただきました

た。

また、すぎえ量がまだ中に入っていた為に…強引に指で掻き出した。

あー…また、その時に麻子が可愛い事、可愛い事…。

正直、スキルのリフレッシュをかければ、それで終わったんだけど…MP切れデス。

はい、嘘じゃないです。

面接会場で、イオ○ズンも唱えられません。

「変態…ド変態…鬼畜…外道…人非人…死ね…」

「……」

はい…そんなこんなで、お姫様抱っこした状態で、お姫様をご自宅まで搬送中。

滅茶苦茶、真っ赤になりながら…睨みながら俺にしがみついている…。

はい、もはやマコニャン、歩行が不可能です。

いやあ…ひ…久しぶりに…本気で暴走した…。

ここまでグチャグチャになんて…。

「グチャグチャなんて…なんだ？ 人でなし」

「……」

「なんだ、変態」

「…正直…初めてです。みほにもここまでした事ないなど…」

「……」

「……」

あ…なんか、黙っちゃった。

「…変態」

ふむ…。

「ふっ…マコニャンに変態と言われる為に、俺はここまでしたのかもしれないな」

「シリアス口調で、言うな。遠い目しながら言うな！」

「いやあ…マコニャン…本当にエロかった…」

「とんでもない事、往来で言うなああ!!」

「マコニヤンは尻穴が、お好きいいつ痛い!!」

…噛まれた。

「お前はもう、しゃべるな!!」

あ…はい。

はあ…そろそろ7時か…結構遅くなったな…。

さて…なんて言おう…。

リフレッシュをさり気なく、マコニヤンと俺に掛けておいたから、匂いはしないと思うけど…。

はい、そんな訳でご自宅…我が家に到着。

玄関の電気が煌々とついてますね…。

はい、では最後のハイライト。

「隆史さん」

「……ハイ」

「…またですか?」

「……」

「また…というか、まだ私だけ、のけ者ですか!?!」

玄関入って、2分でバレた。

…華さんに…匂いで……らしい。

怖い……本気で彼女…怖い…。

「…ええ、そうですね…まだ私には、何もしてくださらないのですか…」

はい……焦らしプレイ継続中。

…放置プレイともいのだろうか?

いや…ただだんに、タイミングが合わないだけだけどね…結果的にそうなってしまっている。

みほには、前回…というか、前の夜這いの復讐で、こちらから夜這いをかけてみたからなあ…。

その為かどうかは知らないが、この所、すこぶる機嫌の良いみほ

りんです。

結果…華さんだけ何もしていない。

「…うう…隆史さんは、私の体に、もう飽きてしまわれたのでしょうか？」

「っ?! なんちゅー事言うんですか!!」

「はっ…ざまあみる変態」

すごい事言う華さんに追い詰められている俺を見て、腰が砕けている為に、座り込んでいるマコニヤンが、追い打ちを掛ける。

すっごいいい笑顔で…。

「…麻子さん」

「っ!?!」

あ…矛先がマコニヤンに向いた。

やーい。

「ちよつと…いえ、詳しくじっくりと…何をして、何をされたか聞かせて頂けますか？」

「…え」

あ、マコニヤンが赤くなった。

やーい。

「隆史君」

!?

「みほ…は…背後から、気配なく声かけないで…」

「あぁごめんね? でもね、何でもいいからコレ飲んでおいて」

…何でもいいって…。

みほの後ろで、沙織さんも笑顔…。

ゆかりん!? 貴女まで!?

今日はなんか…全員で飯だって聞いてはいたけど…なんで集合するの!?

あとコレって…。

「…今日スーパーで買ってきたんだア」

……………。

「…今日はもう、隆史君疲れてそうだし…明日でも良いけどね…」

それまでに……最低5本」

「……………」

血管がキレそうになると思うのですけど…。

というか…スーパーで売ってるの!? こんなもの!!

「全部種類違うけどね……今日は取り敢えず、ママシの黒焼きから食べておいて。あ、これは漢方薬局で買ったの」

薬局うう…。

「……………」

「サソリと……後、オットセイ……ああ後、今日の晩御飯……すつぽんのお鍋だから」

すつぽん!? 鍋!? 今、真夏だよ!?

あ…足元に……ドリンク瓶が…。

いくつ持つてるの?

「さあ……麻子さん。食事の後でも構いませんから……さあ……」

「しよつ……書記い!! たつ……助ける!!」

ごめん……今ちよつとソレドコロジヤナイ。

「……公園のおトイレで無茶するよね、隆史君」

「」

スキル……人よけスキル…。

範囲内にすでに対象がいる場合は効果がない。

……つて事は……いたんですね…。

忘れてた…。

家元の血族……ステルス能力。

探知スキルすら掻い潜るのかよ!!!

「書記いい!!!」

ごめん……今ちよつとソレドコロジヤナイ!!

「ワタシ……アソコまで求められた事……無い……」



…か…

「嫉妬…って…多分、こういう感情なんだよね？ うんっ!! すっ  
ごい悔しい!!」

「

みぽりん…沙織さん。

それと優花里…目が…捕食者!!!

「タノシミ…ダネエ…」

「しほりんは、少し遠慮してくださいねえ？」

「さあ？ どうでしょうか？」

少し、期待をしていた。

先を越されてしまった…。

冗談で発言してみたのだけれど、思いの外に隆史君が慌てていたのが、少し可笑しかったですね。

しほさんは、妙に艶々とした肌でしたが、まあ…朝、シャワーでも使ったのでしょうか。

髪の毛匂いが、シャンプーの香り…。よく有る事です。

昨晚、確かにあの酔い方なら…とは思いますが、あの堅物のしほさんの事です。

二度目の過ちなど、有り得ないでしょう。

現に朝の隆史君。

私が生ほさんに、それとなく声を掛け、遠まわしにからかってみたのですが…フツツ。

あの慌てよう…。

そうです。私がからかうと、いつもの様に慌てふためいておりましたからねえ。

あのくらしいの若い子は、からかうと面白いですねえ。

いや…隆史君をからかうのは、大変！ 面白いですねえ!!  
……。

少し、不謹慎でしたけど…。

前回は確かに、お酒が入っていたとはいえ…私から誘ってしまった様なモノですし…少々、罪悪感と気まずさがありました。

あの夜の事を、少し思い出してしまった。

ゾクゾクツと、背筋に妙な感覚が走りました…。

「……」

あの位の歳の若い子に、最後まで…いいように弄ばれた様な感じでしたねえ…。

私自身、箱入り娘でしたし…そんなに経験なんてないですから…でも、だからと言って…まるで玩具にされたかの様でした…。

ん…ただ、隆史君が基本、無表情だったのが、なんか…こう…イラツとしますね。

「……」

いけません。趣旨がズレています。

そうでは、ありません。

二度目が、あつては駄目な話です。

口では期待させる様な事を言ったとしても、あの子がお酒が入っていなかったら、多分もう二度とあんな過ちは無いでしょう。

少々、思う所はありますが、からかうだけ…本気になりませんし、ならないでしょう。

酔っていなければ!!

事実、その後…何度か顔を合わせましたが、特に隆史君から、どうこう有りませんでしたしねえ。

「……」

…一度、島田家に泊まったというのに…。

普通に寝泊まりして良し…。

……。

まあ…それは決勝戦目前でしたし…ええ。

それに、それ以外にも結構、顔を合わせたり…その…。

ま…まあ!! 楽でしたから良かったですけどね!!

17歳なんて、思春期の真っ只中! あの位の歳の男の子なんて…品のない言い方をしてしまえば、やりたい盛りという奴ですよね!?

一度関係を持ってしまった女性相手にでしたら、隙あらば求めてくる…なんて事も十分ありえますよ!

というのに、一切ない…。

やはり、しほさんでしょうか…。

いや、しかし…しほさんも、特に変化はありませんでしたし…。  
……。

え…ええ！　ですから楽でした！

どうやって断ろうか、どうやっていなそうかとか!?

色々と考えたのに、まったく一切、何も言ってきたりませんでしたら、困りませんでした！

やはり、酔っていない状態でしたら、基本的にあの子は大丈夫！

だいじよ…。

「はあ…」

変に重い、ため息が出る。

私は、生娘ですか…愛里寿まで産んでおいて…。

はいはい。

正直に白状してしまえば、多少…期待…と、までは、いけないにしろ…思う所はあります。

…本気で迫ってきたり、求められたりしたら、どうやって対応するか、何度かシミュレーションしましたし。

思春期真っ盛りですからね…。

男性は一度、関係を持った相手には、随分と遠慮をしなくなると聞きます。

隆史君も、高校生とはいえ、男性ですからね…。

はあ…誰に私は、言っているのでしょうか…。

この歳になって、何をやっているのか…。

やはり、彼は酔っていないければ、基本的に大丈夫なんですよ。

それが、どこかで分かっているから、妙に大胆な、からかい方もできるのでしょうかね。

…。

……………。

あ…？　何か…私は忘れてるような…。

ま……まあ！　いいでしょう。思い出せないなら、大した事では無いでしょう。

……………。

あの夜を思い出してしまったのが、いけなかったのでしょうかね？  
あの時も同じく…こういったホテルですし。

……。

……。

普段、あまり家に帰ってこない、夫を思い出した……。

夜の営み。

あの夜の後も、何度か……。

……夫は特に淡白だとか……その行為自体に、特に不満がある訳ではない。

ある訳ではない……ないのですけど……。

ないのだけれど、なぜでしょうか？

先程から……正確には、しほさんと本日会ってからというもの……なぜか、あの夜の……その……フラッシュバックが頻繁に起こる。

だからか……変に顔が熱い。

「……」

ま……いいでしょう。

そろそろ時間ですし……撮影場所の部屋にでも行きましょうか。

オートロックされた自室のドアの音を確認しながら思う。

ある意味、彼……隆史君との距離は、この位が一番良いと。

少しからかう程度で、良い。

娘の愛里寿の想い人でもある彼……。

だから良い。

この位で良い。

彼は高校生です。

そうそう酔ってしまう事も無いでしょうし……そこだけ気をつけていれば……。

それは、多分……同じくあの場にいた、しほさんも辿り着く事だと……

私は思う。

現在進行形で、娘と付き合っている男性ですしね……。

しかもお堅い性格。

超が付くほど堅物。

それに……。

戦車道関係では、たまに聞く噂……。

女性の競技であるが故に、昔から絶えない噂…。  
いわゆる裏取引、性接待。

…まあ…あのカエル面のクソ下衆のお誘いとやらは、受けたみたい  
ですけどね。

…世間一般では、断る際、指をへし折ったと噂が流れていますが…。  
尾びれが着いて、腕になり…最終的には、首になってますからね  
…。

それでは、死んでますよねえ？ シネバイイノニ♪  
まあ実際には、そうそうあるモノでは無いですしね。  
事実、私の所にも、過去一度も来ませんでしたし。

事実あった場合、発覚した時のリスクを考えると…余計にですよ  
ねえ？

文字通り潰されますからねえ…女性社会で構築された、この戦車道  
で…女の敵認定されて…。

撲滅を謳って、その筆頭にいるのが、しほさん…続いて弥生先輩。  
そりゃあ…怖くて誰も出来ませんよねえ？

そんな彼女が、一度は流されてしまったとは言え、自分から…とか、  
二度目なんてありえませんかよねえ？

ですから、そちらのモラルの関係は、まあ…チヨロクは無いでしょ  
う。

そこは信用しても良いでしょうかね？

「……」

短い距離の廊下を歩き、ものの数秒で到着した指定の部屋。

隆史君には、個室ですねえ？ とか言っちゃいましたけど、撮影さ  
れるのは女性の方ですからね。

個室でも、他人が挟む空間です。

そんな事、責任者の隆史君が、知らないはずがありません。

多少？ 大胆な発言でも、からかっているとすぐに判断できる。

そうそう、この距離です。

この距離が良い…。

さて……水着撮影。

夫にも勿論、報告してありますし…何より全国に出回る写真…と、  
いいですかカード。

ま…大丈夫でしょう。

余程、過激な水着でなければ。

まあ…あのハゲが絡んでいるというのが、若干引つかりますが  
…。

過激な水着なら、断るか……また、隆史君をからかって、遊…誤魔  
化しましょう!!



「  
」

お…思い出しました……忘れていた事…。

いえ…あの……しほさんから、聞いてはいたのですけど…彼。

怒らすと年齢差関係なく、すつごい怖いと…。

あのしほさんすら、正座を余儀なくされたと、昨晚聞いていたのを  
…。

しかし…この怒り方…。

ええ…まず、昨日の盗撮・盗聴の件が、尾を引いているのは明らか  
です…。

初めはそんな素振り、全然見せませんでしたから…。

いつもの様に、私としほさんに挟まれて、ドギマギして…慌てて…。  
怒りを収めてくれたのか？ と、すら…思わせないほど、普通でし  
たのに…。

ま…まあ？ 調子に乗って…顔近づけるとか…困うとか言っ  
てしまったのは、アレかとも反省はできますよ…。

できますから、その顔…やめて…くれないかしら…。

企てた時間稼ぎは「延長」の、隆史君の一言で、確定…私の計画が潰された…。

今では、立ち位置が逆転して…狼狽しているのは、私。

私を見て…彼は…ものすごい笑顔で、はつきりと言いつつ放った…。

「激怒って奴ですわね」

「」

すごい至近距離で、笑顔で私の肩に手を置いている隆史君…。

だ…だって仕方がないと思うのですけど…。

あんな、卑猥な水着、着れる訳…：まあ一応着たんですけど…：着れる訳がないじゃない！

自身の歳と照らし合わせると余計に!!

しほさん、からかうのは楽しかったですけど!!

用意されていた水着…初めの撮影の分は…まあ…許容範囲と言えば範囲でした…。

多少…過激でしたけど…。

でもですねっ!! この…これっ!! ただの紐ですよ!!

着てみたら分かりましたけど、流石にこれは…V字がすごくキワどい…。

「流れとはいえ、こんな水着を着せたんです。千代さんが嫌なら、それでやめました」

「…え」

あ…あら？

思いの外、優しい心使い…。

「俺を囲むとか…度が過ぎた冗談も…まあ、100歩譲って良しとしましよう…」

よ…良かった…そこじゃないんですね…。

酔っていないと分かったので、なんででしょうか？ いつもより勢い



を増して、大胆にからかって見たのですけど…？

「そ…それならあ…」

その言葉に、一部の希望を…って言いますか…本当に人が変わった様な目をしますね…。

「!?」

問答無用。

そんな言葉を思い出しました。

躊躇なく、肩に置かれた手で着ていたガウンを左右にズリ下げられました！

えっ!? なにつ!? えっ!?

背後っ!? あれ、帯っ!? えっ!?

「!?!?」

あっ!?

どこか引つかかったのか、水着も一緒に開け…胸っ!?

反射的に胸を腕で隠し、身体が引いた…。

恐る恐る、後ろに廻った彼の顔を見ると…。

「からかうのと同時に…保身の為に、愛里寿の事を出しましたね?」

そんな私を見て、いつもの様に、戸惑う所か、すっごく冷たい目で見下ろしていた…。

「」

そして、愛里寿の事を言われた…。

「いえ…あれは…その、リアリティを…」

「は?」

「」

思いの外、隆史君が愛里寿の事で、怒ってくれたのが嬉しかった。嬉しかったのですが! その矛先が私っ!

あ…ガウンは、邪魔だとばかりに、後ろに放り投げられた…。

「隆史君!? ちょ!?! ええ!?!?」

水着のズレも直せない…見えちやいそうでしたし…。

前かがみになって、防御体制を取っていた私に、素早く腕を伸ばしてきた。

脚をすくい上げられて…いつもの…隆史君の必殺技とでもいうのでしょうか？

お得いのお姫様抱っこをされた…つつえ!?

「…千代さん」

「なっ!? ベツ!?!」

横…ベツトの方向へと、隆史君は体の向きを変えた…。

そのまま躊躇なく運ばれる私…。

「え…ちよっ!? えっ!?!」

ズンズンと進む隆史君。

そのままベツト脇に到着すると…。

「つつ!!」

ボスツ! と、鈍い音。

そのまま落とす様に、ベツトへと寝かせられた。

カシャカシャと、音が数回…。

少し乱暴に落とされてしまったのか、水着が更にずれていた。

…え。

普通に、こんな面積の小さな水着…少しずれただけでも、アレなんですけど!?

しかも! 今! …シャツター音っ!?! 取られた!?!

見上げたら、カメラを構えた姿勢の隆史君…。

その姿勢を崩し、また見下ろす顔の彼は…真顔…。

「…後、昨日の事…」

「」

ビクツと身体が怖がる…。あ、やっぱり…尾を引いていた。

昨日の事という言葉に、即座に身体が反応してしまった…。

その私の姿を見た彼が、また…。

「やっぱり」

ため息をして、その件に関しては言うつもりはなかったのに…と、小さく呟いた…。

あ…確信された…。

「高校生に混じって何やってるとか…もう、そういうのは置いておいて…まあいいや。…最後、聞いてましたよね？」  
「…え」

「俺ですね…お仕置きという名目で、いぢめるが…非常に好きでして…ねえ？」

「」  
え…え…。

「遠慮しませんよ？」

えっ!? なんで一瞬、すごい優しい笑顔になったんでしょう!?  
「っ!」

そのまま彼は、ベットへ膝をかけた。

私を逃がさない為なのか…仰向けになっている私のお腹の上辺りに、馬乗りの姿勢になった。

両腕は、彼の足の間…体を起こす事も出来ない…え…押さえ込まれた?  
軽く体重を落とされて、彼の重みで動けない。

「隆史君!」

そのままシャツターを切る。

真上から…。

腕も押さえ込まれ…。

乱れた水着姿を…この卑猥なうう!?

片手で、私の胸を下から揉み上げて来た!? えっ!?

躊躇なく…一片の迷い無く、マッサージをするかの様に…。

「隆史君っ!」これは流石にっ! 怒りますよ!?  
…え。

睨みを効かせ、彼の顔を見上げると…笑ってた。

「前回の…ホテルの時もそうでしたけど…」

見た…この顔を昨日…見た。

「…誘ってきたのは、千代さんでしょう?」

別人とも思える…ええ…盗撮の映像を見て、会場中が息を飲んだ表情。

隆史君の男友達が、冗談で言っていた…で、あろう隆史君。

尾形（邪）って、言われた時の顔…。

「んんっ!!」

私の胸をまさぐっていた手を窄め、親指と人差し指の間で、水着を退かす様に乳首を強く摘む。

乱暴にしてきた為、少し痛みが走る。

そのまま腰を下に下げ…私の体の上に覆いかぶさる…。

「たっ! 隆史君!! あれはっ! 冗談…っ…それで隆史君も怒って…んんっ!!」

覆いかぶさって来た彼…私の静止も聞かないで…そのまま唇を合わせてきた。

「っあー…らあ…んっ」

舌が侵入してきた…。

まさぐる舌…奥まで…んっ。

「にちゅ…ちゅ…」

この子…え? なんで…いくら怒っていたって…。

お酒の匂いはしないから…酔って…いるわけじゃ…ない…。

舌が…口の中全体に…。

唾液が交わる音が、じゅるじゅると聞こえてくる。

舌を…犯され…

「っぷ…は…あ…あ…」

思った直後…舌が口内から、出て行った…。

そんなに長い時間では無かったのに…脳が痺れる…。

「…あ…貴方…」

「…睨まれても困ります。確かに舌を入れたのは俺だけ…貪っていたのは、千代さんでしょう?」

「…え…」

…貪る。

はつきりと言われた。

「最後、残念そうな声までだして…」

「……」

そう言って、隆史君はまた口を合わせてきた。

…直後。

「ぢゅっ…はっ…あ……んっ…」

今度は私から、彼の中へと入っていった。

「ジュルツ…ジュジュブツ！」

吸っている。

彼の舌を遠慮無く吸っている。

口を大きく開け、彼を味わう。

「はっ…んっ……あ…」

そして、すぐにまた離された。

「ほら」

か…確認する為…いえ、させる為だけに。

彼の無機質な顔が、目の前にある…。

彼は私の横に、並んで寝そべっている。

よって、私の両腕は自由だった。

逃げれる…今なら…。

これ以上はオカシクナル。

倫理観…何て、今更だけど…。

壊れる…完全に壊れる。

「んっぢゅっ……れら…ぢゅる…」

両手で彼の顔を掴み、思いとは裏腹に…無意識にまた、彼へと口を合わせていた。

激しく動く舌尖。

舌全体を使い、舌全体を絡み合わせている。

「んっっ!! あっ!! ぢゅっ…」

肩に当たる、冷たい感触。

彼との身体に、カメラが間に挟まっている。

下半身の、熱い感触…。

彼の指が、秘部を覆っていた、水着を横へとズラしている。  
ニチニチと、指が上下に動く。

「はっ…んっ!!」

口を離し…そちらへと、感覚が集中してしまった。

思わず出る…声。

彼の人差し指が、秘部…膣口の回りを撫で回す。

クチュクチュと…ニチャニチャとした音…が…。

「はっ…はっ…はっ…はっ…あ…っ」

意識が下半身へと移った…と、思ったら、またすぐに彼は動きを止めた。

離れる指…手…身体…。

ポーッとする頭。

体に力が入らない…。

そんな姿を、ファインダーを通して見下ろす…目の前の隆史君。

また…シャッター切る音が響く。

途中で止められた…これからだという時に、即座にやめてしまう彼を、少し恨めしい顔で見つめる…。

「ええ、水着撮影ですからね?」

また…変な笑顔で…。

それに…さっ…えい?

「では…はい」

彼がズボンのベルトを外し…チャックを下ろした。

ゴソゴソと、片手で弄り…出てきた…。

すでに固くなり、大きくなっているモノ。

一度だけ見たモノ。

…夫とは違う…大きく…エグく…。

子供の腕程の…太さ…。

喉が鳴る…。

「千代さん。すごい見入ってますけど…」

「っ!!」

「…旦那さんと、比べました?」

「っっ!!」

見透す様な目…。

焦る私の顔を見て…何か満足そうな顔をした。

何が…ええ?

「ドウゾ」

「…っ」

舌を伸ばす…。

伸ばす?

許可を得た…とばかりに、彼の言葉に反応してしまった。

首を伸ばし…口を近づけ…亀頭…というのでしたか? その先に

口を少し開き…ツケル。

「…ジュツ…」

舌を口からはみ出させ…回りをゆつくりと舐めまわす。

塩辛い味が広がった。

「…最初だけでしたね?」

「ジュルルブツ! れっはあ…はあ……ヂュプツ!」

「…結局。抵抗は口だけ…」

口に…。

「ちゅっ……ぷっ……はあ……ブツ」

寝ている為に…うまく動けない…。

これなら、舌で舐め回した方が…いい…でしょうか…?

鼻を通して抜ける…男の匂い。

「ちゅぽっ! ちゅぽっ! ちゅぽっ!」

亀頭の部分だけなら、なんとか…。

「んっはっ!!」

指が…太い指が入ってきた。

に……本目……え…。

「…ふっばっ! んあ!! あっ!! あっ!!」

ニツチャツ! ニツチャツ! と、膣内を撫で回すかの様に…何か

を探る様に…。

私の中で、指が暴れまわっている。

「…あった。ここかな？」

「つつつあぁ?」

刺激が…一気に…この子…。

グチャグチャと掻き回される音。

それでも、乱暴にされる訳でも無く…的確に刺激点をゴリゴリと…。

何か、機械の音が聞こえてくる。

が…どうでもいい…。

どうでも…。

つつあ…はあ…。

弱点を一点集中されている。

喘ぎ声と、目の前の陰茎を味わうので…唾液の音と、愛液を掻き回される音で…もう…。

あ…来る。

来るっ!! 大きなのがっ!! ひ…ひさしぶ…りっ…に。

そう、あの夜の情事以来、夫に抱かれても来なかった、快樂の波。

隆史君の指が、三本。グチャグチャと粘液質な音を響かせながら、その快樂の波を引き寄せてくれている。

「はっ!! はっ!! あっ! あっ!! あっ!!」

声が大きくなる。

呼吸が激しくなる。

もう少し…。

あと…少し…。

!?

「んあ…はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…あ…なんで…? な…んで？」

ま…また…止められた。

今…良い所だったのに…。

縫るような私の声に、薄気味の悪いくらい明るい声で…。



「時間です」

「え……」

信じられない言葉を聞いた。

え？ ……な……え？

「時間ですね。そろそろアラームが鳴りますので、千代さんも服装を直してください」

「ア……アラーム？」

「ガウン、取ってきますねえ〜」

軽い口調で、吐く言葉。

意味が分からなかった。

素早く自分のズボンを履き直し……ガウンを取りに、ベットから離れてしまう隆史君。

呆然と体を起こすと……段々と冷静になってきた。

が……体の火照りが収まらない……頭の中が熱い。

勧められる通りに、ガウンを羽織る。

まだ、口から熱い息が吐かれている。

なんとか衣服を正すと……隆史君が、そのまま私を後ろから抱きしめる様に、腕を回してきた。

手にカメラを持って……

「千代さん。最初に何て思いました？」

「……え？」

「俺をからかっていたのに……実際に俺が迫ったら、少し抵抗をした」

「……」

「……千代さんも思っただけですよ？ 最後の理性……というか、倫理観がおかしくなるのを……」

「そ……それは……」

思い出した……。

壊れると思った……オカシクナルト。

け……結局……

「思っただけで、結局は千代さんから、求めてきた…」

隆史君は、カメラを私に手渡しをし、液晶部分に向け…先程まで撮っていた画像を表示した。

「デジタルカメラ画像を表示しては送っていく。

送られる画像は…液晶に映し出されている…私……。

卑猥な水着で、仰向けになり…舌を伸ばしながら…。

挙句、男根を頬張り、ヨダレで口元を濡らしながら…貪っている…

完全に女になっている私の…姿。

ただ、求める…恥も外分も無い……ただ、男を求める浅ましい姿…。

これ…が、私…。

「はい。では、ここまでです」

パツと、体を離れた直後…時計のアラームが鳴り響いた…。

「お仕置きと言ったので、千代さんに満足してもらっては、困りますからね」

「…な……あ……」

カメラを持ち…呆然と自分の画像を見つめる…。

「え…隆史…君？」

視線を移した彼は…いつもの彼に…戻っていた。

「どうした…の？ 君は…え？ いつもだったら…」

「ああ。昨晚、しほさんを朝まで抱いて…すっごい吹っ切れました」

……。

……は？

「いやあ…しほさん。タガが完全にぶっ壊れて…最後なんて、もの凄いい事になってましたよっ」

…え？

あ…あの…女…。

何が、守りは固く…ですか…。

…。

あっっ!! そうでしたっ!!

…忘れていた事…もう一つ…。

飲みすぎで、記憶が少し飛んでました…。

昨日の彼…飲んできた…。

しかも、しほさんも…飲んできた…。

そして…一番重要な事。

…挙句…夜中…彼を起こしてしまった…。

カードキイ…。

彼を起こさないで、放っておけば…こんな事にならなかった…つて、事でしょうか？

そして、頭に浮かんだ言葉が…。

— 自業 自得 —

「はい…そんな訳で…次は千代さんかと…思ってたんですけど…ま。やめておきますか？」

いつもの顔で…いつもの声で…明るく言っはいますが…。  
怖い…。

この隆史君は…ものすごく…怖い。

結局…肉体関係を我慢していたのは、私の方だった。

それを自覚させられて…彼の許しの様なモノに、即座に飛びついて

…。

その時の私…画像を見せつける事で、証拠を提示…強制的に逃げ場なく…ただの女だと…自覚させられた…。

拳句…お預け…。

そして今、今後の関係をどうするかと、私に聞いてきている…。

私から、言わせる気だ…。

なに…本当に…なんなの？ この子…。

吹っ切れたって言っていたけど…迷いが無くなった事…よね？  
寧ろ、酔ってる時より…恐ろしい。

「まあ、いいや。次は、しほさんですから…俺の中途半端な処理は、しほさんに頼みます」

え…笑顔で…。

前までは考えられなかった…じゃあ、今朝のあの慌てぶりは…なに？

しほさんに性処理を頼むと、はつきりと言った…。

「もう、俺は割り切るって、決めてしまいましたからね」

…。

…この歳で…まさか…こんな選択…。

「最後です。どんな選択にしろ、千代さんに対して、態度を変える気は一切ないですからそこは、安心してください」

迫られる…選択。

普段なら、逆にからかい返して…濁すんですけど…そんな考えすら

及ばせない…。

ただ…それでも、普通に…いつもの笑顔なのが…考えを鈍らせる。  
近寄ってくる…。

肩を掴まれる…。

顔が近づく…。

…これが…あの…隆史…く…。

「大丈夫ですよ？ 本当に…千代さんは、俺の恩人だし…大切な女性だ…」

持て余した、火照る身体。

欲情した状態の身体が、選択を強引に選ばせる。

抱き寄せられて、口を塞がれた時…。

…私が…壊れた。



撮影は滞りなく終わった。

千代さんには、しほさんに頼むと言ったが、流石に撮影の時には致しませんでした。

千代さんの時にもだけど、最後までしてしまおうと…特に男のアレは…うん。匂いが…。

女性特有のアレの匂いもどうかと思うが、バレなかったので、良し

！  
カメラの中の画像は、流石に見せられない為に、SDカードだけ抜いておいた。

カメラマンさん達の目の前で。

怪しまれるかとも思ったのだけど、特に何もなく…表情にも出ていなかったなので大丈夫だろう。

延長に延長を重ねてしまった為に、撮影機材をカメラマンさん達の片付けの手伝いをし…。

カードキーは、返しておくからと預かり…とつと帰ってもらいました。

衣装…というか、水着はこのまま放置。

後日、担当の方が取りに来るそうでした。

はい、だから今の所、自由に使えます。

チェックアウトの時間も過ぎている。

―が。

時間の関係上…撮影があつた為に、この部屋はもう一泊使用可能状態です。

その為に、水着は置きっぱなしでも、よろしいとの事ですね。明日取りに来るそうですから。

…ですから、このまま利用させて頂いております。

ここだけ感謝だ。日本戦車道連盟。

だから…。

「んっ…隆史君…これは……本当に気持ちだが、良いのですか？」

「ええ、大変よろしいです」

「…よくわかりませんね」

ベットに腰掛け…床に肩膝を立てた、しほさんに胸で挟んで貰ってます…。

巨大な二つの胸の真ん中が、丸く押し退かされている。

俺の陰茎の形を型どつて…。

はい…昨日の事後という事で…すごい素直に…。

ここまで変わるものか…ま、俺もだけど。

普段なら絶対に言わないし無理。

が、今のスイツチ入りっぱなし状態なら、全然普通に頼みました。

『すっごい中途半端だから、しほさんで処理したいのだけど、いいですか？』

と…「処理」という言葉を強調して言ってみた。

意味はすぐに理解したのだろう。

千代さんとの事も、なんとなしに言ってみたから。

『し…しかたないですね…』

と、また…顔を真っ赤にして言ってくれた。

……。

いや…いいのかな……本当に…。

とか、普段なら思うが…もうやめた。

みほとまほちゃん。…彼女達を思い出すと、共にまだ胃を強く刺激する。

だけど、今はこちらに集中しよう…そう思うと、昨日も…変に胃痛が和らぐ。

快楽に没頭できた。

要は…俺も壊れた。

「…チュツブツ！ チュツブツ！ チュツブツ！」

下を見ると…いや……本当に凄い光景…。

しほさんのパイズリ・フェラって…。

陰茎を伝い落ちている唾液が、胸の滑りを良くしてくれている。

ニツチャ！ ニツチャ！ と、リズムカルな音と共に、しほさんから聞こえてくるフェラ音。

「はあ…はあ……んっ…」

そうだな…。

どうせなら、撮影の続きをしようか。

ベツトに脱ぎ置いていた、ズボンのポケットから、携帯を取り出す。

そのまま、カメラを起動。

…うん。

今、しほさんの姿は…はい。

結局、大洗学園の制服を着てもらいました。

んで…中には、やはりスリングショット。

パイズリの為に、前を捲ってもらっている為に、また再度凄い光景になっている。

「…隆史君」

あ、睨まれた。

「こんな恥ずかし…格好をしてるだけで、どうにかなりそうだと言うのに…。しかも…行為中。写真に撮るんですか？」

遠まわしに、拒否してるなあ…。

まあ制服着ていた時を見た時…凄いい取り乱し方だったからなあ。

現在も前に見た、人すら殺しそうな眼力で睨んできてます。はい。

でも…。

「はい、撮ります。動画で」

「なっ!?!」

携帯の電子音が鳴ると、更に顔を赤くした。いやあ…いいなあ。

正直、行為をしている時の、こういうたしほさんは、もう全然怖くない。

もう…わかったから。

「他校の生徒が言っていました…確かに隆史君は、変態と言っても過言ではありませんね…」

「…人の事は言えないと思いますよ?」

また睨まれた…。

「ほらっ。続けてください」

「……」

頭を軽く押さええると、渋々だったが、動き出してくれた。

人には見せませんからアとか、言ったら…当たり前です! と…



ちよつと噛まれた…。

しかし…乳圧がすげえ…。

「…しかし…本当にこんなのが…んぷっ」

まだ言ってる…。

ああ…。

「常夫さんも、頼まりましたか…」

「んぷっ!!」

かなり特殊な状況。

不倫…浮気…完全にそれに当てはまる。

しかも相手は、娘の彼氏…。

…動きが止まった。

「…ええ！ そうですね！ まったく…男と言うのは…」

「そうですかあ…」

まあ…普通、頼むよね…うん。絶対。確実に。

カメラを構えると、しほさんがまた掌をこちらに向けて、目線を隠した。

「…本当に撮っているのですか？ 流石に…」

「エロい、しほさんを記録に納めたいので!!」

「…無駄に力強い返事…。やはり隆史君は、変態ですね…」

「ですから…しほさんには、言われたくない…」

あつ。

…ちよつと、スイッチ入れてみるか。

「真昼間から、こんな事してるくせに…」

「…それはっ」

「止まっていますよ?」

「……………ちゅぶ…」

す…素直だ…。

「…唾液で、しほさんの胸…すごい事になってますよ?」

「ちゅぶ…ちゅぶ……………」

「…何気に…みほとした回数より、しほさんの方が多いとか…」

「…ちゅっぶ、ちゅっぶ…ちゅっぶ……………」

「凄いですよね…みほより夢中になってしゃぶり始めて…」

「はあ…はあ…ジュツポツジュツポツ…ジュツポツ！」

「挙句…カメラに撮られて…あ…すっごい、エロい顔してる…家元も母親もない…今のしほさんの顔って、何ていうのでしょうかね？」

「ジュブブブツ!! ぢゅゅゅゅ!!」

うん、啜りだした…。

しほさんには、絶対に強い言葉は使わない。

あくま、いつもの俺でいく。

それに彼女は、反応するから。

日常の隙間…背徳感とやらに、しほさんは一番興奮する。

「……はっはっ…ジュブツ！」

息継ぎをするかの様に、時に口を離し、熱い呼吸を繰り返す。

まあ…俺のモノの場合…顎…すげえ疲れそうだしね。

「口いっぱい頬張って…やっぱり、撮影して良かった…こんなしほさんの顔なんて、誰も見たことないでしょ？」

「…はあはあはあ、ジュツポツ!! ジュツポツ!!」

「多分…今、常夫さんが行ってる風俗より、卑猥ですよ？ しほさん。

相手が、俺だつてのがまた…」

「んんっ!! ぢゅぶ…はあはあ…んっ！ グッブ！ グッブ!!」

胸の動きも段々と早くなっていく。

圧もすごいのもあり…そろそろイキそう。

「しほさん…そろそろ…」

俺の言葉を聞くと、舌に亀頭をつけると…亀頭を舐め出した。

そのまま、グポグポと音を出しながら、カリ部分にまで、口を往復する。

絞り出す様に、今度は手で根元をしごき出して…。

いや…胸で…。

ま…まあいいや。

顔の動きも段々と早くなる。

舌も使い、早く出せとばかりに…せつつく様に…。

「まっ…まだ…んっ！ でしょうかつ!？」

いや…普通に口で、催促されちゃったよ…。

ふーふーと、鼻息を荒く…完全に目の色が変わっている。

…ごめんなさい。しほさん。

あなた ちよろい。

しかし…。

「…本当に、しほさん…：精液好きですね…昨日も、散々搾り取られたし…」

「んんっ!! チュツポ!チュツポ!チュツポ!チュツポ!チュツポ!

!」

「…飲みたいんですか? …また」

無言で…行為で答えるかの様に、グポツグポツと、ガポツガポツと

…空気を含んだフェラ音が更に早くなる。

「…はい、では…いきますよ!」

限界が来た。

こみ上げるモノを感じながら…先程から欲しがる彼女へと予告する。

「はあはあはあはあ…はい…：…どうぞ」

「っ!」

ゾクッ! と…した。

どうぞって…。

そのセリフと共に、口を開いて…舌を出した…。

いや…：昨晚、散々それやらせたけど…：学習した…。

…。

その出された舌へ亀頭を添えると、止めとばかり舌でクルツと、舐めまわした…。

「ぐっ!!」

「っん!!」

脈を打つ…。

先から出される液体を、口内に全て吐き出す。

…今回は少し押し込め…外へと溢れ出さない様に。

「…くっ…まだ…：飲んじやダメですよお？」

「!?」

あ…驚いた顔した…。

……。

すごいな…しほさんも吹っ切ると、ここまで貪欲になるのか…。

「んっんっ…：んっ…：!? んうく…：フーフー」

全て出し切る…。

すごい量がまた出た…と、思える程の脈打ち…。

舌先で味わうかのように、亀頭周りで舌が動く…これは…腰が少し引くほど気持ちがいいが。

「はい、では」

「ふうん!?」

大量のモノを口内に吐き出したあと、即座にまた動き出す。

混ぜるように…ぐちゃぐつちやと音を立てて…。

「はい…飲んでいいですよ」

苦しそうに…それでも喉を鳴らす音がする。

喉に突き刺し、えづいても…直接喉奥に送る…。

「んぐっ!! んっ!! めっ!! ぷあ!!」

陰莖を抜き出すと…口内でグチャグチャに混ざり合った、唾液と混ぜたものが、しほさんの口周りを白と透明の液体で汚していた。

ボタボタと下の大きな胸へと落ちて、更に汚す…。

「っっはあー! はあー! はあ…：はあ…：はあ」

上を向き…大きく呼吸する彼女の目は、もう別の色に変わっていた。

ボトボトと音を立てて、胸に落ちる…：太股へと落ちる。

自分自身も、大きく呼吸を繰り返す。

そのまましほさんの後ろへ周り、腕を持ち…立たせる。  
俺が腰掛けていたベットへ、体を前に倒し、手を着かせた。  
そのまま緑色のスカート捲り…白い尻から伸びる、黒い水着をズラす。

お尻を上げさせ…止める。

まだ荒い息を繰り返している、しほさん。

大洗学園の制服を着て、秘部を丸出しにし…お尻をこちらに突き出している…そんな姿を眺めていた。

改めて言葉にするとすげえな…。

さて、俺が動きを止めた事で、疑問に思ったのか…顔だけをこちらに向けてきた。

やる気万々ですね、この方。

「…ど…どうし…はあはあ…どうしました？」

「いや…しほさん。すげえ格好だなど思いました…」

携帯を構え…その映像…というか、出立を録画する。

もはや慣れたのか、嫌がる素振りすら見せないで、俺を見ている。

「…わ…わかってますよ…はあ…はあ…恥ずかしいのですから…早く…」

「しほさん。今、自分がどんな格好してるか…本当にわかってます？」「…え？」

「みほと、同じ学校の制服着て…その上、その彼氏のモノを挿入されるのを、待ってるいる…のですよ？」

「っ！」

スリングショットの股間部分。

それを指で掴み、上下を繰り返し、秘部を刺激する。

現在の状況を、敢えて言葉にして伝える…事実、そのモノを。

「しかも…こんな…前戯なんて不要な程…ここ。凄い事になってますけど？ 地面まで垂れ落ちるって…どうなんでしょう？」

「たっ…たか…」

「入れやすい様にして下さい」

オネダリ…という物を、させてみる。

心なしか…しほさんの鼻息が荒くなっている気がするね。

「両手で…そう…」

頭をベツトに着かせ…両手で尻肉を掴ませる…そしてそれを、左右に開かせ…

「た…隆史君は…本当に…」

…とても素直に従った。

「ここまでさせたの…いや、俺をこんなにしたのは、しほさんでしょうに」

はい、嘘。

責任を押し付ける。

んなもん、悪いのなんて俺以外に、いるわけがない。

が…しほさんは素直にその通りだと、感じているのか…押し黙っている。

尻肉に連動されて、左右に開かれた、膣口。

ヒクヒクと小さく開閉を繰り返している…そこに亀頭先を当てる。

「常夫さんの事…しほさんは、もう何も言えませんか？ 寧ろ、常夫

さんの方が、健全…いや、マシな方じゃないですか？ 商売されてる

店に行ってるんですから…」

「っっ!!」

うん…流石に素直に、健全だとは言えなかったヨ。

少し吃ってしまった。

まあ、健全ではないわな。言い換えた。

「現状…娘の男と完全に浮気しているしほさんは、それ以上にそれ以下だ。最低ですね？」

「っ!!」

うわ…。

今のセリフで、目の色が更に変わった…。

涙目になりながらも…何を言われても、今更やめるつもりなんて、まったくないだろうな。

背筋を震わせた…また、秘部から愛液が脚を伝っていった。

「今、どんな気分でしょうか？」

「……ハア……ハア……」

「みほと同じ制服着て、そんな卑猥なポーズとって……」  
娘に申し訳ないと、思わないのか？

んな事、言わない。

申し訳ないと思ってるに決まっているから。

屈辱……とは、違うな。

目が完全に蕩けている。

いつもの鋭い眼光ではない。

キツイ目は相変わらずだけでも、奥に光ってる光は違う。

「そんな……今のしほさんは、ただの雌です」

バツサリと……優しく言う。

グチュツとそのまま、一気に押し込める。

ヂュブヂュブと、陰茎に圧迫されて……膣内から愛液が音を出しながら、溢れ飛び出してくる。

ゴツンと……奥まで、全て、全部。

容赦なく入れた。

「——ッ!! ——ア!?!? ——ッ!!!」

今まで焦らした事、みほの事との複合で、奥まで入れた瞬間。身体が痙攣を始めた。

ビクンツ……ビクンツと。

「ッ……ッ!! ——ッ!!!」

まだ痙攣を繰り返している。

携帯を横に並んでいる、もう一つのベットへと、録画されるようにカメラを向けて横置きにする。

「……なんだ。もういつたんですか？」

イキ方がすごい……ちよつと心配になるくらい……。

脚と腰をビクビクと小刻みに揺らし……開いていた脚が、即座に折りたたまれ……ベットへと倒れこむ。

「はい。あそこにカメラありますからねえ。しっかりと見てくださあ

「い

携帯の場所を教える…が、聞いちやいねえ。

軽く頭を向けさせ、カメラ目線へとさせる。

黒い携帯のレンズが分かったのか…更に体を震わせた。

さして。

もういいか。

「はい、千代さん、もういいですよ」

「ツ!! —ツ!!」

しほさんは、絶頂の余韻があるのか、俺の声にも反応しない。

正気なら…うん。こんな格好だし、絶対にオカシクナルノニ。

さて…呼び出しと共に…千代さんもゆっくりと現れた…。

始め、浴室へ隠れてくれている様に頼み…後は死角から見えてく

ださいと、指示をだしておいた。

「…し…しほさんが…こんなになるなんて…」

たつたの一突きで、こんな状況…。

まあ…うん。ガンバリマシタ。

千代さんは、しほさんの格好にツツコミがない。

ある訳がない。

だって、同じ格好してるしね!!

…こうすれば、後で制服着たとかの言い争いはないだろうし…ね。

「あつ…はつ…はつ…はつ…」

「ああ、しほさん。落ち着きました?」

「た…隆史…君…今の…すご…」

ああ…千代さんに、本当に気がついていねえ。

凄まじいイキ方でしたからね、完全に余韻に浸っている。

はい、んじゃ。

グチュツと音をだして…少し引き抜く…。

そしてまた一気に一番奥を…殴る様に腰を打ち付けた。

「アッツ!!!」



背筋を伸ばして：海老反り。

ゆつくりはしない。端からそれなりに早く動く。

ブツと何度も空気が漏れる音と粘着液の音。

後は：結局、しほさんは千代さんに気がついたのは暫く後だった。そのまま千代さんに見学させ：暫くは、しほさんに対して動き続けた。

俺がベツトに横たわると、何も言わないで、即座に行動でしほさんは応えた。

騎乗位。

「…こうして見ると…良く入る……ものですね…」

千代さんの驚愕の声…。

結合部分をまじまじと見ている。

陰茎に強引に尋がされた臆。

俺は特に、動いていない…というか、動けない。

足をベツトにつけ、腰だけを下に打ちける様に、しほさんが自発的に動いているから。

余った手で、千代さんの秘部を掻き回すと…彼女は俺に口を重ねてくる。

舌を舌で転がされている…。

「あっ!! はっ!!! はっ!!」

グチャツッ! グツチャツッ! と粘液が、張り付き…離れる音…。

もう、言葉攻めは、しない。

ここまで来ると、逆に野暮だ。後は好きにさせよう…。

目の前で、胸が大きく揺れる…。

前回と違い、今回は日中。

酒も入っていない。

冷静に…見える。

腰をたまに上に打ち上げると、それに連動して、胸も弾む。

…楽しい。

ただ：千代さんだ。

お預けくらった状態で、適度に俺が刺激を与えるのを、繰り返すか

ら…もう、すでに目がおかしい。

しほさん自身…何度かすでに、絶頂を繰り返しているのだけど…千代さんと変わろうとしない。

流石にもう気がついていいるのだろうか、何も聞かれなかった。

その千代さんが、俺の口に唇を合わせてくると…横から割り込んでくる事もあり…。

最終的には、二人揃って俺の舌を舌で、取り合う状況に…。

服は脱がせなかった。

半裸派ですから俺は！

捲った制服は、胸で止まり…何度か絶頂を繰り返す度に、体を伸ばすものだから、胸が水着で縦に肉がへこむ…。

揉みしだき、ずれた水着を戻す。

しほさんは、やはりバックがお好き。

四つん這いにして、ピストンを繰り返すと…非常に喜ぶ。

この時ばかりはと、千代さんが、俺の首元から口まで舌と唇を使い…貪る。

「ふ…ふ…ふ…あつ!? あんっ!! あつ!!」

舐る様に胸をとにかく攻める。

正常位…腕を掴み、引つ張りながら、強引に中へと割り込む。突く。突きあげる。

「は…はあ…はあ…はあ…」

千代さんが、もうすでに限界が近かった。

俺としほさんの行為で、すでに頭の中で、思考が回ってないのだから。

目が…捕食者になり始めた…。

ふむ…。

「そろそろイキそう…千代さん…ちよつと待っていてください」

「っ！ や…や…や…とですか…や…や…と…」

あ…マジ泣きしそうな顔だ…。

そこまで…、まあ自慰は許可しなかったからね。

撮影の時から考えると、結構な時間、お預け状態でしたしね。

しかも、この部屋に再度入った時から、指で定期的に刺激を与え続け…イク手前でやめる…のを、繰り返ししてたしね。

本気で現界なのだろう。拷問に近いのかな？ 知らないけど。

あの千代さんが、懇願してくる位だしねえ…。

さて…と。

「じゃあ、しほさん。どこに出して欲しいですか？」

「っ!! あっ!! はっ!!」

あー…こりやまたイったか…。

即座にまた口に求めらると思っただけどねえ…。

両足を腕で上げ…垂直にお尻を上げる…。

んじゃ…。

「本気で、動きますね？」

「あっ…うっ…はあー…はあー…え…ん？ え…?」

はい、今までは本気じゃありませんでした。

その一言で、一気に下に振り下ろす。

「アッ!! アガッ!」

杭打ち。

前回もしほさん、大丈夫だったから、平気だろ。

グツチュン! グツチュン! 体液の混じる音。

ラストスパートとばかりに、陰茎全体を使い…根元から先端。

ギリギリまで抜き…思いつきり、奥まで打ち付ける。

前回はコレはしなかった。

ぶっちやけ、俺のサイズで、彼女達が持つかどうか分からなかったから。

今は酒が入っていない分、冷静の為…大丈夫だと判断。

「オッ!! アッ!! アッ!!」

「んじゃ…出しますよ…どこが…」

「なっ…中っ!! でっ!!」

今度は即答した…まあ昨日、ピル飲んだしね…。

「中ツ!! なかああ!!」

直後：そのまま、ご希望通り：全てを吐き出した。

「あっ…!! あ…っ!!」

膣内の全体を使って締め上げてくる。

ジムに通っていたとの事で：めちやくちや締りが良い。

ドクドクとまた、脈が波打つ…。

陰茎をズルツと引き抜き、その場を離れると：しほさんの脚が、パタンとベットに落ちる音。

そのまま寝そべる形で、仰向けに：もう動けないのだろう。

今回は一回で終わりだな、こりや。

杭打ち：本当に最後にした方がいいな…。

まあ、今回はみほに、午後には帰ると言っただけだから、あまり時間がないしね。

はい：しほさんの秘部から：2度目とは思えない程の白液が溢れ出している。

ふうー…。

うん、撮っておこ。

「

完全に俺の形になって、丸く穴が開いている：しほさんの膣口眺め…千代さんが青くなっている。

しかも、ものすごい量の精液が、溢れ出している。

そのしほさんは、完全に沈黙…。腰だけを上下に痙攣の為に動かし  
ている位だ。

うん：気持ちよかった。

「あ…あの…隆史…君？」

「なんでしょっ？」

千代さんが呼びかけてきた。

返事をしながら、携帯を確認。

「ふむ…後、一時間位か…片付けの時間を考えると」

「え…」

「ああ、すみません。なんですか？」

「い…いえ…今更ですか…私には少し…手加減してもらえると…」

「散々、求めて来て、欲情して、発情している癖に、何言ってるんですか？」

言い捨てる。

「」

…その言葉に絶句しているな。

多分…千代さんは。こっちのタイプだ。

この人も華さんと同じ…Sの皮を被ったMだ。

多いんだよなあ…お偉いさんに。

普段、怒られないものだから、怒られたい…強く言われたい。

…M方面へと、傾いていく人。

「しほさんも、丁度一時間位でしたし…大丈夫でしょう」

「え…え…」

「待たせてしまった分…初っ端から、本気できます」

「いや…あの…」

「なんですか？」

チラツと、千代さんを見ると呆然とした顔。

目だけでそそり立つ俺の下半身を見下ろしている。

…小さくボソツと、呟いた。

「…このままだと…戻れなくなる気が…」

ま、聞こえたけど。

だから言った。

もう一度、バツサリと。

「戻る必要、あるんですか？」

「…え」

千代さん：彼女の青冷めた顔は……非常にソソル……。

千代さんを、しほさんが仰向けに横たわるベットへと、手をかせた。すぐに腰を引かせ……こちらに突き出させる。すでに抵抗の意思なんてない。

不安気な表情をしているが、期待をしてるかの様な目をこちらに向けている。

軽くお尻を押すと、そのままベットへと倒れ込んだ。

その脚の上に、千代さんが乗ってしまった為、ちよつと……危ない。

その為、しほさんの脚を持ち上げ……M字開脚をさせ、スペースを作っておいた。

……よつて、ベットへと倒れ込んだ千代さんの目の前には、膝を曲げ脚を力なく開いた、虫の息みたいなしほさん。

しほさんは、まだ腰痠を繰り返している。

上から見下ろすと、その顔はもう、俺の知っているしほさんじゃなかった。

倒れ込んだしほさんの腰を持ち上げ、四つん這いにさせる。

前戯はしない。敢えてしない。

まあ正直、お預けを散々繰り返したから、中出しでもしたかの様にグチャグツチャになってるけど。

……。

思う。

彼女達……家元の噂は良く聞いた。

そりゃあ、ネットで調べてみた事もあったさ。  
知り合いだったし、近しい人だ。

戦車道自体が、女性の競技。

戦車道チヨコもそうだけど、如何わしい噂なんて、腐るほどあった。  
みほやまほちゃんも、関与しているし余計に。

まああくまで噂。

枕なんてほぼ無い。

ほぼ無いつて事は、少しはあると言う事。

だからだろうか？

そこから、この二人を好きにしてみたいという願望もチラホラ聞こえてくる。

というか、男性が多い掲示板だと、結構な数…。

まあ：どう見ても、40歳前の子持ちになって、見えないし、あの胸と色香だ。

大多数が、屈服させたいという書き込み。

妄想による妄想の書き込み。

この手のタイプは、強く押せばチヨコそうだとさ。

いやあ：馬鹿じゃないか？ と、笑ったね。

まずこの二人は、ギリギリの所で、自尊心は崩さない方が良い。

だから、少々過激な事を言ったり、罵つたとしても：命令口調の様に、絶対に強く俺は言わない。

「さて、千代さんの番ですけど…」

「な…なに？」

亀頭を秘部にあて、声をかける。

「自分で入れてみてください」

「……」

基本的に男に負けないようにしてきた彼女達だ。

そりゃ、組織、スポンサー。社会の最上部は、男性の方が多い。

よって強く迫れば、反発する。

それはもう、条件反射の如く。

だから…。

…ごっこ遊び…みたいなモノだ。  
何かあれば、即座に普段の彼女達に戻るだろう。  
戦車道名家の家元…母…。

特に俺は、条件的には最適だったのだろう。  
これ以上ない程に。

高校生に見えない見てくれも、ある意味子供に手を出しているとい  
う、視覚的な問題を和らげている。

しかも、酔っていたとしても一度、肉体関係も持ってしまった。  
その為どこかで、男だと認識してしまったと言う事…。

…俺の立場。

それは俺自身も、反対の目線で感じている。

…背徳感の凄まじさ。

ある意味で、特にしほさんは、脆かった。

寧ろ、その背徳感に完全に酔っている。求めてくる。

…要は、彼女達自身の置かれている立場を忘れさせないで、それ  
も非日常を感じさせる事。

そうすれば…。

「……んっ…」

自ずと応える…。

「…はっ…んっ！ んっ！」

サイズの、すんなりとは入らないのか、それでもお願いの通りに、  
自分から尻を押し付けて来た。

「……これ……んんっ！」

指で広げ、強引に俺自身を、自らへと飲み込もうとしている。

携帯で、その状態を移しているのだけど、その先の光景がもの凄く  
官能的になっている。

段々と開かれていく入口…。

普段、上品……清楚…。

それを体現している様な千代さんが、ただ快楽を貪りたいが為に、  
こんな姿を晒している。



「…入って…いく…んっ!!」

クチツとした音がした。

亀頭を飲み込み…カリの部分まで、中へと飲まれた。

…が。

一番奥までは、入れさせない。

「愛里寿」

娘の名前を呼んで上げたら、体を硬直させた。

これは俺自身へも、ダメージが物凄い…が、ここも仕方がない。俺だけ楽しそうなんて思わない。

「…千代さんのこんな姿見たら…何て言うでしょうかね?」

「んっ!…あっっ!」

カ리를膣口の裏へ引っ掛け、軽く弾くように引き抜く。

千代さんの弱点だ。

「…ハア…ハア…」

お預けをくらって、更に今、また止める。

しかも愛里寿の名前を出して。

これはダシにしている訳でもなく、最後の砦…といえば、砦。

やはり何かを考えているのだろう。

何か中途をしている。

「ふっ…い…ふっ…い…んっ!」

それを、壊す。

カリの部分で引っ掛けては弾き抜き、また入れて、弾き抜く…を何度も繰り返す。

浅い部分を何度も何度も。

最初は、黙ってしまい、動いても鼻息だけ。

声を殺しながら、ずっと…考えているようだった。

が…。

「はっ!…はっ!…あっ!…あっ!…あっ!」

すぐに声が甘くなった。

「どうします?」

聞いた所で、答えない。

ただ、グチユグチユと音を出しながら、悶えている。

「…やめます?」

すでに、ここまで来ている。

一度、撮影の時に選択させたのだから。

だから、やめるはずがない。

しかし、これももう一度、自分から言わせる。

…これで完全に堕ちる。

「おっ…奥まで…入れて!!」

あ、案外すんなりと言った。

…おー…ちよつと残念。

「…懇願ですか? 娘の名前まで言われ…。その娘と、偽装とはいえ、  
婚約した男ですよ?」

「良い! 構いませんから!!」

あくまで立場を認識させる。

させておいて…。

「もう…我慢つ…できなああああ!!」

また一気に押し込めた。

奥に当たる感触。

子宮に突き刺さる、この感触。

ビクビクと痙攣を始める。

「…っ!! あ…:…カ…:…あ…:…あうっ!!」

散々焦らしてきたからなあ…。

腕を伸ばし、体を仰け反らせ…肩までガクガクと震えている。

グチユツ!

また限界まで、引き抜き…絶頂している最中であろうが…もう一度  
突き刺す。

「…っ!!…っ!!」

グチャグチャとした音を、繰り返し響かせる。

バツツバツツと、体が当たる音。

「あう!! かっ!! あぐっ!!」

声にならない声が、目の前からする。

イツている最中だろうが、お構いなしだ。  
深い部分で、小刻みに何度も突く。

千代さんが、伸ばした腕にはすでに力がなく、顔をベットにつけ、お尻だけを上げてただ、身を任せていた。

…我ながら思う。

吹っ切れたとはいえ…こうまで冷静にできるのだなど。

頭はスツキリしているし、みほやまほちゃん…愛里寿にも罪悪感がすごい。

それこそ本当に死にたくなるくらい。

……。

ただ、それが今は快樂へと変貌していた。

「あ、千代さん」

「カ……ア……」

動きを止めた。

あの夜とは違い、今は全力で墜とすつもりで、動いている為に手加減なんてしていない。

よって…もう、千代さんに現界が見えた。

氣遣わないし、迷わない。

「あ……あ……はっ……あ……」

黙って動きを止めて、休憩をさせて上げた。

流石にまだ潰さない。

少し経つと、呼吸を繰り返す音が聞こえてきた。

だらしなく、横たわる家元達。

しかも大洗の制服を着て…スリングショットなんて着て…半裸状態。

こうなると、目の前のこの二人。

息をするだけで、エロい。

「ひ……ひゃし……ぶり……に……」

久しぶり？

ああ。そういう事か…。

「旦那さんだと、イケなかつたんですか？」  
はつきりと聞く。

「……」

あら…黙つちやつた。

まあ、いいや。動きながら白状させるか。

…千代さんは、肉体的も精神的にも乱暴にされるのが、好きと見えるし。

クチツとまた音を上げさせる。

「…あ……んっ！ あっ！！ そ…そう…ですう！！」

動き出したら、白状し始めた…。

あれ…まだ何にも言つてねえ…あれ？

「あのおっ！ はっ！！ よっ！！ いけっ！！」

喘ぎ声と共に喋らせるのつて、官能的で好きなんだけど…今回は何を言っているか、わからない…。

「こんなのっ！！ いちどっ！！ 形がア！！」

…クイズですか？

「攻められながら喋るのつて、結構大変なんですね…俺は、エロくて好きですけど」

「はっ！ あっ！！ これっ！！ このっ！！ 掻き出される感じがっ！！」

もはや、聞いちやいねえ…。

そう言えば…ああ、しほさん。

まだ回復してないんですね…。

秘部から精液垂れ流して、ぼんやりと千代さんを見ている。

「目の前の…しほさんの…俺の大分出てきちやってますし…ベツト汚すのも申し訳ないので、口で吸つてやって下さい」

「っっ？？」

「ああ、ちゃんと飲んで下さいね？」

鬼の様な事を言ってみた。

そんな事も、丁寧に優しくお願いしてみたら、素直に聞いてくれましたね。

「ジュツ…んっ!! はっ!! れあ!! ジュブブブ…」

啜りながら…音を出させながら、しほさんの秘部へと口をつけた。また、その行動でしほさんがまた、脚を震えさせている。

逃がさない為か、千代さんは腕で、しほさんの太股をホールド。

「ちよっ!? 千代っ!! んっ!! んんっー!!」

啜る音が…響く。

さて…。

暫く様子を見てみると、また千代さんの脚が痙攣をしている。

また絶頂したらしい。

また、暫く様子を見てみると、しほさんが力なく天井を仰いだ。

また絶頂したらしい。

正常位になると、千代さんは俺の首に腕を回してきた。

抱きついて…脚を俺の腰の後ろで、絡めている。

肌がぶつかり、汗でヌルヌルと滑る…が、これがまた気持ち良かった。

…やはり、どうにも千代さんは、乱暴にされるのを好む。

駅弁の態勢になると、振り子の原理で、千代さんの奥を殴る。

これが非常に喜んだ。

本当に我慢していたようで、しほさんに比べると…いった回数が倍以上だった。

最後、杭打ちで止めを刺そうと思った…辺り、そんな考えに及ぶ程、自分もう躊躇してない。

途中でエアコンが止まったのか、もう二人共汗だくだった。

千代さんって、なんか汗かくイメージも余り無かったのだが、そんなイメージが幻想の様に、体中…汗でヌタアと光っている。

肌をぶつければ汗が飛び…杭を打てば、愛液と汗が飛ぶ。

「オッ!! オッ!! アッ!! イッ!!」

杭を引けば、獣の様な声を上げて。

杭を打てば、獣の様な声を上げた。

…最後、結局…千代さんも中に欲しがった。  
俺がイキそうだと言うと、膣内全体で締め上げて、絞り出す。  
その頃には、千代さんの顔も知性の文字は無く。  
ただの…雌だった。

脈打ち陰茎。

ビクンツと脈打つと、千代さんの体もまた脈を打つかの様に、跳ねる。

後で…しほさんに薬をもらいましようね…。

流石に…中だけは、まずいですから…。

……。

……。

はい…千代さんも壊してしまった。

◇

エロい方のスイッチが切れ、普段の様に冷静になると別の問題が湧きました。

汚しまくってしまった衣装は…うん…どうしよう…。

完全に事後だし…。

コインランドリーにでも急いで行くか…。

とか、思いながら掃除は全て完了。

しほさんも、千代さんも…いつもの見慣れた格好。

しかしなあ…吹き切れたとはいえ、ここまで…。

ドロドロの関係が出来上がりましたとき。

ま…もう今更だな。

現在午後の14時。

後は部屋を出て、フロントへカードキーを戻すだけ。  
まだ外は明るいですね。

「はっー… はっ!! はっ!!」

「ぢゅ…る…ぶつ…はあ…んっ…」

……。

あの…まあ…帰りたいのですけどね…。

俺自身、真っ黒なスイッチ…とやらは、もう切れている。

通常の状態でございます…が。

「気持ちっ!! 良いっ!! ですっ!! やっ!! やっぱり!!! コレがツ  
!!!」

千代さんは、ソファアの背もたれに手を着き…いつもの格好の…下半身部分。

まあ要は…スカート捲って、尻突き出して、俺のモノをまた受け入れている。

いやあ…エロい。

「んっ…んんっ…」

で…しほさんは、さつきから俺の舌をずっと吸っている…。

いやあ…エロい。

普段の格好へと着替えた後、帰る前に…先程、携帯でずっと録画していた映像を見せろというので見せたのですけどね?

また…彼女達のスイッチが入ってしまったようで…。

スカートの千代さんが、そのまま求めて来ましたので…はい。

少しだけというので、仕方なし…。

しほさんは、それを止めたのですが、そんなのを横から見ている為…またスイッチが入ったそうで…。

「んっぶっ! あ…そろそろ帰らないと…」

「何を言っているのですか? こんな歳になってこんな事を教え込んだのは、貴方でしょう? 責任を取りなさい」

…しほさんや。

ぶっちやけ…2回しか致しておりません…。

まあ内容が濃いですけど…。はい…確かに結構、教えちゃったので  
すけど…。

「…余り遅くなると…その…みほに勘付かれると思うんですけど…  
？」

「……」

コインランドリーも行かないといけませんし…。

俺、もう一度ここに戻ってこないと…。

みほも午後には帰ると、言っであつた為に…露骨に遅くなるとま  
ずい。

「許容できる時間って多分、そろそろだと思うんですけど…」

「…チツ」

舌打ち!?

「あっ!!… いっ!!… んああ!!」

んな事してる内に、千代さんが果てました。

また体をビクビクと痙攣させて…。

…ぶっちゃけた話…エロい格好してもらうより、こういった普段の  
姿の方が、興奮する…。

んじゃ…。

「はっ……あ……んんっ!!」

ズルツと引き抜くと、こちらを艶かしい目で、振り向いてきた千代  
さん。

…いや…ね? はい…。

「ぢゅぶっ…んっ……」

「しほさん!」

抜いた瞬間…しほさんが、今度はそこ…というか、ソレにむしゃぶ  
りついて来た。

ガポガポと、即座に俺をイかせようと、本気の動き…。

いや…その動きも…確かに俺が指示出しながら教えましたけどね  
?

「はあ…はあ……あら…しほりん、はしたない」

「ぶっ!… 貴女に言われたくありません」



喧嘩は…するのね…。

「しほりん、チヨロすぎですよねえ？ 私の信頼を返して欲しいです」  
「信頼？ なんの事か、分かりませんが…チヨロくありません。貴女と同じにしないで下さい」

あの…チンコ握りながら、言い争いしないで…。

「…先程は、スカートと言う事で、貴女に譲ったのですから…最後のこちらは頂きます」

「ま…いいですけど？ …あ。私もやります！」

「はっ!？」

「精飲好きな変態さんには、そちらは譲りますから安心してくださあい」

「へんっ!？」

……。

あの…俺の意思は……？

「あ、ちよつとそつちにズレて下さい」

「…まったく」

…どうしよう。

確かに最後の砦を壊したのは俺です。

墮としてやろうとも、思いました。

…二人の事もなんとし、わかりますけど…この二人…：適応力が高すぎる…。

「れあ…ちゅっ……」

「はっ……んっ……舌で…するのは…こう…んっ…ぷっ……」

家元二人にダブルフェラされている、この状況…。

30分程前ならば、どうにでもできるのですけど…今はもう完全に家元のペース。

二人共、俺と攻守が交代しやすいのも気に入っている様ですね…。

「んっ！ ちゅぶぶぶぶっっ!!」

「あっ!! しほりんずるい!!」

しほさんが、啞え込んだら…千代さんが怒った…。

な…なんだ…この変わりよう…。

「たっ…隆史君！ 私はどうしたらっ!？」

……。

……………。

ま…いいや…後で考えよう…。

一度、出さないと終わらないだろ…帰れないだろうなあ。

「じゃ…じゃあ、千代さんは…玉を…」

「どうやって…ああ下から…」

……だから、すげえ素直に言う事聞くなあ…。

みほとまほちゃん…それと愛里寿。

まあその他の方々にもだけど、こんな関係がバレたら…この関係も終わる。

それが分かっているからこそ、さつきみほの名前を出したら、しほさんは、舌打ちをしたんだろうねえ。

「ぢゅっつぽっ!! ぢゅっつぽっ!! ぢゅっつぽっ!!」

「はあ…れあ…れう…」

舌で金玉転がす、千代さん…。

夢中になって、早く出せとばかりに目の色変えて、上目使いで貪るしほさん…。

……。

この歳で…とか言ってたな…。

あ…これ…ひよつとしたら、会う度に求められないか？

貪欲になって貪っている…変えてしまった？ いや…本質的にはこれが…。

……。

しほさんの頭を押さえ、喉奥にまで陰茎を突っ込む。

オゴツと、声が聞こえたが…その声は嬉しそうだった。

「んぐっ！ んぐっ…ぢゅら…ぢゅぶっ…」

波打つ下半身の脈を感じ、しほさんへと流し込む。

出している最中…味わう様に、しほさんの舌が動き回っていた。

……。

いや…自業自得なのだけど…。

変に喜びを帯びた目をして見上げている。

出されたモノをまだ味わう様に…。

陰茎を抜き出した…しほさんのその唇の横から…溢れて流れた液体。

また、ソレを千代さんは…口と舌ですくい取っていた。

見上げてくる二人。

その二人の「堕ちた家元達」を見下ろして…思った。

俺………枯れるんじゃないだろうか？

※ルート壊 ※ 秋山 優花里 ある日常の一コマ

こんにちは！ 秋山 優花里です！

本日は、ここ西住殿のお宅に潜入調査！ を、する事になりました！

…まあ…生徒会長からの依頼ですが…。

普段なら絶対にお引き受けなんて、しないのですが、理由が理由でしたので…法に触れない程度には頑張ろうと思います。

そんな訳で、理由です！

正確にはっ！

西住殿のお宅…

兼、隆史殿のお宅…

兼、五十鈴殿のご自宅…

兼、冷泉殿のご自宅…

どうしろと？

潜入捜査をしろと言われましても…何をどう…報告しろと？

ハンディカメラ渡されまして…小山先輩に…。

すっごい笑顔で頼まれちゃいましたからねえ…小山先輩に…。

いやあ…正直に申しますと…依頼じゃないです。

強制です！ あれは、それ以外の言葉が思い浮かびません！！

…小山先輩…目が…どす黒かったです…それで、口元は半笑  
いって…。

お願いね？♪ って、声はすっごく明るく一言…。

その脅迫にも似た、強制調査依頼は…。

— 健全な生活状態かの調査 —

まあ…そうですね…。

こんな状況、生徒会としては、放っておけませんよねえ…。  
ですからの調査!!

頑なにタラシ殿は、同居と仰られています…違いますよねえ…。  
完全に同棲ですよねえ？

健全!? んなわけ無いです!!

すでももう遅いですよ!!

…。

……。

うう…変に顔が熱いですう…。

普段は、いつもと変わらないのに…本人曰く、変なスイッチが入る  
…だそうです。

「……」

いや…まあ…私も嫌じゃありませんけど…。

その…もう少し…普通に…。

いやまあ!! ええ! 普通の時もありますよ!?

その変なスイッチとやらが、入る前は普通にやさし…。

…やめましょう。

そもそも、誰に言っているのでしょうか? 私は…。

さつさと済ませましょう。

人様のお宅の玄関先で、何を考えているんでしょうかね?

どうせ、真実なんて写せるはずなんてありませんし…適当にインタ  
ビューかなんかして…。

ああ、そうそう。健全過ぎると、タラシ殿の場合、不自然過ぎます  
からね!

…適当に捏造しましょう。

訳を話せば、タラシ殿もわかってくれそうですからね。

…適当に、持っていると思われる、如何わしい本かDVDでも、写  
しておきましょう。

そつち方面……非常に無駄に、迷惑なくらい博識ですからね……。絶対に何かしらは持っていると思います。

……。

で……っ！ ではっ!!

「ごめんくださいーい！」

開きっぱなしの玄関。

……。

「ごめんくださいあーい……」

……あれ？

奥に向かって呼びかけてみました……が、返事がありませんね。

インターホンも何度か押してみましたけど……静寂な廊下が映るだけです。

あ、庭にいるのでしょうか？

……どうしましょう。

好きに上がっても良いと、言われてはいますが……流石に……。

……あ、なにか音がしますね。

玄関入って正面に見える、二階へと続く階段。

その上の方から、トントんと音が聞こえて来ます。

何かしていたのでしょうか？ インターホンと私の声には気づいてくれていたみたいですね。

急いで、駆け下りてくるであろう音が聞こえます。

誰でしょう？

「お？ 優花里？ いらっしやい」

「……」

「……来てそうそう、なんでジト目なんでしょうか？」

「こんにちは…………で、あります」

「……こんにちは」

「2階は女子部屋しかありませんよね？ なんで2階からタラシ殿が、下りてくるのでしょうか？」

「ああ……そういう……」

落胆したかの様に、肩を落とさないでください。

何を呆れてるのでしょいか？　こちらが呆れています。

「…こんな真昼間からは、どうかと思えますけど…私、出直した方がよろしいですか？」

「…声…冷たい…。まったく、何を想像してるか知らんが、華さんに頼まれてたんだよ」

「五十鈴殿？」

「ああ…ちよつとした、修理してたんだよ」

ズボンの後ろのポケットにでも入れていたのでしょい。

そこからトンカチを抜いて、ブラブラと揺らしながら、見せてくれました。

なる程。

修理ですか。このお宅、結構古いですからね。

所々でガタが来ているって、前に嘆いていたのを思い出しました。

隆史殿、手先が器用ですからね。

…ちよつと待ってください？

私は納得しましたが、何で今度はタラシ殿は、私をニヤニヤと見ているのでしょうか？

「やーい、ゆかりんのスケベエ」

っ!?

さっきの発言っ!?!?

「なっ!!　タラシ殿に言われたくありませんよ!!」

「はっはー。ちよつと待っていてくれ。奥間にでも行っていてくれ。なんか持ってくるから」

まったく！　何を楽しそうに笑っているのですか!!

…まったく。

「で…では、お邪魔します」

「あいよ」

靴を脱ぎ、玄関先位上がると、隆史殿は台所の方向へと歩いて行ってしまいました。

…勝手知ったる、他人の我が家。

すでに何度も来て、かなり自由にさせて頂いておりますので…間取

りも殆ど知っています。

それはそれで、どうなのでしょうかねえ…。

言われるがまま、奥間へと進み…何故でしょうか？

大きな座卓の…なんだかんだで、いつもの場所。

指定席みたいな場所へと座ってしまいました。

…人様の家で、指定席があるというのも…。

まあ…武部殿もそうですけど、この家がもう…私達の集合場所みたいになってしまってますね。

それは、喜んでいいのか、悪いのか…複雑です。



「はいよ」

「…あ、ありがとうございます」

暫く座って待っていると、隆史殿がコップに入った麦茶を持ってやって来ました。

座卓へとコトんと、置いてくれます。

…氷が鳴る音。

無意識にその、透明な塊を見つめてしまいました。

「んで？ 今日はどうしたの？ 今、みほ達いないけど」

「…その…ん？ 西住殿達いらっしやらないのですか？」

隆史殿は、自分用のコップを口元で少し傾け、中のお茶を飲みながら向かいに座りました。

もう完全に作業は終わり…の様な感じですかね？

「ああ。午前中、沙織さんも来てな。少し前に、みほ達と一緒に…といっても、麻子は半分引きずられながら、買い物に行ったよ？」

「買い物ですか？」

「えつと…陸のなんだっけ…あのショッピングモール…」

「シーサイドステーションですか？」



「そうそう、それ。なんか、みんなの部屋のレイアウトを変えるからどうのつて、言ってたなあ…」

「言い出しは、武部殿ですかねえ」

「そうです。沙織殿です。…カーテンやなんやら買い行ったみたい。女子力がどうのつて息巻いてた」

「隆史殿は行かなくてよろしかったのですか？」

「荷物持ち役を買って出ただけだな？ …なんか…乙女の秘密とか言われた。男子禁制とかなんとも」

「言いそうですねえ」

あ、武部殿からの先ほど来たお誘いメールって、その事だったんですねえ。

この事があつたので、お断りしたんですけど…なる程。

「所でなんで、カメラ持ってたの？ また潜入調査にでも行くのか？」

「…」

まあ…露骨に持っていますからね。

気になりますよねえ…普通。

ここは正直に、言っておいた方が良さそうですね！

その方が、私も気が楽です。

「掻い摘んで、説明しますと…」

「はい」



「え？ 撮るの？ この家。ああ…学校からそのまま来たのか…それで制服…」

「まあ…流石に隅々までとか…とは、言われませんでしたけどね」

「そうだなあ…お客さんとかが、見る所くらいなら構わんけど…」

「ええ。流石にプライバシーもありますし…。隆史殿が怒らない範囲で…との事です」

「……それって、丸投げされてないか？」

「そうなんですよ!!」

……酷いですよねえ……ええ。

「まあ……あの柚子先輩の状態で言われちゃ……仕方ないか……」

「そうなんですよお!! 隆史殿の気持ち少し分かりました!! 分かりたくもなかったですけど!!」

「……」

はいっ!! それに言ってしまうえば、タラシ殿の巻き添えです!!

「……分かった。適当に合わせるよ……。現状の部屋割りと……流石に2階は無理だけど、俺の部屋くらいなら撮っていい」

「えっ!?!」

……ちよつとびっくりしました。

確かに階で隔てた状態を撮っておけば、ある程度大丈夫だとは思いますが……。

「それなら、納得するだろ……ま。特に何も無い部屋だしな。構わないよ」

……この事で、やって来ています隆史殿の部屋。

……。

『そんな訳で只今……隆史殿のお部屋訪問です!! ……毎度思いますけど……本当に、何も無い部屋ですよね……』

最低限、必要な家具位しかありません。

ナレーションをしながら、カメラを回し……グルッと一周……ん？

「まあ、ほとんどは、押し入れの中に突っ込んであるだけだな」

『隆史殿、なんでパソコンが2台もあるんですか?』

座卓の上と勉強机の上に置いてありますね。

「……ネット接続しない用と、ネットに接続専用」

『なんでまた……安くないでしょうに……』

「あ、びくとりいゆかりんは、接続しない用に……」壊していいですか

？』

「やめて!!」

まったく!! まったく!!!

下手にウイルス貰って、流出しない為とか…

『そこまでして、保存しておきたのですか!! 消せばいいでしょうに!!』

「 ヤ ダ 」

「……」

まったく…今の場面は、消しておかないと…。

こんな会話、会長達に聞かれてはまずいです。

本当に…もう。

……。

……………。

『 隆史殿? 』

「なんだね? ゆかりん」

『 今…なんで、そのダンボールを足でどかしたんですか? 』

「いいえ? 気のせいでございますのことよ?」

『 その口調…ワザと言つてませんか? 』

ワザとらしい、エセ聖グロ風口調…怪しい。

よく見る…というか、私もよく使う通販サイトの、ニヤケた口だけのマークが入った、ダンボール。

開封はされていますね…。

そもそもカメラで撮っているのですから、確認すれば即分かりそうなモノですのに。

…。

『 ま…タラシ殿も、男の子ですからね… 』

「……なんで、みんなして一様に…」

『 そっちの方面では、タラシ殿は鬼畜の所業を繰り返しているからじゃないですか? 』

…言っていてなんですが、私自身、それを受けたのもですから、顔が熱いです。

「……赤面するのなら、言わなきゃ良いのに……」

『っ!! ほっ!! ほらッ!!! やっぱり変なのじゃないですかあ!!!』

「あ、誤魔化した。」

『ちっ! 違います!! 大体、皆さんいらっしやるのに、そんなの購入している時点で……』

「……優花里。勘弁してください。貴女、今…カメラの前で、スゲエ事を言ってますよ?」

ひつつつうつつ!!!

「ま、後で編集すれば良いとは思うけど……」

『じゃあぁー!!! それ、中身見せてくださいよ!!!』

「…はい?」

『ある程度、如何わしい物なら、逆にリアリティがあつて! 会長達も納得すると思うんです!!』

「ああ…なる程。性欲を持って余しているなら、エロい物なんて購入しない」と

『そうです!! …って、やっぱりエッチなのじゃないですか!!』

「結局…優花里とも…その…結構いたしましたしね…」

『マイクが音声拾ってるんですよ!!??? なんて、それを口にするんですか!!!』

「いやあ…なんか、自分自身を追い詰めて、ただ墓穴を掘っているゆかりんが、可愛くて可愛くて…」

『怒りますよ!!?!!』

絶対にこんな動画、見せられないじゃないですか!!

後で編集するの分かってて、言ってますよね!?

「」

……。

なんでしよう……今、一瞬……久しぶりに悪い顔した様な……。

「まっ……いいや。んじやどうぞ」

あれ……やけにあっさりど、そのダンボール箱を渡してきましたね……。

すでに開封されたダンボール箱……。

中でなんか、ガラガラいつてますけど……。

ガムテープ部分が、カッターで切ったのでしょうか？ 綺麗に開封されています。

……変な所マメですよね……この方。

「……」

一つため息をついた後、壁に寄りかかって、腕を組みました。

俺はもう、何もしないからお好きにどうぞ……って。

なんか素直に提供してくる時点で、すごい怖いんですけど……。

『……いいんですか？』

「まあ……疑うなら、見て確認してくださいさる？ ワタクシ、ココカラ、ウ

ゴキマセンカラ」

……。

胡散臭い……。

その一言につきます。

ええ、このタラシ殿は、胡散臭い……。

逆にここまでされると、今更中を確認しない訳にも行きませんしね……。

『はい……では、早速タラシ殿のある意味での秘密を……』

「ちなみに、中身はオモチャです」

『玩具？』

ナレーションを開始しようとする、遮って先に言われてしまいました。

まあ、すぐに確認が取れますし、良いんですけど……カメラを回しながら、ダンボールの蓋を開く……と。

…女の子の絵。

『あ…コレ、プラモデルですか？』

「はい、そうです玩具です」

『フレームパンツァー・ガール…？ あ、戦車パーツを体に取り付けた…女の子…のプラモデル!?』

「そうです！ FPGの新作です!!」

『これ…母体がセンチユリオン…!? 装甲が体に…』  
「……」

『隆史殿…プラモデル…戦車をこんな風にするなんて……英語とドイツ語の混合とかは置いておいて…』

「…はい、少なくとも女の子のプラモです…いやあ…引くかなあつて思っています……」

『 最高ですね!! 』

「優花里さん!?!」

いいですね！ これはいいです!!!

こんな物があるなんて!!

砲身は…背中についているんですね!! 履帯は…。

「…思いの他、食い付きが良くてビツクリですよ、ゆかりん」

『 いいですね！ 邪道とか言われそうですが、これはこれで… 』

「まあ、そういった訳です。優花里は兎も角、みほ辺りにこれを見られたら……」  
『 下は!? 他にもあるんですか!? 』

プラモデルの箱。

どう見ても、ダンボールの深さにはまだ余裕があります。

他にも種類があるのででしょうか!?

「あつ!! ちよつと待て!!」

『……………』

「……………」

『隆史殿…なんですか？ これは』

「……………」

『なんの…なんかのパーツですか？』

「!？」

ピンク色の…丸い卵型の…なんでしょう？

ただの卵型のプラスチック。

指で摘んで、見せると…隆史殿？ なんか、とてつもなくバツが悪  
い顔をしておいでですが…。

「…優花里さん。それをどこ存知でない？」

『知りませんよ。なんですか？ これ』

プラモデルの箱の下。

紙と何かの、別の箱が乱雑した上にあつた物。

なんででしょう？

「……………」

『隆史殿？』

「それはね？ マッサージ器具デス」

『マッサージ器具？』

「ソウデスヨ？ タメシテミマスカ？」

『え？ ……ええ、別に構いませんが…!？」』

壁に持たれ掛かつていた隆史殿が、その背中を壁から離しました。  
見間違いないやありません！ すっごい悪い顔してます!!  
ゆっくりとこちらに近づいてきましたね…なんでしょう!?! すっ  
ごい嫌な予感しかしません!!

あ…他に!! 他に何かあるのでしょうか!?!

ちよつと、ダンボールの中身をもう少し探つて、ちよつと場を誤魔化しましょう!!!

そうします!! ええ、そうします!!

だつて! …あの目のタラシ殿は…ロクな事をしなつ…!?

『!?!』

肩に手を…置かれました。

あの…なんで、抱きつくように…胸を背中に合わせるのでしょうか…。

あの…座っているのです、うまく身動きがとれないのですけど…。

あの…まあ? これはこれで…ちよつと嬉しい……つて、違います

!

「えつとなあ…」

隆史殿が、そのまま腕を伸ばし、ダンボールの中へと腕を入れました。

何かを探している様子ですけど…。

「ああ、あつたあつた」

取り出したるは、何か…薄い板状の…リモコンの様な物を取り出しました。

なんでしよう…ものすごく…嫌な予感が強まりましたけど!?

「あ、カメラはちよつと、邪魔だからこつちに貸して?」

『え…』

カメラを奪われてしまいました!?

普通に持つて…あれ?

座卓の上に…しかもなんで、こちらに向けて置いたんですか!?

っ!?

ズツと、足を持たれ、隆史殿の上に乗せられて…身体事、少し後ろに引つ張らつれました。

隆史殿の両腕が、両足の下…少し開かれる…つていうか、開かれてる!?

「っ!?! 隆史殿!?! えっ!?! ちよつと待つてください」

「え? 嫌ですけど?」



「なあっ!? すっ! スカートなんですよ!!」

「そうですね」

「カメラがッ!」

有無を言わさしないで、両腕を更に深くいれ、体全体を捲るように…。  
いやっ! 本当になんですか!?

隆史殿の膝が、内側から入ってきました。

足をカメラの前で開かせる状態で、固定するように…:…:というか、まさか!!

「ちよつと待つてください!! これ、恥ずかしいです!! 流石に!!」

「あくうん。カメラで撮ってるからねえ」

「なにをいって…:…:あ…:それってまさか…:」

隆史殿が、先程のリモコンのボタンを押し…:。

それに連動されて、先ほどの卵型のプラスチック塊が…:音をたて始めました。

細かく振動している様です。

ブブブツと、ものすごく不安感を煽る音を…:。

座卓の上で、連動してガタガタといった音も繰り返しています…:。

「んっ!!」

手が…:内腿を…:さすり出しました…:。

「ひゃああ!」

即座にそのまま、担ぎ上げる様に、完全に恥ずかしい所をカメラに見せ付ける様に…:。

太股の上に腕を移動させて…:完全に固定され…:自由になった手…:更に…:。

「…:ふむ。あいかわらず…:」

「相変わらず、なんですかあ…:」

さすられる手に、体が即座に反応してしまいます。

スリスリと、肌が擦れる音…:。

親指で、股の内側を刺激され…:くすぐったいやら、なにやら…:。

「いや…:優花里が使つていいと、お許しをくれましたので」

「んっっ!!」

耳っ!! 首筋から耳にかけて…舌が…這う…。

それと同時に、その…恥ずかしい…所を…両サイドから指で揉まれて…。

「ほらほら、ナレーション」

「嫌ですよ!! 恥ずかしいだけじゃないですかあ!! ああっつ!!」

そうでした…この方、ワザと恥ずかしがる事を進んでするんです。

「あ…しまった。後ろからM字開脚じゃ…俺が見れない…」

「はあ!」

「まつ…しょうがない」

「しょうがなくなっつ!? 何処触ってるんですかあ!! 摩らないで…んっつ!!」

指っ!! 指がっ!!

恥ずかしい所の出入り口を、上下に摩り出しました。

というか、いつ隆史殿のスイッチとやらが入ったんですか!?

んっ!

その…上は…弱っ…。

「いやあ…流石にローター持って、こちら向かれた時には、どうかと思いましたけど…」

「ろー…? はっ!」

「純な優花里が持つと、破壊力抜群でしたね」

「っつ!」

「しかし…相変わらず、濡れやすい…」

「はっ! 恥ずかしい事、言わないでくだつツ!!」

耳元で、囁く様に…舌ああ…。

強制的に開脚されている状態で、凄く好き勝手…弄らないで…く  
だ…。

「ホラホラ、優花里。ナレーション」

◇

いやあ…どうしたもんかと、最初は思いましたけどね…。

2階の事もあったし…急な事で、大人の玩具とやらを、開封しておいたのが、幸か不幸か…。

優花里の脚を少し持ち上げ、座卓の上に脚を乗せさせる。

体は、俺の上に乗せる様に持つていき、内側から膝で、閉じれないように再度ロックする。

はい、これで完全に閉じれません。

カメラがこちらを向いているので、即座に顔を赤一色に染め上げてしまった優花里。

これで、弄りやすいね！

秘部を上から下に掛けて擦る。

シユツシユツとした布面を擦る音が、段々としなくなっていく。

ふむ…水分を段々と、下着が吸っている為だろう。

…いや、本当にこの娘は、感度が良い。

「ふっ…んっ！…ふっ…ふっ…ふっ…」

初めは、恥ずかしいを連呼して叫んでいた彼女は、気がついた時には大人しくなっていた。

下唇を噛みながら、顎を引き、声を一生懸命に殺している。

「下着…今日は、薄いピンクなのですね」

「ふっ!!?」

指を、秘部の上から隠している、その布の下にすべり込ませる。

ヌルツとした感触。

「早いなあ…まだそんなに、弄っていないのですけど…」

「だかつ…ら…恥ず…」

「いやあ…こういう事、優花里もそんなに嫌いじゃないでしょう?」

「つつ!?!」

「外でするのが好きだもんな」

「なああ!??!」

まあ…はい。

一番。野外が好きなのが優花里さんです。

優花里は否定するだろうけど、濡れ方とか感じ方とかが、半端じゃないのですよ。イク回数も一番多い。

…学校帰りとか…こう…結構…言葉で攻められるのは、そんなに…かな?

「やつ!! はっ…弄りながら…言わなあ…あっつ!!」

ああ。段々と気分が乗ってきたのか、素直に体を俺に預けている。さして…そろそろだな。

というか、ガタガタと座卓とぶつかり合っているローターが、ただ単純にうるさい。

腕を伸ばし、ローターを指で掴む。

そしてえ…

「な…なんですか…それっ…そういう」

流石にもう分かったのだろう。

そういった目的の器具だと。

はい、そんな訳で…。

「ふあっ?!? んんんっ!!」

そのまま下着の中に…膣口付近に、その卵型をねじ込む。

位置を調整し…。

「やつ! んっあ! これっ! しんっん、どうがあ…」

やあ。初めての感覚だろうなあ。

こういった事の知識は皆無だろうしなあ…沙織さんの雑誌に載ってなかったのかなあ?

入口を探る様にローターを摘んだ指を動かす。

ま、ワザとですけど。

ニチャニチャとした音を聞きたいのだけど、いかんせんローターの振動音がうるさい。

それしか聞こえない。

振動の強さを、弱に設定したまま…膣口をローターで弄る。

声を殺している、くぐもった優香里の吐息が、凄く峻る。  
……。

凄く喋らせなくなる…。

だが、まだ我慢だ。

優香里の場合、言葉で攻めるよりも、白状させる方が良いと思う。  
多分：余り知識が無い為だろう。強い言葉や辱める言葉は、まだ早  
いだろう。

…うん。

正直、俺もスイッチが入りっぱなしだったからなあ。

一度、振動を止める。

止めた直後、声と共に、殺していたであろう息が漏れ出す。

大きな熱い呼吸を繰り返している。

しかし、この位置だと：やはり優香里の表情や、何もかもが見え辛  
くて残念だな。

「はあ…はあ…：な…：なんなんですかあ…：これえ…：振動があ  
…。」

髪が動き：目の前にあつた、彼女の頭髮が彼女の顔になる。

涙目になりながら、上を向き：俺の顔を見上げてきた。

「俗に言う…：大人の玩具…：という奴だな」

「つつはあ…：はあ…：大人の…：つて、やっぱり、えつちな奴じゃない  
ですかああ…。」

恨みがましい、泣きそうな声が心地良い！

だからまだ、終わらせません。

ニチツ！ とした粘着性を持った音がした。

ローターの端、取り出す様の紐の位置をちゃんと確認しながら、掴  
んでいたソレを…：そのまま中へ…：押し込む。

すでに秘部は愛液で溢れていた為に、ニユルツと割と簡単に滑り  
入ってくれた。

「んっっ!! えっ!!? はい!?!」

なにが起こったか分からないのだろうか。

判断をさせない為に、振動のスイッチを即座に入れる。

弱を飛ばして、今度は中に。

「ふつつう!!」

優香里の体に入った。

俺を見上げていた目が、一瞬見開き、前かがみになろうと体をくねらす。

…。

足引き、優花里の体を自由にさせると、更に体をくねらせた。

取り出す事もしないで、体を横にし…俺の胸にしな垂れかかる様に体重を預けてきた。

肩がビクンツと、何度か跳ね上がらせ…赤い顔で、また俺の顔を見上げるてくる。

「あつ…はつ…はつ…はつ…」

何かに我慢する様に、小さな吐息を何度も吐く。

その顔を見下ろしながら、リモコンを操作。

「あ…あつああ…んああああ!!」

振動を最大にする。

それに連動して声も強くなる。

俺の服を掴み、顔を埋め…その振動に身をくねらせている。掴んだ手の、小刻みに震える振動を胸で感じる。

そのまま下着の上から、クリトリス部分を軽くつまむ…と。

「つつ!! あつ!! つ!!」

ガクガクと体を震わせた。

脚を伸ばし、片足で踏ん張り…腰を上げて、ガクガクと…。

…スイツチを切った。

「つつあ…やあう…あ…」

凄く短時間で果てさせてしまった…。

目は虚ろ…よくわからない感覚に、どこか混乱したご様子でした。



「はあ……は……あ……」

「さて、優花里」

「はあ……はあ……はあ……」

聞いてください。

少しすると、快感が去ったのか、力なく俺上に横たわっている。体を押し上げ、どいてくれと指示を出すと……ゆっくりと横に座り込んだ。

お姉さん座り……とでも言うのか……アレがまだ中に入った状態ですのね。

「な……なんなんですかあ……これえ……」

「いやあ……優花里さん、可愛かったです」

「それを今言われても……嬉しくないです……」

涙目で睨まれました。

「ダンボール、まだ入ってるから、見てみ」

「……また、如何わしいモノですね」

「……み……見てみな？」

「……」

「……」

如何わしいモノと、確定事項の様に言われた。

まあそうですけど……

「……その前に、これ出して下さい」

「ヤダ」

「……はあ……」

何を言っても無駄だと諦めているのか、仕方がないと体を倒した。

そのまま……四つん這いになりながらも、座卓へ体を向け……

座卓に手を着き……ダンボールへと、手をまた入れてくれた。

顔は……すげえ不審者を見る目で、こちらを向いています。

「……何か……あ……太い……棒状の物が……なんです？」

あ、見つけた。

顔をこちらに向けている為に、それに気がつかないのだろう。

取り出してみれば…流石に彼女でも分かるだろう。

」

あ、はい。

顔を真っ赤にさせて、取り出した物を見えますね。

「なっ…なっあああ!?!」

男性器を模したモノですね？ はい。

優花里さん。しっかりと握り締めて…まあ、卑猥。

あ。

「つつ!?!」

当たったのか…根元にある、スイッチが入った。

よって…。

」

ういんういんと、音を出しながら根元から横に、360度の円を描く動きを繰り返し始めた。

過去これ以上無いくらいに、真っ赤になるゆかりん。

あ、カメラに収めておかないと…。

「何カメラを構えてるんですかあ!?!」

「え?」

「何言ってるの? って顔しないで下さい!」

「……」

すいっち…ON

「今度は、何を黙っくん!?!」

はい、強さは…中です。

「やっ…ちよっ…止めて…くだあ…」

いやあ…うん。

いやあ…いいなあ。

あ、バイブはうるさいからスイッチを切りました。

両手を前に着き、下を向いてしまいましたね。

優香里の下からは、小さくバイブ音が聞こえてくる。

声を出すのが恥ずかしいのか、また声を殺し出して…ビクビクと肩を震わせている。



…ローター便利…。

優香里のスイツチを入れるの…すごい楽になった…。

実際に優花里が、あんこうチームの中で一番、奥手…というか、こ  
ういった情事に疎い。

純朴…では、流石にもうないが…：まあ…外でやつちやつたり…俺  
が全部教えてたんですけど…：ね。

まあ!! 一番、恥ずかしがり屋でもある彼女。

…エロい状態へと持っていくのは結構難しかったのだけど…なる  
程これは…。

はい。では…。

カメラを再度構え、撮ってますよとアピール。

そして…。

「はい、じゃあ優花里。そろそろ仕事しよか?」

「んっ…：はうあ…：んっ…：し…：仕事…?」

「なれーしょん」

「」

やあ、絶句してますね。

笑顔で言ったのですけど…：なんで、諦めた顔しているのでしょうか  
?」

カメラを近づけ…：うまく上から、優花里全体がカメラに入る様に。

あ、喋りやすいように、弱にしとこうかね。

「今、どんな状態でしょうか?」

『…：…』

「ああ…：そうだ。サンダーズん時みたいに、実況してみようか?」

『…：…』

あ…：睨まれた。

「まあまあ、プレイの一環だと思ってください」

『プレイとっ…：かあ…：言わないでください!』

…：こういう潜もった声とか、すっごい好きです。

『に…：西住殿も…：大変ですね…：こんな事、させられて…：るんっつ  
!!』

「いや？ していないよ？ …あ、水着もそうだけど…写真とかもまだ撮ってないな。PCの中、優香里の写真だけだ」

『……………』  
家元達は、別枠です。

あんこうチームでの話ですけどね？

『はあ……………んっ！ ん……………相変わらずの……………変態です……………ね』  
「自覚しています!!」

あ…すげえ目で見上げられてる…。

それでもカメラで撮ることは、やめません。

暫く構えて、喋りだすのを待っている。

『な……なんで、こんな方…好きになっちゃったんでしよう…』

「そう言って頂けて光栄ですが、そう言って頂ける方ですので、本音で話しますよ?」

『……………』

嬉しい眩きに、素直に答えて見ました。

なんとも言えない顔で返されましたけど…。

小さい快感に震えている、優花里を見ていたので、特に時間は感じなかった。

最終的には…仕方ないですね。の、一言が開始の合図となった。

『い……今……私は……んっ!』

小さく、眩く様に声を出し始めた

『すごい変態な方に、すごい変態的な行為を強要され、そんな変態さんに、とても困ってます。どうしたらいいでしょうか? 西住殿』

「……………」

すごく……流畅です…。

…ああ、そうか。

少し俺も……急ぎ過ぎたか…。

優花里も波に乗れば…。

『……………』

ズボンのジッパーを下ろす。

MAX状態となっている息子様を取り出すと、優花里の前に投げ出してみる。

『う……………う……………なんでいきなり、そんな事になってるんですかあ!?!』

『いや……………今までの優花里見て、こんなにならない方が、嘘だろ』

『……………』  
お行儀的にはよろしくないが、座卓の上に腰を下ろし、優花里がしやすい様に座る。

一度カメラを座卓の上に置き、ローターのスイッチを切ると、そのまま優花里を招き寄せる。

まあそんな距離も離れていないしすぐに股元へに。

…何をして欲しいのかも、優花里さんはもうご存知です。

『……………この状態で……………ですか……………?』

『……………』

『む……………う……………』

俺の前に、正座をする様に座り……………陰茎を手にとった。

相変わらず、分かってはいるけど、躊躇しているなあ。

無言で優花里の頭に手を添え、口元を誘導させると……………近づくに連れて、ゆっくりと口を開けてくれた。

『ふあ……………んっ』

ちゅぷつと、音がでる。

口全体が大きく広がり、締め出されたかの様に、舌が口から出てくる。

亀頭周りを周回するように動かし始めた。

『……………』

はい、優花里の口が小さくて……………全部入りません。

代わりの方法……………亀頭周りを攻める方法を、只今教育中。

ま……………今回は頼っておくか。

『ヂュブツブ……………ブブツブ……………ッはっ……………んっ』

音を上げさせる事も教えた。

元来、真面目な彼女。

教えた事も素直に従い…こんな事でも、真面目にしてくれる。  
そんな彼女に…。

「…はい、今何してますか？」

『……………』

また、変な事を教え始めてるなあ…俺。

ここで、ローターのスイッチを弱で入れる。

潜もった声が、また響きだした。

俺のモノを舐めようと、大きく口を開けていた為に、うまく声は殺せなかったようだけどね。

恨めしそうに見てくるが、行為自体を開始していたので、すでに何処かで彼女の中でも切り替えが済んでいたようだ。

舌を引っ込めて…たどたどしく…答えてくれた。

『 た…隆史殿……な……舐めてますけどお…んっ！』  
……………。

「いや…俺にじゃなくて…実況して下さい」

答えてくれた彼女を、一瞬押し倒したくなる衝動に駆られる…が、我慢…我慢…………。

ローターの刺激に耐えながらも、またこちらを涙目で見つめてくる。

振動を一度強に入れる。

…即座に体が跳ねる。

…。

少しの間眺めて見る。

これでは喋れないと思い、一段階下げると、少し体の動きが落ちつた。

『 いっ…今、私は…んっ……んんうう……っあ、はあ……………』

あ、振動が中でも、やはり喋れないのか…。

しばらくは弱にしておこうかね。

「ちゃんと、正確に状況をお伝えしてください。何をやられている状態で、何をしていますか？」

『 今…私は……あ……んっちゅ……あは……』

あ、完全に言う事、聞いてくれるようになった。  
舐めながらだが、俺の言葉に素直に従い出した。

ローターの刺激を暫く与え続けると、強引に彼女のエロ・スイッチの切り替えができる様だ。

…そうそう。

やはり優花里の場合、ここまでの状態するのが、通常時だと大変…。  
何気に一番、エロいスイッチの切り替えが固い子…。  
ただ、一度入ると途轍もなく従順になる…。

『隆史…殿に、変な…もちゃを…あの…入れられて…』  
いかん。

この優花里…：たまらなくエロい。

俺が指示出すまでもなく、カメラ目線で舐めている。しゃぶっている。吸っている。

ゆっくりと喋るのまた…。

『舌で…前に…教えられた様に…そのっ…んうう…筋の間を…なぞる様に…してますうう!!』

ブイイと、音が響く。

再度、振動を強に。そしてすぐに止める。

余り振動での刺激を与え続けると、慣れてしまう為だった。

慣れさせませんね。はい。

『あっ…：はあ…はあ…：ここで、私…ちよつと練習した事を…  
試して…見たいと思います…』

…はい？

練習？

そこまで言うと、思いつきだろう。

大きく口を開けた。

『ブツ…んんあ…』

開けた口で、頭を前に沈めていく。

強引に龟头を飲み込んだ。

ゆっくりとだけ、前後に動き出す優花里。  
無理すんなって前に言ったんだけどなあ…。

ただ、全体的に優花里の口に包まれている為に、非常に気持ちは良い。

動く毎に、空気の漏れる音が、リズムカルに響く。

『ぶっあつ！ うう…ちよつと顎が疲れました…どうでしたか？』

上目使いで、俺の顔を見上げてきた。

少しの間だったが、頑張ってくれたようだ…。

頭を撫でて、応えてやると…また、変に照れくさそうに笑った。

…いやあ…うん。

こんな子に俺、何やってんだろ…。

相変わらず、会心の一撃で俺の良心を攻撃してくるなあ…。

さて…。

『 たっ!?! 隆史殿?! 隆史殿が…なにやら私の上に…? あれ?…』

そうそう実況を継続してください。

『 ……なんで、お尻を掴んだのでしょ……なんでえうう!! んっあ…』

はい、ローターを抜きました。

次に移行する為ですね。

目の前には、優花里の秘部がある。

下着を履かせたままで、ここまでしたから……なんかもう……染みが…。

漏らしたかの様に型どっていた。

『 し…下着を脱がされました…。余り…この状況は…んっ！ 舌が…あ……』

…。

『 恥ずかっんっ!! あは…ん…えつと…隆史殿がまた、悪い顔して…ます…これ…を、舐めろと? え?…』

はい、先ほどのバイブを使用したいと思います。

その先を口元に当てると、実況でわかるように……察してくれました。

大丈夫です。洗っておきました。

半円の丸い突起部分が、多数ついている筈。

その周りを口に入れるのでは無く、舌で濡らすように…して舐め始めましたね。

『…味は…しませんね。んちゅ…こんな…卑猥な物を購入する、タラシ殿の正気を疑いますね…らあ…』

たまあーに、攻撃してくるなあ…。

ダンボールに手を突っ込む。

はい、もう一つ購入してあった、コンドーム。

袋を取り出して…息子に取り付けます。

サイズ的に…探すのが難しいのですよ…コンビニじゃ売ってないし…。

『んっ！…んっ！…んっ！…』

玩具だからいくらした所で、出るわけではないが…イカせようとする様な動きでしゃぶる優花里。

ああ…無理しないフェラ顔のゆかりんだあ…撮っておこう、うん。

『んゅっ!? タラシ殿が、私の膝を掴んで…強引に開かせましたあ…やっとです…』

やっと!?

ま…まあ、いいや。

実況の通り、仰向けにさせ膝を掴み開かせる。

正常位の体位。

バイブは、もう…ゆかりん手に握って、しゃぶってますね。

挿入までしようかと思っただけど、俺の方が我慢できなかった。

先ほどのまでの事もあつ…ね。

『あつ…はっ…。隆史殿のが…私の恥ずかしい所…を…んっ…強引に、こじ開ける…様においあつ!!』

『あ…っ…っあ…っあ…いあ…』

そしてもう、ここからは、うまく実況ができなかったですね。

『熱いつ!! のっがあ!! うごっ…おおき…あつ!!』

もう、途切れ、途切れで、何言ってるのか分からなかった。

グツチユグツチユと、強引に広げ開けて、優花里を味わう。

最近、言葉攻めつてのに慣れてきたけど…今は集中したいからやめておいた。

カメラも、もう座卓の上に置き、全力で動く。

ただ、レンズはこちらを向けさせたまま。

喘ぎ声が響く…。

こんな真昼間から…あ。

『 たっ！ 隆史殿があ！！ 私の中でえ！！ 』

……。

『 気持ちいところ！ つくっ！！ 擦れてますうっ！！ 』

……あの…

『 後ろっから！！ 好きっ！ 好きですっ！ えぐられる感じがア！！ 』

ぐちやぐちやああって！ 音立てて！！ 』

……優花里さん？

『 見られてますっ！！ こんなっあっ！ はっ！！ かつ顔っっ！！ 』

えっちなあっ！！ 顔っ！！ 』

……えつと。

『 またっ！ とんじやいそっ！！ ですっ！！ すきい…すきうあ！！ 』

』

……。

『 あっ…は…あ…熱い……のが……来ましたあ… 』

「……」



『 あああ…あああっっ！！ 』

「……」

『 んっつっつて事、させたんですかああ！！ 』

「いや…知りませんよ…最後のは、優花里さんがノリノリになったの



であって、私のせいではゴザイマセン」

『うあああああああ!!』

「…いやあ…なる程。玩具も使いようだなあ…」

真っ赤になって、バタバタしてますね。

貴女、今下着脱いでるの、忘れてませんか？

使用済みゴムまで…その口に入れてましたものね。

いやあ…すげえ量出た…。

冷静になった優花里さん。

恥ずかしかつたのだらうね。完全に別人みたいにエロくなつてたし…。

思い出したのか、頭をぐるぐると回し始めた。

いやあ…いいなあ。

「実況…というか、もう。凄かったですね」

『やめてください!!』

「…好き好きの連呼は…ちよつと嬉しかったです」

『ひうあああああ!!』

「…カメラまだ動いてましてよ?」

『止めてください!!』というか、消してください!!』

はいはい…と、カメラの中のSDカードを取り出す。

はいはい。

「ちよつと、待つてくださいい? 何やってるんですか!?!」

どかしてあったPC。

基本電源つけっぱなしの為、スリープ状態からパスワードを入力して復帰させる。

素早く…正確に…。

はい、内蔵ソケットにカードを入れて…。

「ごっ…腰がつ…うまく動けないっ! 押さえないでください!!」

はい、コピー完了

「ああ…あああ!!」

「大丈夫。ネットに繋がってない方だから!!!」

「全然、大丈夫じゃないですよお!!」

「大丈夫。俺しか見ないから」

「だから、大丈夫じゃないですっ!!」

「…あんな…あんなああ…そもそも!!」  
なに？

とばかりに、振り向いて対応すると…。

「なんで、こんな玩具、買ったん…でえ…」

玩具握って真っ赤になってるゆかりん。

いやあ…あ、カメラもう止めてるんだけっけ。

ああそうだ、映像消さなきゃ。

SDカードの中身を全消去。

流石にこんな物、会長達になんて見せれねえしね。

作業をしながら、優花里の質問に丁寧に答える。

…うん。丁寧に。

「…用途が、用途だったからさあ…その為に開封していたのを、優花里が見つけちゃったって事だよ」

「…えあ？」

カメラへと、SDカードを挿し直し、PC画面で時間を確認する。

ああ…優花里が来て、2時間位か…んじや、そろそろまずいかなあ…。

「まだ未使用だったからね。今回の事で、その二つは優花里専用になったね!」

「専用って、なんですか!!」

赤くなった優花里が、パタパタ腕を振っている。

はい。

ゆかりんのスイッチの入れ方が、判明した日でした。

結局、潜入調査とやらは中止。

会長達には、普通に遊びに来てくれていいと携帯で話しておいた。

まあ彼女達もこんな事が、うまくいくはずないと思っただらしく  
…あつさりとそれを了承。

というか、盗撮紛いの事なのでキツチリお灸を今度据えてやろう

…。

…何故か柚子先輩の声が嬉しそうだっただけなのが気になるが…。  
まあ…ちよつと流石に放置させすぎたかな？

優花里には少し待っていてくれと伝え、今は2階へと階段を登る。  
…。

優花里は、気がついていなかったな…。

皆が出かけた…と、言った時に…唯一、華さんの名前だけは出さな  
かった事に。

だからまあ…嘘はついていない。

下から騒がしい声が聞こえて来た。

危ない危ない…もう少し早く帰ってきたら不味かったな。

ドアノブを掴む。

できるだけ、音がしない様に静かにドアを開ける。

部屋の中を進む。

彼女のベットの前まで。

肉体的に、いぢめるのつて、俺の趣味じゃないのになあ…。

ただ、普通に可哀想になるだけだし

「まあ今回は…お試して事で、ご希望に従ってみましたけど…」

そのベットの上。

黒い細い髪の毛が広がっている。

暴れた…訳では、ないのだろうが…。

痛く無い程度に、足首と手首を縛り…目隠しをし…。

口には丸いギャクボールで塞さぎ…。

「あ…あ…意識が朦朧として…やはりこれは俺の趣味じゃないです  
よ、華さん」

「…ハ…ハ…ハ…」

…小さな呼吸が聞こえる。

股間に刺さる二本の棒。

一番初めに調整、調教してみたのが彼女。

その後穴。

…というか、希望されたのですけどね。

すっごい良い笑顔で、手を挙げられました…。

しかし…裸でこの状況…。

脱水症状とか起こしそうに感じるから、ちよつと遠慮したんだけどなあ…。

放置プレイとやらもそうだけど…これはちよつと、流石に…。

体をくの時に曲げている、華さんの頬つぺたを軽くなでる。

目隠しを外し…口の物も取ってやる。

「…んっあ!!」

音を立てている、二本のバイブを同時に、一気に抜き出す…と、物凄甘い声を発した…。

はい、スイッチを切りましようね。

ああ…何度果てたか分からなが…ベットの上が、体液で凄い事に…。

こりや今日寝れないだろ…。

拘束も解いてあげると、ゆつくりと…力なく体を投げ出した。

胸で息を繰り返し、大きな胸が横の溢れる…。

……。

いかん。今はいかん。

「あ…は…たか…しきん…コレ…すごいです…」

体をお越してあげると、こちらを見た。

目の奥には、悦びの色…。

「みほ達、帰ってきましたから…優花里も来てますよ?」

「あ…う…」

あー…何度も絶頂を繰り返したのだろう。完全に惚けている。

頭を撫でてあげると、全身を震わせた。

もの欲しそうな顔…あー…もう。

「はい、じゃあ取り敢えず、今晩は部屋に来てください。みほにも言っ  
ときますから…これじゃ寝れないでしょう?」

「あ…あ……はい……」

また、嬉しそうに返事をするし…。

さて…コレ、洗わないとなあ。

…。

今さっきのセリフが、完全に通常化してしまっている異常事態。

ま…今更、戻れないし…最近では皆、考える事をやめてしまっ  
たよ  
うだった。

…。

「こんな事、もうしませんよ? 心臓に悪い…っていうか、良心が痛  
む」

今更ですけどね。

「……いえ…でも、でも……凄かったです……よお?」

もはや、寝ぼけているみたいになっている。

…はあ。

「じゃあ、それは夜、聞きかせてもらうから……華」  
「つつう!!」

……呼び捨てにすると、結構すんなり言う事聞いてくれるんだよな  
…。

なんか嫌だけど…。

すつごい目の悦び色が、強まったんだけど!?

まあ…こんな状況だ。

誤魔化す事は、必要ないだろうけど、みほが最近…ちよつと拗ねる  
様になったから…まあ内緒にしておこう。

玩具は、取り敢えずここに置いておこう。

余りここにいと、また何か言われそうだし…華さんも動かない…  
だろうなあ…。

では…行動だ。

だからちやんと言っておく。

「今は取り敢えず、着替えて下に来てくださいねっ！」

通販で、もう少し…色んな種類、買っておくか。

※ルート 壊※ く女子会です！く その いちい

無線機が壊れた。

その報告を受けたのは、決勝戦が終わってすぐの事だった。

決勝戦の時は、応急処置で補修し、なんとか乗り切ったと、何故か泳ぐ目で言われた。

応急処置…。

ガムテープで固定されているだけの無線機のスイッチを眺めて、ため息しか出なかった。

雑…。

その一言に尽きる…。

一度ONへ入れてしまえば、後は咽喉マイクやら何やらで話す為に、この雑な固定方法でも、特に困ることはない。

…：…ないけどさあ…：これはないだろうよ…。

余程強く切り替えをしなければ、壊れないぞ？ …：これ。

そのぶつ壊れた無線機を直す為に、誰もいない戦車倉庫…：そこへ鎮座しているIV号戦車の中に現在おります。

元々、テント前に置いておく無線も調子が悪い為に、取り敢えずと、今は家へと持ち帰ってある。

学校とそんなに距離は離れていない為に、またここへと運び入れるのも面倒だった為…：家の無線機はスイッチを入れっぱなしにしておいた。

一番奥の大広間。

家で一番大きなテレビがある部屋でもある。

そのテレビもつけっぱなし。

要はちゃんと直れば、テレビの音が聞こえるって寸法よ!!

電気のムダ使いだなあ…。

なんかあんこうチームで、買い出しにまた…：…また！ 出かけた為に、手伝ってくれそうな人がおりませぬ。

仕方なし…：一人で作業中…。

まあ、無線のソケットがまたイカレタ程度だと思っから、すぐには



直るだろう。

今日は登校日でもないし、戦車道の練習もない。

後日開かれる、エキシビジョンマッチに間に合わせる為の修理。

…開催2日前に言うなよ…みほ。

はしゃいでいたのと、姉来襲の為に、気持ちは分からないでもないが…。

あつ！ 忘れてた！ …じゃねえよ。

…そんなわけで、誰もいない学校で、一人寂しく作業中でごんす。

そんな俺の事情も知らない、約2名様から、お誘いの電話も断り…  
黙々と作業中でごんす。

2回も言わせるなよ…。

お誘いの電話。

『 尾形あー！ ナンパ行こうぜ！ ナンパ！！ 』

…勝手に行け。

即座に通話を切った。

俺を修羅の道に引き込むな。

趣味じゃないし、バレればそれこそ。修羅場という化物が、大きく口を開けて、俺が来るのを待つ羽目になるだろうが。

「ふう…」

こういった負の感情で考え事をしていると、何故か作業が捗りますな。

…終わった。

まあ中に入っている部品を取り替える作業っただけだから、30分も掛からなかったけどな。

やっぱり、切り替えるスイッチ部分…その中の部品が、折れていただけだった。

…。

本当にここ、そんなに壊れる所じゃないのだけど…どんな力で切り替えたんだよ…。

さて…試運転。

カチツと、軽い音を出して、スイッチがオンに切り替わる。

すぐ横の小さな赤いランプが点灯した。

ザツと、小さな外部スピーカーから、音が漏れる。

よしよし。直ったな。奥から、テレビから流れてくる、良くわからないCMの音が聞こえてきた。

はあ…。

しかし、ハッチを全開にしてあるけど…真夏だ。

クソあつつい…。

さて…さつさと片付けて帰ろ。

作業時間より、準備、移動時間の方が長いつてどうなんだ？

「…ふむ。見つけたぞ」

突然、後ろ…それも上から、声が出た。

呟くように声を掛けてくれたから、驚く事はしなかったけど…。

「貴女一応、部外者ですよ？」

「こんな所にいたか。探したぞ？」

はい、現在我が家へ居候中の、彼女の姉君がいらつしやいました。

エキシビジョンマッチをするまでと、短い夏休みを、こんな辺鄙な所でお過ごしですね。

「まほちゃん…不法侵入ですよ？」

「固いことを言うな…。学校も連休中だろう？ しかも、その学校の生徒会役員が、目の前にいるのだ」

ま…まあ、黒森峰隊長様からすれば、ウチの学校の事なんて機密扱いにもならないけど…。

大洗には、秘密兵器すらないし…別に見られて困る事なんて今はない。

大会も終わってるしね。

「その生徒会役員殿。校内を徘徊する許可を頂きたい」

「…はいはい。好きにどうぞ」

「ふふ…そら、もう大丈夫だろう？」

「はっ…」

…いや…うん。

ちよつとやり取りが、楽しかった。

まほちゃんが、こういった冗談を言うなんてな。

大体、ドヤ顔で…もう…：…致命傷を与えかねない冗談しか言わなかったのに…。

…うん。ちよつと特殊な環境だから…余計にそう思う…。

「…どれ」

さすが…。

ハッチの外から見下ろしていた彼女は、慣れた動きで車内へと入ってきた。

カンカンと、少し靴で、鉄を鳴らす音がした。

「…外からも見たが…思いの他、しっかりと整備されいるな。車内もまた…」

「ああ、ウチのメカニックは、優秀ですから」

「ふむ」

……。

……………。

車内をくまなく見ている彼女。

それを眺めていると…和んでいると実感する。

「そういえば、まほちゃんも、みほ達と買い物へ行ったんじゃないの？」

「ああ、初めはな。だが、友人同士…友人がで…楽しそうなみほに、

私の様な無骨者が、間に入り水を差すのも悪いと思っつてな」

「そんな事はないと思うけど…」

「今なら隆史を独占できそうだと、適当に嘘を付いて巻いてきた」

「……………」

「冗談だ」

…ほら…ドヤ顔まほちゃんは、口クナ事を言わないよ…。

「ぬ…あまり、面白くはなかったか…」

「…冷や汗しかでません」

変な笑いが起こる。

…このクソ暑い車内でも、もう少しこういったやり取りを続けたい  
と思えた。

突然、ザツ…と、雑音が入り、無線機が音を拾い始めた。  
というか…。

『 あ、隆史殿。テレビつけっぱなしですね 』

優花里の声が、聞こえた…。

みほ達が家に帰ってきた。

優花里の次に、華さんやら沙織さんやらの声も、次々と流れて来る。  
会話と、何か買物袋だろうか？ ガサガサとした音。

「…隆史」

「盗聴じゃないですよ？ 無線機の修理をしていたからだよ!？」

あらゆる疑いを掛けられる前に、今までの経緯を説明した。

早口で!!

無線の向こうからは、雑談と人が動く音…。

何か飲食の用意でもしているのか、コップ…だろうか？

コツンと机が鳴る音も聞こえる。

ふっ…そうそう。早口だけど、少々時間が掛かる…。

そんな中でも、無線からの音を聞いて、状況判断ができるなんてな  
…。

…慣れたなあ……こういった事に……。

「それで、テレビをつけっぱなしと、あのみほの友人は言ったのか。ふ  
む…」

…良かった。

余計な事も何もなく、素直に信じてくれた!

暑かった車内だったのに…一瞬、涼しく感じたから…良かった…本  
当に…。

「…」

こんな状況に…慣れていく自分が嫌だ…。  
やはり、一息つくのか…無線機が、みほ達の他愛のない会話を拾い始めた。

そんな会話を、少し微笑ましい顔で聞いていたまほちゃん。

みほが、友人をつくり…家に招く。

黒森峰では、なかった事なのかね？

「しかし、このままでは、結局は同じ事になるだろう。隆史、電源を切れ」

はい…仰つしやる通りですね。

楽しそうな、みほの声を、もう少し聞いていたいのか…少し名残惜しい…そんな、目ですね。

ま、このまま家に帰り、まほちゃんも、この輪の中に混ざるのも良いだろう。

もう数日は、家に泊まりそうだしな。

さて…電源を切…『先程の続きですけど…優花里さん？』

華さん？ まあいいや、さつさと切『昨日の彼との、野営…でしたか？ 如何でした？』

「」

……。

『五十鈴殿…目が、怖いです…』

あ、まほちゃんが、俺の肩を握った…。

うつわあ…振り向きたくねえ…。

あ…まほちゃんが、俺の手首を掴んだ…。

いやあ…まほちゃん、握力…結構あるんすね…。

「ふむ…。今の声…あの少し癖つ毛の友人か？」

「…そうだけど」

「あの様な娘にも、彼氏とやらがいるのか…」

ん…ん？

そ…そうか！ 華さんは、「彼」と言ったからか！

俺だと言つてない!

優花里に彼氏がいるとでも思ったのか、そしてそこから、何かシヨックでも受けたのか…。

若干、落胆しているまほちゃんがいた…。

◇

『しかし…五十鈴殿…彼つて、なんでそんな言い方したんです?』

『いえ…なんと言いますか。はつきりとお名前を言ってしまうと…その…』

『うくん。私としても、華さんの気持ちは分かるかな』

『まあ、みぽりんからすれば、複雑だよね。…私も、その件に関して  
は、みぽりんに頭上がないけど…』

『……はは…』

『というか、五十鈴さんは、なんでそんな話を…』

『気になるじゃないですか!! ……気になるじゃないですか!!!!』

『…華、なんで二回、言ったの』

『いいじゃないですか! 正直に申し上げますと、皆さんとの事が、  
非常に聞きたいです!!』

『言える訳ないでしょお!!』

『言えるはずないじゃないですかあ!!』

『…この所、華さんがちよつと怖い…』

『確かに少し、そういった話が出たが…まあ…恥ずかしいな』

『五十鈴殿!! 皆、顔真つ赤になつてるでしょ!?!? そもそも、五十鈴  
殿だつて、言えないでしょう!?!?』

『……』

◇

あ…こら、まずい…。

俺が聞いてもキツツイが、何より…。

「年下…：ぜ…全員、彼氏持ち…：…」

何か会話の内容で、勘違いしてるけど!!

まほちゃんが、思いの他、ショックを受けてる!!

…。

なんでこっち見たあ!!

そういう事、昔は一切、気にしてなかったじゃないか!!!

あ…：なんか、打ちひしがれてる…。

…：というか…。

開き直って、考えるのをやめていたけど…：まほちゃんが、隣にいるから、嫌でも考えさせられる。

この状態に、素直に流されている、俺も俺だけ…：みほ達…：談笑で  
きるほど、このぶっ壊れた関係に慣れちゃってるのか…。

まあ…：俺も悪い方向に腹を括ってしまったから、今更だし…。何よ  
り、俺にはすでに、選択権は無いけど…。

みほの、乾いた笑い声が、胸に刺さる。

◇

『そうっ！　そうですよ!!　五十鈴殿だつて、言えないのですから  
…：そういう事は、ちゃんと、自分から…：そ…：そしたら、私も言います  
!!』

『はい、分かりましたあ』

《…え》

『はい、では言い出しの私から、報告致しますので…。体験談…：優花  
里さんもお願ひしますねえ?』

『なっ!?!』

『今…：自分から仰言いましたよねえ?　私が言ったら言うど…』

『はあい。では、皆さんもお願いしますねえ???』

《!!!???》

∨

ゆかりん…。

学習してください…。

俺が言うのも何ですけど…、水着撮影の時も、うつかりんな事を言うから、びくとりい優花里が爆誕した訳で…。

それに華さんも強い…。

対象を、あつさり…優花里から、全員に移行させた…。

報告とか言い出した!! 体験談とか言い出しあぁ!!!

「あの…古風な黒髪の友人か…? た…体験…。」

まほちゃん!? ちよつと目が輝きでした!?

今は、しんみりしてる場合じゃない!!

切ろう!! マジで!!

華さんが、話すであろう…つていうか、どれ話すんだ!?

…。  
そんなのまほちゃんに聞かれ…剩え、その相手が俺だとバレたら

「……………」

マジで…死ぬかもしれん…。

戦車で、引かれる? 轢かれる!?

冗談にならない…。

それ以前に…絶対に泣かせそう…。

よし!

「…ふむ。どうした? 隆史」



……。

……………。

スイッチを…カチカチと…連続して音を出させる。

上下…上下!!!

確かにさつきまで、上手く言ってたはずだよな!?

「…電源が…切れない…」

「なに?」

なんで!?

赤い点灯ランプが、なにをしても煌々と光ってる!!

…そ…そうだ!!

エンジンを切れば…って、端からつけてない。

……。

そうだよね…。

何かあった時…それこそ、戦車がダメになった時に、無線が使えなかったら意味がないからね…。

くつそ!! 無線機だけ、内部バッテリーだ!!

「…ふう…。隆史にとって、彼女達は、近しい女子の友人だ」

まほちゃん!?

なに優しい目で、俺を見てるの!?

「そんな女子の、これから話し出すであろう、そ…その…：…体験談とやら…だ」

「何言ってるの!?!」

「隆史も年頃の男の子だ。気になるのは分かる…：分かるが…：盗聴は犯罪だぞ?」

「だから、何言ってるんだよ!!」

年上目線の…：言い聞かせる様に、お姉さん風を吹かせてきた!?

顔、真っ赤にさせて、本当に何口走ってんだよ!!

だから、まほちゃんはドヤ顔やめて!!

「ふむ…本当に切れないな…」

まほちゃんも一緒に、電源の切り替えを何度かしてみるが、ウンともスンとも言わない。

完全に…壊れた？

……。

…一瞬、カルパッチョさんの笑顔が、脳内に浮かんだ…。

はあ…。

「車内から出よう…」

「…そうだな」

なんで一瞬、残念そうな顔をしたのだろう。

電源入りっぱなしだし、こんな音声垂れ流しはまずいから、車外に出る電話でもして終わらせ…。

……。

「まほちゃん…」

「なんだ？」

「ハッチ閉めた？」

「いや？」

……。

ハッチ閉まつてる!? 開かねえ!!

全力で押し上げるが、ビクともしない!!

嘘だろ…渾身の力を込めたのに…。

あ…。

……。

だから、なんでカルパッチョさんの笑顔がっ!!??

ザツ…と、後ろから音が聞こえた。

『ええと…まずは……そうですね。彼に相談をした事が始まりでした』

思わず振り向き…、また音声を拾った無線機を見てしまう。

やべえ…本格的に!!

相談…って、あの事か!!??

華さん!! その内容は、ちよつと!!

『語りだしちゃったYO!!』

『…沙織…もう諦めろ。あの五十鈴さんは、止まらん…何度か、あの目は見た』

『……』

『まあまあ。…ん？ 相談？ …ですか？』

『はい、そうです』

『ロクな相談じゃなさそう…』

『沙織さん…』

『話始めちゃった!!』

『むっ…こうなれば、致し方あるまい』

『なんで、座ってるの!? 何、脚組んで聞く気満々なの!?』

『無線が故障。戦車からも出られない。ならばもう、諦める他あるまい?』

『諦めるの早いなあ!!』

『…いいか、隆史。これは盗聴では無い。事故の様なモノだ…。後学

の為……正直、興味もあるしな」

「最後、なんて言った!?!」

「それにな? ……いいか? 隆史」

また……ドヤ顔……。

「これも戦車道だ」

「言うと思った!! 絶対に違う!!!」

く

『まずは……私、都市伝説と言うモノに出会いまして……』

『都市伝説?』

『!? 待て、待ってくれ!! 怖い話か!? 怖い話なのか!?!』

『違いますよ?』

『じゃあ何なのですか?』

『初め……私、理解が及ばなくて……分からなかったのですが……一度、戦車の練習の後、所用がありましたので、少し夜遅く帰宅した事がございましたでしょうか?』

『え……ああ。そういうええがありましたね。21時頃……でしたか? 帰ってきたのって』

『そう、その日です。所用を済ませ……暗い夜道……電灯の明かりのみの路地を一人、急いでいたのですが……。その電灯の下……』

『ほっ……ほら!! お化けの類いじゃないか!! 怖い話じゃないか!!』

『麻子……落ち着いて。華もワザと、そんな言い方し……』真夏だとい  
うのに、コートを着た男性が立っていました』

《……》

『あ……あの……華さん? それって……その人って……もしかして……』

『はい……アレですね。結果から申し上げますと、痴漢さん  
でした』

『 なっ…えっ!? 大変じゃないですか!! 』  
『 なに!? 華、そんなのに会ったの!? 』  
『 ええ…その時は、本当に実在するのだと、思ったものです…。コー  
トを徐に開いたと思ったら、やはり裸でしたし 』  
『 な…なにを…え? 』

◇

「……」  
ま…まほちゃん?

「……いるものだな…そういった輩は何処にでも…」  
うっわ…確かに、アレだけど…それよりも、今はまほちゃんの侮蔑  
の表情が、それを上回る程の迫力が…。

というか、すでにもう普通に聴いてるし…。  
逃げれないし…。

最悪、この無線機…ぶん殴ってぶっ壊すか?

◇

『 でも私、聞いていた痴漢さんと、種類が違ったものですから…彼に  
少々、相談…と言いますか、質問を… 』

『 いやいや! 何、普通に話を続けてるの!!?? 大丈夫だったの華!!??  
』

『 そうですよ!! 』

『 え? 痴漢さんですか? 』

『 ……そもそも痴漢さんって呼び方がちよつと… 』

『 あく…まあ、そうですね。ニヤニヤした顔で、裸体でしたし…男性  
器を大きくされていましたが… 』

『 そんな状況を、淡々と話す、五十鈴殿が怖いです… 』

『今思えば、失礼かと思いますが…その…即座に「彼」と、比べてしま…』

《……………》

『無意識ですけど、思いつきり…鼻で笑ってしまいました…』

《……………》

『その時、何故か小さくされ…あつ！でも、流石に身の危険を感じまして！ 咄嗟に、普段持ち歩いている、花切りハサミを取り出しました』

《……………》

『そうしたら、即座に逃げて行きましたね』

『…そら、逃げるでしょうよ』

『それを彼に話しましたら、逆上してくる可能性があるから、下手に抵抗の意思を示さず、即座に逃げろと…本気で、怒られちゃいました!!!』

『…なんで五十鈴殿、怒られたって件で、嬉しそうなんでしょう?』

『でも、そんなのがいたら…怖いね』

『一人で帰らない方がいいですね』

◇

「ふむ。なかなか…」

「……………」

うん…あゝ…痴漢。…多分、再起不能だろうけど、流石にねえ。  
その件は、杏会長に報告しておいたから、大丈夫だろう。  
特に、柚子先輩がマジギレしそうな勢いで、対応するって言った  
しね。

桃チャンも憤慨してたしねえ…杏会長は…なんか、不気味な薄ら笑  
い浮かべてたな…うん。

「まほちゃんも、んな輩とあったら、何もしないで即、逃げろよ？ ま  
ほちゃんの脚なら楽勝だろう？」

「そうだな…そうしよう」

ランニングが日課って言っていたしね。

比較的、真面目な声で言ったら…何故か、少し笑ったな。

▽

『でっ！ ですね？ …彼に聞いたんです』

『あ、話が戻った』

『痴漢って、電車の中だけじゃないのですねえって』

『…華…：極端すぎる…。まあ、気持ちは分かるけど』

『私達、電車通学じゃありませんからね。痴漢って言ったら、まず  
真っ先に思い浮かぶのそっちですよ？ …怖いなあ』

『どこかで、私達にとって、ある意味で関係ないと思っていたかも知  
れない…』

『そうなんです！ ですから私も、都市伝説だと…』

『それは都市伝説とは、言わない』

『そうなんですか？』

『そうだよ！』

『確かにすごい経験ですけど…：五十鈴殿、それで誤魔化そうとし  
てませんか？』

『失礼な！ ここからです！ それからです？ 彼に相談しまし

て…教えてもらおうと思ったのです』

『何をです?』

『その私の思っていた、電車とかの痴漢と…今回、私が遭遇した痴漢さんと…』

『いや…そんなの、教えてもらう程の事な…』

『実際に!』

《……………》

∨

「凄いことを言う、友人だな…」

はい、よしぶつ壊そう、この無線機。

……。

「まほちゃん?」

「なんだ?」

「なんで、無線機を庇うように、前にいんの?」

「ん? 気のせいだろう?」

「じゃあ、そこどいて。それぶつ壊すから」

「なんでも暴力で解決するのは、良くないぞ? 自然にバッテリーの

電気が切れるのを待つのが、一番良いと思うのだが?」

「……さつき盗聴は、犯罪だと言ってたよな?」

「言ったな。しかし、これは事故だ」

「何を、意固地になつてんだよ!」

「気のせいだと言っている!!」

「くっそっ!! なんでっ!? つっ!」

強引に退かそうと、まほちゃんの肩に手を置いた瞬間…狭い車内だと言うのに、一瞬で組み伏せられた…。



「いかんぞ、隆史…女性の体に、強引に触ろうとするは…それを痴漢と  
言う。それに私は対応しただけだ。うん」

「苦しい言い訳を…こんな技、いつの間に…」

「一通りの護身は、みほと共に、尾形師範から教えて貰っているぞ？」

あのババア!!!

関節を決められているから、動けねえ!!

∨

『この間…私、一度顔を出せと言われ…また彼と共に、実家へと…  
ええ嫌でした…本当に嫌でたまりませんでした。仕方なしに行つて  
きましたよね?』

『あ…うん。行つたね…本気で嫌そうな顔で、出かけて行つたね  
』

『その時、電車を利用しましたので、帰りに頼んでみました♪』  
『華、なにやってんの!!』

∨

くっそ!! 動かねえええ!!!

無線から感じる、み…みほ達の無言の時間が…痛い…。

しようがないだろう!?

拗ねるんだもの!! 最近、華さん、頬を膨らませて、拗ねるんだも  
の!!!

…というか、欲求不満なのだろうか? 華さんが、5人の中で一番

…。

…。

こわっ…壊さないと…この無線機…ぶっ壊さないと…っ!!

∨

『初めは…拒否されてしまいました…バレたら洒落にならないって…仰言いました…』

『そりやそうだ…傍から見れば、普通に痴漢にしている男にしか見えんだろ…』

『誰かが声を上げたら…終わりますよね…社会的に』

『まあ、結局は説得しましたけど』

《……………》

『何か、イベントが終わった後だったらしく…人がすごく多くて…丁度よろしい状況でした！』

『丁度いい状況って…え…？ 本当に？』

『電車の扉側に、私達はいたのですけどね？ 本当に人で鮫詰め状態でしたので、彼と抱き合う様な状況でした』

『華さんの目の色が…変わった…』

『思い出してるな…』

『今なら、大丈夫ですよ？ って、耳打ちしましたら…彼のその気になつてくれた様でして…はい。』

はい。耳に軽く息をかけてみましたよ？ 沙織さん？ なんで睨んでるんですか？ シリマセンネ。

さして…。

向かい合わせに、扉に押し付けられる様な形になっていましたが…私だけ、扉側に体を回されまして…彼に背を向ける格好になりました。

周りの人達から押されたのでしよう。彼の体が、私の背中に密着してきました。

周りの方々は、気分が高揚しているのか…車内だと言うのに、騒がしく…普段ならこう…不快な気分になるのですが、その時は好都合でした。

騒がしい中、彼は私の太ももを摩る様に、何度か触った後…スカートの中に手を滑り込ませ…こう…お尻と脚の付け根部分をゆつくりと揉み始めました。』

『…躊躇無しだな!! その彼とやらはあ!!』

『耳元で、囁いたのが効果有りって感じでしたね!!』

『無理して、元気ださないで下さい…何やってんだろ…その彼は…』

『みぼりん…でも、結局皆聞いちゃってるしね…その内、順番回ってくるよ?』

『そうですよ? 私も恥ずかしいのですから! ……逃がしませんよ?』

『華さん!?!』

『では、続きですが…彼も段々と、気分が乗ってきたのでしようか…。』

両手で、お尻の上の下着の下に…親指を滑り込ませて来ました。

この時、すでに後ろから抱きつく形になっていました…当然、周りからは見えませんね。

彼もその状況は分かっていましたし…徐々に行動が大胆になっていきました。

両手はすでに、スカートの中へと入っているのですから、スカートが、お尻付近まで捲くりあげられてしまっていました。

その状態で、更には私の下着を、上へと…押し上げる様に…こう…ゆつくりと大きく手を動かし、ずううつと揉まれてしまいました。

気が付けば、下着は細くされ…こう…下着がお尻とお尻の間に収め

させられました。

結構…きつく感じまして…大事な部分が締め付けられると言いますか…。

…そこまで、すると…ああそうです。

この日私は、ワイシャツみたく、前をボタンでとめる服装でしたので…その胸の部分のボタンを後ろから、外されました。

そのまま、左右に開かれ…胸だけを露出させられました。もちろんブラジャーをしていましたが…それも下から上へと外され…胸まで露出…』

『…私は…胸の上で下着が止まらない…』

『麻子…。残念そうに言うけど、顔、真つ赤』

『うるさいな！ とうか、五十鈴さんの話が、生々しい！』

『……』

『……』

◇

「」

「……あの娘の、彼氏とやらは…こう…なんというか…電車？ え？」

「まっ…まほちゃん！ 流石に華さんに悪いから!! マジでっ!!」

「……」

動かない!?

顔、真つ赤にさせるほどなら、聞くのやめればいいのに!!

後、いつ俺の名前を出されるかって思うと、気が気でない!!!

◇

『彼は嬲りました。人差し指と親指で、暫く…私の胸で遊んでいました。』

胸はドアのガラス部分に押し付けられて…これって、外から見たら…私大変な事になっていませんか？ と…そこで気づきました。

ですが、すでに私も火が入ってしまったて…それが…逆にまた…。

流石に声なんて、とてもじゃないですが、出せません。

…ですが彼は、今度は私の大事な部分を弄り始めました。

いきなりではなく…締めつけられ、浮き彫りになっているであろう、部分を…こう…：ゆっくり…。

突起物に引つかかると、そこを執拗に…。

音を出さない様につけたのでしょうか？ ただの彼の性格なのでしょうか？

ゆっくりと、彼の太い指が私の中に入ってきました…。

もう…こうなったら、私…：声を殺すのに精一杯でした。

いくら彼の体で、完全に影になっている私ですが…：声を出してしまつたら…。

…そう思ったら、また…別の感情が…。

私の中を掻き回される…そんな行為を、周りに多数の人がいるなか…されている。

ビクビクと、体が…小刻みに反応してしまふ。

電車が走る音と、周りの雑音でかき消されると思いますが…ダメです…。

がんばりました！ 我慢しました！！

だって…です…？

我慢すると、彼が動かす指の感触と感覚…それを集中して感じてしまいますし…本当に我慢しました。

私の弱い所…と、いうのでしょうか？

…集中して責めてくる…とか…：はあ…。

失礼しました。

暫くすると…目の前に彼の手が…ありました。

見せつけてくれたのでしよう。

びつしよりに体液がついたその手を…。

お…思わず、彼の指に口を付けてしまつて…でも、そこで思いました。

今度は…私が…と…ですが、ここ迄でした。

車内に、電車が大洗駅に到着するという、アナウンスが流れました。本当に口惜し…いえ、残念でした。

あら、両方同じ意味？ 知らないです！

…正直、私…この時、立っているだけでやつとでした。

弄られて、弄ばれて…何度脚が、ガクガクと震えたか…』

『な…生々しいよ!! 華つ!! 赤裸々すぎ!!』

『え…でも、女性のお友達だけでの会話ですしい…』

『は…華が「えく」とか、言った…』

『でも、ここで思いました…というか、気がつきました』

『…ロクでもなさそうだけど…なに?』

『あ、これって痴漢じゃない…と』

『それはそうです! それは、ただの…その…』

『いいよ、みぽりん。はつきり言つて…。それは、ただのプレイだよ』

!!!

《…》

『武部殿…まあ…はい。気持ちわかりますが、ハッキリと言い過ぎです』

『沙織。顔がすごい色をしているぞ?』

『…』

『沙織さん?』

『…そういえば…私、たかつ……んんつ! 彼に…まだ気を使われてるのかな? …あまり無茶されない』

《…》

『…そ…それは、良い事…なんじゃ?』

『彼…みぽりんに対しては、結構すごそうだよね…』

『ふえ!?』

『沙織さああん』

『華!?』

『それは追々、聞かせてもらいますからねえ?』

『なんでそんなに、必死なの!?』

『楽しいんです!! 本気で皆さんの事、気になりますし、聞けるかと思うと……もうっつ!!』

《……》

『…所で、華。今までののは、彼との事だけ……それが、普通に電車とかで……見知らぬ人にされたらどうなの?』

『虫唾が走りますね』

『そ…即答。そりやそうだろうけど…』

『知らぬ方なら、初手で………ふふっ!』

《……》

『…冗談ですよお?』

《……》

『…まあ…電車が到着した後……。私、初めて　らぶほてる　なる施設に、入りましたア』

『あ…携帯の電源が、切られてる』

『どうしよう?　まだ彼、学校にいるかな?』

『私、ちよつと一走りしましょうか?』

『……』

『いえ…完全に中途半端でしたし…みほさんのお姉様もいらっしやいますし……その…』

『はあ…まあ。こういうった話題も出てくるのも、仕方ありませんよね…』

『初めて、こういった事でお話しますけど…彼は…他の方に対して

…つて、五十鈴殿が気になるのが分かった気がします』

『…異常な…関係に慣れていく…』

『しかし、…ああ言った施設って…良いですね！ 思いつきり…その…遠慮しなくて良いというのは…電車での反動が凄かったです！』

『……』

『…麻子？』

『なななんでもなない』

《……》

『後で聞きましょう！』

『そうですね!!』

『!?!』

∨

…。

…。

か…会話の内容が…。

「…隆史」

「……なに…なに？」

∨

『はああい!! では、私のお話は終わりましたア…』

『はっ!!!』

『はああい、次は優花里さんの…番ですねええ…』

『え……あの…』

『タノシミデス』

《……》

『やっぱり、ダメだね…こりや諦めよう…あの、華は無理だ』  
『沙織さん…』



『 …正直、みほりん ……正式彼女の事が、気になる 』  
『 沙織さん!! 』  
『 とうか…彼って、呼び方縛り…もういいでしょ？ なんか…気にならなくなってきた 』  
『 五十鈴さん、赤裸々に語りすぎだ…更に麻痺した… 』  
『 そ…そうですか？ 』  
『 もういい？ みほりん 』  
『 わ…私は、構いませんが… 』

◇

「いいか？ 「その彼」 ……私はな。実は知っている」  
……。  
……は？

「 隆史の家に泊まった時…私はみほの部屋に泊まっただろ？ 」  
「 」

ま…まさか。

「その夜、聞いた。みほから、告白された。」

俺の上で、俺に関節技を決めている…彼女。  
まほちゃんの腕に、更に力が入った…。

「 現在の状況……お前の関係…。はっ……全て聞かせて貰っている 」  
「 」

…え…あの…。

「 そんな状況で、隆史は…あの娘達は…。生活の中……皆が、お互いに…ごく普通に接しているのが……気持ちが悪かった 」  
「 …… 」

ま…そりやそうだ。

必死になつて、無線機をぶつ壊そうと思つていたのに…な。  
こうなつていたら、今更慌てない。

…どうしようかつて…迷いは生まれるけど…。

とか…思う暇がなくなつた。

俺を見下ろす…まほちゃん。

後は、一方的だった…。

「その告白を聞いて、確信した。みほは、オカシクナツテイル。分かるだろう？」

「みほの告白…。それは、みほが私へと、釘を刺しただけだ。私の隆史君つて…な」

「だが、すでに私も引くつもりはない。ここで、このまま彼女達の会話……お前の事を聞こう。盗聴だろうが、なんだろうが知った事ではない」

「…私はお前の、全てを受け入れる。…趣味趣向が、これで分かるだろう？ 理解しよう」

何を思ったか…もう数日、彼女は家に泊まっている。

壊れた関係を知つたまま…。

目に光が既がない

「う…受け入れるって…」

「ふむ…言い訳はしないのか…。それでいい。まず…私はお前を即、受け入れる準備がある」

…。

「赤星から教えてもらった。えぬていあーる？ とでも言うのだから…。」

……………は？

「既に私は、男性経験は済ませてある。いつでも来い。遠慮をするな」

「」

話の流れ的に、察し…攻撃に移った…ノ、ダロウカ？

いや…そんな事は…いええあ？

……

え…うつわ…マジで？

まほちゃんの口から…とんでもない…セリフが…連発…。

「もう、私もみほに、遠慮はしない」

……。

…ゴメン…麻子。

麻子に処女ではない、発言より…まほちゃんに言われた事の方が…  
ショックがでかい。

はつきり男性経験って…言った…。

えつと……。

上手く考えが、まとまらない…いや…俺にもう、そんな事を思う、権  
利すらないと思うけど……。

うつわ…吐きそう…。

「…何をショックを受けている。隆史も知っているだろう？ 思い  
出したとか言っていないかったか？」

思い出したって…言って…いや…あれは、衣装を決める…。  
ん…？

俺も知っている…。

「ならば、ここです…切り札だ」

「……」

「私を女にしたのはな？ …お前だ。隆史」

……。

……………。

は？

「中学の最後の夏祭り…その夜だ。そうか…思い出した事は…全てではないのだな…」

…っ…ついていけない…え？

どういう事!?

「…ならば、私の口からは言いたくない。後日で良い…しっかりと思  
い出せ」

…おも…い…

「ふむ…そろそろ、二人目が話し出すな。…では一緒に聞こうか？  
お前の変態性を…」

あ…あの…みほに…え？

まほ…ちゃん？

光の無い目で、赤みが刺した顔で……頗る楽しそうに…。

「さて… タノシミダナア？」

※ルート 壊※ く女子会です！く その にい

「

聞いていた…告白を受けた…。

どこまで!?! どこまで話したんだろう!?!?

同じく告白を…それこそ、本当に同じだろう。

衝撃の告白とやらを…まほちゃんから、受けました。

「…初めからな、彼女達が呼ぶ、「彼」とやらの正体は薄々分かっていた。ただ、本当に彼氏という存在がいるかも知れないと、どこかで期待はしていたのだがな」

期待…。

違うという期待…。

「そら、始まるぞ」

すでに俺の拘束は、解かれている。

どこか…というか、何故か嬉しそうに、それこそ皆の報告とやらの続きを聞きたい様な声…。

流星にもう…逃げる気も、無線機をぶっ壊す気も失せた…。  
はあ…。

く

『では、優花里さん！ お問い合わせ……しますねえ？』

『い…五十鈴殿…』

『昨日の、野宮とやら…。言い換えれば、隆史さんとお泊りですし…何も無いはず、ありませんよねえ？』

『そ…そんな事……ないですよお？ 何も…』

『秋山さん。相手が書記だぞ？』

『

『なんだろう…この、隆史君の変な信頼感…』

『みぽりん、それは信頼感とは呼ばない』

◇

「…ふむ。確かに、信頼されているな? 隆史」

「ま…まほちゃん…アレは、沙織さんも言ったけど…信頼とは言わ」

は?」

な…なんでもないっす…。

腕を組み…何故か、というか!

地べたに胡座して座っている…その俺の足の間に座ってるので  
しよう?

「なんだ、隆史。何かクレームか? それとも、私は重いか?」

「滅相もございません!!」

「ならばよし」

良かないだろ!!

そもそも、聞きたいものですか!? こんな話!!

全てを知っていると、言っていたまほちゃん。

その現在進行形の…皆との情事とやらを…一緒に聞かされるって  
…。

なんだろう…素直にぶん殴ってくれた方が、まだ…。

◇

『わっ…分かりました!! 分かりましたよお…その代わりに、私以外  
の方もお願いしますよお…』

『すでに流れが決まってしまったな。そろそろ私も、腹を括るか』

『麻子…やつぱり…』

『仕方ないだろ!? …ま…まあ、私の事は、皆の意見も聞いてみたい  
し…私は、ちゃんと話す…』

『いいですねえ! いいですねえ!!! 沙織さんも、みほさんも、もう  
宜しいですよね?!』

『分かったわよ!! というか、近いよ華!!』

『わ…分かりました! …私も諦めます…』

∨

諦めるなよ！ 止めてよ、みぽりんっ!!

隊長でしよう!?

…ど…どれ話す気だ？

……どれ……。

俺の場合、スイツチの切り替わりで、その場の雰囲気でも暴走しがちだから、バリエーションが…。

「ふむ…我が妹も、しっかりと話すか…これはもう、最後まで聞かないとなあ…？」

胸の前にいるまほちゃんも、すげえ良い黒い笑顔で、顔を上げ俺を見上げた。

目が…まともに見れねえ…。

∨

『で…では!!』

『わ〜い♪』

『華…。いや…もう、何も言うまい…』

『そもそも、今回は野営というよりか…下見の様なモノでした』

『下見?』

『はい、会長から言われました…夏休みもエキシビジョンで終わってしまいますので、最後に戦車道履修者の皆さんで、キャンプでもつて、お考えの様です』

『ああ、ナルホド。その下見…』

『ですから、今回は野営というよりか、普通にキャンプ場で、キャンプしてきました。会長達も最後に遊んで、思い出作りをしたいみたいです』

『ああ…それで、隆史君。結構、朝早くに出かけて行ったのか…』  
『でも、良く会長が隆史さんと、泊りがけで行かせる事、許可しまし

たねえ…あの方も…その…』

『…』

『み…みぼりん、目だけ笑ってないよ？』

『いえいえ。気のせいですよ？』

『会長は、隆史殿が同行するなんて、知らないと思いますよ？』

『…え』

『邪魔されたくありませんから』

《…》

『やっぱり、秋山さんも気づいていたか…』

『結構、分かりやすいものね』

『邪魔とかハッキリと言う辺り…優花里さんも、結構変わりましたよね？』

『…私としては、なんて言っていないか分からないよお…』

◇

『…モテるな、隆史』

『…』

もはや…黙って聞いている他、俺には選択肢が…ない。

◇

『…』

『ゆかりん？ どうしたの？ 急に真顔になって』

『…西住殿』

『私？ なんですか？』

『朝…隆史殿は、家に私を迎えに来てくれました。お店が開く前でしたので、早朝というのも有り…携帯で到着の連絡を受けました』



『そうですか…って、それが何か…』

『それは良いのですが…既に支度を済ませてあった私が、すぐに家の前にでると…』

『?』

『店の前で、掃除をしていた私の母と、締りのない顔したタラシ殿が…』

《…》

『…タラシ殿の出禁…継続して宜しいでしょうか?』

『お願いします』

『異議はない』

『ありませんねえ…』

『永久で、いいんじゃない?』

『…』

〈

「タカシ」

「締りの無い顔なんてしてないから!! 気のせい!! あれは、彼女の気のせいだから!!」

「…なる程…彼女がみほが言っていた、同士か…」  
「何の事!？」

〈

『…はあ…。で…ですね。下見自体はすぐに終わりました。ごく普通のキャンプ場でしたしね。林間学校とかでも使用される施設でした』

『そうですか…あ、でも…』

『この時は、特になにもありませんでしたよ? 隆史殿は真面目にお仕事してました』

『この時は……』

『一般のお客様達も、いましたしね。まあ：流石に夏も終わりに向かってますし……。4、5人の大学生らしきグループがおりまして：カツプル：ぼっかりでした……。』

『そんな中で、高校生が二人つて……。そういえば、そんな所だし、何か言われなかったの？ 高校生の男女がその：』

『そこは、まあ：隆史殿の見た目も相まり、正直高校生には見られませんでしたから、特に問題は起きませんでした。』

『見た目がすごいからね：彼。大学生に絡まれたりとかしなかった？ 結構、ああいった所の大学生とかだと、お酒飲んでる人多いし：』

『そこは大丈夫です。サングラスかけた、隆史殿にビビってました。』

『……』

『戦車道全国大会の、開会式を少し思い出しました：』

『：イカツイ格好してたよね。』

『ま：まあまあ!! で：どうしました!?!』

『正直：キャンプ自体は：楽しかったです……。』

『優花里さん?』

『山中ですし：まあ：はい。隆史殿が、野兎を捕獲してくるとは、思いませんでしたけど……。』

《……》

『捌き方、教えてくれるって言ってましたが：まさか、本気だったとは：躊躇なく、その兎さんを絞めてました：』

《……》

『血抜きするからって：夜吊るしておいて……次の日の朝食が、兎さんでした：一年生達には、見せられない光景でしたよ……。』

《……》

『確かに、カレー粉って偉大です：普通なら獣臭くて食べ辛いですけど、それで普通に美味しく頂きました……。私、初めてです。あそこまで「ごちそうさま」を本気で言ったの……。』

《 …… 》  
『 大学生の方々も、それをご覧になっていたらしく…見た目も相  
まって、完全に隆史殿に怯えていました 』  
《 …… 》

『 はっ…話が、またそれました!! とうか、その兎さんを吊るした  
夜ですよ!! あの方の本領発揮は!! あの変態が!! 』  
『 ゆかりんが、あの変態とか言い出した… 』  
『 お顔が、真っ赤ですねえ!! 何があっただんでしょう!!?? 』  
『 すごいな、五十鈴さん。切り替えが完璧だ 』  
『 隆史君… 』

〈  
『 そうなのか? ここからか? 本領発揮は 』  
』

〈  
『 あはは…違いましたあ。昼間っから、全開でしたあ…いやあ…  
まさか… 』  
『 まさかって…何されたの? 』  
『 されるの確定なんだ… 』  
『 またあんな水着を、着させられるなんて… 』  
《 …… 》  
『 せっかくだからって…持ってきますかね?!?!? 普通!!!…ぶいい… 』

『 ……どんな水着…? 』  
『 言えません!!! 』  
《 …… 》  
『 確かに、人気が無い所です…。下見も済んだので、後は遊んでも良

いだろうって事で…少し上流の川に行きました。

…いませんでしたよ？ 確かに。大きな岩とか、ゴロゴロある所で  
したし…隠れる所もある。

ですが！ 先ほどの大学生グループの方々も何時、ここに来るかな  
んて、分からないじゃないですか…。

それでも…まあ…はい。着てくれと散々頼まれて…』

『…結局、着るんですね…優花里さん…』

『だって!! 水着取り出した後、ずううと、無駄に良い声で話して  
くるのですよ!?!』

『なにそれ』

『…ちよつと興味有りますね!』

『五十鈴さん…』

『目の前で、着替えさせられるし…そりゃあ、もう裸も見られてます  
し? 恥ずかしい事散々しましたけど!? それとコレとは別じゃない  
いですか!!!』

『…結局、着替えたんですね…優花里さん…』

『いや…もう…ずっと褒めてくれるのは、嬉しいのですが…何故か  
タラシ殿…私のおへソばかり褒めますし…変なポーズばかり取らさ  
れますし…で…』

『…結局、その恥ずかしいポーズも、取ったのですね…優花里さん…  
』

『うう…その…それでも、そんな私を見て…どうにもそれなりに興  
奮してくれた様で…』

『ああ…書記の奴は、どうにも女性を辱めるのが、好きで仕方がない  
輩だからな、あの変態』

『…そうだね。変態さんだよね…隆史君』

『みぽりんも、経験がお有り…』

『ううう!?!』

『白昼の元…あんな所で、確かに岩陰に隠れてしたのですけどね?』

…その…お口で…』

《…》

『ま…真昼間でしたしっ!! 岩肌の熱も凄かったので、最後までは…その…その場ではしませんでしたけどお…』

『みほさん、お口でするの好きでしたよね?』

『華さん!!?』

『汗も有り、ちよつとしよっぱかった…んですけど、その…私が、舌を動かすと、隆史殿の体が反応するのが、ちよつと面白くなってしま…い…。』

初めは、明るい外ですし…恥ずかしいどころでは、なかったのですが…段々と夢中に…。

口の中が、ずうううと熱くて…音を出すと、周りに聞こえてしまいますが、どうにもそれを隆史殿は、好みますし…がんばりました!!』

《…》

『ゆかりん、ちよつとヤケになってきてるね…』

『うう…』

『足音がした……みたいなんです。石を踏む音…会話の声……。どうやら、人がその場に来たようでした…それでも、私はもう気がつきませんでした。』

ただもう…夢中で…。外気温もあつたのでしようが…頭がボーっと、してしまいました…。はい…やめませんでした。

動く頭を、隆史殿に抑えられて、漸く気がつきました。その…お口に入れた状態でしたので、横目で見ると…先ほどの大学生のグループ…一組のカップルでした。

グループの中から、抜け出して来た様で…ただ、私達の事は影になつていた様で、あちらからは、見えない位置でしたし…。

ただ、その状態が、分かったと思つたら…隆史殿が、続ける様に私の頭をゆっくりと引いて…ええ……はい。

私も、熱にやられていたのか、疑問なく続け出しました…。隆史殿、自体が既に…その…限界?…だったのでしょうか?

私の頭をもって、ちよつと乱暴に動かしまして…。そうするとグチュグチュと…こう?…唾液が音を出しまして…バレてしまうかもつてちよつと、恐怖心が芽生えました。』

『 …秋山さん。辿辿しく話しているけど… 』

『 な…内容が、段々と生々しく… 』

『 動かされながら、横目で…来た方々を見てみると…えっと…  
まあ…私達と同じでして…。男の方つて皆、ああなんでしょうか？  
…とか、思っていましたら…。隆史殿の息遣いが、段々と荒くなつ  
て…口の中の…その…隆史殿が、大きくなったと思った瞬間…口の中  
に苦いのが…広がりました 』

《 ……………… 》

『 苦いの…ああ！ みほさんの、好ぶ 』 それは流石に、やめてく  
ださい!! 』

『 ええ…でもお 』

『 でもじゃ、ありませんよお!! 』

『 みぽりん、否定しない… 』

『 …私は苦手だ 』

『 麻子!? 』

∨

「 ……」

まほちゃんの…顔が、終始…真顔…。

「なる程…覚えておこう」

!?

∨

『 優花里さん、顔が…真っ赤… 』

『 あ、でも優花里さん？ 「その場では…」っと、仰っていましたが  
？ 』

『 華の顔が…すっごい笑顔だ 』

『 え？ あ…ああ、はい。その日の夜でした。えっと…夜でしたし  
…恥ずかしいですけど、求められれば、お応えする気ではあったので

すが…何事もなく…就寝の流れ…』

『秋山さんから、もはや躊躇が感じられない…』

『隆史君風に言う…スイツチが入ったんだね…』

『ファスナーは全開でしたが、寝袋で隣り合わせで、横になっていました。そんな中、何と言いますか…こんな二人きりという機会、そんなに有る事では有りませんし…暫く…こう…お話を…』

『もう…普通に、同じテントで寝泊まりしてる…とか、突っ込んだじゃ負けなんだよね…』

『うう…流石にその状況じゃ、私でも同じ所で寝泊りするよ…』

『あら！ みほさんが、漸く乗ってきてくれました』

『恥ずかしいですけどね!! …空気読むってこういう事なんだろうな……はあ』

『…普通…』

無線を聞き、感想を一言二言呟くと、何も喋らないで目の前の機器を睨んでいる…。

『…んで? どんな事、話したの?』

『え? いえ、今回の事とか…これからの事とか…ま…まあ!! 詳しくは内緒です!!』

『ゆかりんが、乙女の顔をしている…』

『とういか!! 隆史殿は、通常仕様と鬼畜使用の落差が、凄すぎます!!! なんですか、あのギャップ…』

『わっ!! 急になに?!』

『な…なんか…会話の流れで…その…』

『その?』

「私が、隆史殿の寝袋で、一緒に寝る運びに…」

「ああもう！ まだ電源切ってる!!」

「どうしましょう？ やはり直接、学校へ赴きますか？」

「ダメだ五十鈴さん。こう言った事に、書記は最近敏感になっている」

「…ついた頃には、逃げてそうだよ」

∨

「……タカシ」

「」

近い…近い近い!!!

顔がっ!!

∨

「は…恥ずかしかったですけどおお…まあ…折角のお誘いでしたしい…あ、いえっ！ 最終的には私がお願いする…流れに…」

《……》

「で…そこで、私。気がつきました。ある意味での、隆史殿の攻略法

…

《!!??》

「…なっ…えっ!？」

「ご教授…お願いします…：優花里さん…」

「…わっ！ 私も!!」

「……」 『スツ…』

「…麻子さんが…静かに手を上げた…」

「…ううう…」

「麻子、真っ赤になって、俯く位なら…」

「ええつとですね…まあ、攻略法…と言いますか…その…タラシ殿仕様・選択法と言いますか…」



『…仕様…』

『タラシ殿から、求めてくる場合…高確率で、鬼畜仕様になります』

《 確かに!!! 》

『はっ…ははずかしいですけど!!! こちらから…その…お願いする場合…結構…優しくしてくれます…』

《 …………… 》

『た…確かに、隆史君。迫ってくる女性、苦手って言った』  
『なる程。ある程度…と、いうか…私達が、こちらから行くと…迫ると!』

『気を使ってくれと…あ…そういえば、そうかも…』

『そうだな。基本的に、あの男…変なスイッチ入る時って、そういった感じだな。油断している時に、迫られて…』

『足腰、立たなくされますねええ!!』

《 …………… 》

『ありがとうございます、優花里さん!! それは良い事を聞きました!!』

『華!』

『…らぶほてる でもそうでした…そうです。普通に…と云っては、語弊がありますが…優しくして欲しい時は迫り…いぢめて欲しい時は、誘惑すれば…』

『華さんの目が…今まで見た事がない、輝きになった…』

『だって、みほさん!! 結構、本気でいぢめてくれる隆史さんを出すのって、大変なんですよ!』

『…いぢめてくれるって…誘惑って…』

『これで、案外…ウフフフ…』

『五十鈴さんが、怖い。』

『あ、でも、こちらが調子に乗ると、すぐに鬼畜仕様に変わりますよね? 隆史殿』

《 …………… 》

『こ…今回もそうでした…』

◇

「まほちゃん…」

「なんだ、タラシ」

……………。

は…初めて言われた…。

「や…やっぱりこれ…壊そう…」

「聞かれたら、まずい事がまだまだ出てきそうだからな!!」

「…そ…そうだよ!! 聞いている俺もキツイ!! 居た堪れない!!」

「自業自得だろう」

「…そうだけど…」

「既に軽蔑案件が、山の様に出てきているからな。貴様自身の罰だと思え。私に聞かれるのも嫌なのだろう?」

「…しよ…正直、一番バレたくない相手が、まほちゃんだったよ…」

「…お母様よりもか?」

「ん? しほさんは関係…無くはないけど…まあ…決勝戦後の事もあ  
るし、昔からの事もあるしで…そうだな。やっぱり…一番がまほ  
ちゃんだったよ…」

「……………」

「?」

◇

『わ…私は、髪の毛に少しコンプレックスを感じていまして…くせ  
毛ですし…皆さんの様に柔らかく有りませんし…。』

でも、隆史殿は…そんな私の髪が好きだと、言ってくれました。こ  
の時もそうです…一緒に横に鳴った時、少しその事を思い出してくれ  
たのでしよう。

…話しながら、その…根元から…かきあげる様に…縛らく撫でても  
らいまして…。

私は…そこで聞いたんです。このまま寝てしまっても良いのです

か? と…まあ…正直、この行為で完全にやられちゃいまして…め  
…めつつちやくた、恥ずかきやつたでしゅけどおお!!!』

『すごい顔色してるなあ…ここにいる全員』

『すごい噛み方もしたけどな』

『そこには、触れないであげて』

『そうです!! 恥ずかしかったですが!! ……私から誘って見  
ましたあ』

『あの初心だった優花里さんが、懐かしく感じる位の成長ですね!!!  
』

『やめてください、五十鈴殿!! 成長とか言わないで!!』

『秋山さん。…誘うって、具体的にはどうしたんだ?』

『言えませんよ!! 正直、体験談とやらを話す事以上に、恥ずかしい  
ですよ!!』

『…ま、そりやそうか…で? なんて誘ったの?』

『武部殿!?!』

<

「…なる程…」

「……」

「うむ…良い事を聞いた…なる程…」  
まほちゃん!?

<

『んああああ!! 分かりましたよ!! 言いますよ!! 言えばいいん  
でしよう?!?』

《……》

『な…なんで、皆さん…正座したのですか?』

『いいから!! 早く!!!』

『…』 『…』 『コクコク』

『ま…まったく…、普通でしたよ？ 普通ですが…自分から言うとなると、ハードルの上がり方が、異常に高くなりますね…』

『でっ!?!』

『ふ…普通に…このまま寝て良いのですかあ？ って…』

『おお！ ゆかりん！ 大胆!!』

『密着してましたから…耳元で…』

『お……おお?』

『その後の隆史殿…なんかもう…凄かったです…』

『ぐっ…具体的に!!』

『沙織さん!?!』

『い……あ……もう、体中…まさぐられると言いますか…撫でられるだけ…っつのも、心地が良いもので…。』

『昼間の時の事もありまして、私も大分中途半端感が…。』

『色々な所を、愛撫? とでも言うのでしょうか? 乱暴ではなく…』

『すごく優しくして…もう…』

『ゆかりん!?!』

『本当に…ただ触れられるだけでも、あそこまでの心地良さ生まれるものかと、思い知らされました。』

『何をされ…どこを触られましたも…体が反応してしまい…。』

『隆史殿が、私の中に入って来ただけで…その…頭が真っ白に…』

《…………》

『はあ…あ……その…隆史殿が、動くたびに意識が遠ざかると、言いますか…もう、何をされても良いとまで…何度も目の前が、チカチカした光の様なモノが飛んでました…』

《…………》

『すぐに私の頭なんて、バカになっちゃいました…。言われるがままでした…でも…』

『それが、また!! 良いのですよね!!』

『華さん!?!』

『そうなんですう……んっ……何を言われても…何か、お願いと言

いますか…言われる事自体が、もう…本気で私なんかを求めてくれて  
いるみたいで…その…嬉しくなってます…』

『分かります!! ええ!! 痛いほど分かります!!』

『…で…最終的には…』

『え?』

『気がついたら…朝でした…』

《……………》

『体中、べつとべとで…なんかもう…すごい事になっていました…  
』

《……………》

『何度か、気を失ってしまいましたが…強引に…その…アレで起  
こされるといふのを、何度も繰り返されて…脚なんて、ずうつ  
と痙攣しっぱなしで、動かなくなりました…はい』

『…それは、私も経験がある…』

『麻子さんは…そうですね…』

『私…五十鈴殿みたいに、あそこまで具体的には言えませんが…  
途中から暴走したタラシ殿は、危険です。色々な意味で、逃げられな  
くなります!…なりました…』

《……………》

『……………』

『…あ、うん…華みたいに、生々しく言えとは、私は言わないから大  
丈夫だよ?』

『……………』

『あ…あれ? 華?』

『沙織さん』

『…華? なんで私の肩を掴んだの…?』

『…次は、沙織さんの番ですねえ』

『え…。えっ!』

『そうだな…。特に、沙織の場合…最後に加わった様なモノだから  
な。…さて…楽しみだ』

『麻子!?』

『そうですよお!! 私も、かなり頑張ったと思いますよ!! 武部殿も同じく恥ずかしい思いをしてください!!』

『ゆかりん!?』

『…隆史君…特に沙織さんに甘いしね…メガネ……だし……』

『みぽりん!?』

◇

もはや全てを諦めてしまっている。

「…沙織……さん? ああ……あの……メガネの……隆史が好きそうな

…」

「

なんだろう…殺気とは違う…少々熱っぽい声…

「私は、あの様に…流行り廃りには、疎いからな…少々羨ましく思う」

「

いや…あの…なんでしな垂れ掛かってくるの!?

「そうか…彼女が最後のメンバーだったのか…ふ……ふふっ……5人もいるのだな…」

「

「サア、一緒に…… 仲良く…聞こうか? 隆史…」

※ルート 壊※ く女子会です！く その さあん

『う…うん』

『いきなり元気が無くなりましたね…』

『いや…話すよ!? でもやつぱり恥ずかしいよ!?』

『最後、有無を言わず、私にオネダリみたいなの…そんな恥ずかしいセリフを、白状させたのは何方ですか…』

『う…っ』

『はい！ ちゃつちやと、吐いてください!!』

『うう…ゆかりんが怖い…』

く

「……」

「あの…まほちゃん。流石に俺の脚の上からどかない？」

「断る」

「即答…って…」

「」

「なんだろうか…胡座の中に座るといのは…結構、座り心地が良いものだな」

「……」

「さて…思いの他、この娘は言い渋っているな」

「……」

む…無言。

そこまで言うと、まほちゃんはまた無線機を睨み始めた…。

俺の胡座の中…体育座りをし、脚の先を少し前に放り出している。

先程からそうだけでも…俺の無線機の先にいる、彼女達へしてきた行為に対し…怒って…は、いるのだろうか、少し様子がおかしい。

本当に興味があるのか、本気で最後まで聞くつもりなのだろう。

…何故そこまで、聞きたがるのだろう。

決勝戦の最後、俺を黒森峰へと連れて行く時に言った言葉。

それを思えば…。

「……」

ぬ…まだ、無言で無線機を見ている。

まほちゃんの後頭部が…彼女の細い髪の毛が目の前に見える。

く

「う…でも、アレだよ？ 私の場合…華やゆかりんみたいに、特殊じゃないよ？」

「あら…そうなんですかあ？」

「と…特殊とか言わないで下さい!!」

「華さんは、なんで残念そうなんだろう…」

「まあいい。で？ 普通？ …正直、普通が良くわからんが…あの変態が、沙織に対しては普通だと？」

「う…うん、普通だったな。華とゆかりんの話し聞いたて思ったんだけど、私の時は、結構…隆史君、普通なんだなって、驚いたくらいだし…」

《……………》

「…まだ、私…その…数回しか、した事ないけど…」

「…数回…もうすでに、何度か経験してるじゃないか」

「冷泉殿！ 突っ込み入れたい気持ちは分かりますが、一応最後まで聞こうじゃありませんか！」

「…ぬ」

「ん？ ちよつと私、気になったのですが…」

「なに？ 華」

「沙織さんって…一体どこで、隆史さんとまぐわっているんですか？」

「華さん、言い方!!」

「優花里さんは、お外が多いみたいですが…」

「多くないです!!」

「私とみほさんと麻子さんは、お家でまぐわう事が、多いですが…」



『華さん!!』  
『で? どうなんですか?』  
『えっと…大体、私の部屋だけど…』  
『ちよつと待つて下さい? え? 隆史君、沙織さんのお家へ、行つた事があるんですか?』  
『え…えつと、うん。何度か来てくれてるけど…』  
『あ、隆史君。携帯の電源は入ったみたいだけど、出ないや』  
『どうします? やはり私、一っ走りしましょうか?』  
『携帯の電源が入ったって事は、学校にはもういない可能性があるな』  
『隆史さん…いつの間に…』  
『えつ!!? ええ!!? 何を驚いてるの!!?』  
『それは、驚きますよ…。しかし、タラシ殿…一体、普段どの様に動いているのか…』  
『本当にいつの間に、隆史君…まだ学校、始まってないのに…』  
『最初の時は、いつですか?』  
『えつと…隆史君から、連絡が来て…』  
《……………》  
『例の雑誌を見せてくれて言われたの』  
《……………》  
『そう言えば…確かに隆史さん、私達の知識…あの雑誌が発祥なのを、嘆いていらつしやいましたね』  
『一度、確認しないと…とも、言っていましたね』  
『ぬ…』  
『でつ!!? でつ??? それで、どうなったのですか!?!』  
『優花里さん…』  
『えつと…了承したよ? うん。だから自宅に招いたの…』  
『…なる程』  
『私も、男の人を自宅へ招くなんて、初めてだったし…ちよつと緊張しちやっただけどね!』

『どこか、嬉しそうですね…』  
『それで？ 書記はどうした』  
『いや…うん、一応…その雑誌を軽く読んで…頭、抱えてた』  
《……………》  
『…それで、ちよつとソレについてお話して…』  
『あの雑誌を読んで、何を話すんだ…ま。それは聞きたくないがな』  
『どの雑誌をご覧になったのでしょうか…』  
『…お昼ご飯作って、食べて』  
『あ、お昼だったんですか。ま…まあ、夜なら気が付くか…夜は大  
体、隆史君、家にいるからね』  
『隆史さん、夜遊びなんてしませんからね！ ……………ま、何処ぞに  
女を作ってる…なんて心配は、一応ありませんね!!』  
『…一瞬、五十鈴さんの目がヤバイ色を放ったな。女って…』  
『えっちして…』  
《……………》  
『ま…まあ、書記だしな…』  
『話している内に慣れたんでしょうか？ ……普通にえっちしたって  
言いましたね、武部殿…』  
『私としては…複雑…というか!』  
『そうです!! そこに至る、経緯をです!! そこが聞きた…』  
『一緒にお風呂入って…』  
《……………》  
『…コール音しかしない。留守録にもならない…』  
『私も掛けてみましょうか?』  
『やはり一度、皆さんで、行ってみましょうか?』  
『……ぬ、そういえば…西住さんのお姉さんが、いな…』  
『もう一回えっちして、帰ったよ?』

《……………》

『大体、いつもこの流れだね。お風呂、一緒に入ると、一度した後なのに、彼すぐに元気に…なっ……っ……華っ!?』  
『いつも!? いつもって言いました!?!?』  
『え…あ、うん。大体、こんな感じ…まあ……それからは、部屋に呼ぶ時は、わ……私からだけど…エへへ…』  
『照れるとか、恥ずかしがるとかの次元では、もうありません!! なんですか!?! 沙織さん、完全に満喫してるじゃないですか!!』  
『そ…そんな事…ないよ?』  
『しかも、お風呂!!いつも!? 私だって、同じ家に住んでいるというのに、大洗ホテルでの一回しかありませんのに!!!』  
『そこお!?!』  
『みほさんは!?!』  
『わ…私は、何度か…』  
『ずりいいです!!』  
『ずりいつて…』  
『麻子さんは!?!』  
『……い…一回だけ…』  
『よし!!』  
『よしって…』  
『優花里さんは!?!』  
『あ…ありませんよ!』  
『……』  
『ど…同情の目をした…』

◇

…。  
いやね…俺は確かに半裸派ですけど…彼女…脱ぐと、すっごいの

本人は痩せないと、とか良く言ってますが…彼女の体つきって、す

げえ男ウケする体型でして…。

後、素直に感心しましたね。あの大きさは。ポリユームは！

「……………」

「」

あの…痛いのですが…。

膝に思いつきり爪を立てて、掴んで来てますね…。言葉にできませんが…。

だって!!! 風呂入ってけって、沙織さんがすっげえ進めて来るんだもの!!

ほぼ強制だったんだよ!?

…まあ、普通に入りましたけど。

「タカシ」

「あ、はい、すみません」

「…私は、何も言っていないが?」

「……………」

◇

「ダメです!!! 武部殿!!!」

「なっ!? なに!? 急に!!!」

「それは、事後報告です! そうではありません! そんな事、私の事に比べれば、恥ずかしくもなんつとも、ありません!!」

「そ…そう? いやあ…そんな事、ないと思うけどなあ」

「……………」

「五十鈴殿! 五十鈴殿も何か…おや、随分大人しい…何を考え込んで…」

「沙織さん」

「なっ…なに!?!」

「隆史さん…胸がお好きでは、有りませんでした?」

『む…胸?』  
『沙織さん、大きいですし…随分と弄ばれませんでした?』  
『華…だから、言い方…』  
『どうです?』  
『ぬ…うう…』  
『これはアレか? 私が、死にたくなる話か?』  
『大丈夫です! 私もそうですから!! 冷泉殿は一人ではありません  
ん!!』  
『秋山さんは…仲間だな! ギリで!!』  
『喜んで良いのでしょうか!? それは!!?!?』  
『う…くん…そうだねえ。一度、好きなようにして宜しいでしょう  
か? って、すつごい敬語でお願いされたなあ…』  
『…私は、まだないですね』  
『張り合わないですよ…。まあ、言わなくっても、好きにすれば良いの  
に…。どうにも彼って、そういう事に關して、私に了承を取ろうと  
…態々口に出すんだよね』  
『むっ! ちよつと隆史さんらしいですね!!』  
『んで…まあ…いいよお? って、恥ずかしかつたけど…その言っ  
たら…なんか、私の事見て…変に興奮してて…』  
『隆史さんらしいですね!! 一気に想像ができました!!』  
『後…彼って、服の間からまさぐるの好きだよね…』  
『そうですね! 脱がされませんね!!』  
『…華…』  
『それで!? それでっ!?』  
『雑誌にとかだと…男の人って、良く分からないみたいで…結構乱  
暴にされて痛いかもッ? って、書いてあったけど…隆史君は違つて  
いて…』  
『ああく…』  
『マツサージする様に、こう…揉んできて…先を…絞り出すみた  
いに…変に適度に刺激されて…』  
『…私の時もそうでしたね』

『それでも胸だけじゃなくて…周りを摩る様に触ってくれて…それで、その胸でしよう？ ……胸だけで、頭真っ白になるなんて、思わなかった…』

『果ててしまったんですか!?!』

『はつきり言わないでよ!!』

『まあまあ。ああ後、胸でして欲しいとか……絶対に言われましたよね?』

『言われた!! それもお願いされた!!』

『隆史さんの…たくましいのです…胸で挟むと…胸の形がそれと型どって…なぜか彼は喜びますよね?!』

『喜んでた!! 胸で挟むのって、結構気持ちいのかなあ? 顔が、普段と違ってちよつと可愛かった』

『分かります!!!』

『うう…』

『西住さん』

『西住殿』

『な…なに!?!』

『西住さんは、向こう側だ!』

『西住殿は、あちら側です!』

『ええ!?! そ…そんな事お』

『ヤゴもあって、何を言ってるんだ!』

『ヤゴツ!?!』

『西住殿、挟めますよね!?! というか、挟んだ事ありますよね!?!』

『ええっ!?! あ……はい。あります…けど…』

『はい! じゃあ、向こう側です!!!』

『!?!』

『性行為をすると、女性ホルモンが刺激…分泌され…胸のサイズが変わると聞いた事がある…西住さんは成功例だ。私達は失敗…例だ』

『それ、都市伝説ですよね!?!』

∨

「……………挟む」

「

なぜ、自分の胸を持ち上げたんでしょうか!!!?

「……………」

なぜ、俺を見上げたのでしょうか!!!?

∨

「お風呂でもそうだったなあ…」

「詳しく!!」

「え〜……」

「ハヤク」

「わ…わかったわよ…。なんでそんなに必死なのよ…」

「……………」

「部屋だと…その…胸とお口で、その……したんだけど……」

「隆史さん、お口でされるの好きですからね…。みほさん、彼女さんですし…結構、遠慮なく頼まれますよね?」

「ふえ!!?」

「バレてますよお?」

「えっ…えっ!?!」

「…というか、アレ…絶対にバレる様にしてますね。隆史さん…素敵ですね!!」

「…何をそれで、どう素敵と言えるのよ」

「そうですねえ…後、胸とお口って、難しくありません?」

「ま…まあ…ずっと前かがみだしね。…というか華。今日、すっごい生々しいよ……」

「でも、嫌いじゃありませんよね!?!」

「う…うん。まあ…。なんか…こう…隆史君が反応してくれるの

が、ちよつと…嬉しい』

『あ、分かるかも』

『みほさん!!』

『こ…こう、先つぽとか…唇で引つ掛けると、たまに声とか漏らして…ちよつと…楽しい』

『分かります!!』

『分かっちゃう自分が、ちよつと嫌…』

『ふ…普段、隆史君にやられっぱなしだから…ちよつと、仕返しできているみたいで、結構…夢中に…』

『分かる!!』

『分かります!!!』

『胸といっしょにとか…難しいけど、それとお口と…その舌で刺激すると…隆史君の反応が、すっごい楽しい…』

『そうですね!! そうですね!!!』

『ん? 沙織さん?』

『気づくと、結構自分でも激しく動かしちゃって…その…それで、出されると…何か勝った気分…にならない!』

『なります!!』

『なりますね!!!』

『…ほら…やっぱり』

『はっ…私達には、理解が及ばない世界ですね…』

『昔は特にここまで、イラつきはしなかったが…』

『そうですね…なぜか今は、無性に悔しいです…』

『あ…後…』

『なんでしょうか!?!』

『なんですか!?!』

『その後の事なんだけどね?』

『…』

『…』

『…あ、終わりましたね』



『む、やつと参加できるか?』  
『どうにも隆史君…その…たまあに、私に喋らせたいらしくて…』  
『…?』  
『どういう事ですか?』  
『その…簡単に言う…と…どういう風か? とか…実況…というか、報告…というかして欲しいらしくて…』  
『…』  
『…』  
『あれ、結構恥ずかしいの!! でも、なんかアレはアレで…』  
『分かります!!!』  
『優花里さん!?!』  
『タラシ殿、基本的に鬼畜仕様になると、結構恥ずかしい事を、してくる…というか、させようとするんですよね!!』  
《…》  
『はい! 皆さん、納得の顔!! で…でもですね? また、タイミングが…』  
『そう! そうなの、ゆかりん!! 気分が乗ってきたというか…素直に従っちゃう時とか、見計らった様に!!』  
『…気分が違う時も、強引にその気分を持って行かれます』  
『そ…そうかも』  
『沙織さんは、どの様な事を?』  
『う…五十鈴さんが、すごい微笑ましい笑顔だ…』  
『う…う。なんだろう…少し露骨に言っちゃうと…その…隆史君、弱点と言うか…そこを探す様に動くと言うか…。それがまた、内側からまさぐられる様で…アレ……なんだけどおおお…。で…でっ! そこを見つけると、また…適度よく攻めてくる…というか…。』  
《…》  
『沙織さんは、どの様な時にそれを気付かれました?』  
『華さん!?!』  
『え…す…座ってる時…だけど……』

『座って……ああ……確か……座位？　でしたか？』

『そういえば、雑誌にも書いてあったかも……』

『西住殿と五十鈴殿が、一発で最中の事だと看破しました……』

『話の流れ的にそうだが……沙織も西住さん達も、段々と躊躇しなくなってきたな……』

『なる程……沙織さんは、座位がお好き……』

『華！　だから露骨に言い過ぎ!!!』

『……う、私は少し……分かつちやうのが、ヤダ……』

『あらあら、みほさんも!!』

『西住殿が、会話に参加すると、五十鈴殿が生き生きしますね……』

『まあ……ある意味で、本当に現状の「隊長」だからな』

『……冷泉殿。その例えは、どうかと……』

『あの体勢だと、こ……こう、くつつくというか……』

『そう！　そうなの、みぼりん!!』

『おや、沙織さんが嬉しそう……』

『向かい合わせだと、こう……抱き合つてできるし……なんか胸が当たると、隆史君喜ぶし……。裸同士で抱き合うと、あんなに気持ちのいい物だとは思わなかった……』

『そ……その、後……一番奥まで当たる？　というか……また隆史君、わかつているのだろうか、こう……すっごい攻めて来てくれるし……』

『そういう時かなあ？　結構、今、どんな感じかとか、聞かれるの……集中したい時とかじゃなくて、結構まだ余裕というか……なんというか……そういつた時を見計らつて聞いてきてる感じがすっごい』

《…………》

『あ……でも、体位とかだと、隆史君つて……その。私が上になるのが結構好きかも知れない。すっごい胸見てくれるし』

『私の時もそうですね!!　見てくれるしつて所も同意です!!』

『おっぱい好きだよねえ……隆史君。あ、でも私自身も上になるの好きだなあ……あれ、倒れると座つてするのと、同じだし。』

『後、結構……激しくなるんだよね……。お尻掴まれて……左右に開かれて……こう……すっごくガツツンガツツン攻められると言うか……』

また…最後付近になると、体が浮きそうになるし…物理的にも…感  
覚的にも…アレ…好き』

『…沙織さんのエンジンが掛かってきた』

『うふふ』

『五十鈴殿が嬉しそうに聞いている…』

『あ…そういうえば。隆史君…なんだろう。最後、顔に出したがる…』

『武部殿も壊れ始めましたね。露骨というか、ナマナマシイデス』

『…私の時は、あまりないが…』

『冷泉殿!』

『そうですねえ。でも、私の時は…胸とかお尻とか多いです。み  
ほさんはあ?』

『華さん!』

『ああ…みほさんは、顔…というか、お口ですかね?』

『なっ!? なんて、分かつ…違っ!? えっ!?』

『はああい。優花里さんはあ?』

『…』

『はああい。優花里さんはあ?』

『…う』

『はああい。優花里さんはあ?』

『…』

『分かりましたよ!!! …お…お腹? ですかね? …うう…』

『私の時は…何故か背中と胸が多いな』

『冷泉殿は、初っ端から諦めてますね…』

『…私も、腹を括った』

『…』

『武部殿?』

『いや…後ね? 最後に出す時、たまにメガネ掛けてって言われる  
の』

『…え』

『えっちして時もそうだけど…掛けてしてない時も、最後に掛け  
てって言われる時があるなあって…』

「……」

「意味が分からないよね？」

「……」

「あ…でも、メガネ掛けてる時の方が…えっちに突入する確率、高いかもしれない…」

《……………》

「みほさん」

「はい」

「後で、皆さんで……伊達でかまいません…よね？ 買いに行きましようか？」

「行きましょう」

「みぽりん…即答」

〈

「……」

そしてまた訪れる静寂…。

なにこれ!! 自分の性癖モロバレとか、そういった問題じゃすでにねえ!!

比べられ始めてる!?

…アレでも結構、当たり障りのない事を言っているつもりなんだろうけどね!!

それも黙々と…真顔で聞いているまほちゃん……。  
最悪だ。

「…なる程」

なんか、つぶやいてるし!!

〈

「は…はあい!! 結構、暴露しちゃったけど、私の話はここまでえ!!

『 …… 』  
『 は…華? 』  
『 ま…少々、ヌルイと感じます…。沙織さん、まだ何かありますよね? 』  
『 そうですね! まだ何かありそうです!! 』  
『 ゆかりん!? 』  
『 そうだな。相手は、書記だぞ? 』  
『 ぐ… 』  
『 あ、やっぱり何かあるんだ… 』  
『 みぽりんまで… 』  
《 ジー… 》  
『 ううう…… 』  
《 ジー… 》  
『 わ…わかったわよ! もう… 』  
『 はい! では、ちやつちやと吐いてください!! 』  
『 ゆかりんも怖い… 』  
『 ……で? 』  
『 はあ…はいはい。あのね? 隆史君って…写真撮るのって結構好きだよね? 』  
『 あ、そういえば…携帯でチョコチョコ撮ってますね 』  
『 …… 』  
『 ゆかりん? 』  
『 いえ…なんでもありません。続けてください 』  
『 う…うん。そ…その、結構…写真を撮られるの…え…えっこの時とか 』  
『 コール音かしくない!!! 』  
『 私のは通話音です!!! 』  
『 私のもです!!! 』  
『 一斉にかければ、それはそうだろうよ… 』  
『 特に胸とか…お口でしてる時とか多いかな… 』

《……………》

「帰ってきたら、隆史君の携帯を見せてもらおうかな?」

「…みほさん」

「大丈夫だよ♪ メールとか、着歴とかじゃないから! ……写真だから…」

「やましくないなら、見せますよね!!」

「…妙に細かい、書記だぞ? そんな写真…何時までも携帯に入れておくか?」

《……………》

「私の痴態が写ってるかも知れないんだからやめてよ!!!」

「…沙織さん」

「は……………華?」

「許してるって事は、まだ何かありますよね?」

「ぐ…なんで、今日は妙に鋭いの?」

「吐いてください♪」

「い……………ぬ……………ん……………はあ…分かった」

「今回はすぐに諦めましたね!」

「…そりゃ、今の五十鈴殿には何を言っても無駄そうですしね…」  
「はいっ! 聞こえませんか! で? なんですか!? 沙織さん!!」

『

「そ…その…私から、ちよとエツチな写真…自撮りして送ってみた事ある…」

《……………》

「何やってるんですか…」

「だ…だって! 会話の流れでそうなったんだもの!!」

「…どんな会話だ…いや! いい! それは言うな!! 聞かない方が良さそうだ!!」

「麻子さんが、防衛に入った」

「…ちなみに、どんな写真ですか?」

「……………」

「沙織さん?」

『 うんっ！ 聞かれると思ってた！ 思ってたからこそ、ちよつと提案♪ 』

『 まで、沙織！ いい！ 言わんでいいから、私を…いや、なんで私を見る？ 』

『 だって、次は麻子の番でしょう？ 私の話は、これでメです！ だから最後に… 』

『 ま…まさか… 』

『 皆も、隆史君に、自撮りを送ってみましょう 』

《 …… 》

『 はい、まずはこれが私の送った、しゃしくん♪ 』

『 まで!! 見せるな、沙織!! とうか、いきなり何をヤケになって…んう!?! 』

《 …… 》

『 ……何故、手の平で、目を隠してるんですか？ 』

『 いや…流石に恥ずかしいし… 』

『 ……胸。思いつきり出してますね。とうか、露骨に服を捲って露出してますね!! 何考えてるんですか!?! 』

『 隆史君の希望 』

《 …… 》

『 何故微妙に…たくし上げた服を口に啜えますけど… 』

『 雑誌には、こういうった格好って、男の子に喜ばれるって書いてあったよね？ 』

『 何故、夏休み中だというのに、制服なんですか…？ 』

『 え？ そっちの方が、隆史君喜ぶし 』

『 ……ちよと待って下さい？ これ、どこで撮ったんですか？ 背景が…室内…じゃない!?! 』

『 ……シヨ…シヨツピングモール 』

《 …… 》

『 で…これを送った後の、隆史君の反応は…？ 』

『 えつと……その……怒られた 』

『 当たり前です!! 』

『でも、言葉の最後が、何故かお礼だったから、本当は喜んでくれたかなあ…って』

《想像が容易い!!》

『はいっ！ そんな訳で、皆も撮ってみよう！ 今回は今の服装でいいからね!!』

『なんで、そうなるんですか!!』

『え？ …だって今回、みんな被害者にナルンデシヨウ？ ゆかりんも、ソウダヨネ？』

『被害者って、なんだ!! そもそも裸の写真なんて、撮りたくも…まして、書記に送りたいくない!!』

『麻子お。裸じゃなくて、こうやって…一部露出う。裸より、隆史君はそっちの方が好きそうだし!!』

『スカートを掴むな!!』

『みぼりんも!!』

『ふえ!? ちよ…服を捲らないでください!!』

『どうしましょう？ 私の場合…胸の方が…沙織さんのですと…こう、服を胸で引っ掛けた方が宜しいですか？』

『…華は、躊躇なさすぎ…』

無線を通して…5人の姦しい声が聞こえてくる…。

バタバタと、色々と音が激しい…。沙織さん…ヤケになってるなあ…。

「隆史」

「……………ハイ」

「何を期待した目をしている」

「してない!!!」



『ほらほらっ！ 麻子お！』

『う…うるさいな!! 私は書記の言う戦闘力がないんだ!! 沙織が、送りたいれば勝手に撮ればいいだろ!』

『…冷泉殿が、遠まわしに諦めてる……』

『こういうのは、自撮りの方が良いんだって!! 隆史君、喜ぶよお?』

『さつきから、なぜやったらと、書記の名前を出すんだ!! ワザとらしいぞ!!!』

『…この方が、手っ取り早いからよ。ほら…結局、みぽりんもゆかりんも、早々に諦めたでしょ?』

『……』

『うんっ！ 華は例外!』

▽

と…特別にお願いした訳じゃない…。

雑誌の…特に、1冊の雑誌がヤバかった。これ…ただのエロ本だろ!?! って感じの女性向け雑誌…。

インターネットが復旧して、簡単に情報なんて入るだろうが…なぜだろう?

この雑誌は、それらに喧嘩を売っている様な内容…過激と言うか…よく発行できたな? といったご内容。

写真付きで、丁寧に…解説…どうりで、熟読されている沙織さん、行為自体の大体の意味をご存知のはず…。

彼氏を…とかの記載じゃない。男を喜ばすって、やたらめったら書いてあったね…。

…。というか…成人向けって…隅っこに記載されてましたけどね…。

無線機から、みほの「…こんな感じですか?」とか、沙織さんに聞きながら、撮影をしていると思われる声が聞こえてくる…。

優花里もすでに諦めたのか…モゴモゴ言いながら、沙織さんの指示に従っている…。

「……」

沙織さんの写真自体…：すげえ破壊力があつた…：というか、恥ずかしいからと、目を手で隠しているのが余計に…。

というか、完全にアツチ系の写真だ…：はい。援助してね？ の、写真…。

流出なんてもつての他な為に、ちゃんと大事にネット環境にない方に保ぞ…：「タカシ」

「はいっ!? なんすか!?!」

「…携帯なつたな。また」

バイブ音を聞かれた…：ああ…：脚の上に座っているから、振動で気がついたので…。

……。

え？ マジで送ってきたの？

「…今ので、5回目だな」

「……」

「ご…五人分…。」

「……」

「……」

「…見ないのか?」

「み…見ません」

「遠慮するな…：……」

「ミロ」

命令口調…。

!?!

「分かった! わかったから、ポケットをまさぐらないで!!」

「……」

仕方なし…：携帯を取り出した。  
というか…。

「ほら…私の目の前で見せてみる。見られるとマズイノカ?」

「…そ…そりや…：……」

「……」

はい、やはりメールが、5通分……いや、今……もう一通届いた。  
ああ……やっぱり……写真が、添付されてる。

携帯の画面から、横目でまほちゃんを確認。

……すつげえ見開いた目で、携帯画面を凝視しているヨウ。

「ヒラケ」

「

有無を言わさない……しかし、この写真は間違いなく如何わしい。

しかも俺に送ってきているのだから、まほちゃんに見せるわけには

……あ。

携帯を奪われた!?

「……タカシ」

みほのメールを開いていた為、すぐに操作ができたのだろう。

題、本文は特に無し。

ただ添付ファイルのみのメール……

よって……すぐに開けたのだろう……

「……人様の携帯を勝手に見る。そんな最低な事をしている私の口から、言える事では、ないのかもしれない」

「お……お構いなく……」

ああ……画像……画面いっぱい広がってる……

まほちゃんを後ろから抱きしめる……様な格好の為、結局はまほちゃんの手元にある俺の携帯をいっしょに見る格好になってしまっている。

取り上げようとすると……また……

「しれないが……隆史。お前、人の妹になんて格好をさせている」

「させてない!! させてないよ!!」

画面は……。というか、画像は……

また目を手だけで隠し……M字開脚で、下着を露出して……更には胸まで服を捲った……立鏡に映った、みほの姿。

立鏡まで用意してるし!!!

少し、恥ずかしそうに顔を軽く背けているのが……というか!!

いきなり難易度高いのクリアしてきたな!!!

「他の子は…」

沙織さん…多分…みほにこの格好を教えたのは、彼女だろう…。  
みほと同じ格好をしているのを送ってきました。…下着……………  
つけてください……………。

あれ!? 沙織さん、ここまで大胆だっけ!? 結構、恥ずかしくって  
…大洗だと写真消して来たのに!? なんのとは言わないけど!!

優花里は、胸の下着を露出して、前回の沙織さんと同じような…格  
好…。

マコニヤン…ロングスカートだったんね…口で啜えて、下の下着を  
露出…。

華さん!?

寝そべって…携帯を上にかざして、カメラを自身に向けたのだろ  
う。

フロントホックなんすね…、胸の半分を外側から少し隠して…いや  
…脚を曲げているから…下もすげえ事に…。

「何を見入っている」

「イマセン!!」

いたけどね!!? そりや見入るよ!! 皆、目だけ手で隠してるし!!

何、この写真!!

「隆史、お前…年頃の娘に何をさせている…というか、なんて格好を  
…」

「させてないよ!?!」

「……………」

あ…あれ?

特にその画像を消す事もなく…更に携帯の…画像ファイルを開き  
始めた!?

とうか、躊躇ないな!!

「なに…どうせ消したとしても、また送られれば同じ事だ」

…あ、はい。何も聞いてないけど、ご解説どうも…。

まあ…見られて困る写真なんてないから良いけど…。

ネットに繋がっていないノーパソに…

「…随分と…ふつ。懐かしい写真まで入っているな」

子供の頃の写真を開いて、スライドをしている…。

古い携帯から機種変しても、写真だけは、携帯に移してていたからな。

「…この会話内容の流れで、それを見られるのは…ちよつと…キツイ。」

昔の…まほちゃんとみほ…はい。

しほさんも…はい。ちよつと睨まないでください。

幼少時の…小さい頃の愛里寿。

「…私のカードの写真？」

ああ…エリリンに送った写真か…。

流し見をする様に…少し止め、スライドをして送るを繰り返している。

「…では、隆史。この写真の詳細を教えてください」

「は？ どれ…うっ!!」

「この赤毛の…ツインテール？ という、髪型だったか？ この娘

の写真…」

「

「…この娘…みほが、小学校の時の友人だろうか？」

「

「…今、送られてきた…如何わしい写真…という訳では無いが。随分で、随分な格好だな？」

「

「…なんだこれは？」

「

「小学生だったが…私に対して、あそこまで意見をした娘だ…そんな娘が…」

「

「…どうして、お前に写真を送ってきている？」

「あ…え…その…あのですね…あ…」

「ふむ…隆史が、そこまでどもるか…」

まだ、なんも言っていないよ!?

多分、現在通っている…ドイツの学校…。

そのパンツァー・ジャケツトだろう。

その服を着ている写真だから、別に如何わしくないよ!?

…ただ、練習後なのか…ちよつと…まあ。前が開いて、汗でインナーがくつついて…。

……。

「…ちよ…ちよつと、彼女、ドイツで…」

「ほう? 彼女はドイツに留学でもしたのか? で? ドイツ? …

遠いな。遠距離で…この写真か?」

」

何を言っても墓穴掘りそう!!

「後……………ふむ。お母様の如何わしい写真は……………良し良し…無いな」

「ないよ!! 何をチェックしてるの!?!」

◇

「結局…撮って送ってしまった…」

「これで皆、一緒ね!!」

「うう…」

「あれ…あの写真…絶対に隆史君、保存する…」

「楽しかったですね!!」

「元気が良いのは、武部殿と五十鈴殿だけです…ああ……………もう…」

「これで、私の番はもういい? 終わっていい!?!」

「もういいです…なんか、余計に被害を被りそうです…」

「沙織…どこが普通だ…」

「アレじゃないですか? 麻子さん」

「五十鈴さん? 何がだ?」

「沙織さんも、隆史さんに毒されてる」

《 …… 》  
『 はあい、そういった訳で、次ですねえ!？ 』  
『 はっ!？ 』  
『 そうね！ んじや、麻子？ 聞かせてね!？ 』  
『 なっ…いや…その… 』  
『 麻子のラブホ話!! 』  
『 なああ!?!? 』  
『 ごめんなさい、麻子さん 』  
『 西住さん!？ 』  
『 こう言つては何ですが…バレバレです… 』  
『 結構、冷泉殿つて分かりやすい所ありますよね!! 』  
『 があ…皆、一気に元気になつたな… 』

◇

「むっ!! ラブホ!？」

「まほちゃん!？」

あれ!？ いきなり意識が、無線機に移つた!？

良し! ……良か無いが、今は良し!!

「そうだな。この娘の事は、後日でも聞ける。覚悟しろ」

移つてなかった…。

…。

なんだろう…先程から、まほちゃんが…たまにモジモジしている…。

脚の上だし…結構感覚で分かるのだけど…今もまた。

しっかし…変にぶつ壊れた環境に慣れてしまつている為か…結構な下衆行為を聞かれているというのに、普段と余り変わらない態度を彼女にしてしまっている。

それにまた…彼女は、普通に応える。

その態度…その対応が、異常だと…すでに異常な俺は気がつかない

かった。

また、ゴソゴソと動いているまほちゃん。  
……。

あの…なんで、こちらに体を向けたのでしょうか？  
なんで、しな垂れかかってきたのでしょうか!?

「先程の娘も言っていたが…ラブホテルとは、アレだろうか？ その…  
そういった事を目的とした、複合施設だろうか？」

「複合施設!？」

「…お前は、節操が無いな」

「」

「……………ふむ」

「ま…まほちゃん？」

「この話は…興味がある。非常にあるな!」

「はいっ!？」

少し、体に体重を掛けられた。

その為に、少し体が傾く…って、なんで押してくるの!?

狭い車内…倒れそうになった体を両手でつき支えると、更にまたその上に…。

彼女の顔が、目の前にある…目が爛々と鈍く光っている…。

少し…呼吸が荒い。

お…え？

「なに…後学の為だ…知識は…武器だからな…」

どこかで聞いた事を…。

そこで思い出した…初めに言っていた事を。

みほから全て聞いたと言っていた彼女…。

まさか…。

四つん這いになって、迫ってくる彼女。

試しに、腰の辺りに手を添えると…。

「…………」

一瞬…目が動いた気がした…ピクツツと…。



撫でる様に…それこそ尻付近に手動かすと…抵抗しない…ただ  
…こちらをまつすぐ見てくる。

…マジデスカ？

そう…でも、これは悪魔で試しだ。

すぐに手を離し、また体を支える為に、地面に手を着く。

「…チツ」

舌打ち!?

今度はちよつと、目が細くなった!?

「みほは…キスは、するなと言った…」

「!?!」

顔が近づく!? えっ!?

見知った顔が、徐々に……だけど、見知ったはずのその顔は…どこ  
か知らない顔だった。

ゆっくりとだが、徐々に詰める距離…。

視線が、唇に集中してしまう。

と…その唇が…小さく動いた。

「…だが、それを守る義理は……な…」

息が掛かる距離に……

…

…

…

「尾形ー!! まだいるかあ!？」

軽い音がして…真上から声が聞こえた。

同じく軽い口調。ある意味で、日常の声。

軽い音は、どうしても開かなかつた、戦車の上部ハッチが…開かれ  
た音だろうね…それと…

「なあ、もういいから、ナンパ行こうぜ。中村いるから…かん…た…」

「林田…お前。中に西住さん達がいたら、どうするつもりだった…ん…だ…」

「チッ!!」

うっわ!! すげえ! 舌打ち!? 絶対に聞こえる様にしたよ! 今っ!!

そのまま、ゆっくりと体を離し…つて、なんでまた脚の上に座るのさ!?

「ナンパか。お盛んだな? 隆史」

「…いたな。西住さん」

「…いた」

「」

「…すまん、尾形。うん、本当にすまん。邪魔した…」

「…申し訳ございませんでした」

「まてッ!!! 待て中村!!! 林田!!! ハッチを閉めるな!!!」

「ああ…そうそう…。確か、隆史の友人で…中村…くん? 林田…くん…と、言ったな」

「」

俺の無情な叫びも虚しく、今まさにハッチが閉められようとした瞬間…まほちゃんが…。

「顔は覚えた」

「」

そつと……優しく……ハッチが閉じられた……

あいつら……速攻で逃げた……

「……邪魔が入ったな。仕方がない」

「仕方がない!?!」

「さあ次だな、次。あの背の低い子の話だな。為になる話しだな」

「……」

今の行動は行動で……

だが、すでにまほちゃんは、無線を聞く事に意識をシフトしたのか

……今までと完全に同じ体制。

真正面に無線を見つめ……非常に楽しそうに言った。

「さあ……本当にタノシミダ」

※ルート 壊※ く女子会です！く その しい

『うう…』

『あ、でもですね？ そもそも、麻子さんは、どうして「らぶほてる」なる施設に赴いたのでしよう？』

『そういえば、そうだよな。麻子の事だから、自分で誘うとは思えないし…』

『まあ、隆史君からだろうけど…』

『ちよつと待ってくれ。だから、なんで、そんな所に入ったのを確定して話を進めているんだ!?!』

『違うんですか？』

『ですから、バレバレです…』

『麻子…諦めが肝心だよ?』

『沙織。嗜める様に言うな』

『でも、入ったんでしよう?』

『…ぐつ…』

『はいはい！ では、まずは経緯からですねえ!!』

『ほら…華のエンジンに、火が入った…』

『…こうなった五十鈴殿は、止められませんね!!』

『分かった!! 言う!! 言うから、取り囲むのをやめてくれ!!』

『そうそう…。最初から素直に吐けば良いのよ…』

『…沙織。自分の番が終わったから、急に元気になったな…』

く

な…なに？ まほちゃんの様子が、おかしい…。

先ほどの中村達に対してもそうだけど…俺に対しても…。

あそこまで接近してくる事にすら、躊躇が一切感じられなかった

…。

「…」

今も俺の脚の上で、体育座りの様に座り、背を俺に預けてきている。顔はまつすぐ、無線機へと向けて…。

「あの…まほちゃん。あいつら、外にいるかもしれないし…無線機を…」

「大丈夫だ、問題ない。気配がこの戦車倉庫からすでない。それこそ、走る様に出て行つたな」

「ナゼワカル!？」

「そんな事より、ほら…ハジマルナ…」

「……」

◇

『…確かに私は、ラ…ラブホテルへと連行された』

『連行…』

『まあ…正直、そういった行為をする事を目的とした施設だろう？ 意識してしまうと、かなり恥ずかしかった…』

『そうですね!!』

『…あ、うん…元気いいね、華さん…。私の時もこうなるのかなあ…』

『西住殿。すでに諦めてますね…』

『う…うん。華さんすつごいグイグイ来そうで…なにを言っても無駄そうで…今のうちに考えておかないと…』

『…そうですね』

『まあ、切掛は、書記がいつもいつも、私に意地悪ばかりするから…。その事で、抗議した事が始まりだった』

『意地悪…』

『そ…その、私はそういった行為の最中、恥ずかしいから声を良く殺すのだけど…な』

『まあ…うん。正直恥ずかしいよね。自分でもコントロール出来ないし』

『たまあに、演技をする女性もいらつしやる様ですが…隆史さんの前では、無駄ですよね! というか、無理です!!』

『西住殿が、ちよつと遠い目をしています…。というか！ 皆さん、もはや普通に言ってますよね！』

『あ…うん。今更だよね…。自分でもどんな声出してるか、分からないほどにされる時があるし…』

『最後には、絶叫させられているからな。夜中、聞こえて来る時があるぞ』

『うう!?!』

『…あら、お恥ずかしい♪』

『あ、みぼりんが目を逸らした。華は…だからなんで嬉しそうなものよ』  
『でだ。あの変態、どうにも私にも声を上げさせようとしてな…。朝、寝ている時に不意打ちとか、よくしてきて…まあ、こちらも意地になつて、枕とかで口元抑えて我慢…いや！ 声を出さないようにしているのだが…』

『やりそう…』

『タラシ殿ですしね…。あちらも意地になっているのでしよう』

『容易に想像できますね！』

『…麻子が普通に話し始めた…そして皆もすつごい普通に納得している…』

『だがな、あの変態!! その割に、声が出せない場所ばかり選んでるじゃないか!! 公衆トイレとか、人が来そうな所ばかり!!』

『あ…そうですね』

『あ…』

『そうですねえ…また、それも「すりる」があつて、良いんですけど…電車は流石に凄かったです!! 優花里さん!!』

『夜の公園でした…。覗きとがいたりとか耳元で言われて…散々場所を意識されましたね。西住殿!!』

『私も、公園…昼間だったけど…。後は、そ…その。お店の試着室…とか? 鏡の前で…うう…』

『……』

『沙織さんは?』

『…皆が、躊躇無く吐きだした…』

『沙織さんは？』

『……』

《……》

『わ…私の部屋のベランダ』

∨

「」

暴露しすぎだ…流石に暴露しすぎだ!!!

普通の会話をしているかの様に、淡々と喋らないで!!

いくら同性でも、引かないか!? まあ、引く行為をしてるの俺だけ

ども!!!

「タカシ」

「ビクッ!

こ…こちらを、見もしないで…

「お前は、スゴイナ」

「」

ぜ…絶対、褒めてねえ…。

∨

『ま…まあ、そんな訳で…その事を、そのまま言ったら…』

『言ったら?』

『じゃあ、声を思いきり、出せる所に行こうか? と、すつごく悪い顔

で言われた』

『なる程』

『テンプレですね!』

『普通に言いそう…』

『麻子…それ、誘導されてない?』

∨

「皆、慣れてるな!!」  
「」

ふ…普通の会話の様な流れで言われてる…。

◇

『五十鈴さんは、学園艦にあるホテルだったか?』

『そうですね、学園艦にある施設ですね』

『そうか…私もだ。陸まで降りるつもりだったのだが、あつたんだな…学園艦にもそんな施設…と、驚いた』

『ま…まあ、住んでいるの学生だけじゃありませんしね』

『でも、麻子。余り頻繁に行かない方がいいよ?』

『行つてない!! 一回だけだ!!』

『うくん。あそこの区画付近つて、ちよつと如何わしいお店もあるからなあ…。風紀委員の人達、たまにいるよ?』

『…え。というか、詳しいな、沙織』

『学園艦に住まう者としてのイッパンチシキダヨ?』

『…あつ! そういえば、私見ました。園さんいましたね』

『…は? えっ!?』

『まあ私達には、気づかなかった様ですし、大丈夫でしょう。すぐにどこかへ行つてしまわれましたし』

『そ…そうなのか? あ…危ない…。そど子なんかに、あんな所に入っているのを見られたりしたら…』

『即、生徒会長へ情報が流れますねえ!』

『だから、なんで嬉しそうな、華…』

◇

つつつぶねえー!!



知らなかった!! 華さん気づいていたら、教えてよ!!

……。

……いや、それって本当に、俺達に気がついていなかったんだよな？

ま……まあ! 大丈夫か!!

気がついていたら、速攻こちらに何かしら言ってきたらいい!!

いやあ……危なかった。

「……隆史。顔の色が優れないな? まあ……良い顔色など、先程からしていないがな」

「」

◇

『はああい!! では、本番ですなぁ!!! でえ!? どうでしたあ!? 麻

子さん!!!』

『……』

『華さんの勢いが増した……』

『ご休憩でした? お泊りでした? あ、お泊りなら、流石に私達も気がつきますよねぇ?』

『……五十鈴さんの食い付きが、コワイ』

『ま……まあ、休憩という奴だったが……。初めて入ったのだから、変に緊張してしまっただけ……』

『麻子、回るベットって、本当にあるの?』

『それこそ、書記に聞け。私は知らん。……ん? 回るベットって何だ?』

『……それで、どうだったんですか?』

『西住殿が、前屈みだ……』

『うう……まあ、その部屋……。ホテルの外観の割に、変に高級感があつて……少し薄暗いんだけど、清潔感もあつて普通のホテルかと思つた程だった』

『なんだかんだ、結構覚えてるじゃないの』

『いや…なんとというか、恥ずかしい事の連続だった…。妙に慣れている書記に違和感が凄かったが…そうか、五十鈴さんとで経験済だったからか』

『あら？…私の時も、結構慣れて…麻子さんの後だからだったと、納得してましたのに…』

『え…？』

『…え？』

《……………》

『後で、聞きましょう』

『そうですね！ 西住隊長!!』

『はあい、では続きです』

『何故、進行を五十鈴さんが…ま…まあいい。我ながら緊張でガチガチの状態だったのだが、取り敢えずと、そのまま風呂に連行され…た』

『…取り敢えずって…』

『そこで一緒にお風呂入った…と、いう訳ですかあ…』

『そ…そうだ。しかしな…妙に……なんというか、書記がそこまでは、普通だったんだが…』

『そこまでは？』

『う…うん。風呂の中でも、普通にいつもの書記だった。変にまた、いやらしい事をされるかもしれないと思ったのに、普通に会話して、普通に出た。』

先にながっていてと言われたので、妙に熱い顔のまま…まあ備え付けのバスローブで、出ただけどな？ いかんせんその後、書記が脱衣室から出てこなくてな？

仕方がないし、手持ち無沙汰で…部屋を漁ってみたんだ』

『…部屋を漁るって…』

『あつ！ でも私は分かります！ いろんな知らない物が、いっぱい合ったんですよ!!』

『ん…そ…そうだ。変に薄暗いし、その割に隅っこに設置されている…なんでポットが…とか、冷蔵庫が…とか、思ってた見えていた。』

避妊具とか設置されてるの見て、固まったがな…。そこで思い知っ

た。やはりそういう事をする所なのだと…』

『…冷蔵庫とかは、やっぱり名前にラブがついても、ホテルだからでしようか?』

『でもな…変なのを見つけてしまった…』

『むっ! なんてしようか!?!』

『…華の食い付きが…もういいや。黙ってよ…』

『大きなテレビもあってな、その横…小さな…四角い、いくつも透明なプラスチックの窓と、その横にボタンのある機械だった』

『機械?』

『うん、見たことなかった、変わった形の自動販売機だった。金額も書いてある割に、お金を入れる所もなくてな? 適当にそのボタンを押してみたら、窓が開いた。』

なんだこれは? と思つて、適当に他のボタンを2・3個押していたら…:…:良くわからんが、いつの間にか後ろに立っていた書記が、頭を抱えてた』

『ま…麻子…あんた…』

『そんな事は、どうでもいいです!! それで隆史さんは?!』

『五十鈴さん…結果的に…どうしても良くは無かったのだけど…』

『…麻子さん?』

『どうか!! 書記がそこから、変になつてな!! そもそも、声を出させる、出せる場所! という理由でそこに行つたのを、私は忘れていた!!』

『…変に舞い上がつてたんだね。二人きりで、んな所入つた状況に』

『そうだ! 悪いかあ!?!』

『…麻子さんも、開き直つた』

『書記の奴、本気で私に声を出せるつもりだったみたいでな…:…:なんかもう…:凄かつた…:』

『そこです! そこを詳しく!!』

『…その…:私の…:を…:その、口でしてくれたんだけど…:態々、啜る音を立てるんだ…:もう恥ずかしくてな…:神経を逆撫でするかのように、敏感な場所ばかり刺激して来て…:』

中に舌が入ってきた時…なんか…初めての感覚で、目の前がチカチカした…。体をほぼ持ち上げられている状態だった為にな、逃げるに逃げれなくて…体の中を舐め尽くされると感じる程、ずううと。

正直、胸を触られる事に、私自身抵抗があるのだけど…なんだろう…。散々、ふやけるまでやられた後で…どこをどう触られようと、体が反応してしまつてな…後、その場所という事で…』

『いう事で?』

『馬鹿みたいに、あ……喘いでいた……とお……思う』

《……》

『即、負けてるじゃないの、麻子』

『うっ! うるさいな!! あれは書記がずるいんだ!!』

『ずるいって…』

『で……そこからだ…。そこで出てくるんだ……さっきの自販機……』

『え……』

『ど……どうにも、その自販機というのは、お……おおお……となあ……の玩具という奴らしくて……』

『……まあ、そうだろうね』

『そうだ。沙織の部屋にあるのと同じだ』

『なああ!?!』

『なんだ? バレてないと思ったのか? タンスの下着入れの下に……』

『なんで知ってるのよ!!』

『お前のブラを手にとって、絶望に打ちひしがれていると……下から硬い感触があつてな。見つけた』

『』

∨

なんだろう……そろそろ……死にたい……。

というか、いつそ誰か殺してくれ……。

「……」

しかしナルホド。

下着の下か。

「…おい、タカシ」

「あ、いえ…ナンデモナイツス」

く

『自販機の扉の前に、名称が書いてあったのだが、その時は何か良く知らなくてな…そこで、書記に教えてもらった。……実戦で』

《……》

『な…何と言うのだろうか？ お互い上下逆に…その…書記が仰向けになって、私がそのの上に乗らされて…お互いの目の前には、アレがが…』

『身振り手振りで、説明してくれるのは、良いんだけど…麻子。顔、真っ赤』

『当たり前だろう！ 恥かしいに決まってるだろ!!』

『はああい!! で!』

『ぐっ…。その体制になっても、あの身長差だ…。書記の方は、体がある程度動かせる程、余裕があつてな…。先程その自販機から取り出した物で…執拗に…』

『…』

『話の腰をおらなくなった…。まあいいけど…。沙織の部屋にもあつた…うん。沙織の部屋にもあつた! …棒状の…その玩具とやらで…というか、アレ振動するんだな…。』

『腔内を何か…探す様にゴリゴリと…。書記の指位の太さだったけど…なんだろうか…。動かす度に、声が…』

『なんで、二回言ったア!!?』

『…』

『優花里さん?』

『い…いえ、ナンデモナイデス』

『でも、隆史君の指位って…しっかり見てるじゃない』

『見せつけてくるんだ!!　なんで、あんなにカラフルな色してるんだ!!』

『……』

『みぼりん?』

『隆史君の指位…それって…。沙織さん…』

『あく…うん、私も雑誌と通販欄で位しか見たことないけど…多分…違う方のだよね…』

『?…後、良くわからんが、私にはまだ早いとかも言ってたな』

『武部殿も、西住殿も、なんでそんなに冷静に分析をなさっているんですか…?』

『…で…でだ。膺内の弱点とかを探っている…とか…ここが弱いとか…。ここも弱いとか!　一々、口に出して説明してくるんだ、あの変態は!!』

《シソウ》

『わ…私は私で、その…口でするのだけど…、結構思いつきり口を開けないと出来ないから…余り長くできない…だから…何か悔しくてな。』

先の方とか…横からとかでしてみるのだけど、それをすればする程、玩具を執拗に使用して…。なんか丸くて振動する…沙織の部屋にもあった奴とで…。

とにかく振動がダメだ。外側からと内側からで、声が…。私は口でしている訳だから…変に潜もった声になってしまっ…しかし、その声の方が、書記が喜んでな…もはやどうしていいか分からなかった』  
『だから、なんで私のを引き合いに出すの!?!』

『でもな…?　なんでか分からないが、私がその…ああもういい!　私がいク、タイミングが書記には分かるみたいでな。寸止めを散々繰り返された。』

アレは一種の拷問だな…。ゾクゾクした感覚…何かが来ると思うと、すぐに止める…そして浅い所を攻めるといった様に、何度も何度も…』

《………》

『はっ!　それでだな!　もはや体液で、粗相したみたいになってる』

私に、不意打ちで書記が入ってきた。…思いつきり、私の一番奥にぶつかつたと分かるくらいに、強く。

…一瞬、意識が飛んだなあ…。本気でイクってこういう事か？と、実感させられた。その時点で、声を出す出さないといった事なんて、どうでも良くなっていたな。

いつもだつたら、最初は書記のは、サイズ的に苦しいのだけど、もはや関係ない。ただの快楽しか感じなかった。…声は出ていたと思うけど、どんな声か覚えがない』

《……………》

『そこからは、書記は余計な事は言わなかった。室内に流れる音楽と、体液が混ざる音…体がぶつかる音。…後、私の変な声。それらが響いていた…だけじゃないか？』

書記が動く度に、目の前が明るいのか、暗いのか…それが理解できない程でな？ 何度イったか分からん！』

《……………》

『時間がない…んな事を、たまに書記が言っていた気がした。ああそうか、ここ借りている場所だと、思い出した。その時点でどの位経っていたか知らんが…そこからだ。』

ここまでは、書記からすれば普通だつたみたいでな…今思えば、私のその…おかしくなつたと自身で思うくらいの乱れ方に、変に結構…その…優しくしてくれていたと思う。

でだ。時間を気にした辺り…書記が言った。「本気で行く」と…。そこからは…もう…』

《……………》

『脚を上げられて、書記が上から…その…打ち付ける様に、下へと入ってきたんだ。書記のアレの…全体を私に擦りつける様に。もう…何をどう叫んだか、分からん。』

体に力が入らないし、それこそだらしない顔にでもなつたんだろう。事が終わったら、変に心配されるくらいにな…あの変態…。その割に、変な所を気にしてな？』

安全日だつたから、別に構わないと言つたのだが…避妊具をして

な……。その割最後には、態々それを外して、体に……って。どうした皆？ 黙ってしまっただけど……？」

『思いの他……ま……麻子が、一番生々しく説明するから……びっくりして  
いるんだよ……』

『散々言わせておいて、それは酷くないか!?!』

《……………》

『皆、何故、目を逸らしたんだ?』

『麻子さん』

『西住さん?』

『さ……最後の、本気の隆史君って、その……脚を持ってって言われました  
よね?』

『う……うん』

『それって……』

『?』

『(……で、……………のまま……)』

『(……! そ……そうだ!』

『(隆史君が……には……杭……で、……よね?)』  
『(!?!)』

『何故、この話の流れと空気で、態々みぽりんは、耳打ちしてるんだろ  
う……』

『えっ!?! いや……その……』

『……沙織。アレは露骨すぎて、私でも言わなかったんだぞ? みんな  
の前じゃ、それは無理だ』

『……なに、されたんだろう』

『簡単に言うと、書記の必殺技だな。……内臓を引きずり出されそうに  
なる……』

『怖いよ!?!』

『わ……私、それはまだ未体験です!!』

『華!?!』

『……それは……今度、私もお願ひして見ましょう……』  
『……五十鈴さん』



『麻子さん?』

『……や……やめておいた方が良く……思うぞ?』  
『?』

∨

「……………」

ま……まほちゃんが、完全に沈黙した。

何故か、体を縮こませてる……。

手を前に回し……完全に体育座りで……

……うん。それはそうと、杭打ちは、正直やりすぎたと……思ったり  
ます。

∨

『はあ……んで? 麻子。その後は、普通に帰ったの?』

『……………』

『麻子?』

『……帰った』

『う……うん?』

『丸型の玩具……あそこに入れられた状態で……』

《……………》

『余韻と、足腰がおかしくなっていたのもあつてな!! うまく歩けな  
かった!!』

《……………》

『……それ……いつの事か、分かりました……』

『はい。隆史さんと一緒に、フラフラで帰ってきた時、ありましたね  
……』

『……………』

『……確か……その夜、麻子さんが隆史さんのお部屋に、忍び込んだ日で

したっけ?』

『なあ!?!』

『そうですね! 体調が悪いと思っていたので、何も言いませんでしたけど…その様な理由が…』

『わ…私達の声もそうですね…あの家、造り自体は結構、古いですがらね。人が動く結構分かりますよね?』

『階段を上り下りする時とかもそうですね』

『で? 麻子。その忍び込んだ時の事は?』

『言わない!!! もう言わない!!!』

『ああ、沙織さん、その日は、特に何もなかったかと…』

『五十鈴さん!? なんて分かるんだ!?!?』

『え? 匂いで』

《……………》

『結構、特有の匂いがしますから。即分かりますよお?』

『怖っ!?!』

『…その割には、その日私が、帰って来た時は分からなかった…ああ……出るとき、お風呂に一度入ったからか…』

『そうですねえ。石鹸の様な香りには、気が付きましたけどね? 敢えて聞きませんでした。あ、でも…玩具…ああ、それで…』

『分析、納得を繰り返す五十鈴殿が、もはや普通にすごいです』

『も…もう、いいか!? 冷静になると、物凄い恥ずかしんだが!?!』

『はい! 結構です!! とても為になりました!!』

『なにがあ!?!』

『……………』

『優花里さん?』

『そうですね? 薄々感じていましたが…アレは、冷泉殿のセイだったのですね?』

『!?!』

『タラシ殿…冷泉殿で味をしめて…くう…』

《……………》

『優花里さんのお話…。また聞きたくなりましたあ』

『五十鈴殿!? も…もう話しませんよ!! 嫌ですよ!!』

『あらあ…残念です』

『何かわからんが、すまんかった…秋山さん…』

『いえ…』

《……………》

『…あの…』

『華?』

『とても、お恥ずかしいのですが…』

『なんですか?』

『私もそうですが…皆さん、結構赤裸々に語って頂いて、とても良かったのですが…』

『そうだね! すんごい、恥ずかしかったよ!!』

『…で、ですね…? 結構、想像してしまいました?』

《……………》

『…私…今、多分……下着が凄い事に…』

『華あ!! なんちゆう事を、カミングアウトするの!!?』

『だつ! だつてっ!! 特に麻子さんが凄かったんですもの!!』

『わっ!! 私か!』

『自身で、お語りになっても、そうじゃございませんか!』

『……………』

『麻子!! 確認しないで!!!』

『残るのは、みほさんだけです…皆さんのお話を聞いて、思ったのですが…』

『いいっ! 言わなくていいよ! 華っ!!』

『いえね? 少し話は変わるので…結局、私達…隆史さんに何も出来ていないと…』

《……………》

『みほさんは、隆史さんに勝てました?』

『な…何を持って勝てた? っていうのも、ありますけど…多分……負けてます』

『そうですよねえ、惨敗ですよねえ…それはそれで、私としては、喜ば

しいのですが…』

『華が何を言いたいのかが、ワカラナイ』

『いえ、みほさんのお話を聞く前に…ちよつとご提案が…』

『この五十鈴殿は、ロクな事を言いそうにナイデス』

『私達は、あんこうチームです!!』

『…何故今、チーム?』

『私達、一人一人では勝てなくても、全員でかかれば、隆史さんとはいえ、籠絡できると思うのです!!』

『は?』

『しっかりと作戦を練って!! …まあそこは、隊長のみほさんにお任せしますが…それで…』

『はい!? 私!』

『…まさか…五十鈴殿…』

『5名総掛かりで、攻めましょう!!』

《……………》

『わ…私の親友が、ついにトチ狂った…』

『むっ!! 失礼な!!!』

『総掛かりって…』

『いいんですかあ? 毎回毎回、隆史さんにヒーヒー言わされて?』

『私は、結構ですけど!!』

『ヒーヒーって…華…。何が言いたいかわからないヨ』

『逆にヒーヒー言ってる、隆史さんも私は、見てみたいのです!!』

《……………》

『弱ってる隆史さんを、私は愛玩したいのです!!!』

《……………》

…何を言っているのだろうか？ あのお人は。

愛玩したいって、意味わかって言っているのでしょうか？

……。

「……………」

し…しかし、まほちゃんが動かないな…。

先ほどの内容を聞いていても、一言も喋らないし…。

というか…俺。この状況に完全に慣れてしまった…。

∨

『わっ…私は、見てみたいです!!』

『みぽりん!』

『…弱ってる…隆史君…愛玩…』

《……………》

『ウフフ』

《!!??》

『な…なんだ、今の西住さん…』

『五十鈴殿、以上に怖かった…です…』

『わくわく』

『華!』

『皆さんが協力してくれるなら…そうですね…それなら…』

『あの…みぽりん？ ちょっと…流石に…全員って…それに愛玩つ

て…隆史君、可哀想じゃ…』

『隆史君を愛玩する為なら、手段は問いません!! そうですね…その

時だけ限定的に、キスを解禁します!!』

『じゃあ! しっかり作戦練らないとね!! 後はみぽりんの体験談を

聞いてっ!!』

『そうだな。書記のパターンを把握しておかないとな!!』

『そうです!! 情報は力です!! 私も協力は惜しみませんよ!!?』  
『でしたら、恥ずかしいですが、もう少し情報を提供します!!!?』

◇

全員、綺麗に手の平返した!?

何言ってるの皆!!??

「……」

はあ……

撃って良いのは、撃たれる覚悟がある者だけなんだけどなあ……ミ  
ナ。

……。

……。

あの……それにしても、今のとんでもない発言にも、まほちゃんが反  
応しない。

ただ……小さくなっているだけだ……。

流星に……許容量を超えてしまったか……

「あの……まほちゃん?」

「ふっ!!」

……

「……あの……まほちゃん?」

少し、弾みで太もも付近を手が掠った。

即座に体がビクツと、小刻みに反応した……。

……。

……あの……まさか。

お……怒られるだろうか?

即座にこんな選択肢を、躊躇なく選んでしまう俺もおかしいの  
だけ……。

……だけど……。

手の平で、少し太もも……その外側を摩る様に一度、触ってみた。  
スツと触り心地の良い、感触……。

「んっ……」

……。

……。

何？ 今の声……。

「っ……次は……みほの番だな……」

誤魔化す様に、声をだした。

……え？

もう一度触れてみる。

シュツと音が出るほどに……。

「んうう……」

……。

マジデ？

もう少し……。

もう少し……。

「さ……さあ。はっ……。タノシミ……んっ！　ダ……ナア……」

※ルート 壊※ く女子会です！く その ごお

彼女も年頃だ…とか、そういった話ではもはや違うのだろう。

—ここまで4名。

直接的な…というか、露骨すぎる話を散々聞かされた後だった。感化されている…。

体育座り…とでも言うのか、その白い脚を曲げて座っている彼女。試しに…というか、確認的な意味もあり、少し…そう、少しだけ彼女の脚に触れてみると…。

…。

少し、潜もった声を、静かに吐き出していた。

「さ…さあ、最後はみほの番だな…」

「」

タノシミ…。

毎回毎回、そう言って来た彼女だったが、今回は様子が違った。

完全に居座り、無線の垂れ流しになっている音声を聞こう。…そういった姿勢では無くなっている。

あの…。

「なんだ？」

「なんだ？ って…なんでこちらを向いたのでしょうか？」

「気にするな」

「気にするよ!!」

座っていた体勢を回し、四つん這いになって、こちらに体を向けてきた。

迫り来るまほちゃん…といった具合に、どんどんと距離を詰める。

…というか、すでにほぼ密着状態だったし、即座にゼロ距離となっている。

無意識に背を引き、後ろへと腰を擦る様に後退。

また、それに合わせ、体をすぐに密着状態へする為に、体を寄せてくる…。

正直に言おう。



そろそろ、理性がモタナイ。

無線機の向こうでの、彼女達の話は、当然俺がしてきた事だ。よって…話を聞けば聞くほど、その時の情景を思い出す……。

ああそうです。ぶつちやけた話、勃ってます。

そりやそうだよ！ 言い訳のしようがないさ！ あそこまで…。せめて、目の前の彼女にはバレない様にと思つて、腰をすんごく引いていただけ…。

目の前の彼女の、女の匂いとやらもすぐくて…結構…。

「……そこまですべてになっているんだ。疎い私でも、分かるぞ？」  
……。

気にしていた事を、目線でハッキリと断言されてた。  
若いつ体つてのも…結構、大変だ…。

▽

「じゃ…じゃあ、私の番だね…」

「はい！ みほさんのお話、楽しみですっ！」

「私…ちよつと冷静になつて来ましたが…」

「華だけずううと！ …フルスロットルだね…」

「………」

「うくん…でも、私の時は、結構普通の時が多いかなあ…」

「…：先程、昼の公園とか、試着室とか言っていますでした？」

「ああうん。変な時は、変なんだけど…」

「西住さん。「態」の文字を忘れてるぞ？」

「麻子…」

「あはは…。えつと…でもね？ 最近じゃ本当に普通なの…」

「…こんな話をしている事に流石に、西住殿も慣れてしまわれた…」

「みほりんも、普通に話し始めたしね…」

「体を触られるって、言うよりも…撫でてくれるし。髪の毛とか頭

と一緒に撫でられる時とか…』

《 …… 》  
『 その…さっ！ 最中うう……に、私の反応見て、明らかに気を使ってくれてるし…。変に強引に？ 何かエッチな事をするってのも…最近は何もないかなあ… 』

《 …… 》  
『 ……少ないって言う事は、少なくとも有るって事だな 』

『 う…動きながら…その……し…舌ペロでっ…キスってのも…結構…してくれるし… 』

《 …… 》  
『 そのまま手を繋いでくれるってのも……好き…… 』

《 …… 》  
『 みぽりんの事だから、がんばったとは方だとは思うけど…… 』

『 これって…ただノロケを聞かされているだけの様な気がします… 』

『 ……してくれるって… 』

『 …… 』  
『 短い話しながらも、書記の態度の差が、少々気になるが…まあ、そこは…な 』

『 皆さん!?! 』

『 …… 』  
『 違います!!! 』

『 …… 』  
『 華っ!?! 』

『 …… 』  
『 こんな話じゃないですっ!! 私、みほさんに期待していた話は、こんな話ではありません!!! 』

『 ……五十鈴殿、なんで泣きそうな顔しているのですか? 』  
『 ……知らないわよ……って、本気で落胆してる… 』

『 ……彼女さんのみほさんですから! もっと……こうっ!! ないのですか!?!?!? 』

『 ……そ……そお、言われましても…… 』

『五十鈴さん…目が必死だ…』  
『みぼりんも、本気で困ってるって事は…さつき言った以上の事は無いのかな?』  
『でもタラシ殿ですよ?』  
『うゝゝ…ん』  
『こう…学校の踊り場で、私に見られながら…っ!! あの時みたいに、ちよつと逆の立場ならつと、羨ましく思えた程の事、ないのですか!?!』  
『ふえ!?!』  
『ちよつと待つて華。なにそれ』  
『…あの変態…』  
『ま…まさか…あの時…』  
『本当にないのですか?! えつと…そのっ!! みほさん、お口でするのお好きでしたよね!?!』  
『はっ!! はつきり言わないでください!!』  
『真つ赤になってるけど、みぼりん。…否定しない』  
『とんでもない所でっ! とか!?! こう…人に見せつけながら…とか、ないのですか!?! 隆史さんなら、その位の事、やってのけるお人ですよね!?!? それにお応えできるのが、みほさんですよね!?!』  
『…何をあそこまで、華を焚きつけるのだろう。すこし引いてきた…』  
『五十鈴殿の、西住殿に対する期待度が凄かったんでしようね…』  
『華の中の隆史君って一体…』  
『…全否定できないのが、タラシ殿ですが…夜の公園とか…:はは…』  
『何を言っているんですか!! 見せっ!?! 見せつけっ!?!? そんな事しませんよお!!』  
『でもお!! 先程、日中の公園とか言ってま…』  
『おっ…音だけです!!』

《 …… 》

『 華…スツ…と、静かに座った… 』

『 すっごい安堵の表情ですね… 』

『 …しかもとても良い笑顔だな 』

『 まさに仏の顔… 』

『 では、みほさん？ 詳しく 』

『 …え 』

『 くわ し く 』

『 …… 』

『 すごいな、五十鈴さん…。あれは大体の状況を、一発で理解してる顔だな 』

『 後は確認するだけ…見たいな顔してますね 』

『 はああ… 』

『 く…詳しくも何も…。あ、はい 』

『 み…みぽりんが、華に臆している 』

『 久しぶりに見ました…あの黒い笑顔 』

『 い…言いますけど…。普通ですよ？ 』

『 お願いします！ 』

『 みぽりん…麻痺してるね 』

『 麻痺してるな 』

『 人の事を言えませんがね… 』

『 んと…。その…どこから話せば… 』

『 …… 』ワクワク

『 戦車道の練習の帰り…だったかな？ ちよつと私だけ遅くなった時がありましたよね？ 』

『 えつと…あの日ですか？ エキシビジョンマッチの打ち合わせがあると、みほさんだけ学校に残った… 』

『 そうです。会議自体は、終わったのですが、会長達と少し打ち合わせをして…隆史君もその場にいましたから、帰宅時間が一緒になりまして… 』

『その帰り道ですね!』  
『そ:そうですね。うう:言い辛い。で:ですね? この家に帰る途中:公園って、ありますよね?』  
『ありますね。都合良く人の通りが時間帯によつてまばらの:』  
『おあつらえ向きって奴ですね!!』  
『:』  
『麻子? 顔真つ赤だけ?』  
『い:いや:。気にするな』  
『そういえば!! 麻子さんは、経験者デシタネ!!』  
『ぐつ:。五十鈴さんの察しの良さが怖い:まあ:うん。そ:それで、西住さんも書記に連れ込まれたと:』  
『連れ込まれたって:公園だよ? 麻子、何言つてるの?』  
『:。察しろ』  
『?』  
『まあまあ! でっ!? みほさんは、隆史さんに連れ込まれたんですか!』  
『:』  
『西住殿?』  
『つ:連れ込まれたと、いいですか:』  
『なんですか?』  
『わ:私が、:連れ込んだと、いいですか:』  
『!!??』  
『みぽりん:!?』  
『:西住殿、意外に攻めますよね:』  
『だっ! だつて!! 会議の時なんか、みんなして!! :そのっ!!』  
『ああ:。例のゲームの時の事ですか? :確かにみなさん、目がギラギラしていましたね』  
『:私、参加できませんでした:』  
『:』  
『:』  
『:』  
『チツ』

『あれ？ 武部殿と冷泉殿は、その件知っているんですか？ ……  
すつごい悔しそうですけど』

『…後から、華に聞いた』

『…沙織に愚痴られて、知った』

『ま…まあまあ!!』

『それは、一旦置いておきましょう!? でっ!? 本当に、みほさんか  
らだったのですか!?!』

『う…うん。なんか、こう…色々…一緒に帰ってた時に、なんかこ  
う…隆史君の顔見てたら…』

『見ていたら!?!』

『イラッと…来て…』

《…》

『ま…まあ、気持ちには察しますよ?』

『一瞬顔が、真顔になった…』

『…は…はい!!! それで!?!』

『華…』

『う…うん。それでね? 夕方近かったけど、まだお日様出てたし  
…ちよつと躊躇したけどね? 公園、誰もいませんでしたし…これは  
…チャンスかなあって』

『チャンス…って…』

『正直、麻子さんの事もあったし…で…こういうった所の方が、隆史  
君なんか…すごいですし…で…』

『やっぱり、あそこの公園か…』

『ああ…あの日の…』

『多少? 無茶をされそうだったけど…思い切って…その…』

『みほさんは、結構負けず嫌いですよね』

『そうだねえ…。たまに張り合う時あるよね』

『隆史君を、藪の中に連れ込んでみたの!!!』

《……》

『いや……まあ、あそこ確かに、雑木林があるから、確かに人目には付きにくいけど……』

『冷泉殿と違って、公衆トイレですらないのですね』

『さっ……流石にいきなりは私も、躊躇はしたよ！ 女子トイレでも男子トイレでも、そうそう入れないし入れられないよ!?!』

『まあ……流れて連れ込まれる事まで計算した上ですか?』

『う……うん』

《……》

『比較的に近い場所だったし……その……取り敢えず、木の陰に……』

『……華の目が、すっごい輝きでした』

『本格的に話し始めそうだしな……』

『……結構、話していると、多少恥ずかしい事でも、スラスラと口にするようになってしまいますからねえ……』

『だな……。もう、黙って聞いていよう』

『それで、初めは驚いていた隆史君も、そ……その！ 私から抱きついて！ あの……キ……キスしたら、分かってくれたみたいで……』

『なる程。みほさんはそこで、隆史さんをその気にさせて……場所が場所ですから、何かしらの手を使って隆史さんが、トイレへと連れ込んでくれる様に誘導しようとなさったんですね?』

『そ……そうだけど……』

『みほりんらしからぬ、大胆さもそうだけど……何より、華の察しの良さがすっごい……というか引く』

『すっごい、参考にしていますよね? あの顔……』

『勉強になります!』

『こつち見たな……』

『嬉しそう……』

『私の事はもういいです! で? みほさん! でえ!!』

『う……うん。それで……ですね? 思ったよりも、すぐに隆史君……その気になってくれて……』

『……早いな書記』

『まあ、みぽりんの状況がある程度、察したんじゃない？』  
『……………あんなゲームの後ですからね…』  
『ただ…そのキスが、明らかに…その…えっこの時するの…  
うう…口の中が凄い事に…』  
《……………》  
『す…吸われるのもそんなですけど、あれ…ちよと意識が飛ん  
じやうというか…こう…口内から動く音とか、すっごい頭に響いてき  
て…すぐに頭の中が、真っ白に…』  
《……………》  
『気がついたら、私も…その、動かして…一度、顔を離すと…目  
の前がもう…ぼやけて…』  
《……………》  
『華。…何を期待した目をしているの？』  
『…限定開放…次…』  
『……………』  
『……………』  
『……………みんなの目の色が変わった』  
『そ…それで、隆史君、私のお尻…また揉むように掴んできたら、あ  
…そろそろかな？…って思ったら…』  
『どつちに連れ込まれたんだろう…』  
『私の時は、男子トイレだった…羞恥心で死ぬかと思った…』  
『……………』  
『五十鈴殿が、すっごい楽しそうです』  
『…スカートを捲れて…すっごい、弄られた…』  
《……………》  
『人はいなかったんですけど…その…明らかに部屋でする、いち  
わるしてきて…すっごい、音出すようにかき混ぜてきたんです  
…うう…相変わらず、弱い所を焦らすように…。もう…声を我慢する  
のに必死だったんですけど、それはそれで、その…感覚に集中してし  
まう事になっていまい…』  
『あ…みぽりん、情景を思い出しちゃったのね…完全にスイッチ



入った』

『…凄い事、躊躇なく言いましたよね』

『…あ！でも、それって…』

『まだ、連れ込まれてませんよね』

『う…うん。まだお外だったんですけど、私も頭がボー…つと、しちゃってて…。そ…それで!!…しばらくすると、肩を押さえられまして…その…。座る様に促されて…すぐに彼が、ズボンのチャック下ろしました…。完全におつきくなってまして…あ。これ、はお口でして欲しいのかな?…って、すぐに理解しちゃいました』

《…》

(もはや突っ込むまい)

(今の西住殿に、余計ない事言うと、途中で我に返っちゃいそうですからね!!)

『木の陰だし、藪林で座ってしまえば私は、見えないって言われまして…。でも、幾らなんでも、外でしたし…その内に、すぐ横の通路…ベンチもありましたし、人が通るかもしれないって…それに、当初の目的となんか違う!…とも思いましたし、思考がぐるぐると回りましたけど…』

《…》

『き…気がついたら、すでに隆史君の…あれ…啜えちゃってました…』

《…》

(つ…突っ込まないぞ!!)

(お気持ち理解します!!!)

(華!?)

『そ…それでも、どこか…その…?…冷静な部分もあって…。やっぱり状況に興奮しているのか、隆史君…変に元氣いっぱい…先っぽとか…その間とか…舌先でなぞると…ビクンって体が振動してね?』

…その…あの…ああ、声出そうだけど我慢してるんだなあって思っちゃって…。それば妙に楽しくなっちゃいまして…。

私も私で…やっぱり、恥ずかしかつたですけど、人がいないつてもありますし…自分でも分かる位に興奮…しちやつて…もう…気がつきませんでしたけど…。すごく…その…激しくしてみたいたいです…』

《……………》

(どうしよう！ みほりん、スイッチどころか、完全に華と一緒になってる!! フルスロットルだよ!!)

(みほさん、お口でするの好きですからねえ…話している内に、完全に思い出してしまわれたのでしようね!)

(目と顔が、完全に熱っぽくなってますからね…)

(…私はもう、突っ込まないぞ。黙ってる)

(…)

(華?)

『みほさん。そこで…ですか？ 音…』

『え…ああ。隆史君、お口でする時って音を出して欲しがりますよね？ でもその時は…流石にお外ですし…。音しない様にしてても、何も言っつきませんでした』

『あらあ…』

(っ…突っ込まない!! 五十鈴さんが無駄に残念そうなの、突っ込まない!!)

(…)

『ただ…』

『ただ？』

『その後…その…私達が隠れたのって、ちょっと奥だったんですけどね？ それでも、ベンチからそう離れていなくて…』

『…ベンチ？ そういえば…あるって言ってましたね』

『どうも、そこに人が来たらしく…男性が二人、ベンチで駄弁り出した…って、隆史君が…』

『……………』

(あ…華が黙った)

(目がキラッキラしてますね…余計な事は言わないから、教えてく

れって顔してます)

『わ：私、びつくりしちゃって…。流石に動きを止めたんです…。でも、隆史君：私の頭を軽く押さえて…』

『……』

(華、完全に余計な事を言うつもりが、なくなってるわね)

(今の西住さんには、勢いがあるからな)

(水を差したくないのでしょうか…いやあ…いい笑顔ですね…)

『小声で続ける様に言ってきたんです。気づかれたら、丸見えですけど…声もうまく出せませんでしたし…』

『英断ですね!』

(…っ…突っ込まない…ぞ…)

(武部殿)

(うんっ! 華はもう諦めよう!)

『やっぱり…どこかで、私も麻痺してたんですね。…隆史君がその人達に背を向けて立っている様な体勢でしたし…。』

此方に気がついたとしても、隆史君がただ立っているだけ…にしか、見えないと…説得されたのを、鵜呑みにしてしまい…。

…続けました。

音を出さないというのも、どこかで私にも不満があったのか…少し、ちゃんとできそう…とか、思っちゃいました…。

ゆつくりと…ちゅぷちゅぷ、小さくですけど…音を出すことができませんでした。

口の中が隆史君の匂いで、いっぱい…変に一生懸命になっていました…ふう…』

(……みぽりん)

(すごいですね…。真っ赤になってますけど)

(どこを見ているか分からない目が、ちよつと…怖いというか…)

(…隆史君の前だと、こんな顔するのかなあ…みぽりん)

『でも、小さく出していたのは最初…だけだったみたいで…隆史君の言われるままに…その…おっきな音を、知らず知らずに出していたみたいでした…』

《……………》

(……え。その状況で?)

(音だけ……って、まさか……)

『そ……その……啜る音とか、動かす音とか……もう……すごかったみたいです……。そ……それで、あつ! とか、隆史君が声を出したんです』

『まさか、気づかれたんですか!?!』

『ま……まあ? プレイの一環だろうって、そこで隆史君言ってたんですが、変にそれも納得してしまいました……私の事は見えないみたいでしたし……。』

隆史君が振り向くと、男性二人がベンチから、体を捻ってこちらを見てるって、そこで言っていました。フー……フー……

逆に大きな音を出すようになって、言われましたけど……変に興奮してしまい……音だけならって……聴かせる様に……いつもより大きく、ヂュプって響かせる様に……』

《……………》

『そこで、隆史君……つま先で座ってる私に、脚を開く様に言ったんです……。私……自分で、その……恥ずかしい所、摩っていたみたいでした……。』

口の中は、隆史君でいっぱいでしたし……変に潜もった声も出ていたみたいで……それも気づかれた原因だったんでしょうね……フー……フー……。

摩っていた手……というか、指を……本気で動かしてくれって言われて……。そこで気づきました……。

隆史君の説明で……その……人に気づかれてはいるけど、見られていないって状況っていうのはつきり言われ……。その言葉で……頭の中を更に真っ白にされて……。

言われるがままでした……。下着の横から指を入れて……自身の指先から、熱い程の体温と……ぐちゅって音と、水っぽい感触を……感じたていたら……音を更に出すようになって言われて……。

そ……それも何も疑問もなく、従いました……。そこからです……。

隆史君から、見られてる……すっごい見てる……。言われ続けました

…それにどんどん頭の中が、熱くなって…。

それと一緒に、隆史君をしゃぶる音も大きく…手の動きも早くなつて来て…。

その…えつちな声を、ち…小さくですけど…気がついたら出してしまっていました…。フー…フー…。先の引つかかりから、唇を引く時になんて…すつごい響く音とか出ちやいまして…』

《……………》

(武部殿?)

(……)

(冷泉殿!?)

(……)

『そ…それで、隆史君…私に脚を開いてって言ってきた…だから、つま先で座っている状態から、そのまま脚を開いて…。

その方が確かに、楽でしたが…もう恥ずかしくて恥ずかしくて…。で…で…隆史君も…少し脚を開いちやいまして…』

《!!!?!?》

『ベンチに座っている人達から…私、下半身だけ見えてしまっている状態…いえ、見せている状態だと…言われました。

大事な所は、弄っている手で見えないからと言われても…している行為と…少しは下着は見えるだろう? とか…も…。

それを聞いても、私自身…やめる気なんて、頭からなかったのか…手の…指を動かす速さが、上がったみたいでした…。もう…グツチャグツチャ音が響いてました…。

…恥ずかしい…という、感情がこうも…。それをまた、隆史君が逐一言ってきた…んっ…!

顔を動かす速さも、すつごい早くなって…隆史君も段々と呼吸が荒くなってきましたし…。

だから…こんな状態の私に…その…口内ヘアレが…いっぱい入ってきたら、どうなるんだろう…って…どうなっちゃうんだろう…?

…って…思ったら…』

《……………》

『鼻を抜ける、独特の味と匂いが一気に押し寄せてきて…脚は痙攣するし…うまく座つていられなくなりそうで…大変でした。』

見られてる…見られてる…と…頭の中でずつと繰り返し、思っ  
ちやったら…段々と…私の指の動きの…激しさが増しちやつて…

あ、立ち上がった…と、言われても、手も口も止めませんでした。  
近づいてきた…と、言われたら、いやらしい音が更に大きくなりました。  
した。

それでもどこか冷静で…隆史君の先っぽが少し大きくなったとか  
…そんな事にはすぐに気が付いちやつて…ああそろそろかなあ…つ  
て思ったら…隆史君、急に私のお口から抜いちやつたんです。

ふーふーつて、どこか荒い息遣いで見下ろす隆史君が、あ…アレを  
突き出して…その…自分の手で擦り始めたんです。

だから私も、いつもの様に…その…お口を開けて…舌を突き出して  
…ああ…来る…熱いのがいっぱい来るって…嬉しくなっちゃつて…。

私…もうそこが、お外とか…見られてるかもしれない…とか…殆ど  
頭から飛んじやつて…一瞬、迷ったんですけど…すぐに口の中に来  
た匂いで…もう…頭の中が真っ白になっちゃいました…。

口では全部受け止められなくて…顔中に熱いのと…匂いと…か…  
広がって…それでも、溢れちやつて…で…地面にボタボター…つて、  
音がしました…。

そ…その音で、我に返りましてえええ…とんでもない事しちやつた  
…って、恥ずかしさで首から上が、熱さを通り越しまして…逆に冷た  
いモノを感じちやうくらいでした。

…で…でも…なんか…あああああ…』

『わかります!! わかりますよ! みほさん!! すごいのですよね  
!! それがまた、すごいのですよね!!』

『五十鈴殿…同士を見つけた様な顔を…それよりも…』

『…隆史君』

『書記…』

『そ…外で…それは…』

『そ…そおなんですっ! ベたベたに…それこそ髪まで飛んじやつ

てるしで、隆史君写真まで撮ってるしでっ!!』

《……………》

『でっ!! ベンチの方向なんて、確認取れないし!! その場から動くと、顔を見られちゃいそうでしたしで!! ……本気で困りました』

『書記…あいつ、自分の彼女に何を強要してるんだ。引くぞ……というか…変態すぎるだろ』

『ハードル高いなあ…』

『でもですね!! 聞いてください、沙織さん!!』

『えっ!? 私!?』

『嘘だったんです!!!』

『…え』

『誰もいなかったみたいですよ!! 嘘つかれました!!!』

『え……あ…ん? ベンチの人?』

『口の中がいつぱいで、喋る事もできませんでしたからっ! どうしよう…って、目で訴えてみようと思ったら…』

『思ったら?』

『笑顔で、リップサービスだって…言われました…』

《……………》

『「はい、ネタ晴らし。流石に、そんな事なんてしないよ」って、言ってましたけど…隆史君…言い方が、妙で…すっごくリアルに実況するしで…』

『流石、書記。鬼畜の所業』

『麻子…』

『隆史殿、西住殿の困った顔を見るの……本当に好きですからね…』

『……みほさん。でも…』

『華さん…。そうなんです……批難しても、行為で応えてしまいたし……なんかもう……何も言えませんでした…』

『はあ……余計な事を言うと、その事で突っ込まれて、更に恥ずかしい思いをしそうだと……そういう事?』

『そうなんです! でも言われましたけどね!! ……というか、言葉巧みに自覚させる様に言ってますから……ちよつと怖い……それが

また変に納得してしまい…ああああ…』

《……………》

『……………以上です…』

▽

「…隆史」

「……………ハイ」

「お前は……………その……………。うむ…私にはまだ覚悟が、足りなかったよう  
だ…少々…その……………」

「……………」

「すげえ黙って聞いてましたね…。」

「顔がすごい色してますけど…。」

……………。

だってさ…変に悪乗りしてしまったのは認めるけど、何か言う度  
に、みほ…顔の動きは早くなるし、舌の動きも早くなるしで…なんか  
…調子に乗ってしまいました。

…すごい、エロかったんです。ちよつと不安になる位に夢中で  
…。

今、言わなかったけど…そのフェラオナで、少なく見積もっても2  
回はイっていたよな…みほ。

▽

『え!! 終わりですか!? そこで終わりですか!? 最後までしな  
かったのですか!?!』

『……………うう…。私もそんな状態でしたし……………し……………しましたけど……  
でも、普通でしたし…』

『その普通が聞きたいんです!! すでに場所とか色々、興味が……  
』

『いえ…普通でした!! 後はご想像通りですので!! おトイレです



!!  
』

『……エー』

『すつごい、落胆した顔しないの、華』

『それに、ちよつと問題が…発生しまして……余り言いたく…』

『問題?』

『うう…その……始まつちやいまして…指に……赤いの着いていたので……』

『……ああ』

『それなら、仕方ありませんね…流石に……ん? 普通? 最後まででしたって言っておりませんでした?』

『書記…流石に、引くぞ……』

『あの…みほさん。お気持ちは痛いほど分かりますが、流石に……始まつてしまつてからは、余り体にもよろしくないと…』

『隆史君も……そんな時にもつてのは、ちよつとどうかと…』

◇

「…隆史。いくらなんでも……どうした? 何を顔を背けている。こつちを見る」

……。

生々しいな……こう言つた女子同士の会話は……それよりも…

「…他の娘達も言っているようにな、女性にはもつと…」

……。

問題はソコジヤナイ。

◇

『あはは…大丈夫ですよ。隆史君も、途中でやめちやいましたし……それに…』

『……聞いていた話から、素直に頷けない…』

『いえ…でも…やめたとか言われましたら、余計に…』

『その…お尻で…しましたから』

《……………》

『ク　ワ　シ　ク　!!!!!!』

『華さん!!』

『お…え?　おっっ!!?』

『沙織さん!!』

『五十鈴殿の食いつきが、半端じゃないです…完全に西住殿に覆いかぶさってますね…押し倒してる様にしか見えません…』

『……………』

『あれ?　冷泉殿?』

『…なんだ……なんか、デジャブが…』

『…どうということ!?　どーゆー事お!!?』　全然、普通じゃないじゃん

『!!!』

『沙織さん、落ち着いて!!　というか、助けてください!!』

『みほさん!!　みほさん!!　くわしく!!』

『華さん!!?』

『…ああ…沙織。興味があったのか』

『…そうなんですか?』

『…あの目を見れば、分かるな』

『流石、幼馴染み…ですなぁ』

『はあはあ…みほさあん?』

『分かりました!!　分かりましたからあ!!』

『正直に言いますと!!　少し…入りましたけど……す……すぐにやめました』

『入った!!』

『その…まだ、完全に準備が出来ていなかった……って、隆史君に謝ら

れました…』

『いや…準備って…』

『あ…はい。その…数日前から…その…準備し始めたばかりでしたし…お口でした後…そんな状況でしたが、少し試してみようって事で…』

『カク…：チ…：ヨ、隆史君!! みぼりに何してるの!?!』

『あ…なんか、そんな事を言っていたかも…。順調とも言ってますた』

『ずるい!!』です!!』

『!?!?!』

『そういえば、秋山さんは、あの腐れ外道の事を聞いていても、普通だな』

『え? あ、はい。私、良くわかりませんし』

『…：』ワカツテシマウ、ジブンガイヤダ…』

『…そ…そんな所です…』

『…：うう…少々、物足りないです…』

『話聞く限りだと、隆史君…：みぼりんには、結構…躊躇しないんだね…』

『そこは、流石に彼女さんですからね!! 私にも遠慮しないで欲しいのですが…仕方ありませんね…』

『みぼりん…。隆史君の知識も怖いけど…何をしてるの? 主に!!』

『え…なんか、道具使ったり…腸内洗浄とかなんとか…：良く分かりませんが…とにかく、恥ずかしいですよ?』

『羨ましいです!!』

『華…』

◇

『…：隆史。お前、人の妹に何をしている』

』

「……」

「あの…まほちゃん!? あれ!? なんで顔を掴んだの!? 近づいて顔、近い!! 言葉と行動が合っていないよ!」

〈

「あの…華さん。もういいですか? どいて…ほしいんですけど…」

「…あ。そういえば…」

「聞いてください!!」

「みほさん、隆史さんに口に出されたのって…どうしたんですか?」

」

「え? 飲みましたけど」

「あ、やっぱりそうですか」

〈……………〉

「至極、普通に言ったな…二人共…」

「…よし…。全員で攻めた時、隆史君に聞いてみよう…」

「武部殿も何か、決意を固めた様で…」

「しかし…さつき、私も流されてしまったが…キス解禁は…いざとなると恥ずかしいな…」

「そ…そうですね…」

「楽しみです!!」

「どいてください!!」

「…五十鈴殿が、食いついた…」

「私、ファーストキスに、なりますからね!!」

「わ…私…相手、西住殿です…」

「優花里さん!」

「大洗ホテルの時…隆史殿に言われるまま…あああああ!! なんでしよう!?! ソレはソレで、いいかなっ!! って思います」

「恥ずかしい事、言わないでください!!」

「…あら? では、みほさん。浮気……したのですね?」

「それは、浮気とは違うんじゃない?」  
「……沙織さんは、全員総攻撃の時は、一番最後ですからね」  
「華!? えっ!?!」  
「バレテマスヨオ」  
「……五十鈴さん。本気で恨みがましそうに見てるな」

▽

「どこ触ってんの!!?? まほちゃん、本気で何をっ……って、近いから!!」  
「……」  
もはや、無線の声なんて聞いていないのだろう。  
なんか、とんでもない事を暴露しているのに、完全に無反応だ。  
ただ、狭い戦車の壁に追い詰められた俺に覆いかぶさるように、ジ  
ワジワと近づいてくる。  
「大丈夫だ、ちゃんと聞いている……お前……隆史……」  
あ……はい。

▽

「……」  
「……あの……華さん? 本気でそろそろ……」  
「みほさん」  
「はい?」  
「……みほさんの場合……どこまでが、浮気なんでしょう?」  
「ふえ?」  
「……」  
「あの……華さん? なんで……そんな熱っぽい目で……」  
「……私……みほさんのお話を聞いて……ちよつと……」  
「ちよつとなんですか!? スカートっ!? なんで捲ろうとしている」

「んですか!?!」

「我慢の限界が…」

「手っ!? ふっ!? どこを触って……んっ!!」

「初めての時…隆史さんとの夜を、今……思い出しまして……散々、みほさんとも……その……」

「そうですねっ!! 状況とか色々とおおんん!!」

《……》

「キスは…流石に隆史さんに……とは思っていますが…あの夜の時の事なら…」

「だから、さすらないでっ!! んああ!!」

「……どうしよう。華が、本格的に頭おかしくなった…」

「…わ……私、経験ありますから、なんとも…」

「……沙織、止めなくていいのか? アレ……」

《……》

「見よう!!」

「見ましょう!!」

「…そうだな」

「!!??」

「…みほさん」

「ちよっ!? 華さん!? ふっ!! 指、入れないで……くだ……んっ!

」

「……ここ……凄い事に……音が……」

——ブツ

∨

バッテリーが切れたのか……急に音声が途切れた。

多分……家の方の無線機が、落ちたのだろう。

……なんか……百合展開……。

ものすごくここにきて、勿体無いと思ったのは…なぜだろう…。  
取り敢えず…。

「……………」

「……………まほちゃん」

「…なんだ」

「…妹さん。襲われますよ?」

「……………お前が諸悪の根源だと思おうが?」

「……ハイ」

通信が切れた無線機を横目で見て、察したのだろう。

目と鼻の先。その怒気を含んだ目をまた此方に向けてきた。

「なに……逆に良い、時間稼ぎになりそうだ…。お前達は、あぁいっただ事に…慣れてるのだろうか?」

「慣れてないよ!!」

…両手で、パンツと、音が出るくらい…強く挟まれました。

ビンタされた様にも感じるのは、多分間違ではないのだろうか…。  
…。

叩かれた痛みと他に、挟まれた手から、熱い体温を感じる…。

「…そうだな。お前の事だ。今までの事も…どうせ、流されただけなのだろう」

「」

よ…良くお分かりで。

睨むように、顔を近づけるまほちゃん。

…ああ…睨まれてるなあ…。

少し頬に赤みが刺し、涙目にも近いほど、目を潤ませている。  
そうだよなあ…ここまでの話を聞いて、怒らない訳が…

「だから…今度も流されろ」

「んう??  
!!?」

口が熱い。

一言…言い捨て…まほちゃんの口が、歯がぶつかる程、強く当たった。

こう言った行為自体に、慣れていないのが分かる。

…が、知識だけはあるのか…即座に舌を…入れてきた…。

「んっう!?!」

俺を逃がさい為か…顔を完全に手で固め…壁に押し付ける様に、俺を押しえ込む。

「んっ…ふっ…ん」

ぎこちなく動く舌。

吸うわけでもなく…ただ…動かす。

それ自体で、気持ちが良いのだけど…ってツ!!??

「ちゅっ…ああは…」

な…なに? 今…の…。

舌全体で、俺の舌を合わせ…巻きつける様に…そして、引いた…。快樂と言うものを、舌で感じた…。

「っ…ふっ…はあ…」

顔を少し離し…口からも舌を引き抜く。

「なる程…こうやって…するものなのだな…」

そして、小さく呟いた。

「理解した」

小さく笑い…目を俺に向ける。

目の色が…完全に変わっていた。

見た事がない…彼女の顔だった。

「っ…ま…まほちゃん? いきなり、何を…んっ!?!」

貪る様に、また口を…今度は吸い始めた。

舌全体を使って、探る様に…味わう様に…細かく、大きく…動き始めた…。

「ん…ふっ…チュ…プッ…」



頭をすでに掴んでいない…。

顎に手を沿え、ただ俺の口を貪る。

後は唾液が混ざる音…そして、小さな彼女の息遣いだけが聞こえる。

歯をぶつける様な、乱暴な…つい数分前とは違う。

慣れていく舌の動き…喘ぎ声に近い吐息を出しながら、俺の口を啜る。

「んっ……はぁ……」

口内を動く舌…とは、別に…俺に完全に体を預けている。

手は体をゆつくりと這い、何かを確かめ…。

「んっぷー… ちよつと待った!! まほちゃん!？」

我に帰った。

ただ、本当に彼女の言うように、流されてしまった。

…俺…変な方向へ、慣れてしまっているのだろうか？

ただ…

「…なんだ…隆史も、そろそろ限界ではないのか？」

「だ…だからって…いや、違う…何を急にして……」

「私は、お前に好きだと言った」

「い…言われたけど……」

「だからだ」

…理由になってない…。

「はっ…こういう事には、お前は隙だらけだな…。そら…浮気確定だ。

…さあ？ どうする？」

「どうするって……」

「それとも…なんだ？ …私は抱けないのか？」

「…ぐっ……」

「みほの友人に対して、欲望の限りを尽くしている貴様が…。昔から

…本当に…昔から……」

「……」

「そんな私に対して…何もできないのか？ ……応えてくれないのか？」

「ちがつ…」

「……ここは、元気なのにな」

「どこ触ってるの!?!」

いきなり、変な事を挟んできたよ……。

というか……最後の照れ隠し……なのだろう。

……。

……。

照れ隠しだよな？

躊躇なく、ズボンのチャックを下ろそうとしてるのですけど……。

「みほにも黙っていよう……それに将来的にも持続する。後腐れはないぞ?」

「……後腐れないとか……言わないでくれ」

……なんだろう。

目に輝きが戻ってきた……。というか、爛々と輝きだした!?

「……………」

「ま……まほちゃん?」

「……そうだ。後腐れなんてない。みほと付き合っているようだが、関係ない……他の女ならば許せんがな……みほなら……」

彼女は立ち上がると、頬が歪む程、口を綻ばせた……。

怖い……いつもと全然違う……。

「隆史」

「な……なに?」

「今……私の中の……長年の、葛藤が消えた」

「……え?」

「結論が出た」

満面の笑顔……。

禍々しい、狂った笑顔……そして、熱っぽい顔……。

知らない…この、まほちゃんは…知らない…。

「無線を聞いていて…良かった…。ありがとう隆史」  
「え…。」

「私を壊してくれて」

……。

はい？

そこまで言うと、おもむろに服を脱ぎだした。

ワンピース調の服だ…。スカートを捲くりあげ、腕を通し…一切の迷いなく乱暴に服を脱ぎ捨てた。

たった数秒で、白い肌が目の前に飛び込んできた。

鍛えられて、引き締まった体と…豊満な胸。

…いや。

「……さて、隆史…結論が出たと言ったな」

…下着姿になるとまた…嬉しそうに喋り始めた。

「私は次期家元…西住流を継がねばならない」

確認する様に…

これ以上の事はない。

そんな…狂った結論。

「ある意味で…私も、あの胸薄いクソ女と変わらん。みほ以外には、認めないし納得もしまい」

「どういう…」

「後継の事だ」

「………はい？」

「後継が出来なければ、最悪…私は分家の男と一緒にさせられるだろう。冗談ではない。ああ…そんな事ならば、西住流など知った事か。

私は文字通り、死を選ぶ」

冷たい目で、遠くを見つめだしたまほちゃん。

分家つて…あの……

「だが、逆に言えば、後継さえいれば問題ない」

……。

……………ん？

「そうだ…そうだな……。あの分家の下衆も、たまには役に立つ…アレが相手になりそうだとさえ、みほも納得してくれるだろう」

あの…まさか…。

「そういった訳だ。お前にも大義名分ができただろう？ ……流石にまだ暫くは、無理だが…行為自体は問題なからう」

「ま…ほちゃん？」

「私は、お前の子ならば、喜んで産もう」

「……………」

「納得したか？ では、子作りだ」

「するか!! いや、確かにあの糞野郎は、俺も見たけども!! だからつて!!!」

「ならば私は、死ぬ事になるな」

「」

手段は選ばない…そんな勝ち誇った笑顔だった。

……。

……………。

「私はお前ならば、全てを受け入れると言った…分かったろ？ 私もすでに…いや、遠の昔に壊れていたかもしれない…な」

「……………」

「では…子作……」

「待っててばっ!!!」

「まずい!!」

「本気でまずい!!」

今までの流れでもそうだけでも、結構理性がすぐにでも飛びそう  
だ。

下着姿で、完全に密着してしまっている。

白と黒の…いかん…細かく確認すると…ただでさえ、脆く…いや、  
壊れてしまっている貞操観念が、またおかしくなる。

「……………じゃ不味すぎる!!」

「…………ぬ」

理性…りせえい…。

ここで、まほちゃんを抱いてしまうと、本気で見境がなくなりそう  
だ。

すでにないかもしれないが、それでも…。

「……………! みほの戦車!! 流石につ!!」

そう! みほのテリトリーだ! しかも戦車…あんこうチームの  
戦車…。

こんな中で、致してしまつたら…それこそ…。

「…確かにみほの戦車内だ…私の戦車で同じ事をされたらと思うと…  
ふっ……………ふっ!」

「……………!!??」

「笑ったっ!」

本気で、別人にしか見えない!!

「分かった…場所を変えよう…。先ほどの隆史の友人達が、戻って来

でも困るからな…」

よ…よし！

移動するという、時間ができた！

今のこの時間に、なんとか…

「…何をしている、早くしてくれ」

「はやっ!!」

着替えるのが、一瞬…考える間もなかった…。

すでに服を着て、ここから出る気満々の彼女が立っていた…。

少ししか、目を離していなかったのに！

早くしろと、急かしてくるし…。

「男だろう？ …ここまで私が、恥も何もかも…それこそ、大切なモノまで捨てて、言っているんだ…」

……

「これ以上、女に…私に恥を…かかせるな…」

これは…ダメだ…。

…他の誰でもない。

まほちゃんに対して…ある意味で俺は…何もできない…。

「では、行こうか…？」

「あ…ああ……」

その返事に、俺が諦めたと悟ったか…ものすごい笑顔になった…。

そんな笑顔…余り見せないのに…。

「では、さっそく連れて行ってってくれ、隆史」

「…ん？ 連れて行ってってくれ？」

「そうだ。先ほどの話を聞いて、興味が沸いた。お誂え向きだろうか？」

「……はい？ 先ほどの話…って、まさか!？」

「そうだ。ラブホテルという所だ」

「

「ふ……ふふ……楽しみだ……本当に……」

先程から、コロコロと……目、顔、雰囲気……そして笑顔……全てが変わる……。

真剣な顔かと思えば、変に茶目つ気を出したり……。

無邪気に笑ったかと思えば、ドス黒い……笑顔になったり……。

そして今は……舌舐りをしているかの様な……。

「タノシミダナア？」

——捕食者の目をしている。

※ルート壊 【人妻・宴編】※ 温泉宿での夜

東京の奥地。

木漏れ日に彩られたアスファルトを進み…というか、それしか見るものがない様な山道を進み…。

人里離れた…と、はつきり言えるようなシチュエーション。

そんな場所に…俺はいる。

……。

「あの…しほさん」

「はい、なんででしょう？」

「なんで俺…こんな所に連れてこられたのでしょうか？」

ここまで乗車してきたタクシーを呆然と見送ると、当然と言えば当然の疑問を口にする。

例の男と会い…まあ…ちよつと色々とおつたけど、その鑑別所を出た後。

用意されていたタクシーへ乗り込むと、真つ直ぐ此処まで連れてこられました。

「ま。簡単に言いますと…明日、隆史君を大洗まで送るのに効率が良いか…と…。」

効率？

今日は、此処に泊まれという事でしようか？

周りを見渡すと、名前が木の看板に。大きく書かれているだけ…つていうか…此処…。

「温泉旅館…なんでもまた、こんな山奥に…」

「秘湯…と、いうモノらしいのですよ？」

「いえ、あの…そういった事を聞きたいのでは…」

彼女の少し外れた返答を聞き流し、もう一度見上げる。

老舗…とでもいうのだろうか。

改修工事を繰り返し、所々真新しい箇所はある物の…木造の和風を全面に押し出したかの様な建物。



大きな玄関が、口を広げて待ってますね。

「追々話します。取り敢えず、入りましょう。こんな所にいつまでも立っていても仕方ありません…よ?」

「…?!」

ジリジリと刺す日差し。

周りの影の濃さで、その強さが分かるほどの明暗。

人の顔の影すらも例外ではなく、前髪の下…目元がその影で、真っ黒になっている。

その影の中から、横目でこちらを見る、しほさんの目が………その日差しに負けない程に、ギラギラと…。

…大洗ホテルの撮影会の時から、そんな日数も立っていなかった。

あの男に会わせて欲しいと、頼む時より、今に至るまでのしほさん…。

ギャップが、ものすごい…。

人前では、いつもの西住流家元。

厳しく周りを威圧するかの様な眼光を放ち続けていたのに…。

いざ、少しでも…例えば彼女の書斎など、二人きりの状況になると、

この目をする様になった。

…もう…俺を見る目が、完璧に変わっていた。

…というか、怖い。

物理的に食われるじやなかろうか? と錯覚させる程の…。

ま…まあ? 二人きりの状況になったとして、いつ人が来るか分からないからだろうか?

一定の距離を置き、変わらない態度で接してきているのだけど、目が…。

「では…行きますよ?」

「は…はい」

スツと目を伏せ、脚を前に出した。

確かにもう、俺にここへ入るしか、選択肢はないしな…。

俺を此処へ止めさせる…と、言う事は…部屋の数で彼女の思考が何となく分かるだろうな…。

んじや、行きますか。



中居さんに案内されるが、その後ろをしほさんは、ついてこなかった。

それなりに広い廊下。赤い絨毯を進むと、中居さんは足を止めた。「こちらです」

やはりすでに予約してあった様で、古めかしい八畳はあろう部屋に通された。

「どうか、俺が……まあいいや。此処まで来てしまったし、何よりも部屋が違う。」

「ならまあ。」

その部屋の畳の上、中居さんより、簡単な部屋の説明を受けるが、いつもの様に頭に入ってこない。

「いやね……だって、八畳だよ？ 俺一人宿泊するにしては、広すぎる。」

部屋の中より見える、外の景観の素晴らしさとか……部屋の設備等から……。

「……」

中居さんの説明を聞き流し、一人になると改めて思う。

「……この部屋……宿泊費、幾らだよ……。」

特にする事もないし、取り敢えず窓際の椅子へ何気なく座ると、外へと目が行く。

「……というか、他にする事がない。」

「……なんていうか」

やはり、この部屋から見る、山の景観がすげえ……。こう言った所でも部屋の値段が跳ね上がるのに……。

「いやもう……いいや。諦めよう。」

考えても仕方ないし、何より不安感しか出てこないから。

あ…そうだ。取り敢えず、別部屋に泊まっているであろう、しほさんに連絡をしよう。

今日の予定…というか、本当に湯治に來ただけって訳でも……。

「……」

「この部屋から見る、風景は素晴らしいですねえ」

「……」

「あら？ どうしたんですか？」

「…なんているんすか、千代さん」

向かい合った窓際の椅子。

その椅子に…いつもの様に、いつもの姿で…お茶を啜っている千代さんが座っていた。

だから…気配を…。

「あらやだ、失礼ですね」

「だから、気配消して…」「島田流は忍者戦術と…」

「それはもう、聞きました!」

なに…え？

なんでこんな所にいるのでしょうか？

しっかし、日本茶飲んでる彼女って、思いの他初めて見る気が…。  
ん？

…そこで気がついた。

しほさんは、正装…いつもと同様に、スーツ姿にも似た服を着て、鑑別所にも同行してくれたので分かる。

が、この目の前の千代さんも、こんな所…プライベートの時だろうに、正装している事に、違和感…がア!?

「……」

「ちつつかあ!? なんですか!?!」

目の間にいると言うのに、まだ気配を消しているのか…。

彼女の手が両手に添えられた感触で、この至近距離の状態に気が付きさせられた。

妖艶…とでもいのだろうか？ 細くした目を俺に近づけてくる。

「開き直ると、案外…素直になるものですよねえ?」

「なにいつてんですか!？」

少し前なら、これもからかってきている…とでも、思うのだろうか、今回は違う。

すっごい本気の目をしているから…。

此処まであからさまに、近づいて…

「…ハア…:…んんん」

「んぐっ!？」

撮影会の後…彼女もまた、完全に割り切ったのか。

壊してしまったというのもあるのだけど、躊躇なく唇を押し付けてきた。

ほ…:…本当にいきなりだな…。この行動に微塵たりとも、後ろめたさなどの感情は、一切感じられなかった。

「はあ…:…んっ…」

一回、顔を離し…:…俺の目を見つめ…:…すぐにまた押し付けてきた。

舌を絡めさせ…:…段々と息遣いが荒くなっていく彼女。

「はあ…:…はあ…:…もう少し…」

逃さない為だろうか？ 体すら俺に押し付け出し…:…チュパツと、音を立てながら俺の口内を舌で弄る…。

呆気に取られてしまっている俺を、一気に…

「何をしてる」

チツ…と、目の前から舌打ちが…:…というか、俺の口内で舌打ちヤメテ!

「…離れなさい。それに、もう時間ですよ？ だから、ハナレロ」

これもまた…:…いつの間にか、その座椅子横に立っていた。

横目で確認したのだろう…。名残惜しい…:…そんな感じで、ゆっくりと舌を引き抜いた。

体を起こし、その人物に体を向け…:…不満げな言葉を口にした。

「あら、しほりん。ちよおくと…:…早くないかしらっ?」

「…見当たらないから、まさかと思って来てみれば…。まったく…:…は

したくない」

「しほさんに、言われたくな……はいはい、仕方ないですねえ。睨まないでください」

しほさんが……幽霊の様に、また気配を殺して、立っていらっしやいました……。

千代さんが、俺から完全に離れるのを確認すると……手に持っていた手荷物を、部屋の隅に置いた。

……置いた？

「はあ……まったく。では……隆史君」

「はい？」

「私達は暫く用事がありますので、ゆつくりと寛いでいてください」

「……用事？」

「そうです。……まったく、面倒くさい」

はあ……と、ため息と共に肩を落とした。

ああ……この態度は、珍しい。

そんな態度と共に、不満を口に出すって事も……ある意味で貴重だな。

「……戦車道全国大会も終わりましたので……その……役員やスポンサーとのまあ……懇親会とやらですな。」

「私としほさん、どうにも出席しない訳には行きませんからねえ……はあ……」

千代さんからも、不満気な声……。

ため息と一緒に、愚痴を聞いてくれとばかりに、説明をしてくれる。

……要は……お疲れ様会、打ち上げ、顔合わせ。

スポンサーも出張ってくるって話だから、出ない訳にはいかないらしい。

ま、そうだよなあ……。

こう言った席は、結構大事だ。

次回もまたあるのだし、それに繋がる。接待にも似ている打ち上げ。

……よくある話だな。

なる程、だから千代さんがいて、正装をしているのか。  
ん？

つて事は、あのハゲもいるのか？

「…そんな訳で、二時間程で切り上げて、戻って来ますから…食事は、17時頃に運ばれてくると思います」

「そうですね…。私達がさつさと切り上げれば、さつさとお開きになりそうな会ですしね…まったく」

「…こんな場所です。今回は少人数ですからね。まあ…大丈夫でしょう」

「特にスポンサー連中は、どうにか、ならないものですかね…。私達抜きにして、コンパニオンでも呼べば宜しいのに」

「……反吐がでますね」

「子持ちの女性に対しての発言では、ないと思いますよね。特にあの髭」

「ああ、あの。今回も出席らしいですね…まったく。私達が出席する度に出てきやがって…」

「それでも、しほさんが、あのガマ蛙の指をへし折ってくれたお陰で、多少はマシになりましたよね？」

「あれは事故ですよ？ 事故」

「はあ…それでも、下心が丸出して…やはり欠席しようかしら」  
……。

あの…ちよつと、愚痴の中に、聞かない方が良い事が出始めましたけど…。

口調…崩れてきてますよ？

あ…段々とイライラし始めてる…。

「あっ！ あのだ!!」

「つ…と、ごめんなさい。なんででしょうか？」

「…しほさん達の予定は分かりましたけど…」

空気を斬ろうと、発言したけど、どうしたものやら…。

…そうだな。

何気なく目に入ってきた、しほさんの手荷物を見て先程の疑問に会

話を切り替えよう。

「…あの…そのしほさんは、手荷物を此処に置きましたよね。それで、宿泊の着替えとかですか？」

「そうですよ？」

すっごい…普通に…何言っただって顔で…。

はい？

「ああ…そういう…。確かにもう一つ、私用に部屋を取りましたが…それはフエイクです」

「はい!？」

「私もこの業界では、それなりに有名ですからね…。男と同じ部屋を取った…と、漏れてしまったては面倒な事になりますから」

「…え…は？」

今…はつきりと、男って…。

「大丈夫ですよお？ 私も後で来ますからア」

「まあ…中途半端に情報が漏れたとして…千代さんも一緒なら、どうとでも誤魔化せます」

「メリットしかありませんねっ!」

「…そうでしょうか？」

「ちやああと、自分達の部屋は取りましたから、大丈夫ですよ？」

千代さん!!? なにが!?

「さて…正直、私達はこれから、凄まじくストレスが貯まる場に赴かなくては、なりません」

「…まあその後のストレス発散は、隆史君に任せるとして…ああ！そこは、しほさんとすでに話は付いていますから、そこも大丈夫ですよ？」

「」

話がついている…って…え？ 発散!?

そもそも、しほさんの発言が怖い…ごく自然に色んなモノをぶっ飛ばして…。

「あ、千代さん」

「は…?」

「…」

「ああ…はいいい。今回は抜けがけしましたからねえ。わかりましたア。先に行ってますよお…あ、私も荷物を持ってこないといけませんね」

荷物!?

部屋を退室していく千代さんを、しほさんが目線だけで、見送る…。時間も余りないですから、急いで下さいねえ…一言、言つて完全に出て行った。

後ろを向いている彼女が、こちらを振り向くと…。  
…う。

この旅館の玄関前で…俺を見る目が変わったと、思い知らされた目の色をしていた。

ゆっくりと近づいて来る…。

呼吸が少しづつ、荒くなつて…なんで、小さくフーフー言ってるんですか!?

座っている俺の間近まで来ると、そのキラキラとした光輝く目で。俺を見下ろしてくる。

なぜだろうか…その目の周りは、影を落とし…その目の輝きだけが怪しく光る…。

腰を落とし、乱暴に俺の顔を両手で挟み、強引に引き寄せられると…。

「…んぐっ!?!」

千代さんと同じくして、一気に唇を押し付けてきた。

触れた瞬間…また同じくして、千代さんと同じように、俺の口を貪り始めた。

下唇を、吸うように何度も舐め…躊躇する事もなく、そのまま舌を口内に滑り込ませてきた。

数秒前の彼女からは、想像できない程の変わりよう…それこそ、必死だと思えるほど…。

ものすごい…性的なクチズケ。

「んうちゅ…あ…」



舌の周りを、舌が這う。

ぐちゅぐちゅとした音が、骨を通して脳に振動する。

口から舌がはみ出る程、激しく唾液を混ぜてくる…。

官能的に小さく漏れる声。

閉じる訳でもなく薄く開いた、呆けた様な熱を帯びた目…。

時間がない、だからできるだけ、激しく。

そんな焦りにも似たような動き。

離す時も…糸を引かせながら…口をゆつくりと離す。

スツ…と、姿勢を正したが、それでも興奮が収まらないのか、変わ

らない目のまま俺を見下ろしてくる。

口からは唾液が垂れ、唇が光るほど濡れ…。目は、爛々と輝かせ…。

「ふー…フー…わ…私は、此処まで…かなり我慢をしました」

親指で口を拭うと、変にうすら笑いを浮かべて、はつきりと言った。

「関係を割り切って、開き直って…何もかも感情に従えば…こうなっ

てしまった」

「あの…しほさん？」

「私の年齢を考えれば、何時までもこんな関係が続くとも思えません

…。ですから、それを考えてしまったら、更に拍車が掛かった…」

ゆつくりと片手を伸ばし、俺の顔を優しく摩る…が、それが妙に恐

ろしく感じる。

指から感じる温度が熱い…。

こんな関係…つまりは…。

「こうなってしまうた…こう変えられてしまった…。それは、まった

く千代さんも同じでしょう」

「は…はい？」

「なに…簡単な事です。こんな年ですし…今更若い子の真似など

…娘達と張り合う気なんてありません…。ですから、代わりに別の

感情に素直になった…それに従う…。つまりは…」

う…嬉しそうに…ものすごく嬉しそうに笑った…。

開き直る…。

娘達と…って、名前すら呼ばない…張り合う気はないって事…。

更には別の感情に従う……って事は…。

「私を母から女に戻した責任を、貴方には取ってもらいます」

「……」

それらしい事を言っただけはいるが、表情と言葉が合っていない。潤んだ目は赤く、…息使いは荒く…。

言いた事は、言っただけ…また俺の口を貪りだした。

口元から、唾液が混ざる音が響く中、どこかで冷静になっていた。故に思う。

先ほどの千代さんも同じだと、言っていた。

話もついたらとも言っていた…。

俺が前回、強引に力尽くで、引きずり出してしまったモノ。

行為自体で、発覚、自覚させ、貪らせて…貪られて…。

今の言葉もそうだ…。

彼女達は、自分達の後ろめたさの全てを…己の欲に逃げたんだ。

…肉慾に。



……。

はい、更に冷静になりました…。

別の意味でね……。

17時30分頃だろうか？

室内に運ばれてきた食事を終わると、特にやる事がない事に気が付く。

戦車道連盟の、あのハゲがいるかもしれないと思うと、旅館内を彷徨く訳にもいかないし…。

テレビなんぞ見る気も起きない。

…完全に暇だ。

そうすると、余計な事ばかりが頭を過る…。

まずは、その運ばれてきた食事。

…：うん。

すげえ豪華なんだよ…。

海山物もそうだけど、数切れの肉とか…味もそうだし…なんか、旨いのだど食ってる内に、段々と怖くなってきた。

何が怖いって、まずここの宿泊費。

…：。

そして彼女達が帰ってくるのを待つ俺。

あの様子では、二人共、完全に…しかも積極的に俺との肉体関係を継続するつもりだろう。

というか、催される懇親会なんぞ無視して、露骨に言ってしまうえば、すぐにでもヤリたくて仕方がないって、感じてたしね…

はつきり我慢していたって言ってたし…。

ま…まあ？ どこか期待している自分もいるは、認めよう。

「……………」

だけども…なあ…。

なんだこの状況、そして関係…。

セフレ…と、言い切って良い関係…か？

関係性を考えると、背徳感をすっ飛ばし、現実味がない。

関係…性…。

…：。

ん？

あれ？ 俺、あの二人から、完全に囲われている状況じゃないか？  
前からたまあああに、言われていた、若いツバメって奴に、完全になってないか？

「……………」

……。

き……筋トレしよ……。

そうだな！ 余計なことを考えないようにしよう!! なる様になるだろう!!

……それで毎回流されいるけど……。

……。

俺自身も、ある意味では開き直った。

それは認める。

今更、やめるとか無理だろう……が。

そうなると別の問題が……。そうそう……物理的な……。

……俺、体持つか？

あの二人、すっごい肉食系って奴だよな……。

千代さんは何となく感じていたけど、しほさんがあそこまで積極的  
に変わるとは、思いもしなかった……。

しかも、あの様子だと、二人同時にまた……。

……。

枯れる。

搾り取られて、枯れる……って、映像が……脳内に……。

……。

っ……使うか！ スキルツ!!

どうにもうまく調整できなくて、結構無茶な事になってるけど、あ  
の二人なら大概の事は大丈夫だろうよ!!

多分!!

……。

どうせなら、一気に攻め落とさないと、毒沼の様に徐々にガリガリ  
と……色々なものを削られそうだしな。

……。

ちよ……ちよつと、黒い感情が……。

いやいや、待てよ？ ある意味で、俺自身もスイッチを切り替えな

いと、多分対処できそうにないだろう。

彼女達の性癖考えて…一気に…。

すでにある程度、その気になっていたし…操作系で…。

「…隆史君」

「うつつわあ!!」

し…しほさんが、ご帰還されていました…。

座っている俺の背後から、小さく呟くように呼ばれるし…例の如く  
気配消すしで…心臓が飛び出るかと思った…。

いや、考え込んでしまっていたから、気付かなかったただけだろうか  
？

……ん？ あれ？

「お…おかえりなさい…。」

「はあ…。ようやく終わりました…最悪でしたよ…。」

絞り出した言葉に応答した言葉は、心底嫌そうな感想でした。懇親  
会の事だろうけど…。

顔を赤くして、胸元まで開いたワイシャツ…。

焦点が少し揺らいだ目…。

それにしても、仁王立ちでしっかりと地に足つけた家元様がいらつ  
しゃいますね。

あの…酔ってます？

「あの…エロ親父共が…へし折りたくて、始終我慢してましたよ  
…」

なにを!?

「た…大変でしたね…」

「ええ……まったく」

他に言う事もなく、適当に労いの言葉を投げかけると、力なく項垂  
れる彼女が、いつものしほさんに見えた。

相当、イライラしたのだろう。上着を脱ぎ、適当に座卓へと掛ける  
と、もう一度ため息と共に、腕を組んだ。

そうそう…座る事もしないで、腕を組んで自身の胸を圧迫してい

る。

胸元開いてるから、すつげえ…。

「…あの、千代さんは？」

「ちよきちっ？」

……誰だよそれ。

「彼女は、今回の出席者を見送ってますよ…誰一人、泊まらせないと……。下手に宿泊でもされて、目撃されたら堪りませんからね。その為、部屋数減らす為に私も千代さんもフェイク用の部屋を取りましたしね。その為に丁度満室…残念でしたねえ……あの髭」

夏休みの行楽シーズンだ。

こんな高級といつて差し支えない旅館だし空いていたとしても、そんなに……あ。

まさか…空いていた部屋を先行して抑えたのか？

ああ…なる程…怖いくらいに徹底してるなあ…。

「千代さんなら、そういうった連中相手をしてでも躲するのが得意らしいですからね。……私はどうにも苦手ですが」

……そうだろうなあ…。

結構直情的だしなあ…。

「……」

「……」

うっ…。

そこまで言うと、俺を見下ろす顔色が変わった…。

酒も入って、千代さんも今はいない。

二人きりの状況に、今気がつきましたという顔。

無言の時間が少し続くと…その少しずつ時間が経つにつれ…鼻息が荒くなっていく…。

あ…これ、多分…酒も入ってる…。

「さ…さて…隆史君…」

うっわ…いきなり全開だ…。

やはり改めて向き合おうと、そういった事…情事とやらに、もつれ込みたいのだろうという気持ちだが、はつきりと伺える。

…明らかに興奮し始めた。

確かに積極的になるしほさんは、珍しいとは思う…思うが…：彼女はある意味で、真面目過ぎるのが魅力と言える。

帰ってきて早々…更に俺の関係を踏まえて、言葉に出すのを渋っている様にも見える。

少し俺を見る視点を逸らしているのだろう。

斜め横を向きながら、段々と赤面していく。

……。

スキル使用を考えていたら、俺も変にやる気になってきてるなあ…と、自覚。

その今のマゴマゴとしている、しほさんを見ると、女性として意識してしまっていると、これもまた自覚する。

胸、腰、脚…無意識に全ての部位を、確認するかの様に、見てしまう。

「……」

色々細かい事は、また後で考えよう。

今更、なにを言っても、なにをしてもこの状態は変わらない。

なら…。

「……」

そういえば、千代さんは、今…来客を見送りに行っていると言っていたな。

…旅館の玄関先にでもいるのだろうか…か？

つまり、一人か…。

「……」

そして目の前には、もう一人…。

……。

……。

「……」

「しほさん」

「なっ！　なんで…しろう」

察してくれた…とでも思ったのだろうか？

いや、察してはいるけども…ちよつと、趣向を今回は変えましょうか？

自意識の中、黒いスイッチを切り替えよう。

少し前とは違い、割とすんなり…とても軽く…。

とても簡単に…それは切り替わった。

では、しほさん。

「温泉行きましょうか？」

「……はい？」



はあ…。

ため息しか出ない。

白状してしまえば、私自身…かなり変になっていました。

興奮していた…とでもいのでしょうか？

勢いに任せ、ここまで…あそこまでしてしまった自分が、少々恥ずかしい…殆ど、痴女ではないですか。

部屋に入った折に、千代さんがすでに行動を起こしてしまっていた…というのも有りますが…。

うう…。

前回の大洗ホテルの時もそうです。

ただ快樂に流され…子供の頃より知っている…娘の相手…恋人に…。

その男性に、私は…。

「……」

廊下なんて場所で…しかも人前なんかで、してしまっただ…。

そのまま部屋に入れば、もう感情が爆発し、何も考えられず、ただ



…ただ…彼の体を求めてしまった。  
初めての恥辱…そこから伴う快感……快樂……背徳感…。  
様々な感情と刺激が、完全に今までの私を殺してしまった。  
負けたのだ。欲に。欲望に。  
ただ、彼に刺激を求めてしまっている。  
今回のこの状況もそうでしょう。  
何か誤魔化す様に、彼に対して凄まじいセリフを吐いてしまいましたし…。

『私を母から女に戻した責任を、貴方には取ってもらいます』

「……」

ただの、馬鹿では無いのでしょうか？  
愚かしいにも程がある。

…口付けをしている中…あの、完全に私の中の女を、露骨に前面へと出した接吻。

その行為で、変に火がついて…。

「……」

いえ、下手な誤魔化しは、やめましょう。

彼に責任を押し付けただけです。…ただ、楽になりたいから…。

この関係性、状態、状況、葛藤を……押し付けてしまったただけですね。

この年で、彼に新しい刺激を教え込まれてしまった。

更にまた、新しい刺激を求める。

彼は開き直ったと言っていましたでしたが、ロースターターの彼の事です。

普段の日常ですと、常識がブレーキを掛け…あの状態には、なつてくれないでしょう。

…ですから、躊躇させない為に、無意識に釘を打ち込んだのだ。

彼はまだ、遠慮をしている。ですから、期待してしまっているのでしょうか？

まだ：彼は私を：私の感情を丸裸にしてくれそうだと。

「…つまり」

…たった二回の関係で：私は、彼にハマリ掛けている。

「しほさん、行きますよ？」

「え？ ああ：はい」

今もそうです。

肩を並べ、服を脱ぐ。

温泉に行こうと誘ってきた彼が連れてきた場所は、家族風呂。

この旅館にある、唯一の混浴が可能な場所だそう……。

使う方は、特に本日はいなかったようで、簡単に取れたと言っていましたね。

脱衣所に入れば、特に気にする訳もなく、普通の態度。

初めは少し驚きはしたけれど、それでも躊躇無く脱ぎ出す彼に釣られ、私も特に恥ずかしがる事もな：まあ、そんな年でもありませんが…。

…それでも、多少は躊躇しながら、全てを晒した。

相手の事を意識すると、動きが取れなくなりそうでしたので：少し、考えるのをやめたお陰でしょうか？

「……」

タオル一枚になった私に彼は、何も言わない。

それが妙に憎らしく思いはしましたが、そんな感情が沸く自分に対し、別の意味で、まだ大丈夫だと思えたので：まあ良いでしょう。

腰にタオルを巻く隆史君が、浴室の入口を開ける。

浴室：と言いますか、流石に温泉宿。

檜の床：浴槽……。

オレンジ色のライトに照らされ、橙色に視界が染まる。

浴槽の周りは、岩で装飾され：湯船の中心に、人すら隠れる程の、大きな岩…。

「……」マジで、幾らするんだ…？」

旅行雑誌にも載っていたいな、そんな広い露天風呂…。

家族風呂と言っていましたか、これ：一般の露天風呂ではないのか

？　と思えそうな程の広さ。

壁で囲まれてはいますが、日本庭園とも言えそうな程の庭が、風呂とは別にあり…。

「先に、体を洗っちゃいませうか？」

……。

リラックスしすぎている…と言いますか、この状況を普通の旅行並みに楽しんでいる様に見える隆史君に、少々憤りを感じますね…。

私を此処へと誘った時に見た、彼の悪い顔とやらに、期待をしてもまった事が、恥ずかしく感じる…。

「……」

そういえば…。

「隆史君」

「んあ？　なんすか？」

……。

……………イラッ。

…本当に、いつもの通りですね。

さっさと椅子に座り、体を洗う準備を始めていますし…。

「…夫」

「……………」ビクッ

ふむ…。

今更、気にする事もないと思うのですが、完全に浮気ですからね…。

彼も…私も…。

ですが、一瞬見せた動揺に、変に心が躍る。

「これは露天風呂…ですね？」

「そ…そっすね」

「では、夫が言っていた、風呂屋…とは、どういう所なのでしょうか？」

「」

完全に体が硬直しましたね。

「…ナニヲスル、トコロナノデシヨウカ？」

「」

ええ、概ね如何わしい事をするのは、予想がつきますけどね。

今は怒りを抑え…もう怒る権利は無いと思いますが、それはソレです。

今は動揺する隆史君を、楽しみましょう。

「…か…体を洗う所です」

「それは、そうでしょう？ お風呂なのですから。具体的には？」

「」

いけません…。

これはいけませんね…。

千代さんが、彼をからかう気持ちが理解できてしまう。

言葉を口にする度に、肩が小さく跳ねる彼を見るのは…楽しい…。

「……………」

あら、無言…ん？

「……………」

えっと…ですね…。

何故、先程見せた、悪い顔をして振り向いたのでしょう？

「そうですね…俺も詳しくは知りませんが…」

「は…はい」

「試してみましようか？」

「……………はい？」



…ま…またやってしまいました…。

これでは、千代さんの二の舞…。

「……………」

体…特に全面ですね…。

この露天風呂備え付きのボディソープを、必要以上に塗りたくり

…。

……………。

なんでしよう…この状況…。

躊躇なく、従ってしまいました。これって…とてつもなく恥ずかしい…と、いいですか。

はしたない事してませんか？

…。

ま、今更ですね。

「……しほさん」

泡を立たせないでいるので、ボディソープの液体が、ヌルヌルとした感触を感じさせます。

彼に言われるまま、胸の間から…全体に塗り広げ…それを彼の背中へと、擦りつけている。

ヌルツとした感触が、全面から感じる…。

「……っ……ふっ……」

肌同士が、滑りを付けて…ヌルヌルと摩擦を繰り返す…。

それが肌、全体で感じ…と、言いますか…結構…楽しい…いえ…気持ちがいい…。

無意識に声が出てしまいそうになります。

…いや…本当に躊躇しなくなりましたね…。

「……初めてですけど…これ、かなり気持ちいですね…」

胸で圧迫するかの様に…塗り込む様に座っている彼の背中、上下を繰り返す…。

はしたないとは、思いましたが…なぜでしょうか？ 彼が言う事に、嫌悪感や抵抗感はありませんでした。

普段はゴツゴツとした、彼の凹凸のある体を感じるでしょう。ですが、その隙間を私の肌が埋める…。

「……隆史君の体…ふう…結構…傷が多いですね」  
そこで初めて気がついた。

彼の体を明かりの元、はつきりと見たのは…そういえば、初めてですね。

肩から掛け…特に背中…。

小さな物から、大きな物……上から肉と肌で埋めた様に、いくつも盛り上がっていた。

また……その小さな凹凸すらヌメった肌で、埋める……。

ニチャニチャと……動かす度に、粘着性の音を体から感じる。

そのまま横へと、移動しながら、胸で肩を挟むと……彼の横顔が見えた。

……そのまま前も洗った方が良いかと思えば……即座に口を塞ぎ……気が付けば……いえ、すぐに求めていた。

にちやにちやと、口元から音が響き……体と手でそのまま、洗う……。自然と向かい合わせになり、お互いの肌を手で舐めまわし始めていた。

「ふっ……んっ……」

塗りたくったボディソープで胸が滑るのか……掴む様に胸の上を滑らしている手を感じる。

絞る様に……愛撫を繰り返す……。

体をくすぐる様に動く手が、また心地良い……。

下半身に硬いものを感じるけど……今はまだですね。

体を触るだけと言うのもまた……ですからもう少し後……。

高校生とは思えない、厚い胸板。

上からゆつくりと手を滑らすと……ん？

「……これは、一度見ましたね。また……大きな傷……」

「ああ……これは……」

「……」

「……え……あの……しほさん？」

今はその傷ですら触れてみたい。

指でなぞる……と、少し……。

別の熱さ……いえ、冷たさ？

……。

——はっ。

小娘が。

「……あら、どうしました？」

「い……いえ……」カイキゲンシヨウガ、オコラナイ……

大きくなっていたと、何となく気がついていた、彼自身が……なぜでしょう？

小さくなっていますね。

まあ……良いです。

もう、今更すぎます。

小さくなったら、また復活してもらいましょうか？

湯船に入れば、すでに出来上がっています。

私が……ですが……。

即座に向かい合わせになり、口を啜り合う。

彼の上に覆い被さる様に、舐め……舐められる。

……。

もう……どうでもいいですね。

みほも……まほも、知りません。

今は……今だけは……そうですね……彼を貸してもらいましょう。

露天風呂の感想も何もない。

ただ、抱き、抱かれる為にここへ来た……と、言わんばかりに求め合う。

自然と……ええ、自然と流れる様に……。

湯船に立つ彼の前に膝まづく様に……そして、その彼を頬張る。

独特の匂い……味……。

音を出せと言われれば、下品な音を上げ……。

舌を使えと言われれば、削ぎ取る様に、舌で削る。

……ここまで、夫にもした事あるか？ と聞かれれば、無いと答える。

所々会話で、ワザとそういった事を聞いてきた……ワザと比べ、判断させてくる。

そしてまた、それを言葉にさせる。

…隆史君は乱暴な言い方をしない。

それこそ、いつもの様に…普段話すように聞いてくる。

それがまた、現状のギャップとなり…変に私を興奮させる。

背徳感。

それを前面に押し出して、感じさせる。

意識させ、自覚させる…。

……。

「フー…フー……」

唾液で口元がすごい事になっていた。

もう少し…。

ええと…こうでしたか？

ぐっぽ、ぐっぽと、無駄に大きな音を上げ大きく動く。

…そして彼は震える。

すでに弱い所は、把握した。

止めと秤りに、彼が好きだと思われる、啜る音を上げる。

口にまで入りきらない、根元の部分を手でしごく…。

絞り出す様に…腰が引くが、後を追う。

引っかかる部分の溝を舌で刺激する。

その先が、大きくなつた、膨らんだ…くれる。

これで、私に……くれ…。

「しほさん！ ちよっ！ ちよつと待って！」

「っぶっ！ …はあ…はあ…はあ…なんですか…」

「な…なんで、ちよつと怒ってるんですか」

「ふー…ふー…ですから…」

「…誰か来た」

「…え」



言われるがまま、脱衣所の…露天風呂の出入り口に視線を投げると、確かに気配らしきものを感じる。

曇りガラスの向こう側…人らしき…影。

「あー…ダブルブッキングでもしたか？」

「……旅館へと、抗議しましょう」

「いやあの……って、本気で怒つとるな」

邪魔を…もう少しでしたのに…。

「……」

あの…隆史君？

声を出す事自体…まずいと思ったのか。

露天風呂の中心の岩へと、私の腕を引き、移動し始めた。

隠れるつもりでしょうか？

…確かに、このままでは、困るだけですけど…。

「湯気で、まだ良く見えませんからね」

岩陰に隠れ、隆史君は岩に背を預け…ゆっくりと振り向くように様子を伺っている。

お湯の中…ゆっくりと音を立てないように移動したというのに…。

「あの…隆史君。さっさと入口の外から、あの方達に声を掛けた方が、早いのではないですか？」

口惜しいが、こちらが動けばあちらも気づくハズでしょう？

そもそも脱衣所に着替えがあるので、相手も分かると思いませんけど…。

まったく…仕切り直しですね。部屋に戻ってしまおうと、千代さんも帰ってきていそうですし…はあ。

立ちがり声を掛けるために、タオルをもう一度体に巻こうと…湯船から手を伸ばし…

「しほさん」

「なんですか？」

「……続けてください」

「っ！」

先程まで夢中に…ええ、本当に夢中になっていたモノが、目の前に

突き出してきた。

私の頭に手を置き手前に引き。早く…と、催促を即座にする隆史君。

その手から、なんででしょうか？

「一瞬、妙に冷たい感覚が、頭の中を走りました」

…マア、キンスルヒツヨウモ、ナイデシヨウ。

それよりも、今、この状況で何を言っているのでしょうか？

此方に来てしまえば、もっとややっこしい事になると言うのに…。

何を考えて…やはり、一度やめましょう。

見上げると、岩肌に背中をつけ、露天風呂の出入り口に顔を半分向けている。

警戒するくらいなら、やめればいいのか…？

彼も中途半端なのでしょう…ですが、今は流石に我慢してください。い。

…部屋でなら…。

ですので、今はやめましょうね？

「しほさん…流石に今は、音を控えてください」

言われるがまま、音を出さない様に…ゆっくりと動かし始める。

舌で刺激する事を優先させると、今まで以上に…味と…感触が…。

それがまた、私を動かせる…。

今度は、ゆっくりと舌を、奥に伸ばし…先に絡ませ…。

「…ちよつと…。」

続けろと言った割に、すぐに終わらされてしまいました。

名残惜しいですが、口から彼を引き抜くと、唾液の糸が目の前に伸びる…。

…。

彼はそのまま、見てみると言わんばかりに、岩側へと私を押しやってきました。

手を付き…ゆっくりとドア側へと顔を覗かせると…その出入り口の向こうに、人影が見えました。

よかった…まだ入って来ていない様ですね。

……。

熱い…のが…。

いつの間にか、腰を掴まれていました。

…隆史君は、私を手前に引き…お尻を突き出させる様な格好に…。  
ですから…今は、少し控えて下さいと…。

今ならまだ、ドアのガラス越しでなら、あの方達と話ができますの  
で、取り敢えずは一旦中止にしませんと…。

ですから私の秘部に、彼の先が当たったと思ったので、腰をゆっく  
りと押し込める…。

ヌルツとした感触と共に、背骨から脳髓へと、真っ白い快感が押し  
寄せる…。

下半身全体が、熱く…熱を帯びた様…。

「つつ……フツ!!」

はしたなくも、腰を自ら打ち付けてしまう。

お湯が混ざる音が、足元から聞こえてきますが…脚を閉じているか  
らでしょうか？

脚を開き…彼が動きやすい様になると、一気に快樂が押し寄せる。

たまに胸が岩肌に当たり、擦れてしまいますが、それはまあ…我慢  
しましょう。

声を上げてしまいそうになりますが、ただ…我慢。

我慢すると、またそれが感触を集中して感じてしまう事になり、ま  
た…気持ちがいい。

まだ入ってきていないのが、彼からも見えるのか…肌をバツンと打  
ち付ける音が響く…。

一度打ち付けられると、秘部からは、下のかき混ぜられる音とは別  
の音が…。

待った…。

「つ……あつ……ふつ……」

待ちに待った…正直に白状してしまえば、そういう事でしよう…。

押し寄せる快樂の波と、隆史君の劣情。

こんな私にここまで夢中になってくれる…そう思ってしまうと、更

に熱が上がる…。

私をこじ開け、中の奥…奥の奥まで、入ってきてくれる…。  
押し寄せる快樂が、何度も脳を刺し殺す。

足は震え、腰も震え…ただ…もつと…もつと…。

彼が、私の入口を広げ…何度も…何度も…。

……。

「あっ……ふっ……ふー……ふー……」

彼が動きを止め…私は岩肌に体を預けてしまった。

冷たい温度が、少し心地良い…。

声を殺していた為…集中してしまった…と言うのもあり…今は  
……。

……。

………？

「し…しほさん。積極的なのは、うれしいですけど…もう、そこにいま  
すから…」

……ど…どういう……はい？

……。

………はい!?

ゆつくりと顔を半分、岩陰からだすと…長い髪の女性と、体があつ  
ちりとした男性が、先程まで、私達が体を洗っていた並んで座ってい  
た場所に、彼女達はいた…。

ど…どういう……それに積極的？

わ…私は、止めようと…え…。

少し思い返して見ると…。

……。

う……あ…。

「…最低のレベルで、…まで…どれだけ…」

彼が何かつぶやいたが、意味が少し分かりませんでした。

ただ、私が…続けると、彼が言う前にむしゃぶりついてしまった事…。

座っていた所を、立たされた時点で…自分から岩へと移動した事…。

それが、一気に…それこそ鮮明に思い出してしまった…。

思考とは逆に…私から…。

い…いけない…これは、まずい…。

自身でも歯止めが効かなくなっている…。

『っ!!… んんっ!!』

岩の向こう…風呂へと続く、途中…檜でできたベンチに、彼らはいた。

湯船の湯気で、よく見えないが…あの声は、そういう事だろう…

自分が夢中になってしまっていた為、時間がの感覚が曖昧な為に…よくどういう状況か分からない…。

今はただ…湯気が作り出している、二人のシルエットが見える…。

…少し…。

ほんの少し、目を離していただけだというのに、望まぬ来客達は、すでに行為を行っていた…。

その…自分の感覚で、ほんの少し…。しかし、実際はどれ程の時間だったのか…。

自身でも驚く程…隆史君との行為に集中してしまっていたと言う事なのでしようか？

「……」

じ…自業自得ですが…出るに出られない状況になってますね…。

目と鼻の先…湯船から出る、すぐその場所に、彼女達がいる…。

『はっ！ あっ!! あっ!!』

リズムカルに響く、甘い声が、ここまで聞こえてくる…。

遠慮なく、声を上げ…快楽に身を委ねている女性…それはそうだろう。

彼女達は、私達に気が付いていない…。

遠慮する事もなく…行為に勤しんでいる…。

……。

秘部が一瞬、しまった気がした…。

……。

なぜでしょうか？　これは…羨ましい？　そう、少し感じてしまっ  
た。

男性の上に跨り…一心不乱に腰を下へ押し付けている女性。

艶かしい声と共に、自身の胸を弄り…腰を前後に振り…。

ニチツ…と、少し音がした…。

と…同時に、隆史君が今度は私の頭を撫でる…。

「また一瞬、冷たい感覚が、脳内を刺激した」

ニチツ…ニチツ……つと、またゆつくりと私の中を、往復する快感。

この異常な状態に、彼もまた、変に興奮しているのか…陰茎の全体  
をゆつくりと押し付けるように…動き出した。

「んっ…あっ……んっ…」

ゆつくりと動かされている分、彼を…彼全体を感じる…。

陰茎の先…カリ？　とか、言っていましたね…。

その部分が、私の出入り口に引つかかる。

ズルツと少し抜け…またすぐに浅く……そしてまた引っ掛け…出  
す…。

少し早く…その動きをグチツグチツと、音を聴かせる様に繰り返し  
始めた…。

「はっ…はっ…」

彼の大きな先は、私の秘部を鳴らす。

下品な音と同時に、脳髓を刺激する快樂。…そしてまた震える、自  
身の腰…。

何度も押し寄せる軽い快樂の波に、声を殺すのがやつとですが…少  
し…焦らされている気がしてなりません…。

……。

そして、今気がついた。

興奮しているのは、私も同じです。

…この特殊な状況に…おぞましい程、興奮している…。  
感情が、異常に昂ぶりやすい…。  
こんな状況でも、行為をやめない隆史君。そして、この状況で分か  
りやすく快樂を示される。  
彼に…ただの女として自覚させられ…そして、引きずり出されてい  
ると、実感をさせられている気がする…。

▽

「かつ…あつ…はつ…」

何度目か分からない…軽い絶頂の波…。

それが押し寄せ…終わった時に気がついた。

岩の向こうからは、私の押し殺した様な声をかき乱す様に…大きな  
声が響いていた。

貸切の露天風呂とはいえ、露天…外です。

外にまで響き…聞かれないとは思わないのでしょうか？ と、思っ  
ていた声が聞こえない。

事が終わってしまったのか？ と、普通なら思うのですが…甘い声  
とは別に、他の音が聞こえる…。

彼も動きを止めていた為に、少し体を捻ると、体を少し傾け岩の向  
こう側を覗いていた。

…ムツ

気になるのは、分かるのですが…他の女性の裸を覗くようで、少し  
嫉妬にも近い物を感じました。

言う権利など無いのですが、腹が立つモノは、立つのです。  
…。

ん…？ ちよつと様子がおかしい。

ちよつと困ったような顔をしていますね…。

なんででしょうか？

「っ!!」

釣られ……私も岩の反対側を覗きました…。

男性の上に跨っていた女性…その態勢は変わらないのですが…その男性の上で、動きは止めていました。

先程まで、湯気でシルエツトしか分からなかったのに、今はハツキリとその姿が見えました…。

更に…その女性。

(ち…千代さん!?)

そういえば…聞いた声のある声だとは、一瞬頭をよぎりましたが…まさか…隆史君はここにいますし、あの男連中をこんな場所…。

更には、あんな行為をするなど…肉体関係を持つなど思ってもみませんでしたから、別人だと判断しました。

それに男性…。あんな体付きの良い男性は、あの場におりませんでしたからね…他の宿泊客だと思いました。

…が、目の当たりにすれば、信じる他にありません…。  
しかも…。

『っ…ぷっ……ジユブツ…あっ!!』 はあ…こつち…も…』

はい…しかも…。

裸の彼女は、その男性の上に跨り…その周りを、複数の男性に囲まれています。

そして体の正面が、こちらを向いていましたから、はつきりと分かります。

…その男性達…その…突き出された、複数の肉棒を美味しそうに…交互に口をつけ…貪っていた。

手は彼らを逃さない為か…肉棒を掴み…口から抜かれれば、だらしなく舌を垂らし…唾液ともに、別のへと口を移す…。

「っ…」

シヨックでした。

彼女のあの様な姿は…。



男性の顔は、よく見えませんが…やはりあの、接待したスポンサー達では、ないようですが。

枕営業とも違うのでしようが、隆史君以外にも、体を許してしまう様になった彼女が…。

「その為でしようか？ また…一瞬、冷たい感覚が…」

『い…イキ…ほうでふか？ ●●君!? 出し…てっ…ジュツツツボツ!!』

君？

男性の名前を呼んだのでしようが、よく…雑音が入った様に聞こえません。

『…こっちの…はっ…●●君も…イキそ…ああ…可愛い顔して…出してくだっ…んんんっ!!』

素早く手を動かし…肉棒に顔を囲まれて、その一つの肉棒にむしやぶりついたていた彼女が、顔を離れた…。

反対の手もまた、素早く動かす。

瞬間…。

二人の男性の先から、勢いよく白い体液が放出された。

こちらまで、臭ってくると思える程の、白く濁った液体。

「はっ…んっ…」

ドロドロとした体液を、顔中で受け止めた。

だらしなく開いた口からは、それをこぼさない様に…長い舌を突き出して…。

粘着質な体液は、顔を滑り落ち…また、彼女の体を伝う…。

…。

その恍惚の笑みを浮かべていた、千代さんは…どこか狂気じみている…。

『んっ…あ…はあ…』

ドロドロに汚れた彼女は、また嬉しそうに体液を飲み干し…次だと言わんばかりに、別の肉棒へと口をつける。

そして啜る様な音がまた…聞こえる。

「…なんだ、千代さんだったか。なら、問題ないな」  
「えっ!？」

安堵にも似た声を、隆史君が吐いた……え？ 問題ない!？」  
「ちよっ!？ えっ!？ たかっ!？ んんっ!!」

浅く入っていたモノを、奥まで突き入れて来た…。

そのまま私の両脚を持ち…。

後ろから太もも部分へと腕を入れ…開脚させながら…私を持ち上げた。

「たっ…たかっ! んんっ!!」

戸惑う私に…彼は言う。

持ち上げられている為に、耳の横に口を近づけ…。

「大洗ホテルの…夜。部屋の前…」

「っっ!!」

「それに、あの千代さん見て…どう思いました?」

「……なっ」

「それに気づいてました? しほさん…男性器を肉棒って、言ってみしたよ?」

「っっ!?!」

え…あ…?

驚き、振り向く私の顔を見て…隆史君は、とても普通の笑みを浮かべていました。

そして…諭す様に…。

「まあ? それが、しほさんの望みなら、俺は構いませんよ?」  
「え…」

ジャブジャブと、湯船をそのまま移動…持ち運ばれ始めた…。

何故でしょうか? 抵抗する意思がどうしても沸かない…。

「そこまで、目を輝かせて…モノ欲しそうな顔されては…協力しましょうね?」

「なっ!?!」

「はい…正直に【言いましたよ?】」  
言う…。

「う…」

「う？」

「羨ましい…少し…そう…感じまし…た」

「へえ？ しほさんも、複数に囲まれたいと？」

「い…いえ…そういった訳ではないですが…。隆史君がいないと、嫌ですし…」

「…は……はい」

言えと言ったのに、言わせておいて何故、照れたのでしょうか？

しかし…と…止まらない。

「大洗ホテルの夜もそうでした…。あそこで隆史君に言われてしまったら？ とも、考えました…それに従うかまた…躊躇してしまっただ…してしまっただです」

「…」

「た…試してみたい…。隆史君が私を掘り起こす…新しい刺激を…」

「では…どうぞ？」

「…え…」

開脚をさせられ…繋がっている状態を、彼女達の目の前に晒されていた。

…いつの間にか、移動が済んでいた様だ…。

そんな…こんな姿を見られている…。

「では、西住流家元様」

「っっ!!」

…(…ここに来て…。

普段の私を呼び起こす様な、言い方…。

「はっ!! んんっ!!」

声をまた…無意識に殺してしまう。

前に突き出された、私の秘部を…何も疑う事も、驚く事もしないで…千代さんが刺激する。

音を立てて…舌を這わせ…。

「あ、千代さん。先に家元が試したい事が、お有りの様ですので、後に

してください」

「んっ……あら、そうですか？」

…何が…。

千代さんのお相手と、並んで寝転ぶ隆史君。

それに…自分から入れるようにと、指示を出される…。

周りの男性の視線が気になりますが…それにまた、素直に従ってしまおう…。

「はあ…はあ………なんでしょう…この…」

秘部を指で広げ…ゆっくりと彼の先を当てる…。

「見られて………ます…の…」

グチュツと、粘着液を押しつぶす様な音…一気に奥まで座り込む。

広げられる快感と、快樂。

それが一気に押し寄せる…。

頭が自然に下がり…軽く上がる息。

ハアハアと、熱いモノが喉元から漏れる。

「……ん」

頬に当たる、また熱いモノを感じた。

さっそくと秤りに、大きな肉棒を横から突き出された…。

周りの男性は、私の顔に……肌に…一斉に擦り付け始めた。

少し奥にいる千代さんが、視界に入ると…すでに私を横目で見ながら、他の肉棒にむしゃぶり付いている。

また…嬉しそうに…。

「正直…試してみたいと、言っ…てしまいましたが…見知らぬ他人…」

「そうですね。鋼鉄程に固いとまで、言われている、西住流の家元が…見知らぬ男に、快樂の為にだけに股を開く」

「……」

い…言い方が、少しいつもと違いますね…隆史君。

乱暴…とは、少し違いますが…それでも、ここまで煽る様な言い方……しませんでしたのに。

「でもね？…しほさん」

普段と同じように呼ぶ時とかは有りますが、ここまで露骨に…。

「もう、夢中になっているじゃないですか？」

……。

え…。

「その、西住流の家元が…男性器を両手に…ですから、【正直に】」

匂いが…味が…。

少し変われど…男の匂いが、鼻を突く。

舌が無意識に動く…。その舌先で、先の穴を穿る…先程お預けを食らったモノが、早く…ほしい。

「それに、俺がいないと…とか、嬉しこと言ってくれましたよね？ でしたら安心してください」

片手で、口のない肉棒を、ただ出させる為だけに動かす…。

脇にも熱いものがあるが、好きに動かさせる…。

ジユルルと、唾液を啜りながら、口に含んでいる肉棒を刺激…出せる為に、恥ずかし事とやらもする…。

目頭が熱くなる…。

どこかで、冷静な部分があるからでしょうか？

ここまです…おかしくなっていたと、どこかで実感してしまった。ただ…男を絞り…貪る。

先程から、思いと行動が一致しない。

所々、時間が抜けた様に感じる…でも……だけれども…。

もうだめ…段々と、考えられなくなってきた。

男の匂いが、私を動かす…ただ…ただ……。

オカシイ。

隆史君が、安心しろと言っていますが…こんな…ただの淫乱女みたいな行動をしている私に…何を…。

「皆…俺ですからね？」

…はい？

一瞬意味が、分からなかった…。  
なにを言っているのか？ …と。

モヤが晴れて、湯気もハレル。

…ここで…初めて周りの男性達の顔が、見えた気がした。

みんな…隆史君だ。

少し、年齢が違う顔つき…少し、懐かしい顔。

歳が違う隆史君も、多々…いる。

何人いるのでしょうか？

…。

…。

ああ…これは…。

夢？ ……でしょうか？

欲求不満、ここに極まり…と、言った感じ…でしょうか？

「そうですね。ほら、しほさんが欲しい物が、でますよ？ …どこに欲しいですか？」

少し前…中学の頃…の彼でしょうか？

その彼が、言う…。

彼が言うならばそうだろう…。

私が、隆史君を見間違っはうが…無いのですから…。

これは本物の隆史君。

…小さい頃から…見ていた…。

そうか…夢なら…いい。

誰にも私にも… 娘にも…：迷惑はカカラナイ…。  
夢なら…。

啜る…。

出されると、同時に啜る。

喉に流れる、粘着質の体液…。

喉奥まで押し込み…逃さない。

待ちに待った、味…感触…：匂い。

扱っていた手にも、熱いモノが掛かる…。

勿体無い。

胸に掛かると、塗りたくるように…広げる…。

夢ならいい…ただの女でいい…。

「そうですよ。ただの雌になってください」

▽

調整してあるので、濃さ…量。最大限になってます。

良く分からない事を、夢の中の隆史君は言う。

ただ、納得した。出される量がすごかった。

噛まないダメそうな程、ネバつき…またそれが美味しい。

露天風呂では、時間の為に、ここまでだと…すぐにまた終わってしまった。

ああ…夢もここまでかと、残念に思うと…部屋に戻っても、ありが

たい事に継続した…。

浴衣を着せられ：ぐったりと歩く中：漸く部屋に戻れば、直様に、彼を：隆史君達を求める。

千代さんもまた、普段見せないほど、乱れていた。

向かい合わせで、二人揃って後ろから突かれ：口が触れ合う程、顔を近づけ：もう一本の隆史君の肉棒を、舌で取り合う。

ジュロロロと、長く響く淫口音を彼はとても喜ぶ。

ならば…と、上に乗り：周りの：何人かの隆史君の肉棒をまた、心行くまで啜り：音を出す。

気持ちがいい。

気持ちがいい。

娘から：借りているだけだと言うのに：何故だろう。

少し、黒い感情が沸く：だけど、今はしまっておく。

この凄まじく感覚がある、夢の様な夢を楽しみたい。

途中：一瞬、お尻に冷たい感触が走った。

それからだろう：その、私のお尻まで使ってくれた。

初めてだと、言えば：まずは慣れましょう：と、背が高かったとはいえ、まだ小学生…。

その頃の隆史君が、複数現れた。

やはり：夢ですね。

表れ方が、非現実的でした。

地面から：影から現れるとか…。

その小学生の：たかし君。

また彼らも、口でされるのが好きでした。

それでも、それなりに大きな幼いモノを咥えれば：男の匂い。

：口で夢中な中：ゆつくりと、お尻に彼が入ってくる。

ゆつくりと、ゴリゴリと入ってくる：初めてだと言うのに、入り

きった瞬間：絶頂に達しました。

息を吐いていれば、目の前には、乱れに乱れている千代さんの姿。



その時にはもう、千代さんは好き勝手にされてましたね。  
前と後ろ：両方から刺されて…。

その姿を見て、生唾を飲み込む、自身の喉が鳴った。  
私にも早くして欲しかった…。

しかし、察してくれたのか：口では無理だと叫んでいましたが、私はどんな顔をしていたのでしょうか？

頬が吊っていたのを、自覚していましたから…。

「かあ……あうああ!!」

ゴリゴリと：たかし君に挟まれ：中で彼らが当たる…。

こすり合わせる様に動かされる度に、意識が飛びそうになる…。

胸はもう一人のたかし君に、文字通り使われ：自身の手で挟み：動かしていますね…。

快樂の為でしょうが、その少し苦しそうな顔が印象的でした。

「ジュツ……レラ」

横を向き：もう一人のたかし君を口で味わう…。

子供に見えますが、出されるモノが、また…。

パンパンと同時に響く、肉を打つ音…。

段々と動きが早くなっていく中……ああ……そろそろかと…。

「いつ……きい……ますっつ!! あああ!!」

絶頂に達する時：報告して欲しいと言われ…。

その度に口にする。

「…子供四人にイカされましたね」

熱いモノを全身で感じる。

耳に息を吹きかけられる様に：たかし君に言われ……また、二度目の絶頂…。

「ひっ……はっ……また……イキ……まし……たあ……」

力なく、たかし君に覆いかぶさると……全身がドロドロ口になっているのに気が付きました。

ニチツと彼の肌と当たると音を上げますから…。

それは千代さんも同じのようで、彼女のポツカリと空いた、お尻の穴からドロドロと大量の白い液体が、流れ出ています。

同じく秘部からも…。その二つの液体が混ざり合い…。ピクピクと腰をう動かす千代さんの振動に、ニチャニチャと聞こえて来てますね…。

胸も…顔も…髪も…。

時間が経つにつれ…全身に隆史君の匂いが、染み付いていく…。

「んんああ!!」

そして…今度は、いつもの隆史君が、私に入ってくる。

中で何度も出されている為に…グチャグチャと…また音を聴かせるように出していきます…。

たかし君とは違い…いつもの大きさ…えぐい…それこそ、子供の腕ほどの大きさ…。

両穴を塞がれ…口まで塞がれ…。

それでも何時もの様に、私の気持ちの良い場所を、適度な速さで攻めてくる。

「イッます!! イってますああ!!」

強引に絶頂を迎えさせられ…休憩すら許さない程、まだまだ動いてくる。

後ろと前…両方からの、この大きさの快楽は、たかし君以上に私をおかしクさせる…。

途中…なぜかゴリゴリとした…丸い異物の様なモノを、彼の陰茎から感じました。

それをまた、両穴を攻められる…。

中で引つかかる部分が増えた様に感じ…それがまた気持ちがいい…。

ハシタナイ、獣地味た声を、叫んでしまっていた…。

グチャツ!! ニチャツ!! …と。

精液が、性器で混ざりあり…泡を立てて飛び散る…。

私もこうなのだ…千代さんの姿を私に見せつけてくる…。

お尻を使われ…髪の毛まで使われ…。

しかし、疑問すら挟ませない様に…余計な事を考えさせないように、彼は私を壊す。

「っは… はあ……はあ……はあ……しほさん」

「か……あ……は……」

腰が震え…腕が震え……脳が震える…。

もう、何も…考え…。

「千代さん」

「……………」

千代さんは、すでにダメですね…。

暫く前に気絶してしまってます。

すでに水でも浴びたのではないのか？ と、疑ってしまうほどに、

愛液と体液と…汗に塗れて動きませんね。

「…もう少し、起きていてくださいね」

「……………ああ!!」

また、肉を叩く音を響かせ…強引に千代さんを起こす…。

仰向けにさせ、横からまた、肉棒で口を塞ぐ…。

「いいっ!! あっ! はっ!! もっっ!! とおお!!」

「あっ!! はっ!! んっ!!」

すぐに意識を取り戻し…また、隆史君を求め始めた。

同時に攻める私の声に応答し、激しくまた動き始めてくれました。

「しほさん…千代さん」

「なっ!! んんんっ!!」

「接待…とか、言っていましたか、性接待って本当にあるんですか？」

「なっ!? んっ!!」

…まあ。気になるでしょうが…何故今、この場で…。

快樂への集中が、一旦途絶えてしまいました…。

「千代さんと、しほさん程の女性なら…腐る程、誘いがあったでしょう？」

「んあ!! あっ…ありましたっ!! きよっ……今日来った!! ……」

はああ……髭…とかああ……あああ!!」

「あっ!! はっ…ありま……すうう……ああっ!! 他にも多数っ!!」

焦らすように…喋らせない様に…そんな動き…。

喘ぎと共に、喋らせるのも、隆史君…好きですからね…。

「当然…殺意で答えていたと思いますが…」

「口っ…!! だけだとかもっ!!」

「胸だけ…とかっ!!」

そこで…彼は、動きを止めた。

急に…いきなり…。

気が付けば、周りのいっばいいいた隆史君が、私達二人を攻めている、隆史君だけになっていました。

そして彼は…。

「じゃあ、今度…それを受けてください」

「!!??」

か…固まった…。

体が、硬直してしまった。

何を…。

「はっ!!! んぁ!!」

「ああっ!!」

体を仰け反らせて…また深く突き立てた、彼に体が反応する。

「…どうです? 俺の言う事、聞けますか?」

「んっ…はっ…はっ…はっ…はっあっあっ!! なんっ…でっ!? あ

あっ!!!」

ゆっくりと動き出し…段々と動きを早くさせていく…。

快樂の波がまた押し寄せて…。

「…どうです……かっ!?!」

グリッ…と、中で大きくなった。

私達の反応を楽しむ様に…。

そして…イキそうなのを知っているのか…焦らすような動き…。

弱い所を敢えて、避けるように…。

…。

考える力がない…。

「わっ…わかりましたっ!!! 聞くっ! 聞きますからっ!!!」

「はいっっっ!! だっ…だからああ!!!」

イカせて欲しい…ただ…それだけ…。

それに隆史君なら…言う事なら…違う私を…。

アレ…これ…夢でしたよね?

「…イキたいだけに、そんなお願い聞くんですね。…完全にもう、ただの雌ですよねぇ…」

意地の悪い事…を…。

「ま。嘘ですけど」

「!!??」

「前にも言いましたけど、俺以外に貴女達を抱かせなんてしませんよ…今のは、ただの確認です」

声が…大きくなる…。

なぜか…安堵と共に、落胆も…しかし、なぜか嬉しい…よく分からない感覚…。

「…自分の女に、そんな事…させませんよ…。」

女…。

彼の言葉は、時折卑怯です…今のも多分、そうでしょう…。

女…女…っっ!!

わかる…子宮が降りてくるのが…。

来る…。

今日一番のが…来る…。

「でっ？ どこにどう、して欲しいですか？」

子宮をこじ開けられる様に…奥に突き入れられた。

私達の答えを知っているかの様に…。

そして…答える……答えてくれた。

「中についいああああ!!!」

「奥についいああああ!!!」

また私達の中が、熱い彼で満たされた。



…。

やっちゃった…。

スキル使って、好き勝手…今までで、一番……無茶しちやっただ…。

うあああ……すげえ事言っちゃったし…。

ノリが今までより、悪乗りする確率が、かなり上がった…。

女……呼ばわり……雌呼ばわり……。

昨晚の事は、快樂と同時に、別の記憶として彼女達に残ったはずだ。

複数ではなく…俺一人と。

辻褄は合わないが、それは疑問に思わない様に、設定。

…。

しかし……すごかった……。

彼女達に掛けた催淫スキル……レベルが最低のモノだったんだけ

ど……乱れ方が凄まじかった…。

隠語…言ってくれなかったな…。

肉棒だけだったな…正直に思った事を喋るスキルも使ったのに…。  
……。

…今度は野外で、でも…してみるかあ…その白状スキル使って…言  
わせてみたいなあ…。

いかん…まだ、半分スイッチ入ってる。

…この状態で、みほに迫ったら…本気でぶっ壊しそうだから…やめ  
ておこうかね。

…。  
朝の布団の中…また裸の二人に挟まれた状態で、目が覚めました

朝の五時です。

ぶっちやけ、殆ど寝てません。

15分位でしょうか？

…明るくなるまでヤツテましたから…。

さて…。

…。  
本気で二人共、墮としてしまっている確認も取れましたので…さて

どうしよう…。

◇ ルート ・ 人妻編④ ◇ くマツサージく

「お姉ちゃん」

「…ん」

まほちゃん含め、朝飯に使った食器を皆で片付けている、クソ暑い真夏の午前。

そう、午前だと言うのに、額に汗が出るほどの、暑い夏の日。

俺一人でも良いのだけど、あんこうチームの面々が全員集合していると、その汚れた食器も結構な数になる。

まあ、今回は優花里も沙織さんも…プラウダ勢の方々も、ご来店されておりませんがね。

台所で洗い、拭き…渡して食器棚へと移動する工程。

流れ作業の様になっているが、これがまた…特にまほちゃんは、楽しいそうだ。

何もない…普通の一日。

こういった休日は、彼女にとってはとても貴重で…変に心安らぐそうだ。

んな事で、完全に客人を働かせているといった状況では、安易に寝ているわけにもいかないらしく、麻子も食器を布巾で拭く事に真面目に取り組んでいる。

華さんは、料理の腕前が壊滅的らしく、毎回毎回、作る事も片付ける事も、お手伝いに専念している。

俺を含めて、全員で5人…はっはー！ 狭いなあ！ 台所！

…いいなあ。なんかこういうのは。

そうそう！

これで、平穏。

何もない、ただ流れて行く生活の時間。

……。

ま、こんな時だ。

気持ちを切り替えないで、あのクソ野郎と、クソメガネの事なんて、



今は考えないでおこう。

「さて…」

全ての工程が終わりそうになったので、お茶を用意しようと冷蔵庫を開ける。

この家には、物凄く不釣り合いな、色んなセンサーやら機能やらが搭載されている冷蔵庫。

…。

これを購入してくれた人が、頭に過ぎった。

…そうだな。

一度、しほさんに色々聞いておかないとな。

特に、あの擬似ホスト…分家の野郎。

露骨に俺に対して、敵対心を見せてきている。

俺の事を思って？

んな親切心を全面に押し出した言葉を、冒頭に毎回言ってくるが、別の意味での俺の事だろうよ。

…：おつと、いけないな。

考えない様にするんだっけか。

強引に、脳内を今の状況に適した考えをしないと…と、切り替える、開いた冷蔵庫の中を見ると、作っておいてあったお湯出し麦茶が、もう無くなりそうだった。

ふむ…また、作っておくか。

「あ、私達の方は、いいよ。隆史君」

「んあ？」

少なくなつた麦茶の入れ物を取り出すと、すぐに冷蔵庫を閉めた時、みほが声をかけてきた。

いい？ 何が？

「私達、すぐに出かけるから」

「出かける？」

「うん。明々後日、エキシビジョンマッチでしょ？ ちよつと学校に行つてこようと思つて」

「学校…あれ…今日、練習あつたっけか？」

会長達から、今日の予定は特に聞いていない。

明日、風紀員の仕事を手伝うって事位だ。

んで、試合前日に、最後の練習の予定……じゃ、なかったっけ？

試合前に戦車に何かあるといけないから、軽い練習とからしいけど……。

「ないよ？　ないけど、最後の練習前に、戦車の様子を見ておきたくて」

「ふくん。ん？　みんな？　まほちゃんも？」

「うん。……みほの戦車を見せて欲しくてな。一緒に行ってくる」

「……西住さん曰く……別に良いそうだな」

他校の生徒に、戦力を見せて良いものか？　と、一瞬思ったけど、マコニヤ……あ、睨まないでまほちゃん。

う……ん。麻子が、俺の疑問に即座に答えてくれた。

「私達、黒森峰は今回参加しないからな」

「うん。だから別に良いかと思って」

「それに、他校の整備力というモノを間近で見たい……と言うのもある」

「そんなもんですか」

「そんなもん……フツ。そうだな、そんなもんだ」

ああ……レオポンさんチームですか。

そういえば、まほちゃん。彼女達に興味があるとか言っていたっけ？

何故か嬉しそうに、まほちゃんが小さく笑った時……。

「あれ？　お客さんだ」

玄関から家の呼び鈴の音がした。

インターフォンではなく、ちよつとアナログな呼び鈴。

古い家だしな。でも、こちらの方が、俺もみほ達も好きみたいだ。

何故か、落ち着くんだよな。

「はいはい」

みほが、パタパタと玄関へと小走りで走っていく。  
家の中で走るなよ…つと、毎回言ってるんだけどなあ。

…昔の、やんちゃだった頃のみほを、思い出すな。

「所で書記は、どうするんだ？」

「俺？ …どうすつか。特に珍しく予定もないし…しほさんの所に  
でも、行ってくるかなあ」

《…………》

「…また、お母様か。お前は、暇さえあれば、お母様に会いに行くのか  
？ ん？」

「…………お前は、馬鹿だろ？ 何故言葉に出すんだ」

「いいい加減にしてくださいネ？」

…何故かフルボッコだった。

最近…華さんが、しほさんに対しての俺に厳しい…。

「西住家の事で…ちよつと、聞いておきたい事が、合つてね」

「西住家？ …なんだ、私に聞けば良いだろう」

「…だつて、まほちゃん」

「だつて？ 相変わらず、変な所で子供みたいな言い回しをするな？

お前は…。まったく…なんだ？」

「あの分家の野郎の事、教えてくれるの？」

「思い出したくも無いな！！！！  
！！！！」

ほら…。

「なるほど。なれば仕方がないな。許そう」

「…………なんて顔すれば良いんだろう」

目元に皺を寄せて、本当に嫌そうに言い放つたなあ…。

彼女の嫌悪感しか無い…俺に対してでは無いけど、そんな顔は、余

り見たくない。

だから、この話はもう、よそう。

「…しかし、みほの奴、遅いな。誰なんだろ」

「宅配便か何かでしょうか？」

「なんだ書記。また何か、如何わしい物でも購入し…「買ってないよ!!」」

「まあいい。荷物もまとめてこよう。どうせ玄関前を通らないと二階へは行けないんだ。その時に確認すればいいだろう」

「そうですねえ」

「わかった」

ま、いいけどね…。



はい、そんな訳で、玄関先。

はあい。お客様を確認。

その玄関先で仁王立ちにも似た、立ち方の方に対して…完全に固まっている、みぼりん。

小刻みに揺れ…振動して、ギリギリと音させながら、此方を振り向いてきましたね。

ああ…完全に目が涙目だ…。

ほぼ蛇に睨まれた蛙状態。

はあい。そして、まほちゃん。

目元が暗いですよお…。貴女も固まってしまっているでは、ありませんか。

どうしたんだろ…別段、変わった事もないだろうに。

「こんにちは」

「ああ、はい。こんにちは…しほさん」

はい、そのお客様。

いつもの様に、いつもの格好でご来店頂きましたのは、西住流家元。玄関に入ったは良いが、完全に硬直してしまった、みほに対して困り果ててしまった様だった。

……。

と、いいですか…みほとまほちゃんの目の前だと言うのが、結構普通なのが、物凄い不安感が襲ってくる。

あんな関係になってしまったというのに…自業自得と言えば、そうなのだけど…。

…変な汗が出てくる中、みほの反応が、ある意味で安心感を与えてくれた。

「お…お姉ちゃん」

「……」

「お姉ちゃんっ！」

「…ガンバツ！ 妹!!」

「なんなの、ソレ!!」

ああ、可愛い応援ってどういうのだ？ と前に聞かれた時に教えてあげたなあ。

しかし、それを今ここでするかね…。

手を握り閉め、顔の前に出し、少し前かがみになって…教えた通り何だけど、顔！

無表情は、変！

…麻子も変に怯えているなあ。華さんの服の裾を握り締めてる。

華さんは、華さんで、微笑を浮かべてはいるけど、変にぎこちないし…どうしたんだろ？

特にあの関係がバレている訳ではないのが、良くわかる態度だから、良いのだけど。

まあ…仕方ない。

膠着状態が続いてもしょうがないので、俺から切り出そう。

「…と、いうか、どうしちゃったんですか？ みほの奴…」

「あ、いえ…私の顔を見たら、突然こんな状態に…」

あ…少し悲しそうだ…。

「ふむ…まあいいや。突然訪問なんて、みほ達に御用ですかね？」

「あ、はい。ついぞと言っては何ですが、少々様子を伺いに来たのですが…どうしたのでしょうかね…これは」

「さあ？」

完全に体を強ばらせ、信じられない顔で、俺を見てきている。

いや…どうした？ 本当に。

しかし…みほ達の様子を見に来たって…。

バレていないかの確認だろうか…。

「隆史」

「ん？ なに？」

「…お前は…あの状態のお母様と、良く平気で喋れるな」

「あの状態って…なにが？」

「なにが？ って…お前」

「いや…普通だよね？ いつもの格好で、いつもの様に、可愛…」その感想はいらん」

あ、はい。

あ、みぼりんの目の色が、若干カワツタネ？

「…あそこまで、機嫌が悪そうなお母様は、初めてだぞ…何か…私達はしたのだろうか？」

「機嫌が悪そうって…」

ああ、言われて見れば、なんか体に力が入って強ばっているなあ…  
オーラが出そうなくらい。

目の周りに力が入って、眉が釣り上がってるけど…。

「…それだけだろ？」

「は？」

「別にしほさん、何も怒っちゃいないだろ？ 機嫌も普通だし…：…ね

？ しほさん」

「そうですね。別段…」

「！？」

「??？」

不思議そうな俺としほさんの顔を、交互に見比べている西住姉妹。

「なに？　どちらかと言うと、しほさん、機嫌良さそうなんだけど？」

「なっ…」

何を一々驚いて…。

まあもう、いいや。

「あの、話が進まないの…それで？　どうしたんですか？　しほさん」

「あ、いえ…少々、隆史君にお願いしたい事がありました」

「俺に？　いいですけど、なんででしょう？」

特に何事も無いように、話を進行する俺に対して、信じられないモノを見る目が…いっぱい。

華さんまで…。

「ふむ…そうですね。…みほ達も一緒に、どうでしょう？」

……。

何を俺に頼む気だろう…。

そういや、しほさん。手荷物を持っているな。

それに目を落として、みほ達も誘ったけど…。

「二二 用事がありますから!!」

ハモったね…。

どうにも俺が、しほさんの機嫌が別に悪く無いって意見が、信じられない様。

特に何をするかすら言っていないのに、気持ちの良いくらいに拒否しましたね…。

「では、隆史君を少しお借りしますが…良いですか？」

本人はニコヤカに言ったつもりだろうけど、目の周りに力が入り過ぎていて、ちよつとその笑い方は怖いっすよ？

なんだろう…。しほさんの機嫌が、悪そうに見えるみたいだからだろうか？

しほさんの用件とやらが、お小言か何かと思っているのでしょうか

?

そのまま、止まった時が動き出した様に、一斉に動き出し…。

「隆史君、特に予定がないって言ってたから良いと思うよ!？」

「隆史! ガンバツ!!」

「後は隆史さんに任せて、私達は、学校へ参りましょう!!」

「頼んだぞ、書記!!」

…アツサリと本人の意見を無視して、俺の身柄を差し出された。

「では、彼を借りて宜しいですか？」

「う…うん」

「…そうですか。分かりました」

な…何故だろうか？

冷や汗が止まらなくなってきた。

みほの了承を得た時、変に安心した様な顔と、少し寂しそうな顔が混合した。

それは、何となく、分かったのだけど…本当に変な警報が、先程から頭の中を頭痛の如く鳴り響かせている。

「では…隆史君は、暫く独占させてもらいましょう」

「………」

あ…あれ？

少し頬を綻ばせ、そんなしほさんのセリフに、みほの表情が…消えた。

何かに勘付いた？ いや…不審がっている…とでも言うのだろうか？

みほの目が…母親を見ている目では、無い。

「みほ、大丈夫ですよ?」

「…なにが?」

「彼をお借りするのは、午前中だけです。午後から仕事もありますし…すぐに返します」

「……」

「そうですね…では、隆史君。みほの了承も得た事ですし…」

「な…なんでしょう?」



しほさんも、みほ達を前にしているというのに、俺を見る目がアノ時の色を放っていた。

一瞬だけ俺を見ただけだというのに、すぐに分かった…つまり、女の目をしていた。

…そして、今は…その目で、みほを見下ろしている。

「少し私のワガママに付き合って頂けますか？」



どうも、しほさん…彼女もまた、エキシビジョンを見ていくそうだった。

その為に、現在大洗に宿泊中。

その宿泊先のホテルまで、あの後すぐに移動した。

何故、ホテル…。

そのまま、我が家でも良かったのだけれどね…。

まあ、集中して欲しいと、良く分からない要望だった為にノコノコ着いてきた。

あの分家の話もあるし、こういった他に邪魔されない空間の方が、良かったのかもしれないしな。

まあ…うん。

先にしほさんの用事だ。

前回の大洗ホテル。

流石に何日か滞在すると言う事で、流石にスイートでは無い。

…ないが、この部屋…前に俺が泊まった部屋なんすけど…。

まあ、長期滞在料金で安くなるかもしれないけど、ビジホではな  
いって時点ですげえなあ…とは、思う。

「では、隆史君」

「え？ あ、はい」

部屋に着き、ベツトに持っていた手荷物を置くと、早速とばかりに、声を掛けられた。

家での雰囲気は、すでにない。

いつものしほさんへと、戻っていた。

「弥生さ…いえ、貴方のお母様からお聞きしたんですが…」

「……なんでしょう？」

「ふふ…別に、構える必要はないですよ？」

母さんの名前が、出た時点で、脳内アラームが真っ赤っかに切り替わった…。

何言った、オカン。

そんな警戒心丸出しの俺を見て、しほさんは笑った…なにが可笑しいのだろうか？

「たかし君は、得意だとお聞きしまして」

「得意？ ……なにがです？」

「そ…その、マッサージが」

…。

…。

「で…ちよっと、お願いしたく…」

「…何を言ってるんですか？ え？」

「いえね？ 本来ならば、プロのお店とかに行けば良いのですが…」

そこまで言くと、手荷物を開き…中から何か…色々な物を取り出してきた。

ピンク色の小瓶を数点。何か…ありや、なんだ？

「千代さんから、色々試して見ればどうでしょうと、言われ…ただ、海外のもらしく、一般のお店ですと持ち込みは不可らしく…勿体無いでしょう？」

…。

千代さんって、名前が出た時点で、どうだろう…。

何か企んでないのだろうか？ いや…失礼な話だけど…。

はあ…。

「確かに俺、体を鍛える上で、筋肉とか筋とかを、勉強してました…その経緯で、ある程度は施術も、独学ですが知識はありますけど…」  
うん…魚の目のおやつさんと、女将さんが腰痛持ちだったから、良くマッサージをして上げていた。

立ち仕事だし、仕方がないと思うしね。

だから、その為に何冊か本を読んで見た。

ああ…そうか、何回かオカンにもしてやったか。それで…。

「……」

少し不安げに見てくる、しほさん。

仕事しなくて良いんですか？ とか、色々と思うが…俺に体を触られるのはいいのか？

…今更か。

ちよつと待て。

でも、そんな事になんで先程、みほ達を誘ったんだろう…。

いやまあ…彼女達にマッサージをする事は、全然良いのだけど…なんでまた。

「そ…それに、ですね？」

「え？」

俺の考えている事を遮る様に、何故か恥ずかしながら手を上げた。

…ナニコノ、可愛い人。

「……すごいんです」

「はい？」

「筋肉痛が…凄まじく…」

「筋肉痛？」

「写真撮影の為…前日にジムで張り切りすぎました…。3日遅れで痛みが襲ってきまして……今は、腕すら上げるのが…いえ、動くのすら辛い…」

「……………はっ。ははっー」

先程の雰囲気は、何処へやら。

いきなりそんな事を告白され、腹のそこからの笑いが出てしまった。

「うっ！ …と…年を感じました…」

「なるほど！ それで、そんなに響めっ面見たいな顔してたんですか！ それりやみほ達も誤解するわ！」

「…くっ」

悔しそうな彼女に、一仕切り笑うと、恨みがましい目で見られてしまいましたね。

あく…うん。筋肉痛ねっ！

……ま。

いいか。それくらい。

思いの他、健全な御用件でしたので、引き受けることにした。

「分かりました、分かりました。しましうか、マッサージ」

「…本当ですか？」

「でも、俺のやり方って、基本的に腰が主ですよ？」

青森での経緯を説明すると、変に優しい顔で納得していた。

その目で見られるのって、なんか…恥ずかしいんですけど…。

「マニユアルが、あるみたいですよ？ ほら…」

「まあ…それならば。後は応用するだけですから、どうとでもできますけど…ん？ なんて冒頭のページが破られてるんだらう」

「ああ、何か紅茶をこぼしてしまったと、千代さんは言っていましたけど…」

「ふむ…他のページも濡れるよりましですが…まあこれなら何とかなるでしょう」

「セットで頂きましたからね。これも試してみましようか？」

「アロマ？ …ですか？」

小さな、英語だか何かで書かれていたピンク色の小瓶を掲げられた。シヨッキングピンク色って…まあいいけど。

しほさんは、その小瓶の封を開け、さっそくばかりに、専用の円柱

の機械にセットした。

コンセントを差し込むと、小さな駆動音と共に、薄く煙が上がり、段々とその煙が濃くなっていく。

…この人…ノリノリだ。

行動が素早い…。

まあ女性って、エステとか好きみたいだな。

この本を読むと、マッサージ…施術というか、エステに近い。

「…では、私も用意します」

用意？

「ええ、マッサージを受ける前に、お風呂へ入るのが良い様です。確かりラックス…の為、でしたかね」

「え…ああ、なるほど」

「あ、その前にコレを飲むと良いのでしたか…？」

マニユアルに代謝を上げるドリンク…と、説明されている物を取り出し、ボトルを捻る。

コンビニとかにも売られている様な、小さな小瓶…また、ピンク…。それを一気に飲み干すとしほさん。

…だから、躊躇がねえ…。

仰がないで…おっさん見たいな飲み方は、流石にやめて…。

「ふむ…苦い…こういう物なのでしょうか？」

一言、ボソツと呟き、小瓶をテーブルの上に置くと、部屋備え付けの風呂場の脱衣所へと消えていった。

脱衣所…ああ着替えるのか？

本格的にエステを受けるみたいだ…素人ですよ？ 俺。

ぽつんと一人、残されてしまった部屋の中。

……。

ボケーと、していても仕方がないし、準備を済ませておこうか…うん。

えっと…後は、ローションオイルと…ふむ。

マニユアルも結構しつかり書かれているし、みほにもやってやれるかな？

どうせなら、覚えて帰るか。

「…母。どうしました？」

「……」

「はあ…お母様？」

「えつと…いえ……」

「何を先程から見て…小包？」

「……」

「…お母様？」

「ま……」

「？」

「間違えてしまいました…」

「??？」

◆  
ある程度の備品を確認していると、それなりに時間が経つたのだから。

取り敢えず準備…オイルも使った方が良くと書かれていた為に、ベットを汚さないように、用意されたビニールシートつぽいのを敷いておいた。

アロマの甘ったるい香りが、部屋に充満してきた。

…うむ、苦手な匂いだ!!

独特な香りというのか…鼻の奥に、こびり付きそう程の香り…。

「お待たせしました」

「あ、はい……はいっ!？」

着替え終わったしほさんが、脱衣所から出てきた。

ポスポスト、スリッパで歩く音へと視線を投げると……いた。

すげえ姿のしほさん。

あの……バスタオルを体に巻いた姿で……。

ティーシャツか何かで良いと思うのですけど……。

……いきなりですね……どうしよう。

少しふらついた足取りで、ベットまで歩いてくると、そのまま俯せに横たわった。

躊躇がない……というか、素早いな……。

さっさとしてくれと、言わんばかりですね。

「……ふう」

……湯上り。

ちゃんと湯船に浸かったのだろう。

肩が蒸気し、少し桃色になっている。

真新しい、白いバスタオルが、強くコントラストを醸し出している。

薄い湯気を纏って、いるのがまた……変にその姿に目を奪われる。

「エステ……ですと、大体この格好ですが……?」

何か、言い訳をするように、俺に言ってきた。

顔が……少し熱っぽく見える。

ま……まあいいや……そりや、彼女も恥ずかしいでしょうよ。

さて、どうするか。

バスタオル一枚の姿で、横たわっているしほさん。

ベットへと近づいて、見下ろすと……またすげえ……。

やめよう……具体的に思うと、恥ずかしくてたまらん。

「私を裸をすでに見ているというのに……なんですか、今更」

「」

少し固まってしまった俺を見て……少し顔を背けて目を逸らしながら……。

「…今日は、ダメですよ？　この後、仕事がありますから」

「はい!？」

何がどう、ダメ…と、いいですか言い方!!!

「隆史君の場合…後に影響がでますので…次回ですね」

「!?!？」

…変に冷静に言っている積もりでしょうけどね!?

セリフ!!　顔を少し背けながら言っても、その表情が…。

「…そ…そんな気は、今日はアリマセン…」

普通にそういった言葉を言い始めたしほさんが、なんか…すげえエロいっす。

人妻…と、いった属性を思い出したら更にマズイ。

と…取り敢えず、余計な思考を誤魔化す為に、用意されていたもう一枚のバスタオルを取り出す。

そのまま、行動だ!　…と、腰から下の上に掛ける。

描けた後、彼女は横で止めていバスタオルを外して、背中をあらわにする。

…水着とか何も着ていない。

トップレスと言う奴だろうか？

ゴソゴソと体を振ると、巻いていたバスタオルを完全に外した。体の下に敷かれている。

「たっ…隆史君…」

「はい!？」

「はっ…恥ずかしいので、早く!!」

「りよ…了解です」

まったく何もしていないの方が、確かに恥ずかしい。

彼女の腰の上付近に跨ろうと、ベットへと脚を掛ける。

ギシツと音がすると、そのまま跨り、立て膝を立つ格好にする。

「で…では、体の力を抜いてください」

「は…はい」

見下ろすしほさんは、腕を顎元でくの字に曲げ…顎を掛けて待って



いる。

くっそ…アロマとやらの匂いが、鬱陶しい！

脇の横からは、丸くベツトに押しつぶされてれいる胸が見える。

30代後半とは、思えないきめ細かい肌が、妙にハッキリと見える。

首の後ろから、隠された臀部に向けてスラツと流れている背骨の筋が見える。

…ま…まにゆあるう。

見入ってしまったては、流石に失礼だ。施術…これは施術だ。

マニユアルに従い、背中へと手を伸ばす。

指が肌に触れると…一瞬体が反応した気がした。

つと、オイルだったな、オイル。

手の平に小瓶から、その透明な液体を流れ出させ、彼女の背中へと塗り広げる。

白い肌に染み込ませる様に、肩から背中全体へと…ゆつくりと…だっけか。

マニユアルに従い、背中表面を解す様に…。

「…んっ」

いきなりは冷たかったのか、小さな声を上げた。

手の平に落とした時には、特に冷たいとは感じなかったけどなあ。

そのまま、表面を解すような手の動きを止めないで、オイルでテカテカと光る肌部分の面積を更に広げていく。

触っていくうちに、広背筋の筋と、疲労しているであろう少し腫れぼったく固くなっている筋肉が分かった。

此処からは、疲労回復の為のマッサージ。親指とその付け根で、ゆつくりと解していく。

…。

いかん。

此処まで、無言でしてしまった。

妙な雰囲気壊そうと、喋ろうとするが、上手く言葉が出てこない。

みほと、まほちゃんの事を話そうと思っていたのに…にも、関わらず…。

「あ……ふっ……」

それなりに気持ち良く感じてくれているのか、段々と体の力が抜けていくのが分かった。

んでは、マニュアル通りに…。

まずは、脚。

体を移動させ、マッサージしやすい位置へと移動する。

足首から、脹脛…膝裏へと、またオイルを塗りたくりながら、ゆっくりと。

暖めるのも重要と言う事で、手の平を使いながら、体温を移すように…。

…なんか、筋肉関係が無い動きもあるけど…こういうものなのだろうか？

「…そ…それ…いいですね」

あ、好評の声を頂いた。

そのまま、スラツと長い脚の膝を曲げる。

バスタオルが少しまくれ、太ももまで見えたが…特にしほさんは気にする様子もないので、続ける。

太もも…内腿からゆっくりと、それこそマニュアル通りに揉み解す。

スベスベとした肌感から、オイルの滑る感触が相まり、触るだけで正直気持ちがいい。

……。

「段々と、足の先まで暖まって行く気がします…」

「そ…そうですか」

「…なるほど。確かに上手…」

「ちよつと恥ずかしいですけどね」

「……」

「……」

「しほさん」

「…なんでしようっ…」

ムニムニと、手全体で、優しく揉みながら、聞いてみる。

「先程、みほとまほちゃんを、コレに誘ったのは、何ですか？」  
「…そうですね」

言い倦ねるかと思つたら、思いの他、すんなりと答えてくれた。  
要は…。

「…罪悪感から…で、しょうか？ 結構、本気で聞いてみたんですけど…断られましたね」  
「ぐっ…」

「みほは兎も角、まほとは、接点を作って上げようと思つたのです」  
「接点？」

「貴方に触れてもらおうという接点…大義名分。それを…作ろうと…。しかし、本当に上手ですね」

いや、褒められて嬉しいという気はあるんですけど、今言わないでください…。

「んっ…ふう。あの子達は、貴方に触られる、触れられる事を、多分拒みません。寧ろ、ドンドン迫ってきて欲しいとすら、思っていると思いますよ…」

「そ…そうでしょうか？」

「そうですね。…後、みほとはすでに、関係は持っているのでしょう？」

「ま…まあ」

「私を散々、好き勝手している最中、その様な事を言っていましたね」  
「」

言った…だつて！

貴女達、性癖がまるで一緒なんですから！

「…聞いている最中、それを思い出しまして…」

「…」

「うっかり…ええ。うっかり…感情が、顔に出ってしまったかもしれないね」  
「」

あ…あの時の目…。

「ふふ…少々、あの時のみほの顔が…」

「」

「あら…手が止まりましたね」

……。

……………どういうつもりなのだろう。

しほさんのみほを見る目が、明らかに違っていた気がしたのは、その為だろうか？

アレ…みほ、何かに警戒色を放っていたけど…。

や…やめよう!! なんか、めちやくちや怖いから!!

過去最大級に、鳥肌が立つ位に!!!

目の前の事に集中しよう…。

手を止めてしまったので、ついでと言ってはなんだけど、マニュアルを再度見てみる。

できるだけ、何も考えない様にして…マニュアル通りに進めて行くか…。

ニチツとした、粘液を潰す様な音とを起て、バスタオルの下に手をすべり込ませる。

できるだけ見えないようにと、気を使ったのがコレだ。

腰骨から、左右に…押し込めるように、ゆっくりと下へ手を滑らせる。

指にも力をいれて、指圧をするかの様にもすると良いらしい。

腰から臀部全体を暖める様に滑らせるのが、オイルの感触も相まり俺すらも心地がいい。

マッサージを再開した辺りから、しほさんの口数が減っていった…。

「んっ…お尻もマッサージを…はあ…するのですか？」

「……マニュアルに書いてあるんですよ。…ほら」

「あら…」

「嫌なら、やめますけど…」

「あ、いえ…大丈夫です…よっ」

少々、熱っぽい息を吐き始めたのに、ここで気がついた。

…我ながら集中してしまつたなあ…。

言われるまで、正直に言えば…まつたく邪な気持ちは無かつた。本当に施術に集中していたからだ。が…一度、しほさんの少し変わった吐息に気が付くと…なんかもう…。

揉み解す…というか、絞り出す…様な動きで、腰と尻部分を往復する。

バスタオルで、その部分は勿論見えないが…背中全体をするのには、正直邪魔に感じた。

腕から下…肋骨の上を滑らせ、背中全体をくすぐる様に動かす。しほさんが、体をくねらせれば、胸が少し弾む…。

オイルと…汗だろうか？

室内灯が、怪しく彼女の体で、その光を反射させ始めた。

ヌルヌルと、またゆつくりと、ローションを塗り広がらせてゆく。隙間なく滑らす手から、粘着液の空気を押し出す音が、ニチニチと聞こえてくる。

「ふっ…ふっ…んっ…ふう」

変に甘つたるい声が…脳内に刺さる。

違う…今日は、違う。

如何わしくない…多分。マッサージデス。

何か…違う事で、気を紛らわせないと…マニュアルウ…。

…。

エー…。

一度動きを止めて、ベッドの端に置かれていた荷物に手を伸ばす。セツトに入っていたもう一つの物。

できるだけ素早く、それを用意…そして。

「…しほさん」

「な…んっ…でしよう…んん?!」

驚いた声を上げた。

まあ、いきなり視界を塞がれば、誰だつて驚くだろうけどね。

もう一つ、セツトの中に入っていた物。

それを彼女へとセツトする。

…そう。アイマスク。

「な…っ?! えっ?!」

「えっと…視界を遮る事によって…触れられる事に感覚が集中して、マッサージの感触が更に敏感になる…だそうですね?」

敏感って…。

「…あ、本当ですね」

彼女の前にマニュアルを開き、見せる為に開いて目の前に置くと、その本文を片指でアイマスクを上げて、読み納得した。

「お好みでって記載されてますね…まあ、良いでしょう。折角ですから試してみましようか」

「え…あ、はい」

納得した所で、アイマスクを再度普通に付け直した…マニュアルに従った様だ。

なんか、結局の所、マッサージを受ける事を完全に楽しんでいる様だった。

プロがするよりも、明らかに俺の方が下手くそだろうに、それでも変にはしゃいでいる様な感じ。

…。

まあ…はい。んでは、その通りにしてみますけど。

自分で捲ったアイマスクを、自ら直して、もう一度装着した。

「んじゃ、続けますけど…」

変な不安感が襲う…。

一度、マニュアルを確認してみると、すでに殆ど工程が済んでいた。

…下半身から背中部分までと。

まあ、せつかくアイマスクを装着してくれたし、もう少し試してみるか。

…やっぱり、違う。

これ多分…俺の知っているマッサージじゃない…。

なんつったか、こういうの…。

しゅ…集中しよう。

うん…手の平に神経を集中…。

業務に忠実になれさえすれば…うん。多分…大丈夫。

「はっ…はっ…はっ…」

会話を挟んで、リラックスしてくれたのか、段々としほさんも集中してきたんだろう。

しかし、そのお陰か、指と手を動かす度に、しほさんの体が大きく脈打つ…。

ビクンツと大きく跳ねる時も、徐々に回数がましてきた…気がする。

触られる度、手を動かす度に体が反応してきている。

「は…あ…あ…はあ…確かに…手の…指で触られている感触…が…ん…」

「……」

しゅ…集中。

しかし、集中するに従って、手中へと、ローションの混じった、ヌルヌルとした感触と、肌のスベスベとした肌触りが、余計に強く感じる結果となってしまうた。

…先程、ざっと見たマニキュアルだと…確か、この後…。

首の付け根から、肩に掛けて…まあ、ある意味で安心した気もする。

良くあるアツサージ…ってっ!?

「…しほさん」

「んっ…そ…そこは、とても良いですね…」

慣れたマッサージを、何度かする。

指圧で、肩から首筋付近のツボを何度も…そこで分かった。

「…しほさん。肩のコリが…異常ですよ…なんですかコレ」

「…ああ、仕事柄、デスクワークも多いですからね…。気をつけてはいるのですが…その割に、立ち仕事も多いという…はあ…」

嘆くしほさんを他所に、指の感覚に集中する。

ガツチガチにコリ固まっているのだもの…なんだこれ。

これって、仕事だけの事ではないだろうよ…。

「…はっ。胸も必要以上に育ちましたからね」

……

あ、はい。

分かってましたけどね。

さて…次に行こう。

あまりやると、揉み返しが凄そうだからね。

体を移動させ…下半身部分の為に、体を移動させる。

…。

マニュアルだと…まあ……しほさんも一度、目を通したというし、良いのだろう。

躊躇すると、余計に恥ずかしいしな…。

お尻を隠している、バスタオルの下に手をすべり込ませる。

足の付け根…ほぼお尻と言っても良いだろう。

そこを親指の付け根で、押し込む様に、強くゆつくりと何度か揉み解す。

「あ…はああ……」

立ち仕事もあると言っていたな。そんなに立ちっぱなしになる事があるのだろうか？ 戦車道だよな？

しかし言っていた通り、筋が少し、固くなっていた。

熱を持たせながら、ゆつくりと解していくと…何度か、溶けそうな声で息を吐いていた。

…効いるのでしょね。

お尻の外側から、秘部に向かい、両サイドから優しく、円を描くようにゆつくりと揉み解す。

お尻の肉を親指で、強く外側を開くように掴んでマッサージ。

それを何度か繰り返す。

…ここまで、触るだけで、官能的というか…気持ちが良いというか…なんだろうか…。

すげえな、この女性は。

…ただ、気がついたら彼女は大人しくなっていた。

「…あの…しほさん？」

「……」



いつの間にか、小さな吐息を繰り返すだけになってしまった彼女に、意識があるか確認してみた。

寝てしまっていたら、それはそれでリラックスしたと判断するだけのだけでも、少し不安になった…

「…あつ…はあ…んっ、なんですか？」

「ああ…いえ、寝てしまったのかと」

「…そうですね…寝てしまいそうにはなりますが…。いえ…正直、期待以上でした。とても気持ちが良いですよ？」

「ど…どうも」

「…変な意味では無いですからね？」

「……」

誤魔化す様に、もう一度マッサージを繰り返す。

指の横から、二チ二チとまた粘着液の音が聞こえてくる…。

柔らかい感触が、とても心地よい…。

「…んじゃ、一番…困るの行きますよ？」

「そうですね…」

ゴソゴソと、体を攀じる。

上手く体を隠すように、バスタオルの下で体を回転させた。

仰向けになり、目隠しされている為か、何度か自分の手を動かして、バスタオルの位置を確認している。

…それを大人しく見守る…：俺！

…下手な事するより、こっちの方が、数倍エロいんですけど…。

バスタオル越しだというのに、動く大きな胸の弾みが肉の波を打つ…

いや…：しほさんの体…触っていて分かったけど、筋肉もあるので、20代後半…もしくは30代後半の若さをキープしていると、ボカア判断しましたね！

「…まあ…複雑ですが、それはそれで、嬉しいですね」

……。

声に出た…。

「では…どうぞぞ、よろしく願います…：覗かないように」

……。

「振りではないですよ？」

「…撮影の時も思いましたけど、どこでソノやり取りというか…そんなの覚えてくるんですか…」

「ググりました」

……みほ。

貴女のお母さんが、ネットに毒され始めましたよ？



仰向けになり、上半身のマッサージ。

先程までのマッサージもそうですが、隆史君…本当に上手。

眠気も何度か襲ってはきましたが、流石に寝てしまうのは申し訳がないので、何度も我慢しました。

我慢し続けると…目隠しをされているのあり、感覚がどんどん鋭敏になっていき…もはや、普通に触られるだけで気持ちがいい。

私の肌に触る直後…彼は、一度躊躇しますが、下手に考えると恥ずかしいのでしよう。

すぐに先程…まあ？ 千代さんからの頂き物ですからね…流石に目を通しましたよ。

…まあ普通のマッサージでしたね。

このアロマ等含め、セットになっていますし…それなりに金額もしたのでしよう。

次回、何か…お礼でもしましょうか？

…でも、このアロマの香りは、少々強いと言いますか…甘い香りが、鼻の奥に残ってしまいそうですね。

「んっ…はっ…はっはっ…」

胸の付け根から、乳房周りとても優しくマッサージを繰り返していきますね。

下から上に掛けて、ゆっくり…ゆっくり…。

特にオイルを使っているからでしょうか？ 手が滑るのか…乳房

周りを滑る様に流す辺り…変に気持ちがいい。

呼吸が段々と、無意識に荒くなっている…。

意識した時に気がつきましたから、どのくらい前からでしょうか？

…まあ、隆史君に胸を見られた…触られたからと言って今更です

けど…別に構わないのですが…。

初めに釘を刺していた甲斐があったのでしょうか？

そういつた行為を感じさせる動きは、してきませんね。

胸を触れるくらいですし…本当にマッサージをしている感覚です

から…。

「つつ…あ…ん…」

脇付近から、全体を撫でる様に、厚を加えて来てますね。

胸全体を優しく両手で包み込む様に…ゆっくりと…。

オイルを染み込ませる様に、体のどこからか、余った物を移動させる様に…。

乳首付近…伸ばすように…。

「あ…あ…あ…」

そこに触れないので、やはりこれもマッサージの一貫なのでしょう  
か？

やはり、ちゃんとしてくれているのでしょう。

…。

両方の胸を真ん中に寄せ、谷間を作る様にして…離す。

我ながら、それなりの重さを感じる…のが、少し嫌ですね…。

谷間にオイルが張り付いて、ニチャツとした音が、胸元からしまし  
た。

「…んあ」

まだ足りないよ、オイルを更に追加してきました。

少し冷たい感覚が、火照った体には、心地よいですね。

…また胸全体にオイルを染み込ませる様に、手の平が胸の上を移動  
し…んっ…。

「つつあー…はっ…はっはっ…んっ…」

胸が寄せられて…重力のまま離される…。

それを何度も何度も繰り返されてますね…って、胸が好きですねえ…  
…隆史君は。

たまに背筋が伸びて…と言いますか、跳ねてしまいそうになるのですが…まあいいでしょう。

それに…これもマッサージの一貫なのでしょう…これ位は、大目に見ましようか？

彼も男の子ですからね…。

胸から手が離れたのでしょうか…次でしょうか？ 次は…なんでしたっけ？

しかしそれもまた、何とも言えない気持ち良さが先行して、どうでも良くなってきました。

どうにも、変に上せましたか？ 頭がボーツとしてきました。

眠気…にも似た、感覚…。

胸のマッサージ。

もう少ししてくれも、良かったのですけどね。



胸のマッサージ。

…オイルを大量に使った結果…非常に凄かった…。

完全に胸を触ってしまった…というか、揉みしだいてしまったけど、これもマッサージと腹を括った結果…。

ドウデモヨクナツテキタ。

なんか…もう…。

ポリユームがポリユームで…谷間を作り、その谷丘を瓦解させる時…左右に引っ張られるオイル液の粘着糸…。

ヌタア…と広がっている、その吊り橋を見て…何度も何度も繰り返してしまつた…。

オイル自体、2種類あつて、混ぜても問題ないらしいので、使つてみたのだけど…殆どローションに近い液体だった。

グチャグツチャとmしほさんの胸の谷間で混ぜられ、離す度に糸の橋を作る光景は…もう…。

それにバスタオルなんて、もう無かつた…。

ほぼ全裸姿なのを、彼女も分かっているのだろう。

…けど、何も言わなかつたので、俺も何も言わなかつた。

というか、邪魔。

…先程から、すでに激しさを混ぜた、甘い声に変わっている吐息。

鼻につく、甘つたるい香りも…段々と気にならなくなつてきた。

……後、息子様が、完全におつきしちやいまして…。

…無理だよ。

これだもの…。

ヌラヌラと怪しく光を反射する胸を見て、反応しなかつたら、それはそれで悲しい結果だと受け入れなければならぬと…思います!!

この歳で、不能は悲しいだろうツ!? だから、これは正常なんです

!!

……。

…何言つてんだ…俺…。

しかし、これはマツサージ。

我慢……だ…我慢。

この後、彼女。仕事もあると言つていましたしね…。

えっ…と。

次は、正面の足の付け根…鼠径部のマツサージか。

仰向けの状態の彼女の脚を、手で少し開かせた。

秘部が見えない様に……まあ無理だけど…。

それでも極力見ないように…持ち上げるた。

……。

…これさ…アレだろ…。

性感マッサージって奴じゃないのか？ すっげえ今更ですが、漸く名前を思い出した。

マニュアル通りに、鼠径部…そこを摩る様に刺激していく。

マッサージだね、マッサージ。

脚が震え始め…声を呼吸が、完全に発情していると思わせる熱を帯びていた。

秘部を中心に、周りの肉を集める様にマッサージすると、甘い声を出す。

摩る様に…焦らす様に…外に肉を逃がすように差すると、荒い呼吸に変わる。

……。

目隠ししてるし…一応自信の携帯で、調べてみた結果…鼠径部付近って、性感帯の集中地帯ナンデスツテ！

誰に言っているんだろうっ!!

…千代さんさあ…なんてもん、しほさんに渡すんだろう…。

いやまあ…今も一生懸命、マッサージはしてるけど…。

……。

まさか…このマッサージにして、このセット…。

アロマや…さつき、しほさんが飲んだドリンクって…。

「たっ…はっ…はっ…隆史君…これ…は…」

完全に出来上がってしまってますね…。

目隠し状態ですし、本人は分かっているかもしれないかもしれませんが…。

すでに秘部からは、すっごい量の液体が…ベットへと糸を垂らしている。

ずっと疑問に思っていたこのマッサージ。

正体が分かっちゃえば、後は開き直るだけだ。

…というか、すでもにもう、体に触る…摩るだけで、ビクビクと体を痙攣させ始めたしほさん。

鼠径部に太ももの内側から、神経を逆撫でし、スー…と、手を移動させるだけで…。

「つつつ!? あつつはっ!?」

上を向き、海老反りになる…。

体中の水分を、秘部から出すように、撫でる度に止めどなく、愛液が溢れ出してくる。

…。

鼠径部を摩る時が、特にそうだった。

ただでさえ、感度が良いしほさんだ。

すでにマッサージという、本来の意味が失われつつある…が、これはマッサージ。

幾ら性感マッサージとはいえ、本来はここまで簡単に、出来上がったり…乱れたりはしないのだろうけど…アロマとドリンクだな…こりや。

媚薬効果でもあったのか…感度が膨れ上がったたりするタイプの奴なんだろうか？

「あつは…そこ…そこ…は、なぜか…その…」

やはり快感で、分かったのだろう。

触れれば、快楽が押し寄せてくるのが。

「ここにリンパが、溜まっているんですよお〜」

「リツ…リンツツパ…?」

…。

…。

使命感。

うん…なんか、言わないといけないって、使命感に襲われました。

「はい、んじやもう一度、俯せになって…お尻上げてください」

「…え…はっ…」

膝をつかせ、お尻を突き出させる格好にさせた。  
すでに思考力が無いのか、言われるがままの格好…。

内股でお尻を突き出しているものだから…秘部ともう一つの恥穴を俺に見せつける様な格好…。

上半身は力が入らないのか…グタアと、体をベットへと預けている。

お尻の肉を、手で掴み…外側へと大きく開く。

親指を秘部周りに添えて、グツと力を込めると…ニチャツとした音と一緒に、パツクリと秘部が口を開いた。

その穴にすら、愛液が糸を引く…。

パクパクと、恥穴が開閉を繰り返してもいる…。

優しく…とても優しく、その周りを揉みしだけ。

ニチツニチツと、リズムカルに音を出しながら…その開閉をまた余儀なくされている。

「ふっ…フツ…フツ…」

動かされる度に、喘ぎにも似た呼吸も繰り返されている。

……。

指を入れた。

「つつっあっ?!?! はっっ!!!」

それだけで、果てた様だ。

体がビクビクと波を打つ…。

お尻が跳ね上がり、手は敷かれたベットの上の、ビニールシートを掴んでいる。

…そして、入れた指を、Gスポットを経由して…ゆっくりと…。

中の液体を掻き出した。

「あっ… あっ!! あっ!!」

ボタボタと…音を出して…透明では無い液体。

真っ白く濁った色をした、愛液が下へ落ちる音がする。

…激しくしないで…ゆっくりと、焦らすように…。

「かつ…んあっ…」

感覚が鋭利になり過ぎているのだろう。



敏感すぎる感覚が、反射的に体を動かしている…。

親指で、恥穴をマッサージすると、恥ずかしさよりも、快楽が優先するの…体をまた振らせる。

うん…まだ、そこ開発してないのに、快楽を感じていた…。

……ので。

ガッツチャン…と。

本来今日を入れるつもりなんて、まったくなかった、真つ黒いスイッチが切り替わった。

しかし、約束は…約束。

はあはあと、大きく呼吸を繰り返しているしほさんに…。

「はい、終了」

はい。

そうです、終了です。

「はあ…はあ…はあ…はあ…えっ!?!」

信じられない…といった、声が上がった。

目隠しを取りながら、力なく倒れこむ様に横になったしほさん。

俺と目が合う…。

「え? って…終了ですよ、終了。マッサージ終わり!」

「はあ…はあ…はあ…あの…え? はあ…」

「いや…だって、仕事あるんでしょ? 時間…そろそろでしょう?」

言われていた時間の、1時間前になっていた。

「オイルだらけの体を洗う時間…用意する時間もあるでしょう?」

「な…え…(こ)…(こ)…まで…(こ)して…」

呼吸が整わないのか、途切れ途切れの非難のお声でした。

完全にしてしまう、流れでしたからね。

今回のマッサージが、性感マッサージなんて、彼女は知らない。

…知らないが、思考が追いついていなかったのだろう……が。感覚と流れで、完全に女としての彼女になっている事は、感じているようだ。

またなし崩し的に…つてね。

激しくしてなかったから、絶頂はしていたけども、満足はいかなかったのだろう。

本気で泣きそうな顔で俺を見てる。

「いや…しないって、言ったじゃないですか」

「はあ…はあ…でも…でも…」

分かるでしょう？ この状態…つてな感じで、目で訴えますね。

まあ…俺の息子も限界を迎えています…我慢。

だって、俺自身の真っ黒いスイッチが入っているから。

「はいはい、着替えてくださあい」

……。

ヌルヌルの体を…せめてだと想って、一緒に風呂に入り、流してあげた…。

まだ感覚的に鋭利になっているのか…洗う度に甘い声を出していた…というか、あのドリルク、後で調べよう。

ここまで、しほさんの状態になるって…洗ってる最中…何度か、座って…俺のアレを啜えようとしてきた。

……まあ…MAX状態でしたからね…。

しかし、全て断った。

後、一緒に風呂に入ったのは、彼女を一人にさせると、自身で慰めようとするかもしれないと、危惧しての事もあった。

さて…ここからだな。

風呂から出て、濡れた体を拭く辺りになると…。

……しほさんが、拗ねた。

「はっ！ どうせ年増ですからね」を、頻繁に連呼してたね…。

「隆史君は、帰れば、みほがおりますしね!!」……とかは、返答に困る

のでやめて…。

いやあ…分かりやすい拗ね方するなあ…怒気が変わる前になんとかせな…。

では。

素っ裸で、下着を着けようとした所で…。

「しほさん」

「……」

あ…無視した。

「…なんですか」

…睨まれた。

「仕事って、何するんです？」

「…軽い打ち合わせですが…それがっ？」

おー…吐き捨てるように…

「相手は、男性ですか？」

「…そうですが…何名かの役員達と、これから発足され…つと、これは言ってはダメですね…」

…そうか。そうか。

「下着。着けないで下さい」

「は？」

いきなりの提案に、しほさんが目を丸くした。

先程までの拗ねていた顔が、変わったね。

「あ、後。内着は良いですけど、ワイシャツだけで行ってください」

「…あの…え？」

…ここで、始めて俺から動く。

唇を奪い、舌を即、絡ませる…。

体は触れない、抱きしめるだけ…。

「んっ……はっ……」

そして、先ほどの効果もあり…即、発情状態になるしほさん。

「ワイシャツも…谷間まで開けて下さいね？」

「なっ!? んんんっ!!」

「分かりました?」

「んっ…ぷあ…」

目に熱を帯びさせた所で…無言で首を縦に振らせた。  
…さて。

たまには、とことん焦らして見ようかな?

◇ 短編 宴 編 ◇

『しかし…今日の家元は、何だったのでしょうか?』

『そうですねえ…まあ、真夏ですし? 良いじゃありませんか』

真昼の男子トイレ。

リゾートホテルの昼間だというので、あまり人は来ない場所。

個室トイレの外から、先程まで会議をしていたであろう、男性の声が聞こえてくる。

声からして初老の男性…20代後半位の若い男性が2名の、合計3名。

全館喫煙の為、ここに集まってタバコを蒸している。

『…しかし、会議が即終わりましたな…もっと噛み付かれるかと思いましたが…』

『何か急いでいたのでしょいかねえ…。ダメなものはダメ。良い物は良い。即答でしたからね』

『判断が早いのは結構ですが…少しはこちらの意見も聞いて頂きたい物ですな』

隠れてって…中学生かよ…。

火災報知機がならないか、不安になるが、どうにもここは、グレーゾーンのトイレの様だった。

つまり、ホテルも黙認している。

入った瞬間、ヤニ臭かった…つてのものもあるし、灰皿も隅っこに置いてあった。

…たまにあるんだよな。

お偉いさんの集まる、特に老害と言われる世代が多く訪れる所は。ヘビースモーカーが特に多い世代だしね。

ま…会議室の近くなら、ここに来ると踏んでいたのが正解だったね。

『…しかし…相変わらず…しかも…』

『すごいですねえ…西住流の家元様は』

『…気づきました？』

『ええ、あれは下着つけてなかったでしょう？ しかも…』

『胸元まで…バックリ…。目のやり場に困りましたよ…』

『…私、しっかり見てました。正直、会議の内容が頭に入ってきてませんでした』

『あつはっは…私もですよ』

『…夜まで掛かると思っていた会議が、1時間で終わってしまったのも、私達のせいでもありそうですね』

『まあまあ、アレは仕方ない。…まあ、後日またやりましょう』

下半身が、生暖かい。

便座に座り、一心不乱に行われている、奉仕を受けているから何だけど…。

カりに引つかかる、唇の感触が気持ちい。

「…やっぱり見てたでしょう？ しほさん」

「ヂュツ…ヂュツ…」

小声で話しかけるも、聞いているのかどうか…しかし、音を抑える辺り、気にはしているのだろう。

先程まで使った、目隠しを今…また着けてもらって…。

『後…そうですね。呼吸する度に、一々…』

『そうそう！ エロいんですよ!! どうしたんでしょうかね？ 変に顔も赤かったですし…』

『エロいって…若いのは、ストレートに言うね…』

『まあまあ。家元…アレじゃないですか？』

『ん？』

『やったあと来たとか…』

『露骨すぎるよ…君。ああ…私は、そろそろ時間だ…先に失礼するよ？』

『あ、はい。お疲れ様でした』

『お疲れ様でした』

…おしいっ!! 今ですっ!!

…発情状態で送り出し、帰ってきた瞬間…ここに連れ込みました。続きと言っていたので、彼女はもう抵抗はしませんでした。

場所すらもう、良いみたいです。

…なんか…すごい勢いだったからね。

話の内容からすると、こんな状態でも、仕事はしつかりとした様です。すね。

『はあ…でも、アレだよな…』

『ん?』

『…ヤつてみたいよな』

『…ぶっちゃけると、俺も』

『…実年齢いくつなんだろう…』

『実年齢が、幾つでも気にならないよな…特に今日はエロかった…』

ため息と、またタバコに火をつける為の、ライターの音がした。

露骨にプレイ内容を言わない辺り、アレだね…林田と違うね…。

さして…。

しほさんは、すでにスーツパンツ…いや、パンツすら脱いでいる…。

というか、脱がせた。

ノーブラのワイシャツだけで、一心不乱に、貪っている。

「ああ…気持ちいんですが…音をもう少し、出してれますか? その方が

いい」

「…ジュツツポツ!! ジュルルルツ」

…即対応したね。

本当に男達の声が、聞こえていないのだろうか?

「…あの…外にまだ先程まで会議していた人…いますよ?」

「つつ?」

…やっぱり、聞こえていなかった…。

啜る音を大きく立てるフェラから、舌メインの動きに変わった。

「ダメですよお…ちゃんと、音させてください。大丈夫、聞こえませんか

から」

「…チュツ……ポツ…ジュツ…」

一瞬、躊躇った顔をしたけど、素直にいう事を聴き始めてくれた。

目隠しされているから、変に官能的だ…。

『…なんか、今。音しなかったか?』

『したけど…トイレだし、排水管の…』

うん。普通…聞こえるよね。

「続けてください…そろそろ、イキそうですから」

被せる様に、しほさんに指示をだした。

上手く聞き取れなかったのか：物凄い勢いで、舌と口でピストン運動を繰り返し始めた。

亀頭付近とカリ部分を往復：余った根元を手で、絞り出す様に：急かすように動かし始めた。

『……おい』

『………まあ：人気がないからな：俺も若い頃に経験ある』

『でも部屋で……』

『ああ、そういうんじゃないから、こういうの』

男達の声が、小声に変わった。

夢中になっている為に、しほさんは気づかない。

「んっぶっ!! んっんっ!! ジュユユプツ!!」

やはり外の声が、上手く聞こえていなかったようだ。

集中力がすごい。

後頭部に手を添える。

添えた瞬間：心地の良い開放感が襲ってくる。

ドクドクと波を打つ脈。

「……んあはっ！ ……んっ」

…即：飲み込み始めましたね…。

口を陰茎から離さないで、舌で溢れた精液を探している様に動き回る。

「はあ…はあ…では」

スピード勝負。

すぐに立ちがらせ、腰を引かせる。

前戯なんて必要が無いほど愛液で、触れている秘部。

個室の出口に手を着かせた。

「じゃあ入れますね」

「はっ…早く…お願い」

俺は普通に喋っている。

『…出るか』

『………そうだな、流石にな』



男達が出て行ったのを、足音で分かったけども…しほさんはそれすら気づかない。

外に気を向けていると、しほさんが、腰を俺に押し付けて来た。愛液がグチャグチャに混ざっている秘部に、亀頭を押し付ける。

…外からは声がしない。

「んっっんん!!」

ゆっくりと秘部へ、それを入れていく。

ネットリと陰茎全体に、肉と体温が絡み付いてくる。

……。

……………。

そこからが、凄かった。

しほさんは、自分から腰を俺に押し付けだした。

グツチャグツチャと音が溢れ出る。

「いや…すごいですね」

「はっはっはっ!!」

声を殺しているのは分かる…分かるが、そこまで荒い呼吸だと、殆ど喘ぎ声と変わらないだろう。

すでに快楽が頭を支配しているのか、声さえ上げなければバレないとでも思っているのだろう。

まだ…あのドリンクが、聞いているのだろうか？

…しほさんが、会議へ行っている時に調べたら……思いつきり媚薬だったね…。

千代さんに今度……まあいいや…。

今は、集中しよう。

荒い息のまま、何度も何度も、腰を俺に打ち付ける。

負けじと俺も、腰を打ち付ける。

ワイシャツから胸が飛び出し…激しく揺れ動く。

腰を打ち付けければ、尻肉が弾み…また、甘い吐息をこぼす。

しほさんは、もう夢中になっていた。

「…どうでした？」

「なっ…はっはっ…」

「男性の目線…」

「はっ…はっ!!」

「この前の夜のホテルと同じですか？」

「つつっ!!」

「ここで…動きが止まった。

体全体が痙攣し…大きく息を吐いた…。

果てたのだろう。

「まだ、男性達…外にいますよ？ 思いっきり聞いてましたね」

「つつっ!？」

「ここでしやがませる。

また、奉仕をさせる為に。

目隠しを外させる前に…トイレのドアを開けた。

すでに、男性達は外にはいなかった。

まあ、それらしい事を言っ、出て行ったのは分かったしね。

開かれた、個室のドア…。

胸をだけさせた状態で、座っているしほさん。

「はい、んじゃ口開けてください。もう分かりますよね？」

もう、上手く判断がつかないのか…そんな状況でも、素直に俺の指示に従った。

トイレの個室…半裸の状態で、目隠しをされ…。

「はい、舌出して…」

舌を長くだし…口を開ける…。

……。

いつ男に入れらるか分からない、その口は…すでに、期待に満ちている様に見えた。

さて…何人出そうか？

※ルート 壊※ く西住 まほく

「…ふむ。思ったより、普通だな」

ほぼ、引きずられる感じで、連れてこられた某建物。

部屋に入って、部屋内を見渡した、最初の感想がソレだった。

独特な造りの、大きなベットがある部屋。

最近、オシヤレ感を全面に出して、高級感すら漂わせる様な部屋が増えてきたんだろう。

…昔みたいに、良くわからないオブジェや、どこの国のテーマパークだよっ！ つと、思わせるデザインでもない。

コンセプトが変わったのか、カップルとかの需要にも…「何を呆けている」

「…」

白く大きなベットの前で、腕を組んで此方を睨みつけてきた彼女。

…まほちゃん。

現実逃避…とも違うが、誤魔化すように部屋内の感想を、無理やり考えていたら、一言で中断させられた。

ま…まあ、ここまで来てしまったり、もうどうしようもないよな…。それこそ、文字通り恥をかかせてしまう。

「別に呆けていた訳じゃないよ」

ラブホテルの室内。

特に青森へと転校してからは、戦車道中の凛々しい彼女を見る事が多かった為というのものもある。

その風景をバックにしている彼女は、こんな場所とは、無縁だったとしか言い様が程に、非常にアンバランス。

「ちよつと、覚悟決めてた…」

そんな、目のキツイ幼馴染に対して、本心で答えた。

「…ん、ならいい」

少し頬を染め、目線を俺からずらした。

まだ決めていないのか…と、言われる気もしたが、俺が逃げ出さな

い意思を示すのと同義だと思ったのか…少し微笑んだ。  
抱く。抱け。

ハッキリと言ってきた彼女に対し、すでに遅めの決意を固めていた。

それとは別に、他の考えが、大きく思考を邪魔をしてくる。

関係が、ドンドンおかしくなっていく…。

昔の様な関係が、いつまでも続かないだろうとは、思っていたが…この変わり方はな…。

幼い頃より見ていた…見てきた彼女達。

…俗に言う、大人の関係という奴だな。

姉妹揃って…。

「愛のホテルと言うわりは…ここは？」

彼女の声で、その思考が中断された。

愛のホテル…ラブホテルと直接的に言わないのは、小さな照れだろうか？

いや…でもな？ 大洗学園の…あの場所から、ここまで直行…。

今更でしようよ…。

陸に降りようかと、打診したが聞き入れてもらえなかった。

…焦っていたのだろうか？

それとも煙に巻いて、俺が逃げるとも思ったのだろうか？

「……」

…今の彼女を口八丁で誤魔化すのは、無理だと判断した。

多分…何を言っても逆効果だっただろう。

…。

まだ…グジグジ考えているな…俺。

みほが、許したと言っていた…。

またか…とも思ったが、彼女に対し、もう俺には何も言う権利はない。

……。

「まほちゃん？」

……ええ…つと…。

「あの…？」

さつきから、何を…？ 突然、騒がしく動き出し、片っ端から、部屋のクローゼットや、何やら…開く扉を開いていく…。

俺の方をチラッと見て…。

…。

めっちゃ、楽しんでる…。

ただ、恥ずかしいだの、そういった感情を誤魔化す為もあるだろう。その為に、動き回り、上手くその感情を少しでも、誤魔化そうとしている…と、思ったんだけど…。

違う…これは違うっ！

すっげえ、良い輝きを、顔と目から放ち、キャツキャツはしやぎ出していた…。

何もかもが新鮮な場所。ただ、そんな場所を散策するのが、楽しくて仕方がない…って、感じでしょうか？

「むっ!! これか!？」

えくと…。

麻子の話に出てきた…まあ…アレとか売っている自販機。

大きなクローゼットの中。その隅っこに隠されるように設置されていた、ソレを見つげなされた。

それを発見した時の、光を増した、まほちゃんの輝いた表情…。

「こういう施設なのだ。…目的もそれに関係した販売機なのだろうか？」

「…そ…そうだけど」

「ふむ…」

「…なんか、楽しそうだね…まほちゃん」

「…隆史と、この様な施設に入った。それは、そういう事だと、実感できるのが非常に嬉しくてな…？」

ぐっ…。

嬉しそうに…本当に嬉しそうに言葉にした。  
顔が赤いのは、相変わらず…だけど、見た事がない微笑みで俺に返した。

狂った関係だとしても…？と、言葉にできない程に。

「やつと。やつとなんだ…」

何故、そこま……。

「…隆史」

………。

もういい。

ただ

単純に……ここまで思ってくれた、まほちゃんに…。

彼女に応えようと、決めた。

…もう、決めてしまっていたんだ。

「では、コレを端から開ければ良いんだな？」

「………違います」

…目を輝かせて、言わないで下さい。

ちよつとしたオカシイ覚悟を、変に狂わせないで…。

自販機に対し、しゃがみこんだ彼女を、止めますね。

というか、貴女そんな表情、滅多に見せないじゃないですか！

で、こんな時にそのレアな表情見せるんでしょうか!?

…はあ。

「ん？ 全て使うのではないのか？」

「躊躇なしに凄い事を言わないで…今回は、使いません」

「…そうか」

落胆した…すつごい、落胆した。

明らかに残念がつてるし…。

「そ…そういうのは、もう少し、慣れてから…ね？」

「そうだなっ!! 次の時だなっ!!」

あ…。

落胆した表情かと思つたら…すつげえ、悪い笑顔してる…なん…で…  
…つて、ああ…。

俺の発言…「今回」「慣れてから」…。

次が…まだこれからがあると、言つてしまった様なモノか。  
それに彼女が、喜んでいる…と。

……。

「…では、何時までも、こうしていても仕方がない」

スツ…と、立ち上がり、ゆつくりと俺に近づいてきた。

同じく、ゆつくりと腕を上げると、静かに俺に抱きついてきた。

甘い匂いと、胸に当たる、柔らかい感触。

そして、彼女から伝わる、体温…と心臓の音…。

「ふっ…ふっ…ふっ…」

早く…そして、大きく鼓動を繰り返す心音と一緒に…小さく深呼吸  
をしていた。

見た目と反して、緊張もしているのか…心なしか、体が強ばつてい  
る感じもする。

先ほどの戦車の中で、最後に見せた、あの禍々しくも妖艶な顔付き  
のまほちゃんはいない。

「で…では…っ!!…シ…シャワーを…浴びてくる…」

…え…あ…はい。

消え去りそうな声で…。

「隆史は私が、恥ずかしく無いとでも…その…思っているかもしれない  
い…でも…な？」

「思っちゃいないよ。…無理にテンション上げてたんだろ？」

「……」

「まっ…だからこそ、俺も…」



「そ…そうか…」

彼女の腕に力が入った。

…抱きしめる力が強くなる。

頭を俺の胸に埋め、小さく聞こえる呼吸を繰り返している。

「よし。…：…で…：…では、行ってくる」

小さく呟いたまほちゃん。

彼女なりの覚悟が決まったのだろう。

だけど…。

「まほちゃん」

「…な、なんだ？」

「俺は俺なりに覚悟を決めた。だから俺らしく行こうと思う」

「う…うん」

いつもと違い、少し子供らしい返事。

埋めた顔を少し離し、潤んでいる目で見上げている。

「だから、それはダメだ」

「…え？ えっ!?! なっ!?!」

そのまま、脚を掬い…彼女を抱き上げる。

随分と前にした、お姫様抱っこというヤツだ。

「隆史っ!?!」

そのまま、広く大きなベットへと直行。

考える隙を与えない。

赤や青やらのLEDライトが見える…その場所へ。

彼女を、ゆつくりとベットへと降ろした。

◇

…初めてだった。

ここまで隆史が、私に触れてくれるのは。

「ふっ……はっ……はっ……」

不本意だが、小さな声が漏れる。

触れる隆史の手が、私の体を弄る。

いや、撫でてくれているのだろう。

太ももや、腰……ゆつくりと何かを伸び広がせる様に、私を体を確認するかの様に。

無線機から聞こえてきた声を、今まさに思い出した。

誰が言っていたからは、忘れてしまったが……なる程。

確かにあの発言の通りだった。

さられ……ふれられるだけで、心地がいい……。

あの隆史にだぞ？ 朴念仁だった隆史にだ。

スカートの中に手を滑り込ませ、太ももの付け根へ……腕でスカートが捲くれ上がるが、今更特にどうという事もなし。

恥ずかしいという感情は、まだ大きく私を支配しているが、それ以上……。

うれしい……。

手が私の肌の上を、右往左往……それこそ、マッサージをするかの様に動き回る。

少し硬い、手の感触が……いや、隆史が私を包混んでいく……。

……ん。

……ん？

「まっ……待て、隆史……んっ……」

「なに？」

「積極的に求めて貰えるのは、正直……その……嬉しいが……この夏場だ……」

「ああ、シャワー？」

「そうだ……流石に、汗もかいている。」

しかも、先程までは戦車にいたんだ……それなりに……。

「やだ」

「……何!？」

「匂いがとれるのは、何か勿体無い」

「!?!?」

い…意味が分からないっ!!

「匂い!? 勿体無いっ!? 余計、恥ずかしいだろうっ!!」

「まあ、後で入れればいいだろう?」

「後じゃ、ダメだろうがっ! 恥ずかしいと言っているんだ! お前は、んっ! お…んあッ!」

隆史が、胸を触ってきた…。

いつの間にか、下着のホックが外されていた為に…先端を…迷う事なく…。

揉みしだく訳ではなく、服の上から、下着を少しずつらして、探るよ  
うに…。

その布越しの感触がっ!!?

「…まほちゃん、なんか、すげえ敏感…」

「じゃあまを…する…はあ…はあ…なあ…」

隆史の指先が、下部の性器の周りを円を描く様に動き始めた…。

お陰で、力が籠らない声しかでない…。

下着の上からだが、体を触る…から、ここまでの行為に、ためらいがない…。

それ良いのだが、何か…こう…んっ!!?

「はっ…き…すがに、手馴れているな…少々、頭に来る…なあっ!!?!?」

下の性器の上を…そのスジを指で刺激してきた…。

お陰で、大きな声を出して…くっ。何か、悔しい…。

足の付け根…しかも敏感な、前の窪み付近を、今度は摩る。

ゾクゾクとした感覚が、脳内を走ると…脚を曲げられ…下半身が、あらわになってしまった…。

確か…エム字開脚? みほが先程写真で送ってきた格好と、同じ…。

「だ…だから、恥ずかしいと言っている…」

「あ…うん」

聞けっ!! どこを見て…ああ、私の胸を見ているのか。

残念だったな。ワンピースタイプの服だからな…捲れまい…。  
…何を勝ち誇っている…というか、そんな所位しか、今は抵抗が  
来そうもない…。

覚悟を決めたと言ってくれたが、ここまで躊躇しないと、流石に若  
干の恐怖を隆史から感じるぞ？

「ちっ…んっっ!!」

私の首元に顔を入れてきた…。首を吸っている様だ…点として、熱  
い感覚が、首元から幾つか、何度か繰り返して感じる…。

後ろへ周り…今度は後ろから、抱きしめる様な格好へ…。

そこで改めて、首元を吸って…これは、キスか…。

…そのまま脚で、座った私の脚を広げ、膝から内股へと手を滑らせ  
る…。

そのまま、腕ごと抱きしめられた…。

「はあ…はあ…はあ…」

呼吸を繰り返し続けると、段々と思考が鈍くなっていく…。

燃える様に、体と顔と…いや…私自身の全てが熱い。

抱きしめられる…抱きしめられている…そして、首元には…。

はあー…良い…。

…こ…これは、良い…。

これは…好きだ…。

本当に心地いい…。

「……」

じゃないっ!!

「…まほちゃんは、非常に敏感な体質か…すごいな…」

「な…何が、すごいと…。冷静に分析をするな…」

「触れば触るだけ、反応で返してくれる…」

「っっ! 恥ずかしい事を…」

「…出すなっ？」

「はあ…はあ……んんっ!!!」

体が反応する…してしまう。

隆史に…というのが、大きいがな。

背中の小さなチャックが、下げられた感覚がした。

するつと、肩に掛かっていた服を、左右に下ろされる…。

下着と共に、真下へと上半身の服を…。

…。

胸を出された…。

積極的な…ここまで、積極的な隆史は、初めてだ…。

シラフのな。

ああ、素面の。

それが非常に嬉しい。

…ちよつと、情けないがな…。

この行為のお陰で、私の服は、腹部分に縮小されている…。

下半身と、上半身…あっさり剥かれてしまったな…。

嬉しい…なぜだろう…本当にそれ以外の感情が湧いてこない…。

気が付けば、私は隆史の口を吸っていた。

小さな呼吸が、舌と…唾液と…熱い息とで、混ざり合う…。

先程は勢いでしてしまっただが…今度は違う…隆史も応えてくれる

…。

「ぢゅっ…あ…はあ…あ…れあ…」

唾液の音が、口元からいやに大きく聞こえてくる…。

背後から、胸を持ち上げる様に触ってくる隆史に対し、顔だけ横を向き…彼の口へと反撃する事しかできない。

優しく揉みながら…というか、何故搾り出すように…指先で先端を刺激するのだろうか…。

「…出んぞ？」

「…いや…そういった事ではなく…」

バツが悪そうにする顔を、何となく面白く感じ…またからかいたく

なる。

小さく、柔らかいだの、重いだのの眩きも何度か、聞いたが…。

「…感想があるなら、ハッキリと言ってくれ」

「……」

「まったく…下着を見もしないで取ってしまうし…私の肌の…いや、裸の感想もなしか?」

「…いや…あまり、見ないほうが、良いかと…」

「赤星が言っていた、勝負下着とやらだったのに…」

「……」

「胸も…んっ…。随分の熱心に触ってくれているのに…私の感想も無しか??」

「………言っているの?」

「……」

「……」

「や…待て。やっぱりいい…別の意味で、参ってしまいそうだ…。例のゲームと同じになりそうだ…」

「う…うくむ」

ふっつ!?

誤魔化す様に、また手が動き出した。

視線を胸に落とすと、私の胸がゆっくりと変形し…その反発する弾力を楽しむかの様な、隆史の手…。

「触りたくば、あっ! …い…いつでも…あ…よかったのだけどなあ

…」

「……」

そう何度か、言った気もするが…。

後…変な声が出るから、今はやめてくれ…。

「はあ…後、シャワーは、もういい諦めた…」

「……」

「まったく…恥ずかしいと言っているのに…。隆史は、女性を辱める趣味でも……」

「……」

「ああ…あつたのだったな。おまえには」  
「……………」

なぜ目を逸らす。

……………

「隆史」

「……………はい」

何か、怒られるとでも思ったのか…逸らした目を更に逸らしたな  
……………

ふふっ…変わらない。

こういつた場で、普段と変わらないのも、また…嬉しい。

さて……………

「…隆史、お前は十分…その…手加減してくれているな？」

「…」

「優しくされるは、非常に…ああ…とても嬉しいのだが…」

「……………うん？」

「遠慮をするな」

「えっと……………」

「私は、全てを受け入れると言った…。言ったからには、好きにしてくれ…その方が、私も嬉しい…」

「……………」

「圧倒的に…みほと経験の差と言うものが、開いてしまっている…。  
ここで、追いつきたい…だからな？好きにしてくれ」

「う…ん。手加減…なんて、してる気は、ないのだけど…強いて言う  
なら…どこまででいいか…」

「それを手加減と言うんだ。い…痛いのは、ちよつと手加減して欲しいがな…」

「か…可愛い事を…。そうだなあ…んじや…頑張ってみる」

「ふふっ…ああ、頑張ってくれ…」

……………

.....。

この言葉を.....後に.....少し後悔した。

▽

この場所はいい。。。

何年か前の.....中学生の時の様な、邪魔者が現れない。

隆史の家では、みほが.....その友人達がいるから、いつ.....どの様に邪魔が入るか、分かったものではないからな。

だから、邪魔の入らないこの場所は.....良い。

良い.....。

「ああああああっ!!!」

.....幾ら大声で、叫んでも大丈夫だから。

「.....まほちゃんは、すごいな.....全身が性感帯って言っても良いくらいだ.....」

アレから、どのくらい経っただろう.....。

頑張ると言った隆史が.....凄かった.....。

今も、下の.....下着の上から、性器周りを散々揉みほぐし、止めとばかりに割れ目をナゾリ.....刺激する。

脚の.....下半身の感覚が、すでに無いと思えるほど、宙に浮いている感覚.....。

体中を刺激し.....一箇所に感覚を集中する様に.....撫で回す.....。

ショーツ.....パンツ。呼び方はなんでも良いが、その下着を脱がそうとしない。



上から…指や爪や…口を使って、敏感な部分を刺激する。  
胸すら自分の胸では、ないみたいだ。

乳首から乳房を、何度も何度も愛撫し…味わう様に、口で吸い出す。  
胸だけで、果てるとは思わなかった…。

「ひっ!! んんんっ!! んあああ!!」

ぐちっつと…指でまた…性器を押し込んだ。

そのまま、突起部分を押し潰すように押しズラす…。

果てたばかりの時、連鎖させる様に、何度も果てさせられる。

そしたら次は…。

「はあ…はあ…んんっ!! あああっあう…ああ…」

全身を摩り始める。

体中が敏感になってしまっている為に、すでに触れられるだけで、

変な声を上げてしまう…。

お腹を…脇を…太股を…。

順番に摩り始めた。

そしてまた、私は腰を上げる…。

脚がつるように伸ばし…何度も痙攣を繰り返して、腰を振ってしま

う…。

「あ…う…はあ…はあ…」

「ん…そろそろ、一時間は経つか…」

隆史は、唾液なのか…なんなのか…。液体まみれの口元を拭い、部屋の時計を確認している。

荒い呼吸が止まらない…顔を手で押さえ…抗えぬ快樂の波に耐え…られなかったけど…。

そんな格好の私を見下ろしている隆史と目が合う。

普通の顔…悪くも何ともなく、こんな私を気遣う様に、優しく笑っている。

ん…。

いつの間にか…良くわからない趣向のTシャツを脱ぎ…全裸になっっていた。

高校生には見えない、筋肉で深い凹凸がある、その体。

そして、傷だらけの体…。

胸の大きな傷に目が行くが、それ以上に細かい擦り傷が癒えて、肉で膨れ上がった傷に目が行く…。

「ん…ああ…コレか」

バツが悪そうに、肩を…腕に掛けて摩る。

「まあ、殆どが、木の枝で出来た傷だから、怖い物じゃないよ」  
木の枝？

…疑問を口にしたいが、声がでない…。

代わりに、隆史が先程、好きだと言ってくれた、甘い吐息とやらが何度も、口から這い出る。

…変態め。

「はあ…はあ…はあ…」

仰向けで、胸を晒し…大きくその胸を肺ごと動かす…。

乳房が揺れるのか…視線を少し、感じた…。

少し、嫌味でも言つてやろう…か？

「…はっ。はあはあ…ふう…裸で…森の中でも…走ったのか？」

呼吸が落ち着いてきて…漸く声が出た…。

「あく…うん。北海道の森でな？ 戦車から裸で体出したら、こうなった…」

……。

何をしてるんだ、こいつは…。

「…はあはあ…んっ…」

「まあ…俺の事は、いい…つつと…」

今までののは、全て愛撫…という奴だったのだろう。

先程も言っていたが…一時間も、隆史はそれをしてきていたのか？ 時間の感覚がオカシクなっている。

次に進むのだろうか？

動けない私の履いている、下着の端に指をかけた…

愛撫中…指ですら一切、私の中に入ってこようとしなかった。

中学生の時は、すぐに…まあいい…。

お陰で、焦らされるだけ焦らされている感じがする…浅い所で、何

度も醜態を晒してしまった…。

あんな大声で…。

「うっ…わ…下着が凄い事に…糸弾いてる…」

「はっ…恥ずかしい事を…言う…あは…なあ…」

「唾液と愛液が混じって…透けてしまってるな…すご…」

「っっ!!」

熱くなる顔を、腕で隠し…一応、隆史を蹴ってみた…。

ダメだ…力が入らない…腰…抜けているんじゃないのだろうか…。

その蹴りとも言えない脚を掴まれ、そのまま開脚された…。

「はずっ!! それは流石に、恥ずかしいっ!! んあっ!!」

そのまま、濡れた下着を退かされ…頭になった性器に口を付けられた。

啜る音と一緒に…初めて、そこで…。

舌が入ってきた。

「はっ!! んっっ!! あああっ!!」

ザラツとした感触とヌルツとした触感が、一気に脳内を白い光に包ませた。

腰が浮いた…。

即座にイカされた…のだろう。

果てると言うのを、イクと言うのだろうか？

散々、イク度に耳元で、言葉にされて言い当てられていたから、いい加減覚えた…。

羞恥と快楽で脳内がオカシクなりそうだったぞ…。

「カツ…ハツ…アツ…ハツ…」

ガクガクと動く腰に…ん？

その下半身に隆史がいなかった…。

というか、退いていなくなるのに気づかないほど、今のが…

「まほちゃん…大丈夫？ 動ける？」

気配で分かる…顔の横にいる…。

動けるか？ …無理だ馬鹿者…こんなにしたのは、お前だろう…。  
辛うじて上半身だけ動かせたので、横を向くと…。

「…はっ…はっ…あ…」

元気になつてゐるな。うん…よかつた…こうなつてくれて…。そのソソリタツ…大きなモノが、目の前にあつた。

「…そろそろ、俺も限界ですのですね？…できればあ…」

そうか…あれか…口ですれば…してくれという、意味だろう。肘で体を起こし…。

…。

起こせない…。

やはり腰が抜けてしまつてゐるのだろう…力が入らない…。せつかくこうしてくれているのだ…どうしようか…。

ああそうだ…。

体を捻り、横に倒す…そのまま、そのグロテクスな物を握る。…これなら、できそうだ。

「くあ…」

狙いを定め…口を開ける…。

確か…こういうのは…。

口の中に、独特な匂い…そして味が広がる…。

無線で言つていた…な…。

そうか、これをみほは、好きなんだな…。

…奥まで入れると、思いつきり開けないとダメだな。

顎を強制的に下がらせられる程になるから、少々疲れそうだ。

「ん…まほちゃん」

「んっ…んっ…」

ゆつくりと前後に動かすと、口に更に濃い、匂いと味が…。

「まほちゃん？」

頭に手を置かれて、静止させられた。

「…んぷ…っ。ふうっ…何故だ」

「に…睨まないで」

睨んでゐる気などないぞ？…ただ、不満なだけだ。

まだ、そんなに…。

「…まだ、みほの様にできないが、教えてくれれば…」

「違う違う。素直に従ってくれた、まほちゃん見てたら…」

そう言いながら、また…私の下へと移動していく…。

両膝を持ち…強引に開かれた。

また、この恥ずかしい格好…。

肩を抑えられ、強制的に仰向けにさせられた。

脚を押さえ…ああそうか。

「我慢できなくなった」

これで、漸く…。

「ああ…」

簡単な返事で答えると…ゆつくりと…。

「んっ…」

私をこじ開けられる感覚…があ…。

「んんんっ!!」

背筋が伸びる…いや、反る…。

隆史が、私に入ってくる…。

散々焦らされた為だろうか？ 2回目だと言うのに、特に痛さは…

というか…頭が…。

上手く…考え…

真っ白…

「まほちゃん？」

「っ!?! つっ…!!」

「い…入れただけで、イっちゃったのか…」

「やっど…」

「やっど？」

「…一つになれた…」

「……」

「やっどだ…」

「……分かった。応えよう…本気で動くな？」

「好きに……してっ…全て…お前の物だ…」

「ぐっ…」

もう…どうせ、私は…動けない  
快樂と達成感と幸福感で…もう、頭がごちゃごちゃだ。

「…けど」

「…ぶっ」

「」

ほら…隆史の声が…聞こえない…ほど…。

「んああ!？」

えぐられる。

引きずりだされる…何もかもを晒される…。

どんな声を上げたかすらわからない。

ただ、もう一度隆史と一緒になれた事もそうだが…なんだ……これは…。

昔は痛いだけだった…。

みほに対する罪悪感に押しつぶされそうだった…。

だからだろうか？

今は全て許されている…。

枷が…無い。

隆史が私の中で、暴れまわる…それが、一挙一足が凄まじい快樂を生む。

キモチガイイ

隆史の体重を感じる…上から私を押しつぶしてくれる。

グチャグツチャとする音…。

だらしなくベットへと、上半身を寝かせ、下半身を上げられている。

凄まじく恥ずかしい格好だが、何度も押し寄せる…一回一回の快樂が、全てをかき消してくれる。

バツンバツンと、打ち付けられる腰…が、動けば動く程、脳内から思考を排除する。

私が上になつて…いる？

しかし、立つ事も出来ない為に、隆史の上に寝てしまう格好で覆いかぶさる。

私のお尻を掴み、遠慮なく私を壊してくれる。

胸を触られているのだろうか？ 吸われているのだろうか？ なんでもいい。

全てが気持ちよく…心地よい…。

隆史が、新しい感覚をくれた…感触をくれた…。

腰が…少し、回復したのだろうか…。動く…足が動く…。

上にまたがり、よだれを垂らし…無我夢中で、自分から隆史に腰を打ち下ろしている。

気持ちいい…隆史がいい…。

何度イったかわからない。

すでに体全体が宙を彷徨っている感覚…。

その割には、どうしているか…隆史がどう動いているか、分かるのが不思議だ…。

すごい…。

最後が…。

「つつ!! ガアツ!! ああああつ!!!」

脚を上…隆史が強引に力任せに、私に入ってきてくれる。

性器を上…上げ…下に隆史が入ってくる。

獣地味た声が、喉から漏れる…。

さらに…意識が遠ざかる…。

…。

…。

？

快樂の余韻…？

隆史が、私から出て行つた…。

なぜ？

……。

………。

顎を持たれた感覚…。

ああ…そうか。

意識を振り絞る。

熱く、激しい呼吸しかしていないが、最後の言葉で隆史に求める。

…避妊具はしていたのだろう。

カラフルなグロテクスだったから。

なら…無理はまだ言わない。

…言わないが、ソレは欲しい…。

どんな感覚…感触…匂いなのだろう？

……。

最後のお願い…一度、試したい…欲しかった…。

……。

………。

顔中に、隆史の熱と匂いと…垂れて来た、隆史の味が…一瞬に広



がった…。

……。

……これは……良いな……これが良い……。



全て終わり…まほちゃんとの…その…1回戦が終わった。

「……」

1回戦って呼び方だと、2回戦もある訳で…。

「…これは…気持ちの良い物なのか？」

「た…大変、よろしいデス」

最初の発言通り、風呂…シャワーデスネ。

浴室へと移動する時に、初めてまほちゃんの全裸と言うものを拝ませてもらった。

…一言、綺麗だと言った所…フリーズしてしまいました…。

「ふっ…んっ…確かに、これは…私も気持ちがいい…」

…さ…流石ラブホ…。

漸く、風呂場へと参った所…その隅っこに…エアマット？ とでも言うのでしょうか？

その様なモノが置かれておりました…。

せつかくですから…先程の自販機で、ローションを購入しまして…。

ローション塗れのまほちゃんに…俺の上で体を洗ってもらっているという、状況ですね…はい。

ヌルヌルとした感触と、スベスベとした肌質が、とても…はあ…。視界を下に移すと、俺の胸の上を滑ってくる二つの丸いのが、ロー

シヨンの波を作り出し…。

「…聞いているのか、隆史」

「えっ!？」

「…聞いてなかったな」

「ぐ…ゴメン」

ニチャツと、ローシヨンの糸を作りながら、体から体を離す…。

……。

うつわ、エツロ…。

左右の胸からも、左右に糸を引き…。

ヌツタヌタに、蛍光灯の光を反射させるその体…。

でつかい…うん…素晴らしくエロイ…。

「はあ…まあいい。いいか、隆史」

「…はい」

「私が、ここまでするのは、お前位だぞ」

「…他にいたら、それはそれで殺意が沸くのだけど？」

「…う…そ…そうか…」

変に照れましたね…。

体を隠す事もしないで、顔を隠したね…。

「ぶつちやけた話、まほちゃんと、こういう関係になってしまった…」

「そ…そうだな」

「だから…俺も遠慮しない」

「……」

「…と、思う」

「ハッキリしない男だなっ!」

いやね…俺が、本気になる乗って、よく言う変な真っ黒スイッチO

Nの時だけなんすよ。

「…まあいい、本題だ」

こういった…ふざけた思考ができる時点で、すでに受け入れている

のだけどな。

「そ…その…どうだった？」

「はい?」

「わ…私は…どうだった…」

「エロかった」

「怒るぞっ!!」

「正常位の時と騎乗位の時に、揺れる胸が素晴らしかった」

「なっ!!」

「後背って、まほちゃん、すげえ似合うよねッ!!」

「知らない!!」

「目が完全に蕩けてる状態で、やたらと俺の名前呼ぶとか、やたらとキス求めてくるとか…」

「なっ…!?!」

「まほちゃん、感じやすい体質なんだろうね? 喘ぎ声の種類が、すっ

ごい多くて……」

グーで……殴られた。

「はあ…はあ…殴るぞ?!?!」

…いえ、もう殴ってますよ…まあ、痛くは無かったけど。

「…ふう。私は…念願叶って、満足した…満足したが…まだまだ、だな。今回はやられ放題だったし…な…」

「あ、うん。んじゃ、風呂出たら、色々教えるよ」

「……………」

「あ…あと…」

ああ…もう遠慮しない。

遠慮は…できない。

だから…。

「…お前は、切り替えが凄いな…別人にしか見えんぞ…躊躇していた、午前のお前が、懐かしく感じるほどっつんん!!」

「回復したから、もう一度ね? 今度は…」

「まっんっ!! てっ!! 上手く、動けっ!! あんっ!!」

前屈みで、俯せに俺に持たれ掛かっていたので、非常に入れやすかった…。

ローションまみれだしね。

体の引き締まった体は、俺のアレも引き締めてくれる…。  
気持ちがいい以外の感想しか、思考を排除させる様に。

「んじや…これからだな。取り敢えず…」

「はっ！ はっ！ はっ!! んんんっ!!」

「…いったのか…。もう聞いてないなあ…」

ここまでの行動を取ってくれた、彼女に対し…本気で応えよう。  
ただ…まほちゃんの場合…。

「んんんっ!!」

今もまた、大きく奥を殴る様に打ち付けただけで、果てた。

すでに先程までの彼女はいない。俺を熱っぽい目で見下ろし…快  
楽というなの感覚に集中し始めた。

いったからといって、動きも止めない。

彼女のこの顔は、全てを魅了する…普段とは別人すぎるから…。

ここまで快楽を求める体質…華さん以上にタガが外れると、凄まじ  
いと思う…。

何だかんだで、全ての俺の要望に応えてくれるだろう。

…だから、ある程度慣れさせないと…感じやすい体質の彼女は…。

「またあっ!! あああっつ!!」

快楽に溺れそうで、少し…怖い…。

※ルート 壊※ 　　く夜這いですく

…トン。

小気味良い音を鳴らし、座卓に置かれた、良くある栄養ドリンク剤。茶色の小瓶の、よく見る栄養ドリンク。

禍々しい赤と黒の文字の…良くある…栄養ドリ…。

嘘です、嘘嘘。

…。  
ここからでも見える、混入成分が、でかでかと表記されているビン

大きな墨字で、書かれている。

「…。」

いや、ママシって…。

そのビンを置いた張本人。

姿勢よく、反対側に正座で座り…モノすつごい、笑顔で…。

「飲んでくださいい♪」

「いや…あの…。」

…トン。

「飲んでくださいい♪」

「!？」

追加された…。

まほちゃんと帰って来た我が家…。

妙に目線を逸らすみほと…妙に真つ赤な顔の四つの顔…。

その一つの顔が、一瞬だけ変わった…。

はい…超真顔の華さん…。

即、いつもの温和な笑顔に戻ったんですけどね？

すつごい青筋立ててるの…。

その雰囲気を感じ取ったのか、他の方は何も言わなかった。

そして用がある…と、一言…その場から離れていった…。

真つ赤になつてゐるみぼりん達は…まあ、その華さんに襲われてた関係が、あつたのだろう。

まあ…正直、その件について、モロモロの感想等、他もあつたのだが、全ての思考をそこで中断…粉碎された。

その件は、この際置いておこう。今は目の前のコレとこの人だ。そして、次の日の朝…。

その一発目のイベントとやらが…コレです。

…トン。

「飲んでください♪」

「」

…また、追加された…。

「いやいやっ！いきなり朝から、何なんですか!? 今、まだ五時前ですよ!?!」

筋トレやら朝飯の用意やらの為に、この家で一番の早起きをするは俺だ。

だから、一時の間、俺はこの家で一人になれる。

そこを見計らつて来てんだろう。…計算してか…部屋の前に、早朝から鎮座していた…。

朝起きて、いきなりがコレだ…そのまま居間に連れてこられて、正座させられて…はい。

「はあ…いいですか? 隆史さん」

「…は」

「飲め♪」

「……………」

いや…飲む分には、構わないのだけど…この強制的につてのが、非常に気になる…。

しかもこのドリンクつて、前に俺がマコニヤンと帰ってきた時に、玄関先でいきなり突き付けられた奴だ。

まあ…その時は、飲まなかったけど…一体…。

と…取り敢えず、華さんが怖いので、一ビン開けた。

味の調整もクソも合ったもんじゃない。

ただ苦味だけが、口に広がる酷い味。

…喉の奥…胃がなんか…すっげえ熱く熱を帯びた気がしたけど…。

「後、二本残ってますよ?」

「はいっ!」

「追加しましょうか? ほら…飲んでくだ…」「いやいやっ! コレ、一日に何本も飲んじやいけないヤツでしょうっ!」

ビンを手に取り、裏の説明部分を指で指す。

強力ですが、強すぎる為に、一日一本を目安に…つて、恐ろしく丁寧な文と、赤字で記してありますよねっ!」

「みほさんのお姉様」

…ビクッ!

「……………」

「……………」

な…ええ…。

「…微かに、石鹼の香り…」

「……………」

「…例の施設ですか……………」

「……………」

「私だけまた放置ですか」

「ま…まあ、結局六回戦ぐらいまで続いてしまったので、遅くなったんですけどね…？」

だから…結構、時間置いて…帰ってきたんですけど…。

後…華さんは…まあうん…最近は、縁がなかったんですけど…。

「では…飲んでくださあい？♪」

……。

鼻が良い…とは、知っていたからの対策なのに…。

全くの意味をなさなかった…よって…。

選択肢なんて豪華なモノ、俺には用意されておりませんでした。



「…お姉ちゃん」

「なんだ、妹」

「……」

「……」

「…ま…一度、言ってしまったから、いいけど…まさか、こんなに早く…昨日の今日だよ!？」

昼過ぎに、隆史と…小さな黒髪の娘が、出かけてしまった。

どうやら、その娘の祖母に会いに行くそうだ。病院から退院したばかりという事もあり、様子を見に行くと言っていたな。

…それを好機と見たか、みほは、即座に聞いてきたな。

というか、確定事項で言っているな。

まあ？ 隠す事でもあるまい。



「ふむ…何故わかった？」

「…華さんから…聞いた…」

華さん…この髪の毛の長い、みほの友人か。

視線を、その娘に移すと、神妙な顔で…というか、少々怒気を含んだ顔で一言。

「らぶほてる…ですね？」

ふむ…そういえば、鼻が良いと、無線で言っていたな。

一応、時間を置いたのだが、この娘にはバレてしまったらしいな。まあいい。

「すごいな。ご明察だ」

あつさりと白状すると、一瞬、心地良い殺気を放ったが…。

「これで私も、仲間…というやつか？」

「…う」

みほの言う条件を理解している…と、遠回しに「仲間」という一言で代用し、報告してみた。

すぐに何を言いたいか分かったのだろう。

少しバツが悪そうな顔をしたな。

そうだな、みほは兎も角、君に言われる筋合いはないな。

…同じ穴の貉だ。

どちらが早いか遅いか、それだけだ。

「…では、まずみほ」

「な…何？」

「すまんが、先に限定開放とやらをさせてもらった。すまん」

「げんてい…え？」

「はあ…幾らなんでも、あの写真はないだろう。…まあ、隆史は喜んでいたが」

「…つつつ?!?!?!」

「…つつつ?!?!?!」

「…つつつ?!?!?!」

「…つつつ?!?!?!」

「…つつつ?!?!?!」

「なっ…えっ…」

「……」

「写真は送られてきた直後、隆史から奪った携帯で見せてもらった。隆史は特に悪くないから、責めてやるな…しっかり保存していたがな…」

「い…え？　なんでっ!？」

「戦車内の無線機にな？　お前達の会話が、聞こえてきてな…ああ、隆史もあの恥ずかしい暴露話大会を聞いていたぞ？　私が逃がさなかつたのだから…。正直羨ましかった思いと同時に、隆史を殺したくもなつたな」

「」

…畳み掛ける。

「ふむ…みほならば、私の気持ちも理解はしてくれるだろう？　悪いかったと思って、正直に吐いている…まあ、あの限定解除の言葉で、私も舞い上がってしまったのだ」

「」

黒髪の娘が、青冷めている…。

それはそうだろう…そして、ここで…。

「だがな？　隆史が強引に戦車から、逃がげてしまったてなあ…。全員で攻めると言うのは、隆史は聞いていないから安心しろ。そして止める気もないし、権利もない。私は、抜けがけした様な感じだからな。それには参加させろとは、言わないから、そこも安心してくれ」

淡々と…早口でまくし立てる。

その私の言葉に、黒髪の娘が安堵のため息を吐いたな。

みほは、みほで、少し混乱しているのか、固まっているな。

相手から言われるであろう事を、此方から発言し、敢えて理解している旨を伝えた。

ちよつとした、フェイクも含め。

隆史から、無線の会話を聞いていた事など、死んでも言わないだろうから、これは有効だ。

そうそう…これがいつもの…隆史のやり口だな。

事実をぶつけ、自身の置かれた立場を言葉で示し…そして、妥協も示し…相手に考える暇を与えない…うむ。

そして、混乱した状態にさせ…。

「ぐっ…でも、みほさんのお姉様」

「なんだ？」

「…後から私達の間に入って来て…それは「そうそう」

ここで餌だ

「隆史の弱点が分かったが…聞くか？」

「!!??」

「後…そうだな。隆史を最悪な、暴走状態に持っていく方法等…」

「…なっ」

「最悪な…暴走…」

「そうだ。あの大洗学園・準決勝時の隆史だ」

そうだ。

そして予想は容易いだろうか？

この狂った関係下での、あの隆史の行動がどうなるか。

「みほは、知るまい？ ただ、酔っただけの隆史では、あそこまでは、ならないと疑問を持っていただろう？ …酷いぞ、あの隆史は。…躊躇なく、お母様の胸を鷲掴みにした」

「なああっ!?!?」

「そうだ。…絶対に今後…お母様の前で、あの状態にさせない為にも、条件は知っておきたいだろう？ 逆に言えば…私達は好きにできる」

「……」  
そして、この黒髪の娘は、特にあの状態の隆史が、好きそうだ。

ほら…興味を持った顔をしたな。

「あの頃の正常…？ まあ、今に比べれば正常だろう。その正常な状態ではなく、こんな関係性で、あの隆史が現れたら、どうされてしまうのか…どこまで…」

「ちよっと、待ってください!?!?」

「なんだ？」

「それを貴女が、私達に教えるなんて…。それこそ、私達に内緒に…」

一瞬、想像したのだろう。

はっ…特に激しいのが好きそうな彼女だ。目に怪しい色が伺えた。不審に思うだろう…：彼女も私と隆史の、昔からの関係で、どういう想いでいたかはすぐに想像がつくだろう。

…が、すぐに頭を振って、当然の疑問を投げかけてきた。

「なに…先程も言ったが、抜けがけみたいな真似をしたからな。その侘びだと思ってくれ」

「……え」

侘び…と言う、装飾をつけた…そんな私からの言葉。

反省の色を見せ…みほ達にメリットしかない情報をチラつかせ…。

「あ…」

ほうら、呆然としたな。

さて、止めだ。

「それに、言っただろう？ 仲間だと…。ならば、情報を共有するのは当然ではないだろうか？」

「お…っ…」

「君の言った、隆史に対する思いもそうだが…：計画も聞いた…。ならば、大いに私の情報を役立ててくれ…」

「お…おねっ…」

「私は君に賛同しよう」

「お姉様っ!!」

最後…私も言っていて良く分からなくなってしまうた…。

賛同って…。

まあいい。

最後に甘言で…籠絡する…だったな。

…はあ…隆史。

「…華さんが、攻略された…」  
まったく、人間きの悪い。」

そもそも全て、隆史の自業自得だと思うのだがな？

…この関係性は。

しかし…今は私も、この狂った関係に甘えよう。

独占欲がない訳ではない…が、すでに私も隆史に壊され、奪われた。

今ならば…今のこの関係ならば、隆史は私を躊躇なく、骨の髄まで  
求めてくれる。

…なら、今のままが良い。

「んっ？ みほは、私を許してくれんのか？」

「ぐっ…」

「そうか…ならば、反省して…全ての情報を闇に葬ろう…」

「つつ!？」

おや…黒髪の娘が、泣きそうな顔でみほを見つめているな。

「ぐうう…ず…ずるいつ！ お姉ちゃん!!」

…ずるいか。

それは、そうだ。

「ゆ…許すしかない…よ。私も知りたもん」

ふむ、役一名…眩しい笑顔になったな。

「そうか、ならば話そう。…そうだな、まずは準決勝戦の時の話をした  
方が良さそうだな…」

「うう…お姉ちゃんの卑怯者」

みほが眩いた…。

卑怯者だと。

そうだな。

ずるくて、卑怯だな。

それはそうだ。

もう私は、隆史の女だから。

…。

わかってる。  
こんな関係、すぐに破綻する。  
だがな？ だからこそだ。  
少なくとも、私はすぐにいなくなる。  
今の私の立ち位置…。

…留学してしまう時までには…この関係を死守する。



「……………どういふ状況だ、コレは」

晩ご飯が終わり…全ての片付けが終わった時間に…。  
麻子さんが、帰ってきた。

…部屋の奥…。

我が家の居間に顔を出した瞬間に、その一言。  
それはそうだろう…だって。

殺人現場みたいな状況だし……………。

「…お姉様」

「…お姉ちゃん」

「……………」

うん…。

というか、計画も酷かった…。

ま…まあ、私も華さんも…そしてお姉ちゃんも…途中から楽しくなっちゃって…悪ノリみたいな空気になっちゃったのが一番なんだけどね…。

全ての情報を提示してくれた、お姉ちゃん。

…ただのお酒の種類で、隆史君があそこまで変わるなんて、信じら

れなかったけどね：事実、目の当たりになっているから信じる他ない。  
そして、そこからの提案。

：隆史君を、強制的に暴走状態へ持って行く。  
どこまで酷くなるか見たくないか？ どうされてしまうか、興味ないか？  
：という、悪魔の囁きに：華さんが乗ってしまった。

あ、うん。お姉ちゃん。悪魔。お姉ちゃん。

：わ：私も乗っちゃったけどね…。

最近：わた：「みほさん？」

：あ、はい。私が説明するんだね…。

―朝。

怒った振りをして、隆史君に例の栄養ドリンクを、華さんが飲ませる。

でも飲ませすぎだよ：後で聞いてびっくりした…。

―ダース飲ませちゃったんだね。

どれだけ、華さんが怖かったんだろう：隆史君。

―昼。

その後、昼過ぎに帰ってきた隆史君に：栄養ドリンクと一緒に購入した、漢方：というか精力剤を色々な物に混ぜて飲ませ、食べさせた。精力剤：いつの間にか、華さんが購入していた物だったんだけど：粉薬だったから、結構簡単に出来たって嬉しそうに言っていたのに…。

今は、少々やつちやつた：って、顔してるね。

―夜。

あ、当然、晩ご飯にも混ぜてたみたい。

お陰でこの頃には、正直隆史君の顔色が、凄かった。

：ずっと、顔が赤かったし。効果があるって思っていたんだけど：  
ね。

そしてさつき：お姉ちゃんが、隆史君：最悪な暴走への鍵だとして  
：虎の子。

日本酒を一升飲ませてしまった。

…。

いや…どうやって飲ませたかを白状させたら…。

疑った隆史君に…泣き落しだった

一升瓶持ってれば、嫌でも疑うだろうけど「そんなに私が信じられないなら、飲まくていい…」とか、涙目でも浮かべたら、あっさり飲んだみたいだね、隆史君。

…。

はい…白状してくれたから、白状します。

昔…中々、積極的になつてくれない隆史君に対して、チラツと思いついた作戦と同じでした。

…同じ事考えていた辺り、姉妹だなあ…とか思っちゃった。

実感しちやったよ…。

一杯飲んでしまえば、後は言いなり…だしね。

ほぼ一気飲みさせたみたい。

それで…その一日の摂取した物が、物だったから…。

隆史君…鼻血だして、そのまま寝ちやった…。

血は止まっていたけど、そんな状況。

麻子さんが、引いてた…。

「…西住さん」

「…ハイ」

「あ、いや…妹の方」

「……」

「…ついに…殺ってしまったか」

「やってないよ!?!」

「大丈夫…可能な限り、弁護するから…警察まで一緒に行こう…」

「微笑ましい顔で、言わないでくださいっ!!」

すっごい、優しい笑顔っ!!



「はあ…。まったく…。なんでこうなったんだ？」

「二 …… 二」

「しかも、酒まで用意して…」

「すっごくいい顔で、隆史君を見下ろしているね…。」

「五十鈴さん」

「あの…隆史さんに、例の…麻子さんと…仲良くご帰宅された時の、例のドリンクを飲ませて…」

「…ぐっ」

「私が密かに…最終手段として購入してあった、漢方薬を…」

「……………精力剤だな」

「あ、顔を背けた。」

「西住さん。あ、妹の…」

「はい…。プラウダ戦の時の隆史君が見たくて…」

「なんでそうなるっ!? あの惨状を再現しっ…!? ……したかったんだな」

「うう……すみません」

「…で。姉の方」

「その再現で、暴走状態を、精力を含め、最大限にまで高めた隆史を作り出そう! ……という、話になり…」

「化物じゃないかっ!! 何されるか、分かったものじゃないだらうっ!?!」

「二 …… 二」

「通常で、あの鬼畜振りだぞっ!?!」

「二 …… 二」

「それに、酒が入って…精力がプラスされた…ら……」

「二 …… 二」

「……」ゴクツ

「あ、麻子さん。今、想像されましたね？」

「してないっ!!」

「……まあ、私も悪魔の囁きに乗ってしまったというのは、ありますが……すみません……」

「みほっ!？」

「はあ……もういい……。西住 まほ……さんも、こちら側になったのは良  
いが……」

「……」 …………… 「……」

四人で見下ろす、完全に意識停止をした隆史君……

………御免なさい。

「……取り敢えず、隆史君の部屋に運ぼう……。救急車は……」

「それは大丈夫だろう。……まあ、安静にしてないとまずいが……下手す  
ると死んでいたぞ?」

「……御免なさい」

「はあ……何度目だ? このため息……。まあ、私に一つ言える事は……」

「……」 …………… 「……」

「明日………三人共、覚悟はしておいた方が良いでしょうな」

「……」 …………… 「……」

「書記……大激怒だろうな」

「……」 …………… 「……」

「こう言うのもなんだが……自業自得だ。……不埒な事を考えた結果だろ

う

何も…考えられなくなっちゃった…。

「…もう夜も遅いし、さっさと寝るのをお勧めするぞ？」

△▽△▽△▽

…喉が渴いた。

目を開けると、そろそろ慣れてきた、自室の天井が見えた。いつの間に、部屋に帰ってきたんだ？

記憶が…曖昧だ。

体を起こし…立ち上がる。

立ってみた感じ…意識が朦朧とするな。

けど…取り敢えず、まったく動けない訳でもない。  
…。

…喉が渴いた

それ以上に…なぜか、股間が痛い…。

…喉が渴いた。

水を求め、台所へと移動する為に部屋の襖を開ける。

すでに夜中なのか…廊下も真っ暗だった。

いつの間に寝てしまったのか…着ている服からすると、風呂にすら入っていないようだ。

ん…。

夜勃ち…？ 変に違和感がある程に…勃起していた。

確認すると、何故か納得がいった。

納得がいったので、次の欲求。

…意識が朦朧とする…。

少し動いただけで、息が荒れる…。

なんで俺は、廊下に出たのだったか？

そうだ、喉が乾いたからだ。

台所に行こう。

…しかし、歩きづらい。

マックス状態…だからか？

何とかしないと…。

ああ…そうか。

まあうん。

いつでも良いと、言ってくれたし、丁度いい…。

色々皆、積極的になってきたから、性欲を持って余す事が、ここ最

近なかった。

だが、今は持て余す所の話ではない。

少々、気が狂いそうな程の、とてつもなく強い欲求がある。

そうだ。だから仕方がないだろう？

…。

ギシツと、足元から音がした。

良かった…アツタ、アツタ。

夜…今は一体何時だ？

夜中だというのは分かる…。

ならばと、ゆつくり…家の住人を起こさないように、気を使って移動をしないとな。

どうしても、家が古い為に音が出てしまう。

起こさないヨウニ…オコサナイ…。

…まあ、こんな夜中だ。

よほど大きな音を立てなければ、大丈夫だろう。

……。

ドアノブに手を掛ける。

…鍵をしていない。

何故だろうか？ 過去にアパートの鍵をしていない事を注意してきた本人が…無用心な。

…丁度いい。

ゆっくりとドアを開き…中に入ると、小さな寝息が二つ聞こえる。音を立てない様に、ドアを閉めると、その部屋の様子を確認してみる。

…ベツトには、みほが寝ている。

足元には、布団を敷き、まほちゃんが寝ている。

…みほの部屋にお泊りしている為に、毎回こうやって寝ていたのか…。

音を立てないように、ゆっくりと移動する…。

まほちゃんの足元を通過し…ベツトの横に。

腕を組んで、改めて見よう。

見下ろす姉妹…。

二人揃って、薄いタオルシートをお腹に掛けて…同じ格好、同じ方向を向いて寝ている…。

姉妹だなあ…と、実感させられる。

「……………」

みほは、例の薄ブルーの前をボタンで止める、標準的な寝巻き…。

まほちゃんは、Tシャツに…。

いや…Tシャツだけだ。

長い脚の根元…薄いブルーの飾り気のない、シンプルな下着が伺える。

俺が着たら普通な位の、大きな…明らかにサイズ違いなTシャツで、下を隠す様な格好なのだろう。

しかし、今ははだけてしまっている為に、隙間から見える下着が、逆に…こう…。

……。  
チラツと見えただけが、背中に西住流って、墨字で書いてある……。  
……。  
ちよつと欲しい……。

「う……んっ……」

……寝息と共に、みほが声を漏らした。

自然と目線がそちらへと、部屋全体を強い、月明かりが照らしている。  
る。

お陰で結構、視界が良い。

無防備に寝ている二人を見て、変な高揚を感じる。

出来るだけ起こさない様に、現状を確認。

夜、夜中。

みほの部屋の中。

寝ている姉妹の足元に、腕を組んで、アソコをマックス状態にした男が立っている。

その変態が、自分だと言う事実。

「……」

何故か……死にたくなつた。

机の上に置いてある、前にあげたプラモデルと目が合った。

……なんだよボコ。

見んじやねえよ。

いいんだよ。俺一応、彼氏とかって奴だから。

これも、みほには許可を得て、その特権を活かしているのだからな  
？

お前の主人にだ。  
文句はあるまい。

「……………」

あ…改めて、部屋も確認。

…沙織さんの趣味も入っているのだろうか？

俗に可愛いと呼ばれそうな、カーテンやら絨毯やら…こういった女性の趣味は、俺には今一分からない。

そのカーテンが、夜の月明かりで、薄く透き通って見える。

後は、机の横の棚…。

…ボコしかない。

…すつげえ数が並んでいる。

このぬいぐるみ達は、何体いるんだろう…数えたら、途中で面倒くさくなってやめた。

アパートでは、これが出来なかったからなのか…鬱憤を晴らすかの様に、ボコボコボコと、綺麗に並んでいる。

…一種のホラーではないだろうか？

まほちゃん、よく何も…ああ慣れているのか。

…うん、ボコしかない。

ボコしか…。

確か会長が、みほにアレのサンプル品を…。

「……………」

その黄色いのは、見当たらないな…。

「……………」

…喉の渇きが増した気がした。

それと同時に、みほに対して、何故か遠慮が更に減った。

姉妹揃って関係を持ってしまっている。

どちらからも、遠慮はいらないと通達を受けている以上…どちらにしようか。

股間の痛みが増した気がする。  
やはりこのままだと、寝れそうにない。  
いつもと全然、思考が違う事に疑問が浮かぶが、すぐに気にならなくなる。

少し、冷静になると思う…。

なんだ、この性欲は。

とにかく、喉が渇く。

とにかく、どうにかしたい。

とにかく、彼女達が欲しくて堪らない。

…気取った言い方は、止めよう。

やりたくて、仕方がない。

頭を上上げると、大勢のボコ達と目が合う。

気のせいだろうが、ご主人様の足元に立っている変態を、責める様な目線を感じる…。

「……………」

やはり黄色いのは、いない…。

「……………」

…みほだな。

ギシツと、少し音が出たが、ベットのの上に乗る事が出来た。

「スー…スー…んっ……………」

寝返りを打って、仰向けになった。

寝息が聞こえる…その寝息と共に、最近急激に成長を遂げた胸が動いている。

無防備な寝顔を晒してるけど…相変わらずニヤけた顔で、寝てい



る。

…まほちゃんも、一緒に寝返り打った…何故か素直に凄いと思えた…。

「…む」

二人共、ノーブラなのだろう。

分かる。すごく良く分かる。

自己主張がとても強い…また無防備なのが、また変に興奮を高める。

特に、まほちゃんの自己主張がすごい。

暑いのだろう…少し、はだけ方が大胆だった。みほと同じ寝方をしているのに、こちらの方が刺激がやはり強い。

お腹の上に掛けている、タオルシートから、少し筋肉質だけど、柔らかい…と、知っている長い脚が、その脚線美を見せつける様に伸びている。

お尻の肉が、下着の形を変えて、更には食い込んでしまっている…。

エアコンは使っているのだろうか、風邪を引かない為だろうか？

温度をそんなに下げているのだろうか。

夏場だろうから、うつすら首元に寝汗をかいている。

月明かりで、薄く光っているから、分かった。

パジャマを脱がしたとしても、気温差で起きる確率が減る。

「……」

もういいだろう？

万歳と…両腕上げている為に、タオルシートを剥がす。とても楽に行えた

まず…前のボタン…。

下から一段、一段と外していく。

変に躊躇すると、気づかれるだろうから、素早く外す…。

外しながら、パジャマもゆっくりと開いてく為に、お腹があらわに

…そしてヘソ…。

ふむ…みほは、なんだかんだ、結構引き締まっている…。

日課がジョギングだからだろうか？ 余計な肉が少ない。

むしろ、その少しだけある肉が、女性らしい体型を強調してくれる。

……喉の渇きが、また増した。

唾を飲み込む事すら難しい程。

…胸の上…。

このままでも、良いな…開かれたパジャマから、乳房の下部分のみが見える。

月明かりだけだから、その明かりの影で、その大きさを色強く強調してくれている。

……。

うつすらと汗……。

結構気づかれないもんだなあ…寝息が、リズムよく聞こえてくる…。

「スー…ボコ……ボコ…ガンバレ…ボコ……」

「……」

…いや…まあ、これが平常運転なんだろう…。

さて…。

さっさとしてしまえば良いのだが、何故かこの状況を、変に楽しんでる俺がいる。

股間がの痛さが増すばかりなのだが、なぜだろうか？

まあいい…次だ。

胸の上のボタンを外すと、胸が左右へと、少し揺れ落ちた…。

シンプルなパジャマ故に、その日常的普通さと、解放された胸の乳房との非日常差が、普段のみほから想像出来ないほどの、淫靡な感じを、醸し出している。

更には、この無防備さ…アンバランス感が、尋常じゃない程に俺を挑発する。

指で軽く押してみると…陥没……丸みを帯びた……そう、陥没。

流石…ヤゴ。

…そのまま、前を大きくはだけさせてみた…が、邪魔をされた。

胸の大事な部分に、パジャマの布が、少し引っかかってしまった。

その為に、ギリツギリの所でその突起物が、見えない仕様になった。  
真っ白い肌の、胸の凹凸が目立つ…体の中心に伸びる…影…  
ふっ…大人になったね…みぼりん。

……。

……何故か、一瞬だけ、脳内がクリアなったな。

先程から、顔全体…呼吸すら熱く感じ、上手く考えが出来ないのに…  
…たまにクリアになるな。

その胸を見下ろすと、自然と手が前にスツ…と、撫でる為に…とつ  
と、危ない。

今、胸はまだだ。

後だ、後。

「…ボコオ……ボ……ベコ、ジャマデス…」

「……………」

取り敢えず、ズボンを脱がすか…これが鬼門だ。

これさえ突破すれば、後はどうとでもなる。

前をはだけ、無防備に眠るみほ。

左右、太もも付近を掴み、下げれるだけ下げた。

もう一つの、暗くても分かる程の白い肌が、光り輝く。

太ももの付け根…白い布が、すでに見える…もう少しだ。

ゆっくりと…ベットへと密着している、お尻部分を下げていく…。

途中、何度か引つかかるも、特に問題ない。

寝言でボコボコ…と、言っているしな。

「…っ」

腕を背中に通し密着させる。

腕で体をゆつくりと上げ、密着部分を解除させる。

下手に一点を支えるよりも、全体の方が気づかれぬ…と、踏んだ。

お陰で、特に気づく様子もなく…お腹を後ろから上げられたみほ

は、特に呼吸もおかしくなっていない。

だから…残った片手で、そのまま一気にズリ下げた。

「んっ…んんっ！」

「っっ!!」

体全体の動きを止める。

ゆっくりより、素早く…との選択は、間違いだったろうか？

少し、大きめの声を上げたみほは…。

「……………ニユ……………スー…」

また、ゆっくりと寝息を吐き出した。

体をまたベットへ戻し…腕を引き抜く。

膝立ちをしながら、上からの目線で、改めて見下ろす。

無防備に…そう、とても無防備にバックリと前を割った衣類を着た

彼女は…。

……。

……………何？ このエロいの。

両足から完全にズボンを脱がしてしまった為に、白い脚が伸びているのが、少し眩しく感じる。

…着ているのは、ズボンを脱がしてしまったので、完全に前がはだけているが…その上着だけ。

後は、下着のみ…。

「……………」

…というか、みほて、こんなにエロいの履いてたか？

白だけど……………レースツて…透けているタイプ……………。

今度、しっかり言っておこう。

普通のが良いと。

エロい下着つてのは、あまり趣味じゃない。

嫌いじゃないがなっ!!

……。

ま…また一瞬、思考がクリアになった…。

さて…本番だ。

取り敢えず…。

「んっ…んん…」

ゆっくりと、あらわになっている両胸…乳房を揉んでみた。

柔らかい…何度も、触ったり揉んだりしたが…肌がきめ細かいのもあり、素晴らしく触っていて、気持ちが良いという感想を強制的に沸かせるような…胸。

下から上に掛けて…先端は気づかれる恐れがある為に、触れない様に…。

全体をマッサージするかの様に…柔らかい感触を触り、揉むだけで、気持ちが良いというのはすごい…。

「…スー…んっ…んん……フー…」

胸周りを摩る…スベスベとした触感が、心地良い。

胸を正面から、鷲掴みをする様に手を開く。

開ききった手…その指を添える。

そのまま、胸中に走る神経を一箇所を集める様に、指一本一本、くすぐる様に…摩る様に乳首へと閉じていく。

それを何度も繰り返す。

「フツ…んっ……あ…はあ…」

何度も繰り返す内に、また呼吸が変わった。

乳首周りへと5指が集まる付近で、熱っぽい声が高まる。

「あ…はっ……はっ…んっ…」

乳輪付近を、指で回して弄ぶ。

肺が大きく動くようになったな。呼吸が少し荒くなった為だろう。

…。

喉が渇く。

下へとゆっくりと移動する。

脚をエム字の格好にする為に、少し持ち上げ…カカトをベットへとつかせ、格好を固定させる。

また同じく、指と手の平を使い、今度は脚の内側の神経を集める。  
太股の付け根…股間部分との間の窪みに掛けて、ゆつくりとその開かれた脚の内側に指を這わせる。

「んっ…んん…はあ…」

起きない…よほど眠りが深いのか…それとも寝ている振りをして  
いるのか。

脚が一瞬、ビクンツと跳ねる時が出てきたが、特に起きる様子もなく、熱を帯びた呼吸を繰り返している。

「はっ…ああ…はあ…はあ…んっ…」

中心へと、その指を移動。

…下着の上から…割れ目へと、ゆつくりと指でマッサージ。

パンツを、ぴっちり履いていた為に、その割れ目部分が、非常に  
分かりやすい。

あまり、時間を掛けてしまうと、起きてしまう可能性がある。

かと言って、いきなり強い刺激も不味い…だからのマッサージ。

「はあ…はあ…ふ…んっあ…あ…」

更に大きくなった寝息。

割れ目の上を、親指を横にし、大きく…ゆつくりと、そして優しく  
摩擦を繰り返す。

消して強くしない。これを何度も…。

乾いた布の触感…。

そのまま秘部の中心を、軽く押してみる。

「はあ…はあ…あっ…あっ……」

リズムカルに、その燃える様な体温のみほの中へと入る入口部分。  
そこを何度も浅く…なじる様に、押したり、グリツと押し込んだり

を繰り返すと…。

「フー…あー…あっ…んっ…はあ…」

寝息の種類が、完全に変わった。

胸を大きく動かしながら、甘い声を発し出した。

…体を起こし、みほの顔を確認。

熱っぽい顔と、閉じる目に力が入った。

何かに我慢する様にギュツと…そんな顔。

「フー…んっ…はあ…はあ…んっ…フー…」

目を閉じながら、眉が動いた。

手の感触から、少し…湿った感じがしてきた。俺の汗かも知れない…が、この顔を見れば、一目瞭然。

無意識だろうが、顔を背け…顎を引いた…。

「んっ…んっ…はあ…んっ…」

何度も繰り返していく内に、指の動きと連動して、喘ぎにも似た甘い声を発する様になっていくみほ。

額には汗をかき…口が少しずつ開いていく…。

唇は濡れ始め…小さな呼吸も漏れ始めた…。

体を確認すると、乳首はしっかりと勃起し、体に熱を帯び始めている。

周りを摩る様に、指で乳房周りを弄る。

「……………ふっ…んっ…」

一度手の動きを止めた方が良さそうだ…続けると、これは気づかれそうだ。

結構、ギリギリの所を攻めている気がする。

起きる寸前…気づかれる寸前…その様な感じだ。

「んっ…あ…はあ…はあ…はあ…はあ…」

少し放置すると眉の形が、通常の形に…顔付きも落ち着いた…。

上手く起こさない様にできた。

……。

さて…どうなっただろうか？

結構効いたのか…体を仰向けにさせると、みほはまだ少し、大きな呼吸を繰り返している。

甘い声は聞こえないが、明らかに身体中に染み渡っているのだろう。

脚をゆっくりと開かせ…パンツの秘部を隠している部分に注目。

…少し横にズラす為に指で横から、浮かせる。

クチツ…と、音を立てその部分も露出させると赤く…充血してい

る。

テラテラとヌメリ気を帯びている花ビラが、果実をも連想させる程に熟れ始めた。

撫でる位の強さで、指を当てて…離してみると、粘着性を持った薄い糸が離れた指に、一緒に着いてきた。

「……」

…喉の渇きが尋常じゃなくてってきた。

自身の口から…喉元から来る息が…熱い。

そして熱い身体。

とにかく、熱い。

…なら、脱げばいいか？

そう思うと、即座に全裸となる。

どうせ結果は同じだから、いつ裸になろうと同じだろうしな。

パンツを脱ぎ捨てると、過去ない程に膨れ上がった陰茎が飛び出した。

…。

ならば…。

ベットから下り、みほの頭の横に移動する。

体は仰向けだけでも、顔をこちらに向けて倒しているのが幸しいた。

一度、試してみたかった…。

……。

相変わらず収まる気配すら見せない、欲望と渇きと…この体中の熱。

そしてそれらの現状を、知らせるかの…表すかの如き陰茎。

やはり散々、興奮していた為なのだろうか？

手で位置を固定する為に触ると、その先端を確認。ニチャツとした粘着く液体が付着していた。

…先から粘着く液体を吐いていた。

ソレをゆつくりと、先端をみほの口へと持って行く。



「あ……はあ……んっ………スー………」

口先…鼻の少し下辺りで、止めると即座に彼女は、息を長く吸った。それこそ匂いを嗅ぐように…そんな感じだった。

「んんう…ちゅ…」

寝ていても、匂いですぐに分かったか。

情景反射の如く、その先端をキスをするかの様に、口をつけた。

まったく迷う事なく…。

「ヂュツ…ヂュ…んん…ふう…」

熱い唇の体温…そして、舌尖で掬い取るかの如く、尿道先をなぞった。

快感と共に、ゾクツとした何かが背筋に走る。

そして吸った…その垂れながしていた、カウパーを…。

……。

「しかた……ないあ…たか……んっ…ヂュツ」

それでも目を覚まさない。

その代わり寝言が、先程まで聞こえて来ていた、ボコからすり替わっていた。

そうだな、流石に寝ている為か、激しい動きはないが、する事はした。

尿道口から、啜る様に即座に吸い出した…。

「んんっ……んん……」

すぐに口から離すと、また先程までの寝息を、また繰り返す事を始めた。

口から少し溢れた、よだれなのか、ソレなのか…それまた…また…。

口の中へと、押し込んでしまいたい欲求に駆られるが、それを押し込める。

「スー…スー…」

彼女の…まほちゃんの寝息が聞こえたから。

体を縦に倒して、こちらに背を向けて寝ている。

そこは良かった。目を覚ましたとしても、即分らないだろうか

ら。

…ただな。まほちゃんに関しては、そんなに気にしていない…寝たら、殆ど起きないからな…。

寝る事、即ち休息も大切だと、一気に深い眠りにつけるのが、まほちゃんだ。

脚を投げ出しているが、その為だろうか？ お尻の肉を、履いた下着と一緒に形を変えている。

お尻と脚の根元部分…。

揉みしだきたくなる…。

…。

…喉が、カワイタ

もう一度見下ろす、みほ。

…。

喉が…。

そういえば…俺は、なんで此処に来たのだっけか？

ああそうだ。

喉が渴いたカラダ。

もう…いいや。

◇

んっ…。

なんで…だろう…。

微睡みの中…自分の息が変なのに気がついた。  
変に、喉が熱い…。

それに寝ぼけているのかな…ちよつとボーつとする。

何度も呼吸を繰り返していたみたいなのに、ちよつと酸欠地味た…。

…何言っているんだろう…：わたし…。

それに暑い…。暑いなあ…。

うん、ちよつとエアコンの温度を下げよう。

その割には、お腹が少しスースーする…。

なんだろう？

それにちよつと下半身が、軽い…浮遊感にも似た感じ。

ベットに寝ているっていう、感覚が無い…。

あれ…何か脚に当たってる…ちよつと、なんだろう？ 触られてい  
る感じ？

お姉ちゃん？ 寝ぼけちゃったかなあ…？

確認する為に、薄く目を開けて…脚の方向を…

「…んっ…：…んんっ!？」

黒い…影っ!?

大きなたっ!?! えっ!?! 何っ!?!

「…」

なにっ!?! なにっ!?!

目を見開くと、お腹…というか、なんにも着てないっ!?!

なんでっ!?! 腕には感覚があるから…んっ!?!

黒い影が、動いた…って、誰っ!?!

えつと…月の明かり…で、顔が一瞬…：…何っ!?! 隆史くっんっ!?!

えうう!?!

「ジュッ…」

「んんっつっ!?!」

股間に、もの凄い感覚が…。

下半身を持ち上げられて、アソコに顔を埋めた。

「声…」

小さく隆史君の声が聞こえた。

やっぱり、隆史君…えっ…何してるのっ!? えっ!?

「ひつつうう!?!」

反射的に、手で口を抑えた。

何が何だか分からない。

「じゅうううう…ぶっ…」

ただ、凄い感覚と一緒に、何となく隆史君が、私のあそこに口を付け入る事だけが、分かった。

吸ってる…すっごい吸ってる…。

「ふっ! んっんっ!!!」

両手を口元に…、思いつきり力を込めて、口が開かない様に押さえつける。

だって…。

彼の舌が、入ってきた…。

私が、気がついたと…えっと…それが分かったから?

寝ていた…寝ていたのよね?

完全に不意打ちだった…後、何故か変に敏感になっていて…彼が何を動しているか、細かく感覚で分かるくらい…。

「っんっん!!!」

分かる…。

私の中に、ねじ込む様に、舌を入れいるのを…そして中で、何かを探す様に蠢いている。

変だ…なにつ!?

すっごい、快感が身体中を駆け巡っている。

「ふつつ!?!」

体の下半身を起こされ、動きも取れない。

体に力も入らないから、抵抗ができない。

というか、何が何だか、分からないっ!!!

頭が…真っ白に…。

横目で見えた、お姉ちゃんの後頭部、それがとにかく声を出さない様にしないと…と、思うことで精一杯だった。

隆史君は、音をワザと立てて、吸っている…。  
また、その気持ち良さが、すごい…声が…。

私の中から、何かを掻き出すように動く舌。

ヌルヌルとした感覚が、何度も私の神経を刺激する。

声を…声が…。

好き勝手に貪られている、抵抗する気なんて起こらない…程にただ  
どんどんと、押し寄せてくる気持ち良さの波が、私に考えさせる事を  
させてくれない。

体が跳ねる…脚が伸びる…うう…。

ズルズルと、アソコからする音を聞かされている見たい…。

私をの下半身を上げて、抱きしめるようにしている…そのまま私の  
中身を吸い出す見たいに、何度も何度も…。

「んっ…んんんっ?!?!」

「…」

2度目の波が過ぎた後…漸く、私を下ろしてくれた…。

うう…やつぱり、何も考えられなかった…。どのくらいの時間なの  
か、何時なのか…今更そんな事を…

懐かしい下半身を感じる、ベットの感触…。

頑張った…私、頑張った…。

なんとか大きな声を上げないですんだよ…。

「なっ…んっで…う？」

口元の手の力を抜き…漸く疑問を口に出せた。

視界も上手く…隆史君にピントを合わせられない…はあ…。

なんで、あんなに…。

「喉が渴いたから」

……。

え？

意味が良く分からない…。

あの…何を…。

「みほのお陰で、少し潤った」

潤う？　なんで？

えっ!?　喉が…何を言つて…。

「っっ!？」

頬が熱く…ものすごく顔が…意味が分かった。

今までの隆史君の行動で…潤ったつて…。

「恥ずかっつ!？」

直後に脚を開いたままで、押さえられてしまった。

開脚とか、このほぼ裸にされた状態とか、色々と恥ずかしいけどツ

!!

潤ったつて言われた程じゃないよっ!?

飲んだのっ!?!　えっ?!

あ…

声を大にして言いたかった…が、それと同時に思い出した。

なんで、今…隆史君、起きてるの？

なんで、今…隆史君、普通に会話してるの？

…あんな状態だったのに。

あ…これ…本格的に…。

「っっっあ!？」

隆史君が、入ってきた。

前置きも何もなしに…。

一番奥まで…思いつきり…。

背筋が伸び…お腹を上につき出してしまった…違う、突き出された。

ゾリツとした感覚と一緒に、強引に…。

「え…あ…あ…う…」

うめき声にも似た声なのか、息なのか分からないモノが、口から吐き出される。

なんとか、手を強く口に押さえ込めたので、声は大丈夫だろう…け

ど。

目の前に、チカチカとした、光の粒が見える…。

…のもの、一瞬だった。

「あっ!! あっ!! あっ!! あっ!!」

全てが白く塗り潰された。

ガタガタとしたベツトを揺らす音が、微かに聞こえれうあ…。

頭が…変になりしよう…。

「いっつっ!!」

気持ち良さがオカシイ。

快樂つてこういう事何だと、思い知らされる。

いつもの最後…激しく動く、隆史君以上におかしい程に激しい…。

彼の肩に自分の脚が掛かっている。

腰を持たれ、動きやすい状態で激しく抱かれている…んだらうな

…。

「ひいあっつ!!??」

また奥を…一番、奥に当たる。当てられた…思いつきり強く。

同じく海老反り見たいに体が伸びた…頭の上で、枕を押しつぶす様にしている。

一瞬、お姉ちゃんが目に写ったけど…見えるのは後頭部だけ…。

なんで、少し冷静に判断できたか…。

また、波が行ってしまった後だから…だね。

だからだろうね…即座にまた、意識が潰されちゃったよ。

敏感になっているんだけど、そんな私に遠慮なく隆史君は、動く…。

彼の体重を感じた。

脚を上げられ、彼の手が私の目の前に来た。

いつものだ…。

時間の感覚は、飛んでしまったけど、そんなに経っていないと思う。

私の身体自体が、変に敏感になっていて、イッチャウのが早いと分かる位だし…。

「やつっ!! あっっ!!! ふあっ!!! あっっ!!!」

お腹が抑えられて、強引に声を出される。

いつもより強く…早く…ぐっちやぐちやに私の中を掻き回される…。

変に意地悪する事もなく、ただ…ただ…。

彼の呼吸が、早くなってきた。

すでにこの時…お姉ちゃんの事は、忘れていた…。

というか、考える思考を奪われていた。

ただただ、気持ちが良いの…。

入れられる度に、目の前が白くなり。

引かれる度に、私の全てを持って行かれそうな位の、浮遊感に襲われる。

そんな感覚も、終わりそうだった…。

私の中に入っている、彼が…大きくなった気がした。

うん…気がしただけ。

つまり…イキそうなんだと…思う。

「はっ…はっ…」

うう…正直…興味があつた。

彼の…この状況で、どんな…その…量が…。

私自身を溺れさす様な…そんな…。

彼のアレが好きだった…人になんて言えないけど…言えないけどねっ!!

匂い…味…音…感触とか…うん。五感全てで彼を感じられるから。

だから…待ち遠しかった。

何故か、この時だけは、すごく冷静だった。

精力剤…散々飲ませたドリンク…どれ位に、なるんだろう。

そういったモノを増強する飲み物とか、お薬だと思っから…変に期待していた。

自然と舌がでる…欲しいから。

早く欲しいから。



私も……オカシクなっちゃったのかな……。

腰の動きが、更に速くなった。

中から私の中身を押しつぶす程に、速く……力強く。  
くれる……もうちよつと……。

とても待ち遠しい……。

意識が飛びそうだけど、目の前の白い色が、更に強くなったけど……  
もうちよつと……。

……。

…………。

あれ……？

「はっ！ はっ！ はっ！ はっ！！ たっかつ！！？」

来ない……。

いつもだったら、大体……この位で、私に口でして欲しがるのに……。  
催促する見たいに、彼を呼んでしまった。

腰の動きが速まる……。

彼が顔をしかめた……。

……まさか。

中で……？

えっ!?

顔に手を添えられた……そのまま口に親指を入れられてきた。

「んっつ!!!……はんっ!!!……んちゅっれ……ふっ!!!」

自然と……その親指を舐めてしまっている私が……言えなかったから。  
その行為で、肯定に取られちゃったんだと思う……。

私自身、上手く考えがまとまっていなかった……と、いうのもあった。  
だから……彼は、動きを止めず……。

手を私の頭の横へと、また移動し……また大きく腰を引いた。

そのまま、私の奥へ思いつき入りつけてきた。

当たる…突き当たる…。  
ぐちゃつと…奥が…押しつぶされた気がした。

「つつ!!!」

「んんんつつ!!!」

私の中が、熱いもので満たされた…。

二人の呼吸が聞こえる。

熱く…激しく。

ここで漸く、彼の動きが止まった。

やっと、彼を確認できた。

大きく呼吸を繰り返し…目が虚ろ…。

「はあ…はあ…」

激しく残る、快楽と快感の余韻…。

まだ脚とお尻を上げられたまま、私の口からも激しく、呼吸音が聞こえる。

彼が少し動くと、ニチャツと音がした…。

「はあ…はあ…た…隆史君…」

だ…出されちゃった…中で…。

どうしよう…。

うう…まあ…うん。

ソレナラ、ソレデ…。

なんだろう？ 一瞬隆史君と目が合ったけど、固まっちゃった。

流石にこの格好は、そろそろ戻して欲しいのだけだな…。

彼がアソコまで、強引に…しかもここまで、激しくなるとは思わなかった…。

後…中に出されるの…。

満たされる…私の中が……。

…い…いいかも……。

うん…これは…すつごくいい…。

そういえば、沙織さんが、アフターピルっていう避妊薬があるって  
言っていたっけ…。

なら…大丈夫か…。

いいな…うん。

…自然に顔を、横に倒す。

……。

………。

お姉ちゃん、目が合った。

妙な満足感や幸福感が…飛んじやった…。

すつごい、目を見開いてるっ!?

「ふ………」

「隆史君！ た…隆史君つつ??」

大きく息を吐いた…。

お姉ちゃんの事を、言おうと思って見たら…まだ様子がおかしい  
…。

顔が…上手く見えない…。

寝込みを襲われた…とか、あんな状況で私の所に来た…とか…。

少し冷静になってみたら、変な優越感が湧いてきた。

…湧いてきたけど…。

全て、頭から…消えた。

◇

妹：みほの上で、隆史が止まっていた。

二人共、裸で…。

みほは、寝巻きの上着だけ着ていたが、裸と言って差し支えないだろう。

…どうでもいいが。

大きな、みほの叫び声の様な…悲鳴な様な声で、流石に目が覚めた。眠気眼から…視界がしっかりと戻り、最初に見た光景が、ガタガタとベットを揺らしながら、激しくみほに覆い被さる隆史だった。

みほの下半身を尻事上げて、大きく下へと打ち込んでいた。

昨日、私に対しても、アソコまで激しくは、なかったのに…。

してくれなかったのに…。

妙な敗北感が襲ってきた。

…襲ってきた瞬間、隆史が止まり…震えた。

みほの上で…繋がったまま。

…即座に理解した。

まあ…そういう事…なんだろう。

しばらくその体勢で、動かない状態が続き…力なく頭を倒すみほと目が合った。

目が合ったのだろうか、私を見ていない。

焦点が合っていないような、虚ろな目…。

はっ…まあ…言ってしまったえば、これだけの事だ。

これだけの事…だったのにな…。

「ふーーーーー……」

「隆史君！ た…隆史君っっ?!?!」

少しの間、そこで止まっていたのだが、突然、隆史は大きく息を吐き…。

グチツとした音をさせて、その陰茎を引き抜きだした。

…と、思った瞬間。

「んっつああっ!!」

もう一度、深く…みほへと打ち付けた。  
グチャツ…と。

聞いた事がない、みほの声が響いた。

いや？ 響き続けた。

「あっ!! あっ!! あっ!! あっ!!」

打ち付ける度に、みほの中から、体液が飛び散る。

またガタガタと、ベットから音をさせて。

その内に、グツチャグツチャとした音が、ニチニチと音を変えた。

みほの中から溢れ出した、先に出したと思われる精液が溢れ出し、

みほのお尻から下へと垂れ下がっている。

白い…線。

その上に、隆史がまた腰を打ち付ける。

甘い叫びを繰り返す、みほの中へと…。

身体と体液が、くっつき離れる音…。

ニチャニチャと…ニチニチと…聞いた事がない音。

…据えた匂いが、充満していく。

「待ってっつ!! あんっ!! 隆史君っ!! またっ!! イッちゃった!!」

ばかりっんあ!! ああっ!!」

そうだな。

果てたばかりは、体が敏感になり…動かれると、更に強すぎる快樂が襲ってくる。

一種の拷問に近いかも知れない。

少し待ってくれと言っているみほを無視し、構わず更に強く、激しく動き出す隆史。

体液が混ざりあう音が、響き続ける。

みほは、私に気づいているのだろうが、隆史が強引にその思考をさせない。

ただ…みほを果てさせ続ける。

…見ていると結構、分かるモノだな…。

「んんっつああっ!!!」

ほら…8回目だ。

小さく呻きにも似た、そんな息を吐いている。みほの腕を掴んだ。ぐったりとしている体を動かして、みほを自分の上に乗せる。

隆史の上に倒れる様になっているみほ。

尻を掴み…腰を上げ…下から激しく動かし始めた。

叫びにも近い、みほの声が響く。

バツンバツンと、体通しが、ぶつかり合う音。

髪を振り乱し、胸を揺らし、腰を曲げ…13回目に至る時には、自分から腰を打ち付けていた。

隆史の動きに合わせて、襲ってくる肉体に、自ら体当たりをするかの様に。

月の明かりで、みほ達の体が光る。

汗だくになりながらも、それでもお互いを求めていた。

汗が飛び散り…体液が飛び散り…

隆史の体に手を付き…顔を上げた。

その時に見えた顔は、幼い頃より見ていた妹ではなかった。

知らない妹だった。

笑顔…。

そうか…アレが、女の顔か。

目が…完全に隆史しか見えていない。

すでに私の事など、忘れているのだろう。

その歪んだ…いや？　ただ、快樂に身を任せた様な、女の顔に…み

ほの顔に…少々寒気を覚えてしまった。

そして…5回目。

隆史が、またみほの中へと、吐き出した。

吐き出される度に、みほが痙攣を繰り返す。

繰り返している、痙攣の途中…また隆史が動き出す。

グチャグチャと、音を立てて…。

…。

どのくらい経つただろう？

しばらく見ていた…。

いや、眺めていた。

違う、そうじゃない。

目が離せなかったただけだ。

知らない、みほの顔…声…体…。

喉が渴いてきた。

いつの間にか、呼吸を激しく繰り返していた様だ。

全速力で走った後の様に。

……。

どのくらいの時間が経つたのだろうか？

何度目だろうか？ みほの声が聞こえなくなった。

ぐったりと、ただ隆史の動きに体を揺らしている。

動かない。

隆史の上に寝そべる様に体を預け…顔をこちらに向けている。

その顔からは…その目からも…正気を伺えない…。

……。

ん…？ いつの間にか？

少し、目を離れた隙に、みほが、こちらに秘部を晒し、仰向けに寝ていた。

ベットの外に脚を投げだして…その開かれた脚からは、隆史の吐き出した物が溢れている。

時に脚をビクビクと、痙攣させて…。

隆史…何回出したのだろうか？

「…うっ」

思わず、声が漏れてしまった。

…その妹の秘部が、変形してしまっている事に気がついた。

真っ黒い穴…隆史に広げられ、元に戻っていなかった…。

悪寒が走る…。

アソコまでされてしまうというのは、少々怖い。  
体も心も何もかも…どうなってしまうのだろうか？

あ…そうか…。

寝起きの映像が、シヨツキングすぎて、忘れていた…。

隆史は、散々あれを…私達の計画で…。

精力剤と…酒。

特に相性が悪い、日本酒を飲ませていた事を、今更ながら思い出した。

…また、悪寒が走った。

みほに目が行き…隆史が視界から、消えている事にも気がついた。

…どこ…どこにいる。

目をすで見開いてしまっている為に、隠しだても何も、合ったものではない。

多分、隆史は私が起きている事にも、気づいているだろう。

なんとか…言い訳を…。

飛び起きる様に、上半身を起こし、辺りを見回す。

暗く月明かりしかない部屋の中に、私とみほ以外は見当たらない…。

…どこにも…いない？

「まほちゃん」

「つつ!？」

体を起こした、その背中から声が聞こえた。

つまり…寝ている私の頭上付近にいたのだろう…。

気づかない私もどうかと思うが、あまりに驚き…悲鳴を上げてしま  
いそうになってしまった。

みほに対しての嫉妬や、妬みがない訳ではない。

ないが…今の隆史は、どうなっているか、想像もつかない…。  
う…。

「た…隆史?」

恐る恐る…後ろを振り向く…。



振り向い…き…。

あ……。

腕を引かれ、起こされた。

目の前には、陰茎が突き出されていた。  
精液と愛液が混じって、ドロドロになっている陰茎。

いきなりの事で、躊躇して…いや、一瞬もしなかったな。  
頭に手を添えられて、唇へと当てられた。

当てただけで、無理矢理とか…強引には来なかった。

大きく鼻で、息を吸いこむと…独特な匂いが、鼻の奥を刺した。  
だから一瞬も躊躇はしなかった。

ああ、次は私の番かと…あのホテルと同じく、思ったただけだ。  
ウレシイト。

歓喜…という、言葉が相応しい。

あつと言う間に…全ての理性が崩壊した。  
手を使わず、頭と口の動きだけで、動かす。

舌を這わせ、全体的に舐める。

「こ…れ…んっ！ があ…みほの中に…」  
無意識に声が出た。

唾液なのか…なんなのか、口から垂れる液体が、太ももに落ちていく。

吸ってくれとお願いされたので、教えられた通りに、尿道を舌先で  
一度開ける様に突き刺し、そこから一気に吸い出した。

ズルツと抜く様な感覚…味…匂い…。

音を立てる様に要求されたので、教えられた通り、下品な音を立て  
て吸い出した。

一度喉の奥に当たるほど、思っきり入れ…唇で全体を包み、陰茎の  
全体から搾り出すように…引き出す。

教えてもらった。

教えてくれた。

掃除…だったか。

「んっ…」

口の中には、味わった事のない…味と匂いが広がっている。

口から、息を吐きたいが、その前に…これを…と、喉を鳴らす。

用意が終わったとばかりに、立ち上がらされて、ベットに手をつかされた。

目の前には、横たわり、小刻みに痙攣を繰り返すみほがいる。

私を見ていない…その目は、天井を眺めていた。

意識があるのか、無いのか、よくわからない。

近くに來ると、良く分かった…その恥部から溢れ出す、とんでもない量の精液の水たまりに。

「っっ??  
!!」

え…。

驚きと多少の恐怖。

それが入り混じった感情で、その水たまりを見つめていると、その目の前が真っ白に光った。

お腹の中が、一気に拡張された為だった。

隆史が…躊躇なく、一番奥まで…それこそ殴る様に入ってきた。

前回と…違う。

強引に…私の体を壊してしまいかの様に。

…みほは、これが続けられたのか…。

たった一回。

これだけの事で理解した。

後はもう…意識を保つのでやっとだった。

一回一回が、重く…強く…そして、信じられない快楽をくれた。体を支えられていた脚は、内股に閉じ…そして震える。

腰骨付近を掴まれ、前回の比ではないほど、遠慮なく私を味わっている。

何かが引つかかり、また頭の中身が飛ぶ。

「あー!! あーっ!!」

ただ：私もただ叫ぶだけになっていた。

お尻に当たる、隆史の体の衝撃。

多少、痛みは感じるが、それがまた気持ちがいい。

後ろから突かれる度に、胸が揺れ：大きめの着ているTシャツに、先端が擦れる。

それもまた、ゾクゾクとした、背筋に走る悪寒の如く、快楽を感じさせる。

「あっはっ!! んああっ!!! ああああ!!」

今は、私だけ。わたしだけだ。

優越感…。

一時だけの優越感…。

それを抱かれる事で、感じている。

…そして、簡単に達してしまった絶頂。

ハ…ハハ…

まるで動物だ。

妹のセックスを眺め：嫉妬とに狂いそうになって…いたと思う。

恋愛感情然り、この隆史に抱かれているという事実を見せ付けられる事に…。

いざ、それが終わり：隆史に求められれば、先程まで妹の中に入っていたソレに、躊躇なくむしゃぶりつく…。

先程の感情は、既がない。

今はこうして：抱かれているという、喜びと：快楽に狂っている。

ホシイ。

モットホシイ。

…動物。

理性も何もない。

ただ、ただ浅ましく、男を求めるただの…雌だ。

そう…今、私は…ただの雌だな…はっ…は…は…はははっ!!

隆史が、私の頭に手を添えた。

もう少し、乱暴にしてくれても良いのだがな。

乱暴に犯してくる癖に、こういった所が、抜けていないのが…。

「あ……はう……かつ……」

体の奥から、肺からの空気を強引に追い出されているかのような感覚。  
覚。

動く度、擦り付けてれる度…感覚が増す。

ツケテホシイ。

匂いも、熱も、何もかも、体に擦り込んでほしい…。

……。

お前に…だ…。

さあ隆史。

ドウシテホシイ？

ドウシタイ？

ナンデモシテヤル

◇

「はっ…んん…ヂュツ」

「んっんっ…んっ…プあ…」

ベットに座り…二人の奉仕を眺め…味わっている。

亀頭を前後に、舐めながら出し入れを繰り返し、動き続けいる…みほ。

根元部分から、玉を口に含め、教えた通り舌で刺激をしてくれる…まほちゃん。

動きを変え、舌先で移動しながら、たまに頬が辺り、陰茎を口に含ませる事を、口と舌で取り合う姉妹。

今は、みほが勝ち、一度大きく顔を沈める。

全体的に取られたと思ったのか、まほちゃんもまた、取り返そうと

する。

「ジュブジュブ……ブ……ブあつ！」

先程。

完全に意識が朦朧としていた、みほの秘部をまほちゃんに吸わせ  
た。

…中の残った精液を吸い出す為に。

ジュルツと音がすると、何故こんなに濃いのか聞かれる。

…答え様がない。

二人の衣服を剥ぎ取り、裸にさせると、すでに汗が体中から溢れ出  
している。

肌を合わせると、ローションの様に滑り…鈍く光る。

汗が交わり、体液と唾液と…すでに全員が、水に使ったかの様にな  
っていた。

肌を打ち付けると、ビチビチと、汗が弾き飛ぶ程に。

兎に角、後ろから邪魔する様に、腰を打ち付ける。

膣内を掘り出す様に動く舌が、その衝撃で更に奥に入り、いつしか  
みほも、意識を取り戻した。

とにかく、欲望のまま、快感がとにかく欲しかった。

打ち付ける体を打ち付ける音と一緒に、まほちゃんの甘い声も比例  
して強くなっていた。

意識がある程度戻ったみほは、まほちゃんをに打ち付け続けている  
俺に対して、とにかく横から俺の口を、唇と舌で要求してきた。

激しい喘ぎ声の横、それに集中させない様にする為か、みほが兎に  
角、俺の口の中を弄る。

性交をするかの様に、舌を絡ませ唾液を啜る…。

その内に俺の限界に、気づいたのか、まほちゃんは中に出すように  
せがむ。

嘆願するかの様にせがみ、お望み通りに全てを中で吐き出した。

陰茎を引き抜くと、ボタボタと…すでに何度も出しているとは、思  
えないほどの量が流れ出す。

ブツと空気を押し出すような音が響く。

ベットに手を付き、こちらに尻を突き出して…その秘部を、みほに見せつけると、みほが今度は動く。

…もうすでに、恥じらいなどない。

そこを…みほが、口をつけて吸い続ける。

先程自分がやられた様に。

ベットの上で、二人を仰向けと俯せとで、向かい合わせにさせた。

みほが…下、まほちゃんが、上。

…後は上下、順番に突き続ける。

これなら変に喧嘩もしないだろう。

動けば二人の体が擦れる。

肌が同士で、女同士といえ、肌と肌の摩擦は気持ちが良いものらしい。

腕を上げさせ、四つん這いにさせて突き入れると、胸が弾むように前後へと運動を繰り返す。

姉妹の先端が、たまに当たり…そして擦れ、途中から二人揃って、思考が完全に飛んだようだった。

みほを正常位で、抱き始めると、今度はまほちゃんが口を吸ってき

た。  
指で秘部をかき混ぜれば、甘い吐息と声が、口を通して脳内に響く。  
この頃には、みほは、俺とまほちゃんがキスする事を何も言わなくなっていた。

まあそうだろう。何度もイカせ続けた。ベットのシーツを掴み、動きがまた鈍くなっていた。

…目の奥に、鈍い光だけを輝かせたままで。

まほちゃんを騎乗位にさせ、自ら動かさせてみた。

…言われた通り、腰を回し…小刻みに上下を繰り返す。

自ら胸をいぢり、乳首をつまんでいる。

余った乳房が、その重さを強調させて、上下へと弾む。

だが、上手く見えない…俺の目の前で、みほの秘部が視界を遮るからだった。

舌を入れ、またかき混ぜる。

甘い声と共に、唾液の音も聞こえてきた。

姉妹同士…口を合わせ、体に手を付け…別の種類の快楽を探している様だった…。

何時間、経っただろう。

夏場だ…窓の外が明るくなってきていた。

そんな事を繰り返し、繰り返し。

欲望のままに体を動かし続けて、今は二人に口で奉仕をさせている。

左右から胸で押して、挟んでもらって見たが、何故かそれは、二人は嫌がった。

曰く…味しないからとの事。

顔中、汗で薄くなった、精液まみれの姉妹の顔。

恍惚の笑みを浮かべながら、陰茎を味わいながら貪っていた。

射精をする際、中以外は、どちらも口に欲しがる。

ならばと、二人揃って顔に出すと二人共納得をしてくれた。

白い肌が白い液体で汚れていく様子を何度も、見る事ができた。

…そして…今も。

「んっんん…」

「あ…はあ…んっ」

頬を流れる白い液体を、二人揃って舌で舐めとる…。

届かない箇所は、お互いの顔を舐め合って…何度か、舌も絡めていた。

…。

…口から…熱い息を、思いつきり吐く…。

二人共…上手く立てなくなっていた。

これで、打ち止めだ。



無責任に中出ししちゃったのが…心残りでしたが、華さんが沙織さんからアフターピルを貰っているとの事で、大丈夫だとみほからご報告頂きました。

…というか、冷静になると罪悪感で死にそうになった…。  
ちゃんと、責任は取ると伝えると、…二人共…なんだろう…目の色が変わった。

何っ!?! この変な悪寒っ!!

…。

あ、はい。

まあ…その喋りもすっごい熱っぽい声だったけど。

…風呂に入れる為に、二人共順番に風呂へと運んだ。

朝…動けたのは、俺だけだったからね。

いやあ…居間まで、西住姉妹お二人様を、ご搬送させて頂いた所…。  
最終的に、朝飯食いながらの土下座会見となりましたね…。

「……」

「……」

はい…かんっぜんにつ!!! …正気に戻りました。

はい…はい…マコニヤンから、全ての全容を、お聞かせ頂きました

よ…?

でもね…すっげえ…睨まれてるの。

俺、今回被害者側だと…あ、いえ。御免なさい…。



結局、甘えに甘えてしまった俺がクズなんだけども…。

はい、被害者筆頭。

完全に今回、蚊帳の外でしたからね。

「…声が…五月蠅いッ!! 寝れなかったじゃないかつ!!」

「申し訳御座いませんでした」

「…はあ…いい」

「……すっ……まあなかつ……た」

二人共まだ、余韻が強いのか…吐く息が、全てエロいですっ!!

「……」

「……」

「あの…」

「西住さん2名が、まだおかしいな…目の奥が、完全に如何わしい色のハートじゃないか」

「うふふ…」

あの…まあ…うん。

「しかも、なんだ? 二人共、完全に歩けないよな? その様子じゃ」

あ、はい。脚を投げ出してしまっていますからね? あ、はい。

「隆史さん」

「はいっっ!!!」

「昨夜はお楽しみでしたネ?」

「」

ま…まあ、二人揃ったの、あの絶叫だ。

家中に響いていたんだろうなあ…うん。

「…放置ぶれいとヤラも結構ですが…そろそろ、私…本気で、怒っても宜しいでしょうか? 私だけ、営みが…ないんですよ…ね? ないですよねえ?」

「」

「はあ…書記。お前…意馬心猿もいい加減にしろ」  
「……」

「麻子さん？ イバ…つて、どういう…」

「はっ…簡単に言うと、年中発情期って事だ」

「あらあ…」

うん。言いたい事、あるけど黙っていよう。

…ああ…今日の味噌汁、失敗した…なんか、無駄にしよっぱい…。  
「今回は、私も負い目が御座いますから、我慢致しますが…ええ、我慢  
します。はい、我慢しますよお？」

「……ハイ」

「みほさん、お姉様」

「つつ?!」

あ…うん、急に振られただけで、驚くらいにボケーとしてたなあ  
…。

「…後で、沙織さんに頂いた、お薬お譲り致しますから…飲んでくださ  
いね?」

「…は…はい」

「た…助かる…」

「……」

「……」

「……」

「…で、隆史さん(狂)、どうでした？」

「す…すごかった…」

「…そう…だな」

「寝込みを襲われたのだろう?」

「……はい」

「私は、違うが…似たようなモノか…体が完全に油断している状態  
だったから、感覚がすごかったなっ!!」

「すぐにオカシクなっちゃいました…」

「理性なんて、紙みたいな物になるな」

「う…うん」

《……………》

「私の気持ちが分かってくれたか…。 私は、アレをやられるんだ…  
気絶するまで…いや、した後も…」

「二 ずるいつつ!!!」

「!?!」

「えっ!? 麻子さん、いつつもアレ…あんな凄いのされたんですかっ  
!?!」

「ずるいです、ずるいです、ずるいです、ずりいです!!」

「…その小さな体、良く体力が持つな…」

「最後ッ!! 小さいのは余計だっ!! 持たないから、好き勝手…あ  
あああああ!!!」

うん…魚は上手く焼けたね…。

明日は、洋食作ってみるかなあ

「お…おいつ! 変態っ!! 書記ッ!! 助けっ…」

「あ、自己反省は後々しますので、お構いなく」

「はああっ!?!」

……………うん。 薬…酒…怖い。

二度と口にしらない…絶対に何か、犯罪犯しちやいそうで怖いなあ  
…。

「…次回、いつ盛りますか?」

「反省してないなッ!! 五十鈴さんっ!!」

「そうだな…でも、期間を短くすると、すぐにバレそうだ」

「…いや…また酷い目に合いそう…」

いやあ…今日は、ノンナさん達来なくて…ほんつとに、命拾いした  
なあ…

「遠い目をしているなっ!! 書記っ! こつち見ろッ!!」

「…またお姉ちゃんと一緒にされるのかな…」

「あれは、あれですごかつたな」

「お聞かせ頂けますかっ!?!」

「いいだろう。…全員で攻める際に、参考にするといい」

「お姉様っ!!」

「…お姉ちゃん。華さんを手懐けちゃったよ…」

いやあ…うん。

…。

マジで俺…そのうちに、枯れそうだ…。

● ルート 願 【宴編】 ● スキル

「…暑い…いや、熱い…」

照り付ける日差しの中、自分の影の濃さが、より一層の暑さを感じさせてきやがるね…。

下を見て歩く癖が、抜けたと思ったのに…。

出来るだけ上を向いて歩いていたいなあ。

「尾形よお…。今更だけでも、いいのか？」

「…何がだよ、林田」

両手に買い物袋を持たせておいて、逆に聞きたい。

今更なんだよ。

「いや…西住さんと…」

「ああ…別に構わん。少し帰りが遅くなる位だ。飯の時間までに戻れば別に…」

「なんか、新婚みたいない言い方で、イラツとくるな…」

「…その新婚さんに会いに行くお前が言うな」

「…どん底…」

学園艦の最深部より戻った所、実家に戻る際に持っていくお土産とやらの購入の手伝いをしている。

結構な大荷物のおかげで、俺という人手が欲しかった様だ。

…その荷物…お土産とやらが、すっごい量。

林田の実家は、結構な山の奥らしく、既製品のお土産…特にお菓子類は喜ばれる様だ。

おかげで毎回毎回、従業員の分も…と、いうか…その従業員の家族分も購入していくらしく、それはそれは、大層な量になる様で…。

「従業員…つつても、俺がガキの頃から、働いてくれている人が多いからな。ほとんど家族みたいなもんなんだよ」

少し笑いながら…それでも、変に嬉しそうに喋る林田。

まあ、そう言われてしまえば、手伝わない訳にもいかない。

しかしまあ…手伝ってよかったわ。

なんちゆう量のお土産を購入してんだろう…って引く位、買ってい

たからな。

大洗の駅前まで到着した時、漸く両手に抱えた、その荷物を降ろすことができた。

後は、家からのお迎えを待つだけだそうだ。

せっかくだから、そのお迎えまで一緒に駄弁っていてやろうと、中村と二人、林田の実家の送迎車を待っている。

「…って、林田。お前何やってんだ？」

「ん？」

林田が下を向いて、何かをしていると思ったら、スマホを弄っていた。

画面のスライドを何度か繰り返して、何かをじいいつと、見ていた。スライドしていた画面を、中村が横から見ながら、渋い顔で呟いていた。

「はあ…俺も、転生とかしてみたい…」

「は？ 唐突に何言ってるやがる」

「……」

……。

ま、最近多いらしいな…その転生をする主人公の話…の、漫画。

死んで生き返る。しかも今までの記憶を所持して…。

その死んだ年齢のままってのを、たまに林田に借りて読んでいた。

…まあ、ご同類だしね…どんなものかなあって、程度で。

まあ…俺はアレで、コレだったから…何とも言えない。

確かに記憶はあったし、スキルやらなにやらつてのを貰えたみたいだけどね。

…そんなの…貰った所で、結局は生きていく本人次第だろうよ。

それに俺の場合、転生後、最初の頃は地獄だったし。

赤子の時なんて、なまじ自我があるもんだから、何年も何年も…やる事が泣く、食う、出す。

それしかなかったから、気が狂いそうになりそうだったわ。

「俺も転生して…美少女に囲まれ、意味なく惚れられたいっつ!!」

ソツチかよ。

「……可哀想に。コジラセテ……」

「うっせえなっ!!! 俺だけ一人っ!! 俺だけっ!!」

中村に呆れた顔で詰られながら、携帯を握りしめている。

はぁ……少し、現実を言っておいてやろう。

「いいか? 林田」

「なんだよ、彼女持ちっ!!」

泣くなよ……。

「実際問題、その……転生? とやらをしたとしても……と、言うかそこま  
でしたいか?」

「したいッ!! 切にっ!!」

「……………」

あ……うん。その顔から、本気の本気で言っている事は分かるが……。

「ま……まあ、いいや。でもな? 普通あり得るか?」

「何がだよっ!!」

「生まれ変わった途端にな? 側に可愛い女の子が沢山いるとか……テ

ンプレだと、幼馴染か?」

「……………」

「しかも、その子達から、ほぼ無条件に好かれて、出会う子皆に惚れら  
れるとか?」

「……………」

「ありえる訳ないだろう?」

「……………」

ないない。

「そんな主人公にだけ都合のいい現実なんて、あるわけねえだろ」

「……………」

「…中村」

「なんだ？」

「サンダースの時…だっけ？」

「そうだ」

「お前が、天の啓示とやらを受けたのは」

「そうだな！」

おい、なんだ。

俺を置いて、違う話に切り変えるな。

「…今、俺はソレをまさに受けた」

「そうか…俺も、再度ソレを受けた所だ、気が合うな」

「…：…なんだろう…？ 何故か今、本気で尾形をぶっ殺したいと思っ  
たのは…」

「やっぱり、気が合うな。俺もだ」

物騒な事を、いきなり言うなよ…。  
会話が繋がらないぞ？ 何がどうなって、そうなったんだよ。

「で?! 尾形!!」

「どうした？」

半分やけくそ気味の笑顔で、林田が声を荒らげた。

「西住さんとは、どこまでいった?!」

……。

またかよ…。

「いい加減しつこいな、お前も…強引に会話を変えるな」

「林田…気持ちは理解するが…。園先輩いたら、また怒られていたぞ  
?」

「いないから、事情聴取を開始しているんだろ？ カツ井かつ!? カ  
ツ井奢れば喋ってくれるのか!?!」



ま…まあ、園先輩は、底から戻ったら、さっさと学校へと報告の為に帰っていつてしまったけどな。

確かにこの場にいたら、またお小言でも頂きそうだな。

というか、林田…古い刑事ドラマのお約束を、よく知っているな…。

「はあ…俺も彼女欲しい…」

「魂の叫び…もとい、嘆きだな…」

「まあ正直、尾形って結構そっち方面へたれっぽいしな…。結局、西住さんには手を出していない…いや、出せなていないと、最近ちよつと思ってる」

「…」

うん…黙ってよう…。

手を出していない…どころか、あんこうチーム全員と関係持ってるとか言ったら、林田、死んでしまうのではないかと思う…。

いや…以前に、軽蔑されてしまいそうだな…。

理由はあるが、言い訳だしな…それは。

「プラトニックも結構だけどさあ…もう少し、積極的になってやれば？」

「…中村？」

「実際に関係持っていたとしても、変に彼女に気を使って、基本的にお前から迫りそうにないしな」

「慣れた発言どうもおお!!」

「お前には言っていないぞ？ 童貞」

「…」

…。

積極的に…ねえ？

まあ結構…結構な事を、結構な所までしてしまう事があるのだけど…。

…。

あ…あ…でも、ソレって、俺のスイッチが入った後だから…俺から迫ると言う事は、殆どないかも知れないな…そういや。

大体、流されて…とかが、一番多い…というか、全部それだった気

がする。

誰に対しも…なあ…。

「あの手のタイプは、結構迫られるの待ってるかもしれないぞ？　タラシ殿？」

「待ってる？」

「…お、食いついた」

ぐっ…反射的に聞き返してしまった。

「そうそう…お前の性格上、流されたり追い詰められないと、答え出さないだろう？　実際に西住さんと付き合いだしたのだからどうだろう？」

「……」

そ…そうだった。

こいつもある意味当事者だったな…。

あの場、あの時…こいつもテントにいたな…。

積極的…ねえ？　しよっぱなから、前フリもなく…ただ、俺が求めれば、応えてくれる…のだろうか？

大体が、その場の流れとか、悪乗りだとか…そんなのばかりだったしなあ。

「そうだぞ、尾形っ！　欲望を解き放たてっ!!」

「そこで、林田が何故食いつく…」

…つまり。

「…酒を飲めって事？」

「…飲むなっ!!　絶対に飲むなっ!!」

「…いや、だつてそうしないと」

「あれは、一般人にも被害が及ぶツ!!　貴様は生涯禁酒しろっ!!」

どないせいっちゅんじゃい。

ふむ…。

そういや、とんでもないスキルも、しよっぱなから使った事は、殆どないしなあ…。

本気でアレを使えば…ある程度…。

欲望…。

解き放つ…。

無理だな、うん、無理無理。

結局、黒いスイッチが入らないと、遠慮が消えないし。

そこまでの経緯が、まず想像つかない。

どうしても、気を使ってしまう。

「…というかよ、林田」

「なんだよ」

「尾形と西住さんの展開…というか、進行具合を何故そこまで気にする」

林田が、ここで真顔で立ち上がると…なんだ、そのポーズ。

変身でもしそうなポーズを決めると、高らかと叫んだ。

「西住さんの乱れた姿を教えて欲しい！」

「……………」

「…いや…な？ 人の彼女に…とか、まあ色々あるけど…そこまで、欲望に忠実だと、なんにも言えないぞ？」

「即答でお前…。はあ…基本的には良い奴なのに…」

「基本的にはって、言うなっ!!」

同級生の…しかも見知った子の、そういった姿とかまあ…興味があるのは、分からないでもない…ないが…。

はつきりと言うなよ…。

「尾形が、怒りを通り過ぎて呆れてる…」

「自分の彼女の、そっち方面の様子を細かく言う訳がないだろうが…」

「委細承知っ!! …まあ9割型、からかってるだけだっ!! 嫉妬だっ!!」

「だろうな…」

「だからっ!! アイアンクローはやめてツ!! 悪かったからっ!! ごめんなさいっ!!」

変なポーズで、叫んだから、冗談だと俺も分かった。

でもな？　言って良い冗談と、悪い冗談ってあるんだぞ？  
まったく…。

「でもなあ…たまに言う奴いるけどな」

「中村さんっ!?!」

「なぜ、さん付け…」

「いたのっ!?!」

「林田…食い付きがパナイな…」

「…ゴメン。聞いていてなんだけど、それがマジなら…それはちよつと引く」

「食いついたら、即引いた…。なんなんだ、お前は」

「ただっ！　興味はあるっ!!」

「…あ、はい」

あく…うん。そういや、俺の昔の職場にも、その手と奴らはいたな。

どこそこの女を食っただの…言う奴は結構大人のチャライ奴なら、何度か俺も見た事あるし…聞いた事あるけど…。

しかしその歳で、ソレを言うか…。

「なんかなあ…。転校前の学校…まあ1年の時だったんだけど…」

「」

あ…林田君の目が死にました。

高一でソレか…それ以前に、その歳で体験がある人物がいるってだけで、林田が泣きそうだ。

「同じクラスの子とヤツたって、息巻いてたわ」

「」

林田…。

「ただなあ…。色々つまあ…その状況と、段々慣れていく経緯を発表形式で、野郎同士に言っていくもんだから…」

「もんだから?」

「最終的に、その子クラスのオナペットになつた」

「」

「なんかなあ…その子の顔見るだけで、おっ裁てる奴も出てくる始末でな…。言っている本人は、自慢…というか、背徳感がすげえとか、嬉

しそうに言ってたけど」

「…うわ…引くわ」

「…まあ性癖は？ 人それぞれだから、兩人納得の上で言うのは、プレイの一環だろうし？ ……まあ実際、プレイだったみたいだけど…女の子も相当だったYO？」

「プレイっていうなっ！！ っていうか…中村、そういった事、すげえ普通に言うよな…」

「はあ…で？ そいつ最終的にどうなったの？」

「知らんっ!!! 俺、その後すぐに転校しちやっただからっ!!!」

「…また力強く否定。あ、でもそうだったのって、普通…」

「俺じゃねえぞ？ というかな？ そいつの実例を見て、俺にも聞いてくる野郎供が増えたんだ…」

「… ああ、お前モテるから」

「ぐっ…そうだよっ!! だから新しいネタ欲しくて、他の連中がワラワラ寄ってくるんだよっ!! うざったくてしかたなかったわっ!!」

「…ちっ。否定する事すら、やめやがった…。あ、尾形。お前はアツチ側だ」

「……」

「どうしよう…スキル使って、ちよつと…いや、大分アレな事しちゃったから、ソイツの事何も言えない…。」

「ただ、快樂だけを与えてしまう際に多様してしまう…。」

「まあ本気で一般に知れ渡る程の事はしないが…どうなのだろう。」

「俺が積極的になったら、どうなってしまふのだろう…か？」

「どしてしまふ…のだろうか？」

「はあ…やっぱり、転生してみたい」

「…変身したいっていう子供か、お前は」

「だからな？ 転生したとしても、うまく行くとは限らんだろうが…」

「そこでチートスキルって奴ですよっ!!」

…と、というか会話が戻ったな。

「俺はアレだって！ 無双とかどうでもいいからっ!!」

「だから…ああもういい」

「エロいスキルってのが欲しいっ!!」

……。

……………。

持ってるの来た…。

「異世界でエロスキル取ってどうすんだよ」

「異世界…じゃなくてもいいんだっ！ とにかく欲しいっ!!」

「…お前、考え無しに言ってるだろ。とつても今みたいに相手にされなかつたら、今とまったく同じだろ」

「現実には聞きたくありませんっ!!」

元氣いいなあ…林田。

いや？ ある意味で現実逃避の真っ最中なのだろうか？

目が死んでるし…。

「具体的には、催眠…？ いや、違うな…」

催眠って…。

結局の所、ソレ解ける奴だろ？

エロ方面と何か関係があるのか？

どれ……。

……………。

……………。

あ…ある。

催眠スキル…まじかあ…。

「そうそうっ！ 催眠って奴だっ！ 媚薬効果もあつて尚良しっ!」

…ゴメン、林田。

持っているどころか、たまに使う…。

「後…後っ!!」

「…ちよっと面白くなってきた」

「中村っ!?!」

「いや、この林田見てるのがな？」

「…なるほど」

脳内で手探りで何かを探している林田。

欲望を混ぜっ返している様だ…。

まあ参考までに聞いておこう。

どうせ…潰す時間なら、いくらでもある。

「に…肉体変化系？」

いきなり疑問形になった…。

「大きくしたい…いや、切実に…マジで…」

「……」

あ、うん。目がマジだ。

「日本人平均より、規格外って言われたい…尾形みたいにツ!!」

「俺を引き合いに出すのはやめろ」

「もしくは、ひんぬーでも、巨乳変えるとかつ!!」

…マコニヤンに使ったら怒られそうだ。

でかくなる事より、でかくした時になんて言われるかわからん。

脳内検索…あ、しっかりとある。

「サイズ変化よりも…」

あ、中村があっさり参加した。

「触手…複数も可…」

「………」

結構、お前もキワどいな…。

「お前、絶対にダージリンのカードの衣装姿で、想像して言っただろ  
う」

「後悔はないっ!!」

いや、返答が肯定を通り過ぎてる。

「…もう少し、現実的な物はないのか…」

「ファンタジーに現実求められても…でもまあ、そうだな。現状、欲しいとかでも面白いかもな」

「意外にノリノリだな！ 中村っ!! 何かあるのかっ？」

「サーチ」

「サーチ？」

「体の性感帯を、サーチして知りたい」

「…面白いな」

「だろっ!？」

う…まずい。

素直に賛同してしまった。

しかし、その意見は面白い。

探すのも良いのだが、知る術が合っても損はしないだろう。

どれ…。

脳内検索……。

……。

あるのかよっ!!!

サーチスキル…人体の急所を調べることが出来る…いや、性感帯、性癖…なんでもエロ方面なら判別可能……。

本当にエロ特化スキルだな。

…なんでもありかよ。

「あっ！ 思いついた!! 痛覚の快樂変化とかかなっ!!」

「…いや、痛いよりは良いかもしれないけど…完全にSM目当てだろ」

「俺は、そういったのは範囲外だなあ…」

「尾形、S寄りなのにか？ お前好きそうだと思っただけど…」

「いやあ…おめえ、ぶっころすぞ？」

「なんで、裏声使った…」

まったく…。

俺は、肉体的に苦痛を与える系はダメなんだよ。

精々、スパッキング…つて、何を言っているんだ俺は。

「あっ!!! 後、搾乳……」

「……。」

「武部さん…小山先輩とかに、かけたい…母乳……赤ちゃんプ…」OK  
林田、ブレーキ」



「なんでだよっ!! 男の夢だろ!?!」

「俺は違う。一緒にすんな…しかし気持ちは理解してやる。が、プレイは無理だ」

「後は、性格変化…性癖付与…淫語…思ってる事、強制的に言わせるとか…」

「……」

「分身とかも…」

それは良く使用シマス。

「えつと…後は、感度上げるとか? 3000倍くらいに  
どこの対魔忍だ。」

「いや、尾形は、なんかないのか?」

「そうだそうだった! お前がド変態のムツツリ野郎ってのは分かかってるんだぞ!?! 素直に吐けっ!!」

「召喚」

…お前ら…。

心の中の突っ込みで、我慢していたというのに…。

無えよ、そんな欲求…実際に持つてる物ばかりだし…。

「……」

「……」

そ…即答してた…。

「具体的には?」

「衣装召喚。変更。換装」

「…お前、コスプレさせるの好きだったな、そういや…」

……。

いや、好きだけど…。

「ちっ…結構、普通でつまらん」

「……」

人に聞いておいて…この野郎。

本気で呆れた顔しやがって…。

「そうだなあ…俺なら、アレだ」

何が、俺ならだ。

林田お前、さつきから欲望がダダ漏れだぞ。

「さつき言った、分身の亜種で…チンコもう一本増やすとか？」

「……………」

「痛覚変化プラスで、二穴責めも、一人で可能っ!!」

……。

……………。

「そーいや、林田のお迎え、遅いな…結構経つぞ？」

「そーだな」

「尾形。こいつ放置して、もう帰るか？」

「そーだな」

必殺オウム返し。

中村…お前、もう飽きただろ。

…気持ちは分かるけどさ。

「酷くないか!？」

「うっせえなっ!! お前、露骨すぎて引いてんだよッ!!」

「エー…」

えー…じゃ、ねえ。

「せめて、もうちよつとマイルドにしろよ…」

「んじゃあ、スキル「タラシ殿」」

「……………」

「ジゴロ、ヒモ、プレイボーイ、若い燕」

コロスゾ。

とうか！ 最後のだけ、何故か背筋になんか走ったぞ？

「モテたいツ!! せめて、女の子を口説く程の魅力を!! スキルに頼って、人生イージーモードしたいっ!! 舐めプっ!!」

「……………」

まったく：お前、これから兄ちゃん、その嫁さんに合うんだろ？

…あ、合うからか…。

身近な人間が、ソレだもな…。

…。

…姉さんじゃなきゃいいな…本当に…。

そもそも、スキル：タラシ殿って、なんだよ…。

あ…。

…。

……………。

あ る じ や ね え か っ ！ ！ ！

なんであるんだよっ!!

駄女神ツ!! 今なら話聞いてやるから出てこいっ!!

効果!! 精神的に、願いを叶える!?

なんだこれっ!!

「うるせえなっ! 尾形っ!!」

「まだ何にも言っつてねえだろ!!」

「お前なんか、無駄にデカいんだから? あっはっはっ! きつと似

合うぞ？ スキルで真珠でも入れてろっ!! あっはっはっはくっ  
そおおお!!!」

「…お前…情緒不安定すぎるぞ…」

「林田…」

真珠…？

あんなの、キモイだけだろうが…。

はあ…。

まったく…。

「真珠？ 入れるって、なにがです？」

「二」 うわあああ!!! 「二」

「…あの、ここ駅前ですよ？ 大きな声は流石に…」

後ろから突然、声をかけられた…。

三人揃って…というか、ハモってしまった…。

「ゆ…優花里!？」

「はあーっ!! はあーっ!! あ…秋山さん!？」

「びっつ…くりした…ああ…」

パーカーにハーフパンツ姿の…優花里さんが、真後ろにいました  
…。

し…死ぬかと思った…。

野郎同士で会話をしていたモノだから、俺もどこかで油断していた  
…。

そうだよ…ここ、大洗の駅前だ。知り合いや顔見知り居たり、来  
たりしても不思議はない…。

「それに、私の顔見て3人とも驚くなんて失礼ですっ!」

ちよっとプリプリ怒って可愛いと思うのですが、流石に心臓に悪い  
…。

「隆史殿。…そもそも、こんな所で何しているんです？」

「い…いやな？ その…」

簡単に経緯を説明。

といつても、そんなに内容は濃くないのだけどな…。

林田家へのお土産購入…そして、その迎えを待っているってだけだし…。

逆に聞きたい。ゆかりん、なんでこんな所にいるのでしょうか？

あ…陸の戦車道シヨップ…あ、はい。電車で行っていたんですね…はい。

「なるほど。…あ、それでさつき言っていた、真珠ってなんの事ですか？」

……。

「せ…戦車ノ事デス」

「……」

中村が、必死な顔で声を絞り出した…。

戦車って…無理があるだろ…。

「……戦車？ それと真珠と関係があるんです？」

「話の流れで…その、えっと…その…ウツ！ …ウエストロツク爆発事故について…」

「真珠湾の？」

「さ…さっすがあ、秋山さんっ！ ほ…ほらっ！ 尾形、そういった事、疎いだろ!？」

あつ！ 馬鹿、中村ッ！ 優花里に関して、戦車関連はすぐにバレるぞ!？」

「嘘ですね」

「」

…ほら…即答。

「確かに、その事故でLST―353の他、戦車揚陸艦のLST―39、43、69、179、480…そして戦車揚陸艇 LCT―96

1、963、983が喪われ……163名の水兵がお亡くなり……39  
6名が負傷した、痛ましい事件ですが…」

「…」  
「しつかり答える当たり、優花里らしい…。」

「戦車の話？ その戦車を運搬する関連の話で出るのはわかりますが、どちらかといえば艦としての話が主流になりうる件です。それに  
入れる？」

「…」  
「……」

腰が砕けた俺達を見下ろしながら、何かに気がついたのだろう。

…優花里さんが、久しぶりにゴミを見る目をされました。

「ああ…また、如何わしいお話ですか」

「…」  
「…」

きつついつ!! ゆかりんの、その目はきつついつ!!

「え？ ちがうよ？」

「林田!？」

すげえ普通に言っている…というか、諦めた目をしてるな!!

「…何が違うのです？ そもそも、往來の駅前で…」

「尾形の購入した物の話だよ？」

「…」  
「…」

「隆史殿の？」

「そうそう。確かに戦車の話は嘘だけど、如何わしくは無いよ？ う  
ん。尾形が通販で買った物を、コンビニ受け取りにして、それをまさ  
に先程受け取っていた件についてだよ？」

「やっぱり如何わしいじゃないですかっ!!」

林田……お前……すげえ流暢に言いやがって…。

優花里も確信して言わないで…。

「え？ そうなの？ 僕達、中身までは知らないよ？ 真珠の入った棒かな？ って、話だよ？」

「棒？」

「本気でぶん殴るぞ、林田っ!!」

確かにさつきコンビで受け取ったけどもッ!!

……。

後は任せたって、顔すんなっ!!!

「何焦った顔をされているのですか!! 通販なら、ご自宅に直接で良いじゃないですか!!」

「いや、優花里さん。僕にもプライバシーと言うものが…」

「西住殿達に見せられない物って、言っている様なものじゃないですか!!」

…くっそっ!! 俺を売りやがったな、林田っ!! 中村と一緒に合掌するな!!

下手に言いマゴつくと、更に疑われるな…ああ…もう…。

……。

……………。

ま、いつか。

「…えっと…」

林田の荷物とは別に抱えていた荷物。

バックから箱を取り出した。

あまり大きくない、その密林からの贈り物を。

「うさぎさんだ」

「はあ!？」

「コレは、みほ専用機だ。三倍のスピードを誇る色だな!!」

「…西住殿？ 専用機？」

あ、マジで分からないって顔をしているな。

ああそうか。優花里が来たのは最後の方だったな。

「……………」

「通販位しか売ってなくてな…マジで結構いい値段した…パーティー

衣装とかでは無く、マジ物を購入したんだ…」

「はい？」

「…林田」

「ああ…アレだな。罰ゲームのだな…。マジでやる気か…くっそっ!!  
俺も見たい!!」

「……」

頭の上にクエッションマークが乱立しているな。  
ならばわかりやすく、もう一つの…。

「これは、優花里専用機」

「…は？」

「上下合わせて、ダブルだダブル。ツインサテライトだよ？ 良かったな。後継機をいきなり買えたぞ？」

「……ま…まさか……」

購入した物…モノでは無く、ブツだな。

そして、できるだけ優しく…そう、自愛の満ちた笑顔で言っ  
てやろう。

手の中にあるモノを、優花里差し出し…。

「あなたに…力を…」

「意味不明ですよっ!!!」

「…あ、専用声だ」

「…お、専用声だ」

「その声、やめてくださいいっつってええ！ 言っているでしょうっ!!」

あ、両腕で、肩を掴まれた。

いやあ…近いなあ…。

グツと上半身を引き下ろす様に、下に体を引かれた。

顔を近づけ、俺にだけにしか聞こえないような声で…。

（そもそも、サイズっ!! なんて知っているんですかっ!!）

（いや、一度見たし）



( なっ!?)

「……………」

( 優花里は、約束を守る良い子だなあ… )

( またそれですか!? 着ませんよっ!! )

( みほは、約束守るよ? )

( なっ!?)

( ダージリンも守るよ? )

( …ぐっ…取り敢えず隆史殿、切り替え早くないですかっ!?)

強引にしゃがみこませた、俺の肩の服を掴む手が震えだした…顔

真っ赤で。

「尾形：秋山さんには、容赦ねえな」

「……」

「…ん? 中村?」

「なあ、お前ら…」

「なんだ?」

「なんですか!?!」

二人揃って中村を見ると、ちよつと怪訝な顔をしていた。

腕を組んで、頬を搔くと、一言。

「…ちよつと…距離、近くね? ただのクラスメート…に、しては…な

「?」

…。



願いを叶えるスキル？

どうせエロ方面に関してだろうよ。

俺のは、そういったスキル特化型だろうしな。

それに願い…なんだ？

…中村が言っていた様に、少し積極的になった方が良いつて事だろうか？

……なりたいのだろうか？

……だから、こんなスキルあるのだろうか？

それを言われて、少し思った。

……。

精神系のスキル…自分に使ったら、どうなるんだろうか。

そう…。

当事者に聞いた方がいい…。

「い…今のままで、十分かと…」

……。

「ただ…」

……………。

「見てみたい…とも…違いますね…。なんて言うか…」

……………。

「——だと、私も…嬉しく…」

帰り道。

林田のお迎えが来て…中村は、一人で帰路につく。

そして俺は、優花里と一緒に帰っていく。

その道中…聞いてみた、素直な疑問。質問。

俺はもう少し、積極的になった方が良いかと。

それに対して、恥ずかしながらも…顔に熱を上げながらも…答えてくれた。

だから、俺も応えよう。

少しくらい、変わる気持ちで…。

自分の手の平を、額に当てる。

少々、怖いので時間制限を設けて、使ってみるか…。

ま、ダメなら……あまり芳しくない様なら、また別の手を考えようか。

……。

「  
」

一瞬、目の前が真っ白になった。

気づいた時。

薄暗い視界が広がっていた。

……彼女達は、拒絶しない。

今までの暴走した俺を見ても、最後には受け入れていたから。

……だからこそ、俺も気を使ってしまうのだけだな。

散々流されて、変な関係がドンドン膨らんでいってしまう。

……だけどもあ……それは今更だ。みほが何も言わないのなら、俺も何も言わない。

いや……言えない。はつきりと言った方が良いのだろうが、みほが選んだ関係だから……もう何も

……。

……。

それが……ナンダツケ？

ダカラ、ナンダツケ？

肩を抱いた。

今までなかった行動だった。

みほ以外に、こういったソフトに触れる事は、なかった気がする。

それは、彼女もわかったのだろう。

……その事実が余計に体を硬直させた。

熱い…体温…。

ああ、そうだ。少し惚けていた。いや、呆ける？

…どっちでもいい。

学園艦の街中…いや片隅。

唇で唇を挟む…そこから感じる体温。

肩を抱え、引けば素直に応えてくれる。

ただ、緊張なのか何なのか…呆れた顔も一瞬見せたが…そう一瞬。

そして、何か予想外なのか…今は体を硬直している。いや、させている。

息を飲む声しか聞こえない…が、まあ驚いているのだろう。

下唇をしばらく弄ぶ…。

体がまだ硬直している。

…最初だ。

できるだけ優しく。

優しく。

優しく。

優しく。

何度も舐め、這わせ。

…挟み、焦らし…愛撫する。

唾液が唇同しをなめらかに滑らす。

丁寧…丁寧……丁寧……。

唇を唇で鋏、舌で舐める…と、唇全体へと、柔らかい感触が伝わってくる。

逃がさない様に、腰に手を回し、引き寄せて下から片手で抱きしめる。

硬直した体が少し和らぎ…手が俺の胸へと添えられた。

何か喋ろうとしたのだろう。

初めての事だ。

驚きはしたんだろうが、唇で唇を噛み…何度かそのまま押し込める。

今は大人しく…いや、夢中になって俺の唇を不器用ながらも、吸っ

ている。

次の段階へと、押し上げてやろう。

口を開けようとした瞬間、中へと舌を滑り込ませた。

舌へと官能的な感触と、快樂だと断言できる感触。

ニユルツと更に奥へと、滑り込ませ：彼女の舌に自身の舌を巻きつける様に動く。

舌の端を舌全体で刺激し、口の中で遊ぶ。

逃がさない為に、頭と体を抱きしめ、更に奥へと顔をも押し込む。

まあ：逃げないだろうが…。

：初めから本気で、彼女を墮とす為に舌を動かした。そう。

完全に口淫。

口内を犯す行為。

動きが変われば、すぐにその状態：態度が変わる。

舌：その根元から全体を絡める。

ニチャツ：とした、音がすると、一気に舌を回す。

舌の表面で、彼女の口内ある物全てを撫で回す。

「…舌を出して」

小さく言えば、素直に従う…。

その濡れた舌を小さく口から突き出した。

口外から口内へと、ピストンを繰り返す様に舌を合わせ…滑らせ始める。

：口を吸い、舌を吸う。

ジュルツとした低音。

継続する音は、俺が出している訳では無く…目の前の彼女。

別の：今までにない感情が湧き上がる。

腰を抱きしめていた腕に、少し強く力を込め…更に強く抱きしめた。

舌の付け根…

止め…だと。

ゾリツと刺激をする様に…舌先で撫でた瞬間。

彼女の体が、痙攣を繰り返した。

唇ではなく、口を合わせたままの為、目の前からすでに甘い吐息と  
なった呼吸が聞こえる。

その振動すら伝わってきた。

口を離し、舌を抜く。

ヌラア…と、唾液の糸が引き、そして切れる。

横に力なく、肩を何度も震わせ、半開きの目…その光が薄い。

頭を撫でてやれば、更にビクンツと肩を震わせた。

建物の間と間。

「さて、優花里」

「あ…う…」

初めてだとは、知っていた。

いや、正確には違うだろうが、そんなのは方便だ。

昔の人工呼吸だとか、大洗ホテルでのみほどの事とか…。

物理的な話では無く、男女としての話。

「…キスが、解禁なんだろう？」

「……は…あ…」

条件が違う……？ アレ？ まあ、もういい。

違ったとしても、倫理観を少し操作してやればいい。

初めてのキスを体験した彼女。

俺の胸に寄りかかり、俺の言葉が届いていないのか…質問に少し荒  
い息でしか答えてくれない。

スキルを出し惜しみしない。

脳内を探り、使える物は使う。

当初の目的…なんだっけか？

取り敢えず、彼女達の性癖をこじ開け…認識させ…。

求めたら、応えてもらい。

求められたら、応えてやる。

その下準備。

まずは、今この場では何もしない。

敢えて焦らす。

焦らして…どこまで変わるか…。

「さて、次はどうして欲しい？」

「…あ…はっ…」

やはり聞いていない。

…だから、そのまま優しく…強く、抱きしめて…頭を撫でてやる。

優花里が、恥ずかしがるという事もしないで、俺の背中に手を回してきた。

ただ、抱きしめ合うというだけの、ただそれだけの…。

…。

…。

次だ。

いや、次は誰だ？



●ルート 願 編● 戦車倉庫裏 ★

「…んっ！」

練習は本日、行われなかった。

無骨な鉄の塊。

その黒鉄の車が鎮座、並んでいる戦車倉庫には誰もいない。

唯一、何も無い日だとして、そこにいたとしても不自然ではない自動車部も、すでに戦車自体の整備も終わっている為に戦車倉庫にはいなかった。

誰もいない、静かな倉庫。

「…あつ、はっ！」

細い植木が、いくつか並び植えられて、建物の左右からでしか入れない裏道、路地？ …いや、お世辞にも言えない程のそんな場所。

人なんて用務員か、手入れの為の業者しか来ない…普段一般の生徒は、近寄らない場所。

植木もそうだが、植え込みすら成長して、伸びに伸びている為に鬱蒼としている。

それこそ、立っていれば、流石に建物の端からでも見れば分かるが、その植え込みの横に座つてしまえば、外から隠れられてしまえる程。

その誰もいない戦車倉庫の裏手で、明らかに不自然で不釣り合いな声が、小さく響き続けている。

現在、まだまだ夏休みが継続中。

生徒会の仕事…これからのエキシビジョンの為の打ち合わせとして、学校へと休みだというのに登校していた。

隊長として、同じくその打ち合わせ…というか会議にみほも一緒に登校していた。

思いの他、その会議がすんなりと終わってしまった為に、時間が大分余ってしまった。

…その為に、みほをそんな、戦車倉庫の裏手なんぞに、連れ込んでいた。

戦車倉庫の中が、唯一見える窓の下。

古ぼけ、少し苔が生えてしまっているそのレンガ造りの壁へと手を着かせ、腰を引かせ、こちらへとその魅力的なお尻を突き出させた。…そして、自らの手で、スカートを捲くり、下着を膝下までへと下ろさせる。

流石に羞恥で顔は高揚し、赤みが指しているが、最近では躊躇を余りしなくなっている…のが、少し寂しい。

…とか言っていると、抓られるので黙ってしよう。

倉庫の端から、戦車道以外の履修生。もしくは部活を行っている生徒の声が聞こえてきた。

そんな中、俺は俺でその場にしゃがみ込み、そのみほを…口で文字通り、貪らせてもらっている。

秘部から、恥穴まで舌を這わせたり、派手に啜る音を響かせたり…。

舌がみほの体を這う度に、体が跳ねる。

突き出された腕の真ん中で、頭を垂れ、必死に唇を噛み、声を殺しているみほの吐息が、ゾクゾクと更に変な趣向へと俺を導く。

「つつ!!」

舌を秘部へと深く差込み、内部で暴れま廻すと、口を両手で覆い、背筋を伸ばした。

内股で、くの字になっている膝が、ガクガクと震えていた。

手で、その白く柔らかいお尻を逃がさない様に掴み、舌を更に奥へと挿入させる為に、その肉を左右に開ける。

手の平で、肉質を楽しむ様に揉み上げながら。

「ふっ!! んっ!! んっ!!」

舌だけでピストン運動を繰り返すと、動きに応える様に、くぐもつた声が何度も聞こえる。

何度も、何度も繰り返すと、口から垂れ溢れて来た愛液が溢れ始めた。

…。

「スーーーーー」

「えっ!?! やっ!?!」

…。

痛い。

思わず、思いつきり鼻で匂いを嗅ぐように息を吸って見たら、その音ですぐに分かったのか：手で後頭部を叩かれてしまった…。

流石にまだコレは、駄目か：すごい焦った様な動きだったしな。相変わらず、ペチペチと叩くな…。

「…も…もうっ！」

いかん、行為の中断を余儀なくされてしまった。

…うん。

なんだろう…時間潰し…と、言うのみほに失礼だが、余り早く帰っても特にやる事がないしな。

だから今、ヤル事にしました。

倉庫の裏手へと案内されていた時のみほは、すぐに察してくれたのだろう。

恥ずかしがっている…という顔はしていたのだけど、心なしか体を少し…密着させてきたのに、少々驚きもしたけどな。

では、そのみぽりん。

ゆっくりと体を捻り、戦車倉庫の壁へと背を付ける。

俺と同じように、みほも並んで座るように促すと、素直に従って背を付け座ってくれた。

あ、下着…パンツは没収しましたよ？ 下に落ちちゃっていたし、ばっちいよね？

「か、返してっ!! しれっと何言ってるの!?!」

「あ、僕のポケットが飲み込んでしまったので、無理です。お家に帰って摘出手術しないと無理っす」

「だから何言ってるの!?!」

真っ赤になって、あわあわ取り返そうとしてくるけど、不可能です。こうなったら僕でも、どうしようもございません。

大人しくお家までお待ちください。

「うう…なんか、昨日から…優花里さんと帰って来てから、隆史君ちよつと変だよ?」

「そうか?」

まだ少し恥ずかしいのか…が、匂い…という言葉を出すのが恥ずかしいのだろう。

露骨に話題を変えてきた。

「妙にスキンシップが増えてたというか、今みたいなのも…あ、これはたまあ…に、あつたね?」

「…少しな、積極的になろうと思つてな」

間髪入れずに、答えてやると、驚いた顔をしましたね。

「……え!?!」

「え…つて。何を驚いている。ジト目に対して、慌てなかったのか? 変な言い回しで誤魔化さなかったからか?」

「りよ…両方…」

ふむ…。なんだろうか? 変に心が落ち着いている。

特にみほの言い方だと、俺の性格が微妙に変わってしまったとか、そういった事は言わない。

文字通り、俺の中の…躊躇が、ただ消えたというだけだろうか?

都合がいい…と、言つて良いのか分らんが、コレならドンドンと色んな事が、出来そうだ。

「…じゃ、返して」

さつさと申請を受理して下さいと、目で訴えながら、両の手の平を上に向けて差し出した。

目は口よりも物を言う…と、実感させられる気迫ですな。

顔を赤らめながらも、その恨みがましい目は、大好きです。

…目は口ほどに…だったか? まあどつちでもいいや。

取り敢えず…。

「みほ」

「…なに?」

「僕はネ? 特に女性物の下着を、コレクションしたりだとか、そういった趣味趣向の変態ではないのです」

「……じゃあ返して」

「ただこの後、下着も着けずに、帰路に着くハメになる、羞恥心に染まった みほを愛でたいだけなんです」

「十分、変態さんだよっ!!」

さて…。

そのまま、ズツボンのチャックを開けると、股間を弄る。下着の間、社会の窓から息子様を、手際良く取り出す。

「…うっ」

横目でみほの顔を見ていたが、特に慌てる事も無く、その様子…と  
うか、息子様を凝視していた。

とうか、チャックを開けた瞬間、次のフェイズに移行したと分  
かったのか、すぐさま黙ってしまったな。

もうすでに、下着の件ではなく、その取り出したものをジ―…と、見  
ている。

流れるに、何をどうして欲しいか、どうするかが分かっているのだ  
ろう。

…いや…慣れてくれたなあ…。

軽くみほの後頭部に手を添えると、口をゆっくりと開き、舌を覗か  
せながら…。

「は…あ…」

何も言わずに頭を下ろし始めてくれた。

指で横髪を上げて、耳に掛けるようにすると、本当に一直線に頭を  
埋めていく。

亀頭の先に、息が掛かる程に、みほの口が近づいた時…人の気配が  
した。

…地面の砂を擦る、足音。

『……………っっ！』

『……………？』

ガサガサと、植え込みを掻き分け、人が此方へと向かってきた。  
下手に動けば、こんなとんでもない状態を見られてしまう。

まだ位置的に、植え込みがある為に見えないのも理解しているのだ

ろう。

その為、みほは、そのまま完全に動きが固まってしまっている。

(よ……よかった……)

すぐに、みほの眩きが聞こえた……。

その気配は、植え込み二つ分程横で止まって、その場に座り込んだからだ。

顔見知り……では、ないのだが、みほはすでに大洗学園では、知らぬ人はいないと言える人物になっているしな。

こんな所……戦車倉庫の裏なんて人気の無い所で、俺と二人で居たとなれば即座に勘繰られる。

いや、勘繰られるどころか、コレの状況で一発だろう。

動きたくとも動けない……そんな状況。

ただ、あの二人が去るのを大人しく待っていていよう……そんな所だろう。

亀頭の先、顔をこちらに向けて、そんな事を言っている様に俺に訴えてくる。

……いや、その絵面が、すごいけどな……。

程なくして、横の二人の会話が、聞こえてくる。

会話内容を判別できる程、鮮明には聞こえないが、それでもニュアンスでなんとなく分かる内容。

それに……そんな会話がすぐに終わり、違う音で何もかもが判別できた。

(……わ……私達と同じ……)

みほが言うように、同じ。

というかみほさん……その音だけで、もう分かっちゃうんですね？

……ピチュピチュと、唇を吸う音が聞こえてきた。

(は……んっ……)

私達と同じ……と、いうセリフもそうだけど……みほが、どんどん慣れ  
ていつている。

体を弄る音も聞こえ、段々とアレの声も聞こえてきた。

くぐもった、吐息……とでも言うのだろうか……っつて。

(…取り敢えず、みほさん。何してん)

(…んちゅっ…ぶっ…)

先程から、生暖かい心地よさを、先端から感じていた。

異様に気持ち良かったので、敢えて黙っていたのですが…。

流石に徐々、ツツコミを入れようと思いました。

(は…あ…んっ。どうせ…隆史君の事だから？　こんな状況でも…イヤラシイ事、ワザとさせようとするでしょ?)

(……)

まあ…そうなんですけどね？

俺が指示をする前に、すでにみほさんは、舌で亀頭周りを周回して舐め回していました。

音を立てないように、ゆっくりと…。

(んっ……ちゅ……)

頬っておくと、亀頭を口に収め…ヌポヌポと、カリの部分を唇で噛むように、ピストン運動を繰り返す。

舌は暴れ周り…それでも音が出ないように…ゆっくりと味わうように、口全体を使っていた。

(……っ!?)

前髪をかき上げ、顔を見ようとすると、何故か手の平で、見られまいと隠した。

しかしそのまま、顔の動きを止めず、喉奥までゆっくりと沈めていった。

目元を隠して、必要に…丁寧に口でしてくれている。

いや…そちらの方が、逆にエロいのですが…。

…頭を撫でてやる。

そのまま後頭部…首付近に手を添えると、分かっている…と、言わんばかりに段々と、その口内の動きを早めた。

ジュツ…ジュツ…と、口で搾り取る様に陰茎全体を扱く行為を繰り返している。

大分…みほも理解し始めて来ている。

調教…とまでは行かないのだろうが、今までの経験が、潜在意識に

でも残っているのか：恥ずかしながらも結構大胆になり始めた。

特にもう躊躇は、余りしない。今も、流れを察してこんな場所で今までと……ん？

これ……みほも癖になり始めている……？

催淫スキルは、まだ使っていないのだけ……。

……ならば、これはどうだろう？

(みほ……)

(……？)

(それだと、足が見えそうだぞ?)

(!?)

随分と集中したのだろうか。

足が段々と開かれていた。投げ出した足が、反対側のフェンスへと当たる位に。

(もういいから、こっち来てくれ)

(ぶあ……ふえ? ……あ……うん)

ちよつと名残惜しそうな声をだしたな。

状況を理解しているのです、さすがにバレるまでは不味いと思つたのだらう。素直に従った。

抱き締め合う格好へとなれば、大丈夫だろうと、耳打ちをしたら納得いつたのだろう。

……素直に従って、俺の上へと脚を広げ……乗ってきた。

顔を見上げると、逆光になって分かり辛いですが、目が怪し色を放っていた……どこか、不満そうな顔で。

ならば……と……。

お尻を俺の腹部分にまで来た辺りで、お尻を掴んだ。

グツと少し強めに掴み、恥穴部分を尻肉ごと開くように、左右に開く。

手に張り付くような肌の触感と、少し汗ばんだ様な肌質……。

(んっ……)

何度か揉み、その柔らかくも弾力のある触感を楽しんでいると、それに合わせて、みほの目が閉じられた。



小さく声を漏らしそうになっているが、触られ揉まれる感覚を感じている。

さて：どう出るか？

腰を落とす様に、下へと力を入れる。

その時点でどうしたいか、今のみほなら察する事ができるのは容易だろうよ。

野外というこの場所、隣のカップル。

そしてこれから行われる事：続き。

少々不安げな顔をしたが、何も言わず：黙って素直に従ってくれた。

…。

……………。

少し予定とは違った流れだが、概ね計画通り。

こんな場所にまで、連れてきた甲斐があつたな。

用意したシチュエーション。

前なら、冗談ですませ：本気でしようとは思わなかつた。

：が、ここまでの関係：状態に壊れているのならば、本格的に壊してしまおう。

(っ！)

亀頭を恥穴へと当てる。

散々、ほぐし：慣れさせてきた場所。

まだ怖いのだろう：少し顔を顰め、目を泣きそうな程潤ませた。

そうそう、記憶を消しているの、みほに取っては初めての事：場所。

だが、前回、スキル：EXPを使用しているの、もはやこちらの穴でも、みほが快楽として快感を得る事を、俺は知っている。

少し、安心させる意味での行動で、片手を伸ばし頬に触れる…。

結果を知っているの、躊躇はしない。

……が。

逆に興味がある…。

初めてだというのに、この場所で絶頂を迎えるであろう、みほの気

持ちが。

さて：今回は記憶は余り、操作するつもりはない。  
催淫スキルも使わない。

すでに快感を、最大限に感じる体に仕上がっているみほ。  
野外、バレていないとは言え、人前。

このシチュエーションにして、そして初めての：しかも普通では無い場所での行為で、絶頂を迎える。

(は……あ……)

みほの：不安はあるが、どこかで期待していると思わせる：目が見える。

その目にも、期待にも応えようか。

みほが、：こんな変な関係になったとしても、俺を求めてくれているのだから、俺もみほを求めよう。

(た：隆史君?)

手始めに指で触り：少し指を優しく入れてみる。

驚いたのか、ビクツと肩を跳ねらせ、目を強く瞑った。

すでに、秘部からの伝った愛液で、ベツタベタになっている。

(つつ!?)

何か、言いたそうな顔をしたが、一言も喋らず、お尻を掴む手での、体の誘導のみでの、この後、どうするかを示す。

下手に躊躇したり、この様な時に変に考えを巡らせると、中途半端になり余計に行動を制限してしまう。

だから、ある意味で何も考えず、ただ欲望に従わせてもらう。

ぐっ：力を込め：押し込む。ニチニチと音をたてながらゆつくりと進入していく……。

龟头から燃えるような熱い熱：体温と、異物を外へと押し出そうとする、肉の壁を感じた。

(あっ！・ かつ!!)

ゆつくりとその中へと：みほの中へと侵入していく。

肉をこじ開け、強引にみほの体を、下ろし侵入させて行けば、その先からゆつくりと恥穴が拡張され広がり……。

みほが、陰茎を飲み込んでいくのを、熱すぎる体温と共に、実感していく。

「あっ…はっ……」

最後…少し手前、何かに引つかかった。

…一番奥。

ならばと…グツと突き上げる様に、押し込むと…勢いよく陰茎全てを飲み込んだ。

(っっ!!)

背中を海老反りにし…顔を真上に上げ…胸を弾むほど、こちらへと突き出した。

すぐに倒れこむ様に、俺の胸に手を乗せ、体重を預けてくる…。

手で頭を撫でると、顎を上げ…そのまま唇を吸い出した。

吸いながら、俺の下唇を舐め…挟み…舌を口へと入れてくる。

応えてやる様に、こちらも舌をみほへと差し込むと、舌を絡ませ…

舌を吸い出す。

ん…。

隣から、今度はジユポジユツポと、唾液と口を滑らせる様な…そして強く啜るような音が、響きだした。

アレを舐めているのだろうな。

負けじと、俺の口を吸い出すみほ…。

…。

あの時の消してしまった記憶の、トイレの時と状況が似ている。

というか、みほ。こっち系は変に負けず嫌い…張り合うよな…。

音だけの…あの時と同じ様な、顔をも知らないカップルなのに…。

……。

………ま。チガウノダケドナ。

う…しかし…。

陰茎全体を包んだ、みほの恥穴の内部…痛いほど締めつけて来る。

これで動く…俺でもすぐに果ててしまいそうだな。

だが、このまま動かないでいる訳にもいかない。

グツ…と、お尻を掴む。

押し上げる様に上へと、抜き出すようにゆっくりと押し上げていく。

(あ……あ……あ……)

ゆっくりと上げていく道中…みほの目が輝く。

期待に満ちたその目…顔。

このすでに隣にいるであろう、カップル達の事を忘れている様な…

今はコレに集中したいと言った様子が伺える。

ゾリゾリとカリが、みほの内部をそぎ取るような感覚…。

だから聞いてやろう。

(なあ、みほ)

(あ……う……?)

俺の呼びかけに、みほは俺の目を見る。

すでに横のカップルを忘れてしまっている様な感じだな。

亀頭部分だけ、お尻内部へ入っている位まで引くと…聞いてみた。

(これ…一気に押し込んだら、どうなると思う?)

言った直後…。

薄く…。

自分でも気がついて、いないだろうと…思うほど。

—みほが、笑った。

◇

学校の見学。

戦車倉庫の見学。

：せめて、他校の生徒らしく：制服で来校をした。

隆史が案内をしてくれた。

途中：全てに興味が失せた。

いや、途中ではない。

隆史の姿を見た時からだ。

見た瞬間：昨晚を思い出し…。

昨日を思い出し…。

全てが欲しくなった。

隆史の全てだ。

全部だ。

みほは今、いない。

いないんだ。

私の立場ならば、全てを欲するのは凶々しいと思う。

みほ。

隆史が選んだのは、みほだ。

だから：体だけ。

…：今…：だけ…。

…：今…：だけ…。

口を塞がれるだけで嬉しい。

いや、触れられるだけで嬉しい。

…：嬉し…：い…。

◇

(これ…：一気に押し込んだら、どうなると思う？)

どうなるんだろう？ どうなっちゃうんだろう？

初めてお尻に入ってきた時から、気持ち良さしか感じなかった…

うう…初めてなのに…。

隆史君が、散々…色々としてく来たお陰で、初めは少しキツかったけど…全てが入ってしまった。

エッチする箇所では、ないと思うのだけど…。  
ないのだけれど。

隆史君から言われた直後、期待感で頭が一杯になった。

というか…その考えしか無かった…。

入れて直後と、少しでも動かした感覚…それだけで、これ程の…気持ち良さ…頭の中に真っ白な光が何度も襲った。

ゾクゾクとした、背中の真ん中を這う、感覚…全身の毛が逆立つような…。

ズチュツ…と、長く考える時間も無く、気持ち良さ…というか、熱い感覚が全身を包んだ。

反射的に、両手を口で思いっきり押さえってしまった。

無意識だと思うけど、目の前には、太陽の光なのか何なのか…また真っ白い光が、何度も何度も…。

自分の体が、自分のモノじゃないみたい…。

立っているのか座っているのかすら分からない…。

下から圧迫感と共に、全身を気持ち良いという感覚が、とても強く襲ってくる…。

(ふー…!! ふー…!!)

息を吐くので精一杯…。

クラツとした、目眩にも似た感覚。

うん…隆史君は休ませてくれなかった…。

私のお尻を掴んだまま…ゆっくりと…でも、大きく動き出した…。

私の中…一番奥からゆっくりと引かれると、それに合わせて背筋を指でなぞられる様な、感覚…。

「はっ…あぁっ…あぁ…あぁ…」

引く時は、ゆっくりなのに…。

「ひゃあっっ!!!」

お腹の奥に響く程に、強く入ってくる。

目の前がチカチカするよお…。  
初めての感覚…熱い…すごく熱くて…。  
キモチイイ。

「あっ！ はっ！ はっ！」

今度は奥に入ったまま、小さく短く動き出した。

大きく広がっている、私のお尻から、ちよつと…いや、すつごく恥ずかしい音が何度も、何度も…。

動く度に聞こえてる。

「つつっ!!」

3度目の絶頂。

…もう…。

おかしい位に気持ちいい…なに？ この感覚は何なのだろう？

圧迫感とか…中身が全部押しつぶされそうだとか…何もかもが、心地よい。

「ハ…ハ…あうっ!」

あ…あれ？

視界が…広がった。

目の前にいた、隆史君がいない。

目の前には、緑色をしたフェンスが…あつ…そうか。

体を回されて、後ろを向かされたんだ。

少し下を向くと、隆史君に腰掛けるように座っていた。

ギツチリと、繋がったまま。

「はうっ!? はっ!! はっ!! はっ!!」

曲げられた、隆史君の膝に手をつくすと、またあの気持ち良さが、何度も何度も襲ってくる。

水を潰した様な音も、何度も何度も。

お腹を疲れる度に、物凄い熱い温度と一緒に、訪れる絶頂感。

隆史君は、すでに動いてくれなくなっていた。

まだ…もうちよつと欲しい。

うん…欲しい。

後ろを向かされた時から、無意識に…貪る様に。

すでに自分から、隆史君へとお尻を突き…ブツケテイタ。

「あっ!!… あっ!!」

声を出す事すら、キモチイ。

隆史君は、私の声が好きだと言った。言ってくれた。

なら、もつと聞いて欲しい。

もつと…もつと…。

聞いて…。

…。

…あ…あれ？

なにか…忘れてる様な…。

「み…みほ？」

視界に見慣れた足が見えた…。

見慣れた靴…見慣れた…。

「お…あっ…んっ…おねええ…んっ!!」

顔を見上げると、そこに制服姿のお姉ちゃんが…立っていた。

制服…乱れた服…。

前のボタンが外され…下着すら外され…大きな胸の谷間が見えた。

明らかに、その…って、事は？ …横に居た、来た…人達って…。

え…えっ!?

「ひゃあっ!?!」

動いていた腰を、掴まれ…奥まで突き入れられて止められた…。

う…ううう？ 私、まだ…動いて…た？

「みほ…まさか…隆史以外と…」

「えっ…えっ!?! 何言ってるの!?!」



隆史君以外!? 寧ろそれはお姉ちゃんの方:

「ん…んっ!? 隆史!」

私の肩に顎を乗せ…隆史君が、私の影から顔を出した。  
特に普通の顔で…。

「なっ…えっ!? はっ!? えっ!?」

お姉ちゃんの顔が、青くなっていく…。

隆史君の顔を見た瞬間、すっごい早い動きで、先程までいたであろう場所を何度も見ている。

ブンブンと顔を振りながら…。

…。

ナンデ?

ナンデ?

そのおねえちゃんのよこ。

たかしくんが、もうひとりいた。

夢でも見ているかの様な光景。

私が見間違えるはずがない。

目の前の男性は、確かに隆史君だった。

うう…脚が震えて…うまく立てない…。

「やっ…んっっ!? あ…はう!」

動く振動が、背中を通して気持ちよさを伝えてくる。

私の後ろの隆史君が、両脚を持って…立ち上がった。

「まっ…まっつっ! たかっんん!!」

両脚を広げられ、立ち上がった自分の重みで更に深く入ってくる。

ニチツとした音まで聞こえ…繋がった部分の熱く感じる温度が、更に上がる。

「み…え?」

お姉ちゃんが驚いている。

その驚いた顔…その目の動きが、一点に集中しているのに気がついた。

その目線の先は……わ……私の……。

「やつ!! たっ……! 隆史君っ!! こんな格好、恥ずかし……あうっ!」  
顔を後ろに向けようとすると、ゆっくりと私の持ち上げ、下ろす行動を始めた。

頭が熱い、顔が熱い……。

恥ずかしさと、こんな状況でも気持ちが良いと思っっている自分が、更に恥ずかしい。

『いや、みほ。あんなでかい声上げたら、さすがに気づくぞ?』

「だよな」

目の前の隆史君と、後ろの隆史君が喋る。

「あっ……んあっ!」

『ふむ……前もすごい事になってるな』

目の前の隆史君が、近づいてきた。

ズボンのチャックを下ろしながら……。

頭の中が、ごちゃごちゃになっている中、ごく普通に……その……取り出すと。

本当に、普通に私へと……私の入口へその先を当てた……。

ウ……ソ……。

「すごいな……お漏らししている程になってる。繋がってる部分まで垂れて……すごい音がしたな」

『だなあ……。自分自身と会話してると思うと、かなり変な感じだな』

「だな」

待って……え……え……え……?

『みほ』

「!」

『わかるか?』

「なっ……え……」

『お前……今笑っているの』

……。

……………。

…にな…ちやう。

…おかしく…なつちやう。

「っ!! あっっ??」

お腹の中が、隆史君で全て埋まった。

隙間なく…びっちり…と。

お尻と…前。

両方で？ が？ ゴリゴリと私の中で暴れまわっている。

前を突かれれば、その動きの振動と一緒に、お尻からも気持ちよさが襲う。

なんて言っていていいかも分からない。

かんがえなんて、かんがえな…ん…。

ただ、肺から声と一緒に、空気を吐き出す事だけ繰り返す。

キス…。

口からも、心地良さが襲ってくる。そう、襲ってくる。

後ろから、耳を舐められ、首筋を舐められ…全身隈なく…気持ち良くない所を探すのが難しい…程…。

アレ…。

隆史君…も…ええあ…。

お姉ちゃん…も、隆史君…達に…あ。

「あああああっっ!!!」

熱い。お腹が熱い。

動きを急に止めた、隆史君達から吐き出されたモノの温度を感じる。

お腹が、私が満たされている…満たされていく。

もつと…コレ…。

まだ…まだ…。



ぐっちゃぐっちゃと、何度も何度も、出し入れを繰り返された。

一度、完全に引き抜かれた場所…みほの秘部から、信じられない量の精液が、音を立て吐き出される。

空気を混ぜた、下品な音を…立て。

地面に落ちれば、ボトボトと重い音。

すぐにまたみほに…妹の中に、隆史は入っていく。

しかし、もう一人…。

私の横に居たはずの隆史が、こちらに近づいてくる。

どういう事だろう？

混乱した頭の整理が、全くつかない。

私が、見間違いなどするはずがない。

肌を触れ合い…指でも触れた。

胸より少し下の傷…。

眉の横の傷…。

間違いなく、隆史だった。

隆史のはずだ。

訳が分からない。

確信を持つて言える分、余計に頭が婚らしていく。

近づく隆史の後方。

…強引に視界を持って行かれた…。

オカシイ。

アレは、なにを…え？

アレは…お尻…か？

大きく、甘ったるい声で、出し入れを繰り返されているみほは、昨晩見た…私の知らない妹だった。

あの時も、衝撃的…というか、知らない妹を何度も見させられたと思うのだが、その比ではない。

肛門を信じられないほどに大きく拡張され、慣れた様に…スムーズに出入りしているアレに合わせ、歓喜の声を上げている。

ブチュブチュと、秘部から先程出されたであろう隆史の精液を押し出されながら…また下品な音を立てて、みほから吐き出している。

「…………ぐっ」

な…なんだ、今の気持ちは。

ドウナツテイル？

私が…私は、おかしくナツタノダロウカ？

「やっ!! はっ!! はっ!!」

獣地味た声が、何度も聞こえる。

聞いた事のない、妹の声。

見た事のない、妹の顔。

女としての…妹。

ソレを目の当たりになっている。

すでに私の事も、もう一人の隆史の事も忘れてしまっているのだろう。

ただ後ろの隆史に対してのみ、反応している様に思える…顔。

ガクガクと上下へと動かされているのに、不思議と…はつきりと分かる。

快樂に身を委ねて、完全に惚けている妹の顔が。

「あうっ!! あっ！ あっ！」

……。

違う。

私は思い違いをしている。

そうだ違う。

…女の顔…？

違うな…あれは違う。

初めて隆史に抱かれた時…あのホテルで鏡の前でもシタた時に感じた。

あの時、私はただの雌…と、動物だと思えた顔をしていた……………  
と、思ったが…違ったな。

今のみほ。

そうだ、あれこそが雌の顔だ。

「……………」

クヤシイ。

ただ、クヤシイ。

その感情が、身体の芯から湧き上がる。

隆史が二人いるとか…ソレはソレ…もうどうでもいい。

私と共にいた、隆史が取られた…。

その敗北感にも似た感情だけが、私を支配している。

私の前に戻ってきた隆史。もうひとりのたかし。

…戻ってきた？

いや…戻ってきてくれたんだ。

腰が抜けた様に…地べたに座るに、やさしく頭を撫でてくれる。

私の前の隆史の後ろ…一瞬、みほと目が合った。

「……………っ!!!」

歯が軋む…。

痛い位に歯が軋む。

分かっている。この狂った関係は、理解しているつもりだ。

つもり…だった…。

「……………」

なら…私はどうしたらいい？

ドウシタラ、イインダ？

教えてくれ。

なんでもしてやる。

してやりたい。

してほしい。

求めて欲しい。

私を…求めてくれ。

私を……。

私を……。

…私も。

— アイシテクレ —

どのくらい？

沢山だ。

沢山……。

沢山……。

いっぱい……。

……。

口を細めて…しぼめて、吸う。

音を出すのが…聞くのが、隆史は好きだ。

舌を這わせ…裏スジと呼ばれる部分をナゾル。

もう一人の隆史が、催促をしてくれた。

ウレシイ。

求めてくれ。もつと…もつとだ。

もう一人の隆史も催促をしてくる。

すまんが、口は一つしかない。

むしやぶり、舐め、啜る。

右手で指も使いながらシゴク。

先から出てくる、苦い味…それが、どういった理由で出てくるかは、前回聞いた。

だから…非常にウレシイ。

せめてと思い、舌を使い、交互にしゃぶり、何度も往復を繰り返す。もう一人の隆史が、胸を大きく…強く掴んだ。

すぐにマツサージをするような手付きに変わり、先端をも舐り始める。

左右の隆史は、耳を…首筋を…そして、頭を交互に撫でてくれる。好きにしろ。

一度、言った。

全てお前のモノだ。好きにしろ。

「…んう…？」

隆史の息が、荒くなっているのに気がついた。

手が、私の頬をやさしく触れた。

ああ…なるほど。

すぐに真正面の隆史の手が、後頭部に添えられたので、確信に至る。もう少し、乱暴に扱ってくれても良いのだが…まあ、いい。

唇と口全体を窄める。

唾液を絡ませ、滑りを良くし…全てを吸い取る様に…吸う。

顔を引く時に、先端の突起部分に唇が掛かり、唾液と空気が混ざる音が、大きく鳴る。

「ふうーッ！ ふうーッ！ んっ!!」

ジュップ、ジュップ

…ジュブブツ…ブツブツ。

口元からは、卑猥な…音。

左右の隆史の陰茎を握っている、私の手をその上から隆史達が掴んだ。

痛くはないのか？ と心配になるほどに強く…。

促される様に、できるだけ早く…もつと…強く。

そろそろだ。

後頭部に添えられた手にも、力が入った。



ヂュツゴ！ ジュツゴ！ と、音が変わった。いや、変えられた。少し、もう少し、もつと早く、その手の力で分かる。ならばと、全力で頭を動かす…。

……。

いや…催促されたから…ではないな。

欲しいんだ。

早く。

欲しい。

早く。

早く早く。

もつと、もつと。

ゴツポ！ ゴツポ！ とまた音が変わった。

…そうだ。口の中で、亀頭…だったな。

それが膨らんだ…。

さあくれ……頂戴。

頂戴…私に。

…。

「あ…はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…」

さすがに、息が切れる。

しかし息をすると同時に、流れ込んでくる特有の香り。

まだ、少し足りない。

先端のその、更に先端。

舌を使いながら、残っているだろうと思う吸い出す…ほら、まだ合った。

左右の隆史には、顔…髪…。

正面の隆史には、口内…へと。

前回とは違い、信じられない程に濃く…大量のモノを吐き出してく  
れた。

余韻が…すごい…。

思考を邪魔をする程の、余韻。

頬を伝う、熱い液体…体液。

ドロリとした体液が、口元にまで伝ってくる。

匂い…味…何もかもが良い…。

そうだ。

もつと、くれ。

もつと、愛してくれ。

舌舐めずり…とでも言うのか…口元にまで来たソレを、舌だけすく

い取り…味わう。

指先にも…手にも…

「はあ…はあ…じゅつちゅつ…はあ…んんっ…はあ…」

はっ…はは…なんだ、その顔は？

みほも果てたのだろう。

だらしなく口を開け、舌を覗かせている。

背中を隆史に預け、全身の力が抜けている様だな。

抜かれた肛門から、大量の精液がこぼれ落ちているのが…少し…ウ

ラヤマシクも思う。

ふむ…目に少し力が入っているな。

私を見る目…。

正直、私と同じく詰まらない妬きもちでもしているのかと思ったが

…なんだ…その…。

羨望の眼差しは…。

私の周りに隆史がいるからか？ それもと、この今の私の姿を見てか？

このくらい、いいだろう？

私…は、ここまでだ。ここで終わり。

…体だけだ。

みほとは、違う。

…だから、この時だけは…。

「…っは…っは？」

囁かな優越感を妨害された…。

なんだ、隆史…。

朦朧とした意識の中、腕を掴まれ立たされた。

「はあ…はあ…」

誘導されるがまま、壁に手をつかせられた。

そうだ、みほの真横に…並ばされた。

みほも、荒い息を吐く中、同じ格好にさせられているな…。

虚ろな目をした、みほと…また、目が合う。

「んうっ!!」

いきなりゾクつ…とした感覚。

…同時に快樂が訪れ、まだ…いや、また私を慰めてくれる。

…隆史の舌が、私の秘部を愛撫する。

啜られ、舐められ…入って来た。

尻を左右に開かれ、秘部を関節的に広げ…その中に、入って来た。

ネチュツとした音が、また心地いい。

みほと一緒。

…イツシヨ。

お前は相変わらず、同じように…昔から…本当に昔から、変な所をみほと平等に、扱おうとするな。

「はっ…う…んっ!!」

みほも同じように、そうだ…私と同じだ。

入ってきたのだろう…。

隆史が、みほに…。

…。

こんな…顔。

今、私も…みほと同じ様な顔をしているのだろうか？

「ひゃアっ!?!」

うう…出した事がない…こんな声。

肺から強引に、酸素と共に強制的に出された…。

いきなり、激しく…腰を打ち付けられる。

奥に…一番奥にズシツとした重み…。

「あかつ……あ……うあ……」

……。

それだけで…軽く、果ててしまった…。

ゾクゾクと、全身を逆撫でされる様な感覚…そして高揚感。

たまらない…正直…今、隆史に触れられるだけで、どうにかなってしまいたい。

みほも同じく、背を仰げ反らせ、天を仰いでいる。

ビクビクと、肩…腰……脚…全身をヒクつかせ、声を途切れ途切れ出し喘いでいる。

「んあっ!!」

休ませてくれない…。

バツンと、音をさせる様に、腰を強く打ち付けて、動き出した。

グツチツグツチツと音を出しながら…いや、ワザと音が出るようにだろう。

腰骨を掴み、ゴリゴリと私の中をかき回す。

「まつ…まつてっ!! たかつ……んっ!! イったばっあああっ!!」

みほが、声にならない声を発している。

私も、そうだろう。

果てたばかりの敏感になっている体を、更なる快楽を与えられる。

舌を向き、舌を口から垂らし、よだれが地面に落ちる。

飛び散る……。

パン! パン! …と、肉を打ち付ける音。

その衝撃にですら、気持ちよさを感じてしまう。

…何度も打ち付けられる…。

打ち付けられる度に、頭の中を真っ白に塗り替えられてしまっている。

目の前には、いつの間にか、別の隆史がいた。

その、もう一人の隆史が、また私を求めてきてくれている…。

お尻…は、すまんがまだ怖い。

だから…口で…。

これでは、うまく呼吸ができないから、動きもうまくできない。

だから、好きに動いてくれ。  
好きに私を使え。

「んっっ!! んっっ!! んっっ!!」

前後から、突かれ…動かれ…二人の隆史が、私を味わっている。  
…体が隆史を求める。

まだ、後ろに隆史が何人か待っているからな…全身を使い、使い…  
もつと、体中を白液で汚してくれ。

みほが私を見てきた。

むっ…。

なにをする。

なにをしている。

「ず…ずるい…」

ボソツと呟くと、私の口を使っている隆史の体を掴んだ。

そのまま抱きつくくと、頭を下げ…隆史の睾丸を口に入れた。

ぬっ…。

それを見た隆史達が、みほに気を使ったのか？ 動きを緩めてし

まった。

ちよつと待て、隆史。

みほを見れば…味わう様に口を動かしている。

舌を覗かせ、遊ぶようにコロコロと唇…口…舌を使い舐め回している。  
る。

ならばと、反対側に口をつけると、空いた陰茎を余った手で扱きながら、私達二人で舐めあう。

「んっ…ふー…んんっ…ブッ…」

交代だと言わんばかりに、空いた陰茎に口を沈めた。

ジュルツとか…ブブツなど…何度も何度も…隆史に聴かせる為だけに音を立てる。

私の唾液で、ビチャビチャになっていた為に、滑りが良く…根元から大きく手を動かしていると…どのくらいしただろう？

舌を出してくれと頼まれた。

何度目だろうか…。

顔に出されるのが好きだ。

みほは、口だったな…。

気がついたら、みほの体が横にあった。

いや、体だけではなく頬がくつつく感触もある…顔を並べさせられた。

隆史が果てるのが、もう分かる。

ならば早く欲しいと、手を動かす速度を上げると、左右の手が私達の頭に添えられた。

クチュクチュと、陰茎を抜く際に出る、唾液を混ぜるような音。

その音が段々と早くなっていくと…。

「んんっ!!」

「…つつ!!」

溺れるのではないかと思うほどの量を、また貰えた。

顔中に熱い体液…。

鼻の奥を刺す匂い。

もつと欲しくなる。

後頭部に添えられた、隆史の手に力を入れられた。

それはみほも一緒の様だ。

口元に垂れ下がる精液を、横から奪うように、生暖かい感触。

「お…ねえ…んちゅ…」

「ん…」

そのみほと、ソレを奪い合う。

舌を絡め、口を合わせる。

みほの舌と私の舌。

絡み合い、奪い合う。

混ざりあい、なんとも言えない味がする。

「んんっ!!」

「んあっ!!」

みほと口で取り合いをさせながら、また激しく後ろの隆史が、動き出した。

快感に酔う、私達姉妹の顔を…その姿を、隆史が見下ろしている。

見ている…。  
見られている…。  
…悪趣味だとも思うが、構わない。  
見ろ…見てくれ。  
この味…この匂い。  
この熱さを、もつと感じたい。  
もつと…。  
もつと…。  
もつと…。



「スキル：タラシ」  
みほと、まほちゃんに対して、使ってみた。  
どうにも欲望を叶える…とも少し違うみたいだった。  
これだけ、全ての説明がない。  
…最後の奥の方にだけ、モヤが掛かったみたいにはっきりと理解  
ができなかった。  
様子で分かるだろうか？

姉妹を並べ…揃って見比べる。  
白い山が並ぶ…とても言うのだろうか…いつまでも見ていたいと  
思わせる程の強制力。  
後ろから責められて、口でするのは苦しいのだろうか…が、貪る様な  
貪欲さを感じる程、吸い出すような吸引力。  
「スキル：精子操作」で、いくらでも供給できる物を、何度でもみ  
ほと、まほちゃんへと打ち込んだ。  
膣内から、外部へと流れ出しているようがお構いなしに。

しかし、外だというのに……この乱れ様。集中しているのだろうか、少々落ち着かない。

「スキル：隠密」

まあ、人払いのこのスキルのお陰で、他人に見られる事はないだろう……がね。

認知変更と似ているが、街中の喧騒の中でも、人から分からなくなるスキル。

「スキル：催眠」

今回は、複数の俺……という、認識をずらす事だけにした。

みほも、まほちゃんも、俺が複数いると言う事に疑問なんて、もう持っていないだろう。

もう今は、全身に訪れる快樂という麻薬の様なモノに酔ってしまっている。

すでに正気……では、ないのだろう。

そして……催眠による、認知変更。

「スキル：催淫」は使用しないで、今回はコレを使用。

この催眠は、認知を錯覚させるというだけでも、十分に使える。

逆に、今回は分身を使っているが、他の男を俺だと認識させれば、今回と同じ様な状況を作り出せるだろう……が、絶対にしないな。

……他の男に、二人を触れられるなんて……冗談じゃない。

後は……他者に対して。目撃者……とかだな。

こんな状況を他者に見られた時、二人を別の誰かに認識させる……とかか？

これなら、露出プレイとやらの幅が、かなり広がる。

非常に使いやすい……応用もかなりできそうだ。

並べせた二人の尻肉を、更に左右に大きく揉み開く。

尻穴を大きく広げ、何度も出し入れされる陰茎が見える。いや見やすい様にもっと広げる。

前後から出し入れされ、すでに快樂しか感じていない、みほの恥穴。

初めは少し苦しそうだったが、慣れてしまえば後は、狂うように善がっていた。



ああでも、今回は、まほちゃんには「スキル：EXP」は、使用しない。

記憶を消すつもりは、今回ないからだ。

みほと同じく、徐々に慣れさせようか。

そちらは、その方が良いだろう。

だから今回の事は、最終的には、夢で終わらせる。

：一回目の時に、気を失ってしまったとでも、言っておけば良い。

非常にリアルな白昼夢を見ていたと、疑問を挟ませない様に「ス

キル：催眠」で、すでに済ませた。

だから夢だとしても、コレをしている記憶を鮮明に残し、脳内では夢だと思っても、体は完全には記憶させる。

積んだ経験を、しっかりと潜在意識に残してもらいましょう。

そうそう…。

：戦車関連は、ある意味で彼女達にとって聖域。

それは、まほちゃんは疎か、みほに取ってもそうだろう。

だから、戦車倉庫：戦車内では、俺は絶対にこういった行いはしない。

逆に、ギリギリで触れられるシチュエーションは、彼女達の現実、非現実の堺を曖昧…かつ刺激する。

人間、どこで背徳感が感じるか分からないモノだな。

人によっては、同じシチュエーションでも、嫌悪感しか持たないとかあるからな。

：と、「スキル：分析」で、分かった。

性癖、感度何もかもが、分かる。

後は、レベルというか何というか…そこら辺の事が数値でも分かるスキル。

そういった訳で今回は、今までのまとめ…集大成にして、みほとまほちゃんに対して接してみた。

催淫は使わず、あくまで素の二人が、どこまでの乱れ方をするかと試してみた。

一度、休憩だと…壁に体を預け、大きく息をしている二人を見て

思った。

：半端じゃなかった。

特にみほよりも、まほちゃん。

底なしと思える程だ…。

次は？ と、妖艶だと言いつける様に見える光を放った目で、休憩中だとい

うののに、催促をする様に俺を見ている。

みほは、現在、感度が最高潮だと言っていていいだろう。

何をしても良い声で、鳴いてくれる。

ここまで、快楽と快感に弱いとは思わなかった。

「スキル：分析」で、更に判明。

現在、淫乱状態。

ここまでの状態になるには、俺が絡んでいないといけない…というのが、条件との事。

…いや、まあ。

普通にそれが嬉しくて、手加減しなかったのだけ…まさかここま

でとは…とも、思いました。「スキル：催淫」

アレは、まずいな。

まず…乱交も露出も、全ては演出。…俺の管轄内では絶対にしない。

しないが…女性に対して、強引にスキルを使用し、催淫レベルMAXにしてしまえば、そっち系に置いてどうなるか分からん。

あのスキルは、この手に関して、本当にまずい。最初にして、最悪のスキルを発見してしまった気分だ。

途中、服装を変えてみた。

「スキル：召喚」

二人揃ってお揃いの…パンツァージャケット。

そういえば、みほの…生でのその姿を見るのは、初めてだな。

もう袖を通す事はないと思っていたけど、ある意味ですごい状況下で、これを着たなあ…。

黒森峰のパンツァージャケット。

闇堕ちした、みほりんには見えねえ…。

しかし、意外にも真っ黒というのは、みほに似合うな…。

その黒い服装に白は、反対色の為に、コントラストが強まり…白が良く映える。

ワザと、服に掛けてしまったくらいだ。

赤いスカートを捲くり、腰を前後に動かしているみほ。

繋がっている部分を見せてくれ、たとえば…スカートを捲り見せてくれた…。

その姿を見られているという状態が、また更に、みほを興奮させている。

いや…エロいのですが、この淫乱状態にさせると、恥じらいが薄れてしまい、躊躇してくれないのが、寂しいかと思ったのは…贅沢なんだろう。

…頬に亀頭を当てると、顔をそちらへと向け、そこに口と舌を這わせ、飲み込む。

下品な音を立て、陰茎周りに、舌を回すように飲み込んでいく姿。

先程まで夢中になって、口淫をしていたもう一つの陰茎を、手淫に切り替え、両手を使い絞り出す様に刺激する。

捻る様に顎を、自身の腕の上に持つてきてたその姿。

そして上目使いで見上げるその目を、もつと良く見たいが為に…前髪を上げると、心地良さそうな顔をするのだが、こんな場所でのその表情は、更に俺を掻き立てた。

何度か息継ぎの様に、一度口を離し…再度すぐにむしゃぶり着くその姿。

前回の男子トイレでもそうなのだから、何人もの俺を同時に相手にさせても…即座に対応していた。

携帯で動画を撮って見て、そのままみほに見せてみる。

笑ってるんだよ…囲まれ、一斉にぶっかけられたとしても…薄ら笑ってる。

その動画を見始めた最中…呼吸がどんどんと荒くなり、もう一度と

…周りの俺を貪りだした。  
ずつと、俺の名前を呼び続けて…。

……。

淫乱状態のみほ…。

……。

完全にタガが壊れた状態。

このみほの淫乱状態。

これが「スキル：タラシ」の影響かは分からないが…気持ちだが、一定のボーダーを超えると、体の感覚を全身に張り巡らせているかの様に、何をしても…それこそ、最終的に触れただけで絶頂を迎える。普段のおっとりした感じからの、この乱れ具合のギャップが…。まほちゃんは、やはり凄まじい程に貪欲。

今までの事が祟ったのか、俺を物凄く求めてくれる。

効率よく、全員を刺激し…イカせるタイミングを合わせようとするのが、感じた。

少しジャケットを開き…胸を露出させると、狭いスペースで押し出された胸の肉が、更に彼女を突く度に、震え…羽揺れる姿が思い出す。まほちゃんは、とにかく掛けられるのがお好きみたいで、何人かに一斉に出されると、歓喜に震えたような目と顔を…：表情をするんだ。

……。

………。

さて…そろそろ、だな。

「スキル：リフレッシュ」を使用し、体液で汚れている彼女達を全て綺麗にする。

すでに分身は消していた。

いや、正確には、みほとまほちゃん二人に対して…つて事で、一人だけ残して置いたのだけだね。

ヘタリ込んでしまっている二人を持ち上げようと一瞬だけ顔を近

づける：即座に二人から、口を吸われた。

好き好きだと、言ってくれ、夢中になって唇を吸い続けている…。

…なに、この可愛いのに。

……。

取り敢えず、完全に腰を抜かしている、まほちゃんをお姫様だっこ  
…いや、久しぶりにやったな。

そのまま：そうだな。取り敢えず：乗ってきた軽トラに運ぼう…。  
持ち上げた瞬間、首に手を回され、更に口を吸ってきた…。

「まっ：待ってっ!! 人目に付くからっ!! 後っ！ 後で!!」

…こんなセリフ吐くとは。

みほは…このまま。

そんな二人を見て…：ゲスなスキルを発見：いや、制作してしまっ  
た。

俺のスキルとやらは、正確には複数あるだけ…という訳ではないよ  
うだ。

想い描いたモノをスキルとして、文字通り制作できるらしい…。

《スキル：利尿作用》

《スキル：淫夢》

《スキル：性癖付与》

《スキル：精神操作》

……を、会得した。

んっ？ 精神そ…：マインドコントロールっ!?

…ど：通りで、みほは、俺とまほちゃんが口を吸い合う事に関して  
何も言わなかった訳だ…。

多分、使ってたな…これは。

エロい事限定だとはいえ、このスキルって、危険な気がする。

男にも有効：だしな。

「……」

…あれ？

これって、ひよつとして…七三とかに対して、強制的にセクハラ行

動起こさせて、社会的に追い込めないか？

……。

……………後…。

「……………」

ま…いや。ソレは後で考えよう。

…次だな、次。

さて…まずは、目の前のみほだな。

【スキル：性癖付与】  
使用。

そして…。

【スキル：タラシ】

…遠隔使用。



特に何か用があった訳でもないのだけど、自然とこの場所に足を運んでいた。

戦車倉庫の建物の周り…特にこんな裏手なんて、普段なら来る事なんてないのにも関わらず。

一度、中へ入り、特に誰もいないのを確認すると、どこからか声がした…気がした。

なんだろうと思い、本当になんでこんな裏手なんて探したんだろう…。

…やめておけばよかった。

『はっ！…はっ！…はっ!!』

に…西住さん。

思わず口を両手で、覆うように隠してしまった。

すぐにしゃがみ、様子を伺う…。

ズリズリと足を地面に剃りながら、少し近くに寄ると、その全貌が分かつちやつた…。

戦車倉庫の壁に手を付き、片脚を挙げられ…見た無い顔をしながら、肩を震わせていた。

ひ…秘め事…って、ヤツなんだろうけど…学校でって…。

大胆というか…何というか…。

ちゆ…注意をした方が絶対に良いんだろうけど…無理。

うん、無理無理！

こんな中で、違うつ！ こんな最中に割り込むなんてできないよつ  
!?

…で、出来るわけがない。

ど…どうしよう。

は…はじめて…みたあ…。

喘ぎ声…という声なんだろう。

普段の西住さんから、想像もできない、激しく…上ずった声…。

『あつ！ あつ！ あつ！ やつ!!』

シヨック…というのものもあるけど…、なんで西住さん、パンツァー  
ジャケット着ているんだろう？

てっ…違うつつ!!

う…あ、後…。

『あつ！ あつ！ あつ！』

痛くないのかな？ って思える程の強さというか…なんというか  
…。

うう…頭がうまく働かない…。

『みほ』

『フツ… ふあつ!! な…に…い…んつ!!』

二人の会話が聞こえてくる…。

思わず、隠れちやつたけど…それなりに離れているのに、なんで…

？

『この格好だと、一番奥にまで入るな』

『んっはっ！ 恥づっっ！！ かっ！！』

片脚を挙げられているから、体がこちらを向いている…。

西住さんの…その…女性の部分に、男性のアレが…その…すっごく良く分かる位に、丸見えになってしまっている…。

アレ…痛くないのかな？

女性の部分が、大きく広がって、隆史君の…アレ…あ…ああ…アレも初めて見た…。

赤く充血して…グチュグチュと音を出しながら…テラテラと…光ってる。

…な…なにを事細かく見ているんだろ…。

心臓が今までの人生で、一番早く動いてる気がする…。

脈を打つ音…というのが、はっきりとわかるくらい。

……。

『…位置的に…誰か来たらと…そいつにの目には、真っ先に、みほのこの姿が目に入るな』

『んんんっっ！！』

……。

『…一瞬…すぐく締まったけど、えつと…何？ 期待した？』

『ちがっ！！ んんっ！！』

……。

…熱い。

逃げないと。

やめさせないと。

…見ちゃダメ。

色々な気持ちだが、ごちやごちやと…。

『いや、でもなあ…』

『ちがうか…らああ！！ あっ！！ あっ！！』

なんでだろう…？

やっぱりと、確信させられて、見せ付けられる様な気がして…すこ



くシヨツクなんだけど…。

目が離せない。

バチユバチユとした肌と肌が当たる音が響く…。

「…う…ぐっ」

ゴクツと、自分の喉が鳴る音…。

大きく動き続ける、隆史君。

動き、肌が当たる度に、西住さんが喘ぐ…。 あえ…。

『はっ…あああ…』

ズルズル…つと、隆史君の…その、男の人のモノが、ゆつくりと抜かれていく。

抜かれると、西住さんの体もゆつくりと伸びていき…ため息に似た長い息を吐いた…。

お…大きい…というか、太く…て、な…長い…。

女性の体の中に、あんなものが…アレ……入るの？ え？

あれで、全部じゃ…え？

「っ!」

パンツ!

『ふあっつ!』

…と、勢いよく今度は、西住さんの中へと全て一気に収まった。

全部飲み込んだ瞬間、西住さんが仰け反った…。

「カツ…はっ…あ…う…」

仰け反った体が、ビクビクと痙攣を繰り返している。

目を見開いて…口を大きくあけて…。

その姿なんてお構いなしに、隆史君が、グチグチと…また粘着液の様な音を出しながら、小刻みに動き出す…。

「んっ! んっ! んっ!」

今度も動きに合わせて…西住さんの声が、小さく響く…。

……。

どのくらい経ったか分からないけど、そのまま見続けてしまっている。

男女の行為…。

見ている…見続けてしまっている。

ずっと…ずっと…。

…。

それほど、集中してしまって…見てしまっている。

大きく動く、西住さんの体…。

アツイ…頭の中が、溶けてしまうかと思うほど…熱い。

……………。

…動く…。

「はあ…はあ…んっ…」

はっ…はっ…と、気がついたら、呼吸が…自分の呼吸が段々と早まっている。

熱い…顔が…頭が…喉が。

「んっ…」

響き続ける、西住さんの甘い声が、すっごく耳に刺さる…。

あんな声って…出るものなんだ…。

当然、こんな外で、恥ずかしいのだろうけど…西住さんは、特に逃げようとか…拒否しようとか、そういった感じはない。

なにを言われても…なんだろう…？

喜んでいる様にしか見えないって…思えるのは何故だろう…。

指の先に下着が当たる…。

布の感触が、湿り気を含んでいった…。

…気がついたら…私は私を…。

『麻子に覗かれた時に、癖にでもなっちゃったか？』

『ち…んあっ！ はっ!!』

冷泉さん…？

覗かれた…。

とんでもない事を聞いた気がする…というか、現在進行形で、見てもいるよね…。

西住さんは、否定しようとしているのだろうけど、喋ろうとすると、

隆史君が強く動いてい邪魔をする。

…様に見える。

あー…。

隆史君、変態さんだからなあ…。

恥ずかしがる女性見るの好きだしなあ…。

「あ…はあ…はあ…はあ…」

…指先が熱い。

変な事を考えていても、動きが止まらない。

壁に背を付け…背を丸め…あつ…。

オカシイな…。

体の変…。

熱い…。

本当にアツイ。

ゾクゾクとした感覚が、下から上へと這い上がってくる様な感じがする…。

こんな事…こんな所で…と、どこかで自製の念が出るけど…それでも、頭と目だけは、彼達に向けてしまっている。

指先に体温が…。

やめようとも思えない…いや、やめれるとは思えない…。

「んっ…ふっ！…ん…っ」

無意識に、自分の声が出ないように、スカートを口に咥え…開脚し…自分を慰めてる…。

…。

…。

私…ここ…お外なのに…。

西住さんの胸を隆史君が、空いた手で揉み上げる。

…自分の手で、自分の胸をも見上げた。

西住さんの乳首を、隆史君が摘む。

…自分の乳首を、自分の指で摘む。

残ったもう一つの手が…。

『…そろそろ』

『はっ！ はっ！ んっ!!』

な…なんだろ…。

隆史君の動きが早くなった…。

同じく、自分の指が早くなる。

下着の横から、秘部を人差し指と中指で、上下に何度も何度も…。

『みほ』

『んふっ!! なっ、にっ!? 私も、い…』

んっ…はあ…。

ああそうか。そういう事か。

彼は…。

彼の呼吸が、荒くなっている。

パチュバツチュと、音も動きも何もかもが、早く…。

自身の下からも、グチュグチュとした音が響く。

響く…。

段々と、こみ上げてくる…感覚…。

…私も…。

『さつきから、覗かれてるの気がついてるか?』

「つつっ??  
!!??」

『つつつなうう???!』

し…心臓が止まった気がした。

血の気が下がるとは、こういう事なんだと…変に冷静に頭を過る

…。

スー…と、体を支配していた熱が下がっていく。

『っ!!』

『んんっ!!』

隆史君が、腰を密着させ…ビクンと、体が大きく跳ねた。

西住さんが、ビクビクと小さく痙攣を繰り返していた。

…それでも脚を下ろさない状態で、しばらく動かない…。  
…驚いて、イケナカツタヨオ…。  
色々なモノが引っ込んでしまった…。

『や…はっ…あう…あ…はあ…ああ…』

二人揃って、口で息を吸い…呼吸を何度も繰り返している。

繰り返し…繰り返し…。

段々と呼吸が収まってきたんだろうな…体の動きが落ち着いてきた…。

わ…私も…びっくりして…声が出そうだった…。

『…最後…見られながら…というか、その言葉で最後、いったな？』

『っっ!!』

西住さんが、真っ赤になりながら、まだ息を粗粗しく繰り返している。

呼吸が荒く、返事ができないのか…それでも、少しも否定的な声を発しなかった。

その顔は、前髪に隠れて、良く見えない。

見えないけど…。

口だけは、はつきりと見えた…。

…口元が…。

笑っていた…。

『…あ…はっ…はっ…はっ…』

ニゲナイト。

隆史君の男性のモノが、西住さんから引き抜かれた。

抜かれた瞬間、大量の…その…白い液体が、ボトボトと溢れ出てきた…。

ブチュツとか…ブビツとか音を立て…って、なんで私は動けないのだろうか？ しっかり見て聞いているし…。

…逃げないといけなのに、目が離せない…。

『ま。嘘だけど!!』

隆史君が、少し大きな声で言い切った。

『……………』

「……………」

……………。

う…そ…?

え…?

嘘っ!?

……………。

……………。

一度、その行為が済んで、嘘だと言った隆史君が、服を…というか、ズボンを履いた。

その横で、西住さんは、服を正している。

『…なんで、私…ジャケット着てるんだろ…?』

私が聞きたいよ…。

はあ…。

全ての行為が終わったのだろう。

周りの空気が、通常に戻り、私も私で服装を正した。

ゆ…指がベチャベチャ…下着を履くと、冷たい…。

うう…。

「……………」

な…なんて事をしてしまったのだろう…。

で…でも今、すぐに動くと、まだバレてしまいそうだから、身を隠していよう…。

うう…完全に、傍から見ても何時もの二人に戻ってた。

ほら…西住さんが、隆史君に恨みがましそうな目で見上げてる…。

『…隆史君…は、意地悪をすぐに言うよ…』

真つ赤になつた顔は、まだ戻らないなあ…西住さん。

そんな、隆史君は西住さんに何時もの困つた様な顔で…

『ほ…ほら？ 俺つて変態ですか？』

『そうだね』

そうだね。

『……………』ソクトウ

『はあ…もう……。時間も時間だし…私、先に帰るね？ 一緒に帰ると、間違いなく華さんに何か言われそうだし…』

『い…言われるだろうなあ…絶対に、俺が睨まれる…』

『……………』

『…みほ？』

『なんで、私…こんな所で寝ちやつたんだろ…疲れてるのかなあ…』

『……………』

『…へ…変な夢見ちやうし…』

『ほう？ 詳しく』

『……………』

『……………』

『ぜ…絶対に嫌！』

背中をこちらに向けているから、西住さんの顔が見えない。

でも絶対に顔を真つ赤にして言っている言い方だよ…アレ。

向かい合っている隆史君の顔が、ニヤニヤしてるし…。

でも、よりよつて、ここで寝ていたつて…。

まあ…うん。多分、先程のが本来の目的だったんだらうなあ…。

…彼女には、少し休んでもらつた方がいいかな…無理させちやつてるからなあ…。

『俺は、ちよつと寄り道して帰るわ…時間もずらした方がいいだろ？』

『う…うん。でも寄り道？ どこ寄つてくの？』

はあ…私も帰らう…。

あの二人はもう、帰つちやつたし…私だけ何しているんだらう…。

『生徒会長室』

『え？ まだ何かあるの？』

……。

え…

『ああ、柚子先輩にちよつと用があるんだ』

『小山先輩に？ でも、会議から結構経つよ？ まだいるの？』

『ああ、いるな』

……。

『…ちよつと、今回の件で聞きたい事があつてな？』

『今回??』

………。

…

見てる…。

すごい、こつち見てる…。

う…そ…。

心臓の音が、更に早くなった気がした…。

『…柚子先輩なら…絶対にいるだろうよ』

『うん?』

嘘が……。

……嘘だった。



『それは、それとして…隆史君』

『はい?』

『……下着……返して』

『嫌どす』

※ルート IF※ ルート・ノンナ

——胡散臭い。

最初：それが、彼への印象でした。

それは、そうでしよう？

初めて彼に会った日。

この男は一体、カチューシャに何をしたのだろうか？

少し離れてしまった。

それだけだというのに、その間に会った男に対し、あのカチューシャが、字名を付けて呼んでいたのですから。

初めは、知り合いなのだろうか？ と、すぐに思いましたが、話を聞く限り初対面。

その時の、カチューシャと彼との会話内容までは、私には教えて貰えなかった。

その為すぐに：『思慮深いカチューシャが、こうも簡単に騙された』と：今では失礼な話ですが、その考えしか浮かびませんでしたね。

私と別れ、あの様な人が行き交う場所で、たった一人でいた：不安気な彼女に対して誑し込んだ男。

：弱った少女に、漬け込んだ詐欺師。

確信地味た：そんな失礼極まりない考えを信じて疑わなかった。

敵意を持って応えていましたね…。

「……………」

…うっ。

初対面の彼に対し、一挙一動に目を配り：警戒をし過ぎた為に、逆にあの時の、彼との会話がよく思い出せない…。

すぐに別れる。もう会う事はないだろう。と：警戒心と共に、安堵にも似た気持ちもあった。

そして…さつさと、彼女をこの詐欺師から離す事しか、頭になかったからでしょうか？

会話は覚えていないのですが、あの時に警戒して、彼を見ることだけに集中していたからでしょうか？

その時の彼の顔は強く記憶に残っています。

少し、拗ねた様な顔。

…初めは、カチューシャをどうにかしようとしていた所、私に邪魔されたからか。…と、思っていたのですが…まあ…はい。

出会い頭、いきなり蹴飛ばしてしまいましたからね…当然ですよ…。

全体重を乗せて、思いつきり殺す気で蹴りましたからねえ…はあ…。

「カチューシャ」

しかし…後日。

カチューシャが、あの店へ…彼に会いに行くと言った時は驚きました…。

「なによ。黙って歩きなさいよ」

何故でしょう…そんな古い事が、私の頭の中で、浮かんでは消え、浮かんでは消え…を、繰り返しています。

古い…ですか…。

出会って、まだ一年も経っていないというのに…。

明かりの少ない、夜の道…。

普通なら、そんな場所、足元の地面が暗く、見え辛いというのに、妙にはつきりと…鮮明に見えます。

自分の思った…出会いという言葉に、対し足が止まってしまった。

先程から、ジャリッ…つと、石を踏む音が、妙に耳に残る。

「…もう、泣かないのですね？」

出会い…ですか。

その日から…全てが変わっていった。

そうですね…人との繋がりが、一番でしようか？

ええ…特に、港町の方達との関係が、大きく変わりました。

私達、プラウダ高校の拠点…青森港。

拠点だというのに居心地が悪く、余り長居をしていなかった、場所。

学園艦が港へ着港する度に、戦車の移動や何やらで、漁や市場の運営の邪魔をしてしまう等、疎まれているはずの私達。

…その仕事の邪魔をしてしまっている筈の、私達…戦車道の試合を、港町の方達が応援をしに来てくれる程に。

初めての時は、その応援団に戸惑いました。

なぜ？ とも思いました。

先導する彼が見えた。

…この頃は、特に気にもしていなかったのに、その姿を見た時に…変に納得をしてしまったのを覚えています。

大漁旗やら、何やら…大凡、その場に似合わない物を携えてましたね。

「さっきから泣いてないわよー！」

次第に、港付近を歩くだけで、無視をされていた頃と違い、声を掛けられ…笑いかけられ…。

戸惑いはしましたが、居心地の良さを感じ始めてた頃…それもまた、彼の行動による事だと分かると、また印象が変わっていった。

その頃には、カチューシャは彼にべったりでした。

青森港へと着港すれば、すぐさま彼の元へと赴き、慕う。

そして、気づいた。

そんなカチューシャを見て、気がついてしまった。

自身の恐怖心に。

疑い：考え、彼を探る。

探れば、探る程：その行動に疑問を持ち、胡散臭い印象が、薄気味悪い：と、変わり…。

やがて最後には、彼が怖くなった。

調べれば、調べる程：彼への恐怖心が高まった。

「泣かなくて、良いんですね？」

そして…

—— 思い出す。

「…っ！」

思い出してしまった。

初めて、彼に詰め寄った：感情的になってしまった、あの時を。

思い出す。

… 思い出す。

… 思い出す。

先行して歩く、小さな背中を見ると、更に思い出してしまう。

「さっきから泣いてないわよー！」

止まらない。

吹き出し… 溢れる。

今までの事が、それこそ走馬灯の様に駆け巡る。

彼がしてくれた事：与えて、築いてくれた事…。

大事な事。

嬉しかった事。

感謝したい事。

山の様にある…。

「…ちよつと黙ってなさい。今、何も話したくない」

しかし、あの時の…。

…彼に詰め寄った時を、思い出してしまつたら…思い出の全てが、違う色に塗り替えられた。

あの時、あの場所で。

ああ…胸ぐらを掴んでしまった…。

嫉妬なんかで、身元を調べ…挙句、ヒステリーまで起こし、強く…

詰め寄り…困らせた…。

最初で、最後でした。

あの…時の様な、顔をさせてしまつたのは…。

困った顔をして笑っていた。

そんな私に。

それなのに私に。

…こんな、背が高いだけの無粋な女に。

「カチューシヤ」

貴方は『可愛い』と、言ってくれた。

毎回、着港する度に、出迎えてくれた。

毎朝早いというの…無理をして、会いに来てくれた時もあった。

あの日も…

あの時も…

「…なごよ」

お茶会。

あの最低な…お茶会。

…好きだと言ってくれた。

「私は…ちよつと…ダメかもしれない…」

食いしぼる齒。

盛り上がる頬の上を、熱い線が引かれていく。

—考えてしまった。

いない。

もう…いない。

帰る度に出迎えてくれた、あの場所に。

…ここから学園艦へと戻れば…。

もう…彼は、いない。

だから……ダメかもしれない…ではなく…。

「何が…」

ダメだった…。

どうしようもない。

顔が熱く、鼻が熱く…目が熱い…。

頭の中が真っ白で…何がなんだか、分からない。

グチャグチャになる程に渦巻く感情…。

私の中が、どうしようもなく、此処まで、おかしくなるとは思わなかった。

多分…色々な思いが、湧き上がってしまったのだろう。

…が、それが上手く、判別ができない。

怒り…悲しみ。

寂しさ…。

何をどう制御したらいいか、分からない。

こんな気持ちは、生まれて初めてだった。

体の一部が、無くなったような…胸の奥の大事な部分が、砕け散って無くなった…そんな…。

…喪失感。

頭の中が、沸騰しそう。

その反面…胸の中は…痛く…穴が空いたかの様に…軽く…。

何も無い。

何も感じない…。

空虚。

その…一言。

段々と、身体にも熱が入っていく。

手を握り締め…肩が上がり…。

ただ…彼女には、こんな私の姿を見せたくない。

せめて顔を見せまいと、強引に下を向く事くらいしかできない…。

…前を歩いている、カチューシャに対して…。

「……………ま、たまには、いいんじゃない？」

たまには…？

何を…言って…？

言われた瞬間、込み上げるモノを、無意識に押さえ込む。

口端を釣り上げ、食いしぼる歯に更に、力を入れる。

「っっー」

瓦解する。

…無理です。

その言葉は…無理…。

声が出そうになる口を、手で押さえつける。

…喉が、熱く動く。

肺から空気が出てくる。

私の意志じゃない…。

「っっー！ ……っっっー…」

唸るような…音が、喉から漏れる。



…体上から、抑えられつけられたかの様な重圧を感じた。  
全身の力が抜け落ちたような感覚。

膝が冷たく…痛い。

小石が、肌を刺す。

目に映る地面が、妙に近い。

…暗くとも、はつきりと分かる地肌。

「……………」

カチューシャの顔が、私の顔の横にあった。

今更、近づかれた事に気が付くなんて…。

首の周り感じる、カチューシャの腕……………頬…。

暖かい…暖かい……………。

「……………」

耳元から、小さく聴き慣れた声が響く。

「…馬鹿よね…タカー…隆史」

「……………」

…。

……………。

頭が、真っ白になった…。

……………。

……………。

…時間の感覚なんてない。

どれくらい経ったのだろうか？ ……とも、思わない。

ただ、思い出す。

繰り返し…繰り返し…何度も。

思い出す。

……………。

忘れないように…忘れないように。

そして、結局は最後にたどり着くのは、あの「最低なお茶会」。

…。

人生で…初…の。

…。

喉が熱く、口が熱い。

熱く…熱く…。

「……………」

無意識に、唇を指でなぞってしまおうと…ひどく濡れていた。  
拭う様に、更になぞる。

そうだ。

今更、誤魔化しても仕方がない。

私は、彼に惹かれていた。

…。

これも誤魔化している。

…言い換えよう。

私は…彼が…好きだ。

ええ…好きです。

どこがと聞かれれば…正直、言葉に詰まってしまうと思う。

しかし…仕方がない。

理屈では、ないのだから…。

…こんな気持ちは、初めてだった。

初恋…なのだろう。

…。

その人が、いなくなる。いなくってしまう。

彼は年下だ…。

私の方が、先にいなくなる筈だったのに…。

それでも。

それでもと、後一年は、猶予があるとどこかで安心していたのだろう。

私達：私は、3年へと上がり、卒業してしまうまでの最後の1年で…と、思っていたのに。

……。

思い出した。

また、思い出した。

へりを貸してほしいと…突然、土下座までした彼を。

地面に頭を打ち付けて、大声で…切羽詰まったかの様な、余裕のない姿。

しかし、その姿を、情けなくなんて思わなかった。

また、誰かの為に、頭を下げている彼を情けないとは、思わない。

…自分のプライドも、何もかも捨てて…。

……。

この人は、私の為だとしても、ここまでしてくれるだろうか？

…多分、彼の事だ。…してくれるだろう。

してくれたら、嬉しい…。

しかし、それは憶測の話。

そう…憶測。

そんな彼を見て、引っ掛かった。

引っ掛かってしまった…。

これは、誰の為？

今彼に、ここまでさせているのは、誰の為なのだろう？ …と。

すぐに思いついた。

出会った時から、毎回毎回……毎回毎回…学園艦が戻る度に聞かれる人物。

結果は少し違いましたが…誤差の範囲だろう。

……。

即座に、浮かんだ。

…誰の為？

それは、他の女の為。

「……………」

他の女…。

その一言を思い浮かべれば…：思考が、一気にクリアになった。  
切り替わる…：音を立てて…：一気に…。

それと同時に、腹の底から湧き上がる…：熱。  
物凄い…：熱量。

気持ちが一瞬で、切り替わった気がする…。

「カチューシャ」

「…なに？」

黙って、抱きしめてくれていたカチューシャへと、ここで漸く声を  
掛けられた。

少し、気持ちが悪く落ち着いた…：ともいうのも、あるだろう。

いや？ この変わった気持ちの為だろうか？

悲しみ。

喪失感。

そして…。

明らかに…：別の感情が、湧き上がってきているのを感じる。

…いえ、感じますね。

ええ、頭の中が、妙にスッキリとしてきました。

「…何故でしょう？」

「…？」

そうですね。はっきりとわかります。

これは…。

この感情は…。

「私…物凄く…：腹が立ってきました」

「はっ！」

…怒りです。

「…ムカムカしますね。なんででしょうか？ 過去…ここまでの怒りを、感じた事ありません」

「…えつと…え？ ノンナ？ え？」

「ああ、後…ありがとうございます。カチューシャのおかげで…大分、落ちつきました」

「あ…はい。いやいやっ!? なんで、ノンナ笑ってるの？」

ええ、自然に頬が引き吊ってますね。

ええ、仕方がないと思うのです。

「カチューシャ」

「なに…よ」

「すでに、我が校のへりは、目前ですね？」

「そ…そうね」

待機させていたへりの影が見えています。

一気に現実へと、引き戻された気分ですね。

何故かカチカチとした音が、私の中より鳴り響いている気がします。

総合的に、思い出す。

言いて、妙ですが…全体を鑑みれば、しつくりきますよね？

ですから、はつきりと…確認をする意味を込めて、引っかかった部分を出しましょう。

「その我が校のへりを借りて？ …あの男は、態々？ 他県にまで他の女に会いに行った…と、そういう事ですよね？」

「なによ、いきなり…。それに女って…。あの時タカーシャ…誰とは別に、言っでなかつたじゃない…」

そうですね。言っでいませんでした。

大切な家族？ そう言っでましたね。

はっ！ どうせ、西住姉妹のどちらか…なのでしよう？

そこで…その赴いた先で、何かあったのでしょうか？

試合で何度も、あの姉妹は見た事がありますか…。

姉……妹……その両方？

隆史さんが、あそこまでして動いた……動かせた。

そして繋がる、今回の転校……。

躊躇せず頭を下げ……体を張ってまで……現在の生活……を……捨てて

……。

……捨て……。

そこが……その部分が、途轍もなく……。

……。

「あの……男……人の唇……奪っておいて……」

「ノンナっつ!？」

「カチューシヤ。隆史さんはプラウダの学園艦が、次回着港する前に、転校すると言っていましたね？」

「え……ええ。そうね……」

……詳しくは、後で聞きましょう。

連絡はしてくれろと、言ってくれてはいましたが……転校先とかは、教えて貰えませんでしたし……。

それはつまり、事後報告で済まそうという腹積もりなのでしょうかね？

……私の初めて奪っておいて、そこら辺は誤魔化すとか……。

……。

少なくとも、あの前後で、私……の気持ちも多少は汲んでくれていると思っていたのに……。

ここまで……こんな感情にまでさせておいて……。

あつさりど、どこか行くとか……。

しかも、電話だけで、済まそうとするとか……。

……。

「ああ……腹立たしい……」

「ノ…ノンナ…?」

…湧き上がる、もう二つの感情。

一つ目は、不安感。

焦り…が、私を突き動かそうとしています。

学園艦で移動を繰り返しているとはいえ…連絡は頂けるとはいえ…。

他県への引越し…転校。

簡単に会う事なんて…それどころか…最悪…もう…。

アエナイ。

「……」

いえ…。

最悪、またへりでも学園艦でも動かせば、それはいいです。

それ以上に…あの姉妹。

西住 まほ、みほ。

火を見るより明らか…ですね。

前から、彼の話聞く限り…あの朴念仁は、気が付いていないでしょうがっ…!!

完全にツ!! …友人以上の感情を、彼に抱いているでしょう。

信じられません、あの鉄の女とまで揶揄されている…西住 まほ

…さんですら…。

「それに今回は?! 県を跨いでまで?! 会いに行っていたらしいですし?!?!」

「えっ?! なにツ?! 今度はなにっ?!」

「言いませんでしたけどね?!」

「いきなり叫ばないでっ!!」

憶測ですよ憶測!!

「まあああ…そうに…決まっていますでしょうけど…おっ!」

「…ノンナのこんな顔、初めて見るわ」

…なにいが、大切な…かぞ…つつっ!!!

腹の底から、声を出した気がします。

そんな彼が…姉妹、どちらかの為に…。

自分の為だけに、そこまでした彼が、目の前に現れたとしたら…。

「……ッ」

「ノンナ…？ 今度は急に、ブツブツ…言いだした……」

…加えて、私は手が出せない。

このまま、ただ…何もしないで行かせてしまえば…。

…。

この考えは、脳内が揺さぶられる感覚…に陥りますね…これは…。

「……」

…さて。

切り替えましょう。

今は、現状を…どうするか…。

「……」

決まっている。

もう、恥ずかしがっている場合では、ありません。

こちらも捨て身にならないければ、全てが終わってしまう。

…捨て身…。

「…っ！」

顔が、一瞬にして先程と似た熱で覆い尽くされました。

目の周りが、熱くて仕方がないですね…うう…。

しかし、拱いていても仕方がありません…。

出来ることは…行動です。

ええ、この怒りは、彼にとっては理不尽かもしれませんが。

理不尽かもしれませんが、あの朴念仁に責任が、一切ない訳ではあ

りませんね！、

が…何も、行動を起こしてくれなかった彼に対して、私も行動をし

ませんでした。

だから…行動。

「カチューシャ。私は、一度…彼に、もう一度、会ってきます」

「は…？」

そうです…行動です。全ては、動かなければ、始まりませんし…終わりもしません。



時間がない…。

「…拉致行為の一つでも、してみましようか？」

「えつと…え？ ノンナ？ なにを言ってるの？」

…残された、時間を取り敢えず聞いて…明日は、土曜日…。

まずは…いえ、取り敢えず、場所の確保…。

「それで…ですね？ カチューシャに一つ、言っておく事があります」

「…聞いて？ ねえ、聞いて？ 私の話を聞きなさいよ…」

「ふふっ…言い方が、隆史さんみたいですよ？」

「なにを、和んでいるのよッ!!」

さて…このカチューシャも、可愛らしくて良いのですが…本当に、時間がありません。

あの店にまだいると思いますが…時間が時間ですので、彼が寝てしまふ可能性もあります。

一応、腕時計で時間を確認すると…24時を回った頃ですね。

早寝、早起きの彼ならば、ヘタをすれば、もうすでに…。

…。

ま、問題ありません。

叩き起こしましょう。

そして、湧き上がった最後の感情。

…いえ？ 最初の感情とでも言うのでしょうか？

「さて、カチューシャ。貴女は、御存知ないかもしれませんが…」

「さつきから、なにを…言ってるの？ ノンナ…一体、どうしちやったのよ…」

先程から私を見上げている…で、あろうカチューシャ。

申し訳ありませんが、すでに私の目には、これから戻る、暗い夜道しか見えません。

湧き上がる、この想い…情念…。

どうにも…普段の私を知っている方からすると、私は感情の起伏が

乏しいとか、思われているようですが…。

先程から渦巻いている感情からして…そんな事は、決してありません。

ええ…そうですね。

過去に一度、ありました。

ここまでの私を、引きずり出したのです。

そうです。また…引きずり出されました。

「私は…ですね？ カチューシャ」

はい。覚悟が決まりました。

ええ…すでに、行動を決めてしまったので、必然的に必要になります。

ただの思い出……になんて、されたくありません。

…ここが、ある意味での、勝負所だと判断しました。

だから、頑張ります。

怒りを込めて、頑張ります。

はい……これから私は…人生で一番…と、断言していい程に…頑張りますから…。

ですから…彼には、それも含め、全責任を取ってもらいましょう。

それに？ 貴方はすでに？ この私をご存知の筈ですから？ 大

丈夫でしょうか？

…ですから、覚悟を決めて言葉にします。

私の本質を…。

始まりの彼女に。

◆ 「途轍もなく、嫉妬……深いのです」

「タアアカツ!! ぼオオオオ!!」

「ああっ!! もう鬱陶しいっつ!! 酒臭いおっさん達に、抱きつかれても嬉しくないっ!!」

その、開かれた入口から、店内の光が溢れる店先。

店前で、酔っ払い達の抱擁。

俺の送迎会とやらが、お開きになりそうで：店にいた全員が、店前に集まっている。

おやつさんと、女将さん。常連客達、数人だけの：送別会。

大人連中だけだけど、顔には出さなかったが：正直、泣きそうだった。

友人：とは言えないだろうが、こんな事をしてくれる人達は、今までの：ああ、死ぬ前にもいなかったから。

：年度初め。

街中が大学生や、社会人の歡送迎会をする連中で、溢れる中。

：ただ、お前ら騒ぎたいだけだろ? と、鼻で馬鹿にしていたのだが：それは、やはり人によるのだろう。

実際に、今回：おやつさん達は、非常に俺との別れを惜しみ：それでも送ってくれる。

この店で使っていた包丁まで、しっかり研いだ状態で饞別にくれたしな…。

こんなにも：嬉しいものだとは、思わなかった…。

いかん：相変わらず、自覚する程に俺は、情に弱い。

目頭が反応する前に、なんとかせねば。

「はあ…これで、タカ坊ともお別れか…」

「ノンナちゃん、来なくなっちゃうかなあ…」

「カツチユンも、来なくなりそうだよなあ…どうしよう、新たにファンクラブ設立を目指していたのに…」

…おい。

「あの、歩く度に上下する、神々しさすら放つモノを拝めなくなるの

「かあ…」

「オレンジペコちゃん達もいなくなったし…随分と、寂しくなるなあ…」

「また、女つ気がない場所になるよなあ…カッチュンが、漁へ出る前の活力になつていたのになあ…」

……。

「待て。取り敢えず、カッチュンって誰だ。ファンクラブ設立って何だ」

「あーあ…結局、このヘタレ小僧…誰ともくつつかないし…ペツ」

「儂、ダーちゃんに賭けていたのに…あの、パツキンのどこが不満だった！ タカ坊っ!!」

「お前は、俺と同じ匂いを感じていたのに…カッチュンの癒しがなぜわからんっ!! ああ…結局、お流れか…」

「あ、俺はオレンジペコちゃんな？ あえて一番レートが低い、安全パイを取っていたのになあ…」

「聞け…俺の話を聞け…どういう事だ、酔っ払い共」

「賭け…とか抜かしやがったか？」

「ああ…う…。タカ坊お」

あ、酔っ払い代表が、手を挙げてた。

女将さんが、大きくため息をつきながら、その地べたに転がった、酔っぱらいの腕を引き上げましたね。

「お前が、誰とくつつくかあ……とかあ？ いつの間にか、賭けになつてたんだよお？」

「……………」

「あ、金銭じゃないから…な？ この店…で、勝った奴が負けた奴に一杯奢る…程度の賭けだぞ？」

ま…もう、いい。

色々と思う所が、それこそ山の様にあるが…今更、怒つてもしょうがない…。

「あ、ちなみに俺は、ノンナちゃんな？ このスケベ」

「何も言つてないだろっ!? 今の言い方、大分端折つただろ!!」

「隠すな、隠すな。お前の…むつつりは、すでに有名だから」

「…このオヤジ…！　って、抱きつくな!!」

へらへらしながら、やっと離れたと思ったのに、全員がまた抱きついてきた。

うん…酒臭え…。

俺がいなくなる…女…気がなくなる…事に対して、随分と残念がりがやがって…。

……。

「…アンタら、ただ飲んで、騒ぐ理由が欲しかっただけじゃないのかい？」

俺を抱きしめる酔っ払い共に、女将さんがジト目で、冷たい一言…。  
今度はおやつさんの襟首を掴み、俺からベリツと、引き剥がしてくれた。

ああ…もう…。

…。  
普段…一応、店がある為、ここまで泥酔するほど飲まないのになあ

真っ赤に目と顔を染め上げて、力なく首を釣らされている、おやつさん。

「はあ…まったく、情けない…」

そんな酔っ払いを、少し優しい目で見下ろす女将さん。

…。

まあ、中学の時の皿洗いから数えれば…2年位、働いただけなのになあ…。

……。

「タカ坊、あんたにも言ってるんだよ？」

!?

顎を上げ、俺を心底情けない男…と、言っただけに見下げてくる。

女将さん。背…俺より大分低いのに…なぜか毎回、見下げられる…。

「な…何がつすか？」

手に持っていたおやつさんを放り捨てる様に…。いや、マジで捨

てたな…今。

そのまま、手を腰に置き…あ、説教モードに入った。

「…店休ませて、合宿とかやらにも、行かせてやったのに…」

「…え？　は？」

「…一人も選ばないとか…。馬鹿かいアンタはっ!!　金玉ついてんだろっ!!」

「っ!」

「あゝあ。可哀想に…」

な…何が言いたいかわからない…。

可哀想ツ!?　何が!?

合宿って、アレだろ?　プラウダと聖グロと…アンツイオの…。

「特に聖グロの子達が、可哀想だよねえ?　いや?　オレンジペコちゃんか…」

「っ!」

「それに…さつき態々、カチューシャちゃんと、ノンナちゃんが来たんだろ!」

「や…え……つと、はい」

「…それでも、分かんないのかい?」

えつと…。

女将さんが、具体的に言ってくれないので、なにを言いたいかわからない。

その俺の態度見て…女将さんの言葉を、黙って聞いていた他の酔っ払い共が…硬直した。

いや?　違うな。俺の先…後ろを見て固まっている。

「…おや」

女将さんもそうだ。

俺と向き合っているのだけど、顔だけずらし、俺の後ろを見ていた。硬直した酔っ払い共の顔も、一定の方向を向いている。

…なんだ?

釣られ、俺もそちらの方向に振り向くと…真っ暗い港が見える。

そこの端に設置されている街灯。

その街灯の下に、見慣れたシルエツトが見えた。

……。

えつと…ノンナさん？

「……」

街灯の下に、顔を隠すほどの長い髪の女性が、風に髪をなびかせていた…。

「……タカ坊。ついに刺されるのか」

怖い事、眩くなよツ!!

……が。

その言葉を呟かせる程に、彼女の雰囲気が変わっていた。

遠目にも分かるほど…肩で息をしながら、その体が揺れている。

髪が乱れ…前に掛かり…こちらからは、片目しか確認が取れない。

街灯の光の下な為に、その光で濃いシルエツトを作り出し…その唯

一確認が取れる片目が…。

はつきりと分かる程…俺を睨んでいた。

…状況が、サスペンス・ホラーですよね。

《南無…》

「酔っ払い共ツ！ 手を合わせるな!!」

「ほら…タカ坊」

「お…女将さん？」

「これが、責任って奴だ。骨は拾ってやるから、ちゃんと刺さ…話してきな」

「言い直しましたね…」

何故女将さんは、嬉しそうな顔をしているんだろう…。



その街灯の下から動かないノンナさん。

そろそろ夏とはいえ、冷え込む夜中。特に今日は、非常に寒い。

ノンナさんからは、白い息が：口から何度も吐かれている。

……。

店先から溢れてくる明かりから体を出し：彼女の元へと駆け寄る。

近づく度に、周りが暗くなる為、明るい街灯の下にいるノンナさんの周りが、ハッキリと分かってきた。

お陰で、その周りは黒一色。

コントラストのお陰で、はっきりと彼女だけが見える。

：カチキューシヤは：：いないな。

こんな夜道だ。

流石に危ないだろう：と、先に帰ったのか？

いや：そもそも、ノンナさん一人でも、夜道を歩くななんて危なすぎるだろう。

ああ：それで、走ってきたのか？

「ノンナさ：：：う？」

ん：：？

ハッキリと、彼女の顔が分かる距離にまで来ると、腕を伸ばし、手の平をこちらに突き出した。

止まれ：と、いった意味だろうか？

反射的に足を止めると：それであっていたのだろう。

すぐに、スツ：と、腕を下ろした。

「……」

すでに息は整ったのか、何時もの落ち着いたノンナさんへと戻っていた。：：：と、思いたい。

俺との間には、まだ少し距離がある：。

どうしたのだろう：。

俺と目が合うのを確認すると、彼女が口を開いく。

波の音しか聞こえないほど：：：人気もなく静かな場所。

ある程度距離が離れていても、その言葉が、はっきりと聞こえた。

「：：忘れ物をしました」



ん? …忘れ物?

さつき何か持っていたか? いや…何か、落としたのだろうか?

「では…」

パサツ…と、左腕で髪を横へ払うと…細い髪が、街灯の光を細かく反射した。

輝くその仕草に、少し目を奪われた…瞬間。

動く、体。

体を低くし、ジャリツと地面を擦る音。

いや…蹴る音だ。

…スタートダツシユの様に、こちらに急に走り出した!?

「ちよっ?! えっ?!」

驚く俺を真っ直ぐに見ながら、駆け寄る…とか…ではなく、全速力。

地面を蹴る音が、更に響き…フツ…と、一瞬、彼女が黒い影の塊となった。

様は彼女は…宙に浮いたんだ。

そう認識した瞬間…腹部上付近に掛かる、衝撃。

捻りを加えた…見事なドロップキックでした。

……。

地面に腰を突き…肘だけで、上半身だけ起こしながら、取り敢えず叫ぶ。

痛くは、なかったのだが、それでも流石に不意を突かれてしまった。全体重を乗せた、更には捻りを加えて破壊力を増したその飛び蹴りに、情けなくも吹っ飛んでしまった…。

《おー…》

少し離れた場所から、パチパチとした手を叩く音。

「拍手してんじゃねえっ!!」

そして訪れる、酔っ払い共の喝采…。

くっそっ!! あの酔っ払い共!! 絶対、楽しんで見てやがるなっ

!!

「…どうですか？ 懐かしいですか？」

酔っ払い共に投げた視線を、彼女の足が遮った。

暗い中、こちらを見下ろす彼女の目だけ…妙に輝いているのが、何故かわかった。

懐かしい？

ああ…しよ…初対面の時…人攫いと間違えて、いきなりコレを喰らいましたね。

はい…ノンナさん。つか…怖いんですけど…。

「少しは、驚いてくれましたか？」

素直な感想。

いきなりの事だったので、情けない姿で、無意識に顔を縦に振る事しか出来なかった。

俺を見下ろしながら、バツ…と、また、髪を横に払いながら一言。

「そうですか。私は、とてもスツキリしました」

あ…はい。

冷たく言い放つ彼女は真顔っ!!

…そのまま、静かに俺を見下ろしていた…たっ!!

「あの!? はいっ!?!」

脚を上げ、肘だけで体を起こしていた俺の上に…彼女は跨った。

「そんなに痛くは、なかったと思いますが…こうでもしないと、貴方を押し倒す事なんて出来ませんからね」

確かに蹴られたというよりも、倒すために両足で押す…といった感じだったな。

「物理的に、女の私では不意打ちでもしないと、こうはできなかったと思いますので。…まあ9割方は、鬱憤晴らしでしたが」

…なにを言っているのでしょうか？ 理解が及ばなのですが…。

はっ!? というか、押し倒すっ!?

「…なにを…ぶっっ!?!」

即座に両手で、俺の顔を、パンツと、音が出るほど強く挟んだ。冷たいその手が、ノンナさんの存在感を表している。

少し震えている、その手。

「ふぶっ!？」

そのまま、ストン…と、俺の腹の上に腰を下ろした。

押された腹から変な声と共に、空気が押し出されてしまった。

「おっもっ!!」

「……………重？」

「いやいやいやっ!! 変な声が出ただけですツ!! 重くないですっつ

!! 鍛えてま…」

「そうですか…鍛えてないと、私は重いですか…そうですか…」

痛だだだああっ!! 爪を立てないでっ!!

ギリギリと聞こえそうなほどに、両手に力が入ってますよっ!!

「…ま。事実、私は？ 一般女性に比べれば、肉付きが良いので…それ  
なりの体重ですが…」

「……………」

…ああ、納得……………うい痛い痛い痛いっ!!

目線でバレた…。

「……………」

「えっと…え？」

スツ…と、すぐにその手の力が弱まった。

「……………」

「ノ…ノンナさくん？」

「……………」

その代わり、なにをする訳でもなく…そのまま、ジー…と、真っ直  
ぐに俺の目を見てくる。

ただ…黙って。

一言も発する事なく。

「…隆史……さん」

ボソツ…と、俺の名を呼んだ。

どのくらい経ったか分からないが、少なくともノンナさんの冷たい  
手が、俺の体温で温め終えたのが分かる位の時間は経過しただろう。

「は…は…っ…」

と…思ったら、何か一気に吃り始めた…。

何なのだろう…。

「す…すみません…」

何故か、いきなり謝られた。

明らかに、取り敢えず謝ってみた…と言った感じだな…。

謝罪なのか、喋りだしの挨拶なのかは、分からないけど…。

「くっ…。こ…こ…ここまで来て…躊躇してしまうとは…」

…？

何か、眩いたな。

「あ…あの？ 先程の見事なドロップキックでの、蹴りの事でしたら…」

「あ、いえ。それは一切、微塵も、絶対に、謝罪する気は、ありません」

…冷たく淡々と、早口で言い捨てられました。

「ある意味で、隆史さんの自業自得です」

《ウンウン》

「……」

絶対、酔っ払い共…腕組んで頷いてやがるな…。

「あの…では、せめて…退いてくれませんか？ 流石にこの格好は…」

『嫌です』

…即答…。

「貴方、すぐに逃げますから」

「……逃げるって…」

「この卑怯者」

「」

『あ、テーブル、外に運ぶか!?』

『酒持って来い、酒っ!!』

あの…野郎共お…。

「先程も言いましたが、全ては、この体勢にする為にした事…。退くはずがないでしょう？ ……と言いますか」

っっ!?

首がゴキツて言ったつ!! ゴキツ! って!!

「先程から…どこを見ようと、していいのですか」

なんかハシヤギ始めた酔っ払い共を、睨めつけようと思ったたら、力  
ずくでまた正面に顔を向けさせられたね…。

そのまま…って、おいおいおいっ!

「ノンナさんっ!?!」

自分の額…おでこを、俺の額に合わせてきた。

熱を計るように、コツンと、優しく…。

「…そうですよ。卑怯ですよ。貴女は卑怯者です」

「…いや…あの…」

「さ…最低ですね」

彼女の顔の色が、少しずつ…徐々に赤みを含めていった。

それでも目だけは逸らさないで…睨みつけてくる。

その睨んだ目が、少しづつ潤み始めた…。

そのまま独り言の様に、俺に…囁き掛けてきた。

「…人の気持ちも知らないで…電話口だけで、さっさとお別れを済ま  
せて去ろうとしますし…」

「いや…それは…」

「の…を…ここまで変えておい…て…気持ちに、させておい…て  
…」

先程から眩くノンナさんが、わからない。

赤くなったり、青くなったり…。

そして今は…

「そこまでしておいて…最後、人の唇奪っておいて…逃げ出すとか…」  
侮蔑の表情だと、はつきりと分かる顔で…。

「Т р у ц」

上目使いで睨んでくる…。



「どうせ、へりを私達から借りて…出向いた先も、例の姉妹の為でしょう?」

自然と口にする、そんな言葉。

例の姉妹の為。

あの姉妹の為。

「転校先が黒森峰ならば、すぐに私達には分かります…。教えて頂けない転校先…という事は…」

西住姉妹の為…。

「…妹の方でしょうか?」

「っっー!」

はつきりと彼の目が見開きました。

「…正解っばいですね」

自然と合わせた額が、コツコツと音を立て始めました。

離しては、引っ付け…を、繰り返し、繰り返し…。

「ノンナさんっ?! 近い近いっ!!」

隆史さんより、小さな悲鳴が聞こえました。

近い? ですからなんででしょう?

一回…少々強めに、額へと額を打ち付け…そのまま離しません。

強く押し付ける様にしながら、囁く声を続けましょう。

「…今の…貴方のその目で、覚悟ができました」

額に広がる、少しピリピリとした痛み。

少し、隆史さんの様な、気合の入れ方…。

なる程、余計な考えが飛びますね…。

彼の顔を手に挟んだまま…額を離し、真正面から彼の顔を眺め…その疑問しか無いような目を、睨みつけます。

ええ、睨みます。

腹立たしい事、この上無い…憎らしい、顔。

相変わらず何を考えているか、よくわからない、顔。

眉の傷…。

硬い…頬…。

親指でなぞる様にしても、彼は何も言わない。

……。

言わなければ……。

私は、言わなければ……。

スツ……と、鼻で息を吸い……吐く。

「転校……。ここ青森にご実家があるとしても……連絡をしてくれるとしても……学生である以上、転校をしてしまえば、顔を合わせる事が難しくなります」

恨み言……それも山の様にあります。

ありますが……それよりも、伝えたい事があります。

「……特に、貴方の場合……。余程の事がなければ、本気で私に会いに来てくれはしないでしよう」

私に……と。

不思議ですが、しっかりと……本音を口にできました。

逃がさない様に、マウントポジションを取り、自分を含め……彼を追い詰める。

もう、下手な言い訳はいりません。

「私も戦車道があります。こちらも疎かになど、出来るはずもない。更に私は3年生……あと……一年……。進学も考えれば、私が此処に来られる回数も少なくなっていく……」

「加えて、聖グロリアーナ……黒森峰……いえ……転校先の……西住姉妹」

逃がさない……逃したくない。

「……不安な要素……しかない。楽観的な考えができない。無理ですよ、無理」

できる筈が、ないじゃないですか。

唇を噛み締める。

少し、刺すような痛みが走る。

「……我ながら、打算的で……嫌になります」

彼を縛りたい……独占したい。それだけの為だけに漸く、決心ができた。

打算……的……。

彼は、そんな私の一人言を、黙って聞いている。

思わず溢れてしまった、そんな言葉まで…。

「ですが、ここ…今この時だけ…ここが、最後の…」

胸の鼓動が…脈を打つ心音が、いやにはつきりと聞こえてきます。

止まらない…止められない…。

止めたくない…。

「あ…貴方が、他県にまで…あの姉妹の為だけに、赴いたと後で聞いた時…へりを貸すべきでは無かったと…本気で悔やみました」

本音。

「そして、その考えに至る自分が、恥ずかしくも思います。情けなくも思いました」

これも本音。

「…貴方に、カチューシャの事で、詰め寄った時以上…体中が熱くなり…どうしようもなく…どうしたらいいか…」

…全てが、本音。

「ええ…私は、嫉妬…しました。あの時と同じ…いえ、あの時なんて、可愛く思えるほど…」

はつきりと自覚している、あの時と同じ…それ以上に強い感情。

目が熱く…喉が熱く…。

「…ですが、貴方は…ここを離れ…その私の嫉妬する…その相手の所へと、行ってしまおう…」

そう…これが、本音。

「行ってしまえば…何もなく…行ってしまおうと…」

必死に…ただ必死に。

ここで本当に…ただ何もなく分かれてしまえば…私は彼にとって、ただの…。

「…私は、ただの過去になる」

彼に話し掛けている…はずなのに…自分自身に言い聞かせる様に  
呟いている。

何度も何度も、先程からループする感情。

…恐怖。



合わせた額が、少しずつ下へズレながら…その声も段々と、声色が  
変わっていく。

溢れる…熱い何もかも全てが、溢れくる。

「私は貴方の…ただの思い出…：な…：なんかに、されたくありません」

鼻が触れ合う程の距離。

彼の顔を挟んだ手の力が、どんとと抜けていき…撫でるように、  
軽く摩る。

ザラツとした、手触り…。

何度も触り、何度も摩る。

触っていたい。離したくない…触れて…ずっと…触れていたい…。  
散々、悩み…躊躇し…今まで、声にも…伝える事もできなかつた言  
葉。

周りの音が、全て消えた。

自分の心音すらも、聞こえない。

そして…自然と口に…できた。

「貴方が好きです」

自然と…。

ヨウヤク…。

…はつきりと。

「…繋がりが欲しい。…作りたい。貴方から、会いに来てくれる程の  
…絆が欲しい」

繋がる言葉…。

それが全て…。

離れていても、一緒にいたい。

繋がり…絆…。

連絡する…きつとまた会える。

そういつた有耶無耶な事ではなく…はつきりとした関係。

手と額を通して、火傷してしまうのではないかと、思える程の体温

…。

…。

口にしてしまった。

後は…怖い。

怖い。

返事が怖い。

口にしてしまった事で、別の恐怖が訪れてしまった。

顔が…見れない。

視界が…彼の首元しか見えない。

…。

…。

「ノンナさん」

名前を呼ばれた。

どれほどの無言の時間が過ぎたか分かりません。

…それも一瞬に感じる時間だったと思います。

跳ね上がる肩…体…心臓。

「俺もノンナさんは、好きですよ」

「…っっ!!」

その言葉に…跳ね上がる。

ですが…すぐに気付かされた。  
……。

そう…同じだと気づかなかった事を…すぐに気づかされた…。

「ですけど…」

その一言で。

それは一度…あの時のお茶会の時と、同じ言い方…同じ好き……  
だったと。

言われた言葉と気付かない程…心が浮ついてしまった。

手が震え…目を見開き…その言葉を噛み締めた。

「あの姉妹……いや……。みほと、連絡が漸く取れたんです」

視界が…歪む。

世界が歪む。

みほ…西住姉妹の妹。

その彼女の名前が出た時点で…理解した。

額が、彼の胸へと落ちていく。

彼の…言い方…。

希に…言ってくれた…その時と同じ……好き。

「前にも言いましたが、彼女達姉妹は…俺とって大切な恩人です。…  
ずっと、探してきた」

手にまた…力が込められていく。

暗い視界が、更に暗くなった気がした。

そう…ですか…やはり…そうですか。

貴方の「好き」は……私に対する…「好き」……は……。

「ですから…俺は、転校を取り消す気はありません」  
暗い。

歪んだ視界が…また深く…暗くなった。

彼の胸に当てた額から…一気に遠くなってしまったと実感してし

まう…彼の体温。

「つつう……」

漏れてしまう。

情けなくも、女々しくも…口から…漏れ…。

「だから…」

……。

自分勝手に告白をし…。

自分勝手に……。

彼の言葉を聞きたくない…と。

身勝手な…拒否…。

……。

「遠距離恋愛…って、奴になりますか…良いですか？」

……。

………。

「…Da？」

…り…理解が…え？

え？

あまりに軽く言われた、そのセリフ…。

遠距…離…？

「それに俺は、恋愛というのが、良くわからない馬鹿ですよ？」

……。

何故でしょう？

隆史さんの顔しか…見えない。

色も白…。

白……………一色。

「ただ…それが、先程言っていた俺の責任とか？ そういった所から来る気持ちだとかは、思われたく無いのですけど…」

顔…。

あの時と、同じ顔…。

困った様な…………。

「俺は…ノンナさんの気持ちに応えたい…。そう思います」

そんな…………笑い顔。

「…何で俺？ ……だとか言うのは、貴女に失礼だと思いますが…。まあ？ 正直に言えばその気持ちだけですけどね」

全身の毛が逆立つ…という表現は、今…この私の状態を言うのでしょうね。

「ですから、まあ…色々と有りま…うつむうつつ…!!??」

全てが…何もかも全てが…。

「ちよっ!! 待っんんっ!?! ぷあっ！ 外っ！ ここ外っ!!」

「ノンナさん、聞いてますかっ!? 見てるっ!! よっぱらムグツ!!」  
「んんんっっ?!?!?!」

真っ白になっていく…。

世界が…純白に…。



「タカ坊」

「…へい」

「あんた、店先…いや、店前で何をしてんだい」

「……………」

脚が痛い…。

店の玄関先で、まさかの正座…。

その正面には、仁王立ちになった女将さん。

暗い外を照らすように、玄関から溢れる光が、女将さんのバックライトとして機能していて…はい。

「…アンタら、酔っ払い共もっ!! 何をまた、おっぱじめようとしてんだいっ!!」

《…………》

そして俺の左右後方に、おやつさん含めて、全ての酔っ払い共も正座をさせられています。

はい。悪乗りしすぎだと、ついには女将さんもブチギレました。

「タカ坊…。漸く一人に絞ったつてのは、まあ良しとしようかい?」  
「…………ハイ」

まさかの告白。

再来店さら、ドロップキックで押し倒されて…。

店の前…いや、ギャラリーすらいる前で…告白された。

ある程度、好意的に見てくれてはいたと、思っていたが…。

ダーズリン達にも気を使い、我慢に我慢を重ね…更には、俺の性格も相まってか、漸く口に出来た…泣いて言ってくれました。

なぜ、そこでダーズリン達と、名前が出たのか訪ねてみたら…。

「…まったく。年寄りに無茶させんじやないよっ!!」

横から、助走を付けて、素晴らしく早く走ってきた女将さんに、ドロップキックをされました。

いやあ…積まれた木材に駆け上がり、高所からの落ちる様な。全体重を乗せに乗せた、威力特化の大変強力な良い一撃でしたね。

…まあ、避けるわけにもいかず、甘んじて受けました。

はい。んで、現在に至るわけですね。

…。

俺は、誰に言っているんだろう…。

いやいや、俺が正座させられる前の、ノンナさんが凄かった。

想いとやらが…ダムが決壊するかの如く、その後はもう…なんか…

大胆っすね、ノンナさん？

…つと、思わず言ってしまう程だった。

余程我慢していた…と、言っただけだが、あの冷静沈着。あの視線で人を殺せそうな目をした彼女が、まさかアソコまで…。

いやあ…。口を…吸われる、吸われる…。

……店前で。

「…女将さん」

「おおっと、来たかい」

店内から出てきた、ノンナさん。

女将さんは、特に強くノンナさんには、言う事がなかったらしく…俺の荷物を持ってくるように彼女に頼んでいた。

言われた通り、俺のこの店に置いてある、最後のハンドバックを持って来てくれた。

先程までの彼女は何処へやら…。

体が少し小さいと錯覚するほど、肩が落ちている。

…顔は、真っ赤だけど。

「…お：お恥ずかしい所を…」迷惑おかけしました：」

「まったくだよ！ 流石にもう少し、場所を考えておくれ」

「…：ハイ」

パンツと、音を立てて、そんなノンナさんの肩に手を置いた。

言葉とは裏腹に、女将さんはノンナさんにだけは、めちやくちや良い笑顔だった…。

「あの…私がした事…ですから、隆史さんは、特に怒られる様な事は…」

「んっ？ いいんだよお！ こういったのは、男が代わりに、責任取るべきなんだ」

じ…時代錯誤…。

と、言葉にしないで、思っていよう。

…こうさせられている責任はあると…流石に思う訳で…。

「わかってるじゃないか、タカ坊。アンタが散々、誤魔化し逃げ回ってきたからの状況だろう？ 自業自得さねっ！」

く…口に出てた…。

そんな俺を見下ろし、手をパタパタさせて、非常に上機嫌になっている女将さん。

怒るのか、喜ぶか、どちらかにしてほしい…。

「隆史さんは、ミニマリスト…なのですか？」

「え…なんで？ んな事、ないと思うけど…」

「…しかし、隆史さんの荷物…。これしか無かったのですけど…これで全部ですか？」

腕に持っている一つのハンドバックを掲げ、少し意外そうな顔をしていた。

「ええ。他の荷物は、ほとんど運んじやって、後は俺の身一つだけでし



「だから」

「そうですか。まあ…お陰で、手間が省けるのですが…良しとしましよう」

「……………ハイ」

ソウデスネ。

「隆史さんは、いつ青森を離れるのでしょうか？」

「えっと…日付変わってるから…ああ、3日後ですね」

「3日後…」

「ええ、ですから、久しぶりにそれまでの間、連休だと思って…最後に筋トレ三昧をしようと思って…い…た…」

「要は暇だと。ならば問題ありませんね。行きましょう」

「近い近いっ！　つと…行く？　えっと…何処に？」

うん…まあ、ノンナさんと話さなくてはいけない事が、多いと思う。

「あら…こんな真つ暗な夜道。……………こ……恋人を一人で、帰す

のですか？」

「……………」

「で…ですから？　しっかりと送って頂かないと」

「…まさか」

「隆史さんの入艦許可は下りているので、問題ありません」

「……………」

「……………」

「も…問題は…ありませんよ？」

……………

不安気に…すぎるような目で言われたら、何も言えないでしょうが。

全ては、計算…という、訳でもないのだろうな…。

俺が彼女を拒否したら、ソレまでだったのだから。

……………

いつの間にか、女将さんと談笑を始めたノンナさん。

……………

すでに普段の彼女に、表面上は戻っている。

いつもの様に振る舞い：たまに見せる小さな笑顔。

：そんな彼女を、見つめながら思う……………気がついた。

何かが：無くなった…と。

心から？ 体から…？

何か、どこからか…と、上手く言い様が：確かに無くなった。

スツ…と、ゆっくりと消えた。

突然に：唐突に：消えた。

言い方が、しつくりこない。

「…隆史さん？」

俺に視線が気がついたのか。

店の外へと漏れる光に照らされた、彼女の顔が、俺に向けられる。

無表情に見える程：小さく微笑んでいる彼女。

…。

彼女は、俺なんかを選んでくれた。

だから、俺もその気持ちに応えて：えら…ん…。

「……………」

「どうしました？」

はあ…。

…：もういい。

…：こんな気持ちで、考え込んでいたら彼女に失礼だ。

脚を上げ、立ち上がる。

彼女の事だけ：見ていよう。

…：付き合う。

交際。

恋人関係…。

そういった関係に、なったんだ。

選択した、決断した…。

彼女に応えようと：決めたんだ。

そんな関係で。ここにいられる時間…。

その残された時間が…短いんだ。

「…ところでアンタ達」

女将さんの声が、俺の思考を中断させた。

そちらを向けば、すでにノンナさんは、帰り支度が完了しており…女将さんは見送る気満々だった。

腰に手を置き、どうしたらいいか分からないという顔の酔っ払い共に一言。

「いつまで地面に座ってんだい。みつともないから早く立ちなっ！」

……。

…女将さん。

色々とヒドイっす。



「もう一度、引越す前に、店に顔出さないと…」

「そうですね。私のせいで…お別れの邪魔をしてしまった様なものですからね」

「いや、邪魔って訳ではないですけど…。あ、カチューシャは…」

「はい。問題ありません。すでに時間も時間でしたしね…部屋に送り届けて来ました。今はもう夢の中でしょう」

「…まさか、ヘリでずっと、待たせるとは思いませんでしたよ…。ドアを開けたら、すっごい涙目で、抱きつかれましたし…」

「そうですね…。毛布、飲み物、食べ物…メディア機器…お眠の際の  
ヌイグルミまで完備しましたが…少し…怖い思いをさせてしまっ  
たでしょうか？」

「完全完備…。いや、それ以前に、あんな真つ暗な場所で、一人で待た  
されれば、そりや怖いでしょうよ…」ナントモイエネエ

「明日…謝りましょう」

「……」

「……」

「…で、ノンナさん」

「はい？」

「そろそろ、夜中の2時を回りますですね」

「日本語変ですよ？」

「散々、普通に話してきてなんですが…」

「あ、無視は傷つきます」

「…取り敢えず、一度俺は帰りますから…」

「え？」

「…何言ってたんだ？ って、顔はやめて下さい」

「？」

「可愛らしく首を傾げないでくださいっ！ というか、出入り口に立  
ち塞がらないで！」

「あら…こんな大きいだけの女に、可愛いらしいとは…」

「会話して!？」

はい、ノンナさん達が乗ってきたヘリに乗せられ…ここにきまし  
た、プラウダ高校、学園艦。

残り短い、3日間…それを一緒に過ごしたいと…そう言われてしま  
えば、聞かない訳にはいかない。

まあ実際は、明後日…いや、日付が変わっているから、明日には青  
森に一度戻らないといけない。

いや…そこまではいい。

寝てしまった力チューシャを、部屋に送り届けるという名目で、こ

こ…よりもよつて…女子寮へと連れてこられました。

夜の…女子寮…。

…こんな女子寮をウロウロしている男なんて、不審者以外の言葉が見つかからない。

いやいやいや、百歩譲つて…そこまでも、良しとしよう…。

本当は、良くはないが、良しとしよう…あえてっ!!

しかし…。

そんな訳ですから？ 私の部屋で隠れて待っていてください…つて、カチューシャ運んで到着した早々に、ここへと押し込められた。軽々とカチューシャを、お姫様だっこの要領で抱き上げて、運んでいくノンナさんを、そこから見送った…。

…俺、必要だったか？

つか俺、見つかったら…即、御用だろ…。

「男性を…自室に…」

……。

なんか、すつごい嬉しそうに笑ってらっしゃるけど…。

部屋の出入り口に立ち、俺を含めて部屋全体を視界に入れているのだろうか？

まあ…ある意味で、昨日までは想像もしていなかったと思いますけど…。

確かに彼女は、すぐに戻ってきましたよ？

だからといって、女性の部屋に、夜中に一人で残される俺の身にもなつてください。

「漁りましたか？」

「何を!?」

「下着はそちらの…」

「漁ってませんよっ!!」

部屋から出ていく前に、箆笥に関してだけ、変に詳しく説明していったな…。

どうぞぞ？… って、何か薦めてきたけど…。

……………あ。

そういえば中学生の時…。

まほちゃんも同じように、俺を待たせる部屋の…「何か…他の女性の事でも、考えてますか？」

「いっ!! いいえっ!!」

な…なに!? 今、すげえ目で睨まれたけど!!

「……………ま。良しとしましょう」

…だ…黙ってよう…。

しかし、なにもない部屋だなあ…。

シングルのベットに…机…。

後、衣装箆筒と本棚くらいか…。

シンプルだけでも、ちゃんと掃除されていて、非常に綺麗だ…。

女性の部屋を余り、マジマジと見るのも何か、申し訳なく…取り敢えず、目の前のノンナさんしか、視界に入れない様にしよう…。

そして、その彼女から…淡々と棒読みで始まる説明…。

いや…カチューシャの事はいい…それよりも、その他に説明…。

こういった寮で個室を与えられるのは珍しいらしく、しかもここは、2階の角部屋。

隣部屋の生徒は、土日を利用し、急遽帰省し…た?

「ええ、先程」

「先程っ!」

怖っ!!

なんか知らんが、得体のしれない恐怖に襲われる!!

「では、隆史さん」

っっ!?

急に真面目な顔して、名前を呼ばれた…。

なんだろう…。

ノンナさんの私室で、こんな時間に対面しているという…すっごい状況。

「御存知だとは、思いますが…」

「は…は…っ」

覚悟…とでも、言うのだろうか？

キツと目を細め…睨みつける様な目で俺を見る。

そして…。

「私は…思いの外…嫉妬…と、いう感情が、深く…強いのです」

「……」

「…ですから、今回の行動に踏切りました…」

「あ…う？」

あ…そうか。

みほの為に、転校をする…それに気づいたからこそ…の。

「貴方は、そちら方面の事は、非常に…本当に…怒りすら覚える程に鈍いので…分からないかもしれないかもしれませんが」

す…すみません。

というか、なぜ今その話…。

「それを、私とお…お付き合いを、する上で…覚えておいて欲しいのです」

……。

「先程…私が、想いを伝えた時…私は特に、貴方に転校を取りやめて欲しい…とは、一言も言いませんでした。ええ、無理だと分かっていますから」

「あ…そうか、俺が…」

「はい。私は言いませんでしたが、貴方から切り出した。それが余計に、貴方にとって「西住姉妹」が、特別だと実感させられ…私は…あき…から…」

顔が前に少し傾き…横髪が前に垂れ下がる。

顔の半分が隠れ…表情が…。

「ですが、あの姉妹よりも、私を選んでくれました」  
……。

まただ…先程の…変な喪失感が、また襲った。

「それが…どれだけ…嬉しかったか…」

「……」

「ですから、特に…あの姉妹と完全に縁を切って欲しいとか…そう

いった事を、私は言いません……なぜなら……」

……少し、また笑って……言い切った。

「あの姉妹との関係……それを含めての、今の貴方。その全てが、私は好きになったのですから……」

そう……笑った。

本当に……嬉しそうに……。

あ……あ……。

ここまで……楽しそうに……嬉しそうに笑った彼女を見たのは……初めてだ。

「あ、ですが、嫉妬はしますよ？ ええ、遠慮なく。浮気をされた場合の処理も、48手程考え抜いています」

「……………」

あっさり……と……顔色を変えた……。

あの表情のノンナさんって、すごい珍しいのに……。  
……………ま。

その内にまた……見せて貰えるように頑張れば良いか……。

「……隆史さんからは、何かありますか？」

……。

「う……そ……その。なんていうか……」

また、楽しそうに小首を傾げた。

同じ様な大きな笑みで……。

「多分……その……俺も男ですので？ ……その……しかも……」

そんな彼女に対して……言えねえ……。

「ああ……隆史さんの特殊性癖の事ですか？」



「なああつ??」  
「!!??」

な…えつ!? はいっ!?

「まあ? 隆史さんも男性ですので…仕方がないと思います…」

「特殊ではないですっ! そりゃ、人より多少? 性欲は強いと思っ  
ますが…って、何言っつてんだ俺はっ!!」

「メガネ…」

「」

変な言い訳を叫ぶ俺に対して、一言呟いた…。

しかも…ソレデスカ。

「…掛けなくてよろしいですか?」

「がっ!! …ぐっ!!」

掛けて欲しいに決まっつてんでしようがっ!

黒フチっ!! もしくは、彼女も黒髪ロングだから、フチ無しが、すっ  
げえ良く似合いそうっ!!

いやいやいやっ! それ以前に、メガネとか好きなの言っつたっけ!?

「…ちよつと、待つてくっださいっ? なんでんな事、知っつてんですかっ

!?! つか、えっ!?! はっ!?!」

「隆史さんの秘蔵コレクションとやらを、拝見したからです」

「」

「出処は内緒です」

「」

出処…って、え?

アレって…実家に置きっぱなしにしていたノーパソにしか…しか  
もネットに繋がってない奴…。

どうい…いや、どのフォルダのっ!?

「…色々勉強になりました」

「何がですかっ!!」

ノンナさんは、表情を変えないで、淡々と言っつて来るから、余計に  
堪えるっ!

寧ろ、軽蔑の眼差しをされる方が、まだ良いよっ!!

…そして、その無表情のまま、本当に疑問というか、不思議そうな顔で…。

「何故隆史さんは、掛けた顔に、掛けたがるのでしょうか？」

…やべえ方のファイルでした…。

「勘弁してくださいっ!! つか、意味分かって言ってます!? つか、俺じゃねえっ!!」

「…十分、特殊性癖だと思いますが？」

「」

し…死にたくなってきた…。

混乱した頭の中が、さらに色々とゴチャゴツチャに…。

なんつー事を…暴露されているんだろう…。

「何でまた、今…このタイミングで言うのですか…」

そりゃ…まあ、その内に言わなきゃいけない事かも、しれませんがどねっ!?

付き合いだしたその日に、んな事を…バレてるって事を、言われなきや…。

「…このタイミングだからですよ」

「はい?」

「……」

カチャリと、良く聞く音がした。

部屋の鍵を閉めたのだろう…って、今までは開いていたんすね…。

すでにその場所には、用がないと…出入り口から、ゆつくりとした足取りで、近づいてくる…。

一直線に…俺に…。

「あの…ちよつと…ノンナさんっ!」

そのまま、俺の胸に顔を付けた。

すつ…と、服を擦る音…腕を開き、抱きついてきた…。

甘い匂い…目の前の彼女の髪の毛の匂いが、鼻をくすぐる。

グイツと、強く…密着させてくる体。

「……」

腕を背中に回し…また、俺を逃がさない様に隙間なく、体を合わせ

る。

本日…2度目の心音が聞こえてくる…。

「いつもみたいに、胸が当たってるとか、言わないのですね？ まあ、当たっていたのですが…」

「つつ!?」

冗談粧した言葉を言いながら…少し冷たい手が、背中に添えられた感触。

Tシャツの下へと手を潜らせ…ゆつくりと上へと…。

彼女の腕が、俺のシャツの中に全て収まり、強く抱きしめられた。それと同時に、胸へと顎を寄せ…俺を見上げてくる…。

「…分かりませんか？」

しばらくそのまま見つめ合い…背中をたまに摩る手の感触…。

摩るだけで、服を脱がしに掛かるとか、それ以上の事は一切しない。視線だけが交差し、静かな時間…。

「一度別れた後、あの場所に戻ると決めた時から…全ての覚悟は、決めています」

「……」

覚悟…。

時間が経つに連れ、彼女の目が段々と充血し…潤み始めた。

頬に薄く赤みさし…そして…。

「……この後…どうすれば…??」

……。

本気で泣きそうな顔で、呟いていますね…。

いや…どうすれば…。

「……う……う……」

分かる…分かるさ。

ここまで、お膳立てされて…部屋にまで招かれて、この状況。

流石に付き合うと決めた、その日に…つてのは、どうかと思ったので、変に誤魔化そうとした。

彼女がその気になる前に、今日はこのまま…本当に、どこぞのホテルにでも泊まろうと思っていた。

だけど…その気になった。

ここまでされた。

…してくれた。

顔を真っ赤にして、狼狽し始めた彼女。

…俺との時間が、余り無いのは、重々承知してるのだろう。

だからこそ…なのだろうか？ 覚悟…とも言っていたし、ここまで

してきたという事は、この事を含めての事だろう。

余り知識もないのだろうに、出来うる限りをして、迫ってくれているのだろうな。

体を合わせ…密着しているこの状況。

どうにかしようと、困りあぐねている彼女。

体の震えから、焦りだけは伝わってくる。

「と…歳上…私は、歳上…」

…聞こえてますけど。

必死になって、自分に言い聞かせる様に呟き続けている…。

歳上…ね。

先程まで、ある程度は余裕を見せようとしてくれていたのだろう。

変な会話も…冗談粧したセリフも…ある意味で平静を保とうとしていたんだな…。

いつもの雰囲気…。余裕を持った彼女は…そこにいなかった。

「私はオネエサン…トシウエ…オネエサン…」

余り表情に変化はないが…逆にソレが、彼女らしく感じ…。

非常に…可愛らしく…。

「…な…何を笑っているんですか」

黙って見ていたのが、バレてしまった…。

自然と出てしまった…苦笑にも似た笑い。

自分の状況がわかっているのか、頬の赤い色が、一瞬にして顔全体

に広がっていった。

顎を引いていたので、恨みがましそうな上目使いが、完成している。

…ノンナさんは覚悟を決めたと言っていた。

本当に一度、お別れとやらが済んだと思っていたので、正直驚いた。

あの場に戻ってきた時もそうだけど…彼女の気持ちだが、ハッキリと  
していた事に。

変に誤魔化さないで、濁さないで…。

ハッキリと伝えられた事と…俺もその彼女に、応えると決めた以上  
…。

宙に浮かせていた腕を下ろし、そのまま下へ…。

彼女の腰に手を回す…と、一瞬、驚く様に体が反応した。

「あ…」

抱く。

腰を抱き…こちらに引く…。

密着した体と体の間が、隙間なく…強く合わさる。

硬直していた彼女の体から…力が抜けていった。

自然と…だろう。

抱いていたノンナさんの腰の位置が…上がった。

▽

一度、口が合わさると…我慢していたモノが壊れた気がする。

音を立てて…脆く崩れる様に。

口を吸う音だけが、部屋に響く。

…初めは、触れるだけ。

当たる体温。

すぐに離し、至近距離から見つめ合う。

…なんだろうか…物凄く…恥ずかしい。

これは、なんか…いや…もう…恥ずかしがる様な年でもないのだろうが、な…んか、こういったのは初めてだった。

それは、ノンナさんも同じな様で…眼だけを逸らすと…。すぐに2度目が…。

また触れるだけ…だったのだが、すぐに彼女の下唇を唇で挟む。ヌルツとした感触と、暖かさ。

それに合わせ、彼女が俺の上唇を…舐めるように舌と一緒に何度も何度も…。

そのまま離す事なく…三度目…。

お互いの舌を絡めあう。

息継ぎを何度か繰り返しながらも、顔を傾げできるだけ奥へ、奥へと。

絡め…吸い合う。

その音だけ。

無言で…お互いを貪り合う様な…口付け。

彼女の腕は、すでに背中には無く、首に回され…俺の後頭部へと手を添えている。

頭を抱き抱えられる様に、離れない様に…。

「…んっ…ヂュ…んっ…んっっ!?!」

大人しい彼女の見た目とは違い…とても激しく…情熱的に求められている。

彼女も彼女で、夢中になっていたのだろう。ハッと、我に戻る様に、目を開いた。

彼女が舌を抜き…少し顔を離すと、また恨みがましい目で見られてしまった。

腕は離していいないので、先程よりも至近距離から…。

「は…初めてが、アレだけ刺激が強かったですから…こうなるのは、当たり前です」

「……」

「大分…我慢していましたし…」

あ…はい。

お茶会の時のお話だよな…。

やっぱり、初めてだったのですね…アレ。

拗ねるような言い方で、言い訳をしてきたね…。

「で…ですから…。もつと…んっ」

またすぐに口を吸われ…体重を掛けられた。

脚の裏に、少し固く…柔らかい感触。

…ベットへと誘導された気がする。

足関節が折れ、自然に腰を下ろすと…口を合わせながらも…膝の上  
に彼女が跨ってきた。

…やっぱり誘導されたな。

跨りながらも、肩に手を置き、体を離すと、彼女の上半身全体が視  
界にはいる。

目の前には…。

「……………」

いや…するよね。

「……………」

して…しまいますよね。

「……………」

しないはずがない。

「見すぎです」

「はっ!!」

いかんっ！ 今までの雰囲気、全て飛んだ気がするっ！

すっごい、呆れられた目で見られているっ！ …気がするっ!! し  
かし、目が離せられないっ!!

「はあ……どうしてこう、男性というのは……」

すっごい呆れられた声が響く……。

いや……でも、ですね？ こんなに立派なモノが、目の前に……少し手  
を伸ばせば届く距離にあれば、見ない方が、不自然というものだ……。

「……言い訳が長いです」

「」

あ……はい。

素直に謝っておこうか……。

「す……すいません」

「……はあああー……」

なっが、い、ため息……。

「でも……何故でしょう？」

そう言う……制服のボタンを目の前で、外していく。

白い指が、更に白く見える……。

その指で、上から順に外されると……床に落ちる、衣服の音……。

赤い、インナーシャツ一枚のノンナさん。

「……貴方になら、ずっと見ていて欲しいと思えるのは……」

今度はインナーシャツのボタンへと、その白い指が……。

……止まった。

しかし、すぐにその……止まっていた指が動き出した。

ポチツと音がして、その白い肌が……面積が広がってゆく。

また、上から順に開かれている……赤い扉。

……余り……躊躇がない、その行動……。

全ての鍵が外された時、シユルツと音を立てながら……真っ白な肩が  
現れた。

腕の関節まで、下げられた赤い……ベール。

それと同じくして、赤い……大きな華の刺繍の下着……。

肌との……紅白のコントラスト……。

「……」



「…ふふっ?!?!」

そのコントラストが、襲ってきた。

目の前が真っ暗となり：眉間辺りに少し、硬い感触。頭に思いつきり抱きつかれた。

ザラザラとした下着の感触と：その後ろから来る、大きな圧力…。い…息ができません…。

「…いえ…ずつとは、嫌ですね。却下です。…なぜか…腹が立ちます」俺の頭に腕を回した彼女が、更に強くその腕の力を強めた。力を込めている為…と、いうだけではないだろう。少し…小刻みに震えている。

顔が近づき…また視界が真っ暗となった。

「…経験なんてないですし…こんな事くらいしか…」

ほぼ躊躇なく、服を脱ぎ出したり…したのは、それしか方法が分からない…とでも、言っている様だった。

先程、歳上、歳上と呟き続けていたのは、本当にそのプライドもあったのだろう。

だから…できるだけ…と、リードをしようと思い、肌を晒してくれた…と。

「…お…思いの外…：恥ずかしい。顔から火が出る様です…」

が、すぐにソレらを、羞恥心を上回り…俺の頭を抱きしめる事で、視界を奪った…と、いう訳ですかね。

お陰で、下着はしているが、あの…あのっ！ 谷間につ!!

…顔が収められているという事だね。

下着の生地を通して、体温が伝わってくる程に…熱い。

…。

……………。

「んっ!？」

そこまでされては、俺も本当に…本気で…応えるしかないじゃないか。

徐に両手で、頭になっている、横腹の肌に触れる。

「ふっ……んっ……」

くすぐったいのか、顎を俺の頭に付け…更にその頭を強く抱き抱えてきた。

スー…と、優しく肌の上を、横腹から背中に掛けて、ゆつくりと移動させる。

見なくとも、その手触りだけで、ものすごくきめ細かい肌だと分かる…。

背骨横をなぞり…摩り…彼女の細いウエストを抱きしめる。

そのまま、尻部の上に手を置くと、ビクツと体が反応した。

シュツ…と、たまに小さな音が鳴るくらいに、手の平で彼女の後部全体を温める様に撫で続ける。

肌の方から、手の平へと吸い付くように流れる感触…。

ずっと…いつまでも触っていた程だった…。

撫でる程、彼女の体温が上がっていくようだった…小さな吐息を何度も上げている。

「んっ…あはっ…」

気が付けば、彼女の体は少し離れ、またお互いに唇を吸い合っている。

言葉は無く、ただお互いの唾液を交えるだけの…音。

こうしているだけでも、満足してしまいそうだけど…段々と俺自身に別の感覚が芽生えてくる。

もう…いいだろうか？ と、摩りながらも…彼女の背中に、まだ存在している物を除去したかった。

片手で、彼女の背中を摩り…もう一つの手の指で、その中心を摘む。

硬い感触が、小さな音を立てて離れた。

解放された乳房が…重力に引かれ…俺の胸の上に…

っ…。

あれ…？

顔をいきなり離された。

「……」

な…んだ？

部屋の明かりの逆光で、彼女の顔が暗く見えるが…その目には光が見えない。

黙って口を結び…それでも真つ直ぐと俺を見下ろしている。

上がった熱が、一気に氷点下にまで落ちたような…そんな雰囲気…。

「…隆史さん」

はい？

本当になんだ？

少し、怒ったような…顔？

肩に掛かっている、紐が…スツ…と外れて落ちると…。

「……随分と…手馴れてますね」

「」

し…。

しまったああーっつ  
!!!!

自然にやりすぎたツ!!

「ホックを…見もしないで…。しかも片手で、あっさり外すなんて…」

「」

目がすっごい、細くなつたツ!!

「……こっわっ!!」

「まあ……? 所詮……過去の事ですので? 深く追求なんて、野暮な真似は致しません……が。ダレ? デシヨウ?」

「」

「……誰……でしよう? ダーヅリン……さん? いえ……まさか……アツサムさん……?」

「」

野暮な真似してますよ!?

オペ子が候補に挙げられないのが、若干引つかかるが……って、近ツ!?

先程とは違う距離の縮め方が、非常に怖いっ!!

目の色が、明らかに先程とは違いますよっ!!??

「い……いえっ!? こんな事するのは、ノンナさんが初めてですよっ!!」

「……」

「……」

「ふ……」

あのノンナさんが……「ふーん」って言った。ふーんって……。

それにまた……すげえ長い、フーンだな。

うっわ……顔が全然、信じてねえ……。

「ほ……ほらっ!! 俺、姉さんいますしっ!!」

「……」

く……苦しい……。

非常に苦しい言い訳っ!!

咄嗟にでた言葉が、こんな事かっ!!

「……」

あ……あれ?

目力が、消えた……え? 閉じた……。

信じた? え? 信じたの!?

「…なる程…あの姉なら…」

「……………」

ちよつと待つて。

逆に、俺が気になる。

明らかに、アノ特殊な姉を、知っている様な口ぶりですね？

「いや？　しかし…それとは別として、隆史さんの手の動きが……………まさか…」

いかん…別の疑問を持たれる。

というか、最悪な誤解をされそうだ！

今は、取り敢えず、変な誤解をさせない事を優先させようっ!!

「お…男はですねッ!？」

「…なんでしよう?…」

ギロツと、眼球だけで睨まれた…。

ひ…引くなっ!!

「普段からですね!?　イメージトレーニングつてのを、欠かさないモノなんですよっ!!」

「……………」

あ…。

すつげえ、呆れた顔をされた。

「それは、普段から如何わしい事を考えていると…そういう事ですか?」

「……………」

ソレを淡々と言われると、非常に辛い…。

「ふむ…しかし、以外ですね」

「ん?　あれ?」

「あのフォルダの中身を、拝見した時も、思いましたが…少し、安心しました」

「……………」



「ですから…見すぎです」

「…スイマセン」

先程から、本当に顔に火がついたのではないのかと、錯覚する程に熱いです。

外されてしまった物は仕方ありません。

どうせ…脱ぐつもりではありませんし…何より、見たそうでしたしね。

自分から露出した胸を、張ると…また、ジー…と見てくる隆史さん。自然に、顔をこちらから背けてしまう程に…穴が開くほど見てきますね…。

そんなに好きですか…。

服を着ていたとしても、男性からの視線が嫌という程に集中する胸。

本当に、無駄に成長したというか…なんというか…。

ただ、不快なだけでしたのに、何故か彼の視線を釘付けにできている…というのが…嬉しい。

「んっ!？」

突然、胸の形が変わった。

下から持ち上げるように…彼の閉じるように縮まる手の形に。

強く…でもなく弱くもなく。

乳房の形を変える指が、何度も何度も、揉みしだく。

端から先端に掛けて、寄せて来るように前後に動く。

かと、思えば…先端…乳首を押し込める様に動く。

親指が、擦るように左右に…。

優しく、マツサージをするかのように、何度も動きを変え…乳房の肉を、先端に集める様に…。

「はっ…はっ…」

背筋に、何かが走る。

呼吸が段々と…自然と早くなる…。

喉から、自分でも分かる程に、熱い温度に温められた様な息…呼吸…。

両肩が開き、胸を前に出してしまった。  
出してしまった胸を、また：優しく……。

「んっ……あ……あの、余り……」

私の言葉が聞こえないのか……気にする事もなく、執拗に胸の形を……  
線を曲げる事に夢中になっている。

：何故、彼は目を輝かせているのでしょうか？

何かに感動するかの様な……。

ま……まあ、喜んでもらっている様で、良いのですが……。

「……余り、人の胸をおもちゃにされては、困るのですが……はうっ!?  
んっ!!」

思わず唇を噛んでしまいました……。

変な声を出してしまふ所でした。

先端……その……乳首を回りごと吸うように、口に含まれましたね……。

あの……。

「はっ……ふうっ!? ……あ……」

転がす様に、舌を転がして……。

左右に顔を離しては着けて……離れた空いた胸を、手先で揉まれる  
……。

感覚が徐々に、敏感になっていく気がします。

触られ……吸われ……舐められていく度に……。

目の前の彼の頭が……それこそ、赤ちゃんの様に、夢中になって胸  
を吸っている……。

「んぐっ!?!」

思わず、その頭を抱きしめてしまった。

胸の間に、彼の顔が押し込めて……。

少し、苦しそうな声がしましたが……何故でしょう？ 離す気には、  
なれません。

「……っ?」

が……そのまま、体を抱きしめられ、彼の体温を感じようとしたら、す  
ぐ横に体をどかされ中断されてしまいました。

ベットのの上に座らせられ……先程まで対面で抱き合う……という、姿勢



を崩されて…？

彼は立ち上がると、少し荒い呼吸に変わっていますね…。

やはり、少し苦しかったのでしょうか？ はあはあと、はつきりと聞こえる程の…呼吸。

「もう、無理です」

「…え」

私に言ったのかどうなのか、分からない程小さな呟き。

その一言で、隆史さんが上を脱ぎ捨て…カチャカチャと、ベルトを鳴らし始めました。

……。

そうですね。

流石に分かります。

膨れ上がった筋肉。

そこには、所々…まだ完治していないのでしょうか？

…赤く、腫れた線がいくつも引かれています。

……。

そして…。

彼が私の頭を撫でる。

髪の間に入を入れて…髪感触を楽しむように…。

ただ…少し。

「どうしました？ 恥ずかしそうですね。髪に触れる事が…でしょうか？」

それとも…。

「いや、それも少々照れますけど…この状態を見せるのが、恥ずかしいに決まってるじゃないですか…」

「そうですか」

初めて…生まれて初めて見る…。

…男性自身。

……。

……。

「…ノンナさん。見すぎです」

…仕返しをされてしまいましたね。  
でも、見入ってしまいました。

半円を描く様に反り、脈を打つようにビクビクと、動いている。  
見た目…正直、グロテクスと言えるのですが…。

「隆史さんのフォルダの中のは、モザイク処理がされていたのですが…なる程。これが…」

「……………」

何故か、手の甲を額に当てて目元を隠しましたね。

何を嘆いているのか知りませんが…少し、楽しく思います。

「……………」

また、顔の温度が上がった気がします。

この少し…ほんの少し…ピクピクと動くのが…また……。

根本的な問題に気がつきました。

雄々しく…とでも言える程に大きい…なのでしょう。

一般男性のなんて、知るわけがありませんが…そうです。

「……………」

コレ……本当に、私の中に入るのでしょ…うか？

少し…血の気が下がった気がします。

いえ…？ 上がった？

なんとも言えない、感覚…。

目の前に突き出されている、その…なんて言えば良いのか…。

その赤黒い先端…。

少し、部屋の明かりを反射し、テラテラと光るその…先端。

これは…私を見て…こうなっていると、思っ…て良いのでしょうか…。

少し、嬉しいと感じるのが、変に恥ずかしいです。

「……………」

たしか…。

取り敢えずと、邪魔にならない様、髪を指で耳に掛け…ええ…と。

次に…と、腰を前に出すと…。

「っ!？」

隆史さんが、何か驚いていますね。

：多分、あの隆史さんファイルの動画とかと同じ事をするのが、正解だとは思うのですが…。

何度か拝見し、やり方：は、なんとなく分かるのですが…。

実際に、いざやるとなると：少し、怖いとです。

ええ：と。

これは：口を思いきり開けないと：ダメでしょうか？

「…」

考え出してしまうと、動けなくなりそうですね。

とにかく行動に移した方が、良さそうです。

……では。

「…はっ…」

口を開ける時に、少し声が出てしまいました。

……。

はい、ですから考え込むと何もできなくなりそうです。

取り敢えず、あの動画と同じ様に…。

恐る恐る伸ばした：舌先から、少し痺れる感覚…。

舌を、その先端の下部へと添える様に這わせると、彼の体が少しビクンと、跳ねた気がします。

少し、舌先だけで動かすと、更に跳ねる。

：少し楽しい…。

ゆっくりとそのまま、上顎を開く。

：ソレを口に入れる事に、特に抵抗はなく：何故か、興味が沸いていました。

舌から：肌を舐める様な：少し、塩辛い味。

そして、少し苦味を感じました。

「んあっ…」

ヌルツとした舌触りと一緒に、顔を前に押し込め…。

唾液を絡めながら：ゆっくりと…。

「んっ」

良くわかりませんが…これで良いのでしょうか？

たまに痙攣するかの様に、口の中の彼が、跳ねる。

口の中が、物凄く熱い…。

「……くっ」

彼の声が漏れる…。

閉じていた目を開け…彼を見上げると、少し苦しそうな顔をしていました。

何か…違いましたか？

「…っふ。痛かったですか？」

一度、口から抜き…彼に訪ねると…。

どうやら、躊躇をせず、口に含めたのに驚いた様でした。

「誰かさんの秘蔵ファイルの中に、多数ありましたので？ 参考になりました」

…何を今更、驚いているのでしょうか？

それに、先程から何故、血の気が引いた様な顔をしているのですか？

まあ…間違えていないのでしたら、また…。

あの動画やら画像では、口に入れるだけではなく、顔を前後に動かしてましたね。

後は…あれは、女性が吸っていたのでしょうか？

では…。

すぐにまた腰を動かし…体を倒す。

また口の中に、奇妙な味…感触と感覚。

大きく動かした方が、良いのでしょうか？

少し、強く体を前に倒すと、その反動で、口全体に広がる味…と、鼻を通して感じる、男性の匂い…。

これが、隆史さんの匂い…。

「ぶゅっ…」

前後をゆっくりと繰り返し始める。

その味と匂いが、何度も刺激をし始めましたね。

……。

…少し…楽しい。

動かせば、動かすほど、彼が反応してくれるのが、妙に楽しく感じます。

…動かす程、口から音がたまに漏れますが、これは…少々、恥ずかしい。

隙間なく、私の口内を一杯にさせてしまっている、隆史さんのソレは、動けば動くほど、唾液が音を立てて、溢れる。

口から、聞こえる音の数が増え…大きくなる。

…繰り返し、繰り返し…何度も。

先端の裏？ というのでしょうか？ 突起部分に唇が掛かると、彼

が少し腰を引く。

…気持ちが良いのでしょうか？ それとも痛かったのでしょうか？

彼の呼吸が早くなっていくので、多分前者でしょう…か？ 何故か…これもまた、楽しい。

特にこの裏側部分に、唇と舌を引っ掛けると、目に見えて大きく反応してくれるので、執拗にしていまいそうになりますね。

はい…やはり楽しい。

「ノンナさん…ちよつと早く…」

…と、言われましたので、さらに音が出てしまうほど…それも気にしない程に早く…。

舌を動かして欲しいと言われましたので、できるだけ大きく…奥へ…全体へ…。

少し喉に当たる時が、咽せそうになってしまいました。彼の反応が楽しく…我慢してまで、また大きく頭を動かす…。

と、いいですか…少し、私の中の気分も高揚している。

この、喉に少し当たる感覚が…また…いい。

初めてでしたので、あまり上手にできませんが…それでも出来るだけ、彼の要望に応えてあげたかった。

私の頭に添える手が、たまに撫でてくれる…それを求めて、また何

度も何度も…。

「んっ…んっ…んっ…あはっ…はい？」

と…せっかく思っていましたのに、頭の動きをその手で、止められたました。

それどころか、彼から私の口の中から出て行ってしまいました。

引き抜かれたソレは、私の目の前で止まると…そこから垂れている唾液の糸が、私の唇と繋がっていた…。

……。

……む…夢中になりすぎてました。

途轍もなく大胆な事を、いきなり…初めてだというのに、してしまつたと、今、そこで初めて実感が湧きました。

それと同時に、途轍もない羞恥心が襲って…。

「え…つと、あ…」

彼の両手が、私の肩を後ろへと押す。

ベットへと、寝かせる為に…。

押される肩、押し寄せる彼の体重…。

抵抗する事なく…その動きに身を委ね…。

「……」

彼の手が、横に仰向けになった私の…下。

最後の下着を撫でるように、下へとずらす…。

脱がしやすい様に腰を上げると、スツ…とその間を通っていく。

軽く脚を上げると、そこから完全に取り払ってしまつた…。

これで、真正正銘…生まれのままの姿…と、いう状態でしょう。

羞恥心や、疑心暗鬼。不安感や……罪悪感…。

色々な思いの中、今日、あそこから覚悟を決めた甲斐がありました…。

変な小細工や、その場限りの企み。

全ては、一瞬で吹っ飛んでしまいました。ここまで…来れました。何もかも…。

これで…  
やつと…  
漸く…

◇

頭をベツトに預け、顔を少し背けている。

額の上には、折れ曲げた左腕…。

特に隠すことなく…その真っ白い肢体を、俺にへと頭にしてくれている。

細く引き締まり、無駄に肉もついていない曲線を描くその体。

…うん。

極力、見ないようにした方が良いかと思っただけど、無理だな。

まだ触れないで、ただ見ているだけで満足してしまう程に、形も良  
く…綺麗な乳房…。

その上半身から、重力に引かれた形に変わっている…胸…。

豊満なその乳房が、更に引き締まった体を、強調させてくれている。

「…こういう時」

「な…なんででしょう?」

「綺麗だ…とか、何か…その…言ったほうが良いのでしょうか…」

先程から、変に大胆に…照れ隠しも含んでいるのであるが、彼女のたまに見せる挙動不審な行動が、変にいじらしく…可愛く感じている。

「…言葉がない…ええ。…出ない」

「……っつー!」

俺が、彼女の糸纏わぬ姿…と言うモノを、視界全体に捉えるように見ているのが、分かったのだろう。

一瞬、こちらを向いたその目が、一瞬見開くと、更に顔を赤くして…また背けられてしまった。

「…悪い意味じゃないですよ?」

「…え…ええ、わかってます」

どんな顔を、俺はしているのだろうか?

俺の顔を見た瞬間の、彼女の見開いた目。

上手く…言い表せない…。

彼女の両膝に手を置くと、ちよつと強引にだが、起こし…開く。

M字開脚という奴…だな。

…体を落とし、顔を沈める。

目の前には、テラテラと光る…その秘部を目に収める為に。

グツ…と脚を更に押上げ…ゆっくりと……つて。

「…ノンナさん? 何で俺の頭を、押さえるのですか」

ええ、力強く。

「なっ…えっ?!? なにをつ…っ?!?」

俺の頭の上に、押し退けるように彼女の両手が、添えられていた。

…あれ?

非常に不本意だけど、俺のフォルダ見て、ある程度の知識はあるん

じや…??

「恥ずっ…!! ハズかつ…っ!!」

ここに来て、秘部をマジマジと見られる…と言う事に直面し、吃る程、恥ずかしがっている彼女。

先程のいきなりノーハンド・フェラをしてくれた彼女からは、想像が上手くできないね。

ああ…なる程。

俺にする行為自体は、ある程度、アレを見て…覚悟があり、大丈夫だったのだろう。

……が、自分が「される」…という事までは、頭が及ばなかったのだろう。

…。

「必要な事なんですかつ! それはず!!」

あ……。

「な…なんでそこを…っ?!?」



あー!!

あーっ!! いいなっ!!

このノンナさんは、大変良い!!

「なんで、そんなに嬉しそうな顔をしているのですかっ!!」

涙目になりながらも、恥ずかしがるその顔が、何時もの彼女とのギャップ差が一番大きい。

嫌がる…というよりも、やはり初めてだし…知識も偏っているのだろう。

混乱してしまっている。

…だから。

「…いいですか? ノンナさん」

「な…なんですか…っ!」

スツ…と股の上に目だけ出して…下を向く彼女の目を見る。

すげえ間抜けな格好をしている俺だろう…なあ…

「…俺は、ノンナさんが好きです」

「っっ!!」

あ、固まった。

口を小さく「への字」にして、目を見開いた。

いや…本当に、今日は彼女の知らない顔が、たくさん見れるなあ…

「それが理由です」

「い…意味が分かりませんっ!!」

でしようね。

「こ…こんな恥ずかしい事をする理由をつっんんっ!!」

即座に秘部へと、舌を這わせる。

少し、刺激が強いかも知れないけれど、痛みを出来るだけ和らげてやりたい…と…思い。

「舌っつがあ…んんあっ!!」

後…ちよつと、いや? 物凄く。

「人に、触れられるのっ……が…こんなにいっ!」

ノンナさんが、乱れる姿を見たいと思いつた。

舌で、秘部回りを掘る様に回し…。

「お…とっ！ 恥ずかっつ!! ああっ!!」

唇でクリトリスを剥き…。

全体を掻き回す…。

啜る音を響かせながら…腰を浮かし、今度は初めから…一気に。

「かっ！ あうあー!!!」

ヌルツと舌を、不意を付くように中に入れて、体を反った。

内部の上方面…舌で剃るように…。

下方面…グリつと回すように…。

…何度も。

ずつと…。

▽

唾液と愛液にドロドロになっている、その膣口が…パクパクと痙攣する様に動いている。

強い刺激と、未知の快感を…俺の顔がビチャビチャになる程に、時間る掛け…愛撫した。

目の前が、彼女の秘部だったので、快感を感じる彼女…というものが見れなかったのが残念でならない。

…ただ、彼女の体の反応からは、色々と…分かったけどね。

胸を大きく、上下させているノンナさん。

胸だから胸が、素晴らしく胸。

……。

良くわからない感想が沸いたけど、まあいい。

手で顔を覆って顔を隠してしまっていますね…。

またその仕草が、俺を滾らせてしまうのだけ…。

「はあ…はあ…」

顔を拭い、彼女のそんな顔の横に、両腕を置く。

ベットに掛かる体重で分かったのか…漸く、手をどけて顔を見せてくれた。

羞恥に染まった真つ赤な顔と、少し呆けた様な、そんな…目。少し、怒ったような、ちよつときつい目を俺に向け…。

「:У меня есть обида на тебя。」

小さく、呟いた…。

はっはー…。

恨みますって…。

苦笑をしていると、更に目を細め…ああ涙目だ。

「隆史さんが、ここまで意地が悪いなんて、知りませんでした」

「…そ…そうですか？」

「お…おかしくなりそうでした…」

「……………」

い…いかん。

一々、その仕草が…俺の理性を壊しに掛かる…。

だけでも、今回は違う…出来るだけ、彼女に…。

後、どうにも彼女は、ディープキスが好きらしい…。

……。

俺のせいだろうなあ…。

言ったら、絶対に怒るだろうなあ…。

顔を落とし、上から口を合わせる。

それに従い、彼女は…やはり、舌を這わせる。

すぐに舌を口内に入れて、舌を絡ませてくる。

ニチャニチャと、目の前から音が響く…。

「隆史さん…」

「は…っ。」

「ほ…本当は、避妊具を…ですが…」

そこまで言うと、首に手を回された。

良く分かりませんが…と、一言付け加え…耳を少し噛まれた。

そのまま、更に口を近づけ…。

「き…今日は…大丈夫な日ですから…そのまま…」

……。

俗にう、安全日だと…言ってくれた。

…何故、それを知っているのだろう…とか…ありますけど…。  
女性って、そういうのが、普段から分かるモノなのだろうか？

それに本当は、その場合でも…避妊具を付けたほうが良いのです  
が。

ここまで、され…弄り合い…。

その言葉に素直に従ってしまった。

…いや、甘えてしまった。

思いの外…理性って、脆いのだな…と。実感させられた…。

もう、あまり余計な事は、言わない方がいいだろう。

手探りで陰茎に手を添え…自分で誘導する。

彼女の入口へと亀頭を添えると…その先端から熱い体温がまた感  
じる。

「じゃ…力…抜いて…息を吐いてください」

「……」

言われるがまま、彼女が吐く息が耳に掛かる。

大きく呼吸を繰り返してはいるのだが、それに少し…怯えを感じ  
た。

出来るだけ…優しく…できるだけ…痛くないように…。

ニチツと…少し音がした。

ゆっくりとそのまま…中へ。

押し出される感覚…それに逆らいながらもゆっくりと。

「ぐっ…」

首の腕の力が、強まった。

強く抱きしめられる頭…。

また、ギチギチと締められる陰茎…痛いくらいだった。

何かを破る感覚：プチツと音が気がした。  
侵入するソレを排除しようと締めて：追い出す。  
その肉壁に逆らい：一気に…。

「かっつ!!! あっ!!!」

一番奥まで、刺し込んだ。  
ぎゅうううう…と、抱きしめられる。

小さな悲鳴にも似た呼吸を、何度も繰り返す音が耳の横から聞こえてくる。

ゆっくりと入れるよりも、一気に入れてしまった方が、痛みは一瞬だろうと、思ったのだけど…まずかっただろうか？

ただ黙って、彼女が落ち着くまで動かない。

「かっ…あ…うう…」

抱きしめられた腕の力が、抜けるまで…ただ静かにしておこう。

ただ：彼女の内部に入り、締められる陰茎からは、彼女の鼓動の音が聴こえてくるようだった。

脈を打ち、ドクンドクンと…。

その脈が、陰茎の周りを小刻みにする様な動きで…正直…それだけで、危ない。

ギチギチと隙間なく、中に入ってきた陰茎を締めあげ、押し出すような彼女の中。

熱い体温と、その小さく動く膣内が、ソレだけで溶けてしまいそうになる。

しかし…この体では、確かにこれが初めて…の性行為。

慣れていない陰茎は、そんな彼女に…もう、限界が近かった。

「た…確かに、聞いてはいたのですが…。これは…痛い…です…」

耳元で、彼女の言葉にできた声が、漸く聞こえた。

少しは落ち着いたのか、ある程度は話せる位にはなっていた。

「…大丈夫ですか？」

「た…多分…。隆史さんは、痛くないのですか？」

「え……ええ。正直……気持ち良いです……というか、長く持ちそうもない……」

「…Хитрый」

いや……ずるいつて……。

「後……圧迫感が……凄……い……ですね……少し………苦しい……」

「…す……すいません……」

「ただ……」

「ただ？」

そこまで言うのと、抱きしめていた腕の力を抜き……抱き合う形から、正面を向き合った。

痛みに顔を顰めていた訳ではなかったのだけど、それでも痛かったのだろう。

涙目で、俺を見つめてきた。

そして。

「ええ……ただ……嬉しい」

「……」

「心地良さ……まで感じます……」

それだけ言うと、また首に抱きついてきた。

顔を見られまいとしているのだろうか？ 肩に顎まで乗せる程に密着する。

胸に当たる、胸の感触を含め……裸で抱き合う、独特な感触。

スベスベとしたその肌は、少し擦り合うだけでも……気持ちがいい。

「も……もう、動いても大丈夫です」

その言葉が、耳に入る。

ある程度の体と……心の準備が、出来たのだろう。

だから、止まっていても逆に気を使わせてしまいそうだったので、ゆっくりと……焦らず動き出す。

ニチャツとした音で、ゆっくりと引き抜く……まだ抱きつかれたままなので、腰だけ浮かせる。

……まずい。

正直、これだけで果てそうになる。

スローSEX…？　とでも言うのだったか？

ゆっくりと亀頭まで抜き…また、ゆっくりと、奥まで入れる。

また抜き…入れる。

ニチツとした音と一緒に、少し、苦しそうな声が、また聞こえる…。

いや…もういつそ、動かないで、このまま繋がっていた方が良いのでは？　と、思うのもある。

…ここは早めに、終わらせた方が良さそうか？

段々と、心配になってくる…。

「ふぐつ…う…」

動かせば、心地よさと気持ちよさが同時に訪れるが、それと同時に彼女の小さな、呻き声も聞こえてくる。

歯を食いしばる様な声…。

「ぐつ…う…」

体を離し、彼女全体を見たいとも思うのだけど…それも力一杯、抱きしめられている為に叶わず…。

動かすたびに、心配と罪悪感が襲ってくる…。

「あの…一度、やめますか？」

堪らず、休憩しようと打診するも…。

「だ…大丈夫です…好きに…動いて…」

…涙声だった。

「やっとなんなんです。我慢…ではなく…。この痛みも…感じていたいのです…」

……。

そんな声で、そこまで言われては、もう…なにも言えなかった。

黙ってゆっくりと…そのまま動き出す…。

「はっ…う…」

ヌルヌルとした感触は、陰茎全体を包み…。

肉圧で扱く…。

ゆっくりと…しかし大きく動く…それだけで、気持ちがいい。

彼女の口が、痛みを我慢する声が収まった。

抱きつきながらも、唇を合わせ…また、強く…とても強く口を、唇

を、舌を…舐めあう。

「…ЛЮБОВЬ」

動いたびに、小さく漏れる…言葉。

「好き」だと何度も何度も、囁かれ…。

また動く度に、押し上げられる感覚…。

「Я тебя люблю…っ！ Я…っ！」

「好き」という言葉が「愛」に変わり…囁かれる度に、また…昂ぶる。

囁かれれば、囁くほど…。

言われれば、言われるほど、それに応える様に…。

ゆつくりと…それでも、着実に…。

気が付けば、俺も彼女の頭に腕を回し…抱き合う様になっていた。

あまり大きく動けはしないが…逆にこの方がいいのだろう。

ゆつくりと、それでも大きく…。

お互いの存在を抱きしめ合う。

体液が混ざり合う音…。

ゾクゾクとした感覚と共に、込み上げる。

そのまま、抱きつかれたまま…抱きついたまま。

顔をずらし…向き合い。

口を合わせ…。

全身を震わせながら、脈を強く打つ。

最後は彼女の最奥へと、腰を打ち付け…。

彼女の中へと、全てを吐き出した。

「う…あ…」

熱いく火照りきつた体が、密着している。

脈を打つ体。

二人の乱れる呼吸と…声だけが、聞こえてくる。

脱力し、そのまま彼女の上に覆いかぶさってしまおうと…重いだろうと、すぐに横にずり落ちる。



ノンナさん：彼女はまだ、俺の首に腕を回したままだった。  
：その体の動きの流れに：従う。  
動かない。

ただ、今は離れたくなかった。  
だから、動かない。

：抱き合い。

彼女と一つになったまま、ただ抱き合う。

……。

……。

しばらくすると、お互いの荒い呼吸が段々と整い：小さな呼吸に変  
わった。

その頃：どのくらいの時間が過ぎたのかという疑問が沸くまで：  
ただ、抱き合う。

時に、目が合えば：彼女から口を求めてくる。

なにも言わない、喋らない……。

ただそれに応え、唇を合わせる。

軽くも：激しくも……。

時間が流れていく……。

ただ、目を合わせ、口を合わせる。

その繰り返し……。

……。

……。



彼女の顔が、ボヤけて見える…。

今までに見た事がない、微笑んだ顔でいる。

窓から差し込む光…朝日だろうか？

その顔を更に輝かせている。

おはようございます…ね。

そんな普通の挨拶。

俺の顔でも見ていたのか…目がうつすらと開いた瞬間を見計らって声でも掛けてくれたのだろうか？

体を横に倒し…裸の…は？

「お…おはようございます」

頭がまだ、はつきりとしなかったのだが、肩から上だけ視界に収まっている状態。

そのまま眼球だけで、下に移せば…シートで少し隠れてしまっているが、隠しきれないその谷間が、一気に目に飛び込んできた…。

そこで、すぐに現状を理解。

…あのまま、寝てしまって…今のこの状況か…。

よって…目が一気に覚めた…。

「……ん…？」

よく見ると、彼女の頭が俺の腕の上。

腕枕…という奴だろう。

完全に、俺が目を覚ましたと分かったのか、その腕の上の頭をそのままゆっくりとずらして来た。

そもそも、目の前という程に至近距離だった為に、すぐに俺とぶつかる。

ちがうな…。

…彼女は、自身の額を俺の額に、コツンと当てた。

「……………は…ああ…」

そして何かを噛み締める様に、大きく息を吐いた。

吐息…といっても良いだろう。

「…夢では、なかったですね」

「…」

嬉しそうに…ただ、嬉しそうに確認をした。

そしてまた、首に手を回してきた。

そのまま、体を伸ばし…唇を…触れる程度に合わせてきた。

「…なにを、驚いた顔をしているのですか？」

目を見開いてしまったのが、変に気に触ったのか…少し、拗ねた顔をした…。

その顔を見て…思う。

いや…なんか、昨日からの一日で、随分とノンナさんの印象が変わったな。

「い…いや、随分と…ノンナさん…甘えるというか、大胆というか…実際、驚いてました」

「……」

「キス…好きなんですネ…」

「好きですね。ええ、大好きです」

「……………っ!？」

なんか…照れ隠しに、少し怒られる様な発言を試みたら、普通に肯定しちゃったよ…。

ノンナさんは、照れる事をする訳もなく、肯定をしたと同時に、また唇を合わせてきた…。

後は、ただ真っ直ぐに俺を見つめてくる…。

「…そもそも、ソレを教えたのは誰ですか」

「……………」

あ…はい。

「ですから、ちゃんと責任…は、取ってくれましたね？　そういうば…」

「……………」

あ……はい。

もはや、何も言えません…。

「…所で、隆史さん」

「はい？」

「ロシア語…分かるのですね？」

「あ…」

ああ…そういえば…。

彼女の「おはようございます」に対して、普通に応えてしまった…。ならば、白状しよう…と、ロシア語を現在進行形で勉強中だと、経緯を込めて説明しました。

クララさんの事は、流石に今は伏せておこう…。この状態で、他の女性の名前を出すのは、流石にどうかと思った…。

ノンナさんも、驚かすつもりで勉強中だったから、貴女に教わるって選択し無かった…というのも一緒にね。

「…」

「あくすいません。ちょっと、からかう目的とか、不純な理由でしたし…って…どうしたんすか？」

突然、彼女が手でシーツを持ち、体を隠しながら体を起こした…。

そのスタイルの良さとか、そういった事よりも…少し乱れた長い黒髪を垂らしながらも体を起こしたその姿。

朝日で照らすコンストラストも合いまり…見入ってしまう。

しかし、無意識に釣られ、腕だけで体を起こそうとする俺の肩を、指で軽く押して制した。

そして…。

「昨晚の事…。何度も…ええ、飽きる事なく、夢中になって叫んでいた…言葉…」

「……」

「アレの意味もお分かりになったのですよね？」

「あ…はい」

どの事…とは、聞かれないし、敢えて答えない。

お互い、少々気恥ずかしい…。

「そうですか…」

シュツとシーツを擦る音…。

胸元を更に隠し…。

「ここまで、人を好きになるなんて思いませんでした…ですから…

あ…あれは…」

シーツを握り締めた手が、口元まで伸びた。目元だけ…そう、目元だけが俺を見ている。だから、口元は分からない。

分からないが…その、ノンナさんの目は…とても真剣だった。

「…わかりますよ……ね？」

……。

ええ…分かりますよ。

鈍感な俺でも、全部…。

だから、それに応えようと…全ての決心は、終えている。

ノンナさんの気持ちは…言葉は……何もかもが、嬉しく…心に響く。

「はい…分かりますよ。当然じゃないですか…だから…」

だから、今度は…俺から言葉にしなくては…。

「俺も…」 『 ノンナー!! ノンナー!!! 』

』

……。

「……」

「……」

ドンドンと…ドアを強くノックされているね。

ぶっ壊す勢いだよね…。

声だけで、主が即座に分かるね…。

『 起きてるっ?! 起きてるわよねっ?!?!? 起きなさいよっつ!!! 』

気持ちの良い三段活用…。

「…し…心臓が、止まるかと思いました…」

「……あ、はい。俺もです」

殴るように……ドアの中間位の位置から響く、けたたましい程のノック音の嵐……

タイミングがすごい……。

意気揚々と、楽しそうにドアをぶっ叩くカチューシャが目には浮かぶ様だな。

『行くわよっ!! すぐに行くわよっ!! 準備っ! 準備っ!!』

……。

あ、はい。

彼女は、俺がどこかのホテルにでも泊まっていると思っっている様です。

当然だよな……まさか、叩いているドアの向こう側にいるなんて、思っっちゃいないだろうよ。

『タカーシャのホテル、ノンナしか場所、知らないんだから、早くしてっ!! 後っ! 朝ご飯っ!!』

……。

あ、うん。

「……今、何時っすか」

「7時……ですね。カチューシャ……一人で、こんなに朝早く起きられる様になっって……」

「……なんでソコで、涙ぐむんですか……。お母さんですか?」

「あら……気が早いですね」

「……………」

「確かに……安全日だと言いましたが……。まあ私としては、構いませんけど……。しかし、随分とまあ……たくさん……」

「どこ触って確認してんすかっ!! なに嬉しそうな顔してるんですかっ!」

『……反応がない……。本当に寝てるのかしら……』

「取り敢えず、服を着まし……。……あら、元氣」

「生理現象っ!! 男の生理現象っ!! というか、どこ見てるんですかっ!!」

下着を履こうとしている、変に間抜けた格好のポーズの俺を、変に幸せそうな顔で見つめてきた。

やめてください…。

「後…1日は猶予はありますので…せめて夜までは、我慢をして頂けませんか?」

「ですから、男はみんなこんなんですってっ!! とうか、サラッと何言ってるんですか!?!」

ノンナさんは、希に会話をしてくれなくなるなっ!!

凄まじいセリフをバツクに、下着姿のまま、急いで脱ぎ散らかした服を取り、袖を通す。

ああ…我ながら、人生初の甘い時間と言うもんを体験中だと思ったのに、すぐにそれは別の時間に塗り替えられてしまった…。

しかし夜って…今夜の事を言っているのか?

確かに、後一日は此処にいるつもりでは、あるが…。

「……」

いきなり色々なモノを持って余しそうになるので、考えないようにしない!!

「ノンナさんも、早くっ…て、なにしてんですか?」

ノンナさんが、俺ではなく、見下ろすようにベットに視線を移していた。

その上の、シーツを動かず、ジー…と、見ている。

あ…あ…あ…。

「…血…聞いていたよりも、出ませんでしたね」

こ…個人差が、あるのではナイデショウカ?

コメントし辛い…。

「…あんなに痛かったのに…」

コメントし辛いっ!!

「…Хитрый」

また、ずるいつて…って、なんで、こっち見るんですかッ!?

『ま、寝ていてもこの際構わないわ。合鍵で入りましょ。……………』

叩き起こしてやる…』

「!?!?」

「…隆史さん。時間がありません。窓から出て行ってください」

「窓!?!?」

「私は、カチューシャを誤魔化しますので」

「…え…でも、その格好で…ですか?」

「普段、私は裸で寝ますので、不自然ではありません」

「……………」

「…なにを納得した顔で、頷いているのですか?」

「いや…イメージ通りだなあ…と」

「はい?」

『あれ? どこいったかしら…あ、あった』

「よく分かりませんが、取り敢えず行ってください。校門前で落ち合  
いましょう…後は……………」

「あの…考えている所、申し訳ないのですが…ここ2階ですよね?」

「…例え、降りれたとしてもですね? 誰かに見つければ、俺…不審

者以外の、何者でもないのですが?」

「ちゃんと後で、私が弁解しますので問題ありません」

一度、不審者として捕まるの前提ですか?

狭い窓へと脚を掛けると、外が見える。

目の前を、ここまで伸びてきている木が、少し空の青色を遮つてい  
た。

雲一つない晴天…うん、いい天気…。

現状の自分を確認してみると、あの言葉が、頭を過ぎった…。

「ああくっそつ!! 間男みたいだ、俺っ!!」

完全に俺の行動つて、浮気相手っぽいなっ!!

色々な現在状況と、俺の行動を改めて思い描いてみると…ソレ以外  
の言葉が見つからなかった…。

「いえいえ。ちゃんと、本命ですよ?」

「……………」



「……」

ちよつと意味が違うのだけど……まあ……うん。  
言った直後、視線をずらされた……。

「自分で言つて、照れないでください」

取り敢えず、自身の言葉で無駄に赤くなっているノンナさんは、  
頬つておこう。

キリがないだろうさ……。

勢いよく窓を開けると、それなりの高所だと認識させる、清々しい  
風が体を包む。

……中途半端に、現実逃避はやめておこう。

普通に危ない……。

木を使つて……なんとか、なりそうだけど……。

カチ……カチヤツ！ つと、ドアの鍵が回る音がした。

ああああ!!

もう、考えている暇がないツ！

カチューシャに、こんな場面、見られるよりマシだけど!!

「ああ、隆史さん。少し、待つてください」

窓枠に脚を掛けると、呼び止められてしまった。

急ぐ様に言っていたのに……ああ、なんか忘れ物でもしたか？

顔を声の方向に向けると……目の前には彼女の顔……。

「……本当に、好きですね」

また……軽く、唇を合わせ……すぐに離れた。

照れ隠しで、んな事を言つてはみたものの、こうも真っ直ぐに來ら  
れてしまうと……どうも、対応に困ってしまう。

「相手が貴方……だからですよ？」

ほら……顔が熱くなる。



雪を地面に押し込める…その様な足音。

あの人のいるであろう、場所から…少し離れた場所。

車から降り、雪を踏みしめながら、目的の人物の元へと歩く。

音が鳴る間隔が、徐々に短くなっていく。

…足が、無意識に早くなっている。

足が前に出る度に、あの日の事を思い出す。

段々と、順序よく…一步一步、進む度に思い出す。

あの日、あの夜。

あの店前…告白…。

その後…の…事…。

…何度も、何回も。

「ノンナ？ どうしたの？ 顔、真っ赤よ？」

「い…いえ、なんでもありません」

先行して歩いているはずのカチューシャが、こちらを向き、少し訝しげな表情をしていた。

私を見ている事にも気づかないなんて…。

顔を上げ、もう一度、その先を見つめる。

「…」

チラチラと、雪が降る暗い夜…雪が積もる平地。

そんな視界とは、正反対に、頭の中では、明るく思い出が光り…熱い。

やっと…。

数ヶ月…たった、数ヶ月だと言うのに、もう…何年も会っていない様な感覚。

「…隆史さんが、いるかどうか不安でしたら、さっさと車で行けばよろしいのに」

「つつさいわね！ 何も言っていないじゃない!!」

「顔に出ていますから」

「ぐっ!!」

指で自分自身の顔を指すと、人の事は言えない自分に気が付く。

一瞬、顔を顰めたカチューシャ。

ですが、その顔をニヤツとした、笑い顔に変え、随分と楽しそうに…。

「…人の事、言えないじゃない」

……。

早速、指摘されてしまいましたね。

少し慌てたような…そして、拗ねたような顔。

その小さい顔に、自分の指を指しながら言われてしまいました。

しかし、すぐに腕を下ろし…少し真剣な顔に変わりました。

「…まっ。ノンナが、さっさとタカーシャと会いたいのは、分かるけどね」

「……」

ですが、その顔も少しだけ。

また、楽しそうに笑い…いえ、笑ってくれました。

「はんっ！ 最初、あんなにタカーシャを嫌っていたのにねっ！ 分からないものね！」

「人生、不思議なモノですね」

「人生って…その年で、なにを言ってるのよ…」

そうですね。

私達の関係は、貴女しか知りません。

貴女…カチューシャにだけは、この事を報告しない訳には、いきませんでしたから。

「でも、なんで内緒にしたのよ。前に雑誌記者のインタビューされた

時にも、隠してたし…」

「ああ……ダーズリンさんが、隆史さんと濃密な関係？　だとか？  
はっ……そんな妄言を吐いた時のですか？」

「…ソ………ソウネ」

なぜ、カチユーシヤは私の顔を見て、怯えているのでしょうか？

「……なんで……ですか」

…最後の。

本当に、最後のお別れの日。

彼には私達の関係を、極力、伏せておく様に、言っておきました。

「…迷惑になりますから」

そうです。

少なくとも私は、カチユーシヤと共に有名選手と言われる一人。

そんな私との関係が、記者と言われる人種に分かつてしまえば、必ず彼の元に、その人種共が行くに決まっていますから。

ハイエナの如く、少しの情報だけでも、あの様な…。

「……………」

はっ…。

何が、濃密な関係……。

私と彼の関係をオープンにし…色々と、牽制を仕掛けておきたかった…というのも、もちろんありますが…仕方ありませんね。

ダーズリンさんは、どこかで勘付いているのか…だからでしょうか？　あの様な事を宣いたのは。

大洗学園としての彼と、一度会っている…みたい………ですしい？  
勘付いているというのでしたら、あの方が何も仕掛けないとも思いません。

まあ、隆史さんに限って、浮気などは…。

多少？　流されやすいからといって……ええ、彼に限って…

…限っ……て……。

か……ぎ……。

「……」

…不安になってきました。

「カチューシヤ」

「なに？」

「肩車しましょう」

「…え？ …えっ!? なにっ!?」

腰を落とし、彼女の腋に手を差し込む。

そのまま一気に持ち上げ、肩の上に彼女を乗せた。

隆史さんに一度、合体シークエンスは？ だとか…ガチャーンと

か、効果音がしそう…だとか？

そんな、訳の分からない事を言われたので、自分からはカチューシヤを乗せようとはしませんでしたけどね。

今、この場に彼はいませんから、構いません。

「では取り敢えず、少し離れた所迄で、よろしいですか？」

「……え…ええ」

では……。

急ぎましょう。

「ノンナ…？ ノツナツツ!?」

……。

「ノーつつ!? つつ!? つつ!?」

……。

「ゆっ！ 揺れるツ!! こっ…こわっ！ ちよっとっ!!」

……。

「ノンナ!! 肩車しながら、走らないでっつ!!」

……急ぎましょう。

「怖いっ!! 怖いっ!! ノンナアア!!」

走れば、不安感が段々と、薄れていきました。  
ええ…。

不安感とは、別に…他の感情が生まれる。  
ええ…楽しみです。

はい、とても楽しみ…。  
会いたい。

…彼に、会いたい。  
彼を見たい。

顔が見たい…。  
触れたい。

触れて欲しい…。

抱きしめたい。

抱きしめて…欲しい…。

ですから…とても…ええ…。

「楽しみですね？ カチューシャ」

私を見たら、どんな反応をするだろう…。

私を見たら、どんな顔をするだろう。

…ええ…。

とても…楽しみ。

「取り敢えず、全速力はやめてえええ!!!」

◇ ルート ・ 人妻編⑤ ◇ く西住 しほく

文部省からの要請。

ホテルの一室を借り、ただの確認の為だけの会議。

携帯のバイブ音で、我に返る…といいますが、現実に引き戻されませんでした。

誰でしょうか…んな時に。

まあ、流石に今、こんな会議でも、その最中に取り出して確認する訳にはいかないのです、後にしましょう。

さて…。

計画されている、戦車道プロリーグの発足。

…その設置委員会の代表を、私に任せたいとの事だった。

細かな決まり事から、過去に聞いていた案件。

ただ「はい」と、繰り返し繰り返し、頷くだけのあまり意味の感じられない会議。

こんな意味のない会議を、貴重な時間を裂き、何度も繰り返し事にはウンザリしていた。

顔合わせの意味もあるのだろうが、その顔を合わせているのが、若い役員が数名…議長をしている、初老の男性…。

膨大な人数で発足されているこの委員会。…そんな二度と顔を合わせないかもしれないという数名との会議。

…色々な柵があるので、一概に突っぱねる訳にもいかない。それは彼らもまた、同じなのだろう。

「この件」について、話し合いをしたという事実が必要なのだろう。

「では、最後に…西住さん。このまま予定通り、設置委員会の委員長を願っていたと思います」

その短い会議の議長から、締め挨拶が行われ様としていた。

私が、ほぼ頷くだけの会議。途中の説明も、存じてます…の一言で、何度か飛ばさせた。

早々に、こんな会議を終わらせたかった為…というのが一番。

…まあ良い。そういった訳で、漸くこの場所から開放される。こ

「はい。では皆様、宜しくお願ひします」  
席から立ち上がり、軽く会釈をする。

「……」

はあ…。

無意識にため息が出てしまいそうになる。

男性の視線…というのは、非常に分かりやすい。

特に私の場合、昔から…それこそ、まほやみほの年齢位から、嫌と言う程感じていた。

今も変わらずの女の園…黒森峰女学園。

私は西住流次期家元…後継者として、否が応にも注目され、学校以外にも私は有名になっていく。

メディアにも取り上げられ、世間に目に晒される。

お陰で、特に地元…その街を歩けば、声を掛けられる事も少なくなかった。

…声を掛けられなくとも、視線は向けられる。

そこで気が付く。

まず最初に、見られるのは、顔…もしくは胸。

特に移動などしている時は、胸から見られる。

…男性達は、バレていないとでも、思っているのだろうか？

私も学校や寮、家に引きこもっている訳にもいかないので、仕方はないと諦めてはいたが、その視線を何度も受けた。

しかし、仕方がないとはいえ、不快な物は不快だった。

特に大人…。

同年代の男性の視線は、まだ我慢できた。

…が、大人の男性は、虫唾が走る。

戦車道に関わる、成人した男性…特に今現在、私が相手をしているような輩は、一般男性に比べれると、その視線がおぞましかった。

舐める様な、まとりつく様な視線とは、良く言ったモノだ。

何度、それを経験したか…。

俗に言う、いやらしい視線…と、ハッキリと断言出来る程に、高校生に対して向ける目ではない者が、多い事、多い事。



女性競技だというのに、そんな男共が上にいる社会。セクハラを受けたという者が後を絶たないのは、言うまでもない。

如何わしい噂の存在も、完全に否定できなかつた。

セクハラ……。それ以上の……体を使った接待など噂も、遺憾ながら聞き覚えがある……あるからこそ。

噂は噂だが、これから娘達が進む……一般社会の戦車道の世界。

そういった事態が、間違つても起こらない様に、千代さんと共に奮闘していた。

そういった疑いも持たれる人物は、大抵がその嫌らしい視線とやらを向けてくる輩が多かつた。

……既婚者で、子供まで産んでいるというのに、その私に対しても、その視線を何度も向けてくる。

いや？ 寧ろ、若い頃より今の方が一段と酷い。

常夫さん……夫が、単身赴任だと言う事を知っている者からの、遠まわしな誘いの様なモノも何度か受けた。

まほと同じく「鉄の女」など、揶揄される様な事もあつた私に対して、些か疑問なのだけでも……。

まあ……全て突っぱね、指をヘシ折……いや、不幸な事故？ に、発展してしまう事も少なくはない。

そんな学生時代の時の事までも、思い出してしまう程に、その嫌な視線を正に今……感じていた。

「では、本日の会議はこれで終了と言う事で……お疲れ様でした」

「家元も、貴重なお時間、ありがとうございます」

「いえ……」

……。

くっ。

胸が重い……。

ただの会釈をしたただけだと言うのに、重心が少し、前に持っていられる。

私の挨拶を切っ掛けに、各々立ち上がり、私に向けて声を掛けてくる。

曖昧な返事を返し、適当に合わせてる。

…そう、その視線。

大人の方が、作り笑いを浮かべ真正面から見てくる。

歪んだ目元の奥から見える、その視線が非常にうっとおしい。

会議中…上座に座らされた私を見る目が、ほぼ一点に集中されていたのが、今でも思い出される。

……。

ダメですね。

先程受けた、マッサージのせいでしょうか？ 無駄に体中の血行が良くなったと実感してしまっています。

大分良くなりましたが、変なアロマの匂いで、頭も少しハッキリとしませんでしたし…。

後は…ええ、隆史君の底意地の悪さを見せつけられて…。体が変に熱くて仕方ないですね…。

その隆史君に言われ…正直、頭に少し血が上っていた状態…と言うのもあり…素直に従ってしまいました…。

下着も着けないで、この様な場所に赴いてしまいました。

…腕を組んだり、資料で隠したり……できるだけその状態を隠す様に、不自然にならない様に注意を払い隠していたのですがね。

素肌と布地と擦れる感覚や何やらで、落ち着かない…。

…しかも第三ボタンまで開ける様に言われて、またそれにも素直に従う私は、年甲斐もなく馬鹿なのではないでしょうか…？

隆史君には内緒ですが、流石に社会人として、こんな年で、どうなのか…と思ひ…途中で一つ、閉めてしまいました…。

…。

しかし、その閉めている最中の時が、一番視線を集めてしまったと感じたのは何故でしょうか？

特に、一番若いと思われる男性役員…。

一回り程、年齢が違うと思うのですが…特に熱心に…。

…ここ最近の…その…隆史君との事で、気が付く様になってしまいま

した。

男性の…その視線に種類がある事を。

思い起こせば、何度か感じた事があるその種類の視線。

隆史君が私に向けてくれる、ソレと少し似ていた。

通常、女性の肌や凹凸を見てくる視線は、異性に対して…といのは勿論ありますが、主に興味の色が強いと感じます。

不快と言えば不快。

ですが…まあ、若い子は異性に対しての興味が強いでしょうから？  
仕方ないとは思いますが…。

それでも、一瞬。

しかし、この若い役員から見て取れるのは、ジツ…と見てくる者に多く感じる…完全に女として見てくる視線…と、言えば良いのでしょうか？

…隆史君と同じ…。

つと…いけない。

忘れる所でした…先ほどの携帯の着信。

今日は、変に考え混んでしまいますね。

バッグを開き、携帯を取り出し画面を確認…ふむ。

メールですね。

隆史君からのメールです。

あの子が、メールなんて珍しい…電話を掛けてくる事が大半ですのに。

しかし…なんででしょう？ 今、工作中だと知っている筈なのですが

…ああ、ですからこのメールですね。

画面を操作し、そのメールを開く。

その間の動作にも、チラチラと視線を感じますが、それはもう頼っておきましょう。

その内に飽きるでしょうし。

ん…？

件名が…「会議が終わった直後に見てください」…ですか？

会議中に、私がメールを確認するだけでも思ったのでしょうか？

まあ…いいですが。

では、その会議が、終わっているので開いてみますか？  
……。

『戦車道チョコカード会議。大洗ホテルの夜。カードキー。その部屋前。』

……。

ん？ 暗号でしょうか？

そんな単語とも言える文字が、メールの内容でした。

…あの如何わしいカードの会議…の日？ と言う事でしょうか？

その夜で…。カードキー…。

ああ…私が、情けなく酔ってしまった…それで…。

その部屋前。

……。

ゾクツ…と、背筋に何かが走った。

私は何を思い出すか…いえ、これは違う。

これは、あの時の…隆史君に言われたからではなく…私自らが、行動した事。

場に流され、お酒も入っていたのもありますが、完全に私が選択し、そして…行動した事。

その、アノ光景を思い出させるメール…。

これを言われたのは、あの宿から2回目だった。

すぐ様にその光景のフラッシュバックが、脳内を掛け走る。

変に熱い体が、その記憶に反応してしまった…。

これを人前で、私は何をした…と、また…。

一度考え出してしまったら、そのまま連動し…一気にその時の状況を思い出す。

ホテルの廊下で、人目に付くという状況下での行為…。

夢中になって、隆史君の…アレを口でしゃぶり…味わい…。

無意識に、喉が鳴る。

舌を這わせ、滑らし…音を出す。

途中…彼は、通行人と会話を始めた。

…内容は良く思い出せないが、彼は体で私を隠してくれていた…のだけど、まだ行為を続けるように私に…。

いや…正直、その指示が、私の枷をほんの少し外した。私自身、やめたくはなかったのでしょうね…。

味わい、舐め、啜り……例え、このまま見られたとしても、気にする事などないだろうと…。

案の定……見られた。見られてしまった。

だらしなく、男性のソレにむしゃぶりつく、浅ましく男を求める女の顔を。

見られていても、構わなかった…もう、思考がその頃には麻痺していたのだろうと思う。

無意識に組んでいた腕に力が入る。

グツ…と、少し反動で胸が軽くなった気がした。

「……は……ああ…」

無意識に、小さくため息がでる。

情けなくい自分に対して…完全に自分を律する事が出来ていなかった…。

その時に見ず知らずの男性と…一瞬だけ目があったのを覚えている。

廊下の照明がバックライトとなり、顔は影で黒くなってしまった。だから、その顔は見えなかったが、目だけ…その私を見る目が、強く私の記憶に残ってしまった。

…ゾクゾクと、背筋を這う様な感覚。

反射的に背筋を伸ばしてしまった…。

「あの…家元？ 西住さん？」

「っ！ っと…何でしょう？」

いけない…いきなり思考が、変な方向へと引っ張られてしまいました。

我に返り、周りを見渡すと、皆が立ち上がり、部屋を出る準備をしていた。…が、揃って私を見ていた。

「…いえ。そろそろ…」

「ああ…申し訳ありません」

部屋を出ようと…そういう事ですか。

そうですね、私だけ携帯を見て固まってしまっていましたからね…迷惑でしょう。

…何故か、呼びかけに応え、顔を上げると、彼らは少し目を逸らしてしまいました…。

しかし…その逸らした目を見て、気がついた。

メールの最後の文。

その文を見たから気がついた。

気付かされてしまった。

『同じじゃないですか？』

…と。

なんの事を指しているかの言葉か、定かではありませんが、「同じ」という言葉で、何が当て嵌るか一瞬考えてしまった。

そして気がついた、その「同じ」。

思い出させて、検索させて…私自身に気づかせた…。

あの時の見知らぬ男性と「同じ目」に似た視線で、私を見ていた事を。

その…幾度も幾度も向けられた視線が…それが、どういう視線だったかという事に。

「…：…っ！」

また…言い様のない感覚が、そこから湧き上がる。

そこでまた、気がついた事が一つ…。

全員が立ち上がったのもあり、その為ごまかすのが難しかったのでしょいか？

一番若い男性の股間が、ズボンの上からでも分かる位に、少し…。

「では、私はこれで失礼ます」

「あ、はい。お疲れ様でした…」

誤魔化すように、早々に挨拶を済ませる。

携帯をバッグへと戻すと、足早に出入り口へと脚を動かす。

……。

まずい……。

一度、意識してしまつたら、一気に脳内に記憶がなだれ込む。

あの時の夜を、その後も、その次の機会も。

連想が、止まらない。

先程から変に熱い体が、無性にむず痒くなつてきている。

段々と、思考が麻痺してくるのを感じる。

もう余計な事を考える余裕が、なくなつてきている。

…目の間の不快な視線なんて、もうどうでも良くなり…先ほどのメールからくる正体不明な感覚がまた襲う。

ゾクゾクとした感覚が、背筋から肩まで遅い、ブルツとその肩を震わせてしまった。

今までの経緯と経験が、隆史君を…記憶と共に、体も思い出してしまった。

…もう、本当に目の前の事はどうでもいい。

もはや、一応の挨拶は済ませてある。

義務は済ませたので、もはやここに用はない。

…その部屋から飛び出す様に、足早に部屋を後にした。



「な…なんだつたんでしよう?」

西住流家元が去つた、男だけの会議室。

呆然と一人の男性が、声を漏らす。

なんだつた? というその言葉に、誰もが同じ事を連想した。

最後のため息。

メールを見て漏らした、そのため息は、その場に相応しくない色

だった。

：聞く者、いや？ 男性なら誰しもが息を呑むであろう、甘く、官能的な：吐息。

普段の彼女を知る者：それも違う。普段の彼女を一度でも見た事がある者ならば、誰もが予想すら出来ない程の声。

表情：その目。

完全に予想外の打撃を受けた男性達が、呆然と立ち尽くし、彼女が出て行ったドアを揃って、ただ見つめている。

それは、仕事一徹。生真面目で温和な性格をした、初老の役員ですらも感じていた。

その場を誤魔化すように、白髪に染まった髪を、手で後ろへと流すように一撫でしながら、乾いた笑いを出すしかなかった。

今日の家元様は、初めから様子がおかしかった。

それもまた、誰しも一斉に思い出した。

妙に薄着で、普段なら考えられないほどに、その何時もの制服とも言えるような服装を着崩して登場した。

確かに今回は、そこまで厳格になる程、重要な会議ではないが、それでも：だ。

娘：「鉄の女」と揶揄される「西住 まほ」以上に、融通が効かず、もう一段階上の「鋼鉄の女」と揶揄される家元。

その彼女からは想像すら出来ない程の格好：直線で真っ直ぐ「I」の字を体で描いている胸を前面に出した、開かれた服。

ちよつと、そんなの姿も見てみたい：と、男性達からすれば、寧ろ妄想の域であろうその姿。

拳句：。

《……………》

誰しも場に飲まれ、下卑た会話すら出来ない程の空気。

しかし全員が、気がついていて。この場では、口には出さなかったが気がつくだろう。

あれ：下着着けてないんじゃないかと。

今回の会議：誰もが聞いていなかった。というか、頭に入ってこな



い。

ただ一点の動きを、どうバレずに見る事しか考えていなかった。生真面目な初老の役員は、それでも気を使い、極力見ない様にはしていたが、彼も男性。

いくら見ない様にしていても、視界に入れば、嫌でも意識してしまう。

彼は、紳士だった。

それに気が付けば、今度は視界に入らない様に、目に力を入れて完全に視界から家元を追い出し、なんとか場を凌いでいた。

本来ならば、遠まわしに指摘し、上着を着て貰うなどすれば良いのだが…世知辛い世の中だ。

セクハラだと言われてしまえば、男性の立場からすれば、説明も弁解も非常に面倒くさい事になる。

…しかも、あの西住流家元だ。その事案で揉めれば、どれだけの労力を裂くことになるか、想像もつかない。

特に彼女の事だから、その目のやり場に困る格好も、何かしらの致し方ない理由が有り、仕方なくだろうと全員が確信していた。

よって思考停止のスルーを決め込む。

「……」

しかし比較的他の役員は、初老の役員に比べれば、ある意味素直だった。

流石にジツ…と、穴が開くほどに見てしまう事はなかったが、見してしまう。何度も何度も見ってしまう。

ある意味で仕方がなかっただろう。

家元は、腕を何度か組んでいた。

会議中に腕を組むとか…と、思うかもしれないが、それを指摘する勇氣は全員にはなかった。

腕で胸を隠すようにした仕草が、何度も見受けられたから察していた…というあるが、その状態を見ていたいという欲求が何より勝った。

その腕が胸を圧迫し、下着を着けていない為…更には前を、大きく

開いたワイシャツから押し出された谷間を見ていたかった…という欲求。

《……………》

そして、初めから何故か、表情が妙に熱っぽく感じる顔。動く度に揺れ動き、圧迫されている胸。

その眼力で殺されるかも…と、錯覚させられる、その目も何処かしら潤み…。

そして…一々、呼吸が艶かしかった。

若い役員からすれば、普段の鋼鉄の様に固く、隙がない彼女。

…下手な上司より、恐怖の対象以外に言葉が見つからない。

しかも、一回り近く年上。30代後半の女性。

…しかし、そこで初めて気が付く。

30代後半の女性とは思えないその見た目。

服の上からでも分かる程の豊満な胸、引き締まった体。

そして今回、殴られる様に…痛い程感じた、そんな女性からの強烈な色香。

午前中にて、焦らされ、お預けをくらった西住流家元。

昔からそちら方面に疎かった彼女は、短期間で強烈な「快樂」という刺激を、精神面と肉体面へと何度も同時に与えられ続けられた。

特殊な環境、人間関係…欲求不満、ストレス。…その刺激は、どうしようもなく、半場諦めていたソレらから、彼女を徐々に開放していった。

精神面では「背徳感」を前面に押し出され、腰が砕ける程の快樂を同時に与えられる。

露出、公開…擬似とはいえ、複数での行為を匂わされ、その「未体験の快樂」が歪んだ「期待」と「欲求」を生む。

それら全てを与えてくれるのが、昔から…それこそ、子供の頃から知っている男。

…しかも自身の娘の恋人。

そんな相手から、調教されているとも言える、そんな体験が、女としての彼女を前面に押し出し始めていた。

その場にいた男性達は、なまじ西住流家元としての「西住 しほ」を知っているからこそ感じるギャップ。

アンバランスになった彼女から発せられる、その強烈な雌としての淫靡な色香に…完全にやられていた。

しかし、感じ取ったソレを、口に出す事に躊躇し…その男性達は、そのまま誰も口を開かずその部屋を後にした。



ピツ…と、小さな電子音。

その電子音の後、すぐにカチャリと、鍵が鳴る音がした。

「……」

急いで戻ってきた、宿泊部屋。

そのドアノブに手を掛ける前に、自然と…少し急いで来てしまったのもあり…気休め程度で、髪を手で撫で整える。

まだ体が熱い。

何もしなくとも、指先までも体温が上昇しているのを感じる。

首、額…どこを触っても、熱でもある様に酷く…熱い。

自身の宿泊部屋に戻ってきただけだと言うのに、何故ここまで変に緊張してしまうのか。

「フウ…フウ……」

喉の奥から、小さく呼吸が漏れてくる音が変に大きく聞こえてきます。

そうですね。やはり何処かで緊張しているのでしょうか？

いえ…何を緊張する事があるのでしょうか？ …ただ、仕事を終

え、部屋に戻って来ただけです。

仕事…。

仕事……。

その仕事を行った部屋で、私一人へと向けられた視線……その目が、一瞬脳内を走った。

あの目……。

職場……いえ、「戦車道」に関係する事柄で、特に若い男性達から、感じた事がない目。

大体は、萎縮して見上げるようにしてくる、情けない目が多く、特に気に知る事もなかった。

あの手の目は、大体……打ち上げ等行われる場所で、それなりの年齢の男性からの視線に類似していた。

しかし、その目も、期待……と言うのでしょうか？ あわよくば……その様な視線。

殆どが、セクハラだと不快になる、からかわれている……とも思える視線。

しかし、あの場の視線は違った。

あれは……。

「つつー！」

また一瞬、ゾクツと背筋を舐めるように這った、良くわからない感覚。

肩を一回……小さく震わせると、ソレラを振り払う様に、頭を左右に振った。

……やはり、何処かおかしい。

鼻の奥に媚びり付いている、あのアロマの甘い匂い。

これのせいで、どこか頭の奥が、ボヤけている様に感じる。

はあ……。

「戻りました……」

家に帰る時と同じような、挨拶。

部屋の前に立ち尽くしていても仕方ありません。

次の行動にできれば、少しは紛れて……その内に忘れるでしょう。

ドアを開け、少しホテル特有の薄暗く短い廊下を歩き、部屋へ向かい歩く。

さて…その言葉は、誰に向かい言った言葉なのでしょう？」

「……」

…彼は、特に待っているとも言っていないかった。

みほ達には、午前中、彼を借りますよと言ってただけ…。

ならば、彼も戻って…あの家へと帰ってしまっていると判断するのが普通でしょう。

まあ…いないならいないで…仕方ないとも思っていたので、特に…。

しかし…少し…胸の鼓動が強くなっているのを感じます。

…何処か期待していた。

いえ？ いるだろうと…確信していた。

何故なら、午前中…同じく、彼もまた中途半端だったと。

…一緒に、シャワーを浴びる最中…これまで以上に、雄々しく…硬く聳えさせていた彼自身を見ていたから。

そうです…そうですよ。

午後になつているとは言え、まだ日中。

みほがいたとしても、彼女の友達もまたいる…夜までは時間がしばらく掛かります。

それにまた、彼も若い男性。…そうそう、我慢なんて出来ないと踏んだからです。

みつともなくも、浅ましく思える程に、私は夢中で…それこそ、仕事など二の次にして彼を、求めてしまった…私。

そんな私を見ているのですから、当然…その仕事を終えて、帰ってきた私が…彼なら分かるでしょうしね…。

「…みほ」

娘の名前を、先程から何度か思い出していました。

はっ…こんな、今の私を…この関係がバレてしまったら…。

怒られ…泣かれ…それとも、ふしだら母と笑うでしょうか？

今度は、あちらから縁を切られてしまう…でしょうかね。

…しかし、もう無理。

今更、止められません…。

何処か：私の奥の方で、娘に遠慮をしなくなり始めている。  
罪悪感は勿論感じますが………何処かでそれすらも…。

段々と視界に入ってくる室内。

小さく音が聞こえてきた。

テレビでも見ているのでしょうか？ やはり…：いてくれましたね。

目に一番初めに入ってくるソファアが見える。

…ほら。

それに腰掛けている、彼の足が見えた。

顔が熱く、胸が大きく叩く音の中…：そんな私を、彼はこの後…：どう

してしまうでしょうか？

脚を踏み出し…：彼の姿を…。

「……」

「……」

なんででしょう。

彼はいました。ええ、いましたとも。

そのソファアに座り…：両腕を背もたれに、大きく開いて乗せ…：頭を垂れて…。

「……寝てますね」

ええ、確かに寝ています。

口に出して確認しなくとも、寝てますね。

テレビをつけっぱなしにして、寝息を立てています。

……。

見下ろす…：無防備な彼を見て、思います。

ええ…：子供の時と、大分変わりました。

抱かれ、一緒に共にした寝所と違い、今は完全に第三者視線で、その姿を見れます。

正直、子供らしさが余りない、子供でしたが…：それでも妙にそこが可愛く、娘を甘やかせない気持ちを彼に向けていた。

それをまた彼が、素直に…：それでも子供なのに、どこか遠慮する姿

が、妙に嬉しくて嬉しくて…。

…ふっ…と、小さく笑ってしまう程。

……。

……………。

あ…。

これ…ひよつとして…好都合なのでは？

先程の彼からして、しかも彼の性格上…ひよつとしてまた、お預けを食らってしまう展開…というのも視野にいれていたのですが…。

今の彼なら…簡単では？

一度、始まってしまえば…そんな簡単には、止められないし…止められない。

「フー…フー……」

ゆっくりと近づく…なんて事はしない。

彼が起きてしまうとかの考えも、すでに飛んでいた。

ただ…気がついた時には、彼の正面に立っていた。

彼の両膝に、手を置き…ゆっくりと開く…。

膝を付き、しゃがみ込むと…彼の項垂れている顔を、下から見上げる。

目をつぶり、口を少し開けながら、小さく寝息を立てている…。

…寝ている。

先程の子供の頃の、昔の思い出…感傷なんて、一瞬で吹き飛びました。

この行為が卑怯だとか…彼との関係などとか…一緒に頭から消えていました。

好都合。

そう思ってしまった時より、ただ…もう。

我慢に我慢を重ね…なんとか仕事を乗り切った自分を漸く開放できると…欲望しかなかった。

彼の内股へと手を這わせると、ズボンの布生地をスー…と音が鳴った。

その先…すでに収まってしまっている、その先へと目を向けると、

そこに顔を添えていた。

鼻で息を吸い…頬を左右に擦りつける。

特に特有の匂いなどする訳もないですが、何故かこうすると…お腹の奥が、物凄く熱く熱を帯び始める。

すでに体は、溶けてしまう程に熱くなっている。

「……」

また、スー…と布を摩る音を立てさせる。

今度は内股の奥から…同時に脚を開かせる様に……。

……。

ささて…これで…。

「…しほさん」

「つつつ?」

……。

テレビの音が聞こえる…。

いえ…それしか、聞こえない…。

それでも静寂とは、こういった事を指すのかと、思わせるほど…。ゆっくりと…顔を上げると…彼と目が…。

「……あの……」

真顔で見下ろす彼に向かい、そんな言葉しか…出てこなかった…。

「…最初から起きてましたよ」

「」

聞く事は分かっている。

そんな彼は、その答えだけを口にした。

お陰で、私の体はそこから逃げる事もなく…彼の股間付近に頭を埋めた状態のまま…硬直している。

「…帰ってきてから、一直線に、いきなりとか…」

「あ…いえ…それは…」

呆れる様な目で見下ろす彼が、一瞬目を逸らし、更に大きいため息をついて…一言。

「ごちゃごちゃと考え事はしていましたが、振り返って思い出してみれば、部屋に入り…いきなりコレでしたね…。」



「まったく……母娘だなあ」

「はい？」

母娘？

え……つと、意味が良く……

「……んっ」

額に隆史君の手が添えられた。

そのまま前髪を後ろへ流される様に、優しく流された。

「はあ……それに、たった半日しか持たないとか……」

ただ、口調は完全に呆れていた……

一日も持たない。

その言葉で分かりました……

やはり、午前中……途中でやめたのは……彼の……

「そ……それはっ！」

「いいですよ…… しまししょうか」

……え？

彼の発言に、恨み言が出そうになった。

が、その一言で、全てがまたどうでもよくなる。

「ごちゃごちゃとした脳内が……「彼がその気になった」と、その事だけで歓喜に満ち溢れてしまった。」

「しまししょう」というセリフが、どうか……すでに、その気になってい  
る私にはもう、どうでも良い事だった。

すぐに立ち上がり、ベルトをカチャカチャと外すと、ズボンの一番  
上にあるボタンだけを外した。

余計な会話も無し。今までの彼の考えが、どうかかも無し。

楽になれる……疼きに疼いた体を収める事が出来る。

それしか、すでに頭になかった。

その光景を眺めている私に対し彼は……

▽

「んっ…ふっ…」

ジ―…ジジツ―…と、不規則にチャックが落ちる音が、目の前から響く。

少し、金属の味がする。

私を見下ろす彼は、手を使う事を禁じた。

すでに疑問もなく、ただソレに従ってしまっている私…。

プライドも何もなく、たった数時間…彼に焦らされただけでコレか…。

自身の変わり様と、この今…男性の股間の前で、歯を勃て、浅ましく男根を求める為だけに、そこを開いている。

ただ羞恥だけは、変わらず襲ってくる。

残っている羞恥心が、顔を熱くする。

上目使いだけで、彼の顔を見上げると、ジ…と、私の目を見続けた。いた。

…喜んでいる。

と…何故かそう感じた。

撫でられる頭に、隆史君の体温を感じ…喜んでいると感じたら、またお腹の奥が熱くなる。

「んっ…んっ…はー…」

少し苦戦しながらも、なんとかチャックを下へと下ろす事ができた。

…何をしているのでしょね？ …私は。

何故こんな事で、妙な達成感と…期待感が膨らんだのでしょうか。

彼の下着の上を、また歯でか…。

「…隆史君。何故、すでに大きくしてるのでしょうか？」

「…」

…ちよつとした疑問を口にする、私を見ていた目を、顔ごと逸らしました。

こんな行為をしている私を見て、興奮でもしたのでしょうか？

…そんな事で、何故興奮するか分かりかねますが…。

まあ…せっかく大きくしてくれてますから、下手に言わない方が良いでしょう。

ならば…と、下着を下ろす事ではなく…その下着の男性性器を取り出す窓を少し噛み…少し強く上に伸ばします。

そのまま舌を使い…その中へと。

「…しほさん」

ただでさえ、彼のは大きいのですから…と、上手く根元を…そしてそのまま舌をまさぐらせ…。

「一度、旅館でコレっぽい事、しただけで、ここまで上手く…」

「んっ…はっ…」

ズルツ…とこの窓から引きずり出しました。

まあ、最後はそんな私に見かねたのか…少し下着が上から引っ張られる感触がしたので、彼が手伝ってくれたのでしようけど…。

「あの…しほさん？」

目の前に、突き出される男根。

上に反り…跳ね…ピクピクと、少し脈を打っていました。

はあはあと、荒い呼吸が、喉を通して吐き出されます。

「…しほさん…」

「んっ…れあ…」

舌を根元から…ゆっくりと上へと這わせると、ビクツと何度か彼の腰が跳ねましたね。

その舌から伝わる、味…。

そのまま…上へ上へと、舌と顔を移動させ…。

「き…聞いちゃいねえ…」

男根を飲み込む様に、口に含んだ。

口に広がる、男性の匂い…味…。

「くっ！」

じゅるっ…と音がした気がします…まあ吸いながら、舌を亀頭周りを舐めたせいでしょう。

唇を亀頭の突起部分に引っ掛け…小刻みに少し動き…まずは、一番初め。

その先端から溢れて来た、少量の苦味を感じる。  
……感じたら……

後は……もう……

ただ立っているだけの彼の男根に、ただ、むしやぶり始めてしまっ  
た。

……。

……。

舌で、もう一度亀頭周りを舐めまわす。

そのまま一気に、喉元近くまで押し込めると……それでも、まだ口の  
外へと残っている部分があるのが、私の期待感を更に跳ね上げてくれ  
た。

チュプチュプと、唇だけで音を立てながら、前後に動く。

吸って欲しいと言われれば、舌の全面を使い、顔を引きながら……

「ぢゅっ……ぶっ……ブブブ……はっ……ぢゅぶる……」

下品なのは分かっていますが、音を出させる様に言われたので……

「んっ！…んっ！…んっ！…んっ！」

ぢゅぽっ！…ぢゅっぽ！…ぢゅぽっ！…ぢゅっぽ！…と……私の声  
と連動する様に、動かす度に音が鳴ります。

カリ……と、言っていましたね。その部分に唇が引つかかる時に、特  
に大きな音がします。

それを彼に、聴かせる様に、何度も何度も……

すでに私の唾液でベチャベチャになり、糸を引き……それをまた私に  
啜らせる。

亀頭の前……尿道付近から、まだかと中のカウパー？…でしたか……そ  
れを舌で掘じる様に書き出した。

「ヂュツ……ヂュユユ……」

苦味が……少し濃くなった……

しかし……

「は……は……あっ……はあ……」

「しほさん…口だけで、ここまでできますか…」

少し、休憩だと口を離すと…隆史君がそんな事を…と言いますか…。

「…こんな歳の私に、教え込んだのは貴方でしょうに…」

「いや…まあ…でも、知らなかったでしょう？」

「ま…まあ…ただ、動かしていただけですから…」

そう…知らなかった。

常夫さんに対しては、ここまで求められなかった。

ただ、動かす…男性への前戯。

口だけの行為…ただ、男性しか気持ちの良くない行為。

それが使用によって、ここまで変わるなんて…。

口から…舌から…何よりも、匂い。

ここまでダイレクトに感じて、頭の奥を焦がす様な熱をくれる。

会話をしながらも、男根を横から啜えながら…ゆっくりと舐める。

ぴちや、ぴちやと…これも音を立てながら…。

どんな顔をしているかも、想像出来ない程、口で愛撫を繰り返す事に集中してしまっている。

舌先から感じる感触、匂い…味が…頭の中を痺れるような熱で満たし、ただ貪るだけの…。

…。

嘘だ。

先程から、一瞬…ふと冷静になる瞬間があります。

彼が前に、私に教えた事を思い出しながら…だらしなく伸ばす舌と口内で、下品な音を出し、それを忠実に実行しようとしていただけです。

熱が私を支配しようとするのですが、時に漏らす彼の言葉に瞬時にその熱を下げられる。

必死になり、行為の一つ一つを頭に浮かべ、強引に…そう、強引に、

ただの女になろうとしている自分に気がつかされる。

何度も…何度も…繰り返して。

ええ…。

…まったく集中ができていない。

また…それと同時に、口に広がる匂いが刺激し、私の奥の方の何か  
が、彼を…強く求めさせてくる。

混乱する…なんなのでしよう？ この感覚は…。

何も考えたくない自分と、何処か何時もの私とでせめぎ合っている  
気がしてならない。

隆史君は、そんな私を、気にも止めないようにいつもの様子が、ま  
た…私を焦らす。

…焦らす？

「…？」

隆史君が、横のテーブルの上に置いてあった、テレビのリモコンを  
手に取った。

ああ…つけたままでしたからね…。

テレビへと、そのリモコンを向けると…。

「今のテレビって、ネットにも接続できまして…」  
消すとばかり思っていたのに、違う画面へと切り替えた。

『撃てば必中 守りは固く 進む姿は乱れ無し 鉄の掟 鋼の心  
それが西住流 』

ビクツ！ …と、肩が跳ねた。

…私自身で気が付く程…強く…大きく。

体…いえ、魂にまで刻み、染み込んでいる家訓。

その家訓が、私の声で…はつきりと聞こえた。

「このホテルも接続してあったんで…待ってる間、動画サイト見てま  
した」

何気ない世間話…の、様に喋る隆史君は、そのテレビ画面に顔を向

けていた。

そのアナウンサーの声で、何か分かりました。テレビに映し出されているその映像は…声は…。

『 本日は、戦車道の強豪校である、黒森峰女学園。その…』  
過去に一度受けた事のある…。

『 西住さん。本年度の試合は、非常に残念な結果に終わりましたが…』  
流れるように、流暢に話すアナウンサー。

動画サイト…と、言っていましたね。これは…録画の過去の録画映像でしょう。

横目で見れば、まだ…試合が始まる前の…苛立ちに満ちた私が映っていた。

眉間にシワが出来てしまうのでは無いかと思うほど、眉を吊り上げた私。

「昔のしほさんのインタビューですね。」

戦車道全国大会へ向けてのインタビューでした。

…何故、こんな物を…今。

『 残念？ それ以前の問題です。話にすらならないー』  
頭に手を添えながら言われ、特に気にするまでもないと、先程の様に口を…。

「このインタビュー…雑誌にも取り上げられてましたよね？ 俺がまだ青森にいた時でした。まあ…あの時は、俺もソレ見て破り捨ててしまいましたけど…」

この画面の向こうの私は、忌むべき私。  
気にする事は、ない…と、思うのですが…しかし…。

『 西住流は何があっても、前へ進む流派。強きこと、勝つことを尊ぶのが伝統…』

西住流を頭に出し、自身の娘を貶める言葉を、何度も何度も…苛立ちを籠めた声を吐く私…。

みほに向けて、追い詰める様な発言を淡々と繰り返している。

それでも感情的にならぬ為に、眉間に皺を寄せない様に、顔を顰め

ない様に…。

その忌むべき私は、無表情を取り繕っていた。  
…。

「…くっ…。しほさん」

何故、この様な動画を再生したのか…それを今更私に見せてきた隆史君が、少し苦しそうな声を上げ、私の名を呼んだ。

目に力が入っているのが分かる。目がつり上がってしまっているのでしょうか…そんな目で私は、私を呼んだ声の元へと視線を移すと…。

「激しくなりましたね」

…：…：激し…？

「手は使わないようにと、言いませんでしたか？」

初め、何を言っているか分かりませんでした。

ただ何故か、自分の手の中が、人肌だとは思えない程の熱を感じる…。

何故か？ 答えは簡単でした。

彼の肉棒を挿んでいた。

挿んでいただけではなく、自分の唾液塗れのソレを撫でる様に動かし…。

ただ、射精を急かす様に、無意識でしょうが、彼が前に言った通り…：教え込まれた通りに動かし、刺激していた。

動かしながら、時に舌を突き出し、肉棒の先端…その根元をなぞる様に。

口内の内側を使い、擦りつける様に。

顔を倒し、骨をしゃぶる犬の様に、根元から舌を下から上へと…：激しく動かす自身の手の隙間、合間を何度も。

何度も何度も…：更に味わう様に、むしろぶりついていた。ただ、一点…。

…：視線だけは、その画面を向けている。



昔の自分から、目が離せない。

ほんの数ヶ月前の姿だと言うのに…。

手元からは、彼の肉棒の表面にまとわりつく唾液をグチュグチュと、混ぜるような音が響く。

激しくなつたと、指摘された。…それでも私は止まらない。

見せられ…いえ、見せつけられた昔の私。

私は昔の自分を…今のこの行為で、否定したかったのでしょうか？  
見たくはない。…こんな私は、今更見たくはない。

必死に…夢中になり、その姿を振り払う様に、行為に集中し…コレを突き付けてきた彼に…逃げる。

しかし、外せない。

視線は…浅ましく淫らな行為をしながらも、外せなかった。

…わからない。

わからない。

ワカラナイ…。

私は…一体…何を、どう…。

「…もういいですよ。顔を離してください」

「じゅっ…ぶあっ…あ…はあ…はあ…」

額を少し、強く押されて、肉棒から顔を離されてしまいました。

口から離されると、代わりに、荒い呼吸が何度も肺から吐き出される。

…ここまで息を切らす程に、夢中に…。

「いきなり、激しくするからですよ…ま、どちらもですけど」

混乱した頭でも、分かる程に、目が泳いでいたのでしょう。彼が少し、苦笑し目の端を親指で、触れてきた。

彼は立ち上がり、片方の手で、激しく自身の肉棒を扱き始め…。

…昔の私の…声が聞こえる。

しかし今度は、そちらを見る事は無かった。

今は目の前の彼から、目が離せない。

段々と手の動く速さが、上がっていく。

動かす度、私の唾液が粒となって頬に落ちる。

髪に彼の手が触れると、当然と秤りに私は、顎を上げ…開いた両手を、その顎の下に添える。  
舌を外へと突き出し…。

大きく口を開けた。

……。

「あ…っ、はっ…。」

少し待っていただけで、ソレはすぐに広がった。

心地よい熱さと、味。

そして…匂い。

熱が、顔中に広がる。

頬を伝い、ボタボタと手の中へと落ちる液体。

口中に広がる、苦味を帯びた味。

口を閉じれば、更に感じる。

それが喉を通る熱すらも、心地よく感じる。

そして…鼻を通して、脳を刺激する匂い。

コレが、ダメだった。

その刺激が、混乱した脳内から、別の思考を生み出す。

横からは、まだ聞こえる、昔の私からの声。

話す内容は、ひたすら娘を貶める言葉。

今、その言葉は…今の私を、貶める言葉にしか聞こえない。

西住流…西住流…。

若い頃からの柵が、こんな所で…。

こんな事で。

…何故か、開放された気がした。

そんな私を貶め…非難する「西住流家元」の…声。

…はっ。

この匂いの余韻と共に「西住流家元」の言葉を聞きながら…その西

住流の衣類を脱ぎ捨てる。

…彼を受けれる為に、下から無造作に脱ぎ捨てる。

「では…しほさん」

しかし今は、声を掛けてきた彼から…次の「新しい」を…ただ期待しているだけ…。

昔の私からの言葉は、もはや違う色を帯びて、私を「刺激する」。  
……。

その「西住流家元」は…画面を通して、今の私を…。

睨み続けている。

◇

効果は絶大だった。

動画サイトに、しほさんの動画を見つけた時に思った。

今の彼女が見たら、どう…思うのだろうか？ と。

更に。

西住流家元として、全てを受け入れていた彼女から、ただの「女」を引き出した状態ならどう変わるか？ と。

そんな単純な疑問からの行為だった。

初めは、嫌がったり、怒るかも…とも思った。

実際は…真逆。

…彼女の中の「女」が、一層浮き彫りになり、激しく求める様になつてしまった。

焦らした…というのもあったのだろうが、ここまで淫らになるとは思わなかった。

ただ、激しくなるだけが淫ら…とは、言えない。妖艶…ともまた表

現が違う。

動物地味た雌……の、様な状態。……とも違うだろう。

上手く言い表す事ができない。

あ、先にまず。

いきなり全裸になろうと、いい大人がする脱ぎ方じゃない方法で、衣服を剥ぎ取ろうとされたので、全力で阻止。

下は問答無用で、一気に脱がれてしまったのは……まあ仕方がない。

全裸になつてしまいそうなのを、取り敢えず止めただけでも良いでしょう。

いつもの黒いジャケットのボタンを、腹前だけ止めていた。

その中。：ワイシャツの前をはだけさせ、胸だけを大きく露出。

ソファー前の、少し足の短いテーブルの上に手を置いた彼女は、そんな格好だった。

脱がしません。最後まで。

……。

しかし……愛撫も何も、ないな。

手をついてください。と、言っただけなのだけでも……それだけで、言われる通りに手を付き、脚を開き……こちらにお尻を突き出している。

脚は閉じたままだけでも、すぐに入れろと言っている様にしか思えない。

その目の前に広がる、彼女の秘部は……濡れていた……どころの話じゃない。

焦らされ、随分と我慢していたというのも、勿論あるのだろうが……既に潮でも吹いた後じゃないのか？ と、思える程の量の体液で、その入口を濡らしていた。

それは、内腿の上を、下へ下へと流れていく雫が、どれ程の量かを想像させられる。

パクパクと、開閉を小さく繰り返している膣口は、俺を待ち詫びている様にしか見えない。

尻肉：足の付け根を、手を大きく開き揉むように掴む。

「……んっ」

そのまま親指を膣口の端に添え、手を握る様に動かし、その入口を少し開ける。

グチュツとした、音と感触。

糸を弾きながら、パツクリと割れたその入口を見て：これはやはり前戯はいらないな。…と、確信。

いや、逆に余計な事はしないほうが良いだろう。

「…ふっ……あ」

すぐにもう片方の手を、同じように反対側に添えると、両手の親指で左右にその穴を大きく開かせる。

またニチャ：とした音。

小さな喘ぎ声を出した彼女の声が聞こえた。

期待を帯びた、熱の籠った声。

膝を少し曲げ、テーブルに両手を付いている腕に、体重が掛けたのが分かる。

そして連動して、意識して……尻を上げた。

「はあ……あああっつ!!」

…瞬間。

今度は焦らすこともなく、腰を上げ、その穴に陰茎を突き入れた。

腕を伸ばし、背筋を海老反りにし、顔を真上に上げる。

黒く細い髪の毛の一本一本が、綺麗にその反動で跳ね上がる。

「かつ……あ……」

奥まで：一番奥まで。腰で殴るように彼女に突き刺した陰茎。その先端から、触れ殴ったしほさんの子宮の感触を、はつきりと感じる。

一度射精したとは思えない程：いや、余計に熱く膨張していたと思われるソレから感じる。

陰茎を纏う、溶けるような熱。

写真撮影の為、また鍛えていたというのもあるのだろう。

その引き締まった体と比例し、一番奥まで挿じ込んだ陰茎を、膣内全体を使って痛い程に引き締める。

そう思った直後、ガクンツ！　…と、しほさんの上半身が崩れ落ちた。

腕が折れ曲がり、テーブルに俯せになる様に倒れ込んでしまった。折れ曲がった膝が笑い、脚全体も震えていた。

「…あ…はっ…はっ…はっ」

肩で呼吸をしている彼女。

ビクン、ビクンと痙攣を繰り返しながら、体全体を震わせている。

「…また…入れただけで、イっちゃったんですね？」

彼女は体を震わせるだけで、答えない。

体全体に快樂の波紋が広がっているのだろう。

「……」

…など…確認する様に聞いてみたが…正直に言えば、強がり…というか、虚勢だ。

最初に勢いよく入れただけで果ててしまった、しほさんを、また少し虐める様な発言だが…余裕が無いのはこちらも同じ。

今までにない感触…入れただけで、俺も果てそうになっていた。痙攣した体…膣内にまで、その振動が伝わる。

ビクン、ビクンと畝ねる膣内。陰茎を隙間なく絡め取る様に、密着し…その振動が小さく激しく…全体を刺激する。

…この状況も相まり…コレだけで限界が近いと感じた。

いや、俺もまたこの関係…状況に酔っている。だってそうだろう？

あの家元。西住流家元…「西住　しほ」が…俺の精液を顔に付けたまま、尻を突き出し、無言だが懇願してきた。

そして、今はあろう事か…体を崩れさせながらも、顔を上げ…流れ続けている、昔の自分の姿を見上げている。

はつきりと顔をテレビ画面へと向けて。小さく聞こえる、呼吸に混じった声。

後ろ姿しか見えないので、分からない…だから余計に気になる。

彼女は、今。どんな顔をして、あの頃の自分を見上げているのだろうか。

……。

滾る。

冗談で言う訳でも何でもなく、ただ滾る。

ゾクゾクとした感覚を引き連れて、興奮が体中を巡るのが分かる。

…滾る。

後背から突き刺し、崩れさせた彼女を見下ろしてる自分にも。

「は……あ。はあ……はあ……」

しばらく見つめていると、落ち着いてきたのか…肘を付き、また体を起こしている彼女に気がついた。

興奮の余り、ボーとその光景を眺めてしまった。

…その腕の先。

更に先。

手。

テーブルに対して、大きく開いている左手が見える。

その薬指……に、光る物が目を刺す。

体を少し捻り、テレビ画面に向けていたであろう視線を、俺の方へと向けた彼女に気が付いた。

目に光はなく、ただ次を要求するかの様な顔をして……。

そして、その顔を見て、目に刺した光と共に、また一つ、思い出した。

戦車道境界が、最近…特に大洗優勝を起爆剤として、大変な盛況ぶりだった。

某ネットの掲示板。

彼女の事が題になっている掲示板。

賛否両論から、誹謗中傷。

彼女の事が題になっている掲示板。

真つ黒な場所があった。

彼女の容姿、スタイル…そして表向きの…動画で見せている性格。一部では熱狂的なファンが多い。

…ああ、糞みたいな連中からの妄想、願望で満ち溢れている場所。黒い欲望。

彼女の様な性格な場合、男連中からすれば、一言で言えば、屈服させたいという希望や願望で満ち溢れていた。

あの体と、一度やってみたい。  
首輪を着けてたい。

ぶっ壊れるまで：とか、自分で股を開かせたい：とか……。

若い男に弱そう。男日照りで、欲求不満が凄まじそう。

ああいう女に限って：などなど。

：まあ妄想は自由だ。

匿名掲示板だし、その連中もある意味で、軽い気持ちで書き込んでいるのだろう。

肉便器にしてりたい：快樂に酔わせたいとかもな。

：はっ。

何も分かっていない。

ああ、そうそう。最中に指輪を自分から外させたい：と言うのもあつたな。

鼻で笑ったがな。

本当にこいつらは、何も分かってはいないなど。

「……？」

今も俺の顔を見る彼女は、俺の視線に気がついたのか、一瞬その指輪にも視線を投げた。

「……」

俺は彼女を壊したのだろう。……が。最後の砦は壊させない。

その指輪は、彼女の置かれている立場を認識させる鎖の様なもの。

それを外させてしまえば、しほさんは本当に、ただ快樂を貪るだけになるかもしれない。

：掲示板の多くの男達は、総じて言ってしまうと、その状態にする事に、妄想と願望を持っていた。

違うだろう。

一定のギリギリで、彼女の正気を壊さない。

嫌でも目に入ってしまう、その鎖。

自分の立場、状況：そして俺という存在。



娘の男との関係。

…不倫。

いくつもの背徳感が、しほさんを芯から興奮させているのだろう。そうだ。快樂に溺れ、ただ男に強請るだけでは、この興奮は味わえない。

何事も減り張りは、大切だ。

家元としてのしほさん。

女としてのしほさん。

ギリギリを保ち続けていれば…「墮ちていく感覚」を、何度でも味わってられる。

それは、ただ媚びるだけでは無理だ。

それは、ただ開き直り、狂うだけでも無理だ。

多分…彼女はソレを理解している。

いや、気がついたのかもしれない。

だから…彼女は今、その動画…昔の自分と、今の自分を見比べている。

そしてまた、指輪を外さない。

いや…外させない。

「…んふっ?! んっ!!」

腰を引くと、膣内で締め上げる為の肉が、ゾリゾリと陰茎を刺激する。

ブルツと一瞬の震えと共に湧き上がるこの感覚。

「あっ!! はっ!! あっ!! あっあっあっ!!」

ゆっくりと…ではない。

もはや、彼女の反応全てが快樂を生む。

動く体と合わせ、出すその声。

打ち付ける度に、形を変える尻肉。

確信した。

今回の動画を見せたお陰で、彼女は変わる。

外だろうが、隠れてだろうが、何をしても、どんな行為をしたとしても。

これからは、まず西住流家元としての自分と、淫らな行為をしている女としての自分：ソレと嫌でも、比べてしまう事になるだろう。  
：俺が、何を言っても：そして何をしても喜んで彼女は受け入れる。

自分の女。

過去に彼女に言った、言葉。

その言葉を吐いた時は、まだごっこ遊びの段階だったのだろう。  
場にただ酔っていただけの話。

だが実質的に：俺に向かって尻を振る彼女を見て：思い通りになると確信した彼女を見て。

：その言葉通りになったと今、実感した。  
……。

ただ……。

：「女」のとしての「西住 しほ」を：俺は、甘く見ていた。



凄い。

「っ!! あっ!! そこっ!! そこがあ!!」

……取り繕った言葉が出ない。

ただ、自然と吐き出される言葉。

彼の動きは、私を強制的に果てさせる。

：もう、馬鹿になるのでは無いかと思える程の快感。

そして今は、ただベットの上で：寝そべった彼の上で：腰を振る女。

はしたない……下卑たるただの……雌。

……故に思う。

彼とのSEXは、まるで麻薬だ。

勿論、その様な物を使用した事は無いのですが、他に例えようがありません。

彼の陰茎のサイズ：というのもあるのですが、動かす度に、私の弱い所を強引に刺激されて、何をどうされても、短時間で絶頂を強制的に迎えさせられる。

私の中を全て満たし、引きずり出し……開放してくれる。

気持ちいい：気持ちいい……キモチイイ……。

ただ：隆史君の言葉は、口調は……何時もと変わらない。

昔からの口調：喋り方。

それが私を私でいさせてくれる。

…本気で狂わせない。

「どう…でした?」

「な…にがア?!?」

しかし、彼は質問をする割に、答えるのを邪魔をする。

今もまた、一番奥…その足の指先まで痺れる様な快楽をくれながらも、邪魔をした。

グリつ…と、下から私の奥へと、ねじ込む。

「…はっ!? あっ! ……はあ……そ…そういう…」

彼は言わせたいのでしょうか? 仕事中の私の事を。

あんな格好で送り出して…。

「め…目線が気になりました」

「まあ、ずっと……見てたでしょうね?」

「ふっ!…ふっ…!」

「俺のメールで、何か…思い出してくれました?」

……隆史君は、行為の最中は…何故、意地の悪い事言う…。

それは最初に関係を持ったホテルでも同じでしたね。

……。

「た…隆史君は…」

「はい？」

「私！ ……をぁ…他の男性に、抱かせっ！ ……たいっ！！ ……のですかぁ？」

……。

それに類似する言葉…。

先日の廊下での事…。

私の頭がおかしくなっている時に限って、その様な事をたまに言う…。

「いえ？ まったく」

「んっ…即答で…す、ね…あっ」

「当たり前でしょう？ あくまでプレイの一環ですよ」

「ぶっ……れいいい!!」

私の胸を掴み、その先端を指で撫で回しながら答えた。

騎乗位…とても言いましたか？

「…ただ、そういう妄想をして…それに興奮する貴女が、見ただけです」

……。

すでに、したかの様に言いますね…。

一度、彼の中の何かが切り替われば、それ以降に、その凄まじさを見せるのですが、今日はその比では、ありませんでした。

テレビの前…テレビが置かれた台に手をつかせ、昔の私の目の前で醜態を晒させる。

後ろから何度も突かれ、突かれる度に、昔の私と目が近づく。

両足に手を入れられ、体ごとを持ち上げられたまま、腰を打ち付けられる。

抵抗する気は無かったのですが、この拘束にも似た格好は、少し恥ずかしい…。

打ち付け、その反動で少し体が動く。

振り子の原理で、私の一番奥が圧迫され…この体位だけで、何度、声を上げ…何度、果てたか分かりません。

エアコンが効いた室内とは言え、お互いに汗に塗れた体をぶつかり

合わせると、また：汗が飛ぶ。

ヌルツ：とした感触が、お互いの肌と肌で、何度も舐め回すように感じます。

その肌を合わせるだけで、気持ちがいい。

腕を絡め、脚を絡め：舌を絡ませる。

汗と体液と唾液。

混じり合い混ざり合う行為も、感触も：何もかもが、キモチイイ。

彼がソファ―に座れば、私自ら脚を上げ：彼に跨った。

秘部を、指で広げ：ゆつくりと彼を飲み込ませる。

私がかじ開けられて、彼が入ってくる感触もまた、頭の中を真っ白にさせる程の快楽を何度も襲ってくる。

体を預け、胸が彼の胸で潰れると、動く度に形を変化させ、隆史君の体が反応させる：：：のが、少し楽しいですね。

常夫さ：夫にすらした事がない：：：真似。

隆史君の首に手を回し、私自らが、何度も上下し腰を下へと打ち付けると、押し寄せる快楽が、私を更に変えていく。

ぐちゃぐちゃと、出入りする音が何度も響く：：。

膣奥から出てくる、彼の精子が私の体液と混ざり合う音：：。

いつかのホテルの様に：室内のベランダへと続く、窓に体を押し付けられ：また後ろから突き上げられる。

一瞬、体が浮くような感覚が、何度も襲ってくる。

窓を開け、外に連れ出され：ベランダの手すりを掴ませ：：：：

まあ、外からは見えませんし：声を殺せば：まあ。

と、思いましたが、できませんでしたが。

……。

「……！」

変に余韻に浸っていると、突然視界が天井を映した。

体を起こされ、今度は私が寝かされてしまったようです。

両脚を掴み：腰を曲げられて：：：：あ。

自分の脚が逆さまに顔の真横に来ると、秘部が真上を向かされまし

た…。

今日の彼は、予備動作が少ない。

予備動作…というのも少々語弊があるかもしれませんが…ただ、この恥ずかしい格好をさせられた時…すぐに分かった。

もの凄いのが…来る。

すでに腰が砕けそうになっているというのに…胸の鼓動が速まるのが分かる…。

口が自然と開き…死にそうな程に恥ずかしい格好だというのに、その部分を見てしまう。

顔が…綻ぶ…。

私に入ろうと…下へとその入口向けられる、子供の腕程の…。

何度も私を狂わせたモノ。

これからも、私を狂わせてくれるモノ…。

呼吸が荒くなる。

…。

アレがまた…今から…これから…。

…。

これ…から？

そう…です。

それが…「これから」が、どういう事か…と、冷たい思考が生まれた。

今はコレに縋っていたいというのに、何も考えたくないとい——

「——」

ズドン…と、でも言うのでしょうか？

お腹の中に熱が広がった…。

体を落とす…肉棒の全体を使い。

私を押しつぶす。

…もうイイデス。

後で、考えましょう。

ただ今は…。



大きく呼吸を繰り返し、脱ぎ捨てたズボンから、携帯を取り出した。ベツトに腰掛け、取り出した携帯を確認すると…時間は、17時を指していた…。

……。

うっわ…3時間程、無休でやりっぱなしだった…。

体も流石に限界…。

しかし、まだやり足りないとも言えるのか、アレが立ちっぱなしだ。……。

やりすぎた……。

…と、何時もならば思うかもしれない。しかし、今回は違った…。

足りない。

もう少し、もう少し…と、変わりゆくしほさんを文字通り、堪能していた。

打てば響くその声。

彼女を犯し続ける。

彼女の反応を…求め続けてしまった。

我ながら、なんだこの性欲は。

みほならば、こうはいかない。

途中で、違う意味で壊れてしまう。

いや…壊してしまう。

しかし、しほさんは違う。

本気で…全てを吐き出せる。

「……」

後ろを振り向くと、彼女が寝ている。

…そう、物理的に寝ているだけ。

ベットの上にだらしなく手足を放り出し、横になっている彼女は、

まだ小刻み痙攣を繰り返している。

膣穴も大きく開いたまま。

…そこから、大量の精子を吐き出し、胸……腹、顔……髪。

全てが…しほさんの全てが、俺の排泄した白濁の液体に汚れている。

虫の息…とは、この事だろう。

「……」

流石に息が切れる…。

余韻に浸るのは良いけど…って…。

ヴウ〜！ ヴウ〜！

…と。

突然、視線を外していた手の中の携帯が震えた。

着信を知らせる、バイブ音。

……。

……。



そう…ここで、先にもの述べた、彼女…。  
女としての「西住 しほ」を…見る。

「はあ…はあ…は…は…は…は…は…は…」

『え…？』

宙に浮いた、携帯電話。

スピーカーにしたのか…その携帯からは、聴き慣れた声が聞こえてきた。

…いや。

正確に、細かく言えば…俺以外に発せられた、返事の声。

「んっ…はあ…。…どう……しました？」

『……』

「みほ」

『…どうして、隆史君の携帯に、お母さんが出るの？』

慌てる暇もない…。

伸びていたはずのしほさんが…後ろから俺の携帯電話を…奪っていた。

「ふう…落ち着いてきました…」

『……』

変な汗が出る…体中の血液が抜けていく様な…そんな…。

「どうして？ …今朝、言ったではありませんか。隆史君を少し「お借りする」……」

『…質問の答えになってない』

俺自身、最低な事をしているのは分かっている、分かっているが…それでも。

しほさんもそれは、知って…いや、同じ？

……。

まさかの行動に…上手く頭が回らない…。

何よりも、彼女が…

「そう？　簡単よ。マッサージに忙しい、彼の代わりに私が出ただけです」

『……………』

笑っている。

前髪に目元が隠れ…夏とは言え、少し日が傾き、薄暗くなってきた室内。

ベットに備え付けられている、薄橙色のライトの光が…影のコントラストを強く引立てしまっている為に、余計にその目元が暗く、わからない。

分かるのは、その薄ら笑いとも言える、曲がった口元だけ…。

『…マッサージ？　それ、午前中だって言ってたよね？』

「あら、そうでしたか？」

淡々と、少し楽しそうに娘と話している、しほさんの口調は…とてもじゃないが、母親とは程遠い…。

いや、口調だけじゃない。

話しながらも、俺にしな垂れ掛かり、股間を弄り始めた…。

あ…ああ。正直、楽観的に元気でいられる程に、俺の息子は鈍感ではなかった。

『…お母さん。隆史君に代わっ「嫌です」

』っ!?!』

なっ!?!

『……………』

「……………」

無言……………。

無言の時間が…。いや、空気が凍ったというか、張り詰めたという

か…。

しほさんの思惑が…全くわからない。

嫌と発言した後、ひたすら無言だが、体は違った。

やたらと俺の胸を摩ったりだとか…頭を型に預けてきたりだとか…。

何より、この会話を聞かせて俺の反応を見ている。

「…はあ。邪魔が入りましたし、本日はこれでお終いですね、隆史君」

「つつつ!？」

『じゃ…邪魔…あ…』

忘れていた…。

いや、どこかで、高を括っていただけだ。

俺という立場…それと、しほさんの性格からして、ソコの部分を削ぎ落とすとは、露にも思わなかった…。

いくら「女の部分」を引き出したとして、ソコだけは…。

母親という、部分を。

そして、肝心な部分を忘れていた。

しほさんの、みほに対する口調…声の温度から、ソレを嫌にでも思ひ出させた。

昔…。

嫌というほど目の当たりにした、黒い部分。

…女の敵は…女。

しほさん…まさか…

「…ま。いいでしょう。今日の所は、素直に隆史君は帰しましょう」

『……………』

返す…のではなく、帰す。

何故か…漢字として目視できるような言い方…。

意味が分からないが、しつくりとくる…。

そして、携帯のスピーカーを通して聞こえてくる、少しくぐもったみほの声。

いや…何か一瞬、軋む音が聞こえた気がした…。

というか、みほの口調からも、戸惑いが一切、感じられない。  
結構…ギリギリの事を…あ。

「ま、もういいでしょう。以上です」

『……なーブツ！』

みほの返事を待つまでもない。

行動でソレを示し、躊躇なく携帯の通話を切った…。

そして、そのまま…口の端が、少し釣り上がった表情で、通話が切れたその携帯を見下ろしている…。

「…引かない。前にのみ進む…。それが西住流…」

…携帯で口元を隠し、流し目でこちらに視線を送ってきた…。

「フツ…」

そして、楽しそうに…本当に、楽しそうに…。

「フツ…：…ウフフフ…：…」

裸のまま…憑き物が落ちたような笑顔で、全てをひっくりくるめた質問。

顔を上げ…首を傾げ…。

俺に全てを託すかのように…言った。

「ちっ…どうしますか？ 隆史君？」

※ルート壊 【宴編】※ あんこう鍋 前編

『野ゆき森ゆく：オリーブドラブ!!』

『海は任せろ、ネイビーブルー』

『黒い森ゆく：ジャーマングレー!』

『砂漠に咲く花っ! デザートピンク!』

『錆から守る、オキサイドレッド!』

『『『『 我ら! パンツァー・ファイブ!!!!』』』』

大洗学園。

まだ夏休みという事で、相変わらずの人の少なさ。

夏場だというのに、変な肌寒さを感じてしまう程に、ガラー……ンとした、体育館の壇上。

例のかくし芸と同じ格好で、あの時と変わらないキレッキレのポーズを決めた5人。

渾身の名乗りを終えた彼女達を見て、非常に感動をしている人物が一人。

横で：目をキラツキラと輝かせた：お姉さま。

パチパチと音は出さない程度に、小さな拍手を繰り返しながら、ただ小さく唸っている。

…はい。

戦車道の練習が終わり、レクリエーション：というか、まほちゃんの要望により、今この状態が出来上がっています。

昨晚、前回の乙女の戦車道チョコの会議後の話となり……まあ、最終的には、夜の事を暴露させられ、まほちゃんの目が鋭く輝く結果となっただけれどな。

その途中経過。大洗の祝勝会の話題となった。俺も参加していた為に、動画はおろか、写真すら残されなかったあの劇。

…恨むぞモモチャン。

もとい……その内容を、まほちゃんは、非常に興味深くお聞きになら

れていました。

…みほの黒森峰にいる頃。

真面目…というか、大人しく内気な性格だと、誰が見てもすぐにそういうった性格だと分かってしまう程だったらしい。

そんな劇などする訳もなく、ここまでではつちやける妹さんが信じられなかった様だ。

…よって、その劇を、一端でも構わないので、一目見たいとのご要望を出されました。

以下略。

目を輝かせ、みほの言葉を食い気味に、見たい！ 見たい！ …を、連呼するまほちゃんお姉ちゃんを止められる人間がいれば連れてきて欲しい。

お忘れかもしれませんが、この方…俺の事を抜かせば、非常にシスコンの方なのですよ？

…だから、以下略。

はあ…誰に対しての言い訳をしているのだろうか？ 俺は…。

チナミニ。

そのご要望を、その仲間達にお願いしたところ…。

「おい、書記…何をニヤニヤしている、この変態」

「気のせいですよっ」

まあ、誰からのご要望からは、最初には言わなかったつてのもあるのだがね？

約一名様から、すっごい目と顔と表情で、きつつい・恥ずかしい・何を今更、この変態…と、散々なご褒美を頂けました。

パンツアーフアイブに変身して欲しいと、お願いしただけのに、なぜ変態と言われなければならないかと、疑問を挟みつつ…俺が後に、ケーキを作るという事…もしくは購入するという事で、手を打ってもらいましたちよろい。

…正直、Mっ気つてのは、俺にはあまりないのだけれど、マコニヤンには詰られたいと、ちよつと曲がった感情が沸き上がってくる今日この頃です。

「うん…奇妙な劇だな。良く分からなかったが…良かったぞ、みほ。あのみほが…友達と…：…そうか」

「…お姉ちゃん」

何かしら想う所があるのだろう。

感慨深く、嬉しそうに頷くまほちゃん。

「お母様にも見せてやろう」

「なっ!？」

そして無慈悲な一言。

仲間内だから見せられる、そのハツチャケ具合を、親に見せるてやるのか…結構なエグい事を仰る。

しかし、このクソ真面目なお姉様だ。その一言には、善意しかないのだろう。

「隆史」

「いえす、まむ」

チロンと、俺の携帯が鳴る。

まあ一部始終、携帯で録画していたのだが、流石に動画を送るのは…と思い、今撮った写真を送って差し上げましょう。

ぼくも善意しかありません。

尚、動画は盗撮です。

サプライズ専用、恥辱プレイの一貫だと思って頂ければ幸いです。

…とか、後で言っておこう。なあに、如何わしい動画じゃござんせんから、大丈夫デス。

…あ、うん。撮るよ勿論。

前回失敗してたから。

撮らないはずがない。

誰が悪いかって言えば、約束を反故にした、某メガネっ子先輩が悪いのです。

「たっ! たかつ 「はい、送信完了」」

「」

俺もまた、無慈悲な一言を、放つ。

しほさんも、こんなに元気なみほは、余り見たことがないだろう。

…幼少時の みほ ならば、想像は出来るだろうが、今の彼女からは想像もできなくて。

「みほ…親孝行だぞ?」

「何がっ!?!」

はい、では今回、この恥じよ…基。

親孝行で、本日の業務は、終了となります。

お疲れ様でした。

あんこうチームは、壇上の横、幕裏へと入る訳でもなく、奇抜な格好のまままで談笑をしている。

談笑…だよな?

5人集まって、小声でコチラを見る目が、心なしかギラギラと、少し怪しい光を放っているのは気のせい…じゃねえな、こりゃ。

昨日の…アレか…。

まあ…、逆にどんな事してくるか、ちよつと楽しみになってきた部分があるしな。

「隆史」

「あ、うん」

まほちゃんが、服を指で引っ張って声を掛けてきた。

あんこうチームに囲まれていた みほを見ながら、少し微笑ましい笑顔のまま…否。

俺の姿を見て、その笑顔を少し引き釣らせた。

「しかし…お前も…その…随分な格好だな」



「……」

あ、はい。

あんこう怪人の…雄。

そのピンクに輝く、全身タイツをまた俺は装備していた…。

なに…簡単な事だ…マコニヤンが、あのパンツァー・ファイブへ変身してくれる条件として、俺もこの恥ずかしい格好をしろとのご命令だったって、ただだ。

まあ、ある意味で等価交換つちや、そうだね…。マコニヤン達同様、俺も…またこんなのを着るとは夢にも思わなかった…。

「…では、私は一度戻る」

「どこ凝視して言っているんだよ…」

「見せているのでは、ないのか？」

「どこの変態だよ!!」

「え…目の前の？」

「……」

まほちゃんの遠慮が、ここ数日でなくなった気がするな…。

相変わらず、何言ってるんだ？ って顔して、素で返してきたな…。

「ああ、そんな事よりもだ。明日の早朝には、戻るから…私の朝食も用意しておいてくれるか？」

「…そんな事…。はあ…まあいいや。分かった。というか、分かっている」

「すまん」

「……それ、5回目だしな」

「そうか？」

まほちゃんは黒森峰女学園へと、帰る事になっていた。

西住家としてのお役目の様で、色々と時間が掛かるとの事。

今日中に俺の家に、再度戻って来るとなると、時間が読めないらしく…仕方ないから自室に戻るとの事。

「……」

仕方ないって…。

「……………チツ」

いや、舌打ちって…。

無表情での、それはやめてくれ。

ある意味で、喜ばしいと思えるのだけど…なんとというか…。

もう出立すると、床に置いていた手荷物を手にとった。

それを見た、壇上の5人も、まほちゃんが出るという事に気がついたのか…そのまま、壇上を降りて近づいてきた。

この4人…。仲良くなってるな…。しっかりと、見送りに来てくれた。

はい、ではここからが、また問題…。

「いいか？ 何事にも準備は大切だ」

見送りに来た、みほ達…あんこうチームにも声を始めた内容が…。

「特に相手を攻め落とすには、入念に作戦を模索、立案するに越した事はない」

淡々と真顔で、全員に話しているのだけ…。

「功を焦れば、ロクな事にはならない…夢々忘れるな」

彼女達もまた、そのまほちゃんの言葉を真剣な顔で、聞いている。

みほだけは、若干複雑な表情だけどね…。

しっかし…。

「あの…まほちゃん。話してる所、悪いけど…」

「ん？ なんだ、隆史」

「それ…何の話？ …戦車道の事？」

夢々忘れるなどか…今日日言わないぞ？

あまりに真剣な空気に、なんか…背筋に走るモノ感じた為、ちよつと横槍を入れてみた。

確かに、彼女は午前中の練習を、見学はしていたので、その事…だよな？

「はっ…」

「…えっ？」

……。

予想外…といった、表情を見せたな。

違うな…これは違う。

「あつ…うん、そうだ。戦車道だ。無論そうに決まっているだろう?」  
「……」

「この…私が言うのだから、戦車道しかあるまい?」  
「……………」

俺の問いかけに、彼女らしからぬ、結構間の抜けた声が返ってきた。  
冷静を装い、何時もの彼女の喋り方や、表情に戻ったのは、彼女らしいのだけど…。

…こりや違うな。何を企んでる。

「そ…そうですよっ! 戦車道です、戦車道!」

「…書記。今の会話に、何を疑う余地がある」

「そうそう!」

…まだ貴女達には、何も聞いていませんし、言ってますん。

それに優花里、マコニヤン、沙織さん。

視線を逸らすな。…俺の目を見て、言ってくれ。

「みほ」

「うんっ!! 戦車道だよ! これも戦車道!!」

「…これも?」

「あ、違う…(…これは、戦車道!」

…みほもやはり、西住流だな。

力強い返事ですね? しかしな?

…だから目を見て、話せ。

「…華さん?」

「なんでしよう?」

「……………」

うっ…華さんだけ、すげえ何時もと変わらない。

俺の目を、ニコニコと笑顔で真っ直ぐ見てくる…。

何気に、あんこうチームで一番のポーカーフェイスって、彼女じゃなからうか。

「……………」

「…あ、いや。もう、いいです…」

聞いた俺が、たじろいでしまっ。

ただ、そんな俺を見て、残念そうにボソツと…

「あらあ……なじつてくれませんか…」

「……」

華さん…。

流石に、まほちゃんの言葉は分かった。綺麗につながった。

前回、無線垂れ流しで聞こえてきた、なんか全員で俺をどうこうしたい…との事だろうな。

「…さて、どうしたもんか」

気付かれていないとも思っているのだろうか…。

皆さん、結構な肉食系ナノデスネ…。

……。

昨晚の事だろうな…。

小声だけど、決行がどうの言っているし…だから、聞こえてますよ？

昨晚…あんこうチームが、我が家へお泊りをした。

作戦会議。

なんの会議か知らないが、泊りがけの作戦会議だったらしいよ。

女子高生が、6人揃って我が家に…とか…林田が知ったら、ブチギレそうなこの現状。

ある意味で、贅沢な悩みだと思えるのだけれど、最近マコニャン以外、やたらと積極的な彼女達だから、俺…枯れるかも…とかの心配が強かった。

みほ達各部屋に、沙織さんと優花里を泊めるのではなく、我が家で一番大きな居間にて、布団を並べてのご宿泊。

全員が揃ったこの状況…何かしてこないか？とも思ったが…。

作戦会議を俺に聞かせるのは、まずいと、内緒話とは思えない程の音量での声を、聞かせて頂きましたので、ある意味で安心していた。

…実際、普通にお泊まり会してくれたいな。

俺は俺で、何となく気がついてはいたが、邪魔をするのも悪いしな。

…お陰で、そろそろ戦車道連盟に送らんとまずいと思っていた、家

元ズの水着写真を選別が捗った。

結構、やばめなアングルやら何やら……こりや全国に流すには、エロす……否、18禁指定をくらってしまいそうな物もあるので、選別に時間が掛かるネ。

ああ……フォルダに、まとめて保存しておかないと……。みほに見られると一発で別れ話切り出されそうだから、一番……奥の……いや、ネットのセキュリティが高い……いや!!

こういった物は、リスクは有るが、手元に置いておかないと、不安で仕方ないし……。

一般的に見ても大丈夫なのを選ぶので、時間が掛かるとか……すげえな家元ズ。

基準は、ハゲに見せても、まあ許せる……つてのを選ぶのがコツだなっ!

……。いかん、別の方向へと、思考が流れた……。

思考を戻そう。

何枚かは決める事はできたので、後はあのハゲに任せよう。……どれが選ばれても、まあ大丈夫だろうって写真だしな。

……。メールで送れと言っていたが、セキュリティ的にまずいだろうな……。

あのハゲに、直接渡した方が、色々と固いだろう。

ながら、あの状況で、コレを整理するとか……危なすぎるだろうとも思ったが、作戦会議とやらをしているので、逆に変な邪魔が入らないと確信した為、作業に没頭できた。

……。夜中の皆が寝静まった時間の方が、最近は特に危ない……。

……。うん……忍び込んでくる方達が、いますから……。

いや、方達が……。

「……」

……。そんな彼女達が作戦会議……。

……。

……。

変な汗が滲み、不安の種が芽吹き始めたのを、覚えている…。

無茶な事はしてこないとは思いますが…華さんがいるからなあ…最近では、まほちゃんも危ない…。

だから、これは自衛だと思っただけですよ!!

何を話しているか、少し聞いてみたいと思っただけが自然だろうなっ!!

「うっ…」

小声で俺を見ながら話している彼女達を見て、その時と同じ汗が滲み始めた…。

まあ実際に使う訳ではないのだけど、探してみる位は良いだろう。

…武器は多い方が良い。

んな訳で、スキル検索…

あ…あった。

スキル「アリス」…さん。

スキル名に特に意味は無いだろうな。

ナイナイ。うん、ナイ。

効力は、まんま盗聴。

音声媒体として、機械類を選択使用可能。

…脳内に直接音声を流せるけど、駄女神達とのやり取りの時にも思っただけ…アレって結構、きつつい。

神経を逆撫でするといっつか、何というか…うむ。普通になれない。

多分、アレ関係の事だから使用可能だろう。

ダメなら聞こえないってだけだ。

まあ、彼女達からの事だからな。お遊び位の感覚だろうしなあ…ある程度なら受け入れて上げようと思っただけ。

…ただなあ…華さん辺り、何を提案してくるか分からないから、ある程度の心構えは欲しかった。

あ、これ…機械類を音声媒体として使えるならば、他人に盗聴を聴かせる事も可能なのか…。

「……」

オカシイ。

流石におかしいだろう。

何が、スキル「ア リ サ」…さん…だ。

スキル…。

整理してみよう。

思い返してみると、基本的に思い浮かべ検索したスキル…能力とやらは、100%で備わっていた。

盗聴スキルも、脳内検索をすると、すぐに出てきた。

俺に押し付けてきたスキルは、性技スキルだと、あの駄女神は言っていたけども、これって…違うんじゃないだろうか？

林田達と話していた時もそうだけど、俺の名前が入った…否。

不本意な、通称が入ったスキルなんて物も出てきたんだ。

何が…スキル「タラシ殿」だ。

効力は、分からなかったけど…こんな人名が入ったスキル…普通無いだろうよ。

普通…ない。

ないよ…な。

「あ…」

分かった。

ひらめきに近いが…単純に考えてみたら、すぐにその答えに行き着いた。

スキルが備わっている…のではなく…。

…これ、ひよつとして…思い浮かべる度に、それと連動してスキルを生成してないか…？

スキル「ア リ サ」…さんも、盗聴能力を、そのままスキル名としてあるってのが、良い証拠だろう。

……。

試しに探ってみるか。

…そうだな、試しにするならば…回復系。

最近、疲れが溜まっている…というか、枯れそう…。散々絞り取

られ始めた精力とやらを、少しでも回復しておきたい…。

彼女達が、この関係に慣れてきたというのもあるし、まほちゃんも加入…更には、二人きりになると、場所を構わず、やたらと求めてくる状況が最近続いている。

基本的に、俺に責任がある為、極力それに応えてきた結果がコレだ…。

特に華さんがヤバイ。

昨日の華さん来襲が、特にヤバかった…。

作戦会議の途中だったのだろうに、アレはない…。

異様に似合う白い寝巻き姿。

夏用なのだろう…薄い生地が体のシルエットを強調した、肩が見えるタイプ。

そんな彼女が、襖を開け…恥ずかしそうに…。

『えっち…：しましよう？』

…：とか言われた時には、流星に理性が吹っ飛ぶかと思つたしな…。

怒って誤魔化したけど…危なかった…。というか、よく我慢した俺の理性！

最近、タイミングが悪くて…華さんとは縁がないのか…彼女は酷く、欲求不満なのでしよう。

…：学校とか、普段の時とかと比べ、二人きりの時とでの、ギャップがすごいつ!! もうっ!! 普段見知った場所で、これみよがしに色気振りまいてくるしっ!!

俺の性癖というか、趣向を完全に理解しているのか…普段と変わらない格好なのに…喋り方とか、その内容とか!! 目っ! 特に口っ!! 飯食う時とか、何か飲む時とか…目配せしながら、唇とかも何か…舌と一緒に見せつける様にもうっ!!

「…：」

やめよう、一度冷静になろう。

それはそれで、男としては幸せな状況なのだろうが、朝立ちすら…最近しなくなってきたのは…正直、悲しい…。



暴走しない程度に…せめて通常の状態に戻せる位のスキルってないだろうか？

「…脳内検索」

あ…あった。

すぐに見つかった。

…やはり、そうか。

基本的に、アレに関する事ならば、無尽蔵に生成出来るスキルか、コレ…。

あの駄女神…強引に渡したスキルですら、コレかよ…。

これ、確かに条件付きって部分で生成可能だから、性技スキルっちゃ、そうだろうが…。

性能が大分違うだろ…。

まあ…いいや。今更、文句言っても仕方ない。

ある意味で、現状これに助けられてしまっている部分もあるのが、否めない…。

みほ…。

段々と、現状況を楽しみ始めている様に感じる…。

今も他の4人と一緒に、目の怪しい光を一層強くして俺を横目で見てくる。

…こりや、今夜辺り何か仕掛けてきそうだな。

今のうちに、少しでも回復させておこうか…何をされるかも分からないいな。

えつと…コレだな。

スキル…。「解除」？

なんだこれ…。

能力は、なんだ？

「マジで…が解けます」  
…。

意味がわからん…。

現状に何か、あるのだろうか？

欲しいと思った効力で、これが出てきたって事は、それに類似する

事だろうと思うしな。

「……」

…使ってみるか？

よく効力の分らないのに、使うのも…とは思うけど…。

今回、「回復」の効力を連想しての事だから、大丈夫…かなあ…？

……。

い…今、一瞬悪寒が走った…。

気が付くと、全員の視線が、俺に注がれている。

「…隆史君、お姉ちゃん、もうそろそろ行くみたいだよ？」

「あ…はい」

「では、私達も、そろそろ着替えて帰りましょうかあ？」

「」

痛い…。

いやあ…全員の視線が痛い。

つか、怖い。特に、華さん。

こんな格好をしてしまっているの、更に痛い。

パールピンク色の全身タイツが、そんなに物珍しいですか？

……。

「隆史君」

「隆史殿」

「…書記」

……。

つ…使うか。

いや、使おう！

回復の連想だから、多少違っていても、そんなに大きな大差はない

と思うし!!

何故だ…？

まだ昼過ぎ位の時間帯だというのに…何故こうも薄暗い…。

「私もそろそろ時間だ。では皆、私はもう行くが…」

…ま…まほちゃんが…ニタアと笑った…。

「…結果を楽しみに待っている」

す……。

スキルっ！

スキルツ!!!

◇

肩を落とし、大きくため息を吐き…閉じられた洋式トイレを眺めま  
す…。

女子トイレの個室に入り、鍵を閉めた所で漸く安心できました。  
トイレで安心して…どうなのでしょう…。

先程までの事を思い出すと、余計に実感してしまいます。

体育館で、でも良かったのですが、荷物も有り…皆さんで、西住殿  
の教室で、着替えるという話になりました。

人がいない、がらくんとした廊下。

喧騒も何もない、静かな学校というのは、少々不気味に感じますね。  
まだ日が出て明るいというのに、少し心無しか薄暗く感じます。

窓から差し込む光が、廊下を照らしているというのに、少し不気味  
に感じてしまいます。

隆史殿は…私達の教室で、着替えるつもりなのでしょうか？ 少し  
ふらつく足取りで、何処かへと行ってしまいました。

あの格好で、校内を彷徨かれると…普通に怖いですが…。

「……」

そこで思いました。

どうしましょう…と。

…先に着替え…いや、でも…しかし…。

西住殿達の教室付近までは、もう少し距離があります。

通り道にもありますし…はい。先に行っておきましょう。

この格好で、あまり一人でいたくはありませんが…逆に、人気がないのが、幸いしてますしね。

…正直、限界でした。

はい…お手洗いにいきたいです…。

体育館を出た時から、感じていたのですが…流石に此処まで早く限界が来るとは…。

この廊下の雰囲気と、夏場だというのに、少々肌寒く感じるこの空気のせいでしょうか？

「西住殿達は、先に着替えに行ってください」

「優花里さん？」

「ちよつと、わ…私、寄る所ができません…ちよつと、戻りますね」

「え？ ああつ…はい。では先に行つてますね？」

西住殿は、少し微笑んで、了承をしてくれました。

察してくれた…って奴ですね！ …はあ、同性でもやはり、言い辛いですから。

「はい、お願いしま…つて、五十鈴殿ツ!？」

五十鈴殿が、私に向かって真正面に…。

黒い…最近、頻繁に出るようになられた、その真っ黒い笑顔…。

それをまさか、自分に向けられるとは、夢にも思いませんでした!!

「優花里さん…?」

「は…はい!!」

ジャーマングレーの衣装で、更に黒い!

「ふふっ…信じてますよっ…」

「な…なにがですしょう?」

「噛んでしまいましたっ!!」

「私…そろそろ、限界です…ええ…ですからね? 優花里さん…みほさんに、今回一番槍のお許しを頂いているんです」

「…で…でしゅから!! 何の…」

思わず囁む程…それ程の威圧が…向けられ…。

隆史殿!! よく、あれだけの威圧を向けられて、今まで平気な顔してましたね!!

目がっ!!! 笑ってませんでした!!!

「優花里…さん？」

「ひっー!」

スツ…と、頬に…静かに…とても優しく五十鈴殿の手が添えられまして…。

そして、その手を開き、親指を私の唇に触れさせ…。

…唇。

「これ以上のヌケガケは…：…ダメデスヨ？」

「」

「…これ、以上…。」

バレテル

「隆史さん何処に行ったかとか…知ってます？」

「知らないであります!!」

ブンブンと…顔を縦に振るしか、この時の私には、その選択肢しかありませんでした…。

うう…この迫力で先に粗相をしまいそうでしたよ…。

「……………」

「い…五十鈴殿？」

しかし、すぐにスツ…と目を細め、少し申し訳ない様な表情をされました。

「すみません、優花里さん…先程から、私少々、おかしいのです」

「お…おか？」

「体育館を出た辺りからでしょうか？ どうにもこう…イライラする

と言うのか…機嫌が頗る悪いと言うのか…当たるような真似をしてしまつて…」

「……………」

そ…そういえば、確かにそうでしたね。

先程から少し、五十鈴殿がご機嫌斜めに感じました。

見たことないような…あ、いえ。大洗ホテルで、五十鈴殿のお父上と遭遇した時の様でした。

すぐに私に謝罪をしてくれた辺り…五十鈴殿らしいと言えらしいのですが…。

…………。

でも、ここからでした。

「いえ…お気になさ」ところで、優花里さん」

この時…目の色が、また変わりました。

私の唇に触れている親指を、スー…………と、撫で始め…五十鈴殿の呼吸が、心無しか…荒く…。

「は…………ああ…。優花里さんの唇つて…とても可愛らしい…ですねえ…」

「」

「肌も…とても張りがあつて…すべすべで…」

「」

ゾクツ…と、先程とは違う悪寒を、此処で感じました…。

少し呆けた様な…妙に艶っぽい表情というか…。

余つた片手を、空いた反対側の私の頬へと…。

「…ふう…………はあ…とても、良い…ええ…すぐく…」

「五十鈴殿っ!? なんて顔近づけて来るのですかっ!？」

「あ! そうですね…やはり最初は、隆史さん…」

「次つて、なんですかっ!!」

「西住さん」

「…みほりん」

「あ…はい、止めましょう…」

はい、逃げました。

逃げましたよっ!! 当然じゃないですか! 何故か、貞操の危機を感じましたからっ!!

西住殿に襲いかかった五十鈴殿と、同じ匂いがしました!!

その、西住殿に止められた為に、一瞬できた隙を突きました!!

「……」

……はあ…。

また、大きなため息が出てしまいました…。

戻る頃には、何時もの五十鈴殿に戻っていると良いのですが…。

まあ、ここに何時までもいるのも、なんですから…さっさと済ましちやいましょう。

トイレの蓋を開け…一度、ベルトを緩める。

初めはパーティーグッズの全身タイツを改造して作ったのですが…何か隆史殿の中の、何かに火を付けてしまったようです。

かくし芸が終わり、もう二度と着る機会なんてないと思ったのですが…すっごい、改造されてしまいましたね。

改めて思います…なんでしよう、この完成度。

襟の緑のラインとか、あからさまに安物特有の印刷だったのに…ちゃんと縫い付けた物になりましたし…。

靴もちゃんとしたブーツ…。ベルトのバックルもちゃんとした金属…。

この腰に着いてる武器とか…どうやって加工したか分からない程にしっかりとしてますし…。

これ、型取つて、PVCで加工…光物部分は、ダイキャストを使つたつて、仰ってましたが…まったく何言ってるかわかりマセンデシタ。

撮影も可能…とか…実際にとか、延々と言っていました…何故ここまで細かい所に拘るかとか…男の子は分かりませんね。

まあ…いいです、私も人の事は言えませんしね。

好きな物に掛ける、その情熱は理解は出来ます。

ああそうそう…これもそうです。

「んっ…」

後ろ手で、背中のフアスナーを指で摘み、苦戦しながらもジー…つと、音をさせながら下げると、更に実感します…。

フアスナーの掴みは、襟で隠れる様にするとか…。これ、後ろから見ても、すっごい自然な感じなんですよ…。

腰元にまで下げると…ブーツを脱ぎ…お尻を…つて、すっごい身体にフィットしてるのに、なんでこんなに脱ぎやすいんですかね!?

下半身だけ、難なく脱げましたよっ!! お陰で、トイレの中で半裸になってしまってます…。

なんですか!?! この!! この…あれ?

…あく…なにか肘に当たった気がしたのですが…壁にでも当ててしまいましたか…。

その割に…はあ…今は、よしませう…取り敢えず…。

「……はあ」

下着を下ろし…便座に座ると、別の意味の安心感が生まれます。

まあ、途轍もなく恥ずかしい格好ですが…。

上半身は戦隊ヒーローっぽい衣装…胸下から膝ぐらい迄が裸…足元に下半身の衣装が少し伸びながら皺寄せあつているとか…。

人様に見られたら、絶対にお嫁に行けませんよ…。

「……」

…校内がとても静かなですね。

水音が…少々気になりますが…まあ、誰もいませんし…ある意味で安心ですね…ただ、やはりちよつと不気味です。

隆史殿の訳のわからない情熱で、私…そのちよつと人気寂しい校内…しかもトイレで、半裸状態になっているのですけどね。

まったく! 彼は、真面目な所と変な所と、えっちな所に関して、ギヤップの落差が激しいです!! が…それはソレですね…。

いろんな意味で、全て全力で…本気になっているだけだとも思いませんし…。

え…えっちな所は、ま…まあ、いいです。

好きになってしまったのですから…仕方ありません。

今更ですし…まあ…はい。



「……」

そ…そうですね。…なつて…す…好きに…。

…い…今はヤメマシヨウ。今のこの状況では、格好がつかない所か、死にたくありません。

よ…よしっ!!

大丈夫っ!! 普段、やられっぱなしですが、今夜は皆さんもついてます!

たまには私だけ恥ずかしい思いをするのではなくて、隆史殿にも恥ずかしい思いをしてもらいましょうっ!!

あんこうチーム総出で掛ければ、普段の……はいっ! その逆襲できそうです!

それうですっ! 今回は、皆さんとです! 私がその結束を乱す訳には行きません!

下ばかりを向いてないで、ちゃん上を向かなくてわっ!!

……。

昨夜…夜中の変なテンションで…全員満場一致で決まった作戦…。

西住殿命名、「がちがち作戦」

初めは全員、人権的にどうなのかとか、かわいそうとか色々言っていました…結局は欲望に、勝てませんでした。

隆史殿の動きを拘束して、私達で好き勝手やってみたい……という、欲望…。

はい、言いだしたのは意外や意外。

…冷泉殿でした。何されたんでしょう、彼女…。まあ、顔は真っ赤でしたけど…。

それに使う道具まで確定…まあお誂え向きですけどね。武部殿曰く…。

『ラブだよ、ラブッ! これも愛だよっ!!』

…彼女、何処に向かうのでしょうか?

いや、様はその名称がそれらしいのですが、目がすっごい輝いていたので、少々怖かったです。

武部殿御用達の女性向け雑誌に、付録とやらでついてきた物。

「でも、今更ながら手錠まで使うのは、どうかと思うのですが…」

…ラブ手錠…って名前みたいですけどね。

なんか…こう、内側にモコモコした…ファーが付いていて痛くないよ!?! …とか言つてましたが。

後ろ手で、手錠に拘束された隆史殿…。

……。

…胸元…開いて…なんか、汗でテカテカして…。

そこから、除く胸筋…。

ゴクツ…。

って、いけませんっ!!

昔見た戦車映画で、主人公が捕虜になった時とか!? 似たような

シーンを何度も見てしまったからでしょうかツ!?

想像が、非常に容易いつつ!!

そして、すっごい似合いそう!!!

ダメですっ! この流れはダメですっ!!!

現状、取りあえずは、散々我慢していたというのに、変に回想してしまつて、疎かにしたダムを!

この決壊しそうなダムを!!

……。

「はっ…ああ…」

すぐに体中の力が抜けていきます。

思わずため息にも似た息が、口から放たれて…全身へと行き渡る、開放感が…。

その開放感と共に、段々と冷静になつていくのが分かります。何を一人で、勝手に焦つて取り乱していたのでしょうか…。

「……」

逆襲…。

そのフリーズを思い出します…。

確かに私も、たまには隆史殿にも色々と恥ずかしい思いをしても  
らって…どんな顔するか見てみたい気はします。

気は…しますが…。

で…でも？ どちらかといえば…逆襲をするよりか…私は…。

「いつも通りでも、構わないのですけどね…。」

結局、頭真つ白にされてしまい…なんか……こう、すごかったです  
ね…。

あの感覚は…。

変に癖になりそうで、怖いですけど…あれはあれで…。

「はっ!! いけない!! あの感覚はダメです!!」

即座に頭をブンブンと!! 左右に、力いっぱい振り、文字通り変な  
事を考えだしそうな自分を振りほどきます!

今の考えは、危ないっ!! 変に回想に……また、あの時とか、この  
時とか…その時を思い出してしまいそうでした!!

学校で、私は何を考えているのでしよう!!

「そ、そうです! あんな感覚!! こんな学校じゃ思い出しちゃダメ  
です」

「そうなの?」

「そうです!! 隆史殿のせいですよっ!!?」

「あ、はい。ごめんなさい」

「ちゃんと責任取ってください! 今更謝られても、こん……な…」

「ん? 責任?」

「…」

「…なに?」

「…」

全ての思考が飛んでしまい…前置きも何もなく…。

…あんなこう怪人が立っていました。



「え……あの……え？」

完全に呆けた顔で、俺の顔を見上げる優花里さん。

特に赤くなったり、青くなったりする訳でもなく、信じられない物を見る顔ですね。

「あの……間違つて……いませんか？　ここ……女子トイレ……ですよ？」  
「そうだな、それくらいは、分かる。人をボケ老人の様に言わんでくれ」

チロチロと、水音が響く中……漸く絞り出した言葉がソレですか。  
無意識にだろうが、太股を閉じ……。

「えっ……と、はえ……はい？」

段々と状況を理解し始めたのだろう。

下から上へと登る様に、赤い色が肌を染めてきた。

「なっ!?　はっ!!??　はいっ!!??」

「あまり大きな声を出すとバレるぞお？　人がまったくいないって訳でもないんだから」

「ひっ……他人事の様になつたっ!!??　えっ!?　どうっ!!?　痛あ!!」

あゝ……混乱してる、混乱してる。!

狭い室内、ガタンガタンと音を出しながら、両手を広げ左右の壁に腕をぶつけた。

それは、素直にごめんよ……俺のせいですよね？

それでもめげずに今度は、脚をパタパタと動かそうとすると……。

「やっ!!?　はっ!!??」

今の自分の状況を、今更思い出したかの様に……動きを止め、脚を閉じ……膝に両手を乗せた。

ジタバタしても、どうにもならないのを悟ったか……耐える方向にシフトしたのだろうか？

「っっ!!?　止まっ!!?　止まらっっ!!??」

水音は止まらない。

そりやそうだ、出し始めてしまえば、そうそう止められまいて。

しかも…今回の優花里の尿意は、完全なスキル仕様だ。

しばらく続きそうだな。

「うううう…」

涙目…いや、半分泣いちやってるな。

はずかしさで、顔を真っ赤に染め上げ、いきなりの事でどうしたら良いか分からず…口をパクパクとさせている。

それでも、出し始めてしまったモノを止められなで…俺の顔をその顔で見上げている。

…。

いやあ…すつつつぐい…こう…ゾクゾクッ！ と、興奮が、背筋を伝って登ってきた。

「なんでいるんですかあ…なんでそんな格好してるんですかあ…いつから…」

「え？ 最初から？」

「…は…はあ!? こんな狭い室内…えッ!?」

「後、この格好は…ほら、ゆかりんまだ、変身中だし？」

「なにか関係あるんですかッ!?」

「当然だ」

うむ。あるに決まっているだろう？

こういった女の子の排泄を見て、興奮する趣味は、俺にはないのだけれど…それに恥ずかしがる表情を見るのは大好きです。

「ドヤ顔で何を言っているんですか!? 耳塞いでくださいっ！ 見ないでくださいっ！ 出てって下さい!!」

「断る」

「怒りますよ!!」

「いや、だって…これも防衛かと…」

「防衛っ!? なに、訳の分からないこっ…」あんこうチームで、なに企んでるんだ?」

「」

あ、勢いが止まった。

企み：その一言で、その表情が凍ったかのように固まった。

いやなあ…だつてなあ…。

「なになつ!!…なんのこ…」

「…手錠つて、一体何に使うんだ?」

「」

最初からいた…と、言ったので、すぐにわかったのだろう。

ポロリと出した、独り言を…昨夜の事を…。

赤く上気させた顔を、少し青くした。

さあ…各個撃破していこうか。

▽

スキル：「解除」

効力は、まだよく分からない。

あんな説明で理解しろという方が無理だ。

だから、無視した。

無視したら、思いの外…色々と躊躇が消えた。

今まで出し惜しみ…というか、使いあぐねていたスキルが簡単に使

用出来るようになっていた。

だから使う。ならば使う。

今まで、同時使用が難しかった…まあ、頭の中の整理が上手く出来

なくて、スキルの為に混乱してしまいそうな脳内が、妙にスッキリ。

バンバンと連続で使用できる。

もしからしたら、これが解除の効力だったのかもしれない。

現状、使用スキル。

「防音」…不自然に使用半径が、広くなっていた。学校を全て覆う事ができた。少ないとはいえ、他にも部活や何やらの為に生徒はいるからな。

「聖水」…最低なスキル名だ…。とはいえ、各個撃破する為

に、あんこうチームを一度バラけさせないとダメだった。まずは優花里をトイレへと誘導させる為に体育館で使用。

「隠者」…はい、トイレと一緒に入る時に使用…。

「増幅」…まあ、ブーストというか、バフだよな…。感情等にも利用可能という事で…華さんにも使用中。「聖水」と同時使用で、尿意増幅。

そして、一番大切なスキル。

「判別」…本気で嫌がり、嫌われたりする様な事が無いように使用中。大・中・小…と、その度合いによって、脳内にブザーが鳴り響く様になっている。

後はまあ…簡単に言ってしまうえば、性癖の鑑定だよな。今現在…ブザーが脳内に響き渡る事は一切無い事からして…優花里はこの状態に本気で怒っていないのが分かった。

むしろ…華さんと同じ…この現状から、何かを期待している節が見取れる。

さて…ここからだ。

「ふむ…流石にもうでないかあ…」

「うう…隆史殿、最低です…変態です」

見たことないから、一度見せて？ の一言で、優花里に脚を開かせ…俺に良く見える様な格好をしてもらっている。

便座の上に座り…こちらに体を向けさせ…大腿を開かせて。

羞恥に染まりながら、こちらを恨みがましく見上げてくるゆかりん。

しかし、怒っている様にも見えるが、その目の奥が少し…怪しい光を放っていたのを見逃さない。

ぶっちゃけ「判別」を使用すれば、その人間の本人でも気がついていない性癖をも分かるのだけど…それは流石にツマラナイ。

探して行くからこそだろうか？ そこから、派生して別の性癖に目覚める事もあるしな。

…あれ？

なんだ…？　今まで、こんな遙か昔の考え方…：嫌悪していたのに…：まったく自然に出てきた。

探して、派生させて…：目覚めさせる…。

…：まるで、これから調教するかのような…。

スキル「解除」

「……」

…アレ？　なんで今、スキルが発動した？

「うう…でも、隆史殿。なんで一度服を着させたんですか？　…脱げとか言われると思っていたのに」

つと…イケナイ。

優花里の声と、恨みがましい目の彼女に意識が戻る。

「ん？　脱ぎたかった？」

「っ!?　んな事、あるわけないじゃないですかっ!!」

はい。パンツァーファイブの衣装を再度、しっかりと着てもらいました。

そして、後ろのファスナーをスキル「改造」で少しファスナー部分を延長させた。

…下の性器がしっかりと拝見できる程に下げることが可能になりました。ので…：そこまで下がらせ…：そこを持って引っぱり、少し強引にだけど…：下の毛が見える程まで拡張してもらっています。

こういう衣装着ているのだから、脱がすとかありえないだろう。部分的に見せる、見えるのが良いのに…。

後、一部を破いたり、破壊工作は絶対にしません。あれはタイツの専売特許です。

ああいったので、脱がせて全裸にする奴は、俺には理解不能だ。意味がないだろう。

「そっかあ…：期待した所、悪かったな。でもな？　俺は半裸の優花里が好きなんだ」

「…期待してませんし…：そ…：その好きは、あまり嬉しくありません」



と、拗ねた様に軽く、顔をそっぽ向けてしまった。  
ので…。

「俺は優花里が好きなんだ」

「くあっ!? なあ!! なんで、普通に言ってくれないんですかっ!?」

…真っ赤に取り乱してくれてますね。

「後、その全身タイツで言われても、嬉しくあり…ま…いえ…ちよつ  
……と」

「…ちよつと?」

手袋にした手を、上げ…軽く親指と人差し指で、円を作りながら…  
少し俯いて言ってくれた。

「…ちよつと…嬉しいです」

「……」

すげえ格好で、すつごいポーズで言われたとしても…かなり…破壊  
力のある…お言葉…。

俺も同じくして、顔に色が出そうになってしまう…ので…誤魔化そ  
うか。

あんこう怪人のスーツ…手の部分のヒレ? だろうか…それを取  
り外し手を露出させる。

あ…後、格好がつかないので…頭部も外しておこう…。

「…期待していなかった割に…随分と素直に言う事、聞いてくれた  
なあ」

腰を落とし…その開かれた部分を、指で触る。

「ちよつ…やめてください! 汚いですよ!」

先程出したばかりで、まだ拭いてもいない箇所を、中指でなぞる。  
湿った性器の入口から…少し、ヌルツとした感触。

「…やっぱり、期待してた?」

「だから、期待してつつんんっ!!」

ニツツと小さく音と一緒に、指に粘着液が付着していた。

そのまま体を少し覆いかぶさる様にしながら…その中指をグチツ  
…と。

「やっ!! はあっ!! んっふっ!!」

ゆっくりと…奥に押し込めていく。

指にまわり付く肉壁と、侵入していく程に、高まる優花里の心が心地よい。

「ほら…普段なら、まだ指一本入れるのもキツいはずなのに。すんなり入ったけど?」

「んあっ!!」

指の付け根で、クリトリスの上をスライドさせながら、膣内の上部を擦りつける様に、指を引き抜く。

突然の同時に訪れた刺激に耐えられなかったのか…脚は開いたままだが、両手を俺の首へと巻きつけてきた。

「で…ですから…汚い…:…んんう!」

喋らせない様に、また深く指を入れ…指先を何度も動かし、刺激する。

俺の肩に顎…口を押し付け、声を上げない様に我慢した様だ。

ビクビクと体が震え…体内で動かされている指の刺激に耐えていた。

「…なんで、こんなに濡れているのだろう…」

「しっ…知りま…あっ! うっ!!」

喋ろうとすると、声が漏れてしまうので、すぐにまた俺の肩へと口をつける。

「いやあ、すっごい音するけど」

「っ! っ! っ!! っあうっ!!」

薬指も同時に入れる。

二本の指が入りると、抱きしめる力更に強まった。

後は…無言で、音だけで認識させる様に大きくたてた。

ぐっちやぐっちやと、ゆっくりと丁寧…優しく。

「やっ!! はっっ!!」

指先でGスポットを刺激させながら、今度は前後から上下へと。

ゆっくり動かす手だとしても、激しく大きく音が響く。

顎を上げさせ…顔を近づけると…前回とは違い、今度は躊躇なく下唇を吸ってきた。

ちゅぴちゅぴと、少し遠慮がちだが、小さく舌を動かしながら…。その至近距離から見た、彼女の顔は、羞恥と快楽と…色々な物が合わさった、とろけた顔。

「んっ…ちゅっんっ!?」

舌先で唇をこじ開け、そのまま彼女の口内へと侵入させる。

暖かく艶かしい、感触と共に、優花里の舌へと絡ませる…と。

「んっっ!!」

最後だと…少し強く、激しく指先と掌を使って刺激する。

彼女の膣内が、一気に絞まり…彼女の腰が引かれた。絞待った膣内をこじ開けるよう、更に動かすと…。

「んっ!! んっ——!!」

手の中が、彼女の体温で埋まった。

指を伝って、下へと流れ落ちてゆく。

水と水がぶつかり跳ねる音…。

失禁…。

スキルの効果なのか、なんなのか…果てると同時にだろう。

しかし手は止めない。優花里の体内から掻き出すように、ぐちゃぐちゃとした音を、更に大きくさせていく。

「ふっ!! フー…フー…」

口を押し付けられている肩が、優花里の吐息で、熱くなっていく。

ガクンと、何度か脚を伸ばし、跳ねる腰。

…ビクビクと、徐々にその跳ねる腰も、痙攣へと変わり…。

「やっ…はっ…あっ…」

漸く落ち着いた。

体重を俺に預け…呆けた顔で、コチラを見ている。

体が小さく痙攣し…力なくダラン…と、両脚を投げ出している身体。

失禁姿を見られた…とか、そういう話りも、羞恥もなく…ただ力なく動かない。

今まで見た事がない程のイキっぷりだったな。

…いや? 例のキャンプへ行った時も、こんな感じだったか…妙

に感じやすく…たった一回、果てただけで、もう何度も絶頂した後の様だ。

…すでに思考が飛んでいるみたいだった。  
……。

優花里の性癖が、顕になった気がした。

みほは…コレから受ける刺激は、嫌いではなさそうだが、ここまでではない。

華さんは…刺激を求めて上手く、一致しただけだと思う。

麻子は…うくん。嫌がりはしないが、余り好きではなさそうだ。

沙織さんは……まだ、未体験だな。彼女の部屋のベランダではしてみたけど…あそこはまだ、彼女のテリトリー内だったしな。

…で、優花里。

「え…あ…う…」

ぐったりとした体を起こすと、俺の手の誘導に従って、壁に手を付きながらも立ち上がった。

優花里との位置を交換し、俺が便座にへと座ると…また彼女を、誘導する。

タイトの真ん中を、スキル「改造」にて、丸く開けると、彼女の目がそこに集中した。

今まで優花里の反応で、なんもしなくとも、そこから飛び出てくる陰茎を、呆けた様な眼差しで眺めている。

「……」

そう、優花里。

彼女は、行為をする場所に強く反応する。

少し開放感を求める みほとに通っている気もするが…なんだろうか、この差は。

口では嫌がるが、場所によっては、露骨に期待したかの様な表情になる。

……。

ま、今回、いちめるのは此処までにしておこう。

今からは、新たな…部位の開発。

「ふっ…ふー…ふー…」

コスプレにも似た衣装を着込んでの行為ですら、彼女はもう気にしていないだろう。

それどころか…その衣装の下に、装着してたであろう下着をいつの間にかスキルで取ってしまつて、ノーブラ状態ですら気がついていない様子。

…なんで、このスキル…「ステイール」だけ、こんなに定着していたんだろう…？

ものすごい自然にできたんだけど…。誤差も何もなく、あつさりとは強奪できた…。

腕を伸ばし、衣服の上から、その見事な手のひらサイズの胸を弄る。生で触るより、衣服の上から触る方が、何故か気持ちがいいのはなんでだろうか？

指先で、その胸の先端。突起部分周りをナゾルと、体をまた少しくねらせる。

…。

優花里の性癖、その2。

どうにも、彼女は場所の事以外に…行為となると…。

「優花里、前に教えた通りに…」

「はあ…はあ…わ…分かりました」

従順に言う事を聞いてくれる。

それが、どんな事でも…だ。

命令？ とでも言うのだろうか？ どんな無茶で、恥ずかしい行為だとしても、その「命令に従う」という事に快感を得るかの様に。それは誰でも…という訳ではなく、彼女の中の一定の水準を満たした相手に限り。

今もまた…全開教えた事を、羞恥に染まり顔を朱色に染めながら…。

「あ…う…」

…自身の指で、秘部を広げ…座った俺にへと、脚を少し上げた。ヒーロー物の衣装を着込んだ彼女が、その敵役へと…ゆつくりと

…腰を落としてゆく。  
その腰が落ちていくにつれて、目を大きく開かれて行き…優花里の入口と触れる。

…  
陰茎の先を、ギチギチと音が出てしまいそうな程に締め付けながら…。

「あうっ！ んっ…あああ…」

躊躇なく、自ら飲み込んでいった。



廊下…。

2階の…優花里さんと別れてた場所にまで、一応来てみた。

あの様子だと、多分お手洗いかな？ とも思ったからんだけど…。

その近くの階段のすぐそばに設置されている、おトイレにまで、ま  
ずは…と、来てみると…。

その中から…廊下にまで響く…その…。

『—— あっ！ あっ！ ——!! 』

…幸い廊下には、私以外に誰もいない。

まだ、あの劇の格好のままだから、こんな格好でいるのは、ちよつと恥ずかしい。

…でも大丈夫。人気はまったくくないから。  
だから…かな？

特有の…声の中から聞こえてきた。

ガタン、ガタンと…中の個室の壁だろうけど…それを何度もきしま  
せ、叩く様な音も強く聞こえる。

一瞬…やっぱり。とも思ったのだけど…正直に言ってしまうえば、声  
だけじゃ中の人物が、誰かは分からない。

だって…あの悲鳴にも、叫びにも似た…上擦った声って…誰か分からないんだもの。

個室前にまで行き、ちゃんと確認を取るの…ちよつと躊躇してしまい、女子トイレの入口のドアの前で…その…えつと…。

『す———い…いいい！ あ———ですから——ああ!! ——

—ああ!!』

女性が出す、甘ったるい声…を、聞いているしかなかった。

壁を隔てているっていうのもある。だけど、所々に会話も聞こえるし…今のこの学校にいる限られた生徒からして、推測は簡単だった。

どうしよう……いた。

「……」

所々聞こえる会話から、今の気持ちを…息を切らせながらも、言わせている見たいだった。

…隆史君がやりそうな事だ…。

たまに私も、言わされる…し…。

普通なら、彼氏の浮気現場…なのだろう。

許してしまっているの、今更…何も言えない…し。でも、だからといって、こんな…間近でというのは…私だってショック…なんだと思う。

頭の中に、冷たい刺激が一瞬走り…すぐにまた…色々みんなの事を思い出してしまう。

そして、いつもと同じで…逃げる。

逃げる。逃げてしまう。

…幸いにも、今回はその理由が目の前に有り、用意されていた。

『———っクッ！———すっ！———いきっつ——!!』

ほら…今も…聞き耳を立てている。

何も疑問もなく…優花里さんかと思える女の子の…声。

いつまで此処にいるんだろうか…でも、なんでだろう。離れる気になれない。

耳を刺す甘い声。…ドクン、ドクンと…何度も自分の心臓が跳ねている音が、大きく聞こえる。

…あの優花里さんも、こんな声を出すんだ…とか。  
何を言わされている…んだろう…とか…。

今…この中に、私が入っていったら…どうなるのかな？  
どうするのかな？

どうなるんだろう？

…今までのパターンだと、大体…一緒に。

「……」

体の温度が、上がっていくのが分かる。

無意識に、自分の体を撫でる様に触っていた。

身体の疼きを実感できてしまう…。

…あれ？

「……」

あれ…？ 逃げる？

違う…なにか、違う。

逃げているとか…そういった事じゃない。

…オカシイ。

今までは、色々な感情が、湧き上がり始めるのを…他の…みんなとの事を考える事で、押さえ込んでいた。

それが、無意識にだろうが、意識的にだろうが…分からない。

けど、ハッキリと変な嫉妬が、完全に消えているのが分かった。それとは別の、湧き上がる感情が、どんな感情か分からなかった。

分からな…かった…のだけだ。

「…あ」

気がついてしまった。

今、この状況だからこそ、気がついてしまった。

お友達との…開き直った関係…。

キス解禁…全員で…とか…言い出したのは…私だ。

だから…そう。

私も…今の状況を、楽しんでる…。

自然と手が…上がって行く。



入口へのドアノブへ、ゆつくりと。

湧き上がる感情の正体がわかると…無意識にゆつくりと…左右に口が開ていく。

…ああ…私はオカシクなってる。

ここに入れば…どうなるか。

何となくだけど…わかってしまう。

でも、ゆつくりと…だけど、上がる手に…躊躇はなかった。

何をどうされるか…恥ずかし思いもするし…また感情がごちゃごちゃになるとも思う。

思うけど………だけ…。

なにか…気がついてしまったら…。

とても、楽になった気がした。

「みほ？」

「ひゃあっつ?!?!」

突然、後ろから呼びかけられた、よく聞いている声。

驚いて背筋が伸びて…変な声が出ちゃった。

というか…考えが全部飛んじやった…。いきなり現実に戻された気分…。

「こんな所で、つつ立って、何してんだ? …それに、まだそんな格好して…って、俺も人の事は言えないけどな」

「えっ…ツ!? えっ!? えっ!?!」

振り向き、見上げる顔…と同時に、何度もトイレの入口へも視線を投げてしまう……う?

「…何故、俺の顔と、トイレを見比べている」

あれっ!?

あっつれええ!?

わ…私の後ろに…まだ全身タイト姿の隆史君が、立っていた…。

頭の部分と、手の部分は外しているけど…。

きよろきよると、顔を動かす私を、呆れた顔で見下ろしてるけど

…あう…。

じゃあ…トイレから、聞こえて来た声って…別人!? まったくの知らない人ツ!?

「……」

「どうした?」

ああああ!! 顔がツ! 顔がツ!!

私っ! 私っ!!

「何、赤くなってるんだよ…。はあ…早く、着替えて…ん?」

っ!?

頭を掻いていた、その手が止まった…。

その隆史君の顔が、私から女子トイレにへと向けられた…。

今もまた、絶叫にも似た声が、漏れて聞こえてきてる…のだけど…。

「…みほ。いや、本当に何してんの?」

「う……うう……」

驚いて悲鳴を上げちゃったけど…それに気がつかなかったのか…まだ、何度も甘い声が、小さく聞こえてきている。

それを隆史君も聞こえたのか…すぐに私の顔をまた、見下ろして来た…んだけど…。

「ちがつ! わ…私も今来たところ…」

反射的に出た言葉に対して…あ…まったく信じてない顔だ…。

それはそうだろうけど!! ちよつとはっ!

「…みほ」

うっ…悪い…顔してる…。

「ちよつと、確認させて?」

—

—

そのトイレの横…抱きしめる様に…腕を私の背中に回しながら、廊下の壁に押し付けられてしまった。

そのまま、背中をくすぐられる様な感触。

「つつ!？」

あつと、衣装のファスターをお尻まで下げられた…くすぐられる様な感触は、摘みを探していたんだ…というか、なんて早技なんだろ。

隆史君の手先の器用さが、最近、碌でもない事にばかり活躍している気がするよ…。

「ちよっ!?! 隆史君、ここ廊下っ!」

「俺、生徒会のお仕事で、最後に学校出るって事で、見回りしてきたんだけどな? もう誰もいないの確認してるから大丈夫」

「大丈夫じゃないよ!?! うう…お尻…」

「そこからファスナー最後まで開けないから、脚開いて」

「嫌だよっ!」

「ん……………っ」と

隆史君が何かを考える様に…確認するかの様に、こめかみを抑えた。

考え直してくれるのかな? とも、思ったのだけど…。

「嘔吐き」

「何が!？」

変に嬉しそうに…

「ほら、開いて、開いて」

「だから、ここ廊下だよ…流石に…」

「ま、ま、まあまあまあ、ちよつとだけ! ちよつとだけだからあ」

「その言い方なんか嫌あ」

うう…なんか、すっごい軽く言う事じゃないよ…。

あれ? 閉じた脚を、こじ開けようとしていた…手が止まった。

「…なら、みほ。一つ、聞きたい事があるんだけど…」

見下ろす彼の顔が、ものすごく…真剣だった。

「絶対にロクな事じゃなさそうだけど…。な…なに?」

それでも、真剣すぎる眼差しに、そう聞き返すしかなか…。

「手錠って、知ってるか?」

「  
」  
…え。

「やられる前に、やる…って、言葉知ってるか？」  
なっ…え？ はっ!?

「はあい、今なら怒んないから、脚開けてえ〜」

「  
」  
まあ…結局、断り切れずに、素直に開いちゃって…そのまま最後まで開かれちゃった…。

あ、はい。断り切れなかったただけだよ？ 誰に言い訳してるか、分からないけど…。

ば…バレてた…。

一番下まで下げ…この衣装…こんなに後ろのファスナー部分、長かったかな…。

そのまま…その…開かれた場所から…下着の合間を縫って…。

「みぽりん、デバガメは良くないと思うけど…？」

「ち…ちがつ！ んう…」

指が…。

「やっ…う…はっ…たかつ!」

「おー…すごい…まあ、月並みに言えば…大洪水って奴か…」

…いつもみたいにまた、いぢわるをする。

しやがみこんだ彼の中指が小刻みに動いて…私に聴かせるみたい…音を出しながら私をかき混ぜる。

動かされる度に、身体が反応してしまっ…気がつけば、前かがみになり…押し寄せる刺激を…待っていた。

「横からまだ聞こえるな」

「んっ…んっ…はっ…はっ…」

少し、左右を見てみると、奥へと続く、物音もなく静かな廊下…。

お陰で、横から聞こえる…誰か知らない人の甘い声と…私の押し殺した声が、変に大きく聞こえちゃう…。

「いやあ…人の声で、ここまでするとかあ…」

「んっ…んっ…んっ…」

「さて…確認も取れたので、もういいかな」

「え？ …あつ…はっ…んんっ!!」

もういいって言っておいて、入口を開いたり…揉んだり…浅く刺激していた指をいきなり、奥まで入ってきた。

あまりに唐突だった為に、大きな声が出そうになってしまった。…唇を噛んで我慢したというのに、そこからまた…

「中の声が聞こえるって事は、外からの声も聞こえるからな？」

「っっ!! んぐっ!! ううう!!」

ゾリゾリって、中を強く擦って…敏感な所を、ワザと刺激してくる。…こういう所で、相変わらず…私に声を出させようと、いぢわるをしってくる…。

隆史君みたいな事をする変態さんが、他にもいた…とか、嫌味の一つも言っただけと思っただけで、声に出そうとすると…多分、別の恥ずかしい声が、大声で出そうで…。

「…ん、指が締まったな。相変わらず、絡める様に締め付けてくるなあ」

「んんう!! んんっ! んんっ!! んー!!」

「って、事は…そろそろか。おー…すごいな…手にまで溢れてくる…」  
ぐちゅぐちゅって…音が…更に大きくなてられていく。

いつもこんな言葉にしないのに、今日に限ってなんで、口にす  
るんだらう？

言われる度に、何故か体が反応しちゃう…。耳とか…目の周りが、  
ものすごく熱い…。

気が付けば、隆史君の頭を抱きしめて、与えられる快感を堪能してい  
た。

優しく、敢えて気持ちの良い箇所を、なぞる様に…また、ぐ  
ちゅぐちゅって…。

来そう…。

訪れそうな、大きな感覚に体中で耐える様に、腰が浮き、脚が曲が  
る…と。

「…はい、終わり」

ぬるりと、突然、指を抜かれてしまった…。

「んっ…やつ…はあ…はあ…はあ…はあ…」

どうして？ とか、言ってしまうようになった。

でも、呼吸が乱れすぎて…上手く声がでない…。

……。

完全に私は、集中してしまっていた…。

思わず、なんで？ と、目で訴える様に下の隆史君を見下ろすと…  
彼がいきなり立ち上がった。

片腕は、私の脚を持って。

片足だけ上げられてしまい、上手くバランスが取れない。

両手をすぐに壁に付き、倒れない様に支えにするしかなかった。

「んじゃ、次な？」

「っ…ぎゅ？」

上手く思考ができない…。

焦らされた…というか、最後の最後で止められ、行き場を失った快感が体中を駆け巡っているようで、何も考えられない…。

少しボヤける視界に、彼の…その…アレが、いつの間にか露出しているのが目に入った。

…それ、そういう作りだっけ？

「んっっ!! あああうっ!!」

どうでもいい事を思った瞬間…彼が入ってきた。

「…っつと、いつもよりキツイ…」

…入れられた瞬間、視界が真っ白になった。

一気に一番奥まで…お腹を押される様な感覚に、思わず声が出てしま…。

「また、入れただけでいったかあ…」

……。

後は、もう…。

【 —— 】

隆史君が、なにか言った気がした。

…けど、もういいの。

気持ちがいい。

…それしか、今は考えられなかった。

必死で声を出さない様に、殺しているつもりだったけど、ほんとに大丈夫だったかは、良く分からない。

この格好だと、いつもと違う角度で入って来て…違う感触が、キモチイイ。

何度も、変なシユミレートをしてしまう。

もし…正面のあの壁。…影から、まだ残っていた生徒が現れたら…。

このトイレのドアが開かれ…中の人達が出てきたら…。

脚を上げ…横から入れられている…こんな場所が…恥ずかしい所が…

「つつあああ!!」

知らない人に見られるなんて、絶対に嫌。

嫌だけど…高ぶり溢れる変な感情で頭の中が、熱くなる。

あまりの気持ちよさに、思い切り閉じてしまっていた目を開けると…やはり誰もいない。

…普段学校へ来る時に見ている、居る場所での行為。  
学校…。

何時もなら声が飛び交い、大勢の生徒が行き来している廊下。

そのおトイレの横で、壁に手を付き…脚を上げて…えっちしてる…。

隆史君が、入ってくる度に、目の奥が白くなって…ゆっくり引かれる度に、脚が震えちゃう。

でも、隆史君もソレがわかるのか…腰を持って支えてくれる。するとまた、一番奥に当たるから…それだけで、何度も何度も…。

「…ふむ」

まだ私に入ったままだけど…また…突然、隆史君の動きが止まっ

た。

「みほ、ちよつと…首に手を廻せるか？」

そのまま、体を近づけ密着させてきたので、まだ熱い温度が残っていた為、うまく考えができない。言われるままに彼の首に腕を回して…。

「悪いが、ちよ…と、んっ…」

彼の唇に、唇を合わせた。

顔が近づいたんだから、良いよね？

…何をして欲しいか、わかっている様に、すぐに舌が入って来て…それに私も応える様に、動かし…絡ませる。

奥まで…奥までと、もつとして欲しいから、意思表示の様に更に絡み付かせる。

「っ!？」

彼は口を合わせたまま…今度は、体を支えていた私の脚をすくい…私の体を両手で持ち上げた。

浮遊感に驚き…両腕で、しっかりと腕に力を彼を抱きしめる。

…この格好…ですもの…好き。

一番奥に当たって…抱きしめ合えて…好き。

「悪いが、みほ。やっぱり、この場所だと集中できんから、移動するな？」

「んう…ばあ…しよ？」

私はもう、気にしないのに…。

彼が誰もいないと言ったのだから、それを何処かで信じていた。変な確信があったんだけど…ナンデダロウ？

「ど…んっ…こ、に？ また、トイレ？」

「んっ…いや、またって…。そ…んっ…。1階のほ…んっ!?!…が、んっ…!？」

「っっはあ…はあ…ちゆう…」

「…みほ。喋るのを…むぐっ…ぶはっ…口で邪魔するのやめてくれ」

顔が近い…近いから、一生懸命に唇を吸って…キスがしたい。



うん…そう。

キスがしたい…だから。

「…やだ」

自分でも分かった位に、ちよつと拗ねたみたいな言い方しちゃった…。

「……………はあ…。ちよつと、小さい頃のみほを思い出したぞ…」

呆れた顔なんて、ちよつとひどいかな。

それに、隆史君も…子供の頃の私を思い出すって…。

「隆史君の、ろりこん…」

「……………」

あれ？

…あの。

急に隆史君が、歩き出した…この格好のまま…？ あれ？  
…………。

まあ……………いいやあ…。

※ルート壊 【宴編】※ あんこう鍋 中編

「どしたの？ みぽりん」

着替えの為の私達の荷物が置かれていた、西住さん達の教室。

更衣室が何故か使えなかった為に、仕方なく利用するハメになっていた。

その目的だった教室に到着し、漸く着替え始めようというの時に、西住さんが先程通ってきた廊下へと顔を向けた。

「いえ…優花里さんが、ちよつと…心配だなあつて…」

「心配？ 何が？ ただ、お手洗いに行ってるだけだよね？」

「そうなんです…」

「？」

「いえ、だって…ですね？ あの…隆史君もどこかに、着替えに行ってるから…」

「……」

ある意味で、傍から聞けば、西住さんの言葉は、何を言っているんだ？ と思えると思う。

だが、ここにいる私達からすれば、西住さんの言わんとしている意味は即座に分かる。

「…ほら…隆史君…お……おトイレ好きだし…」

《……………》

いろんな意味で、自業自得だと思うけど、ハッキリと言ったな？  
西住さん。

その言葉で、一瞬動きを止めた五十鈴さんが怖かったけど…すぐに理解した。

……。

……さて…ここからだ。

まず先に携帯へと電話を入れみた。

案の定…といった風に、二人共出なかったみたいだった。

だからだろう…か？

「私、ちよつと探してきます」

「みぽりん…その格好で？　せめて着替えていったら？」

「だ…大丈夫ですよ。今日、人は少ないですから。見られは…しないと思います」

そう言つて、秋山さん搜索の為に、教室出て行つた西住さん。

虫の知らせという奴だろうな…。

そしてすぐに…「同じ格好で一緒にいれば、見られても言い訳がたつしよ？」…といつて、同じく西住さんの後を追いかけた沙織。

確かにこの格好で、一般の生徒と会つたらバツが悪いだろう…。西住さんに気を使つての行動だとは、思うが…。

……。

そう、ここから。

私も…沙織の後を追う事にしたのだが、五十鈴さんは「入れ違いになつても、なんですから…」と言ひ、教室で着替えながら、待つているという運びになつた。

正直…五十鈴さんも一緒に探索に行くのかと思つていただけ、相変わらず冷静で良かった。

確かに入れ違いになつたとしても、五十鈴さんから、私達に連絡をしてもらえれば、こんなふざけた格好のまま、学校を闊歩する時間が減る。

では、ここは任せ、私もすぐに…と、沙織を追いかけて、教室を後にした。

…と、思つたのだが…。

「うっ…!？」

「つと…あれ？　麻子」

出た瞬間、沙織の背中にぶつかつてしまった。

いや、ぶつかるのはいい…いや、まだよかつた。

教室の出入り口で、立ち止まるなど、少々文句を言つてやりたかつたのだが…見上げた沙織の顔が少し焦つた様な顔で、周りをキョロキョロと見渡していた。

私もそれに釣られ、視線を横に向けると、顔を動かしていた沙織の

気持ちだが、すぐに理解できた。

…自分が、いる場所がおかしかった。

いや、正確には変な場所ではない。

場所ではないが、オカシイ。

2年生の教室は、3階にある。

だから、3階にある教室を出てのだから、3階の教室が並んだ廊下に出るのが道理だ。

当たり前前の事なのだから、改めて意識する程ではない。

…ないのだが…明らかに、私達のいた場所が違った…ここは。

「あれ？…なんで…私達、1階にいるの？」

そうだ。自分達がいるであろう場所が、廊下の窓から見える風景で、明らかに地面に近い位置にいると分かる。

そして、私はこの時間でも、珍しく眠くない。

寝ぼけているとは、考えられない。

「……………」

よし!! 3階に戻ろう!!

「…しかも、保健室の前…。麻子？ 確かに私達、教室にいたよね？」

保健室から出てきてないよね？」

「何を寝ぼけている。保健室から出てきたに決まっているじゃないかかかか」

「……………」

「もし違っていたとしても、白昼夢でも見ていたと仮定するのが、妥当だぞう？」

「だぞうって…。はいはい、麻子。それでいいわよ、もうっ…」

それでいいじゃないか！ 好奇心猫を殺す。

現実的に、1階にいるだけ。それだけで。それだけでいいじゃないか！ 余計な推測はしないぞう！

よしっ!! 3階に戻ろうっ!!

『——っ!!』

っっ!?

「麻子…なんで、私後ろに隠れたの」

「ききのせせせ!!」

「なんの呪文よ」

「なんだっ!? なんだっ??」

「後ろから、声がつ!! 変な叫び声がつ!!」

「今の声…。保健室からだよね」

「違うな!」

「……」

「違うぞ!」

「…麻子」

「よしっ!! 3階に戻ろうっ!!」

「んじゃ、ちよと確認しとこっか」

「なんでそうなるっ!? 変な事が起こっているのに、なにを言っている!」

「いや、保健室のドア、普段なら鍵掛かっているのに、ちよと開いてるでしょ? あからさまにコレ、怪しいのに調べないとかないでしょ」

「沙織…むしろなんでお前は、この状況でアグレッシブなんだ!」

「お化けだったらどうするっ!」

「いや…ただ単に、私達が勘違いしたかもしれないじゃない。それにこの学校にいるのって、私達以外に他にあまりいないんだし、ゆかりんと、みぽりんかも、しれないじゃない」

「……」

「それに、ちよと今の声、みぽりんの声だと思っただけけど…」

「何をしている沙織。さっさと入るぞ」

「保健室のドアに手を掛ける。」

「西住さん達を見つけて、さっさと帰ろう!」

「さあ、さっさと見つけて帰るぞ」

「麻子…さっつきから恐怖で、愉快的なキャラになってるわよ?」

「失礼な奴だな!!」

手を掛けていた、保健室のスライドドアをゆつくりと開けると……ふむ。特に何も異常はないな。

特に何もなく……普段、たまに利用する保健室へと脚を入れる。

……その一番奥の一角。ベッドが6つ並んでいるその端には、カーテンが引かれていた。

誰かいる……のだろう。先程、沙織が聞き違いでなければ、多分西住さんだろう。

先に入った私の後ろから「おじやましまあゝす」と、沙織が小さな声を上げながら入っていった。

入り終えると、律儀にドアを閉めた。

「……」

ギシツ……ギシツ……と、少し軋む様な音が……。

ね……寝返りでもうっているのだろうか！

『はっ……はっ……はっ……んっ……あ……』

……。

その奥から……断続的に、息を切らし……苦しそうな……声がかがかがかきこえええええ。

「あそこか……。って、麻子、怖いなら廊下で待つてれば？」

「余計に怖いだろうがっ！」

こんな人気のない廊下……しかもこんな状況というのに、私をそこで一人でまたせるとか、鬼か!? 鬼なのか!?

詩織ですら……いや、あいつなら、喜々として挑発混じりの発

言で、私を放置しそうだな……。

今度は脚が止まった私の横を、沙織が躊躇する事なく、普通に通り過ぎ……突き当たりの窓へと向かった。

あそこから回り込めば、確かに誰がいるか一目瞭然だけど……な？

この声が聞こえないのか？

「チラツ……と見て、違ったら謝って、次行けばいいでしょ？」

「そうは、言っても迷惑だろ？ 病人だったら、どうするつもりなんだ？」

「……保健室で寝てるんだから、病人の可能性の方が、高いわよ……。麻子

は違うだろうけど」

「違うとは一概には言い切れないのではないか？ ほら、私も人間だ。生きていれば、体調を崩す時もあるだろう？」

「…ほんとに…言い訳が、隆史君みたいね。ほらっ！」

腕を掴み、止める私を引きずりながら…どんとどんと中へと進んでゆく…。

仕切りのカーテンの横にまで来ると、段々と人がいる気配が分かってきた。

まあ…声ができるのだから、いるのだろうか…。

……。

いるよな？ ちゃんというよな？

……。

全人類に見える人だよな？

ダメだ…見るのは沙織に任せれば良いと思ったが、ソコを気にしてしまうと…確認せずにはいられない。

カーテンの向こう側からは、はあはあと、激しい息遣いが聞こえてくる…。

何も言わないで、さっさと顔を近づかせ、覗き込もうとする沙織…。ならば、せめて一緒にと…恐る恐る…カーテンの端から…覗き込むと…。

「……」

「……」

私と沙織…一緒に、固まってしまった…。

「ああ、やっぱり沙織さんと、麻子だったか」

寝ていた…主。

そこには…書記が、ただベットに仰向けで、寝そべっていた。

「…た…かし君…」

「…書記」

確かに書記は、寝そべっているだけだったのだが…あまりにも普通

に、私達の姿を見て、普通に名前を呼んで来た。

しかし、その上…。

書記の横に脚を折り曲げ、四つん這いの様な格好で…書記に倒れこむ様な格好のままの…。

「み…みぽりん…」

例の衣装姿の西住さんが、跨つて…：その…腰を少し上げ…一心不乱にお尻を打ち付けていた。

パツパツと、肌と肌が当たる音が響き続ける…。

お尻をこちらに向けていた為に、私達が見えていない。

しかし、私達が来たというのに、その行為を止める事はなかった。お陰で、完全に出し入れするその部分が、丸見えだった…。

「…」

押入れから覗いてしまった時とは違い、真正面…目と鼻の距離での行為。

呆然とその行為に見入ってしまった…。

…。

…何を言っているんだ。

いや…私も、混乱しているのだろう。

ほら…沙織も完全に顔を真っ赤にさせて…硬直しちゃってるし…。

だというのに、書記は、行為を見られているというのに、西住さんを止める事も、声を掛ける事もしない。

「あっ…：はっ…はっ…んうう…」

パツパツとした音が、段々と大きくなっている。

やはり、西住さんは完全に私達に気がついていないようだ…。

「みほ、今度は教えた通りにやってみてくれ」

そのまま、寝そべり…西住さんの行動を受けれていた。

それどころか、更に行為を要求していた…教え通りつて…。

書記の言葉に、返事を返す訳でもなく、行動で応え始めた。

肩を上げ…書記の胸に添えていた腕を上げ…えつと…。

「ん…ちゅっ…ぱっ…はあ…」

あれは指を、舐めているのか？ 顔を動かしながら…書記へと見



せるように、音を大きく出しながら。

そして、すぐその腕を後ろへと回し…つて…え…。

「はっ…あ…ああ…つ!! うう…」

西住さんは、後ろへと回した…腕というか、手の…いや、指を…お尻の穴へとゆつくりと入れていった…。

さらに呆然としてしまう…。

位置的にハッキリと見えてしまう…。

「さて…何本入った?」

「やつ…う…はあ…。に…ほ…んっ!! んうっ!」

お尻の穴へ、中指と薬指を深く…入れてしまった…というか…入るのか…入るものなのか?

その状態で…西住さんは、また腰を動かし始めた…。

体勢的に辛いのか、先程とは違い、激しく上下ではなく、小刻みに前後に。

自分のお尻へ入れてた指を、動きと合わせるように、出し入れを繰り返しながら…。

その大事な部分だけ、衣装が開いていた為に、その行為はものすごく…強調してこちらに見せつけるようだった…。

動きが段々と早くなっていき、西住さんの動かす指も…止まらない。い。

「きもちいいっ! これっ…はっ! はっ! きもっ…ちっ!!」

もう…うまく、考えがまとまらない…。

それは沙織も同じだった様で…完全に立ったまま硬直してしまっている。

「みほは…アレ無しでも、大分慣れたなあ…もう十分か」

ぐちゅぐちゅ…と、聞こえる粘着質な体液が混じり合う音と…気持ちいいと、小さく何度も呟く西住さんの声しか聞こえない。

その出し入れを繰り返している部分から、濃く、真っ白い液体が…ぬらぬらと光っている…。

「みほ! みほっ!」

「はっ…んっ! …な…なあに? …こ…今度はあ…んっ! 何すれ

ば…いいのお？」

突然、書記がペチペチと、西住さんの頬を軽く叩いた。

体を動かす速度を少し抑え…西住さんが返事をする。が、その返事の声が…完全に呆けていた…。

「体を後ろに向けて」

「…う…うん」

言葉に従い、脚を上げ…身体を回した。

何をするか、わかっているかの様に、腰を俯かせて…お尻を上げながら、書記へと背中を向けると…実感した。

知らない…こんな西住さん、知らない。

コチラに正面を向ける時、西住さんの顔が漸く見えた。その顔はもはや、それは普段の彼女からも想像できない程で…いや、あの押入れの中から見た西住さんと比べても、今の彼女は別人に見える。

蕩けた目、口…顔。

日常…戦車の中での、彼女の顔。学校での顔。

色々な顔を見てきたけど…こんな…。

…。

何故か…また、自分と比べてしまった。

私も、こうなっているのか…と…。

…。

「ふえっ!?!?」

…。

あ、戻った。

何時もの西住さんの顔に。

ここで、体を私達の方へ向けた西住さんは、私達と目が合い…漸く存在に気がついてくれた…。

完全に動きが硬直し…書記に四つん這いになり、お尻を見せた状態で、止まってしまっているが…。

「」

一瞬で、ただでさえ赤かった顔が、さらに…それこそ、心配になる程に真っ赤になった…。

衣装と含めて、赤一色だな。

「さ…おり、さん？ まっ……さ…さん？」

いや…うん。

何をどう話したら良いか、わからん。

返事もできない…ただ、バツが悪そうに目を逸らす私達…。

「さっきからいたぞ？」

「っ!？」

…書記。

「というか、保健室に入ってくる辺りから、彼女ら、えらくおつきい声で、話してただろ？ 気づかなかったのか？」

「き…きずかなっ!! というか、分かっていたなら教えてよっ!!」

「いや、そういう、プレイなのかなと…」

「違うよ!!」

ここで、普段の彼女に戻ったと、実感できた…。

書記とのやり取りも、普段通り…沙織はもう、笑うしかないのか…目を泳がせ真っ赤になって乾いた笑いを出している…。

ま…ここまでか。書記の悪乗りが過ぎると、ここまでするとか…自分の時になつたらと思うと……ちよつと、どうしたらいいかわからんな。

「う……ううう……」

手で顔を抑え、そのままベットへにと、顔を突っ伏してしまった西住さん。髪から覗く耳すら真っ赤だ。

衣装の背中では、パツクリと空いているから…ちよつと、何を言っているか分からんが…。

「だあいい丈夫だよ、みぽりん！ 私達もちゃんと、隆史君の鬼畜ぶりには知ってるから!!」

「……………」

沙織。

それは、フォローになっているのか？

「あ、書記。お前は喋らない方がいいぞ？ 何を言っても墓穴になるからな」

「……………」

いつもの感じに、完全に戻った。

なんとも言えない表情の書記。その顔を眺めると、変な安堵を感じる。

いつもの様に、初期をなじると、さらに安心する。

やはり、これで終わりだ。

はあ…さつさと、戻るか。

はっ…。

あつさりと、この状況を納得し、次に移れる辺り…私も沙織も…完全に毒されているな。

…と、いつもの空気に戻ったと思ったのだが…。

「ひゃああ!!?!」

「!?!」

油断していたのか、思わず西住さんが声を上げた。

「いや…なんていうか…みほ。すっかり、指一本くらいなら普通に入るようになったな」

話の流れを無視…して、書記が西住さんのお尻に…って、なにしたら、書記。

「愛液がローション変わりになって、すんなり入ったな」

「やっ!! んっ…!? 中でえ…動かさない…で…あっ!?!」

「ほら、2本目」

「んんっ!!」

四つん這いになっていた為に、西住さんのお尻が書記の方へと向けられていた。

出し入れを始めたのか…ニチニチと音が、聞こえる…。

「すごい音するな」

「んっ! んっ! んっ!」

「さて…沙織さん」

「……………」

自然…あまりにも普通。

何気なく声を掛けてきた書記を、呆然と見つめる沙織。

「…沙織さん？」

「はっ!!!」

二度目で気がついたが、しかし目線が西住さんに釘付けになっている沙織。

その沙織に向かい、こちらに来るように手招きをしている。

は？

お…おい、書記。まさか…。

「……」

「お…い、沙織」

少し躊躇したのだろうか、すぐに書記の手招き応え…私の声を気にしないで、ゆつくりと書記へと近づいていった。

私も…その沙織の後ろに、何故か続いた…続いてしまった。

ベットの横に来ると…ハッキリと見えた。

顔をシートにへと付け、そのシート握り締め、お尻を上げている西住さん。

書記は、その中へと…何度も指の出し入れを繰り返している。

遠慮もなく、その穴をこじ開けながら…指を3本も入れ…。

空気が混じったグゴポポとした音を、ワザと私達にへと聴かせるように、さらに動きを早くした。

「いきなりここまでやると、筋肉というか…筋が切れて、普通に危険だからな？ ゆつくりと、馴染ませてからになるけど」

「……」

「……」

くぐもった、小さな喘ぎ声を上げている西住さんに対し、ごく普通…本当に普通に私達へと会話を始めた書記。

何も躊躇していない。照れたり…焦ったり。そんな様子は微塵もない。

…そういえば、この場所に来た時もそうだった…。

なんだ？ 今日の書記は…おかしい。

「みほ、ちょっと…」

書記が、ベットから体を下ろすと、アソコに入れたまま、西住さんに体を動かす様にと…ベットから降りるようにと誘導させた。

降りると言っても、半身。

ずり落とす様に、片脚が下り…両脚が下り…ベットの横にへと誘導していた。ただ、西住さんは足に力が入らないのか…。

両腕を折りながら、上半身だけベットへ倒れこむようにして、まだ抜かない、書記の指の動きに耐えている。

フーフーと、小さな呼吸が聴こえてくる。視線を下に動かすと…西住さんの脚が、小刻みにブルブルと震えていた。

お陰で、ベットに横から俯せに寝て、お尻だけベットから降りた書記に向けている…といった、ものすごく恥ずかしい格好が出来上がった…。

「んで、沙織さん」

「……」

「あの…沙織さくん？」

「う…な…に？」

いつの間にか、西住さんへと体を向けて立っている書記の両脇に私達がいる。

このピンクの全身タイツの変態。ただ、股間部分だけ開き…そこから、伸びているモノを隠そうともしない。

書記の呼びかけに、すぐに気づかない程、それを食い入る様に見える沙織も沙織だけだな…。

「ずるいとか、仰ってましたけどね？ ごめんな。みほは特別だから、全てみほを、優先する様にしてんだよ」

「…え」

「……」

「はっ」

「興味あったんでしょ？ お尻」

「なっ!?!」

「ちょっと待て。」

普通に…ものすごく普通の笑顔で、思い出したかの様に言ったな。書記の言葉にすぐに連想、思い出した…。

その沙織が、西住さんに対して…しかも、コレに関して「ずるい」と言った事って…あの時…。

なんで気がついた？　すぐに気がついた？　私はここまで…

「んでもって、麻子」

「っう!？」

…な…なんだ？　私か!？」

コチラを見下ろして、いつもの顔、いつもの表情…。

私には、何を言うつもりだ…？　いや、しかし…あの時の事がもしバれているとしても、私は特に…。

「今回の作戦立案者殿？」

「なっ!？」

「あ、みほは、喋ってないぞ？　俺が調べて分かった事だから。拘束ねえ…」

「」

い…今の…今までの発言…。

まさか…全て…。

大きいままのソレを隠す事もなく…。

「んじや、折角だから…二人も手伝ってくれるか？」

スキル「催眠」

沙織さんと、麻子には、体育館を出る時に弱いレベルで、使用しておいた。

保健室に誘導する時や、後は多少の疑問、不自然さ。全てがどうでも良くなる、あまり強く疑問に思わないように。

流石に建家の階移動は、麻子の「催眠」が、溶けかけたけど…沙織さんのお陰で、どうにかなった。

みほとこの行為を目の当たりにしても、逃げ出さなかつたりしたのは、コレと…彼女達の本能がそうさせたのか…。

スキル「欲望」

みほ達、全員へと掛けたスキル。

自身の欲望を求める。今回は、レベル10段階の内、レベル2で掛けた為に、そちらへそちらへと、流される様になった様だ。

お陰で、二人の前だというのに、このみほの乱れよう…ある意味で心を許している二人だからだろうか？ すでに見られていると言うのに、強く嫌がらない。

ちなみに、MAXレベル10…での使用の場合…どうなるか、想像もつかん…。

欲望を満たす為に、恥や外聞、全て捨て、人前、複数…なんでも有りになりそう。それこそ、街中の往来でもな。調整に気をつけんと…。

「催淫」と、重ね掛けなんぞしたら…人の尊厳も、何もかも捨ててしまいそう。

◇

亀頭根元、カリの部分を、なぞる様に動く舌。

口の大きく開け、唇で噛むように左右から啜え…同じく左右に動かさせる。

飲み込まさせないで、舌だけ動かさせ、唾液を絡ます…二人の舌。

「…んっ…ちゅぶっ！ はっ…あ…」

「れあ…んっ…」

亀頭を取り合うように、向かい合っているお互いの舌を、時に絡ませる程近づけている。

お陰で竿部分には、二人分の唾液が、根元までビチャビチャになるほどの量が流れ…。

「…趣味が悪いな、書記」

一度口を離し、少し恨みがましい目で見上げて、んな事を言われて



しまった。

しかし…。

「…みほどの事を黙って見て…ここまでにさせた、マコニヤンに言われたくないなあ」

「ぐっ…」

二人の衣装。みほと同じく全開させたら、すぐに分かった。

二人共に、みほの痴態を見て、激しく下着を濡らしていた。

「ほら、麻子」

「…分かった」

みほの尻穴を、愛撫する指は抜かず…余った左手で、左側に膝まづいている麻子の頭を撫でる。

頭に手を置くと、口を離れた麻子はまた、沙織さんとキスをするかの様に、舌を絡ませながら亀頭を、横からしゃぶり始めた。

手の中を滑る、やわらかい感触と共に、思うのだが…一言、口で湿らせてと言っただけなのに、二人共躊躇なく…この状況を作り上げてくれた。

二人もみほに、アテられていたのだろう。とても素直に従って、俺の左右に膝を付き、二人揃って舌で奉仕を開始した。

仕方なく…と言った具合ではなく、今も一つの陰茎を、左右から取り合う様に唇と舌を這わせている。

「ちゅ…ここが、いい？」

沙織さんは、兎に角、俺の反応を楽しむ傾向が強い。

「あ、はい。気持ちいいですよ？」

「うん…んっ…じゃあ…ふあんばる…」

俺自身、気持ちがいい刺激を感じてしまえば、無意識にだろうが、なんだろうが、体が反応してしまう。

それが楽しいのか…嬉しいのか…的確に、俺の好きな箇所…というか、弱点を突いて来る。奉仕…自体が好きなのだろう。

今も、横から…舌の先、表面を使い、亀頭の裏スジの根元を、器用に攻めてくる。

…しかも、良いかどうかとか、聞いて…俺に言わせたいというのが、

良く分かり…変な所が俺と似ている…。

「麻子は、口に入り切らないから…舌の動かし方が上手くなつたな」  
「んぶっ!? は…恥ずかしい事を言うなっ!」  
「そもそも、教え込んだのはお前だろうが!」

「後…こう…あまり、こういう事に、恥ずかしがらなくなつたな」

「っ! ……私も、いい加減…慣れる」

「ちよつと寂しい」

「どうしろって言うんだ!!」

麻子は、少し眉間に皺が寄っているが、鼻息を少し荒くし…沙織さんに對抗するかの様に、沙織さんが攻めてきた箇所を、後から攻めてくる。

そしてその麻子を褒めると「褒めてないだろ!」

…褒めると、沙織さんの動きが激しくなる…。「聞けっ!」

結果、取り合う形になっているのだけど…な。

亀頭を舐める際、取り合い、近づきすぎた二人の舌が絡み合う。気にもしないで動かすその二人の刺激は、非常に気持ちよく…心地よい。

舌を限界まで伸ばし、文字通り味わっている二人の顔を見ると…正直、このままイってしまい、二人を同時に汚してしまいたいという、衝動に駆られるが…今は、みほだ。

左右の二人と会話すら、聞こえていないのだろう。完全に集中している。

「すごいな、みほ。尻の穴だけで…愛液が下に落ちてるぞ?」

「っ!! —っ!!」

すでに4本目。

痛い…苦しいと言った感覚を、スキル「感覚変化」で、快楽に全て振り分けておいた結果…ほぼ全ての指を飲み込んだみほは、陰茎と違い、中で動かし掻き回される指の快楽に墮れている。

ギチギチに指を締めててくる肉圧を、強引にこじ開けるように動かす…みほは体で悦ぶ。

敢えて触れず、放置している膾口からは、ポタポタと…長い糸を引きながら、何度となく床へと落ちていく。

さて…もういいか。

すでに「リフレッシュ」は、使用してるから…全て清潔そのモノだ。

それに敢えて今回は、スキル「催淫」を掛けないで、どこまで行くか…だな。

一応…「EXP」を掛けておくか…。現状、レベル3で掛けておいた状態で、いたので思いの外慣れてくれていたけど、入れるとなると、少し心配だ。

んじゃ…。

「もういいですよ」

「…いいの？」

「ええ、ちよつと立ってください。麻子も」

「…ぶっ…分かった」

二人を制すると、沙織さんの名残惜しそうな声。

それに応えると、素直に俺の言うことに従い立ち上がってくれた。

「んんっ!!」

二人が立ち上がるのを確認すると…ここで、漸く指をみほから引き抜くと、またみほが声を上げた。

大きく息を切らし…力なく両腕が頭の上へと、シーツにシワを作りながらズリ上がっていく。

両手でみほの…衣装が捲れ上がり、露出した白い尻へと手を這わせる。

先程まで入れ、かき混ぜていたその入口の肉が、少し浮き出し…ヒクヒクと小さく開閉を繰り返している。

「…んじゃ、みほ。入れて良いな？」

「はあ…はあ…う…うん」

力なく放り出されていた、みほの両腕に弱々しくだが力が、入った。ただ俺が宣言しただけではなく、何を言いたいか分かったのだろう。

どこで覚えたかは、知らない……ただ、自分の幼馴染……こんな関係だ  
けど、彼女……恋人。

その恋人が……俺が教えた訳でもないと言うのに……。

「んっ……はぁ……ど……」

両手を開き……自分の尻に添え……その肉を掴む。

その白い指に力を込め……肉の入口を開いき……コチラを羞恥と快楽  
に濡らした目で、少し振り向き……グツ……と、手に力を込めた。

肌と肉を自ら引つ張り……入口を少し開かせ……。

「……ど……どうぞ……」

と、一言、言った。

思わず、喉がなる。

……どこで覚えた、こんな事。

色々と、段階すつ飛ばして……

「あ……あの、恥ずかしがり屋のみぽりんが……あの雑誌の、恥ずかしい  
特集記事を再現した……」

……。

………沙織さん？

【———】

……？

……と、そうだ。そうだった……。

今回、記憶を有した通常の状態で、アナルに入れるのは、始めてだっ  
た。

過去に消していた記憶が、潜在意識に残っていたのかもしれない……  
が、入れられる事に躊躇をみせる事がない。

普段は少しおっとりとしている彼女から、想像もできない姿。

四つん這いになり、頭を下げ……性器と恥穴をこちらに向け、男根を  
受け入れる為に、自らその入口を開せ見せつけてくる。

血液が一箇所が集まっている気がした。

熱いく猛るとは、まさにこの事か…普段なら、冗談や気恥ずかしを感じる言葉だが、今、この時ばかりは陰茎が破裂しそうな程に熱く、固くなっているのが分かった。

唾液でベタベタになっていているが…念の為に使用しておいた「一口シヨン」を陰茎に一度擦りつける。

尻の上に置かれた、彼女の手の上に手を包み込む様に被せると、みほの体が、一回、小さく跳ねた。

同時に、恥穴へと亀頭を添えた感触を感じ取ったのだろう。

「…だ…大丈夫なのか？ アレ…」  
「し…知らない」

みほの恥穴に、これから入っていくであろう、俺の陰茎を見比べて、不安の声が左右から聞こえる。

今は、ベツトへと腰掛け、みほの上げられたお尻の横から、その先を覗きもしないで見入っている。

目線を落とすと、いよいよかと、言わんばかりに…みほが、少しコチラを振り向いた。

前髪の間から覗く、涙を含めたその目は、爛々と輝かせ…すでに恥ずかしさなんて、感じていない。

フーフーと…小さく荒げた鼻息すら聞こえる…もう、二人に見られている事は、気にもしていないだろう。

ただ今は、これから訪れるであろう、快樂に期待しているだけだ。  
…何故だろうか…。

変に冷静な自分に気が付く。

理性なんてぶっ飛んでしまいそうな、シチュエーションだと言うのに。普段なら大げさに慌てる様な事に、なっているのだろうなど、分かるくらいに客観的に自分を見れる。

あからさまに、アブノーマルな好意。

みほ達、ただ若い連中なら、興味本位や、偏った知識でしてしまうかもしれない、性行為だろうけど、俺は違う…。

「かつ…あつう…つつつて、来るう…：…う」

ブチツ…と、粘着液が空気を含み…弾ける音がした。

「うわ…ほ…本当に入ってく…」

「……………」

自身の陰茎が、みほの恥穴を拡張していく。

比例し、みほの恥穴が、俺の陰茎を飲み込んでいく。

「あう…熱い…あつ…」

少し苦しそうな、みほの呻き声が聞こえる。

熱を持って、ギチギチに男根を締めつけ、肉壁が押し出そうとくるが、強引に押し込み…進み続ける。

ゆっくりとだが、徐々にみほへと入っていく最中……すぐに苦しそうな呻きの中に、甘い声が混じり始めた。

「つ…あつ…あうつ！ …あ…」

それはそうだろう。スキル、道具…それぞれを使って、準備したんだ。

普通とは違い、初回で感じ…分かるはずだ。

「うっうっ!!」

全てを飲み込み、肌と肌が触れると…。

「ぜ…全部入った…」

「…すごい…な」

完全に見入った横の二人から、呆然とした声が漏れる。

「あ…っ…う…」

みほの呼吸と声が、聞こえる。

表情が見えないのが、残念…だけど、肩がビクビクと、痙攣させている。

まあ…一度か、二度、果ててしまったのだろう。

初回…だと、思い込んでいる彼女からすれば、混乱しているのかもしれない。

「んっ！ う！ う！う……………」

休ませない様に、少し…一番奥にまで行った陰茎を、引き抜く。

…俺自身、動きたくて仕方がない。

悪いが、ここでその混乱を解かせる訳にはいかない。

今のその感覚が、通常だと思ってもらおうかね。

「た…隆史君？」

「西住さん…ちよつと、辛そうだが…」

二人の声は、耳に入るが…敢えて、聞かない。返事もしない。

やはり、頭の中が変に冷静だ。

一度、動き出してしまえば、止められなくなるのも分かっているの行動。

抑制できない体の状態を把握している。…頭だけはやはり、冷たい。

「ン。!!ア。!!ングツ」

いつもよりは、激しくないが…それでも強引に早く動く。

何度か…この圧迫感にイカされそうになる程のに。

普段の後背位とは違う反応。

強引に腕の力で、根元まで入れ…そのまま力づくで体を押し出す。

その繰り返し…。

みほは、声を抑える事もできずに、混乱を含めた、獣地味た声を何度もあげる。

やわらかい肌が…身体が、ぶつかる度に痙攣している。

徐々に慣れてきているのか、滑りが滑らかになっていく。

後背位で、スカートに皺を作りながらも、自分から腰を動かすみほ。

それを息を飲み…見続けている、麻子と沙織さん。

訪れる快樂の波に、脚が震え…腕はすでに力なくベットへと投げ出されている。

ああ…後。

正直…今までの格好は、動き辛かったので、スキルで服装を変えてみた。

いつものパンツアージュジャケット。

あの衣装だと、胸が見れない…直に触れない…で、変えてみた。

すでに3人とも、服装はどうでも良いみたいだった…まあ、スキルで疑問にも思わない様になっているけどな。

…ほら。やはり変な所で冷静だ。

冷静だからこそ、もう一度。

これは、アブノーマルな好意。

若い連中なら、興味本位や、偏った知識でしてしまう性行為。だけ  
ど俺は違う。

「み……」

「……」

本格的に、調整し、スキルと言った反則を使い……強制的に素人を玄  
人状態にしている状態。

尻穴で快楽を感じ、考える間もなく、それを与え続ければ、どうなっ  
てしまうかなんて知っている。

ここまでする気なんてなかったし……今日という日に、する事になる  
なんて思いもしなかった。

みほの体を……調整し、調教する……。

「……あう」

「……」

いや……みほだけじゃない。

すでに黙り……友人の尻穴から、出し入れされるモノをただ眺めてい  
る二人。

彼女達もそうだ。

この壊れた関係……この異常な今、この関係。

どうせなら……逸そ、最後まで……壊れてしまえ

《《

そうだ、みほも……自分の事、皆の事を思つての選択で、壊れてしまつ  
たんだ。

なら、俺の為にも壊れてくれ。

……コワレ……テ。

そうだ。……俺の為だけに……「壊そう」。

《《



「ぐっ…」

ズキンと…頭に痛みが走った…。

声が…響いた気がした。

いや、響き続けている。

《特定ノ——ヲ、観測…成功》

違う…いつもと違う…。

いや、俺はこの声を知っている。

認識したら、すぐにハッキリと…聞こえる…。何を言っている？

…脳内の奥からの…呼びかけ…の、よう…：…な…

《スキル「解除」×「欲望」×「タラシ殿」ニヨリ、新規派生》

…。

《ユニーク・スキル「壊」ヲ、獲得》

…。

《現時点ヨリ、発動シマス》

…。



…一瞬意識が飛んだ。

何をどう…いや、まあモウ、ドウデモイイ。

「おっ…：…あっ…んっ…」

顔を近づけると、反射的にだろうか？ 唇を合わせてくる。

すぐに舌が入り…絡みつき…吸われる。

ぐったりとした体で、手足を投げ出し…ベットへと座る、俺の上から動かない。

後ろから両脚を、俺の両脚で下から開き、支えられているみほ。性器からは、愛液が滴り、根元まで啜え込み未だに離さない恥穴の表面をローション変わりになる程に汚している。

…つと、一瞬、意識が飛んだ。

何度も出し入れを繰り返して、中で果て…吐き出された精液も混じり…グチャグチャになっている。

頭は天井を向き…後頭部を俺の肩に掛け、力なく俺の上に跨っている。

その横…反対側から、みほの唇が離れると、次は私だと麻子が唇を…舌ごと合わせて来た。

「はい…んじゃ、沙織さん」

「う…うん」

スキル「召喚」は、何も衣装、服装だけじゃない。

もう、隠す事もなく、彼女達の前で、ソレを使い…彼女に持たせる。どうで、都合良く、記憶も操作できるし、認識も書き換えられる。変に隠すのもすでに面倒くさい。

「い…入れる…よっ…」

逆駅弁のまま立ち上がり…彼女がやりやすい様に、身体を動かす。グチャツ…と、またみほの体が沈む。

「こ…え？ 両方…入るモノなんだ…」

同時に、秘部前に添えられていた、沙織さんが持っていたピンク色の擬似男根。

要は、バイブも同時に入っていく。

「っっ!! っ!!」

みほの体が、また痙攣した。

まあ…また、分身でも使えば良い事だけど…ここは敢えて彼女にやらせる。

すでに抵抗もなく…根元まで受け入る事ができる、全後の穴。

「みほ」

「っ……あ……う……」

「両穴広げられるつてのは、どうだ？」

もう、隠す事も濁す事もなく、言放つ。  
抵抗も何もない。ただ、自然と口にできた。

「やつ……う……アツアツ……アツ」

返事を返す余裕もないのか……目だけをこちらに向けてきた。

「沙織さん、もっと早く動かしてみて」

「えっ……でも、ちよつと辛そう……だけど……」

「みほもその方が、気持ちが良いみたい」

「……う……うん……」

みほの体を少し持ち上げ、腰を動かす……。

麻子は、俺の横から……その二つを受け入れているみほを、しやがみこみ、下から見上げていた。

バイブの機械音と共に、グチャグチャと、音が何度もループして聞こえる。

「あー!! あー!! あっ!!」

耳元からも、その甘い声が聞こえる。

何度も出し入れをする、秘部からは、動かす度に愛液が飛び散り……恥穴から、先程散々出した精液が下品な音と共に、隙間を見つける度に飛び出す。

しやがみ込んでいる沙織さんは、ただ呆然と……俺の言われるがままに、俺と共にみほを攻める。攻め続ける。

飛び回る、愛液と精液を顔に受けながらも、その目が離せない……そんな感じに気が付けば、無言のまま……夢中になっている様だ。

……しかし……これだと上手く動けない。  
ならば……。

一度、沙織さんの手を止めさせ……みほをまたベットの横から、俯せに寝かせると……すでに足に力が入らないであろう脚をすこし上げさせ……膝をつかせ……。

秘部にバイブが入ったまま……両腕を持って……思いつきり動き始める。

今まで力が入っていなかった体が、大きくビクンと跳ね上がる。中でバイブのすこし硬い感触もしたが、構わず動き続ける。そう、またいきそう。ならばみほにも俺の行動意図が分かりやすいようにと…激しく腰を打ち付ける。

「なっ…中で当たっうっあぁ！ あー！ あー！」

バツバツと音を響かせ、みほの体を逃がさない。

俺が最初に願ったスキルが、普通に現れたから、使っている。何故あの時に、「解除」が発現したか…いや、もはやどうでもいい。適度にスキルで「回復」もさせているので、気絶も出来ないだろう。

胸を揺らし…尻肉を震わせ…逃げ場のない快楽を受け続けている。

「…いく…ぞっ…」

宣言すると、みほの体に力が入った。

大きく動かしていた体を、小刻みに動かし…最後に強く、一番奥に殴る様に突き当てる。

…これが、みほが好きらしい。

「ひゃ!! う…ううっ!!」

俺を果てさせる事が、彼女の中の一番の欲望…らしい。それは独占欲をとて強く刺激する…と。

だから、口でするのも好きらしい。…ダイレクトに感じられるからだ。

散々動かし攻め続け…喘ぎ声を混じらせながら、白状させた。

沙織さんも、麻子も見てるから、言ってみろ…と、敢えて意識させながら。

今まで、こう…言い捨てる言い方や、命令口調は使わなかった。

あまり好きではないし、気が引けたから…しかし、思いの外…この口調はみほ…いや、彼女達を喜ばせた。

3回目になるであろう精液を…彼女の中に吐き出す。

身体全体が小刻みに震え…脈を打つ。

精液操作…一番最初のスキルを限界にまで使った行為。

ただでさえ、俺のはアレなのに…一週間以上、溜めた状態の量と濃

さのを、何度も彼女の中に流し込んでいる。

しかも…ここまで、繋がりはなすから…さて。

「っ…っ…うっ…あっ…いいい…」

恍惚の笑み…いや、声を上げている。

ここまで、感覚…感度、それらの向上スキルは一切使っていない。

…だから、これがある意味で、素のみほになる。

いや…させた。

「んんっ!!」

ズルツ…と、そのまま陰茎を引き抜く。

恥穴はポツカリと、すこし閉じただけで、開いたまま…。

ブビツ…ブチツと…下品な音を出しながら、体内に残っていた、今

までの精液を吐き出し始めた。

「んっ…はっ…はっ…」

ものすごい量の白い液体が、飛び出し…体を伝い、そちらの方に、出

したかの様に膣口まで汚す。

お尻を上げたまま…動かないみほに対し…さらにその汚れた膣口

に指を入れ、余韻に浸らせないように、まだまだ…と、小さな快樂の

波を幾つも作り続ける。

「さて…」

「っ!?!」

「っ!?!」

グチュグチュと、みほの恥部から流れる、掻き回す音と小さな喘ぎ

声。

息を飲み、喉を鳴らして、淫らに燃がつているみほを眺めている二

人が、突然の俺の声に対し、同時に驚き体を硬直させた。

スキル「リフレツシュ」で、清潔だが、彼女達からすれば、そ

れは分からない。一応…と、スキルで取り出したウエットティツ

シュで、息子を丁寧に拭きながら聞く。

「二人は、どうする?」

…と。

何に對しての「どうする?」…か。

ここまで、ほぼ見ていただけの彼女達は、この後の行動をどうするだろうか？

俺が何を言いたいか分かっているのか…顔をすこし伏せ…決めあぐねている。

「…そうだな」

まだ、そこまでハッキリとは言えないだろうが…まあ、いい。

すこし、助け舟を出しておこうか。

「んじや、二人共？」

「なっ!? ……なん…だ」

「な…に？」

「みほの横に…そうだな。スカート捲って、同じ格好になってくれ」

「っ!?」

「えっ!?」

「今までの…みほと的事見て、そろそろ限界だろ？」

「……う」

「……」

俺がハッキリと言ってやると、今更ながらに顔を更に赤らめた。

何か、躊躇…しているのだろうか？ ソレも今更だろう。

「んあっ!!」

グチャツ…と、すこし強くみほを刺激したと分からせる様に、指に力を入れる。

すると、立てていた脚の膝が折れ、力なく両手を投げ出し、足は正座のまま上半身のみベットへ倒れ込んだ。

膝を曲げてた為だろうか？ 太ももにお腹が圧迫され…恥穴から、また残っていた白い体液が、何度も音を出して、飛び出してきた。

「はっ…はっ…はっ…」

ズルリ、指を抜くと…手が何で濡れているか分からない程に、ベットになっっている。

その様子を見て、沙織さんが「ま…まだ出てる…」と、小さく呟いた。また二人の喉が鳴る音…そして。

…まさかの麻子から、動いた。

ギシツ…と音をさせながら、ベットに膝を立てると、みほの左横にへと手をつくすと、体を丸め…自分からスカートを両手で捲った。

そのまま、まだ恥ずかしいか…みほと同じように、亀の様に座り、横から除き込むようにこちらに視線を投げってくる。

「麻子!？」

驚く沙織さんの声。まあ…一番渋ると思ったからな。

その声を他所に…下着に隠された、小さなお尻をゆっくりと上げた。

…思わず、触れてしまうのは、仕方があるまい。

「なっ!…撫でるな!」

いや…撫でるよ。撫でますよ。

すこし摘んで絞れば、水分が溢れてきそうな程に大きなシミを、秘部部分に作り出していた。

親指で触れて押し込み、下着のみ少し引っ張ると…グチュ…と、糸が引く。

「…なんか…お漏らししたみたいになってるぞ?」

「うっ…うるさいっ!」

「麻子…自分で、弄ってただら?」

「…う…ぐ…」

否定しない。

まあ…おもいつきり見えていたしな。

俺の言葉に、思わずみほを見てしまったのだろう。

ゴクリと、また息を飲む、喉が鳴った。

完全に惚けてしまい、目の焦点が合っていないようなみほの、完全に蕩けてしまっている顔を、間近で見ている。

その顔を見て、段々と口が半開きになっていく麻子。

グツ…と目を一瞬閉じると、覚悟が決まったのか…俺に何をされても良いと言った、あの時と同じ言葉を口にする。

「も…もういい。す…好きにし…」

初めて関係を持った時と同じ…麻子がこのセリフを言う時は、本当に何をどうしても良い時だ。シンプルだが、分かりやすい言葉。

好きにしろ…と、また言いそうだったので、それを止める。

「オネダリしてみて？」

「はっ!？」

それじゃ、余り意味がない。彼女から求めてくる様にしなくては、ダメだ。

…沙織さんの、例の雑誌を読んでいる事からして？ やり方は知っ  
ている…かな？

ギシツ…と、もう一つ音がした。

みほの右横に、沙織さんが手を付いていた。

ただ…スカートを捲る前に、膝を立て…パンツを膝下にまで即座に  
下ろした。

みほにも負けず劣らずの、白く大きな尻を…続ける様にスカートを  
捲くり廻にした。

…あら。下着は見せてくれない。

「き…今日…その。余り可愛くない下着だし…その…」  
……。

あ、はい。

その言い訳は卑怯だなあ…。

逆に捲る。

愛液に光る秘部をこちらに向け…。

「わ…私も…えっと…オネダリ…した方がいいよね？」  
……。

あ、はい。

沙織さん…出来上がってるなあ…。

そうか…彼女の性格からすると…もう、余り躊躇はないのか。

「み…みぽりんも、頑張ったし…私も…」

ただ踏ん切りがつかなかっただけ…。麻子の行動で、その最後の躊  
躇が消えたのだろうか…。

だから…。

「んっ…」

股の間から、手が…長い指が、見えた。



みほとは違い、分かっている人…の、行動。耳年増な彼女なら、すぐに分かったのだろう。

相変わらず知識は、ものすごい持っている。俺との関係を持った後、まあ…色々調べた様だ。

だから、コレか…人差し指と中指で…グチツ…と、膣口を開かせ、覗かせた…。

「…これ、かなり…うう…恥ずかしいね…」

「……」

はっはー。

「うゝあゝ つつ!!」

と、笑いながらも、前戯も前置きも何もなく、一気にその奥にまで突き刺す。

膣口から中まで…と、いきなり強引に、こじ開けられた為に、肺の息事、甘い声を吐き出した。

その一番奥…子宮口すら使う様にと、一気に腰をぶつける。

「はっ…はっ…はいっ…たあ… ああ…あっ…あんっ!」

いきなりの事で、まだ苦しいのか…少し荒い呼吸だったが、息を整えさせる前に、一気に動き出す。

「はっ…激しっ! んっ!! あああ!!」

ただ激しく、俺がいく為だけの、ラストスパートとばかりに飛ばす。

彼女は基本的に、スローSEXが好みだが、この時はさんさん焦らされた後…の様な身体をしていた。

挿んだお尻の…熱い体温を感じた。…早く逝かせて欲しいと、彼女の体内が入れた瞬間、うねり動く。

「なっ…!?!」

麻子が、声を上げ体を起こして、コチラを見てきた。

バツバツと、肌がぶつかる振動で、ベットが動き軋む。沙織さんの両肘を両手で持ち、更に何度も打ち付ける。

髪を振り乱し、何も考えられないとばかりに沙織さんの甘い声が、

更に大きく響き、まだまだ俺を高ぶらせる為に鳴く。

「さて：前に教えた通りに…」

さて…。

「やう!! も…もうっ! いくっ!! いくいくっ! いったちやう!!」

「…：逝く時は、言って…あ、はい」

入れたばかりだと言うのに、体を縮こまらせ、訪れる快樂に耐えようとしている…て、背中が跳ねた様に反り上がった…。

ただ、果てたとは言え、動きは止めない。果てる瞬間の、膣内のうねりが気持ちがいい。よってそこを更に…。

「あああっっ!!」

いや…その前に。

ちよつとその…視界に入る、ピンクの物体と目が合う。

…いや、この服装に変えたのは、確かに俺だけど…あんこうチームのマークが、変に目立ち、気になる。

しかも、3人並んでいる為に少々狭い。

よし…。

少し乱暴だったが、強引に仰向けに体を動かすと…すぐに両手に力を込める。

ブチブチと、ボタンがハジケ飛ぶ音…。

…。

試しに…と、更に強引にパンツアージャケットの前を強引に開き…中の緑色のシャツを捲る。

白いお腹が顔になり…そのまま上にどんどん上げると…彼女の大きな乳房に引かつかた…そのまま、片方の胸だけが露出した。

腰を少し持ち上げ…脚に力を入れ…また一気に彼女の奥へと入る。

そして…久しぶりに、女性を使う様に、ただ乱暴に動かし始める…。

ゴリツ…と、彼女の奥を強く擦る。

「ひゃあ!!」

目を見開き、背中を反らせる。反動で胸が弾み…重力に負け、卑猥な形に変わる。

あんこうチームのマークを見ているより、胸の方が見ていたいしな  
…。

「かつ…あ…はっ…」

スキル「欲望」の効果が続いている証拠…なのだろうか？  
たまにはと思い…少々乱暴に彼女を扱おうと…少し変わった俺を見  
て、沙織さんはどう思ったのか…少し嬉しそうな顔をした。

いつも皆に振りまく、明るい彼女の笑顔。

…その笑顔が、歪んで見えた。

何となく…気がついていた。

彼女の性格…彼女の性癖。

それをスキルで、その欲求を…欲望を倍増している状態。

華さんと、少し似ている…が、違うモノ。

肉がぶつかる音を、更に強く響かせる。

悦に浸り始めた顔の彼女…。

欲求。それこそが、沙織さんの求めるモノ。

彼女は言った。私は尽くすタイプだと。相手に合わせるタイプだ  
と。

それは逆に言ってしまうえば、相手の欲求が無ければ、何も出来ない。  
先程の歪んだ笑顔も、スキルで倍増されているとは言え、嬉しかつ  
たのだろう。

…。  
乱暴に扱われる事ではなく、がつつく様に自分を求めてくれる事が

間違った事すら、今の彼女なら受け入れるだろう。

「沙織さん。このままで良いですね…っ!?」

「うっ…はっ!! う…うん!!」

そのハッキリと返事を聞けば分かる。俺が何を言いたいか、分かっ  
ているとばかりの返事。

ガツガツと腰を打ち付けても…すでに2回目の絶頂を迎えていて  
も…どこかで理性を残している。

俺の欲求を聞く為だけに残している。

「し…書記！」

…麻子が、声を荒らげて呼んだ。

「どうし…た？」

動きながらだから、返事し辛い。

片足で体を上げて、麻子へと顔を向けると…少々泣きそうな顔で…自身を慰めていた。

沙織さんの体を揺れ…胸が弾ける。

そちらを一瞬見ると、更に麻子が声を荒げる。

「ず…ずるいぞー！」

「なに…が」

麻子のずるいの一言と同時に、思いつきり腰を打ち付けた。

ずるい…ね。

耐え切れず、思わず言ってしまったのだろう。

一瞬、言ってしまったその言葉に、俺から目を逸らし、恥じらいを見せたが…すぐに開き直った。

「わ…私の方が…最初に…「ああっつ!!!」」

…何を言いたいかは、すぐに分かったのだけど、文句を邪魔するかのように、沙織さんの絶叫。

沙織さんが、信じられない程に体を大きく跳ねさせた。

大きく、ビクビクと…。

話の途中だが、構わず動かし続け…彼女が果てた。多分…麻子の声は届いてないだろう。

その麻子の言葉を遮ったの絶頂の声。

同時に脈を感じる。

「…つと…」

収まりつかない、まとわりつく熱が、いっぱいにごじ開けられている膣内の隙間を縫うように、その入口から溢れてくる。

我ながら、ものすごい量だな…。見なくとも分かる程、その溢れた体液が、陰茎の根元を汚している。

同時に果てた。

ビクビクとした、内部まで感じる、沙織さんの痙攣。

はあはあと、息を切らしている…が、まだ動けない程じゃないだろう…。

腰を引くと、ズルツ…と、また大量の液体と共に、沙織さんから、抜き出すと…その反動で、足をベットの外にまで、パタンと力なく投げ出した。

腰とお腹をビクビクと小刻みに震わせていると、身体の左右にと、両の胸が重力に引かれて落ちる。

発現を邪魔された…とかでは、ないだろう。

彼女からしても、普段見慣れている沙織さんの乱れ方に呆然としている。

すでに、乱交とも言えるこの目の前での行為…全員に言える事だが、普段友人として接し、接しられている友人達のこの…ギャップを見せつける。

もう一度…だ。

今日この日に、ここまでの事になるとは思わなかった。思わなかったが…すでにおかしくなり、オカシクシテイク事に、何も思わない。むしろ、どこまで変わるか…それが楽しみになっている。

壊す…。

まだ経験が浅いというのに、初っ端からの濃すぎる性行為の内容。彼女達の常識を…徐々に破壊していく。

「沙織さん？」

麻子を尻目に…沙織さんに声を掛ける。

自ら体を動かす前に、後頭部へ腕を回し…抱き抱える様に体を起す。すると…すぐに次の要求。

「綺麗にできますか？」

「うっ…うん…分かったあ…まかせてえ…」

まかせて…ね。

余韻に浸り、少しぼーっとした彼女は、俺の要求に素直に応える。ベットの上に座り…そのベットの横に立っている俺へと、近づく。やりやすい様にと、何度も射精しているというのに、衰えるどころ

か：更に大きくなっている陰茎を突き出して見せつける。

綺麗にできますか？ の、意味も彼女はやはり、分かっている様だ。

片方の隠れていた胸を出し：下から持ち上げ、精液と愛液にまみれたソレを挟み込み…。

「んっ…」

…と、唇をソレにキスをするかの様に触れさせた。

段々と切っ先から熱が包み込んでいく…。彼女の後頭部しか見れなくなったのは寂しくも思うが：俺自身、果てたばかりで少々敏感になっっているのか。

その姿を少し見下ろし：頭を何度か撫でると、舌の動きが滑らかに…激しくなる。

掃除：というよりかも、すでに奉仕に近いその行為で訪れる気持ちよさに、腰が引けてしまいそうになった。

横を見ると、その姿を熱に浮かされた眼で、小さな息遣いをしながら：体を完全に横に倒して休息を取っているみほが見える…。

恥穴より、大量の精液を吐き出し、スーツにまでお尻を伝い流れ落としながら…。

「…で？…何がずるいつて？」

「…」

話の続き…とばかりに、しつかりと麻子へと顔を動かすと：眼球が沙織さん…みほへと、口を半開きにさせながら、何度も行き来させていた。

ああ：そうか。沙織さんの秘部からも、大量の体液が、途切れ途切れに落ち、シーツを汚している様もみているのか。

「麻子？」

「っ!!」

「…ぼけえと、するなよ。どうした？」

まあ：スキルを使用する場合は、認識を少し麻痺させ、ずらしている為だろうか。

普段は彼女達を安心させる意味も込めて、必ず避妊具は着用しているのだが、この反応の差で、そのスキルとやらの効力を思い知らされ

る。

沙織さんの中にへと、大量に出してしまつたのを、咎める訳もなく……少し……いじけた様な声をだした。

「わっ！……私が……最初に……」

……。

やはりそうか。そこには何も言つてこない。

少し泣きそうな顔で、白液にまみれたモノを口にする沙織さんを眺めている。

麻子：彼女だけ、芯の部分の恥じらい……というか、躊躇が残っている。今回、それを取り除きたかつた。

オネダリという形で、自らその部分を壊して貰おうかとも思つたのだが……ふむ。

「……いや、オネダリ」

「あんな恥ずかしい事、できるかあ！」

……良く分らない。

オネダリの言葉には、スキル「判別」による、脳内にアラームが反応しないのに……何故か黙つていると、小さなアラームが鳴る。

鳴つては収まり……鳴つては収まり……。

嫌だけど……嫌じゃない……そんな感じか。シチュエーションがダメ……なのか？

いや、完全に駄目ならば、現状でアラームが、けたたましく………あ。

そうか……なるほど。

自分の勘違いに、すぐに気がついた。

あんこうチーム全体が、段々と華さんに感化されてか……刺激的な事を優先する様に感じていたからか……。

その流れに、麻子も流されているのだけど、彼女の本質を忘れていた。みほ達も根本にはあるのだけど、割り切つてしまつてる所もあったから、ソレが強く出てこなかったのだろう。

……彼女の場合……だけは、最後の砦の部分が強く残っているのか……なら。

「奥に…まだちよつと、残って…んっ…ヂュ…」  
「っ!？」

……。

龟头先から、抜き取られうる様な感覚が…快感が、思考の邪魔をする。

あの…沙織さん。今、指示出してないよ？ それは、教えたっけ？  
口を窄め…ストローを吸うように、尿道先から残っていたであろう、精液を啜った…。

みほですら、それはまだやらなかったのに…。

「んっ…ぶっ…。綺麗になったあ…」

「……」

沙織さんの場合…麻子と違い、素直すぎる。

何を言っても、もはやなんでも聞いてくれそう…なのだが、何かそれは違う気がする…。

ある意味で、一番籠絡…というか、容易いと思っていた彼女だが…  
ふむ…。

しかし…上から見下ろすと…すごいな。

顔を上げて、見上げるように。終了を告げる彼女の胸元。

俺の…一応、規格外の大ききの物が、すっぽりと覆ってしまえる程の大ききの胸。

まだまだと、舌を出しながら、小さく動かし…舐めてくれている彼女…。

…胸。

明らかに大きくなってるよな…。

みほもそうだけど、この関係になってから、何故か全員のバストのサイズが上がっている気がする…。

あ、違う。麻子だけ変化なしだな。

さて…では、その麻子だ。

「…どおするっ…このまま、えっ…最後までしちゃう？」

上目使いで聞いてくる沙織さん…。

……。



最後…が、どこを指しているか分からんが…いや、まず。

ある意味で、沙織さんだけは普通に…少し激しく致したただけだから…まだ余裕があるのか。

いや…なんだ？ 横目で麻子を一瞬見た気がした…。

「いや…大丈夫です」

「あ、うん…そうだよね」

俺の言葉に、名残惜しそうにだが、…いや、本当に素直に言う事を聞いてくれる…。

少し離れた身体の前から、下から持ち上げていたであろう、豊満な胸が…ズルンと落ち…弾んだ。

いや…久しぶりに思ったが…やはり重力は偉大だな。

沙織さんが離れると、いじけた麻子への前へ移動する。

目の前に来ると、彼女は彼女で、また少しの恥じらいを見せるが、いつもはその恥じらいもごまかす様に、すぐに消し飛ばしてしまうのだが…今回は少し違う。

「さて、麻子」

「…なんだ。私はもう頬つておけば良いだろ？」

両膝を立て…半身をこちらに向けてくる。

色々と複雑なのだろう。拗ねた返事をする辺りが、逆に可愛らしく感じさせてくれるが…。

「っ…」

狭い為に、俺はベットのの上には乗れないからと、麻子を体に引き寄せると、軽い体が正面から当たり、すぐに彼女の体温が感じられた。

腕を細い体に回し…手を彼女の後頭部へと添え、何度かゆつくりと髪を撫でてみる。

その行為に麻子は、特に嫌がりも、逃げもしないので…やはり、コレで正解なのだろう。

ただそのまま、動かず抱きしめる。

何もしないで…ただ。

「…何をしたい？」

シンプルだが、一番の聞き方。

「……………」

抱きしめる事もそうだが、すぐに帰ってきた答えて、彼女の傾向がすぐに分かった。

ただたどしくも…消え去りそうな程に、小さな声でも…ハッキリと口にした。

「(…)のまま…」

俺から抱きしめていた腕に、彼女の小さな手が添えられ…ゆつくりと俺の背中にへと、彼女もまた手を廻す。

もう、いじける様な言い方でもなく、意地も張らないで…ただ、シンプルな希望。

そして切望しているかの様な…一言。

「キ…ス、してくれ…」

みほとしている時もそうだったか、麻子は即座に俺の口へと唇を合わせてきた。

許されているなら…許してくれるのなら…と、自分に言い聴かせる様に、呟く声も聞いた事がある。

麻子は、普段と同じく、少しぶつきらぼうに…言い捨てる様な事を言いはするが、出来るだけ俺に体を密着させようとしてくる。

情事が終わった後も、誰よりも、何時までも…体を摺り寄せてくる。

…初めて関係を持った時もそうだった。

普段の彼女からは、想像も出来ない程に…何時までも、出来るだけ…それこそ、猫の様に。

「んっ…」

小さな唇が、ゆつくりと動く。

先程とは違い…丁寧に…噛むように。

彼女の根底…本質。いや、欲求。欲望。

それを欲と言つていいのか、分からないが…スキルに反応し、肥大化している事からそうなのだろう。

甘えたい

…という、その欲が。

撫でる様に…摩る様に…体をゆつくりと弄ると、すでに体の準備が

出来ているからか…すぐに感情も追いつく。

下唇を噛みながらの、優しいキスから、舌が下唇を舐め始めた。

彼女の口の中に、俺の舌を入れた瞬間…。

彼女の感情が弾けた。

我慢していたモノが、漸く…とばかりに、乱暴に舌が動く。

舌を絡ませる…といった事ではなく、擦りつけたいとばかりに、ガラガラとヌルヌルと。必死になって舌を動かし始めた。

彼女の腕が俺の頭に周り…逃がさない様に、更に深く…とばかりに動く…動く。

「も…つと。もつと…んっ…もつと…」

何度も離し、合わせる。

好きなように、好きなだけと、それに応え続ける。

……。

……………。

ん？

突然、ヌルツ…とした感触と共に、彼女は身体ごと俺から離れた。

そのまま、逃げる様に…距離を取り…脚だけをベットから下ろして、体を仰向けにさせた。

「もう…満足だ」

…顔を横に…みほとは反対側に向けると…また正面。俺の方を見下ろした。

そして、またいつもの様に…。

「いいぞ…。好きに…使え…」

顔が唾液に塗れる程に唇を吸い、それに黙って応えた結果だろう。自ら体を開いてくれる…。

オネダリとやらも、最初のあれでも、彼女には精一杯のオネダリをしたのだろうな。

「……………」

こんな関係でも、麻子だけは、自分の現状を忘れない。

だからの一言…いつものセリフ。

物の様に、自身を卑下したセリフ。

…正直、その言葉は好きではない。だから…せめて…。

「麻子…。その「使え」と言う言い方は、もうやめてくれ」

「…何を今更。今の関係なら、その方が…書記も割り切れるだろ？」

割り切れる…ね。

狂った関係ならばと、その言葉。

彼女を抱く時には、大体…最初にこれを言われる。

しかし、嫌だった。

「そんな物みたいなのに、自分を言うのはやめてくれ」

「私は…物に徹した方が、西住さんにも……ん、書記？」

勿論、みほだけは特別だ。

《《

だが、他の彼女達の気持ちも勿論ある。

何様だとも思うが、こんな状況下で、こんな俺に対し「良心」ヲ

確認」…て。

ならば、せめて抱く時は「良心」ヲ確認」

「「良心」ヲ確認」……なんだったか…？」

《《ユニーク・スキル「壊」再発動。「良心」ヲ、破壊シマシタ》

…。

「…。

「どうした、書記…？」

「…モノね」

スキル「欲望」のレベルを向上。

スキル「感知」のレベルを向上。

スキル「増幅」のレベルを向上。

スキル…

スキル…スキ…

「つつ!?!」

麻子の体が、大きく跳ねた。

なに…ただ、太ももを軽く撫でただけ。

「な…んっ…??」

「そうか。モノか…」

「はっ…はっ…んんっ!?!」

両膝を持って、ゆっくりと上げる。

膝を撫でると…それだけで、ビクビクと体を震わせる。

「なっ……なあ…」

いきなりの感覚に、頭が追いついていない様だ。

膣口へと亀頭先を添えると、今の自分の感覚と、これから訪れるで

あろう刺激に、恐れたような顔をした。

なに、大丈夫。

すぐに楽になるから。

「ま…まで、書記!…今は…」

「…なら麻子は…一体」

だから、後は…言わずだけ。

そう…言わせるだけ。

「誰のモノだ?」

◇

突然…隆史君が、変わった様な気がした。

自分で言ってみても、良く分からないけど…とにかく、そうとしか  
言えない気がする。

人が変わった…とでもいうのかな…。

雰囲気…喋り方…それも特に変化はない…ないんだけど…本当に、  
何て言っていないか分からない。

麻子とのやり取りを見ていて、会話の内容を聞く限り、ああ、麻子らしい…隆史君らしい…とか、初めは思っていたんだけど…。

「沙織さん」

「なっ！…何？」

すでにあの全身タイツを脱ぎ捨て、全裸姿のまま、私を見た。

ふ…普通。

すつごい、普通に喋り掛けてきた…。

本当に普通…いつも通りの彼。

麻子を抱きしめるように抱え上げ…えつと…繋がたままだけど…。

私や、みぼりとも違い…あの麻子の小さな体を、壊しちゃんじゃないか？　とも思えるほど…乱暴に…激しく動いた…。

ベットがその振動で、音を立てながら、ズリ動くほど…大きく激しく…。

あまりに大きい音がしてしまう為に、今はああやって、上下に抱き抱えたまま…うう…。

「あつ…あつ…しよきい…」

何回…出したんだろ…。

今は、普通にしてるけど…隆史君、麻子にも…その…お尻…教えてたのかな…？

ゆつくりと動きながらだけど、上下する時に…麻子のお尻から、何度も下に飛び出してる…。

「きい…すう…もつと…」

「あ、ごめん？　今ちよつと、沙織さんと話してるから」

…。

いや、そこで引き合いに出されると、ちよつと困っちゃうんだけど…。

あの麻子が…隆史君の首に手を回して…執拗にキスを強請ってる…。

いやいや、あんな麻子自体…見たことが無いよ…。

「わあ…かった…」

…隆史君と、えつちしてる時も、すごかった…。

いつもなら考えられない程の声を上げて…口を開けて…よだれを垂らして…。

細くて、小さな体を何度も振らせて…。

お尻に入れる時が、特にすごかった…。

「書記、書記」って、何度も呼びながら、動く度に気持ち良くなってるつてのが、すぐに分かったし…。

後、いきなり隆史君に、強く甘える様になったよね？

なんでだろう…いや、まあ…うん。

後ろからされてる時なんか、私と目が合った時とかも、凄かった…。

私の名前を呼んで来た時とか、上手くしゃべれないみたいに…。

「沙織さん？」

「……」

今も…お尻の穴が、まだ開きつぱなしで…本当に麻子にも、入ったし…私にも……。

ん？ ……隆史君？

「んぐつつ!!」

隆史君が…麻子のお尻にまた入れた…。

大きく開いて…えっちな液体で…ぬるぬるで…。

「やっぱり、興味あるの？」

「はっ!!」

いけない…見入っちゃった…。

「…んじゃ、教えようか」

「え…？」

「そのまま、お尻こっち向けて下さい」

「……」

やっぱり…隆史君、なんか変。

いつもだったたら、どこかで遠慮している感じで…ここまで露骨に言っってこなかったのに…。

隆史君曰く、真っ黒いスイッチとか言ってるのが、入ってる状態ならいざ知らず、今の彼からはそんな感じはしないし…。

「隆史君…なんか、変だよ?」

「そうですか?」

ほら、今もそう。

みぽりんの前で、全然遠慮もしてないみたいだし…えっと、教えてくれるのは、教えて欲しいけど…。

「ああ、麻子とは身体の相性って奴が、合ってるみたいなんですよ」

麻子をまた見入っちゃった私に対して、すぐに…というか、そんな事、前なら言わなかったよね!?

相性っ!?! 身体のっ!?!

「はっ…はっ…そう…だ。書記…だから、もつと…もつと使ってくれ…んんっ!」

…麻子。

言動が、もはや危ない…。

いや、実際にその通りの事を言っているのだろうけど…でも…。

モノ…という言葉に、執着しちやってるみたいを感じる…。

だからかな…。絶対に、隆史君の事を、名前で呼ばない。ある意味で、そこが麻子のボーダーラインなのかな…みぽりんとの…自分との気持ちの…。

「……」

「隆史君?」

「…やっぱり、なんだかんだで、沙織さんが一番冷静ですよね?」

「冷静?…そ…そんな事、ないと思うけど…ほっ!…ほらっ!…実際、いっぱい…その…えっちしちやってるし」

「冷静ですよ。ある意味で、一番、俺との距離を理解してる気がするし…」

あの…それよりも、麻子が…。

隆史君、話しながらも小刻みに麻子の体を、上下させてるから…麻子…すごい事になってるけど?

何度も小刻みに肩を震わせながら…隆史君の胸に舌を這わせて…舐めてる…。

ぐっ…。



「取り敢えず、麻子…一度、隆史君から離れて…話も出来ない…」  
「断るっ!!」

「なんで、そこだけは、いつもの麻子なのよっ!!」

振り向いた麻子が…理性をはつきりと持った顔で、言い切った…。  
くそう。

「あくそうだな…麻子。ちよつとベットに降りてくれるか？」

「…分かった」

……。

隆史君が言ったら、素直に従った…。

ゆつくりと彼が、ベットの上に下ろすと…ズルツ…と彼のモノを自ら引き抜いた…ああああ!! なんかずるいッ!

「んっ…はあ…あ…はあ…まだ、お腹に入ってるみたいだ…」

「……」

「はあ…はあ…なんだ、沙織」

寝転びながらも…うう…。女の子の場所と…お尻とから…ドロドロと白いモノが…。

これもまた見入ってしまうと…訝しげに麻子が私の視線に気がついたのか…って、すっごいエッチな顔してるけど…。

麻子も、そんな顔…するんだ。

「な…なんで、隆史君の言う事は、素直に聞くのよ」

「はっ…」

誤魔化すように言った私の質問に、鼻で笑うような…いつもの返事。

ただ今回。若干、その勝ち誇った顔に、むっとする。

「私は…書記のモノだからな…当然だ」

「……」

……。

麻子が…変だ。

この子、絶対に恥ずかしがらずに、こんな事、言う子じゃなかったのに…。

さも当然…といった顔で、そんな事をはつきりと言った。

「…私はもう…完全に割り切った。西住さんにも、そこはもう譲らん」  
その方が楽…とばかりに…。

「ならせめて…というか、そろそろ俺を、名前で呼んでくれ…」

「書記が私を、マコニヤンと呼ぶなければ、すぐにでも呼んでやる」  
「なら諦めよう」

「諦めなるなよ！」

……。

やっぱり変…。

なんか…ものすごい違和感。

このやり取りも、何時も通りといえば、そうなんだろうけど…なんで、そこまで普通にいられるんだろう…。

「ほら…やっぱり、沙織さんは冷静だ」

「っ!？」

考え込んでしまう私を見て…隆史君が、確信を得た…と、ばかりに頷いた。

全裸だけどね…真顔だし…。

「…まあ、ある意味で、一番気を使っていたのが、沙織さんですからね…中途半端というか、なんというか…」

「え…気を…」

「ええ。事件の事を思うと、どうしてもこっち方面じゃ、気を使っ  
まっして…。ダメですよね、これじゃ…」

「ダメって事は…」

……。

う…うん。

それを言われちゃうと…何も言えなくなっちゃう。

気を使わないで良いよと言っても、そんな簡単じゃないのは、私自身  
思い知ってる…あの時の…みほりんを見てしまっているから。

でもそれでも、違った。彼だけは、違った。

みほりんに対する、態度でも分かったし…私に対する…。

彼は…特別だった。

…彼だけは、特別だった。

そう…特別。

「だから」

彼の手が、私の頭を撫でる。

彼が近づき…あ…レ?…?…?

頭の中に、冷たい刺激…。

な…あれ? え…?

「俺も開き直って、感情に従おうと…そう思ったんです」

上手く…考えが、マトマラナイ。

どうした…んだ…ろ…。

ただ、彼の声が…心地いい…。

「沙織さんで、最後です」

「――」

みぼりんも、十分身体を休めて回復したみたい。

寝ている横で、散々私と麻子の、えっちを見せられて、我慢が出来ないみたい。

ウン！ ワタシモ、ソウ！

麻子のあそこまで乱れた姿を、見せつけられて…もう無理。

「そうかあ…沙織さんは、「好奇心」だったのか…ある意味で理性で一番、抑えられる感情ですね」

…隆史君が、何を言ってるのか良く分からないけど、マツ！ イイ  
カー!!

…。

上手く、覚えていない。

ただ、気持ちがいい…その一言。

横一列に並んで…隆史君が入ってくるのを待つだけ。

横を見ると、みぽりんが、信じられないほどにえっちな顔して…えっちな声を上げて…何度も何度も震えていた。

倒れ込んでしまうと、その先…麻子の小さく細い身体が、また激しく動き出した。

パンパンと、肌を叩き合う音が聞こえて、途切れ…また体を震わす。ボタボタと、音がして…麻子がベットへと倒れこむ。

焦点が合っていないのか、その目が、どこを見ているか分からない。私のお尻に、彼が手を添えた体温を感じた瞬間…目の前が真っ白になった。

……。

また、バツンと…肌がぶつかる音で気が付く。

またすぐに、目の前が真っ白に…電気が走る様な感覚…。

繰り返して、繰り返して…頭が馬鹿になりそうだった…。

どのくらい経っただろうか…。

何度も、気持ちよくなって…何度も、何度も…そして、今は、隆史君とみぽりんの話す声が聞こえる…。

「たあ…隆史…君…次…私…」

「あ、うん。みほ、でもな？」

私の横で、みぽりんが、腰を上げ、彼にお尻を向けた。

さつきみたいに、自分のお尻の端を持って、彼を受け入れる為に、そのまま上げる。

上げると…またボタボタと、シートに何かが落ちた音がした。

「…待て、まだだ…まだ途中…。んっ…西住さんの後でいい…から…」  
「あ〜うん。麻子…オネダリできるようなったな…」

散々恥ずかしがっていたっていうのに、麻子も俯せになって、お尻を上げて…股間に手を回している。

…さつきの私の真似をしてるよね。

えっちな場所を指で広げたから…両方の…その…ソコから、どろど

ろと溢れて落ちてる…。

私は、上手く考えられない…。

ただ、隆史君達の会話を聞いていると、段々と頭がはつきりとして…きた。

「いやな？ …そろそろ時間が…」

時間？

気が付けば…電気の着けていなかった保健室。

大分、暗くなっている。ここから外は見えないけど…。

「俺もそうだけど…夢中になりすぎた…。まずい…そろそろ、帰ろう」  
終わる…終わっちゃおう。

頭の中も熱くて…この身体の芯から、溶けてしまいそうな…時間が…。

「………」

「…いや、そんな目で見られましても…」  
…。

急にいつもの隆史君に戻った…。

慌てる様に、汗を滲ませながら、目が泳いでる……つて、あれ？

「そ…そこまで急いで着替える程…帰りたいか、書記」

「あ…俺の素直なマコニヤンじゃ、なくなった」

「う…うるさいなっ！ ふっ…普段は違うんだ！」

うん…いつの間にか、隆史君が服を着ていた…普通の制服。

後、麻子…「俺の」を、否定しないし……それはずるい。

…つて、あ…。

「あ…あれ？」

3人揃ってベットから降りて…見比べる。

いつの間にか、私達も制服を着てる…着替えた記憶は…。

えつと……降りたベットも、誰も使っていないみたいなのに、綺麗になってるし…あれ？

【 】【

ドウデモイツカ!

そ…それよりも…。

立ってから気がついたけど…。

「ふうっ!? あ…あれ? 下着…」

みぼりんが言うように、どこいったんだろ…。

パンツ…履いてないよ…私…。それよりか、下着自体、上下着けてない…。

麻子も内股になってるし…。

「んじゃ、そろそろ行くから、部屋から出てくれ。カギ閉めるぞ?」

上手く…思い出せない。

急かすように、隆史君がいつの間にか帰り支度をしている。

あれ…いつの間にか、私達の荷物もある…。アレ?

なんか…所々、記憶が飛んでるよ…。

さつきまでの、どろどろした時間が…一瞬で日常になったきが…ん?

ん…。

んんっ!?

「ま…まって、隆史君!」

「んあ? どうした、みほ」

「そ…その、下着…じゃないと…」

そ…そう。

散々、さつきまでの行為の後に…この状態…。

下着も付けてないし…余計に…。

「ぐっ…書記。出しすぎだ…で…出てくる…」

「……」

う…内腿を伝って…ちよつと出てくる、音も…。

「そうか。でも、帰ろう」

「二 つ!?」

え…えつと?」

「沙織さん。今晚、また泊まるのでしょうか? そのままちゃんと帰っ

「たら、教えますから…それで、帰ってください」

…え。

「みほ。…途中で、掻き出すなよ？ そしたら、次のを教えるから」

「…え…あ…えっ!？」

っ…ぎっ…

「マコニ…いや。麻子も、頑張つてな」

「…わ…分かった」

麻子…それは従うの…？

「…んじや、俺は先に行つてる。優花里と華さんは、校門前で待つてるみたいだから、行つてくれ」

「」

わ…かかない…。

え…あれ？

保健室を出て…鍵を閉める隆史君。

急かされる様に…廊下に立つ私達…。

こんな…よく分からな状況で、恥ずかしい状態だつていうのに…。

次…そのまま…。

これから帰る道中の事…それと、帰つてからの事を思うと…不安と恥ずかしさ…色々な感情が、変に刺激してくる気がする…。

なんだろう…この…。

「し…しかた…ない…かな？」

「みほりん!？」

みほりんは、この状態を受け入れた。

いつもの様に、少し困つた笑顔で…軽く…。

顔を真っ赤に、自分に言い聞かせる様に…私達に言った。

「…帰るぞ。沙織」

…麻子はもう、彼の言葉にただ従う事を決めている。

本当に、このまま…帰るの？

内緒で、トイレに行つて…でも…

…。

「うん…帰ろっか…」

これから帰る、道で…どんな感覚が訪れるか…。  
オレンジ色に染まった、見慣れた帰り道を想像すると…  
すごく…ものスゴク…胸が高鳴った…。  
……………。

あ…

ああっ！

そういえば、私だけキスしてないっ!!



※ルート壊 【宴編】※ あんこう鍋 後編 ★

一人になると、考えてしまいます。

他の誰もいないというのに、律儀に自分の席へと座り、皆さんの帰りをお待ちしている何も無い時間。

小さく、それでもハッキリとため息を吐きます。

……。

罪…と、言えるのでは、ないのでしようか？

こんな関係…その始まる切っ掛けを作ってしまった…私の罪。

私の我が儘…みほさんと隆史さんの間に、割り込んでしまった…そのせいで…みほさん……。

それでも、自分を抑えられない。

…隆史さんに触れたい…触れ合いたい。

頭で理解は出来ても、欲に勝てない…。

本当は、たった一度…。ただ、それだけでよかったですのに…。昨晩もそうです。

…みほさんが…いえ、皆さんが近くにいると言うのに、はしたなくも、隆史さんに近づきたくなる。

自分自身が、日々大きく変わっていくのが、わかります。

えっちしまししょう…なんて…今までの私なら、口が裂けても言えなかったのに…。

与えてくれる…今までの生活では、考えられなかった、その与えてくれる刺激を、身体で感じ…望み、渴望してしまう。

それが、誰でもなく…彼に…隆史さんから。

「私は…焦っているのでしょうか？」

何時までも、こんな爛れ、乱れた関係は続かない。

長く続いたとしても、高校生活が終わるまで…この共同生活が、終わるまで…。

進学、就職…今の家を卒業と同時に、隆史さんは出て行って…私の前からいなくなる…。

みほさんは…大丈夫でしょうけど…。

みほさん…。

隆史さんは、みほさんの大事な人。それは解っています。

…解っていますよ。…だからこそ…でしょうね。

みほさんの心一つで、高校を卒業する前に、全てが終わってしまいます。

そう、終わって…。

突然に、この関係が終わってしまうのが…私は怖いのでしょうか…か…。

横恋慕をしている私の立場からすれば、それに対して何も言えない。言ってはいけない。

だから…私は、出来るだけ…恥も、何もかも捨てて…隆史さんにだけは、正直に…包み隠さず…。

「…」

だからと言って…。

なぜでしょう？

今、気がつきました。自分の見慣れた机を眺めているだけだと言うのに、何故か唐突に気がつきました。

今日に限って…とにかく彼に対しての自制が、まったく効きません。

こんな、普段…正直気がつかない様に、考えない様にしていた事まで…。

…私だけ…この所、何もしてくれませんし？ 多少、ええ、多少の苛立ちは？ 否定しませんけど？

「…」

ただ、優花里さんに当たってしまう程にと…思いもしませんでした…。

自己嫌悪です…。

「…と、思うのですが、どうでしょう？」

「…それを、直球で俺に言う辺り、流石としか言えません…」

あら、そうでしょうか？

一人で悩むより、相談だと思うですけど？

……。

みほさん達をお待ちして、しばらくすると、隆史さんがこの教室へと現れました。

「ノックなどしなくても…普通に入ってこられたら宜しかったのに…」

「着替え中だったら、大変でしょう!？」

「あら、私は構いませんよ?」

「俺は、構うんですよ! ……はあ…まったく」

それこそノックをして、教室のドアを開き…着替え終えた姿で現れました。

学校の戸締り、見回りを兼ねての来訪でした。教室へと入り、座る私の横へと立ち、今はお話相手になって頂いております。

本当に今更、着替えを見られた位ではとも、思うのですが…それでもと、頭を掻きながら、少々呆れた様なため息をされました。

…やはり、楽しい。他の男性とお話をする時は、やはり…無意識でしようけど、警戒心が出てしまいます。

それは、沙織さんの事もございましたし、仕方がないと思うのですが…彼だけは別…。

少々はしたないと思うことも、最近では、彼をからかっってしまう材料としてでしたら、スラスラと言えてしまいますね。

こんな関係でも、普段の彼は…前から変わらない。

「華さん?」

…それが…とても嬉しい。

「あ、いえっ! ……なんでもありません」

一瞬…自然と口元が緩んでしまいました…。

「でも…本当に、どうなんでしょう?」

今更、言い訳がましく…彼に承諾を…許しを得ようと…卑怯な私。こんな教室で話す事では、ないのでしようけど…彼と二人きりになる機会が、最近有りませんしね。

「…っ」

…あら?」

一瞬、眉を歪め、片目を覆い頭を抑えました。どうしたのでしょうか？

「あの…どうかされました？」

「だ…大丈夫です、一瞬頭が、痛かっただけです」  
すぐに、ヒラヒラと手を振り、笑顔で返してくれました。

…この、顔に私は弱い…。

「ああ、すみません。えっと…どうなんしょう？ でしたか？」

「あ、はい。…こんな私は…これで良いのかと…」

…みほさんに、お聞きするのは…まだ怖い。

私の問い掛けに、いつもの様に、いつもの彼で…少し、困った顔をされました。

彼の答えは、大体の予想が付きます。

変に気を遣い、変に慰めるように…そんな答えを、言ってくるのでしよう。

現状を続ける意味での安心感…それを当事者の彼から得ようとしている。

答えが分かっているとこのように、困らせて、答えさせ…自身の安定を認識する。

「あ…まあ、うん。そうだな…えっと、今の華さん？ でしたね」

「…はい」

姑息…で、浅ましく…それでいて…卑怯。

落ち込んだ…振り？ でしょうか…。もはや自分でもわかりません。

ただ、下を向き、自分の脚にへと視線を向けて…彼の言葉を待っている。

それでも。情けなくも。卑怯でも…。私の罪悪感を薄れさせてくれる。

見なくてもわかります。今もまた…向けてくれるであろう、…困ったような彼の笑顔が…。

【「いや、そりゃ駄目でしょうよ」】

……。  
……。

一瞬…頭が真っ白になった気が…しま…。

「……え……」

思わず頭を上げ…彼を見上げる。

「えつと…ですね？…こんな関係になった切っ掛け…って、所からでしたよね？」

見上げた隆史さんは…真顔でもなんでもなく…私を責め睨む事もなく…。

ただ、いつもの様に、あの笑顔で…余りにも…普段通りだった…。

「なら、今の華さんは駄目ですよ」

ダメ…駄目？

指が震える。…脚が震える……。

怖い…。

そのいつもの顔で…その笑顔で、これから言おうとしている言葉が

…こわ…い…。

「っ…！」

隆史さんは、私の横にしゃがみ込み…私の脚へと手を置いた。

その手が、氷の様に…一瞬冷たく感じてしまった。

その優しく置かれた手が…怖い……いつもの彼が、あの笑顔が、ものすごく…。

気が付けば、小刻みに口が震える。カタカタと、歯が鳴る音が…。

拒否が…。

彼…その答えが…。

悪い予想……予感…言葉…それが一気に、彼の姿と共に頭に浮かぶ。

もしかしたら、私との事は、本当にただの流れ…仕方がなかっただけ…？

皆さんとの事も…何もかも…。

ただ…の…ワタクシ、タダノ…ジャマ…モ…。

「…華さん」

呼ばれた私のナマエ。

耳元に彼の顔がアル。

怖い。

コワイ…。

訪れるかもしれない…。

明確な拒絶が…。

視界に写る、爪が肌に食い込み…痛いほどに握っている手。

それが…消えた。

「っ!？」

口が…唇が、アツ…イ？

え…？

すぐに熱が引き…いえ、離れた？

「んっ…え…つと…え？」

呆然とする…視界には、隆史さんの顔…。

「はい、舌出して」

「は…い？ え…あの…んんっ!？」

もう一度、熱い体温。

すぐに彼の匂いと一緒に、口の中に熱が広がる。

「はっ…んっ…あ…」

ヌルヌルとした感触が、また口を掛け巡る。

それもすぐに無くなり…無くなったと思った瞬間…頭をいきなり

抱かれ…引き寄せられた。

「んっ—」

私の脚の上の、彼の手が…スツ…と動き…。

◇

摩る様に、滑り込ませるように…彼女の脚の付け根へと手を忍び込ませる。

少し熱っぽく、湿ったその布の感触を楽しむように、摩る。

…リンクした。他の分けた自分の身体との感覚がリンク。

よく分からないアナウンスが、頭に響き…一気に胸の中が楽になった。

内腿を摩りながら、華さんを抱きしめる。

肩をずらし、また唇を吸うと…先程まで呆然としていた彼女が、また動き出す。

内腿を摩りながら、舌を動かすと…ぎこちなく彼女がそれに応えてきた。

まだ頭の中が混乱しているのか…どうしていいか分からないようだ。

さて…。

少し強く引き寄せる様に抱きしめていた腕に力を入れると、少し身体が傾いた彼女。

お陰でその座っていた場所に、少し空間ができた。

そのまま指を滑り込ませる…。

熱と汗で、湿った下着の間を…探る様に、彼女の秘部周りの指を動かすと…その入口に指が触れた。

ヌルツ…とした感触と共に…難なく指を滑り込ませることができた。

「んっ…はっ…」

二本の指を、ゆつくりと侵入させていくと、甘い声が小さく耳元から聞こえた。

「あ…あの…隆史…き…んんっ！」

根元まで入れると、今まで押し込めていたと思える程の、大量の愛液が分かる。

クチュツ…と音までしたので、それを今度は聴かせる為に、内側から下着を手前に引くようにスペースを作り…ワザと空気を混ぜながら派手に動かす。

「んっ…んっ…んっ…あ…あ…ああっ！」

グチユグチユグチユと、何度も何度も

華さんの腕が、俺の首に回り…気が付けば彼女から抱きしめられてた。

「ほら…やっぱり駄目ですよね？」

「なっ…に…えあ…あ…」

「何をどう言っても…華さん、期待してるじゃないですか。なんですか、コレ」

「んんっ!!」

グジュつと…大きく、音を立てる。

ギユツ…と、また強く、彼女が抱き締める腕に力が入った。

…切っ掛け…ね。

「俺はそこら辺の事は、気にした事ないですよ？ 全ては俺が、自分で蒔いた種だ」

耳元で、囁く様に彼女に言う。

「…俺が駄目だと言ったのは、華さんが我慢しているからですよ？」

「が……まん？」

手の動きを止め…彼女の目を見て話す。

抱きしめた腕の力を弱め…間から彼女もまた、俺の目を伺うように見つめて来る。

その潤んだ瞳を眺めて思う。

スキルを使い、快楽に酔わせ…酔い、ここまで彼女達を使い使われ

…何を俺は躊躇していたんだ。

良心の呵責？ 罪悪感？ はっ！ 何をどう言っても、思っても。

…俺に今更、逃げ道なんてない。そんな権利も何もかもない。

…だったら…責任を持って…。

「【中途半端は良くない】ですよ？」

スキル【恐怖】で、普段ならば、特に気にしない言葉でも、必要以上の不安感を生み出し、煽り。

「俺は、華さんの「全て」を受け入れます。今までの華さんも俺は、「好き」ですよ？」



スキル「甘言」で、言葉の効力を強め、安堵させ…完全に思い込ませて、決定づける。

スキル「欲望」で、極度の欲求不満状態の彼女のなら…これで、完全に…。

「わ…私は…今のままで…良いのでしょうか…?」

「ええ、素直にナレバ」

「…すな…お…」

黒いスuitsも何もない。

ただ、普通に開き直っている自分に少し驚く。

「ほ…本当に?」

「ええ…大丈夫です。俺は【素直な貴女】が、好きですから」

「…あう」

恐怖で不安を煽ってしまったのは、大変申し訳ないのだけど…彼女の場合、ある意味必要な事だった。

…一度、不安を最下層にまで落として…一気に全てを受け入れる為に、すくい上げる為に必要だった。

彼女が思っている葛藤や罪悪感は、彼女達の中では、多分…一番強い。みほに対する負い目は、相当なものだろう。

必要以上に、性に対しての大胆に見せ、発言する彼女は、ある意味では「肉体関係だけ」…というのを、強く周りにアピールする意味が強いのだろう。

まあ…彼女の性癖もあるだろうけど…な。

「それが【華さんの為】でもあり…【俺の為】でもあるんですよ」

「……」

だから…逃げ場を用意してやろう。

「な…なら…一つ…いえ、まずは不満…宜しいですか?」

「は…?」

不満…と、来たか…。

ある意味で、彼女らしい。

すでに口を尖らせて言ってくる辺り…元に戻ってきているのだから

う。

「ワザと…ですね？」

え…。

「ワザと駄目だと、はっきりと言いましたね？」

「えっと…」

特に激怒する訳でもなく、潤んだ瞳が、ジト目変わった…。  
バレてる…。

「いちわるです。卑怯です。姑息です。そうやって、私をいちめて…  
もう！ 本当に怖かったんですからね！」

「…あ、いえ…ごめんなさい」

「あとっ！ やっと…の接吻…キスが、あのタイミングとかも…ずる  
いです」

「あ、えくと…」

不満が二つ…とか、言わない方が言いんだろうなあ…。

なんだろう？ 開き直ろうと思ったのだけど、特に俺…あんまり変  
わらんなあ…。

ただ、華さんが思ったよりも、スキルの影響を受けていない様に感  
じる。

スキル「恐怖」は、効力があつたのに、「甘言」の方は  
あまり効力が感じられない。

「催眠」とは、違って俺の言葉を、全て都合の良い様にするのだ  
けど…今回は、安堵させる事が目的だから…か？

「だ…だから…も…もう一度…」

「はい？」

「お…お願いできますか？」



舌が絡み…唇を吸う。

優しいキス…とやらから、一気に激しく攻め立てて来た。

「もっと…はあ…はあ。もっとして…ください…んっ！」

口の回りがベトベトになる程に、彼女は激しく口を求めてくる。

欲求不満の弊害が、こんな所にまで…。

「どれだけ、自分の席を汚すんですか…」

「んちゅっ…。だっ…誰のせいであ…んっ!? んんんっ!!」

6回目。

華さんは、座っていた席を愛液で汚していた。

今回、初めてだろう…か？ 潮まで吹き、ポタポタと…席から地面

にまで垂れる程に。

学校…教室…。

みほ達が帰ってくるであろう…人がまだいるかもしれないであろ

う…そんな疑問や、場所を気にする事は、彼女はなかった。

すでに夢中になっている。いや、この場所、状態から興奮を得てい

るのだろう。

目が妖しく光…次の行為を期待…するのが、いつのも彼女だが、今

はもう…俺の口を吸うことにのみ執着している。

…。

俺…いくら開き直って、この状態になっても…彼女に勝てる気が

しない…。

ん？ この状態？ …まあいいか。ドウデモイイ。

さて…流石に拉致が開かない。

ぶっちやけた話、性欲が暴発しそう。

彼女の甘い匂いと、胸の感触。…そして、鼓膜から通ってくる、隠

微な声。

清楚な彼女の、普段とのこのギャップは、他の人間は知るまい…

す…いぞ？

「…んじや、華さん」

「あっ…もう少し…」

「……」

体を起こし、立ち上がると…まだ足りないと言残惜しい声…。

もう…いいや。無言でズボンのチャックへと手を伸ばすと、その声が止まり…俺の手を凝視した。

華さん…いや、ちよつと本気で解放させると…どうなるのだろうと、少々恐怖を感じる…。

すでに分かっているとはかりに、陰茎を取りし、口に添えると…そのまますぐに飲み込んだ。

ただし…丁寧に。

亀頭にキスをする様に唇を合わせ…そのままゆつくりと、隙間なく。

陰茎全体を飲み込みながら、自分自身を擦り込むみたいに、唾液を絡ませる。

今更だけど、制服姿で…自分の教室で…なんてことしているんだろうとか、思わないのだろうか…。

ま…まあ。うん。こつちが気圧される。

—だから。

「んっ…ブツ…ブツ…うは…んっ…ジュツ…ジュブブツ!!」

ゆつくりと…しかし、丁寧にカリや隙間に舌先を這わせ、教えた通りに音を出す。

優しく頭を撫でると、嬉しそうに動きで、応えてくれる。

頬の裏を使いながらも、俺が好きなの箇所を念入りに…。

「ちよつと…華さんにも、流石に悪いと思って…しなかつた事してみようと思います」

「…?」

上目使いで、コチラを見上げてくる彼女。

何か疑問を口に出そうと、口から陰茎を抜こうと動く、彼女の頭を両手で押さえ…。

「…華さん好みだと思えます…よっ!」

「っっ!!?」

一気に喉奥にまで押し込んだ。

「オッ…ゴツ!？」

使うように…彼女の頭を乱暴に動かす。

前かがみになっている彼女が、反動で椅子から落さない様に、反射的に俺の体に手を着いた。

しかし、止めない。

喉が締めまり、動かす度に苦しそうな声が漏れる。

舌が大きく…逃げるように動き回る。喉の奥に当たると、ビクンと…体を跳ねさせた。

しかし彼女の体は違った。逃げようとするどころか、ズボンを掴み、大きく動く反動に対して、離れない様に強く握り締めている。

「ゴボッ…ガツ!! オグツ!？」

ガポガポと、彼女の喉奥を犯す。

フェラ音どころの話ではない。派手な唾液と、漏れ出す呼吸の音が繰り返し、繰り返し聞こえる。

俺の規格外のモノで、喉を突かれながらも、吐き出したりせず…ただ繰り返す。

始めは、驚きと戸惑いを強く感じさせたが、この行為をすぐに彼女は理解してくれた。

口内の…いや、苦しいだろうに…意識して喉を締めてくる。

この、ただ男側の身勝手極まりない行為に対して彼女は……すぐに喜びを見出し始めていた。

その証拠に…涙目になりながらも、朦朧とした様なそんな目をこちらに向けて見上げてくる。

…気が付けば、俺はその頭に添えた手を離していた。

そんな事をしなくとも、華さん自身…自分で大きく動きはじめていたから…だ。

「おー… おぐー… おいっつー！」

「…これ…みほにも、してないんですよ？」

…俺の宣言に、彼女の動かす頭のスピードが早まる。

いつの間にか、動きやすい様にと、椅子の上から降りて、跪き、俺の下半身を抱き締めると…俺は頭には手を添えずに見下ろした。

正直…これ、かわいそうに感じてしまい、俺自身、趣味では余りないのだけど…彼女が喜ぶならと…思ったのだが…効果は絶大だ。

膝を突き、大きく頭を動かす…すでにどうすれば、俺が喜ぶのか分かっているかの様に、彼女は自分から大きく頭を動かした。

今までの経験もあるのだろうが、初回…しかも余りしていないというのに、セルフでするイマラチオを理解し…楽し…いや、味わいでした。

「っっ…おっ…おっ…おっ…」

陰茎の亀頭先から、順に…力の限りというのか、口内の肉が、文字通り絞り出そうと締め付けてくる

動けば動くほど、身体の根元からゆつくりと、体液を絞り出そうとする様に。

喉元が当たると、華さんの頭が、苦しそうに震える。

しかし、今はその頭を拘束していない。彼女の意味で、この行為を繰り返している。

…。

後頭部に手を添える…そのまま一気に、更に奥へと、まだまだ奥へと…強引につき入れた。

苦しいのか、嬉しいのか…良く分からない声を聴きながらも、ただ…俺が射精をする為だけに力任せに頭と腰を動かし始めた。

それこそ、オナホルの様…ただ性処理の為だけに。  
ぐぼぐぼと、唾液と空気がただ混じる音だけ。

こみ上げてくる、快感を感じる。

華さんの目が、段々と上に…更に上にと眼球が移動し始めた直後に…今まで一番、強引に…その頭を抱き締める様に引き寄せた。

「おっ!?…っっ…おっ…」

彼女に、聞いた事の無いような声を上げさせる。

大きく脈を打つ感覚と、射精の為に鼓動を繰り返す陰茎を…彼女の喉奥で抑えさせる。

もう、ただ…動くだけで気持ちが良い感覚。

…そして一気に引き抜いた。

「…っばはっ!!!」

ズルリ…と、腰をこちらが引き…口から抜き出す。

解放された彼女の喉元からは、げほげほと何度も苦しそうな呼吸を繰り返していた。

口からボタバタと…口内に出された大量の精液と、異常な程の量の唾液が、流れ吐き出される。

すでに、どちらの体液か分からない程に、ベタバタに口元を汚した彼女は、苦しそうに噎せながらも…何故？ と、不思議そうな顔で見上げてきた。

しかし、すぐに嬉しそうに、こんな物の様な扱いをされた感想を述べる。

「えっっはっ!!! あっは…はっ…これ…すごいです…」

その感想…案の定、彼女は気に入ったようだ…。

恍惚の笑み…とでもいうのだろうか？ いやでも…苦しいでしょうよ。

「あの…落ち着いてから…」

「良い…これ…頭の奥…げっほ…んん…」

ほら、上手くまだ喋れていないでしょ…。

「ヨケイナ考えとか…ジャマな事を全て飛ばしてくれて…はあ…はあ…」

…。  
「何より…隆史さんの…匂いで満たされる…もつと…」

唾液と精液に汚れ、口元を拭う事もしないで、また陰茎に舌を這わせてきた…。

そして、そのまま…ただ嬉しそうに寄りかかる…。

ゾクツ…と、その淫靡な彼女の顔に、込み上げる、真っ黒い感情。

更に…もつと…と、このまま中にでも、吐き出してしまいたい衝動を抑えて込みながら、彼女を立たせる。

腕を引くと、まだ余韻にでも浸っているのだろうか…体に力が入らないようだった。

しかし…ここからだ。

座る位置を変え…彼女の席に座りると…また、その姿を見た俺を理解したかたの様に、彼女はあの俺の前に、背中を見せながら立った。流石に、ここで好意を中断させての…更なるお預けは、逆効果だろう。

今までの鬱憤をはらさせるかの様に、少し好きにさせてみようかとも思った。

まだ呼吸は整ってはいないというのに…彼女は躊躇しない。

「ふー…ふうー…んっ…」

俺が脚を開くと、彼女は両脚を閉じたまま少し近づく。膝を折り、机に両手を付き、腰を落とす。

別にそうしろと言った訳では無いのだけど、流れる様に思いのままに動いてくれた。

近づく、華さんの背中…見なくとも、陰茎の切っ先が、彼女のドロドロに愛液に塗れた、入口に触れたのが分かった。

熱く…滑る入口が、少し陰茎の侵入を拒んだ。

「はっ…う…素直に…ですよ？ もう、良いですよ？」

散々、焦らした結果…だろうか？ 許可を取るように俺に聞いてきた。

聞いてきたのに…俺が答える前に、ゆっくりとその体を落としていく。

「んっ…はっ…はあ…あ…」

陰茎の回りを熱が包んでいく。

ぞりぞりとし、ねつとりと絡みついていくその感触と共に…華さんの声が嬉しそうに上ずんでいく。

全てを飲み込むまで、堪能するかの様に…ゆっくりと。

彼女はとにかく、刺激を求める傾向が強い。

それは特定の人物に与えられる刺激。誰でも良いという訳ではないので…少し安心できる。

…そして、態度で示した、この後背座位。

全てを、彼女が飲み込み終えた瞬間。



彼女の高校生離れした、グラマラスな身体が踊りだす。

……。  
……。

すぐに彼女は、次とばかりに、また腰を上げ…。

パツツ、パツツと…机に手を付いて、自分から腰を俺に打ち下ろした。

我慢なんて言葉は、すでに不要みたいに、初めから…大きく体を動かし始めた。

「すっ…ぶ…いつ… あっ… はっ…すごいです…これ…」

下着は全て取り払い、胸の上にもまで服を捲っているとは言え…。

「はっ…はっ…はっ…」

激しく呼吸を乱しながらも、一心不乱に腰を打ち付ける。

彼女のペースで動いているので、敢えて邪魔をしないで…そのまま豊満な胸に手を伸ばした。指先で、尖がり…勃起している乳首に触れると…一気に強く摘む。

少々痛いかと思うほどの強さだと思うのだけど…それでも動きを止めない。

「華さん…痛いのが、好きですね」

「んう…え…痛いのは…あっ…ひんっ!!?!」

グリツつと…言葉の途中で更に強く。

一瞬…体を止め、硬直させた。

ゆつくりとコチラを顔だけ振り向かせ、泣きそうな目で…しかし、歪んだ口元で作った、笑顔を見せてくれた。

「あうっ!! あ…はっ…」

今度は、奥に当たるソレをグリツ…と、少し腰を上げ、亀頭を擦りつける。

「これも…好きなんですよね？」

彼女を言葉で、攻め…認識させる。

順に…ゆつくりと…。

「では華さん？…俺に聞かせてみせてください…いや…」

奥をグリグリと攻め続けながら、彼女の跳ね伸ばす背中を見て…ここはと言い換える。

「華、口に出して言え」

…ブルツと、華さんの体が震えた。

被支配欲が彼女は強いのか…やはり、こういった言い方に喜びを見せる。

…と、多少不本意ではあるが、前々からたまに言う、この命令口調の言葉に彼女は素直に従ってきた。

「わ…わた…くし…」

普段から、彼女には敬語で話す俺が、行為の最中でだけ変わる口調。このギャップが好きだと…一回真顔で言われたな…。

日々の生活では、まず偉そうな口調で言わないから、自分だけに見せる一面…というのを気に入っているようだ。

「普段と…同じ格好…でえ…皆さんがいる…教室で…」

ゆつくりと話し出す彼女。

少し質問とずれているのだが、何を言うのかと…邪魔をしない様に動かないでいる。

というか、俺が動かなくとも、彼女の自身が、ゆつくりと腰を動かしているのです、どうなるのか…少々気になった。

「んっ！…何を…教室…」

ゆつくりと…腰を擦りつける速さが変わっていった。

「き…もち、良いんです…たまらなく…頭の中が痺れるよう…」

目の前で、円を描く様に回す腰…。

「…隆史さん。私、素直になって…宜しいのですよね？」

「そ…そうですね」

思わず口調が戻ってしまった。

何かが弾ける前兆…というのだろうか？

華さんのその言葉に、彼女が完全に変わろうとするのが分かった。

「が…まん…しなくて…スナオ…に…」

上を向き…長い黒髪が、少し動く。

長く細く光る、その髪の流れに…目を奪われた。

スキルを使い、そうする事が目的だったと言うのに…何故かが一瞬、背筋を走った。

止めとばかりに、自分から子宮口にねじ込ませる様に、彼女の腰が動いた。それが決定的だった。

…弾けて…飛んだ。

「隆史…さあん」

膣内が締まる。締め付けながら…ゆっくりと腰を上げていった。

陰茎の血液を、外にへと搾り出すように…つて、これ、意識してやってるな。

…声が出てしまいそうな程の快感。

「んっ…はあ…はあ…」

捲くれ上がっていたスカートが落ち、白いお尻が隠れてしまった…立ち上がった華さん。

机に手を付きながらも、体を回し…俺の正面へと向き直すと…。

「すごい…すごいです…隆史さん」

そのスカートの左右を摘み、恥部を見せつける様に、ゆっくりと持ち上げた。

「言葉にしようとする…はあ…(っ)まで…」

…思わず見入ってしまう。

自ら、両脚を動かし…俺に脚を閉じろと言わんばかりに、外側から脚を動かす。

要はこのまま俺に跨りたい…のか？

「私…教室で…公共の場所で、胸を晒して…」

両手を俺の肩に付かせ…その晒している胸を、俺の顔を挟むように押し付けてくる。

視界が塞がれてしまったが、陰茎に触れた華さんの手の感触…。

「しかも、自分の席で…自分から…脚を…股を開いて…んっ」

また…ねっとりとした熱を切っ先から感じる。

「あっ…はあ…あ…入って…くる…」

包み込む熱と、刺激。

彼女の体が、下に移動すると…目の前の胸が、ゆつくりと離れていく。

ゆつくり…ゆつくり…彼女の中に飲み込まれていく。  
熱と締めつける刺激で分かる。

「っ…は…ああ…」

全て飲み込まれる瞬間。

彼女の身体が、震え…肩で大きく息をしている。

胸の上で捲くれ上がった制服。…前を露出した格好の彼女は、両手を俺の首に回すと、続きとばかりに…口を開いた。

「はしたない…とても…軽蔑される位…に…はしたないです…」

「は…華さん？」

「隆史さん…全部、入っちゃいました…初めは、こんなにすんなりとは、入らなかったのに…」

ブルブルと体を震わせ…腰元から彼女の重さを感じる。

言ってみると、言ったとはいえ…スキルの効果があるとはいえ…あつさりとそれに応じる彼女。

淫語…とは、言えないかも知れないけど、いつもの華さんとは、また違うセリフ。

「我慢…しなくて良い…素直になって…良い…」

彼女の顔が、近づいてくる。

「んっ…ちゅ…ぱっ」

キス…ではない。

彼女は、俺の唇を、小さくだした舌で舐め…這わせた。

唇…頬…首元を…。

這わせながらも、周回させ…何度も何度も。

「皆さんと過ごす教室での行為…見知った場所ですと…ここまで…んっ…」

「え…」

「…背徳感…これが…背徳感…。この今の私が感じている…正体。これが…隆史さんが前に仰っていた事ですよね？」

「は…華さん？」

ゆつくりと…腰を前後に動かし始めた。

「んちゅ…はっ…隆史さんは、私に…色々…んっ…与えてくれます…」

舌で俺の唇を舐めながら、腰を動かす。奥にゴリゴリと当たる感触。

「そうですよ…。みほさんに申し訳ないとか言っておいて…結局…この関係を…私はどこかで、気に入っていたんですよ…」

顔を少し俯かせて、少し寂しそうに呟いた彼女。…それでも体を動かすのを止めない。

「ただ…もう、我慢…しなくて良いと言ってくれました。こんな…軽蔑されても仕方ない…私を…受け入れてくれると…も…」

椅子が鳴る音がする…。

脚に力を入れ…腰を動かす早さが上がっていく。

「はっ…はっ…です…すから、もう我慢しません…貴方が許してくれました…から…」

ギツ…ギツ…と、小さく体を上下に動かし始めた。

それは次第に大きくなり…体を前に倒して…腰を打ち付ける為だけに動き出した。

「あっ…あっ…気持ち…良いです…もっ…もっ…」

動くたびに揺れる胸が、目の前で踊る。

「電車での時とは…また違う…慣れ親しんだ場所での…行為…」

動きも早くなり…すでにこの状態を見られたら…とか、頭から消えているのだろう。

いや、むしろその事ですら、楽しんでる。

「私…思い出してしまうそうです…この場所…で…授業中に…お昼休みに…い!?!」

ビクビクと、体が震え…。

「あっ…はっ…す…す…い…今まで…一番…」

…今、体に訪れた快感を逃がさない様に、体を曲げた。

何度も肩を跳ねさせ、その余韻に浸る彼女…。

…。

しまった…。

スキルが効果があまりなかった訳じゃない。

強すぎたんだ…特に…スキル「甘言」。

あれは誘導する為のスキル。だけど、彼女に対してだけは、相性が良すぎた。

思いの外、色んな感情を彼女は抱え込んでいたんだろう…そのスキル効果を含めた俺の「言葉」が、強く華さんの心に刻んでしまった。

スキル「催眠」では無理な程に、強烈に。…ほぼ洗脳に近い。

「はあ…はあ…次は…どうしましょう…どうしたら良いですか？」

少し落ち着いたであろう彼女は、腕をそのままに体を離れた。

髪が前に落ち…先程から黙ってしまっている俺を見つめる。

「どうしたら、「隆史さんの為」になるのでしょうか？」

【素直】【我慢】…【華さんの為】【俺の為】…の言葉。

「貴方が望む事が、私の望む事に繋がるんです…」

荒い息を吐きながら、更なる刺激を求め始めた華さん。

「今も…仰った通り…口にしたら…すぐ…良かったです…」

黙る俺に…顔を近づけ、待っている間にと…暇を潰すように、今度は口を吸い始めた。

舐め…舌を浅く入れ…。

髪も…瞳も…濡れた唇も…。

妖艶…としか言えない程、強烈な色香を放つその姿に…彼女が変わっていた。

何を俺は…こうなる事が、こうする事が目的ではなかったのか？

しかし、流石にこ《》

…。

……………。

頭に何かアウンスの様な声が流れた。

な…んだ？ 何かが、削れた気がした…。

ま…イイヤ。そんな事よりも、スキルが…もう一つできている。

「……………」

それは、俺が望む事も…思い浮かべる事すらしないようなスキル…。  
効力を調べなくとも分かる、その名前…なんだ、これ…。  
ユニーク・スキル「壊」からの…派生スキル…「隷属」？  
…派生…。  
…。

彼女は、俺に言われるがままに、自分の席…その机の上に寝そべった。そして自分から脚曲げ、大きく左右に開いた。

…すでに自身の快楽を堪能し始めていた。それは、直接的な性行為ではなく、現状の環境…状態を含めての快楽に感じている。

開かれた両膝に手を乗せると、目を見開き…俺が入ってくる様に見入っている。

根本的な「恥」。それを快感に変換させ、彼女は何もかもを受け入れ、楽しむ。

「あつ…あつ…学ぶ為の机だと言うのにつ!! あつ!」

もう、何も言っていないのだが、彼女は敢えて自身の様を口にする。

身体の奥から沸き上がる興奮に、ゾクゾクと体を震えさせながら…。

パンパンと、肌がぶつかる音と、激しく机が鳴る音。

甘い喘ぎ声を教室に…いや。

「好きでっ…すっ!! チ○ポをお!! 私の奥でえ!!」

彼女は教えれば、即座に対応できる。

喘ぎ声と共に、普段なら絶対に口にしない言葉を教室中に響かせている。

元々沙織さんの雑誌知識もあるようで…。

日常の清楚な華さんの口から出る、その卑猥な言葉。

録画していると分かる様に、携帯を取り出し、ワザと見せつける。

その卑猥な言葉と、教室での行為…それを記録されると言う事に彼女が気がつかせると…彼女の中が痛いほど締め付けてきた。

「わ…私のお! いやらしい言葉とお!! チ○ポで犯されてる姿ああ

!!

教室の外にまで聞こえる程に、大きな甘い声。

自身で胸を揉みしだき、悶える彼女は、毎回発言する度に、俺の返答の言葉を待っている様だった。

「違うだろ？　なんて教えた？」

「はっ…あっ！　ハメツ！　ハメられながらああ…ああっ!!　イツて…くださいっ!!　ドピユドピユ…てえっ！　チ○ポから、私の奥にお！　おっ!!　あっ!!」

「良く出来ました」

ゴリツ…と一番奥に、押し込める。

お望み通り、熱い脈を感じながら、熱いモノを吐き出す。

「あ…あっ…中に…出されながら…撮られながら…私…果て…ま…し…」

首を大きく反らせ…ビクンビクンと体を跳ねさせた。

「わ…私の中…に…隆史さんのザーメンで、満たされ…てしまいま……したあ…」

ゾクツ…と、また背筋に走る。

華さんに対して敢えて下品な言い方をさせる事に、ものすごい興奮を感じる。

…ズルツ…と陰茎で、栓をされた膣を開放すると…また、ものすごい量がそこから溢れてくる。

ドロツとした、真っ白いものが机の上を滑り、床へと落ちていく。

「はっはっ…っ…ぎい…は…」

っ…次？　すぐに？

みほ達は、大体本気で攻めた後は、少しの間動けなくなると言うのに、彼女は貪欲に次を求め口にした。

息も絶え絶えだが、その目は俺を求めてくる。

体を起こし、教室の窓前にまで移動させる。

窓に胸を押し付けさせると…分かっているとばかりに、脚を広げた。



ポタポタと股の間から、まだ精液が零れ落ちている…。

窓の外から見える運動場には、誰もいない。…誰もいないが…スキル「催眠」で、男子生徒が数名見えるように細工をする。

例えいたとしても…スキルを使っているので、視線がこちらに向けられても、学校内であれば、俺達の姿は認識できないだろうが…それに素直に彼女は従った。

見られるかもしれないという、恐怖…と、スリルよりも…彼女はもう俺の言う事に従う事に、快感を見出しているのだろうか…？

「はあ…はあ…見せる…見せつけると言うのに…も…男性は興奮する…のでしたよね？」

「えっ!？」

お…思わず、声が出てしまった…。

なんでそんな性癖が存在するのか、彼女は知っているのだろう。

あ、沙織さんの雑誌か…。

「ど…どうぞ…お好きにしてください…」

……。

華さん？

「み…見られて…すぐく…はあ…はあ…見られて…いるかも…しれません」

窓の下を覗き込む彼女…。

いや、まあ…えつと…するのは良いし、うまい具合に変わって行っているのだけど…え？

「私…お外に…胸を晒していると言うのに…なんでしよう…この開放感…」

彼女は、見られているかもしれないという状況ですら、はあはあと息遣い荒く…自身の胸を外に押し付けているのをやめない。

「…今…私…隆史さんの逞しい、おチ○ポで…強引にこじ開けられて…奥にまで一気にハメてしまわれたら…どうなっちゃうんでしょう…」

…えつと…。

「あの…華さん？」

……。

思わず、素で声を掛けてしまった…。

順調…って、言えば順調なんですけどね？ 順調過ぎるとい  
うか、なんとというか…。

「…名前」

」

機嫌が悪そうに、振り向いた彼女が突っ込んだのは、ソコだった…。

「えつと…華？」

「なんですかあ？」

嬉しそうに返事した…。

…。

いや…もういいや。

「見られる恐怖…ってのは、ないのか？」

「ありますよお？」

…即答。

その割に…変に嬉しそうなんですけど。

「あの…見られた場合、下手するとここにアイツ等、来るかもしれないぞ？」

…変な不安感で、念の為…と、軽く脅す様に言ってみる。

正直、胸を窓ガラスへと押し付けさせた時、あまりにすんなりと  
従ったのが、少々気に掛かった。

脳内アラームが、全然ならなかったので嫌がっていないとは、分  
かってはいたのだけど…。

「…むう。邪魔されるのは、正直嫌ですねえ」

いや…邪魔って。

聞かれるかもしれない、見られるかもしれない…それを、省いてソ  
コをまず思った…という事だろうか？

「あつ…この行為も、アレ…ですか？ その為なのでしょうが？ 隆  
史さん」

「…なんの事です…いや、なんの事だ？」

敬語で話そうとした瞬間…一瞬目が細くなった…。

拘る所が、そこですか…。

んなこと、どうでも良いと思える程…それ以上の発言をされた。

「ねとらせ…とか、言うのですか？」

「なんで、んな言葉、知ってんですか?!?!」

いやもう、普通に素になるわツ!!

その単語を華さんが言うかね!?

「あの人数ですと…ああ、そうですか。たくさんのおチ○ポに、囲まれた女性を見るのを、好きな男性もいるのでしたね？」

「」

ま…まずい…。

これは、いかん。

恥ずかしい言葉を言わせられている。…というのを、彼女の中では継続しているのだろう。

下ネタ会話すら可能な状態の華さんからは、破壊力のある言葉しか吐かない!

「…隆史さん。私、隆史さん以外の方とは…想像するだけで、虫唾が走る程、嫌なのですけど…」

「あ…うん。その方が…っ!」

想像…したのだろう。

痛みを伴う、激しいアラームが脳内に響き渡った。

一瞬、声すら上げそうな、刺すような痛み。ある意味で安心できる。

「あ、でも…」

アラームが収まった…そして、「でも」って…今度は何を言うつもりだ。

「どうしてもと…隆史さんが、命じるならば…その…我慢…致しますけど…」

「しませんよ!!! とうか、命じるって!?!」

まずいっ!! 本当にこれはまずい!!

まず、目がやべえ! 命じるって部分で、先程まで出していた、色

香を含んだ怪しい色になった!!

俺は別に、彼女をビッチにしたい訳じゃない!!

「大体、他の野郎に、華さん抱かせる訳ないでしょうが!!」

「あら、良かった♪」

「……」

「あ、でもお…ちよつと似たような事してきませんでした？ 玩具と

一緒に…その…隆史さんに、いぢめられた時は…凄かったです…」

いや…口でもしてもらってる時に、アレをアレに入れて…致した事あ

るが…ああ…もう。うつとりとした目で、思い出している。

いかん…。そういや、トイレで致した時も…彼女ノリノリだった

…。

本当に、ただ刺激を求めるだけにしようとしてしまうと、本気でまずい…こりや適度に分身使って、何人かで攻めて…ガス抜きしてやらんと…。

あ…でも、アレ…夢で終わらせてしまうから…えつと…どうしようか。

…この彼女の目はまずい。

「…興味あるんすか」

「えつと、確か複数で…って、乱交…でしたか？ ありませんよお。そ

もそも隆史さん以外の男性に、触れられるのは、絶対に嫌です」

「……」

…ん？

何か俺は、勘違いしてないか？

少し、俺の考えと、華さんの言葉…ずれている気がする…。

じつ…と、モジモジし始めた、教室で半裸姿を晒している彼女を見る。

そうだ…何か…ずれてる。

「あの…隆史さん…そろそろ…続きを…」

…いや、まあ…。

あつ…ああ!!

「は…華」

「はあ…」

期待した顔で、俺を見つめてくる彼女は、完全に…その…出来上がっているというか、何というか…。

ある意味で、コレは望んだ通りになっていないだろうか？  
…つまり。

「…肌を見られるのは、良いのか？」

「嫌です」

即答…しかし、現行でそれを行っている…。

という事は…もしかして…。

「んっ…」

彼女に近づき…優しく抱き締める。

髪から甘い香りが漂い、一瞬このまま続けようかと思ってしまったが、現状を確認したい。

良くも悪くも…彼女は、自分に正直で…思いの外…シンプル。だからこそ、毎回心臓に悪い発言をなさる。

変に遠まわしに言わずに、ストレートに聞いてみよう…華さんの場合、それがあある意味で一番だ。

「華…は、命じられたらば、他の男とも…と、言ったな」

「え？…ええ…」

あ…声に熱が入った…。

「肌を見られるのは、嫌だけど…今は、それを行っている…。それは、俺が言ったからか？」

「そうですよ…お？」

何を想像したのか分からないが…彼女が一瞬、身震いをした。

…解った…。

「口…開けて、舌を出せ」

「んあ…」

話の流れをぶった斬ったと言うのに、何も言わず、即座に従い…顔を上げ、艶かしい舌をこちらに伸ばした。

顔を近づければ、何をしたかと理解しているかの様に、自ら俺の舌

に絡ませてくる。

貪る様に…唾液を絡ませる音を、ワザと出しながら…。  
……。

「…んっ…ちゅ…ぷ。はあ…ああ…」

舌を離し、堪能したかの様な吐息。

「次は、どうしましょう…どう…したらよろしいですか？」

両手で、俺の顔を挟み、ゆっくりと撫でる。

これは…依存とも違う。

「どうしたら…隆史さんは、嬉しいですかあ？」

これは…隷従…隷属…。

それで、先程…あんなスキルが、俺の意思と反して発現したのだからか？

発現したとしても、使った記憶も、意識も無い。

それでも、これが今の彼女の本質。

あまり使いたくないのだけど、知っておかないと…と、スキル「鑑 定」で確認し…確信を得た。

やはりそうだ。

華さんは、今…俺に命令される事に悦びを得ている。

それが、どんな内容でも、どんな行為にでも…だ。

いる…希にいる。こういった女性は。

特に華さんの様な、お嬢様と言われる人種に多い。

彼女のお家柄もあるのだろう…。そこから歪んだ性癖…性格…そして、今のこの関係と感情…。

さらに、何もかも割り切って、素直に…我慢する事をやめた彼女は…それらが全て、一つになっている。

それだけで…あの言葉でだけで、出来上がった。

彼女は…あんこうチームの中で、ある意味で唯一…完成していた。

《…》  
……。

変な焦りも…何もかも消え、頭の中がクリアになった。

だから、気がついた…ソレだけが、露骨に残って見えたから。  
それは、真っ黒い感情…というのだろうか？

試したい…という、興味…？ 好奇心？

なんでもいい…一つの案が浮かんだ。

もちろん、他の男にどうこうさせる気はない。

ない…が、浮かんだ。

あの時…あの男子トイレでの事は、スキル「催淫」を使った状態でした事。

だからあの乱れ様…それは、みほにも言えた事。

だけど、今の…このある意味で、正気を保った状態ならどうだろう。

どう…乱れるだろうか？

スキル「催眠」で、複数に別れた俺を、常識だと認識させれば…傷つかせる事もない…だろう。

それが前提。

なに…最初にもしもの話で、聞いてみれば良い。

もしも、俺が複数いたら…それらでならば…と。

アラームが鳴ったら、やめればいい。

……。

「華」

「…はい？」

名前を呼んだだけで、期待を込めた目を向ける。

何を言われ、何を命じられるのか…それだけ…。

…しやがめと言えば、彼女は従う。

彼女の前に、陰茎を突き出せば、言葉にしなくとも口を開ける。

「はっ…あ…」

舌を這わせ、亀頭を飲み込む…。先ほどのイマラチオとは違い、彼

女は丁寧な舌を使いながらも、表面を舐めまわす。

ただ、舐めるだけ…それでも、上目使いで…ここが良いかと、目だけで伺ってくる…。

「チュッ…ポッ…チュユ…」

頭を撫でる事で、華さんが、ウツトリと…目を細めた。

窓の下…顔を横にし…自身を慰めながら、顔を動かし始め…。

「俺が言えば…ね」

「っ…ぷっ…。そうですよ…隆史さんが、言えば…喜んで頂けるなら…」

「…ならもう一人…。もし、ここに他の男がいたのなら…もし、一緒に奉仕してやれと言えば…するののか？」

聞いては駄目な質問。

しかし、その割には…普通に…本当に自然に口にできた。

催淫も使っていない…素の彼女はどんな答えを出すのか…。

ただ、それが知りたかった。

怒るだろうか…呆れるだろうか…軽蔑するだろうか…。

ただ、その質問に対し、彼女は…。

「ふふっ…お望みなら…」

笑った。

その彼女が、自分を慰めている手が、動いた。

その彼女の、空いたもう片方の手が、陰茎を掴んだ。

…変に冷静な自分がいた…。そして次の質問…。

「なら、その男が…俺だったら…。俺が複数いたら…どうしたい？」

「…？」

「もしもの話…頭のオカシイ話…。俺が…何人かに分かれて、一斉に華を抱きたいって言ったら？」

「あの…仰ってる意味が…」

はっ…だよなあ。

「…でも、それは…言葉そのままの意味でしたら…」

…？

ジュルリと…亀頭から口を抜き…そのまま陰茎の横に頬を付けた。

髪が上に掛かり…彼女のやわらかい頬の感触…。



「私は…喜んでお受けするかと…」

「……………」

ゾクツ…とする程に、妖艶な笑みを浮かべた…。

こちらが身震いする程に、彼女は笑った…。

言葉、一つ一つの受け答えで、彼女が完全に変わってしまったと…納得出来るほどの笑み。

ただ、少し…少しだけ、疑問が生まれた。

それは、それらの行為とかではなく。彼女に対しての事でもなく。平然と、自然と。そんな考えや…聞いてしまう事に対しての罪悪感も何もなく、自然と口に出てしまう事。

だから、今も…普通に、いつも通りの口調で…………。

「それ…『すいませえくん』」

っっ??  
!!??

トントン…と、軽く教室のドアをノックする音が響いた。

思わずそちらを全力で振り向いてしまった。

…な…なぜ？

頭の中が、一気にゴチャゴチャなる。

聞き覚えのある、その声。

教室の外…廊下から、聞こえる会話内容で、誰かはすぐに分かった。

…いや、そうじゃない！ なぜいる!? なんでいる!?!?

スキルを使って、あんこうチーム以外は、校舎内に近づけないようにしている。

スキルを使って、誰かが近づけば、分かる様になっている。

なのに…なぜだ？

「……………」

あ…。

は…華さん…が、すっげえ真顔になった…。

行為を止め…スツ…と、立ち上がった…。

いや、無表情…喜怒哀楽が全て消え去った様な…顔。

ノックと同時に聞こえてきた、聞き覚えのある声を聞いたとたんに、これだ…。

会話の内容から、今にでもすぐに入ってきてそうなものが、分かったからだろうか？

居留守を使う…という、案もあるだろう。

今の彼女だったら、またあの異様な程、女子高生が出すとは思えない程の、強烈な妖艶な雰囲気です誘って来そうなものだ。

しかし…何も言っていない。

俺に何も言っていないし…あの少しおっとりとした喋り方で、雰囲気が壊れたのか…それとも日常に戻ると、確信したからだろうか？

無表情のまま、衣服を…捲れたスカートを下ろし…胸元の捲れた制服も戻して…あ、後ろ手にブラのホックを付けてる…。

スキル「ステイル」で盗ったおいたブラ。机に野ざらしに置かれていたのを手に取って、淡々とした作業…。

いや、その姿、仕草って、なんかこう…好きですけど…今の華さんの表情からすると、全然、嬉しくない…。

スツ…と、なにか思い立ったのか…無表情のまま、こちらに大きく聞こえる様に…。

「……………チツ」

し…舌打ち…。

『秋山先輩、返事がありませんよお？』

『多分いるとは思いますが…うう…垂れてくる…』

『何がですかあ…？』

『アツ！ いえ！ こちらの事です!!』

『でも、大丈夫ですかあ？ さつきから、歩くのちよつと辛そうですよ？』

『いえ…少し腰が…。うう…恨みますよ、隆史殿』

『？』

…………。

あ、うん。あちらの俺も悪ノリ…というか、なんかハツチャケテタ

シネ。

あの声は…優花里と…えっと、宇津木さんか。

独特な喋りと声で、すぐに分かった…んだけどお……。

「隆史さんも、いつまでそんな格好しているおつもりですか？」

「…あ、はい」

ズボンを脱ぎ捨てている訳では無かったのですが、確かに大事な所を全開にして、全開になってますけどね？

華さん…お…ON/OFFはつきり、しすぎではございません…か？

すぐに全開な状態を、スキル…使うまでもなく、華さんの目線で、収まりました。まだそこまでの、M気は持ち合わせておりません。

ジー…と、チャックを閉め、普段の格好…あ、一応「リフレツシュ」で、周りの匂い、汚れ…等を掃除…。

ジー…と、同じく俺の姿を、チャックを閉める所まで見ていた華さん。

「……………チツ！」

「……………」

ま…また、舌打ち。

…。

いや…まあ、流石にこの時点で、先程からの良く分からない罪悪感や躊躇の消失。

今まで気を使いすぎて、踏み切れなかった部分に、自然と踏み込めてしまう感覚…それに嫌でも気がついた。

まあ…あの良く分からない、機械音声みたいな脳内アナウンス。その新たに寄越してきたスキルのせいだろうよ。

ユニーク・スキル「壊」

効力不明。脳内検索をかけると、モヤが張ってしまい、何もかもが、分からないのが少々怖い…。

しかし、それに気がついたのも、華さんの…この、突然のクールダウンで、脳内が一気に冷め、冷静になったからというのもあり…。

俺…この人に勝てないだろうな…と、変な確信を得た…。

…彼女の良いように使われてしまう…そんな気がしてならない…。

あ…その華さんが、俺の服装が戻ったと確認する様に目が動き…そして動いた。

ツカツカと、俺の横を通り過ぎ、ノックされたドアへと進ん行く。

まだ外で何か話している様だけど、気にする事もなく…一気にそのドアを、ガラツと…開いた。

「どうしましたあ?」

何時もの口調…で、来訪者達へと…開いた瞬間、声を掛けた。

「あ、五十鈴先輩」

「つつ?!?」

華さんは、俺の位置から見ると、後ろ姿で…俺には分からないが…。

来訪者の二人の表情で、すぐに察した…。

「あら、宇津木さん。まだお帰りになっていなかったのですねえ…。

ええと…私に何か、御用ですか?」

「あ、いえ。五十鈴先輩じゃなくてええ。尾形先輩にいく…」

…宇津木さんの変わらない口調で…多分…華さんの表情は…表面的には…何時もの様に、後輩に対して、微笑んでいるんだろう…がっ

!!!

「」

優花里が真っ青になって…目を見開いて…硬直している…。

「…隆史さんに?」

「はいい。いらつしやいますかあ?」

ツツ!?

な…流し目で、一瞬コチラをフリ向いた彼女の、その目が…すっごい尖って光ってる…。

「あ…う…あうあう…」

ああ…めっちゃ震えてる…すっげえ震えてる…優花里さんや。

華さんと、ドアの隙間から俺の姿を捉えたのだろう。

…全てを察した顔をした。

「…ええ、一応」

一応…。

ゆかりんの表情と、華さんの底知れぬ…なんとも言えない口調に…俺含めて二人。黙っているしかなかった…。

「あ、本当ですわねえ。尾形せんぱうい」

「あ…うん。ゴキゲンヨウ…」

「なんですわあそれえ」

ダーズリン口調が自然と出てしまった…。変にツボに入ったのか、コロコロ笑っている宇津木さん。

いや…なんで、スキルが、全く効かないのか分からないが…今は、それどころではない！

優花里との会話の内容で、あんだだけ、でかい声で叫び喘いでいた華さんと致していたのは、バレていないツ！…はず。

一応、冷静に頭が働く辺り、俺はまだ大丈夫っ!!…な、はず。

話が停滞してしまう恐れもあり…正直、この状態での停滞は、怖すぎるしな…。

さつさと、その教室出入り口へと、俺も近づき、華さんの真後ろに立った。

「誰もいない教室で、五十鈴先輩と二人きりとかあ…怪しいですねえ。浮気ですかあ？」

「…いや、帰る準備してただけだよ…みほ達の荷物もあるし…」

悪意の無い、からかうだけの言葉が…ここまで胸に刺さるとは…。

「同じ屋根の下で、暮らしてますからね？」

華さんっ!?

「別段、不自然ではありませんよお？」

「ああく噂、本当だったんだあ」

うふふと笑い合う、二人…。

…それに挟まれるゆかりん。

息、してますか？

……。

「お…俺に、何か御用でしょうか？…というか、宇津木さんだけ？他の一年は？」

「あ、はい。プライベートな事ですのでえ、私一人です。秋山先輩とは…えつと…途中で会いました」

…トイレか。危なかったのだろうか、優花里の顔が真っ赤になったので察してやろう。

「ぶらいべえと…」

「プライベート…」

そして、そこで素に戻って、華さんとハモらんでくれ。まずい。ちよつと、これはまずいぞ。

何かと具体的には言えないが、華さんがヤベエ!!

くつ…強硬手段にでるか…。

ある意味で、華さん向け…なのか? まあいい!

「つつ!?」

おもむろに…ドアの影で見えない様に計算し…華さんのお尻を、スカートの上から驚掴みにする。

やわらかな感触とか…まあ正直、気持ちが良いのだけど…そのまま軽く引つ張る様に横に体をずらさせる。

「ちよつと…ですなえ…相談がありましたえ」

「相談?」

「はあ」

話しながらも、華さんの立ち位置に割り込む様になると…華さんも察してくれたのか…というか、物分り早え…。

廊下側からすると、体を半身、ドアに隠れて見えなくしてしまった。宇津木さん達からすれば、顔の半分だけ見える様な位置に移動させる。

華さんのスカートを弄る様に、手だけ侵入させ…先程まで散々弄り回していた秘部にへと指を入れる為に、下着の上へと滑り込ませる。布越しに湿った感触と熱が手を包み込んだ。布の隙間を作り、その谷間へとゆつくりと侵入させていく…。

「…っ」

…よし。華さんが変な殺気地味た雰囲気消してくれた。

後は…と、指に力を込める。ゆつくりと…また、先程まで入ってた

華さんの中へと、再度入って行く。

肉のヒダをこじ開け、音が出ないようにゆっくりと…そして…そう、またスキルだ。

「えっと…相談に乗るのは構わないけど…なんで、俺？」

何気なく何時も通りの口調で、宇津木さんへと視線を落とす。

華さんを弄びだした腕を、ドアに肩を当てて完全に隠すように、自然に近づく。

後は、音は立てない様に、ぐちゃぐちゃと…まだいっぱいに入っている精液を、彼女の中で混ぜ染み込ませる様に指で掻き回す。

「えっとお、ある意味で、先輩しか相談できる相手がいらないからですよお」

「ある意味で？」

横目で確認すると…すでに華さんは、体をドアに隠してしまい…唇を噛み声を殺し…おでこをそのドアに当て、もたれ掛かっている。

目は…先程まで放っていた怪しい光に染まって…これは、悦んでいるな。

では…と、スキル「召喚」…彼女の中で、プラスチック製の異物を侵入させた。

そしてすぐに、素早く手を、彼女の中から抜き出した。

「つつっ！」

ビクツと、背筋を伸ばし上を向いた…

指が…すげえ…びっしやびっしやになってる…。見なくとも指をこすり合わせて、すぐに分かった…よし、「リフレッシュ」

ああ…ゆかりん。顔真っ赤にして俺をジト目で睨み始めてきましたね。

貴女の位置からだ…ギリギリ、華さんの顔は見えるのでしようか？

急に大人しく…しかも体を隠してしまい…恍惚の笑みの華さんで、察したのですね？ いやあ…君も、随分と慣れたねえ…ゴメン。

「俺なんかでなら、良いけど…一応、みほに確認取っていいか？」

「西住先輩の了承は、ちやあんと貰ってますよお。秋山先輩から、連絡

してもらいましたあ〜」

「…ええ。いつの間にか消えてしまった、どこかの誰かさんの代わりに、聞いておきました」

「……………」

う…うくん。

俺、突然消えたのか…。不機嫌そうな優花里の声で。何をしてどのタイミングで消えたんだ、俺別個体。

今回意思のリンクを切っていたから、全員また一つにならないと、他の個体の記憶とか一切分からないしなあ…。

「ちなみに、相談内容も言っておきましたあ。二つ返事で了承してくれましたよお？ 内容言っておけば、西住先輩も安心すると思いましてえ」

……。

用意周到な事で……。

「み…みほ達、どこにいるんだ？」

「すでに、帰り支度を終わらせて、校門で五十鈴殿を待ってます…。ですから、ここに来たのですけ…ど…」

「……………」

優花里の顔が、真っ赤になったね…どうした？

つと…その五十鈴殿が…肩に寄りかかってきたね…制服、掴んで震えだしたね…。

「あれえ？ 五十鈴先輩…大丈夫ですかあ？」

小さな呼吸を繰り返して、ビクビクと肩を震わせている…。

ただ俺の肩に、頭を擦りつける様にしている為に、表情は分からないのだろう。

傍目からみれば、体調が悪い様にも見えるが…まあいい。

スキル「召喚」で、出したのは…遠隔用のピンクローター。今回は、静音性が高いものなので、バイブ音は聞こえまい…。このスキル「召喚」って、俺が持っていないものでも、知識としてしった商品なら召喚できるようだ。

お陰で色々と幅が広がるな。よし。後で、ちよつとじっくりと考え



てみようか。

「ええ、大丈夫です……よお？ あっ!! ……でも、みほさん達……あ、いつの間にか荷物もありませんね」

……。

若干、声が上がらずつてはいたが……流暢に出来るだけ自然に話した。

あ……の声が、まあ……多分、気がついて上げた声じゃないだろうが。

「……私の分も含めて、隆史殿が持つてきたと、仰つてましたか!？」

優花里さん。メンチ切るのやめてください。

はあ……多分、俺の別個体が、スキル「召喚」で、持つていったのだろう。

「そ……う……ですか、隆史さん、いつの間に……い」

まあ……辻褄が合わないと思う所は、スキルで補正……認知を変える。

ただ黙っているのは、不自然かと思つたのか、熱っぽい声で呟いた華さん。

時系列的に、おかしいのだが、それすら気にしていない声だから、成功だろう。

しっかし……無駄に色っぽい声になってますね。

「ん……んじゃ一度、みほと合流しようか……。優花里、悪いが宇津木さんと先に、みほ達の所に行つていてくれ」

「……そうでしょうね」

……優花里さん。

会話の流れ……返事の言葉が、若干ずれていますよ？

（ ……しようがないだろ!?! あのままだと、華さんどんどん真っ黒になりそうだったんだし! ）

（ ……そこには、感謝してはいますが! 真っ黒じゃなくて、桃色にしてどうするつもりですかっ! ）

（ ……どうもしないよっ!! 身支度させて、すぐに行くから!! みほ達、待たせているならすぐに行きます! ）

（ ……信じますよ。……こう、目の前でこういった行為の、出汁にされるのって……正直良い気分じゃありませんから ）

……。

「目だけで、会話するのやめて頂けますか？」

あ…はい。

華さんには、俺にだけ聞こえる様に…耳元で素声で囁かれた…。

ちなみに、このアイコンタクト会話は、優花里とだけ、何故か出来るようにナリマシタ。

し…振動、止めておこう…。

「じゃっ!! じゃあ! 支度済ませるから、宇津木さんもヨロシクっ!!」

「え…あ、はい」

「まったく…」

片手を上げて、会話は取り敢えずここまでだと、ドアを閉めるっ!! 即効で会話を締め切ったので、若干失礼かとも思うが、ダラダラと会話が続きそうだったので、仕方がない。

…思った通りに、閉めたドアの向こう側から、ブツブツと会話が少し聞こえたが…すぐに足音と共に離れていったので、大丈夫だろう!

一応、頭だけ出して廊下を確認! よし、もういない!

華さんも、目視で確認っ! よしっ!! 真顔っ!!

「……」

よ…良くはないな…。

「で、では華さん。帰りましょうか?」

「……はあい」

「う…宇津木さんの真似は、やめてください…」

このアイコンタクト会話をすると、この…華さん。それとみほが、えっらい不機嫌になるから出来るだけ控えてはいたんだけどな…。

ローターの振動があるからだろうか…。まだ熱っぽい視線のまま、俺の顔を見上げている。

いやあ…めちやくちや不機嫌な顔だ…。

こういった行為の最中だから、余計に…だろうか?

……。

「…は、華さん」

「……なんででしょう?」

ああ…もう、口を尖らせて…。

俺を睨みながらも、小さく肩をビクビクと、震わせる彼女。

よ…よしっ！

「華」

「…は…はい？」

呼び捨てにする…イコール、これから言う事は、そういった関係の事だ。…という関係が、いつの間にか出来上がってしまった。

思った通りに、呼び捨てにして呼ぶと、彼女の返事が、別の色を放つ。

「…帰ろうか」

「んんっ」

膝を曲げ、お辞儀をする様に、前屈みになった。

「振動はランダムだから、何時、どの強さでかは、俺にも分からない」  
「んっ…はっ…はっ…」

「ああ、後…下の下着は、脱いでいってくれ。…華の中に大量に出してしまつたから…滑りやすいと思うけど…落とさないようにな」

…と、鬼畜地味な事を言ってみる。

意味がすぐに分かつたのだろう…。すぐに顔だけ上げ、涙目の目を見開き…俺を見上げる。

…俺に悟らせまいとしているのか、釣りがりそうな口を、強引に歪ませている。

その顔は、次が始まったと…悦びに満ちた顔に見えた。

「わっ…分かりましたア…。たかつ！ん…隆史さんは、酷い人ですねえ…」

……。

いや、うん。

完全に俺は、変わっている。

変わっているのだけど、それ以上に、彼女の変わり様と言葉に驚き…ギリギリで何かを保っている、実感させられる。

「た…ただでさえ、中のモノが…伝って出てきちゃいそうなのに…更にこんな玩具まで使って…私を、いちめて…悦んで…」

さっそく…と、脚を上げ、下着から、その脚を抜き出す。

そして、俺に言っているのか…誰に向けた言葉が、分からないが…。

「変態…です…ね…っっ!!」

その言葉と共に、彼女はその場に崩れ落ちた。



校門前…華さんと一緒に、あんこうチームに合流。

あ、はい、すっごい真つ赤な顔した、全員に一斉に見られました。

あからさまに、様子が変わっている華さん…あの…今振動させていないので、普通だと…ああ、垂れて…。

他の4人も一緒だなあ…両脚を不自然に、もじもじと動かしている…。

分身もスキルを解除して…元に戻し…一気に脳内にへと、分かれていた俺の記憶が雪崩込んできた。

…あ、うん。流石俺。

考えたていた事が、ほぼ一緒。

いやあ…華さんを除いた全員に、ジト目で迎えられています。

後輩の前だと言うのに、それでも言いつけを守っている辺り…順調だ。

……。

はっ…罪悪感すら、沸かねえ…。

「先輩くお待ちしてましたあ」

「あ、うん」

その端、宇津木さんから声をかけられた。

いやあ…貴女の回りの先輩方…凄いことになってるんですよ？

…とか、言つてやったら、全員がどんな反応するんだろう…。

つと…ダメだ。

彼女は、俺に相談があると言っていた。

それにのる以上、邪な事は…夜だな。今は彼女に集中しよう。

「相談って何の相談かな？ 一応、みほ達は知っているんだらう？」

「はい」

…な、なんだ？ 嬉しそうな宇津木さんとは、対照的に、みほと麻子…そして沙織さんが、少々困ったような顔をした。

いや、若干、沙織さんに生気が無いな…。どうした？

「ええと…ですなぁ」

「なんだらう？」

優花里もまだ聞いていないのだらう。そんな3人を、不思議そうに見ていた。

「恋愛相談ですっ!!」

「……………」

えつと…？

「…は？ 恋愛相談？ 俺に？」

「そうですらう」

嬉しそうな笑顔で、まあ…しかしね？

「隆史殿に、それは…無謀としか…」

「…私も、隆史さんに相談する内容では、ないと思うのですが…」

本気で彼女を、心配し始めた二人に対して、何も反論できません…。

そんな二人に対して、宇津木さんが…。

「私…彼氏いたんですけど、一度別れちゃったんですよ」

「!?!」

…と、結構な爆弾発言。

あ、その二人がすっげえ驚いてる。

過去形で話してるけど…うん、俺も少し驚いた…。

「初めは、戦車道初めた時もおく、私のジャケット姿、見たいとか言っ

ていたのに……。でもお、すぐに逃げられちゃったんですう」

「あ……うん」

それしか、言えねえ……。

「でも、最近……また、付き合い始めてえ〜」

「……」

あ、はい。寄りを戻した……と。

「色んな所行ったりいく。それなりに、楽しいのですけどお〜」

「あ……はい」

「実はあ〜、決勝戦とかも、応援に来てくれてえ〜」

それ……俺が、相談に乗る意味あるのだろうか？

というか、相談じゃなくて、段々とノロケに変わってますよ？

ああ……なるほど。

……沙織さんの生気が抜けている理由が判明した。

一年の……後輩に先を越されていた……と、散々コレを聞かされたのか……。

モジモジしながらも、嬉しそうに話してるしね……色んなエピソードとやらを……止めとくか……沙織さんが震えだした……。

「あの……」

「あ、はい」

「……いや、幸せそうなんですが……俺に、それで何を相談する事が？」

「あ……いええ……それがですね？ ……最近……」

「最近？」

「会うと、エッチばかりでえ〜……」

「……」

えつと……。

聞き間違えかな？ さつきまで、散々してたからかなあ〜？

いやあ〜流石に俺、そんな聞き違いするなんて、どうかと思うぞお？

そうだな！ 改めて聞いておこうか。

「……ゴメンな。なんだって？」

「どこか一緒に、遊びに行くとかよりも、お家でえつちばかり迫ってき

てえ〜」

……。

……………。

「き…聞き間違えじゃなかった…」

「んん〜？ どうしたんですかあ〜？」

みほっ！ みほは、この内容で、なんで俺に相談させる事を了承したっ!?

どう扱って良いか、分からなねえよ!!

「えつとお、こんな事、一年の皆に言えませんしい〜」

そら、言えんわな…。

「なら、いつその事、同じ男の子の尾形先輩に、お聞きしようかなあ〜って」

「……………」

「同じ男の子でも、同級生になんて、到底恥ずかしくてえ」

「そ…そりゃそうだろうけど…なぜ、俺…」

「西住先輩と、お付き合いされていますしい、アレだけ他校の…」  
……………。

…ど…どうしたら…。

後輩の女の子…しかも、まだ高一だろ!? 若い子はそうなのかつ!?

いや、みほ達も一年しか年違わないけどな!?

いくらなんでも、赤裸々すぎるだろっ!!

「男の子の事、教えてもらいたくてえ〜。どうしてパンツアージャケットでしたがるのでしょお〜？」

「いや、それは自然な事だよ〜」

《……………》

じゃないっ!!!

あ…。

ああ!!

そうかつ！ この子も、スキルの影響を受けているのか!!

学校中に貼ったから、何かの間違いで…どれだ…どれが掛かった!?

スキル「鑑定」

……あ……やつぱり。

………催眠と……欲望……二つのスキルが掛かっている。

知識欲……？ それとも……。とにかく、そのせいで、そんな質問を俺に投げかけてきてるのか……。

「え……えっと……彼氏は、同級生？」

「そうですね」

よ……よかった。

この子の場合、年上でも余裕で釣ってそう……いや、そうじゃない。

「そのくらいの子は、猿と一緒にだとかあく言われたんですけどお……そうなんですかあ？」

「……」

「あくでもお。此処じゃ……流石にこんな会話続けられませんよねえ」

「そ……そうっすね」

へ……下手な事、言えない……。

ど……どうしたら……。

「流石に……私達じゃ、男の子の事はわからないし……」

「……書記には、ある意味で、うってつけじゃないのか？」

「………はっ……あはは……」

……みほ達もそうだ……。

スキルの効果で、変に都合の良い様に、辻褄を合わせられてる……。

じゃなきや、許す訳がない……。

「じゃっ！ 西住先輩」

「あ、うん」

……そして、宇津木さんは、何時もの様子で、何時もの様に……明るく、はつきりと言った。

「隆史先輩、お借りしますねえ」



アンケート結果報告 + ※ルート IF※ Re :  
西住邸の夜

「あつつつい!!」

暗い部屋の中。

暑いという心のからの思いを吐き出し、ただ単純な感想を叫び飛びながら、思いつきり体を起こす。

：くっそ。漸く寝れたと思ったのに：その暑さのせいで、完全に目が覚めてしまった。

空調：エアコンの代わりに置かれた、型の古い扇風機が、モーター音と共に、ガタガタと音を立てている。

この真夏の熱帯夜。

気休め程度にしかならないであろう扇風機が、熱風を撒き散らし、むしろ暑さによる苛立ちを増長させる。

西住流本家。：その和室の客間。

普段は、客なんぞ泊まる事なんて、ないのだろうか？

掃除は行き届いてはいるが、人が全く利用した事がないというのが、雰囲気でも丸分かりだった。だからだろうか：？ エアコンが無い…。

というか、布団と扇風機しかない。

しかし、叫んだ所で何も現状は変わらない。起こした体の横で、熱風しか送ってきてくれない扇風機に、自然と視線を投げてしまう。

よう相棒：お苛立って悪かった…。ある意味、お前が唯一の生命線だ。

「…はあ…」

くだない事を思いつつ：改めて先程の事を思い出しす。扇風機しかない、この部屋を自ら選んだのは俺自身だ。

この部屋には、エアコンが唯一なのは、家主であるしほさんは、知っていただろうよ。

だから当然、空調の効いた部屋での、宿泊を勧めてくるに決まっ

いる。

…決まっては、いるけどさ…。

しかしっ！ …エアコンある部屋って、家主の部屋。その娘さんの部屋。んでもって、住み込み家政婦みたいな菊代さんの部屋。後は、客間とかリビングとか、しほさんの執務室とか…。

「……………」

ど…どこに泊れと言うんだ…。大きなため息を吐きながら、頭を抱え込んで、先程思った感想を、敢えて！ もう一度！ 心の中で叫ぼう!!

そんなの選択肢なんて、無いじゃないかっ!!

『隆史、私のへ…』『隊長っ!!』『』

『まほちゃん。…流石にどうかと…』

『そうか？ 小さな頃は、良く泊まったではないか』

『…いつ頃の話を、引つ張り出してんだよ。エリリンいるんだよ?』

『むっ…そうだな。残念だが、それならば仕方ない』

エリリンも一緒にお泊りだし…いや、しかしそれは、まほちゃんの部屋でのお泊りに当然だった。

…当然……なったんだよ。

『いや? …むしろ、その方が都合が良いか…? では、エリカ。

さっさと寝てしまおう』

『…』

『…』

『どうした、二人共…さっさと寝るぞ?』

『……尾形ああ…』

『俺にどうしろと!?!』

そんな訳で現在、真夏の夜のクソ暑い夜を満喫している。

しかし…本当に、きつい。

やっと襲ってきてくれた眠気を、この暑さが撃退してくれやがった。余計な事しやがって…。

ただ暑さできつい夜を、何とか我慢出来ていたのだけど…流石にこの大量の汗で気持ち悪く…もう一度、横になる気にもはならなかった。

といっても…特にできる事もないので、ボケーとする事位しかなかった。ぐるつ…と顔を動かしていくと…客室の出入り口で動きが止まった。

その出入り口。そこに設置されている支え棒が目に入る。いや…一応保険で、出入り口の襖…その横に斜めに設置した。

外から開けようとすれば、棒が使えて開かない仕組み。鍵のない和室で唯一できる施錠ですね。

とても原始的で、とても頼りになる棒。

まだ眠れなかった、夜0時頃。この襖が、ガタガタと音を起てたので、コレの活躍を間近で見て、この性能を確認しているので、大丈夫。

『……』

ガタツ…ガタガタツ！

『………チツ！』

ガタガタガタガタツ！！

『………チツ！！』

「……」

外の廊下から、まほちゃんであろう、舌打ちの音が聞こえてきたから、まあ…間違いないだろう。

こえーよ！！

なんで、夜中に来てんの!?

エリリンとの会話で、やたらと早く寝ようと言っていたので…まさかねえ〜とか思って、施錠したらコレだよ…。

…しばらくガタガタと、開かない襖と格闘したのだけど、30分ぐらいしたら帰っていった…と思われる。

「……」

怖い。

こんな夜更けに…本当に、何しに来たのだろうか…。

みほとこの事で、いきなりあの行動だったのだから…何を俺にする気だったんだろう…か？

……。

やめよう。深く考えるのは。

エリリンいるのに変な事は、しない……よな？

よ…よし！ 気持ちを切り替えよう。

流星に汗をかきすぎた為か、異常に喉が渴いている。舌と口内が引っ付く位で、気持ちが悪いし…取り敢えず水分が欲しい。…というか、何か飲まないと死ぬ。

喉の渴きというよりかは、下手すると夜の熱中症…もしくは、マジで脱水症状にでもなりそうだ。

水道水で構わないから、兎に角、水を飲みたい。そうだな…台所にも行くか…夜中に人様の家を彷徨くのもどうかと思うが、まあ…水くらいなら。

重く…汗で気持ち悪くなっている体で、立ち上がると、1階にある台所へと向かう為に…施錠用の支え棒に手を伸ばした。

「……」

ふと、頭を不安が過ぎり…その手が止まった。

い…いないよな？ 廊下に…。

流星にホラーだよな？

枕元に置いておいた携帯で、時間を確認すると、そろそろ夜中の2時を回る、丑三つ時だった。

うん…いないよな？ 流星にいないよな？

恐る恐る…ゆつくりと襖を開けて、頭だけを出して確認する。…某姉様は…よし、いないっ!! そうだよな！ 流星にいないよな!!

「…はあ」

…安心した所で、ようやく体を廊下に出すことができた。

真っ暗な廊下に立っているというのに、なんだこの変な安堵感。はっはー。

そうだよな、寝るよな。普通………寝てるよね？

ダメだ…考えてしまうと、更なる別の不安な要素が、次々と浮かん

でくる。ならば行動だ。

ギシツ…と、音を出しながら、ゆつくりと暗い廊下に脚を出す。

…：軽くお化け屋敷を散策しているかの気分になるのは…なぜだろう？ 足首を某姉さまにいきなり掴まれたりしないよな？

…：めちやくちや失礼な感想だろうけど、あの俺に一瞬見せた、なんと言ったら良いだろう…：そうだな。

肉食獣が獲物を前にしたかの様な、光った瞳が…：頭の中から離れない。

みほと付き合いだした…：その、報告をした直後の彼女まで、連想して思い出してしまった…。

「……」

ゆつくりと進んで行くと、漸く階段へと差し掛かった。

音を意識し、ゆつくりと下りていく。

そうだな…：時間も時間だ。

更には、人様のお宅だ。

昔は、よくお泊りしたものだから、勝手知ったる他人の家。

間取りも大体は、把握しているからな。特に暗くとも問題ない。：

まほちゃんの事もあるが、流星に夜中だし、寝ているその人様達を起さない様に、気をつけなければと、自然と息を殺す。

そして、一番奥にある台所目指して、暗い廊下をまたゆつくりと歩き出した。

▽

…：うん？

1階の真つ暗な廊下。その先の部屋の出入り口…：だろうな。ドアの間から漏れている、細くなっている電気の光が見えた。

ドア…：といっても、襖だけだな。しかし、なんだ？ 消し忘れか？

あの部屋は、確か…しほさんの、書斎だったか？ いや…執務室だったな。

完全な仕事部屋。戦車道関連の書類、書籍などで埋め尽くされた、少しモダンな雰囲気のある部屋だった気がする。

そんな西住流家元としての部屋だから、俺もそんなに入った事は無い。

…小さい頃は、無断で入ると怒られる場所だった。

まあ…大体は、みほがイタズラの為に入ろうとして、それを阻止しようとして、俺とまほちゃん、みほを追いかけたの入室がデIFOオルトだったけどな…。

いやマジで、あの頃のみほが、よくぞ彼処まで落ち着いた性格になつてくれたと、実感できる思い出の部屋だよな…。

ああ…中学の時にみほが、間違えて酒を飲んでしまった事件を思い出してしまった…。

みほ…飲むと、復活するんだよな…あの頃の性格が…。ヤンチャみぽりんが…

はっはー！ 流石のしほさんも、みほがあ頃みたくなるとは思わなかったようだね！ …中学生になってから…子供の頃のように、仕事部屋の中を荒らし回るとは、夢にも思わなかっただろうて。

戦車道の戦略の為に置かれた、でっかい模型がボコに埋め尽くされ…書類が全て紙吹雪となり飛び散り…書籍は全て表カバーを変えられてた。…いやあ…地味にイラつくんだよな…アレ。

後はもう…バッキバキに割られたアレとか…まあ…うん。凄かった。

いやあ…青くなって、茫然自失で立ち竦むしほさんを見たのは、あれが最初で最後だな。

だから声を大にして、俺は言いたい。

俺が酒飲むと、被害者しか出ないから気を付けろと言う割に、一番飲んじやダメなのは、みぽりんですよ？

「……………」

ま…まあいいや。そもそも、真つ暗な廊下で、俺は何を言っている

んだ…。

ふむ…。電気の消し忘れくらいなら、少し入っても、大丈夫だろう。  
…消しておいてやる。

…ん。

それでも…と一応。無断で入る事に変な罪悪感を覚える。

執務室の襖前に立つと、念の為に…と、その襖を軽くノックしてみようかね。

夜中だし、本当に軽く…まあ、流石に…

「…はあい？」

…あら、返事が返ってきた。

「あ、すいません。まだ起きてたんですね」

そして、反射的に俺も返事をしてしまった。

「…仕事…だったか？」 襖の向こう側から、はっきりとした、しほさんの声が返ってきた。

ああ、そういうやエリリンに睨まれ続けた夕飯時に、まだ仕事が残っていると言っていたな。

それで今まで仕事を…って、少し変だな…ちよつとくぐもつた…というか、おっとりとした返事だった。

「隆史君…？ どうしましたあ？」

……。

ほら…ちよつと、変だ。

「どうぞお…」

黙って聞いていたら、入室の許可が降りた。

特に何も言っていないのだけど…まあいいか。入って良いなら、見て確認すれば…。

「あ…はい。では、失礼します」

襖に手を掛け、ゆつくりとスライドをして行くと…エアコンの涼しい空気と、室内の明かりが廊下に広がっていく。

「まだ起きてたんですね、しほさん!？」

襖を開けた先に…家主である、しほさんが見えた。

それはまだ、昼間の時の格好。そのままの出で立ち。

更には、この部屋の違和感が、ものすごい。

襖を閉めて、振り向き：しつかりと改めてその執務室を見渡すと、はつきりとその原因は明らかだった。

畳が広がる、その奥。みほが昔、ボコまみれにした戦車道の模型：その更に奥には仕事机…。

「……」

この人が、クソ真面目なのを知っているからだろうか。

その仕事机に、普段なら絶対に無いであろう物があるから、そびえ立っているのが余計に目立つ。

「どお…しました？ 隆史君？」

椅子から立ち上がり、フラツ…と、少々おぼつかない足取りで、すぐにその仕事机へと、寄りかかった。

スーツジャケットを脱いでいるしほさん。彼女の真つ白いワイシャツ姿は、この明かりの下で良く目立つ。

顔が熱っぽい様に少し赤く：ワイシャツ胸元が、第3ボタンまで開いているから、普段なら絶対に見せないその谷間ががが…。

夜中にソレは、さすがに刺激が強い…。即座に視線をズラすと：あ。

よしっ!! 現状を完全に把握したっ!!

「水飲みに台所に向かっていている最中に！ 部屋の光が見えまして！ 消し忘れかと思ひ、寄った次第です!! では、失礼しますねっ!!」

そうそう。絶対に仕事机に無いであろう物。…多種多様の…：空になった酒瓶が、最低でも4本は目に入った!!

おかしいつ！

少なくとも、この部屋は仕事専用。酒なんて、間違っても持ち込む人じゃなかったはず!!

返事というか、言動が若干おかしかったのは、これのせいかつ!! すぐに例の食事会の状態を思い出したああ…。

この人酔うとやべえ…：というのを主に!!

よって、撤退っ!! 早口で理由を述べ、出て行く意思を伝えるっ!! ……と。



「隆史君…なんて格好をしているので…つく。…すか？」

…スルーされた。

俺の格好。まあ…客服というか、旅館にある様な、浴衣が用意された為に貸して頂いた。それに暑かった為だろう。無意識にだらしない、その浴衣は裸けていた様だ。

それを注意されたのであろうけど…呂律が少し回っていない…。

「いや…暑かったので自然と…」

はだけた衣服を正しながら、言い訳を時間稼ぎに、その部屋の惨状を確認する為に、今しがた逸らした目を動かしていた。

いや、主にその仕事机を…。

…あの。

日本酒の空瓶が、4本程寝転んでるんですけど？ あれえ？ ウィスキーなんて、この人飲むんだア…。

いやあ…仕事机の下で…更に他のが、2本程空になってますねえ。

「お酒…好きなんですよお」

…やっぱい。完全に出来上がってる。

「少し…みつともない所を見せて…しみやいましたかねえ？」

噛んだっ!! レアしほさんだっ!!

つと、一瞬…現実から逃げてしまった…。

みつともない…そう言いつつも、悪びれる事もなく、手に持った琥珀色の液体が入ったショットグラスを仰いでいるのは何故でしょうか？

一気に飲み干すと、カコンと机に叩きつけた…って、マジでどうしたんだろ…。完全にヤケ酒って感じですよ？

あの…空になったショットグラスに、また琥珀色の液体を流し込もうとしないで…ああ…。

顔が項垂れた…と、思った瞬間…新たに注いだ、そのグラスの液体を、また一気に飲み干した…。

めちやくちや無理な飲み方…というか、大丈夫か？

「…はっ。今日はあく…良い事があった…良い日だと思ったのですけどねえ」

あ、やばっ。

直感でわかった…これは愚痴が始まる。

しかし、こんな状態。しかもすでに話し始めた手前…俺は逃げる機会をに失った……。

「…まあ？ 私の水着撮影の件は置いてえ？ 隆史君があ…みほとお付き合いを、始めた…あ。それは、それは、とても、とても…喜ばしい事です」

「ありがとうございま…す？」

…言動が怪しすぎる…。

「ふう…。隆史君はあ、まほを選ぶと…っ！ ばかり…思っていたのですがあ…」

無理だ。逃げられねえ。うん…無理無理。

次々と酒を煽る彼女を見て…「大魔王からは逃げられない」と、…なんか、そんな言葉思い出した…。

「え…ええ。良い事があった…本当にい…そう思ったのです…けどね…本当に…良い…っ！」

あ、確定だ。完全に愚痴モード入った。

だって、机にショットグラス叩きつけて、前屈みになって震えてるし…はだけたワイシャツから、普段見えない谷間が重力に引かれているのが、見える…。

その端から、黒い下着が、チラツチラ見えるのが…つとまずいっ！ 流石にこんな状態の女性のあられのない姿を凝視するのは、卑怯だな。うん！ 正々堂々もないけどっ!!

……。

現実を見よう…。

あ…こりや、下手すると朝までコースだあ。しほさんが、場末の俺がバイトしていた店にいた、酔っ払いみたいになるなんてなあ…。この酔い方は…長いぞ。そして酷いぞお…絡み酒っばいなあ…。

手で顔元をパタパタ仰ぎ…そしてまたショットグラスを仰ぐ…。どうしたら…。

「…まあ？　一応？　キャバクラ通いの夫にも？　みほの事は、連絡してやろうと思っただんですよ？」

…黙ってハイハイ聞くしかねえな。

とんでもねえ事言っていたけど、しほさんに言った時点で、常夫さんにも報告は行くだろうと、覚悟していたから別にいいけど。

いい加減さ…キャバ通いくらいは、許してあげれば？　とは思っていた。でも今、それを口に出したら…確実に死ぬだろうけど。

「でも!!　ですねぇ!!」

「うわー!」

ダンダンと音を立てながら、畳の上を地団駄を踏むかの様に、近づいて来た!?

足元が覚束無いから、見えて不安になるし、転んでもまずいので、狼狽えた様に手を前に出してしまう。

それでも、強引に近づいて来る彼女に対して、一気に壁際に追い詰められる…。

よって…。

「隆史くんっ!!」

「はいっ!」

俺の正面にまで来ると、俺の顔を見上げながらも両肩を掴まれた…つと…うん。酒臭え。

うっわ…完全に目が座ってる…。どれだけ酒を飲んでいたら知らんが…目が充血していた。

「今日っ!!　それで、そしてっ!!　電話したらっ!!　ですな…」

「はいはい…なんですか？　もう…」

あ…あ…顔も真っ赤になっちゃって…まあ…このレアしほさんには、余り遭遇したくないなあ…。

「う…う…隆史君は、私の話もちゃんと聞いてくれるんですね…」

…あかん。だめだこりゃ。

多分、しほさん（泥酔）の話を、真正面から聞いてやれるのって…千代さんと菊代さんくらいしかいないんじゃないか？

…話の途中でも、ちよこちよこ話が脱線するし…はあ…。

こりや…本気で諦めるか？ …今日は、本当に寝れんかもなあ…。  
「またっ！ またですよ!? 私の着信を中途半端に取った様でしてえ  
…常夫さんの会話が、聞こえてきたんです…」  
「はあ…はい」

旦那の事を、俺に対して名前と呼ぶとか…過去に一度もないなあ…。

大体、夫とか旦那とかだし…。千代さんとかに喋りかけているみたいに言うなあ…ああ、完全に俺を高校生って…子供っていうの、忘れてないか？

「多分…同僚の方あ…と、でしょうかあ？ 変な音楽が、聞こえてくるお店にい…いたようなんですけど…」

変な音楽…？

またキャバか？

一度、どんな店かと教えて上げた方が良いだろうか？ 特段、露骨に如何わしい店じゃありませんよと…。

しかしそれは、諸刃の刃…。なぜソレを俺が知っているかと尋ねられたら、何も言えない…。

まあ？ それでも、何とかせな…あ 「風呂屋ってなんですか？」

「……………」

…はい？

「えっと…なんて？」

「風呂屋です」

「……………」

ある意味で、飛んでもない単語が、しほさんの口から、飛び出した。えっ…と。

……。

……………。

常夫おおお!!!

何やってんだあの男!!!

「本番って、なんですかああ!?!」

いかん…これはまずい…。

「せ…銭湯の事じゃ…?」

「銭湯!? はっ! 調べましたよ! 調べましたとも!! 如何わしい所という事くらい、疎い私でも、即座に察しがつきますよ!!」

ダメダ…。

フオローできん…。

「はっ…俗に言う、「ソーブランド」とか言う、風俗店の事ですよね!?!」

「」  
本来なら絶対に、しほさんの口から出ないであろう、施設名が飛び出しました…。

「お、俺に確認取らんでくださいよっ!!」

「同じ、男でしょうっ!! いかがわしいっ!!」

「勘弁してください!!」

ほぼ単身赴任状態だし…まあ同じ男として…? 理解できない訳ではない…。

だが、そこを我慢するのは妻帯者として、当然の甲斐性だろうに…マジで何やってんだ、あの人…。

最悪…商売女を相手にする位なら? …多めに見てあげたら?

…とは、この状態のしほさんになんて、冗談でも言えない…最悪だ…。

なんで俺の胸ぐら両手で掴んだままで、いるんでしようか?

肩を抱く…とか、した方が良いの…か? いやいや、でも…。

「…つねえおおお…本番できる店見つけたとかあ…何を嬉しそうにいい…」

あ…しほさんの手が震えだした。

ヤメテクダサイ、シンデシマイマス。

やあ…。完全に、人によつては浮気だね…。もはや、常夫さんに対してのフォロワーが、完全にできませんね…。

ん？ あれ？ それ以上、何もしないで俯いてしまった。

気が付くと、しほさんが大人しい…。俺の胸ぐら…というか、着物の首元を両手で掴み、額を俺の胸に当てていた…。

「…しほさん？」

これ…：八つ当たりで、いきなり背負投げとか…：されないよな？

…：あれ…？

特に何もしないで、そのままの格好から動かない…。

立ったまま、寝ちやつたか？

「…」

「…」

無言の時間が、しばらく続いた…。

旦那さんの浮気を知って、特に泣く訳でもなく…：小さく、鼻で呼吸をする音が繰り返し聞こえてくる。

顔を覗き込む訳にもいかないので、このままの体制で、文字通り胸を貸してやるしかなかった…：と、言っても流石に深夜だ。何時までもこのままと言う訳にはいかない。

それに、そろそろしほさんも落ち着いただろう。もう終わりだと知らせる為に…：しほさんの両肩に手を置き…：軽く、優しく…：叩いてみる。

はあ…：相変わらずというか…：戦車道以外の事は、不器用な人だな…。

まあ、今回はソレ以前の問題かあ…：しかつし…。

年上なのだが…：年下の人。

不器用すぎて、心配になってしまう人…。

「…」

「あの…何と言って良いか、分かりませんが…少しは落ち着きました？」

…小さく、声をかけてみる。

「……」

「あの…しほさん？」

彼女の体重が、更に俺の体に押し掛かった…あの、壁際にいたから、その壁に俺を体ごと押し付ける様に…。

あれ？ 頬を俺の胸になんでつけたんですか？

…ん？

なんで腰に手を回したんですか？

んん!?

「男性の…汗…というのも、あるのでしょうか？ 男の匂いと言  
うものを…久し振りに、嗅いだ気がします…」

「…は？」

なんか、やばい事言い出した!!

しほさんを見下ろすと…艶のある黒い髪が…上下左右にゆっくりと動いていた…というか、くすぐったいっ!

頬を胸板に擦りつける感触が…うっわ…本当に何してんの、この人  
!

「隆史君は、体付きも良いので…もう、普通に成人男性ですね…」

「ちよっ!?! いきなり何言っているんですか!?! というか、何をして  
るんですか!?!」

まずい。

これはダメだ。

あれだ。あの食事会の時の、最終的にトチ狂った、しほさんと同じ  
感じがする。

スーナーなんか聞こえる!!

反射的に下を向き、しほさんの顔を確認してしまおうとした。

…それが、まずかった。

いつのまにか、顔を上げ俺の顔を見上げる形になっていた。

目は…少し潤んでいた…が。ハイライトさんが蒸発でもしたのか、不在でした。

俺と目が合うと、すぐに顔を伏せ…また頬を胸板に擦りつけ始めた…。

時折、徐々に荒くなる呼吸を繰り返し、いきなり止まったと思えば、唾を飲み込む様な喉を鳴らす音が聞こえる。

それに、胸元に押し付けられている頬から、しほさんの体温が明らかに上がっている事から…徐々に現状の俺の立ち位置を把握していく…。

旦那さんが、浮気した直後…この状態…先程のセリフ…。アルコールが入り、自暴自棄になるには、十分な理由が先程用意された。

「……」

洒落にならない。

い…一旦、距離を離そう。この抱きしめられている様な状態……。まずこれからだ。

しほさんの肩に手を置き、そのまま押す為に、力を込めた瞬間…彼女の両腕が、触るなどと言わん秤りに、両腕の内側から外側へと払い出された。

すつごい早技…本当にもう技だった。

そのまま…宙に浮いた俺の腕の内側を添うように、腕を伸ばし…俺の頭の後ろに回して…頭を…首を…抱きしめるように…首に腕を回してきた。

「ちよっ…しほさんっ!?!」

首に彼女の体重が掛かる。引き寄せられながらも、何とか抵抗をするが…しほさんも爪先を伸ばし…俺の顔の目の前…。

「ぬむい!?!」

引き寄せられた瞬間、唇に暖い感触…つて!! 思いっきり唇を合わせてええ1p!?

「んう!?!」

それだけでは無く…口の中に異物が侵入してきた。



生暖かく…酒の味。

俺を逃がさない為に…だろうか？ 舌を舌で、縛る様に…口内で動き回る。

しほさんの口からは、ニチャニチャとした音と、少し甘いと感じる…吐息が聞こえ始め…俺の口の中を貪る様に動き始める。

そう…貪る。

その表現が正しい。

動けないで硬直している、俺の口の中を、ヌルヌルと彼女の舌が這いずり回る。

すでに聞こえるのは、彼女が俺の口と舌を齧る音だけ。

両腕で、俺の頭が離れない様に、乱暴に舌を絡ませる。

「んっ…はっ…んちゅっ…」

……。

…正直、気持ちはいい。

いいのだけど…混乱した脳内では、その感触すら、混乱を更に加速する行為の他ならなかった…。

取り敢えず、強引に体を引き剥がそうとも思ったが…疲れたのか、満足したのか。…行動を移す前に、俺の口から離れた。

ゆっくりと、体…いや、顔を離すその口からは、俺の口まで繋がる、唾液の糸を作り出していた。

しかしソレは、すぐにそれは切れてしまい、彼女の口元から、胸元まで落ちた為に、細い光る線を引き…。

「ぐっ…」

正直官能的で、ちよつと色々揺らいでしまったのだけど、理性を保持って対応しよう。

くっそ…顔が暑い。

目に光が無い。

比喩なんて簡単だけど、この目はダメだ…。

…彼女は常夫さんの行動で、今までの事も含め、完全に参ってしまったのだらう。じゃなきや…分別ある大人が、自分の娘と同じ年の男…更にはその彼氏…男に、こんな事はするとは思えない。

しほさんならば、余計に…。しかし、普段真面目な人間が、ある事が切っ掛けとなり、どうにかなってしまうのは…過去に…：遙か過去に見た事はある。

その場合…：反動が凄まじい…。

「…なぜでしょう？」

…と、小さく呟きながら、また首に腕を回してくる。

前髪隠れた目が見えない。…その為、彼女の近づく唇が非常に目立ち、思わず見入ってしまう。

普段…化粧気が余り無いしほさんの唇。

…唾液に塗れ、艶と光沢が…妙に艶かしい化粧となって強く強調してくる唇。

一緒に視界に映る、細く…白い首。

根元へと続き…更には俺の胸に押しつぶして来る様に膨らむ胸…。

「…もう、疲れました…もう…。」

…しほさんの様な立場のある女性が、普段どれほどの重圧にあるかは知らない。

それらの全て…張り詰めていた気持ち。伸びきってしまったてであろう…彼女の中の大事な何か…切れている…のか？

…熱の籠った吐息と共に…吐き出された言葉。

それは、普段の彼女なら絶対に言わない言葉。

全てを放棄する言葉。…挫折の言葉。

「ドウデモイイ」

もう一度、今度はゆっくりと…唇を合わせてくる…。

唇で唇を噛み、小さく下唇を舌先でなぞる…。

う…動けない…。

小さくキスを繰り返しながら…何度か口を離す。

離しながらも、彼女の口から呟かれる言葉が、俺の動きを縛って止める。

西住の為に…。家族の為に…。がんばっていた。我慢していた。

誰も彼も、娘も、夫も。  
誰も分かってくれない。

…と、単純な不満。誰しもが言う、身勝手な不満。  
何に対してかは分からないが、子供の様な不満を淡々と…しほさん  
が…あの彼女が吐き出している。

言えば言うほど、口の動きが早くなり。  
言えば言うほど、口を吸う行為が徐々に強まる。  
最後には、唇を噛み、俯き…嘆く。

「…挙句…裏切られた」

確信した…。

何度も見た…いや、見てきた。  
自身を汚したい。自分の欲を満たしたい。…その行為を正当化した  
い。

逃避を性欲で誤魔化すのは、よくある行動…要は…。  
「んぐっ…し…しほさん？」

…彼女の心が、折れた。

痛いほどに口を合わせ、口内を舌で貪る。  
「はっ…あ…はあ…んっ！ はっ…んっ！」

怨嗟の言葉を呟く為に吐き出していた息を、熱い吐息に変えて、何  
度も繰り返していた。  
息継ぎの為に繰り返される、その熱い吐息。しほさんは考えるのを  
やめてしまったのだろうか。

ま…まずい。  
まだ理性はある。理性は保っている。  
保っているのだけ…。

男を求め、貪る彼女。規律を主にしている彼女が、ここまで豹変し  
てしまった

手はすでに首に無く、浴衣の内側へと腕を滑り込ませ、俺の体を撫で回していた。

なめらかに滑るその手の感触と、あの豊満な胸を押し付けられながらも、更には…舌を……。

口から首へ。…キスをしながら、胸を摩る行為を、何度も何度も繰り返す…。

…だから、まずい。

完全にアレが…起き上がってしまっている。

浴衣の下…履いている下着が押し込め、痛いくらいに感じてしまう程に…。

それにしほさんも気がついたのだろうか…。

多分…見れば在り在りと、その存在を型どつてしまう程に勃起したモノを、下着の上から、ゆっくりと…上へ下へと優しく摩り始めた…。細い指が、陰茎の形をなぞる様に擦る…。

「…はっ…はっ…」

下着越したが、たまに引つかかるしほさんの指先に体が反応してしまい…何度か体を震わせる。

その俺の反応に興味が移ったのか…今では…たまに見える、彼女の口元が…笑っていた。

「…本当に…隆史君は、私を…こんな私を、女として見てくれるのですねえ…」

「むっ…昔から！…そう言ってるじゃないですか…だから…」

楽しそうに話すしほさんの口が、もう一度胸元へ…。

「ちよ!? しほさんっ!?!」

「んちゅ…なんでしよう?」

「い…いや…何を…」

ふ…普通の女性は、そういう事しないと思うのですが…とは、言えない…。

今度は、胸板の横…乳首に口を付け…舌先で舐め始めた…。

舌先からの刺激で、少し腰が引けてしまう…。

「たまに…夫に頼まりました…」

常夫っ!!

「…絶対にしませんでしたか」

……。

だろうね…。

吐き捨てる様に言いましたしね…。

確かに、しほさん…そういうお願いは、聞いてくれそうにないしなあ。

いや、お陰で少し冷静になれた…。

突き放す事は出来なくとも、今ならやんわり中断できそうだ。

「…もう、いいいでしょっつ。」

「……」

何を言いたいかは、すぐに分かるだろう。俺の言葉に対して、何も言わない。

これ以上は、洒落になら…いや、すでにまずいんだけど、正直に白状してしまえば、理性が限界だ…。

押え付けられていた反動というモノを、今現在身を持って経験しているからこそ…だ。

ただでさえ、歪みに歪んだ、俺の性欲とやらが変に暴走してしまうと…どうなるか分からん。

だから此処で、もう…終わりだ。

「しほさん…流石にこれ以上は…みほに「ああ…そうですね…」

みほの名前を出したからか、俺の言葉を遮った。

バツが悪そうに遮った言葉からは、何も感じない。ただ「そうですね」と言ってくれた。

ならば…と、思い止まってくれそうだと、少し安堵の……

「っっ!?!」

違う…。

言葉の意味が違うのを、すぐに確信させられた。

…こ…これは、本気でまずい。

しほさんが、顔を傾け…舌を出し、犬のように…胸の表面を舐め取る様に舌を這わせた…。

顔半分。前髪の間から、はっきりと見えた目と…顔が表情。完全に女の顔になっている。

見た瞬間、ゾクツ…とした感覚が走った。

熱の帯びた目と…口と、表情。

俺の胸板に唾液の線を引く姿から、俺を完全に、ただの男として見てると確信付けた。

娘の彼氏、娘達の幼馴染。

そんな言葉、関係性は完全に飛んでしまっている。

息が甘い。甘い音にしか聞こえない…。

「そうです…思い出しました」

思い出した…。何…を？

普段の彼女から、想像すら不可能な位の…行動が、彼女を「一人の女」としての認識に脳内を塗り替えられていく気分だ。

…ダメだ…これは無理だ。

真一文字に結ばれた、普段の口。

それが今は、だらしなく開けられ、俺を舐め尽くそうとしている。

見るもの全てを畏怖させてしまう程の、普段の眼。

それが今は、熱を帯び、潤ませながら、俺を求めてくる。

昔から見ている…見惚れていた。

そんな彼女が、前面に…俺に対して押し出し、見せつけてくる…「女としての自分」

俺は今、冷静を保っている…。保っていた。保っていた…つもりだった。

だが、気がついてしまった。

俺も動かないで、次の行動に期待している自分自身に。

「んう…これも夫には、何度か…頼まりましたね…」

すでに瓦解している理性に。

気がついた頃には、時既に遅く…しほさんが、俺の下着に手を掛け、下ろそうとしている。

「滅多にしませんでしたが…」

口を離し…顔を離し…俺の足元に跪く様に腰を落とし、正座をする

様に両膝を畳に付けた彼女。

その姿に：次の行動を、期待している自分がいる。  
だから：もう、無理だ。

▽▽▽

俺の陰茎が、すでに顔を出され、聳え立っている。

規格外のその大きさ：。体に比例したソレを見て：一瞬、しほさんの、ゴクリと息を飲む音が聞こえた。

それはそうだろう：小さな子供の腕程のサイズだ。多少は誇張は有るが、一般のソレとは規格外すぎるからな。

海外A Vの男性男優のソレと同じ様な：しかし、膨張率は日本人。重量感も漂っているだろう。

「……………え？」

しほさんも、これを見て冷静になれたのだろうか？ 熱っぽく、赤くなっていた顔が、少し青色を指した気がした。

その顔色見て、もうダメだと思った自制心が少し回復した。

そうだ：これで躊躇し：臆してやめてくれれば良し。俺もまだ戻れる：しかし、これ以上続けるのならば：。

多分：。

「…はっ…あ……………」

そんな淡い期待：いや、言い訳。

それも、ただ虚しく感じた：。

見下ろすしほさんが、口を広げ：舌を伸ばした：。その姿を見ても、もう何も言わない。

下着を下ろされた時も、陰茎を取り出された時も、俺はただ黙って見ていただけだ。

「……………あ……………」

小さな声と共に、生暖かく、柔らかい感触をすぐに感じた。

久しぶりの感覚が、快感が：脳髓へと伝わってきた。

：下から支える様に舌を添え、一気に口内へと、ソレを飲み込む。全体が暖かい人肌に包まれる感覚と一緒に、しほさんの頭が：俺の股間の中へと沈んでいく。

少し苦しいのか：舌が口内の空いたスペースを探るように動く。裏筋を滑らかに通る。

ヂュツ：と、音が漏れ：そのまま彼女の頭が、舌の感触と一緒に：ゆっくりと後ろへと引かれ：前にとすぐに動き始めた。

「っ！」

思わず、声が出てしまった。

舌を筋から筋。隙間から隙間まで、舌全体を使い、小刻みに、しかし時には大きく動かした。

：彼女もそんなに経験は無いのだろう。

それは、テクニクと呼ばれる様なモノではなく、ただ知識として知っている：程度の動きだった。

―が。そんな事はどうでもいい。

俺は既に、彼女が口での奉仕：という物を開始した直後に、この状況に酔っていた。

そう酔ってしまった。

：動けない。

こんな奉仕行為。止めようと思えばすぐに、止められる。

押し寄せる刺激に、腰が引け：気がつけば、しほさんの頭にへと手を添えていた。

：言い訳すら考えなくなっていた。

「…んぐっ…」

喉奥にまで飲み込まれた。彼女の後頭部を手で押さえ、動かない様に固定すると、少し苦しそうに：だが応える様に舌がヌルヌルと動き回る。

少しざらついた様な感覚が、心地よい…。

「……」

：快樂というモノが、ここまで自制を殺すとは。



「…んっ…んっ…んっ！」

しほさんも多少、慣れてきたのだろう。漏れる少し苦しそうな声からクチュクチュと、唾液が混じる音に変わり…。

「んっ…ぶっ…ぢゅぶ……ぢゅぶ…ぶ…」

…啜る音からジュポ、ジュポと小さくしゃぶる音に変化し、そのままリズムカルに、前後運動が激しくなってきた。

舌と一緒に絡めながら動かされる快樂の為に、背中が曲がり…彼女の頭を体で包み込むように前かがみになってしまう。

すぐに背筋を伸ばし、腰を突き出す。

成されるがままになってしまっている現状だが…彼女を止めない。止められない。

この感触を味わっていたいという感情と、見ていたいという欲が大きくなり…思考を支配する。

「…ンッ！…ンンッッ!!」

自分でも分かる。意識が亀頭に集中しはじめた。

…早い。自分でも笑ってしまう程に、早い限界が訪れた。

しかし、ソレも仕方がないだろう？

俺の股の下。

この世で、生まれて初めて意識した女性。初恋、初恋とからかわれる事も度々有るが、敢えて否定はしなかった。

そんな…その女性が、一心不乱に俺を…俺、自身を貪っている。

…下品にな音まで立てて…貪っているしほさん。亀頭が少し膨張したのが、感覚的に分かったのだろうか？

「……」

確認する様に…。

口いっぱい陰茎を咥え込み、潤み熱に浮かされた瞳で…上目使いで俺の様子を確認してきた。

……。

それは、ずるいでしょうが…。

「んっっ!!…んっっ!!」

彼女の後頭部を抑えていた手の力を強める。

大きく引き出された頭を、少し強引に押し込めるように促すと、それに応えるように前にまた、飲み込む。

ガポガポと音が聞こえるが、気持ち良さど心地良さで、更に動きを早めさせる。

：無意識だったのだろうか、気が付けば関係ない。  
今更、止められない。

俺自身、腰を彼女の中へと動かし始めていた。

「んうっ！ んぐっ！ んぐっ！」

：と、苦しそうな声を漏らす、彼女も動きを止めないからと、更に早める。

……。

……………。

「んぶっ!?!」

今度は遠慮なく：腰を引き、前かがみになってしまい：彼女の頭を両手で掴み抱え込む。

口から吐かれる息が激しい…。

肩を動かし、腰が小さく何度も跳ねる。

ドクドクと脈を打つ陰茎。

そのまま彼女の口内に、戸惑いと躊躇。罪悪感も何もかも。欲と一緒に吐き出した。

「ふっ…うっ！ う…んう…」

まだ出ている…。

随分と長い射精。

「…はっ…はっ…くっ」

息を乱し：掴んでいた彼女の頭をゆつくりと、陰茎から引き出す。根元から外の冷気を感じながら、彼女が離れていく…。

「あー…あー…」

うまく呼吸が、できないみたいだ。

口を大きく開け：俺の顔を見上げるしほさんは、苦しそうな大きな息を繰り返していた。

それはそうだろう。

抜き出され…開放感もあるだろう彼女の開かれっぱなしの口からは、その陰茎から伝う、唾液と精液の粘着質な糸が何本も繋がっている。

そしてその口内は、唾液が混じった真っ白い液体で満たされている…。

「ふっ…はっ…はっ…ふっ…」

呼吸を繰り返す振動で、口内からこぼれ落ち…彼女の首から胸元へ伝い…ボトボトと質量がある音を出しながらも、畳と彼女の股にも落ちていく。

まだ残っている様な感覚がしたので、少し搾り出すように陰茎を扱くと、残された精液が飛び出し、開かれた口…彼女の顔を汚した。

「は…は…」

息が荒れる。

興奮と色々な気持ちが入り混じった、特殊な感情。

「……」

言葉にできない。

口内を精液で満たし…顎を上げ、そんな姿を見せつけるかの様に俺に顔を向けている。

見入ってしまう。精液に顔中汚れた、彼女の姿…顔。

熱い。…足元から心臓を駆け抜け、脳まで一気に熱くなってしまう。舌を動かし始めた。

お陰で更に、首筋をつたい、胸の谷間へと丸みを帯びた線を引きながら…口から体液が溢れてくる。

「…んっ…」

突然、口を閉じた。

閉じた口も…唾液と精液に塗れて、唇が官能的な光を帯びている。見入る…黙って、見入ってしまうしかない。

「……ん…ぐっ…んっ…」

!?

「…は…あ…」

突然の行動…。

一回顎を上げ、すぐに下げた。そして聞こえた喉を鳴らした音…。  
下から覗き込む様に、コチラを見上げて…。

「…この方が、男性は嬉しいのでしょうか？」

「…え…つと？」

た…淡々と、言い放った…。

そのまましほさんは、身体を重そうに、ゆっくりと立ち上がり…汚れた顔のまま、スーツのパンツを脱ぎ始めた。

布の擦れる音がすると…下だけ下着姿になってしまった。

黒い…レースの布地が…ワイシャツと太股の間に見える…。

「はあ…はあ…はっ…夫もそうでした…」

吐き捨てる様に言ったそのセリフ。そういえば先程から、常夫さんを指す言葉は、夫という言葉に変わっていた。

「口に出されるのも…飲み込むのも…絶対に嫌でしたが…ね」

いや…それ以前に、どこか比較…当て付けの様な事を、何度も言っている。

情緒も何もない…作業の様に、俺の前だとか…もう何も気にする事もなく、すぐに脱いだモノ脱いだスーツパンツを、適当に放り投げると…真っ直ぐにこちらに視線を向けた。

黒の下着…姿…。上はワイシャツ一枚を着てはいるが、体液に濡れ汚れたソレは、彼女の肌色を薄く透けさせている。

ふらついた脚のまま、俺に近づき…強く肩に掛かる衣服を掴み、引っぱりながら後退した。

「はあ…はあ……んな歳で、男の味を知るなんて…」

ハア…ハア…と、息を切らしながら呟く。

仕事をする為であろう、机に腰を付け、体重を預けた。

そのまま誘う様に、熱っぽい顔を上げ…口の端を舐めりながら、舌を覗かせた。

「…わ…悪くない…ですね…」

また、ゾクツ…と悪寒にも似た何かが背中を走る。

男の味…とか、常夫さんの事とか…俺に…いや、普通絶対に言わな

い事を…はつきりと言う彼女がしなだれ掛かってきた。

そのまま俺の首に腕を回し…誘導するかの様に、俺の体を引く。唇を合わせ、口を吸う……。首に回った腕を、自身の服を脱ぐ行為へと変える…。

ワイシャツを投げ捨て、ブラジャーまでも脱ぎ捨て…。

「はっあ…あ…」

その何時も…何時も使用している、仕事机にへと背中を預け、仰向けになった。

……。

そして、日常的に使用し、現実を感じさせる、その仕事机で…俺を誘う。

▽▽▽

「…んっ」

抱きしめる様に、口を合わせてくる。

思わず、彼女の秘部にへと腕を伸ばしてしまった。…触れると下着の上からでも、粘着質の液体が指に感じた。

しかしすぐに…前戯はいらない。早くしろ…と、催促するかの様に、段々と激しい息使いと一緒に口内へと舌を入れてきた。

苦味を感じる口内で、またニチャニチャと、慣れない動きで、舌を絡みつけてくる。

秘部の前の布を、ズラす為に少し引つ張ると、ニチツ…とした音がする。

…体を離し…彼女の下着へと手を掛けると、ようやくその気になってくれたと思ったのか…期待を込めた目を俺に向けてくる。

下着を脱がせ…足を通し…机の横へと置くと、ゆっくりと脚を開かせた。

既に、俺がみほと関係を持っているかと思ひ込んでいるのか…全て俺に委ねる…。そういった感じだった。

…思い込んでいたのならば…あ、いや…もう…今更…だ。  
そう…もう…今更。俺も、我慢なんて出来やしない。  
考えるのを…やめよう。

自分に言い聞かせる様に、すぐに陰茎を、そのまま秘部の入口に当たてた…。自分の口から、熱い息が出ているのも気がつかない。

目線がもう、そこにしか行かない。自身のモノと、彼女の入口。少し当たるだけで、おかしくなりそうだ。

亀頭先を添えると、すぐに飲み込む様に周りを、膣口が包む。後は…押し込むだけ。

「……」

しかし、その先…全て吐き出したハズだった、何かはまだ残っていた様だ。

…一瞬だけ躊躇した。

だから思う。故に思う。

…今、このまま…超えてしまったら…崩れる。

彼女の…彼女達との、関係が歪んでしまう。…いや、崩れてしまう…。

……。

…これ以上は…。

「あの…し…ほ…さ…」

顔を上げ、しほさんに喋り掛けようと視線を戻し、口を開こうとしたが…目に入ってしまった。

いや当然、入るだろう…自分の白液で汚れた…彼女の顔を。

しほさんは抵抗も何もない。ただ、期待を込めた目を向けている…その顔を。

赤く上気した肌、潤んだ瞳。濡れた唇…その全てを、自身の体液で怪我している、その顔を。

「……」

最後の砦。

…意識…最後に残った何が…消えた。

ゆつくりと腰を…突く。

「ふっ…んっ！」

徐々に飲み込まれていく自身の陰茎。

「はっ…あ…あ…」

飲み込まれて行けば、行く事に…進めば進む事に…彼女が、呻く。

ミチミチと、小さな音…しほさんの声が、鼓膜を通して理性を刺激し…別の欲望に変えていく…。

陰茎の中間位までは、愛液で滑り…緩やかに彼女の中へと入っていった。…が、すぐに異物を押し出そうと、肉壁が絞まる…。

正直、このまま止まっているだけでも、畝ねる熱と刺激で気持ちがいい。

…いや、なんだこの絞まり方は……言いたかないが…子供生んだ女性の体じゃない…。

彼女の性格からして、常夫さんに、子供を作る…という目的での行為としてしか、そんなSEXしか、許さなかったのだろうか？

でも、この人クソ真面目だから…知識としてしか知らない…だろうし。…だろうか？ 口での行為も、性技と言えるモノも、夫との行為で…嫌がった…。

余り経験があるとは、思えないほどに絞まり…肉壁が絞り取ろうと動く膣内を味わいながら、変に冷静に分析できている自分が嫌になる…。

…。

常夫さんに、少し同情するも、それ以上に黒い欲望が湧き上がる。

…。

ガタン…と、大きく机が鳴る。

「んっっ…ああっっっ!!!」

…。

奥の壁に当たった感じがした瞬間、彼女が大きく背を逸らした。

……。

白い腹を大きく上げ、肘で体を支えている。

「あ……カッ……」

彼女は、俺のモノを入れただけで、果てた。

不意打ち気味に、止めていた腰を、一番奥……彼女の壁にまで突き当たった。

彼女の中を、俺のモノで満たし……形を変える。上書きされる内部の形に、殴られた子宮。

結果……あの「西住 しほ」が、俺のモノを入れただけで……で、果てた。背筋を反らせ、豊満な胸を弾ませ悶絶している。

「ヒュッ……フツ……」

出来るのは、小さな甘い声を出すことだけ。

「……」

多分俺は、今悪い顔にでも、なっているのだろうか。

そんな彼女を見た瞬間。

背筋に、ゾクゾクとした感覚が走り抜ける。

「……」

ズルツ……と、少し引き抜いて見ると、白く粘ついた液体が、根元に付着しているのを確認するのと一緒に、陰茎の根元周りを包む様に、ヒクつかせてる女の肉が見えた。

グチャグチャに体液に塗れている部分を少し、指で探ると、その白い……本気汁という愛液を親指で救い取る。……そのままクリトリス部分にへと擦り付けた。

「はっっ!!? あっ?!!?」

そのまま、コリコリと刺激すると、顔を歪ませ、泣きそうな顔をしながら、体を振らせ……何かを探るように両腕を動かしている。

何を? ……と、目で訴えつつくるその顔で、……しほさんは、経験が浅いと確信した。

それでも快感を、感じているという事は……本当に教科書通りの事



しかしてこなかったんだろう。

こんな簡単な…初歩的な事だけど、ただの快楽を産ませという行為に、感じた事のない快感から逃げようと、もがいている。

無理だ。もうダメだ。

一度入れてしまえば、後戻りできない。後先を考える思考を快感と快楽が塗りつぶす。

胸をただ鷲掴みにすると、柔らかい感触と共に、胸の形を曲げ…指と指の間から肉を半円に描かせている。

優しくする…というのも…もう無理だ。

「あっ…はっ…」

ゆっくりと突き動くと共に、甘く熱い吐息をだす彼女を見ては、また動かす。

やはり彼女の中は、非常に…キツイ。

俺のサイズも有るが、中のヒダで俺を押し出そうと畝って刺激する…。

気持ちがいい…それ以外に感想が沸かない。

彼女はこういう時には、あまり声は出さないのだろうか？

未体験の快感に戸惑いは見せても、すでに慣れたのか…今は吐息、息遣いのみ聞こえてくる。

「……」

意地でも出させたくなくなった。

…変な所は冷静だな…俺。

「っっっ！」

へえ…しほさんって、包茎なのか…とか、思う程には冷静。…すぐにクリトリス部分を、指で剥き上げる。

剥いたばかりだし…しかも、この様子だと、これも初体験だろう。

いぢめる様に、指で押しつぶし刺激しながら、腰を動かせば…また体を跳ねさせる。

…混乱し、目を見開き…初めての感覚に、また戸惑いを見せている、しほさんの顔が見えた。

「……」

机から下ろし、今度はその机に手を付いてもらう。

さて：もう考えるのは、止めましょう：というか、こちらも限界だ。ただ：もう、本能に従いたい。

同じく、素直に従う彼女の目は、もう正気では無かった。俺と同じく、完全に快楽に酔い始めている。

手を机につけ、お尻をこちらに向けさせ：両手で入口を大きく開く。

掴まれた肉が、形をつけて、体液でベタつベタになっている入口を露出させた。

腰骨を手で掴むと：また、一気に突き入れた。そのまま：遠慮なく、何も考えずにただ突き動かす。

こちらの方が、具合が良い。

大きなお尻の肉が震え、必死になって机の端を掴んでいるしほさん。

彼女から、待て、待って：と、声が聞こえた気がしたが、無視をする。

「た：隆　ンッ！　ハッ！　君：：ちよつと待つアツ！　てえ！」

会話をしながらの艶っぽい声は：：正直興奮する。

もつと言わせたくなかったので、構わず奥で擦りつける。ゴリゴリ：と。

「い：：イった：：たああ!!　ばかり：：でっええ!!?」

パツパツと、肉体を叩き合う音を更に早く：強くする。

そろそろ俺が、果てそうだった。

ただ一心不乱に、腰を彼女に打ち付ける。机が軋もうが、上から何か落ちようがお構いなしに。

中からゾリゾリと削り取るように、カリが引つかかっているのを連続すると、彼女の艶っぽい息遣いが大きくなる。

すでに先程までの、甘い声ではなく：ただの喘ぎ。甘い喘ぎ。熱くなるのが分かる。

込上がってくるのが分かる。

ただ俺が入って来るだけで、女の叫び上げている彼女を更にまた、

汚したくなる。

…：今度の欲望の行き先は、その目の前。

一気に陰茎を引き抜く。勢いと、開放感か…？ その場に力なく崩れ落ちた彼女の頭に手を添え、回し…顎に指を添えてコチラを向かせる。

信じられない程、熱い息が肺から何度も吐き出されるのに、今更気がついた。

やはり何度か集中しすぎて、時間が飛んでいた様だ。

どのくらい、彼女との行為をしていたか分からない。…彼女の…涙と涎に塗れた、快楽に完全に塗りつぶされた「西住 しほ」の顔を見て…それに気がついた。

「あつ…はあーはあーはあー…」

その顔を見ただけで…。

「っ!!」

…音が出ながら、出しているんじゃないかと思う程…大量に吐き出した。

それがまた、更に白く彼女を汚す。

絞り取るように扱き…一滴残らず、彼女にかける。

▽▽▽

インターバル。

また少し自我を取り戻したかの様だ。

興奮しすぎて、頭の間が少し曖昧…。

しほさんを改めて見ると、自身のしてきた事がわかった。

白い液体は、尻の谷間滑り、菊門から秘部へと流れ落ちている。

ドロツ…したモノが、ヌルヌルと…ゆっくりと…。

膣口を覆ってしまったソレは、中に出してしまったのでは、無いかと見間違う程の量が、ボタボタと肌を通り滑り落ちてゆく。

……。

だが収まらない。

一線を越えてしまった感が、更に俺を突き動かす。戦車道の：模型か？ 飾られている、その大きな机の前。そこに手を掛け、その場に崩れ落ちた。

脚が震えるのか：足の先が小さく痙攣していた。この模型の前での行為の時：彼女が一番乱れた。

膣内は絞まり、声を大きく上げ：髪を振り乱した。

「はあ…はあ…」

熱い息を吐きながら、こちらを向く彼女。

見た事のない：締めりも、理性も知識も…いや、気位すらない、女の顔。

…しかし、非常に満足をした顔をしていた。

——が。

「…た…隆史い…君？」

見上げた彼女の目は、次第に怯えた表情になり、俺の一部を凝視している。

もう、何度彼女を汚し：悦ばせたか分からない聳え立つそれを見て、何を思っているのか…。

だけど、まだ俺は満足していなかった。まだまだイケル。

だから…言ったじゃないですか…。

タガが外れてしまえば、どうなるか：収まり付かなくなると…つて。アレ？ イツタカ？

…まあもう、どうでもいい。今更後戻りもできない。

ただ会話は、したくない。

会話をしていたら、正気を取り戻してしまいそうだったから。まだ狂っていたかった。

「…あ…。」

だから無言で、彼女の手を掴み、また起き上がらせる。

まだ足腰は、立つ様だ。なら大丈夫。

…大丈夫。

また仕事机の上に背中を預けさせ、両足を開きまた彼女に入れる。すでに彼女は、俺が何をどうしたいか、すぐに分かってくれ…やりやすい様に体の体勢を変えてくれる。

「ツ…」

何度か繰り返せば、秘部からまた白い液体が陰茎に絡みつぎながら出てくる。

すでに彼女の中は、精子やら愛液で満たされいた為に、動けば動くほど…体液が混ざる泡が立つ。

グツチャグツチャと、バツンバツンと…音の種類が、増えていく…。机が鳴る音…。

胸が揺れ…頭を埋めて乳首に軽く歯を立てると、身をまた振らせた瞬間、大きく息を弾ませた。

「ツ…あつ！ …ハツ！ …ハツハツ…」

ビクン、ビクンと肩を大きく痙攣させて、その動きに合わせる様に、何度も。

肺の中の空気を、熱っぽい吐息と共に吐き出した瞬間…そのまま、おもいつきり、腰を早く突き立て始める。

そういえば、先程から、しほさんの声、ガタガタと鳴る机、…激しく肌をぶつける音しか、聞こえない。

「んあ!? ハッ！ あッ!! アッ!!」

胸が大きく揺れ、顔を覗けば、目は虚ろ。

完全に快樂に身を任せてしまった彼女が、目の前にいた。脚を少し持ち上げれば、大きく脚を開く。

腰骨に手を添え、こちらに引けば、お尻を突き出す。

…そして今は…俺が畳の上に寝ころべば、彼女が跨る…。

今回は少し、催促をされた様な形。…どうやら主導権を握りたいようだった。

いや、違うな…まあ何にせよ、膝をついて寝ている俺を見下ろしている彼女を見て思う。

上を向く陰茎に手を添えると、そのまま自身の入口へと向きを変えた。

前屈みに少し体を倒すと、胸がまた重力に引かれて形を変えた。

しっかし…この人は…：なんか知らんが、騎乗位が凄く似合う…。

亀頭先に、また熱い温度を感じるが、何もしないで彼女の好きにさせる。

…止める気なんてない。

収まらない。

収まらない。

まだだ。まだ足りない。

陰茎全体が、包み込まれていく感覚と一緒に…胸を揺らし、彼女は俺の上で…：また甘い声で喘ぎだした。

◇

「はっ…はっ…はっ…」

気持ちが良い。

その一言に尽きる。

何も考えず、ただひたすらに腰を動かす。

しばらくの間、お互いの息使いしか聞こえない。

私も彼の身体を貪り、彼もまた私を貪る。そうとしか言えない。

…考えるのを諦めた瞬間、異様とも言える程の開放感を身体中に感じた。

ただの女として、彼を求めてしまった結果…：抑圧されていた全てのモノが、弾けて飛んだ。

—そして、刺激。

彼の胸で身体を支え、腰を打ち付ける。

恥も何も無い。

押し寄せる未体験の快楽を、ただ、ただ求める。

彼の男性自身が、押し広げて来た瞬間：頭が真っ白になる。

知らない：こんなのは、知らない：。内側から、私の全てを壊される気分：。

「ンツ!? んんっ!!」

そしてまた訪れる絶頂。

動かせば、動かす程に未体験な感覚を教え込まれる。

男性経験自体、夫だけとはいえ：。此処まで思考を殺されるまでの感覚は、生まれて初めて：。

：。そう、だから教え込まれている。

ああ：。やはりもう、考える事すら億劫：。面倒くさい。

彼の手が、私の身体を撫でる様に動く。その感覚ですら心地よい。

「はっ：。はっ：。はううう!」

お尻を掴まれ、絶頂を迎えたばかりだというのに、また強引に動き始めた。

体の感覚が敏感になっていると言うのに：。それを彼も分かっているだろうに：。

踏ん張るように下で脚を曲げたのが分かった瞬間、打ち込むように、何度も激しい動きで入ってくる。

また分からない感覚が襲ってくる：。

反射的に逃げる様に身体を動かすと、私を逃がさない為に、掴んでいるお尻の手に力を込めた。

脚の感覚がなくなってしまう様だった：。

あ：。いえ、気が付くと私が寝かされている：。。。。本当に曖昧に

「いっっ!!?! かっつあ：。あ：。!」

突然、ゴリツ：。と、一番奥：。お腹の中心付近に届く程の衝撃：。

両脚が震える：。背中を勢いよく仰け反らした為に仰向けにされているのに、今更になっているのに気が付くなんて：。

「ひゃっ…あっ!! あっ!!」

一番奥を掻き回されているに…何度も…擦りつける様に暴れまわっている…。

更には…奥の…一際強く感じる部分を…何度も、何度も、何度も、な…んっ…。

「!!!」

目の前が真っ白になった。

感覚で、彼の指が性器の入口に触れたと思った瞬間…ゴリツ…と何かを押しつぶされと思った瞬間、何か弾けた。

私が今、どんな声を出しているか分からない。

喉から熱いモノが、いくつも通り過ぎているのは分かる…。

頭がおかしくなる程の感覚に耐え切れず…思わず両手で頭を掴んでいた。髪が飛び散り、頭を振り乱す。

入口付近をゴリゴリと押しつぶされてる?…どこを触っているか分かりませんが、悶え…身体をもがらせる事しかできません。

叫びにも似た声を上げ…涙で歪んだ視界が、彼の顔を捉えると…突然、こんな事を思ってしまった。

私は今、彼にどう映っているのでしょうか?…と。

顔が熱く、感覚が曖昧で、口と舌は…多分…はしたない形を描いているであろう私を…。

うまく思考が働かない中、何故か…奥の方でそんな考えが、浮かんできました。

そう思い、彼の顔を改めて見てしまった。

見知った彼を…隆史君を見てしまった瞬間…今までの…事を…思い出が、蘇ってしまった…。

…。

…:…:…:…:…:…:…?

なんででしょうか…この気持ちは…? お腹の底から湧き上がる…

この気持ち…。

そして今更になって、隆史君との関係をはっきりと思い出す…そし



て、更に湧き上がる、感覚…。

どうでもいい…。

本当に…：本当に、何もかもが、どうでもいい。

…この感覚を味わっていたい。

身体が溶けて無くなってしまうのではないかと思える、こんな感覚

…気持ち…。

彼が私の両足を持ち上げ、下半身を上に向けた。そのまま私へと覆いかぶさる。

繋がったままの状態で…曲げられた体は、まるで見せつけてくるかの様。

ズルっ…と抜かれたソレを見て…そして気が付く…。あんなモノが、私に入っていたのかと…。

そしてまた、ソレを私に打ち付けてくるつもりだと…。

ああ…本当に、どうでもいい。

ただ今度は、どんな感覚になるか…どれほど気持ちが良いか…それしか思考が働かない。

それしか、興味がない。

それでも、彼の…：隆史君の声だけは、はっきりと私には聞こえた。

「…本気でいきますね」

言い終えた直後…彼の体重が私の伸し掛った。



早朝5時…の、しほさんの執務室。

その部屋は、行為をした男女特有の匂いで充満していた。

しほさんの腰が抜けようが、容赦なく攻め立てた結果がコレだ。

体液に塗れ…小さな悲鳴にも似た呼吸を繰り返している彼女は、文字通り虫の息だ…。

我ながら何だったんだ、あの性欲は。

……。

はい、賢者タイムです。

やっちゃまった…。

文字通り、ヤッチマッタ…。

しかも…避妊具なんて、着けていなかったから生で…

彼女もまた、拒否をしないものだから、頭から完全に飛んでしまい、これもまた文字通り、しほさんを貪ってしまった。

「ああ…合計で何回やったとか…全く覚えていねえ…。

約3時間程やりっぱなしだった。

若い身体パネエ…。

性欲に動かされ、我を忘れ、酔っ払って自暴自棄になっていた女性。

しかも…彼女の母親……。

そんな女性に手を出してしまった…。

言葉も出ない。

…最終的には、ただ貪り合う様に、お互い求め合っていた。

「……」

肝心のしほさんは、もう気絶をしているかの様に動かない。

やはり意識はあるのか、呻き声に似た声を上げて呼吸を繰り返している。

全裸で…胸を大きく動かし…隠す事もしないでただ横たわっている。

…まずい。

罪悪感も何もかも、それはそれとして、一先ず置いておいて……一つ時計を見て思った。

この後…菊代さん…家主がいない部屋にへと、起こしに行かないだろうか？

いないとなれば…最終的には、ここへと…。

……。

「し、しほさん？ 起きてますか？ ……動けますか？」

この状態を何とかしないと…取り敢えず、ぐったりとしているしほさんに声をかける。

まだ所々、白い肌の上に、更に白いモノが付着をしている…が、一部乾いてしまっている。

その量たるや…：我ながら…。

俺の声に、目を薄く開き…目だけで、コチラを振り向いた。

よかった…起きてた。

「…：はっ…：ははは。 ……してしまいましたね…」

しかし…：自暴自棄になっていた人特有の…乾いた笑いで返されてしまった。

「……………」

一線を越えてしまった以上、その反動は大きく襲ってくる。これは、責任を取るとかどうの…：そんな話の次元ではない…。

…：してしまった。やってしまったとでも言えるのだが…：考えるのは後だ。

「ま…：まずは、風呂に入ってきてください…。この部屋は、俺が何とかしますので」

…：変に冷静な自分が嫌だ。  
でもなあ…。

「部…：屋？」

…。

……………。

「!!」

寝ぼけているかの様な、それでいてまだ熱っぽい目で、部屋を見渡した直後…：飛び起きた。

「いつ、今！ 何時ですか!？」

「5時10分程ですけど…」

部屋の掛け時計に指を向けた。

「…いけない。菊代さんは、5時半に起床します…。か…片付けないと…。」

あわあわと、手で衣服を掴み…散らかりに散らかった酒瓶に手を伸ばした。

彼女もまた…変な所で冷静だった…。

「片付けはいいですから、取り敢えず風呂行ってください。お…俺が、しでかしてしまった事ですけど…しほさん、すっごい格好ですよ?」  
「!?」

自身の格好を改めて見直し、年甲斐もなく…と言つては失礼かも知れないけど、真っ赤になるしほさん。

酒瓶の処理は台所に! と言仰りまして、慌てながら部屋を飛び出して…行けなかった。

立ち上がろうと、手を仕事机にかけたところで、彼女の動きが止まった。

脚が腰元から、プルプルと震え、片膝をついてしまった。

裸になつてしまつてゐる為に、その姿はそれはそれで官能的だったが、そんな事悠長に思つてる時間は無い。

「…腰が…抜けてる…」

「……」

急いで立ち上がり、急いで浴衣を着正す。そのまま、しほさんの脚へと腕を差し入れ…。

「た…隆史君!？」

彼女を抱き上げ持ち上げると…次だっ!!

「あの…隆史君…? …流石にもう…体が持たないというか…時間が無いというか…」

「…ち…違います」

顔を俯かせ…乙女見たいな顔された…。

……。

っ…次っ!!

抱き上げているので、両手は使えない…ならばッ!! 出入り口の襖を、強引に足で開け…一回廊下に誰かいないか確認する。

よし、誰もいないし…人気もない！  
そして…脇目も降らず、一直線に浴室へと向かった。

執務室の酒瓶を片付け、外気が入ってくるであろう窓を全て全開にする。

男女の…この匂いは特有すぎて、ある程度経験のある人には、すぐにバレてしまうだろうよ。

…簡単に取れるモノではないのだろうけど、しほさんが風呂…もしくは、シャワーでも浴びている最中に、出来うる限りの事を急いで行つた。

まずは俺のいた客室から、扇風機を持ってきて、外に向かって最大で稼働させる。

ガチャガチャと、多少音はするが、大量の酒瓶を台所へと急いで運ぶ。…菊代さんと鉢合わせしたら…とも思ったが、考えている時間が勿体無かった。

それに量が量だけど、これはまだ誤魔化しが効くので、指定場所らしき場所に捨てておく。

「…はあ」

…何をやってんだろう…俺は。

証拠隠滅に躍起になっている。そんな自分自身をぶん殴りたいと思うのは…多分普通だと思う。

執務室に台所より戻ってくると、まず時計で確認…あ。

5時40分

まずい…菊代さんの起床時間がすでに過ぎている。

一度執務室を見渡して、現状を確認…よし、もう変な物は転がっていないな。

…鼻が慣れてしまっている為に、微かな匂いは分からない。…この部屋の匂いは、多少なりとも取れただろうか？

ならば次だと…その匂いの元。浴室から持ってきた水を含んだ雑巾で、急いで床畳を水拭き一掃する…。

5時50分

今度は、俺自身の番だ。

足早に執務室を後にして、客室にへと戻ると、壁に掛けてあった昨日も着ていた、学校の制服を手に取り、急いで袖を通す。

浴衣姿よりも、まだいいだろう…。取り敢えず、しほさんが浴室から出てきたら、俺も入らせてもらった方が良さだろうな…多分、俺の身体から匂うだろうし…。

ここまでやり終わると、ようやく一息つけ…あ、ダメだ。せめて顔位は先に洗っておこう…。

部屋を進み、洗面所にも向かおうと…それでも慎重に襖を開け…。

「隆史君？」

あ…開けた。

開けたんだよ？

「」

声にならない声…いや、悲鳴を出したは、生まれて初めてかも知れない。

開けた襖…その入口に…目の前に…菊代さんが、立っていた。

…。

バクバクと心音が聞こえる…。

いつもの様に、しつかりと着物を着て…普段通りの優しい笑顔を浮

かべている。

——が、うつすら開けた…目が怖い…。

スツ…と、突然その笑顔が消え、無表情になった。

「若気の至。そういう言葉もあるくらいです」

「っっ??」

わか…

「……」

「……」

朝の挨拶も無しに、一言……黙ってしまった。

その様子に、指先が震え、足も震えだした。

バ  
レ  
テ  
ル

「…正直、言いたい事が御座いますが……今回の件は、私の胸に仕舞っておきます」

「」

「隆史さん」

「は…はい」

「…この件が知られてしまったら、みほお嬢様は勿論。…まほお嬢様も酷く傷つきますよね？ それは隆史君なら…嫌という程、お解りになると思います」

「……」

「行き届いていない後処理は、こちらでしておきます…と、申しますか？ あんな処理で、まほお嬢様と後輩の方はともかく、私を誤魔化せると思ったのですか？」

「」

「では私はこの後、奥様にお話が御座いますので…これで失礼します。ああ…さっさとお風呂に入ってきて下さいね」

…  
淡々と…すべてを無表情に喋った後、無言で音もなくその場を離れて行ってしまった…。

お…おもいつきりバレていた…。

い…言う通りにしよう…。

カタカタ震える脚を、力いっぱいぶん殴ると…痛むその脚に力を込める。

い…行こう。あの様子なら、しほさんはもう…出ているだろうし…。

今は朝の6時半。

そろそろ、まほちゃん達も起きる時間になっている。

そして…どこからか…菊代さんの怒号が聞こえてきた…。



朝食の時を…思い出す。

俺とエリリンがいた為だろう。

普段なら、一緒に朝食を取る事を余りしないと聞いていた…しほさんもいた。

用意してもらった朝食…純和食。菊代さんの料理は、正直下手店よりも遥かに美味い。

普段ならな…教えてもらおうかと、何度か思う程に…しかし…正直…今回の朝食は、味なんて感じなかったよ…。

無言。

黙って、黙々と食べるしか無かった。

妙にツヤツヤした肌のしほさんだったが、表情はいつもの様に厳



しい顔をしていた。

：が、顔は蒼白になっていた。

何を菊代さんに言われたか分からないが、後ろめたい事がある為にあんな表情をしているのだろう。

昨日、俺に何かお使いを頼むと言っていたが、もはやそれ所ではないだろうか。：というか、多分忘れているだろうか。：。

一人素早く朝食を済ませると、一言：仕事に行きますと、部屋を出て行ってしまった。

俺と話がしたいのだろうか：俺の目をずっと見ていた……。：ので、冷や汗が止まらなかった。

菊代さんに酷く怒られたであろう：が、しほさんの俺を見る目が、もう完全に昨日と変わっていた。

後悔はしたのであるが：何を考えているのかも、分からない。完全に、男を見る目で見られている。：。

一瞬その目を思い出すと、身震いが何故か止まらなかった。それに、いつもより様子がおかしい人物がいた。

：エリリンですら、それを感じ取ったのか、困惑した表情で朝食を食べている。

チラチラ横目で見るのだけど、すぐに目の前にある朝食に、視線を落としてしまっている。

：まほちゃん。  
無表情。

人からすれば、感情が顔に出辛くて、分かりにくいと言われている彼女だけど、とても小さいが変化は勿論ある。

付き合いが長い俺には、その変化は今まですぐに分かっていたのだけれども：今回は全く分からない。

無言の重圧とでもいうのだろうか。  
ずっとこの調子だった。

しほさんとも一言二言、朝の挨拶をするだけで何も喋らない。  
「エリカ」

「は、はい!!」

「すまないが、先に学校へ行つてくれ。私は少し…野暮用で寄つて行く所がある」

「は…はい」

無言を貫いていたまほちゃんが、やっと口を開いた。

それでも見えないプレツシヤーで、エリリンに有無を言わさない指示を出す。

「……………」

そして、また無言の時間。

朝食を全員済ませた所で、今度は俺に声をかけてきた。

ただその目は…酷く冷たい。なんだろうか…他人を見る目…？  
…とも違うな。

「隆史」

「な…なに？」

これは…敵を…見る目…？ いや…それとも違う。…なんだ？

「…話がある。エリカを見送った後に客間に行くから待っている」

「わ…わかつたけど…」

俺に対して、ここまで強い命令口調な言い方をする まほちゃんは珍しい…。

そのまま言い捨て、スツ…と、立ち上がると、エリリンと共に部屋を出て行つてしまった。

普段なら、ここで突つかかて来そうな彼女も、異様な程に張り詰めているまほちゃんの雰囲気、何も言えないでただ従っていた。

そして…早々に登校していった…。

…その後。

そして命令口調の約束の為に、客間で彼女を待っていた。

しほさんの事もあり、イロイロと考えなければいけないのだけでも、菊代さんにバレていた為に…うまく考えがまとまらない。

正直、まほちゃんの初めて見せる雰囲気、戸惑つてしまっているものもある。

後ろめたさが強い為だろうな。  
窓からボケーと、外を眺めついても不安感が拭えない。  
昨日の夜の事が、どうしても引つかかる。…当たり前前だけど。

「隆史」

「フブツ!？」

突然真後ろから、声がして腰を抜かしかけた。  
久しぶりのステレス発動まほちゃんからの声…。

…ただ、それだけでは無い。

彼女を見て驚いてしまった。

その姿は、いつもの制服。

しかし…その制服の前を開き、スカートを履いていなかった。

この部屋に入ってすぐに脱いだのか、床畳に黒いスカートが、無造作に放り捨ててある。

制服の黒いワイシャツのボタンを更に外し、母親に負けない胸の谷間を見せつける様に…前に突き出した。

…な…え？

どうしたのか？ そう俺が疑問を口にする前に…一言。

「昨晚のアレは、なんだ」

最悪な一言だった。

「…夜中…何度か、この客室を訪ねても…開かなかった襖が開いていてな。好機だと思い、中を覗けば…お前はいなかった」

…えー…好機って…。

「トイレだろうと思い、客間でしばらく隠れて待ってみたのだが…一向にお前は、帰って来なかった」

…何してんの、まほちゃん。

「はっ。それで何かあったのかと…少し家を探してみた」

抑揚の無い声で、喋り続けていたまほちゃんの顔が、段々と下がっていった。

「…結果っ!!」

「……」

叫び…顔を上げ…そして…。

「お前は…お母様の執務室で…そのお母様と何をしていた」

やはりバレている…いや、違う!!

何をしていた…? あ…あれを…見られていたのか?

よりによって…。

俺を睨む訳でも無く…悲しそうに見てくる まほちゃんのを…真っ直ぐ見れなかった。

「……」

「…みほを最悪の形で裏切ったお前を見た時…」

やはり見て…ん?

ちよつと待て。おかしい。

責められるなり、殴られるとかなら分かるのだけど、この格好のまほちゃんはおかしい。

「…なぜ…だろう。お母様が隆史に逃げた気持ち…すぐに、理解できってしまった」

「な…何を?」

喋りながらも…段々と近づいてくる。

「私もある意味でならば、お母様と同じなのだろう。抑圧されたものに、負けてしまった…というのだろうか?」

近づかれて分かったのだけど、まほちゃんは……しほさんと同じ顔をしていた。

…熱っぽい目と、呼吸。

しほさんと違い、アルコールは入ってはいないであろう……あれ!? 入ってる!? え!? ちよつと酒臭い!!

「あの襖の外で…廊下で…行為を覗く真似までして…怒りを通り過ぎ

…気が付けばその場で、無意識に自分を慰めていた」  
「なっ…」

「これ…本格的にまずい！  
嫌になった…」

この後、学校に行くつもりなんて、もはや無いのだろう。

「…そんな自分が、心底…嫌になった」

自暴自棄。

完全にヤケになっている。

「もう知らない。どうでもいい。…みほも知らない。何もかもがどうでも…。私は私の、思うがままにする…感情に…ただ従う…」

多分…まほちゃんは、この客室に来る前に飲んで来てたのだろう。その泣きそうな声と共に出す吐息から…完全に…飲酒をしたと確信した。

気が付けば俺は、壁際に追い詰められていた。

「卑怯かも知れない…いや、卑怯だな…。まあいい…もうどうでもいい…何でもいい。知ったことか」

声が出ない。脱ぎながら近づいてきたまほちゃんは…すでに下着姿になっている。

脱ぎ捨てられた制服…。

そのまま胸を押し付け、俺の身体を抱きしめる様に腕を回し…俺の胸に頬を押し付け…強く…腕に力を込めた。

「大丈夫だ…。黙っていれば…黙ってさえいれば、みほにバレる事はない。私も…何も言わない。喋らない…」

当たり前前だけど、彼女も恥ずかしいのだろうか…。

これは勢いを付ける為の飲酒…という事か…。

「い…いや、まほち」「隆史!!」「」

「私を抱け」

言葉を遮り、完結に一言…言い捨てられた…。

「よりにもよって…お母様とお前は、関係を持ったんだ」

「……」

「…私の気持ち分かるか？ 分かってくれないのか？ お前はワカラナイダロウ」

すでに泣きながら…懇願するように…強く抱きしめながら求めてくる。

「ここで、お前に拒否されると……」

「ま…ほ…ちち」

背中に回されている腕…手。

爪を立て突き刺した…その背中に複数の痛みが走る。

顔を上げて俺の目を見た彼女は、笑っていた。

泣きながら笑っていた。

腕を下ろし…今度は優しく顔を左右に伸ばして…顔を掴んだ。

その添えられた手は冷たく…近づくと顔は…その目は、俺を見ているのかどうか分からない。

ただ黒く…濁っている。

近づき…引き寄せられ……。

唇が触れそうな距離にまで近づき…いや、触れる瞬間…小さく囁くいた。

「私が全て…壊れてしまう」

※ルート IF※ 続 ルート・ノンナ ★

…きつい。

その一言に尽きる。

だってな？ 考えても見てくれ。

俺自身、自分の体格と見た目…というか、風貌という奴は、嫌でも認識している。

そんな熊と揶揄される程の大男が…女子高校の正門前に立っているという絵面…。

いやあ…アウトだ。

不審者以外の何者でもないだろう。

休みとはいえ…否、休みだろうからか。その休日の日に出かけるでろうJK達が、制服姿で俺の前を通過していく。

奇異な視線を向けながら…。

あく…そういや、基本的に外出時は制服で出なきゃならないって、聞いたことがあるなあ。

ちよつと懐かしい事を思い出したぞお。

「……」

いやあ…きつい。

待ち合わせに指定されていたので、逃げるに逃げれない。

隠れて待ってれば良いのかもしれないが…逆に隠れている所を見られたり、見つかったりした場合、言い訳なんぞ糞の役にもたちゃしない。

…問答無用で、しよつ引かれるだろうよ。

だから敢えて、堂々と…待ち合わせしてますよ…的なの？ 雰囲気を出すように突っ立っている。というか、それしか方法がない…。

ああ…もう、何時間程こんな状態が続いているんだろう。

…いや？ まだ数分しか経過していないかもしれない。しかし、このいつ通報されるか分からない状態は、時間の感覚を狂わせる。はっはー。

…生きた心地がしないとは、この事だな。

……。

……。

恋人…ね。

人も疎らになり、本当にどの位時間が過ぎたか分からなかった。ボケ々としているのも飽き、気が付けば昨夜の事を思い出してしまう。

そして気が付けば、しっかりとその事を思い出してしまっていた。いや…考えないように誤魔化していたただけだ…。そうだ、極力考えないようにしていた。

ノンナさん。

こんな関係になんて、なるなんて思いもしなかった。

「…何してんの、タカーシヤ」

糞みたいだった前世の影響で、俺の本性とやらが、どんだけ腐っているか分からない。

分からないが…今の俺は、西住家の人達のお陰ですいぶんとマシになっけてくれているハズだ。

…それでも…だから…と。そんな考えを捨て去り、改めて思う。いや、思う。

想いと共に、グダグダと…昔からの事を考えて泥沼になりそうな思考を奥にへと、押し込める。

今までの考えや、自分への言い訳を今更考えてしまうのは、彼女に對してあまりにも失礼だ。

そう…だ。

決めたんだ。

そういう関係に…彼女の想いに応えようと、決めたんだ。

「タカーシヤ？ タカーシヤツ!!」

それでも、みほの事は別だ。

まほちゃんもそう…彼女達は、まさに恩人以外の何者でもない。今の俺を構築してくれた恩人…。



だから全力を尽くす…。全力で彼女達の力になりたい。

それは、ノンナさんからすれば、面白くないだろう。彼女からすれば…決まっていた事とはいえ、異性の為に転校するんだから…。

それでも…彼女は……転校…。

て…。

「……あ」

そうだ…アレだ…。

「ああ…そうか。アレが決め手…か」

あの時の言葉…。

あの言葉が、迷いもなく…すんなりと受け入れる事ができたんだろ  
うな。

「あ、やっと喋った…というか、まだ私達に気が付いてないわね…」

「…そのようですね、カチューシャ」

「しかも…何をブツブツと…決め手？」

「…決め手」

「タカーシャ…。いい加減その癖治さないと…いつか身を滅ぼすわ  
よ」

「……決め手…」

「聞いてないし…ん？ ノンナ？ …ノンナ？」

そうだな。あのお陰で、自分でも驚く程に、彼女をすんなりと受け  
入れる事ができたんだ。

「隆史さん。…因みに…それは、どんな言葉なんでしょう？」

「…いや、最後のですねえ…『あの姉妹との関係、それを含めての今の  
貴方。その全てが、私は好きになったのですから…』って奴で、完全  
に参っちゃいましたね」

「……」

返事をした後で…まあ、状況的にはアレだったけど…。

何よりも、現時点での俺って奴を好いてくれた言葉。すべてをひっ  
くるめてでの言葉。

我ながら、チョロいなあとは思うが…だから……その後もすんなり  
…。

…。

「……」

……。

はっはー。

いつの間にか、カチューシャとノンナさんが、制服姿で真横に立っていた。

はっはー。

状況確認。

状況把握。

よし。

「はい、逃げないで下さい」

「襟首掴まないでくださいっ!! って、何時から!? 何時からだ!?!」

また、口に出してたあ!!! なんで!? 今までこんな往来じゃ…せめて会話の最中とかでならやらかした事はあつたけどっ!!

あ…なんか、カチューシャがキャパオーバーって感じで、真っ赤に茹で上がってる…。

それはそれで、可愛らしくはあるのだけど…あの最中の事は思い出してないよな!? 口に出してないよなっ!?!

とうかつ!! ノンナさん、力! 強っ!!

俺、結構本気で、力出してるけど!?ズリズリと地面を擦る、足の音しか聞こえない!

「…隆史さんも、照れるのですね」

「当たり前です照れますよっ!! もう完全に! ノンナさんの事、女

性として意識してんですから!!」

「…っ!？」

「ああもうくっこそっ! 我ながら一日で、ここまで変わるか…うつ…  
わっ…恥つつず!!」

「……」

はつきり言わなかったっけか? できるだけ異性として意識しないようにしていたって。

性別的に気を付けてはいたけど…ダージン宜しく、近くの女性は…基本的に学生…子供。と、思い込むようにしていた。

昨晚の事があり…それが、一気に解けてしまい…諸々の欲とかつ!  
今までの反動で、凄い事になりそうなのを、どこかで感じていた…、

意識が切り替わっただけで、ここまで…ああもう! 顔が熱い!!  
参ったとか、言っちゃったよっ!!

「……」

逃げるのを諦め、校門に背中を預けると、ノンナさんも漸く掴んでいた俺の襟から手を離してくれた。

一気に顔に体温の熱が集中しているのが分かる…。俺…どんな顔してんだよ…自然と片手で顔面を抑えてしまう。

ため息を付きながら、片手で抑えていた顔。その指の間から、ノンナさんを見てみると…。

…超…無表情…。

いつもと変わらない、ポーカーフェイス…。

「あの…ノンナさん?」

あれ…? 違うな…。

目も顔色も、何もかもが普段と変わらないが…口元だけが違った…。

への字にちよつと歪んでる…。

なんか、小刻みに肩も震えているような…。

「つつたっ!？」

突然、脛に…激痛が…。

反射的にその痛みを感じた脛に視線を落とすと…はい。カチューシャがご立腹でした。

「朝っぱらから、イチャついてんじゃないわよ!!」

両腕を腰につけ、真つ赤な顔して、俺を見上げていた。

「まったく…」

視線を合わせると、ぷいっと顔事反らすが、まだ少し顔は赤い…。

いや…今を見て、なんでその結論になるのでしょうか? …イ

チャついてって、事情を知らなくちゃ分からないと…え。

「今はこのカチューシャがいるの! そういうのは、二人きりの時にして!」

「はあ……は? 二人きり?」

あの…その言葉が出るってことは…。

ぷりぷりとしているカチューシャを横目に、確認をするかの様に、ノンナさんを見ると…。

「あ、はい。カチューシャには、全て報告しました」

「つつ?!」

そんな事を…朝日を浴びながら…何処となく、得意げな顔をした顔のノンナさんが言い放った。

えっと…。

…。

すべ…て…は!?

「勿論、昨晚の事は伏せてあります」

「!？」

間髪入れずに、ロシア語に切り替え…というか、俺にだけ分かる様に口にした。

び…びつくりした…。

「…は…はい」

無表情に喋る彼女に、少し安心して…。

「私としては、カチューシャならば…洗い浚い暴露しても宜しいのですが…」

「やめてくださいよ!?!」  
…できなかつた。



…と、まあ…非常に喜ばしく、何処か気恥ずかしい朝でしたね。

私を女性として意識している…その言葉。

あの時の言葉で、全て繋がった気がしました。

聖グロリアーナ勢含め、散々私達をヤキモキさせていた貴方の態度。  
度。

同性愛者の疑いまで出てくる程でしたのに…ね?

どの様な理由でかは存じませんが、わざと…敢えて私達を異性として見ないようにしていた…と。

「…あ…あの…ノンナさん…?」

重度の鈍感…と思っていた我々でしたが…そうですね。アレはワザと意識をして…気が付かない様にしていたのですね。

それは、貴方の事ですから…あの、西住姉妹に対してもそうでしょう。

しかし…貴方にとって、初めて女性として意識してもらっていた。その言葉。

…それが私。

その前の…夜の事があつたとしても、大きな不安を感じていました。

ですが…その時の隆史さんの…見た事がなかつた程に狼狽した態度。…照れる貴方を見て確信できました。

…しつかりと、貴方の特別になれていた。

それが分かつた瞬間。胸の中の…非常に、もの凄く…大きな不安が、大きな優越感に変わったんですよ。

「ちよつ!? ノンナさん!? 貴女、そんな事、はつきり言う人じゃなかった気がするんですが!?」

ああ…しかし、あの時のカチューシャは、途轍もなく良かった…。いきなり何時ものノンナさんに戻った……つてえ!!?」



「そもそもっ! タカーシャはまず、デリカシーというものを学ぶべきだと思うのよ」

「そ…そっすね先輩」

「私をからかう為だけに、ロシア語勉強するとかひん曲がった性格も改めるべきよねえ!」

「お…しゃる通りですパイセン…」

彼女達の行きつけのお店…とやら。

少し遅い朝食を済ませ、今はきれいになったお皿の前で、何故かカチューシャ先輩からのお説教が始まった…。

まさか朝っぱらから、女性に対する態度について、カチューシャからクドクド言われるとは思わなんだ…。

いや…まあ、それは置いておいて…彼女達に案内されてきたこのお店。

まさかの大衆食堂。

プラウダ高校学園館の街並みで、一際異彩を放つ、この…なんつか…趣のあるお店でした。

女子高生が気軽に入れないであろう、その外見からして…非常に彼女達…というか、俺達はこの店内で非常に目立った。

俺らの他には、常連らしき2組のおっちゃん達が、楽しそうに見える。

まあ…この外見のカチューシャが、俺みたいなのに対して得意気にお説教しているすがたは、そりや楽しかろうて。

そんな俺とカチューシャを見て、ただ食後のお茶を啜るノンナさん。

相変わらず無表情に見えるが…どこか微笑ましい顔をしていると思うのは、気のせい…ダヨネ？

しっかし…彼女達は、本当にこの店の常連らしい…。

連れてこられた時は、俺に合わせてくれただけかと…気を使ってくれただけかと思っただが、店に入るやいなや、先に入店していた、このおっちゃん連中と挨拶を交わし、人が好きそうな店主らしき老夫婦にも愛想よく挨拶をしていた。

そして今も、この現状をノンナさんと同じく微笑ましく眺めている…。

「しっかし、意外だ…カチューシャ達つて、こういった店に来るんだ。女の子からすると、結構勇気いらんないか？」

「ねえタカーシャ…話題変えて、誤魔化そうとしてない？」

「滅相もござんせん」

…滅相もござんせん。

「はあく…ま、そうね。誰かさんと付き合いがあるお陰で？ 慣れたみたい。…躊躇なく入れたわ」

大きなため息と一緒に、話題変えに付き合ってくれましたね先輩。

一瞬目を反らして、少し呟く様に小さく漏らした。

「それに…なんか、似てるのよ。「魚の目」に…。妙に居心地がいいの…」

「ああ…なるほど」

「朝食は、和食に慣れちゃったしね。遠征の時とか…タカーシャのここに行けない時に、結構な頻度で来るようになったわ。今後は？もつつ…と、増えるでしょうけ…ど？」

「そ…そっすか」

ジト目で、俺を見上げるカチューシャパイセン。

「カチューシャ…あの…ちなみに」

「…何よ」

少し拗ねた様に、片肘を付いて食後のオレンジジュースに口を付け

た。

ストローを吸うその姿が妙に愛らしい…まあ口に出したら100%、怒るだろうけど…。

とりあえず…今朝の事を、聞いてみよう…。

「ノンナさんから、どこまで…聞いたんだ？」

「は？ 言った本人に聞けば？」

わー…ご機嫌斜め…。

主語が抜けた話題に、即答で答えが返ってきました…。

チラツ…と、その本人を横目で見ると…うつわ…こちらにも不機嫌そう…先ほどからチョコチョコ眉を傾ける。

話題に対して気に入らない事でもあった…と思わせる程に。眉間に皺を寄せる事も度々見かけるので、ぶつちやけ怖くて聞けない。

かといっても、先ほどの様に妙に機嫌が良さそうな表情も見せるしで…もうどうしたらいいか分からん。

「……」

「……」

「…ま…まあ、そうね…まず、シンプルに一言…」

そんな、ノンナさんの変な雰囲気のカチューシャも感じ取っているのだろう。

本人に聞けと言ったのに、話してくれそうだ。

「タカーシャと、お付き合いを開始した…って、聞いたわ」

ガタツ!!!

…。

あの…店主含めて、お客の男性陣が席から一斉に立ち上がったんですけど…。

女将さんらしき人は、目を輝かせてるけど…。

「え〜…え〜!! まあ!? 惚気に近い、その経緯も含めてね!!」

「あの……なんか、男性陣からすげえ睨まれてるんですけど…」



……アレ？

あの…なんか、皆さん殺気を放ってますけど？ ……え？

「…いい？ タカーシャ」

「な…なんでしよう？」

そんな男性陣の殺気を気にもしないで…ものすごく真剣な声と顔をして俺を呼んだ。

「私はノンナだから納得したの…許せたの」

「え…」

すぐにその真剣な顔を崩し、頬杖を突きながら目線をずらした。

「……ま、ここからは私も…遠慮はしないから。「いつでもどうぞ」…とか、言ってくれたしねえ」

「はい？」

何故か最後…妙に楽しそうに、目を伏せていたノンナさんを、流し目…とでも言うのだろうか？ そんな横目で見ながら、小さな口端を吊り上げた。

いやあ…なんか…すつげえ悪巧みしている様な顔してますね。

…こんな悪そうな顔のカチューシャ、見た事ねえ…。

「……」

「……」

「…と…ところで、タカーシャ」

「あ…はい」

その悪そうな顔のカチューシャに釣られて、その場の全員がノンナさんを見ていた。

見た瞬間…スンツ…と、立ち上がっていた男連中が、大人しく席に座った…。

あ、はい。逃げやがったな。

「…さすがに、ノンナの様子がおかしいわ…何かした？」

「ずっと一緒にいただろ？ 俺…特におかしな事してない。……よな？」

「そ…そうよね」

ノンナさんが…なんか、すげえ機嫌悪そうな顔をしていた…。

…特に、しかめっ面をしているとかじゃなく…何時にも増して眼光鋭くなっているだけなんだけど…。

カチューシャもビビり始めたし、一応聞いておこう…か？ カチューシャじゃ無理だろうな…。

よ…よし。

「あ…あの、ノンナさん？」

「なんででしょう？」

あ、呼びかけには応えてくれた。

声は特に…普段と一緒だな。

「どうかされまし…た？」

「どうか…とは？」

た…淡々と…。

「いや…（機嫌）…よろしく（ご）いませんか？」

「いえ？…（すこぶる）良いのですが？」

…いやあ…良いような顔してたら聞きませんが…。



カチューシャは休日だというのに、午前中しか自由になる時間がな  
いとの事で、ある程度の一服が終わり次第、その店を後にした。

本日はノンナさんが路程を考えていたらしく、カチューシャを肩車  
した状態の俺は、ただエスコートされるがまま、彼女に黙って着いて  
いく。

凜とした顔のまま、特に何も喋る事もなく、ただ歩く。

店を出た後も、何となく不機嫌なオーラを発している彼女に、もは  
や声を掛けるのが怖い…。

それはカチューシャも同じだったのだろうか、すでに飽きたらしく  
…俺の髪の毛を掴んだり離したりで、遊びだしていた。

あの店から見ていたプラウダ高校学園艦。…今まさにその学園艦  
の街を歩いているのが…何故だろう？ 妙に楽しい…。

トローリーバス？ だったか……。触覚の様な物がついた電車の様なバス。それが街を走れば、それを一から説明してくれる。

無軌条電車扱いだから、バスと銘を打ってはいるが、鉄道の分類にはいる：だったか？ まあ他にも細かい事を言ってはいたが、頭の上から流れる声が、妙に嬉しく……。正直、話の半分も覚えちゃいねえ：が、まあ……。いい。

入った事がある飲食店が見えれば、そのコレがおいしい……。とか、それはもう楽しそうに。そういや……。ピロシキって、揚げるよりもオーブンとかで、焼く方が一般的なんだな。

これもカチューシャが教えてくれたが……。まあ……。カチューシャのピロシキ熱には驚いたけど……。人間好きな物を熱く語ってしまうもんだな。

所々、カチューシャの得意気な説明を聞きながら、ゆつくりと流れる時間。

……。悪くない。

そしてプラウダ高校学園艦内を観光……。案内されるがまま、最後に到着したのが……。シヨツピングモール。

「ねえ？ ノンナ。さすがにいい加減にして」

そこに到着した時も、やはりノンナさんの様子がおかしいままだった。

……。だからだろう。漸くカチューシャが声をかけた。

「はい？ 何がでしょう」

「一応、明日船が出る時にもタカーシャとは会えるけど……。残り少ない時間、そんな顔で何時までもいないで」

「……………」

カチューシャの憤慨を、本気で言いたいかわからない……。といった顔で返した。

しかし、その顔も一瞬ですぐさま「あつ……」と、小さく声を溢しながらも納得したという感じの顔に変わった。

「……それで先程隆史さんも……。成程」

「ノンナ？」

「大丈夫ですよ、カチューシャ。本当に私は、今とても気分が良いです」

「…そんな顔に見えないけど?」

「いえ、本当に…:あつ。…そうですね、不満があるとすれば…隆史さんにでしようか?」

「タカーシャに? 何よ。なんなら今のうちに言っておけば?」

な…なんだ?

「そう…ですね。時間も余りありませんしね」

俺の名前を呼んだ瞬間…小さく口端を緩めた…。

小さな変化だけど、俺には分かる…物凄く楽しそうに、いたずらをする子供の様な顔になった。

口元に曲げた指を添えながら、ゆつくりとこちらを見て…。

「 昨晚の初体験の痛みで、私は歩く事ですら辛いというのに…男性はズルいな、と 」

「ぶっつ!!!」

態々ロシア語で…トンデモナイコトをおっしゃいました。

「えっ…何? 何?」

「真っ赤になって照れる隆史さん…という、レアな表情を拝見できたのは、とても嬉しかったですよ? …その対象が私というのでなおさら…」

「勘弁してください!」

「…不満じゃないじゃない」

に…日本語お…。

これはカチューシャにも聞かせる為…か…?

「 昨晚…人の胸を散々おもちゃにした方とは、思えない反応でした 」

「」

…す…すつげえ、いい笑顔で凄い事を言い放った…。

「そういえば、隆史さんには話しておりませんでした。今日は…戦車道に關しての案内をするつもりはありません。…日常。後一年過ぐす私達の街に、貴方の面影を残しておきたい…そういった趣向での案内です」

「え…？ あ…はい、そうですか…」

「急に話が変わったわね…」

「…ですから…私は初めてでしたし？ 昨晚貴方には、私の部屋に来て貰うように企てました」

「」

変わってなかった!! というか!! 企てたって言いました!?

「…と、いう訳で、カチューシャ？ 私は特に機嫌が悪いという訳ではありません」

「…そ…そう。良く分からないけど…多分、ロシア語で何言ったかは…聞かない方が良さそうね…」

俺とノンナさんの様子見て、カチューシャが珍しく、んな事をおっしやいました…。

「ええ、賢明ですカチューシャ」

ノンナさん…すげえ…顔色良いなあ…。

「と…と…ところで、此処で何買うのよ。買い物のために態々来たんでしょ？」

カチューシャ！

俺の様子を見て、即座に会話を変えてくれた！

ノンナさんのロシア語で、あからさまに俺のHPが削られているのを察してくれた！

「隆史さんの洋服です」

「タカーシャの？ …ああ…まあそうね。ある意味で理解するわ」

「…まあ…捨てる…とは、言いませんが…」  
な…なんだ？

「まともな服が、他の女が選んだ服だけ…とか、我慢なりません」  
「…の…のんな？」

オペ子さん…女って言われましたよ？

「カチューシャも手伝ってください」

「え…私も？」

「はい。隆史さんをプラウダ色に染めましょう」

「乗ったわ!!」

あ…あれ？ 話の方向性が変わっていつてるような…。

いつの間にかカチューシャも流れに乗ってる…よな？ 即答した

よな!?

「あの…俺の意見…は？」

「まともな物なら、取り入れます」

「ま、ないでしょうけど」

「……」

「取り合えず、筆字のプリントTEEシャツは駄目ですよ？ 却下です」

「後、いい加減、ジープン以外も買いなさいよ。まるでおじさんよ？」

「いや…楽し…」

「ねえ、ノンナ？ プラウダらしく…赤いれましょ」

「そうですね、隆史さんのイメージに余り沿いませんが、組み合わせによつては、何とかなるかもしれませんね」

「あの…赤は流石に、派手すぎでは…」

「タカーシャの場合、量販品店の方が良いわね。下手に高いの買うと、逆に着なくなりそう」

「そうですね。ここならチェーン店もいくつか入ってますし」

「今後の事を考えると、その方がタカーシャも選びやすくなるわよね…」

「はい。お手本となりましょう」

…。

…あかん。ガン無視された…。

「上も買っちゃいますよ？ タカーシャの場合、迷彩柄のジャンパー

とか？ だっさいの選びそうでしょ？」

「そうですね。…冬場とか市場のジャンパー着てましたしね…。それに隆史さんの場合、ブルゾンの方が似合いそうでは？」

「ならついでにジャケットも一応、選んじやいませよ。後で本人に何が好いか、一応聞いてみましょう」

「そうですね。後は…下ですが…」

「あ、時間がない！ 先にお店に行きましょう、ノンナ！」

「そうですね、時間が大分掛りそうですし…」

…。

あの…ジャケットもジャンパーも一緒では？ ブルゾン？ なにそれ…。

いや…マネキンになるのは構わんが、服を…自分以外の服を選ぶのを、何故こう楽しそうにできるのでしようか？

女性って、そういう生き物だって聞いた事はあったのですが…。

まあ…ピンポイントで俺をロシア語経由で、地雷を手掴みでぶつけてくる様な、ノンナさんの発言が何時の間になくなったので良しとしよう…。

「あっ…後…もう一つ。時間が余ったら…ですが」

「何よノンナ」

「対、隆史さん用に、私の物です」

「は？ 対タカーシャ？」

ま…まあ、楽しいのならば良いだろうさ。水を差す事もない。

ただ…いや、まあ…時間がないとか言っていたけど…まだ2時間以上、午前は残っているのですが…。

俺のプラウダで過ごす時間は、服選びに大半を取られてしまいそうだ…。だからまあそんなに急がなくても…。

「メガネです」

はい、ノンナさん。手を握りましょう

「…なにそれ。ノンナ、視力良かったわよ…ねえ!？」

はい、ではちよつと急ぎますね？

「タカーシャ!? なに、急に!!」

「手…」

「ノンナの手まで引つ張って、何を急に…って、怖い!! 早歩き怖い!!」

「手…」

「だから、タカーシャ!! 貴方、背が高いから余計に怖い!! 聞いている!!」

「手…」

「タカー痛つたあ!! 釣り看板にぶつかったあ!! せめて下ろしてっ!!」

「手…」



その後の時間をすべて費やすと思っていましたのに…まさか服選  
びが、1時間掛からないとは、思いもしませんでした…。

選んだ物、全てが良い…は、選ぶ側からすると、非常につまらない  
のですよ?」

まあ…今の生活で、しっかりと着て頂いている様で、安心しました  
が。

「…いや、そりや着ますよ…というか、何故にして今! 此処で!  
態々言うのでしょうか!」

そうそう、メガネ…。伊達とはいえ、貴方に対してあそこまでの効  
力があるとは…正直驚きました。

「え?…ま…ま…すいません」

オーバル? とかボス…トン? とか? ネガネの種類があそこ  
まであるとは…知りませんでした。

しかし…確かにメガネも悪くないですね…。カチューシャの可愛  
らしい写真を、たくさん撮る事ができましたしね。

カチューシャと私、二人そろって、ある意味で隆史さんにおもちや



に…。

「言い方っ!! 勘弁してください!!」

あ、しつかりと今も持っていますよ?  
つけましようか?

「ぜひっ!! あ、いえ…すいません。…後っ! あ…後でお願いしま  
す」

そうですね…。

「二人きりの時の方が、都合が宜しいでしょうしね」

「なんで今、態々強調して言ったんですか?!?!」

…都合…宜しいでしょう?

「なんで、二回…って、近い! 近い近い!!」

…え? それは…その後の事と同じではないのですか?

「…はい? …は?!…ま…まさか…」

ホテ…むぐっ。

「何を口走ろうとしてるんですか!? はっ…! ワザと…ワザとです  
ね!」

…もがもが。

△▽△▽

ファッションングラス…とでも、いうのだろう。

伊達メガネだけでも、今のご時世かなりの種類と数があった。

何をどう思っつて、今日この日に…態々メガネ…いや、嬉しいけど…  
ね?

まあ…余りはしゃぐと、ドン引かれるだけだと思ひ、かなりセーブ  
したので大丈夫だろう。

むしろ、ノンナさんの方が凄かった…。

ほぼ無言…。

そう、無言で…カチューシャの写真を撮りまくっていた。

ポストン…淵無し…オーバル。ここの3種基本の物を、次々に掛け

てくれるカチューシャ。

そして、掛ける度に…何処から出した、その一眼カメラ…と、突っ込む気力が失せる位にカシヤカシヤ…。もはや写真を撮る事を隠す気もなかったのだろうか…。

店員さんの引きつった笑顔は忘れない…。

『 面白いえば、タカーシヤ 』カシヤカシヤ…ハアハア

『 んあ？ 』

『 随分とノンナのも、あつさりと決めたわよね？ 』ハアハア…カシヤカシヤ！

『 そうだな、ほぼ確定していたからな。淵なし！ 後、プラウダらしくレッドフレーム・オーバルツ!! 』

『 … 』カシヤカシヤツ！

『 …ふっ…今のカチューシャとお揃いだな…。それが？ 』

『 …い…いえ…えつと…なに？ 前から何が似合いそうかとか？ …想像してたの？ 』…カシヤカシヤカシヤカシヤカシヤ

『 …な…なんか、言い方に棘があるな…。そりや…思いつく時とかあつたけど… 』

『 ふ…ん。ちよつとキモいわ 』カシヤ！ …カシヤカシヤカシヤカシヤ

『 いや、ちよつと待ってくれ。だから、思いつく時もあったという話です。特段その様な事をいつも考えていた訳ではございませんよ？ 』

『 言い訳が長い 』カシヤカシヤカシヤカシヤ

『 …… 』

『 はあ…まあいいけど…。んじや何？ ダージンとか、あの小つこいのにも似合いそうなの…とか、あるの？ 』…

『 無 論 』

『 …… 』

『 …え、なに？ 』

『 ノンナ、もういいわ。時間よ。出ましょう 』

『そうですね。他の女はどうでもいいです。…この話は終わりです』

『…』 オンナツテ…

聞かれたから答えたのに…何故か二人、揃って頬を膨らませた…。  
ま…まあ、すぐにノンナさんも…

『メガネ…。盲点でした…普段付けている方も多いというのに…これ一つで、カチューシャの魅力が此処まで引き出されるとは…』

とか…ホクホクした顔で、機嫌が良くなつたから、大丈夫だとは思うけど…。

…で、だ。

カチューシャが言ったように、本当に時間だったようだ。そのカチューシャには、戦車道の関係での仕事が残っていたらしい。

まあ…主に昨晚の、無茶なへり運用の後始末があるとか何とか言っていたが…実際はどうだったんだろう？

昼食を済ませると「そろそろ行くわ!」…と、シャツピングモール正面玄関に横付けされた、迎えの車に乗って行ってしまった。

それは何時もの様…あの店で別れる時みたく、あっさり…手を挙げて…。

今思えば、カチューシャなりに気を使ってくれたのだろうか？

…ノンナさんは、彼女に同行していかなかった。

何時も大体一緒に行動している二人だ。カチューシャに仕事が残っているのならば、それに同行してもおかしくはない。

しかし、カチューシャに同行する事もなく、俺と一緒にカチューシャを見送った。

そして俺の横井はそれなりに量が多い荷物…というか、服。

ノンナさんが残ってくれたとはいえ、そのまま観光という訳にも行かないので、彼女が用意していきれていると言っていたホテルに荷物を置きに行こう。

…と、ノンナさんが提案してくれた。…それを手伝うと付いてくると言い、実際に付いてきた彼女。

そして今は、ノンナさんとの二人きりの状態で、昼下がりにホテルにいるこの現状。

一瞬、何故か…行動を誘導されている様な気がしたのは何故だろうか…。

ま…まあ、そのホテルの一室。俺の宿泊予定の部屋へ向かう最中、エレベーター内で…。

『…一つお願いがあります』

『え…？ あ、はい。なんででしょう？』

『そ…その。手を…』

『手？』

エレベーターという、ある意味で誰にも見られない個室。そこに入るやいなや、そんなお願いをされてしまった。

ちよつと…意外だった。彼女はそう言った事は淡泊…というか、あまりベタベタするのを好まないタイプだと思っていたからだ。

しかし聞いてみれば、俺が先ほど思わず握ってしまった手と手。それが余りにも心地良いと、そう感じたそうさ。

プラウダ高校学園艦での彼女の知名度と、制服姿であるのもあり、此処までの道中ではこんな事を頼めなかった…そうさ。

昨晚それ以上の事をしていたとしても、ソレはソレ。コレはコレ…と、うつすらと赤くした耳のまま、とんでもない言葉と共に、上目遣いでお願ひされてしまいました。

それも照れ隠しなのだろうな。言葉で了承をするよりも、手に持っていた荷物を下へと置き、行動で了承した。

少し汗ばんだ手が触れ、そして握り合う。…握った直後、顔を背け俯いてしまったので…満足頂いているとしますか。

…これが恋人…と、いう関係なのだろうか。

まだ一日しか経っていないが、今までの関係ならば考えられない彼女の行動が、それを一層認識させてくれる。

そして、そのままの状態で到着した宿泊予定の部屋。

変な空気だった。いや…まあ…悪い空気ではないが、変に緊張してしまう。

昼間とはいえ…荷物を置きに来ただけとはいえ…今現状、彼女が置かれていた状況というのは…彼女もまた理解してくれているとは思

う。

…。  
時間がない…と、ノンナさんもノンナさんで、焦っていた様だし…。

…。  
荷物…置くだけ…済むのだろうか？

▽

…と、思っていました。

狭い室内。

そこからは、甘く…官能的な声と音が、響き渡る。

バツバツと、汗を含んだ肌と肌が、何度もぶつかる音。

それに合わせて、響く喘ぎ声…。

それが飽きる事もなく、何度も何度もリピートしている。

何度も何度も…。

そして思う…。

甘く溶ける様な声が聞こえる先を見つめて思う…。

ここは…地獄だ…。

「…ふむ」

聞こえてくる先…。

それは、ノンナさんのノートパソコン…。

「一つお聞きしたのですが…」

「は…はい」

「…隆史さんの所持されている動画は、何故こうも「人妻物」が多いのでしょうか？」

「」

はい…ベツトに仲良く座っています。

はい……テーブルに置かれたノートパソコンを、これまた二人仲良く眺めています。

はい……先ほど購入した…淵無しのメガネをさっそく掛けながら…あからさまに勉強しましょう的な雰囲気…。

似合う…確かに悶えそうになる程に、彼女にはソレが似合うが、使用目的でなんかすっごい嬉しくないっ!!!

数分前…室内へ到着すると、彼女はおもむろに、手に持っていたバックよりノートパソコンを取り出した。

…それ持つて行動してたんすか…とか、心の中で突っ込んだが、んな事どうでも良くなる事が始まった…。

『では隆史さん。隣に座ってください』

『はい?』

テキパキとノートパソコンをパカツ…と開け、準備を始めるノンナさん。

何故だろう…何故、ここまで準備が良いのでしょうか? 予め、

こうなる事が分かっていたかの様な…。  
あ…。

スリープ状態だったのか、その画面はすぐに立ち上がり…綺麗に整理されている、ディスクトップ画面が映った。

あ…はい。壁紙が、最後に撮った写真だった。

あの店の前、おやっさんに撮って貰ったカチューシャとノンナさん。そして俺の3人の写真。

…なんて、感傷的になる暇すらなかったです…。

『』

動くカーソルが目に入り…進む先にあるフォルダー…。そのフォルダー名。

【重要：隆史さん秘蔵物 矯正案件資料】

…死にたくなった。

『…あ、あの…ノンナさん？』

『…なんでしょう？』

無表情でカタカタと、キーボードをタイプしている…あ、パスワード付きなんすね…。

先ほどまでの初々しい彼女は、何処にもいない!! またすつげえ無表情なのが、こええええ!

いや、一瞬でそのフォルダ内容が予想がついたけど! と言いますか!?! なんて…えっ!?! は!?!

『隆史さんの秘蔵フォルダを、拝見したと既に言いませんでしたか?』

…と、俺の顔を見て…どこか嬉しそうな顔と声色に変わった…。

『流石に入手してるとは思いませんよ!! とうか、どうやって!?!』  
ノンナさんの、俺の質問に対する答えが少々の外れの様な言葉だった。

…だったが、全てが繋がった。簡潔な…全てが分かる一言…が…。

『…隆史さんのお母様は、プラウダ高校で護身術の講師として招かれています』  
『』

あつつつのおお!! ババアアあああああー!!!  
やるっ!! あのババアは、確実に面白そうの思い付きで、息子のプライベートを平気で売る!!

何をどう思っただかは知らんが、ふざけんなああ!!

『…隆史さん』

『はっ!!』

そのまま彼女は、下に置いていたバッグから小箱を取り出して…そのノーパーソの横に置いた…って…えく…。

『避妊具というのは、これで合っていますか?』

『……』

…。

『…念の為、先ほど購入しておきました』

『』

『店員の方が女性で良かったです』

いやもう…言葉もなかった。

何時の間に…というか、えっと…コレ見た後…? ながら?

何この行動力…いや、そういう人だというのは、分かっちゃいたが

…エー…。

『はい、では検証です』

…。

……その一言で始まった検証会…上映会。

ま…言い方なんぞ、なんでもいい…。

恋人関係となった女性から、性癖全壊…基、全開の動画、画像集を



真横で見させられているこの現状…。

地獄…それ以外の言葉が見つからない…。

死にたい…。

「ノ…ノンナさんが…人妻物とか言わないでください」

「…答えになっていませんけど？」

また…淡々と喋るので…余計に辛い…。

「ふむ…この一覧を見る限り…今日、私は少し覚悟はしていたのですが」

「…いや、覚悟って」

またカーソルを動かした…って!!

「いえ…それでもまだ、さすがに外は…」

ああああああ!!

「しませんよっ!!」

「てつきりシヨツピングモールで、カチューシャの目を盗んで、暗がりにも連れ込まれるかとばかり…この…トイレとか…」

「話しながら動画再生するのやめて下さい!! ノンナさんの中の俺って、どうなってるんですか!？」

「え…でも、結構な数…」

「ぐっ…がっ!!」

「…後、高確率でメガネ…。え…あつ？ これ…何処に入って…え…おし…」

「聞いてください！ 勘弁してください！ もういつそ、ひと思いに殺してください!!」

しぬ…しんでしまう。

何がつてまず、心が死んでしまいます…。

真顔で、マジマジと見てないでください…。

「ええと…では、隆史さん」

「ナンザンシヨ？」

「あの…これは、まさかお尻に…」

「タブンソウデシヨウ」

「この方は、何故…え…えっ?! 3人っ!?!」

「ソウイウノガスキナカタモ、ヨノナカニハ、イルノデハナイデシヨウカ?」

「この方は…え…何処で…えっ!?! 学校!?!」

「イエ、ソコハウチュウデス」

なに? ほんつとに、何なのこの状況は…。

そこからしばらくは、動画の内容に対する質問を淡々としてくる彼女に対して…多分、俺の目からハイライトさんは逃げ出しただろう…。

しかし、止めるに止めれないし…逃げるに逃げれない…。

しばらくこの拷問のような…否、拷問の時間が続いた…。

「」

意識を完全に飛ばしていたので気が付かなかったが、すでに一つの動画が終わり、再生画面が真っ黒になっていた。

…どのくらい時間が経つたのだろうか。

まあ…動画も飛ばし飛ばしで見ていた様で、パソコンの画面の時計で確認すると余り時間は経過していないようだ。

「…隆史さん」

「ナンデシヨウ?」

表情が変わらないノンナさんが、そのノートパソコンを静かに閉じた。そのまま俺をジツ…と見ながら声を掛けてきた…。

ノートパソコンが閉じられた事で、この拷問が終わったかと少し安堵したが…考えてみれば、声を掛けてきたと言うことは…これから尋問でしょうか?

「此処までは、隆史さんの趣味趣向の確認でした」

「…ハイ」

ソウデシヨウネ…質問される度に死にたくなりましたから…。

「それを踏まえて…ですね？ 隆史さん」

「…ハイ」

「…私に何か、して欲しい事はありますか？」

「…ハイ…は!？」

思わず聞き返してしまった。

うつすら頬を赤く染めたまま…真剣な眼差しで、俺の目を見ている彼女と目が合った…。

え…してほしい事？

「私も女です。…この様な動画を見るのに抵抗があるに決まっています。…ですが、貴方の趣向を多少なりとも理解したく…努力は、怠りたくありません」

「…あのノンナさん。真面目なのは良いですけど…どっか間違った方向に行つてませんか？」

はい。素直な感想を口にしました…。

そうだよなあ…さすがに経験も知識も少ない女性が見る類の動画じゃなかったよな…。

しかも俺と一緒に見るとか…恥ずかしいに決まっている。根が真面目な彼女が出した間違つた行動…というか、答えがアレですかい。

「まっ…まだ、外とかは無理ですが…ど…努力は…」

「…あの…無理しないで下さい…自分で言うのはアレですが…かなり特殊な部類ですから…」

「…そうですね…隆史さんは特殊…」

「違いますよ!?! …そ…その…ああ言った類の動画って、基本的にフィクションですからね!?! 実録! …とか書いてあつても、大体やらせですから真に受けないで下さいね!?!」

「……」

「そもそも、複数のだつて…こう言つちやなんですけど、アレも男用に…要はアレ用にあるだけで、特段したいとかそういった事ではなくっ

!!

「…詳しい」

「」

ああ…もう、どうすれば…。

「…それでは、特に隆史さんからの希望は無いと…」

「……」

…。

ちよつと待てよ。

アレら見ても、こう言ってくれる…と言う事は…特に嫌われたりとかはされていない…と。まあ…確実に呆れられてはいると思うが…。ある意味で、性癖がしょっぱなからバレていると言うのは、今後やりやすくなっていないだろうか？

…こう言ってくれる彼女に対して、無茶はしたくない…したくはないが…希望…リクエスト…オオ…。

「ひ…」

「ひ？」

「一つ…だけ…」

「…なんでしよう？」

はっ…。まあ…彼女からすれば、抵抗があるかもしれない…コンプレックスだったらしい…。

それでももっ!! せめてこの初回に言っておけば! 後々の会話の選択肢が見えてくるだろう!!

…まあ…絶対に怒られるか…嫌がるだろうなあ…。

「そ…その…挟んで欲しく…」

「…挟む？」

怪訝な顔をされましたね…。

よしっ!! ここは男らしく玉砕しようかあ!!

「…む…胸で…」

「……」

あ…。

やつぱり…すげえ目が鋭くなった…。

「……はあ…」

大きいため息を吐いて、その場に立ち上がってしまった…。こちらを向き…見下ろす様に目線を送って来ましたね…。

「…男性と言うのは…全く」

ああ…やつぱり呆れられた…って…え!?

そのまま、ポチポチと…制服の前…真っ赤なちよつと変わったワイシャツのボタンを外し始めた…。

「あの…ノンナさん…? あの…」

「知人に聞きました…ああ言った動画を見せた方が、男性はその気になりやすいと…」

「はあ!？」

「確かにそうでした…まったく。確かに検証をも兼ねてはいたのですが…奥手な隆史さんが、こうもアツサリとその気になったのは…少々以外でした」

「はい!？」

「…:…また私に気を使って、手を出そうとは思いませんでしたから」  
制服のボタンを全て外し終え…淡々と俺を見下ろしながら…遠回しに言っている…。

この状況で動画を見せたのも…そういう事…か…。

「あの…何となく分かりました…けど、これじゃムードも何も、あつたもんじゃ…」

「目的の為に、そこには目を瞑ります」

「…:…目的って」

真っ赤なワイシャツ姿。首から下…バツクリと割れ、胸の谷間が強烈にその存在感を見せつけてくる…。

青いレースのブラジャーがあ…。

「では…」

プチツ…と、音を出し…その下着が左右に割れた。フロントホックが解放され…連動して胸も一緒に解放された。

音でも出しそうな程…その圧倒的な重量感を持つ胸が、重力に引かれて…揺れ跳ねた…。

「な…何故でしょう…。肌を晒すより…下着姿を見られる方が恥ずかしい…。サイズが大きと…碌なデザインが無いからでしょうか?」

…:…コメントに困る…。

しかし真っ白い肌と対照的な、濃い赤と青…。思わず見入ってしまった…。

本来なら下着姿を褒めたりとかしてあげた方が良いのだろうか…。

「では…隆史さんも下を脱いでください…」

「えっ…はっ…」

えっと…マジでこのまま…？ いや、ここで逃げたり余計な事を言ってしまったら、現状に至るまでの計画をしたノンナさんに恥を欠かせて…というか、本気で計画してたんだな…この人。

真面目な性格とかが、変な方向に暴走してる気がする…。

「は…初めてですので、至らぬ点もあるでしょうが…」

正直…断りたくない…。確かにあの動画のお陰で…まあ…はい。

そうだな。俺も腹を括ろう…彼女にちゃんと…って、アレ？ 挟むってだけで…ここまで…って事は…。

「いや…あの、意味分かったんですか？」

「…………胸の大きな女性が多かったですからね。加えて、ほぼ高確率で収録されましたから」

…声が…急に冷たくなった。

ストン…と、喋りながらもスカートを落としたノンナさん。

上の下着とセットな青いレースの下着が見える…。

わ…ワイシャツ一枚…前を全開……更には、メガネのノンナさん…。

り…理性が持ちそうもない…。

言われた通り、ズボンも脱いでいい…がああ…。

が…我慢…。

だから…その勘違いを正し…正解を…。

「ち…違います、ノンナさん」

「…はい？」

「それを挟んで欲しいとは当然思いますが、今回は違います」

「…違う？ …では、何を…？」

「顔を！！！」

「……………」

…間髪入れずに即答した…。

あ…久しぶりにゴミを見る目をされてしまったああ…。

ぶつちやけた話、パイズリして欲しい!! してほしいっ…がああ…。

多分…この機会を逃したら…ノンナさんは、二度としてくれないだろう…。

「…やはり隆史さんは、特殊ではないですか」

「ちっ…違いますっ！ 男ならみな憧れる恒例行事の様なモノ!!」

「…はあああゝゝゝ…」

あ…大きいため息をまた吐かれた…。

「…男性というのは…まったく…何がそんなに良いのでしょうかね…  
まったく！」

愚痴にも似た言葉を吐きながら…。

「…一度だけですよ？」

「ノ…ノンナさん？」

俺の視界を真っ黒に染めたくれた。

◇

初め…何を言い出すかと思ったら、こんな事でした…。

本当に、こんな事をされて、何が良いのか…理解に苦しみます。

しかし…私は違いました…。

「」

胸の中心を彼の顔に着け、抱きしめるように胸で堤んでみました。  
無駄に大きくなってしまった為に、うまくいかなかったので、両腕

で彼の頭を胸と一緒に抱きしめました。  
そして思います。

…こ…これは良い…。

これは良いですね！

胸、顔を挟む…と言いますか、頭を挟むという行為…。

私からすれば、彼の頭を抱きしめる形…。

ただ抱きしめるのとは違った感情が生まれます…。胸の中の…私の腕の中に彼がいる…。

子供の様な隆史さん…。すべてが私の腕の中…。

無意識に腕の力が強くなってしましますね…これは。ギュツ…と抱きしめるだけだと言うのに、こうも違う…。

むっ…少し隆史さんが動きますね…もう少し、大人しくしててください。

「ツツ!!」

ああ…良い。…本当にこれは良い…。

母性…とでも言うのでしょうか？ カチューシャを抱きしめたいという思いとはまた違う…。

胸の中で甘えるような彼が、非常に愛おしく感じてしまう…。

「グツ…ウウ…」

…。

…。

…。

…ああ…。

「つつはああ!!」

む…胸の中で、強引に上を向いた彼が、その胸の中から顔を出しました。

「し…死ぬかと思った…。」

「…どうしました？」

「い…息ができなかった…」



息？

「ノンナさんの肌が隙間なく埋めるから…こう…マジで死ぬかと…」

「…そうですか。ですがもう少し、こうしていい良いですか？」

「…あの…俺の話、聞いてました？」

「…そうですか。ですがもう少し、こうしていい良いですか？」

「…聞いてください」

…。

まだ…後少し…と、隆史さんの顔を抱きしめていたのですが…。

もそもぞと少し息苦しそうに…それでもいつもの様に、いつもの少し困った笑顔で、私を胸の中から見つめてきた彼と目が合った瞬間…。

母性が、愛情に変わり…気が付けば彼の唇に、また自ら唇を合わせていました…。

…。

ここまでの経緯を考えると、確かに雰囲気など…ムードと呼ばれる物は微塵もなく…。

それでも…。

ええ…それでもです。

唇を合わせた後に、彼から私を積極的に求めてくれたのは…嬉しかった…。

△▽△▽

正直に言いますと、いきなり胸で顔を挟んでくれと言われた時…何を考えているのだろう…この人は…とも思いましたけどね？

「

ええ…アレは…本当にとっても良かった…。

「

今日もアレ…しても良いでしょうか？

「  
」  
流石に、ここでは無理ですが…と、隆史さん？

「  
」  
どうしたのでしょうか？ 汗がすごいですよ？

「…あの…ノンナさん…ワザと…。やっぱりワザと言ってますよね  
!？」

え？ そうですよ？

「  
」

△▽△▽

う…うん。

本当に、彼女がノートパソコンを取り出してから…生きた心地がし  
なかつた…。

思い切つて言ったりクエストも、何故か最終的には彼女は気に入つ  
たのも謎だ。

しかし…一度、唇を合わせた瞬間…彼女の態度が豹変した。

態度…というと、少し語弊があるのかもしれないが…何というのか  
…感情的になつた？ いや、違う。

今まで我慢していた事が溢れだした…といった感じだろうか？

そう…普段のクールな彼女からは想像が付き難い程、ノンナさんの  
本質は…情熱的。

唇を合わせると、舐める様に吸い付き…覚えてたの様な、ぎこちな  
い動きをするけど…それでも俺を求める様に舌が動き回る。

唾液が混ざる音が、静かな室内に響く。

荒い息が、何度も繰り返し、目の前から吐かれる。

何度も歯がぶつかる。少し痛い程に唇を吸われ…時に優しく触れ

る。

時間がない。その焦りも見えるが、そこからは殆ど話をする為には、口を開かなかつた。

ただ求められ…それに応える様に求める。

どのくらいの時間を、ただその行為を繰り返したか…分からない。

小さく、呻く様な甘い息遣い。

彼女の髪が、汗と唾液で頬にへばりつく…。

まだ明るいというのに、変に室内が暗く感じた。

「はっ…あっ…んっ…つつ…ちゅ…」

彼女の声が、言葉を作ったのが…次の行動に移った時だ。

抱きしめられながらも、唇を合わせる行為に、俺から…行動で終わりを告げた。

顔を突然離し、体を離す為に、彼女の肩に手を置いた。

ボー…としたノンナさんの表情は、妙に艶っぽく、今までに見た事がないほどに…綺麗だった。

手首をつかみ、ベットへと押し倒す。

その行動に彼女もすぐに理解してくれた様で、特に抵抗もなく誘導されるがままに横たわった。

重力に引かれる乳房が、内側からワイシャツを外側へと開く。

小さく膝を折り曲げ…俺をジツ…と見つめてくる彼女を見下ろす。

真っ白な肌…その肢体を強調するかのような、真っ赤なワイシャツ。

彼女の体のラインを確認するかのように、掌で撫でる。シユツ…とした肌が擦れる音を何度も立てると、小さく…それでも何度も声を上げた。

…。

…。

で…思った。

両脚を一気に持ち上げ、頭を彼女の…まあ、股間へと潜り込ませると…。

すごい力で髪を引っ張られた…。

つか、痛い。

「つつ!? たつかつ!?!」

…彼女は…どうにも秘部を見られ…触れられる事を非常に恥ずかしがる。

そりや確かに恥ずかしいとは思うけど…ここまで来ても、更に恥ずかしがるから、それが普段の彼女とのギャップを感じ、余計にそぞる。メガネも掛けているから、また余計にすっごい…。

「でっ…ですから、それは必要ある行為なんっ…ひゃっ!!」

ノンナさんが…可愛い悲鳴を上げるが、俺はその問いに答えない。真っ青な下着をずらし、その恥部にへと舌を這わせる。

見なくとも分かる程に、ベットのシーツを強く握りしめているのが分かる。それは何かに我慢している様だった。

恥部…。先ほどまでの行為で、下着に染みを作る程に熟していた。…表現がちよっとおっさん臭いけど…まあいいや。

…膣口の周りを丁寧に…それこそ先ほどの様に、彼女の形をなぞる様に舌先を這わせる。

2回目だし…まあ…まだ少し痛みを感じるかもしれない。

ならば…と、それこそ念入りに愛撫を繰り返す。

「汚い…んっ…でえ…あっ!」

何かを言おうとするが、それは喘ぎ声に殺される。

音を聞かせる様に、グチュグチュと…指で優しく撫でまわす…。

ビクン!! …と、お腹を突き上げ、体を振じらす…。しかし逃げられないように、彼女の体を引き寄せる。

「あっ…はっ!! あっ!!」

それを何度も。

「恥ずかしっ!! 声っ…んっ!! あっ!!」

それを何度も。

「ひゃっ!! 中につ!!? あああ!!」

唾液で肌がふやける程に繰り返す。

彼女が俺に対して…特にキスを求めてくる程に…時間を掛けて…何度も。

…。  
…。

気が付けば、股間が…痛い位に膨張している。

ある意味で、非日常感が物凄かった…。久しぶりの行為もそうだが、彼女との関係が…まあ…改めて実感しているのもあるのだろう。

見知った顔…それこそ、ほぼ毎日顔を合わせていたノンナさん。

そういや、最初…ドロップキックから始まったな…。

すげえ出会い方だったわ、本当に…。

「はっ…はっ…た…隆史さんは…」

鋭い目つきで睨まれて…初めは、本気で嫌われていたんだろうな…。

「…意地が…悪い…です…」

彼女の脚を、もう一度少し…上げる。

その行為に彼女は力なく、ただ…なされるがまま。それでも、どこか…満足げな顔をしている。

「あ…あの様な…声…。私も出すんですね…」

はっ…。今は手で口元を隠し、少々恨みがましい目を向けてくれる。

「…昔からの反動…でしょうか？」

「はい？」

ノートパソコンを置いていたテーブルを、手探りでその横に先ほど置かれていた箱を探していると、そんな事を口にした。

…反動？

「小さな頃から、体の成長が他の同級生よりも早かったお陰で…年相応に見られませんでした…」

今度は、露わになった胸の頭を手で隠しながら、恥ずかしそうに…そして少し寂しそうに呟いた。

「…まあ…何となく気持ちちは分かりますよ？ …俺もそうでしたから」

「ふふっ。そうでしょうね…想像が容易いです」

これがノンナさんの素…なのだろうか？ …所々子供の様な仕草を覗かせる様になったな。

「ですから…ええ。やはりその反動でしょうね…貴方には変に甘えてしまいます。…何と言って良いか…少し難しいですけど…ね？」

「…それも何となく分かります」

はつきりとその部分は口にしないが、恥ずかしがったりする仕草。少し拗ねたり…強く嫉妬したり。

年相応に…いや、年齢よりもずっと年上に見られたりすると、周りの扱いも自然と見た目年齢に引き上げられる。

だから彼女は、他人に甘えるよりも甘えられる。頼る事よりも頼られる…。そんな人生だったのだろう。

同じ自分の欲求を…我慢していたそんな思いを、俺に漏らしてくれている…のだろうか？

…なんだろう。

変に…それがうれしく感じる。

言葉にしなくとも、それがなんとなく伝わってくる。

気が付けば、彼女はまた俺の首へと腕を回し、また唇を合わせてくる。

その腕に力を入れ、俺を引き寄せる様に体重を掛けた。

だからそれに応える…これは…まあ…そういう事なんだろう…。体をずらし…脚を動かす。

手に握っていた避妊具の封を切り、彼女からは見えないように、片手で装着していく。

そのまま何も言わないで…唇を、舌を絡ませながら…ゆっくりと彼女の入り口へと…。

愛液で滑りやすくなっているのと、丁寧な、更には丹念にした愛撫のお陰で、先端を押し付けると…ヌルツと滑り込む様に入った。

一瞬、体が小さく跳ね、重ねている口から小さな吐息。

少し入った先端が、グツ…締め上げ、侵入を拒んでいる様に感じる…が、それがまた気持ちが良い。

「んっ…い…ふっ…!!」

そのままゆつくりと…腰を押し込み…彼女へと入っていった。

◇

初めは…まだ少し痛みがありました。

愛撫…というのでしたよね？ あ…下をこう…口で舐められる  
というのは…。

アレは…正直、どうにかなりそうになる程に恥ずかしいですね…。  
隆史さんが何故か、嬉しそうにするのが非常に憎らしく思いますが。  
そのお陰…なのでしよう。その痛みもすぐに気にならなくなりました。

お腹の中が内側から広がって行く感じ…が、ものすごく…違和感が…。

「大丈夫ですか？」

…と、彼は心配して声を掛けてくれる。

しかし、私は答えられなかった。

もう…頭の中が真っ白で…。

ゆつくりと彼が入って…来ているのですよね？ 痛みとは別の感  
覚が強く湧き上がってくるので、混乱するばかりでした。

喉から熱い息が何度も無意識に吐いてしまい…変な声が溢れて…

ああ…もう。

一瞬間を過つたのが、あのいやらしい動画。

画面の中の女性の様…その…呆けたような顔を、私もしてしまっ  
ているのでしょうか？

返事が出来ないのを、彼がどう思ったのか…少し苦笑して、顔に手  
を添えてくれた。

自然と彼を抱きしめる腕に力が入り、体を寄せてしまう。

ゆつくりと動き出した彼は、体の内側を…こう…お腹の下を撫でる  
ように動く。

なんと言つて良いか分からない感覚が、何度も押し寄せてくる…。

…と、短時間ですが私が意識できたのは、こんな事だけ。  
彼の動きが徐々に早くなるにつれ…真っ白な頭の中が、さらに白一色に。

思考を塗りつぶされてしまつていく…。

何度か、途中…意識ができたというのが分かった時は、大体が体が硬直した時…光るように真っ白になった次の瞬間だけ。

全てが心地よく…気持ちが悪くなり…ずっとこうしていたいとリピートして繰り返す感想。

全身を覆う気持ちよさを、ただ…感じていたい。

私は、どの様な顔をしているのでしょうか？

私は、どんな声を発しているのでしょうか？

顔が熱く…喉も熱い。

それでも…恥ずかしくとも、しばらくこの感覚を堪能したい。

…。

………。

…あつ。

それはそうとして、アレら動画は、後で彼のパソコンより全て、削除してもらいましょう。

◇



どの位の時間、彼女を抱いていただろうか。

俺のサイズじゃ特にそうだろう。初めはまだ少し顔をしかめていた。

全体が入った時：まだ二回目というのもあるだろう。締め付けが凄かった…。

ゆっくりと何度か浅く動き、彼女が慣れるのを待とうとしたが：正直、避妊具をしているとはいえ、そのおかげで少し動かすだけでも気持ちよく…。すぐにいってしまいそうになる程に隙間なく締め付ける。

何度か小さく動いているうちに、彼女の声質が変わった。

少し苦しそうな声色が、段々甘い声色に。

出来るだけと：念入りに愛撫したのが、ここでも幸いした。少しずつ快感を得られるようになっていく。

…と、ここでも変に分析し始めた自分が、少々嫌になった。

変な癖…の様なモノだろうが、さすがに酷いのではないのだろうか？ …と。

難しい…。

彼女の体を心配すると、変に彼女を観察し、変化を考えてしまう。

ただ、俺が好き勝手するのもまた、違うと思う…。

そこでまた考え込んでしまう。

考えながらも、ゆっくりと腰を動かしながらも彼女の顔を見下ろすと、彼女は涙目になりながらも俺の顔を：目を見続けてくれていた。

…顔を腕で引き寄せ、口をまた重ねる。

何度もその繰り返し。

繰り返し、繰り返し：気が付けば、彼女の声は完全に甘い声に変っていた。

その声が耳を刺激し、徐々に動きも早くなる。

…俺の考えは杞憂だったのだろうか？

理性とは何なのだろうか？

何が正解で、不正解か分からん。  
ノンナさんの行動に応える様に…いつの間にか…ただ彼女を貪欲に彼女を求めていた。

…。

事が終わり…少し冷静になると思いました。

え…なに、ノンナさん。めっちゃエロい…とか、ただ単純に思ってしまったので、多分俺は最低だ…。

彼女は どうにも、対面するのが好んだ。

初め正常位…顔が見えるのが宜しいそうです。

見下ろす彼女の白い肌が、何度も弾み、零れ落ちそうな胸が何度も揺れる。

奥に当たる感触を何度か繰り返すと…多分…ノンナさんが果てた。

体を振じらせ、目を開き、少し混乱したかの様な顔をしていた。

激しい息遣いと、俺を見上げる潤んだ瞳。

…。

それが切っ掛け。

ぶつちやけた話…理性が此処でぶっ飛んだのだろう。

なんかもう…ここからが凄かった。

昼過ぎ…当たりにホテルへと入ったと思う。

何時間経ったか分からない程、それこそ夕食を取る事すら忘れ、お互い求め合う切っ掛けとなった。

ロシア語と日本語…共に交じ合わせながら、彼女はただ求めてきた。

もつと…もつと…と。

ベットのシーツはくしゃくしゃに乱れていたが、それを気にする事もない。

…。

後背位。

…これ…ノンナさんは、すっごい恥ずかしかった。

俺が少し体を起こすと、繋がっている所が見えるからだそうだ。

顔が見れないんで、何処を俺が見ているか分からないというのが、彼女のご不満でした。しかし！ あのノンナさんが、恥ずかしがる仕事草を堪能できるので俺は好きだ！

彼女の汗を滲ませたお尻が、腰をぶつける度に揺れる。手を思いきり開き、揉みしだいていると、ある事に気が付いた。

：ノンナさんの胸が見えない…。

これ絶対に激しく揺れている！ そう思わせる程の質量！

それと目に映るのは、彼女の後頭部。：ノンナさんの蕩けた様な、顔が見えない…。

しかし、それはそれで彼女の体の動きや声が、その状態が逆に官能的で：これはこれで捗った：なあ…。

騎乗位。

：これは彼女は思いの外、お気に召した様だった。

やはり顔を見れるというのは、安心するのだろうか？　：下見上げる胸が凄かった。

自ら動ける：主導権を取れるという意味も、彼女からすれば良いようだ。：下から見上げる胸は踊っていた。

俺から良いようにされるがままというのは、悔しいと仰り：自ら腰を動かし始めるとかね：動画で動きは見たので、何となく分かったそうです。

…。

うん…。

もう：ホテルの室内、全ての場所を使った。

壁に手を付かせ、脚を持ちながら：彼女を抱き上げ：まあ駄弁とかいう奴ですね。

窓：テーブル。ソファ…。

一瞬冷静になって、流石に休憩…：とか思い一度浴室へと向かえば、彼女も一緒に入る。

シャワーを浴びながらも、またそこで。

キスをし、体をまさぐりあい…そしてまた始まる。  
彼女からのキスで、何度も再開する。

…。

俺も大概だと思うが…物凄く驚いた事が一つ…。

そんな俺に、ノンナさんは全て応えきった…。

この体…自分でも分かるくらいに絶倫体質だと思うのだけど、それにすべて耐えきった。

いや？ むしろまだ足りないと思わせる程だ。

…そして気が付けば、そのまま寝てしまった。

ベットで抱き合い、繋がりがあったまま。

一度、夜中に目が覚めので、それで気が付いた。

横に…目の前に、彼女の寝顔があったから。

小さく寝息を繰り返し、俺の腕を枕にしながら…俺の額に額を当てて。

こうして…プラウダ高校学園艦での最後の日が、何時の間にか終わっていた。



…と、後でカチューシャに報告された時は驚きました

「

本当は私も、お見送りに行きたかったのですが…まあ、彼女！と  
して…いえ、恋人！として…電話もメールもいくらでもできますし

ね。事実その後、すぐにしましたのよね？」

「はい。ですから本日…本当に本当にお久しぶりにお会いできて…まあ、色々和我慢が出来ないかもしれませんが…嬉しくて仕方がありません」

「あ、後…あのエッチな動画は、しっかりと消去してくれましたか？」

「…あら、お邪魔虫

「…どちらが…ですか。私に用があるのは隆史さんだけです」  
「いい加減にして下さいっ!! 隆史さんっ!! 何を何時までも呆けているのですかっ!!」

「はっ!!」  
「…あら、お邪魔虫  
「…どちらが…ですか。私に用があるのは隆史さんだけです」  
「そうですか。私も彼に…そう「彼」に用があるだけです。」

「そのワザとらしい話し方も、そろそろ止めて下さい。不愉快です」

「あの…華さん…?」

「…何ですか不埒者」

「人の恋人を、人気のない場所へ誘い込もうとしている方に、人の恋人を不埒者呼ばわりされる謂れはありませんね」

「……………」  
「はっ…華さん!? 顔っ!! 顔怖い!!」

「…結構。恋人…ですか。それはそれで、事実でしょうから? 私から何も申し上げませんが隆史さん」

「流れる様に呼びましたね…なんですか…」

「ワザとらしく、私に聞かせる様に、態々先程から口を開いてるこの方と、お付き合ひされているのは理解しました」

「…テント前で言った方が宜しかったでしょうか?」

「ノンナさんっ! ちよっと…いや、ちよっと黙ってて…」

「…分かりました」

「……………どうするのですか」

「…えつと…はい?」

「みほさん然り、今の…何角関係にまでなってる、この泥沼状態をどうするおつもりですか…」

「…そんな事、貴女には関係ないと思えますが? 部外者でしょうか?」

「貴女には聞いておりません」

「エツト…エー」

「そもそも、無線機でも隆史さんは私の事を言っていたのに、何を今さら…」

「…」

「…ハッ」

「…イラッ!」

「正直に申し上げますと、西住姉妹とはその内に相見えなければならぬとは、考えてはいましたが…貴女は何なのでしょう? 横恋慕ですか? …見つともない」

「…はい? 横恋慕? 私は皆さんの気持ちを尊重しているだけです。私は彼に対して異性と感じておりません」

「…は…華さんが此処まで感情的になるなんて…」

「…白々しい」

「しっ…失礼な方ですね! 良いですか!」

「何でしょう?」

「たっ…確かに、殿方としての嫌悪感はありませんが」

「…が?」

「…いい、一応止めとくか…はっ…華さん!」

「転校初日でナンパしたり」

「…隆史さん」

「」

「みほさんのお母様に締まりのない顔を披露したり」

「…タカシサン?」

「」

「そのナンパした沙織さん助けたり…あ、これは別に…あ、でも誰彼構わず…」

「タカシサン、チョットオハナシガ」

「ノンナさんっ!!? 近いっ!! 近い!!」

「……………」

「ドウイウコトデシヨウカ? ナンパ? ヒトヅマ? アア、ソレデアノドウガ」

「聞いてっ! お願いだから聞いてください!!」

「……………異性として…異性と…」

「…まってっ!! 本気で待ってください!!」

「はい、待ちます。マチマスカラ、コツチニキナサイ」

「……………」

「…あの…華さん? どうしました? あの…なんで近づて」

「……………」

「…………チツ」

「華さん…!!? 華さん…!!?? ノ…ノンナさんも!? なんっ…!!?」



小さな連絡船。

小さな…といっても学園艦から見れば小さく感じるだけ。…貨物なども載せる為に実際にはそれなりの大きさ。

その甲板で、俺に肩車されたカチューシャが、俺の頭の上から口を開いた。

…出航時間が間もなく訪れる。

この船には乗らない、彼女は船から降りる時間でもある。

「んつとに、いいのかしらノンナ」

「…まあ」

朝。

起きたら彼女はいなかった。

代わりにメールが一通。置手紙…とかじゃないのは、時代かね…とか思ってしまった。

…朝、寮にいない場合、色々と問題が出る為に、早朝目が覚めた時に帰ったの事。

そして簡単な別れの挨拶。まあ、別れ…とは少々違うかもしれませんが、んがと、頭に一言入っていた。

昨晩はカチューシャの気遣いで譲ってもらったので、本日はカチューシャの番だと言う。

随分とあつさりしていると感じるかもしれませんが、顔を合わせると…また…でしょう？ との事。

…また…なんだろう。

一瞬、寒気を感じたのは何でだろう…。

普通ならうれしい事だと思うのですけど…。

「夏休みには青森に帰ってくるんでしょ？」

「ん？ ああその予定だ」

「まつ！ そうよね！ とー！ ぜんよね!!」

「そつすね」

肩車していて見えないが、言葉で何となく分かる。…胸を張ってるな。

つと…いい加減、時間か。

そのまま歩きながら、何となく可笑しいと笑ってしまいそうになる。…送られるはずの俺が、降船場へとカチューシャを送るか…。

「タカーシャ」

「んあ？」

「タカーシャには、悪いけど…今年も私達が。…プラウダが優勝を頂くわよ」

「はっ。なんで俺に悪いんだよ」

まほちゃん。…黒森峰との事を言っているんだろう。



それに関しては、俺から言う事はない。

「どっちも応援してんだから、気にすんな」

「気にしちゃいけないわよ。というか…どっちもつけていい加減にやめなさいよ。ノンナが怒るわよ?」

「はっはー。大丈夫大丈夫」

「八方美人は己の立場を崩すわよ?」

「大丈夫だって、ノンナさんもそこら辺は理解してくれるって、言つて………つつつ?!?!」

な…なんだっ?!? なんなんだ、今の怖気はっ?!?!

戦車道…での事じゃないよな…。

「タカーシャ? どうしたのよ」

「…い、いや…大丈夫」

「ん? …まあいいけど。聖グロ連中に対し見たく…誰にでも良い顔しないですよ? タカーシャって、気が付いたら女に囲まれてる気がするからね」

「はい? それこそ大丈夫だろ…俺が、んな事にな…る…はず…」

なんだ…この妙な悪寒は…。

「……ノンナ…怒るわよお? …本当に…どうなるか私にも分からないわよ?」 コワイ

「……ぜ…善処します」 コワイナ

何故か、樂觀的な事が言えなかった…。

連絡船の出入り口。

すぐその下が海の為だろう。潮の匂いが鼻に着く。

学園艦と繋ぐ橋を前にすると、カチューシャが体を少し起こした。頭の上腹を乗せて、上から俺の顔を覗き込んできた。じつ…と俺の目を見る為に。

「つ…つ…つ…つ…」

頭の上のカチューシャ声を掛けるが、彼女は動かない。

「タカーシャ」

「な…なに?」

真剣な眼差しに変わると、睨みつけるような目が鋭い。

「…今回は、ノンナに譲ったわ。ええ、しょうがないわ」  
「はい？」

「だから私も、奪う程の気概は、見せないとダメだと思うの」  
「…うん？」

「…ま、一言で言うと、負けっぱなしは私の性に合わないの。知ってるでしょ？」

「あ…ああ、カチューシャ、負けず嫌いだしな…って、よく話が見えな  
いんだけど…」

「…つまりこういう事よ」

…。

……。

あの…えっと。

…は？

「…つと」

呆然としてしまい…完全に固まってしまった俺から、彼女自らスト  
ンと降りた。

「…案外、覚悟を決めると…思ったより、恥ずかしくないわね。すんな  
りできたわ」

「……………」

「ふー。タカーシヤ、良い？ 私は「小さな暴君」…なんて、不愉快な  
二つ名なんて付けられるぐらいよ？」

「……………お」

「私はね、奪うのが大好きなの」

…。

せーの。

「お…お前、何やってんの!?!」

「何って…ノンナと同じことよ」

はっ！ …と、どこか誇らしげに言ってるけどな!?

ま…前かがみのまま…逆さのまま…カチューシャが顔を合わせて  
きた。

一瞬…一瞬だけ…だけ…どお…。

指をこちらに指し…また胸を張って叫んだ。

「光栄に思いなさい！ 私の初めてよ!!!」

触れただけ…だけど!!

逆さまのまま…口に…。

「つまりは、そーいう事よっ!!」

そのまま音を立てながら、橋を渡り…って、耳真っ赤ですが？

カチューシヤは、学園艦への出入り口に立った。

一瞬、こちらを振り向いて…。

「だから…次に会えるの…楽しみにしてあげええ…え…」

…。

今更になって恥ずかしくなったのか…その場にしゃがみこんだね

…。

顔を手で覆ってますね…。

「つつさいわねっ!!」

…。

何も言ってますんがな…。

うう…と、うめき声を上げながら一気に立ち上がり…。

「じゃっ…じゃーねっ!! ピロシキツツツ!!」

…と、捨て台詞の様に叫び…カチューシヤは、学園艦の中へと消えていった…。

…。

…。

ど…どうしたら…。

湿っぽい別れよりかはマシだと…えつと…。

えー…。

ノンナさんには…こりや…言えんな…。

アンケート結果と…スキル【壊】

「…」

「また…一人増えてます…。そろそろ確定してくれないでしょうか…彼」

「…」

「次回のお茶会の時にでも、ちよつと強めに釘を刺した方が良いでしょうか…」

「…エリス」

「ひゃああ!!」

「…」

「な…なんですか、先輩！ 何時の間に私の神域に…つて…」

「…」

「どうしたんですか…。顔色がすっごい悪いですよ？ 髪の毛と顔が同色になって誰か分かりませんかよ？」

「…うっさいわね。アンタ…隆史の影響受けすぎ」

「そつ!? …そんな事ないですよ？」

「…どうだか」

「だから、なんですか？ もう…いきなりすぎますよ」

「ちよつと…コレ見て。久しぶりにアッチの世界線の隆史見たら…」

とんでもない事になってたわ…』

『…あ…あつちの…ん？ とんでもない事？』

『ちよつと…洒落になってないわ…。よつ…と』

『???』



ユニーク・スキル「壊」

結局、能力…効力は不明のまま。

アレから、それなりに時間が経ったというのに、脳内で検索しても相変わらず解らない。

それを触媒に、スキルが派生して出現なんて、今までなかったのに…。何でこれだけ？

派生するのならば、逆に他のスキルと干渉して何かしら解るかもしれないと、発現しているスキルを片っ端から干渉させてみたが…弾かれるか、エラーが出てお終い。

…あの時、このスキルだけ駄女神が言う、自動音声で聞こえたのも気になる…。

「…」

与えられた…というか、押し付けられたスキルを、必死で調べようなんて今まででした事がないな。

…正直、恐ろしい…。

このスキルだけ、俺の意思とは関係なく発動していた。…といのもあり、更にその恐怖心を浮き立たせる。

お陰で、解らないならば仕方がない。…と、後回しにする事もできない。

大きいため息を吐きながら、何気なく顔を上げると…オレンジ色の夕空が目の前に広がっていた。

…はあ…どうしたもんか…。

「ため息つてえ…先輩、聞いてますう?」

「あ…はい。聞いてます聞いてます」

あ…はい。

謎スキル考案もそうだが、コレもまた俺の頭を悩ませている…。

こ…公園。そう、あの公園だ。

みほ、マコニヤン宜しく、俺がはっちゃけてしまったあの公園…。  
人氣が段々と減ってきたその公園の…あのトイレ付近、ベンチに並んで座つとる。

学校で言っていた通りに、マジで恋愛相談なんていうレア物を、本当に俺になんぞにしてくれる。人生初だぞ…。

…しかし、この宇津木さん。

人払いのスキル発動中に、何故学校にいる事ができたのだろうか?  
…発動した時に学校内にいたとしても、すぐに立ち去る気になるのだけれど…。

自販機で購入してあげた飲み物を、チビチビと飲みながら、少し浮かれた様が続けて話し掛けてくる。

「でもお、先輩と二人きりつてえ…なんか、しんせくん」

相変わらず、独特の喋り方ですね…。

「でえ…タラシ先輩もそうなんですかあ?」

「えつと…な…何が?」

しかし…彼女の恋愛相談…とやらの、その相談内容…があ…。

「西住隊長に、エッチとかいっぱい迫ってますう?」

「———」  
ん? …なんだ?

「どうなんですう?」

「…ま…まあそれなりに…」

「わあ…びっくりい…。ずいぶんと、アツサリと言ってくれましたねえ。それに、やつぱり一緒に住んでいるだけありますねえ」

…そういう関係になっていると暴露させられた。

迫る…か。むしろ最近は逆だ…。西住流つて…肉食系なんだなあと、あの姉妹見て思い知らされてる今日この頃です。

つか、なんで俺もあつさりと云つちまったのか分からん…。不思議な魅力があるよな…この娘。

正直に言おうか。スキルの考案なんて、ただの現実逃避だっ!! こんな話になって答えりやいいんだよ!!

さつきから、現在の彼氏さんとやらの…なんつーか…なんつーか…。

少し乱暴だの…なんだの…思いつきりアツチの話だよっ!!

こりや、相談ですらねえ…ただの猥談だ!

「と…年頃の男は、そんなもんだよ…」

「やっぱり、おサルさんなんですネえ」

「…い…言い方…」

「それでもお…場所位は選んでほしいんですう」

ミリタリールックつで、したいと言われるとか…：学校でも迫られるとか…。

「おかげでえ…この前、練習終わった後とかに言われたんですよ？ 着替えないでほしいってえ。確かにずううと、それは断ってきたんですけどねえ…だからってえ」

「…そ…そうですか。まあ…練習終わった後とかじゃ…気持ち的に嫌だわなあ」

「そうなんです。待っていてくれたのは、嬉しいんですけどお…」

…。まあ…流石にこの前までは、決勝戦に向けてで忙しかったからなあ…。

戦車道履修してなきや、夏休みというのもあり…彼氏さんとやらも会う機会が減る事もなかっただろうに。

「パンツァージャケット…エキシビジョンでも着ますからあ、汚れちゃったら嫌だし…。また今度つて事でえ、その時は断ったんですけどお…」

「はい…まあ…」

「それでも？ エッチはしたかったらしくてえ…帰りに…えっとお…：…そのトイレで…」

少し恥ずかしそうに、公衆トイレ…俺が使った場所じゃない、その

端に個室としてある障害者用トイレを指さした。

：先程から思うが：彼女は普通に：そう、ごく普通に語る。

こんな話、同姓でも話すのは抵抗があるんじゃないか？ と、思うような内容を、よりによつて俺という異性に、ベラベラと話している。ため息だつて吐きたくなるだろう…？ 学校で確認をしたが：彼女、やはりスキルの影響を受けている。だからだろうが…。

頭を抱えて、少し項垂れてしまうと：俺が彼女の話を聞いて、照れていると思つたのか：俺の膝に手を置き、少し摩りながら楽しそうにココロと笑つた。

「先輩が珍しく照れてるう。かわいいく♪」

：照れている訳じゃなくてですね？ いや、でも自然と流れる様に俺の膝に手を置くとかの、スキンシップには少々照れますけどね…。その手を軸に、照れている…と、思っている俺の顔を覗き込んできた。そしてまた無邪気に笑う…。その覗き込む時に上目使いで見てくるとか…？

なんとというか、男心を撥る仕草が妙に自然に行うよな…宇津木さん。こりやアレだ。天性の小悪魔タイプだな…。

つか、俺の顔を見て可愛いと…何故思う…。

「でもお…：そういうのつてえ、なんか落ち着かないじゃないですかあゝ」

「いや、まあ…：そうだろうけど…」

しかし…先ほどからの彼女の相談が、今一要領を得ない。同意と否定を繰り返し求められている。

彼氏さんのエロい愚痴を、延々と聞かされているだけな気がしてならないんですが？

あ…ソレだ…：わかった…。

彼女…ただ、愚痴りただけだ…。

こんな話、誰にでも話せる内容じゃない。…じゃないが、誰かに聞いてほしいって所だろう。

：スキルの影響で、俺に対してだけは話せる様になっている…つて事じゃないのだろうか？ あれ…：欲望を開放するスキルだったよな



…確か。

ならちよつと変だなあ…。

ま…いいや。

俺の責任でもある。…黙って聞いてやろう。これは、ストレス発散という奴も含まれているのだろうな。

それにある程度話せば、スキル効果も切れるだろうから…まあ、スキルの影響ならば、記憶操作も効くだろう。

ある程度、影響が少ない程度で、この恥ずかしい暴露の記憶を消してやろう。

「———」

…？

「スリルがあつて良い…とか、言ってみましたけどお。男の子は、そうなんですかあ？」

「スリ…ル？」

「でもそれ、男の子だけじゃないですかあ。気持ち良いのも男の子だけでえ〜…」

「あ〜…いや、そりや違うぞ、宇津木さん」

「えっ…？」

…あ…アレ？

この相談で、初めて俺は意見を言った。

それに対して、少し驚いたのか…それとも嬉しかったのか…少し目を輝かせた。

その輝きの奥には…スキルに掛かってる人間特有の…歪んだハートマークが見えた気がした…。

《「———」…ガ、発動シマシタ》

…なんだ？ まただ…。

…ま…まあ…いい。今は目の前の宇津木さんだ。

背もたれに背中を預けて、腕を組んだ。

…彼女の顔を改めて見た時…少し視界に入ったが…周りに人影が殆どいない事に気が付く。

そして…何故か、ス…スラスラと、舌が回る…。

普段なら、同姓に対してでも普通、口にしない事も簡単に口にできた。

「まず始めに…話を聞く限り、宇津木さんは、自分本位の彼氏さんとのSEXが、気持ち良くはないと」

「…」

…オカシイ。

「宇津木さん？」

「あ…いええ…ちよつと驚きましたあ…」

「何が？」

的外れな事を言ったか？

俺の言葉に、目を少し丸くしていた。

「タラシ先輩…随分と、はつきり言ったのでえ…」

…ソウダナ、オレモオドロイテル。

「…き…気持ち良くない訳じゃないんですう…ちよつと時間が掛かるっていうかあ。始めはちよつと痛いというかあ」

「ふむ…やつぱり、そこは若いってだけだ。経験が乏しいってのもあるだろうな」

「つまり、おサルさん…」

「まあ…うん。もうソコは肯定してやろう。高校生だし、仕方ない」

淡々と話を続ける俺に、少し引いてる…つか、言って来たの君からでしょうが。

「でも隆史先輩い？ それは、先輩にも言える事ですよねえ？」

「…ん？ まあ…そうかもな」

驚いた顔はもうしていないく、今度は少し…何と云うのだろうか？

ちよつと…華さんに似ている表情というか…。

…高校生らしからぬ顔をしていた。つまり…妙に色っぽい…。  
上半身を俺に寄せ、問い詰める様に顔を近づけ…。

「教室で…五十鈴先輩と何してたんですかあ〜？」

…。

……。

《 一 ――― 一 》：ヲ、確認。破壊…成功 《 》

優花里は、気が付いてはいただろうが…。まあ…宇津木さん、流石  
経験者。…気が付いてたか。

…。

アレ？ …変に冷静だぞ…？

オカシイ…普段なら…

「隆史先輩、浮気してえ〜西住先輩、可愛いそお〜…ですよねえ？」  
「揶揄うように…それでも、いつもの様にコロコロと笑いながら、  
はつきりと言った。」

「…見てたのか？」

「見なくても、分かりますよお〜」

「……だよなあ。」

「あとお…凄い事、言っていていいですかあ〜？」

「どうぞ」

「あんこうチーム…。全員の先輩とエッチしてませえん？」

「……」

「あつ！ 良いんです、良いんですう〜。男の人って、そういうモン  
だあ〜って、雑誌で読んで知ってますからあ」

校門前で、みほ達と別れる前に宇津木さんは、俺にする相談内容を  
全員の前ではつきりと言った。

しかし、それに対して麻子ですら、特に驚く様子はなく…しかも、俺

にぴったりと言い放った。それで、ピンツ…と、来たらしい。

俺の置かれている現状と…特に華さんの態度で、どこか確信したみたいだ。

「しかもお…西住隊長…それ知ってますよねえ？」

…なんだ、この子。

「なんかあく思いついたってだけじゃなくてえ…何となく確信めいて分かつちやっただんですよねえ」

吐息…と言っても良い程の、少し熱っぽい息を吐きながら、俺にしな垂れかかってくる。

一年…15・6歳の女の子の行動じゃない。

…これもスキルが関係している…のか？

「私い、彼の浮気とか…許せる程、優しくないんですけどお…何故か、気になつちやってえ…」

「……」

スキル「鑑定」

…やはり、彼女はスキル「欲望」の影響を強く受けている。

沙織さんと似たような、知識欲…という名の欲が、暴走状態だ。

耳元で彼女が囁く。

男の子…彼氏は、宇津木さんと寄りを戻したのは、ただエッチを…SEXしたいだけなんじゃないかと。

逆にSEXとは、ネットや本に記された通り、本当に気持ちが良いものなのかと。

ある意味で年頃らしい…悩みと。

ある意味で年頃らしい…好奇心。

「先輩に相談でえ…す。浮気するって…どんな気持ちです…かあ…？」

…と、俺の耳元で囁きながら…俺の耳たぶを甘噛みした。

《ユニーク・スキル「壊」…ガ、発動シマシタ》

今度はハッキリと…無機質な声が、頭に響いた。



『……………』

『……………』

『…どう?』

『なっ…えっ…』

『なに、あのスキル。いや、もはやアレ、スキルって枠組みじゃないわよね?』

『…え? …は!? 何やったんですか、先輩!! もはや、アレ!! 神威の効力あるじゃないですか!! 洒落になってませんっ!!』

『…だからそういったじゃない。それに私じゃないわよ。自動音声の機能すら持つていかれる程の事、しちやいないわよ』

『巻き添えは、もう嫌ですよ!!』

『私じゃないって、言ってるでしょっ!? 前回! 私のロッドが壊れた理由! ……多分、アレのせい…。あの世界線に干渉し辛くなってる証拠よ』

『いや…でも、おかしいですよ…。人間が持てる…というか、干渉できる次元じゃないです』

『はっ! ……更におかしい事に…』

『なっ…なんですか! ちよつと聞くのが怖いですけど!』

『…私達…上からのお咎めが…ない…』

『』

『…んで、アンタに一つ聞きたいんだけど…』

『…はい』

『エリス、アンタ…いえ、貴女。あの世界線の隆史を、此処に呼んでないわよね?』

『…はい? え…ええ、呼んでませんよ。私も女ですから? あ…

ある意味で、アノ隆史さんは、怖いですから！』

『……………本当に？』

『呼んでませんよ、嘘つく意味ないでしょう？ それに私、女神ですよ？ 嘘なんてつきませんよ』

『……………』

『……………なんですか…』

『某、クズマさんの時と同じく…貴女の様子が、最近変なのは、流石に私にも分かるわよ。獣の姿で現界した時点で、正直どうかとも思ってたわ』

『どこかの幽霊擬きより、大分マシだと思えますけど…』

『は？ ゴーストと一緒にしないでっ!! アレは失敗しただけ…で…つて、誤魔化さない!!』

『はあく…で、なんですか』

『……………』

『……………先輩？』

『あのスキル…どう解析しても…アンタなのよ』

『……………は？ 私？』

『アレ…。スキルと…貴女の「幸運の神威」が、交じり合って…変貌した姿よ』

『……………え』

『……………神威の効力が、パクられてるの。……………アノ性獣に』

『……………』

『貴女なら、すぐに分かるんじゃない？』

『……………』

『スキル「欲望」との相性も最悪…。更には、自動的に発動す

るあのスキル…』

『』

『あの世界線の隆史。…増強された欲望を…しかも、女性側の欲をね？…都合の良い様に満足させるだけの存在になり始めてるわよ』

『』

『見て見なさいよ、現に今も…』

◇

「…アツ…アツ…」

ゾリゾリと…敢えて弱点ばかりを攻めてみた。

すでに何度も果てた様で、目の焦点が合っていない。

ただ腰を動かすだけの行為とは、比べ物にならない程の快楽を感じたはず…。

駅弁で逃がさぬように、お腹の内側から擦り合わせる行為を繰り返した。

敢えて、彼氏さんが行った行為をナゾル様に俺仕様でやった結果がこれだ。

可愛らしい顔は、涙とよだれでぐちゃぐちゃになり、呼吸も虫の息…。

障害者用のトイレの個室…便座に座り、手すりに寄りかかりながらも、動くことが出来ないようだ。

始めは優しく、快感を沸き上がらせるように愛撫し…一気に快楽で殴り殺す。

「めっ…目の前が…チカチカし…まつ…」

今まで、イツたことがなかったのだろうな…。何度か果てさせた後、彼氏さんとの違いを見せつけた後…スキルで絶頂を倍増させた。自分でするよりも…未体験な快楽を何度も感じられただろう。

「いや…彼氏さんには、悪い事したな…サイズ的に宇津木さんの中…俺の大きさに拡張されただろうし…」

「かつ…彼…し？」

俺を手玉に取ろうとでもしたのだろうか？

今は逆に、思わぬ快感に、完全に我を失っている様に見えるな。

「キスはできないから…まあ、今回は半分程度か」

「あ…う？ う…?! はん…ぶっ…!」

一瞬…まだ上の快感があるのかと…期待を含ませた顔をさせた。

もう、完全に…。

でも一応言っておこうか。

「ああ後な？ みほからすれば、浮気Ⅱキスなんだと。だから、俺からすれば浮気じゃない」

とんでもない事を言ったが…まあ…ナントデモナルダロウ。

体を少し起き上がらせようとした所、膝待つくように地面へと落ちてしまった。

「…せ…ん…ぱ」

「確か…彼氏に顔に出されるのは、嫌だったんだっけ？ AVの見過ぎだな…でもまあ、気持ちは分からんでもないけど…」

「あ…え？」

「女性からすれば、髪に掛かるとか…まあ、後々大変そうだしなあ…。嫌う人、結構いるな」

「けどな？ 男って女性顔に出したがるのは、一種のマーキングみたいなものなんだ。独占欲の現れだな…。自分のモノだと…女だと。そういうのは誰にでもあるよっ…」

「……………」

細く小さな体。その体を包む制服は、乱れてはいるが、特に汚れない。成長途中の膨らみかけの胸を隠させ…顎を持ち、こちらに顔を向け



させる。

スキルのお陰で分かる。…いや、解る。相手にする女性の、その望みが解る。

「宇津木さん。上向いて…口を開けて」

俺の言いたい事が解るだろう。

嫌なら断ればいい。俺は強制しない。

ゾクゾクとした様に肩を震わせ…彼女は目を閉じ…顔を上げた。

口を開けて舌を突き出し…先ほど言ったマーキングの意味を理解した。

「んじゃ、次は外の…そこのベンチに行ってみようか？」

「ふあ…い」

「…スリルの本当意味を、教えて上げるから」

「…ふあ…あ…」

こみ上げるモノを感じて……亀頭を彼女に向けた。



「……」

「完全に2コマ落ちでしょうがっ!!!」

「意味が分かってしまう自分が嫌ああ!!」

「あの娘…天然ドSなのに…隆史にS度で負けたのね…ああ……  
どん調教されいって…」

「…」

「で、どうなのエリス」

「何がですか!!」

「この際、はっきりと言いましょうか？」

『つ…』

『神との交じり合い。つまり性交渉…。それがないと…あそこま  
で、見事にゴツソリ持っていかれないわよ？ 体内から箆絡され  
ちやっただんでしょ？』

『あつ…ある訳ないじゃないですかああ!! セクハラですよ!? 労  
務に訴えますよ!!』

『大丈夫よエリス。私、怒らない。怒らないから正直に言つて?』

『だから! 公私混同なんてしませんよ!!』

『どうかなく。アンタ、結局のところチヨロイしい』

『いい加減にしないと…私も怒りますよおお…』

『…あつ!』

『なつ…なんですかっ!!』

『…』

『だつ…黙らないで下さいっ!!!』

『…隆史のスキルに、少しでも関与した場合…アレができる…』

『な…なんですか』

『記憶操作』

『…あ』

『アンタの神威を、ある意味で奪った状態だし…アンタに効果が  
あつても不思議じゃないわ…』

『…』

『…エリス…貴女、穴という穴が隆史に埋められたのね…』

『言い方!!! 最悪なコメントしないでくださいっ!!! 後、確定事項  
の様に言わないで!!』

『いや…マジな話…あんた。隆史に対しての態度が、ここ最近変わ  
り過ぎてるのよ…うん』

『…』

『 …後ね…？ やっぱり上から何も無いってのが、一番不気味なのよ、私… 』

『 …… 』

『 …… 』

『 …先輩 』

『 …なによ 』

『 次のお茶会…彼女呼んで良いですか？ いえ、呼びます 』

『 …は？ 誰よ。今のアレに対して一般の人間には、すでにどうこうできる次元じゃないわよ？ 』

『 …知恵を借りましょう…。なんでも使いましょう…はい。そして何とかしましょう…ガラクタだろうが何だろうが…稀に伝説級の物すら仕入れますし… 』

『 伝説級？ 仕入れる？ だから誰よ。あの家元連中でも、今のアレには勝てないわよ？ グツチャグチャにされて終わりよ？ 』

『 ……イズさん。強引にでも連れてきましょう 』

『 え？ …え…ま…まさか、あのアンデット!? やめなさいよ!!! 神域にあんなの連れてこれる訳ないでしょ!? 』

『 いえ…その場合…彼だけでも、アノ世界に飛ばして…。それでも何でも構いません!! 』

『 ねえ…エ…リス。顔が…すっごい真っ赤よ？ 』

『 私だって女神ですっ！ 女なんですっ!!! 真実は知りたいたいですっ!!! 』

『 あ…ああ。…そっちか 』

※ルート壊 【宴編】※ 女子会ですっ!! そのいちい!★★★

…やっちゃまった。

その一言。

宇津木さんとも関係を持ってしまった…しかも、今回は殆ど俺からだった。

しかし罪悪感は強くある物の…何故か心が軽く、その事をその夜に、アツサリとみほに白状した。

経緯と共に、その状況も…。

自分でも驚く程…今日何があつたか話す様な感じで、口を開いてしまっている。

そして、何も言わない。彼女もまたふんふんと頷いている。

…報告を聞いている内に、彼女の目が怪しい色を放ちだし…どこかその話を興味深く聞いていた。

キスはしていない。

言い訳にしか…いや、言い訳ですらないソレを聞いたならば、もはや何も言わなかったのに…変な恐怖感に襲われた。

俺が嘘をつくど、それはすぐに分かるそうだ。俺の癖…の様なモノがある様で、ほぼ100%の確立で分かる様だ。

…アレの最中は何故か分からないと、顔を赤くして言っていたので間違いないんだろう。

なぜか…確信した。

一般なら…はっ、今更だが完全な浮気。

…そういうや麻子が、言っていたな…。

まほちゃんは、まあ…特別枠なんだろうが…。

みほの許容範囲は、あんこうチーム。

その許容範囲を逸脱したというのに、何も言わない。

そして、コレも何となく分かった…みほの価値観が、次の段階にシフトしている。

壊したくない関係…とやらが、今のコレなんだろう。

あんこうチーム全員と、肉体関係を結んでしまってる今の狂ったこの環境を…みほは…楽しんでる。

快樂をも話し合い、痴態すら暴露すらお互いがして話している。

何をどう考えても異常だというのに、それが歪んだ一体感でも生んでいるのだろう。

それらをすべてを共有している、この仲間との一体感。

彼女は受け入れ、溺れてしまっているのだ。

そしてもう一つ。

…謎のスキルが、解けない。

前々から気が付いてはいたのだが、スキルが掛かっている状態の彼女達には、ある一つの特徴がみられた。

それは…目の奥に怪しい光が灯っている。

歪んだハートマーク…とでもいうのか？ 強く影響を受けている時には、その光もまた強くなる。

…それが…通常の時にも消えていない事に、この時に気が付いた。

その瞳の奥に、うっすら…と。

しっかりと見てみないと気が付かない程だったが、ハッキリと…確認が取れた。

…。

はっ…もう今更どうにもできない。ならば俺としては…できるだけ彼女達の要望を聞くだけ…叶えてやるだけ。

壊れ、壊してしまった責任を…トラナクテハト。…アタリマエニ、ソウオモウ。

「あ、そうそう隆史君」

「…ん？」

…そして、最後。

みほに…恐怖した。

冗談でもなんでもなく…ただ怖い。

「隆史君、優しいから…まあ仕方ないかな。あ、それに！ ちゃんと家に何時もの時間には、帰ってきてくれるから安心感もあるの！」

「……」

「外とかで？ 黙ってお泊りとか…浮気とかだとすぐに疑っちゃうでしょ？」

そんなセリフが出たというのは、すでに倫理観やら何やらが、完全に歪んでいる。

とうか、文脈が変だぞ…所処、自分に言い聞かせているみたいに聞こえる…。

浮気…の概念が何なのだと、今の彼女に聞いてみたかった。

…俺としての最低条件。みほを最優先にする事。

生活リズムというか…何と言うか…。できるだけ普通の時間…コレばかりは曲げないようにはしていた。

しかし…俺が本気で恐怖したのは、こんなセリフじゃない。

「うんっ！ でもコレだけは、聞いておいて欲しいの！」

「なんだろう？」

何時もの表情。何時もの明るい声。

「お母さん」

「…しほさん？」

「……ああ…お姉ちゃんなら、特に怒るだろうけど…。キス抜きにしても、私も怒るよ？」

「あ…あのな？ …昔から言ってるけど…」

「うんっ！ でも!!」

極めて明るく言う彼女に、ああ会話のメに冗談か…と思ったが…。

…表情が変わった。

それは、後に映像で見た顔。

あの準決勝の会場で、あの犯人の仲間を捕まえた時の顔。

その顔は…その時に見せた、愛里寿の表情を思い出させた。

見開かれた目からは、…スキルに掛かった怪しい光すらも真っ黒に押しつぶされ。

無表情にも似た表情だが、目にだけは力が入っていた。

付き合いの長い俺でも…幼い頃から見てきたこの幼馴染の…見た事のない…。

…一瞬、目の前にいるのが誰か、分からなくなるような…そんな顔。  
そして…ハッキリと一言…。

「…エリカさんとだけは、絶対に許さない」



余り今回は時間が掛からなかったな。

雑木林を抜けて、焼却炉の前にへといくつかのゴミ袋を運び終えた所で、漸く一息着くことができた。

それは、あの宿直室としての利用されて…いた、小さな建屋。

この建物は、存在すら知られていないというのもあるので…すでに俺しか利用する者なんていなかった。

生徒会室よりも戦車倉庫に近かった為に、仕事類の物を置いたり、備品の置き場所として重宝していた。

その為に、俺の仕事部屋…兼、戦車道準備室。

…兼…け…。

改めて考えると…ヤリ部屋と化しているな。  
…。

ま…まあっ！ 不必要な書類をまとめて、ダンボールに入れていた物を、漸く今日処理出来た訳だ。

…書類作成、不要な書類の判別…それをひたすら繰り返してな…。  
主に広報関係の書類だったな…は…は…は…。

正直、無駄なモノが多すぎて…余計判別に手間取った…。

その書類作成自体は、既に済ませてあったので、今日はゴミ処理の  
為だけに登校。

あの部屋、一応は電気は通っているので、まとめていた書類を、持

ち込んであったシレッツダーに、何度も何度も何度も掛ける…。その単  
純作業を繰り返した…。

大量の細切れの紙を生産する作業は、地味にきつい…って、休日に  
俺は何してんだ…って途中で嫌になりそうだったけど…。

大概の物が桃先輩の仕事類だった為に、頼っておけば…最終的に柚  
子先輩が、処理する羽目になりそうだったので仕方がないと言えばそ  
れまでだ。

書記…という役職だが、ほぼ雑務処理役という俺にとっては、もう  
慣れてしまった仕事だった。

まあ桃先輩は桃先輩で、あの人なりに忙しいらしく、少しは手伝っ  
てあげたいと思っていたのでコレも良しとしよう。

…。

ま…まあ、結構なブラックな生徒会だとは思うが…昔の職場に比べ  
れば、パールでホワイトな職場だろうて。

午前中で片付く位だから、まっしろお!!

「はあく…」

そして…いくつかの仕事を終わらせた今、漸く…落ち着くとか…。

…。

き…昨日のみほ…。

…ここ…怖かった…。

命の危機…とか、そういう問題じゃない。

人の恐怖心を、体の芯から引き出させる様な…そんな顔。

…だから昨晚は、スキル全開でガンバリマシタ。

うん…。

やっぱり、常軌を逸脱した行為の時は、記憶を操作しないとダメ…  
だよなあ…。

色々と説明が出来ないからなあ…やっぱり。うん、夢として処理し  
よう。

腰に手を置き、背筋を伸ばしながら空を仰ぐ。



…あ：降ってきたな。

朝から余り良い天気とは言い辛い雲行きだったのだが、ついにポツポツと雨が降り始めた。

…そういや、みほ達：傘ちゃんと持って来たのだろうか？

今は、どこにいるか知らないが、一度は学校に行くとか言っていたし：後でちよつと電話でも掛けてみるか。

本日は練習もなんもない、完全な休校日。生徒会長は用があるとかで、一応学校にはいるようだが：そういや見てないな。

戦車倉庫になんぞ用があるらしく、一度学校へ寄り：陸へというのが、みほ達の今日の予定。

なんか：女の子だけで会合：らしい。よく知らんけど。

どうやら、みほとマコニヤンに、悩みがあるようで、その相談会を今から開く様だ。

相談お姉さん枠として、絶賛宿泊中のまほちゃんも参加する様だ。彼女はそういった事に今まで無縁だったらしく：つて、まあそうだろうな。

それも相まって初めての女子高生らしい事！：らしく、すごぶる楽しみにしていた。

そうそう、それはそうと：何か悩み事なら、俺も力になれるかもと言ったら、力強く拒否された…。

『戦車道の事だからっ!!』

『そうだっ!! 書記には関係ないっ!!』

いや：今さらだろ…。

まあ：良いけど、それなら戦車道の会議が、何故女子会になるのだろう：良く分らん。

みほとマコニヤンの言葉で、華さん、優花里、沙織さん。：そしてまほちゃん。彼女達も何かある様で、せつかくならと：その？ 女子会とやらの開催が決定した。

女の子達の集いのだ真ん中に参加する…という地獄を味わいたくない為、快く承諾。俺は無事に別行動と相成った。

「やっ…ん」

午後からの予定がない。

取り合えずと：悪友連中に声を掛けてみようと思ったが：中村とは連絡が取れない。どうせまた戦車道関連を廻っているのだろう。

林田に電話をかけ：「ナンパ行こうぜっ!!」ので：速攻で通話を切った。：から連絡は取れない。

ブレねえなアイツ：。

よって：やはり予定はない。

しかし：久しぶりに一人だ：。昔ならボツチ街道まっしぐらだったというのに：生活一つで人生変わるもんだなあ。

まあ：たまには一人で、船外にでも行ってみるか：。筋トレでも良かったのだが、昨晚：ある意味で筋トレした為に筋肉は休ませないとな。

あ：。

そーいやアノ件どうなったかなあ：。

一応は学生が自治体の様な学園艦で、権限を強く持っている人だ。防犯対策を強化の為に会長に一度、相談をした事を思い出した。

不審者：らしき者がいた。というか、来た。

一応、俺が居るとしても、我が家には若い女の子が、現在4人も住んでいる。：字面すげえな：。

だから変なのを目を付けられても不思議じゃない。

鈴木：じゃない。：カエサルさん達の様な女の子だけで、住んでいる家も結構多いしな。

下着ドロ：ではないにしろ、不審者らしい人影が、一度夜中に庭先に来襲した。

：まあ：ちよつと、アレ用に利用させて貰って、処理したけど：。

男にも効くんだな：スキル。寧ろ分かっている分、掛けられた男は悲惨な事になってたなあ：。

華さんが遭遇した痴漢もそうだし、防犯意識を上げる事は悪い事じゃない。

会長に会うにしろなんにせよ、一度荷物を取りに宿直室に戻るか。うん。

危ないからな。考え事をしながら歩くものじゃない。

普段なら気が付く事でも、ボケーとしてると気が付かないで、事故に繋がる可能性があるからな、うん。

ほら、特に戦車道履修者の隊長各って、気配を殺して人の背後取るのが好きみたいだからな、何時殺られるかわかったもんじゃない。  
…。

「…うん、将来有望だよ…宇津木さん…」

「本当ですかあ♪ なんの事ですか分かりませんが…」

今みたいに…気が付いたら、腕を取られている可能性あるしな…。  
相変わらずコロコロした笑い方をして、俺を見上げている宇津木さんが…いた。

《……………》

その後ろには、ウサギさんチームが固まって見てるし…。

そりやそうだろうな…いきなり、コレだし…。

「優季…ちよつと近くない?」

「……………近い」

澤さん!?

丸山さん!?

「ええ〜そんな事、ないよお? ……まだ外側だし、触れ合う程度ならあ〜問題ないと思うよお?」

つつ!?

「は? 外側?」

「…意味不明」

「あいく…」

「…何が起こってるんだらう」

「優希、タラシ先輩と仲良かったっけ?」

いつ…一年達は、自主練…戦車は動かせないが、それでもできる事はあると…登校してきたらしい…ねっ!!

というか、宇津木さん!! 目の奥に例の光が見える! と…解けてないのか…まだ。

しな垂れかかるとうか…小指で唇なぞつたり…なんか…少し幼い

色香が、ヤベエ…。更に強まってる…。

「あらあく…。隆史先輩、雰囲気戻っちゃいましたねえく？」

「なっ…。何が…かな？」

《……………》

宇津木さんが、腕を下に引つ張ってきた…。腰を下ろせって事か？  
腰を少し下げると、彼女はつま先立ちをして耳打ちを…っっ!!

（昨日の容赦無い、隆史先輩も好きすよお？）

…と小声で言い、少し…耳の端に舌を当てた…。

内緒話をするように、手で耳元を隠しているので大丈夫だとは思いますが、  
ますけどね!?

いや…教えただけど…確かに、それも教えただけど時と場所を考えよう  
ね!?

「っ!？」

「っ!？」

「…？」

「…桂里奈は分かかってないみたいね」

「…どうなってるんだろう…被害者が増えた」

（宇津木さん!？）

（優希でいいですよお…あ、でもそれだと、わざとらしいかなあ？

）

…。

あかん。この子あかん。

将来…いや、今もそうだが…。

男が彼女相手に、浮気や不倫した場合…高確率で、身の破滅を招く  
タイプだ。

単純な色香…ではない。何ていうか…。

（私は何時でも良いのですのでえく…それでも余り頼っておかないで  
下さいねえ？）

（っっ!？）

（誰のモノ…とか、女の子から宣言させられる位なんですからあく

♪ 責任は取ってくださいあい♪）

( )

( あ、でもお、何時もと、あの時の違いのギャップは良いかもお〜♪ )

( )

この子…距離感というのを、ちゃんと理解している…。

じ…自分から都合の良い女宣言…とか…。

…というか、あの時の真っ黒い俺が良いって…華さん以外には初めて言われた…。

「ゆううきい！ 何やってんの!! 尾形先輩困ってるでしょ!？」

「…西住隊長に…報告」

「あ〜…ねえねえ」

「何？ 桂里奈！ 後にしてっ!!」

「…ちよつと面白くなってきた!」

…丸山さんが、ストレートにチクリ発言した…というか、久しぶりに声聞いた…。

「…いや、澤さんが別に、ソコまで怒る程、困って…」

「はいいい!?!」

「あ…はい。困ってます」

…この子…怒ると結構怖いな…。

優希さんの腕を引っ張り、強引に俺から引き剥がした…。

剥がした瞬間、丸山さん含め…残りのウサギさんチームが彼女を取り囲む。

「…どういうつもり?」

「……………つもり?」

「ええ〜? 他の人達もやってる事だよお? ほらあ〜」

「そつ…そうだけどっ! あれって、尾形先輩の昔からの知り合いでしょ!?!」

「…………」

「身近の人もそうだよねえ〜? じゃあ、いいんじゃない?」

「良くないっ!」

「…………ない」

「一人増えた所で、隆史先輩ならあゝ…問題なさそうだしねえ」

「大問題よっ!!」

「…もんだい」

……。

宇津木さんの言葉だけ、別の意味に聞こえるのが不思議だ…。

「無差別で女性に、粉を掛けて廻っているツケですわね」

「…無差別について…」

確かに昔はそうだったかもしれないが…宇津木さんに関しては、何も  
言えねえ…完全に自業自得…。

「…止めなくてよろしいの?」

「いや…止めるけどさあ…。なんか、身の破滅になったとしても…俺  
には色々とそういつた権利なんて…既に無いような気がして…」

「まっ…自覚症状が出てきただけ、マシですわね」

「自覚症状って…」

《……………》

はあゝ…まあ、そろそろなあ…。

グラウンドの片隅で、なにやっつてんだって話だよな…。

それこそ、もしみほ達はまだ学校にいて、此処に来たとしたら更に  
また収集が付かなくなるしな…。

「…あの…澤さんや」

「なんですっ…か…」

「…」

「…タラシ先輩?」

「雨も降ってきたし…そろそろ…って、どうした」

《……………》

全員が一斉に俺を…じゃないな、俺の横にへと視線を集中させた。

何を驚いた顔をしているのだろう…。別段不思議じゃないだろ…  
普通に学校指定の制服を着た生徒が…。

「…ぎげんよう」

「んつつつで、いるのっ!?!」

崩れ落ちた…両腕を地面に叩きつけるよに…。

「…チツ」コンニチワ

「…チツ」コンニチハア

「…チツ」…ナマステ

「ダージリンさんだあ」

「…いや、それよりもあの三人、あからさまに舌打ちしたよ?」

「全て理解してだよねえ…。エリリン先輩の時とは、また別の反応…

面白いっ!!」

面白かねえよっ!!

「ふふっ…久しぶりに変装…と、いうものをしてみましたわ。うまく

騙せたようですわね」

「オペ子の時の事、言つてのっか?!? ありや変装とは程遠かったわ!」

大洗の…制服を着た…ダージリンがいた…。

手を…口元に添えてのドヤ顔がうぜえ…。

「エキシビジョンの最終打ち合わせに参りましたの。…そちらの生徒

会長さんから聞いていないのかしら?」

「…分かりやすい返答ありがとよ。そんなに、俺は分かりやすい顔し

てるか?」

「ええ。ものすごく」

くっそ…。今回は紅茶を持っていないからまだいいが、すげえ嬉し

そうに言ったな。

しかし…なんで、大洗制服を入手して…ああ…そうか…ダージリ

ン、ご令嬢だしな…。あと、あの会長じゃあ面白がつてすぐ渡しそう

だ…。

「あれ…そういや、ダージリン一人か?」

「ええ、今回はあのおじや…二人には内緒で来ました。…今日はそち

らの生徒会長さんとだけの会議。おあつらえ向きという奴ですわね」

「…出し抜くつて…何をだよ」

《……………》

「…一瞬で、尾形先輩の意識を持っていかれた」

「…不法侵入」

「…うざあい♪」

「アノ人…あの恰好で、絶対、尾形先輩探してたよね…」

「…迷惑」

「うっざあい♪」

「…この三人は、何と戦っているのだろうか」

「…尾形先輩。こんな雰囲気、何時も身を投じていたんだ…」

「タフにもなるのも分かるよね…」

…。

いかん。そうだ、まずはダーズリンより…一年だ。

宇津木さんが、どういうつもりか分からんが…このままだと、俺のせいで仲が悪くなってしまうそうだし…。

しかし…どうしたものか…。

「…タラシ先輩い？」

「っ…な…なに？ 宇津木さん」

また…なんか見透かした様な笑顔で、俺を見上げてきた…。

「雨も強くなってきましたし、私達帰りますねえ？」

《えっ!?!》

「あくそうか。まあ…本降りになる前には、そうした方が…」

あ、よかった。この子ちゃんと空気読める子だ。

人の顔色ばかり窺ってきたお陰で、何となく分かる。…この嵐を終わらせてくれる！ この台風の目の娘！

いや…俺が一番悪いんだけど…そういつた事を言うなど、それが私に対する責任だと、この娘に言われてるからなあ…。

…何故か良心が痛まないから…どこかで納得してしまっているんだろう。

「大丈夫ですよお？ 私達…ちゃんと仲良し…ですからあゝ」

「…ちゃんと仲良しって」

「心配しないでくださいねえゝ」

「ああ…ありがと」

「はあい…仲間ですからあゝ♪」



…なんだ？ 一瞬…あの光が強くなった気がしたけど…。  
クルツと背を向け、他の一年生達の背中を押した。まあ、すぐに帰ろうと暗に言っているのだろうか？

この場を収め……………

「…ねえ皆あゝ…ちゃんと…説明するからあゝ今日は帰ろうねえゝ？」

「…ホント？」

「……………」

「まあ、雨強くなってきたし…って、傘っ！ 本格的に降ってきたあ！」

「メガネが…」

ダーズリンが現れたから…という事ではないのだろうか…何となく逃げるように…。

「…ちゃんと教えてね？」

「…説明」

「うん…仲間だからねえゝ♪」

走って行ってしまった。

そして…何故か思い出した。

また訳の分からないスキルが…昨日、宇津木さんと別れる時に…発現していた事を。

たしか…。

スキル「伝染」

…段々と発現するスキルの名前が、怪しくなっていく。



「人気のない一軒家へ、隆史さんに連れ込まれました」と  
「人聞きの悪い事を言わないでくれ…ここ仕事もしてる部屋なんです  
が？」

…。  
はい、例の宿直室…。嵐が去りて…という奴には、まだなつてない

…。  
いよいよ天候が悪くなり、あの場にいる訳にもいかないので、荷物  
もあり傘もあり…で、ここにダージリンを連れてきた。

「送信…つと」

「何やってんだああ!!」

確かに遠目には、古ぼけていて壁に苔も生えて、ホラー映画の舞台  
になりそうな見た目だが、中は…俺が丹精込めて掃除した事もあり、  
普通に家賃取れるレベルにまで修復した室内だ。

雑木林の下を走ってきたので、びしょ濡れ…程には、濡れはしな  
かったが…女の子はそうはいかないのだろう。

肩が雨に濡れ、白い大洗の制服から肩の肌色が少し透けて見える。  
部屋に常備してあったタオルを渡すと、ポンポンと軽く叩きながら  
拭いている。…とか、思ったら携帯を操作しながら物凄い事を言っ  
ていた…。

「冗談ですわ。そんなメールを送ろうモノなら、ペコからの電話が鳴  
りやまなくなりませう」

「……寄りによって、どこに送ろうとしてんだよ」

「あら、ペコの気持ちには、お気づきになつていますのね？」

「ぐっ…」

そ…それも、まあ…今更だろうがな。

みほとどの付き合う事になつてから…まあ…大体は把握…してきた。

しかし、今の関係なんかバレようモノならば…。

…。

っ…！　まずい…。

久しぶりに、ま…《 》…タ 《 》

…ま、いいや。今はダーズリンだ。

雨に濡れて、少し湿っぽくなってしまった室内。

その…雨に濡れた為か、ダーズリンから少し甘い香りがするので…  
変に緊張する。

昔なら…青森にいる頃では、こうはならなかった。

何処か心の中で距離を置く事で、どうにかなっていたと…今になつて確信する。…完全に逃げてたな。

「今日はエキシビジョンの打ち合わせ…会議といつても、諸々の取り決め確認の為だけでした」

「…あ…ああ、そう言つてたな」

「冗談半分で生徒会長さんに制服を頼んでみたら…すごい乗り気で貸してくれましたわ」

「……やっぱり」

「ま…あ？ …それで何時も通りの？ 何処かの、女つタカシを見つけた訳ですが…」

「…スミマセン」

軽く口を挟みながら、会話をする中…こちらをジツ…と見つめる  
ダーズリンに気が付いた。

青い瞳と…頬に、濡れた細い髪が張り付き……妙に色っぽく…つて  
!! なんだ!?! なんなんだっ!?

おかしいぞ!?

今まで意識はしないようにしていたというのに、いくら何でも逆に意識しすぎだろう。

確かにシチュエーションとしては、王道といつても良い状態なんだが…  
…なんで…。

寧ろ意識しろと言わんばかりに、変な所ばかりに目が行ってしまう…。

うつすら透けている為に肩から見える、下着の…青い紐。

そこから流れる制服が…女性らしい…体つきを、妙に…て…。



…と、何時もと違う雰囲気の彼女が目映る。  
その違いが、女性としての魅力…を…強く引き立たせ…て…。  
まずい…。

外の雨音が…その痛みに響く。  
段々と何も聞こえなくなつて…き…。

ガチャツ!!

…と、突然ドアノブが回された音が響いた。

この音は何故か、妙にハッキリと聞こえた…しかし「ツツツ  
ヂツツツ!!」

…。

「んんっ!! …誰か来ましたわね」

…あ、うん。

「そ…そうだな」

はい…思わず音がした方を見ると…ダージリンが物凄く悔しそう  
な顔をしていた…。

あ…：良く見知った昔からの顔だあ…。

…。

何時ものこの空気が、一気に俺を、平常運転にまで戻してくれまし  
た。

目が覚めたよ…。

ここまで、ダー様の舌打ちに救われた事はないわあ…。

あ…：あと…俺、この部屋に鍵…掛けてないんだけど…。

『あれ…：みぽりん、鍵掛かってるよ?』

『そうですかあ…隆史君、帰っちゃったのかなあ?』

…。

oh…

「…みほ、鍵は持ってないのか？」

「あ、うん。あるよ」

「即答…。確かにみほさんは、頻繁に利用されていますからね」

「うう…華さんには、言われたくない…よ？」

「五十鈴殿…バレてますよ？」

「なんの事でしょう♪」

「白々しいぞ、五十鈴さん」

「…皆、何を言っているんだ？」

まっずいい!!

「チツ…みほさんの声…チツ!!」

ダージリン…今回は何も言いません。…ある意味で、感謝しかないから…。

鍵かけたのも、ダージリンだろうな…。すつげえなんか悔しそうな顔してるし…でも今回はグツジョブ！

じゃなくて！

まず初めに!!

この部屋に対する、全員の認識がヤベエ!!

どうする…どうするっ…。

この部屋の…あの認識で、ダージリンと二人きりで行っている事を見られたら…確実に…。

…。

みほは、なんか…いや、それでもっ!! 少なくとも西住流家元が、二人揃ってる状態だし…。

…。

「…ん？…まほさんの声…？」

よしっ!! 諦めて行動!!

荷物！ 靴！ 確保っ!! 襖を急いで開く!!

よしっ！　今回はマコニヤンいない!!

「あの…隆史さん、何されてますの？　私の靴をつて…え!?」  
押し入れを開き…ダージリンの両肩に、優しく両手を乗せた。

「あ…あの？　あの!？」

真正面から向かい合う形…ほぼ見つめ合う状態になると、ダージリンの瞳が、俺と肩に置かれた手を何度も往復する。

何故か耳が段々と赤くなっていくが…今はそれを見入ってしまった程の時間はない。

「ダージリン…今から言う事は、冗談でも何でもない…」

「…はっ…はい」

真剣な眼差しで、今までにないくらいの真面目な口調で、ダージリンに声を掛ける。

その声で、俺が何時もの様にふざけて言う事ではないと、彼女も感じてくれたのか…。

彼女もまた真っ赤になりながらも、小さく声を出した…だから。

「…押し入れに隠れてくれ」

「……」

あ…目が死んだ。

…そして、すごい無表情になった…。

『…みほ？　どうした』

『あれ…カギどこいったかなあ…』

…いやあ…血の気の引き方がすごいわあ…。

どうでも良いけど、ダージリンって和室が異常に似合うなあ…  
ちゃんちゃんことか…こたつ…とか？

セットで一度見てみたわー洋風テイストな見た目なのにねえーよ  
しっ！　現実逃避してる場合じゃない！

『しかし…随分と、辺鄙な所にある建屋だな』

『…書記の…はっ…ある意味で仕事専用になってるがな』

『ふむ?』

『あつ! あつた』

…。

「」

「……………」

「つて、ダージリンっ!? 何で頬膨らませてんの!?!」

「そおおくですわよねえ〜? こんな所、見られたら大変ですわよねえ〜それでも? やましい事してくれないのですから? 堂々としていれば宜しいのではなくてええ?」プク〜

「お前、どうして俺の前だと、変に子供っぽくなるんだよっ! 後、文法なんか変だったぞ?!」

「この制服姿の感想も、まだ頂いてませんし〜? あ〜あ〜がんばりましたのにい〜頭まで下げて頑張りましたのにい〜」

「感想っ!?何を…あー…もうっ!! 変にエロすぎて、ちよつと理性が飛びかけたわ! これでもいいかっ!?!」

「エロツ!?!」

入り口付近を手で掴み…意地でも入んねえって拒否してる!!

こんな所見られたら、ダージリンも困るだろ!?! というか! 俺だけならまだしも…あの状態のみほを見ているから、余計に心配なんだよっ!!

俺だつて、まさかここに自分が入るとは思いもしなかったよっ!!

『むう…相変わらず錆びて…うまく鍵が回らない…』

『隆史さん、普通に開けてませんでした?』

あ、うん…今度なんとかしておくよ…じゃないっ!!!

こうなったら…俺の靴っ!! 靴っ…は、もう入れた!! よし!!

「…っ!?!」

ほい、ダージリン!! 一度引き寄せ、抱きしめる上げる! …つて、相変わらず軽いな…。

えつと…下の方が良いな! 布団少ないしっ!!

「えつ…あのっ…えつ!?! 隆史さんっ!?!」



「悪いが、強行させてもらう…文句は後で聞きますわ」

襖を再び、スパーーーン!! …と、閉めた。

『 あっ…やつと開いたあゝ 』

それと同時に…またドアノブを回す音と、ドアが開く音が聞こえた。

間一髪…こうして俺達は、二人仲良く…in押し入れ…  
はああく…。  
危なかった…。



「…オレンジペコ?」

「はい? なんですか?」

「…ダージリン、今日見ないわね」

「そうなんですよ…特に、今日は予定はないと仰っていましたのに…  
何処かに出かけられたのでしょうか?」

「……………」

「アツサム様?」

「ねえ? オレンジペコ? …最近、ダージリンの様子がおかしいと  
思わない?」

「何時もの事では?」

「そうね。概ね同意はしますが、今回はそういう話ではないの」  
「はい?」

「…先日、大洗の方々と交流があったでしょ?」

「ああ、あのカードの時…」

「そう。それで、西住 みほさんのご友人に、どうも雑誌を一冊頂いた  
ようなんです。それを最近、熱心に読んでいましてね…」

「雑誌?」

「本来は借りるつもりだったようなんですが、既に読み終えたと言う事で、頂いたみたく…ああもう…コレを見て」

「これですか？ 随分と派手な表紙ですね。…ええつと、女子力アップの秘訣？ 彼も大満足？」

「最新の女子高生…つて記述で、興味を引いたみたいですね。ダージリンは読み終えたと言うので、今度は私に何時ものアノ顔で…勉強なさい？ とか…私に今朝渡して来たわ」

「はあ…それで。どんな内容な…ん…」

「……………」

「」

「…本来ならば、貴女に見せる様な内容ではないのでしょうか…」

「なつ…なつああ!! なんですか、コレは!!?」

「…正直、私じゃ意味が分からなくて…卑猥な事だとは思いますが…」  
「卑猥どころの話じゃないですよ!!…いや…露骨に書きすぎですよ、コレ…」

「…オレンジペコは、意味が分かるのね…」

「殆ど分かりませんが、何となく分かりますよ！ イラスト付きとか…あああ…」

「……………」

「…うわ…あ。…ええ…」

「……………」

「……………えつと…」

「……………」

「…あ、これなら、なんとか…え…ええつ!!? …でも…イチコロ…」  
「……………」

「…へえ…あ、コレ…」

「…もういいかしら？」

「ひゃわああ!!?」

「…はあ…もういいわ。それでね？ オレンジペコ」

「…な…なんですなあっ!!」

「先程も言いましたが…ダージリンはそれを、読み終えたと言ってい

たんです」

「…はい？」

「特に、この…ドッグイヤーをしてあつたと思われるページ。折り目があるから、戻したのが丸分かりでしょう？」

「本当ですね…えつと。特集…男性に好まれるプ…プレイランキング。1位…セーラー服」

「ね?…マーカーまで引いてある」

「……」

「……」

「……」

「…あの娘…大洗の学園艦に行つてないわよね？」

「……」

◇◇

スキル「隠者」…の潜伏機能、これで俺達が押し入れにいるとは認識できまい。

明かりの為に、少し襖を開ける事がこれでできる…。

俺達の話声、その他、些細な事でも、押し入れに異常や違和感を、外の彼女達は感じる事は不可能にした。

…あ…危なかった…。

流石に目の前で、んな事したら…絶対におかしな事になるに決まってる。

「ダーズリン…悪いな」

「……」

体の大きさもあり…申し訳ないが、ほぼ抱きしめ合っているような体勢で押し入れの中…というか、ダーズリンがさつきから大人しい…。

というか、ダージリンの甘いにおいで…押し入れの中が充満してきた…。

「ふっ…ふふ…一緒にでしたらあそこまで意固地になりませんでしたのにな…」

「はい？」

…ダージリンの腕が…なんかしらんが、俺の背中に回ってんだけど…。

「…ペコに一歩リードオオオ…」

…何言ってるんだ？

はあく…まあいいや。後は、みほ達が帰ってくれるのを待つだけだな。

雨宿りに来たただけだろうから…すぐに出ていくだろ。

…流石に四畳間で、6人は狭すぎるだろうし…。少し開けていた襖から外の様子を窺ってみた…。

案の定、雨宿りをしに来たようだ。試合に持っていく用の傘をいくつか取り出していた。

『はあく…雨強くなってきたあ』

『…ふむ。どうだろう皆？ もう、此処でよくないか？ この雨だ、陸にまで行くのは、少々億劫だろう？』

『そうですねえ。そろそろ私、みほさんと麻子さんのお話お聞きしたいですし…私は別に構いませんよ？』

『…まあ、もう此処でいっか。内容如何によっては…外じゃお話をきかないもんね…』

『家だと隆史殿、何時帰ってくるか分かりませんからね！』

『私は別に構わん』

『私も皆さんが良ければ…お家よりかは、安全だと思いますし…』

『んじゃ、けってーい！』

…ちよつと待て。

『いやあく！ 先に買い物してきて、良かったですね！』

『んじゃ、準備しちやおー!』

待て待て待て!

変に大人しいダージリンは置いていおいて! 例の女子会とやらを此処でやる気か!?

…戦車道の事…と、言っていたし下手すると時間掛かる…よな…あああ…菓子とか色々取り出してるしっ!!

『どうしました?』

「いやな…みほ達、女子会戦車道を…というか、作戦会議ぼくってな。終わるのが何時になるやら…」

「ふむ…そうなると私…作戦を盗み聞きする真似になってしまいますね」

「そうなんだよ…耳を塞いでいてくれっていつても、時間掛かりそうだから無理だろ? 疲れるし…」

出るに出不れないし…後、エキシビジョンの作戦会議とかだったら、相手がここで聞いているし、まずいよなあ…。

『よしっ…では、始めますかっ!』

『結局、沙織さんも楽しんでますね』

『開き直つてると言っつて!!』

『…で、順番はどうしますか?』

『私から行く!!』

『あら、麻子さん?』

『最初に言っつて、最初に終わらせたいっ!! 西住さん、良いか!?!』

『わ…私は構いませんが…』

…ん? なんか、会話内容が変だぞ? 戦車道だよな?

『私も構わんが…一つ、提案良いか?』

『お姉ちゃん?』

『前回皆が、呼んでいた呼称でお願いしたい』

《……………》

…前回？ まほちゃん、前にも参加したのか？

『ま…まあ私は良いけど…アレ結構、恥ずかしいですよ？』

『ぜひっ!! 今回は、途中で何があっても呼び方を戻さないようにお願いしたい!』

『第三者目線で見れますからね。お姉様の気持ちは、なんとなくわかります!』

『とりあえず華…まほさんの呼称なんとかならないの…?』

『では、西住殿、音頭をお願いします!』

…ま…さ…か…。

『そ…それでは! 相談・報告を兼ねた、女子会を始めますっ!!』

《お願いします!!》

…。

あ…いきなり…積んだ…。

「相談…報告? …って、隆史さん? どうされましたの?」

いや…いやいや待て…前回の呼称…と言っていたな…。

それは「彼」呼びって事だな? ならまだ…って! みほの場合、バレッバレだっ!!

どっちにしろ、ダージリンに、んな話! 聞かせれるかっ!!  
…。

何をどうしようと…八方塞りだ…。

もう…運を天に任せるしか…。

『じゃあ…さっそく私からだな』

『麻子は、相談…って言ってよね?』

『うん。じ…実はな…? け…結構深刻で…』



《……………》

『私が良い医者を紹介しようか？ お母様に言えば何人か手配できるぞ？』

『あ…ありがたいが、話を一度聞いてもらえないだろうか？』

『ふむ…そうだな…できるだけ力になろう』

『…お姉さんも結構、ぶっ飛んでるわね』

『お優しい方なんでしょうが……って、西住殿？』

『……………』

『感覚が…何と言うか、おかしいんだ。正確には夢だとすぐに分かるんだけど…余韻というか…何もかもが現実を感じて…』

『…いや…麻子、アンタそれ…冗談抜きで病院に…』

『行けるかああ!!!』

『なっ…何よ…』

『大体、アイツが出てきて!! 私が散々な目にあう夢に限ってソレだぞお!!?』

《……………》

『欲求不満とか言われて良しだっ!!』 とうか、こんな事他人に言えるかあ!!』

《……………》

『…あ、うん。ごめん…麻子』

『な…なんだ、沙織。随分と素直だな…』

『実はね…私も最近、そうなんだ…』

『私もだ』

『わ…私も…』

『拙者も…』

『私もですう!』

『沙織は…よくそれで、私に病院へ行けと言ったな』

『…ゴメン。とりあえ華は何で嬉しそうなのよ…後、ゆかりん武士語になってる』

『あの…私の相談って…実は麻子さんと同じなんです…』  
『西住さんも?』



「はい…私…夢で、たかつ…彼が、いっぱい出てきて…大変な事に…」

「みほ？ …いっぱいって…え？」

「き…昨日も…それでちよつと今朝…起きたら、腰が抜けてたの…」

《…………》

「後で聞きましょう!! 今は、麻子さんですっ!!」

「華…水を得た魚のよう…」

「わ…私も似たような夢…が、あるな…話した方が良いか？」

「お姉さまっ!!」

「わ…私は少し違いますが…ちよつと現実かどうか…」

「では、本日は「夢の発表会」ですねっ!!」

「字面は健全なんだけど…華が言うとお何わしい…」

「沙織さん、酷いです!!」

…よ…よしっ!! 夢っ!! 夢の話なら、何とかなりそうだ!!

「みほさん…夢で腰が抜けるなんて…怖い夢でも見たのでしょうか？」

結構可愛い所ございますわね」

…。

あ、うん。ダージリンが免疫ないのは知っていたけど…ま…まあいいか。

それに、考えてみたら…スキルで、うまく誤魔化せないかな…」

催眠」でも…つて…え…。

《…………》

「どうしました？」

…は…弾かれた？ スキルが効かない…違う、発動しない…どういう事だ…？

「…その…私も、しよ…」彼『』

「…え？」

「彼…だろう？」

『あ…はい』

『何という気迫…お姉さん、徹底する気だ…』

『あくまで、第三者としてお聞きしたいのでしょうね…私も何となく分かりました』

『か…彼が、3人くらい出てきたつてのはあつたが…今回はそれじゃくて…な？　ちよつと夢が現か、判断してほしいんだ』

『そちらもお聞きしたいのですが…』

『…華』

『ええと…その。私がこの前、家で昼寝をしている時だ』

『麻子、夢の中でも寝てるつて…アンタらしいわ…』

『うるさいなっ！　それだから、判断してほしいんじゃないかっ！』

『はいはい、で？』

『なんか引つかかるな…まあいい。まあそれで、縁側で寝ている時にな？』

『麻子さん、あの場所好きですからね。日当たり良いですし…よく見かけます』

『縁側でお昼寝つて…本格的に猫に…』

『うるさいなっ！！　で…でだ、たまたま目が覚めたら…その…しよ…彼っ！！　彼が、すぐ横にいたんだ』

『お姉ちゃん…友達を威圧しないで…』

『むっ…すまない』

『…徹底してるなあ』

『それよりも、寝顔見られても平気になつてきましたね…私達…今更ですからね…』

…あ…アレか…。

「あら、随分とお可愛い事…」

あ…うん、ソコまではね…。

「あの…隆史さん」

「なに？」

「あの方…彼つて…恋人…いるんですね…」  
「……………」

あ……………何て言ったらああ…

「スツ…と近づいてきたからな。コイツ、何する気だと思つたら…  
寝てる振りで観察してやろうと思つたんだ」

「何故…あ、いや、すまない。続けてくれ」

「お姉ちゃん…」

「私が寝てると、私のスカート捲つたり、下着をすぐに脱がしたりする  
るだろ？」

「確定事項の様に言われても…」

「…彼」

「だからたまには…と思つてな。何かしようとしたら…起きてるぞ  
…と、脅かしてやりたくてな」

「あ…うん。普通の事で彼の事を脅かしたいという気持ちは…  
分かります」

「なんで最後ためて言つたんだろ…」

「手が近づいてきて…頭を持たれた。それで…」

「それで…それで!？」

「五十鈴殿…」

「いつの間にか持つてきた枕を頭の下に入れられ…タオルケットを  
腹に掛けられた」

《……………》

「これは、夢だろう。彼の行動原理としては在り得ない」

「はあああ……がっかりです。麻子さんには、失望しました」

「五十鈴さん!？」

「…もう、黙つて見てようか、ゆかりん」

「慣れてきましたね…私達」

「もう結構です。次のみほさんが、グツチャグチャにされるお話に  
期待します」

「華さん!？」

『 だっ…だつて彼だぞ!! 在り得ないだろ!! 』

『 …よく見る光景です。アレですか? ただの惚気を聞かせたいだけですか? 』

『 なう!?! 』

…。

華さん…今日はまた、一段とお黒いですね…。

『 …だっ…だつてアレだぞっ!!? 彼だぞっ!!? 私に…ネコミミ着けようと! 態々買ってくる様な変態だぞ!!? 』

『 …… 』スツ…

『 い…五十鈴さん? 』

『 あ、いえ。お邪魔しました。続けてください♪ 』

『 あ、華が、微笑ましく笑った… 』

『 興味持ったんですね… 』

『 みほ…お前の友達は…すごいな 』

『 は…はは… 』

ま…まだ…セーフ…まだ…。

『 着けたのですか? 』

『 ゴミを見る目で対応したっ!! 』

『 あらあく断ってしまったのですか? 』

『 当たり前 前 だ !! 』

『 …意味が分からん… 』

『 …彼らしいなあ…。一度私、黒森峰の時の…えつと…あのカードと同じ格好してって頼まれた… 』

『 みほ…私は、何も頼まれてない… 』

『 お姉ちゃん…なんで残念そうなの? 』

『 はあく……で? 麻子…結局? 』

『 …… 』

『 ……麻子? 』

《 ……… 》

『 …… 』

『 …… 』

「…着けてた」

《……………》

「……………」

「惨状が、目に浮かぶようだわ…」

「知らないっ!! 知らないけどっ! 気が付いたら着けてたんだっ

!!」

「……………」

「しかもアイツっ!!」

「はあく…なに?」

「セツトだからと言って!! …尻に…尻尾型のおもちゃ入れてきて

…っっ! 大変だったんだぞっ!?!」

「……………」

「…華」

「…ああ…あの愛のホテルとやら販売していた部類か…」

「お姉ちゃん…なんで即座に分かったの?」

「麻子さんっっ!! 詳しくっっ!!!」

《……………》

「おもちゃ…? なんていうか…彼女のお相手…おいくつくらいの方  
なのでしよう…」

「……………」

ダ…ダージリンの純粹に考察してる顔を見ているのが…辛い…。

「し…知らない…もう…なんか…気が付いたら、自分でも信じられ  
ない声だしてて…。ソコまでの経緯が、おぼろげにしか思い出せない  
んだ…。

なんかもう…頭真っ白で…相変わらず、ゴリゴリ人の弱い所ばっ  
かり!! …擦りつけてきて…」

「あ、スイッチ入りましたね」

「麻子、頭良い分…普段ならすっかり覚えてるんだよねえ…それに、  
気が付いたらっっ…完全に気持ちよく潰されちゃってるよね」

『ん？ 尻尾型のおもちや？』

『なんか…丸い球体が棒状になって…根本についてる尻尾っつ!!  
マコニヤンだからあくって、意味わからんわああ!!!』

『…あ、ソレ…やっぱり、大人のおもちやだ…』

『アイツの…無駄にデカいから…私の中…いっぱいまで物理的に、  
こじ開けられてるだろ？ そこに…まだ慣れてないってのに…お尻  
にまで変なの入れて…ゴリゴリ…って…』

《……………》

『何が、ニヤーって鳴いてだあっ!! 鳴くか、ボケエツ!! 頭おかし  
くなりそうで、それどころじゃないんだっ!!! また…中で当たるから  
…変に…』

『ニヤー…絶対に、鳴いてるよね。いや、鳴かされてるよね？ ソレ  
』

『目に浮かぶようです…』

『うるさいなっ!!』

『あ、否定しない』

『どうでもいいけど、沙織さんと優花里さんが、突っ込みに徹してる  
…』

わー…俺、キモチワル…。

その場のノリって怖いよな…。

あの…とりあえず、ダーズリンさん？ すっごい食い入るように覗  
き込んでますが…普通ならバレそうだぞ？

「あの…隆史さん…コレって…ひよつとして…」

暗闇の中でも分かる程に、顔を真っ赤に染め上げ…俺に涙目を向け  
てきた…。

「……………」

気づいたか…。

《……………》

『遠慮なく人を使ってくれて…確かに使えと言ったが…もう…前と後ろともグツチャグチャで…両方からなんて、オカシクなりそうだったんだぞっ!!』

『あ…はい』

『麻子…羞恥心はないの？ 露骨に言いすぎ…』

『うっさいなっ！ 今更だろうがっ!! だ…だって、あの男っ!!』

…なんか、ソレこそ発情した猫みたいな声だとか!? 何とか散々耳元で、感想言いやがてっ！ だから私も声を我慢しようとするだろ!? そうするとワザと焦らしてなっ!?

敢えて私に、口でオネダリと言わせようとかするんだぞっ!? 羞恥心!? そんなモノとづくにカンストしてるわ!!』

『オネダリしたんですか?』

『したさっ！ するしかないだろっ!』

『…麻子…』

『うっさいなああ!! 人間、快樂には、抗えないもんなんだよっ！ だから麻薬とか無くならないんだろおお』

『彼は麻薬か』

『…なんだろう…ハッキリ否定できない…』

『怖いくらいにしつくりきますね…』

『即堕ちしてるじゃない…麻子』

『しようがな…っ!! あーそうですっ！ そうですよっ!! アイツ一々、的確に人の弱い所とか気持ちい所とかっ！ 全部的確に攻めて、的確に言ってくるんだからっ!!』

『あの…麻子さん？ 目が…』

『アイツので、私の中をいっぱいにされると…オカシクなるんだっ!!! 初め苦しいと思っただけど…気が付いたら…口も…お尻も…全部アイツにいっぱいにされて…ほぼ全体的に…しかも同時に…頭おかしくなりそうだ…』

《……………》

『後ろからの時とか…もう…訳が分からない…。ゆつくりと引かれ

ると、内側を捲られるような感覚がずっ…と続いて…そのまま一気に奥まで入れられると…はあ…。それを何度か繰り返し替えられたらもう…ダメだった…』

《……………》  
『…避妊具…一箱全部使い切った…アイツ…底無しか?』

『そこは物凄く現実感あるね』

『ソコで、現実感を感じるのはいかがでしょうか…』

『…』

『ピル飲んでるの知ってるから、そこからが本番だと言わんばかりに、散々中に出してくれたがな』

《……………》

『…ま…まあ、ソコは別にいいんだが…』

『いいの!?!』

『…白状すると…私から頼んでた…』

《……………》

『い…いいだろう?!? な…なんか…嬉しいんだ…。中に出されると安心するんだ…』

《……………》

『それにな? …頭真っ白で…気持ちが良いという…感覚しかないんだ…。混乱しているのと変わらん…。それが徐々に…段々と怖くなる…その恐怖が、次に何に繋がると思う? …沙織』

『えっ?! 私っ?!』

『……………』

『え? …えっと…わかんない。…けど…?』

『はいっ!!』

『はい、五十鈴さんっ! しかし…なんでそんなに元気なんだ…』

『期待に繋がります!!』

『…いや華、期待って…』正解!』

『正解なの!?!』

『ほぼ快感の極現状態だろ? でも、その先が見えてくるんだよ…それを態々あの変態は、洗脳させるように言ってくる…具体的にっ!!』



『 ……ああ……そうですかあ……沙織さん、まだソコに至っていないの  
ですね……お可哀そうに 』

『 同情された!? 』

『 ……恐怖の先の快樂は……更にオカシクナルゾ? 知らないのか……  
』

『 しっ……知らないっ! 知るわけないよっ! んなこと言ってる  
の、華と麻子だ……け…… 』

《 ……:……:…… 》

『 ……みぽりん? ゆかりん? なんで目を逸らしたの? こっち見  
ようか? 』

『 私も……まだ知らない…… 』

『 お姉さまは、これからですよ 』

『 むっ、そうか。楽しみだ 』

『 ……:……:…… 』

「……すまん、ダーズリン。紅茶は無い。無いから、持った様な手を震  
わせるのはやめてくれ」

「(っ……(っ……(っ……、こー!」

「二ワトリか。こんな言葉を……か?」

エア紅茶を持った手をガタガタと震わせて……目を見開いて、なにか  
可哀そうな位に動揺してる……。

……。

う……。

『 ま……まあ……結局、言いなりになってしまっ、私も悪いんだが……。な  
んか……その割に体に触る時とか……妙に優しく……。それでも携帯で  
撮影しながらとか……いや、それも慣れたが…… 』

『 ……麻子が隆史君に、完堕ちしてる 』

『 うっさいなっ!! 惚れた弱みだくっそおお……アイツ、普段とアノ  
時のギャップが酷すぎる!! 』

『それには、同意します』  
『異議なしであります』  
『素敵ですねぇ』  
『…華』  
『そ…そうだな。彼は…まあ…随分とその…ため込んでいたのだろ  
う…』  
『…昔から…だもんね…』  
『私に言ってくれば、何時でも対応したのにな…』  
『オネエチャン？』  
『…後…優しくしてくれる時…とかもあるんだが…その時は、全く  
違って…なんて言うか…アレはアレで凄くて…。2重人格を疑う程  
うぞ…』  
『…：…：…：飴と鞭…という言葉を思い出したよ…』  
『西住殿…』  
『また絶妙なタイミングなんだっ!! そうして欲しい時とか、ピン  
ポイントでっ!! 髪撫でるとか! 頬を触るとかつ! 細かい所、変  
に完全把握してんだ!』  
『逆に言ってしまうえば、いぢめられたいと言う時もあると…お気持  
ち分かります!』  
『華…ああ…もういい…』  
『…：はあ…：はあ…：いっぱい喋って疲れた…』  
『麻子…で、結局その時は最後、どうなったの?』  
『私か? 私ならもう…体中に使い終わった、避妊具乗せられてるの  
気づかない程に気をやって…小声でニヤーニヤー鳴いてた』

《…：…：…：》

『で…：…：どうだろう?』  
『何がです?』  
『…：これは夢だろうか? 現実なんだろうか…：本気で分からん…』

『現実だと…』  
『現実ですね!』  
『現実よね』  
『現実だな』  
『記憶が混濁するまで攻めて頂いた事は、素直に羨ましいです♪』  
『……………』

……。

あ、うん。道具召喚とか性力ブーストとか初めて使ったスキルが幾つかあったから…夢で処理しておいたけど…。

あー……それにしても…。

他の玩具を利用したのが、完全に記憶から飛んでるな…。

「」

ダージリンが…大人しい…。

完全にキャパオーバー…って顔してるな…。

「お…おお…やりにになりますの…ね…」

その言葉が出た時は、限界が近いと言う事ですね。はい、学習します。

「あの…な? ダージリン。せめて…耳塞いでれば? 俺もそうするから…」

「嫌です!」

「……は?」

「ワツ…ワタクシモオ? …ソレナリニイ…チ…チシキクライハアリ  
マスノデエ…」

「…無理すんな」

寧ろそうして頂けると助かります…。

「ん? …ちよつと待て。ダージリン…言ってる意味分かったのか?」

「…あそこの…武部 沙織さんに、参考書を頂いたおかげで…なんと

なく…」

「……………え」

「そ…それにしても…あの方の相手は…その…どうなんでしょう？  
同じ男性として、どう思いますか？」

「」

「割と…女性に対して、無茶をしている様に思えるのですが…」

「サ…サア？」

俺…ダージリンと何を話しているんだろう…。

…。

あれ…なんで…だ。

多少の明かりがあるとしても、基本的には真っ暗な押し入れの中  
…。

狭い為に必然的に密着しているというのもあるし、多少は顔が近い  
というのも分かる…だからって…なんでソレがあるんだ…。

また…得体の知れない悪寒が走った…。

『は…恥ずかしい事を暴露しただけだった…』

『まあまあ冷泉殿っ！ …ソレこそ…今更ですよ…』

『あ、因みにソレって場所はどこだったの？ またトイレ？』

『…またって』

『…いや…ラブホ…』

《…………》

『久しぶりに彼から誘われた…。彼は彼で…ああいった場所だと本  
気になるから…その…おかしくなって終わりだったか…』

《…………》

『な…なんだ？』

『じゃあ、麻子の夢は、夢だったと判明したので…』

『あれ!? 現実とか言ってなかったか!?!』

『夢ですよ』

『夢だな』

『夢ですね』

『夢ですよねえ〜』

『まこにやん・どりーむ』

『沙織、最後なんて言った!?!』

『んじゃあ、次はみぽりんだね!』

『おいっ! 沙織っ!』

『うう…結構、恥ずかしいね…。でも、明かに夢ですよ?』

『構いません! …みほさんも感覚が現実の様に感じる…夢ですよ?』

『そ…そうですけど…あう。じゃ…じゃあ…』

『何気に一番大胆になったのって…みぽりんだよね』

『人は慣れる生き物なんだ』

『お姉さんが言うと、真実味が凄い…』

『…っ…次は、みほさんですか…あの方も…』

ダージリンは気が付いていない。気が付きようがないだろうが…今の言葉で分かった。

みほ相手ならば、俺だというのはすぐに分かるだろう。夢の話とは言え…まあ…そういった経験があると前提条件を既に示している様なモノだ。

みほの顔を、見ながら…時折俺の顔を見てくる…ダージリン。

そうだ…そうだよ。

この会話を平気で聞いている、あのダージリンだぞ? 初めに気が付くべきだった…。

「た…隆史さん?」

ダージリンの瞳の奥に…見慣れてしまった…怪しい光が浮かび上がっていた。

『あ…因みに、最近はどうなの?』

『え…? た…隆史君ですか?』

「……」  
「そうそう、変な夢じゃなくて」  
「お姉さん、西住殿が言うときは、彼と言わなくても良いのですね……」  
「……」  
「みほさん？」  
「え……えへへ……」  
あ……ダージリンが耳を即座に押さえた……。  
しかし顔から表情が消えた……。ついでに変な眼中の光も消えた……。  
「……」  
なぜ、今更……いや、こっちの方が都合は良いけど……  
「あ、やっばい。その顔でもう、お腹いっぱい」  
「そうですね、今は惚気は結構です。夢のお話だけで結構です」  
「……武部殿……五十鈴殿……」  
「……」  
「ん？ ……西住さんのお姉さん？ ……なぜドヤ顔」  
「……」  
「あつ！ ……そういえば……夜、お姉さんみぼりんのお部屋に泊まっている……よね」  
「ソウダナ。大体いつもは二人でだ」  
「お姉さま……ちよつと待ってください？ 「で」？ だ？」  
「んつと、私の夢なんですけど……」  
「あつ！ ずるいすみほさんっ！ そつちのお話も気になりますっ！」  
「華……アツサリと手の平返したね……」  
「……恥ずかしがっていた西住殿も、誤魔化す為にすんなりと話し始めましたね……コレが西住流……」  
「秋山さん……それは違うだろ……」  
……。  
……。

よしっ!! ダージリンが、耳を押さえていてくれたお陰で、危機回避っ!!

…。  
あ…みほが夢…と、思っている話を話始めようとした矢先…スツ…と腕を下ろした。

聞こえていないか? …聞いてなかった? 雰囲気だけで判断したの? …とか、色々聞きたかったが、このダー様に今言うのは完全な藪蛇だと思えますから…。

やめとこ…。

『…この前…隆史君が、いっば出てきまして…』

『みぽりん…いっばいって…』

『…普通だな。私も割とみる夢だ』

『そうですねえ…結構な頻度で』

『そうだな』

『そうですね』

『あっつれっ!! 見てないの私だけ!?!』

…。

それを普通と言う皆…。

…。

後…沙織さんには、複数分身は使っていない…。

やはりどうしても抵抗があつて…無理。

『…私は一人ですが…』

『ダージン?』

『なっ!! なんでもありませんっ!』

…。

…なんなのだ?

『…ですね? この前のは割と特殊…というか、なんというか…』

』

『特殊?』

あ：アレか。

特にみほの場合：アツチの欲求不満が凄かった：というか、思いつきりやってみたいという真相心理に気が付いてしまったので、それに対応したのだな。

だからと言っても、嬉しくは感じたが、俺以外の男についての、酷く抵抗を持っていた様なので：露骨に姿を変えてみた。

全て俺：しかし、全て現時点での俺じゃない。感覚的に俺だけど、俺じゃないって環境を作ってみた。

…よって。

『小学校とか：中学校の時の隆史君が：いっばい：』



※ルート壊 【宴編】※ #%||子会ですつ!! その  
%※★(差分5枚)

それは夢だと、私は今なら断言できます。

そう：あれは、夢。

なぜそんな言い方か…？

…。

記憶があるんです…。

今でもすぐに思い出せる…。者に触れた触感。…それと鼻を刺すような匂い。周りからは、肌に気持ちの悪い汗を滲ます様な…纏わりつく湿気。

思えない程に、意識がハッキリとして、昨日の…数時間前に体験したかのような感覚。

その中で起きた…あの非現実的な出来事がなければ、私はそれを、夢とは一切疑わなかった…。

だからこそ、分かつてはいるのですが…こうして相談しているのです。

それは…そうですね。丁度、今の様な突然の雨。

一昨日、ちよつとした要件で会長に呼ばれまして、一人で登校した日です。

その帰り道の…つと、その日って夕方頃、急に天候が変わりましたよね？音が強く鳴り響く程の豪雨です。はい、そうです、その日の事です。

分かりやすい程の大粒の雨が、地面をすぐに打ち付けて始めました。

…え？ ええ、学校の帰り道です。…あ…はい。丁度その時…私は、コンビニへ買い物する為に…寄り道をしようとしていました。

予定外の雨ですし…まあ、コンビニへと行けば…傘も売ってますし、丁度良いかなあって…思っていたのですが…余りに強い雨で…しかもこの家、住宅街じゃないですか。

その為に特に雨宿りできる場所もなくて…その…一気にびしょ濡れに…。

下着とかすごい透け始めちゃったし…人に見られたら恥ずかしいので、家に走って帰る事にして…泣く泣くボコは諦める事に…。

…え？ あ、はい。ボコです。  
…。

はいっ!!、そうです！ そうなんですっ!! 今回はなんとコンビニ限定のボコ！ ボコがコンビニの制服着てるんですっ！

久しぶりの新作なんですよっ！ 新作!! 最近どうやら、ベコに触発されて？ このままじゃいけないって、制作班が重い腰を上げたみたいなんですよ!!

丁度コンビニの品出し時間と、私の帰る時間が合いまして、これは運命だっ!!

どうせなら4、5件は巡ってコンプリートしようと思ってたんですっ！ 今回は凄いですよ!?

かなり力が入っているらしくて…親指人形タイプのソフビ人形なんですけどね!？ まあーこちら辺は、ベコに感謝してもちよつとは良いかなあゝって思ってるんですよ!!

あの黄色いだけの、偽も…あ…はい…そうですか…その説明は良いですか…。

…そうですね…ね。脱線…ですよ…続けます…。

でもですね!？ 食玩の分類される商品なんて、久ぶっつ…!! …あ…はい…はい…。

…はあ…。  
えつと…はい。

そんな訳で…泣く泣くボコを…諦めた私は、走って帰っていったんです…あ、これはもう言いましたよね…。

【 ー 】

…。

…ア、ゴメンナサイ、ツツケマスネ？

夕方の5時頃…だったかな。家に到着しました。

《!?!》

ここでも良く覚えてます。水を頭から被った様に、髪も服も…ソレこそ下着までびっしりに濡れちゃいまして…肌に張り付く制服が、すぐく気持ち悪かったです。

髪と服を軽く絞って…玄関を開きました。

ガラツ…と扉を開き中に入ると、一瞬ですが妙な眩暈がしまして…まあ…ボコを諦めたシヨックが大きかったので、これは仕方がないと思います。

小さくため息がでちゃって…ふっ…と顔を上げると何時もの風景が目に入りました。何故こんな事を態々言うか…といいますとね？

妙なんです…変なんです。奥に続く短い廊下…外からの光が少し入っただけの…その光を薄く反射する廊下。

電気がついていないその廊下は、変に薄暗く感じました…。

その何時ものお家とは違った雰囲気、思わず視線を逸らして下を向くと、誰の靴も置かれていませんでした。

『珍しい…まだ誰も帰ってないのかな？ なら丁度いいや…こんなびしょ濡れだし先にお風呂入っちゃおう』

この変な雰囲気なので、少し怖かったのか…無意識にそんな一人事が出ます。

靴と靴下を脱いで、軽くハンカチで体を拭いて、家に上がると…とりあえずは電気を付けました。

でも…なぜかわかりませんが、妙な不安感。歩いていても、いつもはそんなに気にならなかつた、廊下を踏む音が、妙に耳に入り気になります。

ギツ…ギツ…と、小さな軋む音が…何故かすっごく。

『この雰囲気、ちよつと臆病になつてる…のかな？』

と、不安感を取り除く為に、敢えて自分の感想を口にしました。

だったら早くシャワーだけでも浴びちゃおう。そう決意して、そのまま脱衣所に足早に向かいました。

夜とはいえ、真夏だというのに妙に寒く感じました。だから、ちよつと熱めのシャワーをもって思いながらでも…。

途中で気が付きました。電機は付いているのに、妙に暗く感じる廊下の奥…。

いつも皆が集まる居間の襖が目に入りました。その部屋の雰囲気が一番変。妙に意識を持っていかれる。なぜだろう？ そんな疑問が頭を過りました。

確認せずにはいられない。そんな脅迫観念まで感じてしまう程の強制力。

その原因には、無意識に向けられる足が踏む、軋む廊下の音でハツ…と、気が付かされました…。

音とか色々な事で分かる。…感覚的な物ですけど…そう。

…すぐく…濃い気配がする…。

普通なら躊躇する所ですが…この時の私は、少し変でした…。

明かに誰かいる。…それは何故か？ 気配は他の理由も考えられるのですが、そう…何故か、確信していました。

…本当なら、隆史君もいないし…泥棒とかそういつた事に危ないし、注意しないとイケないのに、確認する事に…確認しなくちゃって思いこんでしまつて…。

それでも、ゆっくり…中に気づかれない様に、ゆっくりと襖を開けて行きました。

スツ…と音もなく開かれていく襖。

見えてくる居間の室内は、電機がついていない様で…少し薄暗かったです。

そして見えました。…その薄暗い室内の窓際で、何かが動いている。座卓が邪魔をして良く見えませんが、その座卓からチラチラと見え隠れする…何か。

なんというのでしょうか？ 上下にへと動きを繰り返している…とでもいうのでしょうか？ 座卓の陰から少し見え、消え…見えて、

消えて…を繰り返している。

小さく擦る様な音を繰り返している「その何か」…の、正体を確かめる事もしないで、私は体が驚きで硬直してしまいました。

いた…、

本当に「何か」がいた。頭の中はソレだけです。

…その時、カタン…と、襖から音が…。

はい、何かの拍子で私の腕が襖に当たってしまった音でした。

「その何か」…は、その音にすぐ気が付き…少しだけ見えている状態で動きを止めました。

…そして、ゆつくりと…座卓の陰から…立ち上がりました。そう…立ち上がったんです。

そして突然の…強い光。

雷の稲光と、すぐに大きく鳴り響いた音と共に、ハッキリと分かりました。

細く…私より背の低い程の身長…。

…それは、人…でした。

部屋に見知らぬ子供がいました

「怖い話じゃないかっ!!」

「ひあっ!?!」

「…びっ…びっくりした…。もおおー…麻子お、急に大声ださないですよー!」

「と…お…途中で怪しいと思っていたけどっ!! お化けじゃないかっ!! しかもっ! 住んでいる家のっ!!」

違いますよお。私も最近そっち系の…怪談とか苦手になっちゃたんですから、そんな話はしませんよ

「そ…そうなのか?」

…アンツイオの時の事で…ちよつと…

「あ………ああ……。な……なら！ その子供は誰だったんだ!？」

「冷泉殿！ ゆ……夢のお話ですよ？」

「……しかし、みほの喋り方が……。勘違いしてもしかたがないと思うが……」

「そうですねえ。みほさん……急に淡々と語り始めるものですから……私も驚いてしまいました」

「何かに憑りつかれたかの様に……。な。思わず聞き入ってしまった……」

子供。

薄暗い部屋の隅っこで、全身が濡れている子供……子供だよね？

動かずに私をジッと見つめている。

段々と目がこの薄暗さになれてくると、顔がすっかりと分かってきました。どこかで見た……見覚えのある……そんな懐かしくとも思える、そんな幼い顔付き。

あ……そうか。隆史君の小さい頃にそっくりなんだ……って、すぐに気が付きました。

『……だれ？』

……と、少し警戒した顔で声を掛けてきました。

よ……よかった。話ができる。この世の存在だ……と、内心安堵をしてみました……。

あ……はい、ごめんなさい麻子さん。正直、そっちの方の人かと思つて、すつごく怖かったです。

アノ時の事を思い出して、なんかそういう話し方になってました……。

えつと……安堵をしたのと同時に、一気に疑問が湧いてきました。

……この子……誰だろう……？

当然の疑問……。見たところ……小学生位にも見えるんだけど、家に忍び込んだ……という訳でもなさそう。

『 ああ……ぼくは……●●●っていいいます ……』

やっぱり、すこし：隆史君の子供の頃に似ていた。

立ち竦んでいる私の顔を窺ってか、すぐに私の気持ちを察したかのように、自己紹介を始めてくれた。

名前は……なんでだろう……ここで聞いているはずなのに、次の瞬間には忘れている……そんな感じでした。

すつごく丁寧な喋り方で、昔の隆史君をすぐに思い出しました。その隆史君の……親戚？　みたいな事を言っていたと思います。上半身が裸で、半ズボン。

すぐに現状を説明し始めてくれたおかげで、段々と状況が呑み込めてきました。

『おじやましています』

そうそう、やっぱり丁寧な……そんな言い方してました。

彼が小学生の時もそう。……ランドセルをしていないと、中学生に間違われる様な背丈。誰に対しても丁寧なんだけど、露骨に他人行儀な……そんな喋り方もそっくり。

あはは……正直、余り可愛くない子供だったと思いますよ？　ね？

お姉ちゃん。

あ……はい。そうですね。話が大きく脱線しそうだし……小さい頃の隆史君の話は、また後でしましょう。

この子は、彼の親戚……。彼の元に夏休みを利用して遊びに来たらしいのですが、此処に来てすぐに隆史君は野暮用が出来たと出かけてしまったみたい。

すぐに戻るから……と、言っただけのもの、この家に一人、残されてしまったみたいです。

見た目は少し大人びて見えても、子供を見知らぬ家に残すとか……そもそも、親戚の子が学園艦にまで遊びに来るんだったら、私達にも教えて欲しかったな……。

そんな事を思っていたら、また察してたのでしょいか……？　彼をフオローする様に、内緒で来たので仕方ありません。……と、また……昔の彼の思い出すような、丁寧な口調で説明されてしまったんです。

……初めは、隆史君の部屋にいたみたいなんです、さすがに飽きて

しまった様で：庭先で一人で遊んでいたみたいなんです。

そうしたらこの大雨……。少しの兩位ならと気にしていなかったらしいのですが、さすがに雨が強すぎました。気が付いたら、びしょ濡れになっていたと：で、庭先から居間にそのまま入って避難したらしいんですよ。

余り人様の家をウロウロするのも、なんですから：って、最後に入った居間で過ごしていたみたいなんです。あはは：は：は：そうです、そういう言い方も含めて、あまり小学生らしくなかったんですよええ  
く：隆史君も。

：え？ あ、はい。今で何をしていたかと、勿論聞きましたよ？

『筋 トレ』

そしたら：一言で返されました：腕立て伏せを、していたみたいなんです。

だから座卓から見え隠れしていたんですねえく：この子の背中と  
いうか、肩が…。

はい、そうなんです！ 一々行動もそっくりでした！

もう：なんか、もうそれを聞いて、すっごく面白くて！ …ちよつと、笑っちゃいました。

笑ってる私を不思議そうに見てくるその子に、今度は私が自己紹介。そして：そう、それでっ！

『西住：さん？』

また一言、他人行儀な呼ばれ方をしてしまいました。

確かに面識も少ないんですけど、さすがに小学生の子供に、その呼ばれ方はこそばゆくて：もうちよつと碎けた言い方で良いよ？ っ  
て言ったんです。

あ、でも小学生相手に碎けた感じで：って言っても分からないかな？  
？ とも思っただんですけど：この子、すぐに対応してくれて…。

『み ほ お 姉 ち ゃ ん ？』

『』

：って!! 呼んでくれたんです！

お姉ちゃんだよ!! お姉ちゃん!!



私っ!! お姉ちゃんって呼ばれちゃった!!

「み…みほ?」

「おー…みぼりんのテンション爆上がりい」

「私も詩織から呼ばれるが…特にそこまで嬉しいとかは思わないな…」

「私も〜」

「あく…私は何となく分かります。一人っ子ですので…兄弟姉妹は、ちよつと憧れますねえ」

「私も優花里さんと同じですね〜。みほさんは、お姉さまはいらっしゃるので…逆に呼ばれてみたかったのではないのでしょうか?」

「それはそうと…西住殿のテンション……ボコ殿遭遇並みに上がりますね…」

お風呂が沸きました。

「え?」

「はい?」

つて…突然、廊下から機械の音声が聞こえたんです。

「どうやら隆史君が、予約を入れてくれていたみたいで…それが今、湧いたと…。まあそれで、ちよつと浮かれていた私は我を取り戻しました。」

…うん、雨で体がびしょ濡れのままだと…というのを思い出しました…。

「あ…ああ、そういう…みぼりん、よつぽど嬉しかったんだね…」

「続きですか。…しかし、夢らしからぬ程のリアル感…西住殿の喋り方で、妙な説得力がありますね…」

目の前の相手って小学生…子供だし…とも思ったんですが、私より少し背の低い位のその子に、思わず体を腕で隠しちゃいました。

し…下着まで透けて見えてましたしね…。そんな私を不思議そうに見つめているその子に、あはは〜って、愛想笑いまでしちゃいましたね。

その時に翌々見たら、私だけじゃなくてその子も大分雨で濡れていました。

居間の畳を濡らさない様に、上半身のTEEシャツを脱いで、縁側の部分の板間部分で腕立てするとか：変に気を使っていたその子。

『くちつー！』

何となく眺めていたら：変なクシヤミが出ちゃいまして：この時、結構寒かったんですね。

私もそうですが、その子もこのままじゃ、風邪を引いてしまいそうですので：その子にお風呂を先に入れてもらおうと思いましたが。

ですから、声を掛けたら、その子：遠慮しちゃいまして：でもです。その子の体が、少し震えているのが分かってしまいました。

何度か説得をしようとする：また何かを察したのか、すぐに了承してくれました。

…。

：そうなんです。：なにか変だ：と、物凄い違和感を感じました。警戒心：とでもいうのでしょうか？ それすら湧かない。彼が言う事が全て正しく感じ、思考がすべて一定方向へと誘導されている様な。

なんて言っているのか：考え事に、疑問すら挟ませない。：都合の良い方向へ：でも、それは誰の都合でしょうか？

何を言っているか、良く分かりませんよね…。

『みほお姉ちゃん？』

：考え込んで動かなくなつた私を、不思議そうに見ながら：そう呼びました。

……。

その一言でなんかっ!!

なんかもう！ どうでも良くなりました!!

もう：凄かったです。凄かったです!!

なにかこう：体に稲妻が走ったかの様な感覚が：もう…。

お姉ちゃん：良いいい…。

小さい隆史君が、恥ずかしがっている様にも見えて、更にはお姉

ちやんと呼んでくれるのが…もう凄く…て…。

その子の、着替えないとか…そういつた考えはなく、一瞬触った肩が、冷えていたというのもあり、すこし急ごうって思えまして…何より！

お姉ちゃんならこうっ！ 多分こうしますっ！ 弟がいたら多分！ 絶対ッ！！

それで脱衣所に着くと…。

え…？ 飛ばすな？ いえっ！ ここは、お姉ちゃんなら一緒に入るか…!! お姉ちゃんもそうでしたしっ！

なんかもう…その子の腕を掴んで、お風呂場へ直行しました。

『お姉ちゃんが洗ってあげるっ!!』

何か言っていた気もしますが、お姉ちゃんに任して！ としか言つてなかつた気がします…。

まあ…うん、私と余り身長が変わりませんし、妙に大人びていましたが、子供ですし…まあ良いかなあ…つて。そうですよ！ 大丈夫ですっ！

子供相手だし、隆史君もさすがに何も言わないだろうって…でも今思うと、何故かそうする事が正解で、そうする事が当然だと…思い込んでいた様な感じがします。

決してお姉ちゃんと呼ばれた事が、嬉しくて舞い上がっていた訳じゃあ…ありませんよ？ だってお姉ちゃんですもん!!

はい？ …紛らわしい？ お姉ちゃん、我慢して！

はいっ！ では脱衣所に到着しました！

えっと…その子はすぐに、パパツと服を…と、いつでも靴下とズボンだけだったんですが、すぐに脱いでしまいました。…ちよつと脱がすの手伝って見たかったのに…。

脱いだ物は、洗濯機に入れておいて？ というと、無言でそれに従ってくれまして…すると、その子はすぐに逃げる様に浴室へと入ってしまいました…。

はい…逃げる様に…。どちらかと言うと私よりも、その子の方が、恥ずかしがってる感じがして…妙な感覚になりそうでした…。

さて：私はここで、どうしようかと迷いました。本当に一緒に私もお風呂に入っちゃっても良かったんですが：子供相手でも初対面の男の子だし：裸はちよつと：その：恥ずかしくて？

あ、でもそうだ。どうせここまで濡れちゃっているんですし、洗う時に多少のお湯が当たったとしてもいいかつ！　って：感じで、着替える事もなく、このまま制服で洗って上げようと思いました。

あの子を洗って上げた後に、私は私で入ればいいやって。：流石にいきなり一緒にお風呂に入るなんて、あの子も更に恥ずかしいでしょうし：。

そういえば：と、あの位の男の子だと、もう年上だとしても裸を見られるのが恥ずかしいとか思い始める頃なのかなあ？　とか、今になってそんな事思いました。

いくつ位なんだろう：あの子。ちよつと透けた私の制服姿を、恥ずかしそうに視線をずらしていた：。それに気が付いたからこそ、私も無意識にさつき腕で体を隠しちゃったんだろうなあ。

難しい年頃なんだろうなあ：。なんて：そんな事考えてて：少しなんとも言えないって顔を思い出したら：また昔の隆史君の事を思い出しちゃいました。

隆史君に似ているから、余計にだよ。彼にはそんな時期：あったような：なかったような：。

小さい頃の私達とお風呂に入った時は、子供だったし特に変化なかったけど：その子供の頃、私達とお母さんとお風呂に入ろうとした時は：。。。。。。。

すつごい：慌てたね：あの子の比じゃなかった：。すつごい遠慮してたよね：お姉ちゃん。というか、本気で逃げて、結局一度も入らなかったよね：子供ながらに正直、イラッとしたよね？

。。。。。。  
でも、今回は：隆史君にすつごい似てる、その子の反応が：。。。。。。

『。。。。。。』

ちよつと：かわいいかも：。

「みほ！ 今度その子を見せて…というか、紹介してくれないか!？」  
「お姉さん…？ 夢！ ゆ…夢ですからね？」

「むっ…そうだった…。動く小さな隆史を見て見たかった」

「…言い得て妙ですね、その言い方…」

「恥ずかしがる隆史君…に、似た子。」

あんな姿…昔は、微塵も…欠片も！ …見せてくれなかったの、  
ちよつと…変な嬉しさがありません。

うふふふふ…。

「…みほ」

なに？ お姉ちゃん？

「…ずるい」

《……………》

知らないっ！ だって夢だもん！ お姉ちゃんもお姉ちゃん、お  
姉ちゃんがお姉ちゃんになる夢を見ればいいじゃない！

「だから…紛らわしいよみほりん」

「…夢とは、狙って見られるものだろうか…」

「とりあえず、寝る前に考えたり…そういった所から、試してみたら如  
何でしょう？」

「むっ…そうだな。さっそく今夜にでも試してみよう」

……。

……………。

「西住殿？」

えつと…ここからです。

「ん？ 何がだ？」

…私がコレを「夢」だと、認識せざる負えなかつた事態は…。

「どういう事です？ …つて、顔真っ赤になつてる時点で、察しは付き  
ますが…」

…。

と…とりあえず、順番に。

浴室の扉を開けると…その目の前の…その子は、既に体を洗い終え

た後でした…多分。

扉を開けた私に少し顔を向け…すぐに前を向いてしまいました。ああ…恥ずかしがってる…。でも…早い…いくらなんでも早すぎる…。体がボディソープの泡が、体中にすでについていました…。

これだと、後はお湯で流すだけじゃないっ！ ご丁寧に隆史君用のボディブラシ使ってるしっ！ …はあ…色で男性用なのが分かったのかなあ…。

洗ってあげたかった…お姉ちゃんらしい事…したかった…。

「…そこで落胆するんだ」

でもっ!! 背中っ!! 背中は無傷ですっ!

ならばお風呂の椅子に座らせて、さっそくっ!! …と思ったのですが…すぐく…嫌がりました…。

こちらを見ようともしてくれません…私…お姉ちゃんなのに…大丈夫! ちゃんと服着てるよ? って言ったら、チラツとは見てくれましたが、すぐに前を向かれました…。

しかしっ! こんな事で私は諦めませんでした! 何度かの攻防の後、漸くあきらめさせる事に成功した私は! その子の背中を洗う事になりました!

そうですよ…背中を洗いながら、ついでにもう一回、体を洗ったって大丈夫ですよ、大丈夫…問題ありません!

『ちゃんと洗おうねええ〜♪』とか、言ったら大丈夫でしたっ! 触る、少し小さな背中。

ボディブラシに泡を立てて、できるだけ優しく…優しく…。

『…………』

洗って上げているっ! 頭も再度もう一度っ!

たまにくすぐったそうに、体を振じらせる仕草とか…ああ…でも、洗っている最中にじっとしているのに我慢できず遊びだして、それを制止して苦勞しながら洗うっつて…のはできなかつたなあ。

基本的に大人しくて…言う事をちゃんと聞く、良い子なんだもん…なんか寂しい…。でも実感っ! 実感してましたあ! ……ああ…コレがお姉ちゃん。私、お姉ちゃん。

なんか…その子に逆に気を使われて、大人しく洗わせて貰っている感が凄かったです…でもっ！ 私の要望通りになりましたっ！

「…みぼりんは、一体何と戦ってるの？」

「私…：突っ込みが、追い付かなくなってきました…」

泡が流れる、年の割に筋肉質な背中…。小さくても男の子の背中…：って感じがしました。遊んでいて出来た傷なのか…？ 小さな傷もいくつか見える。これが男の子かあ…：とか、少し関心してました。

…この子、どんな子なんだろう…：とか…色々と考えながら、背中から太もも…腕…と、順番にもう一度！ …洗っていきます。そういえば、いつ頃隆史君、私達の家でお風呂入っていかなくなっただなあ…：とか？

そんな事思い出しながら、少しノスタルジックな気分にもなってきました。…うん、懐かしい。

でも…その子。一言も喋ってくれなかったのがちよつと寂しかったです。何を言っても、空返事っぽかったし…。

シャワーを手に取って、お湯を出して、準備完了。後は泡を洗い流して終わり…：なんですけどね？ …最後まで綺麗に流せない。

だってその子、座ったままで体を動かさないうですもん。背中を流すのは全然問題なかった…：あ、あつた。思ったよりも勢いよく出してしまっていた様で、跳ね返ったお湯で…：私もまたびしょびしょに…。

なんかもう…：透けすぎちゃって、下着姿と変わらなくなってます。…：でもなんか…：楽しすぎて、全然気にならなかつたんですよええ…：まあ、その子は裸ですし。

変な声を上げちゃって、一瞬だけこちらを振り向いてくれたんですけど…：まあ、また前向いちゃって…：それでもこちらを気にしてくれ始めたのか、チラチラ何かに葛藤するように見えてくれるようになったんですけどね！

もう、これならどれだけ濡れても、一緒だなあ…：って思って、後ろから抱きしめるみたく、腕を回して強引に前にもシャワーを掛けてみました。

でも…何故かその子、余計に体を更に硬直させてました…なんでしょう？

そのまま、体全体を洗っている時も動かないで前を見て…そう思っていると、やっぱりたまに、チラチラとこちらを振り向いてくれるので…ちよつと嬉しかったです。

目が合うと、笑って上げたりすると、急いでまた前を向いてしまいましたけど…。それが不思議でした。…気を使ってくれてるか分かりませんでした

「あの…西住殿…あの…それって…その子にとってある意味拷問…」  
「ゆかりん…もう、黙ってよ…。結構、鈍いし天然な部分もあるからねえ…みぽりんって」

「夢の話…なのでしよう？ どうしてそこまで詳細に…あ、いや。ちやんと最後まで聞きましよう」

「……とりあえず、私でも分かるぞ…西住さんは、書記の事は言えないな」

私は体を洗い終わると、壁にシャワーを掛けようと、立ち上がった時…ふと何となく視線を落とすと…その…見えちゃったんです。

彼の……え？ ふえ!? ちっ…違いますっ!! 違いますよっ!!  
!!

…。

なぜ皆さん黙るんですか…。

はあ…。

えつと…ですね？

洗っている時は、陰になつて見えなかったんですが…その子が膝に添えていた…左腕が見えたんです。

…少し、話が変わります。

「…え？」

隆史君って、この夏場でも制服は長袖のワイシャツ。ティーシャツは着ても、何かしら長袖のシャツを着てますよね？ はい…少し袖を捲っているだけの。

コレは…昔からなんです。小学生から、中学生になつても…今、高



校生になっても…多分これからも…一生。

特に私とお姉ちゃんがいる時は、極力…はい。皆さんも見た事ありますよね？

肘から伸びる…左腕の傷。

昔の事件で、お姉ちゃんを庇った時の…傷。大袈裟に隠したりは、もうしなくなりましたが、彼は基本的に…私とお姉ちゃんの前ですと、その傷を隠します。

最近では大分薄くなりましたけど…それでも…です。できるだけ人目から隠そうとします。

あっ！ いえ…すいません。ちよつと変な雰囲気になっちゃいました…。

私が言いたいの…その子の腕に…同じ傷がついてました。

今と違って、解りやすい生々しいその痕が…ハッキリと…。

同じ形、同じ場所…どうにもコレが気になって仕方がなかったんです…。その具合が…この子と同じ位の時の…隆史君の傷と一緒…。

はつきり言います。私とお姉ちゃんが、ソレを見間違うという事はありえません。

絶対に無い。断言します。

だから…初めに聞いた、この子の名前を自然に思い出そうとしました。この時また…ちよつとまた…怖くなってきまして…。

だって、どんなに思い出そうとしても、この子の名前が思い出せない。何かを発音しても、雑音が入って聞き取れない。そこだけは、認識が出来なかったんです。

そして…まったく同じ…あの傷痕が、その子の左腕にあった…。

立ち上がり、固まってしまった私は…名前を…もう一度、彼の名前を聞こうと、窺ってました。

何故…なんでそうまでして、執着するのか…私にもわかりません。何度も何度も頭の中に、冷たい感覚が…連続して走る。

でも、そうしていても、本当に何時までも状況が変わらない。…なら思い切って！…て、意を決して！

『あ…あのっ！ 君!!』

…。  
つと…声を掛けた瞬間…こちらを振り向いたその子と目が合うと…。  
突然浴室の電気が、ブツツ！ …って切れました。

「やっぱり怖い話じゃないか!!」

「ひゃわ!？」

「麻子さん…ですから…心臓が悪い…ですの…」

ちっ…違いますっ!! だから、違いますって!!

「どうせアレだろ!? 書記の生霊か何かだろ!？」

「麻子…生霊って…」

麻子さん、落ち着いてくださいっ!!

「今…また、すっごくいいタイミングで、雷落ちたよね…」

「稲光が良い演出してくれるな…電気が切れたの下りで、綺麗にみほの顔に濃い影を作り出したな…」

「冷泉殿が、本気で取り乱してますね…」

ま…麻子さん! 落ち着いて! これは…お話は…この…お話は…

えっちなお話ですっ!!

《……………》

「みほ…言い切ったな…」

「分かって聞いてはいましたが…ここまで露骨に言ったのは初めてです…」

「楽しみです♪」

「……華」

はううああああ。もうっ! なにを言わせるんですか!

「…うう…分かった…信じる…」

「麻子…すぐに大人しくなったね…」

「冷泉殿も染まって来ましたね…」

「楽しみです♪」

「…ブレないな君は…」

その…ですね…一瞬の停電…？　とでもいうのでしょうか？　学園艦の何処かに雷でも落ちたんだと思います。

避雷針にしっかりと落ちたみたいですから…電機はすぐに復仇したんです。

ただ…状況が著しく変わりましたけど…あ、大丈夫です、大丈夫ですからねえ…麻子さん。

…正直に白状してしまいますと…その停電のタイミングが恐ろしく良くて…ちよつと腰が抜けちゃいました。

驚いて足を滑らせて…その…尻もち付いちゃいまして…変な悲鳴上げちゃいましたし…でも、すぐに目の前の子の事を思い出しました。だって、私お姉ちゃん!!

『だ…大丈夫?!』

…と、声を上げるのと一緒に、浴室の電気がパカッ…着いた瞬間。

どうも…その子が座っていた風呂椅子を、尻もちを付いてしまった時、軽く蹴飛ばしてしまつたようで…うまく避けたのか、彼は転ぶこともなく…目の前に立つてました。

驚いて立ち上がったんでしようけど…その…座った私の目の前に…あの…あ…はい。皆さん、さすがに気が付いてますよね…。

オツキクなっているのを、こちらに向けて…。

《……………》

わ…私だって気が付きましたよ！　この時に!!

さつき沙織さんが、私を天然とか言つた時にも、どれだけ話の落ちを言いそうになつたかつ!!

はい…はい…もう、いいです…。自覚もありますから…はあく…。

【……………】

……………。

「あの…みぼりん？　…ど…ど…どうしたの？」

「ガクンと頭を垂れましたけど…首、大丈夫です…か？」

ワタシハ…んんっ！ 私は一瞬…固まってしまいました…。

ああ…弟が成長していく寂しさってこういうものなんだなあ…  
…って、ちよつと思いました。

…え、違う？ まあ…良いじゃないですか…お姉ちゃん気分を満喫  
したかったんですっ！

一瞬、目を奪われちゃいましたけど…恐る恐る顔を上げると…あれ  
だけ影が掛かった様に、うまく分からなかった…その子の顔がはつき  
り分かりました。

恥ずかしそうに…そして、いたずらが見つかった子供がするような  
顔。目だけ逸らしているんですが…見られてしまった事で動けない  
…そんな雰囲気。

そして…ここで思い出しました。ここ最近続いている、妙にリアル  
な…変に記憶に残る…夢を…。

そして思いました。

あ…コレ、いつもの夢かも？ …って。

夢…。

それでも、とてもリアルに感じる…お風呂場の湿度。手に触れる触  
感。お湯の熱さ。

シャンプーなどの香り……感じるがまま普通で、とても夢だとは思  
えない…それが私を、更に混乱させました…。

目の前の子が、更に私の頭の中をゴチャゴチャにして、うまく考え  
をまとめさせてくれない。

だった…あの時の眉にできた、小さなキズまで、まるで一緒。

目の前の彼顔…見忘れるわけ…いえ、見間違える訳ないじゃないで  
すか。

そう…子供の頃の、隆史君でした。

…。

あ、はい。ですから怖い話じゃないですからね？ 麻子さくん…逃  
げないでえ…。

とうかつ!!!  
お姉ちゃんっ!!

「…」  
お姉ちゃんっ!?

「あ、私か? なんだ?」

その時の!

隆史君の顔がっ!

もうっっ!!

可愛くて!!

かわいくてえ!!!

いくら子供姿の隆史君だとしてもっ!! 絶対に昔からしないような顔を私に向けてくれるの!!

見たことないっ! そんな顔! 照れくさそうに…年相応な挙動!! 解りやすく言う…。

まるでお母さんに、褒められた時の顔を私に向けてくれるの!!  
「自分だけけずるいぞ、みほっ!!」

だから夢だもんっ! 自分で見てよっ!!

「……麻子?」

「あ…うん。もう大丈夫だ…なんかもう…うん」

「…シタ

…。

…。

「ずるっ…ん…ん? みほ? ど…どうした? 急に黙って」

…。

…それでもね…ちよつとその時…。何で夢の事を思い出したのか  
分からないの…。

普通に偶然、万が一…同じ様に同じような…そんな子供がいても、  
おかしくないでしょ?

信じられないからの、現実逃避…って訳でもなさそうだった…でも  
…強烈に心に残って…頭の片隅に、これは夢だと言いつける自分が  
いた…。

言い聞かせる…とも違う…夢…コレは夢だって…確信させられた  
…。

…サセラレタ？ エ？

「…マシタ」

そ…それに…ソウダ。目の前に突き出されたアレのお陰で、更に冷  
静に考えられなかった…何時もの隆史君と、やっぱり違ってたし  
…。

大きさが…その…ちよつとやっぱり小さかったしね？ ああ…  
やっぱり子供なんだあ…って、そんな考えが頭を巡ってた。

つるつるだったし…ちよつと…さきつぽに、か…皮？ とか言うの  
かな？ …被ってたし…あ、はい。これは完全な現実逃避デシタ。

「い…妹？ しつかり確認してるな…」

「今日のみぼりん…ちよつと、様子おかしいね」

「恥ずかしがってはいませんが、結構露骨に言い出しましたね…とい  
うか…」

「なんか、催眠術にでもかかっているみたいだな」

「…そうですねえくみほさん？」

…はい？ 華さん、なんですか？

「因みに大きさ、どのくらいでした？」

「華!」

「…五十鈴さんは…すごいな…」

13センチくらいですね。

《……………》

「そ…即答…」

「13cm…日本人の男性平均ですねえ」

「ゆかりん？ …なんでそんな事知ってるの」

」

「…沙織さん…。優花里さん泣かせちゃダメですよ？」

「ゆかりん!? ごめっ! ごめんね!? そうだよね!? 調べるよね!!  
彼のとか見ちゃたら!」

「うっうっう!!」

「……」

で…ですね…?

二人して完全に硬直してしまっただので…もうどうしたら良いか…  
ある意味で頭の中真っ白でした。

子供の頃でも、決して泣いた事がなかった彼。だけどその時の隆史  
君が涙を浮かべた目をしてる…。

それが…今のこの状態で混乱して…その涙目で、私を不安そうに見  
つめている…。

今みたく、ある意味で知識豊富じゃなかった頃…なんだなあ…つ  
て、ちよつと…現実逃避してました…でも。

『みほお姉ちゃん…どうしよう?』

…。

てっつ! そんな顔でっ…泣きそうな顔で言われたらっ!

泣きそうな顔で、そぎやん事、言ってきまして! …なんかもう…  
こう…。

ゾクゾクツ! って…背筋に何か走りました…。

《……………》

私自身…流石にこの展開は予定してなくて…このくらいの子に、な  
んて言っついていいか分からなくて…また更に混乱しちゃいました…。

夢かもしれないけど…目の前の子供らしい隆史君。で…でえ…何  
を言ってるか分からないかもしれないけど…私も分かりませんでし  
た。

…あ、はい。そんなどうしたらいいか分からなく、人間こういう  
時って知っている事をとっさに言っってしまうんだなあ…って…思  
いました。

無垢な感じの隆史君(小)に…私…。

『い…一度！ そ…そのお！ 出したら大丈夫！』

…て…。

「はい、みぼりんストップ」

「…シヨタカシ…」

「冷泉殿？」

「なんでもないっ!!」

おもいつきり…ハッキリ言っちゃいました…。

この隆史君(小)、言われた意味が分からないのか…きよんとした顔をされたのがまた…。そんな顔で見られたら、また…また…こ…こう…ゾクゾクって…。

何て言うんでしょうか…無垢！ そう！ 無垢な隆史君だったんですよ!? 性の芽生えとうか何というか!

オツキクなっちゃったのも、なんでか分かってないみたいでっ!!

良いですか!? あの隆史君がですよ!!?!

「ゾクゾクって…何を言っているんだ妹よ」

「…みぼりん、何かに目覚めの時」

「ワタクシモ、ワカリマセエン」

「…五十鈴殿」

ま…まあ、私もその時は、一体何を言っているんだろ…と、思い出すため息しか出ませんでした…。

…。

…一瞬、眩暈がしました。

のぼせたかな？ とも思いましたが、何か冷たい感覚…とうか、衝撃が頭の中に…その為の昏倒…？ ソノヨウナカンジ。

いえ…逆に、この眩暈のお陰で、冷静になれました。一気に自分を取り戻せたんです。

『一度出す？ 何を？ どうやって？』

…つて、また…無垢な顔で、聞いてくるんです…まっすぐにっ!!



私の顔は、絶対に真っ赤になってるだろうし…すっごく熱いし…お風呂場だし…で、のぼせそうでした…。

完全に硬直してしまった私です。…方法なんて口に出して言える訳ありませんし…夢だと思っただけでも、完全に確信取れてませんし…。

もし違ったら…って思うし…隆史君以外に、そう言う事…したくありません。…で…一つ…妙案を思いつきました。

そうです…そうですね。男性の射精のメカニズムは思ったよりも単純だし…しかも相手は子供。その子の容姿、傷跡…隆史君の生き写し…それらを踏まえても、それくらいなら許されるはずですよ。

これが夢だとは確信はできませんが、もし現実の場合の事も踏まえ、敢えて自然に…この子を気づけけない様に…何よりもそういった意味合いでの行為ではありませんし…的に…そう！

事務的に行えば良いのです！ いわばこれは医療行為！ そうです医療行為なんですっ！！

「み…みほ？」

「…西住殿…戦車に乗っている時の顔してますね」

「完全に思い出して…自分の世界にはいつちやっただあ…」

「…かなり取り乱していたと、推測ができるな」

医療行為…そう…特にそういった芽生えの時と違って、トラウマとかになり得そうだし…あくまで自然に…。

だから…これを…ああして…そう…そうっ！ そうですよっ！

「ごしごし作戦」ですっ！

《……………》

『みほお姉ちゃん？』

『うん！ だっ…大丈夫！ 洗えばっ！ 一緒にもう一度洗っちゃ

おっか！』

『洗う？』

絶対に声が上ずってたと思います…。

どうやって？ の応えを行動で示すべくして動き出した私…それは彼も分かってくれた様で、動かないで逃げずにいてくれました。

ちよつと近づいて…彼の腰を…というか、この子…腰すつごい細い…。今の隆史君とは大違いだなあ…つて、更にまた現実逃避を追加しながら頑張りました。

体を洗うっ！ ボディソープの泡だらけにすれば…うんっ！  
それなら自然だよねっ!! 自然だから仕方ないよね!

あ…このままだと、流石にちよつと痛いかも…つて思つて…自分の掌に新しく追加して…両手で擦る様にして…さらなる泡を作製しました!

これなら滑るし、液体石鹼で更に自然っ！ 体を洗う医療行為で、  
更には自然だから仕方ないよね!!

「みほりん…え…まさか…」

「沙織さん?」

「え…なに、華」

「医療行為ですから、仕方ありませんよお?」

「……………」

「五十鈴殿…今日一番の輝く笑顔ですね…」

「…」ガ、ハツドウシマシタ。

…。

……………。

…そのまま…両手で…その…その子のオツキクなつてるのを片手で、掴んでみました…。

一瞬、その子の体がビクンと跳ねる様に驚いていましたが…液体石鹼を塗っていると、あからさまに見せながら…伸ばしていききました。  
洗うよ? 洗うからねえ…つて…。塗りながら…洗う様に…その…うん。もう片方の手で、その付けね…の周りを…洗いだして…どんどんと泡を立てていききました。

『み…みほ、お姉ちゃん?』

『大丈夫っ！ 医療行為だからっ！』

『いりよ…？ こうい？』

私の行動に、心配そうな声が聞こえましたが…そう答えるので精一杯でした…不思議そうに、聞き返してきましたが…気にせず動かしません。

ヌルヌルとした感触が手の中に…あ…あう…。その子のを掴んだ手の中が熱い…これ…動かさないと、いつまでも終わりませんよね…。

ですから、ゆっくりと…その…前後運動を始めました。液体石鹼が、クチクチツて混ざり合う音が妙に残ります。しばらく…ゆっくりと続けると…彼が腰を前に出してきました…その行動に見覚えがありました…。

あ…気持ちいいんだ…って…思っちゃって。

それでも私が何をしているか、理解していない…そんな顔で…目に涙を溜めて、見下ろしてきました。

『……………』ゾクウ！

その泣きそうな顔を見ると…私の喉が鳴った気がします。彼の顔を見つめながら…石鹼が混ざり合う音が段々と細かく…早くなっていく。

もう、浴室からは、その音と…彼の呼吸しか聞こえません。

その子は特に、何も言わず…私の顔をずっと…見下ろしていました。ただ…その口から吐かれる呼吸が、徐々に荒くなっていききました。

こ…子供にしては、大きい分類に入るんだろうなあ…とか、段々と私も考えが変な方向に向いてきました。

ただ握っていた手は、指に変わり…親指で適度に押さえ…液体石鹼を擦り込み…交じり合わせるように…根本から瀬端まで丁寧に…。

クチクチツて音が、段々と粘着するような音に変わる頃…私はもう、ソコを見ていませんでした。

彼の顔をしたから覗き込むように見ていた…手の強さで、彼の表情が変化するのが、もう…どうにも目が離せません。

クチュクチュとした擦る時に起きる音がドンドン早くなっています。私も彼を見上げて、動かす手が無意識にどんどん早くなっています。

切なそうな顔段々と変化していき……なんかもう……溶けちゃいそうな顔というか、なんというか……どう？ とか、痛い？ とか聞いても夢中になっていしまっているのか……声にならないような声で答えてくれる。

だって……もう……その子の訴える様な顔がもう……可愛くて、可愛くて……。また……寒くもないのに、悪寒に似た何かが、何度も背中を這ってくるんです。

でも……そんな時間もすぐに終わってしまいました……だって、なにか……くる……くる……って、言い出したんです。

やっぱり「今の隆史君」と、比べてはダメなんだなあとか……思っちゃって……でも……その顔と声をだした時なんてもう……フフツ……

《……………》  
「……な……なんだ一瞬見せた、あの笑顔……」

その子のモノを滑らせる右手が、段々と……いえ、もう……洗うとかじゃなくて……完全に射精させる為だけに動いていました。

口を開け……呼吸を乱しながら……「みほお姉ちゃん」って繰り返して呼んでくれるんですよ？ もう……凄かったんです……。

開いた左手何て……何処を触っていたんだろ……ただなにか……私自身の気持ちよくなってきちゃって……それで……それで、ですね？

グチュグチュと音が何度か繰り返していると、段々と足がガクガクと震えて来たんです……。もう、それは強く握り、一気に絞り出すように動かしちゃったんです。

……すると……小さな悲鳴の様な声を上げて……私の手の中に熱いモノが吐き出されたんです。

《……………》

もう……すっごい量でした……。手がもう……一瞬でベトベト……。手の中が熱くて……脈を感じました。

そのまま……手から溢れ出した精液が、ポトポト——って、音までし

て…垂れ落ちて…はっ…ああ…今度は私の太ももに落ちるのを感じました。

小さくても男…。そんな実感が一気に湧いて来たんです…はあ…。その子は、初めての感覚に混乱していたのか、その子…息を荒げたまま…動かなかったんです。

出したばかりのをまた少し扱くと…残っていたのが…少し出てきて…。それが恥ずかしかったのか、お風呂に逃げる様に入っちゃったんですよね。

手を開くと、にちやあ…つて…指に絡みついて…私の指を汚してしまいました…。

…。

目が離せませんでした…。

…：それで…ここで、ああ…これって…夢なんだ…つて…完全に確信しました。

だって…自分の手を見ているその視界が、その奥に影が映ったんです。

…：私のすぐ横に、もう一人…。

小さい隆史君がいたんですよ…。

ああ…夢だ…。

これは、また…アノ夢だ…つて。

華さんと一回、一緒の…えっちな夢見た事ありますよね？ ええ…二人して驚いたあの夢。

学校の…おトイレでの時の…ええ…その…いつぱいの隆史君が出てきたあの夢。その夢がフラッシュバックしました。

いつの間にか増えていた、もう一人の小さい隆史君…それと前に見た夢と結びつけてしまう…。変に理解が進みます。

えつと…後ですね？ 何時からいたのか分かりませんが、そのもう一人の小さい隆史君。…私の行為を見ていたんでしょう。

…おつきくしてました。

それをまた…泣きそうな顔で私を見てきて…『みほお姉ちゃん、僕も』…つて言つて来たんです。

痛い位に冷たい感覚が、頭の中を刺激しました。すると夢……これは夢……。この子達……は、隆史君の昔の姿そのモノなんだ……って、完全に理解しました。

性格も違う……こんな年相応じゃなかったけど……こんな隆史君を見たかったのもまた事実。多分……きつと……コレは都合の良い夢。

何処か別人にも感じるけど、この子達は隆史君……でも小さい頃の彼と比べると、年相応なセイカク……ああもう……良く分からない。

それでも妙に頭の中がスツキリしたんです……ああ……イインダ……ツテ。すると……彼らが更に可愛く感じてしまい……すぐにまた、同じように差し出されたもう一人のモノを今度は迷うことなく……掴み、ゆつくりと扱きだしました。

あ……この隆史君は、その子に比べると……少し成長した姿なんだ……とか……どこか変に冷静でした。うん、比べて見ると、ちよつと髪の毛が長かったんです。

クチクチと動かしていると、また口を開けて……分かりやすい位に気持ちよさそうな顔して……もう……もうっ……！

今度は、液体石鹼は付けませんでしたけど……まあ……いいかなあ……つて。

クチクチと、音を繰り返していると……先ほどの隆史君もその行為をジツ……と見ていました。そしてすぐに湯舟から出てきました。

また……オツキクしている状態で……。

もう……この行為の意味は理解したんだと思いました。いえ？……この行為のお陰で、気持ちよく感じたんだと分かったんでしょね。

だから、また大きくなっているソレを、私に突き出してきました。もう一度してほしい……。口にはしませんでしたが、遠慮がちな目を見ると、そういうった要求がハッキリと分かりました。

腰を……少し出して……私を見下ろす懇願の目……。

『……………っ……ふう……』

隆史君なら……大丈夫……うん。性格が違っていたとしても彼らは隆史君。

リアルに感じる不思議な夢のお陰で……覚えていた……求めていた。

隆史君に求められる…全部を求められた…。

アノ、キヨウレツナ、カイカン。  
…。

手でして上げて、彼の顔を眺めているのも良かったんですが…もう一人の隆史君にも頼まれちゃった。

不安そうなその顔をしている…彼。どうしよう…：また手で…？でももう片方の手も今は、ふさがっちゃってるし…。

あ。そうだ…なら…今度は…：と思い…私は…。

『んっ…はああ…』

…口を開けました。開けた瞬間、信じられない程の熱い息が喉を通りました…。

彼はまた、私の行為を不審に思ったでしょうが…。

『そのふあふあ…入れふえみふえ？』  
…。

凄い事言いましたよ…私…。自分が言ったとは信じられませんでした…。汚いよ？とか言っていました…：もう一人の隆史君が、気持ちよさそうな声を上げると…。

恐る恐るですが…私の口に…ソレを近づけてくれました。

熱い…その先端が、舌に触れる。

『んっ…むちゅ…』

…エツチな音をワザとさせながら…唾液に音を混じらせて…ゆっくりと動き始めて上げました。

ああ…もうっ！一瞬苦しそうな声でしたが、それは気持ち良い感覚になれていない…：って感じると…更に可愛くてっ！

確か、先端で…えつと…龟头っていうんだっけ。それで男の人は感じやすいって教えられたから…：教えてくれた人に、教えられた通りに…舌を動かしました。

でも…何時もの隆史君と違って。舌触りが違う…。ああ…：そうか、これが邪魔してるんだ。

そう、すぐに分かると、その邪魔をして、龟头を隠している物へと、その先端の入り口から舌を差し込み…そのまま…奥へ押し込みまし

た。

その皮の下で、舌を動かすと、彼の体がビクビク震えたので：ああ気持ち良いんだ：って思うと、なんか嬉しくなっちゃいましたね…。押し込める様に：剥がすように…。そして完全にその剥き上げると：慣れた感触が：ズルンツツって感じで口内に感じました…。

同じくして、もう一人の隆史君にも、その皮が被っていましたので：同じ様に：舌でゆつくりと向き上げると：今度は口を離さず、舌で転がす様に：ゆつくりと皮を剥いていきました。

だって、反応が新鮮で：嬉しくて嬉しくて…。あの隆史君が真っ赤になっっているんですよ!? 私に喜んでくれてる！

『んぢゅっ…! チュツブツ!! んっ…はあ…ヂユユユツツ!』

：やっぱり、小さくても隆史君は、隆史君ですよねえ。そうやって大きくエツちな音を出すと、体で喜んでくれるんですよ。

明かに興奮したような目で：お姉ちゃんって呼んで甘えてくれる。そんな左右に立つ彼らに、交互に口と舌でアレを…。

まあ：もういいや。おチンチンを舐めまわすと：もう、すっごいんですっ! いつの間にか頭にか頭に手を添えられて、自ら私の頭を動かそうとしてくるんですよ？

え? 何? オネエチャン。え?…うん。お…チンチンとか? えつと…その…恥ずかしい言葉を言うのと隆史君…喜ぶから…。

あ、華さんは解ってくれてますよね。教えて貰ったんですよ? えつと…彼に? あ、はい…そうですか、やっぱりこの前…。

なんか…私がそういったエツちな言葉を使うと、ギャップがすごいとか、なんとか…すぐく隆史君興奮してくれるんですよねえ…わ…私も…そういった気分の時に、エツちな言葉を言うのと、更に一気にエツちな気分にされて…慣れちゃうと…寧ろ…そっちの方が…。

あ、はい。では…ツツケマスネ?

気持ち良さに夢中になって、強引に使うように…乱暴にされてましたね。…やっぱりちよつと苦しいけど…結構好きかも…。



片手なんて自分の唾液でベチョベチョになっちゃってるんで…はい…。

『んぶっ！ チュッブツチュッブツ!! つばあ!』

片方の隆史君に口で奉仕しながら…もう片方の隆史君には、指と手で扱いてあげていたんですけどね。どうにも二人とも…お口でする方が好きみたいでした。

やっぱり…隆史君ですよねえ…。二人とも、はあはあ言っただけでちよさそうで…あ、私ここで気が付きました。教えられた通り…私余った手で、自分のを…その…いちつてました。

もう…二人のその気持ちよさそうな顔を見上げてると…すつごく良くて…。

まあ…それでも…今回も、終わりは早かったです…。

『みほお姉ちゃんっ!!』

二人同時に叫んだんです。

え…? もう…?

もう少し、していたかったです…限界だったようです…でも…アレが来るし…。

なら…って、思っただけ…両方の隆史君のおチンチン掴んで…その先を向き合わせました。…両手を使って二人のを扱きながら…両方の亀頭に向かって、舌でチロチロツツと舐め回すように舌を出しました。

私も少し乱暴なくらいに、強く擦りながら…唇と舌で最後に刺激を試してみました。唇で噛むように…交互に音を響かせながらおしゃぶりすると…段々とその先っぽが膨らんできました…。

『んぢゅっ！ ぢゅっぽっ!! いいよっ！ そのまま…お姉ちゃんに…出してっ!』

…って…言っちゃいました…。

言っちゃった直後…二人揃って…二人分の濃いのが…顔と…舌と…口の中に勢いよく、広がって…んっ! …はあ…。

ドピュドピュって、顔から髪の毛にまで飛ぶほど勢いよく…て…後…ボタバタ…って…。最初の子は、2回目とは思えない程の量と…味…。

顔中に掛かった熱いのが、ゆっくりと垂れて下がって行って…口と舌を伝って落ちていく…。口から華に通って行く匂いが、いつものように、いつもと違う…。

また…射精した事を恥ずかしがっている二人の顔を見ると…ゾクゾクウウ…つて。

『んっ…ちゅっ…あ…』

…もう、我慢できませんでした。

口の中に溢れている、二人分の精え…ザ…ザーメン。すっごい量で…このままですと、喋る事も出来ないから…舌で転がして…そのまま飲んじゃったら…頭の中が真っ白に。

喉を通る時に鼻に通る、強烈な男性の特有の匂い…。しかもあれだけだして、まだおつきな二人を見ると…もう…オカシクナリソウ。

その大量に射精した二人は…特に最初の子。その場に座り込んでしまつて…はあはあと息を荒げていました…。

『んぐっ…ふ…二人とも…はあ…はあ…た…隆史…君…だよね？』

そして…自然と確認の為に聞いてしまいました。…聞いても分からなかった…認識できなかった部分が…はあ…はあ…。

オカシイ…本当に…オカシイヨネ？ だつて…今回はハッキリと分つたんですから…。

『そうだよ？ オガタ タカシだよ』

…つて。

…。

頭が真っ白になりました。

ああ…ならもつと、この可愛い隆史君…見たい…つて、その感情だけ…。

浴槽の横…に、手を掛けて…膝をついて…自分からお尻を上げました。

恥ずかしい所が、二人に思いつき見えちゃってますが…夢ですし

…隆史君ですし…そうですね…完全に夢でから良いんです。

自分でも信じられない程に…大胆に…なっちゃって…自分からつて、今の隆史君にも、恥ずかしくて滅多にした事…なかったのに。

入り口を…私の入り口…お…お…おマンコ…を…人差し指と中指でグニツ…つて開くと…ニチャ…つて…大きく音が出る程の…愛え…違いますね。

…エツチなお汁で溢れてました…。

はあ…はあ…。

「みぽりん、か…完全にスイッチが入っちゃった…私…すっごい聞き入っちゃったよ…」

「夢だと理解して聞いてはいたが…隆史…みほに、何を教え込んでる…」

「…露骨に卑猥な言葉を使い始めたな…」

初め…訳が分からないって顔をしていた二人でした…なら…教えて上げなきゃ…。

ワタシ…オネエチャン…。

お尻を着いているタカシ君に、そのま跨ると…ビクビクツ…て動いてるまだ大きいその…えっと…おチンチンをゆつくりと…指で開いたまま…おまんこの入り口に…その先を添えさせました。

何が何だか分からない…そんな彼の顔を見ながら…目を合わせながら…ゆつくりと腰を落としていきます。

こんな事…自分から何て今までの事なかったのに…不思議ですよねえ…自覚がある程に、随分と大胆になってました。

…ゾリゾリツツて…体の内側からくる刺激…脚がそれだけで、ガクガク強く震えました…。

『んうう…んっ…はっ…ああ…』

自然とでる熱い吐息。はい…彼のを私が飲み込んでいきます…。熱いんです…熱くてたまらなかつたんです…。

ゆつくりと…全部…一瞬…目の前がチカツ！…つて…光った気がします…タカシ君の…その…女の子みたいな声を上げだした彼の顔から目が離せなかつたんです。

クチュツ…つて音をさせながら、私の中に彼が入ってくる…ゾリゾリつて音まで出そうな程に…。

でも…ですね…タカシ君のおチンチンが、全部私に入って…こういつた瞬間…タカシ君の顔が、少し苦しそうに歪みました。腰をガクガクと震わせている振動が、私にも伝わりました。

がに股で、私凄いい恰好…でも…はい…その子…私の中に入っただけ…いっちゃいました。

混乱した彼の顔…蕩けそうな顔で、大きく呼吸を繰り返している。  
…ゾクツ…つて、また…。

『はう…ん…良いかも…』

中に出されているのが、すつごく分かったんです…。

どくどく…つて、脈打つて…熱いの…タクサン。

それにワカリマス。まだ…彼全然衰えていない…。私の中で大きいまま…固いまま…。

ですから…私は体を前に倒して…ゆつくりとまた…腰を動かし始めてみました。『ああ！』…つて、また気持ちよさそうな声を上げたので…そのまま続けます。

中に出されちゃったままなので、また音が凄かった…。グチグチつて、何度も何度も…。今の隆史君とは違う…大ききさだけど…私もちやんと…その…気持ちいいんです。

グツチャグツチャ…つて、なんか音を出すのも楽しくなってきた…ちやっしたし…自分から腰を上げる時…中で少し引つかかる感じもどかしく…それでも気持ち良くて…。

『んっ！…んっ！…っ…！』

つて…なんか…もう、声を殺しても、しつかり彼の顔を見ていたかった…それでも見下ろしながら…気が付いたら、もう…夢中になつて腰を…。

うううううう…。

なんで皆さん、いきなり無言になるんですか!?

「…あ、お構いなく。続けてください」

お姉ちゃん。なんで敬語なの？ で、皆さんも何故、無言で頷いて

いるんすか？

う：うん。つ：続けますけど…。

えつと…。

何度か繰り返し返していると、グツチャグツチャって音が凄いい響くんです…。それに後…肌にへばりつく制服が邪魔になってきました。だって、動きづらいんですよ…。

でも…ここまでびしょ濡れになると、脱ぐのも大変だし…どうしようかなあ…って、考えちゃいました。その考えが私を少し冷静に戻してくれたみたいだったんですが…タカシ君が、腕を目の上に置いて、呼吸を繰り返しているのに目が入りません。

…あ…ちよつと…ヤリスギチャツタカナ…それでもそんな彼に…ゾクゾクした感覚が止まりません。

あ、でも一度…冷静になろうと思つて…ゆつくりと腰を浮かして、彼のおチンチンを引き抜こうと…腰を上げると…またゾクゾクって気持ち良さが…。

彼が私から出た瞬間……ポトポト…って、すごい量のザーメンが私から溢れました…。出ていくのが、分かる位…。

手で触ると…ヌルヌルな感触…。時間的に余り経ってないと思います。ましたし…そんなに激しくもしていない…でも…すごい量…。

『んっ…はっ…』

四つん這いになって…グツとお腹に力を入れると…ブビツビチュツ！ とか…そんな音を出しながら、更に溢れてきました…。

…彼…何回、出したんだろ…。私が上になっていたから逃げれなかったのか…それでも私で気持ち良くなつてくれて…何度も何度も…。

…。

あつ…良い…すつごく良いかも…。

『みほお姉ちゃん』

突然…後ろから、もう一人のタカシ君の声がありました。

…ごめんなさい…完全に忘れてた…。

『えっ…えっ?!』

四つん這いになっていたお陰と浴槽の地面が、液体石鹼と精液でヌルヌルになっていたのでしようね…あっさりと腰を持たれ…引き寄せられてしまいました…。

すぐにまた、熱い感触…。もう一人のタカシ君が、私の入り口におチンチンを添えた…と思つた瞬間…。

『んっっひあ!?!』

強引に入ってきました…。下のタカシ君との行為で、すでに理解していたんでしようね…グチャツ…つて一番奥まで入ってきました。

でもまた…それだけで、彼は動きを止めてしまった…。はい…彼もまたすぐに射精してました…。

ドクドクと脈を打っているのが、ハッキリとワカリマス。

…でも、このタカシ君は、違いました…。休むこともなく…すぐにまた腰を動かし始めたんです…。私の中に吐き出されていた、ザーメンが交じり合う音が、グツチャグツチャと音を更に大きくさせて…。パツパツと、肌を打つ音をさせて…大きく腰を打ち付けてきました。…はい。もう我慢できませんでした。

『やっ! あっ! あっ! あっ♡!! あっ♡!!』

声を殺す事なんてもう無理でした。今までにない感覚…。もう我武者羅に求めて来てくれて…はっああ…。

四つん這いの私を後ろから抱きしめながら、腰だけ動かして…お姉ちゃん、お姉ちゃんっ! …つて…夢中になって呼びぶ姿がもう…すっごく…。

いつもの隆史君つて、随分と優しくしてくれていたんだ…つて、この時分かりました。この子が乱暴に腰を打ち付ける度に、どこかで比べてしまつて…。

バチユバチユ…つて、肌がぶつかると音が、段々と違う音に変わつていきました。ああ…この子も何度も私の中に出してるんだなあ…つて、どこかでワカリマス。

段々と私の中が熱で満たされていくのを感じていたからですよね…。少し乱暴に突き上げくる小さなタカシ君…。必死に…必死に…それが、妙に可愛くて…全て受け止めたくなくなりました。

そうそう：目の前の：まだ元気な、最初のタカシ君：今度は忘れな  
い様にしないと：確か：私…。

ナンテ、オシエラレタツケ？

あ：そうだ…。

丁度いい位置に体を引かれていて：元気なおチンチンが目の前に  
ありました。だから：何時だったか忘れてしまいましたが、教え込ま  
れた通りに…。

『はっ：んちゅ：ぶっ：あっ♡！ んっ♡！ んっ♡！ んぶっ♡  
!!』

口を開け：一気に飲み込むと：舌を絡ませながら、動き出します。

一人だけ除け者は、寂しいヨネ…？ 口に入れると、舌全体に少し  
苦みを感じましたが：コレが：好き…。 すごく好き…。

剥かれたばかりの先っぽをニチャニチャとタカシ君に聞かせる様  
に：大きな音をさせながら…。 後ろから突かれ続ける…。

『ヂュッポヂュッポヂュヂュ…：んんっ♡♡!?』

私今：凄いい恰好してるよね…。 浴室で、透けた制服姿のまま：子供  
二人に：そう思った時、ドスンッ！ って、お尻から衝撃が：その瞬  
間。

口の中に粘着く体液：ザーメンをどくどく注がれて：後ろからも  
好き勝手に注がれて…。

いっっちゃった…。

一気に飲み込むと：ゆっくりと体を上げたんです…。

腰に抱き着くタカシ君が、妙に可愛くて：流石にもう私から出てっ  
ちやっただけど：一緒にまた：すごい量の精液が…。

はあはあ…って、誰もが皆：息を切らしていました…。 その浴室か  
らは、石鹸の香りはもう弱く：すっごいエツちな香りが充満していま  
した。

『い…いっばい…出したね…』

そんな言葉がまた…：自然と口から零れてしました…。

「…：はい、お疲れ：みぽりん」

「また：随分と：随分な夢だな：西住さん」

「……………」

「優花里さん？ あの…鼻血…」

「つつ!? すいませんっ!! ティ…シュツ…」

「みほ…ずるい…」

…。

「私…今のみほさん以上のは…まだです…くっ！」

「なんで悔しそうなの、華」

「…：うう…恥ずかしい」

「ほら…このハンカチで押さえると良い…というか、みほずるい…」

「西住さんのお姉さん…」

「えっと…次に早く行った方が良いよね…えっと次は…」

彼らに視線を送ると…。

《 えっ!? 》

また…増えています。

「ちよっ!? え…みぼりん…え!? 続くの!？」

「あ…あらあ…終わりじゃなかったんですねえ…」

「……………」

「あ…西住さんのお姉さんが、綺麗に正座した…」

今度は…その小さな隆史君の後ろに…更に二人…。

「二人!？」

もう…段々と、頭がおかしくなりそうでした…。

夢だと理解して…分かっているも…ダメ…もう…嬉しくてウレシクテ…。

「う…嬉しくて…」

だって…一人は…転校前に見た…私の思い出、最後の…隆史君。

「……………そうか」

「お姉さん？」

もう一人は…一瞬、今の隆史君かとも、思ったんですが…違います。



ええ…違いました。

何故かそう感じました…そしてすぐ分かりました。コレは…この人は、1つ年下の男の子。ああ…そうか…青森に行っちゃった…時の…。

…高校一年生の…隆史君だ…って。

ノンナさんとか…オレンジペコさん…ダーズリンさん達は、知っている…私はもう知る由はなかったはずのタカシ君達が…出て来てくれた…。

しかも…。

『みほ姉ちゃん、俺もいいか？』

…ってえっ!! オネエチャン継続!!

《……………》

浴槽に両腕着いて…お尻を上げて…お尻のお肉…グツ…と、おまんこ開くように掴むと…また変な落として…ボトボト…って中から落ちてくるんです。

この二人のタカシ君達は、もう…今とあんまり変わらない大きさ…。転校前のタカシ君も、少し大ききこそ違うけど…エッチな形して…だから…。

もはや、冷静な判断何て無理です。

『い…いいいよお…お姉ちゃん、好きにしてえ…♡』

って…思わず言っちゃいました。

片脚を上げられ…引き寄せられて…その脚に抱き着いてきました。体を横にさせられたまま…その一番奥まで入る恰好で…やつぱり…一気に入ってきました…。

『んっっふああ♡!!!』

もう、声何て気にする必要ありません。むしろエッチな声を出した方が、隆史君は喜んでくれますしね…。

このタカシ君達も例外じゃなくて…小さい頃のタカシ君達に比べると、やつぱりそれなりの知識があるんでしょうか？ 変に興奮した目で見てくれます。

また…ゾクツ…って…。

大きな声を上げた私の開いた口に、もう一人の：転校前の彼が入ってきました。でも、遠慮がちに：先っぽだけ……。こつちから口に含んであげると：彼の手が頭に……。

制服を胸の上にもで捲られたんですが：気が付いたら下着なんてしていませんでした。：いつ外したんだろ……。

また：乱暴に下を、横から突き入れられて：上を、横から：犯される。はあ：もう：凄かったです……。息が苦しいくらいでした……。気持ち良いと感じに、完全に染まっちゃってました。

何時もの隆史君とは違って：乱暴：力いっぱい私に入ってくる。横にされているから：前後に動く胸が揺れてちよつと痛かったです。気が付くと小さいタカシ君達が、その揺れる胸にすつごく見入ってる……。

ああそつか：おっぱい見せなかったから：余計にかあ：とか：可愛くて……。

今度は、転校の前の隆史君に：その：制服のまま？　：浴槽に入れられると……後ろから思いつきり入ってきました……。

その：お湯が入っちゃうからって：理由で後ろからでしたが、：コレもまた：凄いです。今度はさつきまで届かなかった場所をコツンコツンって、当ててくれて……。

バツチャバツチャ音をさせながらも、突き上げてくるんですが：さつきとは違う感覚が：違いが：凄くて：頭が真っ白になりそう。それでもなんとか青森のタカシ君にもしてあげたくて：横から突きだされた見慣れたおモノに口を付けて：って……。そこでその後ろに立つ二人に目が行きました……。あ：なんか、小さいタカシ君達がまたオツキクさせてる……。今度は自分でゴシゴシしながら：私を見てる……。

もう：こつちのタカシ君達も、可愛くてしかたなかったです……。

後：このタカシ君達も：ちよつと終わりが早かったです……。バツバツとした音が早くなった……って、思うと：すぐに熱いのを注がれました。ただ今回は、胸に出されてしまいました……熱いのがまた……うん。

口を好き勝手に使っていた彼も、胸に……。もう……。ザーメンと汗とで……。ヌルヌルで……。テカテカしちやつてましたね……。

一度射精を終えたというのに、彼らもまた……。えつと……。元気でした。まっかな顔して、息も激しくて……。なんか……。今の彼に近い姿なんです。が……。ちよつと違っているのが……。良いかも……。新鮮……。

「……みほ……。夢とは言え、私達の念願を叶えていた……。私も彼を愛玩してみたい……」

「愛玩とはちよつと違うと思いますが……。少し羨ましいです……」

「……。私もそうだが……。皆……。染まり切ってるな……。いや、割り切つてると言うべきか……」

「ズリイです……」

「……。華」

……。

でも……。ここままでした……。

『……。……。狭い』

突然、そう……。一言、青森のタカシ君が眩きました。

その言葉に、示し合わせたかのように、転校前のタカシ君が……。私の両脚を持ちあげました……。

小さなタカシ君達も、すぐに浴室のドアを開けて……。アレ？ 出てっちやつた……。青森のタカシ君……。確かにこの浴室に5人は狭いし……。動き辛いけど……。あの子達、追い出しちやつたのかな？

つて……。思った瞬間……。体が大きく持ち上げられました……。えつと……。まさか……。

ザバツ……。とお湯から上がると……。私におチンチンを入れたまま……。あの……。え？

『ふう!? んっ……。っ!? んう!!』

もう……。これも凄かったんです……。正面から見れば、繋がっているのが丸分かり……。つてくらいに恥ずかしい恰好で運ばれ始めました……。

浴室を出て……。脱衣所を抜けて……。私に入ったまま……。廊下を歩きだしました。歩く振動で、下から突き上げられている感覚……。歩く度に……。一番奥に当たるんですもん……。オカシクナリソウデシタ。

薄暗い廊下を進み…見慣れた…場所に付きました…。玄関…。あ、  
そうか…隆史君の部屋…か、階段を上がって私の部屋にでも行くのか  
なあ…つてこの時は思いました。

なんかもう…夢つて感覚も薄れてきました…。

『おっ…うっ♡!!』

そのまま彼は…土間に素足のまま…足を下ろして…短い式台を無  
視して…上がり框に座りました。ワザとドスンッて…強く…。変  
な声出ちやつた…。

はあ…はあ…つて、息が途切れ切れ…いっちゃつた…んですこの衝  
撃で…。でも…顔を上げると…。

…。

玄関が…全開に…開いてました…。

『ふ…え…っ?』

雨も止んで…空は明るい…。アレ? 夕方帰ってきたよね? 私

…。

顔が別の意味で、熱くなつて…思わず目を見開いてしまいました  
…。通行人は少ない場所ですが、道路から…まるみ…え…。

『あの…た…タカシ…く…んふう?!?!』

いきなり抜かれちゃいました…。

もう…転校前の彼のつて…今とあんまり変わらないから…動かさ  
れる度に気持ち良くつて…また変な声だしちゃつて…。

そのまま…力まかせに…それこそ、さも当然の様に…。

『んっいぐっ♡♡!!』

お尻にねじ込まれました…。何時もの隆史君なら、ちよつと準備し  
て…痛くない様にしてくれるのに…彼はそんなのお構いなし…。

ちよつとした痛みも、気持ちよく感じちやう位に…この時は、体が  
反応しちやいました。それこそ本当に…彼のおちんちん全部を、一気  
に入れてこられちゃつたので…意識が朦朧と…。

そんな時に…みほお姉ちゃん…みほ姉ちゃん…つて…甘える様な  
声で、耳元から囁いてきました…。

両脚を腕で上げられ…えっと…M字開脚? とかなんとか言つて

いたっけ…まつ！ まあ…そんな風にとでも恥ずかしい恰好に…でもそれってある意味で連携だったんですね…。

『んっっはぁ♡♡！』

前から、小さな隆史くんが入ってきました…。いつ頃は忘れちゃいましたが…私、先ほどからすっごいエツチな声出していると思います…。

私を開脚させたのは、この子が私に入ってくる為だったんです…。このタカシ君達…話なんてまったくないのに、まるで意思疎通ができてみるみたいでした。仲いいよね。

え？ …あ、はい。

段差が慎重さを埋めるのに丁度いいらしくて…すぐにまた一生懸命に腰を振りだしました。ばつちゅんばちゅんって、音が出る位に激しくて…だから動く度に、お尻の中のおチンチンも、波を打って動いている見たく感じて…思考なんてすぐに飛んじやいました。うまく体の自由が利かないのと、姿勢を支える為に、彼の体を抱きしめると…私の顔を彼の肩に乗せました。

すると必然的に玄関の方向を向く事になるんじゃないですか……したら…左右から差し出される2本のおちんちんが見えました…。あ…待つてるんだ…。

ああ…この子達もまだ、全然足りないんだ……舌を伸ばし…息も絶え絶えに舐めて…しゃぶって…。

…。

もう…好き勝手にされちゃいました。

濡れた制服姿…。

胸も大事な所も見えちゃう状況で、その玄関先で…。

『んんっ♡！』

この子達、何度も何度も出しても、衰える事なんて全くしないんです。

もっと、もっとって…私を呼んで、私を求めてくれる…。

あ。アレ…すごかったなあ…。

壁に手をつかされて…立ったまま後ろから…。

バツバツって…何度も何度も…脚がしびれるくらいに…何度もガクガクしちやつて、立っていられなかつたんですよねえ。

崩れ落ちちやつて、四つん這いになると…もう…。

『ふあっ♡！ あっ♡！ あっ♡！ あっ♡！』

おまんことお尻の穴…小さい隆史君に犯されながら、両手とお口で、横から出された二人のタカシ君に奉仕して…。

ごりごりいーって、される感覚も…すごいんですけど…こんな、外にまで聞こえそうな所で、大きなエッチな声だして…。

誰かに見られたりしたら…って…思うと…。

『んぐっ!? おう♡！ おっ♡！ あぐっ♡！』

青森のタカシ君は、今と変わりがあまりないから…凄かった…。気持ちいい所をまとめて引っかけて…捲られる感じが…すっごい…すっごく良い…。

バツバツって音とかも凄くて…力強くて…でも、今の隆史君とちよつと違う…。

考えさせない…っていうのかな？ 考える暇もないっていうのが…しつくりくるかなあ…。どんどん求められて、それが嬉しくて…。…知らない…ただもう…気持ち良くて、気持ち良くて…おかしくなつてたと思います…。

こういうの…つて、どういふのだろ…？ 終わらない…終わらない気持ち良さ…。中に出されて、体に掛けられて…はあ…。

そして…いっぱいエッチしている時に…顔を上げると…気が付いちやつたんです…。

玄関先に…その…別のタカシ君が…立ってたんです…。いっぱい…いっぱい立ってたんです…。

私のエッチな姿…見てたんです…。覗き込むように…玄関の外から…。いっぱい…いっぱい…。

小さなタカシ君も、大きなタカシ君も…みんな前…オツキクしていたの…。

『フウ…♡ フウ…♡』

みられてる…私…見られてる…。口の中犯されながらなので…唸

る様な息ししかできない状況なのに…横目ですが…ハッキリと目に映り…話せられない。

そんな見られている中でも、頭を持たれ…外のタカシ君達に見せつける様に口を犯されてしまいました。

左右から…交互に奉仕していると…舌を…と、おちんちんを舐めまわす舌を、ワザと見せる様にお願ひされました…だから、出しながら…転がします。

『んっちゅっ…らあ…んっ♡!』

外から…一人…入ってきました。

だからグツポグツポって、変な音を…音を、聞かせて上げる様に…さらに激しくすると、入ってきたタカシ君がすぐに見入っていました…。

あ…やっぱりオツククシテル。…片手で…ズボンの上から摩ってあげる様に言われたので…え? 誰にとって…小さいタカシ君ですけど? あ…摩るとですね? 自分から取り出してきました。

その姿を見ていたんでしょね。もう一人…もう一人…入ってきました。

すると…大きいタカシ君達が…私を四つん這いになると…前と後ろから…一気に…。頭を外に向けたので…エッチな顔した私が…他のタカシ君達に良く見えちゃう…。

でも…両方から入れらると、夢の中だというのに一瞬意識が飛んだようにチカチカして…。モット、ミテホシクナル。

だって、中で二つのおチンチンが擦りあってるんですよ! ゴリゴリー…ゴリゴリー…って…。

コレ…本当にすごいんです。さつきから何度も、違うタカシ君が入れ変わり立ち代わりで…中で違いが分かる位に擦り合わせているみたいなんです。

もう…それはもう…むせかえる様な、男の人の匂いしきしませんでした。

『んっ…んっ!!』

『はぶっ! んっ? つちゅぶぶっ♡!! ぐっちもおおっ♡!』

はあ…つつぢゅっ♡♡!!』

『こっちのタカシ君はああ…あぐうつ♡!!』

『いくう…♡!! イグツ♡!! いぐう…ウウ…ああ?あ?あ?♡

♡♡!!!』

何度イカされた分かりません…。

訪れる快感には、まったく抗えないで…ただされるがまま、おつきな声を上げて…何を私は言わされ、言っちゃたんだろ…。

もう…玄関は、エツチなお汁とザーメンでベツタベタ…。

夢だつていうのに、気持ち良さ、味…匂い…何もかもがハッキリと感じる。

コレ…夢…ですよ? あれ?

だって…何時もだったら…何時もの私だったら…気絶しちやつてそうなのに…。

『はっ…♡ はっ…♡ はっ…♡』

終わらない快感…気持ち良くて気持ち良くて…変な呼吸を繰り返してちやう。虫の息…つてこういうのかな? でも吐く息ですら、気持ちいい…。

『…?』

……。

更に…一人…玄関に入ってきたんです。

…気が付いたら…たくっさんのおチンチン…いえ…おちんぽに囲まれてました…。両方のエツチな穴を、四つん這いに入れられちゃつてるので…私は逃げれません…。

…鼻に着く匂い…先から少しだけ出てる…お汁とか…を…入ってきた隆史君は見せつけてくるんです…ずるいですよね…。

抗えるはずないじゃないですか。

「…に…しずみ殿?」

出されたおちんぽに、舌を這わせると…次々にタカシ君は私にこう…言ってくるんです…。



みほお姉ちゃん：次は、僕って…次は、僕って…。

そのまま：私の口を使い始めたんです…。全部のエツチな所…全部タカシ君に埋め尽くされました…。

ぐちゅぐちゅ♡　ぐぼぐぼ♡　…って、またいっぱいエツチな音が響いちやって…。

…余ったてしまったタカシ君は、自分達で始めて…私の前から、外まで？　…順番に並んでいるんですよ？　ちよっと面白いですよねえ。

「あの…みぼりん？　えつと…」

タカシ君らしいさは、他にもあつて…皆携帯で、私のエツチな姿を録画し始めいたんです…。

私が口でしている所とか…おまんこも、お尻の穴も大きく広げられちやつてる所とか…。

制服なんて絞れそうなくらい…。髪ももう…ベトベトで……んっ♡！

満たされてる…私、全部の隆史君で、いっぱい…。

途中…目隠しされました…。少し…持ち上げられて…移動しちやいましたけど…それはそれ。

目隠しされても分かるものなんです…もう、どのくらいのタカシ君のおちんぼなのか、すぐに分かっちゃう位でした。むしろより感覚的に強く感じられて…癖になりそう…。

舌でジュルジュルくツて、やると…ビクビク動いたり…喉の奥まで急に入ってきたりで…大体の行動でも分かっちゃういましたし。

あつ！　目隠しされながら、大きなタカシ君に上から乗っていたんですけど…そのまま口と両手で、ご奉仕出来て良いんですよ？

入れかわり立ち代わり…前も後ろも口も何もかもが使われて…それでも…残念ながら終わりは来るんです。

夢から覚める時でした…。

《……………》

…あ…終わる…覚めちゃうって…分かったんです…。

…え？　なんでわかったか？

感覚的なモノもあつたんですが…だつて…。

途中から…私の口に入つてきたのが…「今の隆史君」つて…私がかつちやつたから…。

久しぶりだと思える味に…なんか…お腹の奥がきゅんきゅんして…一番激しく…丁寧にしちゃつたんです…。

私の名前を呼んできたんです…目隠しされながら…口でエツチしながら…も…色々聞かれて来て…恥ずかしかった…。

『はぶっ♡！ んっんううじゅ…うっ…うんっ！ きもちいいっ！ きもちいいよ♡!?』

感想を聞かれます。

『前も…あっ♡！ あうっ！ 後ろもおお…ぐちやぐちやに犯され…てええ♡♡!!』

状況を聞かれます。

『ざっ…ざーめんでえ…っ♡ おなかあ…の中までえタカシクンでいっばいでえ…♡♡!! んぢゅっ♡!!』

恥ずかしい事…いっばい言わされて…それでも彼を舐めるのはやめないんです…んっ…！ は…はあ…♡

やめられないんですう！ なんかもう…やっど…やっどだつて…そんな感情が凄くて…。

今の隆史君から…他のタカシ君は、全て俺だつて…んっ…言つて…言いながら…。

『きっ…たああ♡』

今度はちゃんと、私に入つてきてくれました。 やっぱり…全然違う…すぐに分かっちゃう位に…今の隆史君。

目隠しされているのに…後ろから隆史君…が、来たがハッキリと分かりました。 どこかに座つて…その上に私を座らされている。

入つてる…奥まで…グリグリつて…グチユグチユつて…それで私の両手にはタカシ君。 私の口の前にも…タカシクン。

いっばい…いっばい。

『わっ…私っ!! あっ♡ あっ♡ うまく…しゃべれっんっっ♡ !!』

動きながら口で奉仕させて…そんなのうまく声出せる訳ないじゃないですかあ…でも…。

それなのに、声にさせてっ！　ワザと口にさせ…言わせて…んんっっ♡！！

…。

……………。

あ…あれ？　コレ…言わされたんだっけ？　自分から言っただっけ…？

『べつのおおあっはっ！　っ…んんっ…！　ぢゅっぽっ♡！！』

もう…夢中で、夢中で良く分かりません…。

何を…私は…？　えつと…。

沙織さんの雑誌の通り…男の子が喜ぶって書いてあった…すっごくエツちな言葉を言っちゃって…。

上級者向けって書いてあった…絶対に言わない…恥ずかしくて死んじやいそうな言葉…。

隆史君に教えて貰ってない言葉まで…。

『お…まんこおも…口まんこもおお！！　ケツ穴もおおオ”オ”っ♡♡！！　好き勝手使われてエエ！！』

そんな言葉まで言っちゃって…いっぱいイッチャツテ…いっぱい…。

『じゅるるるっっ！！　は…わっ…たしい…たくさんのお、おちんぽにいい♡！　…散々いかされ…まし…たああ♡♡！！』

たくさん…の…タクサン…イッパイ…。

真っ白…目の前が真白で…。

なんで…え？　あ…違う…。

私から…言っちゃった…私があんな…言葉…私から言っちゃったんですよ…。

なんか…全部…全部の私を…隆史君に上げちゃった気がする…上げちゃっている気がする…。

恥も…心も…ダイジナモノ…すべて…。

恥ずかしい事を言わされ…言いたくて…言うのが気持ち良くて…あれ？ 過去から現在の隆史君の全て…で満たされて…。

あ…そうだ…あの時のあの…感覚…

すごい…今までに無いほどの…すごい…絶頂…それと…。

【強烈な解放感】

…。

『口開けて…舌伸ばしてくれ、みほ』

隆史君の…声が聞こえて…まわりから音も聞こえて…。

…気が付いたら、私…目隠しされた状態で、手を使わないでの奉仕をさせて貰っていたんです。

はい…？ なんですか？

それで…すごいんです…何も見えなくても解つちやうですよね…。

後はもう…少しずつでも順番に…お口と舌で、最後に思いっきり舐めさせてもらいました。

匂いをこすりつける様に…また気持ち良くなって、気持ち良くなつて…。

あ…残ってしまったタカシクン達が、自分で慰めている音だつ…てすぐにわかって…。

それが、私の声と言葉に…えっちな姿に…興奮してるんだって思うと…また得体のしれない…か…いかんが…。

シユシユツ…って、どんどん早く…大きくなって…。

その音のする方向に舌を伸ばすと、そのまますぐにお口に入って来てもらえて…。

すぐに隆史君が喜ぶように、エツちな音で啜って…。

言われた瞬間…あ、来る…来てくれる…って…また嬉しくなっ  
ちやつて…それで…それで…。

全員の熱いタカシクンが…外からも…中からも…熱も匂いも…私  
に沁み込んできた…。

この夢の最後…頭に終わりを告げる声…。

…。

…なんて…言っていたんだろう…。

あの声…あ…そうだ。

でも…。

…スキルって…なんだろう？

—スキル—「依存」ガ、解除デキマセンデシタ

—スキル—「共鳴」ガ、解除デキマセンデシタ

—スキル—「伝染」ガ、強制発動サレテマス

—スキル—「欲望」ヲ、受託シマシタ

ユニーク・スキル— #%|| 愛 —ヲ獲得シマシタ



『み…みぼりん？ えっと…大丈夫？』  
『あ、はい。大丈夫ですよ。これで終わりです…ベットで起きた時に、恥ずかしくて死にたくなりましたが…』  
『お…思ったよりも大丈夫そうだな…顔は真っ赤だけど…』  
『しよっ！ しよっ！ しよっ！ しよっ！ しよっ！ しよっ！ しよっ！ しよっ！』  
『……』  
『はあ…で、どうでしょう？』  
『何がですか？』  
『これって、現実だよ？』  
『みぼりん、言ってる事が最初と違うっ!!』  
『みほさん？ 気持ちは痛いほど…ええ…本当にお察ししますが…夢前提のお話でしたよね…？』  
『そうだな。寧ろこれが現実だったら、書記はただの化け物だろう…』  
『あはは…』  
『みほ…』  
『なに？』  
『最後の卑猥としか思えない言葉で、分からない単語がいくつか出てきたのだが…意味は…』  
『いつ…言わないよっ!! 言える訳ないでしょ!!!』  
『しかたない…エリカにでも聞いてみるか』  
『……そこは隆史君に聞こうよ…』  
『恥ずかしいだろう!!? アバズレだと思われたらどうするっ!!!』  
『…姉』  
『ま…まあまあ、お姉さん。みぼりんが読んだ、私の雑誌を貸しますから…』  
『むっ！ 本当か!? 助かる!!』

『あ…でも、アレ、ダーズリンさんに上げちゃったっけ…。ま…  
まあ、似たようなのありますから見繕いますね』  
『ありがとうっ!!』  
『まだあるんだ…』  
『しかし…冷泉殿…静かですね』  
『ここは黙っているべきだろう』  
『そうですね…火の粉が飛んできそうです』  
『…あの…みほさん』  
『え? はい』  
『…』  
『華さん?』  
『…下着…凄い事になってませんか?』  
『…』  
《……………》  
『あー…んんっ! …一つ…提案なのだが…良いか?』  
『お姉ちゃん?』  
『今日は…もう、お開きにしよう…。降参だ…』  
『えっ…降参って…』  
『うん。私のは、ただ隆史が3人ほど出てきて、普通に抱かれて終わ  
りだ』  
『…普通じゃないよね』  
『ま…まあ…本来は、冷泉殿と西住殿のお話…って事でしたしね…  
私は賛成ですよ! …私はリール付けて、夜中お散歩しただけの夢で  
すし…まあ、彼が4人程出てきましたが…』  
『それも普通じゃないよね!』  
『わ…私も…。みぽりんのお話の後だと…何の話をして良いかわか  
らないよ…私…普通に…詩織と電話させられながら彼とエッチして  
終わりだし…チツ』  
『それも割と普通じゃないよ!』  
『口惜しいですが…みほさんに、今の私では勝てそうにありません  
…。私の所には、彼一人しか出てきませんでしたし…普通にまぐわっ

て終わりでした』

『あ、言い方はともかく、意外にも華さんは普通だ…』

『まあ…見目隠しされて、複数の男性の前でしたので…見抜き？  
とかなんとか…いっぱい掛けられましたあ』

『前言撤回です！ 全然、普通じゃないですよっ！ 華さんの話が  
すつごく気になるんですけど!?!』

『一番手で良かったと、心底思っているぞ…どう考えても、西住さん  
に勝てる要素がない』

『これって、勝負だったの!?!』

《……………》

『で…では、そういう事で…』

『そうですね…今日は、現地解散で良いですかね!? 私…ちよつと  
用事を思い出しましたので…』

『わ…私も…所用を思い出した…』

『…私もだ』

『皆さん…まさか…』

『そうですか…皆さんご用事があるのですねえくなら丁度いいです  
』

『は…華?』

『私、みほさんのお話で、限界に近いので、彼を…ああ、終わったの  
ならもういいですよね? 隆史さんをつままえに行きますので?』

『…………お邪魔しないで下さいねえ♪』

《!!!?》

『では、お先に失礼しますねえく♪』シユツ

『消えたっ!? 忍者か何かか、華あ!!』

『ずつ…ずるっ!!』

『くっ!!』



「…靴がつ！」  
「…つつ！」  
「…わ…私もつ!!」

…。

……………。



「マ！ ジ！ de!! やっぱい事になってきたあつつ!!!」

「…わ…あう…あ…」

「ど…どーすんのよ、エリス！ 西住 みほさん、えらい事になってるじゃないの！」

「……………ど…どうするって…」

「これ…アレでしょ？ 隆史の世界じゃ、こう言うのでしょうか？」

「な…なんですか…」

「フルボッコだ、ドン！」

「……………」

『そ…それに！ あの子にもスキル派生しちゃったじゃないの!! あれもアンタの「神威の加護」が影響してるわよね…。隆史に対して、完全に都合の良い流れになってるわ…』

『…まだ確定してませ…っ…私…本当…に？ えっ…ええ!?!』

『…うう…彼女のスキルって…文字化けして、所々解析できない…』

『うう…そもそもユニーク・スキルなんて、レア中のレアですよね…それを与えるなん…あ、違う…。隆史さん…西住 みほさんに、無意識に植え付けてる…強制発動…任意で解除できない…』

『…』

『多分…西住 みほさんが、聞いたスキル発動音声…二度と聞く事はないでしょう…ね。…これはもう…一種の呪いですよ』

『これ…西住 みほさんの本能…というか、欲望が歪んだ形で具現化させてる…そりゃ…抗えないわよ…ね』

『えつと…学校代表…隊長としてのストレスが凄まじかったんでしようね。その大会も終わり…そのストレスから解放された直後の、このストレスの解消方法…』

『うまい具合に噛み合っちゃった…はっちゃけすぎでしょ…』

『お陰で、夢だと思ってますが…ストレスは、すっごく緩和されてますね…』

『…はあ……ストレス……ね。…エリス』

『え…は、はい?』

『実を言うと、うまくいけば記憶操作解除できると思ってね? エ

リス…アンタには、…内緒でブレイク・スペルを使ってみたの』

『えっ!? 初耳ですよ!? 何時の間につっ!!』

『……効果は…無かったわ』

『えっ!? あ…じゃあ…何もなかったって事ですよね!!』

『神威……アンタの「幸運の加護」に弾かれた』

『…』

『…その方が隆史にとって都合が良いって事よ……これ…マジで、

『ほぼ確定じゃないの?』

『』

『あつ…』

『ツ!? なつ…なんですかっ!?』

『そうよ…エリスに何かあったとしたら、それを遥かに凌駕する美貌を持ち! 神々しいく気高く! 美しく! パットには再現不能なこの豊かな胸!!!!』

『…』

『そんな私が、あのクツソ変態の性獣認定された隆史に、何もされてない訳ないでしょ!? 記憶操作されない訳がない!!』

『…』

『心配ね…よしっ! 私にもいつちよ、使ってみるわ! …ん? なによ、その目』

『…別に』

『んじゃ、さっそく…ブレイク・スペル!!』

『…躊躇しないんですね』

…。

……。

『』

『先輩、ど…どうしたんですか? どうだったんですか!』

『』

『せ…先輩?』

『き…記憶操作…』

『はい!?』

『されてた…』

『え…』

『……………』

『……………あの…』

『あ———もおお!!』

『っ!?』

『 あんのおおおつつ糞女つタラシっ!!! どーいう事!? どーい  
うことおおお!? 』

『 先輩!? お…落ち着いて下さい! 気持ちは…その…わかり…  
』

『 なんで私には、通常の記憶操作なのよっ!! 』

『 …え? 』

『 差別よ! 差別うっ!! エリス教徒はこれだからああ!! 』

『 きよっ! 教徒は関係ないじゃないですか!! 』

『 はああ…腹立つううう!!! 』

『 …はあ…ろくでもなさそうな結果ですね… 』

『 エリスツ!! 』

『 あ、はい 』

『 結果から言うわ 』

『 … 』

『 来てたわ、あの性獣!! ここに! いたっ! 』

『 え… 』

『 まあ!? 私は、何もされてないみたいですけどねえええ!! 』

『 あ、そうなんですか? 良かったじゃないですか…って、ん? 私  
は? えっ!? ならこの私は! やっぱり何かされたって事ですか  
!?! 』

『 そんな事、どーでもいいのよっ!! 』

『 よくないですよっ!! 』

『 あの女つタカシ…ひどいじゃない! 女神差別よっ!! 』

『 あー! もういいです!! 先輩とその時の隆史さんとの世界線が  
繋がったのでしたら、私も見れますから直接見ます!! 』

『 あ、ばかっ!! 』

『 ……すごく短い…あ…えっと…確かに、隆史さん此処に…でもこ  
れ、あの世界の彼とは…あ 』

『 …… 』

『 ……すごい優しい笑顔しているじゃないですか。あ…何か、言い  
ますね… 』

《 悪いな、駄女神… 》

『 …… 』  
『 …… 何時もの事じゃないですか？ これで、一体何をそこまで怒る…あ 』

《 お前じゃ勃たないんだ 》

『 …… 』  
『 …… 』  
『 …… 』  
『 …… 映像…終わりましたね 』

『 …… フツ…フツ 』  
『 …… 先輩？ 』

『 ウフフフ♪ 呼ぶう。今すぐにあの糞野郎呼び出すわねえ？♪  
それで眉間に、ゴッドブローぶち込んでやるわあ♪ 』

『 先輩っ!?! 』  
『 次回のお茶会の時までなんて、待ってやるものですかあ♪ むしろそんな事したら、オレンジペコさん達が危険よお？♪ 』

『 …… 』  
『 あのアンデットの心配なんてしないけどお……確実にあの馬鹿の好みでしようしい♪ 被害者が増えるだけえ……んじや、呼ぶわねえ？♪ 』

『 まっ！ 待ってください！ 心の準備がっつ!! 』  
『 だってほらあく♪ このままだと、どんどん被害者がああ…♪  
……あっ… 』

「待って……ってどうしたんです……か……あ？……」

「……………」

「……………」

「……お……遅かった……」

「……ダーズリンさん……」

※ルート壊 【宴編】※ もう女子会とは程遠いですっ！

「あの……ダージリンさん」

「何かしら？」

「：俺に話ってなんででしょうか？ さっきから30分程、お茶しか飲んでいないのですが……」

相変わらずと言って良いほど、この場所にコレは余りにも不釣り合い。

ペコが用意した豪華な椅子やテーブルは、彼の働いている飲食店の前では少々趣が違いすぎて、大分目立ってしまいますわね。

それにこの場所は、港町特有の開けた場所な為に、とても遮蔽物が少ない。そんな場所に吹く風は強く、髪が少々乱れてしまいます。

その少し乱れた前髪を、軽く指で整えながら、向かい合わせに座って頂いている男性へと目を合わせる。

「あら、私とのお茶会はお嫌かしら？」

「いや……嫌ではないのですが……まあ、ちよつと……」

一つ年下男の子……という言葉が、どう見て考えても不釣り合いにしか感じられない男性。

私と二人きりという状況だというのが、どこか落ち着かないのか……初対面の時と少し感じが違う様に見えますわね。

何故かそれが、どこか嬉しく感じてしまいます。その面持ちは、すこし引きつっている様にも見え、ティーカップを先ほどから、頻繁に口元に運んでいます。

「それか……緊張でも、しているのかしら？」

それは緊張の為……とは、違うのですが、そのような様子を見ると、敢えてその言葉をだしたくもなるというもの……。

「緊張？ あ……いや……そうじゃなくて……ですわね」

「あら、そう？ それは、少々残念ですわね」

「いや、残念って…」

一口：紅茶を口に含むと、少し甘い風味と：香り。そして苦みが口内に染みわたる。

手元のティーカップに少し視線を落とすと、自身で入れた琥珀色の液体が小さく揺れている。そう言えば…：自分で自分の為に、紅茶を入れてみる事はあっても、最近誰かにお茶を入れると言う事が少なくなつた気がします。

正直に申し上げると：お茶の入れ方に置いては、私はペコに叶いませんから。お家での教育なのか：入学早々、脅かしてましたわね。

他校の方には信じられないかもしれないかもしれませんが、それは我が校の中では、大きなアドバンテージになる。私があの子を気に入った理由の一つでもありますしね。

同じく、私の真似をするかのように目の前の彼も口に含む。その大柄な体系のお陰で、随分とティーカップが、小さく、可愛らしいサイズに見えてしまうのに、口元が綻んでしまいそうになります。

「私は殿方と二人きりという状況に、余り慣れておりませんので？少々緊張しているというのに」

「はは…緊張してる様には見えませんが…」

「ふふ…ペコと一緒にの時と、貴方の様子が、少々違う様に感じますが？」

「あゝ…そうですか？」

確かに人相は非常に…ええ、失礼ですがお世辞にも良いとは言えません。しかしペコが言う様に愛想は確かに宜しい様ですわね。

すこし嫌味にも似た私の言葉に、こうして少し困った様に笑うこの方を誘つたお茶会。簡単に言えば、少しお話がある…と。

ええ…先日彼を、手紙にてお誘いした…中止になってしまったお茶会ですわね。

本来は中止になってしまったお茶会に出る為のマナー講座…という形だったというのに、気が付いたらペコは、普通に此処でのアフタヌーンティーを楽しんでおりました。

そのお茶会に私も混ぜて頂こうと…ここで私も参加すると、ペコに



言つた通り：初対面のその後、確かに何度か私も参加させてもらいましたが：今回は本来の目的の為。

：その為に、こうして見極めようと：二人きりの状況を作る為、今回、ペコ達には遠慮をしてもいきました。

数回参加したお茶会で、私を感じた事…。

彼は確かに愛想は良い。接客業をされているお陰なのででしょうか？ 彼は人との距離を適度に保つ。

その割には、聞き上手…。それこそ会話の中で、余計な事まで喋つてしまいそうになる程に。

ええ：愚痴：…なのでしようね？ あのペコがそれらしい事を彼にだけは臆面なく吐き出す。一瞬私やアツサムが居ると言うのに、思わず口にしてしまつていた。

普段、彼女と彼は、なにを：どの様な話をしているか、興味を持つてしまう程に：アツサリと。

私はペコとはまだ、それほど時間を共有してはいません。それでも私を慕い、紅茶の園に誘つた後輩。その後輩の、そんな変化。……少し嫉妬にも近い感情を沸かせるには、十分な理由になりました。

彼に興味を持つてしまった。

彼女が、ノンナさん以外を：しかも男性を：自慢するというのが、本当に信じられませんでしたから。

同じ学校の仲間ですら、ついてこれない者は切り捨て：逆らう者には容赦せず、完全な実力主義。

傲慢にして横柄。

彼女の少し子供じみた体格から、彼女は彼女で苦勞してきたのでしよう。その性格は自衛。…その為の武器：鎧だったのかもしれない。しかし：その彼女は変わった。

今の彼女。子供らしさが前面に押し出され、ただ可愛らしいだけですから。…まあ、試合での彼女とのギャップに驚かされるくらいですわね。

そして：あの、まほさん同様：鉄仮面と揶揄されるノンナさんを変えてしまった。

人には見せませんでした。解る人には解つたと思います。あの終始、張り詰めていた彼女が…ええ、此方もまた、劇的に変わったのです。

あの彼女が、カチューシャにだけ見せる温和な笑顔を、誰に対しても見せ始め…ええ…簡単に言えば雰囲気は少し、穏やかになったと。変わった二人は、それまでの体制を全面的に見直し、改革…と、他校まで言わしめる程にプラウダは内部から変化をさせた…。

相変わらず「小さな暴君」と言われますが…それは今の彼女を知らないから、言える事なんだと思いますわ。

…更には先に出向かせた、後輩まで変えしまった。可愛い後輩を盗られてしまった…と、思うのは…少々傲慢な考えでしょうか？

ええ…そんな変えてしまった、その原因。

そんな彼に、興味を持たない方が。嘘ではないかしら？

…ま、いきなり二人きりでお茶会を…なんて誘い文句では、警戒されても当然でしょうけど。

とても分かりやすく、私を警戒したかの様な顔を向けて来てますわね。

…さて、どうしましょう。

色々と考えて見たものの、何をどう切り出した方がよろしいのでしょうか？

…ふむ。

「…私」

「はいっ。」

…そうですね。

こう…《切り出しましたわね》

「隆史さんから、どう口説かれるか楽しみにしてましたのに…」

「アンタ、いきなり何言ってるんだ？」

…なんて…。

「いえ、カチューシャ。更にはあの、ノンナさんまで…。そんなお二方を籠絡し、更には私の可愛い後輩までも毒牙にかけた隆史さんですか？ …次は私かと…」

「籠絡つて…その言い方だと俺、ただの女誑しじやないですか…しかも毒牙つて…」

「あら、違いますの?」

「違いますよっ!!」

…ええ、それは心地よかった。

「そう…私だけは、口説いてくれない…」

「誰も口説いた覚えなんてないのですが?」

とても楽しかった…。

…余りできませんでしたが、ペコとのお茶会の後、こうしてたまに時間を頂いて二人でのお茶会を開きました。

カチューシャ、ノンナさん。…そしてペコ。

あの方達の気持ちだが、回数を重ねる度に理解できてしまった。

初めは本当に、彼女達の変化の原因を聞きたかったのですが…どうでも良い話で切り出したからでしょうか? その後の会話はひどく脱線し、それでも他愛の無い会話を続けてしまいました。

その内…もう、そんな事の方が…彼女達が変わった理由なんて、些細な事へと変わっていききました。

「そうでしょうか?…ペコなんて」

「オペ子?」

「入学した頃から、緊張で体が強張つて、固まる事が多かったと言うのに、最近ではその緊張も解けて誰に対しても、笑顔でいますわよ?」

「…良い事だと思えますけどね?…というか、ソレが俺がオペ子を口説いたという語弊に、何故繋がるんですか…」

「あらご謙遜を。彼女は、貴方のお話を良くしますが?…あのペコが。殿方の話を。良く。するのですのよ?」

「…なんで、強調するかの様に言っただんですか…」

…ええ、どうでも良い。なんでもないお話。

彼とお茶会は、ほぼ私達の何でもない…そして、どうでも良いお話で占められていました。彼はそんな話に、真剣に考え、返し…そして聞いてくれました。

ある意味で、彼は中立。中立という言葉としては、適していなかも

しませんが、そう…感じました。

戦車道に全く関心を示さない彼…だからこそ良かったのかもしれない。少し離れた会話も、彼にはできた。…してしまった。

彼は私には遠慮をしない。

私のお話にも打てば響く様に、返してくれる。…それがとても嬉しかった。

男性との会話は、これが初めてでは勿論ございませんでした。…しかし、どうしても彼との会話は、今まで見て来た男性と比べてしまう。

と…言っても、大体はお父様絡みの男性でしたので、私に配慮してくださいるそのお話は、酷く社交辞令で…そして打算すら見え隠れしている会話。

ですから…正直に言ってしまうえば、私、男性は余り好きではございませんでした。余程狭い世界にいたのでしょね…私。ただお話をするだけの事に、こんなに喜びを感じるなんて。

ペコが愚痴とも言える内容を、私には内緒にしても、彼に溢していたのを何となく分かってしまいました。

…だから私も。ですから私も。二人きりでのお茶会の際には、徐々に…。

「カチューシャとノンナさん」

「…っ」

「どちらかと、お付き合いされてるのでしょうか？」

「してませんよ…というか、何故そうなるんですか」

「私としては、カチューシャかと。ほら、ペコといい、隆史さん幼い見た目の女性が好きそう…」

「ダージリンさんの中での俺って、一体どうなってますか!？」

ええ…やはり思い返せば、なんでもない会話がとても楽しかった。

…毎回毎回、OG会の方から私充て頂く、ストレスと言う名の迷惑な贈り物。

一般の方にすら分からないであろう、独特な人間・上下・確執。そんな殺伐とした関係。

年下の…更には戦車道も…よく分からないと言っていた彼を、徐々

にそのストレスからの捌け口、逃げ場として利用してしまっていた。

：とても心苦しかった。しかし、何度も何度も利用してしまう。本当に気が楽でしたから……。何もかもが関係ない場所での、どうでも良い話が心地良かった。

だから：一度、冗談めかして話した家の事。ええ、勿論詳細なんて言いませんでした。少し、心が参ってしまった時に零れて……。いえ、溢してしまった事もございませいた。

聖グロリアーナとしての私を……。お父様の娘としても見ない、彼だからこそ……。なのでしょう……。そう……。思えたのでしょうかね。

私を私として見てくれたのは、ある意味では彼だけでした。

ですから思わずええ、罪悪感から逃げる為に、聞いてしまった事もありました。

思い切って：軽蔑されてしまうかもと思えた事を……。

全ての事を、今までの事を一度……。ええ、一度だけ。

私は、情けなくも指は震え、声は上手く出ず……。それでもゆつくりと話す、彼は……。一言……。

「は？。それがなに？」……。でしたわね。

アノ時の心底聞いた意味が解らないといった顔は、今でも忘れられませんわ。

利用されている本人の答え。：それはただの息抜きだろ？ と、普通に：何気なく……。何時もの様に、紅茶を啜りながら……。

俺を逃げ場と利用するのなら、好きなだけ付き合ってくれ……。と、言っ  
て下さった。

それが利用するって事ならば、いくらでも利用してくれ……。と、言っ  
て下さいました。

我ながら単純ですわよね？ そんな一言で、彼を見る目が一気に変わってしまった。

……

ええ……。本当に単純。

「えくくく。だって私は、口説いてくれませんのでしよう?」

「……えくくって。だって……って……」

「大人の女性はお嫌い?」

「……俺がロリコン前提で話すの、やめてもらえませんか?」

「あら私、カチューシャもペコも、幼女だとは一言も言ってますわよ? 隆史さん結構、酷い事を仰いますのね」

「あああ!! もうっ!!」

……そしてもう一つ。

私は、思いの外……独占欲と言うものが強かったようですわね。

何故か……その頃……いえ、彼が転校してから……青森を去ってから、それを強く実感しました。

切っ掛けは、あの……プラウダで行われた最低の……ええ、最悪なお茶会。そんな事を気づかせたお茶会は、最悪と言って過言ではないと思いますわ。

……その事を思い出す時……どうしても指先を、唇の上に走らせてしま……う……。

「……ダーズリンさんだって、俺から言わせれば子共ですよ……というか、高校生なら皆、子供でしょう?」

「まあ、そうですね。高校生は子供。ですから、初対面でいきなり?

私にこの様な場所で、スカートを捲れと命令する貴方ですから?」

私も隆史さんの趣味趣向に当てはまりますわよね?」

「……どうあっても俺を、ロリコン認定したいんですか?」

「あ、その事ノンナさんに報告してよろしいかしら?」

「………段々、アンタの性格掴めてきた」

「あら嬉しい」

「………良い性格してるよ……はあ……」

……ええ。みほさんとの関係を、後日知ってしまった後……その想いが……ソレこそ……身を焦がすように膨れ上がった。

「隆史さん。そろそろ時間が時間です。最後にお聞きしたい事が……ございます」

「……唐突だな……。はあ……なんすか」

「…私は口説かれない。それは私のプライドを、少なからず傷つけました」

「なんで!？」

どこか油断していたのかもしれない。

「ですから隆史さんは、私を一体、どのように見て感じておいでなのでしょう? それが非常に気になる所です」

「なんでそんな事……。ま…まあ、俺の思い上がりでなければ、友達だと思っただけです…。が?」

「ふむ、友人。…それはそれで光栄ですが…私、異性ですわよ?」

「えつと…え? だからなんですか?」

「……成程」

彼に限って…。

鈍い。朴念仁。散々に言われ、言わされてきた彼に限って、その様な事には…と。

「隆史さん」

「はい?」

ええ…私達は…いえ。

…私が甘かった。

「こんな格言を知っています?」

「は?」

盗られてから焦りだす。

…そんな醜い横恋慕。

「男女の間で友情は不可能。情熱、敵意、崇拜、愛はあるが…友情はない」

「えつと…知りませんが…」

「ふふ…ペコの様にはいきませんわね。これはアイルランド出身の詩人、オスカー・ワイルドの格言です」

「は…はあ…それが何か…」

「ですから私、少々楽しみなのです。殿方との友人関係は初めてです」

のでえ」

「…：なんちゆう、わつるい笑顔するんだ、アンタ…」

欲が溢れ出す。

みほさん達のお話を盗み聞きなんてはしたない事をしている内に…：そのお相手が、目の前の彼だと思えば思う程…：嫉妬で身を焦がしてしまいそうになる。

夢の話？ そんな事はどうでも良い。そのような夢を見ていたと言う事は…：と、思うと…：頭がおかしくなりそうな程の…：顔が熱を帯びる。

「情熱」

それと同時に…：何度も何度も冷たい感覚が、耳の奥を刺してきました。

「敵意」

刺されれば、刺される程に沸き上がり…：零れ、溢れる。

「崇拜」

制御なんてできない。  
したくない。

「…：そして愛」

醜い…。

「隆史さん、これから貴方は…」

とても…：醜い欲。

昔の…：青森での…：彼との最初のお茶会。

何故それを、今になって…：何故思い出したのか…：決まっていますわね。

これは確認…：そして確信。

…：あの時の私は貴方に、何とお聞きましたでしょうか？

今まで羞恥心が邪魔をして、表に出せなかつた欲が、今はとても自然に吐き出せる。



単純な嫉妬から始まり…今は、私だけを見て欲しいという欲。私にだけ…ええ、この一時だけでも構いませんから…触れて欲しいという欲。

今、まさにその欲が全て叶っている。

この狭く暗い場所で、彼は私だけを見てクレテイル。

此処を出ても、小さな部屋だけ。邪魔はハイライナイ。

ならばと…次だ、次だと、別の欲が沸き上がる。それもまた、単純な欲。

何かを思いつく度に、体の芯から刺すような冷たい感覚が、私を後押ししてくれる。

初めての感覚。それが何か知る術もございませんが…今はソレがとても心強い。

冷たい感覚が、襲う度に…逆の溶けてしまいそうな程の熱が一気に襲ってくる。

顔は熱く、手も熱く、お腹の奥まで…もう、身体中に伸びていく熱がとても心地よい。

欲…欲？

欲…。

…彼に触れたい。

彼に触れてほしい。

彼に…。

彼に…彼に？

いえ、彼が…。

…ホシイ。

「隆史さんは…どの感情を、この私に与えてくれるのでしょうか？」

「

◇

…。  
…。

薄暗い室内から聞こえる段々と大きくなっていく雨音。全員が我先に…と、急ぎ出ていった用務員室。

そんな少し緊張した短い時間。

押し入れの襖、その数センチ開けた隙間から狭い室内を見ていると、出ていった彼女達が帰ってくる気配も様子もない…部屋にも彼女達の私物…忘れ物らしき物もないな…。

忘れ物でもして、一度すぐに戻って来やしないかと、注意して少し様子を見ていた。鉢合わせでもしたら隠れた意味も何もないだろうしな…んなお約束は勘弁です。

俺達が入って来た時と同じような室内へと戻っていた。押し入れの壁…そこに背を預け、仰向けに寝そべる様に脚を投げ出している俺の上に、覆いかぶさるように体を密着させてしまっている、この現状。狭いから仕方がないと、この状況を甘んじて継続させてはいたのだけれど…そのせいだろうか？ ダージリンが、みほの話が始まった付近から…妙に大人しい…。

真夏の用務員室。…エアコンが先ほどまで元気に稼働していたので、今もそれなりに室内は涼しいのだろうか…この押し入れの中は世界が違った。

くっそ暑い。

じつ…と、動かないでいても、額に汗が自然と滲む。それはダージリンも同じだろうし、更には密着状態……地獄の暑さだ。

先程からずつ…と、彼女と目が合っていた。俺の胸で口元を隠し、目だけで見上げてくるダージリン。俺の顔を見上げる彼女のその頬には、細かい髪が汗で引っ付いているのが見えた。

睨むように細めたその目に映る怪しい光が、妙に俺を刺激する…。

そして何よりも気になるのが…そう…。その目の奥の…その歪んだ光が、また一層強くなっている。

…彼女…ダージリンがスキル催淫に掛かった時と同じ様な目をしてた。

「ダージリン。もう…その…皆出ていったから…もう大丈夫かと…」

「…はあ…はっ…ああ…」

酷く大人しいと感じてはいたが、それは少々語弊がある。彼女は一言も喋りはしなかったが、言い方を変えれば喋らないだけ。

見事に先程からの提案。この場所から出ようと言う事に対して、とにかく無視をされる。

その返事の代わりと言わんばかりに、俺の胸の上を湿らせるほどに、何度も熱い吐息を繰り返しているのが現状だった。

俺の顔をジツ…と見降ろし…そして、見つめ…うつすらと口元を綻ばせ、何かを確認でもしたのか、短時間だけ見つめると、また俺の胸の上に頬を落とす。

その繰り返し…。

「いつ…頃まで…でしたでしょうか？」

少し呆けたような顔のまま、確認するかのような言葉で、俺に話しかけてきた。

いやまあ…俺からは見えないのだけど、胸から離す度にその顔が段々と締まりのない顔に変わっていつている気がしてならない。

身体をまさぐり、摩り…密着させる。ただでさえ狭いという理由と…その行為に対して、突き放すとか…そういった気にはならなかった。

顔を時偶、襖の狭い隙間にへと投げるだけで…今の状態を甘んじて受けている。

「隆史さんが、私に敬語でしたの…は？ …ああ…3回目のお茶会で、私からやめて欲しいと言いつ出した時でしたね」

…呟く。

「隆史さんは、男女間での友情は在り得ないと…そう…ええ…あの時、本当は理解していませんでしたか？」

…俺に確認するかのような…一人事。

あの時…その質問ならばアレか…。青森で一番最初に彼女とのお茶会とやらをした時の事だろう。

男女間での友情は在り得ない。…と、まあ…ある程度の境を超えなければ、という条件があれば、成立するとは思うが…基本的には在り得ないと思っっている。

華さんの実家へと赴いた時、そんな考えを思わず口に出してしまったのを覚えている。

境…そう、距離だ。無駄に他人行儀に話す様にしていたのも、その距離を保つ為。まあ…肉体年齢的に年上というのもあったしな。

華さんに未だ敬語なのは…あの人…グイグイその距離を縮めて来るのだから…。

「ならばなぜ…ふふつ…嘘つき。アレはただ、どこかで私…いえ、私達と距離を置く為の言葉でしたのね」

クスクスと笑い出しながら、距離を置く為…と、どこか棘のある言い方。

責める様に…それでも何故か楽しそうに…。

「武部 沙織さん…彼女が、冷泉 麻子さん…の、お話の最中…貴方のお名前を思わず溢されました」

「っ!？」

「あら、素敵なお顔。…相変わらず、この手のお話だと、すぐに顔にでますわね」

…麻子の話の時から…。確かに一瞬心臓が跳ね上がったのだけど…ダーズリンが、かなりてんぱっていたから、聞いていなかったと安心していったのに…。

麻子の話でバグツたダーズリンを見ていたし…しかし、しっかり聞いてた…聞かれてた…。

それは…つまり…頭の良い彼女の事だ…すぐに理解したのだろう。だから…

「お盛ん…ですわね」

…一言で全てを理解している事を俺に提示してきた…。

…何故だろう…。見下したり、軽蔑したり…敵意を露わにする訳でもなく…その言葉は…酷く普通だった。

沙織さんが漏らした俺の名前で、みほの話もあり…そしてあの場の異常なほどに和やかな報告会。それである程度…いや、確信して気が付いたんだろう。

しかも、その場にまほちゃんも居た…。この狂った関係に気が付いた…と、言い切つていいだろう。

なのに…だというのに…。

「流さる事がお得意な隆史さんですものねえ…。過程がすぐに想像できるのが…ええ…とても腹立たしい」

それはもう…怖い程に何時ものダージリンの口調…。

ただ笑い、お茶会で何気なく話すような…そんな…普段の喋り方。

「なら…私も…構いませんわよね？」

「……は？」

そんな口調で言い切った。

何故そんな結論に至ったか分からないが、呼吸が徐々に荒く乱れていく。

頬を引き釣らせ、満面の笑みを作り上げた。顎を上げ…徐々に起こした体をまた…此方へと倒して来る。

近い…段々と近づくその顔…。

だが…止めない。

普段の俺ならば、その時点ですぐに焦り…戸惑う。しかし怖い程に頭は冷静だった。

麻子の話を…みほの話を聞いてしまった為なのだろうか？ それともあの訳の分からないスキルのせいなのだろうか…。

「あら…私を止めませんのね。了承と受け取りますわよ？」

余裕がある様に話す彼女もまた、何かを誤魔化しているのだろう。

両手を俺の顔に手を添えて来た時に分かった…。少し震えている様にも感じる。

この状態で、今までのあの話…流れるには最悪の部類に入るのだろうが、もうそんな事なんぞお構いなし。

その言葉に黙っていると…近づいた顔は、俺の顔を通り過ぎて首元にへと顔を埋めた。

それが始まりとばかりに…それ以上、余計な事を口にする事は無かった。

その代わりに…彼女は確認をするかの様に、言い訳をするかの様に…首元から別の言葉を呟き始めた。

「もう…細かい事は…どうでもよろしいですわ。他の女性なんて今は関係ございません…わ…。んっ…」

細かい事…何を指しているかは…まあ…みほ達の事だろう。

彼女の甘い匂いが更に強くなる。

首元に軽く唇が触れると、俺の体をまさぐる様に、顔に添えられていた手が体へと伸びてきた。

汗で少し滑つく胸板に、ヌルツ…とした感触と共に柔らかい掌の感触が…。摩る様に動くその手が、服を脱がせる様に…ワイシャツの間をこじ開ける。

「っ…んっ…」

首筋を舐める様に…小さく当たる舌の感触…。

身体に押しかかる重さ…脚の間にも彼女の脚が滑り込んでくる。身体全体を使い、身体全体で…匂いを擦り付けるみたく彼女は動き始める。

「常に…いかなる時も…んっ…優雅…ふふっ…ちゅっ…ぷっ…」

首筋から付け根へ…動く彼女の口は、首元へと伸びる。腹を胸を…体全体を掌が伝う。

普段の彼女ならば、こんな事でも不可能…だろうな…。余裕を保っているように見えるが…ダージリンの場合、オペ子よりも耐性がないのだろうと思う。

正真正銘の…お嬢様…箱入り娘。

「…何が優雅…。この様に男性の体を弄り…触れ…んっ…」

何度も何度も首へと口付けをしながらも、少し自傷気味に笑う。

唇を滑らせながら…ゆつくりと顔を上げ…体を上げた。

少し髪は乱れ…口元から伸びる細い唾液の糸…口の端に舌先を走らせ…怪しい瞳で俺を見下ろす…。

…強烈な…色香。

あの奥手な彼女が、ここまで…。

「…しかも…横恋慕…。この私が浮気相手…に…なるなんて…屈辱ですわよ…ねえ？ ふっ…ふっ…ふっ…」

そして、どこか…何かから解放されたかのように…無邪気に…笑う。

「楽です…本当に気持ち楽…。何もかも考えないで…ただ思うままにするのが…こんなにも…」

彼女の細い指が、俺の唇にへと添えられた。

爪を立て、軽く引つ掻く様に動く。小さな痛みが走るも…彼女の顔が近づいてくる為、動く事ができない。

ああ…その顔を…目を真正面からもう一度確認すると、やはり…。「これが本能…というモノなのでしょう…最低です…わね…」

本能…。

ダーズリンは色欲…という事を言いたいのだろうか？

さらに近づく顔。

浮気…ね。

「この狭い…空間の中…私達だけ…二人だけ…。今までの私は…ここには…イナイ」

今更過ぎる気もするが、彼女は彼女で何をどう思ったか分からんけど…もう本気なのだろう。

自分を浮気相手とハッキリと口にし、その行為を今…俺に迫る。

やはり…その行動を俺は止める事ができない…いや、止めない。

「は…あ…ねえ…隆史さん」

鼻と鼻が触れる程の距離にまで顔を近づけると…彼女の少し荒くなった呼吸が大きく聞こえる。

「素直に私との浮気行為を受け入れるなんて…どう…お考え…なのでしょう？ ノンナさんや…ペコから迫られても同じなのでしょうか

？」

…微笑を浮かべながら至近距離からの問い掛け。

そんな事を聞いた所で…いや。彼女からすれば、大事な事なのだろう…な。

なまじ青森の事からを知っているからこそ…なのだろう。だから正直に言っておこう。

「浮気行為…ね。確かに言い逃れできないな」

今までとは、明かに違う距離での会話。

物理的にも…何もかも…。

「開き直るつもりはないけど、ダージリンと浮気をしたとしても…」

「え？」

「え？」

…。

あれ？

浮気をしたとしても、何がどうなるうかその責任は取るつもりだと、続けようとしたら…いきなりあの、強烈な色香が消えた…。

スツと体を離して、目をまん丸く見開いている。…が、すぐに俺の視線に我を取り戻したのか…さっきまでと同じ様な表情に戻った。

「い…いやですわね。すでに行方を済ませているというのに下手な言い訳を…」

「え？」

「え？」

…。

先程までの雰囲気は何処へやら…お互いに変な声を上げてしまう。えつと…。

「あ…ああ…そう…だな。こんな状態でも完全に浮気だよな。立場が反対なら、俺でも…」

「え？」

「え？」

…。

な…なに、このやり取り…。



「隆史さん…此処まで体を重ねる行為…十分に…後、残されてるのは、キ…キス…」

「……」

今更羞恥心が襲って来たのか…真っ赤になってキスというフレーズを出した…。

わ…分かった。

はい、解りました。

「まっ！ まったく！ しゅっ…淑女たる私になんて事を言わせるのでしよう！」

…。

「いくら、そ…その！ 浮気行為だとしても！ こういう事は殿方から…」

…う…うん。

彼女の中で、達成感がすであっただろう。

…俺が言い訳でもしているとも思ったのか、いつもの彼女にすぐに戻り…変な照れ隠しでマゴマゴし始めた。

「……」

あ…はい。

では…スキル…〔鑑定〕

…はい、しつかり催淫掛かっていますね。〔欲望〕と〔壊〕も、しつかり元気に活動中です。

みほと麻子の話を聞いて、まあ…対抗意欲なりなんなり湧いた…のか…。それがスキル〔欲望〕の引き金なってこんな行為に及んだみたいだね。

「いくら女性を辱める趣味がお有りだとしても、ここまでの…隆史さん？」

「……」

ス…スキルの影響あつて…コレかあ…。

真っ赤になってマゴマゴし始めたね…俺の上で。体を動かす度に、ちよつと痛いんですが…。

いやもう…ね。ぶつちやけた話、麻子とみほの内面から言葉にして

の報告話に、当事者だった俺も色々と思い出して…その…息子がMA X状態なんです。

更には…ダージリンは、息子のちよつと上部に座っているから、ちよいちよ動く度に擦れてしまい、刺激になってしまいうんですよ。

「OK、ダー」

「…なんですししょう？ それより…いきなり呼び方が、ぞんざいになっておりませんか？」

はあ…。もう直球で聞いてみよう…。

「あのな？ 麻子…と、みほの話…の内容。理解してたか？」

「…もっ!! もちろんですわ…」

…なら何故、目を逸らす。

「…沙織さんから、参考書…というか、あの雑誌見せて貰ったんだろ？」

だからだろ？ 麻子の話の時、結構な状態になったの」

「……………」

おい、顔が完全に真横向いたぞ。こりや雑誌の内容の意味ですら、よく解からなかったと見える…。

一度見せて貰ったけど、結構なイラストでかなり直球に……………あ、そうか…。

意味が分からなきや、素ツ裸のカップルが抱き合ってる様にしか見えぬのか…？

男のエロ本とかじゃないしな…。この様子じゃ、沙織さん…一応…ソフトな物を選んでみせたのだろうか…。

…。

…ま…まあ…エグい内容のもあったけど…あんなの、いきなり他校の人に見せたら100%引かれるしな…。

「……………」

「……………」

…おい、目を見る。

「はあ…。あのな？ みほの話って…俺の口から言うのもなんだが…結構、直接的な事を言ってたよな？」

「みほさんの話は、完全に聞いていませんでしたわ」

「…何故ドヤ顔でそれを言う」

…。

そうだ…みほが話始めたら、ダージリン…俺が複数出てくるって下り以外、思いつきり両耳塞いでたな…。

「く…っ！ 悔しいじゃありませんか…その…その…貴方との…」

…あ、はい。

余計な事聞いた気がする…。少し緩んだ空気の中、指同士を遊ばせながら…モジモジを白状した。

「そ…そもそも！ アソコまで！ ま…まぐわったのですから…十分に…」

「まぐわうとか言うなよ…」

ま…まあ、言わんとしてる事も分かる…。ダージリンが脚と脚を絡めてくるとかしてきたしな。現に今も…で、でもな？ その言葉は外で使うなよ？

男女で体を絡み合わせる事が、そういう行為だとも思っているのか…。今時…小学生でも知ってる奴は知ってるぞ？

ダージリン…超お嬢様だから、そういつた知識の…ああ、でも概念的には理解しているみたいだから、多分…具体的な行為については、完全にシャットアウトされてたのかね…。

何時の時代の教育を受けて来たんだろう…。

「……………」

よし…察してやろう…。

照れ隠しなのか何なのか…今度は横髪をいじり初め、汗をぬぐう様に頬つぺたに引っ付いている髪の毛を、小指で整えた。

そんな少し子供じみた仕草をする…このある意味で、完全無欠のお嬢様。

…そして思う。

みほには、まあ…良く分からん許可は貰っているし…俺も変に覚悟が決まっていた状態。

しかし相手のダージリンは、すでに事を済ませたかと思っている…。

……責任……

「……………」  
思っているだけとは言え、彼女は彼女なりに決め手の行動だったの  
だろう。

飽きれ……とも違うが、色々意識の落差に考え込み、黙ってしまった  
俺に対して口を尖らせた……

何故かダージリンは、俺と二人だけになると、こういった子供じみ  
た仕事を匂わせる。……彼女にとっては俺に対して油断をしている……  
というか心を許してくれているという事なのだろうか？

それにあの……青森での混合のお茶会。……良かった俺に対して、腕を首  
に伸ばしてきた時を思い出すと……まあ……そういう事なんだろうとは、  
分かっていた。

大胆なのか、奥手なのか……良く分からんお嬢様。

俺に何を望むか……まだ分からん。分からんが……望むのなら……なら  
……

「あの……隆史さん？……どういった意図がありますか理解しかねますが  
……黙り込むと言うのは、少々……っっ!!」

いじける態度の彼女の首の後ろへと腕を伸ばす。此方から動きを  
見せるとは思ってもいなかったのか……一瞬体を強張らせた。

そのまま力づくで、抱きしめる様に彼女をそのまま引き寄せる。

「たかっ!! たたっ!!」

お……おかえり、いつものダージリン……

また顔が近づいた時点で、またあの怪しい光が目には帯び始めてはい  
たが、完全に羞恥の方が勝ったのだろうね……

冷静沈着……普段、落ち着いている彼女も、すでにいない。

下手に言葉を交わし、下手に浮気行為の間違いの指摘をするより  
も、行動で示した方が……タブン正解なんだろう。

「……………あの……あ……」

唇が触れる程に近づくと……言葉数も少なくなっていく。

至近距離でお互いの目を見つめ合う形になってしまっている。……  
そんな状況。

彼女の後頭部に手を添えて…顔を更に引き寄せる。  
彼女にとつては、二度目の…。

【  
】  
ダージリンは抵抗もなく、素直にその俺の動きに合わせてくれた。  
すぐに唇へと、柔らかく…暖かい体温が伝わり…。

「んっ…っ…っ？ …んんっっ!？」

そしてすぐに口内で動く、艶めかしい舌の感触。

手の力を少し強め、ダージリンの口内へと舌をねじ込むと、少し驚いたかのように動く彼女の舌が、生暖かい感触が伝わる。

円を描く様に舌を回しながら動かすと、ダージリンの舌の根本…先、横…に擦り合わす様に流れる。

「んっ…はっ…あ…」

…明かに前回とは違ったディープキス。

ただ舌同士が触れ合うだけではない、明らかに口淫。下唇を吸いながら、舌を絡ませる。

初めは驚いただけのダージリンは、戸惑う処かすぐに順応し…絡ませる舌に、更に結ぶ様に絡ませて来た。

少し開いた口からは、小さく…甘い息がすぐにでも漏れ始めた。

「んあ…はっ…んっ…はっ…」

たった、それだけの事。

口を合わせ、舌を絡ませる。お互いの口を吸い、抱きしめ合う。

あの、ダージリンと。

額や、頬にくすぐる様に当たる髪。

なにか、大きな境界線を越えた…そんな感覚がした。

冷たく脳内に走る感覚が、妙に俺を高揚させ…気が付いた時には、抱きしめ合う体を回し…ダージリンとの居場所が交代していた。

彼女に覆いかぶさり、彼女もまた一線を越えたと思つてでもいるのか、今は俺を逃がさない様に、腕に力を入れ…顔を離させない。

脳に一番近い場所での舌同士での交じり合い。ふっふっ…と、鼻から何度も小さくも荒い呼吸が、何度も聞こえる。

ダージリンの頭の横、手を付き腕に力を入れ…腕立ての様に上半身

だけ上げると…首に抱き着いているダージリンは顔をやはり離さない。

今は俺の口を、自ら耳に残る様な音を響かせながら吸い続けている。

狭い押し入れ内にこもる熱気。

ぬるっ…と、汗で滑らせながら、顔をゆっくりと…体ごと離れた。

「…んっ…はっ…ああ…あ…はあ…」

久しぶりに見れたその顔は、目は涙で蕩け…熱で顔を上気させ…休憩？ それとも終わり？ とも…取れる、ちよつと抗議するかの様な目線で責める様に見上げている。

唾液に塗れ、小さく開いた襖の間から入る光で、テラテラと反射させている口元。なんかもう…これだけで満足してしまいそうな感覚。

口端に伝う…唾液の糸を、小さく出した舌で拭う仕草を見せる…一瞬ゾクツ…と、背筋に何か走った。

こんな彼女の姿なんて、誰にも見た事なんてないだろう。ある意味で、普段とのギャップが…落差が此処まで違うのは、誰よりも彼女が一番だろう。

「もう…よいのでしょうか？ ふふっ…もう…そうそうこんな機会…ないですわ…よ？」

俺からの行為ということもあり、少し心に余裕でもできたのだろう。少し挑発するかの様なセリフ。

しかしその顔は、まだ足りない。もっと、もっと…と、ねだっているかの様に見える。彼女は基本的に、有利な立場での立ち位置がお好きなようだ。

それはこういった事でもそうなんだろう。…中村と林田が言っていたな。彼女には責められたい…とか。ちよつと気持ちは理解できる。

…理解はできる…が、むしろ俺は、こんな彼女を見てしまったのは…逆にネダラセタクナル。

スツ…と無言で彼女の服…大洗の制服。お腹へと手を滑らせた。…汗で少し滑りやすくなっているとはいえ、触るだけで心地よい肌の

感触が、心地よい。

そのままゆっくりと…服を捲る様に腕をその上へと滑らせる。

「んっ！…そ…そうですわよね…本来なら…裸…同士…で…」

眉が少し傾き、何か覚悟を決めたかのようなセリフ…。

一瞬肩が跳ね、何か…うん。またちよつと違つた反応で返された…。

うん…。

もう片方の手で…彼女のスカートを捲る様に、太股へと手を滑らせる。

腕で片脚を上げさせ…彼女の下着を…とも思つたが…いかんせん狭い。体を完全に上げると2段の押し入れの天井へと頭をぶつけてしまふので…うん。

見れない！

すげえ悔しく感じるのは何でだろう!!

「っ…たっ…隆史さんっ!？」

彼女の腹に滑らせた手をどけ…もう片方の脚へと、腕を滑り込ませる。

要は…両腕で彼女の脚を曲げ…大きく開かせた。彼女の顔の近くに俺の顔が在る為、下着は見られないと分かつてはいるのだろうが、その格好に彼女の顔が更に赤く染めあがる。

後…もう、面倒くさいというのと、この押し入れ内が狭すぎて、動き辛いというのもあり…スキル「転移」で、俺のズボンを取っ払つた。

俺のズボンは押し入れの外だ。…彼女の服も取っ払つて…も、良いのだけど、半裸の方が俺は好きですからね。取り合えず下の下着だけ、俺のズボンと一緒に外に飛ばしておいた。

後…こんなスキル、一体何時発生した…？ まあ…もう…今更過ぎるけど。

「」

あ…うん。

彼女からは見えるのだろう。彼女はいつの間にか下半身が裸に

なっている俺：正確には、一点に顔を下に向け：凝視して固まっていた。

熱に浮かされ、転校前…の関係の境界線を超え…この状況での妙な感じ。その状況に完全にMAX状態の俺の息子に対して熱烈な視線を送ってくれていた。

「」

あら…痛くないのかな？ と、心配してしまう程に目を見開き…口を小さくつぼみ…つてVの字になっちゃってるし…。

完全に固まっちゃってますね…。

「ふっ…!?!」

M字に開いた両脚を押しつぶすかの様に、彼女にまた覆いかぶさる。

少し押し出された息が、口から洩れたけど苦しくはないだろう。

下手に説明したりするよりか、彼女の場合…まあ…行動で示した方が良い…と、結論つけた。

「…俺は、ダーズリンを抱いても…良いんだよな？」

彼女は俺を求めた。浮気をさせた、した…と思い込んでいる。SE Xをしたと…。

ならば問題ないだろう。…とも思ったが、一応聞いてみると…。

「い…今更…? …相変わらずの唐変木ですわね。この私が此処までしているというのに…いい加減にしないと、さすがに怒りますわよ？」

すげえ睨みながら…怒られた。

抱く…という意味は、すでに完遂されている…と、思われているからこそ、更に怒りを買ったんだらうなあ…。

結構、本気で睨まれてしまった…。

「んうつつ?! たっ…隆史さん?!? どっ…何処を触っ! んあっ!?!」

ですので、誤魔化しました。



愛撫…してあげたいが、この狭さではキツイ…。準備の為に口でもして欲しいが…この狭さでは無理。多分…沙織さんの雑誌の内容から、その手の事は記載されていると思うけど…。

肩で脚を更に上げ止め…両手で彼女のお尻を掴む様に秘部を大きく開かせると…指先に少し触れたその入り口から、汗ではない体液がその指先を滑らせた。

「はっ…そんな所…汚っ…んっあ!! はうっ!! …っ…んぐつつ」

秘部に触れた指先を揉むみ…軽く動かしてみると、甘い声が漏れた。一瞬、自分からそんな声が発せられたのに驚いたのか…片手で口を塞いでしまった。

ほぼ無意識にだろう。人生で初めての声…だったのだろうかね。あの偏った知識じゃ、自慰行為すらしそうにないしな…ダージリン。

「ダージ…ああいや…違うな」

「っ?」

「…今から中に入るな?」

「…え?」

名前を呼ばれたと思ったのか…混乱した顔で、不思議そうに視線だけ俺に向けた。

そして、中途半端に言葉を止めた。

そして、一言…。

「凜」

「っっ!?!」

…と、本当の彼女の名前を口にすると…少し顔を上げ、また驚いた顔をした。

…まあ…うん。本人から教えて貰った訳ではない。何故か、オペ子もアッサムさんも…本名はひた隠しにしていたしな。

だけどまあ…ダージリンの場合、かなりのお嬢様だ。少し彼女の家との関係を持って調べてしまえば、嫌でも耳に入ってくる。

例の北海道合宿での事で、判明したんだけどな…まあ今はそれはいいや。

こういう事をするんだ。せめて本名で呼んでやりたい。亀頭先を、

感覚だけで彼女の入り口へと添える。その先からまた…熱い感覚。

そして名前を呼んだ瞬間…一気に彼女の中に押し入った。

「ひうつつあつっ?!?!」

ブツンとした感触と、小さな音が何度も鳴りながら、大きく広がっていく感覚。

ゾリゾリとした感触が、陰茎全体に伝わり、痛いくらいに異物を押し出そうと膣内が蠢く。その中をお構いなしに全てを一度で差し入れていく。

押さえていた手を離し、見えた小さな口は大きく開き…腹を大きく跳ね上げ、背中を逸らせながら…。

「つつかつ…あつぐつ…? お…あ…??」

ガクガクと押上げられた脚を、激しく痙攣させた。

男を知らない身体…に、俺のモノをいきなり根本までねじ入れた。

…ただ、ダージリンは痛みは感じていない。

林田の家族を待っていた時の会話が役に立った。

痛く…無い方が良いよな? …だからアノ時の話を参考にして脳内に探りを入れ…見つけた。作製したと考える方が正確かもしれない。

スキル「感覚変化」

痛覚を快感へ。痛みを感じない様に変換しておいた。

体内に異物を入れた感覚に戸惑い…そこは少々苦しいかもしれないけど、痛みは無い。

ただ、本来感じるであろう破瓜の痛みが、快感として彼女の中で蠢いているはずだ。

そしてスキル「リフレッシュ」…「キュア」。破瓜の血を拭い…その傷痕を治す。

…さてと…人外な事は此処までだな。

「あ…あう! …あ…え…あ…」

痛み⇨快感は、多少緩和されたとは思いますが、まだ慣れていないのだから、本来なら多少は痛みを感じるだろう。

痛み…だけでは、それはそれで可哀想だともオモウ。

「ダーズリン？ 大丈夫か？」

虫の息…とも違うな。これもまた人生で初めての快感なのだろうな。

先程から、彼女は驚いて目を見開いてばかりだよなあ…。涙で少し潤んだその瞳から、あの怪しい光が強く光る。

「ひゃ…ひゃえ…？ なっ…ん…あ…？」

だからここからは、多少…乱暴にするくらいが…チヨウドイインダロウ。

◇

オカシクナリソウ。

何と言って表現してよいのか、全く分かりません。

喉が熱く…人生で初めてだと思いう程の声を上げた気がします。

よく覚えて…よく見えな…な…え？

あ…そうです…ね。

武部 沙織さんから頂いた雑誌。…良く意味が分かりませんでした。

男性と女性の性器…付近から、まったく理解が及びませんでしたから。

しかし…隆史さんの行為で、それが…疑問が全て解消された気がします。

これがある意味での、本当に一つになると…言うものなんです。ね。繋がる…繋がっている。

彼には…教えていかなかった…本当の名前で呼ばれた。

驚きはしましたが、何故知っているのか…まあ…察しは付きますわね。

付きますが…それ以上に…嬉しかった。

嬉しかった…。

ええ：嬉しかったのですが：その細かい感傷は、一気に塗りつぶされました。

正確には、塗りつぶされた。：のとは、少々違いますでしょうか？別の嬉しさに塗りつぶされた：とでも言い換えればよろしいのでしょうか？

彼が私へと：その：まあ：一つになれたという事実が、今まで掛けていたピースを埋め：納得させ、理解させてくれた。

：同時に来る：恐ろしいと思えるまでの：キモチヨサ。形容し難い快感。

何もかもが単純な思考に塗り替えられる。

オカシクナリソウ。

この空間、この狭い室内、彼と私だけという事実。

それに加えて：彼は今：本当に私だけ：ワタクシダケヲミテクレテイル。

ああ：この行為が、SEXという行為：確かに私と隆史さん：ダケ

愛シテクレテイル。

ワタクシダケヲ、見てくれている。

彼の汗が私に落ちる：。

肌が触れ合えうと：私の汗と交じる。

今、私は：どういった格好で、どういった声で、どういった顔で：いるのでしょうか？

真っ白に光る。

何も上手く、考えられない。

細かい事なんて：どうでもいい。

知らない。

キモチイイ。

知らない。

キモチイイ。

知らない。

キモチイイ。

知らない。

…オカシクナリソウ。

…わたくしは、かれのまえでなら…たかしさんになら…こどもように…こどものときの…ときの…。

彼が動く度に、体中の力が抜け…一気にキモチヨサが押し寄せる。

獣みたく声を上げ…はしたない。

だらしなく舌を突き出し…いやらしい。

ただ彼が欲しく、欲しく…浅ましく求める私は…淑女とは程遠い存在なんでしょう。

でも…どうでもよろしいですわ。

彼は…いえ、彼も私を求めてくれている。

…。

………。

ええ…今は…それだけで…十分…。

◇

ガタガタと激しく揺れ音を出す襖。

狭い押し入れで、二人溶けあう様に貪り合う。

細かい感想なんて…無理だ。

ダージリンの綺麗にまとめられていた髪は、もうとつくに乱れ…汗に濡れ舞っている。

制服は捲れ…胸を露出してる事にすら気づいていない。

スカートの生地もすでに意味はなく、腰の周りでクシャクシャに丸まって…裸と変わらない。

動く俺の振動に対し、甘い…とは、もう程遠い声を上げている。

遠慮無く、本気で彼女の中へと打ち込む。

肌がぶつかり合う音は、汗を飛び散らせ、子宮すら押しつぶす様に打ち込めば、狂ったかと思える程の…声。

「んぶっ♡!! んぐっううう♡♡!!」

ダージリンの代名詞とも言えるであろう優雅…気品…そんなモノ、もうどこにもない。

すでもう、なんど果てたか数えてない。

口を…唇を合わせながら、杭を打ち込む様に力の限り打ち入れる。膣内から体液が飛び、グチグチと粘着質な音が響き渡る。

綺麗な胸が下品に揺れる。

身体を離し、少しだけ遠目で見れば服は汗で透け、下着の線がハッキリと見える。

身体を近づければ、彼女は即座に口を吸ってくる。

キス…いや、ディープキスが癖にでもなってしまったのか…兎に角、ダージリンは好きそうだった。

下着を外す事すらも忘れ、文字通り夢中になり腰を打ち付ける。

バツン、バツンと彼女の奥に当たる感触…。

「あぐっ!! ああ!!」

どれだけ…もう、どれだけ繋がり続けたかもわからん。

体位を変える事もなく、正面から向かい合い、ただ動き続ける。

「あ?…♡!! ア?…♡♡♡!!」

脚を上げ、体を抱きしめ…体を拘束するかの様に打ち付ける。

すでに喘ぎ声と言うよりかは、叫び声に変わっていた。

射精が近づき、小刻みに激しく動く。その動きにダージリンは、かなり気持ちが良い様だった。

彼女は彼女で、すでに何度も絶頂を繰り返しかえしすぎ、何も考えられていない様だ。初めてでの体験では、普通ならば不可能な程の快楽。

みほですら、あまり痛みは無いようだったが、ここまで乱れる事はなかった。

一度も陰茎を抜き出す事もなく、彼女の中に吐き出しては動く、その繰り返しを延々と続ける。

ダージリンは結局、終始言葉を発すること無く、夢中になって初めての快楽に…身体を振じらせ、口をだらしなく開き…何より…完全に堕ちていた。

…。

「あっ…はっ…あっ…あ…」

いつ終わったのか…そんな事も曖昧になっている。

押し入れの襖は開かれ、中に畳んであった布団は外にへと、形を崩してはみ出している。

その上で…ダージリンの肢体は、体液に塗れ…彼女は仰向けに痙攣し、だらしなく両脚を投げ出し、全身が脱力し…呼吸と連動し胸が上下運動を繰り返しているだけ。

秘部からは、下品な音をさせながら精液が溢れ出し…喘ぎ声にも似た吐息を吐いてはいるが…まともにその喘ぎ声を聴けなかったな…とか、今さらになつて思える程には俺は回復していた。

激しく動き合っていた為だろうか、結つてあつた髪は綺麗に解けてしまい、乱れてしまっているが、ロングヘアのダージリンを始めて見ている。

…そんな…短文を繰り返すような、状況判断。流石に俺も息が切れしていた。ダージリンの横に…と、押し入れの入り口の横、その柱に背を預け…息を整えていると息も絶え絶えに名前を呼ばれた。

「はあ…はあ…た…たかし…さ…ん？」

「ダージリン？」

此処までの会話は、殆どなかった。彼女の想いも何もかも、聞いていない。

ただ名前を呼ばれ、呼ぶ…それしか…。

裸のまま…億劫そうに体を起こすダージリン。乱れた布団の上…というのもあり、うまく起き上がれないようだった。

現状を理解し…数時間前までの知識が偏っていた彼女は、もういいのだろう。

だが、彼女の性癖はまだ分からない。スキル「鑑定」を使ったとしても、分からなかった。

「ふふ…もう…名前で…呼んでくれませんか…のね」

「…無理するなよ。希望するなら…まあ…呼ぶけど…ちよつと照れ臭いんだぞ?」

先程まで、みほにすらしなかった、激しい行為なんて想像できない程の会話…。

しかし、俺の言葉がどうやら気に入ったようで、嬉しそうな顔で、まだ少し痙攣が続く体を隠す事もなく少し起こした。

「こ…こんな…格言を…知っていて?」

「知らん」

「…むつ。合いも変わ…意地悪…ですわ…ね」

「虫の息だぞ…本当に無理するなよ…」

口を尖らせながら、また首に腕を回して来た。

しかし、体にやはり力が入らないのか…体をそのまま任せ…

「愛してますわ」

…。

…。

まっすぐ目を見て…言い捨てる様に言われた…。

俺の手を取り…自身の胸に引き寄せ…睨む様に…試す様に…そして、ねだる様に言葉を続けた。

「理解が及びませんか? 私も及びません。何故私が、このような浮気者相手に…まったく…」

「き…急に舌が回りだしたな…」

「どなたかに似たのでしょね」

「…ぬ」

ある意味でコレも彼女の強さ…なのだろう。

急に何時もの…彼女に戻った気がした。

「これから…もつと私に教えて頂けるのでしょうか?」

武部 沙織さん



ではなく…あのような雑誌ではなく…隆史さんが」

教えて頂ける…ね。関係を続けるとハッキリと宣言したようなものだな。本当に人間関係を無視した…いや、もう気にしていないとばかりに、これからの関係を確定させる為の発言とも取れる。

しかし…別の意味での…底が知れぬ不安感を…俺に思い出したかの様に…今更与えてくれた。

不安感…いや、違う…これは安心感とも言えるのではないのか？俺は間違っていないかったと…確定付ける証拠が見えた。

「私に、貴方は何を…望みますか？」

「ダ…ダーズリン…？」

「私は、ナンデモ…ナンデモナンデモ…ドンナモノデモ…叶えますわ」

何故なら…その目には、禍々しい光が灯っていたから…だ。

彼女の想いに応えた結果…その光は、彼女の瞳に焼き付いたかのように…ハッキリと刻まれていた。

「ですから貴方は…次に、どの感情を…ええ…どんなキモチを…私に与えてくれるのでしょうか？」

…なら、これからも…それに応えよう。

…。

でもな…何故だろう…スキルの弊害？ いや、その効果の証拠とも

言える瞳の中の光。

それが灯る事を見て、何故そう…思えるのか…。

…。

…えつと…あく…ああ…そうだ。

…そう…言われたと…教えて貰ったからだ。

…。

それは誰……だっただろうか？



「……………」

「ダ…ダージリンさんの恋心を…完全に欲望に変換させた…」

「いえ…最後、愛してると…おしゃっていたので…比それ以上かと…」

「……………」

「お…女の子の初体験を…完全に快楽に改変して…塗りつぶして…」

「絶妙なタイミングで、本名で呼んだりとか…更には隆史さん自身に、全ての感情を…渴望を…欲を…擦り込ませた…」

「……………」

「あの性獣…相手の女の子に対して、スキルで潜在欲望満たしてしまうから、タチが悪すぎるわ…」

「女性側からすれば、それらを解消してくれるのが…思い人…。ほぼ、逃げる事ができない状況を無意識に作り出していますよね…」

「……………」

「……………」

「うんっ!! じゃあ早速呼び出すわねっ!!」

『エ？っ!!』

『来たれ 地獄を抜け出しし者！ 十字路を支配するものよおお！  
汝 夜を旅する者 昼の敵 闇の朋友にして同伴……』

『ちよつと待ってくださいつ!? 先輩ソレ、ガチの悪魔召喚の黒魔術じゃないですか!! 女神が、なんて呪文唱えようとしているんですかっ!!』

『ぷうくくすくす！ 女神がガチとか言い出したわっ！ んっつとおおに、あんた隆史の影響受けすぎねっ！』

『うっ…受けてません！ 勝手な事言わないで下さいよ！それにつ！ 隆史さんは悪魔ですか!?』

『私、それで間違いではないと思うの』

『………』

『こっちはこっちの隆史に…正直、私にも責任の一端はあると思っ  
ているのよっ…』

『一端…では、確実にないと思うのですけど…』

『何言ってるの。エリス、貴女が勝手にアレ呼び出して、アソコまでの性獣に仕立て上げたんだから、これは貴女の責任よ』

『責任を挿げ替えないでくださいよっ!! そもそも、先輩があのですキルを彼に押し付けたのが、事の元凶じゃないですかっ!』

『あくはいいはい。んじやもう、それでいいわよ。私がぜくくんぶ、悪いのよねえそうよねえ』

『……幸運の女神エリスの名においてオーダー。本編の尾形 隆史  
さんに『神殺しの剣』の使用許可を…』

『だっ!! だから!! 責任持つて一応私も同席して？ 呼び出した  
直後…あの女つタカシが悪さしない様にしてあげるって言ってる  
じゃないいい』

『まったく…。はあ…一応つて…危なくなったら逃げる気満々です  
よね?』

『………』

『先輩?』

『はっ…どうやら私じゃ、勃たないみたいだし? 逃げる必要な

「いんじゃないの〜?」

「…結構、気にしてるんですね」

「あの糞野郎…絶対にゴツトブローお見舞いしてやる…」

「…先輩」

「はあ…はいはい、冗談はもういいでしょ? さっさ呼んで…  
さっさと神威を奪い返すわよ」

「ぐっ…」

「マジな話…早くしないと、取返し…つかなくなるわよ」

「うっ…ううう…わかりました…」

「…んじや、いくわよ?」

「…はい」

「エロイムエツサイム、エロイムエツサイム、我は求め訴え…」

「…やはり悪魔扱いで、呼ぶんですね…後、先輩…今まで呪文何て唱  
えた事ないでしょうに…」

「うっさいわねっ! こういった事はノリが大事なのっ! この方  
がすぐに呼び出せるのよ!! ほらっ…もう反応が来たでしょ!? そ  
んな事も…って…あ…」

「…はあ…今度は、なんですか?」

「……」

「先輩?」

「…まずっ。冗談で言ったのに…コレ…マジかも…」

「なっ…なんですかっ!? なんですかっ!?!」

「エリス…あんた…」

「え…なんで指さすんですか…どこを…顔? え…ま…まさか…  
」

「目に…淫紋が…」



…。

夢…と、処理をしている関係もあるとはいえ、前回もそうだが…女性って、そういった体験談とかを話の題材とかにするのかよ…と、思わずにはいらなかった。

まあそれも人によりけりだと言ってしまうえば、それまでなのだろうが…結構明け透けに言うもんだな。

みほに対してハツチャケてしまった時の…アレ結構…いや、かなり濃い内容だと思うのだけど、そんな体験や言葉をみほの口から吐かれるとは思いませんでした。

みほの場合、彼女の性格や雰囲気もあり、アツチ系の話を言うというのは、アンバランス感や意外性が…なんか…すっごい。

しかも人に対して話すとか…ぶっちゃけた話、色々と来るモノがありました。

淫語とか…もつと言わせてみたくもなる。

そして違和感。

…みほ達…この関係を、案外楽しんでる様に思えた。

みほだけでなく、最初に俺に対して忠告…いや、警告をしてくれた麻子ですら、今回アノ調子だった。

麻子の場合、みほの現状を理解しているからこそ、余計にそう思わせる。

狂った関係だというのに、それに対して普通に……。

…。

……ん？

違和感？ …なにを持って、そう思えたのだろうか。

多少の誤差はあるだろうが、彼女達には彼女達が、ある程度望む事を具体的に示して来たただけだ。

夢と判断しているとはいえ、欲求が発散されている現状を楽しんでいる事に対して、何に違和感を持つんだ？

スキルを利用しての事に関してもそう。

…。

…現実離れしている現状だからこそ、現実離れした事に対しての抗  
体が出来てないか？

現状は夢だと判断している事が、現実起こった事だとしても、彼  
女達は…ひよつとして…ウケイレルノデハ、ナイダロウカ？

実際問題、前回のみほと的事で、みほのお姉ちゃん欲求というもの  
を知ったし、ある程度の事だったら…更に彼女達からの欲求を素直に  
叶えてあげる事が出来るのではないのだろうか？

一度…聞いてみるのも良いかもしれない。俺の頭が狂ったとでも  
思われたらソレはソレだ。冗談と笑い誤魔化せば良いだろう。

…。

ただ、そうなった場合…特に華さん…欲求が凄そうだな…。

彼女の場合、特にアツチ方面への好奇心が物凄い…。先程彼女本人  
の口から、少し話していたが、公開SEXっぽい事をしてみた所…乱  
れ方が半端じゃなかった…。

ギャラリーっぽいのも、全て俺にした所、どこかで安心したのか…  
それとも夢だと解っているの事だったのか分らんが、凄まじかった  
のが記憶に残っている。

最近、みほにもその傾向が表れていると思うのだけど…どうにも少  
し、乱暴な呼び方とか、口調とかを彼女達から求められる…。なんで  
だろう…。

スキルなんて存在を知られさせてしまったら、なんかこう…新しいス  
キルがバンバン発生しそうな気がして、仕方がないのですが。

現在、羞恥心を刺激して、背徳感を生ませて…だまし討ちみたいな  
事をしてしまっているのだけど、それはそれ…だな。

快楽に流されて、学校のトイレの時の様にただひたすらに求める様  
にするのではなくて、複数で攻める時の趣向を少し変えてみたとしよ  
う。

それは先ほどのみほの話と同じく…最初から俺だと認識させてか  
らの場合…どうなるのだろうか？ あの恥ずかしがり屋のみほです  
ら、ガキの頃の俺とはいえ、複数の俺という男に対して…卑猥な言葉

連発して求めて来たというのだから…。

……。

受け身だったみほが…積極的に自らの快楽を求める傾向になっていた。

「」

そう…なのだろうか？　そういうコトなんだろうか？　やはりスキル提示をした方が、彼女達もモット積極的に分かりやすく…

「」

冗談と笑い誤魔化せば良いと思っただが…違うだろう。そこは、スキルで…その感じた違和感を消してやれば良いんだ。

コレも違う。…それは洗脳に近い…そうだ。違うな。ダメならダメで、記憶を操作すれば良いんだ…。一度告白してみても、ダメだったらそれまで。スキルの告白したという事実を消して、また…普段通りにガンバレば良い。

もし…彼女達がスキルという、人外の事を受け入れたらば…ある意味で俺としても、本気を出せる…。

ソウダナ、よし…ソウシヨウ。

ナニヲ、ドウ、モトメラレヨウガ、ソレを叶えてやる事が、もう…ここまで関係を拗らせた俺の…義務だ。

※ルート壊 【正史・宴編】※ 女神会ですっ！

『……………わっ』

「…んあ？」

…もやは見慣れてしまった、真っ黒い空間。

少し寝ぼけたような、ボー…した頭が、これもまた聞きなれてしまった声で、現状を把握した。

今回もまた、気が付いた時には、この場所に立っていた。

これもすでにまた、慣れてしまったていたこともあり…まあ何かしらの理由でまた呼ばれたのだろう。その呼び出した主と思われる…俺の意識を取り戻した切っ掛けの声の方向を向くと…ああいたいた。そのド派手な水色のロングヘアの自称女神様が、今回は少し距離が離れた場所に、俺と同じく立った。

「…お、駄女神？ またお前か…。今度は何の用で呼び出し…駄女神？」

俺が声を掛けると、少し俯いていた顔を上げ…此方にまっすぐ、睨みを効かせた顔を向け…叫んだ。

『私のっ!!』

「……………なんだいきなり。私のなんだよ」

来て早々、睨まれる覚えはないんだけど…。

『私のこの手が真っ赤に燃えるっ!!』

……………。

叫びだしたと思ったら、手を…指を広げて自分の顔の前に突き出した。

駄女神……………今度は、何に影響された…。

『勝利を掴めと轟き叫ぶ!!』



あ、うん。手がなんか燃え出したな。

『ぶわあああつ……あああああく熱うっ!!!!』

手を掲げ……なんか此方に、全力で走りだして来たな。

『ゴツドツツ!!』

……

『ブツツロオオオオオオ!!!!!!』

……

『オオオオ……おらああああ!!!!!!』

……

『アあつ!? あぶつらはあ!!!!』

……

『……ぎゃんつ!!』

取り合えず……炎に包まれた手で、此方に殴りかかって来たので普通に避けた。

うん、オカンにぶん殴られる時に比べたら、止まって見えるわな。

避けた拍子で、体制を崩したのか……見事にダイブしていく女神様……あ、違う。

駄女神様。

「おー……。顔から派手にイッたなあ……」

とても気持ちの良い、ズザザを久しぶりに聞いた気がするな。

『グスツ……ひっ……酷いじゃないっ!! 避けないでっ!! ちよつと擦り剥いちやっつたじゃないのっ!!』

「いきなり殴り掛かって来ておいて、随分な言い草だな、おい」

『しかもおっ! 避ける時に足掛けたああ!!! あああああ!!!!』

……いきなりピーピー泣き出した……

『あ……あの……隆史……さん?』

「はい？ ……ああ、エリス……さ……まっ？」

おお……この世界、唯一の癒しの女神様も、今回は初回からお出まじだった。

ただ……。

『あ……いえ……聞きたい事があると云いますか……何と云うか……それでご足願いましたと云うべきか……』

「……………」

遠っっ!!

何時もは比較的近くに来てくれるのに、今回100メートルは離れてませんか？

例の脳内へ直接届く声の為、会話は問題なくできるといえど、さすがに遠すぎる……。

「なんか、距離離れすぎてませんか……？」

『そっ……!! そんな事……ないですよお……？ 適正距離ですっ』

「そうですか？」

『そ……そうですよ……ええ……そうです……』

「……ま……まあ、俺は良いですけど……なんか、物理的に距離を取られてる感じが露骨にして、なんか寂しいんですが……」

あ、うん……直感だけど、露骨に避けられてないか、俺。

『寂し……ま……え……そうです……か？ な……なら……』  
……………。

あ、なんか数歩だけ、トテトテと、近づいてくれた……。

なんか掌を前で合わせて下向いているので、顔は分らんが……目を合わせてくれそうにないな……こりや。

今の数歩は、妥協できる距離って事か？ ……まだ遠いなあ……今回様子が、なんか変だぞ？

『ちよつと！ 無視しないでっ!!』

転んだ状態で、そのまま座り込んでいる姦しい駄女神様からクレーム。

「……お前は何時もと変わらん……はあ……何時までも地べたに座ってるなよ……」

『起こしてっ！ アンタが転ばせたんだから、責任取って!! 起こさないよっ!! ほら早くっ!』

「…はいはい。まったく…ほら、手を寄越せ…」

『そこは素直に手伝うんですね…』

座り込んだまま両手を広げ、持ち上げるアピールをする青いの。またビービー泣かれても面倒くさいので、さっさとその手を引っ張り上げようと此方も手を出してやった。

『……………』

「…? どうした、駄女神」

駄女神の手首を掴み、そのまま引っ張り上げようとする、その掴んだ俺の手の腕首を駄女神が掴む。

しかし、ソコまでで…変に踏ん張る様に動かない。ただ…なんか知らんが、クスクスと笑い始めた。

はあ…今度は何だ…まったく。

『射程距離…油断したわね…』

「あ? なんだって?」

あ、余ったもう一つの手が、先ほどの炎に包まれ…

『ゴットオツ!! ブロオオオオオ!! あっぱーV e r!!』

「おまつ——」

…。

『…ふっ…ふふっ…』

『』

『ひゃっは——!!! すっきりしたああ!!!』

『』

『ど——よ、エリスツ!! してやったわっ!! 自ら顎を差し出すなんて、隆史も少しは殊勝になったんじゃないっ!?!』

『』

『 オンナっ隆史さんの事ですから？ んなに効いちゃいないと思うけど……これで少しは……って、どうしたのよエリス 』

『 …… 』  
『 なによ……指刺さないですよ 』

『 …… た……隆史さんっ……がっ…… 』

『 ああん？ 隆史がなによ……って、そうそう！ 隆史もいつまでも黙ってないで、悔しそうな…… 』

『 …… 』

『 …… 』

『 ね……ねえ、エリス……隆史の……頭……無いんですけどおお…… 』

『 …… 』

『 それでも二本足で、しっかり立ってるんですけどおお!!?? 』

『 なっ……何やってるんですかっ!! この世界、魂だけの世界なんですから、彼にも効果あるに決まってるじゃないですかっ!! 』

『 さっ……最初に言いなさいよ!! というか、止めなさいよっ!! 隆史、アンデットみたくなっちゃってるじゃないっ!! 』

『 基本中の基本ですよっ!! 冗談だと思いうに決まってるじゃないですかっ!! 』

『 …… 』

『 …… 』

『 ……リ……リザレクション……で……元に戻るかしら…… 』

『 いえ……見た目だけ、霧散してしまっただけだと思いますので……時間が経てば、何もしなくても元に戻ると思いますが…… 』

『 …… 』

『 …… 』

『 ぶれっしんぐう! 』

『 つっ!?! 』



『……………』

「……………」

『 ……あの…隆史…？ 隆史さん？ お…怒ってる？ 』

「出会い頭にいきなり頭フツ飛ばされて、怒らない奴がいるなら連れて来い」

『 ……………… 』

「……………」

『 れ…歴史上のどんな偉人だって、塩と砂糖を間違える位の、簡単なミスくらい犯すわっ！ それと同じよお！ 』

「……………」

『 どんな女神だって…そうっ！ 姿色端麗！ びもくしゅ…しゅ…なんだったかしら？ …とっ…兎に角っ！！ 私くらい優秀な女神だって、失敗くらいするわっ！ 』

「…眉目秀麗」

『 そっ…そうよ、それっ！！ だからそうっ！ 仕方がない！ これは仕方がない事なのよお！！ 』

「……………」

『 …… 』

「…アクア、一つ、良い事教えてやる」

『 このタイミングで、普通に名前呼んだ!? こわっ！ 怖いんですけどっ!?! 』

「眉目秀麗は男性に使う言葉だ」

『 ふいたいっ！ ふいたいっ！ ふいたいっ！！ 頬をふいつふあらな…吊り上げないれっ!!!』

「……………最後になんか言いた事あるか？」

『 ふおめんなさいっ！ ふおめんなさいっ！！ ふいたいっふいたいつふいたいっ!! のふいるっ!! ふおおが、のふいちやうっ!!!』

『 ひゃんっ!! 』

『 それでも、普通に許してあげるのですね… 』

「はっ…なんかもう…慣れました…一々本気で怒ってたら…こっちの

世界の俺の胃も死にそうですので…」

『あはは…』

『うう…お尻痛い…ブレッシングの意味なかった…』

『十分あったと思いますけど…ちゃんと許してもらえたでしょう？  
よかったじゃないですか、十分幸運値が上がったと思いますよ？  
』

『ほっぺた掴まれて、身体事持ち上げられた拳句、急に離され落っこ  
とされてっ!! 良い訳ないでしょっ!! 千切れるかと思っただわよっ  
!!』

「…まだ足りんか」

『いいっ!! もういいですっ!! お腹いっぱいですっ!!』

『…先輩』

「しかし…焦った…。いきなり視界が真っ暗になったし…まさか頭無  
くなつてたと思ひもしなかった…」

『ま…ま…はい』

「あ、エリス様…ようやく何時も距離に来てくれた…」

『ま…ま…安全かなあ…って』

「安全？」

『…』

『…』

「では、駄女神」

『なによっ!! 変態っ!!』

「…アクア」

『あ、ごめんなさい。…な…なんでしょう』

『先輩…』

「はあ…理由を聞こうか」

『は？ 何がよ』

「なんで俺は、いきなりお前に頭消し飛ばされなきゃならんかったか  
…だ」

『なんでっ!! なんですすって!? よ…よくもまあ…いけしやあ  
しやあと…』

「はっ！」

『 あはは…は… 』

『 元はといえば、アンタがスキル使って、好き放題しまくってるのが原因じゃないのよっ!! 』

『 ……なに? 』

『 う…うう… 』

『 この神聖なる女神様に? 不埒な欲望を持たないのは、良しとしましょう。そこは? まあ? 褒めたてあげるわ!! 』

『 …… 』

『 でもなにつ?! 勃たないってつなによっ!! 女性にある意味、一番言っちゃいけない事言ったのよアンタはああ!! そんなにパッド神の方が良いか、この背教者めええ!!! 』

『 先輩っ!?! 』

『 いや、たたないって…何が? 』

『 チ〇コよっ!! 』

『 …… 』

『 …お前…一応、女神だろうが… 』

『 いい!? 傷つけたのっ! アンタの言葉は少なからず、私の女としての部分をガッツ…つりと傷つけたの! よりにもよって偽乳の方が良いってどういう事!?! 目も頭も腐ってるとは思ったけど、ソコまでとは思わなかったっ!! 』

『 ……(…この… 』

『 ……えー…と 』

『 ほら謝って!! 私の繊細な心を傷つけた事を謝ってっ!! 両手付けて額を地面で擦り下ろしながら謝ってっ!! 謝りなさいよっ!! 』

『 …… 』

『 …… 』

『 はあ…はあ… 』

『 余程悔しかったんですね… 』

『 悔しくないっ!! 大体! スキル使って影響下にある癖に、私にだけ勃たないって、脳内に問題があるかもって、心配してるのよっ!! 』

悔しくないっ!! 悔しくないからっ!!」

『 あ：はい。そうですね 』

『 優しい笑顔すんなああ!!! 』

「……………あのな、駄女神」

『 なによっ!! この変態っ!! ふいたいつふいたいつふいたいつ!! 』

「まず最初にな?」

『 ふいたいつふいたいつふいたいつ!! 』

「スキルって…なに?」

『 ふえ? 』

『 え? 』

「お前が別世界線で、俺に強引に与えた転生特典ってやつか?」

『 …… 』

『 …… 』

『 …… 』

『 …… 』

「はあ……………もういい…その沈黙で理解した。…疲労しか感じねえ…」

『 ……ごめんエリス…間違えちゃった 』

『 先輩… 』

『 あつつるえく…でも確かに、うまくいったと思ったのに 』

『 何故でしょう…今回の結果に、ひどく安心してしまいました… 』

「まあ…別世界線とやらの俺ん事は、あまり聞かない方が良いとは思  
う。思うが…」

『 そっ! そうねっ!! それはそうよっ!! 』

『 そうですっ!! 間違いではありませんっ!! 』

「お前に勃たないってのは、同意見だ」



『……………』

『……………』

「こ…このっ…じよ…じよ——とーじゃないのっ!! じょうとう  
ですうう!!」

「おう? どうした、いきなり胸突き出して」

『先輩っ!?!』

『どうよ、この胸っ!! どごぞのパッド神と…格差って言葉を如実に表す、この胸っ!! こんな間近で見ても、まだそんな事言うかああ!!』

『……………』

『……………いい加減、怒りますよ』

『なによ、黙っちゃって!! …あ、そくくよねえ…我慢してただけなのよね! アンタみたいな変態が、私に対しての劣情を素直になんか…』

「…いや、しほさんなら兎も角、お前じゃな…」

『……………』

『……………先輩』

「突き出されたくらいじゃ…駄女神?」

『……………』

『……………』

『か…か…』

『か?』

『帰れよおお!! アンタ、もう帰りなさいよおお!!』

「…呼び出しておいて、いきなり帰れは無いだろ…」

『帰ってっ!! 帰りなさいよっ!! 二度と来るなあああ!!!』

『お前な…っっ!?!』

『あの…先輩、それはちよつと…』

『うっさいわねっ!!! どうせ!? 隆史なんてほつといっても! こつちの…ええ』

『隆史さんっ!?!』

「……」

「……」

「……」

「あの…隆史？　なんか、アンタ面白い事になってるわよ…ちよつと流石に笑えないんですけど…」

「ノイズ…。隆史さんの魂…その輪郭がぶれ始めた…まさかつ！」

「……」

「えつと…エリス。これってあれ？　私、ひよつとして本当は成功してた？　アツチの隆史（性獣）の反応が、もうすつつごいんですけど！」

「どつ…どうしましょうっ！　私、隠れた方が良いですか!?　あれ…先輩…何処に行こうとしているんですか…」

「え？　うん、別に？　お家に帰ろうとしているだけよ？」

「なに、普通に逃げようとしているんですかつ!!　魂の世界線が切り替わるんですよ!!?　露骨にあつちの隆史さんと、魂が入れ替わるのが分かるじゃないですかっ!!」

「うふふく大丈夫！　大丈夫よ。エリス、良い？」

「…なんですか。何が大丈夫なんですかつ!!」

「記憶を見た限り、アンタちゃんと服着てたしいく特段、グツチャグチャにされてた訳じゃないの」

「え……？」

「そうっ！　そうなのよっ！　アンタはただ…神座に座っていただけえ」

「そ…そうなんですか？」

「だから、私なんていなくても大丈夫！　…ただ」

「ただ!?　やっぱり何か、あるんじゃないですかっ!!」

「…アンタの…目の淫紋が気になるのよねえ。…ほら、西住みほさん達のもって、まだ不完全だから、ハートマークにしか見えないでしょっ…」

「…そのセリフがすでに怖いんですが…私の目に何が映ってるんで

すかつ!？」

『いや…エリス…アンタのはガッツリ、しつかり、完全に……発現してんのよ』

『……』

『椅子に座ってただけなのに、不思議よね! アハハ』

『わっ…笑いごとじゃないですよっ!! えっ!? えっ!!』

『まあ…後は…』

『後!? あるじゃないですかっ! まだ何かあるじゃにやいですかああ!!』

『神座に座ってるアンタ…』

『な…なんですか』

『明後日の方向見て、ビクンビクン体痙攣させながら、体中の体液撒き散らしてたわ』

『』

『とてもじゃないけど、女神の見た目とは、程遠かったわ。でも大丈夫っ! 貴女幸せそうだったから!』

『』

『じゃ! 私そろそろ行くわね♪』

『…はっ! にっ! 逃げないで下さいよっ!! こ…怖すぎますっ!! いてくださいっ! いてくださいよっ!!』

『え? 嫌よ。あの隆史さん、私も怖いもの』

『……』

『す…少しは、本音を隠してくださいよっ!!』

『でもほら、大丈夫よ! 本質はアレ、隆史だから。私には起たないみたいだし用はないでしょ』

『逃がしませんっ!! 絶対に逃がしません!! 拘束魔法使つても、此処にいて貰います!!!』

『離して!! 離しなさいよっ!! 私関係ないからっ!! 可愛い信者たちなら兎も角、女神なら自分のしでかした事の責任取りなさいよっ

!!』

『先輩がそれを言いますかっ!? それに最初と言ってる事違うじやないですかっ!!』

『ならっ! あの隆史のその気を逸らす、良い言葉を教えて上げるわ!! それで勘弁して!!』

『言葉? …なんですか!? それで、なんとかなるんですか!』

『そうそう。そうよー! あの性獣の邪な劣情を押さえる、魔法の言葉よお?』

『なんですかっ!? なんですかっ!? 教えてください!! 教えてください!! 教えてください!!』

『えつとねえく…』

『エリスの胸はパッド入り』

『……………』

『はい、貴女も続けて言ってみなさい? エリスの胸は…』先輩っ

!!!』

『なにを、私に言わせようとしているんですか!!』

『大丈夫っ! ええ、これでもう大丈夫よ! あの巨乳好きな変態には、効果覿面だと思うの!!』

『…………絶対逃がしません…絶対逃がしませんっ!!! 死なば諸共ですっ!!』

『嫌ッ!! 離しなさいよっ!! これでもう良いでしょっ!! アンタ本人の口から真実を白状なさいっ! そうすればアレも正気になるわよ、この嘘付き女神っ!!』

『やっぱり、起たないって言われた事、気にしてますよね!? 気にし

「てますよね!?!」

『気にしてないわよっ!!!』

「……二人とも何してんだよ」

『ひいっ!?!』

『ひゃあ!?!』

「…人の顔見て…悲鳴は酷くないか?」

『なっ…っ! 入れ替わっちゃったじゃないのっ!! エリスッ!』

「アンタの事なんだから、私を巻き込まないでっ!! 後でアフターケア位はしてあげるからっ!」

『あ………う……』

『だから……。あれ? え……えりす……? ちよつと……』

「…エリス様?」

『  
』



よくわからなくナツテキタ。

…何をどうしていいか、解らない。

良かれと思つての行動が、別の関係を生み…いや、壊した…という

のが正解なのかもしれない。

みほの考え方も、徐々にオカシクなつていき、その流れていく歪んだ関係に拍車をかける。

スキル…というのにも関係しているのだろうか、実際にその現場…と  
いうか、進行形の状況になると、どうにも悪ノリというか、また流されるというか…。

…誘導されるように…とでも言うのか…一つの感覚…想いともいうのか？ ただ彼女達が一番喜び、新たな感覚を呼び覚ます事に心血を注ぐ様に思考が傾く。

「おっ…っ…おっ…う…んんん？…っっ!!♡」

身体を跳ね上がらせ、両手には下に敷かっていたシートが握られる。

解りやすく絶頂を迎えたその体は、ビクビクと大きく波を打ち、服を着ているというに、ハッキリと大きな乳房がブルブルと揺れている。

その薄いピンク色の服装…揺れる乳房が零れ出さんと暴れている様にも見えるから…不思議だ。

「かつ…はっ…はっ…はっ…はっ♡」

乱れた呼吸を整えようと、また途切れ途切れの息を繰り返す。またそれに合わせる様に、胸が…小さく揺れる。

中には下着は付けていないのだろうが、胸のボリュウム…柔らかさ…それが、その服の上からでも解ってしまう。

そんな物を見ていれば、すぐに触りたくなるのが自然だろう。優しく…ゆつくりと触った瞬間揉み解すと、手に広がる柔らかな感触に、果てたばかりの陰茎が再起動をしまいそうになる程だ。

といつても、若い身体は回復力も早いのだろう…すでに軽く勃起し始めているが。

「あっ…はあ…あ…んっ！」

腰を引き…ズルリと、陰茎を抜き出すと…ブビツとか…ちよつと下品な音を出しながら、大量の白濁汁が彼女の膣内から溢れ出した。

ドロリと、肌…尻の割れ目を伝って、下のシートを汚す。思わず見

入ってしまうその光景に、また一瞬我を見失いそうになってしまう。身体を起こし、背筋を伸ばすとその淫靡な全体像を見下ろす。服は乱れ真つ白な太股が伸び：動く度に揺れる胸へと、また視線が泳いでしまう。

熱い息を何度も何度も、小さく吐き出す彼女の：その潤んだ瞳と目が合った。

「た…隆史君…きよ…はっ…はっ…。今日は…凄かったね…」

……。

あ、はい。

「…も…申し訳ございませんでした…」

「変な声…でちゃった…うう…」

今回…抜かすの6発…。一々動く度にいやらしいその体が目に入ると…すぐにまたスイッチが入る。…と言った具合で何度もループしてしまいました。

スキルのお陰で妊する事は無いのだけど…彼女からすればそれは知らぬ事。それでも何度も何度も中へと出す事をせがむので…ノゾムノナラバと、何回も吐き出した。

だって…しかたがないと思うんだ。…今回は、ずるいんだよ…。

…沙織さん。

激しく動いた為に、ズレてしまったメガネをまた掛け直し、体を起こそうとするのだけど、身体がまだ回復していないのか、うまく動けないでいる。

決して露出度が多い訳ではない。…ないが…マゴマゴと動く、その体の線を浮かび上がらせる服装がまた…なんというか…。

「…すごい…また大きくなった…」

「大変…申し訳ない…です」

「わ…私としては、嬉しいんだけど…ホントに好きなんだねえ…コスプレ」

「じ…自重します」

あ、はい。

前回の女子同士で出掛けたお買い物…まあ、まほちゃんに關係バレた時の日ですが…どうにも…衣装を買いにも行っていたらしい。

俺を挑発…とでも言うのか、その気にさせやすくしたい恰好というか、衣装をですな。

「男の子って…弱いよね…この恰好…ソレこそ引くくらいに…」

「……………ナニモイエマセン」

はいピンクの…旧型…そう。

ナース服。

沙織さんのナース姿！

…。

パーティー用グッズで、簡易的なコスプレ衣装なので作りは非常にチープですが、雰囲気を味合う分には申し分ないと思うのです。

グジグジ考え込んでいた俺ですが、そんな姿を見せられたら理性なんて、即座に溶解した訳ですよ！

「……………」

「あ、はい。ゴメンナサイ。声出てましたね…そのジト目やめて下さい…すいません」

「…まあ…わ…私としては、複雑だけどね…隆史君の理性を溶解させることが出来た事実は、成功解いて良いと思う訳です」

「俺の口調を真似しないで下さい…」

……………っ！

変に和やかな雰囲気になり始めた直後…また違和感を感じた…。

少し…刺すような…これは…。

「隆史君？」

これは…視線…か？

何故か強烈に見られているとう感覚に陥る。

…即座にスキルを利用。

スキル「サーチ」

あっち目的で、仕掛けられているならコレも効果が見込めるだろう



…と思ったが、正解だった。

部屋中の検索はできたが、特に変な機器類…盗聴とか盗撮の疑いは無かった。

…まあ、別の変な事は判明したけど…。

「あの…隆史君？ どうかした？」

急に黙ってしまった俺に、少し心配した声を掛けてくれた。

「…いや、なんでもない。今…何時だろうって考えていただけ」

「あー…うん。そうだね…結局…い…一日中だったもんね…」

顔を真っ赤にして、言ってくれたそのセリフが、また色々な部分を刺激してくれますが…沙織さんが言った通り…流石にもう、時間がないだろう。

沙織さんの部屋に来てから、もう何時間経ったか、時計を見ないと解らない程にいるしな。いい加減、家に戻らないと…みほの機嫌がまた少し悪くなりそうだ…。

許されているといっても、それはソレでなんか嫌らしい…。なんにも言えないよね…。

しかし…この視線…。

なんの目的か分からんけど…一応、対策はしておこうか。あっち目的ならば、スキルが反応してくれそうだ。

えっと…ただ余り黙ってしまうと、また沙織さんを不安にさせてしまいそうだったので、取り合えず会話を続けて誤魔化しておこう。

「んっ…？ そういえば、その衣装って…全員買ったんですか？」

「……………」

「沙織さん？」

あ…なんか不機嫌になった…。あんこうチーム全員で買い物に出かけたと言うので、当然の疑問だと思う訳ですが…。

「まあーねえ…皆、バラバラの物だけど、全員買ったよお？ 明日みほりんのお姉さんに見せる…アレの補修用品と一緒に買いました。

……対…隆史君用に」

「……………そ…そっすか」

「楽しみだねえ？」

「……そ…そっすね」

身体を起こし、髪を整えながら頬を膨らませましたね…。

あ、こりやまた別の話題で誤魔化した方が良いか？

「と…と…ところで沙織さん…？」

「……………なに？」

わー…ご機嫌斜め…。

コスプレ衣装を脱ぎ始めたのは、それはそれで良いのですが…なんか…ぶっきらぼう…。

「ご…この部屋の壁って、結構薄い？」

「壁？ えっと…そんな事はないと思うけど…？ まあ…たまに隣の部屋のテレビの音聞こえてくるくらいかな？」

スキル「サーチ」で分かっていたが、誤魔化す為に敢えて聞いてみました…。

この部屋の壁の厚みは、いたって普通…。テレビも余程大音量にしない限り聞こえはしないと思う…思うが…。

「隣人って…男性だったよね？」

「え…あ、うん…確か…」

「多分…となりに沙織さんのエロい声…丸聞こえだったと思う」「つつ!？」

おー…顔真っ赤になったな…。

【 】

…。

…色々便利なスキルとやらで、どうとでもできるけど……というか、最近…変に冷たい感覚が走る様になったな…。なんだろうか…。

ま…まあいいや…。

「…えっ…あっ…えっ!？」

「…聞き耳立てていたりしたら…どうしようか…」

「 」

おー…おー…真っ赤になっちゃって…。

「あ…あの…隆史君？ …なんで悪い顔したの？」

あ……。

「えつと…なんで…あの…今壁の話したよね…なんで、壁に………んんあつっ!!」

うん、またみほに怒られるなあ…。

◇

スキル「逆探知」

まあ…一応掛けておいたスキル…その「逆探知」にもう一つ、スキル「追隨」。

視線の主を発見したら、その場に移動できるってスキルを生み出しておいた。まあ…コレもアツチ方面に少しでも関与していなかったら発動しませんけどね。

あの行為の最中の中に感じた視線だったから、発動条件を満たしていた…って事だろう。

『……………』

そして、やってきたその場所。

…地面が薄く光るだけの、なにも無い…どこまでも地面だけが続く広々とした空間。

その真っ黒い空間に、俺は気が付いたら立っていた。

ただ一つあるとすれば、真っ白い…そう、白一色の椅子のみ。

その椅子の周りには、いくつもの…37インチ程の大きさの映像が、浮かびあがっている。なんといか…テレビの画面のみ浮かび上がっているとも言えるだろうか。

取り合えず、また…変にマニアックなサイズだな…。テレビサイ

ズとしてはもう生産されていませんよね…。

『……………ゴクツ』

…。

何してんだろう…。

また、あの駄女神が何かしらしてると思ったのだけど…意外や意外…別人でした。

というか…何してん…この女神様。なんで喉を鳴らしてるんだろう…。

椅子の横に立つも、俺に気が付く事もなく…その映像を前屈みになつて眺めていた。

『……………ワー…』

いや、わー…つて…。耳まで真っ赤になってますやん。

『あっ!! あっ!! あっ!!』

…。

AVでも見てるのか…とも思う程、大きい喘ぎ声が、その映像から聞こえて来た…。

どうにも一人称視点…ともいうのか、男の目線での映像だった…。

動く体と一緒に、髪を振り乱し…壁に手を付きながら、自ら腰を振り続ける女性…。

まあ…男視点なんで、背中しか見えないんですけどね…。

『…声…完全に聞こえちゃってるよね…』

『はっ!! すごっ!! あっ!! あっ!!』

『あの…流石に止めますか?』

『いいっ! もう何でもいいからあ!! あ?っ! あ?っ! 深いいいっ!!』

パンパンと、身体を物凄い勢いで…ただ快感を求めるだけの動きをする女性。

…というか…。

「なにしてんすか、エリス様」

『ひやああああああ  
!!!!!!』

…悲鳴だよ、悲鳴…。

女神様が「ひやああ」って…どうなんでしょうか？

即座に立ち上がり…手をバタバタさせて、霧散させる様に映像をかき消した…。

まあ…アレだ…彼女が見ていたのは、先ほどまで致した、俺と沙織さんとの行為の映像…。

ソレを食い入る様に見ていた…俺の最後の良心のエリス様…。

まあ…あの状態で「催淫」使用したらどうなるかって試したので、一番の乱れ方してましたけどね…。

うん…やつぱり後ろからすると、胸が見えないのが寂しかったね。

…はあ…。

その場に座り込んでしまい、はあはあと息を思いつきり乱している女神様…。

取り合えず落ち着くまで待っている、ある程度呼吸を整え終えた所で、スツ…と立ち上がった…そして。

『…こんには隆史さん。ノンナさん達の救済処置以来でしょうか？』

ノンナさん…？

何を言っているんだろう…まあ…いいや。

「取り繕っても遅いです…いやだから…何してんすか…」

俺の言葉に、真つ赤な顔が更に真つ赤になりましたね…。

そりやまあ…やってたこと、完全にただの覗きだったよな…。

『なっ…なんで、この神域にいるんですかっ!? 呼んでませんよねっ!?』

涙目になってるけど…色々と端折って誤魔化したな…。

「…いや…スキル使っておいたら、ここに辿り着いたんですけど…」

『…え…スキル? …スキルっ!?!?』

「いやまあ…なんつーか…」

スキルって言葉に、顔を真っ赤な色から、真っ青にされましたが……まあ……視線を感じた件から簡単に説明した。

取り合えず、話を進める為に今の俺の状況を説明した方が楽だろうよ。

ただ説明をしている最中が、おかしかった。真っ青にされた……と言ったが、本当にその通りで、スキルの説明から徐々に青から白にへと変わっていく。

「というわけで……ここに至ったって訳ですが……どうしました？」

『ひえっ!! なんでもっ!!』

声裏返して……なんか、すげえ距離を取られたんですけど……地味に気になるんですけど……?

両手で胸元押さえて……めちやくちや涙目なのが、若干可愛い。

……そして訪れる……静寂……

『ス……スキルだけで……この場所に? あ……在り得ません……』

「……」

『先輩と話してあった、あのスキル……? でも……それが此処まで影響する事なんでしょうか……?』

「……」

『何かに引き寄せられた……としか考えられませんが……そうすると何が原因で……』

「……あの……」

なんかブツブツ言っているな……

後、俺と目が合うと、何かを話そうとするのは分かるのだけど、途中で言葉が止まるというか、なんというか……

話だし辛そうって感じた。まあ……ここは俺から話しかけた方がいいか?

……

あれ……ちよっとおかしい事に気が付いた。

あの駄女神も、姿は知らんが……知ってる……。見た目が在り在りと浮かぶ……

このエリス様も、見た事も話した事も今までなかったよな…でも…何度も会って、何度も話した感覚に陥る。

実際、さつきも名前呼んだよな…。

『ほ…他の世界線の貴方は、何度か此処へと来ておりますので…認知が共通したのだと思いますよ？ あ…ある意味で最悪ですが…』  
また一人言が、口に出てたのか…。エリス様が俺の疑問に答えてくれた。

世界線？ 認知？ よくわからん言葉が出たが…まあいいや。俺は彼女達、女神を知っている…また話が面倒くさくなりそうだから、それで今は納得しよう。

だから、まあ…本題に移ろうかね。

「…で？」

『……………』

「だから貴女、何してんすか…ただの覗きですよありや…」

『も…申し訳ありません…はい、面目次第もございませぬ…』

…。

だから…沙織さんとの同じくして、俺の口調を真似するのやめて…。

はあ…まあ、訳が分からんスキルを獲得したというので、監視の意味もあるのだろうけど…覗きは…ちよつと…。

余り追及するのもアレですので？ まあ…こちら辺で手打ちにしておくかね…あの真っ赤い顔は見ていたくはあるけど…。

「はあ…駄女神といい…女神ってのは、暇なんですか？ まったく…」

『……………っ！』

…。

おい…。

適当に嘆きでも入れて、終わらそうとしたら、暇って言葉に体が跳ねたぞ…。

まさか…本当にただ暇って理由か？

まさか…まさかね…。

「……………」

脳内…検索…  
…。

あつた…。

「これでいいか…えっと…スキル…」

『つつ!?!』

…スキル【復元】

スキルを発動させる…と、解りやすく手を振ってみた。

要は、先ほどまで此処であつた状態を復元…再生するスキル。

…コレもアレに関係しなければ、発動しないのだけど…。

あ…。

手を振つた直後、その腕の軌道の後ろに…先ほどまでソコにあつたのだろう…。エリス様が見ていたと思われる映像が…浮かび上がった。

『ちよつ!! ちよつと待ってくださいっ!!』

…マジカヨ。

沙織さんとの行為の他に…なんだろうか…めちやくちや出て来たんですけど…。

光る長方形の映像が、いくつも浮かび…並んだ…。

『』

俺の体に縫りつくように…腕を引っ張るエリス様だけ…もう遅い…。

それこそ真つ暗な空間に、光を灯すように…はつきりと映像が復元された。

…というか…な…。なに? この数…。

『こつ…こんなのばかりじゃありませんっ!! 何故、この…こんな所ばつかり、選別されてるんですかっ?! ひゃあ!』

…浮かび上がった映像に向かい、また腕をパタパタさせながら、ピョンピョン跳ねてる…。

まあ…なんだ。幾つ物致している映像だけが選別されて映し出されているからだろうね。アツチ系にしか効力がないスキルですから、



それらばかり選ばれたんだろうけど…。

聞こえる、その映像からの音声で、どんな…いや、誰との…というのが、ハッキリと解った…。

……。

「……俺に……この記憶は無い」

『えつと……あの……隆史さん？』

酷く……そう、自分でも驚く程に重い声が、喉から通った…。

「これは、俺の未来って奴ですか？」

『あつ……えつと……』

凶星……だったのだろうか。一瞬、エリス様の目が泳いだように見えたが……すぐに白状してくれた…。

『はい……その……貴方の世界線での未来は……その……別の世界線の貴方の救済処置に関して、とてもヒントになるんです……』

「救済……ね。さつきも言っていましたね……」

まあ……それはもう……どうでもいい。

映像を眺めていると、その中での俺はスキルでしか可能しえない状態が、いくつもいくつも……何度でも……映っている。

成程……世界線とやらも、何となく理解ができる。……要はこの映像類は、スキルを使いまくった俺の未来の姿って事か…。

気が付けば、膝は折れ……その場に座り込んでしまっていた。

そう……最悪だ…。

その一言しか出てこない。

あのぶっ壊れた、みほ達との関係が続け……最悪……こうなるって事だろうな。

俺の相手……は、複数人……かなりの女性の……ああ、見知った女性達だった。

『タカシツ！……ちゃんと聞いているのっ!?!』

……ケイさん…。

いや……正直、気持ち的に、突っ込む気力がないのに突っ込まわらず終

えない映像…。

なんで俺、仁王立ちのケイさんの前で、全裸で正座してんだろ…。

『正直、タカシの気持ちは嬉しい…本当に嬉しいの…でも…でもねっ!!』

こういった事は、将来の伴侶とするべきだと思うのっ!!』

…あ、やっぱり彼女は見た目と反して、身持ちが硬い派だ…がつつり日本語で説教食らってる俺がいた…。

非常に見ている辛い状況だよな…うん。なぜこの状況が作り上げられたか分からんが…数分後には…この映像は変わった。

目には見覚えの有る、シヨツキングピンク…とでも言うような、ド派手な怪しい光が移り…ベッドの上で、自ら腰を打ち付けている彼女の姿に変わっていた。

聞いた事もない、彼女の口から発せられる甘ったるい声が耳に刺さる。

『た…隆史殿？　ぬ…申し訳ないが…前回と趣向が違う気がするのだが…』

…し…しずか…。

春を買う。…その本来の行動。特段、金銭のやり取りは出ていなかったの…正確には違うと思う。

思うが…ありや何処だ…？　ド派手で、また怪しい薄い光がその薄暗い室内の壁を照らしている。ありや…ラブホ…か？

まだ見た事が無い、彼女の制服姿をこんな所で拝めるとは、思わなかったな…。

女子高生とは思えぬ、喋り方や顔つき…凜とした意志の固そうな表情なんて、見えやしねえ…。

数分後には、目にまたあの禍々しい光…。

だらしなく口を開き…舌を出し、俺の口を吸い始める。形がよく…凄まじいポリュームの胸を男の為に使い…ヨガリ…また耳に纏わりつくかの様な声を上げる。

スキルをあの場でも使っているのだろうか、痛みを快楽にでも変換してんだらうよ。尻まで使い、ただただ…。

頭がオカシクナリソウだ。

壊れた…と、自分で自覚していたつもりだが、まだ…甘かった。  
俺自身、客観的に見ると、ここまで酷いか…。

ただ彼女達の願望をかなえる…とだけ思考が傾いていたが、その結果が…

「…これか…」

オペ：子…と、ローズヒップが、陰茎を二人掛かり舐め取り合う様に、むしゃぶりついている。

オペ子は…正直、解らんでもないんだが…ローズヒップまでつてのが…。

はっ…なんか知らんが、アールグレイさんまでいやがる…し…。

そんなに接点なんぞ、有りはしなかったのに…気が付いたら複数の俺に囲まれてやがる。

後は…ミカ…エ…エリカ…本当に手当たり次第だな。エクレールさんも居やがる…。

長時間、見ているハズでも、凝視しているハズでもないのに、妙にスラスラとその後展開も何もかもが頭に入ってくる。

その内、知らない女性も出てくる…。妙に黒髪が綺麗な女性…茶色と黄色のスカート…あれはパンツアージュジャケットか？

後、あの制服…は、乙女の戦車道チョコで見たな…。BC学園…だったか？

金髪の女の子のケツひっ叩いてやがるな…。それに変に喜んでる様に歓喜にも似た悲鳴を上げてる髪が長く…少し背の低い女性。

例外なく…皆、目の奥にあの光を灯していやがる…。

…。

『あの…隆史さん…？』

…。

…。

最初は、慣れない映像…徐々に内容が過激になって行き、何もの俺

により、嘆願し…それでも嬉しそうな顔をしていた。  
完全に狂ってる。

人外の力…スキルと言う名のふざけたモノのせいで…いや…俺の  
せいで…。

極めつけが…アレだ…。

『お兄ちゃんっ♡ お兄ちゃんっ♡ お兄ちゃんっ♡』

「……」

『んっ…ちゅっ…気持ちいい？ 気持ちいい？』

『どうして欲しい？ なんでも言って？ また愛里寿を使ってくれる？  
？ また愛里寿を愛してくれる？ また…また…』

見た事のない制服姿の愛里寿…。大学の何か…だろうか。

タイツスカートなんて履き…その服装をはだけながら…俺の上に  
跨っている。

それが何処か…大人びて見える…。

見え…み…。

はっっ…あ…あああ…あああああああ！！

「なにが、大人びて見えるだっ!!!」

『ひゃっ!?!』

まだ年派のいかない子供相手に…いやっ!! 愛里寿に…何を俺は  
教え込んだっ!?!?

俺の首筋を舐め…体を舐め…胸を舐める。陰茎を片手で扱きなが  
ら、執拗に口を吸っている見慣れた…くっそっ!!

小さな身体を使い、何をさせ…してんだよっ俺はっ!! 少女？ 何

が少女だっ!! あの愛里寿の顔は、完全に女の顔だっ!!

あの歳の子に…あんな顔をさせて…なんなんだっ!! 恐怖を通り

越して…気持ち悪いわっ!!!

「はあ…はあ…」

無意識にでも手を握り絞めてしまう。…このまま、つい数時間前の俺を殴り殺してやりたい…。

この狂った映像…が…俺に正気を取り戻させた気がする…。

皮肉にもなりやしない…完全に自業自得だろう…が…だけどっ!!

…。

……。



…お…思い出してきました…。

そうですねよ…そうですね…。

あの世界線の隆史さん呼び出したか…それは失敗でもなんでもなかった…。

多分…ノンナさん達の救済処置の後…こちらの隆史さんは、此処に来た…だから…アノ隆史さんなら…安全…だったから…。

同じ魂ならば、この…世界を共有した時点で…彼でも…記憶は…取り戻せたんです…。

ですから…言える…。

それは、彼女の…アクア先輩が齎した奇跡的な失敗…だったと…言え…ると…。

あは…は…結局…失敗って言っちゃいました…ね…。

『落ち着きましたか?』

「…まあ…はい」

『…あくまでアレは、可能性の未来の話…ですから…』

「…スキル…消す事ってできますか?」

『……単刀直入ですね』

「正直…今はもう…それ以外の事は、あまり考える余裕がないんです

よ」

『 ……そう…ですか 』

「……」

『 結論から言うと、それは不可能なんです…。 』

「でしょうね…細かい事は兎も角、そんな事できりや、こんな事になっちゃいけませんよね…」

『 え…ええ… 』

「なにか…後は緩和する事は？ 元の俺に意識が戻れば、ここの記憶も消えるんですよ？ それで…こんな決意もそれで消えてしまう…」

『 …… 』

「…はっ…んな事もあればとづくに使用してるか…」

『 …… 』

「エリス様？」

『 私の加護を使えば…あるいは… 』

「え…あるんですか？」

『 一度は別の世界線の貴方に、この加護は邪魔だと蹴られてしまいましたけどね？ 』

「はっ…その言葉で、なんとなくわかりましたよ。転生特典とやらと、似た通ったかのチートつて奴ですか？」

『 ええ…まあ…あ、いえっ！ ち… 』

「ち？」

『 違いますっ！ 』

「違うんですか？」

『 はい…違い…ます。せ…先輩のブレッシングと同じ様な…ええ、同じような効果…です 』

「つまり？」

『 多少…ええっ！ 多少…ですっ!! 多少…ですが、貴方の運を…幸運値を人為的に…いえ、神為的に向上させます。…それが信念に反してしまったのでしょう…けど…ね… 』

「はっ…そりや…俺なら言いそうだ。多少の幸運値でも、俺なら拒否

するでしょうね…。 まあ…。今のこの俺には説得力なんぞないですけどね…」

『これなら…。その…。貴方が戻った後も…。継続しますし…。スキルという概念を、隆史さんの幸運にへと導く為に…。その…。効力を消せる…。かも…。』

「…信念…。ね。んな、大層なモノじゃねえんですけどねえ…」

『……………どう…。します？』

「んじゃ、お願いします」

『えっ!?』

「いや、え？ って…」

『てつきり断られるかと…』

「まあ…。普段の普通の状態なら、選択の余地もなく切って捨てますね…。ですけど…」

『ですけど？』

「俺以外の…。大切な部分が絡んでるなら別ですよ。信念…。でしたか？ そんなもん、俺の大切な人達に比べたら…。はっ…。どうでもいい」

『……………』

「…エリス様？」

『貴方は…。そちらの世界線でも、変わらないのですね…。即決で…。人の為に動ける人…』

「え…。他の俺の事は、知りませんけど…」

『ん…。んんっ!! ……自己犠牲も過ぎれば、自らを破滅へと導きますよっ…』

「……………なんでソレを、笑顔で言うんですか…」

『ふふっ。では…。早速ですが、すぐにでも加護を与えたいと思います』

「あ、はい…。お願い…。あ」

『どうしました？』

「いえね？ その加護を貰ったとしても、判別方法が無いなど…。戻ったら記憶無くなるでしょ？ 誰かに実験でスキル掛ける訳にもいかないですしね」

『成程…では、こうしましょう』

「はい？」

『まずは…幸運の女神…エリスの名において……%※☐εθ……』

「エリス…様？ あれ…」

『ふう…はい、これで完了です。あ、あと、こちらの…はい。この書類に名前を記入しておいてください。本来なら何かしらの物品に付与するのですが…貴方の場合、もう肉体に着けてしまえますね？』

「え…そういですか…。しかし、一瞬で済みましたね…まあ…軽い加護っていうなら、そんなもんなのか？」

『そ…そうですっ!!』

「は…はあ…まあ…良いけど…。後、サイン…ね、変な所がお役所仕事だな…」

『はあい、ご苦勞様です。これで無事に私の加護が、貴方に付与されました』

「実感無いつすけど…」

『はい…では、私にスキルを掛けて下さい』

「……………は？」

『では早速どうぞ』

「いや、はいそうですか…ってなる訳ないでしょ…」

『ふふっ。ここは私の神域です、大丈夫です。…この神域ですと、私に対しての《悪意的な攻撃》は、全て反射されるのです』

「反射？」

『加護の効力が無く、貴方が発動するスキルの効力がもしあれば反射…効力があれば、毒気が抜かれた無害なスキル効力が、私に付与される…といった具合ですね』

「それ結構、ザルでしょ、それ…」





ちな…』

「まあ…そうなんすけど…俺に反射されたとしても、湧き上がる欲の原因は、お互い解っているのです、ちゃっちゃと解いてしまえば良いかと」

『成程…では、それでいきましよう。この場所でしたら、逆に安全かもしれませんしね』

「ですから、なまじ失敗して？ エリス様にスキルが掛かって、貴女の欲を俺が知っても良いかと心配して…一応聞いたんですが…」

『欲望…ですか…』

「はい」

『ありませんよ？』

「…即答。さつきまで人の…『無いと言ったのです』」

「……」

『ナイデス♡』

「……」

「あ…はい…。まあ…確かに女神様相手なら…これが一番…やっぱり無難かな…。特に欲とは無縁そうだしな…この人」

『…？』

「んじゃ…掛けますよ？」

『はい、遠慮なくどうぞ♪』

…スキル【欲望】

……。

「…あれ？」

『どうしました？』

「あ…いえ」

『ん？』

「(発動しない…ただ、変にこう…熱というか、なんと言うか…)」  
『隆史さん？』

「あ、いえ…(ちよつと…強めに…えつと…こうか?)」  
…。  
…。

《 所有権の移行を確認 》

「なに?」

『 あの… 』

《 補足 対象へのスキル付与は 現在の能力値では不可能 》

「(…この声って確か:…)」

《 補助 スキル保有者に神威を確認 スキルと統合します 》

「ちよつ…はっ!？」

『 隆史さん? あの…先ほどから何を… 』

《 失敗 スキルにエラーが生じ…:%※ε:成 εθ 功 》

「……………」

《 スキル「――」を発動します 》



スキル「欲望」

…は、直で付与はできなかった。

その後、変な音声が脳内に響き渡って、その通りに行動してみた。  
これもエリス様のくれた加護とやらのお陰なのだろうか? ス  
ムーズに行えるように、補助…助言をしてくれる。

属性…? という、RPG特有のナンタラがドウノ言っていたが、  
頭に上手く入ってこなかった。

下準備…主にスキル「欲望」を付与させる布石として、スキル「催淫」を使用。

…女神様に効果なんぞあるのか疑問だった為、取り合えずレベルをMAXに設定…。表情が一気に変わったが、本人へ訪ねても答えてくれないので…まあ失敗だったのだろう。

しかし、頭の声が言っていた通り、次にスキル「欲望」を使用したら、あっさりとソレが掛かった。

…言っていてなんだが、頭の声とか言っていると、俺の頭がおかしくなっている様に感じるな…。

まあいい。

さて、エリス様の欲望。

…俺の意識が眩暈の様に一瞬飛んで、我を取り戻したら彼女は何時もの椅子へと座っていた。

ただ、その向かいに立つ俺の手首を少し苦しそうに息を切らしている。

…ああそうだ、彼女の欲望だったな。

女神様の欲望を理解するには、人間の俺には無理だ。大体の漠然とした色…の様にしか把握できない。

ただ…強烈に憧れ…の様なモノを感じた。

憧れ…その対象が、今まで見ていた未来の映像…。それが彼女の憧れだった。

性的欲求しか出てこないスキルなので、そう言う事なんだろうか？

これが…彼女の欲望…？

その彼女の欲望とやらが分かると、やはり「催淫」の効果はなかったんだと思った。

…。

アレ…なんで、俺…彼女にスキルなんて使ったんだろ…。

まあ…いいや。忘れる位なら、大した事じゃないだろう。

『あ…うつ？ あ…たっ…隆史…さ…』

《 神威がスキル保有者に吸収されました スキル「」付与の為

補助スキル付与を推奨》

…。

なにか知らんが、あの自動音声とやらが、やたらと親切だ…。先程から一々報告してくれる…。ただ、頭ン中で喋られるのは、やはり気持ちが悪いものだな。

…ああ…そうさそうさ。

今は、エリス様の欲望とやらの成就だった。

ああそうさ…この目の前の女神様は、少女に見えるが…やはり神様。

想像が付かない程に、長い時間を生きて来たのだろう…この真つ暗な空間で…ずっと…。

だから…憧れでもあるのだろうか…？ …見続けて来た人間の生活とやらに。

俺の映像を見ているのだから、普通…とは言いつれなけど…。しかし、あの映像に憧れを持ち、欲を膨らませるのならば…そう…叶えてやらんとな。

「」

叶えないと…かなえてヤラナイト…どうやらそれが俺の責任とやら、らしいし。

…あ。

…でも、なんでそれが分かったんだろう…。

まあ…ドウデモイイ。

さて…どうするか。

彼女は彼女で、何か身動きが取りづらいようだしな。

…。

俺を見上げる彼女は、目が潤み…唇は濡れ、自分の状態が良く分かっている様に見える。

あれだ…何度か見た…女性が…まあその気になった時の顔によく似ている。

…が、しかしだ。

俺に好意を持つてなければ…みほの許しが無ければ…と、まだどこかでそう思えるのもあるが…流石に…俺も神様に手を出そうとは思わん。例え、目の前でそう嘆願されている様に見えても…だ。

ナラバドウスル？

あちら方面の願望や欲でなければ、スキルは効力を発揮してくれないし…。

あ、ソウダ。まとめて…なら、大丈夫かもしれない。

あ、デモ。みほ達のプライバシーというのを…

「」

ま…今更か。…もう一度見る事になるくらいのなら、大丈夫だろう…というか、この人にそれらの事は今更だよな…。

全て見られている状態だろうし…な。でも、それじゃ意味が余りないか。

なら…どうすれば…ああ…そうかそうか。

…なにか…エリス様が、言っているが…ちよつと待ってください。時間があまり無いか言っていますませんでしたか？

なら、一気に掛けて…終わりにしましょうかね。

…どうせ…探した時点で、作成されるんだろ？

ああ…やつぱりあった。

『ふっ…っ!?!?』

彼女の頭を、少し撫でる様にそつと触れると、小さく肩が跳ねた。何が何だか分からない…少し涙があふれる目を此方に向けて来た。

さて…と。

スキル「接続」

これがまず必要だろう。

どうせなら臨場感が在った方がよい。視点を調整…時間は…

まあ、別の世界線の俺…とやらが前回来た時から、俺がここに来た時までで良いだろう。

話していた様子だと、そんなに時間は開いていないみたいだし、短時間ですむだろうよ。

『えっ…あう!?!?』

誰のとを見ているか知らないが、顔が一気に深紅色へと染まった。まあ：あれだ。映像にあった事を：女性側の立場へ、エリス様の意識を繋げてみた。

よくわからない力の、よくわからないVRというだけ：ただ、感触や感覚：それらも同様に感じてしまうってだけ。

彼女が見ていた数だけ、彼女が体験する：そんな具合。

こんな事、神様相手にできるものなのか？　とも思うが、どうやら彼女の加護とやらが、そのリンクをスムーズにしているみたいだった。

：自動音声が教えてくれた。

『はう!?　あつ：あれ：？　あの：なぜ：裸!?　裸なんですかつ!?』

俺の顔を見ているようでも、彼女は別の映像を見ているのだろう。椅子の背凭れへ、そのまま体重を預け：手すりを強く握り始めた。

『えっ：あのっ：んんっ!?』

更に加えて、あくまで彼女の見ているのは、映像の女性側の視点と感覚をリンクしているだけだから、接続が深まるにつれて、体が勝手に動いていると錯覚する。

今も：まあ、アレをしている所だろうなあ…。口を大きく開けて：舌を大きく動かし始めた：体には力が入っているから、大きくは動かないだろうけど…。

アレを押し出そうとしているのだろうけど：エアフェラとでも言うのか：顔も前後に動き出し始めた…。

よだれで口元を汚し：零れ落ちる。

艶めかしく舌が：その肉が動く…。

『はっ：んちゅっ：はっ：はっ：はっ…』

先程まで清純派の代表格みたい、女神様がいきなりコレですか…。

う：うん。不埒な思考はカットしよう。  
えっと…。

スキル「賢者」





…が。これは自動再生…終わったら次へ行くだけの話。

『あ…あれ？　ここ…は…あの…隆史さん…何時の間にボコさん着たんですか…？』

何してんだ、エリス様の中の俺…。

あ…そうだ。

そーいや、昨日…林田を送る時、駅前でスキルの話をしたな…。

参考にさせてもらうかな。

どうせなら…感覚的に鋭い方が…良いだろ…。

あの倍率が、どの位の感覚になるか分からないけど…まあ、女神様だし大丈夫だろ。

…今までの長い時間の事を考えれば、多少刺激的な方が良さそうだよな。むしろその方が、余計な事を考えなくて集中できるかもしれない。

んじゃ…。

『ひゃっ!?!』

スキル「対魔忍」

…だから…ネーミングセンス…。

えっと…感度3000倍へ強制変更…っと。あ、正確には性感3000倍か。

『あ…あ？ツ!?!　あ？オ？ツ!?!　ア？ツツ♡!!』

あれ…？　やべえ声した気がする…。



…。

…。

あの…この女神様…一体、いくつ映像を見ていたんでしょう…。  
この場所って、時間の感覚が余りないから、正確にはどのくらい  
経ったか分からんけど…。

『めっ…女神っ♡！ 私…はっ…快樂になん…てえあ？っっ♡!!  
』

…最初は、何かと戦っていたんですが…まあ声質が完全アレですけ  
どね…。

『ひあっっ♡!? まっでっ！ まっでくださいっ!? ちよつと…休  
ませ…んぐっお♡!! 』

喘ぐ度に、体がビクンビクンと、大きく波を打ち…長いスカートは  
いつの間にか捲れ上がっている…うん…太股が白い…。

女神も絶頂するんだね…既に何度も果てていたのか…スカートに  
は、シミが幾つか増えている。

取り合えず、捲れたスカートを元に戻し…また少し離れて向かい合  
う様に体育座りをします。

…しかし彼女の様子を見ると…何か…ちよつと様子が変に変わっ  
ていった。

『はっあゝゝっ♡ はあゝゝっ♡ んぐっ…♡ んっう？っんっ  
! 』

…初めは躊躇したかの様だったけど…今はもう、普通に喉を鳴らし  
始めた。ありや…飲まされてるなあ…誰のシーンだ？

口元はもう、よだれでベトベトになっている…舌を口から頼りだす  
ように…おつといけない…。

スキル「賢者」

定期的に自分に掛けないと、色々な意味で持て余しそうだ。

『すゝっ…ん？おっ♡!! めくれっっあ？あ？っっ♡!! 隆史さ  
…イツグツツウウ♡!! あああっ♡!! 』

だって…遂には名前を呼び始めた…。  
感度を上げているとはいえ…5回の映像…らしきので、こうなって  
しまった…。

『いっばいっ!! 隆史さんいっばいっ♡!! お？ウ？ツ!? ンブツ

！ こっちも…ングツ♥!!』

『スキツ…ソコ…スゴツ…ク…スキツ♥!! …んがつ!? ツツアツ♥!! アツ!♥』

『おっっおっっおっっ♥!! もっどっ♥! おっっ♥! おっっ♥! ひっっ…ぎあっ♥! ——っあ! またっっ♥!! いぎうゆううツツ♥!!』

……。

…。

そして…

……。

…終わったのか?

いつの間にか彼女は…女神様は、椅子の上で静かに、ぐったりとして…。

『アグツ♥♥…ア?ツ♥…アう…』

小さく喘いでいた…。

身体を仰け反らせ…だらしなく股を開きながら…座部から液体が伝い落ちる程に…盛大に出来上がっていた…。

ピクピクと身体を小刻みに震わせながら、動こうとしない…。此処からは見えないけど…どんな顔してんだろう。

そして…本当に終わったのを理解した…彼女の中から、スキル「欲望」の反応が完全消えていたのを感じたから…。

いやあ…スキル「賢者」…が、何気に、今まで俺が使ったスキル回数第一位に輝きました。

他の追隨を完全にぶっちぎり、今回初めて使ったのに、いきなりの第一位です。

…。

あれ…俺…なんで、こんな事してたんだっけ…。

そもそも…未来起こりうる…愛里【 』

…。

まあいいや。

エリス様は、ビクンビクンと、今度を体を大きく跳ねさせた…。服は乱れ…肌を大きく露わにしていた。

また捲れあがってしまっている、スカートを綺麗に直して、ついでに「リフレツシュ」でも掛けてやろうと、立ち上がると…何時からいたのか…横から声がした。

『あ…あ…アンタ…』

「…んあ？」

『なにっ…やってんのっ!!!』

何時の間に…えっと…誰だっけ？

『隆史…此方側のアンタは、なんだかんだ…大丈夫だと思って、此処に呼んでたのに…』

敵意を持った目で、こちらを睨んでくる青い長い髪の女性…。

立ち上がった俺の姿と、ぐったりとしているエリス様を交互に見比べると…何処から出したか分からんが、何か杖の様なモノを取り出した。

長刀を持つように構えると、こちらに勢いよく構えた。臨戦態勢つて奴か。

『エリスッ！ 貴女も何やってんの!! 人間との性交渉…しかも神域でのなんて…せめて受肉して他で盛りなさいよっ!』

受肉？ …いや、そもそも。

「…何言ってるんだ？ えっと…アクア様…だっけ？」

ああ、そうだ。そういう名前だった。これも一応女神様だった。

そうそう、駄女神様だ。…認知とやらが、一々ブレて、認知が遅れるのは何とかならんかね。

『はっ? …はあっ!?? アクア様っ!!』

なんだコイツ…全身に鳥肌が立ちました…を、ご丁寧に身を震わせて体現したな。

『き…きもっ! きつつつもおつつ!!!』

…この野郎。

「ああ…この惨状…。いいか? 別に俺は、エリス様となんにもしてねえぞ?」

『流石嘘つきね…でもお生憎様。…どうせつくなら、もつとバレない嘘付きなさいよ』

「嘘言っただろすんだ。…彼女は、なんか知らんが、俺の世界線とやらを見ていたらしくてな? 彼女が気になっていたシーンとやらを、追体験させてやっただけだぞ?」

『なにを訳の分からない事を…んなら、その無駄にデカくしたのは何なのよっ!』

「…この状態になるまでのエリス様を眺めていたら、こうならない訳がなからう。それこそ不能を疑うレベルだったんだぞ?」

『…ちよつとっ!! 見てたんでしょっ!? どうだったのっ!!』

一瞬、俺に疑いの目を向けると、今度は真っ黒な空へと顔を上げ、大きく叫んだ。

なんだいきなり…どうした?

『あ…あれ…っ? システムが反応しない…』

…。

…あ、それよりも。

「おい、駄女神」

『なによっ!!!』

「…そういや…お礼をしてなかったな…」

『お礼? 何のことよ』

「結局このふざけたスキルを押し付けた時…俺に一切姿見せなかったよな…」

『……………え』

「その時の…お礼を言いそびれたなあ…と思っただけなあ…」

湧き上がる…ああ、心の底から湧き上がる…この怒り…。

『あ…あんた…ひよつとして…!? えっ…えっ!? なんで此処にいるのっ!? どーしているのよっ!!』

「お前に教える義理はねえなあ…さあ…どうしてくれようか…」

「ごきつと、無意識に首を鳴らすと…駄女神の臨戦態勢が解け…完全に及び腰になった。」

今更遅え…。

俺の心が弱かったというのも大きいが…この駄女神が、全ての元凶だと言っても間違いは無いと、俺はそう思うんだ…。

『ひいっ!』

「……お前程、「ひい」って悲鳴が似合う奴も珍しいな…」

あ、エリス様は、もう少し待っててください。

『あ! アンタがさつき言ってた事って…スキル使ったって事!!』

「他に何があんだよ…」

『でも…オカシイ…悪意のある攻撃は、弾かれるはず…』

「俺がエリス様に、攻撃なんぞする訳ねえだろ」

『……解った…解ったわ…それでか…。この変態の場合…そういうた事に悪意なんて微塵もないのね…って、質が悪いわっつ!!!』

「……何言ってるんだ、駄女神」

『はっ!! ひよつとして…まさか…!! アンタ、それを私にも掛ける気ねっ!!』

「……あ?」

腕で自分の体を隠す様に巻き付けてた…。

『それだけじゃないわっ! アンタの今のその状態……ひい!!』

「………」

『還しましょう。ええそうしましょう即座にしましょう! このままじゃ私の貞操が危なすぎるわっ!!』

「はあ…何言ってるんだ駄女神…っておい、本当に還そうとすんなよ…マジかコイツ…体が発光し始めたぞ…。

コレって確か、元の世界に戻る前兆だったような…。

『…ちよと、なんでいきなり通常に戻ってんのよ…』

それ以前に、何処見て言ってるんだ、この自称女神…。

俺に、こんなスキル寄越した時点で、百歩譲って、コレは俺の中で邪神だ。

ふう……いいか？

「悪いな、駄女神…」

『は？ 何がよ…うつつわ…気持ち悪い顔…』

これが俺にお前に見せられる、精一杯の優しい笑顔だ。

「お前じゃ勃たないんだ」



『…ど？』

「いや、で？ って…先にエリス様何とかしないとダメだろ。なんか、動かなくなっちゃったぞ？」

『…いや…もういいの。アンタがこっちの世界に来て、記憶が戻り始めただけでしようし。放っておけば、その内元に戻るわ』  
「戻り始めた？」

『どうやらね…あの場にいた3人がいないと、ハッキリと記憶が戻らない仕様だったみたいね！ アンタのせいだつ!!』  
「なんで俺のせい？」

『それで？ 　どうなのよ。アンタ、どっちの隆史？』  
「いや、どっちって…ああ…さつき…」

『一瞬、アッチ側の隆史の魂の反応があつたんですけど？ 　今は交じり合つて、訳が分からなくなつてるのよ。で？ 　どっち？ 　変態の方？ 　それとも変態の方？』

「それ、選択肢が無いぞ」

『じゃあ、クズの方？ 　それともカスの方？』  
「……………」

『ふいたいつ！ 　ふいたいつ！ 　ふいたいつ!!』

「…スキルの事を言っているなら、俺は持っていない。何よりさつきから此処にいただろうが」

『はっ。…変態の方だったか…………』  
「……………」

『ふいたいつ！ 　ふいたいつ！ 　ふいたいつ!!』  
「……………」

『うう…そういえば…アッチ側の隆史…もう来れない様にプロテクト掛けたの忘れてた…そうよ。いる訳も来れる訳もないのよつ!! さつすが私つ!!』

「……………」  
『そうよつ！ 　忘れてた事も、記憶を消されてたからであつて私のせいじゃないわつ!!』

「…もう駄女神はいいや…めんどくさい…」  
『めんどくさいってなによつ!!』



『 あっ…う… 』  
『 …エリス？ 』  
「おっ…気が付いたみたい」  
『 あう!? あうあああ!! 』  
「…あの…顔真っ赤ですけど…」  
『 隆史じゃんっ!! 』  
「あ、はい、隆史です」  
『 あゝ…あの様子じゃ完全に記憶戻ったみたいね…。大丈夫よ、エリス。コレ…いつもの変態の方だから 』  
「おい、駄女神」  
『 あう…あうあ!! 』  
「あの…エリス様？ あの…何で手を掴んだんですか…？」  
『 ちゃんと私の名前呼んでくれますうう…!! 』  
「…え？」  
『 他の女性の名前じゃないです…ちゃんと私の名前えええ… 』  
「あの…何を言ってる…なんで俺の手を頬に当てるんですか…あの…」  
『 ああ…暖かい… 』  
「あの…駄女神…どうしたんだろ…エリス様…」  
『 エリス…あんた…目の淫紋の輝きが増したわよ… 』  
『 …… 』  
「…エリス様？ なんで人の顔凝視してんすか…あの…ちよっ…エリス様っ!」  
『 ああっ!! そうよっ…! あっちの変態…確か…追体験させるとか言ってたわね…まったくの本人と同じ感覚で…しかも…感度増量で…って事は… 』  
『 ……はあ…はあ… 』  
「あの…なんで息が…あの…」  
『 内側から…精神的に…って…え？ 』  
『 はっ…む。あっ…んちゅっ…ぶっ… 』  
「アノっ!? あのっ!? なんで指を舐め始めたんですか!? うわ、えっつろっ!! ……じゃないっ!!」

『更には…この馬鹿が来た事で、失っていた記憶が完全に戻った…って事は…』

『はっ…んんく…ちゅっぷっ…』

「舌っ!? うっわ…気持ち良…じゃないっ! 何やってんですかっ!!  
手、抜きますよ!?!」

『……実際にシタ訳じゃなくても…完全にアレね…。あの変態のアレを…長時間…あの状況を全部体験したってこと?』

『はあ…はあ…』

「駄女神っ!! 駄女神っ!! トリップしてんなっ! 助けっ…んむっ!!?!?」

『しかも、逃げられない状況だった訳で……どうしよう…女神が…人間に…』

『はっ…れちゅっ♥』

「んんっ!? むうっ!?!」

『逃げれない快樂は、ある意味拷問って聞いた事あるわ…まさに…』

「んっむあ!! ちよっ…離れて下さいっ!!」

『あ…んっ…あ…あら? こう教えられたのになんで…あ…あれ?』

「いや…んな事、教えた覚えはないんですが…」

『え…』

「え?」

『……あ…』

「いや…これはみほには、絶対に言えんな…いくら忘れとしても…付き合ってから的事だから…やべえ…。これって浮気に当たる…のか?」

『…あっ…ああっ…あああああ!!!』

「エリス様!?! …だっ! 大丈夫っ! ほらっ! 忘れますからっ!  
忘れますからっ!?!」

『うわああああああんっ!!』

「マジ泣き!? エ…エリス様っ!? エリス様っ!? 大丈夫っ! 大丈夫ですからっ!!」

『でも…なんで最初…彼女の神威で、ブレイク・スペルが弾かれたのかしら…? それにプロテクト掛けてあるとはいえ、…さっきの魂の入れ替えが一瞬だけ起こったのも気になるわ。一瞬だけ現れた隆史（性獣）の反応も…』

「駄女神っ!! アクアツ!! アクア様っ!!?? 助けっ…助けてくれっ!!!」

『わああああああんっ!!!!』

『取り合えず…エリス……この子。…これからのお茶会とか、救済処置の時…どうするつもりなのかしら…』

◆ ルート正史 ◆ …の、次回アンケート

「そろそろ22時を回るな…。隆史は…寝たか？」

「書記？ 寝たかどうかは分らんが、随分前に自室に戻ったな」

「まあ、この時間ですと、多分もうお休みになったと思いますよ？」 2

「1時頃には隆史さんお休みになられますからね」

「そうか。なら丁度いい」

「突然どうしたの、どうしたのお姉ちゃん」

「ふむ。では皆に一つ、提案があるのだが…良いだろうか？」

「その提案…隆史君の動向を気にした辺り、不安しかないけど…」

「あら…なんでしよう？」

「…今日、私はこの家で留守番をしていだろうか？」

「あ、うん」

「この家で、その時に私一人だけ…隆史は留守…。これはある意味で千載一遇のチャンス…しかしこれは少し卑怯ではないだろうか？」

「しかし…と、隆史の部屋に侵入しようが決めかねている時にな…」

「いや、お姉ちゃん何を普通に言ってるの!？」

「…西住さんのお姉さん…結構アグレッシブだな…」

「そうですねえ…良い事ですね！」

「…ツツコミ役の沙織がいないと、五十鈴さんを止められない気がしてきたぞ…」

「もう…そういう事すると隆史君、すつごく怒るよ？」

「みほ、人の話は最後まで聞きなさい。まずは…これだ」

「DVDが…3枚…。え…まさかお姉ちゃん、本当に隆史君の部屋に入っただの!？」

「まさか。そんな恥知らずな真似はしない」

「…色々ツツコミ処が満載なセリフを真顔で言わないで。じゃあ、それはなんなの？」

「うむ。部屋の前で迷っていたらな…隆史の友人が訪ねて来た」

「……………」

「……………」

「玄関先の私を見て、早々に逃げ出そうとしてな…捕獲して事情を吐かせ…否、聴いたらば、隆史へとコレを持ってきたと言うので、預かっているという訳だ」

「……………」

「そしてこのDVD。見ての通りラベルがない。このケース張られた付箋に…隆史報酬用と書いてあるが…。なあ、この中身が気にはならないか？」

「…どっち？」

「どっち…とは？」

「どっちの隆史君のお友達が来たの？」

「はあ…隆史…誰？ と、聞かれない辺り、本当に友人が少ないのだな…」

「でっ！ どっちっ!？」

「林田くん…とか言う方の友人が…」

「絶対に如何わしいDVDだよっ!！」

「…あっちの方が…。もう一人なら、戦車の試合映像とかの確立がまだあったのにな…」

「……………」

「まあ…それなら、それで良いだろう」

「なんでっ!？ お姉ちゃんはそれで…」

「聞け。隆史も年ごろの男の子だ。異性に興味を持って当然だろう？  
そもそも、こういった物を男子学生は友人同士、共有するのだろうか？」

「…そ…そうらしいけど…。お姉ちゃん、なにか妙に物解りが良すぎない？」

「ふふ…」

「そ…それでもな、一応…書記宛てに来た物を、勝手に見るのは…どうなんだ？」

「そうですね…そこは、しっかり隆史さんを問いただした後に、本人同席の元で、中身を確認するのがスジかと…」

「……………」

「は…華さん？」

「…五十鈴さんがとてもエグイ事を真顔で言い放った…」

「それでしようか？」

「さ…沙織…本気で呼ぼうかな…」

「そうだな。君の言う事も最もだが…ここは敢えて私自身泥を被ろう  
と思いつこの提案だ」

「西住さんのお姉さんが、さも当然の様に五十鈴さんの案に賛成した  
…」

「うふふ」

「泥をつけて…完全に巻き込もうとするよね、お姉ちゃん…」

「まあ、聞け妹よ。赤星に、この前聞いたのだがな？」

「赤星さん？」

「健全な青少年が常備する重要資料とやらは、その青少年の趣味趣向  
が如実に現れるそうだ」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「皆、同じ屋根の下で暮らしている異性の趣向が気にはならないか？」

「…べ…別に…ならない…かなあ…」

「みほ、何故目を逸らした」

「…わ…私はどうでもいい。へんたいは所詮、変態に違いはない  
だろうし…」

「ふむ…君は結構、解りやすいな」

「何が!？」

「私は気になりますねっ!! ええ! 物凄く…ええ…」

「君は目の輝きがすごいな…」

「非常に知識欲をそそられますから!!」

「五十鈴さん…それは知識欲とは言わない…って…私じゃ駄目だ…。  
ツツコミが追い付かない…」

「まあ…この場にはいない、みほの友人の二人には悪いが、今回は私達だけ  
で確認しよう。…そう言った案だ」

「二 …………… 二」

「私は気になる…この際、後で隆史に怒られようが…一つの不安要素  
を取り除きたくて仕方がない…」

「いや、今更だろうソレは…あの書記だからな…完全にろくでもない  
内容だと思うぞ」

「……………」

「ん？ みほさん？」

「み…見よう。お姉ちゃん」

「即断したな。…ふむ、解ったか。そうだ…これは、あのもう一人の同  
志と言っても良い娘の為でもある」

「…やっぱり」

「同志？ 誰の事でしよう？」

「優花里さんです」

「……………」

「…わ…解った…何を言いたいか、理解したぞ…」

「……………成程。確かにそういった趣向の映像があると…沙織さんに  
聞いた事がありますね…」

「うん。だから敢えて、お姉ちゃんの口車に乗ってでも、確認しておい  
た方が良いと思うんです」

「おい、妹」

「虎穴に入らずんば虎子を得ず…とも言いますし」

「そう言う事だっ！」

「そうですねっ!!」

「…突っ込まない…私はもう、突っ込まないぞ…」

「……………」

「ん？ みほ？」

「うう…最近、隆史君。異性に対して…というか、皆さんの接し方が変

わってきたし…コレも防衛策だと思つて…うん…知識は有つた方が  
良いよね…」

「… ……」

「うん…そうだよ…ね。後学…後学…これからの事考えれば…えつと  
…要求されても…大体の事は応えてあげたいし…うん。心構えがあ  
れば…うん大丈夫…だよね」

「… ……」

「…よ…よしっ!!」

「… ……」

「では！ 隆史君の就寝を確認した後…そうですね。今から1時間後  
…居間に集合しましょう」

「… ……了解した」チツ

「…わかりましたあ」

「もはや躊躇ないな、西住さん…つて、居間？ ここで見るのか…大画  
面か…」

「…麻子さんも、すでに見る気満々ですね！ スバラシイです」  
「諦めが肝心だというのは…書記から散々学んだからな…はあ」



※ルート壊 【人妻・宴編】※ 夢の後遺症 前編

書類を手にとり、机の上へとトントンと軽い音を立てる。

我ながら随分とまあ溜め込んでしまいましたねえ。手の中の紙の厚みでその数を実感させられます。

思わず今のご時世で、まだ紙媒体なのかと思わず毒づきたくないもなりますよね…。ある意味で時代の流れと言いますか…戦車道会ではまだまだ頭の古い人種と言いますか…。

重要案件は形に残すとか、なんやかんや…古臭い考え方が蔓延している。書類仕事が主に今回は溜まってしまいましたがおかげ様でソレを思い知らされましたね。

その頭が古い人種が、この書類の数と比例されているのではないかと思うとため息の一つも出ようものです。

データで管理運営すれば、ここまでの作業はかなり短縮できるというのに…。今回の事に関しても、殆どが書類に目を通しサイン捺印する事。

後はコレら一式、まとめて回収してもらえばデスクワークでのお仕事はこれでお終い。

ここから次は視察…会議…会食…。家元を襲名した後の方が、襲名の前に比べて当然増える。特に増えたのがこの会食。

本当に時間の無駄と思わせるこの「仕事」が、私のストレスの元…癌だと言っても申し分ないでしょう。…いえ、確かに大切だとは思いますが。

顔を広め、横の繋がりを確保し、円滑に戦車道発展を促すには必要な事…。全国の戦車道履修者…愛里寿の為に必要…。

…それでも遠慮したい気持ちは生まれてしまいますし、溜まるモノは溜まる。

「ふうー…」

…疲れる…の一言ですな。

机の端の受話器を取り、内線のボタンを押す。

受話器の向こう側から聞きなれた声がし、特に他に伝える事もなく、ただ事務的に書類一式を取りに来るよう伝えるとそのまま受話器を下ろす。

一つの仕事が終わった…と言う小さな解放感…。

それと同時に、次に訪れるストレスの元を憂鬱に感じてしまう。まあ私の仕事など、殆どがソレの繰り返しでしょうし…今更ですね。とてもではアリマセンが、こんな本音は誰にでも言える訳ではありませんけどね。

会議：兼、会食。

大体これのセット。

せめて今回は、内容の有る集まりだと良いのですが…。毎回毎回、唯意義とは程遠い内容で頭が痛い。

最近はどうにも血の気が多い連中が多くて余計に疲労を感じてしまいます。

私はその一部の過激派…とも言われ始めている「戦車道は女性のみで管理運営されるべき」と謳っている連中とは違う。

その連中は性別で限定してしまっているが、全体的に見てもその「限定」という、一部の者のみにしてしまつては徐々に衰退していくだけなのに…。

前回はそんな彼女達が主張する場…の様な不毛な集まりでしたね。どうにも彼女達は、私としほさんを取り込みたくて仕方がないようですよ…。

特にしほさんへのラブコールが凄まじかったですねえ。連中が勧誘する度に彼女の青筋が浮かぶのを見るのが唯一の癒しでした。

さて…問題は会食の方ですか…。あの旅館で行われた打ち上げと、なんら変わらない内容になると解つてしまうのが憂鬱の元ですよ。ねえ。

お酒の入る場…だからでしょうけど、遠慮が徐々に薄れていくのが目に見えて分かりますから余計に…。

一言で言つてしまえば、戦車道会での男性の立ち位置。

：戦車道会へ関わる男性はその評判・評価が極端に分かれてしまっているのも要因でしょうね。

男性が戦車道に関わっていても私は何ら問題ないと思う。戦車へ理解ある男性や聡明な方も何人も存じ上げています。

私のストレスの元のように、癌だと言われる人間はその二極の片方。昔からよく沸いて出てくる。

その癌が重要なポストに就いているだけで大幅にその発展は遅れてしまいます。特にその悪評が集まる者達が、最近妙に会議や会食に毎回顔を出し始めている。

まあ今回も当然の様にしやしやり出てくるでしょうね…。

はあ…：特にあの髭。

何を企てているかは分かりませんが…：今後の子供達の為にも、ただただアレが来るから嫌…：なんて私が駄々を捏ねて出席しない訳にもいけませんしね…。

その過激派とは別に、あの髭は管理、運営こそ男性が指揮をするべきだと暗に謳っている。…：しほさんは当然それに気が付いている。

セクハラ紛いを続ける男が更に戦車道会の上層部へと介入でき、意見が押し通る様にでもなったら…：どうなる事でしょうか…。

しほりん、今回の会食来てくれませんかねえ。ちよつと誘ってみましょうか？ 今度は指とは言わず、首でも背骨でも好きな様にへし折ってくれませんかねえ♪

…。

仕事からの解放感が、一気に憂鬱に塗りつぶされていく。

机の上に鎮座している書類の束を遠めに見ながら椅子の背もたれへと体を預けると、溜まりに溜まった疲れを吐き出すように、また一つ大きなため息が漏れる。

とても人様にこんな姿見せられませんねえ…。

家元として「体裁」というモノはとても大事。…：それはプライベートにおいてもそう。そもそもこんな姿、あの髭にでも見られようモノなら、そこからまた何をしてくるか分かったものじゃない。

う…っ…。

親切そうに心配する振りをしながら、手でも触れて来そうだと即座に想像してしまい、鳥肌が立ちそうになった。

ここ暫く、愛里寿の事で忙しくはあったのですが、上手くやってこれたと思っていたのですが…気が抜けてしまったのでしょうか？

その皺寄せが一気に押し寄せてきたかの様に感じますねえ。

私も、もう若くないですからねえ…。

…いえ？

定期的にストレスの解消が、とても上手くできていた…からでしょう。

……。

ストレス解消…。

………。

「さ、て…」

そのストレスの元は、明日から…。自分に残ったプライベートな時間を部屋の時計で確認すると、その針は5の数字を少し超えた辺り…。

…良かった。彼との約束には間にあった。

この溜まりに溜まったものは、この後に来る予定のあの子に解消してもらいましょうかね♪

…。

尾形 隆史君。

まあ…彼のお陰でしょうね。初めは、ただ揶揄い甲斐がある子だと思つて…いえ、実際あつたのですけど♪

愛里寿との関係も良好。彼からすればとても大変だったと思いますが…私と愛里寿にとってはどれだけ気がまぎれたか。…そして実際に救われたか。

…あのガマガエルの件は、概ね解決と言っても良いでしょう。

後は………。

「……っ」

自然と少し顔を顰めてしまった。それは嫌悪感から来るものでは

ないのですが…一瞬。

ええ、嫌悪感というよりも罪悪感。一人になると余計に冷静に考え  
てしまいますからね。

しほさんがや、彼がいると不思議と素が表に現れてくる。それもま  
た含め：順々に想い返していけば、必然的にアレに当たる。

からかい行為から始まった肉体関係。

この歳で今さらどうこうなろうとは思いませんが、愛里寿の事を考  
えてしまえばその罪悪感が更に強まる。

…。

……。

………罪悪感？

【 ー 】

…あつ。

その一言で納得がいった。

あつさりと…そしてとても簡単に。

今まで何度も感じていた事ですが、なぜ今になって…とも思います  
が、閃きにも似た何かででしょうか？

一瞬、頭を過つた冷たい感覚が、その答えをいとも簡単に導きだし  
た。

…。

取り合えず、しほさんという「共犯者」。

はい、共犯者です。間違えではありません。彼女は共犯者です♪

この「歳」…で、女として扱われ、あまり考えたくはありませんが、  
その「歳」の為に長くはないこの関係性。

それは共犯者さんにも言える事で、彼と娘達との事を考えれば…そ  
の先の男女としての発展はありません。…その「歳」も含めて。

そしてその「娘達」の存在。既婚者という立場とそれが、行為を  
重ねる度に「罪悪感」と…信じられない程に強烈な「背徳感」を生む。

昔の私達からすれば、そんな俗っぽいこんな関係なんて、もうフィクションの様な出来事…。それが私自身にへと現在進行形で続いてしまっている。

考え始めると、不思議と体の奥の方が徐々に熱くなっていくのが解る。

何度か行つた「行為」も、私が体験して来たモノとは比較にならない程に濃く…熱い。状況、内容、全てが全く違いすぎていた。

初めは彼自身が、私達に遠慮しがちなものも含め…徐々に彼から発せられる言葉も強くなり、そして酷く、醜くなっていく。

あの様に罵る様な言葉…：しかも歳下の…男の子から言われているのに、憤慨する所かむしろ更に身体の熱を強めていく。それが演出であるかの様に。

当然、彼は私達の「立場」というのを理解している。理解しているからこそ…なのででしょうか？

私達の普段とはかけ離れた姿。彼の下に敷かれている淫らな姿を罵り、煽る。その言葉には強制的な力でもあるかと疑う程に素直に納得させられて…いえ、解らされるとでも言うのでしょうか？

彼のモノが私の最奥を刺し潰す度に焼き印の様に、刻み込まれる。俗っぽい言葉ですが「割り切った関係」というのが、ここまで…。

…。

思わず出そうになった別の感情…ソレを表す言葉を飲み込んだ。

そう、アレ…。

アレがすごかった…。

その「言葉」がはつきりと出てくる前に、一番強烈に感じた「快樂」を思い出す。

ええ…もう…何も考えられない程に強烈な「快感」を。

…そこになぜか思考が誘導されていると思える程に鮮明に、記憶を探り…一気に思い出す。

あつ…あの温泉旅館での出来事とは…何でしたのでしょうか？

夢…では片づけ枯れない程に強烈な「快樂」。

朝、気が付いたら彼としほさん以外誰もいなかった。…でもあの隆史君が他の男を私に宛がう…なんて事っ…まあ…ないでしょう…。  
やつ…まあ、夢で間違いないのでしょうけど…だからと言って、私が…。

…全ての男性が彼。それは不思議と認識し、疑いもしないで受け入れてしまっていた。

複数の男性に一齐に求められて…女性を抱く…のではなく、完全に使われる…。それを悦んで受け入れ、ただただ快樂を貪る浅ましい自身。

ど…どうなのでしょう？ 隆史君、催眠術でも使えるのでしょうかねえ？ …なにか似たような事を聞いたことがあった気が…。

何故か、しほさんも同じような夢を見ていたようで…まあ…さすがに事細かく詳細には吐かせられ…いえ、聞けませんでしたが。

何と言いますか…私はそこまで欲求不満だったんでしょうか？とても催眠術とは思えない程、今でも鮮明に残ったアレらの感覚…：変わる変わる「彼」に求められる様な感覚。

普段、彼はどこかで私達に気を使う。言ってしまうえば、私達の為に私達を抱く…様な感覚があり…どこか遠慮がちにも感じていました。それが複数の隆史君全員に感じ取れてしまったから…でしょうか？

しかしソレも徐々に変わっていった。  
「……………」

遠慮の無い彼は…ある意味ではとてつもない。  
そういえば…一彼は酔うと変わる。実際に初めて関係を持った時がそうでしたね。

アレ以降、あの旅館での夢らしきモノ以外では、なかったので…余計にその日は…。  
…。

大洗学園の準決勝戦の時…。西住 まほさんが言っていた彼の情報…。

日本酒が彼…とても相性が悪いとか言っていましたね…。

……。

……………。

それと撮影会時…隆史君が友人同しでの会話をしていた時の…あの時の…。

「……」

アレには時間が掛かりそうですが…。

いや、でも、しかし…。

「っっ！」

突然のノックの音、で思考が一気に現実へと引き戻された。

思わず鳴り続けている扉へと顔を向けてしまった。

いえ、多分少し前から扉を叩いていたのでしようが…随分と我ながら卑猥な思考に囚われてしまっていました…。

夢中になって思い出していました自分が少し情けないですね…。

最初は仕事の事を考えていたはずですが…彼の事が挟まった瞬間、コレですからね…。何と言いますか…俗っぽい言い方をしてしまえば、見事に「彼にハマっている」…と、言うのでしょうか。

あの温泉旅館では最初から敢えて、できるだけ積極的に…と、今まで以上に開き直っている感じで誘ってみました…あからさまに思いつきり引かれてましたね…。

私自身から唇を合わせに…なんて、夫にもした事なかったのですが…照れてくれてはいましたが…引かれてましたね…。

「……」

…。

んんっ！

少し、体裁を取り繕う様に咳ばらいをし…いつもの自分を取り戻そうと…静かに返事をした。

「…はっ」



返事の後、ワンクッションを置いてゆつくりと扉が開いた。  
そこには書類を取りに来てくれた家の者と：しつかりとアポイントメント取って、戦車道全国大会の折のお礼：という名目で来た彼。その手には手土産でしょう。：熨斗紙を巻いた一升瓶が。

「――」

……。

：一瞬：別の込み上げるものを強引に飲み込むと同時に：頭の中で何かが切り替わった気がした。

相も変わらず、歳に似つかわしくない愛想笑い。

しかし、嫌という程見てきた厭らし笑いではなく、不思議とその愛想笑いには嫌味がない。

どうでしょうか……。しほさんがいないこの珍しい状況。

今までは諸々の事情で、彼としほさんがセット。それはあの温泉旅館でもそうでしたね……。

それは仕方がないとはいえ、私としほさんを相手にしていた彼。

まあ：大変そうではありますが……。いえ、実際に大変でしょうね。

ほぼ同時に二人の女性相手にアソコいぢめられるのですから……。

でも、今日は一人。私一人。

その現状を確認すると：ゾクツと背筋に何かが走った。

高校生とはとても思えない身体……。

服の上からでも、その凹凸が確認できてしまう彼の身体を：その服の下を無意識に思い出してしまう。

ゾクゾクと続けて背中を中心に何かが走り続ける。

だってそうでしょう？

今日は、しほさんは居ないのでから。

私だけ……。

私にだけ……。

体力的にも意識的にも、今日だけは彼を私一人に集中させられる。

：彼を独占できる。

何度も何度も思い出し、しつこい位に走る背中感覚がまた気持ちよく、徐々に気分を高揚させてくれる。

それで…そして…とても良い考えが浮かんだ。

「あゝ…こんにちは、千代さん。お邪魔します」

慣れない営業マンの様に、中途半端に頭を下げながら挨拶をしてくる彼を見て…。

「こんにちは、隆史君」

独占できると思うと、さらに欲がでてしまう。そう…事が上手く進めば…と考えると…思わず舌で唇を濡らしてしまった。

「あれ？ まだ仕事でした？」

普段、完全な受け身でスロースターターな彼が、最初から全力で来たら…求めてくれたら…。

応接ソファへと勧め、静かに私の中で決心をした。

「いえ、大丈夫ですよ？ …取り合えず、そちらに掛けになられて」

…どんな手を使つてでも、彼に私を襲わせようと。



「どうぞ…お納め下さい」

最初、お手伝いさん？ とでもいうのか…。島田邸の方に渡そうとしたらば、直接奥様に…と言われてしまったので、今のこの違和感のある状況。

何度か千代さんのお宅には伺った事があるのと…愛里寿との事で流石に顔を覚えられたのか、直に千代さんの仕事部屋へと通されてしまった。

相変わらず洋風でかなり豪華な造りの邸宅。それでも成金感のない…上品とでもいうのか？ どこぞの観光施設じゃないかと疑う程のお宅なんですけど…正直俺は落ち着かない。

まあ：落ち着かない理由はそれだけじゃないんだけどなあ…。

机の手前、あからさまに良い値段しそうな応接用セット。千代さんと俺はテーブルを挟んで向かい合わせに座っている。そしてそのテーブルの上に鎮座している熨斗付き一升瓶。

コレを持参した理由はもちろんあるのだけど、こうして見るとやはり思う。

合わねえ…。

この部屋にはとても似つかわしくない。超洋風の部屋のテーブル。その上に鎮座する超和風な一升瓶：やはり違和感しかねえ。

まあそれでも、そんな違和感を誤魔化すように、軽く冗談めかした挨拶と共に持参したこの手土産を差し出した。

「あら、うー丁寧に。…ん？ 少し言い回しが違いますか？」

そんな冗談に軽く笑顔で返してくれた。

：相変わらず柔らかい笑顔をする人だ。そしてその笑顔で確信した。

よしっ！ 今の千代さんなら大丈夫だっ！

ここっ！ この部屋っ！ 完全な彼女のパーソナルエリア！ 更にこれから夜に差し掛かる時間帯を指定したきたっ！

：そして何より：あの旅館での彼女を鑑みると：正直不安でしかなかった。

しかし大量の書類を手に取り、先ほど退室したお手伝いさん。今まで仕事をしてきた事が簡単に伺えるから、この考えも邪推だったのだろう。

そしてあの普通の顔っ！ 自宅とはいえ、千代さんは理性を持って会話を俺としてくれそうだっ！

清楚を地で行っていた彼女が、どうにもその本性はガツガチの肉食系だったのではないかと疑ってしまう程の変化を最近されましたね…。

まあ：俺がしてしまったんですけど…。

…。

……………一瞬、彼女の眉が動いた。

「何か……とてつもなく失礼な事を考えていませんか？」

「滅相もないっ!!」

あ…相変わらず滅茶苦茶、勘の良い人だ…。

全力で顔が取れるんじゃないかと思う程に左右へと振る。

「まっ……良いですけどお」

そう許容したかのような事を言いつつ、いつもの何処から取り出したかわからない扇子で口を隠す。

別の意味でその口元が緩んでいる。完全に挙動不審になっている俺を見て、目が柔らくなつた。

……相変わらず俺が慌てる姿を見るのが好きな人だな…。

「えつと…」

そのまま社交辞令を述べ、これまでの事に関してのお礼を述べる。有難うございました…と。

愛里寿の時の事で返され、また彼女からもお礼の言葉を貰う。お互いに他人行儀にも感じる挨拶が少し続くも、この固っ苦しくも思えるが事は、俺が一度しておかなくてはならないと思いついて参じた。それは彼女も理解している事で、それに素直に応じてくれた。いつものワインレッドの服で、いつもの笑顔で。

親しい中にも礼儀あり…つてね。

…。

……。

普通だ…。

とてつもなく普通だ…。

場に変化あったのは、先ほど退室したお手伝いさんがお茶を持ってきてくれた事くらいで、お礼の後に続く他愛の無い会話。

まあ…そのお手伝いさんに千代さんが耳打ちしていたのが、少し気になったけど、まあ仕事の話だろう。それっぽい会話が少し聞こえたしな。

あ、そういうえばこの部屋に入るのって、俺一人だけってのは初めてではなからうか？

大体ここに来ていた用事って、どれも大変な時だけだったしなあ

…。あの時とは違って、こんなかなり落ち着いた状況でつてのは  
ちよつと逆に新鮮だ。

…。

何気なく部屋を見渡していると、先程からだまう…つて、俺を見  
つめていた千代さんと目が合った。

それは先程から変わらず…の、いつも通りの笑顔だったんですけど  
ね？ …気が付いた。

…ギツツツラギラにその瞳が…なんつか…薄紅色に輝いている  
んすけど…。

おあ？

…視線が合ったなと思つたら…スツ…とその輝きが隠す様に収  
まった。…気がする。

いつもと変わらない顔に戻ったんの良いんですけど…逆になんか  
不気味なんですけど…？

そういえば、あのお手伝いさんが退室してから、ろくに話していな  
い気が…。

「隆史君」

「は…はい？」

そんな事を直感的に感じ取つてしまつたいたので、一瞬身構えてし  
まつたけど…。

意外な言葉を口にだした。

「涼香さん、ご結婚されるそうで…おめでとうございます」

「あ、はい。ありがとうございます」

お…よかつた…まだ普通の話題だ。

一瞬見せたあの目のギラつきは、やはり気のせいだったのだろう。

…多分。

千代さんが姉さんの話題を出すのが非常に珍しい。

「あの子…どうにも私の事を目の敵にしているみたいですので…直接  
ご本人には、どうにも言い辛くて…」

「あ…ああ…」

苦笑をしながらつてのも非常に解るので…此方も思わず苦笑しな

がら相槌を打つ。

「そうだよなあ〜。」

小さい頃からすごかったからなあ。理由は解りきってるけど…。姉さんと俺。二人揃って島田家へ遊びに行った事ももちろんあつた。あつたけど…。途中からまあ…姉さんの事知っている人なら、誰でも察することができる事態になったからなあ…。

だから愛里寿と姉さんは会った事はない。ただ姉さんの趣味からすれば、愛里寿ってドストライクだから逆の意味で怖いな…。

「ええと、それですすね？ …コレは、そのお相手先の…」

「このお酒？」

「ええ、実家で酒蔵を営んでいるようで…姉さんのお相手の弟が、俺の悪友でして…」

「ああ、なるほど」

「そこまで言うと、ある程度察してくれた。

それと日本酒を選んだのは、しほさんの所にも手土産で持って行った事があり、その事を彼女も知っていたから…というのしかない。

変に違うの選んだりしたら、へそ曲げそうだからな…。まあしほさん時は、千鶴の所の酒だったけど…。

「ではさつそく…グラスでも持つてきましようかね」

「あ、はい。…じゃないっ！」

「は〜。」

なに普通に飲もうとしてんだらう、この人…。

いや違う、そうじゃない。飲んで貰う為に持つてきてのだから、それはそれで良い。

ただ…流れるに俺でも流石に気付くよ!?

絶対…俺に飲ませる気だ。

「さ…流石にお手伝いさん、グラスを二つ持つてこさせたら何かと思えますよ…」

「お手伝いさん…ふふつ。隆史君は少し古い呼び方をしますねえ」

お手伝いさん、ハウスキーパー、メイド…とか呼び方色々あるけど、今はソコじゃねえ。

「敢えて俺が言葉にした：「グラス二つ」に対して何も言わねえよ、この人…。」

千代さんが、ゆっくりと立ち上がりながら…。

「二応彼女達の勤務時間は、9時～17時です。先ほどの彼女には少し残業してもらいましたが：基本的にその残業はさせませんからねえ…。」

「え…なにその、くっそホワイト」

あ、思わず突っ込んでしまった…。

愛里寿の時は、むしろ彼女達が率先して協力してくれたようで、夜中までいたようだ。シフト制で早朝班みたいな人もいるらしいが、昼食の用意をして業務は終了だという事。

あ、はい。一応状況に応じて夜勤班もいるんですね？ …というか、ツラツラと説明してくれたのですけど…なぜその説明を今するのでしょうか…？。

「まあ…本家には、住み込みも…あつ」

あと、福利厚生付いて…めっちゃ給料が良い…。

「聞けば隆史君」

「え？ あ、はい」

「隆史君は、家事、掃除…それこそ料理まで何でもできるそうね？」

「まあ…一通りは…」

「就し…いえ、残り夏休み中でも構いませんから、アルバイトとかしてみませんか？」

「」

ズイツ…と顔近づけて勧誘されたんですけど…。

眼え見開いてすっげえ真顔なんですけど!?

あの…何で横に座ってんでしよう？

そのまま顔の軸をほつとんで動かさないでゆっくりと…。

柔らかい髪が少し頬を掠めると、何度か感じた事の有る…すこし甘い匂いした。ソファの手摺に肘を乗せ、さらに顔を近づかせ耳元に唇を寄せてきた。

「お給金…ハズミマスヨ？」

み…耳に息を吹きかける様に囁いた。

あ、これヤベエ。

一気に彼女の雰囲気を変化したのが解ったので、反射的に少し首を動かし逃げる様に顔を少し離れた。

…離れたら、彼女は手を俺の顎から頬を摩る様に手を添えて「逃げるな」と言わんばかりに、優しく強制的に止められた。

「…あの…千代さん!？」

彼女の眼を見ると…。

「…夜勤専属…が、一番良いかしら?」

いつもの柔らかい笑顔は変わらないのですが、眼…がもう、ギツラギラに輝いていた…。

俺の頬に手を添えているので、その腕の肘が必然的に彼女の胸を寄せている。貴女の服…体のラインが結構でるから、かなり目の毒…なんです…。

「…と、一瞬。とてもとても良い考えが浮かびましたが…はあく…しほさんが怒り狂いそうですので、断念しておきましょう」

「……」

俺に接近してくるのはソコまでで、スツ…と体を離してくれた。思わずそこで解放された手で、囁かれた側の耳を押さえた。

こ…こそばゆい。

そんな俺を見て、また千代さんは解りやすく笑った。

そしてまた隠す様に、ギラついた眼を細めていた。

…。

……よし。



逃げました。

はいはい、逃げましたヨ。

まず最初に：不穏な空気を感じ取り「じゃあ僕、そろそろ御暇しうかと：」と、口にしましたら「はい？」とか：笑顔で僕の言葉を遮られてしまったので、本気で断念：。

はい、もう何を言っても無駄だと。

千代さん、色々とかかを隠そうとしてますけど、全然隠せていません。

人間、目を見れば大体の事は解るものですよ？

ぶっちゃけ千代さんの策略に乗り、俺も酔ってしまえば酒のせいにしてどうとでもなったとも思いますけど…。

それでも大洗が優勝し、ある意味でその戦後処理の最中：俺が何か問題起こしてしまえば何もかもが無駄になってしまう。

島田さん家での事で、外にバレるはずがないとも思うだろう？ でもな？ 温泉宿の時とか鑑みると、千代さん：俺に何してくるかかわからんだろう？

そんな中で：ぶっちゃけてしまえば、彼女に襲われる。結果、流されて間違いない俺も俺で、変なスイッチ入ってやる事やっちゃおうでしょう？

抱く、寝る、SEX。はつきりとは言わなかったけど：遠回しにもハッキリと牽制してくる千代さんでしょう？

俺も腹括っているから、今さらもう酒なんて使わなくても：とも思うし、彼女も解っているだろうに：何故今さら執拗に飲ませようとしているんでしょうか？

よって。

「フラグって言葉をぐっ存じでしようか？」

もう一度言う。アソコ、島田さんのお宅。

旦那さんが帰ってくる可能性が全くない訳じゃない。千代さん曰く、海外出張中で帰ってくる事もない。…と、めちやくちはつきりと暗に説明してくれましたね。

言っていて妙ですが、その表現がしつくりとくるのですよ。

…そして一番最悪なのが愛里寿。

戦車道乙女の隊長各。その方達は本当に訳がわからないステルス能力を保有しているのですよ？ それも有り、いつ実家帰りしてもおかしくない。それこそ現時刻の為あり得ないとも言っていました、怖くて仕方ありません。

一瞬、愛里寿の名前を出した時、彼女にしては言い淀んだのだけど…先ほど見せた薄紅色の眼光ができましたので…あ、コレマジでヤベエ。…とも思いましたので…。

温泉宿での事で、完全に墮としてしまっていると確認が取れているので余計に…洒落にならん。

なぜか分からないけど、俺に酒飲ませようしていると確信が取れた時点で、いつの間にかやら、いつもの千代さんではないと分かっちゃったからな。

更に愛里寿の名前で、彼女の中のスイッチが完全ON。

スキルで色々分かっちゃいたけど、しほさん含め、完全に彼女達は「背徳感」に酔っている。程度は不明だったけど、完全に沼に沈んでいると…確信した。

ある意味では危険でしたが、ソコを刺激し…現実感を改めて認識させてもらいました。シラフに戻ってください。死にますよ？ …と。

別に俺が致したくない訳ではありません。この関係を作ってしまった責任を取らないとも思います。

ですが不思議と、追われれば逃げたくなるのも人情と言うモノでございます。

よって…何を企んでいたか知りませんが…旦那様と愛里寿の事を口に出して、フラグ構築を敢えてさせて頂きました。はい。

ある事を代償にして…。

「たあかしくうん？ 聞いてますう？」

「はいはい、聞いてますよ」

…返事しながら皿の上の大根をお箸で割る。

千代さんの風貌を見れば場違いと言つて間違いないだろう。

島田さん家よりだいたい離れた繁華街。…その裏路地。

人気の少ない繁華街から少々離れたこの場所にある、屋台の暖簾を今潜っています。

つまり…酔わされる前に酔わせてしまおう…と、そういう訳です、はい。

19時を回る辺りで、晩飯もお互いに食っていなかったで、下手に島田家にいるよりかはと思ひ、飯を食いに外へ…と、土産から彼女を遠ざけた。

というかね？ 食事時にお伺いするのも失礼かと思つて、日中時間があれば…と、最初提案していたのだけど、この夕方時に指定してきたのは彼女だった。

やはり彼女は今日の食事を用意させていなかったようだ。…まあそういう事なんだろうなあとは、聞かされてすぐにわかったけど…。俺との時間を作ってくれていた。

そこまで俺の事で予定を開け、調整してくれているのだつたらば逃げ回っているのも申し訳がない。

だから俺から食事へ誘うと、一瞬間が正氣に戻つたようにも感じた。当初の目的を思い出したかのように、この案には乗つていただき…ここに来た訳です。

しかし…あかん。

色々と予想外で、俺が参り始めた…。

車の中。

車なんて乗つて走りや良いやつて考えなんで、興味がまったく無い。無いので車種なんて知らねえんすけどね？ さすが島田家、あからさまに高級車。

走り出した後、その車内で何処かに電話を掛けようとしたのだろう。携帯を取り出した。

はい…行先決めてないんですね…それでその電話つて事は…。

食事の時に何処に行くかは任せますと言つてしまった事を、ある事を思い出し…ひどく後悔した。はい、思い出したんですよ、あの彼女

が家元就任した後に行った打ち上げを。

即座に「金掛かない所をお願いしますっ!!」…と、すぐに言い直す…「遠慮しなくても…ある程度融通が利きますよ?」とか返されたのでその発言は間違いではなかったんでしよう。

よし、俺の直感間違いなかった。その「融通」が何を指すかわからないが、絶対洒落にならない店へ連れていかれると思った!

金額とか!

金額っ!!

「なら…」と、余程面白かったのか…少し必死の形相だったであろう俺の顔を笑い…ここに連れてこられた。

…いやまあ…全然俺としては良いのですが、あまりにも予想外すぎて驚きました。

それでもある程度は納得はした。どうにも、しほさんが来た時とか、あの大学生のお姉様方と率先してここに来ているお店だそうです。

…しかし真夏におでん出してるのか…。

「さあいきん、また愛里寿が私の事、母って呼ぶんですよ…」

「あ、はい。そうですねえ…何度も聞いてますよ…ソレもう68回目ですねえ…」

「でっつ…しよおお?」

まあ回数は適当だけど、それに似た回数を聞いた気にはさせられます。ます。

すでに真面に会話が成立するとは思っておりませんので…空返事をしながら、グラスに入ったウーロン茶に口をつけた。

席に座った直後、俺こんな見てくれですが未成年ですから…と、店のおっちゃんに言っておいた。何を言いたいかすぐに理解してくれたのだろう。

返事は無かったが、コレを俺の前にコトんと、置いてくれた。千代さんが一瞬泣きそうな顔したので、本気で俺に酒を飲まそうと画策してたんだな…。

…そしてその千代さんの前には、解っているとばかりに一升瓶と安っぽいコップを置いた。…その一升瓶に「しぽりん」と、マジックで殴り書きしてあるのがすつげえ気になる…。

店主：慣れてますね…。

躊躇なく出された他人のキープボトル…。

余程の常連なんでしょうね…ある意味で二人の人間関係知らんと、このヤベエ空気の読み方はできませんよ？

…後でしほさんに何言われるか…。

すげえ幸せそうな顔して人の酒飲む千代さん…。

はあ…。まあ…ある意味で愛里寿の事を話に出してくるといふ事は、背徳感からは抜け出していると思うから少し安心していた。

良しっ！ 忘れようっ！！

あ、この大根ウメエ！！

「それでね？ さいきんね？ せんしゃどーれんめーの糞ヒゲがね？」

「…それ外で言っちゃ不味くないですか？」

「セクハラがひどくてえ〜んつつとにひどくてえ〜……………もはやアレが息をしている事すら殺意を覚えるわ」

「最後はとても流暢ですね…」

「そよねえ〜隆史君は人の事いえないわよねえ〜♪」  
「……………」

余程疲れを溜め込んでいるのか…2、3杯で直ぐに酔い始めましたネ…。いや、もはや泥酔っすね。まあ…ほぼ間髪入れずに飲み続けますけど…。

そして相も変わらずハシヤグタイプですね。…ちよつと貴女とコンビニ行った時の事思い出しました。

軽く周りを見渡したけど、マジで人が通らない路地。それとこの超寡黙なおっちゃん。不愛想と言えはそうなんだろうけど、こういう店員さんの店というの也需要があるのだろう。

特に彼女達みたく立場のある人間からすると…ね。「魚の目」はこの店とは、全くの逆な雰囲気だったからコレもまた新鮮。

「…千代さん」

「なあにい？」

カウンタ―に突っ伏した状態で俺に顔を向けてきた。

「頼みますから、ラツパ飲みはやめてくださいね？」

「しほりんみたくう…：しないわよお？ 私あんなに、はしたなくなあーい」

「いや…：そうじゃなく…：」

…いやもう…：誰だよこの人。

数時間前とは別人だよ…。

「無茶な飲み方して…：大丈夫ですか？」

「あたしのお酒は飲めないのに!？」

「会話してくださいねえ…：」

しほさんいなくて、ある意味で良かったよ…。

二人が泥酔した時に挟まれたらと思うと頭痛くなってくる…。千代さん一人だから何とかなっているようなモンだなコリヤ。

亜美姉ちゃんにシラフで接待させたけど…：何かもう、今さら申し訳ない気持ちになるな…。

なるだけだけどなっ!!!

「…キープボトル…：空になつとる…：」

3升なっ!!

あと今気づいたっ！

コレ日本酒じゃねえっ！ 焼酎だっ!!

ろくに食わずに…：割らずに飲んでたよなこの人…。

「ふう…：」

店主のオツチャンが、少し深い息を吐いた。

「んっ」

その無口な店主の顔を見ると、俺の顔が向いたのに気が付いたのか、すぐに指を握った手から親指だけ出して屋台の隅を指していた。

…：そういやこのオツチャンが、相槌以外で喋ってるの一回も聞いてねえな。

今のため息も、暗にこつちを見ろって事だろう。…どんだけ喋りたくねえんだこの人…。

客商売として…とか人様に言える立場でもないし、コレがこの人のスタイルなんだろうな…まあ、それはそれとして、その指された先を見た。

先ほどから静かに流れるラジオの下にある時計…を指したんだろう。あと15分程で、短い針が9の数字の上に差し掛かる所だった。

…？

一体何の事だ？

……。

あ…ああっ!!

「さっ…さあ、千代さん」

「なんですうかあ？ 漸くその気にならないまりましたあ？」

「噛み、かつみじゃないですか…つか、なんの事つか…はあ…」

「あ、隆史君。今、私の事めんどくさいと思ったでしょ」

「はい、くっそ面倒くさいっす」

「そーよねえ…めんどくさいわよねえ、こんなおばさん…んっふっふっふっ♪」

隠す事もなくドストレートに本心を喋ると、千代さんがブーブーとぶー垂れた…。

…いや、だから誰ですか貴女。

例の打ち上げん時は、そこまでオカシクなかったでしょ…。

はあ…。

「もうすぐ21時ですから…ね？ 俺、未成年。条例、ヤバイ、補導、サレマス」

「え〜」

カタコトの様に、さっさと帰りますよと訴えながら、ポケットから財布を取り出す。

こんな状態の彼女だし…まあいつもお世話になっておりますからねえ…良いんだけど…。

財布を取り出した俺を見て店主のオツチャンが察してくれたのか、

マジックで料金だけ書きこんだ古い紙の領収書をカウンターの上のスツ…と置いた。

すぐに書かれていた料金を支払い、お釣をもらう。

ある意味ですつげえ空気が読め、気がきいているんだけどなあ…本当に一言も喋らないこの人。

「ほらっ！ 千代さん」

「んえく？ …まだ飲むう」

「……はあ」

あかん。ダメだコレ。

強引に彼女の腕に腕を入れ、脇を持ち上げる様に立たせ、そのまま少し引きずる様に屋台の暖簾を出す。

女性を酔わせてどうの……ってからかい半分の言葉が今回出てこなかったから良しとしよう。いつもの千代さんなら平気で言っけきそうだしな。

後、こんな裏路地に連れ込んでくとかは、言ってきたけど、割と真顔で睨んだら目を逸らしたのでコレも良しとしよう。

「…ふう」

今までオレンジ色の屋台光に包まれていたから、思いの外にこの裏路地の暗さが引き立っている様に感じた。

…しほさんと、大学生のお姉様方なら大丈夫だとは思うけど…女性だけでくる場所じゃねえな…。

「…隆史君」

「なんすか千代さん」

「相変わらず、私の扱いが酷く雑な時があるって思うのだけど…」

屋台を出た瞬間…スツ…と背筋を伸ばし…いつもの千代さんに戻った。

その変わり様に半場あきれて眺めると、口元を扇子で隠して目を逸らした。

「いつもの大人な千代さんなら丁寧に扱いますよお？」

「あら、なんら今も変わらないと思うのだけれど…？」

…この人も世間体ってのを気にしているんだろうなあ…。



確かに誰に見られても、いい大人の女性が裏路地でへべれけになっ  
ていたら引くわあ…。

ON・OFFがハッキリとしすぎていて、ちよつと怖いっす。屋台  
の中ならOKって訳だったんすね。

…まあ今の状態も本人は聞けば否定するだろうけど…絶対に気合  
だけで「いつもの千代さん」を演出・キープしてんだらうなあ…。

でもまあ…一応。

歩き出す前に聞いておかないと後で大変そうだ。

「大丈夫ですか？ 歩けますか？」

「ええ、もちろんです」

……。

いや。貴女顔真つ赤ですやん。取り繕っても、フラフラ小刻みに揺  
れてるやないですか。

「…」

「……」

思いつきりジト目で見てやると、だんだんと目線が泳ぎだしまし  
たね。

「…」

こりやあかん…と、タクシーを呼ぼうと、おもむろに無言で携帯を  
取り出す。

「ちよつ！ ちよつと待ってくださいー！」

「なんででしょう？」

思いつきり輝く笑顔…というのを意識して返すとあからさまに  
焦っていた。

俺が何をしようかとわかつたんでしようね。もはや無理。強引に  
自宅へと帰宅させます。を、敢えて露骨に演出しましたからねエ。

「ええと…その…宜しいのでしょうか？」

「はい。露骨に何か企んでいそうで恐ろしいので」

「」

分らぬとも思っていたのだろうか…むしろ、すでに俺にバレて諦  
めていたと此方は思っていたんですけど…。

何が宜しいか：は、お互いに流石に言葉にしない。

：お外ですしね。

まあ：アレです。騙されるってのが、俺が嫌いなものを知っている彼女だ。

何か策略があつたのだろうけど、その事で少々俺は怒っている。：とでも思つたのか、目に見えて狼狽えたな。

「……う」

俺が黙っていると、更に狼狽え始めたな……。

この人の酔い方からもそうだけど：アルコールが入ると千代さんって、少々子供っぽくなるよなあ……。

意外っちゃ、意外ですけどね。

「わかりましたあくもういいですう」

：すねた。

とても分かりやすく拗ねましたね……。

プライベート時間の、しほさんと話している時みたいになつとるな……。

「私が帰る……のは良いとしましてもねえ？ 隆史君はどうするんですか？ 明日はお休みですよね？」

「適当に帰りますよ。車で来ましたし」

「……そうですか。ならもう少し時間ありますよ……ね？」

「まあ……」

一応明日まで、レンタカー借りといてよかつたわ。

あ……でも千代さん家に駐車させて貰つてるから、結局一緒に帰らないといけないのか。

「なら少し寄りたい場所があるのですが……歩いて行ける場所ですよ？」

「……寄りたい場所？」

「……普段、私だけですと入り辛くて……。せっかく隆史君がいますので、ついでと言つては何ですがお願いしたく……」

……？

……ああ、なるほど。

前回と一緒か。随分とはしゃいでいたし、やはり物珍しかったのだろうか。

「いいですよ？　またコンビニですか？」

「ええ！　似たような場所です」

俺がそれ位ならと軽く返事をする、俺の機嫌がよくなったと思っただのか？　それとも純粹にあの彼女とは場違いな場所へ行ける事ができるのか？

やはりアルコールが入っているってのもあるのだろうか？　なんだろう？　純粹に無邪気に喜んでいるような笑顔をしてくれた。

まあコンビニならそっくら辺にあるし…この前とは違う店舗…つてところだろうか？

…。

…ん？

似たような場所？

—  
—  
—

「はっは—…」

出ない…乾いた笑いしかさつきから出ない…。さつきから何度も何度も喉を通る…。

なんて言いますか…。

ある意味スタンダードと言えば、そうなんすけど…。

横目で辺りを見渡すと、ピンクの派手々しいライトが壁や天井を照らしている。

ムードも何もあつたもんじやない。こういう施設って、ある意味でアミューズメント…の、一面もあるのだろうか…なんというか…。

ラブホじゃねえか…。

部屋に入るなり、すぐ近くのソファに腰を掛けると一気によくわからない疲れがでてきた…。

そりゃ一人じゃ無理でしょうよっ!!! ラブホ街に来た瞬間、ぶっちゃけ度肝抜かれて硬直しましたよ!

それに気が付いたのか、即座に強引に力づくで、目の前のホテルへ連れ込まれましたね!! そんなホテルの前やら、中やらで誰かに見られて御覧なさいよっ!

というかつ! 千代さんとホテル街にいたら、しかもそれが月刊戦車道の記者にでもパラッチされてみなさいよっ!! 洒落にならない程の事態になるでしょうよっ!!!

はあ…。

誰に向かって言い訳してんだ俺は…。

「思っていたよりも綺麗ですねぇ〜♪」

「言っていた通りに、初めて入ったんだろうけどさ…。」

かなりモノ珍しそうに、先ほどから部屋を散策してた千代さんが、バスルームから出てきた。

といつても、シャワーを浴びたとかではなく、本当にただの探索。ガラス越しに随分と燥いでいたのが見ていたので良くわかつとります。

鼻歌交じりで、風呂場の壁がガラスという造りになっている為、ベッドルームからも丸見えですからね…何故それをとでも楽しそう

に見て回っていらつしやるんでしようか？

酒も少し抜けたのか…完全なヘベレケではなく、少しハシヤグ程度に落ち着いてたから…まあ…うん。

「まあ…何かと思っただら…」

取り合えず次は、ベッド横の壁が何やらスライド式の大きな開き扉っぽくなっていたので興味を引いたらしい。

ベッドに脚をかけ、四つん這いになりながらも近づいていく。…思わずそのラインがはつきりと出ている綺麗な円を描いているお尻に目が行ってしまう辺り…俺もなんちゅーか…。

俺の視線を気にすることもなく、躊躇なくそれをゆっくりと開くと…まあ、そらそうだろう。予想通りのでけえ鏡。

…挙句。

「何かしらこの自販機…このボタン…あ、開いた」

「」

…。

今日一番のアンバランス感がこの上無い…。リゾートホテルのスイートとか…比較的上の階の部屋がディフォルトっぽい彼女。

その千代さんが、ラブホにいるんだぞ？ なんつーか…これも一種の背徳感とでも言うのだろうか？

なんかこの状況だけでも、すっげえエロいんですけど…。自販機の前で何かゴソゴソしてるが、何してんだろ…。

パキパキと何かを鳴らして…。

「隆史君？ どうかして？ あ、動いた。…なんとなくわかりますけど…コレはちよつと…」

「なにしてんすか!？」

いつの間にか常設してある自販機から取り出した…まあ大人の玩具というべき物を透明な箱から取り出して…電池入れてスイッチ入っていた。

しつかりセッティングしてるし…ウインウイン音出してるし…。

ラブホでバイブ持つてる千代さん。

…なんだよコノ絵。

「あく…もう、どこから突っ込んで良いのやら…」

「あら、えつち♪」

「……………」

いやもう…。

「……………でえ？」

「なに？」

「どこから計算されてたんですか？」

「あらやだ、人聞きの悪い。私が打算的な女に見えますか？」

…見えます。

その手の物が五月蠅かったのか、すぐにスイッチを切り、もう興味は失せたとばかりにベッドへと軽く放り捨てた。

まあ…はい。

「そもそも、此処のどこが…」

コンビニと似たような場所…なんすかね？

俺が言おうとした事を察してくれたのか…かぶせる様に理由を教えてくれましたね。

「え？ 此方はお手軽にコンビニ感覚で男女が馬鋏う場所でしょう？」

「言い方っ!!」

ぶつちやけてしまえば、スキル使えば千代さんの所でもどうとでもできた。

できたんですけど、何か企てていたのを分かっていたので迂闊にできなかつたつてのが、やはり大きい。

というか…いつもと行動パターンが違う彼女が、少々気味悪かつたつてのが…。

温泉宿ん時とか、すでに割り切つて開き直っている様な事を言っていた様に、いきなり舌絡ませてくる様な事してきたのに…今回は変に遠回しというか、回りくどいというか…。

「結局、千代さんは今日一日、俺に何をさせたかつたんすか？」

まあ…もういいや。正直に聞いてみよう。

千代さんと探り合い見たいな事しても勝てそうにないし…ここ

に来た時点で…まあそういう事だろうし。

「え？ 隆史君に本気で私を襲わせたかったんですよ？」

「」

どストレートな答えを頂きました…。

「隆史君がお酒もって来てくれた時…鴨がネギ背負ってやって来た…と、私の中で狂喜乱舞したモノです」

どストレートな感想を頂きました…。

「しかし、私を襲ってくれる気配どころか？ お酒を飲まそうとした時点で気付いてくれも良さそうなモノの、いつもと変わらなすぎなのが非常に腹立たしかったですねえ」

あ…アレやっぱりワザとか…。千代さんがあんなに分かりやすくアピールしてくるのはおかしいと思っていたからな…合点がいった。どーして皆して、俺に酒を飲ませようとすんだよ…。変なことになるの解りきってるだろうに…。

あ、そういうヤスキルつてのを手に入れてから、一切酔わされた事なかったよな…。

……。

俺でも何するか分らんから怖ええ…。

「あの…千代さん？」

「なんです？ ちなみに今、隆史君のお陰で、私のストレスが最高潮ですよ？」

「……………」

笑顔だ…。

…めっちゃ笑顔。

下手な事ぬかしたり、日和つてでもしてみろ。何をするか私も分らんぞ…と、暗にでもなんでもなく、ハッキリとその笑顔で仰っていますね。

「一応…ですね？」

「…はい？」

……。

あ、うん。その笑顔やめてもらっていつすか？

「今回、本当に今までの御礼をしにきたんですよ」

「ええ…まあ、丁寧なご挨拶でした」

若干テンプレ通りになってしまいましたかね…。

「ですから、正直に言いますとね？　そういった事を目的だと思われなくなかったってのがありまして…」

「……」

ソレはソレ。コレはコレ。

ある意味でちゃんと境界線を引いておかないと、だらしない関係…  
どころの話じゃなく、本格的にどこかでぶっ壊れる。

締める所は締めておかないと、絶対に綻びが発生して、どこかの時点で関係が露呈する可能性が高い。

今更過ぎるとも思うけど、双方の関係を秘密裏に進めて行く上で、必要な事…。

言い訳がましく淡々と説明するも、彼女も大人だ。黙って聞いていた。

そこはしっかりと分かっているんだろう…けど、俺がソコの部分をしっかりと考えている旨を伝えておかないと…。

でもまあ…ラブホになんぞ入るって危険性は解っていないかったみたいですけど…。

「隆史君は真面目ですねえ〜」

茶化す様に…でも何処か、嬉しそうなのは気のせいだろうか…？

ある程度は納得してくれたんだろうか…？

あ…。

「もう一つ聞いていいですか？」

「何でしょう？」

「なんで俺に酒を飲まそうとしたんですか？　こう言っちゃなんですが…普通に言ってくれば応えました…よ？」

「ん〜…それはですねえ」

これも今聞いておこう。あの温泉宿ん時みたく露骨じゃなくても…普通にしてくれば…。



「隆史君、基本的に受け身だから…最初から全開で迫って欲しくてえ」  
欲しくてえ…て…

可愛らしく言ってますけど…貴女すげえ事を仰ってますよ？ 要  
は初っ端から俺の中のスイッチONの…って事？

俺が一応、考えがあつて今日一日拒んでいましたら、もう強く言え  
ないんだらうね。自身の希望を少し言い淀んでいた。

ま…まあ…確かに俺って結構エンジン掛かるの遅い方ですけど…  
う…ん。女性って30代超えてくると、性欲上がるって聞いたこと  
あるなあ…そういや。

後は…まあ、彼女が先ほど言っていたストレスって奴もあるんだろ  
う…。

ぶつちやけて言つてしまえば、はつちやけたいと…俗に言う、滅茶  
苦茶区にして…つて奴でしょうか？

彼女もそこまで言つてはいないけど…まあそうなんでしょう。俺  
が黒いスイッチ入ってる時の彼女達の乱れ方すごかったし…。

……………。  
はあく…。

「千代さん、今何時ですか？」

「…は…はい？ ええと…もうすぐ21時半ですわね…」

「今、21時半か…8時間以上開ければ抜けるか…」

ため息を吐きながら、おもむろに立ち上がと…そのまま部屋備え付  
けの冷蔵庫を探す。

確か…クローゼットを開けると、先ほどの大人の玩具の自販機の横  
にある、小さな冷蔵庫を見つけた。

クローゼットの扉を閉めていれば、部屋からはある意味で無粋なコ  
レラを見えなくなるって造りだな。

「良いですか？ 俺でもどうなるか分かりませんか？」

「あの…隆史君？」

「先にも言いましたけど、俺以外に迷惑掛かりますから、朝6時まで出  
れませんかからね？」

認識障害を使えば安全に出れそうだけど、これに慣れてしまつては

今後また、面倒臭くなる。

…だからあらかじめ言っておく。

「今回だけですから」

そこまで言うのと冷蔵庫を開けた。その中はいくつも小窓に分かれている特殊な造り。

レバーというかボタンというか…その日本酒とワインと書かれたスイッチを押した。

◇

正直に言ってしまったえば、少し自暴自棄になっていたと言っても良いでしょう。だから正直に密かに企んでいた事を白状したというのに…。

未成年に飲酒をさせる。…普通に犯罪です。ですが、そのことから目を逸らし、こんなにも破廉恥な事を企ててしまった。

ある程度私に気を使ってくれたのでしよう。そこまで必死に見えてしまっていたと思うと、別の意味で恥ずかしい…。

冷蔵庫から取り出した小瓶。コンビニで見かけた気がする、安っぽい日本酒とワインの栓を開け、交互に一気に飲み干した。

ですが飲んだからすぐに酔うという訳でもない。飲み干した後、脚を少しふらつかせただけ。

少し時間が欲しいと、すぐにその横にあったベッドへと腰を掛けると、そのまま両ひざに腕を乗せ、頭を下に地面をずつ…と眺め始めた。

正直、とてもとても期待していた自分がある。夢だったとしても、その前…ホテルでの一室の時の事から…。

あの温泉旅館の時の様に、トップスピードへとギアを入れている彼は、とてつもなくすごかったのを身体が覚えていた。

1分、2分…と徐々に時間が経過する毎に、ゾクゾクとまた得体のしれない悪寒にも似た何かが背中を這い上がってきているのが解る。アルコールを摂取してから徐々に…変わっていく。彼はとてもアルコールには弱い様で、5分も掛からず変わってしまったのを一度目にしてからその時間経過もまた…。

「…？」

なんでしよう…酷く大人しい。

静か…余りにも静か。…なので、少し…確認しておきましょう…か？

もうすでに15分は経過したのではないでしょうか？ 前回は少なくともそれなりに、可愛らしい酔い方をしてきていたはずなんです…。

な…何故でしょう？ …こんな状況ですが、彼は仕方ないと言わんばかりに、今回は自らお酒を煽ってくれた。

それでも近づく事に少し躊躇してしまっている…。期待半分、警戒半分という所でしょうか？ それでも腰をゆつくりと落とし…彼の顔を下から見上げると…。

…信じられない結果となる。

そして…まさかこの歳で、こうも歳下の子に手玉に取られるとは思いませんでした。

「……………寝てる」

お…おあずけ…。

まず最初に、そんな言葉が情けなくも私をひどく落胆させた…。

小さな寝息を立てながら、ゆらゆらと小さく頭を揺らしている隆史君…。

初めて関係を持った夜は、私から飲ませてしまったのですが、彼がその状態になつてゐるのを一度見ている。

だから、上手く誘導させることができれば…と、色々と考えていたのですが…っ!!

普通、寝ますか!?

この状況で!?

…。

はあ…。

この無駄に派手な部屋で佇む私の…なんと滑稽な事か…。

一瞬、起こしてしまおうか…と、思いもしましたけど、彼は私に会う為に、長時間運転をしてきた事を思うと…可哀そうな気がします。

疲れていたんでしようね…それで私の様な酔っ払い相手にした後なので、無理もないでしょう…ね。

…はあ。

彼に背を向け、ここからも内部が丸見えのバスルームに自然に目が行く。

そういえば…クローゼットの中に、ハンガーが吊るされてましたね。女性が服を脱ぐ仕草も、また彼は好きそうでしたから敢えて脱がなかったというのに…はあ…。

かといって、私一人で佇んでいても仕方がない…。落胆のため息が何度もだしてしまいましたが…コレは邪な企てをした私への罰なのでしょう。そうとでも思わないと、あまりに惨め…。

…時間的に少し早めですが…シャワーを浴びて私も寝てしましましょう。ここから見えてしましますが、途中で起きてくれれば…。まあ、それでもダメでしたら本日は諦めましょう。

しほさんがいない今が、千載一遇のチャンスだと理解してはいますが、私の我儘を通して無茶させてしまうのも、また違うと思いますから。まあ…この鬱憤は明日彼が起きた時に、何割か増しで返して貰う事にしますか…。

「はあ〜〜……ひゃう!？」

…。

お…思わず普段出さない様な声を上げてしまった。

バスルームへ向かう前に、上着だけでも掛けておこうと先ほど見つけていたハンガーを取ろうとした時…違和感。

お尻が少し熱い…。

そしてすぐに理解し、思わず生唾を飲み込むように喉がなった。

バスルームへ意識が完全に向いてしまっていたので、ほぼ不意を突かれてしまった形になりましたが…コレは行幸。

ゆつくりとその違和感の原因を確認する様に、首を回し後ろを振り向くと…。

「……………」

隆史君が、私のお尻に手を伸ばしていた…。

ベッドへ座っているままですが、そこからその太い腕がまつすぐに…。

…落胆からの回帰。

胸が高鳴るとでも言うのでしょうか？ まだ顔は下を少し向いていたので表情はよくわかりませんが、その目は特徴的。

きつつ…たあ…。

意識が少し飛んでいただけだったのでしよう。そしてコレ…そして確信。

…完全に酔っている。

こんな時です。普通ならまず最初に会話から基本切り出す彼が、大洗の準決勝戦の時の様にまず最初に行動をし始めた。

「…んっ」

私の右の尻肉を少し指を動かした。

散々焦らされた為か、こんな簡単な動きでも声が漏れた。

さて…。

あの時の…しほさんの胸を鷲掴みにした場面を思い出すと、更にまた期待が膨らんだ。今の私達の関係なら、彼がどの様に動くか…。

……。

……。

「……………」

す…少し違和感。

彼は少し指を動かしただけで、得にそこから動こうとしない。

ま…まさかまた寝てしまったのでしょうか？

「…あ…の？ 隆史君？」

「はい」

…。

すぐに返事が来たので、寝てしまったという訳ではなかった。ただ…完全に動きが硬直していた…本当に私のお尻を驚掴みにしているだけ…。

何をする訳もなく、そこから動こうともせず、ただベッドに腰かけて、掴んだままの私のお尻を映ろな眼で…眺めている。

…。

……。

「ええと…何をしていますのでしょうか？」

「千代さんの尻を掴んでいます」

「……………」

違いますっ！ …我ながらとても愚かな質問を投げてしまいました…。

ああそうでした…忘れていました。彼、酔うと命令待ちのロボットのように…取り合えず動きが止まるのでした…。

まるでスタンバイモードと言うべきなのでしょうか？

ん…？

その割になぜ…。

「何故、まず最初に私のお尻を掴んだのでしょうか？」

「そこに千代さんの尻があったからです」

「…しほさんの時は？」

「そこにしほさんの胸があつたからです」

「……………」

「俺にとって、しほさんは胸。千代さんは尻。そこに境界線はありません」

「……………意味が分かりませんし、そこまで聞いていません」

「はい」

あ…頭が痛くなりました…。

隆史君からすれば、私に吐出した魅力的な部分…と、解釈しておけば多少は良いのでしょうか…この子、やはり酔わせると危険かもしれませんね…。

しかし完全に彼は今、制御下…。今ならば…いえ、ダメですね。

「……………」

せつかくのこの機会…。今の彼ならば、私の希望を伝えれば素直に聞いてくれるでしょう。それでは意味がありません…。

思いがけない彼の復活に、危うく最初の計画を忘れてしまう所でした。

しかし…どうしましょう。自由にすると、言ったところで逆に今の彼ですと何をしてくるか分かりませんよね…。かと言って…何をどう言えば…。人に対してそれ以上に好き勝手させる命令…というのは、難しいモノですねえ。

…。

「…あの隆史君」

「なんででしょう」

「何故突然、私のお尻を揉み始めたのでしょうか？」

「そこに千代さんの「もういいです」」

「はい」

先ほどの質問をしてから、ゆっくりと指が動き出した…。しかし無造作すぎると言いますか、事務的と言いますか…それよりも何故このタイミングで…？

特段そういった雰囲気にはなっていないませんし…。それでもまだ何も言っていないにも関わらず…。

こ…行動が読めない…。

上手く考えが纏まりません…コレは徐々に命令を小出しにして  
いった方が良いでしょうか？ 上手く誘導してすれば…？

あまりに露骨に言ってしまうのは、流石に下品すぎると思いますし  
…。

しかし隆史君。

いくら酔っているとは言え、今までここまでハッキリと私のお尻と  
か…しほさんの胸とか露骨に口にしなかつたはずよね？ た…確か  
に最中の時には、もつとすごい事を言いますが、まだ何もしていない  
というのに…。

前兆…と考えれば良いのでしょうか？ 取り合えず…【脱いで】も  
らいますか？ そうすればこの状態でも、ある程度察してくれるはず  
…？

いえ、しかしそれで彼がその場で佇んでしまった場合…なんとも言  
えない空気になりそうな…。

…。

…：わ…割と面倒臭いですね…。

なにか思っていたのとは違う気がします…。

「…ん？」

若干頭を悩ませていると、スツ…と、お尻を撫でる様に手が動き…  
そのまま彼が立ち上がると、私の左肩の後ろに彼の胸が当たった。

「んんっ!？」

ぐっ…つと、掴んでいた手に力が入った。痛みが走る少し手前…絶  
妙と言いますか…何と言うか…。意識がそちらへ集中してしまう程  
の圧力。

「っっー!」

思わず背筋が伸びてしまった。

掴んでいたその手を少し撫でる様に移動し、今度はお尻の間に指を  
這わせ始めた。ゾクツとした感覚が背筋を上り、一瞬また変な声が出  
てしまそうになる。

そのまま上下に手が動き始め…まるで服の上からお尻の間に指を



擦り込ませる様に優しく動く。

「んっ…あの…隆史君…まさかとは思いまっ…んう…思いますが…」

「…?」

「…痴漢の経験とかないですよね…」

「ある訳ないです」

それはそうでしょう…けど…触り方が別の意味でイヤラシイ…。

本音しか話せない状態での返答ですから、間違いがないでしょう。

しかし…隆史君の場合、自白剤とか無用ですね…。

そして余りに突然で驚いてしまいました。人のお尻の弾力で遊ぶ様に動くその手から、もう一つの確信を得た。

何故だか分かりませんが、彼がその気になりはじめた。

諦めかけた欲望が、また胸の中で徐々に…しかし確実に大きくなり始めた。

人のお尻を揉んだり、摩ったり…何か玩具にでもされている感じも否めませんが、それはそれでまた…。

次に腕を私の腰へ廻し、通り過ぎた手で脚の付け根をゆつくりと摩り始めた。このゾクゾクとした、こそばゆい感覚をもう片方の手を使い、太腿を撫でながら…引き延ばす様に下半身全体へと広げて行く。

この子は歳の割りにがつつかない。…こう秘部を直接触れてこそ、マッサージの様に身体全体の感覚を上げるみたく触れてくる。

「んうっ…っ…っ…はっ…」

ここまで長かった…。

焦らされたと言っても過言ではないでしょう。漸くかと…心底思える程に身体が反応し、彼の動きに応える様に息が漏れてしまう。

でもまだ。まだ彼が完全にその気になったとは言えない。逆に言ってしまうば、思っていたよりも私のお尻に触れる彼に一切の躊躇が無く、今の彼が「本格的に動き始めた」ら…と考えると…。

……………。

無意識に頬が上がったのが解る。そして期待が願望に変わってきた。

ならばこそ…ただこちらも受け身だけではなく、少し行動に移した

方が一気に波に乗ってくれるかもしれ…な…。

「…っ!？」

そう…思ったので、彼の首にでも腕を廻して身体全体を使って抱きつければ察してくれと考えてみました。

まあそうなれば必然的に彼に体の方向を向ける事になる。まず彼の様子からどうするか判断しようと顔を向けたのですが…。

「たっ…かし君…いつの間に…」

「…?」

アルコール摂取状態の彼はとても大人しい。いつもの軽口を出す事も無くなり、基本的に良くも悪くも「待ち」一辺倒。

しかし…今回はすでに彼から行動を起こしてくれたのですけど…ええと…。

すでに全裸になっていたんですが…。

本当にいつの間にか脱いだのでしょうか? そんな気配など微塵も無かったはずなのですが…。

会話を続けるよりも、すぐに腰に手をかけられ、そのまま彼の胸へと引き寄せられていた。

…。

嫌でも目に入る。

引き寄せられたお陰で手に少し触れた。

それは私の思いに応える様に…すでに理解してくれていると分らせてくれる程。すでに大きくそそり起ち、ビクンビクンと小さく脈打つ…彼のモノが。

「…っっ」

小指が少しソレに当たると、それだけで動けなくなってしまうた。そして頭の中が真っ白になり目が離せない。

初めて見る訳でもないというのに、とにかく眼が動かない。目を見開いてでもしているのか、眉が上がってしまったっている。

そしてただはしたなく、喉を鳴らす…。

「んっ…ちゅ…」

どちらかから…とか分らない。

身体が動かない為何なのかは解らないが、ただ顎を上げ唇を会わす。

暖かい体温と共に、彼の舌が口内へ滑り込んできた。いえ、滑り込ませたのかもしれない。

ああ：もう、本当にどちらでもいい。

当初の計画も忘れ、ただ漸く。待ちに待ったと、ただ貪る様に舌を絡ませる。

ヌルヌルとした感触がただ気持ちよく、そして心地良い。私の舌の動きに合わせ、コレもいつもの様に小さく絡め返してくる。

口からだらしなく唾液が溢れ、顎へ伝い：墮ちる。口を吸い、唇を舐め、舌をまた絡ませる。

：手の中も熱い。

気が付けば彼の陰茎が振れていた指は、振れている事にすでに満足できずに：亀頭を撫でている。

私の脳内とは切り離された様に、細かく指が動く。彼の弱い所をなぞり、手袋の下から少し爪を立て引つ搔く様に刺激すると、時折ビクリと動く反応を楽しんでいた。

次第に指は添えられ、陰茎を握り、前後に抜く。

「んっ…はっ…はっ…んうう…」

何時しかこの部屋は、塞がれている口の隙間から漏れる吐息と舌と絡める音。ビチャクチャと唾液が絡み合う音が響く。

後は布が擦れる音が彼のモノを抜く手から聞こえる。どんどんとその手の中は熱くなり、その先から滲み出始めた体液と混じる音。そろそろ…。

「はっ…はっ…んんんっ!？」

突然、揉みしだいていたお尻から手を離し、後頭部に添えられた：と、同時に一気に舌を吸われた。

彼の舌全体が私の舌を犯す様に弄り舐める。それに呼応する様に手の動きを速めると、その先が少し膨らみ始めたのか引つ掛かる感じがした。

亀頭に指が掛かる瞬間、手で添える様に被せると：一気に手の中に

熱が立ち込めた。

ビクビクとしたその感触と共に、舌が一気に奥へ…。

…。

顔が異常に熱く感じる。

ビクビクと波を打っているのは、手の中のモノだけではなかった。それに合わせる様に、私の肩から下、つま先まで脈を大きく打っている。

…まさか、キスだけで果ててしまうなんて。

手の中の熱、今まで散々焦らされた経緯、そして突然始まった行為の少し異常とも感じる空気。

そのどれもコレもが集まり、舌先で感じていた快樂に突き抜かれてしまった。

しかもこんな短時間で…ああ…もう。

裸で肌を何度も重ねたというのに、ただその事実が妙に恥ずかしい。

顔をゆっくいと離し…顎を引くと、彼の口から私の口へと繋がる唾液の糸が部屋のライトに照らされてピンクに光る。

「はっ…はっ…はっ…」

行為をした訳でもないのに、だらしなく聞こえてきてしまう激しい自身の犬の様な息遣い。

せめて体裁だけでは…と、小さなプライドで体の痙攣を力で押さえつける。それでもカクカクと膝が笑ってしまいそう。

「…あら」

悟られまいといつも私を演じる為に頭の中を切り替える。

…彼のモノを握っていた手を上げ…彼に見せる様にゆっくりとその指を開いた。

「きよ…今日は随分と早いですね」

黒い手袋を汚した白い精液が、いやらしいコントラストを作り上げていた。

ニチツ…と鈍い音。精液が手全体に広がっている。指と指の間に糸を引きながら、そのまま手首へと伝っていく。

妙なプライドと妙な気恥ずかしさから、余裕ぶってしまっている自分をどこかで滑稽に思いながらも、その手から漂う男の匂いに…体がまた震えだしそうになる。

その匂いにもやられてしまったのか…無意識に舌を伸ばし、ただれ落ちる塊を救い上げて口へ運ぶ。

「……」

そんな私を見て隆史君は……無反応。

「たっ…隆史君」

「はい？」

「えっ………と…」

「…？」

少しは息が上がっているのか…小さな呼吸を繰り返してはいた。…が、私を見下ろすその目が…全て解かっている。と、私を詰る様に感じた。

その無表情にも似た顔で見られると、完全に看破されていると思え、段々と耳が熱くなってくる。

人間焦ると饒舌になる方もいますが…私はそれにはあたらないようです。…。会話でごまかそうとするも続かない…。

…しかし言いあぐねている私の次の発言を待つ彼は…なんともまあ…純粹な瞳をしているのでしようか…。この下にぶら下げている凶悪なモノとまるで正反対ですね…。

「あの温泉旅館で何度コレで泣かされたか…あつ」

「温泉旅館？」

「」

泣かされた…あの温泉旅館の夜。

その構図できてしまった故、焦っていた私は思わず声に出してしまった…。

「い…いえ、ちよくとあの日の夜の夢を思い出して…」

「…夢？」

「あの夜、かなり隆史君が張り切って私をいぢめてくれたお陰で？  
いっぱいの隆史君にいぢめられた夢を見てしまいました〜」

「はい」

「…」

「……？」

「あ…いえ…」

しまった…。

いつものノリでしたら、彼は照れる。照れてながらも返してくれる。

ですが…この酔っている隆史君に揶揄いは通じない…。全て真に受けてしまう…。

何を言っているのでしょうか私は…先ほどまでの空気がまた一転しました…。

それもコレも、アノ夢が悪い…あの強烈な感覚を残している為に、妙にリアルな思い出とされてしまっているのですから…。

み…認めてしまえば、また【体験してみたい】…と、どこかで変な欲があるのまた事実で、コレも私の自己嫌悪をさせ…。

「……………」

…。

…今、私はどの様な顔をしていたのでしょうか…？ この状態の隆史君ですら、少し訝し気な顔してますね。

なにか迷っているのでしょうか？ 今度は彼が言い淀んでいる様に感じます。

暫く黙っていると…一言だけ感情があまり籠っていない声で呟いた。

「…わかりました」

…え？

※ルート壊 【人妻・宴編】※ 夢の後遺症 中編

「…わかりました」

軽く答える様なその一言に、一瞬呆気に取られてしまいました。こんな状態の彼でも、冗談めいた事を言うのだと少し驚きました。

しかし…ドクンと一度跳ねた期待地味た胸の鼓動。ですが、それもすぐに馬鹿々しく感じ、自分自身を鼻で笑ってしまふ。

顔を見上げると、特に変わった様子もない。…彼なりに気を使ってくれているのでしょうか？

「何人ですか？」

…あら。

「ふふ…隆史君は催眠術でも使えるのでしょうか？」

「まあ…似たようなモノです」

この冗談を続けるつもりなのでしょう。

普段の彼ならば、苦笑しながら軽口で言いそうなモノですが…相性の悪い日本酒で酔っている為なのでしょう。そんな冗談を口にする事はあつても顔が大真面目。

本当にリクエストでも何でも聞いてくれそうな感じですね。

まあ…その様な顔をしていても、どうにも彼との軽口での会話は楽しい。

今回、襲われるつもりで仕掛けました…が、もうそれもどうでも良くなってきました。逆に酔っていてもその気になっている彼ですから…上手く会話で誘導すれば、本気を出してくれそうです。

やはり、しほさんがしないというのが、今回やはり非常に大きい。最初の時…途中から彼女が乱入してきた為に、彼の意識が分散してしまつた。

脚は痙攣し、腰が砕けて意識が朦朧としていた時ですけど…しほさんですらそのまま抱き、骨抜きにする程に体力を持て余していたのですから…もしあの時に彼女が乱入してこなかったらと考えると…。

…。

そう…本気。

思わず生唾を飲み込んでしまった…。

「そうですね、試しに一人お願いします」

「…頑張ります」

ふふ…頑張ります…ね。

冗談で返す分、彼はまだ余裕があると考えるのが妥当でしょう。頑張ります…ですか。彼もう一人分、頑張ってくれと言った意味でしょう。

コレならばもう。今度は寝てしまう事もないでしょうね。約…8時間…。コレからその時間だけは誰にも邪魔されない。

この事実だけで、ゾクゾクとした感覚が期待と共に背筋を駆け上がってくる。

とは言っても…ですね？ キスだけで一度果ててしまった事も、やはり何処か変なプライドが邪魔をします。それを余裕を見せる事で、誤魔化そうとしてしまった。

しかし…本当に何時脱いだのでしょうか？ 彼はすでに全裸…。それに合わせる為に私も…ああ…まあ最初にコレですかね…。一つ一つ衣類を脱ぐ事で少しでも彼が興奮してくればと、取り合えず彼の精液でベトベトに汚れてしまっている手袋を取ってしまおうと親指を下に入れた。

ストリップをしてしまう事になりそうですが…彼の目線が少し気になる。ええ…どう私を見るか…その視線をどう動かすか…興味がとても沸いてきますねえ。

湿った布が指に引つ掛かりながらも、徐々に手袋を手から抜ききく。そのまま趣味の悪い、無駄に派手な部屋からすれば、かなり不釣り合いで質素なガラステーブルへと置いた。

素手になった指には、少しヌメツ…とした感触。何気なく指を擦り合わせ、その感触を確認してしまう。その独特な匂いがまた私を…。

「…っ？」

その手を…手首を後ろから掴まれた。



彼の顎が少し当たった。そのまま髪を掻き分けるながら、キスをす  
るかの様に口を首元へ這わせる。

掴んでいた手首を放し、滑らせながら下ろすと、彼の体温が背中に  
感じる…。私の胴体付近を優しく後ろから抱きしめた。

そういえば…こういつた行為は、今までありませんでしたね…。

首元で感じる彼の息遣いをもう少し感じていたくもありましたが  
…その彼の顔を首を回す事でだけ…顎を上に向けた。

私の行動の意図にすぐに気が付いてくれたのでしょうか…そのま  
ま唇を合わせて来てくれました。

「んっ…ちゅっ…はっ…」

口を開き、舌を再度絡ませ、下唇を舐め、少し噛む。

これが始まりの合図とばかりに、彼の腕が動き始めた。

私のお腹を摩る様に移動しながら、私の体を上を手の平が滑る。お  
腹を、太腿を、胸の上を…。

ただ胸や秘部に触れての直接的な愛撫ではなく、くすぐるかの様に  
動くこのボディタッチ。まるで全身を愛撫されているかの様。

揉んだりする事もなく、ただ凹凸を確認するかの様に摩り…動く。  
それに合わせ、徐々に私の全身の感覚が研ぎ澄まされていく。

「んっ…はっ…あ…相変わらず…」

「…。」

本当にこの子…女性の身体の扱いを完全に理解しているかのよう  
…。

スローSEXとでも言うのか…身体感覚だけでもなく、この様な  
愛撫は、気持ちをもまた高ぶらせてくれる。

この位の男の子だと…本当にもっと性欲に正直なのだと思うので  
すが…彼の行為は何時も相手の為なのであると、嫌でも分つてしま  
う。

何度を口を吸いあい、少し口が離れば少し荒くなってきている自  
身の呼吸が、身体に響く。

マッサージをするかの様に優しく身体を摩り、ほぐす。時折、焦ら  
すかの様な手つき。

私の息を…身体の反応を見て手の動きを変えてくるのが…何処かまたイヤラシイ。

「はあ…はあ……んうっ!？」

…かと思えば…突然、強めに胸を掴まれた。

感情が高ぶってきてた時に、突然コレ…。服の上からというのもありませんが、結構な圧迫感。

一瞬だけ少し痛みが走ったが、すぐに手の力を抜き、指で今度は胸を揉み下し始めた。それは先ほどまでとは違い、少し乱暴…乱雑とも言うのでしようか？

私の胸の弾力を確かめる様に、少し乱雑に5指を動かす…。

「あっ…はっ…あっ…」

胸の先、服の上から下着ごと強引に乳首を挟もうと指に力が籠った。当然シャツはともかく…下着の厚みに勝てずに失敗し、指の間から滑り落ちる。

それを何度も何度も繰り返すものですから、胸の先端を繰り返し摩擦られて…いえ、擦られ続けられているモノ。

自由になつていた両腕は、無意識に…でしょうね。彼の口を離すまいと、頭の後ろへと廻し抱きついてしまっている。…その為、必然的に彼の手の動きを受け入れるが如く…胸を突き出している。

彼は私のジャケットを脱がす事もなく、その隙間からいつしか両手で両乳房を…何度も弄ってくれる。

丁寧にして乱雑。両手で私の胸を玩具の様に扱われているというのに、徐々に自分自身の声色が変わってきた。

口を吸い続ける音だけの部屋に、シュツシュツと…布が何度も擦れる音が追加されていた。

ああ…やはり。

会話があまり無いのが少々寂しくは感じますが、その分彼は行動で示してくれる。それは妙な安心感でも言うのでしょうか？

身体全体にも徐々に熱が上がってきて、その先…行為の続きを望み始めた時、分っていたとばかりに身体に別の感触を感じた。

両脚のふくらはぎ上に触れられる感触。そのままスー…と、脚の肌

を下から太腿まで両手で滑らせながら、一緒にスカートが捲られる。振れた手の平が上に上にと、登ってくる感覚がゾクゾクとした感覚も一緒に連れてくる。口の中の舌が少し激しく動き始めると、その感覚も伴い、合わせて私も激しく動く。

脚の上を滑る手が腰にまで達すると、ストッキングの間に指が入った。それと同時にシャツの間にも指先が入り：下着と胸の隙間へとそのまま入って……。

…。

…え？

とてつもない違和感に、思わず夢中になって舌を絡ませていた口を離すと：すぐに目に入った顔は、変わらず彼ののまま。

腕：手：胸と脚：。胸を愛撫していた彼は目の前：。しかし、普通簡単に下ろせるものではないというのに、すでに脚首まで下げられたストッキング。

私に触れた手は4つ。ただその事実反射的に顔を下へと向けてしまった。

目に飛び込んできたのは、顔は下を向き見ないが：何処かで見かけたシルエツト。

信じられない程に胸が脈打つ。

第三者なんてあり得ない。今ここに誰かが入ってくる事、彼は私と：いえ、しかし：と、状況判断する自身の否定と肯定。

どんだんと混乱する頭が、妙に熱くなっていく。胸の鼓動が更に強くなり：膝がカクカクと笑い始めた。

「はい、ちよつと脚上げてもらって良いですか？」

聞き慣れた声。

声を出す事もなく、思わず素直に声に従い右脚を上げた。スツとすぐに縮んだストッキングを抜き出すと、続けて：と左脚も上げると催促された。

上げられた左足からストッキングを完全に引き抜くと、その脚を下から手を添えた。顔を上に上げ：完全に見えた彼の顔に、それこそ心臓が壊れてしまう程に鼓動が更に強くなる。

あの温泉旅館の行為が、何度もフラッシュバックする。  
：それでも、私もアルコールが入っているとはいえ、今は意識がはつきりとしている。

この非現実的な現状に、どこか頭の隅で生じる「矛盾を潰す為」に彼を見下ろし、視覚から違いを探す。

どういった原理なのか：…なんの冗談なのか：「そんな細かい事」なんてどうでもよくなり、即座に「消え去る」。

彼は彼だ。第三者ではなく、彼自身なのだ：…完全に「確信」を得ていた。

なぜなら：一度「私には経験がある」という。

確信に導く為に、その理由という言葉が自然と頭に刻まれるよう。

刻まれ、納得させ、確信して：…「」する。

「…つつんあー！」

足元の彼に気を取られ、後ろの彼の両手がシャツと下着を弄り、私の胸をいつの間にか露出させていた。

絞る様に両手の人差し指と親指で、その胸の先端を少し強く潰した。痛みよりも突然の刺激に熱が更に高まる…。

先程からの離れず感じる背中にいる彼。

足元でこちらを見上げている彼。

現実感と非現実感が同居している。

「すいませんけど：…両手で捲っていてくれませんか？」

捲る：スカートの事を言っているのでしょうか。私の顔を見上げている彼は、どうしようもなく彼でした。

「はっ…はっ…はっ…！」

後ろから両乳房を玩具にされながら、私は開いていた自身の両手で太腿上のスカートを握る。

少し脚を開きながら、そのスカートの先端を手繰り寄せる様に何度も繰り返す。

徐々に捲りあがつて行く様を足元の彼は見ながら、何度か私の顔を見上げてくる。目が合えば合う程、彼は彼なのだ…。

彼が二人：あり得る訳がない状況…と、否定する思考を何度も繰り返す度に、心臓の鼓動を上げ、私の中の熱を高める。

納得し、安心し、否定し：期待する。

それをこの短時間で何度繰り返したか。

…逆に言ってしまうば：思考できるというのは、ある程度の余裕があるという事。

スカートを腰元にまで捲り上げた時、その思考も消え去った。

足元の彼は、私のショーツを目の前にする、顔を押し付けて来た。頭で太腿を押し開ける様に：捻じ込む様に…。

片手で私の脚を少し持ち上げると、ショーツごと上から、私の秘部…その先端に軽く噛みついた。

「んうあっ!!」

それと同時に溜めに溜め込んだ様な熱い息が、喉元を通り吐き出されてしまう。今まで触れては来ず：焦らされるだけ焦らされた。

その反動もあります、彼の攻めが凄い…。

「あっ…はっ…：あっ!!」

恥ずかし気も無く大きく声を上げ、その快感に思わず身体が縮こまる。背を曲げ：気が付けば彼の頭に手を添え、身体を支えています。

彼の動きが一気に動く。ショーツの上から…まさにむしやぶり付いてきました。

陰唇の形をなぞり、確かめる様に口を這わせ：唇と歯で下着の上から強引に開く。指で下着を少しずらすと、躊躇もなく舌が陰部へと侵入してきた。

先程の優しいペッティングとは極端に違い、今度は遠慮も何も無い。私の中で彼の舌が暴れまわる。ただ膣内を乱暴に動き回るだけではなく、乱雑ですけど浅い所だけ…ほじくる様に…と、しっかりと私を焦らす。

こんな今の私に対して、彼ならば容易いでしょうに：私の快感が

解っているのか、決して絶頂にさせようとしな。

一瞬、ゾクツ…とした感覚が走ると、すぐに舌だけを抜き出し、私に聞かせる様に派手に愛液を啜る音を響かせ始める。

「あっ…あ…んう?!」

突然、後ろの彼に強引に快樂に耐え切れずに縮こまっていた身体を強引に起こされた。

背筋が伸びきった所で片手で顎を掴まれ…顔を向かせらると…また唇を塞がれた。いえ? 塞いだのかもしれない。

…伸びた背筋、顔を固定され、両脚は彼に掴まれている。振る事も出来ない身体には、秘部から伝わる快感から逃げられない…。

「んっ…ちゅっあっ! はっ…んうっ!」

ガクガクと膝はまた笑い始め、また何度も往復する絡み合う舌の快感を貪る。唇で彼の舌を扱き…啜る。胸を愛撫する彼の指は優しく…反して秘部を愛撫する彼は激しく荒い。

一人では不可能な愛撫に、刺激と快感と悅樂に徐々に頭の中が溶けていってしまいそう…思考ができなくなってきました。

今、私は…完全に私は期待している。

だってそうでしょう? 非現実的な出来事だというのに、コレが現実だと認識してしまっている。

足元の彼が、誰でもない彼自身だと確信してしまっている自分に思考の処理が追いつかない。

加えて、今までにない…いえ、あの夢で体験した、どうしようもない逃げられない快感と快樂を、またこれから味わえるというのですから。

彼の口を啜り、両手で衣服を捲り、男に向けて脚を開いている私。

…いつの間にか、彼らの動きが止まっていた。息も切れ切れ…何度も胸が動くほどに呼吸を繰り返している自分にも、止められた快樂で気が付いたほど。

二人同時の愛撫に夢中になってしまい、吸いあっていた口の端から涎を垂れ流し、ハツハツハツと細かい息を繰り返しているだけの…そう、まるで犬みたいね…。

「千代さん？」

何故でしょう？ とても久しぶりに声を聞いた気がします。そしてとても久しぶりに名前を呼ばれた様な気もしました。

どちらの彼に向けての発したか分かりませんが：私に問いかける様な彼の声に：…多分：私は返事を返していたのでしよう。彼が次の言葉を口に開いた。

「…なんで笑っているんですか？」

…何故でしょうね？

◇

ある意味、自分の意思で酒を飲んだのは、初めてではなからうか？

しかし、酔いが少し冷めたのか：ある程度思考しができてきた。というか、そんな考えができるのだから大丈夫なのだろう。

酒で鈍った頭に、いかんせん千代さんの「希望」が、所々で流れ込んできて、それに対応するだけで精一杯だった。

このスキルつてのが、どうにも最近扱いが難しくなっている気がする。気が付けば「有る」。

こちらの都合を図ったかの様に、検索すれば状況に対応できるように、まるで今そこで造ったかの様に。

それはス「」

…。

まあ、それは別に今考える事じゃないな…。

「そんな事」より千代さんだ。

襲って欲しい？ …とか、ボーダーラインが非常に難しい事を希望されてきた。どこから、どこまでかと…。

酔った俺が前提に来ていたのを考えると、ある程度は手加減無しでして欲しい：…って事だったんだろうか？

取り合えず、思った以上に彼女は色々な意味で墮落していた。

しほさんも開き直ったと言っても良いのだろうが、千代さんの場合、少々違っていると思う。

俺との関係を開き直っていただけではなく、その先：背徳感も含め、この今の関係を楽しみ、快樂に対して渴望し始めている。

温泉宿で二人共、積極的というか：俺に対して結構強く迫ってきた。それに対してまあ：はっちゃけてしまった訳だけど：夢として処理したせいで潜在意識に刻まれてしまったという事なんだろう。

あゝ：いかん。

やはり日本酒つてのが、俺はどうも体質に合わない。

プラウダ戦の時のように、妙に頭がスッキリとするのだけど、深く考える事が上手くできなくなる。

彼女の希望に沿って、さつさと酔ってしまえとビールなどよりかは強い酒：という事で飲んでみたのだが、やはりこうなったか。

千代さんの現状を分析してみたのだが、途中から考えが纏まらない：というか、面倒臭くなる。

【……………】

…考えるよりも先に、行動に移してしまった方が楽なんだろう…。  
そもそもが、今回自分から酒飲んだもの中途半端に理性が残っていると千代さんの希望が叶えそうにないと思っただけか？

まあ：それなら取り合えず、目の前の彼女に集中しないとな。

…だけど【……………】

な【……………】

…で【……………】

【……………】

「……………」

…一つ、忘れていた。

彼女の希望が沿う様にと、今まで考えて来たが：その中の「俺」自身の事を。



ある意味でそれを抜かしてしまっているのは、彼女達に対しても失礼なのではないだろうか？

しほさんと千代さんの為…まあ今回は千代さん一人だが、彼女達を悦ばせる為だけで、行為そのものに対して「俺」が悦んでいない。文字道理、身を挺して俺を悦ばそうとしていくれているのに、そこを無視していた気がする。

…いやしていた。

こんな関係になってしまったのだから、せめてと思い、必死で彼女達の希望に沿うようにしていただけたと…何故か、今、「キガツイタ」

なら今こうして考え込んでしまっていては失礼だ。

「……………」

見下ろしてみると前髪で目元が隠れ、表情はよく見えないのだが、その口は薄っすらと…彼女は笑っている。

ならまあ…コレで正解だったのだろう。この現状を受け入れてくれているのなら、特段もう遠慮することもないだろう。

悦ばせ…悦ぶ。

そうだ、本来SEXという行為は、そういうものはずだ。

小さく熱い呼吸を繰り返している彼女の肩は、俺の胸へと預けられている。その千代さんの足元で、俺の思考が停止してしまっていた為なのか、完全に動きが止まってしまっている分身。

激しいのをお望みだったので、そこそこ乱暴に攻めさせてみたのだが、千代さんの反応を見る限り、コレも正解だったみたいだ。

…さて、意識を切り離そうか。リモートではなく、オートで。思考回路は俺と同じだし、消してしまえばそのまま俺の記憶にもなる。

今回は行為に関しては「分身」以外のスキルは使わないでおこう。素の千代さんが、どう変わっているか…正直興味がある。

だから、彼女の希望や欲望が俺に流れ込むようにしていたスキルも切っておこう。「看破」だったか？…まあなんでもいいし、どうでもいい。

さっそく「俺」をオートへ変更した所、すぐに立ち上がった。

真正面から見る「俺」は、鏡をみているのとあまり変わらない。ドツペルゲンガーの様だ：とか、気味が悪いなどの感情は一切浮かばない。

「俺」が立ち上がった時点で、腰：いや、痙攣していたし、脚にもきていたんだろう：下から支えるモノが無くなった千代さんは、その場にゆっくりと：へたり込んでしまった。

さて…。

座っている千代さんは、両手を床に着き下を向いているというのに、はあはあと聞こえる程に解りやすく肩を上下に揺らして大きく息を繰り返している。

俺は動くこともなく、その様子を「俺」と一緒に二人で無言で見下ろしている。やはり分身というだけあって、行動パターンは一緒の様だ。

どうでるだろうか？ そう、彼女の次の行動が気になる。

：暫くすると、大きな呼吸は止まり、ゆっくりと顔を此方へ向けた。俺達が次の行動に移る事もなく、ただ自分を見下ろしている事に彼女も漸く気が付いた様だ。

…。

今更だけど、彼女は何かいきなり俺に服を脱ぐ事を希望したのだろうか…？

ある程度ならば解るのだけど、細かい事までは把握できないからな…スキル。

お陰で俺が二人、フル勃起した全裸状態で彼女を見下ろしていると…  
いう凶になってしまっている…。

…ん？

顔を少し上げ：何かに気が付いた様に此方を見上げた。

千代さんの前後にいたはずの俺達は、彼女が崩れ落ちた際に少し体を動かした様で左右にいる立ち位置。その為：顔を上げた彼女には、左右両方から突き出された男根が視界に飛び込んできたはずだ。

あんな状態の千代さんを見て、大きくならない方が無理というモノ。「俺」の方も、俺と同じく完全にMAX状態。

彼女の表情は、見下ろしている位置と前髪が邪魔をして目元が見えない為、どんな表情をしているか分らない。

分らない…が、表情が分らない代わりに、音が教えてくれた。

ゴクツ…と、大きく喉が鳴る音が聞こえた。

床から手を離し、身体を少し起こした。そのまま両腕をゆつくりと上げていく。

恐る恐る…とでも言うのか、ゆつくりと上げていたその腕が…手がある高さで止まった。

…何かを迷っているかの様に陰茎の前で…ただ手を開いた。

その手の細長い指は、小刻みに震えている。

また一つ…喉が鳴る音が聞こえた。俺は…俺達はその行動に対して何をすることもなく、ただそのまま見下ろしている。

そうだな…千代さんは明らかに迷っている。

…もう彼女の希望は俺には分らない。「催淫」も使用していないので、アルコールが入っているとは言え、今の彼女は正気と言ってもいいだろう。

初手から「催淫」と使用した温泉宿の時とは明らかに違う。考える事が今の彼女にはできている。

その千代さんが迷っていた。

非現実的な事が起き、分身が明らかに「俺」だと認識しているとはいえ…物理的な男、二人相手だ。

突き出されたソレを手に取りするという事は、行為を続けるという意味。それは倫理的にも今までの彼女からしても…それは千代さんの何かが完全に変わる。

俺が指示を出したり…何かを言えばその通りに今の彼女はしてくるだろう。しかしそれでは完全に千代さんの意思ではない。「俺」という逃げ道を作ってしまう事になる。

だから、敢えて、ここは…彼女に任せる。否定し行為をやめれば、俺はすぐにも分身を消す。行為自体をやめるだろう。

指を震わせ、徐々に息遣いが荒くなっていく千代さん。

もう今の彼女の「希望」は解らない。どうするかは彼女の選択。そ

れに俺は応えるだけ…。

「はっ！ はっ！ はっ！」

知ってか知らずか…千代さんは分身ではなく、本当の俺に対して顔を向けた。

久しぶりに思える程に見えた彼女の表情は、いつもの凜としていた彼女からかけ離れていた。

目を見開き、眉を顰め…唇を湿らせ…笑っている。

その笑いは混乱から来るモノだろうな。人は極度の混乱状態になると…比較的に笑う。それは逃避行為にあたる。まさに現実逃避というやつだ。

いざ実際に行動を起こそうとすると理性が邪魔をするのだろう。前世で何回か見た事があつた為にすぐに気が付いた。

犯罪を犯す寸前の人間によく見られた表情…だ。今は別に犯罪を犯す訳ではないのだけど…彼女からすれば等しい行為なんだろう。

これは言うなれば…彼女自身、今までの自分を殺すという行為。

普通の一般人ではなく、島田流家元という立場ある女性…。しかも彼女の人生観では明らかに異質なこの状況…。

行動にすれば酷く簡単な行為。ただ握るだけ。しかし確実に千代さんの中の何かが変わる。

本能的に感じているのか、だからこそその助けを乞う様な彼女の表情。俺に背中を押して欲しいのか、止めて欲しいのか…俺には判らない。

だからこそ俺は何もしない。何も言わない。ここまでのただだから、後は彼女が選べば良い。

…。

時間がどれだけ立っただかわからない。わからないが…時間が経つに連れ、彼女の目は俺の顔から、もう一人の俺へも何度も移る。何度も見比べ、両手の前のペニスに喉を鳴らす。

徐々に口は開き…半開きになったその口からは、喘ぎ声にも似た吐息が何度も吐かれる。

心臓の鼓動に合わせた様に、何度もリズムカルに吐き出される呼吸

が…一瞬止まった。

「あ…はっ…あ…あ…」

思ったよりも早かったのか、遅かったのか…膠着が続いてたその状態は、漸く終わる。

…彼女は「欲」を選んだ。

何かに吹きかける様に、大きく息を吐き出すと…開いてたを閉じ…両手に男根を優しく握った。指先の熱が少し熱い。

そのまま形を確かめる様に、扱くというよりかは…前後に摩り始める。顔は真正面を向き…何かを噛みしめるかの様に何度か頷いていた。

…彼女の肩が少し震えていたのがわかった。やってしまった…と、後悔でもしているのだろうか？　しかし行為をすでに彼女は始めてしまつて…それは止まらない。

優しく摩つていて手に力が入り、ゆつくりと絞り出すかの様に手の中のペニスを扱き始める。それを合図に俺と「俺」は一步…彼女に近づく。

ここまで黙っていたのだが、俺が余りに反応しないというのは、彼女に取つては苦痛になつてくるだろう。

「はっ…はっ…っ…っ…」

ここまででは一切の会話がなかった。その為、俺の行動に一瞬千代さん少しが難色を示した。

左右から両肘を少し掴み、立つ様に上へと上げる。それに素直に従う千代さん。膝が上がり、太腿が上がった時点でその手を離れた。

「流石に痛いでしょう？」

土足厳禁とはいえ、床は絨毯使用の部屋じゃない。両膝を立てていればそのうちに痛くなつてくるだろう。俺の意向を理解してくれたのか、膝を上げ足を着き、しゃがみ込む様に座り直してくれた。

軽い気使いだつただけで、千代さんの震えが少し取れた。少しは極度の緊張状態が緩和してくれた様だ。

…まあそれだけじゃないのだけど。

一度仕切り直した格好になっただが、出来上がった絵は先程よりかなり卑猥。

両手に持ったペニスはまだ離さず、身体を左右から俺達に挟まれる。胸だけは服から露出し、スカートは捲れ上がり太腿は露わになっている。

しゃがみ直したお陰で、亀頭の先は丁度彼女の顔の位置…。

ここで俺と「俺」は、彼女を避ける様に左右にゆっくりと回る。一歩近づけば、ソレもまた近づく。

ソレを握っていた手と一緒に肘が曲がり、彼女の顔に突き出す様に亀頭が更に顔に接近した。俺が二人接近すると流石に狭さを感じたので、特に深い意味はなかったのだけど、それは俺が次の行為を催促したかの様に感じたんだろう。

…千代さんの口が…何も躊躇なく大きく開かれ…舌がゆっくりと出された。顔を反対側へと向け…そのまま「俺」の亀頭の先をゆっくりと舐め始める。

始めは触れただけだったのだが、すぐにその亀頭を舐め回すように大きく動く。まだ少し戸惑っているのか…ゆっくりとした動き。

俺が彼女の頭に手を添え、髪を少し撫でると、こちらに顔を向きなおし、今度は此方の亀頭先を舐め始める。熱い滑る感触に一瞬声がかそうになるが、なんとか飲み込んだ。

「はっ…んっ…えあ…」

亀頭の下に舌を伸ばし、顔を傾けながら裏筋へと滑らせていく。

彼女なりに段々とエンジンとやらが掛かってきたのだろう。「俺」がまた千代さんの頭を撫でると、彼女は反対を向く。離れていく口の代わりにと、握っていた手で何度も扱き始めた。

前回の温泉宿での事を思い出しているかの様な動き…。

「ぢゅっ…ぶっ…じゅっ…ぼっ」

「俺」の亀頭を口で包んだ。意識を切り離しているので、細かい事は解らない。…が、徐々に音が大きくなっていく。

亀頭のカリへ唇が引つ掛かっているのか、唾液が鳴る音と空気が漏

れる音が非常に…。

…つと。

今度は特に催促していないのだが、此方に顔を向けた。即座に「俺」と比べる様に、口内で形を確かめる様に…一気に亀頭へと口を被せた。

顔を上げると「俺」側には、同じく握っていた手を前後に扱っていた。

「じゅっ…ぶっ！」

千代さんの「躊躇」は徐々に、俺という男二人同時に奉仕をしている現実に「興奮」に変わり始めているのだろう。

口が離れている「俺」側の手の動きが、段々と早くなっていく。自身の唾液で濡れている陰茎の上を、その唾液が少し飛び散る程、白い指を滑らせている。

口で奉仕している俺側の動きも、段々と早くなっていく。すでに亀頭先を愛撫する事をやめ、その顔を前後に動かしていた。ゾクゾクとした感覚が背筋を走る。

「ブツ！ デュブツ！ ジュぶっ…はっ…んっ…んっ」

…。

というか…躊躇が無くなるの早くないですか…？ 一瞬酔いが冷めた気がする程に素に戻った気がする…。

亀頭の力りに唇をひっかけ、舌で亀頭廻りを舐め回している。そしてその先から根本まで、指のみで扱き始めた。カ리를刺激する様に小刻みに顔を前後させ、それと連動する様にまた指に力を入れ扱く。

「…くっ」

…その舌の動きと同時に来る快感に、思わず声が出てしまった。

その声に千代さんは一度動きを緩めた。顔傾け頬の裏側で亀頭先を擦る。傾けた顔から此方の様子を伺うような目を前髪の間から覗き込ませてきた。

俺がどんな顔をしたかわからないが、一瞬満足そうに眼を細めると…その口が離された。彼女の頭には「俺」側の手が乗っている。

それが合図とも思ったか、今度は「俺」側のペニスにむしゃぶり

つく。そう、むしゃぶり付くと言った言葉がしつくりとくる。

「じゅっぽー！ じゅっぽー！ じゅぶっ…ぶっ！」

ああ…完全に躊躇が消えたな。

下品な音を響かせながら、口を鳴らす千代さんを見下ろしてそう確信した。

「…千代さん」

「っぶー… はっ…はあ…はあ…んうう」

彼女の名前を呼ぶ。すぐに応え、こちらのペニスへとむしゃぶりついてきた。

彼女の名前を呼ぶ。すぐに応え、「俺」のペニスへとむしゃぶりついた。

どやら名前を呼んだ方が良いみたいだ。千代さんは夢中で左右のペニスへと交互にむしゃぶりついていた。

しほさんもそうだが、千代さんも言葉にされる事が好きみたいだ。

…一気にタガが外れた。

徐々に両脚は開き、肘は上がり…ただ口で楽しむだけの姿勢に変わっている。

もうすでにこちらか催促する事も無く、両手のペニスを交互に味わった。涎で顎がすでにビチャビチャに濡れ…部屋の明かりで唇が艶めかしく光る。

そして思う。

…ちよつと失敗したなと…。

意識を切り離すと、分身からの感覚が伝わらない。口が離れた俺のペニスは、手で扱いてはくれているのだが…物足りなさを感じる。

まあコレは彼女のタガが外れた辺りから、解消はされたけどな。

それと視覚。彼女が今、どんな顔をして奉仕しているのかが分らないのは、とても惜しい。

そう、とても惜しいので後で確認する為に撮っておこう。

…。

…。



「千代さん、夢中になってくれるのは嬉しいのですが…気付いています？」

「ヂュッパツ…はっ…はっ…は…い？」

俺が口を開くと…余程夢中だったのだろう。荒い息を繰り返しながら、鈍く光った眼を向けた。

それは俺でも「俺」の方でもなく、真正面。

…もう一人の『俺』。

離れるホールドされていた俺は、離れる事もできず…しかも全裸になつていたので、もう一人出した。

もう一人の『俺』は、真正面で先ほどからスマホを掲げていた。

「っ?!?!」

千代さんは、突然のもう一人の『俺』を見上げ、左右を見渡し、真正面をもう一度見上げる。

寸分違わぬ分身にすでに頭の処理が追い付かないのだろう…限界まで目を見開いていた。

ただ…『俺』が言った気付いているか？ は、自身の存在の事ではない。

その見開いた彼女の目に向かい、手に持っていたスマホの画面を彼女の目の前に向けた。

今回、俺は詰る事は言うだろうが、できるだけ強い言葉を使わない様にしていった。一部、蔑む様な言葉は千代さんには有効だろうが、今回はしない。

だから逆に事実だけを、視覚で見せつけるというのも、手だろうと判断した。

『俺』から向けられたスマホの画面は、俺からも見えた。

開いた脚の上には捲れ上がったスカート。カメラへ見せつける様に下半身を露出し、亀頭へとだらしなく舌を這わしている。

そこからは卑猥な音を響かせながら、二人の男に股を開き、交互にペニスを味わってる女性が映っていた。

千代さんの顔が徐々に青ざめていく…。彼女自身「欲望」を選

んだとはいえ、ハッキリとした今の自分の姿はショックだったんだろう。

…淫らに口いっぱい男根を頬張る自身の姿は。

しかし彼女は眼を逸らさなかった。…その青ざめた顔には、すぐに紅色が差し始め…スマホの映像が流れていく度に、呼吸がまた乱れ、熱い吐息が何度も吐き出された。

どんな表情をしているか、此方からは見えないが…『俺』が立ち上がると…何となく理解した。

真正面から彼女の顔へと、もう一本のペニスが突き出される形…一歩前に『俺』が出ると…千代さんは大きく口を開けた。

「おっ…!? っっっ!!!」

直後、開いた口にペニスを押し込まれた。

奥まで一気に届いたのか…千代さんの苦しそうな声が出た。

「あ、すみません…流石に千代さん、エロすぎて我慢が限界だったんで」

…この『俺』は、少々軽いな…。

いかんせんアルコールが入っている俺だけでは味気ないというか、色々支障が出るかと思ひ…変にテンションが高い俺を設定してみたんだけど…。

変に冷静に思考できてしまっている俺とは違い、こちらの『俺』には遠慮がない。

「んごっ…ごっ… おっっっ！」

両手で頭を掴み、強引に千代さんの頭を乱暴に前後させる。

それでも彼女の両手は左右の俺達のペニスを離さなかった為、頭だけを強引に動かされている様な状況だった。

「少し乱暴な方が良かったんですね？ 俺もすげえ気持ち良いですよ」

喉まで使う様に、腰を打ち付け始めた『俺』。

この『俺』は、酒飲むとほぼ意識が朦朧としてしまう何時もの俺ならば、考えられない酔い方をしている状態…と、考えていいんだろう。

…イマラは今で遠慮して…というか申し訳なくて本気で出来な

かったのだけど、酒の入ったテンション高い『俺』は遠慮がないな。千代さんを口元から涎をまき散らせ、垂れ流しながらも文字通り「使用している」。口元からグチュグチュと音を大きく響かせながら特に抵抗する事もない。

両手は…流石に余裕がないのか、もしくは苦しい為なのか、俺と「俺」のペニスを握りしめているだけだった。

というか…ちよつと痛い…。

「おい…」

『あく…そうだな了解』

俺自身で分身と会話したのは初めかもしれない…俺のアレのサイズ的に、イマラは一種の拷問みたいなモノだろう？ 千代さんに流石に申し訳なさすぎて『俺』を止める。

それは了解と答えた『俺』も、もちろん解っている。流石にやり過ぎたと思ったのか、一気に口から抜き出した。

「ぐっ…はっっ!! はっ…はっ…はあ…はあ…」

短時間とはいえ、強引に使われた千代さんの口から抜き出されたペニスが、彼女の唾液が泡立って付着し、口と何本もの唾液の糸が繋がり、何本も切れて下へと落ちていく。

あれで嘔吐かないのは凄いとと思ったが、流石に苦しかったのか…大きく口を開け、自身の唾液にまみれにしたペニスを見上げる様に顔を上げ、何度も呼吸を繰り返して身体を大きく揺らしている。

ペニスに付着する唾液が垂れ落ち、彼女の顔を伝う。呼吸何度も繰り返しているが、ただソレを見上げている眼の色が明らかに変わっていた。



『んじや…どうしますっ…』

「んぢゆっ…はっ…はっ…れあ…んんっ!!」

『俺』が、千代さんに聞いた。

三人の俺に見下ろされ…突き出された左右の亀頭を口元に引き寄せ…同時に舌で舐め回している千代さんに問う。

足の親指で彼女の秘部を刺激すると、熱い吐息を吐き出す。

表面辺りを雑に掻きまわしているのだろう。クチュクチュと愛液が混ざ音が聞こえてきた。

「あっ…はっ…あっ！」

…こいつ、俺のS部分が特化されてでもいるのか？ 返事を邪魔する様に、愛撫を繰り返す『俺』。

又チツ…と、ネバついた音が響くと、千代さんは体を震わせた。

頭を落とし、両手を俺達の腹下へ移動させると、その震え…痙攣を何度か繰り返し始めた。

…。

俺達は快感を甘受している彼女を邪魔しない様に黙って見下ろしている。『俺』の足指と床を愛液で濡らす…と、先程からこれのほぼ繰り返しだった。

取り合えず、焦らしに焦らし、彼女から乞う様に促している。その効果が有ったのか…3人同時に奉仕する事にも慣れ始めていた。いや、むしろ愉しんでいるのではないだろうか？

俺も悦ぶ事を考えてみたら…どうやら、焦らす行為自体、俺は楽しい様だ。

「はっ…はっ…」

千代さんの痙攣が少し収まると…先程までとは、少し違う行動を起こし始めた。

俺達の腹に添えていた手に力が入ると、俺達を支えに…ゆつくりと体を立ち上がり始めた。

「はっ…はっ…」

完全に立ち上がった千代さん。

周りの風景を確認するかの様に、何かを確認するかの様に…俺達の顔を見比べていた。

そして…久しぶりに彼女の言葉を聞いた。

「隆史君…コレは…どういう…はあ…はあ…はあ…カラクリなの…かしら？」

やっぱり凄いなこの人…。

「あり得ない事だと解って…はあ…はあ…はあ…いますが…全員が隆史君だと…頭が理解してしまっている…」

いや？ 呼吸を何度も繰り返したお陰で、少し頭が冷え…冷静になれたのか？

すでに何回か、快楽という欲に流されていたんだろう。それでも大きく呼吸を繰り返して、息も絶え絶え…と言った感じだが、当然の疑問を今此処で投げ掛けてきた。

快楽には十分に酔っている…とは思う。アレだけむしやぶりついてきたんだしなあ…。しかし軽口を挟む様に、当然の疑問を問いかけてきた。

…理性を残していた。じやなきやこんなセリフ吐けん。特に怒っている訳ではないだろうが、熱っぽさを含めた、少し鋭い眼をさせてきた…。

それが…その行動が、俺の中の「」を大きく膨らませた。



「カラクリって…少し言い回しが古いですね」

目の前の3人がまとめて群がる様に近づいてきた。

遠慮なく露わになっている胸を弄り、お尻を揉みしだく。手を内腿へ入れ、摩り…唇で口を塞ぐ。

顔も喋り方も…表情ですら全て隆史君なのは間違いない。とてもあり得る事ではない事が、現に起きてしまっている。

得に彼の特徴的な体中の傷。小さな傷から胸の大きな傷…。位置、形…がすべて一致してしまっているのが、私の中の疑問を全て消して

しまう。

否定し、細かな違いを探そうとしても、逆に全てを納得させてしまっている。

「はっ……んっ……」

「……いや……千代さん。しつかり舌絡めてくるじゃないですか……」

横の隆史君が、野次ってくる。

その通り……先ほどまで、浅ましく彼らを貪っていたというのに、何を今更……。疑問を問いかけ、現状を否定しようとも……身体が応えてしまう。

身体を開き、彼らの愛撫を受けいれ口を吸う。

彼の一人は、お酒を飲んだ状態から余り変わらない。いえ、慣れてきたとでも言うのでしょうか？ 少し言葉を交わせる。

彼の一人は、その隆史君をまるでコピーしているかの様。

彼の一人は、いつもの……普段の彼の様。しかし……少し明るいというか……燥いでいる様にも感じる。

幾つもの表情で見知った彼達が私を弄る……。ゾクゾクとした感覚が、また更に強くなる。

残っていた理性で、最後の否定で抵抗を試みせるも……あっさりと最後の砦が瓦解した。

「んっ！……あっ！！」

突然、秘部を弄んでいた右側にいた彼が、太い指を2本……強引に侵入させてきた。水音が響く程の勢い……その刺激に耐え切れず、正面の口を吸っていた彼の首元に、唇を離し項垂れ掛かってしまった。

グチグチと音を聞かせる様に躊躇もなくかき混ぜる。……コレも彼の特徴……。相変わらず人を辱めるのが好き……。

「あ……はっ……あ……あっ！！」

入口の裏を……指の先で強く掻き出すようになぞる。余ったもう片手で胸を掴み、口元に引き寄せ……舌で乳首を弄ぶ。

左側で私のお尻を掴んでいた彼の手が、更に激しく揉みしだき始めた。余ったもう片手で胸を掴み、口元に引き寄せ……歯で乳首を虐める。

下がったていた顎を下から強引に上へと上げられ、口内へ舌がまた入ってきた。その口内自体を愛撫…いえ、犯す様に動き回る。

口から胸…上半身から下半身に掛け、身体全体から感じる快感…そして匂い。薄っすら汗を滲ませていた群がる彼ら。男性の…男の匂いが…一種のフェロモンの様に脳を刺激する。

両胸から、違う快感が遅い…鼻と口…いえ、顔は熱に浮かされ、グチュグチュと音を鳴らし、上下へと抜き刺しを繰り返す。

同時に襲い掛かる快感というのは、こうも凄まじいモノなので…徐々に全ての疑問が邪魔になつて来ました。

「あつ…れあ…はあ…はつ…んあつ…」

舌が抜かれ、指が抜かれ…彼らは一步下がる様に、突然少し離れた。思わず可笑しな呼吸を続けてしまいました…。息を整えるだけで大変…。

「はつ…はつ…きよ…今日は、口数が少ない…ですね…」

小さな虚勢。彼が酔うと口数が少なくなるのは分かっているのですが…どこか余裕を見せたくて、またこんな事を口にしてしまう。

しかし少し本音も混じっています。見た目に寄らず、彼は結構おしゃべり。その彼が全く喋らないというのは、どこか寂しくも感じてしまう…。

「まあ…今の状態で口を開くと…」

「結構、ひどい事を言つてしまいそうなんすよ」

大人しい彼と先ほど野次つてきた彼が、同じ考えとばかりに交互に口を開く。

もう一人の大人しい彼もそうだと言わんばかりに苦笑して頭を掻いていた。

…ゾクツ。

また背筋に何か走った。

「はつ…はつ…べ…別に遠慮しなくても良いですよ？」

「そうですか…？」

「まあ…千代さんがそう言うなら…まあ…」

「今回、あまり強い言葉を言うつもりはなかったんですが…」

次に自身の喉が鳴った。

…。

彼らは見れば見る程、仕草も口調も何もかも、いつもの隆史君で…。その事もありまり…行為の最中の彼の言葉…。それが3人…分…。

「んじやあ千代さん、そろそろ…」

「…え…ええ…」

…。

…返事を返してしまった。

敢えてそう許可を取ろうとする彼もまた、彼らしく…。

その為に一旦距離を置いたのだと思うと、コレもまた変に遠慮しがちな彼でまた愛らしく…。

…ここで許可を出したという事は、この3人を同時に本格的に相手にするのを承知する事。

伺うように少し視線を落とす。

…相変わらずエグく程に…思い知らさんばかりに彼らの自身もまた、たくましく…。ソレも3人分…。

先程まで、はしたなく貪っていた、愛らしいという表現とは、遠くかけ離れたグロテクスなソレらは…私の唾液に部屋の照明で照らされていた。

愛撫だけで…アレ…。

私が先程、発言に遠慮をしなくても良いと言ったからもあるでしょう…本当に遠慮なく…私に…選ばせる。

「はっ…はっ…はっ…」

またこの感覚…。

私…私自身に…今までの私を上塗りさせる様な感覚…。胸の鼓動が…耳を内側から通して大きく聞こえてくる…。

すでに後戻りなんてできない。これが夢でも幻でも、先程すでに私は選んでいた。

しほさんがいない、今ならと…彼を独占しようとした結果が…コレ。彼は私の希望以上に…私に彼を独占させてくれた。

目の前の続く信じられない光景に、もはや…期待しかありません。



軽く返事を返すだけで：頭の中が真っ白になり、一気に沸騰したかのよう：。

何と言って良いか分からない：分からないので行動で示そうと、ジャケツトのボタンへと手を動かした：。

先ほど一瞬考えたストリップをこんな形にする事になるなんて：ね。しかし指が震えて上手くボタンへ指が掛からな：「千代さん」。

何故か、割と力強く：一人の隆史君が肩に手を置いた？

「「最初から脱ぐのは情緒に欠けます」」

。。

。。。。。

：とても彼らしい事を言われました：。

声を態々合わせなくとも：。

「はい、じゃあそこが上がってください」

一瞬、毒気を抜かれてしまった気もしますが：肩に置かれた手でそのまま促されたので素直に従い：弾力のあるベッドへと膝を掛けた。

もう片方の膝も上げ：そのままベッドの上へと完全に上がると：その行動一つ一つが、徐々に近づく：あの温泉旅館での快感を思い出せる。

彼に背を向けている状態ですので彼からは私の顔は見えないでしょう：見えていたら、なんと言われてしまうでしょうか：？

顔に少し力が入っていた。：頬が上がっているのでしょうか：。

「…っ？」

ベッドへと上がり、立膝を着いてただけの私の背中を、彼がまた促すように軽く押した。

倒れそうになる身体をそのまま両手を着いて支え、四つん這いの恰好へとさせられた。

ふくらはぎに、掛かる布に感触：。

スカートが半分程に捲れ上がり：露出した下半身を、まさに見せつける様に彼達に突き出している恰好：。

また聞こえる喉が鳴る音：。

もう今までの関係も、今までの私もすでに無い。

隆史君…3人の男性に向けて性器を向け、受け入れる態勢で卑しく待つだけの…自分。

此処まで…遊ばれるみたく散々焦らされ…自覚させられ…解らされた。

…一瞬間を過つた「島田流家元」と言う立場も、「愛里寿」の事も…「夫」という全てが…どうしてもよくなる処か…寧ろ私の中の熱を高め、壊していく。

そして改めて…しほさんが頭を過つた。

同じく私と完全に同じ立場いる彼女…その彼女が今回はいないと言うこの現状。

…隆史君が3人もいると言う、非現実的な狂った状況を独占できるという「現実」。

「はっ…はっ…」

自ずと残っていたスカートを捲り上げていた。

首を下げ…身体の下から後ろを覗き確認すると…彼らの身体が見える。何も変わらない、本当にただコピーしただけかの様な、身体。

この卑しく…涎を垂らしながら…男を受け入れるのを待っている自分…を、彼らは見つめている。

隆史君達は消えていない。手の下のシーツの感触…太腿の内側を滴り落ちる愛液。喉から何度も繰り返す呼吸。

完全に露出した私の入口を「まだか」と、催促するかの様に…自分から尻肉を掴み…広げる。

まぎれもないこの「狂った現実」を自身の立場…全てを含め…私は…確実に享受している。

腰を手で掴まれた感触がした。

腰骨に手を引つ掻け、グツ…と力が込められた瞬間…。

「おっ!!」

内臓を上へと押し上げられたみたいな衝撃に、肺から息が一気に吐き出される。

海老反りに…強引に背筋を伸ばされいる気がする程に、一気に肩が

上がり腕が伸びる。

「あ…カツ…あ…」

ガクガクと顎が鳴り…目が見開かれる。その視界がチカチカと光る。

ばつんつとお尻が鳴る音を一回響かせ、お腹の奥…一番熱い場所まで一気に彼が入ってきた。

たった一回だというのに…脚が痙攣…いえ、身体全体がビクビクと小刻みに痙攣する。

「千代さん、前戯はたっぷりとして…散々焦らしたとはいえ…随分すんなりと入りましたね」

あまり抑揚の無い声で、眩かれた。

「千代さん、一突きで潮まで嘔いて…盛大にイきましたね」

私を詰る軽めの口調と、ボタボタと…少し遅れてシートに何か落ちる音がする…。

何と言いますか…焦らされてたとはいえ、彼の最初の一撃は毎回強烈で…一気に私の中が彼の形へと変わってしまう気がします…。

う…上手く声が出せない。何かを言い返そうとするも、押し寄せてきた強烈な快感に頭と身体が追いつかない…。

後…。

「千代さん、焦らされる方もそうですが…焦らす方も我慢するの大変なんですよ？」

口を彼が開く度に…最初に私の名前を呼ぶ…。

「あがつ!? あつ! おつ!! おつ!!」

バツバツと…今までの彼が嘘だったかのように、突然激しく腰を打ち付けてきた。

ベットの外側に立っていた為に、力が入れやすいのか…遠慮なく全力で当たる肌に、大きな音が部屋に響く。

「まつ! …待って…あつ!! あつ!!」

絶頂がまだ収まっていない中で、私の中を隙間なく刺激する膣内の快感を押さえつけようと身体中に力が入ってしまう。

敏感になっっている身体には、この刺激は強すぎる…。それでもお構

いなしに、彼は両手で私の腰を掴み、何度も強く腰を打ち付けてきた。「…やっぱり普段着を着たままの方が、日常の千代さんとやってるみたいで良い…ですよ」

「裸体姿も勿論素敵ですけど、俺はこっちの方が気分です好きです」  
情緒に欠ける…と…言っていました…。

…駄目。これは駄目…彼は…彼らは私に話しかけながらも、打ち付ける腰を止めない。私の身体の状態を無視し、私の顔の横で何かを聞いてきたり…すべて彼のペースで行為を続けている。

最初…本当に最初に望んだ、遠慮の無い隆史君が見え始めてきた。「あつ…あつ…はっ…はっ…」

ギシ…と少しベッドが重みで少し沈み、もう一人の隆史君が真正面で膝で歩きながら近づいてくる…。

両手に力を入れ、シーツを握りしめ何とか体制を保ちつつ…前後に動く身体で顔を上げると…鼻先に彼のモノが…。

それ以上…彼は何をする訳もなく…ただ見下ろしている。

秘部を突かれる度に、彼の陰茎の先が何度も鼻…頬へと当たる…。

3人が全員共、彼だというのは【理解】しています…。しかし今こうして私が見えるのは見下ろしている隆史君のみ。

今更ながらも小さな恥辱が生まれ…眼球のみを動かしながら上を見上げると…彼の手はゆっくりと髪を撫で下ろし…そのまま私の頬で手を止めて…私の目を真直ぐと無表情で見つめてきた。

その…目…。他の男に抱かれています訳ではないというのに…この淫らな痴態を晒す私を、彼はどう思い見下ろしているのか…と、頭に過る。

…  
ゾクツ

目の前の彼は何もしない。…ただ私を見つめている…。

「はっ…はっ…はっ…」

何度も突かれる度に、彼の陰茎が顔へと近づき離れる。

もうすでに本能で動いている…としか言いようがありません。何もしない彼に対し…口を開け舌を突き出していた…。

すると今度は舌先から表面を何度も滑る…。亀頭の裏を滑り、口内を外れ頬を滑る。

何時しか唾液でまみれた陰茎を口で上手く呑み込めない。何度も外れ…滑る頬に付着した唾液で何度も滑る。口元をまた唾液まみれにし、垂れ流しながら…気が付けば夢中になって舌を、唇を使い…啜え込もうとしていた。

ワザと彼は口に入れさせないかの様に、男根を動かしている気がしてなかったのですが、それでもお構いなしに口で彼を追う…。

「あっ…はっ…はっ…んっぶっ!!」

ようやく唇で亀頭の先を挟み、捕まえた瞬間…後ろから突かれた衝撃でそのまま唇を抉じ開けて滑り込んでくる。

舌…口内を通して、鼻を通る男臭…と、味。

「んぐっ！ お、ごっつ！ んぶっ!!」

一気に口いっぱい頬張る様に、正面からもう一人の男性を飲み込んだ。

後ろからの突かれる度に飲み込み啜る。唾液がジュプジュプと下品な音で鳴り続け…私の頭の中を匂いと快感で塗りつぶしていく。

犬の様に両手両足を着き、上と下から両方の口で男根を飲み込む。駄目…オカシクナル。これは…本当に…ダメ…。

ゆっくりと腰を動かし…私の口を使い始める彼と…何度も腰を突き上げ、私を悦ばせてくれる彼。

「千代さん、せっかくですし…コレ使ってみますか」  
後ろで彼の…少し抑揚のない声でした。

でも秘部を突かれ、口を突かれ…啜り、息苦しさで快感の為に何を言ったのか分からなかった。

「んっ!! ん、んっ!! はっ…はっ…じゅぶっ！ ぶっつぽっ!!」

二人同時に男が私の身体を使い、それを自身から望み悦楽に浸る、淫らな姿。

息継ぎの様に陰茎から口を離し空気を吸うせば…その息継ぎが…  
本当にまるで犬の様…。

目の周りが…顔が、熱く、すでに感覚が解らなくなっている。  
突然、熱さとは逆に…お尻の穴に冷たい感触が走った。

「んぶおっ…た…あっあっ！ たっ！ 隆史君!？」

あまりの違和感に、思わず陰茎から口を離してしまった。

「前回、散々使いましたし…愛液でベトベトだ。問題ないでしょう」  
前回使った…？ 何の事か考えようとしても、そこからまた一気に  
広がった冷たい感触に思考が飛ぶ。

お尻に…何か入って…っっ!!

「あゝぐっっ!!! …ああ…あー…」

冷たい感覚がズルズルとお尻の中に侵入してきた。

異物…としか言いようがない。彼の指でも…ない…。

「せっかく買った物だし、興味有り気でしたよね?」

…もう誰が…どの隆史君が喋っているのか分からない…。

買った物とは…買った…?

「まあ、こつち用ではないですけど…俺のも飲み込んでいましたし、問  
題ないですよね」

膣内を限界まで広げている彼の男根をなぞる様に、その異物が私の  
中で擦れていく…。

苦しさ…? それも当然有りますが…これは…。

「この玩具に千代さん興味があつたんですよね?」

お…玩具?

あの自動販売機…の事…あ。あの男性器を模った卑猥なモノの事  
でしょうか?

こつち用では…ない? あの玩具の形状から、使用用途の大体の予  
想はつきますが…。

それを…今…?

…。

…カチツ。

「ひいぎゅう!!!」

モーター音が響き渡った。お尻へ挿入されたそれが気刻みに強く振動。

腕の力が完全に抜け、ベットへと頭から落ちる。…と、それに連動してお尻が上がる。

「…反応良いですね」

膣内の陰茎と、お尻の中の振動するモノが私の中で当たっ……………。

「——っっ!!」

声にならない。

「では俺は、そろそろイきますね」

事務報告の様に呟くと…隆史君の腰の動きが突然早くなった。

腰に彼の体重を感じる。…更にパンパンと肌を鳴らす音が増えた。

ゴリゴリと中でぶつかり…更に腰を打ち付ける度に、彼に玩具が当たり…沈む。

異物を出そうと、身体が玩具を吐き出そうと少し浮くも…また押し沈む…。

「あゝっ!! おゝう!! おあゝう!!」

その後…どれ程、打ち付けられたか…彼の動きが止まるまで、この嬌声を彼に聞かせていた。